春の櫻に夏の海、秋の月そして冬の雪。

松の慎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
春の櫻に夏の海、秋の月そして冬の雪。

【Ｎコード】
Ｎ０３７２Ｆ

【作者名】
松の慎

【あらすじ】
キュートボーイ春樹は頼もしく、元気な夏実は弱く、クールな秋人も傷つき、気が強い麻冬は泣き虫だった。僕らが出会ったのもケンカをしたのも恋をしたのも傷ついたことも、全ては偶然でも宿命でもなく「運命」だった……恋や友情を知っていくたび成長するバラバラなタイプの４人の青春学園感動ラブストーリー。

第1話【出会い】

未来になにが起こるかなんて分からない。

誰にも予想できない。

自分自身でも…

「お！席４つ空いてる！」

春樹、高2。

明るさいっぱいのキュートボーイ、バドミントン部部長。

「よっしゃ！今日もうちらついてるーっ」

夏実、高2。

運動神経が取り柄の茶髪の長髪少女、バレー部部長。

「相変わらず元気だな…俺は眠い」

秋人、高2。
クールなのかと思いきやいつも眠っている美男子、サッカー部部長。

「空いてるっていうか、みんなよけてくれたって感じ？」

麻冬、高2。
肩までのウェーブで大人しめのお嬢様風、水泳部部長。

４人は高校入学当初からみんなに一目置かれていた。

春樹は人なつっこい性格でクラス中から好かれていたし、夏実は入部早々エースの座に上り詰めた。

秋人は入試トップで入学式に新入生のあいさつをした。
麻冬はその可憐な容姿で高嶺の花。

４人のクラスはバラバラだった。

当然お互い顔見しりってわけでもなかったのだが、あることがきっかけで知り合ったのだ。

『こら！なんだその髪は！』

入学式から１ヶ月くらい経った頃、夏実は髪の色を茶色にしたことで教師に呼び止められていた。

『だってセンセ、これが一番気合い入るもん。中学んときもこれだったし』

受験のときだけ黒くしていた夏実は、そろそろと思い髪をもとに戻した。

当然校則違反なわけだ。

こんな夏実でもクラスの男女からは好かれてるわけであって、たいていはこういう場面に出くわしてもみんなが助けてくれた。

しかしそのときに限っては人気のない渡り廊下で、ほとんど人が通っていなく夏実を庇ってくれる人はいない。

『エースだかなんだか知らんが、調子に乗るもの大概にしろ！』

さすがに慣れている夏実はハイハイとソラ返事をしながらよそ見をする。

それが教師のカンに更に触るわけだが、ちょうどそのとき1組の櫻井春樹がジーっと夏実のほうを見ていることに気付いた。

『…？ん？なに？』

まだ友達にもなっていない頃のこと。

春樹は嬉しそうに『わー！海野夏実ちゃん近くで見るの初めてー！！』とニパッと笑った。

いかにも春樹らしい。

『あたしのこと知ってるんだ？』
『うん！3組だよね？』
『あたしも知ってるよー。1組の櫻井くん』
『やーった！』

なにが「やった」なのか分からないが、とりあえず春樹は無邪気に喜んだ。

と、そのとき自分のことを忘れて会話に花を咲かせていた2人にかなり怒っていた教師が今度は春樹に向かって言った。

『おい櫻井！お前もいつになったら制服着てくるんだ！』

春樹はネクタイをつけてブレザーを着ることはなく、常にパーカーを着ている。

その日は黄色のパーカーを着ているせいで余計に目立っていた。

『だって俺ブレザー似合わないもん』

１５５センチくらいしかない春樹には、ネクタイとブレザーという組み合わせは似合わないらしい。

春樹に比べて夏実はというと、バレー部にしては小さく１６５センチほどだ。

エースがそんなに小さいのかと疑問だが、夏実は小さい代わりに誰よりも高く飛ぶ。

『そんな理由が許されるか！』

２人がそろってしまったことで教師の怒りはさらに高まる。

どなり声に何だ何だと少しずつ人が集まってきた。

その後もしばらく口論していると、麻冬が現れた。

『先生、その辺でもう良いでしょう』

まだウェーブの髪をしていない頃の麻冬だ。

見た目は可憐で美しく大人しそうだが、実際にはそんなことはない。

きれいなのは事実だけど、実はかなりの強者だったりする。

『2人にあなたがこれ以上言っても無駄よ。白髪染めしてるあなたが生徒の茶髪を注意しても説得力あるかしら』

『お前は…5組の雪原だな』

『そうよ。あまり怒ると血圧が上がってハゲますわよ。その白髪染めは偽物だってみんなに知らせた方が良い？』

フフッと笑っているようで、チラッと教師を見ながら悪魔のような笑みを浮かべる。

ポカンとあいた口がふさがらないでいる春樹と夏実をよそに、麻冬はまだ何か教師に言おうとしていたが、彼がそれを止めた。

『それくらいにしておけ。生徒に注意するのが教師の役目なんだ』

7組の月影秋人、寝坊・居眠り常習犯の成績優秀人間だ。

ちょうど移動教室をする際に3人と教師がいるのを見つけ、よってみただけ。（つまり興味を持っただけ）

『あ！7組の月影！』

そう叫んだのは夏実だった。

『あ。えーと…確か女子プロレスの岩波…？』

『誰がプロレスラーじゃボケー！！！』

夏実は本気で秋人にチョップをかました。

寝ぼけている秋人はよけきれずモロにそれをくらった。

『3組の海野さんよね。そっちは1組の櫻井くん』

『俺らのこと知ってるんだ！君は5組の雪原麻冬ちゃんだよね』

４人そろったのは、このときがはじめてだった。
それまでは話したことすらなかった。

話に盛り上がる４人に、教師は入っていけなくなったのかソソクサとどこかへ逃げてしまった。

『あー、俺移動教室だった』
『ちょー待ちなさいって。せっかくだしアンタも一緒に話そうじゃん。月影秋人』
『え～…』

入学からわずか１ヵ月後のことだった。

もともと有名だった４人だけど、４人そろえばその迫力はすさまじいものだった。

４人が一緒にいるところを見にわざわざ人が集まってくるほどだ。

学年の廊下の真ん中でやっていたわけでもないのに、みんな遠いのにわざわざ次の授業に遅刻しても良いと言わんばかりに物珍しいもの見たさにどんどん集まってくるのだ。

誰しもが口々に言う。
すげぇ…なんちゅー奴らが集まってるんだ、と。

あの４人が集まるなんて…と感嘆の声を漏らす人さえいる。

それほどに有名な人たちが、今まで話したことがない方が不思議だ。

４人が仲良くなったのは、これがきっかけだった。

タイプも性格もクラスも全く違う４人。

だけど、どこかオーラがある。

４人が友達ってことは学校中の公認であって、４人は瞬く間にスターとなった。

それというのも当然である。

困ってる人や泣いてる人がいれば春樹が優しく支えるし、校内でイジメや恐喝を発見しようものなら夏実の爆裂キックが炸裂する。

不良とか粋がってる奴らが何かしようとしたら麻冬の毒舌がもれなくついてくるわけだ。

秋人は…うん。秋人は頭脳明晰で運動神経も良いわけであんな性格のせいで女子からの人気はもちろん、男子からもかなりの人気なわけで。

誰も秋人の前で変なことをしようとする人はいないわけだ。

とにかくこんな４人なのだから、みんなが好くのは当然である。

春夏秋冬の彼ら。

合言葉は、ＧＯ　ＦＯＲ　ＩＴ　！！

ｎｅｘｔ

第2話【恋の行方】

「でさ、昨日の子も恋愛系で泣いてたんだよ」

引き続きランチを食べる4人。

ラーメンを食べながら春樹が困ったように言う。

春樹は困ってる人をほっとけないタチで、昨日も放課後教室で泣いてる女の子に声をかけた。

「へぇ。春樹もほっときゃ良いのに」

秋人は素っ気なく言った。

たぶん知らない人が泣いてても素通りするであろう秋人には春樹の気持ちが到底理解できない。

「だめだよー！困ったときはお互いさまっ」

「でもさぁ春樹、困ってる人助けて春樹が困ったら意味なくない？」

「う…」

麻冬の最もな意見に春樹は何も言い返せない。

そして珍しくしおれた声で
「俺のやってることって無意味なのかなぁ…」と言った。
無邪気なくらい明るくて、一緒にいれば癒されるような春樹が落ち込むなんてそうそうない。
すると、パクパクとおにぎりを食べながら夏実が言った。
「はに言っへんのよ春ひー」
口にご飯が入ってる状態で喋っている夏実の言葉は何ともバカバカしい。
夏実はゴクンとご飯を飲み込んで春樹を見ながら言った。
「無意味なわけないじゃん。だってそれが春樹で、春樹の優しさなんじゃん」
「夏実…」
「あんたに落ち込む顔は似合わないっつーの。あたしまで元気なくなるわっ」
明るい春樹と元気な夏実。
2人が揃うとその場の盛り上がりは二乗になる。
校則違反しまくりっていうところでも息の合う2人。

「確かに夏実の言う通りね」
「まー俺にゃ考えらんねぇけど、春樹は春樹のしたいことすりゃ良いんだよ」

夏実に続けて麻冬と秋人も言った。

春樹は
「みんな…」と今にも泣きそうな表情をしている。

みんな性格が違っても、お互いを好いていることに変わりはない。
あのクールで何を考えてるか分からない秋人でさえ、他の3人には割りと心を開いている。

「みんなありがと」

へへ、と軽く春樹は笑った。

「ん～でも恋愛を知らない春樹には難しいねぇ」

夏実はケラケラ笑いながらそう言う。

「やっぱいくら春樹でも恋愛相談だけは無理ねー」

楽しそうに言う夏実に、春樹はムッとしながら
「俺だって恋愛くらいするよ！」と言った。

夏実が面白半分でからかいながら
「じゃあ今も？ならお姉さんに言ってみなさい」と完全に子供扱いしながら言った。

なぜ秋人と麻冬が何も言わないのかと言うと、2人は真実を知っているからである。

「俺が好きなのはっ…」

春樹はそこまで言ってあとにつかえてしまう。

勢いに乗せて言ってしまえば良いのに、やっぱり言えない。

「あ、やば。そろそろ戻んないと授業遅れるよっ」

言うに言えなくて悔しそうな春樹をよそに、もうどんな会話をしたか忘れてしまっている感じの夏実は、3人にはやくしようと促す。

「…夏実、あんたの鈍感さはいつか人を殺すよ」

「何言ってんの？麻冬」

４人は食器を持ちながら席を立つ。

そう、もうお分かりだろうけど春樹は夏実のことが好きなのだ。

秋人と麻冬は当然知っている。

知らないのは夏実だけで、まぁ春樹も２人にバレてるとは思ってないようだが。

鈍感な２人。

好きと言えない春樹と、春樹を子供扱いする夏実。

春樹の恋はどうなるか。

午後の授業は体育から始まる。

２年から晴れて同じクラスになれた彼らは、一緒に更衣室へと向かう。

雨が降っているため、女子と同じく男子もバドミントンかバスケになった。
夏休み明けの体育、しかも雨のせいでかなりの湿気がある体育館での運動はかなり疲れる。
だが、夏実と春樹にはそんなことおかまいなし。
基本的に秋人と麻冬も運動神経良いし体力あるのだから平気なのだが、あえてそんなに頑張る必要もないという。
もちろんプレーしてしまえば目立ってしまうのだが、夏実たちのように無駄に燃えたりはしないということだ。
更衣室は体育館の近場にある。
もちろん男女別。
さっさと着替えて４人は更衣室から出て体育館へと入る。
「春樹！バドでしょ？！」
「うん！」
２人は体育用具室に行ってポールやらネットやらを取り出してさっさとコートを作り始めた。

体育館は真っ二つに区切られ、北側でバドミントン、南側でバスケをやることになっている。

秋人はバスケを選んだのか、南側の壁に寄りかかりながら眠っている。

麻冬は体育館のステージ上にあるピアノを弾き始める。

小さい頃から高校に上がるまではピアノを習っていたらしい。

秋人が寝ていれば男子たちがワラワラと集まるし、麻冬がピアノを弾けば周りの人たちはうっとりする。

そして春樹と夏実がバドミントンを始めれば、観客が増えていくのだ。

２クラス合同でやるせいで、８０人もの人が体育館に集まる。

バシュッと羽を打つ音が体育館に響く。

「うっし！これで追い付いたもんねっ」

夏実はピースしながらへへんと笑う。

２１点真剣勝負のようだ。

「う～～～…絶対絶対夏実には負けない！」
「負けた方がジュースだかんね！」

バドミントン部部長として、というより男としてのプライドのせいか。

やはり好きな人に自分の得意スポーツで負けたくないのだろう。

アグレッシブベースライナーな攻撃スタイルが春樹の持ち味なのだが、珍しく積極的になっている。

バレー部での絶対的な大エースの夏実はもちろん攻め系。

攻めと攻め同士の試合が激しいことは言うまでもない。

と、１７―１５で春樹が優勢なとき、体育教師がやってきた。

１５分も遅れてくるとは何ともいい加減な。

まぁゆったりした性格で生徒からは好かれているから文句は言われないようだ。

教師はピーッと笛を鳴らしてみんなを整列させる。

「おーい櫻井海野〜。整列してくれー」

夏実は

「えー?!」と文句を言うが、そんな夏実に春樹は

「まぁまぁ良いじゃん、出欠のあと続きやれば」と言う。

夏実はしぶしぶ従う。

麻冬はまだ寝てる秋人を起こして整列させる。

出欠確認取ったあと、準備運動をしてからみんな再びバドミントンかバスケを始める。

もちろん春樹と夏実は試合の続きをするし、麻冬と秋人はバスケをやり始めた。

スラーッと綺麗なドリブルやシュートを見せる麻冬とは対照的に、自分勝手に豪快に攻めに行く秋人のプレー。

バスケ部よりも上手い。

よくもまぁこんなに運動神経良い人たちが集まるものだ。

自分たちが試合じゃないときは、眠そうな秋人の隣に麻冬がいて話

をしている。

麻冬は厳しい口調のときもあるけど、でもどれも的を射ているし間違ってない。

見た目通り中身も可愛らしい女の子なのだ。

身だしなみにも気を使い、髪を朝巻いたり軽くメイクをしたり、どこにでもいる乙女。

「…ねぇ秋人」

麻冬だって、恋をする。

「んー…」

秋人は眠そうに目をこすりながら虚ろな返事をする。

「良いの？春樹と夏実」

意味深長な言葉。

秋人は麻冬の方をじっと見て、そして

「なにが？」と言った。

麻冬は分かってるくせに…とポツリと言う。

聞こえたのか聞こえてないのか、秋人は珍しく起きてるものの何も答えなかった。

少しの間を置いて、秋人はバスケをやってる人たちを見ながら言った。

「お前はどうなんだよ」

「あたしは…好きな人なんていないもん」

「ふーん」

麻冬だけが知るもの。

麻冬にしか知らないもの。

みんなそれぞれの想いを背負いながら、一緒にいる。

例えそれがどんなに辛いものだと分かっていても…

next

第3話【3年越しの思い】

この地球の、この日本に生まれたのは偶然だった。
この惑星で君に出会えたのは何十億分の1の確率の偶然だった。
その中から、君を選んだ。

「…まぁたやってる。夏実」

昼休み、ジュースを買いに行くと言って出かけたはずの夏実が外で誰かとケンカをしている。
なかなか帰ってこない夏実のせいで秋人はまた寝ているし麻冬は携帯をイジっている。

春樹はボーッと外を眺めていて偶然夏実を見つけた。

「なに、ケンカ?」

春樹の独り言に麻冬が問いかけた。
春樹は

「あぁうん、みたい」とヘラッと笑って答えた。

そして窓から身を乗り出して、下を見下ろしながら大きな声で言った。

「夏実ー！遊んでないではやくはやく～！」

下から

「ごめーん！今行くっ」と威勢の良い夏実の声がした。

言葉通り夏実は、途端にケンカを止めて走って校舎に入った。

「…なんで夏実？」

「え？」

「なんで夏実が好きなの？」

麻冬は春樹にそう尋ねた瞬間しまったというような顔をした。

春樹に自分がその事実を知っていることがバレるからではなく、秋人の前でそんなことを聞いてしまったことに後ろめたさを感じているのだ。

「えっ！なんで知ってるの？！」

バレていないと思っていた春樹はかなりの勢いで驚いた。
そんな春樹にさっきまで寝ていたはずの秋人が言った。

「見てりゃ分かるよ」
「そっか～…」

春樹は照れ臭いような、気まずいような顔をした。
そしてチロッと秋人を見て何か言いたそうな顔をした。

「夏実…助けてくれたんだ」

春樹はボソッと呟いた。

麻冬が
「え？」と聞き返すと同時に教室のドアが勢い良く開いて夏実が入ってきた。

「おまたせっ！」

４人分のジュースを抱えながら楽しそうに走ってくる。

そして一本一本渡していった。

「あーっ！夏実の美味しそう！」
「いーしょいーしょ？！新発売なのー！」

春樹は夏実の持っているジュースを見て叫んだ。
新発売に弱い２人。

「てか俺のはー？」

まだジュースを渡されてない春樹はブーブー文句を言う。
夏実はニッと笑って後ろからジャーン！とジュースを出した。

「わ、やった！」

春樹のも夏実と同じく新発売したジュースだった。
夏実は春樹が自分と好みが似ているのを知った上で、頼まれてたオレンジをやめて新発売のジュースにしたのだ。

「さっすが夏実ー」

語尾にハートを付けて、春樹は嬉しそうに喜んだ。

「あたしと春樹の好み一緒だから絶対こっちだなーって思ったの」

「覚えててくれたんだ？」

「あったりまえー。あたしが春樹を忘れるわけないじゃん」

ニコッと元気に言う夏実。

太陽の陽が当たって一層夏実が眩しく見える。

春樹はそんな夏実を愛しそうに見上げた。

嬉しくて仕方なかったのだろう。

そんな春樹を秋人は何かを考えているかのような顔で見た。

「あんたらがいるとほんと騒がしいわ」

麻冬は呆れたように言った。

「へへ、そう？」

春樹が夏実を好きになったのは、もうずっとずーっと前。
高校に上がるより前の、中1のときの話。

小学生のときからバドミントンをやっていた春樹は当然上手くて、中学入って即レギュラーに抜擢された。

もちろんそれを良く思わない人もいた。

ある中学との練習試合、団体戦で挑んだとき勝ったのは春樹だけだった。

レギュラーの先輩たちはそんな春樹を完全に嫌っていて、その日は春樹だけが勝てたことで余計に腹を立てて試合後の体育館でストレッチをやっていたとき、公然と春樹に攻めよったのだ。

心温かいベンチの先輩たちや同級生は片付けをしていて、部長と副部長はあいさつに行っていたから助けてくれる人なんていなかった。

『てめーまじで調子乗ってんじゃねぇぞ』
『今日勝ったのだってまぐれだっつーの』

先輩に口答えできるはずもなく、春樹は黙ってストレッチしながら聞き流す。

そんな春樹の態度に腹を建てた先輩がラケットで春樹を叩いた。

『いっ…』

まだ3年も引退していなく、強豪校のため部員も多くいる中で数少ない団体戦のメンバーに選ばれたのだから、多少の嫌がらせは仕方ないと春樹も思っていた。

『…先輩っ！いい加減にしてください！俺が何したって言うんですか！』

だけどその日は珍しく春樹も反撃した。

『あ？』
『なに言ってんの、お前』

そんな春樹を先輩たちはバカにしたように笑って言った。

『何がっていうか、存在自体がうぜぇんだよ』
『チビのくせによー』
『見てるだけでむしゃくしゃするっつーの』

人懐っこい性格をしているってこともカンに触るらしい。

誰からも好かれて、それでいてレギュラーになってしまったから心狭い先輩たちの標的にされてしまったのだ。

そしてもう一度一人の先輩がラケットを振り上げた。

春樹は反射的にバッと右手で頭を隠すようにしてカバッた。

けど、痛みを感じなかったから不思議に思ってゆっくり目を開けてみると、ラケットは目の前で止まっていた。

『え…』

茶髪の女の子が左腕でラケットを止めていたのだ。

『ふざけんじゃねぇぞ、こら』

短パンにTシャツを着ていて、長い靴下に膝サポーターを足首に下ろしているその姿は、どう見てもバレー部員。

『存在自体がうざいって?チビだからいけないって?はっ。調子乗ってんのはどっちだよ』

女の子はラケットを奪い取って男子たちに突きつけた。

『スポーツマンが大事なラケットで人殴って良いわけ?自分が負けた腹いせをこの子にぶつけんの?』

『お前には関係ないだろ!』

『あーないね。だったらあんたらがこの子イジめる理由だってこの子には関係ないだろ!』

男子相手に怖じ気づく気配すらなく、それどころかいつも憎まれ口を叩く先輩たちがたじろっている。

『見苦しいんだよ!正々堂々やって勝てないからってこんな卑怯なマネすんじゃねぇ!』

『なっ…』

『傷つけてるあんたらはこんなことすぐに忘れるんだろうけど、傷つけられた方は一生癒えない傷を背負っていくんだよ!』

まだ何か言おうとしていると、誰かが『夏実?!あんた何やってんの?!』と夏実を連れ戻しに来た。

知らぬまに人が集まってきていて、そのうち春樹たちの部長たちも『どうかしたのか?!』と走って戻ってくる始末。

『部長～。だってこいつらがねー』
『もぅ！問題起こすんじゃないの！それも他校と！』

部長らしきその人は夏実をグイグイ引っ張っていく。

『え～っちょっと待ってくださいよ！』

夏実は必死に立ち止まろうとしたが思うようにいかず、終いには春樹に向かって叫んだ。

『あんたも！黙ってるだけじゃ何も変わらないよ！言いたいことがあるなら言いな！あたしだってチビだしまだ1年だけどエースであることに誇り持ってるよ！』

叫び続ける夏実に部長が『こらっ』とグーで頭をこずいた。
夏実は『あだっ』と変な声を出してイヒヒと笑った。

そのとき、春樹の中で何かが変わった。

自分と同じで身長低くてまだ入部したばかりなのに彼女はあんなにも堂々としている。

そのことに、何とも言えない憤りを感じたのだろう。

『おいっ、お前らまた…』

部長がレギュラー陣に詰め寄った。

そんな部長に春樹は、待ってくださいと声をかけた。

『先輩、俺このくらいのことじゃ絶対負けませんから』

春樹はそれだけ言って再びストレッチに戻った。

先輩たちは何も言えず悔しそうな顔をした。

もう大丈夫…何に確信を持ったのか分からないが、春樹はそう思った。

その後嫌がらせはなくなり、春樹は順調に勝ち続けてそのうち部長になった。

スポーツ推薦で高校に上がって、そうして3年ぶりに夏実に再会した。

夏実が覚えているかは分からないが、少なくとも春樹は夏実のことを一日たりとも忘れはしなかった。

中学と名前と部活しか知らなかったけど、それでも春樹は初めて自分に向かいあってくれた夏実に惹かれていた。

同じ高校だと知ったとき、どれだけ嬉しかったかは言うまでもないだろう。

「なーつみっ！」

「ん？」

春樹は声を上げた。

新発売の炭酸飲料をシャカシャカ振って、振り向いた夏実目掛けて蓋を開けた。

プシュッという音と、

「ぅわっ！」という夏実の声。

「はーるーき～！もぅなにすんのよ！ベトベトじゃん！」

君といることが

嬉しくて仕方なくて。

next

第4話【飛び交う気持ち】

「もーっ。まだベトベトする」
「春樹もバカだからねぇ」

水で顔を洗っている夏実の隣で麻冬がクスクス笑う。
麻冬が差し出したタオルを夏実は受け取り、顔を豪快に拭く。

「次なんだっけ?」
「数学よ」
「げ〜っ」

たわいもない話をしながら2人が教室戻ると、春樹が気づいて「おっかえりー」と手を振った。
なにがお帰りだ!と夏実は春樹の髪をクシャクシャする。

2人にしてみればただじゃれあってるだけだが。

「ん?春樹なにしてんの?」
「勉強だよ?だって次テストじゃん」
「はっ?」
「やだなー夏実。また寝てて先生の話聞いてなかったの?」

ケラケラ笑う春樹をよそに夏実は麻冬に「そーなの?!」と問うた。

麻冬もそうだっけ?なんて曖昧な答えを返してくる。

まぁ麻冬は数学できるから特に心配はいらないだろうけど。

「うっわ~最悪!ちょっと秋人!ボーッとしてないでヤマはってよ!」

秋人は決してボーッとしてるわけではなく、ただ単に眠いだけなんだが…まぁそこは置いといて、秋人にはテスト勉強なんて無用なのである。

入試トップで新入生のあいさつをしたほどの人で、これまで一度も試験で1位以外を取ったことがないのだ。

あ、だが確か去年の暮れは1位ではなかった。

というわけも、期末の時期に風邪こじらせて全教科追試になったのだ。

もちろん追試はほとんどが満点かそれに近い点数。

風邪をこじらせずに普通に試験を受けていれば間違いなく1位だっ

ただろうのに。

「うるせーなー…」
「この万年居眠り男ー！」

ちなみに春樹・夏実・麻冬はスポーツ推薦だ。

なぜ秋人だけ一般かと言うと、実は推薦が来てたけど、推薦の日に風邪をこじらせたのだ。

つまりその時期は毎年風邪をひくということか。

「わーったよ。春樹、教科書貸して」

春樹は秋人に教科書を渡す。

秋人は教科書をパラパラめくりながら、ここととここと、あとこの公式と応用が出る…などのようにヤマをはっていく。

秋人のヤマは的中する。

1分もたたずに秋人のヤマはりは終わってしまったが、そんなずぼらな説明でも夏実には完璧に覚えられる。

「…ふーん、なるほどね。あんがと秋人！たぶん９割取れるわ」

夏実は自信満々に言う。

夏実の特技は暗記。

どんなものでも簡単に暗記してしまうから、文系科目は大の得意なのだ。

春樹も勉強すれば並み以上の点数取れるし、そんなわけで４人は特に勉強で困ったりなどはしない。

運動部部長として全国大会に導いてる４人を一目置く先生も多くいるし、勉強もそこそこできるものだから言うことなしなのだ。

もちろん未だに夏実の茶髪と春樹の服装は注意を受けるが。

春樹にいたってはもはや遊びの範疇だ。

春はパーカーで夏は色とりどりのＴシャツやポロシャツ、秋はハイネックに冬はモコモコ素材や可愛らしい帽子の付いてるセーター。

「おーい席つけぇ」

数学教師が入ってきて授業が始まる。

予告通りテストが行われた。

秋人は当然のこと、数学得意な麻冬や秋人のヤマ的中で夏実も助かり、少しだけ勉強をしていた春樹も合格点を取った。

テストさえ終わってしまえばもう関係ないと言わんばかりに秋人はガン寝し始めるし、夏実は隠れてメールをしている。

夏実のメールの相手

そう、それは…

「聞いて秋人！今日ね～半年記念なんだっ」

夏実は隣の席の秋人にコソッと言った。

「へー」

「一週間前からお祝いしよーって2人で言っててね、今日は久しぶりに先輩とデートなんだ」

楽しそうに夏実は言う。

夏実は半年前から1つ上の先輩と付き合っている。

「部活ねぇの？」
「あ～今日わね、自主練なんだ。だから…」

夏実は少しだけ微妙な顔をした。

部活はもちろんのこと、自主練だって欠かさず行ってる夏実が自主的にサボりなんて珍しい。

「…自主練終わるの待っててくれねぇんだな。冷てぇ彼氏」
「え、なに？ちょっと聞こえなかった」
「いや、なんも」

秋人にしてみれば面白くないのも当然である。

入部した頃からあの何事にも無関心な秋人も部活だけはしっかり出ていた。

それは夏実も同じで、夏実の取り柄といったら運動神経が化け物みたいに良すぎることだ。

その夏実が珍しく、しかも男のためなんかに自主練をしないと言うのだから、なんとなく裏切られた気分にでもなったのだろう。

何か正当な理由があるわけではなく、彼氏のためってことに少し腹を立てているようだ。

「まぁ好きにすれば」

そう言って秋人は再び眠りに入る。

そんな秋人にお構い無しに、夏実は好きにするもんねー！と上機嫌だ。

2人から少し離れた斜め後ろにいる麻冬は、2人の光景をチラチラ見ている。

もちろん会話は聞こえないけど、麻冬は夏実が羨ましい限りだ。

普通に考えて男子からモテているのは麻冬の方だ。

元気な夏実は男子には同等の立場として扱われやすい。

だが、実際問題そんなことは麻冬にとっては関係ないのだ。

なんせ、自分の好きな人が夏実を好きなのだから。

「麻冬ちゃん、当てられてるよ」

ボーッとしている麻冬に、後ろの女の子が声をかけた。

「えっ？あ、えーと…」

急いで席から立ち上がるが、授業に集中していなかった麻冬はどこを当てられたのか分からない様子。

すると隣の男子が
「問４だよ」と教えてきた。

「問４……あ、えっと、ｘ＝８です」
「正解だ」

正解してホッとしながら麻冬は席に座る。

教えてくれた隣の男子に
「ありがとう。助かった」とニコッとすると男子は顔を赤くして照れた。

こんな反応、麻冬にはちっとも嬉しくない。

他の男子に好かれたって意味がないのだ。

麻冬は後ろの女の子にもコソッとお礼を言う。

人はみんな羨ましがる。

麻冬の外見を。

もちろん麻冬の努力のおかげでもあるが、もともとの素材が良い。

水泳部ってことにも惹かれるところがあるらしい。

だけど麻冬は、頑張って綺麗な身なりをしている自分より、夏実の方が何倍も良いという。

綺麗じゃなくても夏実みたいだったら…と。

そのうち授業が終わり、本日最後の授業、物生が始まる。

物理か生物を選択できるのだが、もろ理系の麻冬と何となくで選んだ秋人が物理。

暗記得意の夏実とスポーツ医学が好きな春樹は生物なのだ。

夏実と春樹は同じ授業で、しかも席は自由だから隣に座るんだろう

けれと、夏実はあまり春樹に恋の話をしようとしない。
例えばさっき秋人に言ってた彼氏の話とか。
春樹が子どもっぽいからとか恋愛経験少なそうとか、そういうことではなく、春樹の気持ちが夏実にバレているわけでもなく。
春樹だから言えないらしい。

なぜかって？
それは夏実本人にも分かってはいない。

「ねっ夏実、今日自主練なんだって？俺んち今日部活休みだからさ～終わったら遊び行こ！」

移動教室の際、春樹が夏実に言った。

「あ、あたし今日用事あるんだ」
「なぁんだ、そっか～」
「休みなのに春樹は自主練しないんだ？」
「うん。たまには息抜きも必要だしねっ」

春樹はニャハッと猫みたいな笑顔を見せた。

春樹は可愛くて明るくて能天気で気の合う男の子。

夏実にとって春樹とはそういう認識しかなかった。

そう、今日の放課後が来るまでは――……。

next

第5話【綺麗な景色、君のおかげ】

最後の授業も終わり、掃除もＨＲも終わると、みんなそれぞれ部活に行ったり帰宅したり遊びに行ったりする。

ガヤガヤ賑わう教室の中で、４人も仲良く会話をする。

これから部活がある秋人と麻冬は荷物をさっさとまとめ、夏実は気分良さげに髪型を整えている。

「麻冬、秋人。部活頑張ってね～」

春樹が手を振った。

それに同調して夏実も軽く手を振りながら

「じゃーね～」と笑う。

秋人と麻冬が教室から出ていき、夏実も支度を終えて席を立ち上がった。

特に帰る支度もしていなく席に座っている春樹に、夏実は帰らないの？と声をかけた。

「課題でもやってこーかなって思って」

春樹が課題をやってくなんて珍しいなあ、なんて思いながらも夏実は軽く会話をしてから教室を出ていった。

夏実は放課後に玄関で待ち合わせすることになっている。

学年も違うし夏実は運動部に入ってるから、彼氏と実際に会ったのは一週間前が最後。

電話やメールでのやりとりはあるものの、なかなか会う時間がない2人。

それでも最後に会った日に彼氏が半年記念しようって言ってくれたから、夏実は会えなくても頑張れたのだ。

たわいもない出会いだった。

部活のあと遅くまで残ってた夏実が帰ろうとしたとき、その日はちょうど雨が降っていた。

走って帰ろうとした夏実を、誰かが引き止めた。

『傘ないの?』

その人は、夏実に傘をあげた。

自分は自転車があるから大丈夫なんだって笑っていた。

翌日、偶然校内でその人を見かけると彼はマスクをして少しだけ苦しそうに咳をしていた。

夏実に気づくと、パッとマスクを外して隠し
「昨日は大丈夫だった？」と夏実に聞いた。

大丈夫じゃないのは自分の方なのに。

夏実は彼のそんな優しさに惹かれたのだ。

彼が夏実に告白してきたのは、それから二週間ほど先のことだった。

「久しぶりだな～。先輩に会えるの」

夏実はルンルンしながら、靴を履き替えて玄関を出たところで立ち止まって待つ。

どんなに忙しくて会えなくても、気持ちさえ繋がっていれば大丈夫と夏実は思っていた。

バレー大好きの運動バカで元気すぎるし、髪なんかも染めちゃったりしているけど、中身は他の女の子と同じ恋する乙女。

決して熱血スポーツマンってわけではないのだ。

人並みに好きな人の話をして、彼氏と一緒に帰れるだけで喜んでしまうような可愛い奴。

表面では平気なフリをしていたって本当は傷ついてる。

笑っていても、本当は悲しい。

夏実が髪を茶色にした理由は、弱い自分を守るためだ。

小学生のときからバレーをやってる夏実はバレーに自信があるが、そのバレーで嫌な思いをしたことだってある。

まだ髪が黒い中学入学当初、バレーが上手い夏実をバレー部の先輩がイビっていたときがあった。

春樹のように叩かれるようなことはされなかったが。

部活以外では泣いていた夏実は、ただバレーが好きなか弱い女の子だった。

それでも自分を認めもらおうと、強くなろうと思って茶色の髪を身に纏ったのだ。

「夏実ー」
「せんぱっ……あ、真理子。今帰り？」
「うん。夏実は誰か待ってるの？」
「へへ。ちょっとね」

玄関で彼氏を待ち始めてから、かれこれもう1時間以上経っている。
電話をしてみても留守電だし、探しに行こうにもすれ違うと困るから動けない。

「…やっぱダメかな」

雑誌に載っていた可愛いヘアアレンジ。
珍しく夏実が髪をいじったのも、彼氏のため。

どれくらいの人が玄関を通ったことか。
その中に来て欲しい人の姿は見えない。
それでも夏実は待ち続けた。

その頃春樹は、ようやく課題を終えて伸びをしていた。

もう誰もいない教室。

テキストを閉じて、耳からイヤホンを外す。

「あーあ。せっかく休みなんだから夏実と遊びたかったな」

窓まで歩いていき、外を眺めながらつまらなそうにそう呟く。

窓をガラッと開け、グランドにいる秋人を見つけるため少しだけ身を乗り出す。

が、見えるはずもない。

諦めた春樹は、帰る支度を始めた。

学校は1年が4階、2年が3階、3年が2階で、5階建てだ。

1階と5階には専門室がある。

階段を降りると3年生の階についた。

2階に玄関があるこの校舎は、両端の階段から降りると2階の真ん中からつながる玄関に行くためには3年の教室の前を通ることにな

る。

真ん中の階段から降りてくればそのまま玄関へ行けるのだが。

特に何も思わず3年の教室の前を通っていると、夏実の彼氏の姿が見えた。

なんだ、用事って彼氏とじゃないのか…なんて思いながら教室をチラッと見ていると、夏実の彼氏は一緒にいる女とキスをした。

「えっ…？！」

春樹は目の前にある光景が信じられず驚いた声を上げる。

そしてちょっと隠れながら2人のやりとりを見ていることにした。

「も～雄大ってばぁ」

楽しそうな2人。

「あ、そういえば夏実ちゃんとの約束じゃないの？」
「あ？そーだっけ」
「ひっどーい。半年記念なんじゃないのぉ～？」

2人はケラケラ笑った。

やっぱり夏実はこいつとの約束だったんだ…と思いながら春樹は怒りを露にしている。

「別に良いよ。俺たいしてあいつ好きじゃないし」

「あは。夏実ちゃんと付き合ってても特権なかったもんね」

「本当だよ。学校のスターと付き合えば何か良い扱いでもされんのかと思ってたぜ」

春樹は今ここでこいつを殴り倒すか、今すぐ夏実のとこへ向かうか迷った。

殴ることは簡単だ。

だけど夏実を好きな春樹にとって一番大切なのは、夏実を傷つけないこと。

春樹は怒りを抑えながら玄関へ向かった。

どこで待ち合わせしてるのかくらい聞けば良かった、なんて思っていると玄関に夏実が立っているのが見えた。

春樹は急いで靴を履いて、外にいる夏実のところへ駆けた。

「夏実っ…！」

振り向いた夏実は、少しだけ悲しそうな顔をしていた。

「あ、春樹。今帰り？」

それでも動揺を見せないために夏実は必死に笑った。

そんな夏実を春樹はギュッと抱きしめた。

「はっ…春樹？！」

まだ下校していないみんなが2人を見てキャーキャー言う。

夏実はどうしたのよ～と少し困惑気味だ。

「…今日あいつ来れないって！」

「え…？」

春樹は夏実を離して、目を反らしながらすまなそうに言った。

「ごめん…俺伝言頼まれてたのに言うの忘れてたんだ」

精一杯の春樹の優しさだった。

夏実は

「本当に？」と疑いながら春樹に聞くと、春樹は本当だよ、ごめん。

と頭を下げた。

「…そっか。それじゃ仕方ないもんね。ありがと春樹」

「いや…」

そんなやりとりをしていると、夏実は下駄箱の方を見ながら

「あっ…」と声を上げた。

春樹がそっちを向くと、夏実の彼氏とさっきの女がいた。

春樹はやばいと思ったものの、夏実が見つけてしまったのだからどうすることも出来ない。

「…げっ」

彼氏は夏実に気づいて、面倒くさそうな顔をした。

「先輩…その人誰？」

まさに修羅場というものだ。

彼氏は夏実の質問に答えることなく、こう言った。

「なに、もしかして俺待ってたわけ？」

「え…」

「2時間近く待たされてもまだ気づかない？ぶっちゃけ俺お前と記念祝いする気もないから」

そして続けて

「こいつ今の彼女。だから悪いけど別れて」と言った。

夏実は言葉が出て来なく、代わりに涙が溢れた。

「夏実っ…」

春樹が心配そうに声をかけたけれど、そんな行為も次の雄大の言葉によって無意味となる。

「つか俺お前と付き合ったのもお前が好きとかじゃなくて、海野夏実と付き合えば自慢になるし特権があると思ったからだから」

「おいっ、お前いい加減にしろよ！」

春樹が怒鳴った。

真剣な春樹の瞳に雄大は一瞬たじろぐものの、負けじと言い返す。

「なんだよ、本当のことだろ。まぁ別に雪原麻冬でも良かったんだけど」

その言葉にキレた春樹が雄大の胸ぐらを掴んで殴ろうとするところを夏実が止めた。

「夏実…なんで」

「良いの！」

夏実はポロポロと涙をこぼしながらその場から逃げるようにして去った。

そんな夏実を

「あいつでも泣くことあんだな～」と雄大がバカにしたようにゲラゲラ笑った。

春樹は殴りたい気持ちでいっぱいだったけど、それを夏実が止めたから殴るに殴れない。

「おい櫻井。お前も気をつけろよー。俺みたいな女に引っ掛からないようにな」

春樹はバッと振り向いて雄大の顔目掛けて勢いよく殴りかかった。
寸前で止めたものの、雄大はあまりの驚きにヘナヘナと腰を抜かした。

「…おいバカ、耳ほじってよーく聞いとけ」

めったに泣かない夏実が泣いているのを見て、よっぽどこいつのことが好きだったのか、と春樹は少し悔しく思った。

「良いか！傷つけた方はこんなんすぐに忘れるんだろうけどな、傷つけられた方は一生癒えない傷背負っていくんだよ！」

いつか夏実が言った台詞。

未だに鮮明に覚えているのは、春樹が夏実との出会いを大切に思っているから。

「お前みたいな奴が人を好きになる資格なんてねぇんだよ！夏実に謝れ！！じゃなきゃこの顔二目と見れない面にしてやるよ」

春樹はグッと雄大の両頬を握りながら、見たことのない怒りの形相で雄大に言った。

「分かった！分かったから許してくれっ」と、春樹に怯えた雄大が半泣き状態で叫んだ。

春樹は乱暴に雄大を離して、夏実の後を追いかけるようにして走った。

野次馬のように集まってた人たちもガヤガヤと騒ぐ。

人気者を傷つけた雄大はきっとこれから肩身狭い思いをするだろう。

春樹は夏実を探した。

まず家に帰ることはない。

近くの公園やら広場やらを探してみるものの、なかなか見つからない。

それでも必死に探す。

「どこだよっ…」

そんなとき、春樹は前に夏実がこう言っていたのを思い出した。

悲しかったり悔しかったりするときは、ここに来るの。

夏実がそう言った場所は、この辺の街が見渡せる高所。

光景がとても綺麗で見ていると元気なれるんだと言っていた。

一度だけ4人で行った場所。

絶対にそこだと確信を持ちながら春樹はその場所へ走った。

春樹の考え通り、夏実はその場所にいる。

夏実にとっては初恋だった。

それをあんな形で裏切られたら、誰だって傷つくだろう。

信じてた人からの、好きだった人からの残酷な言葉。

「…最低」

いつもなら見れば元気になれるはずの光景も、今はちっとも元気になれない。

目に綺麗に写らない。

夏実は、最悪の形で裏切った彼氏を憎むけれど、なにより泣くだけで何も言えなかった自分が一番憎いのだ。

「うわー、すごい眺め」

座っている夏実の後ろから、春樹の声がした。

夏実が軽く振り向くと、汗を袖でぬぐって、膝に片手を置いて息を切らしながらも笑っている春樹がいた。

「春樹…」

春樹は夏実の隣に腰を下ろす。

「…春樹、ありがと。本当は伝言なんか聞いてないでしょ？」

「う…」

「あたしが傷つかないために言ってくれたんだね」

それでも結果的に夏実とあいつを引き合わせちゃったんだから意味ないね…と春樹は苦笑した。

「そんなことない。でも…春樹がいてくれて良かった」
「夏実…」
「…あたし、あれ初恋だったんだ」

春樹は足を伸ばして両手を後ろに伸ばす。

そして聞こえるか分からないくらいの大きさの声で
「うん…」と言う。

夏実も、少し間を開けてから涙声で弱々しく言った。

「あたしは…柄にもなくこの恋が一生続けば良いなって思ってた」

そして夏実は、あの女の人と仲良いことは前から知ってた、と続けた。

「…それでもきっとあたしを選んでくれるって…思った」

春樹は何て言葉をかけたら良いか分からなかった。

だけど春樹は、夏実の方を見ながら夏実の手を握った。

「あいつの見る目がなかったんだよ。夏実は十分素敵だよ！」
「春樹…」
「あいつなんかのために泣くなんてもったいないよ。はやく忘れよっ」

仮にも夏実はまだ雄大が好きだとしても、春樹には関係なかった。
いつでも一直線な春樹に、今夏実が救われているのもまがいない事実。

「…夏実、今は辛いかもだけど頑張ろう?明日あいつにちゃんと気持ち伝えて、それでこんな悲しいの終わりにしよう」

夏実はその言葉にまた泣いてしまうけど、そうだね…と口元は微笑んでいた。

こういうとき、1人じゃなくて良かったと身に染みて思うのだ。

「あ…綺麗」

夏実は景色を見ながら言った。

さっきまで綺麗とも思えなかった景色が、今はとても綺麗に見えるらしい。

「本当だ。陽が赤く反射してるからかな」

春樹はそう言ったけど、夏実は違うよと心の中で思う。

「夏実、夏実には俺がいるんだからなっ！」

無邪気にそう言う春樹。

どういう意味で言っているのか分からないが、夏実は春樹が隣にいてくれることが嬉しくて

「うん」と笑った。

たった数分間で景色の輝きが変わった。

綺麗と思えたのは陽のおかげなんかじゃない。

春樹が隣にいるから…夏実はそう思った。

next

第6話【はりつめた状況】

夏実の気の済むまで春樹は付き合った。

気づけばもうそこに2時間は滞在していて、まだ9月だというのに夜になると涼しくなる。

「あ」

部活を終えた秋人が部室で着替えていると、メールがきた。

春樹からのメールで、麻冬にも同時送信してある。

「なんだ秋人、メール？」
「んー」
「おっ、もしや女？」

チームメートがいたずらっぽく言った。

メールの内容は、夏実が泣いてるから秋人んちで集まって遊ぼうというものだ。

まるっきし意味が分からない内容である。

「…女の子が泣いてるからから励ましてきまーす」

秋人の意味不明な言葉に部室にいたメンバーは雄叫びを上げるが、秋人は気にせずさっさと荷物を持って部室を出る。

帰る前に水泳部に寄って行こうとすると、その近辺で麻冬と出くわした。

麻冬もメールを見て秋人を迎えに行こうとしてたのだ。

「お疲れ～。見た？春樹のメール」

「うん。なんか謎だった」

確かに謎だ。

夏実が泣いてるってのも珍しいけつ有り得ないことではないからそこまでは良いけど、だから秋人の家に行くってなぜ？

普通夏実の家か、ダメでも春樹んちだろう。

しかも遊ぼうって、励まそうじゃないのか…というわけだ。

まぁ春樹のメールはいつもだいたいこんな感じだから秋人も麻冬も慣れている。

みんな自転車通学しているけど、麻冬は今日車で来たから秋人と2

ケツすることになった。

「夏実…どうしたのかなあ」

軽やかに自転車を走らせる秋人の後ろで麻冬が心配そうに言う。

麻冬は今日夏実が彼氏と会う予定だったことを知らない。

春樹も知らなかったし、知ってたのは秋人だけ。

だから秋人にはだいたい想像がついている。

記念日を忘れられたか振られたか…いずれにしよ別れたんだろうな、なんて軽く考えるほどに。

「…ま、とりあえず慰めてやったら」

「他人事ぉ？」

「だってあいつがベタボレだったんだし」

そっけなく言うけど、秋人だって夏実のことをかなり心配しているはず。

むしろ、心配してるのはそこじゃないかもしれない。

別れたことは秋人にとっては大したことじゃない。

ただ一番落ち込んでるときに側にいたのが春樹だったとしたら、春樹に情が移るかもしれないって思っているのだ。

「…彼氏のことで泣いてるの？」

麻冬は秋人の意味ありげな言葉に過剰に反応した。

秋人が質問に答えずにいると、麻冬は続けて言った。

「なんで秋人…知ってるの？」

秋人が春樹に夏実を取られたくないって思うように、麻冬も夏実に秋人を取られたくないのだ。

秋人の親友は春樹で、麻冬の親友は夏実だけど、例え親友にでも取られたくないと思ってしまう複雑な心。

「…昼間夏実が今日彼氏と会うって言ってたから」

「夏実が？」

「半年なんだって。今日で」

麻冬は小声でふぅん…と答えた。

もう夜になって歩いてる人もほとんどいなく、家の灯りが点々と付

いている。

くだり道をサーッと気持ちよく下っていく。

秋人が自転車の後ろに乗せるのは夏実と麻冬だけ。

気が向けば春樹も。

秋人にとって3人は大切な存在で、他の3人も同じ。

けれど

出会わなければ良かった

そう思うことだって、たくさんあるのだ。

思いたくなくても、ひがみたくなくても、恨んでしまう。

恋愛に限っては。

「あ！来た来たっ」

秋人と麻冬が秋人の家に着くと、２階の秋人の部屋から春樹が窓を開けて手を振った。

その横からひょこっと夏実が出てきて、泣きはらした目で笑いながら軽く手を振る。

秋人が自転車を止めて麻冬と家へ上がる。

ちょうど秋人の母親がジュースとお菓子を運ぼうとしていたから、麻冬が

「おじゃまします」とあいさつがてら、お菓子を運んだ。

秋人の部屋へ行くと、たくさんのジュースにお菓子が大っぴらに広げてあって、半分はもう食べられている。

「おっかえり～」

夏実がいつものように元気よく迎えた。

秋人は荷物をバッと放り投げ、ベッドの上に寝転がりながら

「で？」と言った。

「ん？」と聞き返す夏実に、秋人は彼氏と何かあったんだろ、とそ

っけなく言う。

「あぁ～…うん。えとね、振られちゃった」

苦笑しながら夏実は言った。

「なんで？あんたらラブラブだったんじゃないの？」

麻冬がちょっとだけ怒りながら言う。

夏実は

「うーん…」と答えるに答えられずにいる。

そんな夏実に代わって、春樹が勢いよく言った。

「ほんっとムカつくんだよ、あいつ！」

春樹は、一部始終全部2人に話した。

と言っても、春樹が雄大とその女の会話を立ち聞きしたから夏実に「雄大から伝言あった」って言ったことや、夏実が逃げたあと雄大に文句を言ったことは決して口にしなかった。

あくまで夏実と雄大の会話だけを秋人と麻冬に話す。

けれど、秋人は勘がするどい。

些細なことからいろんなことを見透かしてしまうんだ。

「春樹何やってた？」

「俺？学校で？一応課題」

「ふーん…じゃあ夏実の男に女がいること知ってたんだ」

今の会話の中でどこをどう解釈すればそうなるのか、本当謎だ。

さすがは学年一の天才、頭の回転がはやければ頭もキレる。

「えっ、どゆこと？」

麻冬が秋人に聞き返すと、秋人は春樹の方を見ながら答えた。

「だって春樹がタイミングよくその場に現れるのってかおかしいだろ。

例え偶然だったとしても春樹が夏実たちの会話に入ってるってことが変」

なるほど。

確かに偶然通りかかったんだとしても、3人の会話に春樹が突然入るのも変だし、会話の流れからしても最初から春樹と夏実が一緒にいたように感じる。

麻冬は
「あっ、確かに！」と納得した様子だ。

春樹はちょっとためらいながら
「うん…知ってた」と言う。

「あのね、春樹が言いにきてくれたの。先輩から用事あるから今日は行けないって伝言頼まれたの忘れてた…って」

夏実が言った。

秋人はそうだろうな、というような表情を見せた。

「嘘ついたってこと？」

麻冬が春樹に尋ねた。

「あ…うん」
「春樹やるー！先輩と夏実会わせないためにそう言ったんだ～」

「結果的に会っちゃったんだけどね」

へへ…と微笑する春樹に、そりゃそーだ！と麻冬は豪快に笑った。

「ま、さっさと別れられて良かったな」

寝転がったままの秋人が言った。

「確かにねぇ。本当最低よね。夏実、あんな奴はやく忘れちゃいなよ！」

「うん、ありがと。あのね、本当言うと裏切られたって分かったあと泣いたのは、それでも先輩が好きだったからなの」

夏実はポッキーをかじりながら、揚々と語る。

「死んでも良いくらい…大好きだったんだ」

夏実は過去を見ているような瞳をしている。

たった半年だったけれど、出会ってからの思い出は数知れないほどある。

忘れろっていうほうが無理。

「だけど、春樹がいてくれたから立ち直れたの」

その言葉に秋人と麻冬が微かに反応する。

「春樹が一生懸命励ましてくれたから、頑張ろうって思えた」

隣で春樹は
「そんなことないって」と照れ隠しをする。
夏実は春樹に向かって微笑みながら言った。

「春樹がいてくれて良かったって、本当にそう思ったよ」

夏実は本当に嬉しそうな顔をしている。

春樹は、そんな夏実の顔にドキッとしたのかパッと顔を反らせた。
顔を赤くしているのが秋人と麻冬には分かったけど、夏実は気づいていないよう。

「さーて、話はこれだけ！みんなありがとね！」

夏実が手をパンッと叩きながらそう言うと、麻冬は
「いーえ」と笑い、秋人は
「おー」と薄ら返事をして春樹は
「うん！」と猫みたいな顔をした。

そのあとはみんなでジュースを飲んでお菓子を食べながら世間話やら面白い話やらをして盛大に盛り上がった。

けどこの４人の間で決してされないのは恋愛話。

まぁ当然と言えば当然である。

春樹と秋人は夏実が好きで麻冬は秋人が好きなのだから、この４人の間でそんな話ができるはずがない。

夏実も彼氏の話とかは敢えて自分から言おうとしないから、必然的に恋愛話はされないのだ。

だけど、今日わ違った。

彼氏と別れた夏実は、はっと思い立ったようにみんなに尋ねた。

「ところでみんなは好きな人とかいないの？」

なにも知らない夏実に全く悪気はない。
けど、一瞬にしてシーンとなってしまった。

「？え？なに、どしたの？いやーみんなの話聞いてないなと思ってさ」

夏実がそう言っても、誰もなにも言おうとしない。
春樹は目を反らすし、秋人は目をつぶっているし、麻冬は冷めたような目をしている。

そんな中で、一番に口を開いたのは意外にも秋人だった。

「さぁどうだろうな」
「えー？なによぉ秋人～」
「お前はどうなんだよ春樹」

秋人は春樹に話を振った。
俺かよ？というような顔で春樹が反応した。

「…いることはいる。けど、教えない」

そんな春樹の言葉に夏実は
「ずるーいっ」と言う。

今度は春樹が麻冬に振った。

麻冬は夏実を一瞬見て、そして
「あたしに彼氏できたら男子泣いちゃうから」なんて語尾にハートをつけながら言った。

みんな適当に流したけど、この何気なく漂うピリピリ感。

さすがに夏実もなんだか少し変だな、なんて感じた。

口には出さなかったけれど。

「まーまー、そんなことより俺カップ麺食いたい！」
「あー俺牛丼食いてぇ」
「あたしパン系かな」
「あたしスパゲッティ！」

春樹の気のきいた転換に、また盛り上がりを取り戻す。

ガヤガヤと誰が買いに行くかをもめながら楽しそうに会話する。

結局ジャンケンで買いに行く人を決めることにした。

いつまでもこんな仲が続けば良いのに、と誰もが思う。

けれど誰かが動き出してしまったら安定している糸は一気にプッツリ切れてしまう。

はりつめた状況に

今、４人はいる。

ｎｅｘｔ

第7話【ご機嫌取り】

「はぁ？！ふざけんな！」
「そーよ。意味分かんない」
「本当うぜぇ」
「ありえないよ、これ！」

時は初秋。
つまり体育祭の時期にあたる。

夏実が、麻冬が、秋人が、春樹が文句を言っているのには訳がある。

朝練から帰ってくると、後ろの黒板には体育祭での種目がズラーッと書かれてあり、勝手に４人の名前が書かれているのだ。

しかも大概派手な種目や面倒な種目ばかり。

「いや、でも４人がこういう得点高いのやってくれるとうちのクラス優勝間違いだし…」

最後の大砦のスウェーデンリレーには４人ともエントリーされていて、障害物やら２人３脚やら騎馬戦やら、面倒なものばかり。

「なんでよ。優勝なんて興味ないし」

夏実はそっけなく言った。

一番張り切りそうなのに、なぜ夏実がこんな態度なのかと言うと夏実は太陽が苦手なのだ。

だから部活も体育祭部活だし、体育祭は1日だからずっと外にいるのが耐えられないのだ。

秋人や麻冬はまぁ性格からして嫌がりそうだし、春樹はみんなで協力しようとしないクラスが嫌だから怒っているのだ。

「強制種目だけでもかったりーのに」

秋人が言う強制種目とは、男子は組体操と棒上げ、女子はダンスと竹取りのことである。

それからもちろんクラス全員リレーも忘れられない。

「優勝したいならしたい人だけでやってよぉ。あたしは強制種目だけで良いわ」

強制種目以外の参加は自由だ。

もちろん各種目とも何人ずつ参加しなきゃならないって決まりはあ

るが。

だから人数が合う限り誰かが2種目出ようが0種目だろうが問題はないのだ。

「人まかせって俺嫌ーい。迷惑極まりないな。そんなんより強制種目って全部午前中だよね？午後遊びに行かない？」

春樹の発言はもはや強制種目以外出る気はないという感じだ。

体育祭の日は部活もない。

つまり遊ぶには絶好の日なのだ。

そうこうしているうちに朝のＳＨＲが始まり、１限の現国が始まった。

昼休みにクラスで何に出るか話し合うってことになったけど、おそらく４人はそんなこと無視するに違いない。

真っ直ぐな上頑固な４人だから言い出したら切りがないのだ。

特待生扱いの彼らなんだからスポーツ科みたいなのがあれば良いのだが、県立高校がゆえにそういった科はないのだ。

私立なら特待生として授業料も免除されてもおかしくないのだが、

県立のため推薦扱いになるせいで授業料も払わなくてはならない上に普通科になる。

もちろん私立からいくつか特待生としてのオファーがきていたのだが、面倒くさがりな彼らは近場の高校を選んだのだ。

それが偶然この星陵高校だったのだが、理由はそれだけでなく、県立にしてはスポーツが盛んで特に彼らがやってるスポーツは全国常連という具合。

特にお金に困ってるわけでもないんだし、それならば私立に行く必要もないと考えたのだろう。

「あーあ、天音とかにしとけば良かったあ」

1限が終わり休み時間になり、夏実と秋人の席へ春樹が文句を言いながらやってきた。

「天音学園？あーあたしんとこにも特待来たあ。あそこの学食すっごい美味しそうだったし」

夏実が答えた。

「舞留学園もなかなかじゃない？」

3人のもとへ麻冬もやってきた。

「あー舞留か。あそこのグランド広くて良いよな」

いつもは休み時間だいたい寝ている秋人も起きている。

みんなと文句を言いたいのだろうか、その気持ちも分からなくはない。

天音や舞留の両方とも4人のもとへ特待のオファーがきていた。

もちろん他の私立からも。

私立だけあって星陵よりは断然設備も良くて敷地も広い。

普通の人間ならそんなところから特待が来れば喜んで行くだろうのに、そうしないところがこの4人の良いところと言うかなんというか…

「で、どこ行くどこ行く?」

夏実がウキウキしながら話を切り出した。

さっきの春樹の提案に賛成の意を示している。

「ゲーセンで良くね？」
「え～映画とかの方が良いわ」
「俺プール行きたい！」

なかなか話がまとまらない。

あーだこーだ言いあっていてもラチがあかなく、１０分の休み時間はあっという間に過ぎた。

春樹と麻冬は急いで席へ戻り、授業の支度を始めた。

２限は数字、３限は物生で４限は音楽なのだが、４限でも再び波紋が繰り広げられることになる。

体育祭と文化祭が終われば、次は音楽祭がある。

つまり、歌う曲と各パート、それから伴奏者と指揮者を決めなきゃならない。

特に伴奏者あたりは…

なにかしら目立つ４人だし、スポーツだけじゃないってところがまた人気を呼ぶわけだ。

生徒からの支持はもちろんのことだが、教師からだって頼られる存在になっている。

まぁ…４限だけならまだ良いのだが、５・６限は体育なのだ。

なんで２時間連続なのか分からないが、とにかく今日の体育からは体育祭の各種目の練習に入るのだから本当に昼休みまでに決めなきゃならない。

騒々しい予感…

「じゃあ立候補はいないかしら？」

ついに始まる４限。

先に伴奏者と指揮者を決めることになったのだが、どっちも立候補がいない。

仕方なく推薦という形になるのだが、案の定麻冬の名前が上がる。

麻冬以外にも2人ほど候補は上がってるけど、断然麻冬がトップで支持されている。

「冗談じゃないわっ！」

それを見かねた麻冬が勢いよく席から立ち上がった。

「あたしやらないわよ！」
「でも雪原さんが一番…」
「ずるいですよ！」

教師相手でも怯むことがないのが麻冬らしい。

「あたしは朝も放課後も部活があるんです。もうじき秋季大会だってあるのにピアノの練習なんかしてらんないわ」

麻冬が言うのも最もだ。

面倒くさいとかそういう前に、麻冬は期待されてる運動部の部長だからそれなりに練習に励まなければならない。

朝も放課後も休日も部活があるのにいつピアノを練習する時間があるのか…これほど正当な理由はないだろう。

「そうねぇ…確かに雪原さんは大変かもしれないわね」

麻冬の意見に教師も納得気味。

それでも周りは麻冬にやって欲しいのかガヤガヤする。

「なによぉ、文化部の子がやれば良いじゃん。週一の部活しかないんだからー」

どっからか夏実が言った。

「むしろ帰宅部がやれっつー話だよな」

夏実に続いて秋人も言った。

「なんかみんなこういうの俺らに押し付けたがるけど、なんでなの？」

春樹もブーたれながら言う。

麻冬だけでなく3人にまでこう言われちゃ、他の生徒たちは何も言

えない。

結局麻冬以外の候補に上がってる人たちの中から多数決で決めることにした。

伴奏者がダメなら指揮者を麻冬に…ってみんな思っているようだったが、これ以上麻冬を怒らせるわけにもいかないと感じたのか麻冬を推薦しなかった。

代わりに春樹が指揮者に立候補し、指揮者は春樹となった。

しかもソプラノパートのリーダーは麻冬、アルトパートのリーダーは夏実、男子パートのリーダーは秋人になった。

ちなみに全て教師が強制的にやらせたのだが。

3人ともまぁしぶしぶ引き受けたものの、特にやる気はない。

各パート練のときに少しだけ指示する程度。

なぜみんなもそこまで4人に執着したがるのか分からない。

体育祭で頼りたいってところは分かるが、音楽祭なんてブラスバンドとか軽音部の人とかが中心になってやれば良いはずだ。

ご機嫌取りのつもりか…

そのご機嫌取りが逆に機嫌を損ねているというに。

とりあえず４人は諦めて指揮、リーダーを務めた。

next

第8話【スウェーデンリレーのメンバー】

音楽の授業が終わり、教室に向かう途中秋人が思い出したように言った。

「あ、飯忘れた」

「秋人ばっかだなぁ。うち学食もないのに」

「んー…」

学食がないばかりか購買には食べ物系は全く売っていない。

パンや弁当を売りに来るけど、どれもすごく行列ができて買うのに時間がかかるから秋人は絶対に嫌がるのだ。

「コンビニ行ってくる」

秋人は春樹に音楽の教材を預けて、向きを変えて玄関へと向かって行った。

「あ、じゃあプリン買ってきて！」

「じゃー俺メロンソーダ！」

「あたしフランクフルトー」

みんなして寄ってたかってそう言うので、秋人は仕方なく「へーへー」と軽く返事をして歩いて行ってしまった。

学校のなため前くらいにコンビニがあるから、便利っていえば便利なんだよね。

最も昼休みにコンビニ行くこと禁止されてるんだけど。

そこは誰も深く突っ込まないところが良い。

3人は先に教室に戻って昼ごはんを食べていることにした。

そういえば、昼休みといえば体育祭の種目決めだ。

ばっくれようと思っていたものの、なんか教室から出れない雰囲気が漂っているような感じがして3人は仕方なく教室でご飯を食べることにした。

後ろの黒板は見ないふりをしながら。

そのうち体育係かクラス委員かは分からないけど男女が立ち上がって、「じゃあさっそく種目決めよう」と言いだした。

3人はシカトしながら楽しくご飯を食べているが、その男女が3人

に近寄ってきた。

「あの、何なら出てくれる？」

どうしても出て欲しい様子だ。

４人が出なくても別に人数的には問題はないのに、やぱりそこは勝ちたいって気持ちがあるからだろう。

近寄られて話しかけられちゃ、いくらなんでもシカトするわけにはいかない。

春樹が一番最初に口を開いた。

「…どーする？」

「うーん」

本気で出る気のない３人。

「俺障害なら良いけど、でもうちの障害物って簡単すぎてつまんないしなー」

はしごをくぐったり平均台を歩いたり網の中をくぐったり…など、ごく普通の障害物なのだが春樹にとっては物足りないらしい。

「そこをなんとか頼めない？」

男女と同様、クラスメートたちもお願いしますというような目つきをしてくる。

「あたし手が汚れるのも練習が必要なのもヤダな」
「あー綱引きとか麻冬には無理そうだもんね」
「でしょ？」

断るに断れない状況になっていて、「どーせなら４人同じ種目にしよっか」ということになり、男女４人でできる種目を探してみたところ春樹の嫌がる障害物リレーと借り物競走とスウェーデンリレーしかない。

借り物も楽だけど、やっぱここは見せ場のスウェーデンにしようということになり、４人はスウェーデンリレーに出ることになった。

「もう１つくらい出てくれると嬉しいんだけど…」

委員はそう言うけれど、「なら秋人に頼んでくれる？」と麻冬が言うと男子の委員が「だよね。やっぱ１人１つで十分だよね。じゃス

ウェーデンよろしく！」と言って、そそくさと言ってしまった。

男子が秋人に逆らえるわけがない。

あんなボーッとしている男でも、かなり慕われているのだ。

3人がご飯を食べ終わった頃、ようやく秋人が戻ってきた。

秋人は教室入るなり後ろの黒板に目を移し、自分の名前がスウェーデンリレーのところに書かれているのを見て3人に言った。

「なにあれ」

眠いのか怒っているのか分からない顔だが、3人は慣れっこ。

「あーね、あれねー、うん。断れなくってねー、スウェーデンだけ出ることになっちゃったんだよねぇ」

夏実が笑いながら言うと、秋人はハァとため息をついて「まじかよ。かったりー」と言った。

そして腰をおろして3人に頼まれたものを渡して、秋人も昼食を食べ始めた。

プリンを食べながら夏実は「でもスウェーデンって一番最後だから遊び行けなくなっちゃったね」と言った。

「良いじゃん。終わったらどっかで飲もうよ」

まるで大学生のような発言をしたのは麻冬だ。

「あ、じゃああそこで良いんじゃない？亀八」

亀八とは４人のいきつけの居酒屋のことで、街のはずれにあるからうちの学校の教師や生徒は絶対来ない。

ことあるごとに４人はそこへ行く。

例えば誰かが試合で勝ったときやこういう体育祭のあと、あとは進級祝いとか…まぁ要は飲める口実ができればなんでも良いのだ。

「賛成！よーし、なんかやる気出てきたぁ！」

ちなみにクラス優勝とかあまり興味のない４人は午前の部が終わったあとは近くのファミレスに行く予定。

スウェーデンは一番最後だからかなり時間かかるし、間に自分のクラスが負けてようが勝ってようが、自分らが出る種目が勝てれば問題なしなのだ。

昼休みも残り１０分となった頃、次は体育だからみんな更衣室へ向かった。

ちなみに本日の体育は４人のクラス…６組が行う。
つまり１－６、２－６、３－６だ。

体育祭はクラスマッチだから、３学年の同じクラスが同じチームとなる。

ちなみに６組のハチマキの色は桃色。

１組赤、２組青、３組黄、４組橙、５組緑、７組紫、８組白である。

普段の体育ではハチマキなんてつけないけれど、こういう合同の体育と体育祭予行練習のときは付けなければならない。

特に秋人は嫌がるわけだが。

「３年代表、菊池・田中・久野・服部っす」
「１年代表、志村・畠山・村田・笠井です」

体育が始まり、各種目での顔合わせが始まった。

１－６と３－６の人たちが紹介を始める。

「２年代表、櫻井・月影・雪原そんでもってワタクシ海野でーっす」

夏実がふざけ半分でピースしながら言った。

スウェーデンはこの１２人で１チームとなる。

誰がどこを走るかは自由。

つまり男子と女子が一緒に走るときもあるということ。

「すっげーな！今年の２年最強！」

「なー！これ優勝間違いなしなんじゃね？！」

先輩たちが興奮したように騒いだ。

まぁ無理もない。

運動神経抜群の４人が、しかも一緒の種目に出るのだ。

これは他の人がかなりの勢いで失敗しない限り優勝は約束されたも同然。

この４人はそれほどすごいのだ。

普段はそうは見えないが…

「わ～夏実先輩に麻冬先輩！ずっと憧れてたんですぅ」
「俺も！櫻井先輩と月影先輩と一緒に走れるなんて嬉しいっす！！」

あらあら、先輩だけでなく後輩までも興奮気味だ。

「で、走る順はどうする？」

４人はどこでも良いと答え、１年生たちも同意した。
みんなタイムを言っていき、３年生が決めることにした。

１２人の中で一番早いのは秋人だ。
なので秋人がアンカーを務めることになった。

あとは適当にタイム的に割り振っていった。

その結果、麻冬が１番、春樹が６番、夏実が９番となった。
そして秋人は１２番だから、４人ともちょうど良い具合に散らばった。

そして１回だけ軽く流して走ってみることになった。

「おいっ、櫻井と月影と海野に雪原がスウェーデンにいるぞ！」

１２人が走っているのを見た周りの人が騒ぎたてた。

そんなに騒ぐことでもないことなのに。

「すっご。じゃスウェーデン優勝じゃね？」

さぁ、４人は周りの期待にこたえることができるのか。

体育祭まであと１０日。

ｎｅｘｔ

第9話【阿笠】

「なぁなぁ、昨日の結局なんだったん?!」

放課後になりＳＨＲを終えて、４人はそれぞれ部活へと向かった。

秋人が部室で着替えていると、一緒に着替えている同級生が昨日のことを尋ねてきた。

「昨日?」

秋人が聞き返すと、他の男子たちも「俺も気になる!」と挙手までしながら名乗り出てきた。

昨日ってなんかあったっけなー…なんて秋人が考えていると、サッカー部ん中で一番仲の良い阿笠が言った。

「ほら、女の子がどうのって奴」

「…ああ。あー、あれか。はは」

1人で納得して1人で笑っている秋人についていけてないチームメートたちは頭にクエスチョンマークを浮かべている。

阿笠は副部長で、秋人が部員の中で最も信頼している男だ。

優しめの顔に、サラサラの髪で、確か麻冬と同じ中学だったはずだ。

「？なんだよ、秋人」
「夏実が…あ、いや、なんでもねぇ」

言おうとしてやっぱりやめた。
人様に言うようなことでもないから。
秋人は「まぁ昨日言ったまんまだよ」と軽く流した。

「ふーん？まぁ良いけどさ」

秋人が着替え終わったと同時に阿笠も着替え終わる。
2人は一緒に部室から出て、練習へと入った。
まずはランニングにアップにパス。
副部長なだけあって小笠原はうまいのだ。
あの秋人と同等にできるのだって、阿笠くらいだ。

当然、そんだけサッカーがうまいのなら阿笠にだって秋人と同様に高校受験のときにいろんなところから推薦がきていたはず。
なのに阿笠もどの私立の特待も蹴って、この高校に推薦で入ってき

た。

柔軟で阿笠が秋人の背中を押しているとき、ふいに小笠原の手が止まった。

「阿笠？」

「え？あっ、あ、わりぃ」

秋人の声で我に帰った阿笠は再び秋人の背中を押した。

秋人は阿笠が向いていた方を見てみた。

おそらく、水泳部の方。

「…麻冬と同じ中学だっけ」

「俺？ああ、そうだな」

時々阿笠が水泳部の方を見ていることを秋人は知っている。

うちの学校は温水プールがあるけど、この時期はまだ暑いから外のプールを使っているからグランドからプールが見えるんだ。

「…麻冬元気？」

「あれ、お前麻冬と仲良かったっけ」

秋人がチラッと阿笠を見ると、阿笠は少しだけ切なそうな表情をした。

すると、阿笠は小さな声でポツリと言った。

「中学のとき、麻冬と付き合ってたんだ」

知らなかった意外な事実に内心少し驚いたものの、秋人はいつものごとく平静に「へー」と答えた。

麻冬だって人気があるんだから付き合ったことがあったって別におかしくはないし、それが偶然阿笠なだけ。

秋人はそう思った。

「もしかしてまだ好きとか？」

秋人の直球な言葉に阿笠は「はっ？！」と声を荒げた。

秋人は立ち上がり、今度は阿笠の柔軟を手伝う。

阿笠の背中を押しながら秋人は、「お前がうちの高校来たのって麻冬追いかけてじゃねぇの？」と平然と言った。

確かにそう考えてもおかしくない。

秋人たちみたく近場の高校にしたいから星陵を選んだっていうような性格ではないのだ、阿笠は。

「…好き…だけど、でも俺が振っちゃったから近づけなくて」

「――――え？」

物事に対してあまり興味を示さない秋人も、この阿笠の意味ありげな言葉を気にかけた。

だけどストレッチの時間は終わってしまい、パスに入るからそれ以上話をすることはできないから後で聞くことに決めた。

昼間麻冬が言ったようにあと1ヶ月くらいで秋季大会がある。

サッカー部だってもちろん秋季大会に参加するし、秋人はサッカー部部長としてサッカー部を全国へ導くという役目がある。

ちなみに秋人はＭＦで阿笠はＦＷだから、２人がお互いを信用しないわけにはいかない。

まぁ２人は昔からお互いを知っているわけだし特に困りはしなかった。

近場の高校に進んだってことは中学もお互い近隣なわけで、しかも

2人は県選抜でチームメートだった。

一度同じチームとして試合していたのだから高校に入ってからも余裕でチームワークは問題ない。

「おい！ボケッとしてんな！」

大会が近くなれば練習にも身に入る。

普段寝ている秋人も、サッカーとなれば別。

やっぱりサッカーだけは昔から好きなのか、部活中だけは絶対に寝たりしない。

「下がるな！上がれっ！」

秋人だけてなく阿笠の声も必然的に大きくなる。

秋人が真面目にやれば阿笠も必死になり、そんな2人を見たチームメートも頑張ろうと努力する。

秋人のチームはこうやって均衡を保ちながら勝ち続けてきているのだ。

夜の8時を過ぎた頃練習が終わり、秋人は残ってドリブルの練習をしている。

いくら上手いといっても秋人だって努力して上に登りつめたのだ。

ただの天才なんかじゃない。

確かに素質がなければ努力したって大した成果は見られないが、素質があっても並大抵の努力じゃ一流になんかなれない。

秋人は全国常連校のサッカー部の部活になっただけでは満足するわけもなく、こうして練習のときに気に入らなかったことがあれば残って練習をしている。

「付き合うよ」

秋人がボールを蹴っていると阿笠が来た。

阿笠も秋人同様自主練をたくさんしている。

簡単に人を信用したり心を開いたりしない秋人に好かれることは本当にすごいことで、その点では春樹たちより阿笠の方が上かもしれない。

春樹たちに出会うより前に2人は出会っていたのだから。

「おう」

2人でやる自主練。

そろそろ部活を終えた運動部たちがぞろぞろと帰宅する。

春樹も夏実も麻冬もそのうちの1人だ。

「…なあ、さっきのどーゆーこと？」

適当に練習して、適当に休んでいるとき秋人がおもむろに言った。

阿笠は

「さっき？」と疑問を抱いたが、少し間をあけてから

「ああ…さっきね」と言った。

阿笠は地面に座り込んで、静かなグランドにあまり響かないよう割りと小声で話し始めた。

「麻冬さ、あんな容姿だからやっぱ中学んときもモテたんだ」

だろうな、と秋人は思ったけどあえて口にしなかった。

阿笠は続けた。

「でも…それをよく思わない女子もちょっといてさ、その女子の1

人が俺のことを好いていてくれたみたいで」
「…」
「でも俺は麻冬が好きだから麻冬に告白して付き合い始めた」

9月の夜は少し冷える。

汗をかいたままの服でいれば余計そう感じる。

「付き合って間もない頃、麻冬が嫌がらせされてるのを知った。…誰がやってんのかすぐに分かったからそいつらに注意したんだ」

だけど何度言っても嫌がらせをやめることはなく、どんなことがあっても麻冬は
「大丈夫だから」と笑っていた、と言った。

「そんなんがずっと続いたけど、ある日麻冬が俺に隠れて泣いてるのを見て、俺が側にいるだけじゃ守りきれないって思った…」

阿笠はサッカーボールを手でもて遊ぶ。

秋人は首に巻いたタオルで汗を拭き取って、なおも黙ったまま阿笠の話を聞き続けた。

「俺と麻冬が付き合ってることが気に入らないなら、俺が麻冬から離れるしかない…そうすれば麻冬への嫌がらせもなくなる。だから、結局俺は麻冬を振った」
「…何て言ったの」
秋人の質問に、阿笠は答えるのをためらった。
そんな阿笠を見て、秋人は言った。
「別れて欲しい。もう麻冬のことが好きじゃないんだ」
「えっ…」
「当たり？」
当たりだったのか、阿笠は何も言えずにいた。
「お前の性格からしてそうだろうな。本当のことなんか言えるわけねぇ」
「……うん」
「好きじゃないって言えばもう麻冬が自分に近づくことはないとでも思った？」
「…思った…」
麻冬じゃなくても、阿笠なら十分女子から人気あるんだから選べるのに、高校まで追いかけてきたとなるとよっぽど好きなんだろうと分かる。

好きで別れたわけじゃない。

けれど、事実を知らない麻冬にとってはどうだろう。

「お前はそれで良かったの？」

秋人が言うと、阿笠は

「だって、そうするしかなかったんだ…」と小声で言った。

しばらく沈黙が続いたあと、秋人のもとへ誰かがやってきた。

「あーきと。自主練あとどれくらい？」

部活を終えた麻冬が、一緒に帰ろうとしたのかグランドの真ん中らへんにいる秋人たちのところへ来たのだ。

「まっ…」

秋人が答える前に、突然麻冬が現れたことに驚いた阿笠が声を上げた。

「あ…阿笠――」

next

第１０話【蘇る過去の恋愛】

ビュウッと冷たい風が吹いた。

辛い過去はもう二度と口にしないで思い出さないようにしていたのに、そんな壁はもろくも崩れ去る。

「あ…あっと、あたし邪魔だね。先帰る」

まさか阿笠が一緒にいるとは思っていなかった麻冬は、戸惑いながら作り笑いをしてその場から去ろうとした。

「待てよ麻冬」

逃げようとした麻冬の手を、秋人が掴んだ。

たぶん話は聞かれていなかっただろうけど、今でも麻冬を好きでいる阿笠のために何かしてあげたいと思ったのだろう。

「あ、秋人？」

麻冬は明らかに戸惑っている様子。

それもそうだ。
昔付き合っていた、しかも振られた男が目の前にいるのだ。
逃げたい気持ちも十分分かる。

「せっかくなんだし久しぶりに話でもしたら。阿笠と」

秋人の突然の言葉に麻冬だけでなく阿笠も驚いている。
ちょ…秋人?!と阿笠は少し怒り気味で言った。

「じゃ俺先部室行ってっから」

2人を残し秋人が部室へ行こうとすると、麻冬が震える声で言った。

「…話すことなんてない」

震えているというより、今にも泣いてしまいそうな感じだ。
秋人はそんな麻冬を残しておけなかったからか、立ち止まる。

「積もる思い出も楽しい話も、何にもない…。…じゃああたしもう行くね!」

こんなにうろたえている麻冬を見るのは秋人も初めてだ。

いつも堂々としていて自分の意見もちゃんと言うし、なにか言われようものなら相手が沈むほど言い返すような気の強い女の子だ。

「…麻冬！」

走る麻冬を、阿笠が後ろから呼び止めた。

麻冬は走るのをやめて振り向かないまま「なに…？」とだけ答える。

「俺…どうしても伝えたいことあるんだ！」

夜のグランドに響く声。

真っ暗な中、電灯とライトだけの灯りが頼り。

「昔お前を振ったのは好きじゃなくなったからじゃなくて…」

阿笠はそこまで言って言葉に詰まった。

それ以上言ってしまえば、麻冬が傷つくと思ったのか。

「じゃなくて…なに？」

クルッと麻冬は向きを変えて、阿笠を直視した。

蘇る過去。

二度と思い出したくないことだけど、事実があるのなら知りたいと思うのが人間の性だ。

「……」

「…言えないの？」

麻冬は怪訝そうな顔をして阿笠を見た。

阿笠は拳をつくってギュッと握った。

「…麻冬と付き合っていたときも別れたあとも、今でもずっと好きなんだ」

風に乗って麻冬のウェーブの髪が揺れた。

麻冬は一瞬理解できないというような顔をしたが、次には少しだけ顔を赤らめて声を上げて「な…なに言ってんのよ！」と叫んだ。

麻冬にしてみれば謎だらけである。

好きじゃないと言って振られ、辛い恋を乗り越えて秋人を好きになったのに、昔の彼氏に未だに好きだと告白されたのだ。

「嘘つき！」

「嘘じゃない！！」

「阿笠の嘘つきっ…！」

麻冬はポロポロと涙をこぼす。

阿笠は麻冬の涙を見て、グッと言葉を抑えた。

「じゃあなんで振ったのよ…あたしがどんな思いでっ…」

袖口で目を押さえながら、麻冬は泣き声で言った。

阿笠は「…麻冬を守りたかったんだ」と震える声で言った。

麻冬もいろいろ頑張っただろうけれど、阿笠だって辛かった。

麻冬を守るためにわざと嫌われようとして、それでも未だに忘れられない。

忘れたくても忘れられない、そんなやり場のない思い。

どうすることもできない。

麻冬が追及しても阿笠はそれ以上何も言えず、代わりに秋人が過去の本当の話をした。

けれど麻冬はその実際の真実なんて頭に入ってこなく、自分が知らないのに秋人が知っているということに驚いた。

「なんで…なんで秋人が知ってるのよ?」

他人に知られているのが嫌だとかそういうんじゃなく、秋人にそんな過去を知られているのが嫌なのだ。

自分の好きな人に自分の過去の、しかも振られたときの話なんて知られたくない。

「ごめん、さっき俺が話したんだ」

阿笠は申し訳なさそうな顔をしながら言った。

麻冬だって阿笠がこの高校に来ていて、それで秋人と仲が良いことは十分に知っている。

知っているからこそ、秋人が阿笠と一緒にいるときはなるべく近寄らないように努力してきた。

今日は暗闇で、しかも阿笠は座り込んでいて、しかも麻冬のいた位置からは背中しか見えなかったから阿笠だなんて思わずに油断したんだろう。

「なんで…?!」

麻冬はバッと阿笠に近づき、服を掴みながら「なんでよ?!」と叫んだ。

麻冬が秋人のことを好きだと知らない阿笠は、なぜ麻冬がそんなに怒るのか理由が分からず、「なんでって…ダメなのかよ?」と言った。

麻冬は阿笠の服を掴んだままうつむいて、「…阿笠なんて大っ嫌い!」と叫んだ。

なくなりかけてた涙も、再び溢れてくる。

「ま、麻冬?」

困った顔をしながら阿笠はそっと麻冬の頭をなでた。
麻冬は、そんな阿笠の手を払いのけて怒鳴り声で言った。

「…意味も分からずに振られたあたしの気持ち分かる?!」
「ま…」
「あんたを忘れるのにどれだけ大変だったか…なのにっ…」

秋人は2人の様子を少し離れたところで見ている。
2人にしといた方が良いのかいなくなったら良いのか分からなかったから、黙ってその場にいることにしていたのだ。

「なんで秋人の前でそんなこと言うのよぉっ…!!」

麻冬はドンっと阿笠を押して、そして阿笠につかみかかる際に落としたカバンを拾い上げて、涙を袖で拭きながら走って行ってしまった。

「麻冬!」

秋人は麻冬の名前を呼んだが、麻冬は振り返ることなくあっという間に暗闇に紛れて姿が見えなくなった。

うつむいて悲しそうな顔をしている阿笠に、秋人は「大丈夫か？」と声をかけた。

阿笠は全然大丈夫じゃないくせに「ああ…」と答えた。

「ごめん…俺からじゃなくて阿笠から言えば良かったな。本当のこと」

「いや…俺言えなかったから」

阿笠のその優しさは自分をも麻冬をも苦しめた。

昔も、そして今も。

優しい人間だから好かれている阿笠なのに、その優しさがアダとなってしまうとは…。

夜空は、一番星すら輝いていなかった。

next

第11話【揺れる思い】

もうほとんど人がいない夜道は、怖いというより不気味な雰囲気。
昼間は晴れていたのに、今夜は星が1つも見れなく曇っている模様。
そんな夜だからこそ、思い出してしまうのかもしれない。

『麻冬〜っ』

忘れもしない、出会ったのは中2の初秋。
晴れて部長に就任した麻冬が月に2回の定期部長会に参加したとき
偶然隣に座ったのが新サッカー部部長の阿笠大悟だった。

一緒のクラスになったこともないし、面識もほとんどなかったから
そのときが初対面だったけど、消しゴムを忘れた麻冬に阿笠が貸し
てあげたことがきっかけで2人は仲良くなった。

『阿笠。あっれ、今日は部活は?』
『ん〜なんか休みになった』
『そうなんだ?あたしんちも今日は休みだよ』
『そっか、月曜は休みだっけ。水泳部』

部長会で顔を合わすときだけでなく、普段の学校生活でも2人はよく一緒にいることがあった。

クラスも2つしか離れてないからそう遠くもないし、たぶん最初からお互いに惹かれていた。

『あ。じゃあ今日暇？映画見に行かない？半額デーなんだよ』
『えー行く行く！なんか良いのやってるかしら』
『そーだなー…』

そんな2人が付き合いだしたのは、冬休みに入る前のことだった。

必死の思いで阿笠が麻冬に思いを伝えると、麻冬ももちろんＯＫした。

相思相愛だった。

冬休みに部活があっても、部活後や夜に会ったし、初詣も一緒に行った。

2人が付き合いだしたことを学校の人が知ったのは、新学期に入ってからだった。

人気のある2人だから、残念がる男女はたくさんいたけど、それでもほとんどの人が2人の幸せを温かく見守った。

お似合いのカップルだと、みんなが祝福をした。

けれど、そんな心優しい人たちばかりではなかった。

『麻冬！大丈夫か？！』
『あ…大丈夫。心配しないで』

最初は些細な嫌がらせだった。

陰口を言われたりする程度だったけど、麻冬がその程度でひるむはずもなく、嫌がらせはどんどんエスカレートしていった。

くつを隠されたり教科書に落書きされたり、ときにはラブレターを装ってカッターの刃入りの手紙を下駄箱に仕込ませてあることもあった。

とにかく、大事にならない程度のことがずっとずっと続いたんだ。

あんな性格だから麻冬も友達や阿笠に弱音を言えないし、１人で背負い込むしかなかった。

少ししてから阿笠もちゃんと気づいていた。

犯人のわかってる阿笠は、当人たちに何度もやめるように注意をし

たけれど彼女たちはやめなかった。

自分のせいで麻冬がこんな目にあってるんだから、と阿笠はできるだけ麻冬のそばにいて麻冬を守るようにしていた。

麻冬もそんな阿笠の優しさを理解したうえで、どんなに嫌がらせされても阿笠が好きだから別れないでいた。

麻冬は耐えに耐えていた。

ひどいことをされても笑って心配するなと言う。

そんな矢先、麻冬が階段から落ちたと麻冬の友達から聞いた阿笠が急いで保健室に行くと、ドア越しに麻冬が泣いていた。

先生がなんとか慰めようとしていたけれど、なかなか麻冬は泣きやまなかった。

階段から落ちて右足首を捻挫した。

もちろん、そんなことは及びではないのだが、３日後に水泳の大会をひかえていたのだ。

部長でエースの麻冬が捻挫なんて、どれほど大きいショックを受けたことか。

『…麻冬、入るよ』

阿笠がノックをすると、麻冬は急いで涙を拭いていつものように元気よく『良いよ～』と答えた。

阿笠がドアを開けて保健室に入ってくると、足首に包帯を巻いた麻冬が阿笠に『あはは、ドジっちゃったよ』なんて笑って言った。

先生は用事があるから阿笠くんよろしくね、と言って保健室を出て行ってしまった。

2人きりになると、麻冬が話しかけても阿笠は何も答えようとしない。

不思議に思った麻冬が『どうしたの?』と聞くと、阿笠は震える手をギュっと握って麻冬に訴えるように言った。

『それ…やられたんだろ?!なんでそんな風に笑ってられる?!』

『…だって…』

『…違う、麻冬を責めることじゃないな…』

このとき阿笠は自分のことを激しく責めた。

麻冬は気にするなと何度も言ったけど、気にしないはずがない。

結局麻冬は大事な大会だったから痛みをこらえて大会には出たけれど、いつもより成績は落ちていた。

部員も怪我してるのによくやったと麻冬を励ましたし、麻冬自信もここまでいけるとは思わなかったと、少しだけ喜んでいた。

阿笠だって痛いのを我慢してそんな成績が残せた麻冬をたくさんたくさん褒めたし阿笠にとっても嬉しいことだったけど、それでも悔やまれる。

知らない人が持っているそのトロフィーは、本当ならば麻冬が今持っているはずだったのだ。

その後も終わらない嫌がらせに、阿笠はこれ以上麻冬を苦しめるわけにはいかないと思い別れを切り出した。

『ごめん。別れて欲しい』

その言葉を言うのに、別れようと決めてから1週間が経過していた。

ようやく覚悟を決めてそう言えたが、阿笠がそう言ったときの悲しそうで泣きそうな麻冬の顔を見て阿笠も泣きそうになった。

『なんで…？あたし何かした？』

好きな人に、どうしようもないくらい好きな人に別れを告げるのは、こんなにも辛いことなのかと阿笠は実感した。

それでも、たとえ自分が嫌われてでも麻冬を守るためにはそれしかないんだと自分に言い聞かせ、振り絞るようにして阿笠は言った。

『…麻冬のこと、もう好きじゃないんだ』

『え…』

『付き合ってみたら何か違くて、前ほど好きじゃなくなったんだ。だから、ごめん』

麻冬は泣くのをグッとこらえながら「分かった…」とそれだけ言って、その後もう二度と阿笠に近づくことはなかった。

2人が別れたのは3月下旬。

晴れて3年生に進級してみると2人はまた違うクラスで、そのせいもあって本当に会う機会なんてなくなった。

部長会も離れて座ったし、廊下で見かけても知らないふり。

2人が別れたことを知ったたいはんの人たちは残念がったけど、麻冬をイジめていた人たちはコゾッて喜んだ。

ピタリと嫌がらせはなくなり、麻冬も平穏な生活を送れるようになった。

それでも、たとえ嫌がらせがあったとしても阿笠が一緒にいた日々に勝るものはないと麻冬は思った。

好きなのに付き合えない。
それがどんなにもどかしいことなのか。

1年間喋ることもなく、そのうち高校受験を迎えて2人は星陵高校へと推薦合格が決まった。

「…ほんと、今更なのよ」

誰もいない夜道で、麻冬はボソッと呟いた。

「今更言われたって、どうしろって言うのよ…」

中学のとき大好きだった人からの、しかも麻冬が嫌いで別れたわけではない人からの突然の告白はあまりにも衝撃だった。

さっきは秋人が事実を知っていることが嫌で頭に入ってこなかったけれど、今よく考えてみれば阿笠が麻冬を振った理由も十分分かる気がしていた。

もちろんそれでも別れを望んではいなかったけれど、優しい阿笠ならそうすることくらいちょっと考えてれば分かったことだと、当時振られた理由をよく考えなかったことを麻冬は後悔した。

よく考えて、それでも麻冬が無理に阿笠と付き合っていれば高校でもずっと一緒にいれて、毎日毎日幸せな日々を送れていたんだ。

…そうしたら秋人を好きになることはなかったかもしれない。

今みたいに4人で仲良くすることはありえたかもしれないけれど、秋人のことは恋愛対象としてでなく彼氏のチームメートで、パーフェクトボーイって認識くらいしかないはず。

悲しさに埋もれて目先の事実を知ろうとしなった自分を麻冬は恨んだ。

現実を見ていたら、あの幸せな日々は今でも続いていたはずだった。
ありえた未来だった。

約束されてる将来だった。

「……阿笠…」

麻冬の瞳に涙がたまった。

忘れたいのに忘れられない。

そんな思い、切なくて。

next

第１２話【すれ違う２人】

「春樹ぃ。チャリめんどいから２ケツしよ」

部活後の駐輪場で、夏実がせがるように春樹に言った。

「えー。そしたらまた朝俺迎え行かなきゃじゃん」
「良いじゃん良いじゃん。お互い朝練始まる時間一緒だし」

夏実は語尾にハートをつけながらウィンクして「ねっ」と言う。

惚れた弱みと言おうか、夏実に頼まれたら春樹だって断れるはずがない。

体育館の１階でやるバドミントンと２階でやるバレーだから、放課後の部活が終わるとお互いの部活が終わるのを待つ。

待つと言ってもほとんど差はなく、１５～２０分くらい。

自主練するときを除いて、２人はだいたい一緒に帰るのだ。

秋人と麻冬がそうなように。

もちろん夏実が彼氏と付き合っているとき、たまに夜に彼氏から呼び出されることとかはあったから、そんなときは春樹は先に帰ってたわけだが。

「ところで春樹、今日のオレンジのポロ可愛いね」

結局夏実の押しに負けて2ケツして帰ることになり、自転車をこいでる春樹の後ろに座っている夏実が羨ましそうに言った。

「でしょ？これセールで７００円だったんだぁ」

「へー！」

夏実の言うオレンジのポロとは、春樹が制服代わりに着ている服のこと。

毎日いろんな服を着てくるが、今日のは一段と目立つ色。

夏は、男子の正装はワイシャツにネクタイだが普段は学校指定の白いポロシャツも可。

…なのだが、ネクタイが似合わないからと言って私服（ズボンは学校のだが）を着てくる春樹も、指定の白いポロは着てこようとしない。

まぁ要は制服自体が好きじゃないんだろう。

教師も半分諦めモードに入ってるが、それでも生活指導の教師は頑張って春樹に注意する。

注意したところで春樹が改正するわけもないのだが。

「でも今日も先生に怒られてたね」

「夏実こそ」

「あたしは良いの。茶色じゃなきゃ頑張れないもん」

春樹だけでなく、夏実も教師にとっては悩みの種。

髪染めも校則違反だが、どんだけ注意されても夏実は黒に戻そうとしない。

真面目なのは意外にも秋人と麻冬だけ。

あ、麻冬のウェーブも本当なら違反だけど地毛で通してる。

「なんで？願掛けでもしてるの？」

春樹は前に夏実が教師に、中学のときも茶髪だったと言い返していたのを思い出した。

まぁやるとしても普通は高校生からだし、中学のときにやるなんてよっぽどだと思ったのだろう。

「うん。茶髪はあたしの勇気の源なの」
「源？」
「あたし中１のときに入部早々エースになったから先輩からちょっと嫌がらせされててね」

夏実の意外な事実に春樹は「えっ」と声を漏らした。

「だから嫌がらせされても負けない人間になるために茶髪にしたんだ。茶髪自体に意味はないんだけど、でもある意味願掛けなのかな～」

夏実はアハハと笑う。

春樹は自転車を急に止めた。
後ろに乗っていた夏実は急にブレーキがかかって前へつんのめる形になった。

「なっ、なに？」

春樹は自転車を止めたまま、後ろを振り向いて夏実を直視した。

顔が近いせいか、夏実は少しだけ顔を赤らめる。

「…だから助けてくれたんだ」

「え？」

「俺も夏実と同じ理由で嫌がらせされてた。そんなとき夏実が助けてくれたんだ」

春樹はいつになく真剣な眼差しをしている。

夏実は春樹の突然の言葉に戸惑いを隠せずにいた。

「あ…あたしが？」

急に何のことを言われているのか分からない夏実は、気になって春樹に聞き返そうとしたとき、春樹がパッと前を振り向いて「…人？」と呟いた。

夏実は暗闇で前に人がいるか見えなかったけど、春樹は夏実にチャリ走らせるよ！と言って自転車を再びこぎ始めた。

知らない人でしょ？なんで近づくの？と夏実が驚き気味に言うと、春樹は「麻冬だよ！」と言った。

少し自転車を走らせて人が歩いているところまで行くと、春樹の言

う通り本当に麻冬だった。

「麻冬っ」

なぜか春樹は心配そうに麻冬に話しかけた。

訳が分からない夏実はかなり困惑しているが、目が赤い麻冬を見てハッとした。

「春樹……夏実？」

気の強い麻冬が泣くなんて、元気な夏実が泣くのと同じくらい珍しい。

「麻冬が泣いてるなーと思ってめっちゃチャリこいじゃった」

春樹はいつものように愛らしい顔で言った。

「よく分かったね。あたしが泣いてるなんて」

麻冬は微笑しながら言った。

そう、本当によく分かったものだ。
夏実には人さえ見えなかったのに、春樹は麻冬って分かった上に泣いてることまで分かっていた。

なんで…？と夏実は春樹を凝視する。

「分かるよー。だって麻冬だもん」

答えになっていない応答。

でも麻冬は「ありがとね」と笑う。

春樹はあえて麻冬にどうしたのかなんて聞かなかった。

自分が話しかけたことで笑顔になれたのだから、もう良いかと思ったのか。

夏実は微妙に納得できないでいる様子だけど、２人のペースに合わせるために口出しはしない。

春樹は歩いている麻冬の速度に合わせるため、夏実を荷台に乗せたまま自転車を押し始めた。

麻冬は先に帰って良いよと言うけど、春樹はみんなで帰った方が楽しいからと言った。

春樹の自転車の荷台に座ったままの夏実は、優しく麻冬に微笑みかける春樹をボーッと見ていた。

「夏実？」

しばらくボーッとしていると、春樹が不思議そうな顔をしながら夏実の名前を呼んだ。

「えっ？あ、なに？」
「ボーッとしてどうしたの？部活で疲れた？」
「あ、ううん」

春樹は優しい。
みんなに優しい。

そんなことは誰もが分かっていること。

数分してから、麻冬と別々の道になり春樹と夏実は麻冬にバイバイして、２人はまた自転車を気持ちよくこぎだした。

春樹と夏実んちは案外遠くない。

秋人と麻冬んちもそう遠くはない感じで、まぁとりあえずみんな家は学校から東の方向にある。

春樹と夏実は体育館、秋人はグランドで麻冬はグランドに近いプールで部活をしていることもあるし家の距離の関係もあって、お互い一緒に帰ることが多いのだ。

「麻冬、なんで泣いてたんだろうね」

夏実が疑問そうに春樹に問いかけた。

「さぁ。まぁ言いたくないのを無理に言わせるのも酷だしね」
「そうだね。…あのさっ、さっきの話なんだけど…」

夏実は思い切って話を戻そうとしてみた。

だけど春樹が「ん？なに？」と言うと、怖気づいたのか夏実は「…ううん、なんでもないや」と誤魔化した。

さっきの話とは、春樹が夏実にあの日のことを言ったこと。

春樹にとって夏実は恩人なのだから、春樹が忘れるわけはない。
けれど助けた当の本人は、何年も昔のことだから記憶の片隅にあって、今更言われてもなかなか思い出せない。

けれど気になって気になって仕方ない夏実は春樹に何のことか聞き

たいのだけど、なんとなく聞けない雰囲気になってしまう。

「えー、なに？気になるじゃんよぉ」

春樹は笑いながら言った。

「あ、ほらっ。なんで麻冬が泣いてるって分かったのかなーって」

夏実は大声で笑いながら適当に言った。

春樹は「ああ、そんなことか」と背中越しに言う。

まぁそのことも実際気になってるって言えばそうなるだろう。

けど友達思いで優しい春樹だし、なんとなく分かっても不思議じゃないなーなんて夏実は考えていた。

すると、春樹は言った。

「だって、麻冬だもん。俺が分からないわけないじゃん」

「だよねぇ」

「大切な人が泣いてたら地球の裏側にだって行っちゃうね」

春樹は軽く冗談っぽく言うけれど、その言葉は本気そのものだった。

夏実は「大切な人…？」と聞き返した。

夏実の問いかけに春樹は「俺にとって大切だよ。麻冬は」と答えた。

それは夏実とってあまりに衝撃な言葉だった。

前に春樹が泣いている夏実に「俺がずっと一緒にいるから」と言った言葉、あれはただの慰めの言葉でしかなかったんだと夏実は実感し、ショックを受けた。

不幸のどん底にいた夏実を救ったのは紛れもなく春樹で、春樹がいたから夏実は立ち直れた。

夏実にとって春樹は大きな存在だった。

「そう…なんだ」

間が悪いと言うか、言葉のニュアンスのせいか夏実は春樹が麻冬を好きなんだと勘違いをしてしまった。

たぶん春樹にとって麻冬は大事な友達として大切という意味で言ったに違いないのに、それを夏実は「好きな人だから大切」と思ったのだろう。

夏実がそう勘違いしてるとも知らずに春樹は夏実と一緒に帰れてることが嬉しくてルンルン気分で自転車を走らせる。

すれ違う2人の気持ち。

この先、どうなるのだろう。

next

第１３話【どうにも止まらない】

春樹も夏実も麻冬も帰宅している頃、秋人はようやく着替え終わり帰る支度をし始めた。

広い部室に秋人と阿笠２人のみ。

特に会話もなく黙々と作業を進めていく。

サッカーに命をかけたところで、秋人も阿笠も普通の男子高校生だ。

好きな人を泣かせたら辛いし、叶わない恋は悲しい。

特に阿笠のような恋は、相手も自分も傷つけてしまう。

「阿笠、チャリ？」

ロッカーをバタンと閉めながら秋人は阿笠に尋ねた。

阿笠は

「あー今日は電車なんだわ」と答えると、秋人が

「なら乗せてってやるよ」と言った。

あの秋人が自ら人を荷台に乗せようとするなんて、何か裏があるのかとさえ思ってしまう。

それとも、さっきのことに罪悪感を抱いているのか。

単に阿笠を心配しているだけなのか、いずれにせよ阿笠は秋人の特別な存在であることが分かる。

２人は部室を出て、もう空が暗い中自転車で帰っていく。

平面を自転車で走るが、２人の間に会話はなくペダルをこぐ音だけがしている。

阿笠は荷台に後ろ向きに、秋人と背中を合わせるような感じの向きに座っている。

なんとなく前を向きたくないという阿笠の心情の表れだ。

しばらくシーンとしながら帰宅していくと、阿笠が重い口を開いた。

「…なぁ」

暗く静かな夜道にうっすらと残る阿笠の声。

秋人は

「なに？」と尋ねる。

「俺…なんであんなこと言っちゃったんだろ」

阿笠はいつになくしおれた感じを見せている。

「言いたいから言ったんだろ」

「でも、もう3年近く経つんだ」

一度芽生えた恋心は、一体どうすれば忘れることができるのだろうか。

なぜ好きになった人を好きではなくなれようか。

この世で最も難しいのは、バレーでスパイクを決めることより、バドミントンで強いスマッシュを打つことより、水泳で自己新を泳ぐより、サッカーでシュートを決めることより、何より一番恋愛が難しい。

「それでも、忘れられないんだ…」

阿笠は今にも泣いてしまいそうな声で言った。

秋人にも阿笠の気持ちが分かるだろうか。

秋人とて、好きになった人に自分以外の恋人ができたんだ。

今は破局しているけど。

でも、秋人は誰よりもそれを間近で見ていた。

抑えられない気持ち、衝動、怒り、悲しみ、憤り…

片思いは、なくなることのない永遠のテーマ。

「…良いじゃん、それで」

「え…」

「好きなんだから仕方ねぇよ。無理に忘れる必要もないし、伝えたいなら伝えれば良い」

秋人の言ってることは正しい。

けど、不安でいっぱいの阿笠は戸惑いを隠せずにいる。

「でも…そんなん俺の独りよがりで、勝手じゃん」

阿笠のそんな言葉に、秋人は

「んなことねぇよ」と真っ向から否定する。

そして秋人は、透き通るような声で阿笠に言った。

「お前が幸せになれる方法を見つければ良いんだよ」

平然と自転車をこぐ秋人。

阿笠は幸せ…？と小さな声で呟いたが、秋人はその阿笠の声を聞き逃しはしなかった。

「好きだって思うから伝える。一緒にいたいから話しかける…そんくらいしかできねぇけど」

「…」

「けど、麻冬のためとか言って身をひくのは正しくない。そんなに麻冬のことばっか考えなくて良いんだよ」

不思議と、最初は受け止められなかった秋人の言葉が、自然に阿笠の心に響いていく。

「お前、幸せになる権利あるんだよ」

背中越しの2人の会話。

それは何とも頼もしく、いままで心に積もっていたものが消えていくような、清々しさ。

優しくて、優しすぎて結局ダメになってしまった阿笠の昔の恋愛。

それを追い続けることすら罪だと思わせた。

けど秋人は、阿笠に言った。

阿笠は、

「幸せになれる権利…あったんだ」と泣くのをグッとこらえたら。

たったの２０分やそこらの帰り道なのに、いとも簡単に過ぎていき、その時間はやがて阿笠にとってかけがえのないものとなる。

好きだからこそ麻冬と別れ、他人となったあとも見守り続けた阿笠を責めることができようか。

たとえ麻冬が秋人を好きだったとしても…

秋人が阿笠と帰っている中、麻冬は家に着く。

夕飯の支度がなされていたけど、麻冬はいらないと答えてさっさと自分の部屋へ向かった。

カバンを机の上におろし、ベッドに寝転がる。

いつもならキチンと着替えている制服も着っぱなし。

しばらくベッドに伏せっていたあと、机の一番下の引き出しをグイッと開けた。

おもむろに取り出す数枚の写真とネックレスとブレスレットなど。

「…懐かしい」

ふふ…と軽く笑う。

付き合う前から仲良かった2人には、たくさん思い出がある。

写真の中に写ってる麻冬と阿笠は嬉しそうな笑顔をしている。

3年も前のことなのに、まるでついこの間のことのように感じられる。

「あたしのため…か」

別れを切り出されてから、麻冬がショックから立ち直るのには時間がかかった。

友達の前では弱さを見せないように強がり、夜は1人で部屋の中で泣いた。

嫌われて振られたと思っていた最愛の人に実は守られていて、ずっと見守ってくれてたなんて、麻冬には知りたくない事実だったのかもしれない。

阿笠を忘れるのにとても苦労した麻冬には。

「ほんと…どうしろってゆーの。…どうしよう」

秋人を好きなはずの麻冬。

けれど、阿笠の告白を振り切ることはできない。

夏実を好きな秋人を追いかけるよりも、自分を好いてくれる人と一緒にいるほうが幸せなことってあるかもしれない。

恋愛に悩みはつかない。

麻冬はしばらくの間、阿笠との思い出の写真やプレゼントとしてもらったアクセサリーをただただ眺めていた。

もう夜はかなり暗くなり、そろそろ春樹が夏実を家まで送り届けた頃だ。

夏実は夕飯の支度を手伝いながら、今日のことを考える。

麻冬を心配する春樹はとても男の子らしくて、それはまるで好きだと言っているような顔だと夏実は思い込んだ。

みんないままで自分の恋愛については話したがらなかったけど、それは4人の中にお互い好きな人がいたから言えなかっただけ。

「春樹が麻冬…で、麻冬は?」

なんて、ひとり呟く。

春樹が麻冬を好きだとしたら、麻冬の気持ちはどうだろう。

明日麻冬に聞いてみようかな、と夏実は軽く考えた。

もし麻冬も春樹を好きだったら2人は両思い。

そしたら夏実は?

キューピッドになる？

春樹と麻冬の恋を？

「…つまんないな」

夏実にできるはずがない。

夏実本人が気づいてなくとも、春樹に惹かれてるのは事実。

ただの友達だったはずが、今では秋人よりも少し上に春樹が位置付けられている。

秋人も何か行動を起こさないと、夏実は完璧春樹を好きになってしまうだろう。

そんな夏実が、春樹の恋の応援なぞ到底無理なのだ。

阿笠と自転車をこぐ秋人。

思い出に浸る麻冬。

悩む夏実。

気分ルンルンの春樹。

揺れ動く気持ち

もうどうにも止まらない。

next

第１４話【春樹の好きな人】

「なっつみー！」

早朝、春樹が夏実を迎えにやってきた。

玄関から聞こえる春樹の大きな声に答えるがごとく、夏実はパンを口に目一杯入れて走ってくる。

おまたせ！と元気に言って、２人は夏実の家をあとにして学校へと向かう。

「ん～やっぱ朝は冷えるね」

荷台に乗ってる夏実が言った。

自転車をこぐ春樹はそんなに冷えないが、冗談交じりにおかしく言った。

「もう秋人の季節だしねー」

秋生まれの秋人、ということか。

まぁ誕生日自体は１０月後半なのだが。

「今年は秋人に何プレゼントしよっかな」
「悩むね。あと冬には麻冬の誕生日もあるなぁ」

春樹の麻冬を名前を呼ぶ言葉に、夏実はピクッと反応する。

「…麻冬って何で冬生まれなんだろ」
「えー？」
「なんであたしは夏に生まれちゃったのかな」

夏実の訳の分からない言葉に春樹は軽く笑った。

けど、夏実にとっては軽く本気でそう思っている。

「冬に生まれたら麻冬みたくなれたかな…」

その言葉に、どんな意味が込められているんだろう。

まるで麻冬になりたいと願っているかのようだ。

元気ない夏実に春樹は少し気になったが、こう言った。

「なんで？夏実は夏実のまんまで良いじゃん」

夏実が勘違いしてるなんてことは露知らず、春樹は本気でそう言うのだ。

夏に生まれた夏実だからこそ好きになれたのだから、冬に生まれてもらっては困る。

春に生まれた春樹だからこそ優しくて愛らしい。

夏に生まれた夏実だからこそ元気で楽しい。

秋に生まれた秋人だからこそ眠り魔の完璧少年。

冬に生まれた麻冬だからこそ気が強いけど女の子らしい。

４人が４人だからこそ良いのに、でもやはり無いものをねだってしまうのは人間の性か。

完璧少年の秋人でさえ、３人を羨ましく思うときもある。

いくら勉強ができてスポーツ得意でも、例えば夏実のような意思表示のできる人間を羨むもの。

お互い相手が自分に無いものを持っているから惹かれる。

男女関係なく。

「だって、あたしのままじゃ…」

夏実はそこまで言っておいて、はっと口を止めた。

「なに？」

だってあたしのままじゃ好きになってくれないでしょう。

そう言おうとしたのか。

夏実自身何を言ってるのか把握できていないようだ。

「ううん、なんでも…」

春樹はそんな夏実の気持ちに気づかず、すいすいと緩やかな坂を登る。

春樹が小さいと言えど、小学生のときからずっと有能選手として鍛えているんだから、そんじょそこらの奴なんかよりよっぽど力も体力もある。

女の子1人乗せて坂を上がるくらい、春樹にはお安いご用なのだ。
それは秋人も同じだが。

「元気ないね夏実」
「え…そう？」
「うん。朝練終わったら購買で夏実の好きなポッキー買ってあげるから早く元気になって」

春樹は気楽に言った。
そんな些細な言葉でも夏実には嬉しくて、小さな声で返事をする。

少し元気になってきた夏実は、しばらく春樹とたわいもない世間話をして盛り上がる。

そんなとき、春樹と夏実の後ろからものすごいスピードで自転車をこぐ男の子が来た。

あっという間に2人は抜かされ、男の子は見えなくなっていく。

「阿笠じゃん」
「んー？阿笠って確か秋人の一番弟子？」
「あはは、そうそう。サッカー部の副部長ね」

よく分かったね、というと春樹は
「去年クラス一緒だったんだ」と答えた。
サッカー部はバドミントン部やバレー部より朝練の始まる時間が１０分はやい。
２人と同じ速度だったら間違いなく遅刻だ。

「阿笠遅刻だなー。あーあ、秋人に走らされる～」
「秋人って何気厳しいもんねぇ」
「鉄壁を誇る部長だしね」

２人で面白おかしく言っていると、春樹が思い出したように言った。

「そーいえば阿笠と麻冬って中学のとき付き合ってたって」

春樹の突然の衝撃な言葉に、夏実はこれでもかっていうくらいの大声で叫んだ。
春樹はそんなに驚くこと?!と、夏実の声に驚きながら言う。
そんな春樹に、夏実は身をこにして言った。

「あの麻冬が付き合うなんて…阿笠くんってもしかしてすごい人？」

確かに麻冬がそう言うのも無理はない。

ピアノを弾くし料理も上手いし、夏実なんかよりも全然女の子らしい。

女の子らしいのだが、物をはっきり言うし時には毒舌だし、そこらの男には目もくれないのだ。

麻冬のつくり笑いに惚れた男は数知れず。

そんな麻冬が選んだ男なのだから、きっとすごいに違いないと夏実は思った。

「阿笠ねー、すごい優しいよ」

「春樹より？」

「やだなぁ、俺全然優しくなんかないって」

春樹はそう言って笑い飛ばすけど、夏実は内心そんなことないのに…と思う。

続けて春樹は、阿笠は大人びた感じの優しさで…紳士って感じで女の子にモテるんだよー、と付け足した。

紳士な阿笠に可憐な麻冬。

なるほど、お似合いなのは確かである。

「でも過去の話だけどねー」

「ふぅん」

ようやく学校が見えてきた。

運動部の人が校門付近にちらちら見受けられる。

彼らが春樹と夏実にあいさつする中、2人も愛想よく答える。

駐輪場に着き、夏実は自転車から降りて春樹が自転車を置いた。

じゃあ行こう、と春樹が声をかけると同時に夏実は言った。

「ねぇ…春樹本当に好きな人いないの？」

時間が止まったような気がした。

目に見える景色が白黒になり、音が完全に消え去る。

夏実はオドオドする。

「…どうしたの、急に」

春樹は少しだけ真面目そうな顔をする。

そんな春樹に、夏実は軽くビクッとした。

「あ…えっと…」

春樹から直接麻冬の名前なんか聞きたくないはずなのに、夏実はなぜそんなことを聞くのか。

気になることは絶対確かめたい夏実の性分ゆえかもしれない。

答えられずにいる夏実に、春樹はクルッと振り返り体育館へと歩き出す。

夏実も置いていかれないように小走りをする。

夏実より一歩も二歩も前にいる春樹が、重い口を開いた。

「いるよ、好きな人」

えっ、と夏実は声を出す。

けど雰囲気的に誰なのか聞けず、夏実には言葉がない。

春樹は構わず続けた。

「もう４年以上もずっと片思いしてる」

それは、あまりに衝撃の言葉でした。

４年以上も前となると、中学のときの話だ。

春樹の好きな人は麻冬ではない。

…夏実でもない。

「たぶん、その人以外好きにならないよ」

冗談交じりではなく、とても真剣な声。

今春樹がどんな表情をしているのか夏実には分からない。

春樹が何年もかけて思いを寄せる人。

それが誰なのかちっとも検討がつかない夏実は、

「そうなんだ…」とつくり笑いをして答えるほかなかった。

夏実の心にポッカリ空いた穴は、塞がらなかった。

next

第１５話【悩み】

朝練が終わり、朝のＳＨＲも終えて１限の英語が始まる。

夏実は当てられたものの、ボーッとしていて答えない。

宿題をやり忘れて今隠れてやってるため起きてる秋人が、教師が夏実の名前を呼んでも答えない様子を見かねて教科書で夏実の頭をバシッと叩いた。

「…えっ？なに？！」

叩かれてようやく我に返った夏実は、キョロキョロと見回す。

「なにやってんだよ、バカ」

「あ、秋人」

夏実はやっと自分が当てられたことに気づき、秋人にどこかを尋ねスラスラと答えた。

よろしい。だが授業に集中するようにな、と教師は言い、再び授業が再開される。

夏実もフーッと一息入れ、椅子をひいて席に着いた。

「珍しいな」

隣で秋人がコソコソ言った。

普段から授業中寝ている秋人と違って夏実は授業だけは割りとちゃんと聞くんだ。

テスト前とかも部活があるから授業中に理解しなければならないらしい。

ノートも綺麗にまとめるし、何分暗記が得意なもんだからどの教科もけっこうできてしまうというが、普通に羨ましい話だ。

「ちょっと考えごとしてて」

夏実はへへ、と軽くベッと舌を出した。

「へぇ。お前でも悩みとかあんのか」

「あんたねーっ」

コソコソ喋っているつもりが、普通に教師にはバレている。

こら！と丸めた教科書で2人は軽く叩かれた。

ついでに課題をやり忘れたことがバレて、秋人は次を当てられてしまった。

まぁ秋人にとっては何の問題もない簡単な問題だが。

そのうち英語の授業が終わり、2限は体育だ。

体育は体育祭の練習。

各種目別の練習だから、リレーに出る4人には関係がない。

休み時間に更衣室へ行って着替え始めた。

秋人と春樹は男子更衣室で、たわいもない話を始めた。

「なぁ、夏実なんかあった？」

「え？」

「あの能天気が考えごとなんて変だと思って」

秋人にそう言われるものの、春樹には分かるはずがない。

春樹は夏実が勘違いをしてることを知らないのだから。

首をかしげながら
「うーん…」と春樹は悩む。

「朝来るときは普通だったけどなぁ」

体操服を上からかぶりながら、平然と言う。

「一緒に来たんだ」
「うん。昨日帰り夏実乗せてったから今朝夏実足ないから」

春樹が付け足して
「あ、麻冬も帰り一緒だったよ」と言うと秋人は
「はっ?!」と珍しく大きな声を出すと同時に、開いていたロッカーに腕を思いっきりブツけた。

「いっ…てぇー!!」
「だっ、大丈夫?!秋人」

秋人がここまで取り乱すとはなんとも珍しい。

まぁ無理もない。

昨日の夜麻冬と…阿笠とあんなことあって、情緒不安定な麻冬が春樹たちと偶然帰りが一緒だったんだ。

「なんか…言ってた？」

秋人はちょっとためらいながら言った。

「ううん。あー、泣いてたけどね」

「…そう」

「なに、麻冬と何かあった？」

「いや、俺とじゃなく…」

秋人がそう言ったから、春樹は

「じゃあ誰？」と聞いたが秋人は答えようとしない。

そのとき予鈴が鳴り、２人は慌てて更衣室を出てグラウンドまで走った。

まぁ２人以外にも更衣室でまだ着替えてる人はいたから２人だけ遅刻ってわけでもない。

体操のあとは各自練習に入ったが、やることがない４人はだれている。

「あ、秋人さっきんとこ切れてる」
「ほんとだ」

ひじに近い部分がパックリ切れていて、みるからに痛そうだ。

春樹は秋人に保健室に行こうと言ったが、秋人はこんなんほっときゃ治ると言った。

「まぁ良いじゃん、暇だし」

春樹がケラケラ言うと、秋人も納得したように秋人のケガをしていないほうの腕を引く春樹のあとを付いていった。

夏実と麻冬は日陰のコンクリートで寝転がっている。

だから春樹と秋人が保健室へ行ったなんて知らない。

2人が保健室へ行くと、養護教諭はちょうどいなかった。

春樹が適当に消毒液を出したり綿棒を出したりしている。

椅子に腰を下ろして、秋人はグラウンドのほうを眺めた。

「はーい秋人、手〜」

春樹にそう言われ、秋人はケガした腕を出す。
春樹は慣れた手付きで手当てを始めた。

「あ、そういえば阿笠」

春樹は思い出したように阿笠の名前を出した。
麻冬に引き続いて阿笠の名前まで出て内心ビビった秋人はパッと春樹の顔を見た。
クエスチョンマークを頭に浮かべながら春樹は不思議そうな顔をする。

「あ…いや、なに阿笠？阿笠がどうかしたか」
「遅刻した？朝練」
「あ？ああ」
「やっぱり！俺朝あいつがチャリ飛ばしてるとこ見たんだぁ」

春樹は浮き浮きしながら楽しそうに話す。
秋人は昨日のことが知られてるわけではないと、かなりホッとしている様子だ。

「運動場何周？」
「…走らせなかった」
「え？！」

秋人の驚きの言葉に春樹はビックリした。

いつも無断遅刻はグラウンド１０周、無断欠勤はグラウンド３０周くらいは軽く走らせている秋人だから、春樹が驚くのも無理はない。

「なんでなんで？阿笠だけ例外なの？」

興味津々と言う春樹に秋人は、
「あいつ体調あんま良くなかったから」と答えた。

例え体調悪くとも無断は無断だから許さないってのが秋人の方針なのに…

春樹は手当てを終えて使用した道具を戸棚にしまうために椅子から立ち上がった。

そして、おもむろに言った。

「…秋人も何かあったの？」

手当てをしてもらった腕を動かしていた秋人は、その言葉に妙に反応する。

「も？…ってことはお前も？」

図星を刺された春樹はドキッとするが、

「俺じゃなくて麻冬とか夏実がさっ」と慌てて誤魔化す。

秋人は

「俺自体には何もねぇんだけどな」と小さな声で言う。

けど春樹はそんな秋人の言葉を聞き逃さなかった。

「秋人…他人のことでそんなに考えるって珍しいね？」

「や、別に考えちゃいないけど」

「だって明らかに動揺してるじゃん。阿笠と…麻冬に何かあったんだ？」

春樹の真剣な目に、秋人は嘘をつけなかった。

違うとも言えないし、そうとも言えないから黙っていると、春樹はそんな秋人の態度を肯定と受け取った。

「2人が付き合ってたことは知ってたけど、また何かあったんだね」
「なんで知って？」
「昔噂でさ」

秋人が悩んでいることは、阿笠と麻冬の未来なんかではない。

実際阿笠と麻冬が付き合うことになろうがダメだろうが、秋人の知ったことではない。

もちろん阿笠も麻冬も大事な友達だから心配はするが。

「…そのことじゃないよね、秋人が考えてるのは」

いつになく勘が鋭い春樹に、秋人は為す術がない。

秋人は深く目を閉じた。

「…幸せになれる権利、お前にもあるんだよ…って、言った」
「え？」
「好きな奴に…麻冬にどうしたら良いか分からないでいる阿笠に、好きなようにやれって、幸せになれる方法見つけろって、言ったんだ…」

グラウンドで元気に騒いでいるクラスメートたち。

授業中のため校舎は静かで、当然保健室だって静かだ。

秋人の、切なそうな声以外は。

「だけど、分からないのは俺のほうなんだ」

春樹は戸棚を閉めようとしている手を止めて、秋人の話に耳を傾けた。

「なんもできねぇのは…俺のほうだ」

自分の知る限り悩みなんて到底なさそうなパーフェクトボーイの秋人がこんなふうに弱音を吐いている姿を目の当たりにした春樹は、正直かなり驚いている。

「秋人…好きな子いるんだね」

春樹が諭すように、少しだけ穏やかな笑みを見せた。

秋人はそんな春樹をチラッと一目見て罰が悪そうに下を向いた。

「…ああ」

好きな気持ちが溢れて抑えきれないでいる。

阿笠も春樹も秋人も。

けれどどうしたら良いのか分からないでいる。

溺れる恋

next

第16話【迷い】

「…ごめん」

秋人はうつむいたまま小さな声で春樹に言う。

当然春樹には何がごめんなのかは分からない。

なに?と聞き返すも、秋人は答えようとせずただただ黙る一方。

「…よく分かんないけど」

春樹は窓から見えるグラウンドの方を遠く眺める。

クラスの人たちがけっこう真面目に練習に取り組んでいる。

「なら、俺もごめん…だよな」

春樹の意味深な言葉に、秋人は

「…え?」と声を上げる。

こんな重い雰囲気を壊すかのごとく、春樹はいつもの愛らしい笑顔で「じゃ体育戻ろっか！」と言った。

秋人が春樹に、自分の好きな人は夏実だなんて言えるはずがない。

春樹は親友なのだから。

春樹も、本当は秋人に自分が夏実のことを好きだってことバレたくなかった。

秋人の視線の先にいつも誰がいるのか、春樹は知っていたから。

さっきの春樹のごめんは、そのことだったのかもしれない。

春樹の気持ちばかりバレてて、そのせいで秋人に苦しい思いをさせていたかもって、きっとそう思ったに違いない。

親友同士が同じ人を好きになってしまうとは、なんとも悲しいことだろう。

頑張ってとも…諦めろとも言えないのだ。

2人は保健室をあとにして、再び体育の授業に戻った。

その頃の夏実と麻冬はと言うと、まだ日陰で休みながら2人で話をしている。

と、そのとき竹取りの配置を決めようと女子体育委員のお呼びがかかり、夏実と麻冬も仕方なくそれに参加することになった。

竹取りとは、グラウンドの真ん中に数本竹が置いてあり、自分たちの陣地へ何本持ち帰れたかを競う種目だ。

竹の取り合い…つまり女子たちの本性が露になる種目でもある。

竹の長さや太さによって得点も違うのだ。

「麻冬得意じゃん」
「は?!やめてよ。あんたのが得意でしょ」
「んー、まぁ得意じゃなくはないね」

2人のそんな会話。

強制種目だけは真面目にやるため2人は得点が高い竹を狙う配置になった。

これぱっかりは2人も文句は言わない。

男子の方は、棒上げについて何かやっている。

棒上げとは、相手陣地にある棒を登って天辺の旗を取れば得点となる。

もちろん棒に登れないように阻止したり棒を倒したりするからなかなか危険ではあるが。

これも棒の高さによって得点が違うわけで。

この種目は旗を取りに行く人数人と棒を守る人大勢に分かれる。

春樹と秋人はどう考えても旗を取りに行く人だろう。

「あたしあっちのが良い」

夏実が棒上げを見てそう言った。

「え～むさいじゃん。男ばっかで」

「でも竹取りより面白いよ、絶対」

文句を言いたい気持ちも分からないではないが、こればっかりは仕方ない。

男女で区切りがついている以上は。

とりあえず男子も女子も配置や役割は決まり、体育は2クラス合同のため5組と対戦してみることになった。

グラウンドの真ん中を使うから男女いっぺんにはできないから、女子男子の順で行う。

竹を10本ほど真ん中に置き、その両サイド30メートルほど離れて5組と6組が向かい合う。

麻冬は手前の2番目に得点が高い竹、夏実は1番に得点が高い竹を狙うのだ。

走ってそこまで取りに行くのだから、夏実たちはかなりの自信がある。

なんせ2人はそんじょそこらの女子よりよっぽど足が速い。

ホイッスルが鳴ると、特に夏実は鬼のように走り出した。

夏実と同じ竹を狙うクラスメートでさえかなり遅れを取ってる。

あの長い長い竹の真ん中を掴んで、夏実は腕に抱えながら自分への陣地へと走り戻る。

まぁ当然5組が阻止しようとするわけだが…

「みんなー、よろしく！」

夏実の呼び掛けに、同じ竹を狙うクラスの女子が一斉に相手女子を押さえにかかった。

足ひっかけたり押してみたり、中にはマジパンチを喰らわせる人もいる。

そんな大乱闘の中夏実は悠々と竹を陣地まで持ち帰る。

そして多少手こずってる麻冬の応援に行ったりなどして、結果６組の圧勝で終わった。

まぁ男子のほうもそんな感じ。

とりあえず身軽な春樹は棒を守る相手男子を踏み台にして棒に登ってスイスイと天辺まで行き旗をゲットする。

秋人はピョンと飛んで棒に飛び乗り、天辺まで行って旗を取る。

男子もかなりの圧勝。

所詮ただの練習って言えばそうだが、おそらく本番でもかなりの期待はできる。

まぁ、本番は3学年が合体するわけだから今日の3倍くらい激しくなるわけだが。

男女とも種目をやり終えたから、今度は全員リレーをやってみることになった。

5組も6組ももう走者順は決めてあるし、対決するのにちょうど良い。

6組の戦法としては、前と後ろに速い人を固めるというものらしい。

もちろん4人はそんなことも知らずに勝手に走る順を決められていたわけだが。

「…俺どこ?」

もうスタートしたにも関わらず、秋人が眠そうに言った。

「アンカーに決まってるでしょ」

麻冬が笑いながら答える。

秋人は

「えー、またアンカー…」と少し嫌そうに言う。

そして麻冬にお前は?と尋ねた。

麻冬は１０番よ、と答える。

そして８番走者が走り出したから麻冬はライン上に立った。

ちなみに夏実はスターターで春樹は３６番である。

スターターは距離が少し短いが直線のため差をつけやすいからなかなかの重役だ。

男子がやれば良いものの…

「あーあ、今日の体育ハード」

夏実があくびをしながらまだ走っていない秋人と春樹に言う。

「なにがハードだよ」

秋人は少し笑った。

「やりたいこと以外のことをやるのは重労働だもーん」

そんな会話をしていると、走り終えた麻冬が偶数組のほうへ戻ってきた。

夏実がお疲れ～と声をかけると、麻冬は本当だよぉと冗談交じりで返した。

秋人と春樹の出番はまだまだ先で、そのうち授業の時間が押してるからリレーは途中で打ちきられてしまった。

春樹はブーたれてたけど、秋人は走らなくてすむからラッキーと言う。

「あ、海野・櫻井」

授業が終わりみんなゾロゾロと校舎のほうへ戻って行く中、春樹と夏実が体育教師呼び止められた。

「なんですか？」

夏実が返事をすると、教師は
「用具しまっといてくれな」と言った。

もちろん体育委員でもない2人はここで反論するわけだが、夏実の茶髪に春樹の緑ポロシャツを指摘されて何も言えなくなる。

「いつも見逃してやってるだろー？たまにゃ良いじゃん」

教師は笑いながら言った。

面白い教師だ。

確かに2人はこの教師に注意されたことはない。

2人もこの教師のことけっこう好きだから、反論はやめて仕方なく言われた通りに片付けることになった。

それにしても夏実の茶髪は仕方ないにしても、春樹も体操服くらい着れば良いものを。

夏実と春樹を残して、秋人と麻冬は先に更衣室へ行くことになった。

普段から眠くて口数少ない秋人だが、今回に限ってはいつも以上に静かだ。

昨日の今日だし仕方ないのかもしれないけれど。

「…昨日はごめん、ね」

更衣室の近くにある体育館に近づいた頃、麻冬が口を開いた。

秋人はなにが？なんて白を切るけど、麻冬はそれでも続けた。

「前から知ってた？」
「いや、ちょうど麻冬が来る前に聞いた」
「そっか…」

落ち込み気味の麻冬に、
「より戻せば？」と秋人はそっけなく言ってしまった。

まさか麻冬が自分のことを好きだなんて思ってないから、そう言ったんだろうが。

「嫌いで別れたわけじゃねぇんだろ」
「…だめ、できない」
「好きな奴でもいんの？あ、でも前いないって言ってたっけ」

できるはずがない。

けれど、麻冬が阿笠に再度告白されて嬉しかったのも事実。

ここで秋人のことが好きだって言えたらどんなに楽か。

昨日の夜までなら言えたかもしれない。

「秋人は…自分の好きな人に好きな人がいたらどうする？」

阿笠のたった一言で麻冬の気持ちが揺れたのも事実。

けれど秋人を好きになった思いとて半端なものではないのだ。

秋人は、麻冬からの意外な言葉に少しだけ驚いた顔をしたが、そのうち予鈴があと5分で鳴るため2人は更衣室へと急いだ。

麻冬の欲しい言葉は聞けないまま…

next

第17話【松の慎の戯言】

「やっぱ！ギリセーフ！」

そう言って教室に入ってきたのは夏実と春樹だ。

用具を片していたせいで着替える時間も少なく、更衣室から走ってきた模様。

「おつー。次は地理よ」

麻冬が手をヒラヒラ振りながら言った。

なぜ社会で地理をやるのかと言うと、彼らはとりあえず理系クラスにいるから。

大まかに分けると、文系クラスが番号のはやいクラスで理系がおそいクラス。

まぁ秋人や麻冬が理系にいるのは普通に当たり前で、前にも言ったように春樹はスポーツ医学が好きだから。

夏実はもろ文系だけど、理系も苦手なわけじゃないし何より3人が理系に行くなら、という理由。

まぁ理系も何クラスがあるけどその中でこの４人がまさか一緒になれるとは、運が良いのか教師の配慮か…

「げっ、ジミ男か！」

ジミ男とは、本名の久実男をもじってジミ男になったらしい。

まぁ名前が似てるというのもあるけど、何より外見が地味だからそういうあだ名なのだ。

とにかく2人はさっさと席に着いて地理の支度を始めた。

少ししてから予鈴とともにジミ男が教室に入ってきて、３限が始まった。

「あっつー」

夏実は下敷きでパタパタと仰ぐ。

かなり急いでたから汗もひいてないのだろう。

そんな夏実を横目で見ながら秋人は

「日頃の行いだな」と嘲笑う。

「ふーんだ、茶髪の何が悪いのよー」
「校則違反だからだろ」
「なにさ」
「まぁ夏実は黒よりそっちのが似合うな」

秋人の言葉に、夏実は
「でしょ？」なんて自慢気に言いつつも嬉しそうな顔をした。

勇気が出るようにと願いを込めて染めた髪の毛。

いつの間にか愛着が湧いてて、とっくに夏実のお気に入りだ。

「あ」

夏実がおもむろに声を出した。

髪の毛の話をしていたから、昨日の春樹との会話を思い出したのだ。

麻冬と出くわす直前に春樹が、夏実に助けられたと言っていた会話。

その言葉を言う春樹の眼差しは真剣そのもので、夏実には忘れられなかった。

「なんだよ？」

秋人は夏実の声に反応したが、夏実はなんでもないと言って軽く笑った。

夏実には春樹を助けた覚えも記憶もなく、春樹が何を思っているのかなんて分からない。

「…だから助けてくれたんだ…？って言った…？」

今度は秋人にも聞こえないくらい本当に小さな声で、声にならない声で呟いた。

夏実の髪の毛を染めることになった理由を話しただけ…なんだが、その話をした直後に
「だから助けてくれたんだ」と春樹は言っていた。

そのだからにはどんな意味が込められていたのか。

自分が嫌がらせを受けて、それを乗り越えるために茶髪にして…それでいて、春樹を助けた？

どこでどう繋がっているのか夏実には到底理解できずにいる。

モヤモヤしたままでいることが嫌いな夏実も、こればっかりは春樹に直接聞けない。

なんとなく、聞いてはいけないような気がしているらしい。

だからといって他の人に聞くのもおかしいから、夏実はかなり迷っている。

４年も昔の、しかもたった一瞬のできごとだ。

しかも正義感強い夏実はあんなことはたまにってわけでもない。

春樹だけが例外ではないのだから、思い出せってほうが無理難題だ。

「お前、今日変だよな」

秋人が夏実に言った。

「へ？」

いきなり言われた夏実は間抜けな返事をする。

けど、これは嫌味なんかではない。

秋人は続けて言った。

「でも春樹も麻冬も…俺もか」

夏実にはその意味が理解できず、
「そぉ？」なんて軽く流した。

だが鈍感な夏実以外は、お互いに何かを思って何かを考えていることは確かだと分かっている。

夏実が春樹のことばかり考えているように…
春樹が秋人に後ろめたく思っているように
秋人が何もできない自分をもどかしく思っているように
麻冬が答えのない迷路をさ迷っているように

「…お前くらい能天気だったら良かったかもな」

フ…と秋人は少し笑いながら言った。
それを悪口と受けとった夏実は
「なにー？！」と少々怒り気味。

知らないことのほうが幸せなことって、たくさんある。

ことわざでもあるように。

それでも知りたいと思うのが人間で、それを知ることで絶望を感じて知らないほうが良かったなんてワガママを言うのも人間である。

知って、それが悲しく苦しく切ない事実だと分かっても投げ出さずにちゃんと受け止められる…そんなことはただの理想論かもしれないが、そうあって欲しいと願うことはいけないことだろうか。

人間には未来が分からない。

運命が決まっているとしても、変えられるかもしれない。

明日は自分でつくることができる…それが人間だ。

未来が分からないからこそ、懸命に生きるのだ。

だから、今４人がこうして悩んでいることは決して無駄なことではない。

今この時間があって、将来の自分がいる。

けれどそんなのは言ってしまえば結果論であり、綺麗事だ。

無駄な期間をすごして、そして将来もそのまま無駄に終わってしま

うかもしれない。

今という期間を、苦しさを感じている最中の彼らには今が大事な時期であることが分からないだろう。

なんでこんなに苦しいのか

なんで思い通りにいかないのか

そんな歯がゆい思いが大事なことなんて、ちゃんちゃら思えるはずがない。

けれど、結果論から見れば無駄な道に進んで良かったと思える日が絶対に来る。

来ないはずがないのだ。

「起立、礼」

泣いたことも

怒ったことも
笑ったことも
悔しかったことも

全ては通らなくてはならない道だったのだと、理解する日が来るのだ。

それがいつかは分からないが。

だから

どうか乗り越えて欲しい。

気持ちがある限り。

next

第18話【一番星】

「ちょっと！離してってば！」

放課後になってすぐ、部活前に麻冬は手紙で呼び出され、玄関付近に向かった。

そこには男子が2人ほどいて、1人が「こいつが雪原さんのこと好きなんだって」と言ってきた。

オタクのような身なりで、自分では告白できないって雰囲気漂う男で、友達に告白手伝わさせてるのも何だか納得できる。

もちろん麻冬は丁重にお断りしたが、友達の方が麻冬の手を掴んで「そんなこと言わずにさ、軽く付き合ってやれよ」だなんて身勝手なことを言ってきたのだ。

あとは上に書いてある麻冬のセリフ。

麻冬は千切れるような勢いで腕を振って追い払う。

「悪いけど付き合えません。だいたい友達に告白させてるような男と付き合えるはずがないわ」

いつものごとく麻冬の毒舌。

まぁこれは毒舌というより正論だ。
当の本人はそう言われてしょぼくれているのに、友達はなぜかカッとして麻冬に向かって叫んだ。

「気取ってんなよ、ブス！」

さすがにカチンときた麻冬はお返しに
「そのブスを好きだって言う人もいるけどね。あなたの友達みたいに」と捨て台詞を吐いて、その場から立ち去った。
まだ友達が何か喚いてたけど、麻冬は気にせずプールへと急ぐ。

と、そのとき阿笠がこっちのほうを見ていることに気づいた。
麻冬は一瞬ためらったけど、シカトして歩いていこうとすると阿笠から声をかけてきた。

「あ…えっと…大丈夫？」

阿笠もちょうど部活へ行く途中だったようだ。

「…見てたの」

麻冬はそっけなく言った。

麻冬だってこんな冷たい態度取りたいわけじゃないけど、昨日の今日だから気まずいのだ。

「ごめん。助けようかと思ったけど何か平気そうだったから」

「まぁね」

シーンと沈黙が流れる。

耐えきれない麻冬は

「じゃあね」とこの場から去ろうとしたが、阿笠が呼び止めた。

麻冬はピタッと立ち止まって振り向かずに立ち尽くす。

阿笠ほそんな麻冬の背中に向かって懸命に言った。

「昨日は本当ごめん。けど、言ったことは嘘じゃない」

突き放したくても、突き放せないでいる麻冬がいる。

麻冬は少しだけ肩が震えているようだった。

「あたし…振られたことより中3生活が一番辛かった」
「え…」
「阿笠、すぐそこにいるのに何であたしじゃダメなんだろって…悲しかった」
「麻冬…」

阿笠は麻冬に近づき、正面に立つと麻冬の目から涙がこぼれていることに気づき、どうしようもない気持ちになった。

決して阿笠の前で弱さを見せなかった麻冬が、今正面切って泣いているのだ。

よっぽどなんだろう。

「…でも、嬉しかったの」

阿笠はその言葉に反応し、バッと麻冬の顔を見た。

麻冬は目から涙がこぼれているものの、口元は少しだけ微笑んでいる。

「知らないとこであたしを守ってくれてたんだね」

阿笠は返事ができず、少し照れながら視線を反らした。

「変わらない…いつも阿笠優しかった」

麻冬の言葉に続けて、阿笠は真剣な顔で麻冬に言った。

「…麻冬、もう麻冬の中に俺がいないんならこんなこともうしない。だけど」

「待って、阿笠！」

阿笠の言葉を麻冬が中断した。

少しビックリした阿笠は

「え？」と意味が分からないでいる様子。

麻冬は少しうつむきながら、焦る気持ちで言う。

「急に…悲しかった過去が報われて…今混乱してるのよ」

小学校、中学校

そのときから男子に人気があった麻冬は、何度告白されてきたことだろう。

そんな高嶺の花のお姫様が、心から愛した人は

優しい優しい
サッカー少年でした。

「お願い…もうちょっと待って」

懸命に言う麻冬に、阿笠は優しい笑顔で
「分かった。ありがとう」と言った。

そして2人は、部活へと出かけた。

サッカーはグラウンドだが、水泳はグラウンドの向こうのプールでやるから、途中までは一緒なのだ。

2人が一緒になって歩いているところを、ちょうど玄関から出てきた秋人が見かけた。

「…え？」

阿笠と麻冬が一緒にいるのを見て、当然秋人は不思議に思う。

昨日あんなことがあったのに、しかも昨日までにも麻冬は阿笠のことを避けていたのに突然仲が戻ってるのだから驚くのも無理ないだろう。

秋人は立ち止まって2人のほうをボーッと眺めた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「おー、麻冬」

自主練している途中、秋人は水道で顔を洗っているとそこを麻冬が

通りかかった。

「あ、秋人。お疲れ。自主練終わり？」
「あー、どーすっかな」

麻冬はもう制服に着替えてあって帰る気満々だ。
秋人は自主練を終わりにするか悩んでいたが、そんなことよりもさっきのことが気になってつい言ってしまった。

「…なぁ、阿笠と仲直りでもしたの？」

秋人がそう言うと、麻冬は少し罰の悪い顔をして
「えーと…」と言葉に詰まった。

「付き合うとか？」
「そういうんじゃなくて、んーと…待ってもらってるの」
「待つ？」
「いきなりのことだから頭が混乱してるのよ。だから…」

まさかその混乱の原因が秋人だなんて、秋人には到底言えない。
秋人さえ好きにならなければ、間違いなく麻冬はもう一度阿笠と付き合うだろう。

だけど今は秋人のことが好きで、好きなはずなのに最愛だった人がまた隣に来てくれたから、どっちを好きなのか分からなくなっている。

「混乱？なんで」
「なんでって…」

単刀直入に聞いてくるから、麻冬は答えられなかった。

秋人は続けて、
「まだ好きなら付き合えば良いしそうじゃないなら離れれば良いだけじゃん」と言った。

秋人が言ってることは確かに正論だ。

だけど頭で分かってても心がついてこないことなんて、いくらでもある。

「…嫌いじゃないから困ってるのよ」

麻冬が重い口を開いた。

「実際揺れてるから…」

その麻冬の言葉に、

「揺れてる?」と秋人が聞き返した。

はっとした麻冬は口を押さえた。

「…なぁ、昼間俺に聞いたよな」

「え?」

「好きな人に好きな人がいたらどうする?って」

いきなり秋人は何を言うんだろうと、麻冬は内心嫌な予感がしていた。

秋人は手に持っていたタオルを首にかけて、少し間をあけてからおもむろに言った。

「それってお前がそうだから聞いてきたんだろ?」

麻冬の予感は当たった。

確かに麻冬が秋人にそんなこと尋ねるなんて、自分がそういう状況じゃなきゃあり得ないだろう。

秋人は別に麻冬の好きな人が知りたいってわけではないけど、気に

なったことは解き明かさなきゃ気がすまないタチだから聞いているだけ。

麻冬とて1人で考え込むのは大変だし、できれば誰かに打ち明けたい。

だが、その誰かが秋人であってはならないのだ。

「…そうよ。好きな人いるから迷ってるの」

麻冬は隠すことなく、そう告げた。

秋人はやっぱり、という顔をした。

「大変だな、お前も」

秋人はそれ以上何も詮索しようとはしなかった。

それは秋人の優しさか、それとも単に興味がないだけか…

どっちにしろ事実を誰かに聞いてもらえたことで、麻冬が少し吹っ切れたのも本当だ。

「ま、答え見つけんのはゆっくりで良いんじゃねぇの」

そう言って秋人はポンッと麻冬の頭に手を置いた。
そして俺ももう帰るから5分くらい待ってて、と言って秋人は部室へと向かった。

「ばか…。あんたなのよ、好きな人は」

秋人がいなくなってから、麻冬はそう呟いた。
気づいてくれない秋人に少しだけ切なさを感じつつも、優しい言葉をかけてくれたことの嬉しさのほうが上回っている。
ちょっぴり顔を赤くした麻冬は、夜空に輝く一番星を眺めた。
幸せを願うかのように。

next

第19話【すれ違い】

「春樹調子悪いん？」

部活中チームメートが春樹のプレーを見てそう言った。

そう？なんて言いつつ春樹はいつもなら簡単に返す羽もネットにかけた。

「…本当だ」

羽を拾い上げながら、小さな声で呟く。

「珍しいな。体調でも悪いのか？」

「ううん、ちょっと集中力足りないだけだよ」

春樹は愛想笑いをして受け流したけど、まぁ春樹の言葉に嘘はない。

実際に体調が悪いわけでもケガしてるわけでもない。

「そっか。あんま根詰めるなよー」

「ありがとー」

春樹だって、いろいろ考えたりする。

秋人のこともあるけど、でも一番切ないのは夏実が自分のことを覚えていなかったこと。

夏実は４年前に春樹を助けたことすら覚えていないのだ。

春樹にとってはそれは人生の中で一番かけがえのない思い出だったけれど、夏実にとってはそうではなかった。

もちろん春樹だって仕方ないと思う面もある。

夏実といざ友達になってみると、夏実がこれまでイジメをする人とかを何度注意してきたか数え切れない。

守られたのは自分だけじゃないんだ…って、春樹は思い知ったけどそれでもどうしても、ほんの少しでも良いからカケラでも良いから思い出して欲しかったのだ。

何かきっかけがあれば思い出せるかもしれないと、淡い期待だって抱いた。

昨日の夜にはそれらしいことを言ってみたし、朝は何年も前からある人に片思いしてると言ってみた。

春樹なりに気づいてもらおうと必死なのだ。

自分で言っちゃったら意味がない。

自力で思い出して欲しい。

春樹の小さなワガママだけど、春樹が人生で初めて好きになった人との出会いなのだから春樹にとっては特別なのだ。

…叶わなくとも。

「夏実ー、どうしたのよ」

同じく体育館の2階ではバレー部が練習している。

「なにが？」

夏実がスパイク練習で列に並んでいるとき、正セッターの子が夏実に話しかけた。

ちなみに今は準セッターの子がトスを上げている。

「だてに去年からコンビ組んでないわよ。あたしを誤魔化せるかってての」

彼女はさっきまでトスを上げていたから、夏実が不調なのに素早く気づいたのだろう。

他のみんなには分からなくても1年の頃からお互いレギュラーとしてコンビを鍛えてきたのだから、バレるのも無理はない。

夏実は袖で汗を拭きながらセッターに何も答えずにいると、彼女は言った。

「夏実は部長でエースなんだからしっかりね」

「…うん」

部長でエース

そんな肩書き夏実にはいらないのに、周りが勝手にそうさせた。

実力社会だから当然のことだが、夏実も…夏実だけでなく麻冬も秋人も自分から部長とかやるっていうタマじゃないけど周りが異常に期待をするんだ。

春樹はそれほど億劫ではないかもしれないが。

部長でエースだって、不調のときくらいある。

まぁ大会が近いからセッターの子もピリピリしちゃってるのかもしれないが。

悩みをプレーに出す夏実も悪いと言えば悪い。

夏実だけでなく春樹も。

こういうときに上手く切り抜けられるのは秋人や麻冬だ。

不器用な夏実と春樹はどうにも気持ちが顔に出る。

そのうちバレーもバドミントンも練習が終わり、2人は今日も一緒に帰る。

今日わちゃんと夏実も自転車で帰るらしい。

駐輪場に向かう途中、まだグラウンドで自主練をしている秋人を見かけて春樹は言った。

「偉いなー秋人…」

自主練して偉いとかそういううんじゃなく、ちゃんと部活と私生活を分けてるところが偉いという意味らしい。

「俺今日部活不調だった」
「あたしも」

2人はしばらく秋人を眺めて、そして駐輪場へと向かった。

このあと秋人は水道で麻冬と出くわし、一緒に帰る。（前話参照）

2人は駐輪場に着き、自転車を出して自転車に乗った。

学校を出て夜道を通るとき、無言が続いた。

しばらくしてから2人して声を合わせて
「あのさっ…！」と言った。

「あ…春樹先良いよ」
「や、夏実こそ」

2人して譲りあいをしているうちに、結局お互い言えずじまいに終わった。

聞きたいけど聞けない。

考えていることは同じなのに、すれ違ってばかり。

ただ一言言えば良いだけなのに。

助けたってどういうこと？

本当に覚えてないの？

って…。

「あ。そうだ春樹、今日春樹んち行くね」

夏実が思い出したように言った。

「うん？どしたの？」

「お母さんが春樹ママに夕飯頼んだの。今日両親とも出張だから」

「そうなんだ！良いよ良いよ。きっと輝樹も喜ぶよ」

春樹の言う輝樹（てるき）とは、春樹の2歳年下で現在中3の弟である。

輝樹は春樹と違ってどっちかっていうとクールなマセガキ。

「輝樹か～。あいつあたしに対して態度悪くない？」

「そうかな？もともとあんな感じじゃない？」

そんな話をしていると、噂の輝樹から春樹に電話がかかってきた。

内容は、母親が風邪ひいたから夕飯の支度できなくなったとのこと。

春樹と輝樹だけならまだしも今日は夏実もいるから、どうしようか…って話らしい。

「あたし作る！なんて言えないしなぁ～…」

夏実は自他共に認めるほどの料理音痴だ。

包丁すら危なっかしくて持たせられない。

「あー、じゃあ俺なんか作るよ。あと5分くらいで着くから待ってて」

春樹はそう言って電話を切った。

夏実は隣でシュンとしながら
「ごめんねぇ」と言う。

春樹はそんな夏実を見て
「美味しいの作ってやるから期待してて」と笑って言った。

こういうとき普通女の子が作るものだけど…

この場合に限っては致し方あるまい。

数分して春樹の家にようやく着き、自転車を庭に置いて2人は家へと入った。

春樹は制服も着替えずカバンだけ居間に置いて、さっさとキッチンに入る。

２０分くらい待ってて、と言って支度に取りかかった。

とりあえず夏実は居間でテレビでも見てようかと思ったが、春樹の部屋の雑誌がまだ読みかけだったことに気づいて春樹に
「上に行くね」と行って春樹の部屋へと向かった。

春樹の部屋は2階の奥から2番目だ。

部屋に入って雑誌を見ていると、部屋をノックする音がした。

「春樹？」

夏実がそう尋ねると、ドアが開いて輝樹が入ってきた。

「なんだ輝樹か。どうしたの？」

輝樹は春樹とは大違いで身長なんか軽く１７０はある。

顔はほとんど同じなのだが。

まるで春樹が身長伸びたみたいで、学ランを着ている輝樹になぜか笑えてしまう。

「なぁ、夏実男と別れたんだって？」

2歳も年上なのに普通に夏実のことを呼び捨てする。

ちなみに秋人や麻冬にはサン付けするのだが。

「そうよー。春樹から聞いたの？」
「いや、彼女から」
「彼女？わ～輝樹にも彼女いるんだ！可愛い？」
「さあ…不特定多数だしな」

輝樹のその言葉に夏実は
「は？」と聞き返した。

「彼女の1人が星陵だから聞いたってこと」
「ちょっと待って、何言ってんの？」
「なにが？」
「なんで彼女がたくさんいるのってこと」

そりゃ夏実には理解できないだろう。

1人の人を一途に思う夏実には。

けれど輝樹がそんなことするのには訳がある。

理由もなくそんなバカなことはしない。

「だってそっちのが楽しいじゃん。別に女なんてどれも一緒だし」

だけどその理由を誰かに喋ったことは一度もない。
遊び人を装おっているけど、輝樹こそ誰よりも一途なのだ。

「さいってー！輝樹がそんな奴だとは思わなかった」

怒った夏実は再び雑誌を読み始めた。
輝樹は内側からガチャッと鍵をかけると、夏実はそれに気づいて
「何してんのよ？」と言った。
そんな夏実の言葉なんか無視して輝樹は夏実に近づく。

「そんな奴だとは思わなかったって、じゃあどんな奴だと思ってたの？」

輝樹は不気味にニヤッとする。
まさかそんなこと聞かれるとは思ってなかった夏実は、答えに詰まっている。

「お前、俺の何を知ってんだ？」

なんとなく夏実は迫力負けをしている。

夏実はベッドの上で寝転がってる体勢から起き上がり、ベッドの上に座った。

「なんで近づいてくるの！」

あの勇ましい夏実がたかが中3のガキに負けている。

いつもなら蹴りの一発でもかましてるのに。

夏実がそばにある雑誌を輝樹に向かって投げようとすると、輝樹はその腕を掴んだ。

そしてもう1つの腕のほうも掴み、夏実をベッドの上に押し倒す。

「てっ…輝…」

明らかにいつもとは違って何かがおかしい輝樹に夏実も少しだけ怯えている。

両手が塞がってる夏実は抵抗できない。

「知らないんなら、今から教えてやるよ」

next

第２０話【気づく思い】（前書き）

多少えっちな行為があります。
ご了承ください。

第２０話【気づく思い】

「よーっし。上出来」

春樹はスープを一口飲んで満足そうに言った。

皿におかずを持って気分上々で食卓に並べている。

まさか夏実が春樹の部屋で輝樹に襲われかけてるとも知らずに。

春樹と輝樹の違いといえば、性格と身長であるが輝樹のほうが髪の毛は真っ黒で春樹は少しだけ茶色味が混ざっている。

春樹は昔からバドミントンをしているけど、輝樹は特に何のスポーツもやっていない。

もちろんスポーツだって得意なはずなのだが。

そんなことはさておき、春樹の部屋で押し倒されている夏実は輝樹を怖がっている。

「輝樹…なに？ちょっと…離れてよ」

目の前にある輝樹の顔。
春樹と同じ顔なのに、する表情は全く違う。

「あれ、珍しく元気がないね」

輝樹は笑いながら言った。
挑発されても怯えてる夏実には歯向かう元気など出るはずがない。

「…兄貴さ、ずるくね？」
「…え…」
「いつだって俺の欲しいもん手に入れるんだ」

輝樹は一瞬切なそうな表情を見せたが、夏実には輝樹の言っている意味が理解できない。
黙って聞いていると、輝樹は無表情の顔で
「だからあいつの大切なもん奪ったらどんな顔すんだろね」と言った。

夏実は直感的にヤバいと感じた。
手を振り払おうとするけれど、体勢的にあまり力も入らなくやっぱり男の腕力に敵うはずもない。

「…夏実」

輝樹は夏実の首に唇を寄せた。

「やっ…」

カプッと音がして、同時に軽く痛みが走る。

輝樹は夏実のポロシャツの下に手を入れ、胸を探りあててブラをずらして乳房を摘まんだ。

さすがの夏実も、これ以上はさせないと掴まれてないほうの手で輝樹を押し退けようとするも、輝樹には効かない。

「輝樹！やめっ……んっ」

春樹に気づいてもらおうと大声で叫ぶが、輝樹がキスをしてきて口を塞いだ。

舌をからませてきて、夏実はとても苦しそうだ。

輝樹が唇を離しても夏実はまだ少し苦しそうで、息を整えるのに必死だ。

「あっれー、鍵かかってる。夏実ー、いる？」

そのとき春樹が食事の支度を終えて部屋にやってきた。

夏実は助けてもらうチャンスだと思ったけど、思うように声が出せない。

輝樹は構わず夏実のポロをめくりあげ、ブラをずらしてあったから胸がおおやけになる。

輝樹はおおやけになった夏実の乳房を歯で噛んだ。

「いっ…やぁ……」

小さく声が漏れた。

春樹は知らずに

「おーい、夏実～？」とドアをノックする。

それでも出てこないから諦めて輝樹を先に呼ぼうと輝樹の部屋に入るが、当たり前のように輝樹は部屋にはいない。

訳が分からない春樹は再び春樹の部屋をノックする。

「あっ……」

夏実の甘い声がもれる。

輝樹がスカートの下に手を入れて少しももに触れると、夏実はビクンと体が揺れた。

輝樹がパンツのすきまから局部に指を入れようとして、指先が局部に軽く触れたときに夏実が震える声で言った。

「お…お願い…やめて」

夏実の目から涙がこぼれた。

夏実が泣いたところを見たことがない輝樹は一瞬ひるんで、指を引っ込めた。

「おいっ夏実?!」

夏実の喘ぎ声とやめてと言う声を聞いて不信に思った春樹は勢いよくドアを叩きながら、
「輝樹！そこにいるのか?!」と叫んだ。

輝樹は諦めたのか、チッと舌打ちして夏実から離れた。

夏実はすぐさまずれたブラを戻してポロをちゃんと着る。

輝樹が手を差し出して、ほら行くぞと言うが、夏実はその手を掴むことなくベッドの上に座りながら震えた。

輝樹は軽くため息をついて、部屋の鍵を開けた。

「兄貴うるせーよ」
「お前ら何してたんだ?!」

春樹は輝樹に詰め寄ったが、震える夏実を見て輝樹を振り払い、夏実のところへ駆けた。

「夏実っ?!」

春樹が夏実に触れようとすると夏実は手を振り払った。

触らないで！と言いながらまだ少しだけ震えている。

「夏実、俺だよ！春樹！」
「あ……はる…」

夏実は春樹だと知って安心したのか、余計に涙を流して春樹に抱きついた。

「うっ……春樹ー…！う〜…」

可哀想に夏実は縛っていたゴムも取れ、春樹に抱きついている手がカタカタと震えている。

「夏実…大丈夫か？何があっ…」

何があったのか尋ねようとしたとき、夏実の首筋についているキスマークを見て全てを悟った。

「……おい、輝樹」

背後のドア付近に立ってる輝樹に向かって春樹は言った。

「お前…夏実に何をした？」

背後からでも感じられる、いつになくかなりの勢いで怒っている春樹。

「何って、遊びだろ」

「なんだと？」

「良いじゃん、夏実だって初めてじゃないんだし」

春樹は夏実に

「ごめん、ちょっと待ってて」と言って夏実を自分から離した。

春樹はベッドからおり、輝樹のほうへと歩く。

「な、なんだよ兄貴。そんな怖い顔して」

輝樹は軽く笑った。

春樹は輝樹の袖をグッと引っ張って前屈みにさせ、輝樹の左頬を思い切り殴った。

輝樹は油断していたせいもあって、廊下に倒れ込む。

「いっ…」

かなり痛そうだ。

春樹が６０％くらいの強さで殴ったのだから。

春樹は倒れ込んだ輝樹にまたがり、胸ぐらを掴んだ。

「もういっぺん言ってみろ」

春樹はかつて見たことがない形相をしている。

そんな春樹にビビッた輝樹は

「も、もうしねーよっ」と叫んだ。

「当たり前だ！次こんなことやってみろ！二目と見れない顔にしてやる！！」

脅しなんかではなく、本気だ。

２人のケンカに寝込んでいた母親が階段をかけあがってきて

「なんなの？」と慌てて言った。

春樹は輝樹から離れて、自分の部屋に入りがてら「なんでもねぇよ、ただのケンカだ」と言った。

春樹はバンッとドアを閉める。

夏実はさっきよりは落ち着いている様子だ。

「夏実…」

春樹は夏実の前に立って、頭を下げた。

「ごめん！本当に…輝樹がひどいことして…」

自分が悪いことをしたわけでもないのに、むしろ助けてくれたのに春樹は夏実に精一杯謝罪をする。

確かに夏実には初めてのことではないかもしれない。

だが、好きな人との行為とそうでない人との行為では全く違う。

夏実は友達の、しかも弟に犯されそうになったのだ。

例え輝樹が本当にしようとはしてなくても、夏実の心にできた傷は癒えない。

「やだ、頭上げて春樹」

夏実にそう言われ、春樹は恐る恐る頭を上げた。

夏実は軽くニコッと笑った。

「ありがと、助けてくれて」

あんな目にあったのに夏実は笑っている。

夏実の精一杯の優しさだ。

「もう…大丈夫？」

春樹は心配そうに言うが、夏実は大丈夫と言い返す。

けど春樹が夏実の肩に触れると、夏実は少しまだビクつく。

「あ…ごめ…」

春樹は謝るが、夏実は春樹の手をギュッと握った。
春樹がどうしたの？と聞くと、夏実は答えた。

「…正直怖かった」

春樹の手を握るのは、触られてもビクつかないように、克服するため。

「でも、春樹助けてくれた。だから…嬉しかった」

今、夏実の心は完璧春樹に揺れている。

必死になって輝樹から助けてくれたことが、この上なく嬉しかったのだ。

例えそれが友達だからという理由だとしても…と夏実は思っているが、実際には春樹が夏実を好きだからあんなに怒ったのだ。

お互い気持ちを少し伝えれば叶う思いなのに。

なかなか上手くいかない。

だけどそれが恋愛だ。

「助けるよ。そばにいるって約束したじゃん」

春樹は、いつものような猫みたいなニパッと笑った愛らしい表情とはうってかわって、穏やかで優しく微笑んだ。

意外な一面ばかり見せる春樹に夏実はドキッとする。

「…うん。そうだね」

春樹につられて夏実も穏やかな表情をした。

そしてしばらくしてから、2人は春樹が用意した食事を一緒に食べ始めた。

食べている最中、輝樹のご飯がまだ残っているのを見て夏実は、

「輝樹も呼ぼうか」と言った。

春樹はもちろん大反対した。

夏実は、確かにひどいことをされたけど同時に春樹への思いに気づかせてもらえたことにほんのちょっぴりだけ感謝もしているのだ。

そりゃ輝樹の行為は許されたものじゃないけど。

ご飯を食べ終えたあと、夏実は春樹の反対を押しきって輝樹の部屋へ向かった。

同じ過ちが繰り返されたら困るから春樹もしぶしぶ付いていく。

輝樹の部屋をノックすると、輝樹は
「…誰」と小さい声で尋ねたから夏実が
「あたし」と答えると、数秒してからドアが開いた。

「…夏実」

輝樹は困ったような驚いたような顔をしている。

「ご飯はやく食べてね。美味しいよ。じゃああたし帰るからまたね」

夏実は軽く手を振った。

夏実がクルッと振り返ったとき、輝樹は震える声で言った。

「なんで…俺あんなことしたじゃん。なんで笑ってんの」

夏実はチラッと輝樹の顔を見て、そして言った。

「今度2人でゆっくり話そっか。輝樹話したいことあるでしょ？あたしもあるんだ」

「え…」

「2人で会ってももう手は出さないんでしょ？」

「…おう」

夏実はそれだけ言って、階段をおりていく。

話が見えない春樹は疑問が浮かぶけど、とりあえず輝樹に

「冷めないうちに食っとけよ！俺夏実送ってくるから」と言った。

夏実につられたのか、春樹ももう怒った口調をしていなく普通に戻っている。

2人が家を出て行ったあと、輝樹は部屋で枕をボスッと殴る。

ちょっと前まであんなことあったのにもう平然としている…いや、平然になろうとしている強い2人を見て自分が情けなく感じているのだ。

決して意味なくあんなことしたわけではない。

けれどいくら理由があろうとも、悪いことは悪いこと。

輝樹はしっかりそれを受け止めた。

「くそっ…」

やっぱり兄貴にはいつだって敵わない…

輝樹はそう思えてならなかった。

next

第２１話【康介】

部活を終えてご飯を春樹の家で食べて行ったのだから、もう時間はかなり遅い。

まぁ春樹の家と夏実の家は自転車で5分くらいだからすぐだ。

けど夏実の自転車がパンクしてしまったから2人は押して帰ることになった。

「ごめんねぇ、春樹」

夏実は笑いながら言った。

「良いよー。じゃ明日から迎え行くよ」
「えっ、良いのに」
「そうさせてよ。やっぱ何かあったら…心配だし」

春樹は微笑した。

朝はまだ平気だとしても夜道は危ない。

夏実は罪悪感を感じる春樹の優しさを理解して、じゃあお願いと頼んだ。

「ね、輝樹って彼女いっぱいいるの？」
「あー、んー…まぁ確かにいつも違う女の子つれてる」
「へぇ。去年はそんなことしてなかったのにね」
「ただのマセガキだよ」

春樹はフンッと言う。

よっぽど気に入らないのだろうと夏実は内心笑った。

「…あいつ夏実に惚れてるのかも」

春樹は小声で呟いた。

「えーまさかぁ。惚れた人にあんなことはしないな」
「無理やりものにしようとしたとか」
「考えすぎだよ～」

夏実はケラケラ笑った。

夏実はそんなことは絶対にないと思っているのだ。

手を出される前、輝樹が言った言葉を考えるとどう考えても春樹への当てつけにしか思えないのである。

「…じゃあもし」

春樹は自転車を押すのをやめて止まる。

つられて夏実も止まった。

「もし輝樹が夏実のこと好きだって言ったら夏実はどうする?」

少しだけ真剣味がかかった瞳をしている春樹。

最近ときたまこういう表情をするようになった。

夜道に吹く風が夏実の長い髪の毛を揺らした。

「…断るよ」

夏実は微笑みながら言う。

「あたしのそばにいてくれるのは春樹だけで良い」

夏実のその言葉にどんな意味が込められているのか。

春樹は、じゃあ秋人ならどうするかって聞きたかったけど、それはさすがに卑怯だと思い止めた。

しばらくして夏実の家に着き、玄関に夏実が入っていくのを見届けて春樹が帰ろうとすると、何やら家のほうから声が聞こえた。

「春兄〜！ちょっと待ってー！」

その声に春樹も立ち止まる。

出てきたのは夏実の弟の康介だった。

夏実と同じくらいの身長で、康介は母親似のせいか女の子みたいな顔だちをしている。

「康介ー！どした？」

夏実たちとは違う高校に通っている1年で、夏実とは本当反対に料理やらも得意。

「ちょっと話聞いて欲しいんだ。泊まってかない？」

康介は片目ウインクをしながらおねだりした。

優しい春樹はもちろんオーケーして、結局春樹は夏実の家に泊まっていくことになった。

「あたしも混ぜてよー」

夏実はウキウキしながら言うが、康介は男同士で話したいと言ったので仕方なく諦め、夏実は居間でテレビを見ることにした。

春樹は康介と一緒に2階へと上がっていく。

康介は顔もきれいで夏実譲りか運動もできるし、何よりトランペットが大得意で常に持ち歩いている、絵になるような少年。

能力があるところは秋人に似ているが、性格はまるで優しくて…そう、阿笠のよう。

人気はもちろんあるらしいが、康介はあまり彼女を作ろうとはしない。

「話って?」

春樹が言うと、康介は
「…笑わない？」と念を押した。

春樹は当たり前だよ～なんて言うけれど、康介はきっと笑うだろうな…なんて思いながら話し始めた。

「…なんかさ、1週間くらい前に2人の女子に同時に告白されたんだ」
「おー！さすがっ！」
「でも2人はどっちがオーケーもらえるかやたら張り合っててさ」

康介は何度かこういった相談を春樹にしている。

春樹は普段からいろんな人の相談に乗ってるせいか慣れていて、いつも康介に的確なアドバイスをしている。

「でもどっちとも付き合う気はないから断ったんだ」

春樹はフンフンと真剣に聞いている。

「そしたらどんな子が好みかって聞かれて…」
「夏実みたいな子って？」
「ああ、いや…姉さんのことは知らないだろうからとりあえず姉さんの特徴を話してみたんだ」

康介は指をおりながら夏実の特徴を上げていく。

まず茶髪の長髪で、いつも元気で男子も顔負けの強さで、勇ましい女の子、と康介は言った。

「あっはは、確かに～」

春樹は大声で笑った。

康介はここまでは良かったんだけど、ここからが問題なんだと気まずそうに言う。

「4日くらい前…1人が柔道部、もう1人が女子プロレスに入っちゃって」

康介は、その2人になんでまた部活に?と聞くと、彼女らは「康介くん好みの勇ましい女になって強くなるの!そして康介くんと付き合えたら守ってあげるからね」と言ったらしい。

康介は返す言葉がなく、灰となって立ち尽くした。

守ってもらいたいからではなくただ好みを言っただけなのに。

しかも例え勇ましくなっても、康介が彼女らを好きになるはずはな

いのだ。

なぜなら

「あはははは！なにそれー！」
「あーっ、やっぱ笑った！」
「だってさぁ～。それにしても康介も姉離れしよーよ」

勇ましい女の子が好きなのではなく、夏実が好きなのだ。

もちろん恋愛ではなく。

「シスコンみたいに言わないでよっ」
「えー、違うの？」
「違う！ただ姉さん基準に考えると他の女の子には興味持てないだけ」
「だからシスコンじゃん」

春樹はお腹を抱えて笑った。

康介は顔を赤くしてムーッとしながら、ちょっと強い口調で話を続けた。

「で！どーやったらその子たちにやめてもらえるかアドバイスして

欲しいんだけど！」

未だに春樹は笑っていて、分かった分かったと言いつつも笑いを抑えられずにいる。

モテる人ならではの悩みだ。

康介は彼女らが強くなったとしても付き合う気はなく、なんとかして諦めさせたいようだ。

たいてい勇ましい女が好きだと言えば諦めるはずなのに、めげない女もいるとは驚きだ。

「そーだなぁ…たぶん口で言っても分かんないだろうな、その手の子たちは」

「そうなんだよ。1回やめるよう言ったんだけどさ」

「いっそのこと誰かに彼女役やってもらえば？行動で示さなきゃ分からないよ」

そうは言うものの、同じ学校に康介の彼女がいるとなれば女子たちは黙ってないだろう。

難しい話だ。

「彼女かー。あ、じゃあ春兄やってよ」

「えー?!やだよっ」
「春兄ならいけると思うんだけどなぁ。夏実じゃバレちゃうかもだし…」

中学のときの女友達に頼んだとしても変な噂が出てしまうと困る。

うーん、と考えていると春樹が思い出したように言った。

「麻冬は?」
「あ!麻冬姉か。でも麻冬姉に迷惑かかっちゃうしな」
「たぶん大丈夫だよ。明日頼んでみる」
「そうかな?…ならお願い」

結局麻冬に彼女役を頼むことにした。

康介の相談話も終わり、2人はたわいない話をし始めること小1時間。

夏実が康介の部屋に来てお風呂沸いたから春樹入ったら?と声をかけた。

春樹はお礼を言って1階にある風呂場へと向かう。

春樹がいなくなり、夏実は康介の部屋に入ってベッドに座った。

「春樹に相談？」
「うん。ごめんね姉さん、春兄借りて」
「あはは、良いよぉ別に」

夏実と康介は仲の良い姉弟。

こんなに仲が良いのも珍しいってくらいだ。

男と女なのに、中学までは何するも一緒だし、夏実は康介の前じゃ平気で下着でもいられるし康介も慣れている。

この姉に何でこんなジェントルマンな弟がいるのかは謎だが、２人とも本当にお互いを思いやっている。

「…ねぇ、康介」

だから康介が姉離れしないのも仕方ないかもしれない。

高校は違うところに進んだもののやっぱり康介自身も夏実以上に好きになる女子はいない。

「ん？」
「あたしね、春樹のこと好きになった…かも」

康介はいきなりの驚きの発言に、誤ってコップを机から落とした。

「え…」

next

第２２話【康介の悩み】

『姉さん、朝練は？』
『今日はないんだ。だから一緒に行こうよ』
『うん』

両親共働きのせいか、小さい頃からいつも夏実と康介は一緒だった。

夏実は小学生のときにジュニアバレーに所属し、康介は知り合いの音楽家のコネでいろんな楽器をやらせてもらっていた。

器用だからか才能があるのか、基本的に康介はすぐにどの楽器もある程度できるようになった。

だけどトランペットは大きくて重くて、小さい康介には未知の楽器だったから康介はトランペットに興味を持ち始めた。

『そういえば康介生徒会に誘われてるんだって？』

いつだったか２人が中学生のときの会話。

久しぶりに一緒に登校しているせいか、夏実も康介も心なしか嬉しそうだ。

『あぁ～…うん』
『会長ってうちのクラスの山崎だよね。あたしにも弟くんによろしくとか言ってくるよ』

普通このくらいの年になると姉弟は一緒に行動するのを嫌がるものだ。

けど2人は別で、特に康介は人気があるのにも関わらず他の女の子に興味を示さない。

みんなブラコンだのシスコンだのからかう奴らもいたけど、2人はそんなのちっとも気にせず、夏実は力で黙らせるが康介にいたっては「姉弟で仲良くして何がいけないの？」と本気で不思議がる始末。

『姉さんからも言っといてよー。俺入る気ないって』
『嫌なんだ？』
『やだよ、めんどくさい』

どうして高校は別にしたのかと言うと、夏実が通う高校より康介が通う高校のほうが吹奏楽に力を入れてるからである。

トランペットだけはいつまでたっても放さない。

『じゃあ言っとく』
『ありがと』
『ところで康介は彼女とか作らないの？』

2人の間で恋愛話なんて滅多にされないから、このとき康介は少しだけ驚いていた。

康介はすぐさま
「いないよ。どうしたの？急に」と返答する。

『なんか友達も康介のことカッコ良いとか言っててさ』
『まさかぁ』
『でも康介かなり人気あるらしいよー？』

鈍い夏実はそんなことちっとも気づかないし、こういうことには康介も疎そうだ。

『女の子ねぇ…あんまり興味ないな』
『もったいなーい』
『そっかな』

夏実は今は秋人や春樹や…から好かれているけれど、このときはまだ男っぽさが上回っていて男子とは友達レベルだった。

逆にこの頃からオーラを出しまくりの康介は、入学早々人気が出まくりになる始末。

『姉さんこそ彼氏作らないの？』
『あたしぃ？んー…特に男子とか興味ないからなぁ』
『でしょ？俺も同じ。まぁ姉さんいるし良いかって感じ』
『そーだね』

お互いがお互いを異性の基準として考えてしまうから、なかなか相手が見つからないのだ。

夏実は高校に入って先輩と付き合ったけど、それこそその先輩が出会ったとき優しかったから惚れたものだった。

年上の大人っぽさと優しさが康介とかぶったんだろう。

康介は未だ好きな子すら作らない。

そりゃ夏実を基準にしてたら見つかるはずもないが。

「姉さん…なんて？」

だけど夏実は、ようやく見つけた。

「だから…春樹が好きになったかも…って」

本当の好きな人を。

「本当に？」

康介は耳を疑った。

なんせ康介は春樹が夏実のことを好きなのを知っている。

康介が相談するとき、ちょくちょく春樹の恋について聞いていたのだ。

「？うん」

康介は秋人とはなんだか自分と似ているような気がして一歩ひいてるところがあるが、春樹にはかなりなついている。

身長も康介より低いし、どっちが年上に見えるかって言ったら迷わず康介だけど、どんな相談にも的確にアドバイスしてくれる春樹を本当の兄のように慕ってる。

「そっか。ねぇ、好きな人いるって楽しい？」

康介は夏実に尋ねた。

夏実は少し考えこんでから、まとまらない返答をする。

「そうだなぁ…片思いは正直苦しいことといっぱいだよ。悲しくもなるし切なくもなる」
「へぇ」
「だけどね、苦しくても好きな人のそばにいれるだけで幸せ」

片思いをしたことがない康介には夏実の言っている意味が分からないでいる。

軽く首をかしげて
「なんで？」と怪訝する。

「なんでって、好きだからよ」

ますます康介は頭にクエスチョンマークを浮かべる。

「隣にいて自分に向かって微笑んでくれるだけで、嬉しくなるの。その人の言葉に一喜一憂することもあるけど、でもね、理屈じゃないんだよ」
「…？」
「楽しいとかじゃなくてね、好きって思ったらもうだめなのよ」

康介は小さな声で
「好きになったら止まらないって意味？」と聞き返すと夏実は頷い

た。

康介はまだ納得できないようだけど、
「ふーん…そうなんだ」と言った。

高1にでもなればたいてい周りは恋人持ちも増えてくる。

康介の友達だって彼女もちがけっこういるし、ノロケ話やら相談やらされるわけだ。

もっとも好きな人すらいない康介に相談しても無意味なのだが。

「…姉さん、俺にもできんのかなぁ」

ジェントルマン康介くんは天然らしく、基本的にマイペース人間だ。

ボケーッとしてるところもあるし、人が何かをするから自分もつられてやるってことはしないような人だから滅多に困ることもない。

「好きな子？」

夏実には言わないけど、康介の親友が彼女に振られたらしい。

小学生の頃から長い間ずっと片思いしてて中学入ってからようやく

オーケーもらえて、目に余るほどラブラブだったとのこと。

中学からの親友だから、康介はその親友が彼女をどれだけ好きだったか知っている。

思いが通じたことで、一緒にいれて幸せだったことを知っている。

だけど今の親友は目に見えて分かるほど落ち込んでいる。

康介は慰めたいけど、かける言葉がないのだ。

こういうとき何て言ってもらえたら嬉しいのか、康介は知らないから。

「姉さんも達哉も…なのに、俺はなんでできないんだろ」

達哉とは親友の名だ。

大事な大事な親友を助けてあげられないことが、この上なく悲しいようだ。

春樹にこのことを相談しなかったのは、相談したところで好きな人ができるわけないと分かっていたから。

だけど夏実が恋愛について語ったから、ついポロッと言ってしまったらしい。

マイペース人間の康介はこれまで悩みなんか持ったことはなかった。たいてい思い通りにいくし、悩みなんか必要なかった。

けど、親友を救えないことで初めて康介は悩みを抱えるようになった。

それって、康介には良い経験なんじゃないだろうか。

好きな人をつくるつくらないは別にして、何かを真剣に考えていることは康介にとって初めてのこと。

「焦る必要ないよ。康介は康介のスピードで良いんだよ」

「うん…」

「康介がしたいと思ったことをすれば良いの」

夏実はニコッと笑った。

康介はまだ夏実の言葉を理解しきれていなかったけれど、いずれこの言葉が康介を進歩させる鍵となることに2人はまだ気づいていない。

そのうち春樹がお風呂から上がってきて、夏実・康介の順にお風呂に入った。

3人ともお風呂から上がり終わったあとは、台所からお菓子やらジュースやらをくすねて夜中まで大いに盛り上がった。

楽しい時間はあっという間に過ぎて、明け方に近づいた頃3人はようやく眠りについた。

みんな、様々な思いを抱えながら…

next

第２３話【正論反論】

朝、約束通り春樹は夏実を迎えに行った。

余裕持っていつもよりはやく学校に着き、春樹が自転車をしまっている間夏実はボーッとグランドのほうを眺めている。

「よ」

誰かが夏実の肩に手を置いた。

誰なのか見ようと夏実が振り向くと、夏実は一気に青ざめてその手を振り払った。

「いやぁっ！」

夏実はバッと身を隠すようにしゃがみこんだ。

「え…なに？」

その手の持ち主は秋人だった。

なぜそんなに夏実が怯えるのか訳が分からず、夏実に声をかけよう

とすると駐輪場から春樹が
「どうした?!」と顔を出した。

うずくまってる夏実を見て春樹はすぐさま駆け寄った。

「秋人…何かあった?」

春樹に安心したのか夏実は春樹にしがみついている。
春樹はそんな夏実の背中に優しく手でポンポンとする。

「肩に手を置いただけなんだけど…」
「はっ?」
「したら急に怖がって」

春樹はすぐにピンときた。

昨日の今日だ。
昨日あんなことやられて、やっぱり平気なわけがない。
特に秋人は輝樹と同じくらいの背丈だから余計にだろう。

「夏実、夏実。大丈夫、秋人だよ」

春樹がそう言うと、夏実は恐る恐る秋人のほうを見上げた。

「あ…秋人……」

夏実は秋人だと確認すると、ホッとしたような顔をした。

そして春樹は夏実を立ち上がらせて、夏実が落としたカバンを拾って夏実に渡した。

符に落ちない点がありすぎて秋人はしかめっ面をする。

今この状況を見て理解できるはずもない。

春樹は秋人のほうをチラッと見て片面を閉じて左手を顔と垂直に立てて、

「ごめん、あとで説明する」とアイコンタクトする。

春樹のメッセージを受け取ったのかなんなのか、秋人は軽く頷いて、自分の部室へと向かった。

春樹と夏実もまた体育館へと朝練をしに向かう。

体育館に着き、1階で部活の春樹は2階で部活する夏実に心配そう

に行った。

「上まで行こうか？」

バレーは女子部しか朝練してないから上には男はいないだろうけど、それでも親友の秋人にすらあんな反応をするんだから春樹も心配で仕方ない。

「…ううん、良い。ありがと」
「じゃあ教室までは一緒に行こっか」
「うん」

そう言って夏実は2階へと上がって行った。

春樹は夏実がしっかり上へ行くのを見届けてから部室に向かう。

昨日の夜、あのあと輝樹に対しては普通だった。

臆することなく輝樹と会話していたはずなのに、どうして男を怖がるのか。

春樹には分からないけど、とりあえず治るまで守るしかないと思った。

秋人と春樹は気になって気になって練習にあまり身が入らないでいるけど、夏実はやたら調子が良い。

スパイクを決めたときにはいつも通り元気に笑うし、リベロと同等…もしくはリベロよりもレシーブが上手い夏実は後衛では守りの要でもあるから一生懸命拾っている。

夏実自身、秋人を怖がったことの意味が分からない。

だけど頭で分かっていても体で拒否してしまうのだ。

どうにもならない

感情

朝練が終わり、着替え終わると夏実は階段をおりて、1階体育館の入口で春樹が来るのを待った。

「あっ、夏実ちゃん。おは～」

誰かが入口から出てきて夏実に声をかけた。

男子バド部の人だ。

「あ……お、おは…」

「？どうかした？」

何も知らないその人はいつもと同じように夏実に声をかけているだけ。

夏実もいつもなら

「おっはよー！」なんて言って明るく会話しているところだ。

いつもしている会話ができない。

そのことは、夏実の心を傷つけた。

「ごめん宏樹、夏実つれてくから」

春樹がその男子の腕をグイッとよけて夏実の手を取る。

「お、おお」

男子は訳が分からずにいるが、とりあえず返事をする。

春樹は夏実の手をつないだまま歩き出した。

「あっ…春樹、手が…」

夏実が恥ずかしそうに言うと、春樹はハッと気づいて手をパッと離した。

「わっ！ごめん！」

「んーん」

春樹とは普通に会話をするのに、どうして他の人じゃだめなのか。

春樹だって男だ。

夏実よりタッパがなくても、夏実よりずっと強い男なのに。

教室に行けば、普通にみんなが話しかけてくる。

女子にはいつも通り接するけれど、男子のほうは見向きもしない。

校内で麻冬と歩いているとき、上級生が下級生にたかっているのを見ても夏実は知らない振りをした。

疑問に思った麻冬が

「なんで止めないの？いつもみたいに」と聞くと、夏実は

「…だって危ないじゃん」と小声で答えた。

らしくない。

いつもなら真っ先にかけつけて助けてるような、正義感が強い人間なのに。

「見損なったわ」

麻冬はため息をついて、夏実の代わりに麻冬が止めに入った。

麻冬の毒舌に敵うわけないし、なにより麻冬の容姿を見れば男子はたいてい麻冬の虜になる。

夏実はそんな麻冬を遠くを見るようにして眺めた。

「だって…仕方ないじゃん」

夏実は悔しそうに呟いた。

助けたくても、男子に近づけないから助けられない。

一番歯がゆいのは夏実だ。

そこ頃、春樹と秋人は教室で話をしていた。

今朝の出来事を秋人が春樹に尋ねると、春樹は昨日の夜のことを説明した。

あまりにも衝撃的なことで、秋人は怒りつつも驚きを隠せずにいる。

「は……なにそれ」

秋人は嘘だろ?というような表情をする。
春樹は悔しそうに言った。
「どこまでされたのか分からない…だけど」
「だけど、なんだよ…?」
壁にもたれかかって立っている春樹に秋人はつかみかかった。
春樹の胸ぐらを掴んで、力をこめる。
「お前がいんのになんでそんなことになってんだよ!!」
珍しく怒鳴る秋人に驚いたクラスメートたちは一斉に振り返ってクラス中がシンとする。
「…気づかなかったんだ」
春樹は怒られるのは仕方ないと受け止めている。
そんな春樹の態度にカッとなった秋人が、春樹の頬を殴った。

春樹はドサッと倒れ込み、キッと秋人を睨んだ。

「なにが起こるかなんて分かるわけないだろ！」

「分かれよ！輝樹だって中３だぞ！！夏実が勝てるわけねぇだろって」

確かにその通りだ。

秋人が言うのは最もだ。

なにが起きるか分からないんだから、起こらないように務めなきゃいけないし、なにより女の夏実が一般男子に迫られて敵うはずがないんだ。

ただのケンカなら勝てるかもしれないけれど、状況が状況だ。

「…俺は確かに夏実を守れなかった」

春樹はゆっくりと立ち上がる。

そして秋人の目の前に立った。

「だけどお前が俺の立場だったら守れるって保証できたか?!」
「春…」
「俺だって俺が悪いことくらい分かってんだ!」

春樹は背伸びをして秋人の胸ぐらをグイッとひいた。

「だったら俺はどうしたら良かった?!あのまま出前でも取れば良かったのか?大人しく家に帰せば良かったのか?!」

春樹だって責任を感じていないわけではない。

食事の支度をしていたのは確かだけど、でもそれを言い訳にしたら実も蓋もない。

「それとも!部屋に行くって言った夏実を引き止めれば良かったのか?!」

けれど、誰もそんな最悪の状況を想像なんて普通しない。

部屋で雑誌を読むと言った夏実を引き止める理由なんてなかったのだ。

「お偉いお前はそうできたかもしれないけどっ…俺にはちっとも分からなかったんだ!」

怒鳴りながら言う春樹の目には少しだけ水がたまっている。
春樹は泣くのをグッとこらえ、秋人の胸ぐらを離した。

「春樹…」

秋人はちょっとだけビックリしている。
秋人が言ったのは正論だけど、でも春樹のしたことだって決して悪いことではない。

後悔先に立たず

その言葉がこんなにも当てはまることはない。

春樹は袖で目を押さえながら、
「ごめん」と一言言って教室からいなくなった。

クラス中は少しザワつきだして、コソコソ話を始めた。

秋人が睨むとみんなビクッとしてコソコソ話をするのは止めたけれど、予鈴とともに夏実と麻冬が入ってくるとどうにも気まずい雰囲気ばかりが流れた。

春樹は授業には出てこなかった。

next

第２４話【屋上】

「…何かあったの？」

クラスの異様な雰囲気を変に感じた麻冬が女子たちに尋ねた。

「秋人は起きてるけど反応薄いし春樹は授業サボってるし…夏実はなんか変だし」

麻冬は何も知らない。

夏実に聞こうにも様子がおかしいし、そもそもクラス全体がおかしい。

女子たちは顔を合わせて言いづらそうな顔をする。

「あのね…授業の前に秋人くんと春樹くんが大ゲンカしたの」

「…はぁ？！」

「なんか夏実ちゃんのことで…」

夏実というキーワードに麻冬は反応した。

夏実が何？と聞くと、女の子たちは口々に言った。

「守るとか…守れないとか」
「輝樹？がどうとか…」

さっきの2人の会話で、クラスの人たちは内容が分かっていたわけではないようだ。

あんなに大声で言い合っていたから夏実が襲われかけたことをみんなに知られていたかと思っていたけど、そういうわけではないらしい。

幸いだ。

夏実が襲われたなんてことが学校中に広まったら夏実の居場所がなくなってしまう。

「…輝樹？」
「確かにそう言ったと思う」
「なんで輝樹が…」

麻冬は考え込んだ。

とりあえず女子たちはそれ以上は知らないようだったから、お礼を言って席に戻る。

麻冬だって輝樹とは認識ある。

だけどなんで2人が輝樹と夏実のことでケンカしたのかいまいち繋がらないようだ。

夏実も夏実でなんで春樹がいないのかキョロキョロしてる。

隣の席の秋人はそんな夏実に話しかけた。

「…なぁ夏実」

夏実はちょっと振り向いたもののすぐに視線を反らした。

無理に話しかけても今朝みたいになることを恐れた秋人はそれ以上何もできない。

秋人は歯がゆそうに呟いた。

「…なんで春樹なら良いわけ?その場にいたのが春樹だったからか?」

「…え…?」

夏実はゆっくりと秋人の顔を見た。

秋人は悲しそうな悔しそうな…そんな表情をしている。

「むしろ怖がるのは輝樹と同じ顔の春樹じゃねぇのかよ」

夏実は何も言い返せない。

「俺はっ……っ…」

秋人は言いたくても何も言うことができない。

言えたらどんなに言いか。

なんでも良い。

俺のこと怖がるな
俺は何もしない
俺が治してやる
…俺はお前が好きだ

言えないことの辛さ。

何もできないことの悔しさ。

「……なんでもねぇ」

秋人は席から立ち上がり、もうすぐ授業が始まるというのに秋人まで教室から出ていってしまった。

「あき…と……」

夏実も悲しそうな顔をする。

夏実とて避けたくて避けてるわけじゃない。

怯えたくて怯えてるわけじゃない。

春樹は良くて秋人がなぜだめなのか分からなくて一番悩んでるのは夏実だ。

秋人は大事な大事な友達。

なのに

「……う……」

夏実は泣きそうになるのを必死にこらえた。

秋人は何も悪くないのに、いつもクールな秋人にあんな顔をさせてしまったことが悲しくて仕方ないようだ。

秋人も秋人で、春樹にああ言ったものの春樹の言い分もよく分かる気がするからこそ、夏実に何も言ってやれない。

お互いを思いあう気持ちは十分にあるのに、それを伝えることのできないもどかしさ。

その頃春樹は屋上で寝転がっていた。

普段鍵がかかっているけど、春樹は屋上の鍵の代わりに自分の家の鍵を職員室に置いてきたのだ。

屋上は春樹ただ1人。

「あー……いった～…」

春樹は殴られた頬を押さえながら言う。

秋人が強く殴ったせいで頬は少し赤く腫れている。

春樹は青空を見上げた。

高く青く澄んでいる空は、悩みをぶっ飛ばしてくれそうだ。

「…だよなぁ…」

春樹は呟いた。

やっぱり俺が悪いんだよなぁ…と。

春樹は事を少し軽く考えていた。

なぜなら夕飯を食べたあと輝樹に普通に接していたし、そのあと夜中すぎまで康介も交えて3人で楽しくやっていた。

康介にも春樹にも拒絶反応を示さなかったから、もう大丈夫だと思い込むのはごく当たり前だろう。

でも実際にはそんな軽く済むことではなかった。

秋人に…男子に拒絶反応を示してしまっているのだから。

春樹だって今朝は驚いたのだ。

だけど、仕方なかったですまされる話なのか。

秋人と春樹がケンカしたところで終わる話なのか。

「なんだよこの鍵。屋上のじゃねーな完璧」

誰かが屋上のドアを鍵で開けようとしている。

だが開かないようだ。

彼が持っている鍵は春樹の家の鍵なんだから開くはずもないが。

「…誰だぁ？」

春樹は腕時計を見て時間を確認する。

確かに今は授業中だ。

なのに屋上に来るなんて、ただサボりたいだけか春樹みたくなんかあったのか。

春樹はドアに近づいてみた。

「ちっ…誰だよ、こんな小細工しやがって」

ドア越しに聞こえるその声はついさっきケンカをしたばかりの秋人だ。

春樹は開けようか開けまいか一瞬戸惑った。

ケンカしたばかりの秋人と向き合いたくないけど、でも何となく向き合いたいような気がしているのだ。

春樹は鍵を鍵口に刺してガチャッと回して鍵を抜いた。

そしてドアの隣の上へつながる鉄格子を素早く駆け昇って、屋上のドアの上のおよそ6平方メートルくらいのコンクリートの上に上が

って寝転んだ。

ドアが開かないから諦めて帰ろうとしていた秋人は、鍵が開く音を不信に思い再びドアに近づいた。

「…ガチャッっつったよな…」

秋人はゆっくりとドアを押してみると、ドアはいとも簡単に開いた。

屋上へ入ってみると、見渡しても誰もいない。

春樹は上にいるのだから秋人の位置からはあまり見えないのだ。

春樹わ高い所で寝転がりながら温かい日差しを受けているせいか、ウトウトしてきた。

数分後にわ完璧寝てしまった。

秋人はと言うと、屋上から町を眺めている。

特に意味もなく、ただボーッと。

「…綺麗事かな、俺」

秋人は小さな声で呟いた。

秋人はさっき春樹に言ったことを後悔している。

春樹とて責任を感じてないわけないのに、さらに追い討ちかけるようなことをしてしまったのだ。

そもそも自分の弟が夏実に手を出すなんて絶対に考えられなかっただろう。

だけど秋人は、春樹には大丈夫なのに自分のことは怖がる夏実にショックを受けている。

友達なのに信用されてないのかって…

好きな人からそんな態度されたら秋人だって狂う。

そのこともあって春樹に当たってしまったのだ。

普段からそんなに思ってることを口に出さない秋人と、いつも楽しそうな春樹の2人だからケンカなんてしたことない。

殴り合いなんて絶対しない。

けど、本気で本音を言い合うこともしないのだ。

どこかでためてしまっている。

ふと秋人は鉄格子から昇れる場所を見上げた。

屋上には誰もいないけど、誰かが鍵を開けたのだからいるとしたらあそこだろう。

なんとなく、春樹かもしれないと思って秋人は鉄格子を昇って上へ行ってみた。

案の定春樹は気持ち良さそうに寝ている。

「…頬腫れすぎだろ」

秋人はそっと腫れている頬に触れた。

そして、数秒してから鉄格子をおり、屋上から出ていった。

春樹がいるのを知って居づらくなったのかと思いきや、１０分もしないうちに秋人はまた屋上へ戻ってきた。

手には保健室でもらったらしきシップが。

再び鉄格子を昇って上へ行き、春樹の隣に座った。

そして春樹の左頬にシップを貼って、一言

「ごめん」とだけ言って屋上から出ていった。

今度はもう屋上へ戻ってくることはなかった。

next

第２５話【元通り】

「結局２人とも帰ってこなかったね」
「…うん」

午前の授業が終わり昼休みに入った。

昼休みに入ればいつも４人で昼食を食べるのに今日は春樹も秋人もいない。

けれど秋人がいないことに少しだけ安堵している夏実がいる。

麻冬はたまには違うとこで食べない？と夏実を人気の少ない裏庭の噴水前のベンチに連れてった。

夏実はなんでこんなところ？と当然麻冬に尋ねた。

麻冬はお弁当を広げながら、真剣な顔で言った。

「昨日何があったのよ」

夏実は麻冬に隠す意味もないけれど、どうにも言いづらくてなかなか言えないでいる。

そんな夏実に麻冬は
「輝樹が何かしたの？」と言った。
夏実は一瞬ビクッとして麻冬の顔を見た。

麻冬は起こってるような、泣きそうな表情を見せた。

「え……麻冬？」

なぜ麻冬がそんな顔をするのか分からない夏実は、
「どうしたの？」と心配そうに言う。

「…なんで春樹と秋人がケンカするのよ？なんであたしには何も言わないのよ」
「は、ケンカ…？」
「輝樹に何かされたってのなら予想ついちゃうじゃないのよ！」

麻冬は勘が良い。

輝樹
守れなかった
男性不信

これくらいのキーワードが揃えば普通に何されたのか分かる。

麻冬が悔しいのは、秋人と春樹が夏実を巡ってケンカしたことなんかではない。

そういう悲しい現実を同性である自分に言わないことが悔しくてたまらないのだ。

「…だって……」

夏実はうつむいた。

「もっと信用してよ！じゃなきゃあたし夏実守れないじゃない…」

麻冬はさっき夏実が男子生徒を助けなかったときに「見損なった」なんて言ってしまったことを後悔している。

知らなかったとはいえ、夏実にひどいことを言った。

知らないじゃすまされない。

「麻冬…」

夏実は持っている缶コーヒーをグビッと飲んで、落ち着かせてから話し始めた。

昨日春樹の家へ行った理由。

春樹が食事の支度をしてる間春樹の部屋で雑誌を読んでたら輝樹が入ってきたこと。

輝樹にされたこと。

だけど途中で春樹が来て輝樹がやめたこと。

春樹が輝樹を殴ったこと。

夏実は麻冬に事細かに説明した。

「ひど……輝樹の奴」

「…でもまぁ、最悪春樹が来てくれて良かったよ」

夏実は弱々しく笑った。

「夏実…」

麻冬は夏実に何て声をかけたら良いのか分からなかった。
けどとにかくホッとしたことは、最後までやられなくて良かったってこと。
それだけが救いだ。

「夜輝樹と話もしたし、あのあと春樹が家に来て康介と喋ってるときあたしも混ざったけど平気だったの」
「うん」
「でも…今朝秋人が声をかけてきたときあたし全身で拒否した」

麻冬は意外な言葉に
「えっ?!」と声を上げてしまうが、すぐに
「あ…ごめん」と謝った。
夏実は首を横に振った。

「あたし謝られるようなことしてない。むしろ秋人に謝んなきゃなんない…」

麻冬は秋人とは当然普通に接していると思っていたのだ。
夏実は秋人だけじゃなく、バド部の男子に声をかけられたときも上

手く答えることができなかったんだと付け足した。

男子を避けているんじゃなく、男子を怖がっているんだと麻冬は初めて知った。

「秋人にね、なんで輝樹と同じ顔の春樹は避けないんだよって言われた」

「あ、言われてみれば」

「春樹だけはなぜか大丈夫なんだよ。その場にいたからか助けてくれたからか…」

「好きだからか？」

麻冬は夏実が言おうとしなかった言葉を言った。

夏実は一瞬麻冬の顔を見て

「分かんない…」と呟いた。

好きなのは事実だ。

けれど、好きだから春樹だけは大丈夫なのかってことは分からないでいる。

「…でも、そっか。で、あんたはどうしたいの？」

麻冬はお弁当の蓋を開けて、ご飯を食べ始めた。

夏実はそのお弁当を細目で見ながら、

「どうって？」と聞き返した。

このときちょうど、雨がパラパラ降ってきたから2人はお弁当を持って校舎へと駆け込んだ。

裏庭は芝生とベンチ側に植え込みを境にして分かれてる。

植え込みは1メートルくらいの高さがある。

そんな中、その芝生のほうで寝そべっていたのは秋人だ。

屋上には春樹がいたから他の人気の少ないところを選んでみたら裏庭になったらしい。

ずっと寝ていたが昼休みに入って人の声が聞こえてきてうっすら起きると、夏実と麻冬の会話だった。

だいたいのことは春樹から聞いていたけど、でも春樹も夏実が何をされたかまでは知らないと言っていたから夏実の話を聞いて少しだけ安堵した。

雨が少し降ってきたせいで2人の会話を最後まで聞くことはできなく、濡れるから秋人も校舎へと入って行った。

屋上で昼寝していた春樹もまた、雨に気づいてバッと起き上がった。

いきなり起き上がったことで頬に衝撃が走ったが、多少ひんやりしていることに気づいて頬に触れてみるとシップが貼ってある。

「…秋人？」

春樹の記憶の中では、屋上に来たのは秋人だけ。

でももしかしたら寝ている間に秋人以外にも誰か来て優しいその人が貼ってくれたのかもしれない。

そんな予想もできるのに、春樹は絶対に秋人だと確信した。

証拠も保証もないけれど。

そして春樹は鉄格子でおりて屋上から出ていった。

秋人と春樹はまだ昼飯を食べていないから、2人とも教室へ向かったのだ。

春樹のが先に教室について、カバンからお弁当を取り出した。

「春樹、頬やべぇぞ」

男子たちが駆け寄った。

「え、そぉ？まぁこれは男の勲章ってとこかな」

「ばっか！」

そんな会話をしてると、秋人も教室に入ってきた。

「おー秋人。お前授業サボりすぎっしょ」

「そ？」

「まぁ授業サボってもできるとこがずりぃけどな」

春樹は教室に入ってきた秋人をじっと見た。

春樹の視線に気づいた秋人も春樹をじっと見た。

クラスの人たちは、朝2人がケンカしたばっかりだからまたするんじゃないかとヒヤヒヤしている。

そんな不穏の空気の中、秋人は春樹のところへと歩き出す。

そして春樹の頬にデコピンをした。

「いいったぁぁあぁぁ〜！！」

春樹はクラス中に響くような声で叫んだ。

男の勲章だなんて言っときながらそれだけ腫れてれば触っただけでもかなりの痛みだ。

デコピン（ホホピン？）なんてされたらたまったもんじゃない。

「秋人っ！お前なぁっ！！」

痛みのせいで半泣きで怒る春樹に秋人は、春樹の手を引っ張った。

「ちょっ…」

秋人は自分の席にあるカバンの中から弁当を出して春樹の手を引いたまま教室を出ていった。

クラスの人たちは何がなんだか分からない様子だけど、なんとなくその光景からケンカをするわけじゃないことが読み取れてどことなくホッとした。

夏実と麻冬は教室に戻ってくることなくラウンジで食べているわけだ。

2人もラウンジに向かうが、ラウンジは広く人もたくさんいるため夏実と麻冬がいるなんて2人は気づかないし夏実たちも気づかない。

秋人が空いてる席を見つけて座り、その隣に春樹が座った。

秋人は淡々と弁当を広げて食べ始めた。

つられて春樹も弁当を広げる。

「…夏実」

秋人はおかずを食べながら言った。

「え？」
「夏実、最後までされてないって」
「…え…」
「お前が来たから大丈夫だったんだって」

いきなりの秋人の言葉に春樹は驚いた。

春樹は、ならどこまでされたの？と聞くと、秋人は春樹の耳へコソコソと言った。

「…そっか…」

春樹は少し照れるような、そして安心したような、悲しそうな顔を見せた。

「…悪かったな」
「え、なにが？」
「お前なりに守ってたのに殴って」

秋人は春樹の頬を見た。

春樹はチラッっ自分の頬を目で見て、
「なんてことないよ、こんなの」と笑った。

そんな春樹を見て秋人も少しだけ微笑んだ。

「でもなんで秋人が…」
「さっき麻冬と夏実が喋ってるとこ偶然聞いた」
「そっか」

2人が仲直りすることで夏実が報われるわけじゃないけど、でもケンカしてるよりはずっと良い。

2人はその後も、まるで何事もなかったかのように会話を弾ませながら弁当を食べて、昼休みを終えたら教室に戻って行った。

next

第２６話【合奏】

夏実が男性不信に陥ったと3人が知った日から、もう数日経つ。

夏実は相変わらず元気だけど、男子たちには近づかないし向こうからも近づいてこない。

日頃の恨みを持ってる不良だとかいるだろうけど、夏実に何もしてこないのはバックにあの3人がいるから。

特に秋人を敵に回そうとする人なんかはいない。

夏実は知らないうちに3人に助けられてる。

それでも、一番に秋人に救われてるとしても秋人だけは何日経っても関わらない。

秋人も必要以上に夏実には関わろうとはしない。

「あ、あの…秋人…」

数学の時間、隣の人同士でプリントの答え合わせをするとき夏実が怯えながらも必死に秋人に話しかけた。

秋人は「あー、はいはい」と夏実のプリントを受け取った。

俺のはしなくて良いよ、と付け加えて。

採点し終えて夏実にプリントを返したら秋人は漫画を読み始める。

「あ、ありがと…」

秋人のプリントを渡さないのは、秋人は満点取ってると分かってるからというのも一理あるかもしれないけど、夏実との接触を少しでも避けるため。

秋人は夏実が傷つくなら、と自ら夏実から遠ざかっている。

そんな秋人に夏実は切なそうな顔をした。

夏実は本当は前みたいに秋人と一緒に楽しく話したい。

けれどどこからかやってくる恐怖心に打ち勝つことができない。

そんな2人のやりとりを麻冬は遠目で見ていた。

今までのように4人で行動することはなくなった。

夏実と麻冬　春樹と秋人
夏実と春樹　麻冬と秋人

このペアでしか動かなくなってしまった。

必然的に。

ご飯だって４人一緒では食べない。

最初は秋人だけがいなくなろうとしたけど、春樹が秋人を１人になんかしないと言って秋人のそばへ行った。

前みたいなワイワイした楽しい空間は表面的にはあっても内容的にはなくなってしまった。

「あーきと」

ある休み時間、夏実が隣にいないのを見計らって麻冬が秋人の席に行った。

「ん？」

秋人は耳からイヤホンを外す。

「今日自主練してく？」

「おう」

「じゃああたし待ってるから一緒に帰ろ」

「あれ、今日水泳補講…」

「良いの。絶対絶対だからね」

「？ああ」

麻冬はそれだけ言って自分の席に戻った。

秋人は再びイヤホンをつけて音楽を聞き始めた。

トイレから戻ってきて席についた夏実に目もくれずに。

秋人は夏実のためにと思ってやっているのかもしれないけど、夏実にとっては秋人にそうされることはさらに傷つくことだ。

確かに話しかけるたびにビクビクされてたら秋人だっていい加減うんざりかもしれない。

実際傷ついているのは秋人のほうだ。

特に昼休みの夏実と麻冬の会話を聞いてからは不安さえ募る。

――その場にいたからか助けてくれたからか…――

――好きだからか？――

最近春樹のほうがずっと夏実のそばにいて夏実を助けている。

夏実が別れたときだって慰めたのは春樹だし、今回だって結局春樹のおかげで助かったようなものだ。

春樹にだって麻冬にだって不満も不安もこぼせない。

愚痴れる人がいない秋人だって精神的に辛いはずなんだ。

だけど、だからといって夏実がいつ治るかなんて誰にも分からないしどうすることもできない。

春樹が笑ったって

麻冬が泣いたって

秋人が辛くたって

夏実が動かなきゃ、始まらない。

この日も授業を終えて、放課後になれば夏実と春樹は体育館へ向かう。

今日は練習がない秋人は自主練するためグランドへ行き、授業の水泳補講があるからプールが使えない水泳部も休みだ。

麻冬は秋人を待つため、教室に残る。

おそらく1時間半くらいは自主練するだろうから、暇だし麻冬は校舎内を歩いてみることにした。

ここの文化部は週一くらいしか活動してないから、校内での部活はほとんど行われてない。

「あー、そうだ」

麻冬は方向を変えて、階段を上り音楽室へと向かう。
吹奏楽部も練習してないし放課後は音楽室は空いている。
音楽室についた麻冬はドアを開けた。

「あれ…阿笠？」

麻冬が声をかけると、阿笠が麻冬のほうを振り向いた。

「麻冬。あー、ピアノ弾きに来た？」
「うん。阿笠は何してるの？」
「いやさ、俺んちクラスピアノの他にフルートとか入れることになって」

阿笠は譜面を見ている。
そういえば音楽祭も近い時期だ。

「そっか、阿笠フルート吹けるもんね」
「つってももう小６でやめたんだけどね」
「え～趣味で吹いてるじゃない」
「そー、ほんとただの趣味程度だから失敗しそうで怖い」

ついこの間まではギクシャクしていた2人も、麻冬が「迷ってるから待っていて欲しい」と言ってから少しずつ前みたいな関係に戻りつつある。

とはいってもまともに会話するのは本当中学以来。

「阿笠なら大丈夫だよ。あたし保障するし」

麻冬はニコッと笑った。

そんな麻冬を見て、阿笠も優しく微笑んだ。

麻冬は「あたしに気にせずやっててよ」と言ってピアノの椅子に座り、蓋をあける。

そこらへんにある楽譜を適当に見て何にしようか迷っていると、阿笠が曲を吹き出した。

趣味程度でもずっと続けていたおかげで、その音色はとても綺麗だ。

「…時の旅人」

麻冬はポツリと呟いた。

阿笠は麻冬のほうを見て目で笑い、吹き続けた。

阿笠が吹くのは前奏と中盤の大サビと最後の3回。

それ以外は歌うらしい。

ピアノとフルート、そして3音階に分かれた歌声が合わさったらきっと美しい音が出るに違いないと麻冬は思った。

こうして練習している阿笠を見て、自分もやっぱり伴奏やれば良かったな、なんて思う麻冬がいる。

そのうち阿笠は吹き終え、フーッと息を吐く。

「すっごいじゃん！綺麗綺麗！」

「ほんと？良かった」

「これなら問題ないんじゃない？」

「麻冬は伴奏やんないの？」

「んー…今回はね」

そして、阿笠は麻冬に「時の旅人弾ける？」と尋ねた。

麻冬は「弾けるけど…なんで？」とキョトンとする。

阿笠は、中盤の部分の入り方がいまいち微妙だからちょっとやってみたいんだと言った。

麻冬もそういうことなら協力するよと答えた。

「じゃあここから弾いてもらって良い？」

阿笠はピアノ用の楽譜を麻冬に渡して説明した。

麻冬はオーケーと言い、合図をして演奏し始めた。

最初はフルートの入り場所もたどたどしかったけれど3回もやると、阿笠は完璧に入れるようになった。

もうそのあとは2人で合奏を楽しんでいる。

慣れてくるとちょっとアドリブ入れてみたり、麻冬が歌も歌ってみたり阿笠も一緒になって歌ってみたりしている。

音楽室という狭い空間に広がる、楽しい空間。

幸せな　空間

「あっは、楽し〜！」

麻冬がすごく良い笑顔で言った。

「珍しいね、麻冬がそんなに喜ぶなんて」

阿笠は笛を置いてから麻冬に軽く問いかけた。

麻冬は上目をして

「んー…」と少し考える。

「そうかも。ここ最近あんま楽しくないってゆーか…ね」

「へぇ？それこそ珍しい。いつも秋人とか夏実ちゃんとか櫻井と楽しそうに……あっ」

阿笠は自分で喋っている途中で麻冬の言っている意味に気づいた。

「今夏実ちゃん大変だもんな」

「うん…でね、春樹には平気なのに秋人はだめなの。夏実」

「えっ」

阿笠も噂で夏実のことを知っている。

数日も経っているのだから学校中に広まるのは仕方ないことかもしれない。

麻冬は時の旅人の楽譜をじっと見つめながら、少しだけ神妙に言った。

「ねぇ、例えばね。例えばの話なんだけど…」

「うん？」

「好きな人に避けられたらどうする？」

阿笠は少し驚いた顔をしたが、すぐに考え込んで麻冬の質問に答えた。

「…何もしないで避けられたまま時は過ぎていつか離れちゃうな」

「やっぱりそうなるのかな…」

「てゆーか、その人にもよるけどね」

阿笠の言葉に麻冬は

「えっ」と声を上げた。

阿笠は少し照れたような表情をしながら、麻冬から視線を反らす。

「…俺はそうだった」

阿笠は呟いた。

けど麻冬の耳にはしっかり残って、麻冬は少し顔を赤らめる。

「阿笠…あの、…」

麻冬はなんと言葉を返したら良いのか分からずどもる。

阿笠はフッと微笑んで、

「気長に待つから良いよ」と言った。

優しい阿笠

息だって合うし、とても愛されている

欠点なんか見つからないし、あっても嫌いになんかなれない

言うことなしなのに

阿笠の気持ちに簡単に答えることができないのは、一体なぜ？

なにに迷って

なにに戸惑っているのか。

「…うん。ありがとう」

それでも

今は秋人を救いたいって気持ちが勝っている。

なぜ？

友人だから？

好きだから？

好きだから…

next

第27話【秋人の本音】

「秋人先輩っ」

秋人が自主練をしていると、誰かが声をかけてきた。

秋人はボールを足で止め、振り返る。

「だれ」

そこには制服姿の見知らぬ女の子が2人立っていた。

「1年の小坂です。先輩今彼女いないんですよね？」

「…まぁ」

「じゃああたしと付き合ってくれませんか？」

内心少しキレている秋人は

「はぁ？」と嫌そうな声を出した。

それにも関わらず女子生徒はキャピキャピしながら

「入学当初から目立ってて気になってたんですよ～」と言った。

どうやらもう1人の女の子はただの付き添いのようだ。

「目立ってたから？」
「はい！」
「なら春樹で良いじゃん」

秋人はそう言ってそっぽを向いて、リフティングをし始める。

「あ、この子は春樹先輩が好きなんですよー」
「ちょ…喜美ちゃんっ」

秋人の嫌味も通じず彼女は意気揚々と言う。

さすがの秋人もうっとおしくなったのか、リフティングをしながら「俺好きじゃない奴とは付き合わないから」と言った。

そしてポーンと少し前めに高くボールを蹴り上げ、軽く走ってゴールに向かってロングシュートをした。

ゴールの中に入ったボールを取りに向かうと、さっきの女子が秋人の隣に並んで歩いた。

「好きになってくれれば良いんですよね？」
「それはない」
「好きな人いるんですか？」

「さぁ」

なんともしつこい女だ。

女子生徒は秋人より先に小走りしてボールを拾って、秋人に差し出した。

「…俺さ、しつこい人嫌いだから」
「？はい」
「…」

秋人は軽くため息をついた。

そしてボールを受け取らずに向きを変えて部室のほうへと歩き出す。

ボールいらないんですか？と彼女が言ってきたから、
「練習する気なくなった」とだけ言ってさっさと歩いて行く。

秋人は部室に入って、麻冬の携帯に電話をかける。

何回かコールしたあと、麻冬が電話に出た。

『秋人？』

「終わった」
『あ、はやかったね。じゃあ今から向かうよ』
と、麻冬が話している向こう側からフルートの音が響いている。
笛？と麻冬に尋ねると、
「あぁ、阿笠が吹いてるのよ」と言った。
「へー」
阿笠と一緒なのか、とちょっと面白く思ったけどあえて何も言わずに
「じゃあ」と電話を切る。
相変わらず愛想のない電話。
それでも、秋人が女子とまともに喋るのは今は麻冬だけだ。
もちろん女子からいろいろ話しかけられるんだけど、ミーハー気分の女子はたいていシカトする。
秋人は今着ている運動着から制服に着替え始めた。
それはそうと、そのときさっきの女子2人は秋人が部室から出てく

るのを待っているようだ。

春樹を好きなほうの女子は「止めようよ」と言うけれど、強引女はどうにも秋人を手に入れたい様子だ。

外見も可愛いほうだしそれだけキャピキャピしてれば他の男なら簡単に落ちるだろうのに。

秋人が着替えるより先に、麻冬は校舎から出てきた。

音楽室に荷物は持っていってたからそのまま階段を降りるだけだから早いのだ。

外部の部室が並んでいるらへんまで来て、麻冬はサッカー部の部室の前に女子がいるのに気づいた。

どう見てもサッカー部の部室から出てくる人を待っているようだが、今日は練習ない日なのに秋人以外に練習してた人がいたのか…と麻冬は思った。

「あっ、麻冬先輩！」

強引女が叫んだ。

叫んだことで秋人はまださっきの女子がいることに気づき、部室から出るのを躊躇している。

「えーと、誰かな？」

「1年の小坂と大橋です。わ～っ、やっぱり綺麗です！」

「ふふ、ありがと」

麻冬が誰か待ってるの？と尋ねると、強引女は秋人先輩を待ってるんですと答えた。

自分と約束していたはずの麻冬は驚いて、

「そうなの？」と言うと小坂はさっき告白したことを細かく説明し始めた。

可哀想に秋人はもう支度を終えているのに出るに出れない。

「どうしたら付き合ってもらえますか？」

麻冬も詳細を聞いて、内心うざい奴だな、なんて思っている。

「きっと一生ないわよ」

麻冬は軽く笑いながら言った。

「秋人は諦めたほうが良い。それに今からあたしと一緒に帰るの」
「ど、どういうことですか?!」
「あなたみたいな子って秋人の嫌いなタイプなの」

麻冬は躊躇することなくズバッと言った。

真実だから仕方ないことかもしれないけど。

そのとき、部室のドアが開いて秋人が出てきた。

「秋人。お疲れ〜」

麻冬が微笑みかけると、秋人もわざと笑顔で
「おう。待たせたな」と言った。

そんな笑顔滅多にしないし、さっき女子生徒にした態度と麻冬にしている態度を見比べれば、望みがないことを示せる。

2人はアイコンタクトもせずにそれをやってのけた。

「先輩…笑顔…」

女子生徒は少し驚いた顔をしている。

「あー、これは麻冬と夏実使用。もしくは好きな奴。あんたにはできない」

秋人がそう言ったことで、ようやく脈がないってことに気づいて女子生徒はトボトボと帰って行った。

いなくなったのを見届けてから、秋人はフーッと息を吐いた。

秋人もああいう自己中な女だけは絶対に受け付けない。

だけど麻冬は、あの子に「あなたは秋人の嫌いタイプ」と言っておきながら自分で切なくなっている。

あの笑顔だって作り物で、あんな顔は麻冬にすら見せない。

麻冬と夏実と好きな奴…

つまり夏実にしかしないと言っているようなものだ。

秋人と麻冬は、ゆっくりと歩き出した。

「なんか用があるとか？」
「え？あ、うん」

2人も自転車通学だけど、特に麻冬は歩きも多い。
今日は秋人も珍しく歩きだから、久しぶりに2人で仲良く歩いて帰る。

今日麻冬が秋人を誘ったわけは、秋人の夏実に対する態度に疑問を持ったから。
夏実を避けたんじゃ夏実が可哀想ってこともあるけど、夏実にあんな態度を取らなきゃいけないでいる秋人の心配をしているのだ。

2人なんてほっておけばきっと秋人は夏実を好きじゃなくなるかもしれないのに。

それでも今、2人が辛いのが麻冬には耐え難いのだ。

「…夏実のこと避けてるね」

麻冬がそう言うと、秋人は物怖じせずに
「ああ」と返事した。

「なんで？なんで…だってさ…」
「夏実が俺を怖がるから」
「だけど…」
「それ以外に理由はないだろ」

麻冬はそうだけど…と小声で呟いた。

そして付け足して、
「それじゃ秋人が辛いでしょ…」と言った。

秋人は一瞬麻冬のほうを見て、そして軽くうつむいた。

「…辛くねぇよ」

精一杯の秋人の強がりだ。

辛くないなら、なぜ堂々と前を向いて笑わない？

辛くないはずがないんだ。

そのことは、麻冬が誰よりもちゃんと分かっているから。

「秋人の弱虫」

強がる秋人に、麻冬はムッとしながら言った。

は？と秋人は振り向いた。

「夏実に拒絶されるのが怖いだけじゃない！」

麻冬は声を上げて言った。

「前みたいに戻れる努力をなにもしてない！！」

麻冬の言葉に、秋人は何か言おうとしたけど止めた。

秋人にも言い分はあるだろうけど、言わなきゃ伝わらない。

「あたしは４人で一緒にいたいの…秋人が頑張ってくんなきゃどうにもならないよ」

麻冬は足を止めてそう言った。

さっきまで怒っていたのに、今度は切なそうな顔をしている。

秋人も足を止めて、麻冬のほうを軽蔑するように見た。

「…頑張る？」

秋人の冷たい声が路上に響く。

「春樹も周りの奴らもみんな頑張れって言った」

「あき…」

「…頑張ったんだよ。それでも最初はどうしたら怖がられずにすむか考えたんだよ！」

周りにいた人たちも秋人の怒鳴り声でシーンとなる。

みんなコソコソと話しながら秋人と麻冬をジロジロ見ている。

「今まで生きてきた中で一番悩んだんだよ！」

秋人はもはや我を失っている。

おそらく積もり積もっていたものが爆発したんだろう。

「それでも夏実は俺の顔見るだけでビクつくんだ！…どうにもでき

ねぇんだよ！！」

麻冬は何も言えない。

秋人は麻冬が想像していたよりももっとずっと精神的にまいっている。

「これ以上どう頑張れって言うんだよ！」

秋人は本当に夏実が傷つかずにすむ方法を考えていた。

どんな風に接したら、どんな態度をすれば怖がらずにいられるのかたくさん考えて実行して、それでもダメだった。

だから、せめてあまり関わらないようにして夏実を守ろうとしていたのだ。

４人が仲良しなのを知ってる学校中のみんなが、夏実が秋人までを怖がるのを知って秋人に励ましの声をかける。

だけどどんな素敵な励ましの言葉でも秋人を癒すことはなく、逆に傷つけていた。

頑張れって言葉ほど残酷なものはない。

「…ほっといてよ。勘弁してくれよ、もう」

秋人は髪の毛をクシャッとして、そして走って帰って行った。

取り残された麻冬は、秋人の姿が見えなくなってもずっとずっとその場に立ち尽くした。

力になりたいと思っていたのに、言いたいことは言えずにおまけに結果的に秋人に追い討ちをかけてしまった。

救えるのは自分しかいないと思っていた麻冬は、悔やみばかりが残る。

トボトボ歩き出しても、涙こそは出ないけれども、秋人の最後の辛そうで悲しそうで泣きそうな顔が目に焼き付いて、離れなかった。

next

第２８話【選んだのは…】

秋人は走って家に着き、親が食事の支度をしてくれてたのにも関わらず自分の部屋へと駆け込んだ。

乱暴にカバンを放り投げ、ドサッと座り込んでテレビをつける。

ろくなテレビがやってなく、すぐにブチッと切った。

母親が階段下から
「ご飯いらないのー？」と叫んだから、いらないとだけ答えてドアを閉めた。

「…ちくしょ」

秋人はもたれるように座り、頭を抱え込んだ。

麻冬に怒鳴ってしまったことへの後悔と、本音は隠していたかったのに言ってしまったことの後悔。
天才だけど努力する人。
秋人といえばそんな人間。

よく１％の素質と９９％の努力と言うが、どんなに才能ある人でもやらなきゃできるはずがない。

天才は天才と呼ばれる努力も裏でしている。

その通りに秋人は今回のことだって努力した。

けれども実らない努力だってあるんだ。

「あー…課題」

秋人はサボった授業のうち物理に課題が出ていることをクラスの友達に聞いていた。

カバンの中からプリントを取りだし、問題に一通り目を通して筆箱を取りだしスラスラと問題を解いていく。

けれど途中でペンが止まる。

いつもならこんな問題すぐに解き終わるけど、イライラしているせいで頭に入ってこない。

麻冬に言われたことを頭の中で回想しては、切ない顔を見せる。

麻冬が４人でまた一緒にいたいと願っているように秋人だってそう思っている。

頑張れなんて言われなくても、十分頑張っている。

秋人が怒鳴ってしまったのは無理のないことで、むしろ麻冬のほうが少し無神経かもしれない。

秋人のことを心配してああ言っているのだとしても、あれじゃあまるで秋人が何もせずにいたみたいに感じられる。

秋人にこれ以上望むことは秋人自身への拷問だ。

それでもやっぱり夏実自身が治せないというのなら、秋人しか頼める人はいない。

そもそもなぜ麻冬が秋人にそう言ってきたかと言うと、そこには理由があった。

昼休みに夏実と麻冬が裏庭でご飯を食べていたときに雨が降り、２人はラウンジへと行った。

雨が降り出す直前、

「夏実はどうしたいの」と言った麻冬の言葉を麻冬はラウンジでも

う一度言った。

『…このままじゃだめなの、よく分かってる』
『なら、どうにかしなきゃ』
『だけどどうしたら良いか全く分からないんだよ』

夏実もどうにかしたいという気持ちはあるようだ。
ただそのどうにかするために何をしたら良いのか分からないでいる。

『…秋人が気の毒なのよ』

麻冬は切なそうな顔をした。

そんな麻冬を見た夏実は、少し罪悪感にかられているよう。

夏実も秋人は大事な友達なわけで、麻冬が望むように４人で一緒にいたいのは山々だ。

『…なんで秋人すら怖がっちゃうんだろ』

そう言った夏実の肩は震えていた。

夏実とて秋人のことはちゃんと考えているのだから、そんな夏実を責める言葉なんて麻冬にはちっとも浮かばなかった。

このとき、夏実がこうなら秋人に頑張ってもらうしかないと思ったのである。

麻冬の相手の気持ちを思いやる気持ちが逆に、夏実を追い詰め秋人を傷つけることとなってしまった。

その頃麻冬は重い足を引きずって歩いていたけど、なにを思ったのか向きを変えて今歩いてきた方向へと駆け出した。

理由は分からない。

とにかく学校へ向かった。

何を思ったのか何を考えたのか…

正門を越えるとロータリーの傍らにグランドがある。

今日はサッカー部は練習が休みの日なのに、ボールを蹴っている人がいる。

阿笠だ。

ついさっきまで麻冬と一緒に音楽室にいたが、麻冬が帰ったあと着替えて練習をしていた。

麻冬は阿笠を見つけて立ち止まり、阿笠が練習している風景を眺めた。

少ししてから、なぜか阿笠を待とうとグランド横のベンチに向かおうとしたら阿笠が声をかけてきた。

「麻冬？秋人と帰ったんじゃなかったのか？」

麻冬を見つけて麻冬のところまで走ってきたのか、少しだけハァ…と息を切らした。

麻冬は何かを求めるような表情をしながら阿笠を見つめた。

それに気づいた阿笠は、
「なんかあった？」と優しく言う。

阿笠がそんな優しく言葉をかけるものだから、麻冬は溜め込んでいた涙をブワッと溢れ出した。

そして阿笠の胸に飛び込んで、服をギュッと掴んで少し声を出しながら泣き出した。

「ま…麻冬？」

阿笠は驚きつつも照れを隠せずにいる。

だけど今、この状況で阿笠は麻冬を抱きしめてやることはできない。

「う～……っ…」

付き合っている間、どんなに辛くとも阿笠に涙を見せることはなかった麻冬。

今こうしていとも簡単に泣けるのはなぜ？

阿笠はただただ胸を貸しているだけだ。

そのうち周りの人がジロジロと2人を見てくるものだから、阿笠は「あ…じゃあベンチ行く？」と、さっき麻冬が行こうとしていたベンチに麻冬を誘導した。

ベンチに座ってからもなお麻冬は泣き続けた。

あの強がりの麻冬が誰かに泣き顔見せるなんてよっぽどだと思った
阿笠は、息を飲んで穏やかな声で言った。

「…秋人となんかあったんだね、麻冬」

「――――――…」

麻冬は少し顔を上げて鼻をすすった。

阿笠には分かる。

なぜ、麻冬が戻ってきたのか。

なぜ…自分の前で泣けるのか。

「秋人のことが好きだったんだね」

優しい優しい阿笠の声。

麻冬は阿笠のほうを振り向くと、阿笠は優しく真剣な顔をしていた。

決して麻冬は好きな人の前で涙を見せたりしない。

あのとき…中学のときそうだったように。

なのに今阿笠の前でこんなにも泣いている。

「…中学のとき、俺の前で麻冬は絶対泣かないからいつか泣いて欲しいって思ってた」

阿笠は麻冬から一瞬視線を反らし、そしてまた麻冬に視線を移した。

「だけど今泣かれてもちっとも嬉しくなんかない」

「阿…」

「好きな奴のことで泣く麻冬をあやすほど俺優しくないよ」

阿笠はどことなく悔しそうな表情を見せた。

麻冬はいたたまれなくなって阿笠から視線を外す。

そしてハンカチで涙を拭いて、一言ごめんねと言った。

「…でも、やっぱ好きだから麻冬が悩んでるなら話聞くけど」

阿笠は照れながらそう言う。

麻冬はどうしようかためらったけれど、ポツリポツリと話し始めた。

きっと麻冬が阿笠のところに戻ってきたのは、優しく包んで欲しかったから。

自分のことを見てくれない秋人ではなく、自分を愛してくれる阿笠を選んだ。

「秋人…好きな人いるの。春樹と同じ……きっと春樹とその子両思いなの」

「…夏実ちゃんだね？」

「…夏実は秋人のこと避けてるし秋人も避けてる…だから、さっき言った」

「…なんて？」

麻冬は首を横に振る。

そして数秒してからさっきの秋人との会話を簡単に話した。

頑張れ、って言っちゃいけない言葉なんだと麻冬は初めて知った。

よく考えればそうだろう。

「悔しい…秋人のこと助けたいって思うのに傷つけちゃうし、秋人は絶対あたしを見てくれない」

涼しげな風が吹いた。

阿笠の髪と麻冬のウェーブが同じ方向へと揺れる。

まだ夏の名残が残っている季節…

夏実の季節。

それが終われば秋人の季節を迎えてしまう。

「麻冬」

広がる空間に、阿笠の声が響いた。

「そんなに辛いならやめちゃえば良い。思いなんて…いくらでも変えられるよ」

「阿笠…」

秋すら過ぎれば冬になる。

今年の冬は、麻冬にとってどんな季節となるか。

3年前のように切なく終わってしまうのか。

「俺を選べよ」

サァッ…と木が揺れた。

麻冬が見る阿笠の顔はいつになく男らしくて、麻冬の心にストンと入ってくる。

「…だめだよ。秋人がだめなら阿笠なんて…そんなの都合良すぎる」

「それでも良いよ。麻冬といれるだけで幸せだから」

秋人はきっとそんなこと言ってくれない。

どんなに側にいても、夏実を選んでる。

思っていても報われない。

だからって逃げたくはない。

秋人が好きだから。

それだけは隠せない。

好きだけど

好きなのに

「…あたしきっと阿笠に甘えちゃう。阿笠はそれでも良いって…絶対言ってくれる」

夏実のことであんなに傷ついてる秋人を目の当たりにして、勝ち目がないことくらいは歴然と分かってしまったんだ。

秋人を癒せるのは自分じゃないと、麻冬は思う。

「…でも、阿笠となら幸せになれるかもしれない」

麻冬は少しだけ微笑んだ。

なのに涙が浮かんでいるのはなぜなんだろう。

2人でベンチに座っている時間は、永遠かのように思われた。

next

第２９話【決意】

「ちょっとちょっと聞いた?!」
「聞いた!びっくりなんですけどぉー!!」

次の日にはもう噂は広まっていた。

夜２人が帰るときに麻冬に憧れてる同級生の女子たちになぜ一緒にいるのかと聞かれて、付き合ってるからと答えただけでこんなに広まるものか。

「相手は?!」
「サッカー部副部長!」
「え～っ阿笠くん?!」

麻冬はあの４人のうちの１人だから学校ではかなり有名だし、なおかつ阿笠も人気があるから簡単にバレてしまったんだろう。

夏実も春樹も朝練の時点では知らなかった。

ただ秋人だけは、阿笠から聞いていて知っていた。

『秋人』

練習後の部室で阿笠は着替えている秋人に話しかける。

『ん』

『俺麻冬とより戻した』

阿笠がそう言った瞬間、『えーーー?!』とかなり大きい声が部室に響いた。

だがそれは秋人の叫び声ではなく部室にいた他のサッカー部員たち。

『は…なん……』

『なんでって、お前が言える?』

『…どういう意味だ』

『昨日なにがあったか知らないとは言わせない』

秋人はピクッとした。

なぜ阿笠がそれを知っているのか、それはどうでも良い。

『…俺は本心を言っただけだ。俺にこれ以上のぞんだって何もできねぇんだよ』

『…うん。なら何もしなくて良いよ。何かしたら麻冬が君のところに戻るかもしれないから』

阿笠の意味不明な言葉に秋人は、え?と不思議そうな顔で聞き返したけど阿笠は『じゃあ先行くね』と荷物を持って部室を出て行った。

残された秋人は阿笠の言葉の意味を考えようとしたけど、時間がないことに気づき秋人もさっさと支度を始めて部室を出た。

秋人が教室に着いた頃には春樹と夏実ももう来ていて、噂を知った直前だった。

春樹が秋人に
「麻冬が阿笠と元サヤって…」と最後まで言い終わらないうちに秋人は
「知ってる」と答えた。

そのうち麻冬も朝練から戻ってきて、違うクラスや違う学年の人まで集まってきて麻冬を取り囲んだ。

麻冬はどことなく寂しそうな顔をしている。

「ほっといて…くれませんか?」

あの麻冬が悲しそうにそう言ったものだから、騒ぎ立てていた人たちは一瞬にしてシンとなった。

そして付け加えて、
「あたしが誰かと付き合ったらおかしいですか?興味本位はやめて」
と言った。

言葉はいつもと同じだけど、今日の麻冬は毒舌というより本当にかよわい女の子という口調。

そんな麻冬に聞き返すことができなくみんな自分のクラスへとゾロゾロ帰って行った。

ホッとした麻冬も自分の席に着いて、やり忘れていた物理の課題をやり始めた。

「麻ー冬」
「あ、夏実。おはよ」
「おはよ。珍しいね、課題やってこないなんて」
「えへ、ちょっと夜は考えごとしてて」

笑ってそういう麻冬に、
「考えごとって阿笠くん?」と尋ねた。

麻冬は、阿笠だけど阿笠じゃないかも…と矛盾した答えを言う。

そんなとき、秋人が麻冬の席に近寄ってきた。

「…阿笠に聞いた。付き合うんだって？」
「あ…うん」

2人の間に流れる不穏な空気。

あんなに気にしていたのに、もはや秋人の視界に夏実はいない。

秋人と麻冬がつくる2人の世界を夏実は変に思う。

「俺が関係してる？付き合うって決めた理由に」
「え…なんで…」
「…なんとなく」

なんとなくとは嘘だ。

どうみてもさっきの阿笠の言葉を気にしてる。

だけど麻冬は、
「違うよ。あたしが勝手に…決めたの」とうつむきながら言った。

麻冬は今どんな思いだろう。

どんな思いで阿笠の告白を受け入れ、どんな思いで秋人と会話しているのか。

「…そう」

秋人も何を考えているのか。

秋人が好きなら付き合えば良いと言ったのに、なぜそんな切ない表情を見せるのか。

「見れば」

秋人は麻冬の机の上に物理の課題プリントを置いた。

「え…」

「昨日はごめん」

「あ、あたしの方こそ…」

秋人はそれだけ言って席に戻って行った。

昨日秋人も手をつけられずにいた物理の課題。

けれどしっかりと最後まで答えは埋まっていて、さすがは天才間違いすらない。

麻冬は秋人のプリントをそっと手に持ち、しばらくの間眺めた。

「秋人と何かあったの？」

2人のやりとりを見ていた夏実が尋ねてきた。

「ううん、ちょっとね」

「そう？」

そして朝のＳＨＲが始まるから夏実は席に着き、麻冬はＨＲ中もせっせと課題を写す。

ＨＲを終えるとすぐに麻冬は秋人へプリントを返しに行った。

すると秋人は何か言いたそうな仕草をしている。

「秋人？」

秋人は麻冬を教室の後ろのほうに呼び出して、話した。

「どしたの？寝なくて平気？昨日寝れなかったんでしょ？」
「え？」
「ほら、目の下にちょっとだけクマできてるもん」

麻冬はフフッと笑った。

そんなところまで見ているなんて、普通誰も気づかない。

だけど麻冬は常に秋人を視線で追ってしまっているから、阿笠と付き合うと決めた今も自然と秋人を見てしまう。

「あの、さ」

秋人は言いにくそうな顔をする。

「俺が口出すことじゃないけど…好きな奴はもう良いの？」

麻冬は秋人の意外な言葉に目を丸くして驚いた。

「いや、それでも阿笠を選んだんなら別に良いんだけどさ、なんか迷ってたから」

秋人は自分が誰と付き合おうと興味ないだろう、なんて思っていた麻冬にとって秋人のこの言葉は予想外だ。

心配してくれることに関しては嬉しいけれど、そんな心配なぞされたくはない。

「…なんでこんなときばっかり優しくするの」

麻冬は床を見つめながら、秋人には聞こえないくらい小さな小さな声で呟いた。

当然聞こえてない秋人は
「なに?」と聞き返す。

「…うん。それでも阿笠を選んだの。阿笠なら…幸せにしてくれそうな気がして」

麻冬はそう言いながらも泣きそうになった。

けれどグッと堪える。

「幸せにして欲しいんだ?麻冬は」

「は…？」
「幸せって自分から掴むもんじゃないの」
分かってない秋人に、麻冬は憤りさえ覚えた。
どんなにしがみついても掴めないから、自分を掴んでくれる人を選んだのだ。
「秋人さ…これ以上どう頑張れって言うんだ…って昨日言ったね」
麻冬は口元に笑みを浮かべる。
そして秋人の顔を見上げた。
麻冬のその顔は、必死に笑顔を作っていながらも悲しさや悔しさをいろいろ我慢している表情をしている。
「その言葉…そっくり返すよ」
麻冬はそれだけ言って教室を出て行った。
「ちょ…麻冬？！」

秋人が呼び掛けても麻冬は振り向かなかった。

何が何だか分からない秋人は、とりあえず席に着くことにした。

「ケンカ？」

席に着いた秋人に話しかけたのは夏実だった。

「…えっ」

秋人は驚きの表情を隠せずにいるけど、よく見るとやはり夏実の肩は震えている。

「…ごめん、正直まだ怖い。だけど昨日麻冬が…」

夏実はラウンジでした麻冬との会話を話した。

そのことで、麻冬が昨日なぜ秋人にあんなことを言ってきたのか秋人は理解した。

麻冬はただ単純に４人でいたいだけなんだ。

秋人を責めるためにあんなことを言ったのではない。

予鈴が鳴る少し前に麻冬は教室に戻ってきた。

秋人は麻冬をじっと眺める。

「…麻冬……」

慈しむように麻冬を見る。

そして、今度は自分の手のひらを見た。

その仕草はまるで、俺にも何かしてやれることが他にもあるんじゃないか…と言っているようだった。

next

第３０話【頑張る、とは】

いつもの日常
いつもの空間

けれど、まったく歯車がかみあわない。

変わらないはずなのに、みんないろんなことを心に秘めている。

「あーかさっ」

ある休み時間、春樹が阿笠のクラスへ遊びに行った。

教室のドアから顔を出すと、数人の女子たちが寄ってくる。

「あっ、春樹くーん」
「ポッキー食べる？」
「飴もあるよぉ」

わーい、くれるの？と春樹は喜びながら受け取った。

と、そこへ阿笠が来た。

「櫻井。どうした？珍しい」

阿笠と春樹が2人になるなんて、今年になってからはない。

去年はクラスも一緒でわりと仲も良かったりしてた。

阿笠も人気があったし男子にも女子と同じくらい優しいし、何より秋人の相方だから。

「あのさ、ちょっと良い？」

「うん」

春樹は阿笠を廊下へ呼び出した。

人通りが多い廊下の一辺で2人は話す。

「より戻したって」

「ああ、うん。聞いたんだ」

「学校中の噂だからね～」

春樹が阿笠を呼び出したのは、より戻せて良かったね、なんて言うためではない。

阿笠と真剣な話をしにきた。

「なんで麻冬は阿笠を選んだの？」
「…それは麻冬に聞くセリフなんじゃなくて？」

阿笠は苦笑した。

「まぁそうだけど、でもこの前麻冬となんかあったでしょ？」
「この前…」
「麻冬泣いてたんだ。帰り道」

春樹がそう言うと、阿笠は思い出したようだ。

「秋人とも何かあったのかもしれない」

春樹は切なそうな顔をした。

阿笠はそんな春樹を見て何と言葉をかけたら良いのか戸惑う。

阿笠はギュッと拳を握って、一息置いてから言った。

「だけど、秋人も櫻井も夏実ちゃんが好きなんだろ」

その言葉に春樹は阿笠を見上げた。

「麻冬の好きな人は秋人だよ」

「…え――――」

知らなかった事実に春樹は言葉を失った。

阿笠の好きな麻冬は秋人を好きで、秋人は夏実を好き。

なら、夏実は？

「わ…分かってるのに麻冬と付き合うの？」

「俺がそれでも良いって言ったんだ」

「嘘…」

「秋人に傷ついた麻冬は俺を選んでくれた」

傷ついた…？と春樹は聞き返したけど阿笠はそのことに関しては何も言わない。

春樹は、それで阿笠も麻冬も幸せ？と尋ねた。

けれど阿笠は幸せだよと即答はできずに、悲しそうに微笑んだ。

阿笠だって分かっている。

「…ごめん。阿笠」

そんな阿笠を見て春樹はハッとして、すぐに謝った。

阿笠は謝ることなんかないよと、いつものように優しい顔を見せる。

いつだってそんな優しさが仇になっているのに。

それでもそれが阿笠なのだ。

「櫻井は何を心配してる?」

「え?」

「麻冬のこと?夏実ちゃんのこと?秋人のこと?」

春樹は答えに詰まった。

春樹自身なぜ自分がこんなことしているのか分からない。

予防線を張ってるわけではない。

麻冬と秋人をくっつけたかったからでもない。

ただ夏実が傷ついて

麻冬が泣いていて

秋人が切ない顔を見せたから何かしようとしただけ。

「えー…と…」

答えが見つからないでいる春樹に阿笠は、フッ…と微笑む。

「櫻井のそーゆー真っ直ぐなところ良いよね」

「え」

「俺にも周りのことが見えてれば違う未来があったかもしれない…」

阿笠は腕時計を見て、

「次移動教室なんだ。ごめんっ」と言って急いで教室に戻った。

春樹も返事をして、６組へと戻っていく。

戻ってみると、次の４限は教師の都合で自習と黒板に書かれている。

「あ、春樹ー。どこ行ってたの？」

麻冬が呼び掛けた。

春樹はちょっとね、なんて言いながら薄ら笑いをする。

そしてふと秋人たちのほうを見ると、秋人と夏実が２人で話をしている。

「えっ、なに？なんで？！」

春樹が驚いたように麻冬に言うと、麻冬も
「びっくりよね。あたしにもよく分からないけど」と返事をした。

いつもなら秋人はだいたい寝ていて、夏実もできるだけ秋人に近づかないようにしていた。

どうして突然２人が喋り出すようになったのか。

はたから見れば仲良く見えるかもしれないが、実際には夏実は普通

に秋人を怖がってたどたどしいし、秋人もできるだけ夏実を怖がらせないようにと慎重だ。

麻冬に言われて夏実は積極的になろうとした。

これ以上頑張れないと思った秋人も、震えながらも自分に話しかけようとする夏実を救いたいと思った。

2人がお互いに頑張ろうとしたから、一歩進めたのだ。

『あたし…逃げてた。大事な友達の秋人を傷つけてでも自分を守ろうとした』

これは春樹が阿笠のところへ行っている間の夏実と秋人の会話。

『だけどそれじゃあだめなんだって麻冬が言った』

『…俺もある意味逃げてた。言い訳して結局身を守ってたんだ』

麻冬が言った言葉は、2人に勇気を出させた。

確かに一時は傷つけた言葉かもしれないけれど、決して無駄ではなかった。

なくてはならないものだった。

『前みたく４人で一緒にいたいってのは俺も同じなんだ』

夏実はなかなか秋人の目を見て話そうとはしないし、秋人もまだどこか距離を置いてる。

けれど

『…うん。あたしもこんな弱い自分なんかいらない』

けれど

何かが繋がった。

秋人は机の上に置いている夏実の両手をギュッと握った。

夏実は反射的に放そうと抵抗したけど、それでも秋人は握りしめた。

『夏実、俺が治す』

秋人がそう言ったとたん、夏実は抵抗をやめた。

『…本当に？』

秋人の瞳は真剣そのものだ。

興味ないことには絶対自分から歩み寄ろうとしない秋人がここまでしてくれている。

その手を振りほどく理由なんか見当たらない。

『絶対。約束する』

その言葉にどれほどの確信と保証があるのか分からないけれど、２人は信じた。

きっと治る、と。

たどたどしくても、よそよそしくても、２人は必死に治そうとしているのだ。

その光景を見た麻冬は、心底嬉しかった。

自分が2人にああ言ったから2人が頑張ろうとしているのではないとしても、それでもなんにせよ治るんだったら何でも良い…と。

強気だし女王様な麻冬だけど、友達を思う気持ちは人一倍だ。

このまま秋人と夏実が疎遠になれば麻冬の恋のチャンスだって増えるのに、そうしないところが麻冬らしい。

阿笠に逃げてしまったけれど、秋人を好きな気持ちがなくなることなんかない。

「夏実、秋人」

麻冬と春樹が秋人と夏実の席へと近寄った。

「せっかく4限自習なんだし、美味しいもん食べに行こ！」

春樹がウキウキしながら言った。

「近くにカフェできたの。なんか超人気なんだって」

麻冬も笑って言った。

秋人と夏実はポカンとしながら2人で顔を見合わせた。

「ほら、はやく！」

春樹はせかした。

そこに麻冬がちょっと照れながら付け加える。

「行こうよ。…4人で！」

麻冬のその言葉に、秋人は嬉しそうに笑った。

麻冬はその笑顔にドキッとしたものの平常心を保とうとする。

つられて夏実も笑った。

春樹が夏実と秋人の手を引いてはやく！と立たせる。

４人で一緒にいるなんて何日ぶりなんだろう。

たった数日なのに、とても長く感じられた。

「つか制服で行くのかよ」

問題なんていくらでも残っているのに、今はたったこれだけのことがこんなにも嬉しくて、それすら忘れてしまう。

「良いの良いの！」

頑張る

その言葉に込められる意味

探り当ててみた。

next

第３１話【リハーサル】

「うっま！」

本当に４人は自習中にも関わらずカフェに来た。

まだお昼どきより少し前だからそこまで客もいりくんでいない。

「おー、確かに」

秋人も明太子スパゲッティを食べながら感嘆する。

「ところでさー、明後日って何気に体育祭だよね」

夏実が言った。

「そういえば」
「そーだっけ」
「忘れてたぁ」

いろいろあったせいで学校のサブメインイベントの体育祭をすっかり忘れていた４人。

まぁ４人はあまり優勝とか興味なさげだからどっちみち関係ないことだけど。

「秋人～リレーはあんたにかかってんだからね」

麻冬は茶化すように言った。

「あのなぁ、お前らがコケたら俺が恥ずかしい思いするから頼むぜぇ」

「あはは、わざと転んであげよっか～」

「夏実、てめっ」

よそよそしい態度を取らないように、自然にと装おっている夏実に、秋人は気づいた。

前ほどまではいかないけれど、前みたくなろうとしている姿は誰が見ても明らかだ。

「あ、今日クラTくるよね。たっのしみ～」

春樹はニパッと笑顔をした。

クラスTシャツのことか。

6組のクラス色はピンクだからTシャツももちろんピンクが地なわけで。

「…え、楽しみなの？」

秋人は不服そうに春樹を見た。

春樹は確かにピンクも似合うだろうけど、秋人は…というか普通の男子は嫌がるものだ。

「秋人楽しみじゃないの？」

「ったりまえだ」

「てさか、あのTシャツ何のギャグかね」

夏実がストローを回しながら言った。

誰が考えたのか知らないが、表には堂々と春夏秋冬と書かれている。

そして後ろには自分の名前とクラス番号がローマ字で書かれているデザイン。

「春夏秋冬って」
「あたしらかよーみたいな」

笑い話で盛り上がる。

そのうち昼食も食べ終わり、のろのろと立ち上がって学校へ戻った頃にはもう昼休みの中盤に入っていた。

教室内がなにやらワイワイと盛り上がっていたから3人が人だかりに寄ってみると、クラスTシャツが出来上がって届いたようだ。

「おっ！できたかーっ！」

春樹がいち早く自分のTシャツを取ると、
「なにこれっ！」と叫んだ。

普通背中には

ＨＡＲＵＫＩ，Ｓ

ＳＩＸ一出席番号

となるわけだが、春樹の背中にはＨＡＲＵＫＩ，Ｓではなく

「あんたがプリンス　ＨＡＲＵＬＩ」となっている。

秋人と麻冬もまさかと思って自分のＴシャツを取って背中を見た。

秋人の背中には

「あんたがキング　ＡＫＩＴＯ」と書かれてあり、麻冬のには

「あんたがクイーン　ＭＡＨＵＹＵ」となっている。

それもドデカク書かれているものだからかなり目立っている。

「あ、あたしらが考えたんだけど…だめ？」

女子たちがそう言った。

麻冬が人だかりから少し離れた場所にいる夏実に夏実の分を届けた。

「夏実っ、あんたがプリンセス　ＮＡＴＳＵＭＩだって～」

笑いながら夏実に渡すと、それを見た夏実も笑った。

春樹も楽しそうにキャッキャキャッキャはしゃぎ、秋人は呆れている。

どうやら女子たちが４人の分だけ勝手にそう注文したらしい。
まぁ表が春夏秋冬だし…もうどうでも良いかという感じだ。

クラスは笑い声で賑やかに溢れかえっている。

夏実が男性恐怖症になって以来、どことなく張り詰めた空間を保っていた２―６の教室。

４人が笑えばみんなも笑う。

笑うことがこんなにも楽しいことだなんて、改めて知らされた。

「あっきー、ピンクまぢ嫌だよなぁ」
「あっきー言うな。俺は黒が良かった」

秋人も文句を言いながらもどことなく笑みを浮かべている。

「俺は紺かな」
「ハチマキまでピンクだろ～男には最悪だな」
「まったくだ」

男子はそう言うけど、女子の中にも普通に嫌がる人はいる。
ハチマキもTシャツもピンクなんて確かに恥ずかしい。
ちなみに春夏秋冬の春はオレンジ、夏は赤、秋は黒、冬は白で書かれている。
４人の好きな色だ。
「せっかくだし5、６限の全体練習これ着ない？」
誰かが提案した。
全体練習とは、言わば体育祭のリハーサルである。
一通り軽く通してみるのだ。
「おー賛成」
「いんじゃね？」
クラスの人はその提案に乗っている様子だし、４人も特に嫌がる素振りは見せなかったから着ることになった。

昼休み終了の鐘が鳴る前にみんな着替えてグランドへと向かう。

他のクラスや学年の中にも独自で作ったTシャツを着ているところもある。

だがどれもノーマルなものばかりで、春夏秋冬と書かれている2―6のシャツを見てザワつく。

春夏秋冬と見れば、2―6と書いてなくてもすぐに分かる。

あの4人がいるクラスなのだから。

「あー…やっぱい」

夏実はパタパタ手で仰ぎながら空を見上げた。

何度も言うが夏実は太陽が苦手なのだ。

「帽子かぶってろ」

「わっ」

秋人が夏実の頭にスポッと帽子をかぶせた。

「あ…秋人。でも」
「大丈夫、担任の許可取っといたから」

秋人はそれだけ言ってさっさとその場を離れる。

開会式は男子の後ろに女子が並ぶのだ。

「…ありがとう」

夏実はもう姿が見えない秋人にお礼を言った。

秋人のさりげない優しさに触れるたび夏実は嬉しくなる。

普段寝てばっかりでクールなくせに言ってることは的確で、人をよく見ている。

そのうちリハーサルが始まり、開会式が軽く行われてから種目へと入っていく。

基本的に種目は全部流しだけど、竹取と棒上げとダンスと組体操は行われるのだ。

これば っかりは全員がいないとできない種目だから練習しようもないからだ。

流れ的にはダンス組体操のあとに竹取棒上げをやる。

そのあとプログラム上では昼休みに入り午後の種目が始まるという形だ。

自分がその種目に出ないときは基本的には各クラスに設けられてる応援席にいるわけだが、みんな盛り上がるため種目を行ってる人の邪魔にならないギリギリのところまで前に出るのだ。

夏実なんかは日陰に座っていたりするわけだが。

ちなみに麻冬も日焼けするのを嫌がって夏実と一緒に日陰にいるが、春樹は面倒くさがる秋人を連れて最前列で応援する。

午後に入ったら4人の出番は一番最後のスウェーデンリレーまで何もないからかなり時間がある。

どこか行こうにもピンクのクラスTシャツなんか着てしまっているし、教室は施錠されてるから制服にも着替えられない。

つまり学校内にいるしかないということだ。

「夏実、今日さー部活のあとラーメン食べに行かない？」
「ラーメン？」
「なんかね、秋人いわくかなり美味いんだって」

春樹は目を輝かせてワクワクしながら言う。

そんな春樹に圧倒されてか、夏実は笑いながらオッケーと返事をした。

今はリハーサルももう終わりみんな教室へ戻る途中だ。

これだけ多くの人がいるとなんだか恐ろしいものだ。

「麻冬、これから阿笠と帰んのか？」

秋人が麻冬に尋ねた。

「あー。ん～…どうなのかな」
「阿笠と付き合ってんのに俺と帰るのも変だよな」

確かに秋人の言う通りだ。

だけど麻冬が付き合ってるのは実際には阿笠でも…

「でも阿笠待たせちゃうな」
「あー確かに」

秋人の自主練が終わる頃に麻冬も練習が終わる。
ということは、サッカー部の練習だけをする阿笠はその分待たせることになる。

「聞いてみるね、あとで」
「おう」

内心秋人と帰りたい気持ちのほうが大きい。
阿笠といれば幸せになれるだろうし、そばにいても振り向いてくれない秋人といるのは辛いこともあるけれど、それでも好きだから一緒にいたいと思う。

見返りのない愛…アガペー。

その愛は美しいものかもしれないが、実に悲しい。

相手が誰かを思っていても思い続けるなんて、なんとも切ない。

「あのさ…」

秋人はとても言いづらそうな表情を見せる。

「ん？なに？」

「阿笠のこと…好きになれそうなのか？」

秋人は一体麻冬のことをどう思っているのか。

なぜそこまで気にかけるのか。

「…一度はあたしが好きになった人なの。本気で」

夏実のことが好きなら、夏実ばかり気にかけるのなら麻冬にこんなことを言う必要なんかない。

言わなければきっと麻冬は阿笠と幸せになるだろうし、この先壊れることはないかもしれない。

だけど秋人が気にしてしまうものだから、だから麻冬の心が揺れるのだ。

大事な友達だから

そんな言葉で済まされるようなことだろうか。

next

第３２話【名のない気持ち】

「阿笠、いますか？」

放課後になってすぐに麻冬は阿笠のクラスへと足を運んだ。

ＨＲを終えたばかりの阿笠のクラスはほとんどの人がまだ教室に残っている。

麻冬が阿笠を訪ねてきたのを見たクラスの人たちがザワついた。

やっぱり噂は本当なんだ。

雪原さんなら敵わないな。

阿笠ずるいぞ。

いろんな声が小さく飛び交う。

そんな中でも阿笠と麻冬は全く気にせず、阿笠は麻冬のもとへ行った。

「どうかした？麻冬」

2人並ぶと美男美女でとても絵になる。

人を好きになるのは見てくれが大事なわけではないけれど、容姿が良いのだって人間の長所だ。

「帰り…どうするかなって」

「帰り？」

「今まで秋人と帰ってたの。で、秋人が阿笠と帰るの？って聞いてきたから」

麻冬がそう言うと、阿笠は

「ああ…」と納得したような顔をした。

「…麻冬はどうしたい？」

阿笠は優しく問いかけた。

阿笠は麻冬が秋人のことを好きなのを知っている。

嫌味ではなく、単純に麻冬の意見を尊重したいんだろう。

「えっ、あたし？」

麻冬は不意討ちをつかれて少し驚いた。

そして数秒沈黙して、重々しく口を開く。

「……阿笠と…帰ろうかな」

「良いの？」

「…」

阿笠のつっこみに答えられず黙ってしまう。

「俺に遠慮しなくて良いよ。麻冬の好きなほうで」

「…もし阿笠と帰るなら阿笠待たせちゃうよ？」

「全然」

阿笠はニコッと微笑んだ。

おそらく秋人と一緒に帰りたい気持ちのほうが上回っているだろうのに、麻冬は阿笠を選んだ。

麻冬は阿笠と付き合うにあたって決めたことがあるのだ。

麻冬はこんな性格だから中途半端は嫌がるし、決めたことは貫きたいタチだ。

貫くには苦しいし辛い場面も多くあるはずだろうけど…

「分かった。じゃあ部活終わるの待っててね」

麻冬はバイバイと手を振って自分の教室へと帰る。

戻る途中麻冬の荷物を持っている秋人に遭遇した。

「秋人。あ、カバンありがと」

「おう」

麻冬は教室へ戻ることなく秋人からカバンを受け取り、そのまま秋人と玄関へと向かった。

秋人が阿笠どうするって?と聞いてきたから、麻冬は阿笠と帰ることになったよと微笑した。

「ふーん。分かった」
「寂しい？」
「ばーか」
「なによぉ」

本当は一緒に帰りたいんです、と麻冬はじっと秋人を見た。

だけどその心の思いは届くこともない。

秋人はあくびをして眠そうに目をこすった。

玄関について外に出て、少し歩いてから2人は別れて麻冬はプールへと向かう。

秋人はサッカー部の部室へと行く。

まだあまり人も来ていなく、1年が素早く着替えてコート整備をしに急いだ。

秋人は長椅子に腰をおろしてどっかり座り、特に何をするでもなくボーッとする。

「秋人？着替えねぇの？」

サッカー部員がそう尋ねてきたから秋人は「ああ」と空返事をするものの、一向に着替える気配はない。

いったいどうしたんだろうか。

そのうち他のサッカー部員たちも部室へ入ってくる。

その中の1人に阿笠も含まれていて、阿笠も何もしていない秋人に声をかけたが秋人はそれでも空返事をするだけだ。

「…秋人？具合でも悪いのか？」

「いや」

「じゃあ何か悩み事？」

「悩み…？」

秋人は悩みという言葉に反応した。

マイペース人間の秋人は基本的に悩むことも困ることもない。

昨日の麻冬に怒鳴ってしまったことを除いては。

今はそれすらも少しずつ解決してきているのだからもう悩むことなんて何もないはず。

「なんだ、悩んでるのか。俺で良かったら相談乗るぞ」

「いや…何を悩んでんのか分からない」

「あはは、なんだそれ。よし、じゃあ俺がラーメンおごってやるよ！それで元気出せっ」

阿笠は秋人の肩にポンっと手を置いた。

秋人は一瞬阿笠の優しさに嬉しく思ったけど、次の瞬間には麻冬の心配をした。

麻冬と帰るんだろ、良いのか？と。

阿笠は思い出したように「あー…」と上を見上げた。

「良いよ。秋人は大事な友達だから」

阿笠は笑顔でそう言った。

そんな恥ずかしいセリフよく言えるな…なんて秋人は言ってみせたけど、内心は嬉しい気持ちでいっぱいだ。

せっかく手に入れた大事な彼女よりも自分を選んでくれた阿笠の優しさは秋人の心にしっかりと響いている。

阿笠は麻冬に今日は一緒に帰れなくなったとメールを打って、秋人にもはやく着替えるように促して部室を出て行った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「あーっれ、麻冬じゃん？あれ」

「んー？」

夜になりバレーとバドミントンの練習を終えた春樹と夏実が駐輪場へ向かうと、駐輪場から自転車を出している麻冬を見つけた。

夏実はすかさず麻冬に声をかけた。

「麻冬、おっつー」
「あ、夏実春樹。お疲れぇ」
「秋人は？」
「今日からは阿笠と一緒に帰るの」
「あ、そっか。じゃあ阿笠くんは？」
「何か用事できたんだって」

夏実が「そうなんだ？」と言うと、春樹が「じゃあ一緒にラーメン食べに行かない？」と麻冬を誘った。

麻冬はどうしようか少し悩んでいるようだったけれど、誘いに乗ることにした。

夏実の自転車のパンクも直り、３人とも自転車だ。

春樹が言っていた秋人のオススメするラーメン屋は安くて美味いことで部活帰りの学生もけっこう寄っているらしい。

もちろん秋人の家の方向なわけだが。

まぁそこまで高校からも離れていない。

3人はたわいもない会話をしながらラーメン屋へと自転車に乗って向かう。

今日は部活のあとに秋人は自主練をせずに阿笠とラーメンを食べに行っている。

阿笠もこれからは麻冬を待つために自主練すると言っていたが、秋人は今日はのらないらしく自主練はなしになった。

約束通り阿笠のおごりでラーメンを食べているのだ。

阿笠と秋人は中学も隣くらいにあるせいで家も割りと近いほう。

阿笠がそうってことはもちろん麻冬もそうなるが。

「あ〜やっぱここのラーメン美味いなー」

阿笠が味噌ラーメンをズルズル食べながら感嘆した。

「おっちゃん、餃子おかわり」
「秋人っ、少しは遠慮しろっ」
「まぁまぁ」

秋人たち以外にも学生や親子がチラホラいる。

タイプは違うが冷静に周りを見てプレーをするところは同じな2人で、1年の頃からコンビだったから息も合っている。

秋人も阿笠も本音を口には出さないけど、秋人は阿笠に異変があればすぐに気づいた。

そうやって阿笠は何度秋人に助けられたことか。

「元気出た？」
「おう。ごち」
「何悩んでるのか分からないって、面白いこと言うね」
「んー。なんだろな、ほんとよく分かんねぇ」

阿笠はハハハと笑う。

秋人に何度も助けられたから阿笠だって秋人を助けたい。

いつだってそう思っている。

阿笠がチャーハンを食べていると、秋人がおもむろに話しかけてきた。

お前こそ何かあった?と。

阿笠は何もないよ~なんて笑いながら食べ続けてるけど、秋人は阿笠の異変は見逃さない。

「何がらみ?麻冬か?」

秋人も頼んだ餃子に手を伸ばしながら諭すように言った。

阿笠はチャーハンを食べる手を止めて、なんで…?と固まりながら問うた。

なんとなくそんな気がした、と秋人はそっけなく答える。

「…今日櫻井が俺んとこ来て俺に言ったんだ。なんで麻冬は阿笠を選んだのかって」

「はぁ？それ麻冬に聞くことだろ」
「な。まぁ…櫻井なりに心配だったのかもな」

秋人は、そういえば…と何かを思い出したように言った。
なに？と阿笠が聞き返すと秋人はお茶を一口飲んでから言った。

「今朝さ、俺が何かしたら麻冬が俺んところに戻るって言ったよな」
「…ああ、言ったかも」
「何かしてみた」

秋人の言葉に、阿笠は
「はっ？」と驚きの声を上げた。

「夏実と前みたくなれるようにって、夏実と俺頑張ってんだよ」
「そう…」
「で、どういう意味なわけ？」

秋人は麻冬が自分のことを好きだと知らない。
だからここでその意味を言ってしまったらバレてしまう。

阿笠は遠回しに答えた。

「分からない？秋人が夏実ちゃんばっかだからだよ」
「え…」
「夏実ちゃんのこと好きなんだって？」

阿笠がそう言うと、秋人は目を丸くして驚きながら顔を少し赤くした。

なんで…と秋人が聞いてきたものだから阿笠は、麻冬に聞いたんだと答えた。

「ま…ふゆ？」
「ねぇ、秋人にとって夏実ちゃんは好きな人だよね」
「…まぁ」
「じゃあ秋人にとって麻冬は何？」

一瞬時が止まったかと思えた。

なぜ阿笠はそんなことを聞くのか。

なぜ秋人はそんなに考え込むような顔をするのか。

それぞれの思いはどこにあるのか。

ラーメンから出る湯気のせいか緊張感のせいか、２人の額には少し汗がにじみ出ていた。

next

第３３話【月夜の灯り】

あなたが誰のものにもならないのなら、別に私のものでなくても良い
けれど、誰かのものになるなら
その誰かは私でありたい

知っているだろうか
この言葉を

知っている人も初めて知った人も、この詩の意味をどう解釈するか。

問題はそこにある。

「…いや、何って麻冬は友達だろ。俺の」

秋人は長らく時間を置いてから苦笑しながらそう言う。

「友達？」

「それ以外なんもねぇだろ」

秋人は平静を装いながら言うけれど、だったらさっきの間は何だったのだろうか。

いつもなら阿笠もここで引いているところだけど、今回は引かずにずんずんと攻め寄る。

「俺には友達以上の感情があるように思えるけど」

阿笠のその言葉に、秋人は真剣な顔して反応した。

「何が言いたい？」
「別に」

阿笠は飲み物をおかわりする。

店員がすぐさま届けに来た。

「じゃあもし俺にその感情があったらどうすんの」
「さぁ…麻冬取られないように頑張るしかないね」
「取られる？彼氏はお前だろ」

不穏な空気ばかり流れる。

お互い腹の探りあいみたいに喋り続けている。

「麻冬が俺を好きだから俺を選んだなんて、秋人だって思っていないんだろ」
「…」
「本当は…分かってるんだ。結局俺らは昔達成できなかった記憶だけを抱いてるって」

阿笠は少しだけ切なそうな顔を見せた。

そして、秋人のほうを見ながら宣戦布告をした。

「だけど負けない。取れるもんなら取ってみれば良いさ」

阿笠はやられた、というような表情をしている。

秋人が好きなのは夏実なわけで麻冬じゃない。

だから別に宣戦布告されたって意味はない。

はずなのに

「俺――」

秋人が何か言いかけたとき、店のドアがカラカラ開いた。

おやっさんの

「らっしゃい！」という大きな声が店の中に響き、客たちは楽しそうに会話しながら入ってくる。

秋人と阿笠は自然とドアのほうをチラッと見る。

「えっ」

阿笠が声を上げた。

秋人も阿笠の隣で同じような声を上げる。

2人はすぐに顔を背けて視線を変えた。

入ってきたのは麻冬たち3人である。

阿笠と秋人はカウンターで食べているため顔を背けようとすればバレはしないかもだけど、制服を着ている。

「ここのラーメン屋だったんだね」

麻冬の声が漏れる。

「知ってたんだ?秋人のオススメの店なんだよ」

春樹が陽気に答えた。

なんとなく秋人は教えなきゃ良かったかもなんて思う。

3人は奥の机のほうに座った。

案外カウンターのほうを見ることはなく秋人たちがいることは麻冬たちには知られてないようだ。

「…聞かれてはないな」

秋人がボソッと呟いた。

「みたい…たな」

阿笠もホッとした。

聞かれてまずいことはないけど、やっぱり知られるのはちょっと気が引ける。

阿笠と秋人はさっきの会話とは打ってかわってサッカーの話で盛り上がった。

2人の共通点といえばサッカーが上手いことだ。

中学からのコンビの2人には大きな目標があった。

「優勝したいなぁ」

阿笠は少し嬉しそうに言う。

「県予選？県大会？東海大会？」

秋人はニヤッと阿笠を試すように笑いながら問う。

ちなみに舞台はサッカー王国・静岡だ。

県予選で勝てば県大会、そして東海大会があって全国大会に繋がるのだ。

「全国大会！」

星陵は運動が盛んで全国常連の部活も多々あるけれど、優勝するとこまではあまり達しない。

サッカーで、それも静岡で県大会を勝ち抜くのはなかなかの至難だ。

なのに至難を越えても優勝には手が届いていない。

「…中学んときはさ、県選抜でベスト8だったな」
「うん。悔しかったなぁ、神奈川だっけ」
「神奈川だな。まぁ…中学んときは学校単位で全国行くのはなかなか難しかったけど」
「でも今なら学校単位で十分だよね」

ラーメンやらチャーハンやら餃子やら何やらも全て食べ尽くし、それでも話が尽きないから更に注文を追加していく。

どれだけ食べれば気がすむのかってほど食べている。

「秋人がいて俺がいる」

阿笠は揚々と言った。

「そうだな。俺がいて阿笠がいる。十分だ」

秋人も同意した。

やっぱり2人は部活の中でもズバ抜けて上手いわけだから、決して自信過剰ではない。

本心だ。

「それとＤＦの木村とＧＫの里田。里田なんかまだ１年だしな」
「里田は上手いよ。あいつがいるから俺も安心して上がれるし秋人にパスを送れる」
「ああ」

注文したラーメンを２人はフーフーと冷ましながら食べる。
熱いラーメンを食べて暑くなったのか、秋とはＹシャツを腕まくりした。
そもそも９月なのによく長袖着てられるものだ。

「楽しみだな、大会」
「たぶんもう負けることはない」

秋人は平然と言った。
その根拠はどこからくるのか分からないし、野生の勘ってやつだろう。

「まずは県予選、県大会東海大会。そんでもって全国大会Ｎｏ．１

だ」

そう、根拠はない。

理由もない。

だけど確信はある。

「もっちろんだ」

左手を開いて阿笠に向けている秋人の手を、阿笠は秋人の言葉に心が踊りながら左手で勢いよくギュッと掴んで握った。

そこには友情以上のものがある。

絆という名の。

お互いに手を掴んだまま顔を見合わせた。

どうにも自信で満ち溢れている秋人の顔と、秋人を心から信頼している阿笠の顔。

数秒して手を離し、再び2人はたわいもない会話をしながらラーメンを食べる。

「あっれ、阿笠に秋人」

そのとき、春樹が2人のところにひょこっと顔を出した。

どうやらトイレの帰りのようだ。

「わっ、櫻井！」

「なーんだ、用事って秋人とだったんだ。今ねー夏実と麻冬も一緒なんだよ」

「へぇ、そうなの」

阿笠はまるで今知ったかのように返事をした。

春樹が2人に絡んでるのを見た夏実と麻冬も秋人と阿笠の存在に気づいた。

「阿笠」

麻冬が席から立ち上がって阿笠のほうへと向かってきた。

「あ、麻冬。麻冬も来てたんだな」
「偶然だね。用事って秋人なんだ」
「うん、ちょっとね」

夏実はやっぱりこっちには近寄ってこない。

頑張って秋人と接しようとするもやはり阿笠はまだ無理なようだ。

仕方ないといえばそうかもしれないが…

「じゃあね～」

春樹は手を振って席へと戻って行った。

麻冬も愛想笑いして手を振って春樹と同様夏実が待ってる席へと帰る。

「…なんか普通だね」

阿笠は秋人に向かってポツリと呟いた。

「てか、なんで俺らバレないように振る舞ったんだろうな」

「はは、確かに」

それだけ言って2人はしばしの間沈黙に入る。

そのうち最後に注文したラーメンもともに食べ終わり、そろそろ出ようかと阿笠が言い、2人は会計をして店を出た。

「あ」

自転車に乗る際に、阿笠が思い出したように言った。

「ねぇ、夏実ちゃん治そうと思ったのは何で?」

秋人も自転車にまたがる。

「…んー、4人で一緒にいたいから」

「誰のおかげ?夏実ちゃんがそう言った?」

「いや…お前も知ってるだろ、麻冬だよ」

阿笠はやっぱりそうなんだ、と心の中で呟いた。

「…麻冬の涙はなんだったんだろうね」

「え、なに？」
「いや。夏実ちゃんはやく治ると良いね」
阿笠は適当に笑いを作って明るくそう言った。

阿笠の心にある思いと秋人の心にある思いはどう違うと言うのだろうか。

2人は自転車に乗ってそれぞれ自分の家へと向かっていく。

月夜の灯りだけが2人を照らしていた。

next

第３４話【お節介】

ラーメンを食べている中、春樹が思い出したように言った。

「あ、麻冬っ」

「ん？なに？」

春樹は麻冬に何かを言おうとしたけど、夏実も一緒にいることに気づいて言うのをやめた。

「あーやっぱなんでもない」

語尾にハートをつけて可愛く言ってみせたものの、夏実はなんとく自分がいるから言わなかったのだと勘づいた。

麻冬はちっとも気づかすに

「も～、なによぉ」とケラケラ笑っている。

春樹は慌てて話題を変えて、今日部活であった面白い話などをし始める。

そこから話が多いに盛り上がって、麻冬は春樹が何か言いかけたことなんてすぐに忘れてしまっているようだ。

けれど夏実は、楽しく盛り上がってる様子を装いながらも気になっているようだ。

なんでもない、きっとたわいもない話だ…と自分に言い聞かせるもそわそわしている。

そのうちラーメンも食べ終わり、少ししてから3人は店を出た。

夜は少しだけ冷える。

麻冬がくしゃみをしているのを見た春樹は、持っていたホワイトのカーディガンを麻冬に渡した。

「良いの？」

春樹がもちろんと答えると、麻冬は嬉しそうに受け取った。

可憐で清楚な容姿の麻冬は白がよく似合う。

麻冬はブラウスの上にカーディガンをはおり、自転車に乗る。

次いで夏実も春樹も自転車に乗って3人は道路を走り出す。

少ししてから麻冬との分かれ道に差し掛かり、麻冬は
「春樹ー明日返すね！じゃあ2人ともまた明日～」と言って分かれ
道の片方へと自転車をこいでいく。

春樹と夏実も別れのあいさつをしてそれぞれの家に向かって行った。

そのうち春樹と夏実との分かれ道にも差し掛かった。

「じゃあね、春樹」
「うん。また明日」

2人は別れ、自分の家へと向かって行く。

春樹は途中でコンビニに寄って昨日発売した週刊誌を立ち読みし始
める。

いつもなら発売日に行くものだけど、昨日は寄り忘れていたようだ。

コンビニには実に様々な人がいる。

学生やＯＬが帰り道にちょっとした食べ物を買ったり、親子連れがいたり、雑誌のコーナーでエロ本を読んでる中年のおじさん。

そんな中、輝樹が春樹のわりと近くで雑誌を読んでいることに春樹は気づいた。

「輝樹」

春樹は雑誌を閉じて輝樹に声をかけた。

「あ…兄貴」

輝樹は少し驚いた顔をして、そして雑誌を元あったところに戻してそそくさといなくなろうとした。

春樹はそんな輝樹の腕を掴んだ。

「逃げることないじゃん。最近俺のこと避けまくってるけど」

「…」

輝樹はその手を振りほどこうとしたけれど、春樹の力には逆らえな

い。

輝樹は諦めたのか抵抗をやめ、気まずそうな顔をしている。

「気にしてるならあんなことしなきゃ良かったんだ」

春樹は真剣な瞳で言った。

「……ほっとけよ」

「夏実、男性恐怖症になったんだぞ」

「え…？」

「俺やお前や康介には普通に平気だけど、秋人すら怖がるんだ」

輝樹は嘘だろ…というような表情を見せた。

驚きの事実に言葉さえ失っている。

春樹はあえて今まで輝樹に言わなかった。

言おうにも輝樹に避けられて言えなかったってことも一理あるけれど。

「…なんで…」

輝樹は重々しく口を開く。

「ならなんで兄貴も夏実も俺を責めない？」

「責めれるわけないだろ」

春樹はどことなく兄らしい表情をした。

背なんか２０センチくらい輝樹よりも低いのに、力も勝るし兄らしい言動もする。

「…兄貴は甘いよ」

輝樹はパッと春樹から視線を反らした。

春樹も輝樹を掴むのをやめる。

周りの客にチラチラ見られてるのに気づいた2人は、コンビニから出た。

輝樹が歩きだったため春樹は自転車を押して帰る。

「もーさ、すっごい大変だったんだ。俺と秋人がまじゲンカしたり

とか」
「秋人さんと？」
「うん。こないだ顔腫れてたろ、あれ秋人に殴られたんだ」

春樹はアハハと笑って話すけど、輝樹はあの痛々しい春樹の顔を思い出して少しだけ責任を感じているようだ。

そんな輝樹を知るよしもなく、春樹は続けた。

「でもさ、今日夏実と秋人が喋ってたんだ」
「？」
「２人とも前みたいになれるように頑張るんだって」

輝樹は小さな声で、ふーん…と言う。

「…治りそう？」
「うーん…たぶん治るよ。なんたって秋人だからね」

輝樹はチラッと春樹を見た。

春樹はさっきの笑顔とは打ってかわって、無精面をしている。

もともと分かりやすい表情をするけど、ここまで１８０度変わるの

も珍しい。

「兄貴はさ、夏実のこと好きなんだろ」

春樹は輝樹にバレていることを驚かなかった。

秋人にも麻冬にも普通に知られているから、弟にバレていてももう
なんとも思わないよう。

「…それが？」

「なんで俺があんなことしたかって聞かねぇの？」

輝樹自らそんなことを言うとは驚きだ。

春樹は、聞いたら教えてくれるんだ？とからかうように言う。

輝樹は声のトーンを少し落として語りかける。

「…兄貴が夏実を好きだから」

春樹は輝樹の意味深長な言葉に
「は？」と聞き返した。

「兄貴だけには負けたくない。夏実だけじゃなくて」
「輝樹」
「ずるい…兄貴は」

輝樹は少しだけ悔しそうな顔をしている。

だけど春樹は、輝樹の本心も十分に理解しないまま言い放った。

「俺をライバル視すんのは構わないけど、だからって夏実には手ぇ出すなよ」
「夏実じゃなきゃだめなんだ」
「どういう…」

春樹が輝樹の顔を見上げて尋ねようとしたけど、決してふざけて言ってるわけではない輝樹の顔を見て言うのをやめた。

そして春樹より先に輝樹が口を開いた。

「分からないなら良い」

輝樹はそれ以上何も言わなかった。

春樹も、それ以上何も聞かなかった。

結局春樹は輝樹が何を言いたかったのかは分からずじまいだけれど、とりあえず夏実が治そうと頑張ってると春樹に聞いて安堵したのは確かだ。

2人は家に着くまでそれ以来何も喋りはしなかった。

春樹の自転車のタイヤが回るたびにカラカラ鳴る音だけが道路に響いて止まなかった。

春樹は家に着いてから自分の部屋へ行き、しばらくくつろいでから麻冬に電話をかけた。

数回コールしたあと、電話越しに麻冬の声が聞こえる。

「あのさ、ちょっと話があって」
『うん。良いよ』
「あのさー」

春樹は康介の話をした。

2人同時に告白されたつづりから柔道部だの何だのに入部して康介の話に耳も傾けないことなど、事細かく。

数分して説明し終えると、麻冬は電話の向こうで楽しそうに大声で

笑っていた。

『やだぁ、康介ってば』

クスクス笑う麻冬の声が春樹の耳に入る。

「ど？やってくれる？阿笠にはちょっと悪いけど」

康介はあんな性格だから春樹にも秋人にも麻冬にも好かれている。

天然王子の康介の話はいつも波乱万丈。

『良いよ。でも知り合いいたら困るし軽く変装でもしとく』

「ありがとー！あとで康介にも電話しとく」

春樹は元気に答えた。

春樹の提案だからそれが成立してちょっと嬉しい気持ちになっているようだ。

２人はしばしの間康介の笑い話をした。

康介の話はなかなか尽きない。

けれどしばらくすると少し沈黙になった。
どっちから話すかお互い戸惑う中、春樹が先に口を開いた。

「…聞きたいことあるんだけど…良いかな？」

電話の向こうでは『良いわよ』と陽気に答える麻冬がいる。
春樹はゴクッと息を飲んで、目をギュッと閉じて言った。

「麻冬は何で阿笠を選んだの？…秋人が好きなのに」

春樹がそう尋ねると、麻冬は驚嘆の声をもらした。

『好きじゃないわよ』
「嘘。…じゃあ仮に秋人のことはなかったとしても、阿笠のことは好きじゃないはずだ」

春樹は人の心配ばかりだ。

麻冬たちのことだってほっておけば良いのに、友達がいつか傷ついてしまうのを恐れて忠告してあげてしまうんだ。

『…なんでそう言えるの？』

そのとき、電話越しの麻冬の部屋で宇多田ヒカルの曲が流れていることに春樹は気づいた。

英語の歌詞がけっこう混ざっていて、切なげな感じで心にドーンとくる歌だ。

「阿笠が…そう言ったんだ」

宇多田の歌は春樹の言葉をより神妙にさせる。

サビの部分だったからか余計に雰囲気が出ている。

麻冬の心にもマッチして、電話越しのはずなのに2人の間にはただならぬ儚げな雰囲気が漂っていた。

next

第35話【進む道】

『春樹くん、あたしのこと好きじゃないよね』

春樹が麻冬のことに口出すのには訳がある。

あれは春樹が中2の頃の話で、春樹は3ヶ月くらい付き合っていた彼女がいた。

『好きだよ?』

春樹は中1の春に出会った夏実に恋をしていた。

だけど夏実に会いに行くこともできずにただただ思っているだけだった。

その話を冗談っぽくクラスの割りと仲が良い女の子に話したら、

「それならあたしと付き合おうよ」と言われた。

春樹はもちろん最初は断ったけど、彼女は

「今好きな人がいてもあたしは気にしないから」と言って引かなか

った。

押しに押された春樹は結局断れずに付き合うことになったのだ。

『じゃあ、その好きは他の女子を好きなのと違う気持ち？』

付き合ってから3ヶ月近く経った頃のある日の休日、2人はデートをしていた。

昼食を食べようとファーストフード店に入って食べている最中、彼女がそう漏らした。

『…』

『答えて、春樹くん』

春樹はポテトを食べる手を止め、黙り込む。

それでも彼女がしつこく言い寄ってくるものだから、春樹は少し真剣な顔をして言った。

『同じだよ』

春樹がそう言うと、女の子は
「ひどい…っ…」と泣きそうな顔をした。
春樹は同情するでもなく優しい言葉をかけるでもなく、その子を突き放すような言葉を放った。

『好きな子はいる。それでも良いって言ったのは絵理だよ』

確かに付き合い初め、彼女は春樹にそう言った。
春樹はバカみたいにその言葉を信じて、彼女を好きになることはなかった。
どんなに一緒にいても、どんなに好きだと言われても。

『好きに…なってくれると思ってた。一緒にいれば』
『…だから最初に断ったんだ』
『少しはあたしを好きになろうって…その人忘れようって努力した？』

彼女の目には涙がたまっている。

彼女は必死に春樹に訴えかけるけれど、いつになく春樹は彼女に冷たくする。

『してない。しようとも思わなかった』

その言葉は彼女の心を深く傷つけてしまった。

優しい言葉をかけたらまた彼女が期待してしまうかもしれない。

そう春樹は思ったのだ。

『だけど別れを切り出すこともできなかったんだ』

期待させてしまったら、またずるずると付き合うことになるかもしれない。

春樹は、彼女からこういう話題が出たらきっぱり別れようとずっと心に思っていた。

自ら別れられずにいたのは、別れるなら自分が振るのではなく振られようと決めていたから。

優柔不断な自分がオーケーしてしまったせいで傷つけてしまったのだから、せめて最後は彼女を傷つけるのではなく自分が傷つかれようとしたのだ。

別れること自体が彼女を傷つけることになるのに。

『そんな優しさなんかいらないよっ……』

彼女は自分のポテトを春樹に向かって投げた。

春樹は反射的に顔にあたるのを防ぐため腕で避けた。

春樹の腕に当たったポテトが机や床や春樹の足にボロボロと落ちていく。

『…ごめん』

春樹は彼女の目を見ながら、ただただごめんとだけ言う。

『ごめんって言わないで！』

彼女はもう半狂乱だった。

春樹に好かれたくていろいろ頑張ったのに、結局愛されることはな

かった。

それがどんなに惨めなものか。

『だったら最初っから付き合わなきゃ良かったのよ！あたしの手を振り払ってでも断れば良かったんだ！！』

彼女の目から涙がこぼれる。

それでも春樹は、ごめんしか言わなかった。

彼女は涙を吹きながら、そのまま店を出て行った。

周りの人がジロジロと春樹を見ているけれど、春樹はそんなのには気にもとめずに、さっきまで彼女がいた椅子を見つめた。

『…愛せなくてごめん』

春樹が最後に彼女に言った言葉はそれだ。

春樹は狂ったように、椅子を見つめてはそう呟いた。

愛せなくてごめん
好きにならなくてごめん
優柔不断でごめん

春樹は、1時間近くは1人でずっとその場に座っていた。
その女の子はもう二度と春樹に話しかけることはなかった。

「阿笠は、秋人に傷ついたから自分を選んだって言ってた」

春樹が麻冬にそう言うと、麻冬は黙り込む。

春樹は構わず話し続けた。

「逃げたって幸せなんかなれないよ。そりゃ思ってることに辛いことはあるかもしれないけど」

麻冬はそんな春樹の言葉に、あんたに何が分かるの？と震える声で言った。

「分かるよ。分かるから言ってるんだ」

『あたしが選んだの。幸せになりたくて選んだ道なの』

「本当に…それは幸せに繋がる道？」

麻冬には俺の二の舞にはなって欲しくないんだ…と春樹はポソッと言った。

え…？と麻冬は聞き返したけど、春樹はそれには触れずにただ黙る。

『分からない…でもね、信じなきゃ始まらないよ』

麻冬のその言葉に、春樹は少しだけ心が変わった。

あの頃の春樹は彼女を好きになろうとはしなかったけれど、麻冬は幸せになるために阿笠を好きになろうとしている。

それだけで未来は大いに変わってくるはず。

「ふーん…」

春樹は夏実をずっと好きでいることに後悔はしなかったけど、彼女と付き合ったことは激しく後悔している。

忘れられない思い出。

『未来がどうなるかは分からない。だけど、春樹も見てて。もしかしたら幸せな未来がくるかもしれないのよ』

麻冬が言うのももっともだ。

未来は分からないし、信じなきゃ始まらない。

それでも春樹にはその輝かしい未来を信じることなんかできなかった。

「麻冬が良いなら…」

やっぱり好きな人がいるのに他の人と付き合ってしまったらどこか

で歪みができてしまう。

そのまま上手くいくかもしれないけど壊れるかもしれない。

暗い恋愛をした春樹には、明るい恋愛しかもう見えないのだ。

真っ直ぐでひたむきな愛しか受け入れられない。

『…ねぇ春樹、あたし阿笠を好きだったの』

「うん」

『そのあと秋人を好きになった。だから…思いが変えられないことはないと思う』

麻冬は春樹を諭すように言う。

電話越しにカラカラという音がした。

麻冬が部屋の窓を開けたようだ。

『でも、変えられないかもしれないよね』

麻冬は窓から空を眺める。

一等星二等星…数多くの星が空に散りばめられている。

だけどどの星もまるで競っているかのように輝いている。

『変えられなかったときはきっと春樹のアドバイス聞いとけば良かったって思うと思う』

春樹はベッドに腰を下ろして、麻冬の言葉に耳を傾けた。

ふと斜め前方にある窓から星が見えて、その輝きが春樹の目に映る。

『…ごめんね、春樹』

「え？」

『確かに逃げてる。阿笠を傷つけてる…』

麻冬も春樹も星を見ている。

2人に見えている夜空は同じものだ。

『だけどあたしも愛されたかった。…弱虫でごめんね』

それは麻冬の精一杯の頑張りだと春樹にも伝わっている。

春樹にも思いがあるように麻冬にも思いはある。

「そういう道も…あるのかな」

にわかに信じ難い雰囲気を春樹はまだ持っているけれど、麻冬がここまで自分に必死に言っているのだから信じざるを得なかった。

その道を？

愛を？

違う。

麻冬を――――…。

『どうかな』

麻冬はフフと笑う。

「あはは、なにそれ」

つられて春樹も少しだけ笑う。

人は星を見て何を思う？

願い事をするのか

綺麗だと思うのか。

ただ、心は繋がらなくても空だけは永遠に繋がっている。

いつまでも、

いつまでも。

見上げた空　綺麗でした。

君のことを　思いました。

next

第３６話【クラスの意志】

次の日も当然のごとくやってくる。

４人は朝練をして授業に出て、秋人は寝ているし麻冬は髪で隠しながらイヤホンを耳につけて音楽を聞いている。

春樹は外をぼんやり眺めているし、夏実は暇そうにノートに落書きして遊んでいる。

真面目に授業を受ける気がない４人に向かって、４限の授業の地理教師が怒った。

怒られても秋人は再び寝るし、麻冬も音楽を聞くのはやめるもののふと思い浮かんだ作曲を紙に書いたりしている。

夏実はパラパラ漫画を書き始める始末だ。

ここでいつもなら春樹は素直に受け入れて授業を聞くのだが今日だけは違っていた。

『聞いてるのか櫻井』

『聞いてますよぉ』

怒られながらも教師の顔は見ずに窓の外を眺め続ける。

『前を向け！』

珍しく言うことを聞かない春樹に教師も負けじと声を張る。

春樹は振り向いたと思ったら予想外の言葉を発した。

『気が散る。考え事してるんですってば』

あたかもウザそうにそう言うものだから教師も少し驚いて諦めて教卓へと戻った。

クラス一同が春樹に注目したが春樹はそんなこと構わずボーッとしている。

反抗的な態度なんてする柄ではないのに、何をそんなに真剣に考えているのか。

だけど秋人でさえ春樹に突っ込むことはできなかった。

春樹が出すただよらぬ雰囲気には誰もあがらえない。

それでも自分自身はそんなつもりではないと思っているから余計にやっかいなのだ。

「えっとー」

昼休みに入るとすぐに秋人はだるそうに教室の壇上に上がった。

後頭部に左手をあてて、いかにも眠そうな顔をする。

「なんかー」

いかにもというより、かなり眠そうである。

語尾が長いし、言葉一つ一つが短い。

「さっき担任がー」

半分コクリコクリと首が揺れている状態だ。

そんなとき春樹がカバンから弁当を取り出しながら、

「秋人っ、寝るな！がんば！」と笑いながら声をかけた。

春樹の声で少し目が覚めて秋人は

「はっ」と声を上げた。

そして手で髪をくしゃっとして、眠いのを我慢して言った。

「さっき担任がクラス優勝したら焼き肉連れてってくれるって。とりあえず薄井には勝ちたいってー」

薄井とは1組の担任のあだ名で本名は加州井（かすい）のことで、6組の担任とは長年なにかと競いあっている仲らしい。

「へぇ、秋人がやる気出すなんて珍しいね」

麻冬が感心するように言ったけど、春樹は麻冬の感心を打ち消すかのごとくケラケラ笑いながら言った。

「やっだなぁ、秋人がやる気あるわけないって。みんなに伝えなきゃ居眠りしててやらなかった群青のプリントもらえなかっただけだよ〜」

群青とは秋人たちの担任の名前で、担任は数学。

4限がちょうど担任の授業だったのだ。

春樹にそう言われた秋人は図星を差されたような表情をしたから、クラス中のみんながなるほど…と納得して頷いた。

親友なだけあって春樹はよく分かっている。

確かに秋人はさっき寝ていて授業中に行われたプリントをやり損ねた。

いつもならちゃんと秋人の席にもプリントが配われていて授業後にやるのだが、今回は教師の策略で配われなかったのだ。

理由は春樹が述べた通り。

秋人がやる気を出せばクラス全員もやる気になると担任は思ったのだろう。

「なぁんだ。裏ありあり」

麻冬はがっかりしたように言う。

「秋人らしい」

夏実も笑った。

学年首位の秋人は提出物もきっちり出す完璧派だからプリントを受け取らないという選択肢はないのだ。

「うるせーな。俺はプリントやりてーんだよ」

秋人は半怒しながら言う。

そして、じゃあ伝えたから～と言って壇上を下りて席へと戻る。

春樹が屋上で食べようと言ったから、４人は教室を出ようとした。

また家の鍵とすり替えるつもりなのか。

そのとき、クラスの女子が少し大きめの声で言った。

「待って！あたし明日勝ちたい！」

その声に４人は振り返る。

「せっかく４人がいるんだし、できるんなら記念に勝ちたい」

女子は振り絞るような声で言った。

けれどのっけから勝ちに興味のない４人はシラーッとしている。

「頑張って」

麻冬はニコッと作り笑いをして、さっさと教室を出て行こうとする。

でも女子はそれでも続けた。

「４人がいるから…なんて、そんな無責任な言葉４人が嫌がるのは分かるよ。でも４人がいてくれるから実際に勝てる」

「…あのね、スポーツで優勝するのは４人じゃ無理なの」

麻冬は呆れたように言う。

春樹も麻冬に続いた。

「優勝するにはそれなりのことしなきゃ勝てないんだよ。みんなそれぞれの種目優勝できるくらい練習した？」

春樹がそう言うのももっともなのだ。

朝や放課後練習するでもなく、体育の時間に真面目にやるわけでもなかった。

春樹たちはもちろん優勝する気なんてサラサラなかったからまだ良いけれど。

「意気込みだけして勝てるんなら毎日必死に部活やってるあたしらは何なのって話でしょ」

こう言ったのは夏実だ。

「まーな。勝ちたいって願望だけで勝てるなら練習しねぇよ」

秋人も言った。

４人にそう言われたその女子は、うつむきながら泣きそうな顔をしている。

女子を泣かせる、という罪悪感よりケンカモードに入ってめんどくさいと感じるほうが断然大きい４人。

優勝したい、勝ちたいと思うのが個人の勝手なら、勝たなくて良いというのも個人の勝手。

後者が４人全員に当てはまってしまったがためにこんな雰囲気になってしまう。

「だいたいあたしらに何を頑張れって言うのよ」

麻冬はうんざりした顔をしながら怒り気味に言う。

「あたしらが出るのはクラス種目とスウェーデンなの。クラス種目なんてあたしらじゃなくてあなたたちが頑張るものでしょ」

「確かに。俺らスターターもアンカーもやるんだから繋ぎのお前らが頑張ってくんなきゃ俺らどうしようもねぇわな」

秋人が麻冬に便乗する。

４人はそう言うけれど、決して悪気があるわけじゃない。

スポーツを長年やっていれば誰だってそう思うのだ。

それすらいらないと言うのなら４人が部活を懸命にやってる意味さえ否定される。

実際のところ正しい。

「まぁさ、別に優勝は興味ないけどあたしたち負けず嫌いだから、自分が出る種目は絶対負けないから」

夏実はピースしながらウィンクをする。

「竹取棒上げクラスリレー、それすらスウェーデンの勝利は期待してて良いよ」

春樹は猫っぽい顔つきで言う。

そして麻冬も、まぁ焼き付け刃でなんとかなるもんじゃないけど、なんかやらなきゃ始まらないよ、と助言する。

そしてあたしらは部活があるから何もできないけどね、と付け足した。

「ま、やる気がなきゃ勝てるものも勝てないけど。俺らは俺らで勝つからそっちも頑張れば」

秋人は手をヒラヒラ振って教室を出ていった。

3人も秋人に続いて教室を出ていく。

4人が出ていったあと教室内は数秒くらいシーンとなっていたけれど、すぐに誰かが口を開いた。

「遥やったじゃん！」

「えっ、あたし別に何もしてな…」

「4人にあんなこと言えるのすごいよっ」

クラス中がザワつき出す。

遥というその女子を囲むようにしてワッと盛り上がった。

「まぁ確かに4人が言うのも当たり前だよな。4人に頑張ってもらうんじゃなくて俺らが頑張るもんだよな」

男子が言った。

周りの男女が納得したように頷いた。

「なんでもかんでも４人４人って言うから４人は嫌になるんだ。頼りすぎてた」
「体育祭は全員が頑張らなきゃ勝てないよな」

みんな４人の顔色ばかりうかがってるからなかなか本音が出せないでいるだけ。

でもそんなことは４人は決して望んでなくて。

４人はそれを分かって欲しいだけなのだ。

いつまでも４人が、４人がって言ってたらクラスは４人のものになってしまう。

「よーし、一発やってやろーじゃねーかっ！」

誰かの雄叫びに、クラス中が一丸となって
「おー！」と叫んだ。

その声は隣のクラスまでにも響いていた。

next

第37話【不穏】

「おぉ月影、今日の部活は体育祭の準備だから部員に言っといてくれ」

4人が屋上へ行くために職員室に秋人が鍵を取りに行き、すり替えて職員室を出て行こうとしたときちょうどサッカー部顧問が職員室に入ろうとしてきた。

「あっ」

秋人はそういえば去年もそうだった…なんて心で思う。

もちろんその顧問の話は職員室の前で待っていた3人にも聞こえたわけで。

「えーっ?!やだっ」

春樹が露骨に嫌そうな顔をして、麻冬も忘れてた…と少しだけ嫌そうな顔をした。

ただ夏実だけが嫌そうな顔をしなかったから、春樹が夏実に嫌じゃないの?と尋ねた。

「ふふっ。バレー部ライン引きだったから超楽だもん」

夏実は楽しそうに答える。

そんな夏実にサッカー部顧問が言った。

「あ、仕事はローテーションだから去年とは違う仕事な」

「えっ！」

ずっと同じ仕事だと思い込んでいた夏実は軽くショックのようだ。

体育祭はグランドでやるが、その準備はグランド部活だけでなく運動部全般がやらされる。

体育館で部活をやるバレーやバドは部活をしようと思えば今日の放課後もできるわけだが、人手も足りないということで手伝わされるのだ。

ちなみに各部の部長は部活単位でやった仕事の最終確認を朝しなければならない。

つまり部活の朝練はないけど体育祭の最終確認のため４人ははやく学校へ行かなくてはならない。

運動部は得することもあるが割りと損することも多々ある。

まぁ損得のために運動部に入る入らないを決めるわけではないのだが。

それはそうと、とりあえず屋上の鍵を手に入れた４人は屋上へ向かった。

今日は良い天気だからピクニック気分だ。

だけど日が当たったまま食べるのは熱いので日影へと行き、弁当を広げる。

極力夏実と秋人は隣に座るようにしている。

どちらかがそう言ったわけではないが、お互いはやく治したいと思っているからこその行動だろう。

「言いすぎたかな」

春樹がモグモグとご飯を食べながら言った。

「そっかな?まぁ良いんじゃない。あそこまで言って何も変わらないならそれまでってこと」

夏実はウインナーを片手にそっけなく言う。
横で麻冬も同意している。

「てかさ、なんであたしがプリンセスなわけ？」
「俺だってプリンスの意味が分かんないよ～」

そして2人はほぼ同時には
「秋人と麻冬は分かるけどさ」と言った。
秋人はキングで麻冬はクイーンなのだが、確かにそれは分かる気もする。

「まぁプリンスよりはマシだわな」

秋人が春樹を見ながら言う。

「俺だってプリンスならキングのが良い～っ」

春樹はプーッと頬を膨らませて文句を垂れる。

「どーせならもっとちゃんとした役柄にして欲しいわね」

麻冬がケラケラ笑いながら秋人に同意を求める。

秋人も、麻冬に便乗した。

「さしずめ夏実はナイトで春樹は小人だな」

無表情で黙々と食べながらそんなことをサラッと言ってしまう。

ナイトなんて男だし、小人なんて言われて嬉しくはないはずだけど

夏実も春樹も

「確かに…」なんて言って妙に納得してしまっている。

それが麻冬のツボに入ったらしくお腹を抱えて笑っている。

「あ、てことは月曜日学校休みじゃん?」

春樹が思い出したように言った。

明日の土曜日に体育祭が行われるため月曜日は振替休日になるのだ。

当然部活もないわけで。

「じゃあみんなで遊びに行こうよ。あたし久しぶりにディズニー行きたいな」
「えー、かったりぃ」
「もー秋人は面倒くさがりなんだから！俺サイクルスポーツセンター行きたい」
「富士急でも良くない？」
「いっそ沖縄とか。土曜の夕方から」
「あほ。日曜の部活どーすんだよ」
「あ」

みんなテンポよくポンポンと意見を出して行く。

基本的に休日も部活がある４人は１日丸々４人で遊べる日はないのである。

夏休みでさえほとんどなかったくらいだ。

だから久しぶりに出かけられるとはりきっている。

「俺家でくつろぎてー」

秋人が眠そうに言う。

いつもならこんな言葉は軽くかわされるものだが、今回に限っては

みんな秋人の言葉に耳を傾けている。

「そうねぇ、良いかも」
「たまには４人でまったりするのも悪くないかぁ」
「有楽系は高校受験で休みになる日とかにしよっか」

部活、勉強、部活で正直疲れているのが現状。

いくら公立といっても全国常連校なだけあって練習だってハードなのだ。

年に５～８人くらいは辞めていくような部活の部長を４人はしているくらい。

ゆっくりしたいというのも分からなくはない。

「５限音楽かぁ」

夏実が少し面倒くさそうに言った。

「音楽楽じゃない。歌ってれば良いんだから」

麻冬がおかずを食べながらそっけなく言う。
確かに今は音楽祭に向けての歌の練習がほとんどだから音楽史とかの勉強はない。
「てか曲目なんだっけ」
「時の旅人」
秋人の質問に春樹が答えたが、その答えに麻冬が驚いた。
「えっ、待って。それ他のクラスとかぶってる」
「かぶっても良いんだよ。その方が得点も出しやすいし」
「そんな…」
麻冬が驚くのも無理はない。
秋人は麻冬が普通以上に驚いてるから、なに？と尋ねた。
麻冬は数秒置いて、そして秋人のほうを見ながら口を開く。
「阿笠のクラス」
「……フルートか！」

秋人もアチャー…という表情をした。
ようやく麻冬が驚いた理由もこれで納得できるわけだ。

夏実と春樹だけは意味がよく分かっていない様子で、なんなのかと麻冬と秋人に問うた。

2人は気まずそうに顔を見合わせる。

「…まずピアノにフルートってだけで得点上昇。しかも阿笠のフルートは別格なの」
「べ、別格？」
「麻冬のピアノと同等の腕なんだよ、あいつは」
「えぇ？！阿笠そんな特技あったんだ！」

去年の音楽祭では阿笠はフルートを吹かなかったから春樹が知らないのも無理はない。

麻冬も、なんとなく阿笠のクラスには負けたくない…というより阿笠に負けたくないと思い始めている。

負けたくないというよりは、楽しく演奏する阿笠を見て自分もやりたくなったというのが正解か。

「でも阿笠くんのフルートだけじゃ分かんなくない？要は歌が大切でしょ」

夏実は淡々と言うけれど、春樹はため息をつく。

「だめなんだ。阿笠歌上手いんだ。去年俺のクラス優勝したけど阿笠がいたから」

「そうだっけ？でもいくらなんでも阿笠くんだけのおかげじゃ…」

「阿笠のソロで高得点取れたんだよ」

春樹の言葉を聞いて、夏実は意気消沈する。

無理もない。

阿笠には音楽の才能がありすぎているんだ。

それでも音楽よりサッカーを選んだわけだが。

今年は阿笠の歌に加えて阿笠のフルートだ。

2倍の強さになったと言っても過言ではない。

「阿笠くんってそんなすごい人だったんだぁ」

夏実は少し嬉しそうに言う。

「そんな人と付き合えて麻冬はラッキーだね」

夏実がそう言ったとたん、３人の間でだけ微妙な空気が流れた。

一瞬のことだからもちろん夏実は気づかないわけだが。

好きじゃないのに阿笠と付き合ってることを良く思わない春樹

麻冬の決断になんとなく悶々としている秋人

そして秋人を好きなのに阿笠を選んだ麻冬

何も知らないのは夏実だけ。

もちろん秋人とて全てを知っているわけではないけれど。

「そうね」

ニコッと微笑んだ麻冬。

嫌そうに視線を反らす春樹と秋人。

麻冬を羨む夏実。

４人の思いはまったく食い違っていた。

ｎｅｘｔ

第３８話【変わってゆくクラス】

「んー、だめ。ちょっと音外れてる。もっかいサビから」

昼休みが終わり5限の音楽が始まった。

楽譜が渡され各パートごとの練習に入る。

麻冬がソプラノ、夏実がアルト、秋人が男子パートのリーダーを務めるため3人が頑張ってみんなを引っ張って行ってる。

「じゃなくてー、幼い日々の手のぬくもりがかえってくる♪のあとはこう！」

麻冬は歌って教える。

みんなも麻冬の指示通りにやろうとするけれどなかなか上手くいかない様子。

麻冬の場合はソプラノパートを教えるだけでなく…

「麻冬ちゃん、ちょっと良いかな～っ」

伴奏者の女子が麻冬を呼ぶ。

麻冬は返事をして、パートの人たちに練習しとくように言ってから彼女のところへ向かう。

なに？と麻冬が尋ねると伴奏者は楽譜を指差しながら、ここが上手く弾けないんだけど…と言う。

麻冬は彼女にかわって椅子に座り楽譜を眺める。

「ここね。じゃあ弾いてみるから見ててね」

そう言って麻冬は綺麗な旋律を奏でながら弾く。

「ちょっと指使いがやっかいなとこは置く指かえると良いよ」

麻冬は弾き終えて椅子から立ち上がる。

そして、今度は彼女にその部分を弾かせながら細かく説明していった。

麻冬が伴奏者を嫌がったため彼女がやることになったが、彼女の腕は波。

麻冬とは比べものにはならない。

伴奏する分には問題ないのだが、対抗するには…

「まーふゆっ」

ピアノを教えている麻冬のところに春樹が現れた。

春樹は練習を抜け出してきたようだ。

「あっ、あんた秋人に見つかったら…」

「もう見つかってる」

麻冬が言い終える前に秋人がそう言った。

秋人は春樹の服をつかんで戻そうとするが春樹は粘る。

「え〜もう飽きたよぉ！」

「やかましい」

「秋人だって麻冬の伴奏聞きたいでしょー？」

ノーとは言えない秋人は、呆れたように春樹を見る。

春樹は勝った！と言わんばかりにニヒッと笑った。

「あたしー？伴奏するのは佐野ちゃんだよ」
「良いじゃん良いじゃん。麻冬の聞きたいもん」

躊躇する麻冬に春樹は無理を言う。

仕方なく麻冬は春樹のリクエストに答えて再び椅子に座って楽譜を並べた。

1回だけだからね？なんて言いつつもピアノが好きな麻冬は鍵盤を前にするとやはり嬉しそうに微笑む。

麻冬が弾き出すと、練習しているはずのクラスメートが止まる。

夏実もトコトコとピアノに近寄ってきた。

まずは前奏。

なめらかに弾きこなす。

歌に入ると、春樹が歌い出した。

少ししてから春樹を追うように夏実まで歌い出す。

春樹が秋人のシャツの裾を掴むと、秋人はため息をついてから春樹と同じパートを歌い出す。

3人が歌うものだから伴奏をしている麻冬も歌い始める始末。

全パートが揃っている。

4人で歌ってるものだから声はそんなに大きくはないが、3パートが重なることで綺麗な歌声となっている。

春樹はそのうち指揮をし出し、秋人は男子たちに「こいよ」と指で合図する。

秋人に合図された男子たちも最初はためらいながらも歌い出して、夏実がアルトパートの女子を手招きしたからアルトも歌い出した。

麻冬は何も合図はしなかったけれど男子パートとアルトパートが歌い出したためかソプラノパートも歌い始めた。

指揮者がいれば麻冬はちゃんとその指揮に合わせる。

中盤に差し掛かる頃にはクラス全員が歌っていた。

始めたばかりだしお世辞にも上手いとは言えないけど、麻冬の美しい旋律がリードして迫力はある。

ソプラノは麻冬のように高い声を出そうと頑張るし、アルトも夏実に合わせようとしている。

だいたいこんなとき男子は歌なんか嫌がって遊んでそうなのだが、6組に限ってはそんなことはない。

なぜなら、男子のボス的存在である秋人がしっかりやっているからだ。

4人は4人が立ち上がればなんとかなると思われることを嫌うけれど、実際にそうなのだから致し方ない。

そのうち歌が終わり麻冬の後奏に入る。

ここからは春樹と麻冬の一気打ちだ。

左手で歌を止めた春樹が今度は右手をゆっくりと握る。

その瞬間ピアノの音もなくなり、ワッと歓声が上がった。

「すごい！こんな風になるんだっ！」

「なんかやる気出たかも！」

クラスの人たちはワイワイと騒ぎ出した。

そんな中ピアノの側にいた3人と麻冬もクスクス笑い出す。

伴奏をするはずだった女子が麻冬の隣に行き、こう言った。

「あの、やっぱり麻冬ちゃん伴奏やってくれないかな？」

麻冬はキョトンとした顔をして、その女子はまた人任せにするの？と言われるとでも思ったのか慌てて付け足した。

「あっ、あのね！やっぱ麻冬ちゃん上手だし歌って伴奏がかなり重要になるし…たぶんみんなも歌いやすいと思うの」

「…」

「無理ならあたしがやる。でも麻冬ちゃんも今楽しかったでしょ？あたしも麻冬ちゃんの伴奏だったから楽しかったの」

彼女は、決してできないとは言わなかった。

麻冬に何度も伴奏を教えてもらって弾けるように努力した。

それでも、勝利を見据えて麻冬に託そうとした。

そんな人にそう言われて、断る理由なんかあるだろうか。

麻冬が3人の顔を見ると、春樹は大きく頷いたし夏実はウインクしながらピースをし、秋人は口元が少し微笑んでいた。

そしてクラスみんなのほうを見回す。

「…あたしなんかで良いの？」

麻冬はたどたどしく言う。

一度キッパリと断ってしまった手前、なんとなく気まずそうだ。

けれどそんな麻冬の思いとは裏腹にみんなは言った。

「なんかじゃなくて、麻冬が良いんだよ」
「そーだぞ。雪原さんがやってくれんなら俺ら本望だし」

みんなが麻冬が伴奏をすることを多いに望んだ。

麻冬が最初に断ったのは、ピアノを練習する時間があまりないからだ。

けれど時の旅人はもう弾けるんだから、全く知らない曲を練習するより遥かに楽すぎる。

時間がないなんて言い訳なんか到底できない。

それに阿笠が演奏すると言ったときから伴奏やれば良かったと思っていたのも事実だ。

「じゃあ…やる」

麻冬は嬉しそうに笑った。

麻冬がやると言った瞬間、音楽室には歓喜の声が響き渡った。

麻冬にやってほしいのは彼女だけでなくクラス全員同じ。

最初に麻冬を推薦したのだって、麻冬がクラスの中で一番ピアノが上手いからだ。

たびたびそういうことを押し付けられる麻冬たちには、もはや実力ではなく名前で選ばれてると思い込んでるところがあるが。

「やーった！麻冬良かったねぇ～！」

春樹は飛び上がりながらキャッキャッ喜んだ。

「えへへ、うん。阿笠たちの伴奏に負けないように伴奏してみせる」

麻冬が春樹にそう言ったのを聞いた一部の男子が声を上げた。

阿笠のクラスと同じ曲目なのか?!と。

びっくりしながら麻冬が肯定すると、男子たちは昼間秋人が阿笠のクラスと同じ曲目だと知って驚いたときと似たような反応をした。

つまり阿笠のことをよく知っている同中の人たちだ。

阿笠と同じ中学ということは当然麻冬とも同じなわけだ。

阿笠が音楽の才能があることを知らない他のクラスメートが何なのか問うと、その男子たちが詳しく説明してきた。

中学時代の音楽祭では麻冬と阿笠が重奏してぶっちぎりで優勝したことさえ話している。

3年間クラスは全部違ったけど中学のときは2クラス合同だったから2年のとき偶然一緒になったのだ。

相思相愛真っ最中だった。

音楽祭のこともあって2人の仲がいっそう深まったことは言うまでもない。

「じゃ、阿笠に勝てる方法を考えれば良いんだよ」

誰かが言った。

「だな。なんか秘策考えて真っ向から対抗しなきゃ！」

クラスメートたちは麻冬に頑張れとは決して言わなかった。

麻冬の腕はもちろんだけど、音楽祭は歌がキーだと分かってるからなんとかしようと思ったのだろう。

秋人や春樹や夏実に頼ろうともしていない。

あくまで自分たちもやらなきゃと言っている。

いろいろ積み重ねてきた中で、分かったのだろう。

クラスは何かが変わろうとしていた。

next

第３９話【夏実の告白】

放課後になると、運動部による体育祭の準備が行われた。

今年のライン引きは水泳部…つまり麻冬たちの仕事だ。

バド部はテント貼りでサッカー部とバレー部は机・椅子を設置する係になっている。

テントと鉄パイプは倉庫から、机と椅子は体育館から持ってこなきゃならないから大変なのだ。

部員総勢でやるがなかなか時間もかかってしまう。

「あー…あっつー…」

夏実が手をかざしながら空を見上げた。

サンサンと晴れた太陽が夏実を照らして体力を奪う。

「部長、ここは自分たちでやるんで休んでてください」

暑さに弱いことを知ってる部員が夏実に声をかけた。

「んー、でも…」

夏実は少しためらった。

部長である自分が休んでるなんて他の部員に示しがつかないことを気にしている。

夏実はパイプ椅子を3つ持っているが、重さのせいと暑さのせいで少しクラッときた。

「夏実！」

副部長が倒れそうな夏実を支えようとすると、副部長より先に誰かが夏実を支えた。

「ばか、ちゃんと帽子かぶれっていつも言ってるだろ」

秋人だった。

秋人の顔を見上げた夏実は反射的に秋人から離れようとする。

「月影くん、この子…」

副部長の子が気まずそうに何かを言いかけた。

「大丈夫。夏実、ほら向こう行って休むぞ」

夏実は嘘みたいに抵抗はやめて素直に秋人に従う。

秋人はパイプ椅子を副部長に預けて、貧血を起こしつつある夏実をおぶさってその場を離れた。

「…月影くんにも平気になったんだ」

秋人はとりあえず出来上がってるテントに行った。

テント貼りはバド部の仕事だからバド部がたくさんいる。

秋人はそこらへんの部員にシートをひくように言って、そこに夏実を寝かせた。

「わり、ちょっとここ借りてて良い？」

「あ、どうぞ」

秋人は自分が着ていたYシャツを脱いで夏実にかける。

ちょうど下に黒いTシャツを着ていたから問題はない。

そのうち夏実が寝ていることを聞いた春樹が飛んできた。

「秋人！夏実はっ？」

「寝てる。大丈夫」

「そっか」

春樹はホッとした。

そして夏実に近づいてのぞきこむように見た。

「秋人仕事のほうは平気？」

「あー…」

夏実のそばに腰をおろしながら春樹は秋人に問う。

秋人は歯切れの悪い返事をしているから、春樹は

「テントん中ならバド部の範囲だし俺見てるよ」と言った。

秋人も夏実のそばを離れたくはないけれど、仕事のほうが心配だから戻ることにした。

机と椅子運びは男子サッカー部と女子バレー部の仕事だから部長が両方いなくなったら困る。

秋人は変に真面目だから仕方なくテントから離れた。

「あ、そっちは向こうのテント。それはここ」

春樹は的確に指示をする。

みんな春樹の指示に従ってテキパキと動いた。

春樹は小さくてもやっぱり部長を務めるだけあって統率力がある。

実力だけではない。

春樹はあれこれと指示をし終えて一段落ついてから、フゥ…とため息をついた。

夏実はまだ眠っているようで、春樹は夏実にかけられているシャツに目を移した。

「…Tシャツだったな」

春樹はさっき秋人がシャツを着ていなかったことを思い出して、そう呟いた。

無造作に落ちているネクタイを拾い上げる。

入学式以来着けていないネクタイをじっと見つめた。

何を思っているのか。

「…長？部長？」

「えっ？」

ボーッとしていた春樹に部員が声をかけた。

どうやら仕事が終わったらしく、何をしたら良いのかを春樹に尋ねた。

「あ、あー…」

春樹は慌ててグランドの回りをキョロキョロと見回す。

「じゃあ陸上部とバスケ部と男バレの仕事手伝ってあげて」
「うぃーっす」

部員たちがぞろぞろと他部の仕事を手伝いに行く。

テントには春樹と夏実だけになった。

春樹は夏実の頬にそっと触れる。

「わっかんないなぁ…」

少しだけ切なそうな顔をしながら、夏実から手を離し見つめる。

夏実はだいぶ顔に血の気も戻ってきていてぞろぞろ起きても平気な様態だ。

夏実なんて一番夏の暑さに強そうなのに一番弱いとは。

「なんか…いろいろ頭ん中回ってる」

春樹は小さな言葉で誰も聞いていないけれど語りかける。

「自分のことだけ考えて…周りを…秋人を押し退けるとか…麻冬を見て見ぬ振りするとか…」

春樹の声はどんどん小さくなっていき震えていく。

握っていた手を開くと手汗が出ていて、その手をおもむろに見つめた。

「そんなこと…できない」

今の時点ですべてを知っている春樹にはどうにも動けないでいる。

違う…

すべてを知っているのは麻冬のほうだ。

春樹は夏実が春樹を気になっていることを知らない。

もし知ったら春樹はどんな行動をするんだろうか。

やっぱり身を引くのか。

「…ん…」

夏実がかすかに声を上げた。

どうやら気がついたようで、手で頭を押さえながらゆっくり目を開けた。

隣で春樹が起きた夏実をのぞきこみながら安堵した表情をする。

「夏実、気がついたんだ」

「あれ…あたしどうなったんだっけ…」

春樹が説明する前に、夏実は自分にかけられているシャツに気づいて、それがすぐに秋人のだと理解したようだ。

「そっか、秋人が助けてくれた…んだっけかな」

「うん、そう」

「春樹も付いててくれたんだ。ありがとね」

夏実は笑顔で言った。

春樹はニコッと穏やかに笑って何も言わない。

「…春樹？」

夏実はいつもとは少し様子の違う春樹を不思議に感じた。

春樹はなに？なんて平然で答えるけれど、はたから見たら別人のように見える。

「なんか…あった？」

夏実はたどたどしく尋ねてみたが、春樹はそれすらも何もないよと答えるだけ。

春樹自身いつもと違うことに気づいてないのだ。

だからそんなことを尋ねてくる夏実のほうが不思議だ。

夏実はゆっくりと上半身を起こす。

もう貧血も大丈夫のようだ。

「どうする？バレー部のとこに戻る？」

「まだ仕事中かぁ」
「でもまた悪くなるといけないしまだ休んでると良いよ」

春樹はいつからそんな大人っぽい笑顔をするようになったのか。

いろんなことを思い、いろんなことを抱えているから心から笑えてないだけなのか。

「…ねぇ春樹？」

暇そうに立ち上がってストレッチをしている春樹に夏実が話しかけた。

春樹はクルッと夏実のほうを振り替える。

「春樹前に言ったよね。４年以上片思いしてるって」
「え…あ、あー」
「あたし春樹は麻冬のことが好きなんだと思ってた。でも違うんだね」

春樹は心の中で
「え？」と呟いた。

夏実の言っている意味がよく分からないらしい。

どっちみち夏実はまったくの勘違いをしている。

「春樹が誰を好きなのかは分からないけど…」

夏実は緊張しつつもじっと春樹の顔を見上げる。

「あたしは春樹が好き…」

その瞬間春樹は少しだけ驚いた顔を見せたけど、視線を少しずらして右手で口をふさいだ。

目を合わせたら喜びが伝わってしまうから。

「……ごめん」

予想外にも春樹の答えはノーだった。

4年以上片思いしてきた人からの告白を無下にも断っているのだ。

なぜ?

「あ…そうだよね、好きな人いるもんね」
「それは――――…」

それは違うと、春樹には否定することができなかった。
否定したら断った理由の意味が分からなくなる。

「あ、でも明日からもちゃんと仲良くいつも通りにしてよ？あたしと同じくらいハジけてくれるの春樹だけなんだから」

夏実はニッと笑う。

そして、夏実はやっぱり部のほうが心配だからそろそろ行くね、と言って起き上がる。
秋人のシャツを持って。

「帰りは…どうするの？」
「あー…４人でどっか行く？」

夏実も気まずそうに聞く。

春樹は夏実を見て作り笑いをしながら

「あ、急用があったんだ俺」と言った。

「…そっか。じゃあまた明日」

夏実は逃げるように走っていなくなった。

春樹は夏実の姿を見ることなく、ただただその場に立ち尽くす。

思い描いていた夢

ずっと夢見ていたのに

「…なんでっ…」

春樹はやり場のない悲しみと怒りを必死に抑えている。

走り去った夏実も、テントから少し離れた人目につかない場所で立ち止まる。

目から涙が溢れている。

手で拭おうとしても拭いきれないほどの涙が。

両思いなのにすれ違う。

こんな悲しいこと

あるだろうか。

next

第４０話【体育祭】

翌日、見事に体育祭日和の天候になり体育祭が行われた。

午前中の種目がすべて終わったところで、今のところ1位は1組で6組は3位だ。

宿敵薄井のクラスにあと一歩及ばないでいる。

2年によるクラスリレーやらなんやらはぶっちぎりで1位だったけど、4人がいない種目はやっぱり必ずしも1位取れるわけではない。

それでも3位にまできているのだから大したものだ。

「かんぱーいっ」

午前中の種目のあとは1時間の昼休みに入る。

当然4人は一緒に食べるわけだが、体育祭の日は夏実と麻冬が作るのだ。

去年もそうだったし、今年は2人は部長だから朝はやく行かなければならないけどそれでも更に早起きして作った。

「あはは、これ夏実のだ！」

春樹が焦げたウインナーをフォークでさしながら笑った。

「えー！なんでぇ？！」
「麻冬が焦がすわけないもぉん」

昨日あんなことがあったにも関わらず2人はいつも通りに接している。

夏実が今まで通りに…と言ったから春樹は忠実に従っている。

夏実も夏実で必死に友達ではいたいとすがっている。

なんて痛々しいのだろう…

「いーの！焦げたって味は変わんないし！」
「いつも康介にやらせるから」
「だって康介なんでもできるんだもん」

2人が康介の名前を出すと秋人が反応した。

「そういや最近康介に会ってねぇな」

秋人は康介をなかなか気に入ってる。

秋人には3つ上の姉がいて下にはいないから、弟というものに少し憧れがあるらしい。

輝樹も嫌いじゃないが、秋人と同じで愛想がないからお互い引き付け合わないみたいだ。

ちなみに麻冬は一人っ子だから兄弟はいない。

「会いたいならうち来ると良いよ」

夏実が答えた。

近いうちに行こうかな、なんて秋人も返事をして、そのうち話題が変わる。

去年の体育祭の話で盛り上がり出した。

結局去年は4人がいたどのクラスも優勝はしなかった。

バラバラのクラスだった4人だけど仲は良いわけだから何か種目を

見たり昼食を食べるのは一緒だった。

たぶんそのとき麻冬がいたクラスが全体でビリで、春樹のクラスが2位くらいだった。

4人で適当に喋っているところへ麻冬のクラスの3年女子が来て麻冬に文句を言ったのだ。

『他のクラスの奴と喋ってる暇あんなら応援しろっつの』
『有名人の雪原がいりゃ良いとこまで行けるかもなんて思ったあたしらがバカだね』

ただのヒガミだが、負けん気の強い麻冬には逆効果だ。

秋人たちが言い返そうとする前に麻冬が不敵な笑みを浮かべながら言った。

『あら、さっき転んだ先輩ね』
『な…』
『あれさえなければ7位にはなってましたよねぇ。自分のミスを年下に押し付ける気?』

麻冬の言葉に言い返せないでいる先輩たちをよそに、夏実と春樹がクックと笑いを抑えようとしている。

『いや、6位だな』

秋人が真顔でそう言うものだから、春樹たちは笑いをこらえられずに完璧に笑っている。

『も、もう良いわよっ』

罰が悪い彼女らはそそくさといなくなって行った。

2歳上にも強気なのはさすがに麻冬くらいだろう。

その他にも春樹が組体操のピラミッドの天辺から落ちた話や、夏実がダンスの中ソロでバク宙やら何やらのアクロバティックやった話や、秋人がアンカーを務めるときにバトンが渡ったにも関わらず靴紐を縛っていた話。

ちなみに秋人の話は、半周くらいぶっちぎりで1位だったからやったらしいんだが。

結果的に優勝したから笑い話になった。

４人のネタはなかなか尽きないでいる。

麻冬と夏実が作ったお弁当を食べながら楽しい尽きない話をする。

はたから見たら、なんて幸せな空間だろう。

けれど実際にはそんなことはなくて。

でもただこうして話をしている間はきっとみんな、そんなモヤモヤなんか消し飛んで本気で楽しんでるかもしれない。

昼休みが終えて午後の部が始まっても、４人の出番はあとは一番最後だけなのだ。

あと2時間くらいは時間が空いている。

暑さ防止で帽子をかぶり濡れタオルも持ち、うちわも持って夏実はスタンバイオーケーだ。

夏実の支度が終わると４人は球技をしているところのギリギリ近場まで行って応援…いや、見ている。

どうやら今は借り物競争をしているようだ。

靴を借りたり人を借りたりと大忙しに競争者が走り回る。

見ている分には楽しいが。

そんなとき、観覧している4人のもとに男子球技者が2人走ってきた。

「雪原来てくれ！」

「月影！ちょい頼む！」

そう叫ばれ、同時に2人は訳も分からず手を引っ張られてゴール目掛けて走って行く。

今は3年生の借り物らしく、2人は仕方なく付いていく。

「ちょー先ぱぁい～」

いかにもだるそうな秋人が嫌そうな声を出すと、3年男子は「あとでジュースおごっから！」と言った。

ただジュースにつられて秋人は真面目に走り出す。

ここではいかに早く借り物を見つけられるかと足の早さが関係してくる。

ほぼ同時に走り出した秋人ペアと麻冬ペアの一騎打ちだ。

「うし！1着！！」

勝ったのは秋人ペアのほうで麻冬たちは2着だった。

ゴールしたあと借り物の内容を係りが確認していく。

秋人を連れた人の紙にはサングラスが似合う男子と書かれてあって、係りが秋人にサングラスをかけた。

内容をまだ知らない秋人は勝手にサングラスをかけられて、しかもそれを係りの人たちに審査されてる。

もちろん全員一致でオーケーだが。

「なんすか」

「ん？サングラス似合う男子」

「はぁっ？」

「月影にピッタリじゃん」

3年男子は語尾にハートをつけて可愛く言った。

呆れてものが言えない秋人のそばで、今度は麻冬ペアが内容確認をしている。

麻冬たちのはウェーブヘアの女子らしく、うなずける。

そんなこんなで疲れて帰ってきた2人を春樹と夏実がからかった。

「あははお疲れー」

麻冬と秋人はまったくだよ、という表情をしている。

麻冬が選ばれた意味はよく分かるが秋人のはからかいがいがあるらしく、春樹は秋人に突っかかる。

まだ借り物はあと2年生と1年生もやるわけだから、また走らされたら面倒だからと秋人と麻冬は見つからないように遠くで休んでると言った。

残された春樹と夏実はお互い顔を見合わせて、少し微妙な雰囲気を漂わせる。

それも当たり前だ。

それでもなんとか話題を作って2人は気まずくならないように頑張

った。

そのうち時間は経過し、最後から2番目の種目の中盤に差し掛かった。

スウェーデンのメンバーに召集がかけられ、４人は集合場所へと集まっていく。

６組のメンバーが出揃ったところで、１２人で円陣を組んだ。

３年男子の掛け声のあとに、みんなで精一杯大きな声を出す。

ここまでで6組は2位にまで上がっている。

1位との差は少し開いているがスウェーデンで1位になれば逆転優勝ができる。

スウェーデンでしか、もう逆転できる機会はない。

最後の大砦の種目

スウェーデンリレー

ホイッスルとともに

いざ始まる。

next

第４１話【感動のリレー】

ピストルがパーンと鳴ったと同時にスターターが走り出す。

２００メートルのグランドで１人半周ずつ走る。

本部側が偶数者で観覧席側が奇数者が用意する場所。

つまり秋人と春樹が本部側で夏実と麻冬が観覧席側。

６組のスターターは麻冬で、男女混じっていて８人中５人も男子なのに麻冬は３位で走っている。

麻冬の運動神経も実は計り知れないのだ。

麻冬が２番目の人にバトンを渡し、コースからグランドに入る。

「お疲れ麻冬」

春樹が声をかけた。

「んー、3位だよぉ」
「やーすごいよ！男子に混ざってなんだから。ね、秋人」
「おう」

秋人はアンカーのタスキを着けている。

6組の証、ピンクのタスキ。

ピンクのハチマキにピンクのTシャツ、それでもってピンクのタスキだから本当にピンク三昧だ。

気の毒なことに。

もうじき出番がくる中、春樹はぼんやりと考えごとをする。

もちろん考えるのは夏実のことだ。

昨日の告白は春樹にとっては本当に嬉しいことなのに、春樹は受け入れようとはしない。

走って帰ってベッドにうつぶせになっても涙すら出ない。

嬉しくて嬉しくて悲しいはずなのに、自分の心を押し殺してしまっている。

春樹は前に阿笠に言われたセリフを思い出している。

『櫻井のそーゆー真っ直ぐなところ良いよね』

『え』

『俺にも周りのことが見えてれば違う未来があったかもしれない…』

確かに春樹は周りのことがよく見えている。

だから麻冬や阿笠の心配だってしるし、人一倍優しい。

けれど、その優しさが阿笠と同じ道を辿っているとは夢にも思わないんだろう。

阿笠は麻冬のことを考えてしまったために好きなのに別れた。

春樹とて両思いのはずなのに、好きなのに振ってしまった。

好きな人を諦めた麻冬にはああ言ったのに、春樹は重大な間違いをしてしまっている。

「春樹、そろそろ出たほうが良いぞ」

秋人が春樹に声をかける。

我に返った春樹はハッとして、すぐにラインに立つ。

ちなみにバトンゾーンは１５メートルあるが、春樹は前の人の負担を減らすためギリギリに立つ。

さらに春樹の次の走者の負担さえも減らすために、１５メートルあるバトンゾーンのうち１２メートルも走るのだ。

つまり基準の１００メートルを越えている。

６組メンバーの男子で一番速いのは確かに秋人だが、次に速いのは春樹なのだ。

「櫻井が抜かしたー！！」

麻冬のあと２人に抜かされた６組だが、春樹が２人抜き返し、バトンゾーンでさらに１人抜かした。

つまり今２位で走っている。

7番走者にバトンを渡し、春樹はグランド内に入る。

「はーっ…」

ひざに手を置いて春樹は息を整える。

「すごいよ春樹、3人抜き」
「へへ。あとは夏実と秋人に任せるだけだね」
「うん！うちらも頑張るよ」

夏実は9番走者だから、すぐに出番がくる。

夏実もラインに立ち、8番走者が走ってくるのを待った。

春樹が健闘するも7番走者が1人に抜かされて、だが8番走者がその1人と競り合っている。

最後の種目にふさわしい大接戦のリレーである。

「夏実ー！頑張れー！！」

春樹の叫び声とともに夏実にバトンが渡り走り出した。

1位との差は6メートルほどだ。

夏実に抜けない距離ではない。

だが次の走者にバトンを渡す15メートルほど手前で、競っている1年男子が自分の足にからまり、夏実のほうに転んできた。

もう少しでその男子を抜けそうな矢先、その男子が夏実に思い切りぶつかってきたため夏実は足をくじいた。

「いっ――――…」

夏実は足を抱えて地面にふさる。

「夏実ー!!」

秋人が麻冬が春樹がメンバーが、コースギリギリまで近寄ってくる。

みんなが夏実の名前を叫んだ。

麻冬がコースに入って夏実のところへ行こうとしたけど、その前に夏実が自力で立ち上がった。

「夏実！だめよ！」

麻冬が止めるも、夏実は足を引きずりながら歩き出す。

２人の走者に抜かされていく。

「夏実やめろ！靭帯切れてたらどーすんだ！」

麻冬の横で秋人も叫んだ。

それでも夏実はよろよろと歩き続ける。

秋人は１０番走者にラインギリギリにいるように指示した。

本当はバトンゾーンの中７メートルほどまで夏実が走る予定だった。

その７メートルを減らし、少しでも早く夏実がバトンを渡せるよう

にしたのだ。

つまり8メートルだ。

夏実は最後の力を振り絞って次の走者にバトンを渡した。

手をかしたくても、グランド内までは他の走者の邪魔になるといけないから自力で来なければならない。

夏実はひょこひょこと足を引きずながら、ようやくグランド内に入ってくる。

「ごめん、みんな」

夏実の周りに集まってきたメンバーに夏実が言った。

「なに言ってんのよ！3組が悪いんじゃないっ」

「そうだぞ。海野はよくやった！」

みんなが口々に言った。

１０番走者が走り、１１番走者が向こうで構えている中、残りリレ

ーを走る人はこの中で秋人だけだ。

みんながチラッと秋人を見る。

「秋人…」

申し訳なさそうに秋人に近づく夏実。

秋人は深く目を閉じている。

みんなが秋人の名前を呼んだ。

もう秋人しかいない。

秋人しか頼れる人がいない。

「…アンカーは２００メートルだよな」

秋人がゆっくり目を開けながら夏実を見つめる。

「う、うん」

夏実も答えた。

秋人は不安がる夏実と他のメンバーを見回して、ニッと笑った。

「俺に任せろ」

根拠はない。

保証もない。

けれど、誰もが秋人の言葉を信じた。

秋人はラインに立って用意をする。

１１番走者が走っている時点で、順位は４位だ。

そして

最後の剣ヶ峰

秋人にバトンが渡った。

「秋人ーー！！」

麻冬に支えられながら夏実も、そしてみんなも秋人に頑張れと叫んだ。

スウェーデンリレーのメンバー以外の全６組も立ち上がって秋人の応援をしている。

ここまで熱いリレーが今までにあっただろうか。

『６組のアンカー２人抜かして２位になりました！１位との差は約２０メートル！！』

実況も入り、グランド中が多いに盛り上がる。

いつも真面目に体育すらやっていないのに、今の秋人は本当に本気だ。

本気の秋人に敵う人なんて学校の中にはいない。

『ゴール１０メートル前！２組と６組が並びました！！』

２０メートルも前にいた２組アンカーに追い付き、ものすごく競り合っている。

２組と６組の応援がさらに増してグランド中に響いた。

秋人はくいしばりながら、６組全員の思いを背負いながらゴール手前で２組アンカーを抜き、テープを切った。

『ゴール！６組１位でゴールです！誰が想像できたか奇跡の大逆転！！２組は２位でゴールです！』

テープを切った秋人の周りに人が溢れた。

みんな秋人に駆け寄って歓喜の声を上げる。

秋人は倒れるように地面に仰向けになる。

「秋人っ！」

夏実がケンケンしながら近づいてきて、そして仰向けになっている秋人に抱きついた。

「…夏…？！」

まだ男性恐怖症の治っていないはずの夏実が自ら抱きついてきたのだ。

驚く秋人をよそに、夏実は大声でごめんねとありがとうを言った。

秋人は自分に抱きついている夏実の背中を支えながら上半身を起こして、夏実の頭に手を置いた。

「任せろって言ったろ。お前を守るのは俺だ」

「秋人～っ…」

「不可能なんてねぇんだよ」

秋人は夏実を諭すかのように言いながら笑った。

すると3年のメンバーだった男子がガッツポーズしながら言った。

「よーし！月影を胴上げするぞーっ！！」

他の男子たちも元気よく
「おーっ！！」と叫んだ。

麻冬が夏実に手をかして立たせ、3年男子が秋人を持ち上げた。

「えっ、ちょっ…！」

秋人の嫌がりなんかまるっきり無視され、胴上げがされた。

その周りを全6組が囲み、歓声を上げる。

スウェーデンリレー1位

そのため

6組

堂々　総合優勝

next

第４２話【打ち上げ】

『以上で第〇〇回体育祭を終了致します』

体育委員の委員長があいさつをして体育が終わった。

みんなぞろぞろと教室へ帰っていく。

６組は本当に優勝をなし、３年６組が賞状を授与した。

夏実は閉会式の間保健テントの中で治療を受けた。

派手な転び方をしたけど、若いし鍛えているだけあって軽い捻挫ですんだようだ。

秋人と麻冬と春樹は保健テントに夏実を迎えに行く。

「夏実平気？」

麻冬が心配そうに聞いた。

夏実はいつも通り元気に

「平気平気！」と答えた。

そして夏実の肩を借りて立ち上がり、４人は歩き出す。

「本当むちゃだな」
「だってー、勝ちたいじゃん」
「夏実らしい」

秋人は夏実を見てフ…と軽く笑う。

棄権させるだけが守るってことではないことを秋人は分かっていた。
きっと棄権するよりも、自分がこの手で優勝に導いたほうがきっと
夏実は喜ぶと。

「あ、夏実治ったの？」

春樹が思い出したように尋ねた。

なにが？と夏実が聞き返すと、春樹は
「さっき秋人に抱きついてたじゃん」と言った。

そう言った瞬間春樹もハッとし、夏実も顔を曇らせた。

「あ…ね、なんか勢い的にいっちゃった」

作り笑いをしながら夏実が答えた。

「ちょっと秋人に触ってみてよ」
「うん」

麻冬に言われて夏実は秋人の腕に触れた。

前みたく拒絶反応はまったく出なく、夏実自身も平気そうだ。

秋人も少し驚いている。

「やったじゃん夏実！」
「うん」
「あれ、嬉しくないの？」
「え？あ…ううん、あたしもちょっとビックリしちゃって」

そんな夏実に麻冬は
「だよねぇ」とケラケラ笑う。

だが秋人は不穏な雰囲気の夏実と春樹に気づいていた。

なにかがおかしい、そう思っているけど聞けない。

春樹はああ言ったことを後悔しているようだ。

昨日告白してくれた人に言うセリフではない。

夏実自身も昨日告白した人の前で違う男子に抱きついたのだから居たたまれない。

「…秋人のおかげだね」

春樹はニパッと笑った。

「まさか、偶然だろ」

「えーでも秋人のおかげよ。男の怖さ知って恐怖症になったんだから、男の優しさを知って治ったんじゃないかしら」

そう言う麻冬に春樹は

「なるほどね～」と感心している。

春樹が平然を装っているのを見て夏実も平然になろうとする。

「いろいろ心配かけちゃってごめんねぇ。恐怖症もリレーも」

夏実は語尾に（笑）を付けながら言う。

「んじゃまぁ夏実の快気祝いと優勝祝いで亀八行くか」

秋人がハチマキを外しながらそう言うと、春樹が
「優勝したから群ちゃんの奢りで焼肉っしょ？」と訂正する。
そういえば昨日担任の群青先生が優勝したら焼肉と言っていた。

「あ、そっか」

そんな会話をしながら、４人はゆっくりと教室へ帰る。

夏実が足を怪我してるため3人も歩くスピードを合わせていたから、
４人が教室に入った頃にはもうみんな席についていて、担任も壇上
に立っていた。

「おぉ、櫻井月影海野雪原。お疲れさん」

どうやら４人を待っていたようだ。

群青は少しウキウキ気分で４人にそう言った。

麻冬は秋人に夏実を任せて、春樹とともに席につく。

秋人に抵抗しない夏実を見て少しザワッとしたが、２人は気にせず席に向かい、夏実を椅子に座らせて秋人も着席した。

「えー、じゃあ改めて優勝おめでとう」

４人が席に着いたところで、担任が話し出す。

「まさか本当にできるなんてな。特に最後のリレーはすごかった」

担任の言葉にクラス中が一斉に秋人のほうを見た。

だが秋人はもう居眠りタイムに入ったのかうとうとしている。

「まぁ固いセリフはなしにして、約束通り焼肉ごちそうしよう！」

すると、ワッ！とクラスが盛り上がった。

そのあと少しだけ連絡事項などを伝えたりして、ＨＲが終わった。

場所は学校から1キロくらいにある場所で、みんな歩いて行くことになった。

だが夏実は足を怪我しているため、春樹が担任に詰め寄る。

「群ちゃん、俺ら４人車で」

春樹は可愛らしく語尾にハートをつけた。

「夏実怪我してるんだぁ。群ちゃん乗用車だから5人でピッタリじゃん」

群青はチラッと夏実を見て、

「確かにその足じゃ大変だな」と言った。

結局４人は群青の車に乗せて行ってもらえることになった。

４人はまだ着替えてなかったため着替えた。

群青は職員室に行くらしいから、着替え終わったあと４人は職員室へと行き、群青と一緒に駐車場へ向かった。
さっき春樹も言ったように群青の車は乗用車だから後ろに３人乗れるが、夏実の足を考えて広い助手席に夏実が座った。

快適に車を走らせていると、大通りの歩道をぞろぞろと６組の生徒が歩いている。

１キロなんて車じゃあっという間だが、歩くと２０分くらいはかかる。

まだ夕方になる前だから焼肉屋もかなり空いている。

宴会用の部屋も用意できるらしいが、そのほうが余分な値段もはるので普通の席にした。

４０人余裕だ。

群青は何やらメニューを見ながら店員と相談をしている。

４人は窓際の４人席に座り、メニューを広げてあれこれ言い出した。

「おーきた、俺牛タン」
「カルビっしょー」

「最初は軟骨よ」
「麻冬ばばくさいっ」

とりあえず担任が飲み放題にしてくれたから、じゃんけんで負けた麻冬がジュースを取りに行った。

飲みながらたわいもない話をしていると、ようやくクラスメートたちが焼肉屋に来た。

４人と同様適当にみんなも座り、メニューを見たり飲み放題を利用したりして、店内が一気に溢れ帰った。

そのあとから副担任の女性も来たりして、コースが各テーブルに運ばれる。

みんな一目散に肉に手を伸ばしてどんどん焼いていく。

「麻冬～、豚」
「はいはい」

夏実が麻冬にそう言うと、麻冬はいつものことのごとく夏実の分も焼く。

夏実は基本的にこういうことはしないのだ。

調理実習では包丁を使わせてもらえなかったり、カニは絶対自分では剥かなかったり。

夏実の不器用さに加えてほったらかすと何しだすか分からないからみんなから進んでやってくれるのだ。

「はーい。こっちも！」

春樹も野菜やらを夏実の皿に入れていく。

みんなもう慣れている。

ちなみにもちろん飲み放題には酒なんてない。

居酒屋行こうとしていた４人は少し残念な気持ちもある。

担任と副担任も車を運転するから酒は飲んでいない。

それでもタダで肉が食べれるのだから御の字だ。

みんな大いに盛り上がる。

４人も世間話をしたり体育祭の話をしたりと楽しそうだ。

1時間半くらいするとどのテーブルもコースをすべて食べ終えて満足している。

そんな中秋人はこっそり牛タンを追加して未だに焼いている。

秋人に便乗して3人も牛タンをつっついているが、担任にバレて軽くしかられた。

担任が夏実を家まで送ると言ったけど、夏実が遠慮したから春樹が「俺が連れてくよ」と名乗り出た。

とりあえず4人は学校まで送ってもらい、自転車で帰ることになった。

だがまだ夕方で、4人そろうのも久々だから夏実の家に遊びに行くことになった。

夏実は春樹の自転車の荷台に乗り、3人は自転車を走らせて夏実の家へと向かった。

next

第４３話【幸せの定義】

「あっれー、姉さんその足何？」

玄関で出迎えた康介が夏実の足を見て言った。

「リレーでコケちゃってね～」
「大丈夫？」
「うん、なんとか」
「そう。じゃみなさんどうぞー」

４人は家の中に入った。

自分の部屋へ戻ろうとする康介に麻冬が近づき、耳元で囁いた。

「あの件、部活がないときならオッケーよ」

楽しそうに言う麻冬に、康介は軽く顔を赤くして春樹のほうを見た。

春樹がベッと舌を出す。

康介は恥ずかしそうに「うん、お願い。麻冬姉」と言って、そそくさと部屋へ駆けあがって行った。

夏実たちも夏実の部屋へ行くために階段を上る。

台所のほうから母親が顔を出して、あとで飲み物とお菓子持っていくわねーと明るく言う。

少しちらかっている夏実の部屋を見て、麻冬は「だらしないなぁ」なんて言いながらさっさと片付ける。

夏実はエヘヘと笑って誤魔化した。

みんな適当に腰を下ろしてくつろぎ出す。

麻冬がファッション雑誌を開いているから夏実がのぞきこむと、ちょうどヘアスタイルのページになっていた。

「あたしもパーマ…かけよっかな」

夏実は雑誌に載っているヘアをじーっと見ながら呟く。

「珍しいこと言うわね」

麻冬がそう言うと、そしたら麻冬みたくなれるかな?と夏実は冗談

交じりに言った。

冗談ではないことは、春樹には瞬間的に分かった。

だから春樹は知らないふりをして漫画を読み続ける。

「お前はストレートのが良い」

寝っ転がりながら音楽を聞いている秋人が口を出した。

「え、そっかな？」

「お前っぽい」

秋人はそう言ってくれるけど、夏実は内心自分っぽくなくても良いから麻冬みたくなりたい、と思っている。

何も知らない夏実は、麻冬は幸せいっぱいだと思っている。

好きな人とより戻して両思いで幸せな毎日を送っている…と。

実際にはそんなことはないのだが、夏実の目にはそう見えている。

「あ。月曜どうする？」

春樹が思い出したように言う。

確か結局４人でくつろぐことにしていた。

「夏実んちよね、やっぱ」

夏実の足を気にして麻冬がそう言った。

けど月曜はお客が家に来るらしく家は使えないと夏実が言うから、

みんなでどこにしようか考える。

「春樹んちは？」

夏実がそう言うと、みんなの顔色が変わった。

なぜならみんな夏実が春樹の家でされたことを知っている。

「だめだよ！」

春樹が勢いよく叫んだ。

「あいつ何であんなことしたか知ってる?!俺が夏実のことっ……」

春樹はそこまで言いかけて、言葉を詰まらせた。

「俺が夏実のこと…?」

夏実が不思議そうに聞き返すも、春樹はワナワナと震えながら何も言えないでいる。

まさか言えるはずがない。

俺が夏実のこと好きだから、輝樹が嫌がらせでやりました…なんて。

なんとなく察した秋人が、春樹の代わりに言った。

「まぁもう少し時間置いたほうが良いだろ」

「うん、でもね、違うの」

夏実は諭すように言う。

「…春樹が輝樹から何聞いたか知らないけど、あたしも輝樹からちょっと聞いた」
「…なにを？」
「それは言えない…でも、きっと輝樹辛いよ。だからあたし輝樹と話したいの」

麻冬と秋人は少しだけ納得しているような雰囲気だ。

輝樹が本当はそんなことする奴じゃないことをちゃんと知っているから。

それでも春樹は断固として認めなかった。

「話し合ってもきっと解決しない。夏実こそ何聞いたか知らないけど…あいつは俺に面と向かって言ったんだ」
「…なに？」
「……俺が夏実のそばにいる限りきっと、…絶対輝樹は納得しない」

遠回しに言うものだからもはや春樹の言葉は3人には理解不能だ。

だけど麻冬も秋人も、春樹は事実を知っているからこそ夏実を止めているということだけは分かっているようだ。

「よく分からないよ、春樹」

夏実は真剣な顔をしている。

「何をそんなに心配してるのか知らないけど」

夏実は春樹をじっと見る。

ひるむことなく夏実に視線をぶつけている春樹に、夏実は凍りつくような言葉を言う。

「あたしにああ言った春樹にあたしを止める権利あるの？」

春樹は事実を突き付けられて戸惑いを露にした。

その言葉に麻冬と秋人は素早く反応したが、その重々しい空気から何も聞けずにいる。

春樹はギュッと拳を握り、眉間にしわを寄せる。

そしておもむろに立ち上がり、カバンを拾い上げて夏実に向かって怒鳴りつけた。

「あーそうかよ！勝手に心配なんかして悪かったね！！」

春樹は今までに見せたことのないような怒りの形相で夏実を睨んで、部屋を出ていった。

階段をドタドタと駆け下がる音が聞こえ、そのうち玄関を開けて閉める音もした。

「あいつ…っ…」

秋人も自分の荷物を持って急いで部屋を出て春樹を追いかけた。

春樹が自転車に乗ってちょうど走らせようとしているとき、秋人が春樹を止めた。

春樹はさっきとは打って変わって、悲しそうな表情を浮かべている。

どう考えても深い訳がありそうだから、秋人は近場の公園に行って話を聞くことにした。

公園の入口に自転車を止めて、春樹はブランコに座る。

秋人はブランコを支える柱に寄りかかって立っている。

キコキコ軽くブランコを揺らすも、春樹は何を聞いても喋ろうとしない。

切なそうな顔で今にも泣きそうなのに、吐いてしまえば楽になるのに、春樹は頑として何も言わないのだ。

そんなことが続き３０分が経過した頃、春樹はようやく口を開いた。

「…秋人」

待たされたにも関わらず秋人は怒るでも寝るでも嫌がるわけでもなく、ちゃんと春樹の顔を見て耳を傾ける。

「俺、幸せの定義が分かんない」

いきなり突拍子なことを言われて秋人は心の中で「はっ？」と声を上げた。

そんなの秋人にだって分かるはずはない。

だけど秋人は決して分からないとは言わなかった。

「…どこまでが幸せなのか、どうなれば幸せなのか、それは自分で決めることだ」
「じゃあ秋人は幸せ？」
「…幸せだけど」

秋人がそう言うも未だ少し納得できていないようだ。

「なんで？」

春樹がじっと秋人の顔を見るものだから、冗談で聞いてるわけじゃないことは一目散だ。

春樹が弱音吐くことは珍しいことだから、秋人はしっかり受け止めようとしている。

「サッカーできてお前らがそばにいる。これ以上幸せなことは…」
「ないって言える？」
「…どういう意味だ？」
「夏実…夏実手に入れてやっと本当の幸せになるんじゃない？」

秋人は意表をつかれて言葉が出てこない。

秋人は誰にも恋心がバレていないと思ってたのに先日阿笠に知られていたことを知った。

おまけに阿笠は麻冬から聞いたと言う。

麻冬や阿笠に続いて春樹まで知っているとは、驚かないはずがない。

「…じゃあ何か？お前は夏実を手に入れてないから今は幸せじゃないって？」

「幸せじゃないとは言わないけど、幸せでもないかも」

「で、どうするわけ？」

夏実は麻冬ばかり好かれてずるいと思っているけれど、麻冬にしたら夏実のほうがよっぽど幸せなのだ。

秋人も春樹も夏実のことが好きで、おまけに春樹とは両思い。

ウェーブなんかにしなくても、ストレートのほうが幸せの要素を持っている。

「…うーん。でも俺さ、なんか夏実のこと好きじゃなくなったかも」

春樹は微笑する。

「は？何言って…」

「うん、なんかやっぱ違うなって思って。だから秋人俺のこと無視して頑張ると良いよ」

「それは自ら幸せの道から遠のいてくってことだぞ」

秋人がそう言っても、春樹は何も言い返さない。

そんなことは春樹には百も承知なのだ。

それくらい覚悟して夏実の告白を断ったんだ。

春樹はブランコから下りて、地面に置いていたカバンを拾って砂を払う。

「別に夏実のこともう好きじゃないんだから、秋人に譲ることは幸せの道から遠のくわけじゃないっしょ？」

顔は笑っているけども、なんとも寂しそうな雰囲気を漂わせている。

春樹は公園の入口に向かって歩き始める。

秋人も春樹に続いた。

幸せを捨てた男と
幸せを掴まん男

自転車に乗ってそれぞれ違う方向へと進んで行った。

next

第４４話【思い違い】

「夏実ぃ、春樹となんかあったの？」

春樹と秋人が出ていき、麻冬はそな場に留まった。

明らかに何かあったような2で、しかも春樹と夏実なんて滅多にケンカもしない。

「んーん、なんも」

夏実はそう言うけど、何もないわけがない。

麻冬は更に詰め寄った。

「じゃあ、『ああ言った春樹に止める権利あるの』ってどういう意味なのよ？」

「…」

「なんか言われたの？」

麻冬は何度も尋ねるけど、夏実は春樹に告白したことだけは絶対に言わなかった。

プライドなのか何なのか。

とにかく麻冬にも秋人にも、他の誰にも知られたくないようで。

「春樹は夏実を心配して言ったんだよ。あんな言い方よくない」

「…だって」

だって、のあとは何も言わない。

麻冬は軽くため息をついて、ベッドの上に座りなおす。

「らしくない。そんな顔」

夏実も春樹と同様切なそうな顔で今にも泣きそうだ。

本来ならば今この時間だって春樹と楽しく幸せに話してるはずなのに。

なのに春樹も夏実もちっとも幸せなんかじゃない。

秋人はそれでも今幸せだと言う。

けれど…

「あたし…いけないこと言ったのかな」

夏実はようやく口を開いた。

足の指を手でいじりながら言う夏実に、麻冬はなんのためらいもなく「当たり前よ」と言った。

けど夏実はそれでも微妙にまだなんか言いたげだ。

夏実が屁理屈なのではなく、夏実がそう感じるまで春樹にひどいことでも言われたのだろうと麻冬はすぐに理解した。

けれどそのあとの春樹の形相を見れば、本当に夏実を心配してる風にしか感じられない。

何を言われたのかは知らないが、春樹にとってはなんてことない言葉が夏実を追い詰めたのかな…なんて考えもしている。

「…麻冬は良いな」

「なに？」

「幸せそうで」

麻冬はその言葉に一瞬にして凍りついた。
なにを見て幸せそうだと言ったのか麻冬にはまったく分からないでいる。

「…だからウェーブにしたいんだ?」

麻冬は怒りや悲しみを通りこして、微笑して言った。
そうだよ、と答える夏実に麻冬は笑いも尽きて真顔をしている。

「それならあたしはストレートにしたいわ」

麻冬がそう言うと、夏実は麻冬の顔のほうを向いた。
正直夏実には理解できないだろう。
実はそんなにも悩んでる夏実のほうが麻冬よりよっぽど幸せじゃなくないことを。
どういう意味?と聞き返す夏実に、そのまんまの意味よとだけ言う。

「なんで?」

「こっちこそなんでよ」
「だって…じゃあ逆にウェーブが嫌な訳は何？」
「たぶん、夏実には分かんないわ」

麻冬は少しだけ切なそうな表情を見せつつも穏やかに言った。

振られたばかりの夏実には彼氏がいる麻冬のほうがよっぽど良いに違いない。

お互いがお互いの事実を知らないがゆえに、お互いを良いと思ってしまう。

なんて皮肉なことか。

「…美人で才女で料理もできて運動神経良くてみんなの憧れで、阿笠くんっていう彼氏がいて、それ以上何を望むの？」

夏実は眉を逆八の字にしながら言った。

「そうだから望むのよ」

麻冬も夏実に対抗して少しムッとしながら答える。

言ってしまえば良いのに。

あたしの好きな秋人は夏実のことが好きなんだって。

春樹も夏実が好きなんだって。

だけど、きっと麻冬の口からは一生言わない。

言いたくないだろう。

「人が羨むものなんでも持ってるくせに、何言ってんの」

夏実が吐き捨てるように言うものだから、麻冬はカチンときた。

たぶんお互いの胸の内を明かせ合わないとずっとこんなすれ違いばかりだ。

夏実は確かにずっと麻冬を羨んでいた。

さっき夏実が述べた事実に加えてピアノもできて大人っぽくて、夏実には無縁の世界。

しかし、それとて麻冬には意味のないものだ。

夏実が麻冬を羨むように、麻冬も夏実のような元気があっていつも楽しそうで、みんなが憎めないような存在でありたいと思うのだ。

秋人がそんな夏実を好きになったのだから。

「…いつだって一番欲しいものは手に入ったことはないわ。昔も…今も」

何か言いたげな夏実をよそに、麻冬はベッドから立ち上がってカバンを持って
「じゃあお大事に」と言って部屋を出ていく。

「…なんなの？」

夏実は言葉の真相を知りたくても走って追いかけられないため、ただただ麻冬がいなくなるのを見ているしかなかった。

そっと窓から覗くと、そのうち麻冬が玄関から出てきて止めてあった自転車に乗ってこぎだす。

夏実の部屋のほうは、決して見向きもしなかった。

夏実は麻冬の姿が見えなくなるまで…いや、見えなくなってもずっと窓の向こうを見ていた。

男性恐怖症がようやく直ってこれからまた４人で本当の友情が取り戻せると思った矢先、これだ。

夏実と春樹がいがみ合い、春樹と秋人は譲り合い、夏実と麻冬は羨みあう。

１つ何か起きて解決したらまた何かが起こる。

その繰り返しの日々は、単なる偶然なのだろうか。

高校２年生という、一番楽しい時期。

楽しい時期だからこそなのかもしれない。

恋愛に友情

望むものができれば歯車が狂うのは当たり前かもしれない。

麻冬はその夜、秋人に電話をかけた。

夏実と言い合いして何も知らない夏実にイラつきすらするが、なんだかんだ言って心配なのだ。

それはもちろん秋人も同じだ。

秋人は春樹が夏実を好きなことをずっと知っているし、簡単に変わる気持ちじゃないと分かっている。

それでも秋人も負けじと恋をしてきた。

「春樹は何か言ってた？」
『いや…何があったか結局教えてくれなかった』
「そう…夏実もなの」

麻冬は部屋で雑誌をパラパラめくりながら会話をしてる。

逆に秋人は公園で電話をしている。

麻冬から電話がかかってくるまでボールを蹴っていたのだ。

どこまでもサッカーが好きな男。

『だけど変なこと言ってた』

秋人はタオルで汗を拭きながら言う。

変なこと？と麻冬が聞き返す。

『夏実のこともう好きじゃないって』

「……はっ？」

『だけどたぶん本心じゃない』

麻冬は雑誌を閉じて秋人の話に耳を傾ける。

秋人も近場のベンチに腰を下ろした。

『なんか、幸せの定義って何かとか…いろいろ言ってた。なんか…なんだろ、振られた…ってことはないか』

「振られたから諦める…それなら矛盾はしないわね」

『でもひどいこと言われたのは夏実なんだよな』

「そうね。てことは、その理屈はなくなるわ」

2人はあーだこーだ言い合うも、結局それらしい結論は出せずにいる。

それもそうだ。

まさか春樹のほうが断ったなんて夢にも思わないだろう。

少し話をしてから、麻冬はたどたどしく秋人に尋ねた。

「…ねぇ、本当に春樹が諦めるとしたら、秋人どうするの？」

麻冬は秋人が夏実を好きなことを知っている。

けれど秋人は麻冬が秋人を好きなことを知らない。

こんなことを聞いても麻冬は阿笠と付き合っている。

それは変えられない事実。

『どうするって』

秋人は汗で冷えたのかジャージの上着を着る。

「だってチャンスでしょ」

『そうだな。春樹もいないしガンガン攻めるかな』

麻冬はその秋人の言葉にズキッとする。

上手く言葉が出てこないでいる麻冬がいることも知らず、秋人は淡々と続ける。

『なんて言うわけねーだろ』

「え…」

『そんな性格じゃねぇし。俺』

そ…そっか、と麻冬は安堵したような声を出す。

『明後日どうすんだろな、まじ』

「ねぇ。あの様子じゃ…」

せっかく4人全員が1日中休みだというのに。

こんなつまらないケンカで楽しみにしていた休日さえ失う。

それでも、麻冬には秋人の言葉だけが心に残っていた。

next

第45話【優しさと悲しさと、切なさと】

「よし、じゃあ次は紅は……ん？」

翌日午後、部活をすること2時間、突然雨が降りだした。

最初はポツポツ程度だったからそのままサッカー部は紅白戦を行ったが、すぐに大降りになった。

せっかくの部活だけど大会も近いし体を壊すといけないからみんな屋根のあるところへ避難する。

結局部活は中止となった。

水泳部も同じで、軽く大降りな程度なら泳いでいたがそのうちかなりの大降りになったから部活を中断することになった。

秋人は部室に戻り、他の部員たちもぞろぞろと秋人に続いた。

濡れた頭をタオルで拭きながら、秋人は携帯をイジリだす。

麻冬の着信履歴から麻冬の携帯に電話をかけようとすると、阿笠が

話しかけてきた。

「災難だったね、本当」

阿笠もタオルで頭を拭いている。

ふいに秋人は携帯を閉じてロッカーに置いた。

「ああ」

阿笠の存在にハッとしたのだ。

ついいつもの癖で麻冬と一緒に帰ろうとしたのだ。

けれど麻冬は阿笠と付き合ってるから、もう秋人とは帰らないことになっている。

ただ2人が付き合い始めてからまだ一度も一緒に帰っていない。

だから秋人もその癖が出てしまったのだろう。

「阿笠」

秋人は練習着をぬいでYシャツを着てネクタイを巻いている。
隣で阿笠も着替えている。

「俺、お前にも幸せになる権利はあるって言ったよな」

突然の意外な話題に阿笠はピタッと手を止める。
秋人のほうを振り向くも、秋人は淡々と着替え続けている。

「…言ったよ」

すると秋人は阿笠の顔をじっと見て、そしてまた視線をずらす。

「…俺にもあると思う?」
「あるよ。誰にだって」
「誰にだって?…じゃあ春樹にも」
「?そりゃあると思うけど」

阿笠には秋人が何を聞きたいのか分からずにいる。

秋人は何を思って阿笠にそう尋ねたのか。

2人とも着替えをすませ、秋人は阿笠に
「じゃあな」と言って部室から出ようとする。
そんな秋人を阿笠が止めた。

「秋人！」

阿笠の声に秋人が振り向くと、阿笠は少しだけ真剣な顔をしている。
なにかと思うと、その真剣な顔から今度はいつもの穏やかな表情に
変わって携帯の画面を秋人に見せながら言った。

「俺傘ないんだ。入れてってよ」

携帯の画面はメール受信の画面になっていて、麻冬からだった。
ミーティングやるから先に帰ってて、というような内容。

「…あるじゃん、傘」

秋人は阿笠の開いているロッカーを指差す。

青い折り畳み傘が顔を出している。

阿笠はさっと傘をロッカーの奥に入れて、
「壊れてんだ」と言う。

「…本当優しいんだな、お前」

秋人はそう呟くけれど、阿笠には聞き取れなかった。

なに?と聞き返す阿笠に、秋人は早く来ないと入れてかねぇぞと言った。

阿笠は荷物を持って秋人と一緒に部室を出る。

はたから見れば男同士の相合い傘なわけで多少気味が悪いが、それが秋人と阿笠だから誰も何も言わないのだ。

2人は雨降る外を歩きながら、サッカーの話をし始める。

ザーザーという雨の中、2人の距離が近いせいかしっかりと声は聞こえている。

雨に濡れながら走って帰っていく生徒や自転車で急いで帰る生徒もいれば、傘を並べて楽しそうに帰る生徒もいる。

2人とも話題に盛り上がりつつもどこか落ち着きがない。

「あ、本屋寄って良い？」

秋人がそう言ったから本屋に寄ることにした。

阿笠は週刊誌コーナーで立ち読みしていると、前に同じクラスの男子がいることに気づき声をかけた。

「田島」

「おー阿笠。あ、部活帰り？」

「ああ。秋人と」

「月影か。あ、月影といえばさっき櫻井見たぜ」

「ここで？」

「おう。ついさっき出て行ったけど」

阿笠はなぜか春樹の名前に敏感に反応した。

「つかお前ら部活は？」

田島と言うその男子は、部活はバスケ部だ。

「午前中。ちなみに櫻井んちもな」

「あーなるほど」

そんな会話をしていると、田島はコホンと咳払いをして阿笠に小声で言った。

「なぁ、お前海野さんが櫻井に振られたって知ってるか？」

「……は？」

「あれ、聞いてないか」

田島は、櫻井は親友の月影にそれ話すだろうし月影もお前には話したのかと思ったよ、と言った。

いまいち話についていけてない阿笠は軽く頭を抱えた。

「そんなはずないって。どこの噂だよ？」

「噂じゃねぇよ。俺見たし」

「えっ」

そして田島は、海野さんが休んでたテントに荷物を運んで帰ろうとしたときに海野さんが起きて櫻井に告白したんだ、と詳しく状況を

説明した。

聞いてちゃ悪いと思ってすぐに離れたけど、櫻井が断るところまでは聞こえてしまった…と。

「まじかよ…」

阿笠は言葉にできないというような顔をしている。

どうやら聞いてたのは田島だけのようだ。

そのテントはほぼ完成してたからみんな違うところで仕事していたし、何より周りはガヤガヤとしていた。

だからテントの本当に近くにいた田島だけが聞こえたのみ。

田島もテントのすみに荷物を置いたものだから2人の視界には入っていなかった。

ただそれだけのこと。

「お前それ他に…」

「いや、誰にも言ってねぇ」
「だよな。お前良い奴！」

阿笠は週刊誌を元あった場所に戻して、田島に「じゃあな」と言って走って本屋を出て行った。

「阿笠ー？なんだあ？」

良い奴はどっちなのか。

阿笠は何のために傘もないのに雨の中走るのか。

バシャバシャと水をはねるせいでズボンが濡れる。

それでも雨を振り切って阿笠は走った。

「櫻井！」

ようやくこの雨の中傘を差している人を見つけ、阿笠は思い切り叫んだ。

すっと振り返ったその人は、確かに春樹だ。

5メートルくらい後方にいるずぶ濡れの阿笠に驚いた春樹は、走って傘に入れてあげようとしたが阿笠の声がそれを止めた。

「…なんでお前夏実ちゃん振ったんだよ?!」

なんでそれを知ってるの?と聞いた春樹を無視して、阿笠は「夏実ちゃんのこと好きなんだろ!」と言った。

ザーザー雨のせいで阿笠の髪はもちろんのこと、Yシャツも濡れて下に着ている赤いTシャツの色が浮き出ている。

「…阿笠には関係ないよ」

「ある。だってお前俺のこと心配したじゃないかよ」

麻冬と付き合うことになった阿笠に、春樹はきっと傷つくよと言った。

人が傷ついて悲しそうな顔をしているのを見るのが嫌いな春樹ならではだけど

だけど今回ばかりは間違っている。

「…秋人のために身を引いてんじゃねぇよっ！」

阿笠は力いっぱい言った。

その言葉は春樹の心にズドンとくる。

両思いなのに断る理由、それしかないだろう。

阿笠にはすぐに分かった。

「自分は傷ついてでも秋人を守りたかったのかもしれないけど、それって夏実ちゃんの意思丸無視だろっ」

「……違うよ、阿笠」

春樹は薄ら笑いを浮かべる。

目元は泣きそうなのに。

「守りたいなんてそんな大層なもんじゃない。ただ秋人を出し抜いて夏実と付き合うなんて出来なかっただけなんだ」

「…嘘だ」

「本当だよ」

「嘘だ！」

春樹がそんな人間ではないこと、そう思って身を引いたわけではないことなんて、阿笠にはちゃんと分かっていた。

けれど、本当だよと言う真剣な目付きの春樹が、一瞬昔の自分と重なったように思えて阿笠は言葉に詰まった。

春樹と阿笠はどこか似ている。

その似ている部分が、こういう場面でもっともよく表れてしまうのだ。

阿笠は麻冬の意思を無視して振った。

理由は違えど、その裏に優しさがあることは2人とも同じ。

阿笠は左手で目頭をぐっと押さえた。

分かってしまうからこそ、何も言えないのだ。

春樹も阿笠にかける言葉がなくうつむき、1~2分ほど2人はそのままの状況を保った。

そのうち誰かがすっと阿笠に傘を差し出して、阿笠は雨から防御される。

それに気づいた阿笠が横を向くと秋人がいて、春樹も秋人の存在に気づいた。

ザーザーという音で秋人が歩いてくる音は聞こえなかったのだ。

秋人はびしょ濡れの阿笠にまだ使っていないタオルを渡して、行くぞと手を引いた。

「あ…秋人！ちょ、待っ…」

手を引っぱられながら阿笠が後ろを振り向くと、春樹は2人をじっと見ていた。

そして阿笠が振り向いたのを待っていたかのように、口パクで何かを言って、そしてニコッと笑った。

阿笠も何か言いたかったけれど言えず、秋人に引かれてそのまま春樹とは反対方向へと進んで行った。

阿笠たちの姿が見えなくなると、春樹は堪えていた涙を露にして、

服で涙を拭き取った。

阿笠にも春樹にも

悲しい気持ちだけが残っている。

阿笠は頑張って笑いながら言った春樹の強さに、胸を打たれながらも未だ目頭を押さえて涙をこらえている。

――ありがとう――

next

第４６話【パネル】

「何やってんだよ」

秋人は寒さで冷えきっている阿笠に秋人のジャージの上を羽織らせる。

阿笠は秋人がそうしてくれても、まだ涙が止まらないようでさっき秋人に渡されたタオルで目を抑えている。

阿笠にだって、なぜ自分がこんなに泣いているのか分からないでいる。

ただただ報われない恋愛の存在を悲しく思うのだ。

「…なんでお前が泣くんだよ。春樹も泣きそうだったけど」

本当にはたから見れば奇妙な組み合わせだ。

男同士の相合い傘に加え、１人は泣いている。

秋人にも何が何だか分からないでいる。

「…なんで…」

阿笠は声にならない声で秋人に話しかける。

何が言いたいのか分かったのか秋人は、質問に答えた。

「本屋ん中で阿笠探してたら、田島が阿笠はたぶん春樹を追いかけたって言ったから」

「田島…」

「もしかしたらケンカになるかもしれないから止めたほうが良いかもって」

阿笠は

「そっか…」とだけ言って、それ以上は何も言わなかった。

秋人はなんで田島がそんなこと分かるのか、春樹と2人で何を話したのか、なんで泣いてるのか、聞きたいことは山程ある。

けれど阿笠がようやく泣き止んでも、秋人はそのことに触れることはできなかった。

沈黙の中歩き続けて、十数分くらいしてからようやく阿笠の家に着

いた。

「大丈夫か？」

秋人は阿笠を玄関まで送り、少し心配そうに言う。

「うん、平気。ありがとう」

阿笠は落ち着きを取り戻したようで、少し恥ずかしそうにお礼を言う。

そして秋人が帰ろうとしたとき、阿笠は秋人の名前を呼んで止めた。

「…あのさ、俺秋人に言いたいことあったんだけど…」

一緒に帰る一番の目的だ。

秋人も最初は分かっていたけど、すっかり忘れていた。

秋人が何なのか聞こうと耳を傾けるも、阿笠は意外な言葉を言った。

「だけど…よく分かんなくなっちゃった」

眉を逆八の字にして阿笠は微笑した。

ごめんね、なんて笑って言う阿笠に秋人は何を感じたのか、
「しっかり風呂入れよ」とだけ言って帰って行った。

阿笠は秋人の後ろ姿を見ながら切なくなり、そして秋人に言われた
通りすぐに風呂を沸かして湯船に浸かった。

チャプン…と丁度良い温度の湯に顔を半分くらいまで浸ける。

「…最悪」

阿笠は秋人の前で泣いたことをすごく後悔している。

別に春樹と阿笠はケンカしていたわけじゃないけれど、お互い泣い
てたなんて秋人が変に思わないわけがない。

おまけにせっかく秋人を励まそうとしていたのに、それさえ出来ず
終いだ。

「…あれ？」

阿笠はふと思い出した。

そういえば秋人は櫻井に声をかけなかったな…と。

2人は親友なんだから普通は心配するものだろうのに、2人はじっと一時見つめあって、それ以外は何もなかった。

おかしいことだ。

「秋人も知ってる…?…や、違う」

阿笠が違うと断固するのにはちゃんと理由がある。

もし秋人が知っているなら、阿笠が知っていてもそれは秋人から聞いたと思うはず。

だったら、誰に聞いたの?なんて春樹が聞くわけがない。

麻冬は知ってるのかな、阿笠はと心で思う。

阿笠はあれこれと考えれば考えるほど、何が何だか分からなくなっ

ていく。

阿笠も十分なお人好しだ。

考えるのが億劫になったのか、阿笠はさっさと体や髪を洗って風呂から出た。

「洗濯物出しといたわよ」

阿笠に似て…いや、実際には阿笠が似たんだが、とにかく阿笠と同じように優しそうな母親が脱衣場にいる阿笠に言った。

「あーありがとう」

阿笠はタオルで体と髪を拭いて服を着る。

脱衣場から出ると、母親が夕飯の支度をしていた。

「クリームシチュー…」

阿笠がそう呟くと、母親は

「良い匂いでしょ？」と言う。

阿笠家のクリームシチューにはアスパラが入っている。

昔麻冬がこの家でアスパラ入りのクリームシチューを作って以来、母親もそれを作るようになったようだ。

そのとき居間にある阿笠の携帯が鳴った。

阿笠はトコトコ歩いて誰からの着信かも見ずに電話に出る。

「もしもし」

『阿笠？あたし』

「え、麻冬？」

意外にも麻冬からの電話で阿笠は少し驚いた。

『ごめんね、今部活終わったんだ』

どうやら麻冬は部室からかけてきているらしい。

電話の向こうが少しガヤガヤしている。

「ううん、お疲れ。どうかした？」
『今日阿笠んち行って良い？』
「良いよ。あ、ちょうど夕飯クリームシチューなんだ」
『わ！アスパラ？』
「もちろん」

麻冬は本気で喜んでいるよう。

阿笠はクスッと笑って、
「じゃあ待ってる」と言って電話を切った。

母親に麻冬が来ることを言うと、見たこともないような驚いた顔で
「より戻しでもしたの？」と言った。

阿笠はあっさりと
「うん」と返事をするも、母親はかなり喜んでいる。

母親は麻冬がお気に入りだ。

「もー大悟ってばあんな良い子振っちゃうんだもん」
「悪かったね」

阿笠はソファーに座り、テレビのチャンネルを回す。

どうせそのうち麻冬が来るからと2階へは上がらないようだ。

時間帯的にもたいして面白い番組はやっていない。

阿笠の家は洋風で、父親は外資系の会社に勤めるため一般の家庭よりは裕福だ。

母親も専業主婦で阿笠は一人息子だから、何不自由なく育てられた。

いわゆるお坊っちゃんという部類か。

「あ、ねぇ。秋人から借りたタオルもあるから洗濯し終わったあとごっちゃにしないでね」

阿笠はソファーから身を乗り出すように後ろを向き、キッチンにいる母親に声をかける。

分かったわ、と返事をして母親はサラダを作り続ける。

阿笠は携帯を充電しようと結局2階にある自分の部屋へ行く。

液晶テレビの隣にある棚には数々のトロフィーやら賞状やらメダルやらが置いてあったり飾ってあったりする。

中学選抜で取ったものと高校入ってから取ったもの。

チラッと中学選抜の集合写真のパネルを見た。

そのパネルは中学選抜最後の試合のときのもので畳の2分の1畳くらいの大きさだ。

真ん中でガッツポーズをしている阿笠と秋人。

県の中じゃ怖いものなしの2人だった。

たくさんの強豪校から特待のオファーがきた。

選抜のみんなは様々なところへ進んで行ったが、秋人と阿笠だけは進まなかった。

みんなが惜しいことしたな、なんて口を揃えて言うけれど結果的に2人が同じ高校に行ったことで私立に進んだ人たちよりも上へ行っている。

「権利…ね」

阿笠はそっとそのパネルに手を触れる。

ユニフォームを着て元気に笑ってる中学時代の自分。

あの頃の俺がサッカー特待捨ててまで星陵に入って手に入れたのは、こんなにも脆い気持ちだったのか…と阿笠は心の中で思う。

今も星陵を選んだことに悔いはないけれど、それは単なる結果オーライだ。

先を見据えての結果ではない。

阿笠は麻冬が自分のことを好きになることはきっとないと、思っている。

それでも繋ぎとめておくために今は付き合ってるけれど、いつかきっと決定的なときがくる。

そう分かっていても思いは捨てきれないのだ。

「大悟ー、麻冬ちゃん来たわよぉ」

下から呼ぶ母親の声に返事をし、阿笠は部屋から出て階段を下りて

行った。

そう、それでも君が好きだから――……

next

第47話【思い出とともに】

かなりの雨で麻冬の制服は少し濡れていたため、阿笠の服を貸してあげ制服を乾かす。

まだ夕飯を食べるにははやい時間だから2人は阿笠の部屋へ行くことにした。

「わー、懐かしい」

麻冬は部屋の中を見回して少し嬉しそうに言う。

「増えたねぇ～」

麻冬が棚にあるたくさんの賞たちを見ながら言う。

それもそうだ。

3年のときの県選抜のもの、高校に上がってから1年半分の賞も含まれるんだ。

つまり、その増えた賞の数だけの日数を阿笠は麻冬への思いを秘め

ていた。

「はは、まぁね」

阿笠は紅茶をカップに入れながら受け答える。

「そだ。あのね、あたしんちクラスも時の旅人歌うの」
「えぇ？カブったのか」
「ふふ。でね、あたし伴奏するから」

麻冬はピースしながら言う。

阿笠は紅茶を飲んでいたからブッと吐きそうになる。

「あっ、汚いな」

麻冬も紅茶を手に持ちながら阿笠に言う。

「だ、だって今年は伴奏しないんじゃないの？」
「うん、でもやることになって」
「そっかー」

阿笠は信じられないというような顔をしながら、同時に少し残念そうな顔をしている。

昔阿笠と麻冬は重奏をした。

それはもう美しい美しい音色で、誰もが惹き付けられた。

「どーせなら麻冬と演奏したかったな」

笑って言う阿笠に、麻冬は
「あたしも」と意外な答えを言った。

笑い飛ばされると思っていた阿笠は必死に驚きを隠そうとしている。

麻冬はずっと紅茶を飲んで、そして懐かしそうに言う。

「たぶん…あの頃一番幸せだったの」
「…麻冬」
「でも、もう誰もあたしたちを邪魔する人いない」

麻冬は阿笠と付き合うにあたって決心したものがある。

決めたことはやり遂げる派の麻冬は、それを成し遂げようと頑張っ

ている。

そう、今だって。

「きっと…幸せになれる」

麻冬は微笑みながら言った。

阿笠にはそれが麻冬の本心ではないと思う。

秋人のことが好きなはずなのだから、自分と幸せになりたいと思うはずがない…と。

「阿笠？」

何の反応も示さない阿笠を麻冬は不思議そうに見る。

阿笠は視線を少しズラして、麻冬に問うた。

「幸せって…俺と？」

「他に誰がいるのよ」

「……秋人は？」

麻冬は阿笠から秋人の名前が出てきて、少し戸惑う。

けれど、阿笠の不安を打ち消すかのように、阿笠の頬にチュッとキスをした。

「幸せになりたくて阿笠と付き合ったの。幸せにしてくれるんでしょ？」

麻冬はこれでもかっていうくらいの飛びきりの笑顔をした。

麻冬が笑うと本当に可愛くて、人気があるのもよく分かる。

阿笠は、言葉では表しにくいが…なんというか、感情が込み上げてきてる表情をした。

「…うん」

返事しながら麻冬の後頭部に手を回してキスをした。

甘く長く

愛しむように、宝物を包み込むように

阿笠は麻冬から唇を離し、２人は見つめあってもう一度キスをした。

「んっ…阿か…」

阿笠は舌を麻冬の舌にからませ、ディープをするものだから、麻冬は少し苦しそうに阿笠の名前を呼ぶ。

阿笠は少ししてから口から離して、麻冬の首筋に印をつける。

カプッと音がして、麻冬が
「あ…」と声を上げた。

だけど阿笠はそれだけして、麻冬から離れた。

阿笠…？と麻冬が肩目をつぶりながら阿笠を見ると、阿笠は少し顔を赤くして麻冬から視線を反らしている。

「…わり、だめだ」
「な、なに？」
「…持ってない」

恥ずかしそうに阿笠がそう言うと、麻冬はプーッと笑った。

「あはは、やだぁ阿笠」

楽しそうに笑う麻冬に、阿笠は顔を赤くして少し怒りながら
「お前なぁっ！」と言う。

阿笠が怒っていても麻冬はクスクス笑い続けた。

もー良いよ、なんて珍しく阿笠がスネたから麻冬は何を思い付いたのかカバンからデジカメを取り出してパシャッと阿笠を撮った。

「えっ」

阿笠が振り向くと、麻冬は笑いながら
「スネた記念〜」なんて言っている。

そんな麻冬に阿笠は呆れたように笑った。

笑いが溢れる空間

これが2人が望んでいた幸せな空間なのか。

「あ。明日暇？スイパラのチケットあるんだけど」
「えー行きたい！…あっ」

麻冬は何かを思い出したような顔をした。

何か先約あった？と阿笠が尋ねたから、麻冬は
「夏実と春樹と秋人と遊ぶ予定だった…けど」と言葉を濁らせる。

「そっか。じゃあ仕方ないね」
「ううん、良いの。行く」
「え？でも」

阿笠は4人で遊ぶことに関しては寛大のようだ。

特に気にする気配はない。

「なんか…ケンカ？っぽくなっちゃって」
「ケンカ？」
「うん。夏実と春樹がね～」
「あー…」

阿笠は微妙な声を出す。

2人が何のケンカをしたかは分からないが、とにかく告白が原因なんだろうな、なんて想像したりしている。

「夏実も夏実でさ、ちょっとあたしもムカついたの」

麻冬はプンプンしながら言う。

「なんかあたしのことズルいとか言ってきてね、幸せそうだとか何だとか」

「なるほど」

「でもあの子秋人からも春樹からも好かれてて、しかもたぶん春樹とは両思いなのよっ」

麻冬は

「もー、ほんと頭きちゃうっ」なんて言うけれど、そんな麻冬に阿笠はハハハと笑いながら言った。

「まぁしょーがないよ。だって夏実ちゃん実際にはそうじゃないんだから」

「え？」

「ん？あっ…いや」

阿笠は慌てて言葉をかきけそうとする。

阿笠のセリフと不振な行動から、麻冬は「阿笠…何か知ってる?」と疑った。

夏実は麻冬にも言ってないから、本当に事実の意味を知ってるのは本人2人と阿笠だけ。

田島は詳しくは知らないから含まれないが。

櫻井が秋人にも言わず、夏実ちゃんが麻冬にも言わないということはお互い知られたくないということだろう…と阿笠は素早く解釈する。

「知らないよ。ただなんとなくそーかなって」

「本当?」

「俺嘘言わないよ」

麻冬は、嘘ばっかり…と心で呟いた。

今の阿笠を信用しないわけではないけど、阿笠はその優しい性格がゆえに嘘をつくときもある。

大事なときに。

「…そっか。そうだね」
「うん。だよ」
「あーあ、2人仲直りするのかなぁ」

麻冬は肘をついて、疲れた感を漂わせる。

「どうだろうね。ケンカなんて本当珍しいし」
「でしょ？」

口ではこんなことを言うけど、表面上の和解はしても本当の和解はきっと出来ないんだろうな、と阿笠は感じている。

阿笠と麻冬が和解するのに3年近くかかったように。

もっと早いかもしれないけど、もしかしたら一生できないかもしれない。

一生できないときは、2人や阿笠がその事実を秋人に言わないときだ。

秋人が事実を知れば何か行動を起こすだろう。

けれど知らなければ、春樹たちが結ばれることはきっと二度とない。

実際にそれを体験してきたからこそ分かる阿笠。

「まぁそんなわけだし明日は阿笠と遊ぼっかな」

「了解」

2人は顔を見合わせて微笑んだ。

そんなこんなをしているうちに、夕方になり母親が2人に夕飯にしようと呼び掛けたから、2人は食卓へ向かう。

本当に久しぶりにクリームシチューを3人で食べる。

そこは、3年前の記憶が流れているようだった。

next

第４８話【巡る記憶】

「兄貴！」

櫻井家の玄関のインターフォンが鳴り、輝樹が出た。

びしょ濡れの春樹を見て、かなり驚いた顔をしている。

「傘持ってんのに何でそんな濡れてんだよ」

輝樹にそう言われても、春樹はうつむいたまま何も言わない。

輝樹が春樹に触れると、春樹はかなり冷えきっていて、熱い。

「輝樹…」

ようやく口を開いたかと思うと、春樹は

「やばい…頭……」と、そう言って輝樹にもたれかかった。

「ちょっ…兄貴？大丈夫か？！」

輝樹が必死に呼び掛けても春樹は応答しない。

とにかく輝樹は春樹を春樹の部屋に連れていき、濡れた制服を脱がして温かい服を着せる。

ベッドに寝かせて、輝樹はベッドにいる春樹を座りながら見る。

「すげー熱…」

春樹のおでこに手を置き、ボソッと呟いた。

春樹は少し苦しそうな顔をしていて、顔は赤い。

輝樹は冷凍庫からアイスノンを持ってきて春樹のおでこに置いた。

いくら兄貴でもこんなバカなことするなんて、と輝樹は小さな声で言う。

春樹は阿笠に会ったあと、しばらくその場に立ち尽くして泣いていたが、家へ帰ろうとはした。

よろよろと止まらない涙を流しながら、家へと向かったけれど

止まらない涙に溢れる思いを抑制することができなかった。

『……わぁーーー！！！』

これでもかというくらいの大きな声で叫んだ。

雨が春樹に降り注ぎ、涙は雨と一体になり雄叫びはザーザー雨にかきけされる。

どうにも居たたまれない春樹は、傘をたたんで引きずりながら、知らない道を右往左往する。

結果家につくのが1時間半もかかっていた。

本当ならば15分程度くらいで家に帰れる距離なのに。

熱こじらせるのも当たり前だ。

鍛えていたおかげで肺炎にならなかっただけマシだろう。

輝樹はとりあえず様子を見て、自分の部屋に戻った。

本当なら風呂に入るべきだが、当人の意識がないんじゃ無理だ。

春樹は熱にうなされている。

そんなことしたら風邪ひくのは分かっていただろうのに。

それでもそんなことが考えられなくなるくらい、負に陥っていたということか。

負に陥るどころではない。

確かによく漫画とかで友人と好きな人がカブってしまうことはよくあるし、現実でも割りとよくある。

それが偶然親友同士で、彼らが偶然春樹と秋人というだけでありふれたことだ。

けれど、できればその確率には当たらないで欲しかった。

好きな人がカブったときの選択肢はいろいろだ。

お互い何もしないか

お互い猛アタックするか

どちらかが告白するか

そして

どちらかに譲るか、だ。

告白された場合は、付き合うか付き合わないかの二択しかない。

その二択の中で春樹は後者を選んだ。

秋人だって2人が付き合うとなれば、きっと祝福はしないにしても諦めがつくはずだ。

両思いなら仕方ないと。

なのに春樹はあえて身を引いて、自分の幸せよりも秋人の幸せを叶えようとした。

そう上手くいくとも限らないのに。

本当に

超がつくほどのお人好しで、バカで、単純で。

「う……」

春樹は今夢を見ている。

いろんな夢がごちゃ混ぜになって、まるでフラッシュバックのように記憶が甦る。

――好きに…なってくれると思ってた。一緒にいれば――

――…だから最初に断ったんだ――

――そんな優しさなんかいらないよっ……――

――だったら最初っから付き合わなきゃ良かったのよ！あたしの手を振り払ってでも断れば良かったんだ！！――

――傷つけてるあんたらはこんなことすぐに忘れるんだろうけど、傷つけられた方は一生癒えない傷を背負っていくんだよ！――

――先輩、俺これくらいのことじゃ絶対負けませんから――

――わー！海野夏実ちゃん近くで見るの初めてー！！――

――あたしも知ってるよー。１組の櫻井くん――

――やーった！――

――夏実、夏実には俺がいるんだからなっ！――

――春樹が誰を好きなのかは分からないけど…あたしは春樹が好き……――

――あたしにああ言った春樹にあたしを止める権利あるの？――

――…なんでお前夏実ちゃん振ったんだよ？！――

――…秋人のために身を引いてんじゃねぇよっ！――

最近あったことや思い出がグチャグチャと春樹の脳に巡る。

出会いも
片思いの日々も
楽しい思い出も
辛い思い出も
すべてが記憶のカケラとなって落ちていく。
幸せになりたくて仲良くなって、隣にはいつもいた
笑顔があった
けれど

自分が幸せになることは捨てた

なんのために？

いつだって好きな人のために一生懸命だった

けれど最後の最後で大切な人に最大の癒えない傷をつけた

――傷つけてるあんたらはこんなことすぐに忘れるんだろうけど、
傷つけられた方は一生癒えない傷を背負っていくんだよ！――

――傷つけてるあんたらはこんなことすぐに忘れるんだろうけど――

いや、傷つけた人とて決して忘れはしないだろう。

ただの弱いものイジメやカツアゲとは訳が違う。

――傷つけられた方は一生癒えない傷を背負っていくんだよ！――

きっと、傷つけた人は一生償えない十字架を背負っていく。

――夏実ちゃんのこと好きなんだろ？！――

――そうだよ――

春樹は無意識の中で記憶の阿笠に答えた。

どうにもならないけれど、どうにかしたいものだ。

春樹は意識が混在する中、約８時間ほど眠っていた。

目が覚めたのは夜中だ。

「ん…あれ…」

ムクッと起き上がると、おでこにあったアイスノンが落ちた。
もう溶けて生暖かくなっているアイスノンを拾って、状況を把握しようとする。

そのとき、春樹の部屋を輝樹が開けた。

「あ、兄貴平気なの？」
「輝樹…」

春樹は輝樹が手に持っているアイスノンに気づいた。

そして自分が持っている生暖かいアイスノンを見て、輝樹が介護してくれてたことを理解した。

「俺…何したっけ」

輝樹は部屋の電気を付ける。
春樹は少し眩しそうな顔をした。

「こっちが聞きたいよ。まったく、傘も差さずにどんくらい歩いたわけ？」

「さぁ…」
「医者に見てもらったけど、なんとか肺炎にはならずにすんだって」
輝樹の言葉に、春樹はそっか…とあまり関心のないような声を出す。
「母さんも親父も今日帰ってこないみたい」
「そうなんだ…。あ…輝樹、ありがとね」
春樹は薄ら笑いをする。
「あ…。…何か食う?」
輝樹は何となく照れくさくて、視線を少し反らして尋ねた。
「んー…」
8時間寝ていたとはいえ、春樹はかなりの熱だ。
まだ体は熱いし、少しボーッとしている。
「一応食べとけよ。お粥作るから」
「うん」

春樹は輝樹から新しいアイスノンを受け取って、２人は１階の食卓へと向かった。

next

第４９話【姉と兄】

輝樹は春樹のためにお粥を作り出した。

シーンとしてる中、春樹はテーブルについて座りながら、ボーッとうつむいている。

輝樹がお粥を作り終えて春樹に差し出してから春樹が食べ始めるまで、少し時間がかかった。

けど春樹は美味しいと言いながら少しずつ食べる。

輝樹は春樹の向かいに座って、春樹をじっと見た。

「…なぁ、何があったんだよ？」

「何にも」

「だって家出るまでは普通だったじゃんか」

「そう？」

春樹は単語しか言わない。

というか、言えないと言ったほうが正しいか。

ボーッとするせいで頭がなかなか回らないのだ。

フーフーとお粥に息をかけながら食べている春樹を見ながら、輝樹はズバッと言った。

「つか一昨日から変」

一昨日といえば、体育祭前日だ。

痛いところを付かれた。

「あはは、俺変なとこばっかり」

春樹はケラケラ笑って受け流すから、輝樹はもうそれ以上何も突っ込まなかった。

そして輝樹は席から立ち、医者にもらった薬を出した。

「ほら、これ」

「あーありがと」

「アイスノンで冷やしながら寝ろよ。片付けは明日俺すっからそのままで良い」

輝樹はそう言って、居間を出ていこうとする。
そんな輝樹に、春樹は静かな口調で言った。

「…夏実、治ったよ」

その言葉に輝樹はそっと振り返る。
そんな輝樹をよそに春樹はお粥を口に入れている。
輝樹は目を丸くしながら、
「まじかよ…？」と半信半疑の様子だ。

けど春樹が、まじだよ、と言うと安堵した表情を浮かべた。

輝樹も夏実のことを心配していたのだ。
自分のせいで男性恐怖症になんてなってしまったのだから。

「輝樹と話したいって言ってた」
「…うん」
「輝樹きっと辛いからって言ってた。どういう意味？」

心当たり大有りなのに、輝樹はさもそんなこと知らないとでも言う

かのように、
「さぁ？分かんね」とはぐらかす。

「…だから夏実とケンカした」
「は…」
「まだ絶対夏実を輝樹に会わせたくなかった」

春樹がそう言うと、輝樹は罰が悪そうな顔をした。
輝樹も二度とするつもりはないし、春樹だって輝樹がまた同じ過ちをするなんて思ってはいない。
だって病気の春樹にここまでしてくれてる。

「輝樹…もしかして夏実のこと好きなのか？」

春樹はあれかれと考えていたのだ。
いくら嫌がらせと言っても、好きでもない女とやれるものなのか。
たまたま兄弟で好きな人がカブって、たまたま兄の方は夏実と仲良しだった。
だから悔しいと思った。

春樹はそう考えた。

「…違う」
「違うならなんで…」

春樹が尋ねても輝樹は本当のことを話そうとしない。

時間ばかりが過ぎていく。

「…いつか言う」

言うつもりなんてないくせに、輝樹はそう言って居間を出ていった。

一人取り残された春樹は、残りのお粥を食べて薬を飲んだ。

いくら考えても輝樹の気持ちなんか分かりっこない。

けれど、もしかしたら夏実になら本音を言うんじゃないか…と思うようになる。

とりあえず春樹は、まだ熱も下がってないわけだから、輝樹に言われた通りアイスノンで冷やしながら再び寝た。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「秋人ぉ、黄色のマニキュア知らなぁい？」

秋人が部屋で音楽コンボをつけてくつろいでいると、ノックもなしに姉が入ってきた。

「ノックしろって」

秋人がそう言うのも無視して、姉の茉李亜（まりあ）は秋人の勉強机の椅子に座る。

でかい秋人とは対称的に茉李亜は小柄で、春樹より小さい。

ふわふわのショートカットが似合ってて、メイクしてる顔はとても可愛い。

「もー、お気に入りなのになぁ」
「あ、待った。黄色だっけ？母さんが使ってた」
「えー？！お母さんたら良い年して黄色ー？」
「おま…何気ひどいな」

秋人はこんな仏頂面だけど、茉李亜は甘い感じだから2人は昔から仲は良い。

秋人が近場で試合するときはよく応援しに行くものだ。

「そういえばね、秋人の写真見せたらみんな紹介してーって言ってたよ」
「はぁ～？」
「でね、ついでに春ちゃんたちのも見せたら大好評なの」

茉李亜は楽しそうに言う。

ちなみに茉李亜は地元の国立大に行っている2年生。

こう見えても秋人と同じで成績優秀で特に理数が得意なため、女にしては珍しく理学部。

「これはイケる！って思って写真のオークションしちゃった」
「はー…いつになくお前アホだな」
「まぁまぁ。でね、個人写真はみんな５０００円で４人一緒に写ってるのはなんと！」

茉李亜はピースをした。

秋人はバッと寝転んでいる体制から起き上がり、
「にっ…」と声を漏らす。

２万とはさすがに驚きだろう。

たかだか写真１枚が２万もするなんて普通なら有り得ない。

「やはは、すごいっしょ～」

茉李亜はいっぺんに大金が手に入ってホクホクしている。

それもそうだ。

なんだかんだで6万くらいは軽く稼いだのだ。

売る茉李亜も茉李亜だが、買う方も信じられない。

秋人は呆れてものが言えないという顔をしている。

「だから今日は秋人に夕飯おごってあげる」

「お、まじ？俺寿司食いてぇ」

「よーし、じゃあお姉ちゃんが食べさせてあげよう！」

秋人は珍しく

「やった」なんて言って少し嬉しそうだ。

茉李亜は約束したことは絶対破らない。

ただ、秋人にしかおごらないから2人だけで食べに行くのだ。

両親も誘えば良いものの、たいてい2人で勝手に食べに行くのだ。

「うーっす」

喜んでいた2人のもとへ、またもやノックもせずに誰かが入ってきた。

「あー、佑ちゃん」

茉李亜が佑ちゃんと呼ぶその人は、茉李亜が中学のときから付き合ってる茉李亜より1つ下の彼氏で、名前は佐々佑亮（ささゆうすけ）だ。

つまり秋人の2つ上。

「げ。ちょーなんすか。今から飯っすよ」

「久々に会った先輩に言うセリフかぁ？」

佑亮は笑いながら言う。

中学のとき、そして高校のときの秋人の部活の先輩でもある。

佑亮が3年のときはまだ秋人は1年だが、中高ともに1年のときか

らレギュラーの秋人は佑亮とプレーをしていた。

「2週間前に会ったし」
「かっわいくねーなぁ」
「佐々先輩こそ」

2人はこんな会話をしているけども、秋人が皮肉を言えるくらい仲は良いのだ。

まぁそれもそうだろう。

中2の佑亮が中3の茉李亜に告白して付き合い始め、その翌年には同じ部に彼女の弟が入ったのだ。

高校だって、佑亮がキャプテンの時期に秋人が入ってきて大歓迎されている。

プライベートでも顔を合わせるしチームメートとなれば仲も深まるもの。

「じゃあ今日は佑亮いるしお寿司はまたにしよっか」
「あ、明日明日」
「おっけー！」

その会話を聞いた佑亮はピーンときた。

長年の付き合いだから、秋人が茉李亜におごってもらうのだと素早く察知できたようだ。

「なんだよ茉李亜ぁ、俺も寿司食べたい」

「あは。だめ」

茉李亜は語尾にハートをつけて可愛く言った。

たとえ彼氏でも理由がなきゃ絶対おごらない、それば茉李亜でそこらへんは徹底している。

「あ。ねぇ先輩」

秋人は茉李亜とじゃれあう佑亮に話しかけた。

ｎｅｘｔ

第５０話【本音】

秋人は佑亮に阿笠と麻冬が付き合い出したことを話した。
秋人が１年のときから出てたように阿笠だってそうだ。
必然と佑亮との仲も深まる。

「へぇ。阿笠がなぁ」

佑亮は感心したように妙に納得している。

「なんか中学のときも付き合ってたらしくて」
「じゃあ元サヤか。あーでも合ってるかもな。あの２人」
「そっすか？」
「めっちゃ絵になるしなぁ」

佑亮はそう言うけど、秋人はいまいち納得していない様子。

そんな秋人に、佑亮は
「なに、不服？」と茶化す。
けど茉李亜がそれを笑いながら全否定した。

「あはは、秋人は夏実ちゃんが好きだからそれはないよぉ」
「はっ?!ちょっと何言ってんの?!」
「え~もしかして茉李亜が知らないとでも思った?」

秋人はまじかよ…と呆れてものが言えないようだ。

ことごとくみんなにバレていく秋人の思い。

「お前夏実ちゃんが好きなのか。麻冬ちゃんかと思ってた」

意外な反応の佑亮に秋人は振り返る。

佑亮は付け足して、だっていつも一緒に帰ってたろと言った。

「あー…うん。でも2人が付き合うからもう帰らないけど」
「そっかぁ、夏実ちゃんのほうだったとはな~」

佑亮は感心するように言う。

「けど、じゃあなんでそんな顔してんの?」
「顔?」

佑亮の言葉に茉李亜が素早く反応した。

そんな顔と言っても、いつもの秋人と同じクールな表情をしている。

けど佑亮にはそうは見えないらしい。

「だって不機嫌そう」

えっ、と秋人も少し驚いたようで声を上げた。

確かに秋人は今、麻冬と阿笠の話をしているせいか少し不服な気持ちがある。

けどそういう感情はいつも表に出さないから、みんなには分からないのだ。

茉李亜にだって分からない。

だからこそ秋人は驚いたのだ。

「？え、なに？」

驚いている姉弟を佑亮は不思議そうに見る。

不思議なのはこっちだよ、と言わんばかりの2人。

佑亮と秋人が知り合ってから5年目になる。

佑亮は言わば秋人の兄貴のような存在なのだ。

姉しかいない秋人には佑亮の存在はでかいらしくて、だからこそなついてるのだ。

「あ、そだ。ごめ～ん、茉李亜買い物頼まれてた！」

「行ってらー」

突然そう言った茉李亜に秋人はそっけなく返事した。

「秋ちゃん行ってきてよ」

おねだりする茉李亜に、秋人は完全に無視している。

そんな2人を見て佑亮は笑いながら言った。

「あはは、茉李亜行ってらっしゃい」

いつもならたいていいじゃあ俺も行くよ、と言う佑亮がそう言ったものだから、茉李亜はプクーッと頬を膨らませた。

そして、良いもん！と言いながら財布を持って部屋を出ていく。

「あーあ、スネちゃった」

「大丈夫大丈夫。どうせお菓子でも買ってご機嫌になるから」

「なんで付いてかなかったんすか？」

秋人はドカッとベッドに座る。

佑亮は座椅子に座りながらくつろいでいる。

「うん、だってちょっと気になって」

佑亮はニコッと笑う。

佐々佑亮とはいまいち掴めない男だ。

先々代キャプテンであり、ポジションはＤＦで、天才と呼ばれた。

佑亮のディフェンスは見事に華麗なものだ。

去年はＤＦの佑亮、ＭＦの秋人、ＦＷの阿笠がチームを率いていたと言っても過言ではない。

Ｊリーグから誘われたし、大学の推薦だってもらえていた。

なぜなら夏、サッカー王国と呼ばれつつもなかなか優勝できなかった静岡が十数年ぶりに優勝を成し遂げたのだ。

星陵サッカー部といえば県民は誰もが知っていて、特にさっき上げた３人はインタビューなどで取り上げられもした。

華麗なディフェンスをするキャプテンに、入部してまもない１年２人が活躍したとなれば話題にもなったものだ。

「気になった？」

そんな人が、オファーも推薦もすべて蹴って茉李亜と同じ大学に進んだのだ。

上手くいけば世界の舞台でだって輝けるはずなのに。

上を目指すサッカーは高校まで、と言って辞めたのだ。

ニュースにもなった。

本当に何を考えているのか分からない男だ。

「うん。やっぱ麻冬ちゃんが好きなんしょ？」

茶髪でピアスをしているけれど、爽やか風の外見。

サッカーに未練を残さないよう、大学ではサッカー部には入らなかった。

ダブルダッチのサークルに入ったりして、その優れた運動神経をアクロバットを取り入れながら活かしているのだ。

「何言ってんすか。だから麻冬はただの友達で」

「うっそー。俺の勘は外れたことないんだよね」

勘って、と秋人が微笑すると
「いやいや、まじ」と言いながら手を降る。
そして指を折りながら、佑亮は淡々と言った。

「テストのヤマに明日の天気にー、体育祭とかの優勝クラスも言い当てたし」
「まじすか」
「あと試合でも。勘で動けば必ず止められた」

笑いながら言っているけど、どうやら嘘ではない。
秋人はそう感じた。

確かに佑亮が止められなかったことはほとんどない。
そう、1回だけあったらしい。

佑亮にも止められなかった天性フォワード。

「えー、阿笠に抜かれたじゃないですか」

紅白戦で2人が別のチームになったことが一度だけあり、そのとき

のことだったようだ。

外れるはずのない佑亮の勘…いや、外れたわけではない。

阿笠が佑亮の想像を超えたのだ。

「ありゃ良いんだよ」

「でも確か2人が対戦したのって後にも先にもあれっきりっすよね」

「おう」

と、すると佑亮は

「じゃなくてっ」と自分で突っ込む。

「で、どーなんよ」

佑亮は話題を元に戻した。

秋人はしつこく聞いてくる佑亮が勘にさわったのか、少しムッとしている。

「良いじゃないっすか、どうでも。夏実ですよ夏実」

秋人は投げやりに言うが、佑亮は真剣そのものだ。

なんのために佑亮が茉李亜をスネらしてでも買い物に行かなかったのか。

そんなの答えは簡単だ。

「なんでも一人で抱え込むの悪い癖だって言ったろ」

秋人は佑亮を見た。

「お前は俺のその指示だけは一度足りとも聞かなかったよな」

佑亮は懐かしげに、そして穏やかに言った。

はじめて言われた中学時代、そして高校時代。

佑亮が頭の中で記憶を蘇らせているそばで、秋人も佑亮との記憶を思い巡らせている。

一緒にプレーできた時間は少なくとも、思い出は密だ。

忘れやしない。

「…抱え込むことなんてなかっただけです」
「嘘ばっか。俺が知らないわけないだろ」

秋人は前髪をかき分ける。

そして、悲しみを堪えているような、我慢しているような顔をしている。

秋人は佑亮が遠回しにフォローし続けてくれたことをよく知っている。

分からないはずがない。

それでも、秋人はいつだって佑亮にすら悩みは言えない。

そういう性だって言えばそれで終わってしまうけど。

「…抱え込むほどの悩みじゃないんです」

秋人はひざに拳を作った手を置き、うつむいた。

佑亮は秋人がようやく何かを話そうとしているのだと感じて、耳を澄ました。

「自分自身でも何に悩んでるのか分からない…」
「…うん」
「だけど、隣にいるのが普通だったから…いないのはちょっと寂しくて」

秋人は何を言っているのか、何が言いたいのか自分でも分かっていない。

それでも佑亮はきっと受け入れる…そう思ったのだろう。

「それは…夏実ちゃん？それとも阿笠？」

佑亮は穏やかに微笑んでいる。

そんな佑亮の表情も見ずに、佑亮の言葉に自然と答えている秋人がいた。

「……麻冬――――」

next

第５１話【再戦】

「抜かせるかっ！！」
「しつこい！」
「あっ、てめ！俺にそんなこと言うか？！」

翌日、月曜日は見事に晴れている。

振替休日のため部活もないから学校中ガランとしていて静かだ。

そんな中男２人が元気にサッカーをしている。

誰とは言わないが。

ハンドボールコートを使用して１ｏｎ１をしている。

「っし！」
「あっ！！」

秋人が攻めていたが、佑亮が見事に奪って今度は佑亮が攻めに行く。

だが元ＤＦの佑亮の攻めは現ＭＦの秋人により阻止される。

どっちが攻めてもどっちかが止めてしまうから、なかなかシュートまでは至らない。

その繰り返しだ。

何十分かやったあと、喉がかわいた2人は校内にある自販機にジュースを買いに行った。

だが、佑亮の欲しいコーラが売り切れていたため学校近くのコンビニに行くことになる。

秋人も暇だし佑亮に付いて行く。

「今日学校ないんすか？」

「ああ、俺月曜午前しか授業ねぇんだよ」

「へぇ」

茉李亜はもちろん学校だが、昨日佑亮が帰る間際に

「明日の午後星陵来いよ。サッカーやろうぜ」とだけ言った。

秋人が何言ってんすか？と言い終える前に、佑亮は出て行った。

その頃にはもうとっくに茉李亜も帰ってきてた。

言われた通り午後の1時半くらいに星陵に行くと佑亮が本当にいて、リフティングをしていた。

半年以上やってないとは言え、やはり鮮やかで正確だ。

さすが先々代キャプテンを務めただけある。

「おー、あったあった」

コンビニでコーラを見つけた佑亮は素早くレジに持っていき買った。

そしてコンビニを出ると、遠くから人が歩いてくるのを見つけた秋人はじっと見る。

それが阿笠と麻冬だと瞬時に気づいて、プイッと視線を変える。

「先輩、はやく行こ」

「？おう」

急いで学校に戻ろうとする秋人だけど、佑亮が阿笠たちの存在に気づいて手を振った。

「おっ、阿笠ーー！！」

佑亮が叫ぶから、麻冬と楽しそうに話していた阿笠は佑亮と秋人に気づく。

そして麻冬の手を引いて小走りで走ってきた。

「よっす。久々」

「お久しぶりです。どうしたんですか？」

阿笠もかつてのヒーローに会えて嬉しそうだ。

「暇だから秋人と１ｏｎ１やってんだ」

「へぇ～」

阿笠は内心自分もやりたいと思っているが、隣に麻冬がいる以上そんなこと言えない。

だからやりたいって気持ちを顔に出さないように堪えている。

そんな阿笠に麻冬はあっさりと言った。

「阿笠も混ざれば？やりたいんでしょ？」

「え、でも」

「良いよー少しくらい。あたし見てるし」

麻冬はそう言って微笑んだ。

阿笠はとても嬉しそうな顔をしながら麻冬にお礼を言う。

「あ。先輩リベンジしなきゃ」

秋人が茶化すように佑亮に言った。

佑亮は指をポキポキ鳴らしながら、

「ったりめーだ！」とやる気満々の様子。

秋人も佑亮も忘れはしない。

たった一度、最強のＤＦと呼ばれた佑亮がたった一度だけ、それも同じチームの２つ年下の男に止められた。

チームメートしかその事実は知らないわけだから、世間での最強の名は滞っているが。

そう、忘れやしない。

阿笠だって。

「時間は？」

「無制限に無限得点」

「ってことは」

「どっちかが止めるまで！行くぞ、阿笠！」

グランドに戻った４人のうち、阿笠と佑亮はさっそく１ｏｎ１を始めた。

やはりハンドボールコートで、さっきと同じようにやる。

秋人と麻冬はそばにあるベンチに腰を下ろして、２人がやっているのを傍観している。

秋人は、最強ＤＦと天才ＦＷの久々の対戦をボーッと眺める。

佑亮がもし秋人たちと同級生だったら星陵は３連続で優勝したんだろうな、なんて考えながら。

もし佑亮がずっとサッカー続けていたら、また３人で同じ舞台に立つ機会があったかもしれない。

その先に光が見えたかもしれない。

『全国優勝おめでとうございます！』

『ありがとうございます』

最後の大会での優勝、まさしく有終の美を飾れた佑亮に記者がインタビューしてくる。

『星陵には佐々くん、そして月影くんと阿笠くんの活躍が今や必須ですね』

『そうですね』

佑亮は他の記者にインタビューされてる秋人と阿笠を呼んだ。

2人は何すか？と言いながら佑亮に近づく。

佑亮は2人の肩に手を回した。

『わっ…キャプテン？』

その瞬間が、カメラのフラッシュがもっとも光った。

左に秋人、右に阿笠そして真ん中に佑亮がいるその写真は新聞に堂々と載った。

『たぶん、これ以上の最高のチームは俺にはないです』

佑亮は笑顔で答えた。

『他のメンバーももちろんですけど、秋人と阿笠がいなきゃ始まらなかった』

いきなり褒められて2人は反応に戸惑っている。

『年下とか関係なく、本当彼らに感謝してます』

と、そのとき阿笠が他のチームメートから炭酸が入ってるペットボトルを受け取った。

佑亮が2人を離した瞬間、阿笠は勢いよくそれを振って佑亮目掛けてぶっかける。

『わっ?!なっ、なんだ!』

顔面に炭酸をかけられた佑亮はかなり困惑してる。

秋人も、炭酸を佑亮の全身にバッとかけた。

『キャプテン！ご愛嬌といきますかっ！！』

秋人も阿笠も笑いながらそう言い、チームメートたちもお互いにかけあっている。

『よーしっ！！』

佑亮も炭酸を持って秋人と阿笠に思い切りかけて、星陵は大いに盛り上がった。

優勝した瞬間、たぶん誰も忘れはしない。

その後3年が引退して、そして1年が過ぎ1つ上も引退してついに秋人がキャプテンとなる。

佑亮がいて、そして阿笠と秋人がチームに入った瞬間が伝説となった。

おそらく星陵史上最強のチームで、これからもそのチーム以上のチームはできない。

秋人にとっても阿笠にとっても、だから佑亮は大切な存在なのだ。

「きゃーっ！！」

麻冬の声に現実に引き戻された秋人は、バッとハンドボールコートを見る。

中央で阿笠が佑亮のディフェンスを抜いたのだ。

「いただき！」

阿笠はドリブルしながらゴール目掛けて走る。

その横を佑亮も走る。

阿笠が蹴ったボールはゴールの左上目掛けて、誰もが入った！と思った瞬間、ボール目掛けて横から足が出てきた。

「させるかっ！！」

佑亮がかなり高くジャンプして、足で止めたのだ。

ボールは佑亮の左足によって跳ね返される。

これは佑亮が得意としてたもので、キーパーがゴールにいないときにシュートを打たれたとき、よくこれをやっていた。

時にはオーバーヘッドの体勢で止め、時には頭から止めに行くときもあった。

「出た！伝家の宝刀！」

秋人も嬉しそうにベンチから立ち上がって叫んだ。

だからゴールキーパーがゴールを離れているときにシュートされたことは、佑亮にはないのだ。

ゴールキーパーが自分のミスやらでシュートされたことはあっても。

「わ〜っ、あれを止めますかあ！」

阿笠は地面に座り込む。

そんな阿笠に佑亮はピースしながら笑う。

「まだまだ負けないぜ」

現役と同等にやれるなんて、さすが…というかなんというか。

そして佑亮はベンチのほうに歩いていく。

「まーふゆちゃん」

「はい？」

「阿笠と付き合ってんだって？」

佑亮が麻冬に尋ねると、阿笠も麻冬のほうを見た。

「そうですよ」

「あんなヘナチョコやめて俺と付き合おうよ」

冗談でそう言うと、麻冬はケラケラ笑いながら
「茉李亜さんと別れてくれますかぁ？」と言う。
愛想振り撒きながら佑亮がもちろん、と言うと麻冬も
「なら良いですよ～」なんて言った。

「ばかか。やめとけ麻冬、旦那が怒るぜ」

秋人がこっちに向かってくる阿笠を指差す。

「なーに言ってんすか、先輩」
「わ、わー！ギブギブ！」

阿笠は佑亮の首に手を回してギューッと締める。

佑亮がギブと言ったものだから離すと、佑亮は
「冗談だろー？」と言うから阿笠は
「分かってますよぉ」なんて言って笑う。

「ね、麻冬ちゃん」

また佑亮が麻冬に何かを言おうとする。

麻冬が振り返ると、佑亮は
「俺がだめなら秋人は？」と言った。

「も～先輩、何言っ…」
「や、真面目に」

佑亮は阿笠の言葉を遮って、真面目な顔をする。

「だって阿笠が良くて秋人がだめな理由ってないしょ？」

麻冬は真剣に聞いてくる先輩に戸惑っている。

秋人も、いきなり何を言い出すのかと焦っているようだ。

「秋人にしなよ。麻冬ちゃん」

next

第５２話【誓い―サッカーに生きた男と生きる男―】

「…先輩、悪ふざけがすぎます」

阿笠はキッと佑亮を睨んだ。

佑亮はチラッと阿笠を見て、そしてまた麻冬に視線を戻す。

「どうなん、麻冬ちゃん」

麻冬は何と答えたら良いのか分からずたじろぐ。

そして秋人をチラッと横目で見る。

「どうって…」

答えられないでいる麻冬をカバうために、秋人が何か言おうとすると佑亮が先に口を開いた。

「なーんてね、嘘嘘」

「はっ？」

「いやさ、秋人がロンリーだから可哀想だと思って～」

佑亮はさっきの真剣な表情とは打って変わって、ふにゃっと笑顔をしている。

佑亮の言葉に阿笠と麻冬はかなり安堵して、

「なーんだ、脅かさないでくださいよぉ」なんて言う。

けれど秋人はそんな反応を見せず、なおも驚いた顔をして冷や汗を流しながら佑亮を見ている。

秋人には佑亮が悪ふざけで言ったのではないことを分かっている。

「んー、じゃあそろそろ俺ら行きますね」

阿笠が麻冬に預けていた荷物を受けとる。

「あらー終わり？大ちゃん」

「今日は麻冬いるんで。また絶対やりましょうよ、先輩」

阿笠はニコッと笑った。

佑亮も

「おう。暇だからいつでも誘ってや」と答えた。

そして阿笠と麻冬はグランドから去って行った。

佑亮は相も変わらずリフティングしてボールと遊んでいる。
けど秋人はその場に立ち尽くして動かない。

不自然な秋人に、どうかした?と佑亮が声をかけると秋人は勢いよく振り返った。

「…先輩、何言ってんですか」
「んぁ?」
「麻冬に!」

怒りながら言う秋人をよそに、佑亮はまたリフティングをし始める。
先輩!と秋人が叫ぶと、佑亮はリフティングしているボールをポーンと秋人目掛けて蹴る。

秋人はそれを手でキャッチした。

「俺…余計な波風立てたくないんです。望んでない」
「うん。けど、俺お前には幸せになって欲しいんだよ」
「他人の幸せ壊してまで自分の欲望貫けないでしょ」
「幸せ?うん、そうそれ。たぶん麻冬ちゃん阿笠に本気じゃないよ」

佑亮はあっさりとそう言ってのけた。

秋人が聞き返すと、佑亮は
「勘ね、勘」と言う。

外れない佑亮の勘。

秋人は返す言葉がなくて黙りこくっている。

佑亮もこれ以上何か言う気はないらしくて、気持ち良さそうに伸びをしている。

佑亮は何かいろんいろ感じとったらしい。

秋人とて麻冬には本当は好きな人がいることを知っている。

それでも麻冬は阿笠と付き合うことを選んだ。

秋人にはどうすることもできないのだ。

「…先輩はよく茉李亜と5年以上付き合ってられますね」

「んー、まぁな。だって何年経っても好きなもんは好きだし」
「結婚とかするんすか？」
「あはは、なんだよいきなり。まぁいずれはなー」

好きな人と付き合える。

好きな人と一緒にいれる。

好きな人と結婚できる。

好きな人と共に人生を歩める。

当たり前のように思えて、実はとても難しい。

秋人はサラッと言ってのける佑亮を羨ましく思う反面、何もできない自分に苛立った。

それまで楽しかっただけの日常が、少しずつ変わってきている。

たぶん、夏実が彼氏に振られた頃から始まっていた。

「…先輩は自分で道開けて良いっすね」

「お？なした、急に」

秋人は手に持っているボールを軽く上に投げ、リフティングを始める。

近くで佑亮が、おー上手い上手い！なんて言うけれど、そんな言葉すら入ってこない。

秋人は…4人はおそらく全く違う道を歩む。

例えば同じスポーツ業界に入ったとしても、なかなか会えないかもしれない。

「…茉李亜と同じ大学行くためにサッカー辞めたんすか？」

秋人はさっきの佑亮のように、今度は佑亮に向かってボールを蹴った。

佑亮はそれを足で受け取って、十数メートル離れたゴールに向かっ

て蹴った。

惜しくもゴールポストに当たり跳ね返る。

「同じ大学に行くためではない。でも、茉李亜のためだよ」

ニュースでも、記者にインタビューされても佑亮はサッカー辞める真相は言わなかった。

ただサッカーは高校までで良いんです、としか言わなかった。

「何で茉李亜のために…。だってサッカー界も世間も…先輩だってサッカー続けたいと思ってたはずなのに」

惜しいですね、なんて言葉じゃ済まされない。

違う、済まさせない。

栄光すら掴み取ることができたはずなのに、こんな地方で学校がないときに後輩とサッカーして遊んでるなんて信じられない。

少なくとも秋人には。

「オリンピックだって夢じゃないはずなんだ…」

秋人は震える声で言う。

あれほど慕い尊敬していた先々代キャプテンがこんな状況に甘んじてるのは秋人には理解できないよう。

真面目に聞いてる秋人に、佑亮も真面目に答えた。

「…それさえもいらないくらい、茉李亜のそばにいることを望んだんだ」

「だから何でっ…」

「サッカーか茉李亜かって言ったら、俺は迷わず茉李亜を選ぶよ」

佑亮の瞳はとても一途だ。

まっすぐで、どこか春樹に似ている感じもする。

優しさや少しお茶目なところや、部活になれば真剣になる姿は瓜二つだ。

そんな佑亮だからこそ兄のように思い、そんな春樹だからこそ親友でいられる。

「…別にサッカーに生きたって茉李亜と別れるわけじゃないじゃないですか」

「うん、だけどJリーグに入っても大学に行ってもどっちみちここを離れるだろ。そしたらきっと茉李亜を忘れてサッカーばっかりになってしまう」

佑亮はどこか遠く空を見つめた。

「そんな自分は嫌なんだ」

愛する人のために大事なものを捨てれるって、とてもすごいこと。

ましてやオリンピック目指せるような人なら尚更。

簡単にできることではない。

だって、ただサッカーのために生きてきたような人間なのだから。

「分からない…俺には分かりません」

秋人は空を見つめる佑亮の足元を見つめた。

カリスマと歌われる人は、最強と呼ばれた人の足元にも及ばないのだ。

サッカーの素質は同じでも。

「うん」

佑亮はそんな秋人を微笑みながら見た。

「これは俺が自分で決めた道なんだ。秋人、お前の道はお前で選べ」

「…」

「きっとお前ならプロになる。その先も狙える。引退年齢になるまでサッカー続けて、そのあとコーチにでもなれば更に有名になるかもな」

アンダー18に選ばれ、その活躍は目覚ましいものだった。

その為す技は誰もを魅了した。

国民的人気も高く、サッカー関連だけでなくバラエティーまでも出演のオファーがあったほど。

けれど、だからこそサッカーを辞めたのだ。

きっと続ければ自分は普通とは違く、遠い人になってしまうだろうと分かっていたから。

茉李亜が気にしないと言っても、きっと忙しくて会えなくなれば疎遠になってしまう。

「俺のように辞めても良いんだ。…まぁお前が辞めるってことはないだろうけど」

佑亮はアハハと笑う。

「…まさか、茉李亜の為に星陵にしたんすか？」

佑亮は、その質問にだけは答えなかった。

ただ口元が少し緩んでいて、表情は穏やかそのもの。

秋人も近場が良いと星陵を選んだクチだけど、秋人には到底佑亮の

考えが理解できない。

「…結果的に星陵入って良かったよ」

佑亮は汗で冷えたのか、ベンチに置いておいた上着をバサッとカブった。

「お前と阿笠が来てくれたおかげで最高の思い出が作れた。高校生活史上のな」

「もし…俺らが入んなかったらどうしたんすか」

「んー、そうだなぁ…」

佑亮は軽く笑いながら少し返答に考えている。

そして、思い付いたように楽しげに言った。

「そんな結果はないな。俺ら一緒にやる運命だったんだよ」

本気なのか冗談なのか分からない佑亮のセリフに、秋人はポカーンとして、次の瞬間には大笑いした。

「ははっ、う…運命っすか！」

秋人が大笑いするなんて珍しくて、佑亮は嬉しくなり後ろから抱きついた。

なんすか！うっとうしい！なんて秋人は照れながら言うけど、佑亮はそれでもギューッと抱きしめながら
「良いじゃん良いじゃーん」と楽しそうだ。

そして、秋人は一息置いて後ろから抱きついてきてる佑亮に言った。

「先輩」

佑亮は秋人の呼びかけに
「んー？」と軽く返事をする。

「俺、絶対サッカー辞めないっす。更なる頂点まで上りつめてみようと思います」

秋人は空に向かって誓った。

佑亮もまるで自分のことのように嬉しそうな顔をしている。

「先輩のおかげでそう思えた。ありがとうございます」

太陽がサンサンと照らす夏の終わりのことだった。

秋人は、どこまででも見据えるような瞳で空を見上げた。

next

第５３話【異変】

火曜、いつも通り朝練をして普通に授業も行われる。

朝練を終えた秋人、麻冬、夏実は教室へと向かう。

体育館で部活をする夏実が一番はやく、次いで秋人と麻冬が教室に入った。

「うす」

秋人は隣の席の夏実に声をかけた。

「あ…おはよ」

一昨年春樹とケンカした手前少し気まずいようだ。

だが秋人はそんなこと無視して淡々と話し続ける。

「春樹は？」

「朝練来てなかったよ」

「え、休み？珍しい」

そこへ、まだＨＲが始まらないため麻冬が遊びにきた。

「風邪かしらね？」
「な。万年元気男が」
「あはは、それいうなら秋人は万年無気力男よね～」
「ほっとけ」

秋人と麻冬が楽しくじゃれあっているのを秋人はボーッと傍観している。

麻冬が、どうしたの？と尋ねてようやく夏実はハッと我に返ったようだ。

「仲直りした？」
「…ううん、あれ以来連絡取ってないもの」
「そう」
「てかごめん…あたしらのせいで昨日結局遊ぶ約束なくなっちゃって」

夏実がそう言うものの、２人はむしろそれで良かったかも…なんて内心思っている。

まさか麻冬は阿笠とデートしてて、秋人は佑亮とサッカーしてたなんて言えまい。

おまけに2人は学校で会っていた。

2人はチラッとお互い顔を見て、すぐに夏実に
「気にしないで」なんて言った。

と、そこへ教室のドアが勢いよく開いて誰かが走って入ってきた。

「秋人っ！」

なんと阿笠だ。

阿笠は一目散に秋人のところへ行き、携帯をバッと見せた。

「すげぇの！ちょー良い席取れた！！行こうぜ！」

すごく嬉しそうにはしゃぎながら言う理由。

どうやらJリーグの観戦チケットが当たったらしい。

教室戻って携帯開いたら当選のメールがきてたから秋人のところへ
すぐに駆けつけたようだ。

「うおっ、まじかよ！しかも良い席だなー！！」

秋人も阿笠の携帯を見ながら嬉しそうに言った。

どうやらペアチケットのようだ。

だから秋人はハッとして阿笠に言った。

「あ…麻冬と行って来たら？」

「んー？」

秋人が麻冬の顔をチラッと見るものだから阿笠がその方向を見た。

「あ、麻冬。おー夏実ちゃんも。おはよ」

「おはよ阿笠くん」

「ちょっとー、ひどくない？あたしに気づかないなんて」

「あはは、ごめんごめん」

そりゃ気づきもしないだろう。

秋人しか見ていなかったのだから。

そして阿笠は、麻冬に
「なー、秋人と行ってきて良い？」と両手を合わせてお願いするように言った。

「え、俺別に…」

秋人は遠慮しようとするが、阿笠は俺は秋人が良いの！なんて言うから秋人は何も言えなくなる。

たいてい周りのことを考える阿笠は普通ならそんなセリフ麻冬の前では言わないはずだが、今回は違うようだ。

前々から2人が見たがっていた試合だから、阿笠は何がなんでも秋人と行きたいのだ。

「？あたしに許可取らなくても良いわよ、別に」
「えっ」
「遊びに行くのにあたしの許可なんて必要ないでしょ？」

麻冬は秋人と阿笠が何をそんなに遠慮しているのか理解できないようだ。

もともとそこまでサッカーに興味のない麻冬にはチケットなんて別にどうでも良いのだ。

麻冬からしてみればサッカー大好きな2人がサッカー見に行く約束をしているって程度。

「よーっしゃ！秋人！１０月3週目の土曜日な！」
「おう。…って部活は？」
「んなもんサボりサボり」
「おま…仮にも部長と副部長だぞ」
「大会終わってるし大丈夫だって」

阿笠にそう言われたのもあるけど、前々から行きたかったから実は秋人もサボろうと考えていた。

堂々とサボる約束をして良いものなのか。

そして、予鈴が鳴ったから阿笠は急いで自分の教室へと帰って行った。

「騒がしい奴」
「珍しいわね。阿笠があんなに張り切るなんて」
「あいつぁサッカーとなると別人だ」

へぇ～と軽く返事をして、麻冬も席に着いた。

「あ。…阿笠！」

秋人は突然席から立ち上がって教室から飛び出したが、もう教室に入ったらしく廊下には阿笠はいない。

秋人はスゴスゴとまた自分の席に戻った。

夏実がどうしたの？と尋ねてきたけど、曖昧な返事しかできずにいる。

秋人は阿笠が去ったあと、瞬時に日曜の雨が降る中、春樹と阿笠が２人でいたことを思い出した。

阿笠に何を聞こうとしたのかは知らないが、そういうわけで阿笠を追いかけたのだ。

少ししてからＨＲが始まり、それが終わると１限が始まる。

珍しく１限の授業に起きてる秋人に担当教諭が称賛するも、秋人はボーッとしていて答えない。

「おい、月影？」

応答しない秋人に、夏実が
「ちょっと秋人！」と肩を揺らす。
揺らされてようやく我に返った秋人が、隣に教師がいるのに気づいて言った。

「あれ、俺当てられてます？」

本当に何も聞いていなかったようだ。

「あ、いや…」
「そうっすか」

それだけ言って秋人は、フワーッとあくびをした。

けれどそれでも寝ない。

それを見た夏実も麻冬もクラスのみんなも、教師でさえも不思議に感じている。

だいたい起きてることで褒められる時点でおかしな話なのだが。

「お前体調でも悪いのか？」

みんなが秋人を見ている。

担任が恐る恐るそう言うと、秋人はゆっくり周りをチラッと見て、教師の顔を見上げた。

「……え、俺？」

教師だけでなくみんなが、うんうんと頷いた。

異様な光景に疑問を持ちつつも、秋人は

「普通ですけど…え、何なんすか」と答える。

ここで春樹がいればいつも春樹が突っ込んでくれるところなのだが、あいにく春樹はいない。

まぁ今回に限ってはもし春樹がいたとしても突っ込みはしないだろうけど。

「ああ、いや…異常ないなら別に良いんだが」

「はぁ」

「そ、それじゃあ授業を進めるぞ」

秋人にとっては不自然な言動をする教師やみんなに、クエスチョンマークを浮かべる。

秋人は夏実に耳元でコソッと

「俺注意でもされてた？」と尋ねた。

夏実はその逆だよ、と答える。

ますます謎だが秋人はもう良いやと諦めたようで、パラパラと教科書をめくる。

今は世界史（本当は地理の授業だが未履修発覚のため）の授業だ。

秋人はどちらかというと世界史より日本史派だが、理系の社会は地理と決まっているため日本史の授業はない。

「あ」

秋人は隣の席の夏実にすら聞こえないほどの大きさの声を漏らした。

どうやら何か見つけたらしい。

そして今はプリントが配われていて、みんな一斉にプリントをやり出す。

そんな中秋人は教卓で本を読んでる教師を手招きして呼んだ。

教師は秋人のところに向かってきて、まだ教科書を出してる秋人に「月影、教科書しまいなさい」と言った。

だが秋人はそんな忠告は普通に無視し、更に手招きした。

教師が顔を秋人に近づけると、秋人は小声で言った。

「ジャンヌダルクって恋人いるのに何で聖女なんすか？」

どうやら秋人が見た教科書の内容はジャンヌダルクのようだ。

教師は突然の秋人の言葉に、

「はっ？！」と声を上げる。

するとクラスの人たちが振り返ったため、教師はみんなに続けなさいと指示し、咳払いをした。

「いやいや、ジャンヌに恋人などいないだろ」
「え？いますって」
「じゃあ誰だ？」
「えー…なんだっけ、名前覚えてないんだけど…ジャンヌと一緒に百年戦争で戦った人」

教師は社会教師なのだから当然世界史の知識もある。
だが教師はそんな話は聞いたことがないらしく、信じていない。

「ジャンヌをイギリスに奪回しようと試みた人たちいたしょ？」
「ああ…ジル・ド・レイたちな」
「そうそう。その人たちと一緒に奪回しようとしたって」
「まさか」
「まぁ俺もよく覚えてないけど」

そして最後に付け加えて、春樹が言ってたんだけどね、なんて言った。

すると教師はみんなにすぐに戻るからプリントやってなさい、と言ってさっさと教室を出ていった。

「あー。行っちゃった」

おそらく歴史の本でも探しに行ったんだろうが、クラスの人たちはそんなこと知らないから少しザワつき出した。

秋人をチラチラ見て、何してたのか気になっている様子。

「何話してたの？」
「んー？他愛もない歴史話」
「？ふうん」

教師が戻ってくるまでザワつきは収まらず。

ただそんな中、秋人だけは何も気にせずプリントをやっていた。

まぁ特に理由もなく聞いただけなんだろうけど、本当不思議な男である。

next

第５４話【秋人の本心】

１限目を終え、秋人は阿笠のもとへ行くか悩んだ末やめた。

２限のあとは顧問に捕まって行けなく、３限は長引いたため休み時間は短く、そして４限が終わり今に至る。

ちょうど昼休みだ。

今日は教室で食べることにしたらしく、秋人と夏実の席らへんで食べようと、麻冬は秋人の前の席の椅子に座る。

「あ。体操服忘れたぁ」

食事中、夏実が思い出したように言った。

５限は体育だ。

ちなみに体育祭が終わったから女子はバスケ、男子はハンドボールになる。

「もー、ばかね。まぁ部活ので良いんじゃない？」
「そだね」

2人が会話していても、秋人はどこかボーッとしている。

麻冬が秋人に
「なんかあったの？」と尋ねた。

「え？」
「えって…本当どこか調子悪いんじゃない？」

麻冬が熱でもあるのかな、と言いながら自分と秋人のおでこを手で触った。

ふと秋人はカーッと顔が赤くなった。

「やっ、平気！」

瞬時に麻冬の手から逃れて、焦りながらそう言う。

麻冬は熱を比べようとしていたから秋人の顔が赤くなるのは見ていなかったけど、夏実はバッチリ見ていた。

不思議に思った夏実は秋人の頬をそっと触ってみる。

「？夏実？」

秋人は抵抗することなく、普通の態度をしている。

夏実は秋人から手を離し、再びご飯を食べ始めた。

「…」

夏実は直感的に気づいた。

もしかして秋人は麻冬のことが好きなのかも、と。

だけど気づいたところで何をしてあげられるわけでもない。

夏実は麻冬と阿笠が相思相愛だと思っているのだ。

「秋人ぉ」

「……えっ」

お弁当と箸を手に持っているのにボーッとしていてご飯を食べない秋人に、麻冬が声をかけた。

秋人はいきなり現実に引き戻されて、勢いでお弁当をひっくり返しそうになった。

それを見た麻冬が

「何やってんのよ、もー」と楽しげに笑った。

「食べないの？今日ボーッとしすぎよ」

「あ、ああ」

秋人がなぜ今日こんなに考えこんでいるのか。

思い当たる節はいくらでもある。

なぜ春樹は休んでるのか。

春樹と阿笠の間に何があったのか。

祐亮と阿笠は同じだ、とか。

どうして阿笠も祐亮も秋人の好きな人は麻冬だと言うのか…だ。

何より麻冬に触れられて赤面した自分自身に驚いていることだけは確かだ。

突然だったからかもしれない。

麻冬の手が温かかったからなのかもしれない。

ただの偶然かもしれない。

けれど

好きかもしれない。

秋人にしか分からない感情だけど、秋人自身すら分かっていない。

だって、特に麻冬を好きだと思った瞬間などないのだ。

夏実のことを好きだと思っていたはずなのに、麻冬が阿笠と付き合い出したことに疑問すら抱いている。

それは麻冬に本当の好きな人がいるから心配してる…という時点で

はもはやない。

心配の域なんてとうに越して、むしろ切なさを感じている。

隣にいることのできない切なさを。

『だけど、隣にいるのが普通だったから…いないのはちょっと寂しくて』

『それは…夏実ちゃん？それとも阿笠？』

『……麻冬――――』

あの日、秋人は誰にも言えないでいる思いを祐亮に語った。

『…寂しいんだ？』

麻冬にはもちろん言えないし、夏実だって言えない。

阿笠に言ったら宣戦布告になってしまう。

春樹には…にも言えない。

けどもし、麻冬が付き合い出してすぐにこの複雑な気持ちを春樹に話して相談していたら、春樹は夏実を振らずに済んでいたかもしれない。

『一緒に帰るのは俺で…それから、麻冬は俺のどんな些細な事柄にも気づいてくれる』

ただ春樹が夏実を振ったことなど知らない秋人には意味はないのだが。

『秋人はさ、どうして夏実ちゃんを好きだったの?』

祐亮は諭すかのように優しく尋ねた。

秋人はしばし言葉に詰まって、目が泳いでいる。

ようやく口を開けたかと思うと、答えにならない答えを言っていた。

『…元気なとこ』

元気なとこ?と祐亮が復唱すると、秋人は軽くうつむいた。

『自分に持ってないから良いって思ったんだ』

最初の印象がそれだ。

もちろん、それだけで人を好きになるわけではないがそれがきっかけで気になり出すことだって十分ありうる。

『そっか。確かに人は自分にないものを持つ人に惹かれるものだよね』

『…夏実が前の彼氏と付き合ってるときにはこんな気持ちにはならなかったんだ』

『どんな?』

祐亮はあれこれと突っ込んでくるけど、優しく秋人を包み込むような口調をしているから、つい秋人もポロッと言ってしまう。

誰かに知ってほしいのではなく、誰かに理解してほしいのだ。

知ることは誰にでもできるけど、それを理解することは簡単なようで難しい。

『…彼氏がいなきゃ良かったのに…って』

もはやこの時点で秋人が麻冬に恋心を抱いていることは祐亮には明確だった。

だけど、敢えてそれは言わずに祐亮は秋人に尋ねた。

『…思うだけなら悩まないよな』

秋人はかすかに頷いた。

『…阿笠だから、そんなこと思いたくないんです』

中学高校と一緒に活躍してきた大事な大事な相棒。

信頼関係は何よりも誰よりも勝っているはず。

そんな阿笠に、いなきゃ良かったなんて秋人が思えるはずがないのだ。

阿笠だから、阿笠だから秋人も辛い。

『…なぁ秋人』

祐亮は、切なそうにうつむいている秋人の名前を呼ぶ。
秋人は軽く祐亮を見た。

『自分の気持ち優先させて良いんだよ』
『…え…』
『相手が阿笠だからって身を引かなきゃならない理由にはならない』

祐亮はそう言うけど、実際2人は付き合ってるんだから秋人には為す術がない。
それを分かってる秋人は祐亮の言葉に答えられずにいる。

『幸せ…って、誰でも手に入れれるんだよ』
『そんなの…』
『阿笠が今幸せなように、秋人にだって幸せになる権利はあるんだよ』

秋人はその言葉に、少し前の記憶を蘇らせる。

阿笠と麻冬が付き合う前、阿笠から初めて麻冬との過去を聞いたときに秋人は阿笠に同じようなことを言った。
阿笠にも幸せになる権利はあるんだから、自分の思ったことをやれ

ば良いんだ…と。

あれは秋人の本心だ。

当時は本気でそう思っていた。

けれど、いざ自分がそう言われる立場になるとそうは思えないでいるのが現状だ。

必死に掴んだ阿笠の恋と、幸せになるために阿笠を好きになろうとしている麻冬の間に割って入れるほど図々しくはない。

秋人は知らないけど、麻冬が阿笠と付き合うと決めたのは秋人が夏実を好きだからだ。

もし、秋人がもっとはやく麻冬への気持ちに気づいていたら本当に変わった未来があったのかもしれない。

だが、阿笠がいなきゃ秋人は自分の気持ちには気づけない。

今ですら分かっていないのだ。

『まぁさ、こんなときは憂さ晴らししかないっしょ』

祐亮はニカッと笑いながら親指を立てた。

『は、憂さ晴らし?』

不思議そうに秋人が尋ねると祐亮は、明日サッカーやろうぜ!と楽しそうに言った。

翌日2人がサッカーをしていたのはこういう成り行きからだ。

この数分後くらいに茉李亜が帰ってきて、祐亮含めて家族全員で夕飯を食べた。

祐亮は家族同等で、秋人の両親も本当の息子のように祐亮に接している。

いつしか来る、本当の家族になる日まで。

next

第５５話【明かされる思い】

「おいっ、あっきー！」

始まった体育。

男子はハンドボールで、今は試合だ。

チームはたいてい実力が同等になるように分けられ、３チーム作られる。

だから秋人と春樹はだいたい違うチームになる。

今日は春樹がいないためどう考えても秋人がいるチームが優勢だ。

「え……ぉわっ！！」

だが秋人の要望で秋人はキーパーをやっている。

「大丈夫か？！」
「わ、わりぃ！」

キーパーをやっているのだが、秋人はまたボーッとしていたため声

をかけられたときには目の前まで攻撃ボールがきていた。

自前の反射神経でも避けきれる距離ではなく、手でかばうことすらできずに秋人の左頬に命中したのだ。

あの近い距離から思い切り投げたボールが顔面に当たったらかなりの痛さだ。

秋人は後ろに倒れ込み、クラスメートが秋人のところに急いで集まってきた。

「い…つつ……」

秋人は左頬を押さえながら上半身起き上がる。

「平気か？」

「あ…ああ」

阿笠が手を差し出してきたから、秋人はその手を掴んで立ち上がった。

前に体育は2クラス合同と言ったが、同時にやるクラスは阿笠のクラスだ。

阿笠のクラスも3チームに分かれていて、偶然秋人のチームと阿笠のチームが試合をやっている最中だったのだ。

「秋人…ボーッとしすぎじゃないか？」
「や…んなことねぇよ」

秋人にぶつけたのは阿笠ではないが、阿笠は間近で秋人にボールが当たるのを見ていた。

「授業中もボーッとしてたよ、あっきー」

クラスメートが阿笠にそう言うと、阿笠は「寝てたんじゃなくて？」と問うた。

みんながウンウンと頷くものだから、秋人は罰が悪いのかプイッと視線を反らした。

阿笠はそんな秋人をじっと見る。

「…保健室行こっか」

阿笠は微笑みながら秋人にそう言い、秋人は目を反らしたまま「良いよ…」と否定する。

けど阿笠は秋人の手を引いて、無理やりその場から立ち去ろうとする。

「みんなー、適当にやってて。俺ら抜けるね」
「お、おう」

誰かが阿笠の言葉に反応した。

「阿笠っ」

秋人は断固として嫌がり、阿笠の手を振りほどく。
ここまで嫌がる秋人は初めて見る阿笠は少し驚いている。

「本当平気だから」
「赤くなってるよ。そのうち腫れる」
「大丈夫だって。ほら続きやろうぜ」

阿笠は秋人のかなり動揺している様子を変に感じる。

保健室へ行くのが嫌なわけでも、体育をどうしてもやりたいわけではない。

とすれば俺と2人になるのが嫌ってことか…と。

「…今の秋人がキーパーやったって絶対俺のシュート取れない」

「やってみなきゃ分か…」

「分かるよ」

阿笠は秋人を一途な瞳でじっと見つめる。

その瞳から目が離せずにいる秋人は、なんとも気まずそうだ。

「俺に言いたいことあるんだろ」

阿笠は遠回しに言わずにズバッと問うた。

秋人はズキズキ痛む頬を手で押さえながら、視線を斜め下へと移す。

「別に何も」

「俺が分かんないとでも思ってるのか、秋人」

その言葉は、何とも祐亮の言葉とダブる。

阿笠にまで心を見透かされそうになるのを恐れた秋人は、「だからないって！」と叫んで走ってこの場から去った。

「あきっ…」

阿笠はすぐに追いかけようとしたが、みんなが見ているのに気づいて足を止める。

「阿笠…」

何が何だか分からない男子たちが一斉に阿笠を見た。

迷惑そうな表情ではなく、心配している表情。

秋人がどれほど慕われているのか嫌ってほど伝わる。

「…大丈夫、何でもないから。俺秋人んとこ行ってくる」

阿笠はみんなを安心させるために笑ってみせた。

いつもの阿笠の笑顔にホッとしたみんなは、またワイワイとゲームを再開させる。

阿笠はとりあえず秋人を探そうと、秋人が走って行った方へ走って行った。

秋人は部室近くにある水道に向かい、頬を冷やそうと顔をじゃぶじゃぶ洗う。

タオルがなかったため体操服で拭いていると、服の生地が患部に直撃した。

「っつー…」

秋人は前に春樹を殴ったときのことを思い出して、あいつもきっとかなり痛かったんだろうな…なんて考える。

秋人は部室へ入り、救急箱を出して漁り始める。

だがお目当てのものが見つからないらしく、今度は自分のロッカーの中をゴソゴソと探し始めた。

ねぇな…と呟きながら探していると、秋人の左肩をポンポンと誰かが叩いた。

秋人が左側に振り向くと、肩に置いてある手の人差し指が秋人の左頬をプニッと指した。

「い〝いっ……て…めぇ！」

秋人が痛そうにクルッと振り返ると、そこにいたのは阿笠だった。

「阿…」

阿笠は秋人をよそに自分のロッカーの中を秋人と同様探し回して、湿布を出した。

「ほら、痛いんじゃん」

阿笠は平然と言いながら、取り出した湿布を秋人に渡す。

「なんで…」

けれど秋人は湿布を受け取らずに、怪訝そうに阿笠を見た。

「なんでって、理由がなきゃダメなの？」

「え…」

「心配くらいさせろよ」

フ…と阿笠は大人っぽく笑っている。

秋人は挙動不審のように目を泳がせて、ごめん…と小さな声で言った。

阿笠は秋人にベンチに座るよう言い、秋人は今度は素直に従ってベンチに腰を下ろした。

阿笠は座っている秋人の左頬に湿布をペタッと貼る。

冷たかったのか秋人は片目をつぶって声にならない声を上げた。

「で？」

阿笠は秋人の隣に腰を下ろす。

走ったためか暑そうに阿笠は手でパタパタと扇く。

首に汗が流れていて、そんな阿笠を見た秋人はこれほどまでに俺のことを考えてくれる奴に隠すことなんてあるのか…と思う。

「…佐々先輩、茉李亜のために星陵入って茉李亜のためにサッカーやめたんだって」

意外な話題に阿笠は内心驚きつつも、相づちを打つ。

「阿笠は…」
「うん？」
「阿笠もやめるか？…麻冬のために」

何をバカなことを言ってるのかと、阿笠は秋人を見た。

けれど秋人は真剣そのものだったから阿笠も真面目に答えないわけにはいかなく、
「やめないよ。麻冬のためになんて」と言った。

麻冬を追いかけて星陵に入った人の言葉とは思えない、というような表情を秋人はしている。

それを察したのか、阿笠は扇ぐのをやめて冷静にあっさりと言いのけた。

「星陵でもサッカーはできる。だろ？」
「麻冬よりもサッカー…ってこと？」
「比べらんないけど、たぶんサッカーやらない未来はない」

秋人は自分からそう尋ねたにも関わらず、阿笠がサッカーやめる気

がないのを知って内心かなりホッとしている。
秋人の未来には阿笠がいる。

たぶん、阿笠も同じ。

「…でも秋人。それが聞きたいわけじゃないよな」

落ち着いた声で阿笠は言う。

秋人は頷くでも返事をするでもなく、ただ黙りこくる。

阿笠はベンチから立ち上がって部室の窓を開けて涼しい風を取り入れる。

そして、秋人が話し出すまで窓のところで涼もうと立っていると、秋人は阿笠の予想よりもかなり早く口を開いた。

「…なんか、お前に言うことではないと思う」
「けど俺関係なんだろ？」
「阿笠関係というか…」

秋人がそこまで言った時点で阿笠は秋人が何を言いたいのか悟った。
軽く目をつぶり、ゆっくりと目を明けながら阿笠は重々しい口を開く。

「…麻冬か」

ベンチにうつむきながら座っている秋人と、腕を組みながら窓にもたれかかっている阿笠。

割りと広い部室に2人しかいないからとても声は響く。

窓を開けているせいか、体育をやっているクラスメートたちの楽しげな声が部室にまで届いてきていた。

next

第５６話【必死の訴え】

「まーふゆ！ナイッシュ！」

体育館では女子たちがバスケをしている。

バスケも男子と同様クラスで３チームずつ作る。

そんな中やはり麻冬と夏実は違うチームになるわけだが、夏実はまだ足が治っていないため舞台に座って応援している。

しかも麻冬チームの。

夏実に声をかけられた麻冬は手を振って応える。

なんだかんだで得点の３分の２は麻冬が稼いだものだ。

もちろんチーム内にはバスケ部の子とかもいて、彼女らは攻撃よりもディフェンスを固めているから麻冬の得点率が高くなるのである。

３チーム作るとなると、１チームはたいてい６～７人ずつで編成される。

試合に出るのは５人だから、前半出ていた麻冬は後半は自主的に交代した。

試合に出ない麻冬は舞台に上がって夏実の隣に座る。
タオルを首に巻いて、暑そうに髪の毛を結っている。

「おつー」
「もー本当暑い。あ、そうだ。今日の放課後春樹のお見舞い…って、部活後じゃ悪いかなぁ」
「あー、どうかなぁ」

部活のあととなれば確実に9時すぎになってしまう。
風邪だったらきっとその時間じゃとっくに寝ているはず。

「あ、今日サッカー部休みの日だよね」
「そうね。秋人行くかしら」
「行くしょ、秋人なら」

なら秋人にあたしたちの分のお見舞いも頼もうか、と麻冬は言ったから夏実も同意した。

その頃、サッカー部の部室では重々しい空気を漂わせながら秋人と阿笠が話をしている。

この堂々としたサボりにはもう誰も文句の言い様はない。

阿笠にとって心配なのは、秋人に麻冬を取られるかもということではない。

心配なのは、その先みんなの関係がこじれて気まずくなって疎遠になってしまうかもしれないこと。

阿笠は案外心の奥で覚悟はしているのだ。

麻冬が実際に好きなのは秋人で、秋人も麻冬が好きだと言うなら自分の入り込む隙はないと。

「やっと気づいた？」

阿笠は皮肉でもなく嫌味でもなく、嬉しそうに且つ切なそうな表情を見せた。

秋人が阿笠を見上げると、阿笠は窓の外の空を見上げている。

青い空は凛と澄んで、雲たちは静かに揺れる。

「気づいたっていうか…正直好きかなんて…」
「分からないって？」
「…」
「自分の気持ちに素直になれ…って俺に言った人のセリフとは思えないな」

可愛い人、気になる人、好きな人
世間の人はよくこれらは別物だと言う。

可愛いから好きなのではなく、気になるからと言って好きであるとも限らない。

阿笠の麻冬への思いは明らかに好きな人、だ。

なら秋人は？

「…秋人、そんなの簡単だよ」
「え…」
「いつも側にいて欲しい人が秋人の好きな人だよ」

阿笠はなぜライバルにこんなに優しくするのか。

最大の謎である。

「側に…」

秋人はゆっくりと目を閉じた。

誰が思い浮かべられてるかなんて阿笠には百も承知だ。

秋人が目を開いたと同時に阿笠は
「分かった？」と尋ねる。

「ああ…俺…」
「待った。そのあとの言葉は櫻井に言ってあげて」
「は…なんで春樹？」
「…櫻井は、君のために大事なものを捨てたんだ」

このときの秋人には阿笠の言っている意味が分からずにいた。

阿笠は続けて
「今日部活ないしお見舞いに行くと良いよ」と微笑んだ。

秋人だってはなからお見舞いには行くつもりだった。

けどそれは自分の本心を言うためではなく、純粋に風邪が心配だったから。

ためらっている秋人に、阿笠は秋人の正面まで来て立ちはだかる。

「…頼むよ、秋人」

座っている秋人を見下ろしながら阿笠は言う。

「このままじゃ櫻井は俺の二の舞になっちゃうんだ。あんな悲しい思いは櫻井にはさせたくない」

「どういう…」

「櫻井が自分で気づかなきゃ本当は意味ないんだけど…でもあいつの優しい性格じゃきっと一生無理なんだ」

阿笠はまるで自分のことのように必死だ。

そして、阿笠は秋人と同じ目線になるように片膝を床につける。

「俺にはお前がいてくれて救われたように…櫻井も誰かが救ってやんなきゃならないんだ」

「それが俺って…」

「今回ばかりは秋人じゃなきゃダメなんだ」

ここまで他人のことで必死になるのも珍しい。

よほど春樹が心配なのか。

それとも…

「…俺はきっとダメだ。長続きなんかしない」

阿笠は床につけていない方の膝も床つけて、腿の上で両手を拳にしてカタカタと肩が震えている。

視線を床に向けて、ポツリポツリと語る。

「一度終わってしまったものは二度と甦らない…」

「何のことを言って…」

「だけど、だから…終わりにしちゃダメなんだ。どっちかが想わなくなったらおしまいなんだ」

単刀直入に春樹が秋人のために身を引いて夏実を振ったんだ、と言えば良いのに。

こんなまどろっこしく遠回しに言われたって絶対秋人には理解でき

ない。

だけど、言ってしまったら春樹の思いが無になる…きっと阿笠はそう思っている。

「櫻井は……」

阿笠はギュッと拳を強く握って、バッと秋人の顔を見る。

真剣に何かを訴えているその表情に、秋人はかける言葉がない。

「…俺にも権利があるって言うのなら…櫻井は…っ……」

阿笠は言葉に詰まる。

けれどそれでも頑張って秋人に伝えようとしている。

こんなにも懸命な叫びが伝わらないはずがない。

「…櫻井にも幸せになる権利あるんだ！」

阿笠に片思いしていた3年間があるからこそ、こんなにも春樹のた

めにしてくれている。

自分の恋はきっと終わると分かっておきながら、秋人の助けもして他人の心配までする。

こんな人間って存在するのだろうか。

麻冬を取られてでも秋人の方が大切だと言うのか。

到底理解し難い。

けどそれが阿笠大悟という男なのだ。

「阿笠…」

秋人は困惑したような表情をしているが、真剣そのものの阿笠の顔を見て、しばらく黙る。

そして、コクンと頷きながら

「分かった」と言った。

阿笠は心底嬉しそうな、そして安堵している顔を見せた。

「ありがとう。秋人」

秋人は阿笠にも聞きたいことがいろいろあったけど、あまりに嬉しそうな顔をするものだから聞くに聞けなくなる。

阿笠は立ち上がって、ん～っ、と声を出しながら伸びをする。

部室の時計を見て体育が残り15分くらいになったことに気づき、阿笠は秋人に
「いけそう？」と尋ねた。

秋人も立ち上がり、首をパキパキ鳴らして
「ああ」と返事をした。

阿笠は秋人の左頬をチラッと見て、そして部室を出る。

秋人も阿笠に続いて部室を出て、2人は体育をやっているみんなのところへ戻った。

阿笠チーム対秋人チームの試合はとっくに終わっていたらしく、お

互い違うチーム同士と試合をしている。

「あっきー！助かった！はやく出てくれっ」
「はいはい」

秋人は小走りして今出ているキーパーと交代した。

「阿笠ぁ！やっぱお前いないと得点できねぇよーっ」
「あはは、ごめんごめん」

阿笠も走ってコートに入り、出ていたメンバーの1人と交代した。

ようやくモヤモヤした気持ちに気づいた秋人は、残りの試合シュートを全て止めた。

阿笠も、シュートした球は全て決まった。

授業終了の合図がされるまで、2人はお互いの顔を見ることなく意気揚々とプレーを楽しんだ。

next

第57話【知らされる事実】

5限6限と授業を終え、掃除やらHRやらも終えて放課後になる。
夏実と麻冬は急いで部活へ行くが、部活のない秋人はのんびり荷物を片付けている。

『阿笠…も、一緒に来てくれるか？』

今週は麻冬と春樹が大会で、来週が夏実と秋人が大会。
今回の大会は全国へつながる大会ではないけど、良い成績を残すためにみんな頑張るのだ。

『んー…行きたいけど、遠慮しとくよ』
『…そっか』

阿笠も本当は春樹のもとへ行きたかったんだろうけど、あえて秋人に譲る。

『…ケンカになるかもしれなくても、頑張れ』

阿笠は微笑した。

『…ケンカ…』

どういう経緯でケンカになると言っているのか分からない秋人に、阿笠は『俺んとこ来たら励ましてやるよ』と笑う。

秋人は気まずそうに、俺らライバルなのに…とポツリと呟いた。

けれど阿笠は、ライバルの前に友達だから、と言うんだ。

「あっ」

廊下で、秋人と阿笠が出会った。

阿笠は同じクラスの女の子と一緒で、フルートのケースを持っている。

「阿笠。あ…練習か」

「うん。じきに音楽祭だからね」

そして秋人は、グッと堪えるような顔をして言った。

「…行ってくるから」

本当はその一部始終を見ていたい阿笠だが、自分が入っていく問題ではないから秋人に全てを託したのだ。

阿笠は祈るように、秋人を見て言う。

「任せた」

そうして2人は別れる。

秋人からすればただ春樹に正直に言うだけなのに、阿笠が遠回しにいろいろ言うものだから変に緊張してしまっている。

幸せになれる権利だの

終わってしまうだの

ケンカになるだの

秋人には全然予想できないもの。

けれど阿笠の必死の訴えを無視するわけにはいかないから、とりあえず阿笠のために秋人は言うと決めたのだ。

秋人は校舎を出て駐輪場に向かう。

珍しく自主練もせずに帰るのだ。

帰り道にあるスーパーに行って、春樹の好きなチョコレートやらポテトチップスやら、りんごやらスポーツ飲料やらを手当たり次第カゴに入れていく。

そして自分の左頬に貼ってある湿布の効果がきれたときのために、予備の湿布も買う。

適当な量をカゴに入れてからレジにいくと、値段は軽く１０００円を超していた。

買ったものを自転車のカゴの中に入れて、秋人は再び自転車を走らせる。

春樹の家へ向かうのだ。

数分後、春樹の家に着いてインターホンを鳴らすと輝樹が出てきた。

「秋人さん。…あ、兄貴の？」

「おう」

輝樹は秋人を中に入れて、玄関を閉める。

輝樹は気まずいのか

「兄貴部屋だから」と言ってそそくさと自分も部屋へ行こうとする。

そんな輝樹を秋人は呼び止める。

「輝樹。よそよそしいのは夏実のことか？」

図星のせいか輝樹はピタッと立ち止まる。

何も言わないのを見て秋人は肯定と判断した。

「気にしてねぇから。俺も麻冬も。夏実だって怒っちゃいねぇよ」

「…」

「意味なくお前がそんなことするなんて思ってねぇから」

秋人がそう言うと、輝樹はゆっくり振り返ったが、何か言おうとして止めた。

「気まずいと思うのは悪いことしたと思ってるからだろ。なら二度としねぇよな？」

「…しない」

「なら良いじゃん。みんな心配してんだよ、夏実があんなんになって輝樹が気にしてんじゃないかって」

秋人は軽く笑いながら言った。

それでもやはり気にしてしまうのか、輝樹は素直に喜べない。

「…ごめん。ありがとう」

輝樹は照れを隠すようにして、小走りで階段をかけあがって行った。

そんな輝樹を追うように、秋人も階段を上る。

春樹の部屋の前まで来て、ノックしたけど返事がないため秋人は勝手に部屋に入る。

まだ少し顔に赤みを帯びているが、だいぶ治まってきている様子だ。

秋人は寝ている春樹に近づき、買ってきたスポーツ飲料を春樹の頬に当てた。

「ん…」

冷たいからか、春樹が少しだけ意識を取り戻している。

秋人が春樹の名前を呼ぶと、春樹は眠たそうに目をこすって、ゆっくりと目を開けた。

秋人が上からのぞきこんでいるのに驚いた春樹は、

「わっ?!」と声を上げた。

「よ。2日ぶり」

「あ…秋人…」

春樹はおでこに手を当てながらゆっくりと上半身を起こした。

「別に起きなくても良いよ」

「ん…大丈夫」

「あ、これ。はい」

秋人は春樹にさっきスーパーで買ったものを手渡す。

春樹は袋の中を覗いて、

「俺の好きなのばっかだー…」と軽く声を弾ませた。

「ありがとう、秋人」

「おう」

「あれ、ほっぺたどうしたの？」

「あー…体育でキーパーやっててシュートが当たって」

「えっ？！秋人が？！」

春樹はものすごい勢いで驚いている。

まぁ無理もないか。

シュート決められただけならまだしも、顔面に当たるなんて素人でもほとんどない。

「もしかして試合中にも寝てたのー？」

「いや…」

ふーん、と春樹が返事をしてしばしの間沈黙が続く。

沈黙をなくそうと春樹が、飲み物でも持ってくるよ、とベッドから降りようとしたのを秋人が止めた。

秋人は春樹に、話があるんだ…と小声で言う。

春樹はベッドに戻り、秋人はベッドの側にある春樹の勉強机の椅子に腰を下ろす。

「話？」

改まってなんだろう、と春樹は不思議そうな顔をする。

「あの…さ」

秋人は話そうとはするけれど、なかなか言葉が出てこない。

おじおじしている秋人に、春樹は何も言わずじっと秋人を見ている。

そしてようやく口を開いた秋人は、こう言った。

「俺…麻冬のこと好きなんだ」

秋人がそう言った瞬間、春樹の時間が止まった。

「なんか阿笠がお前のことひどく心配してたぞ。春樹にだって幸せになれる権利はあるとかって…」

「え…え？ちょ…待って」

「え？」

「何…好き…？麻冬…」

春樹は壊れたように薄ら笑いをしている。

春樹が聞き返してきたから、秋人はそうだよ、と言う。

「だって…秋人…夏実…」

「俺もずっと夏実のこと好きだと思ってたけど」

「な、なんで…」

「なんでかな。麻冬が阿笠と付き合い初めてから俺変なんだ」

春樹には今何が起きているのか理解できずにいる。

いや、正確には理解したくないと思っている。

つい先日夏実のことが好きだと言っていたはずなのに、今このタイ

ミングでこのカミングアウトは春樹にはかなり大きな傷。

「ところで阿笠と何かあったわけ？あんな必死な阿笠初めて見た」
「え…」
「てか俺なんかした？俺のために春樹は大事なもの捨てたって言ってたんだけど」

春樹は頭の中で日曜日のことを思い出している。
雨の中、びしょ濡れの阿笠とした話を。

「あと他にも、阿笠の二の舞になるとか…終わったら二度と元には戻らないとか、どっちかが思わなくなったらおしまいだとか？」
「二の舞…？」
「なんのことかねぇ。麻冬のこと言ってんのかな」
「…？なんで麻冬？」

春樹は震え上がる気持ちを抑えながら、押し殺したような声で言う。
秋人はそんな春樹を気にせずに淡々と喋った。

「ああ、あいつらが昔別れたのって阿笠が振ったからなんだけどさ、実は麻冬が阿笠を好きな女子たちから嫌がらせ受けてたからなんだ」
「嘘…」

「阿笠の前では必死に笑うくせに隠れて泣いてたんだと。阿笠なりの麻冬を守る手段だったのかもな」

そして秋人は、それでもまだ麻冬を好きだから星陵に入ったことなどを細かく説明した。

全部話し終えたところで、春樹は頭を抱えて小さな声で「嘘だろ…」と呟いた。

今の自分と昔の阿笠があまりにも重なっていることと、自分がした行為の無意味さにショックを受けているようだ。

特に後者。

それもそうだ。

もっと前から知っていれば今頃春樹はこんな風に寝込んでなんかいなかった。

輝樹のことで夏実とケンカせずに済んだかもしれないし、幸せな日々が待っているはずだった。

「春樹。なんか隠してねぇ？」

そう尋ねてくる秋人に、春樹は作り笑いをして
「何にも」とだけ言った。
秋人はそれ以上そのことに関しては何も聞かなかった。

長らく世間話で盛り上がっていたけれど、春樹は作り笑いの向こう側に薄暗い闇を作っていた。

知らないほうが幸せだった…とは言えないけれど、風邪をひいてる春樹には更なる追い討ちをかけることになった。

直に試合だというのに、春樹はあと2日も学校に来なかった。

ｎｅｘｔ

第５８話【大ゲンカ】

春樹がようやく学校に来たのは、金曜日だった。

本当ならまだ風邪が完全に治ってないから朝練はパスしたいところだが、日曜日以来ずっと部活をしていないし春樹は部長でエースだし、おまけに日曜は試合だから行かないわけにはいかないのだ。

春樹が朝練に顔を出したときには部員たちが泣いて喜んだものだ。

朝練を終えて着替えてから教室へと向かう。

夏実が先に来ていて、春樹に気づいて春樹のもとへ行く。

「春樹、大丈夫？」

夏実が部活休みなのは水曜だけど来週試合だから休みはなくなった。

麻冬も木曜日休みだが、今週試合だから休みはもちろんなしなわけで。

結局秋人しかお見舞いに行けなかったのだ。

「お見舞い行けなくてごめん」
「ううん、良いよ。もうだいぶ良くなったし」
「そっか。でも春樹が風邪なんて珍しいね？」
「…うん、ちょっとね」

春樹は軽くハハハと笑った。

「…なんか変」

夏実が怪訝そうに春樹を見る。

春樹はドキッとしながらも平静を装いながら受け答える。

「そんなことないよ」
「まだ…土曜日のこと怒ってる？」
「…」
「ごめん…麻冬にもあたしが悪いって言われた。関係ないこと口に出したよね」
「ううん、俺こそ」

春樹は決して怒っているわけではない。

ただそのことで自分は夏実とは無縁の関係になったんだという事実を突き付けられたことに悲しさを抱いているだけだ。

それだけならまだしも秋人からの告白。

春樹にとっては、プラス2日寝込むだけで済んで良かったと思っている。

「…夏実、あのさ…」

春樹は何か言おうとするけど言葉に詰まる。

夏実が何?と聞いても答えず、結局やっぱ良いと逃げた。

そのとき、秋人が教室に入ってきて夏実と春樹が一緒にいるのに気づいた。

「おー春樹、もう平気?」
「うん、来てくれてありがとね」
「おう」
「ね…阿笠もう教室?」
「今そこで別れたけど」

すると春樹は勢いよく教室を飛び出した。

今まさに教室に入ろうとしている阿笠に、春樹は思い切り叫んで呼んだ。

「阿笠っ！！！」

その声に驚きながら振り向く阿笠に、春樹は小走りで近づいていく。

治ったんだね、と言う阿笠の言葉を無視するかのように春樹はズカズカと言う。

「阿笠が俺に何を言いたかったのかやっと分かった」

「は？何のこと…」

「阿笠が今の俺と同じような経験したから言ったんだ」

春樹の言葉に、阿笠は穏やかに対応した。

「そうだよ。秋人に聞いたんだね」

春樹はギュッと拳をつくり、悔しみや我慢に耐えているような表情をしながらワナワナと震えている。

「…聞きたくなかった！」

春樹は阿笠の足元に視線をやりながら言った。

「俺は阿笠と違う！全てを諦めるつもりだったんだっ…」

春樹が声を上げて言うものだから、通りすがっていく人たちがジロジロと2人を見る。

それに気づいた阿笠が春樹に、場所を変えようと言ったけれど春樹は聞く耳を持たない。

「阿笠が秋人に言うように言ったんでしょ?!秋人が自ら言うはずがないっ」

「ちょ…櫻井」

「阿笠が心配してくれて嬉しかったのは本当だよ。だけど、こんなのってあんまりだよ！」

春樹はなだめる阿笠をよそに言いたいことを言う。

その春樹の言葉にムッとしたのか、なだめていたはずの阿笠も反論し始めた。

「余計なお節介でも言わなきゃいけなかったんだよ！」

「だから何で！」

「櫻井にあるはずの未来を掴んで欲しいんだって。そんな簡単に諦められる気持ちじゃないだろ！」

阿笠が経験したものは現在と似ているようで似ていない。

確かに嫌がらせは別れればなくなると分かっていたことだけど、今回は嫌がらせではなく…

ただ親友と好きな人がガブってしまっただけ。

状況が違いすぎる。

「諦められる気持ちじゃなくても諦めようとしたんだよ！」

春樹は一直線に阿笠の目を見つめる。

「だから諦める必要なんかないって教えてんだろ！」

阿笠も珍しく口調が悪くなりつつある。

2人がヒートアップすると同時に野次馬も増えた。

何だ何だと廊下に人だかりができる。

「知りたくなかったんだって！俺っ、覚悟してたんだ！！」

春樹と阿笠の罵声が聞こえてきた夏実と秋人も教室から出てきて、そのうち朝練を終えた麻冬もやってきた。

「だから例え俺のしたことが無意味だったとしても、知らずに過ごしたかった！」

「違う！無意味なのは今のお前の行動なんだよ！！」

「何だと！」

「もう我慢しなくて良いって言ってんだ！なんで素直に受け止めないんだよ！」

そして、分かったように言うな！と春樹が阿笠の胸ぐらを掴んだ。

さすがにまずいと秋人が止めに入ろうとすれけど、2人の迫力に押し負かされる。

阿笠も春樹の胸ぐらを掴み返した。

「分かってるから言ってんだよ！」

誰かがキャー！と叫び声を上げた。

野次馬たちがガヤガヤと騒ぎ立てている。

「お、おい、春樹阿笠。良い加減止めろって」

秋人が何とか割って入ったけども、２人は秋人の言葉なんか無視して言い続ける。

「…阿笠は確かに言われて報われたかもしれない。けど、それは阿笠がそう望んでたからだ！」

「さく…」

「望んでない俺にどうこう言ったって変わらないんだ！…どうしろって言うんだよっ！」

春樹は胸ぐらを掴んでいる手に力を込めた。

両者の言い合いは平行線を辿るばかりで終わりがこない。

そのうち予鈴が鳴るが２人は一向に治まらず、野次馬たちも震えていくばかり。

もうしばらくすると職員会議を終えた教師たちがＨＲのために教室に向かってくる。

２年の教師たちが廊下にかなりの人だかりができているのを見て、

慌てて人だかりに割って入っていく。

なんとその野次馬の中で、あの櫻井春樹と阿笠大悟がケンカをしているものだから教師陣も驚きものだ。

ちょうど春樹が阿笠の胸ぐらを離し、自分の胸ぐらを掴んでいる阿笠の手を振りほどいて殴りかかろうとした。

教師たちは急いで止めに入ろうとするが、その前に阿笠が平手でそのパンチを止める。

そして阿笠が右足で春樹を蹴り上げようとすると、春樹が防ぐより先に秋人がその足を手で掴んだ。

「秋っ…」

2人そろって秋人が近くにいたことに驚いている。

野次馬がいることさえ気づいていなかったようだ。

「阿笠。お前のこの足はボールを蹴るためにある」

秋人の真剣な瞳に阿笠は自分がしようとしたことにハッと気づいた。
気づいたけども、どうにも怒りは止められずに2人はまたもにらみ合いをするが

「櫻井！」
「阿笠！」

2人の担任が2人を押さえた。

「ちょっ…何！」

阿笠も春樹も反論しようとするが、教師たちは阿笠や春樹の手をグイグイ引っ張って各教室へと連れていく。

それでも阿笠は、振り返りながら叫び続ける。

「…櫻井！お前は何にも分かっちゃいない！！」

阿笠の声に春樹も振り返る。

「お前自信がどれだけ傷つこうが勝手だけど、傷つくのはお前だけじゃないんだって言っただろ！…何で分かんないんだよっ！！」

春樹は阿笠に何か言おうとする前に教室に入らされる。
阿笠もすぐに教室に入らされてしまう。

他の教師たちは野次馬たちに教室に帰るよう促した。

阿笠と春樹は2人とも、担任たちに
「あとで職員室来るように」と言われて席に着けさせられる。

いつもニコニコ笑っている春樹と、穏やかで紳士な阿笠のケンカだから生徒たちの話題は尽きずにHR中もひそひそ話をしている。

当の2人は、みんなの視線なんか気にもせずに左肘を机につけて立て、左頬を左手で支えていながら、ムスーッとしている。

HRが終わると、2人は言われた通り職員室へ担任と一緒に向かった。

next

第59話【いがみ合い】

「で、一体何があったんだ？」

春樹が担任にそう聞かれている5メートルほど横で、阿笠も担任に同じようなことを聞かれている。

「何でもないです」
「あれだけ野次馬になってて何でもないはないだろ」
「ただ口論してただけですし、野次馬は勝手に群がってきただけ」

確かに春樹がそう言うのは間違ってはいない。

普通の男子生徒同士のケンカならあそこまで野次馬はいなかったかもしれない。

担任も、確かに櫻井と阿笠だからなぁ…と多少納得気味だ。

「それにしても口論て…それだけであんな激しくなるか」
「だって実際そうですもん」
「なら手を出す必要はないだろ」
「それなら向こうは足を出してきました」

春樹は阿笠の方を指差して、阿笠を見た。

すると阿笠側も何やら春樹を指差していて、お互い目が合った。

フンッ！とすぐさま顔を反らす2人。

これにはお互いの担任たちも困り果てている。

「とにかくだな、もう一切ケンカはするな。他の生徒たちに悪影響だ」

「…はーい」

「お前とか阿笠はただでさえ目立つんだ。そこらへん考えてな」

「はーい」

「…ところでそのシャツは何だ」

担任が春樹の着ているシャツを軽く指差した。

今日のはポロではなく、白字でバドミントン魂と書かれている黒地のTシャツだ。

部活で着るようなTシャツで、もう何でもありな春樹に担任はため息を漏らす。

どんだけ注意しても春樹と夏実は従わない。

教師たちもこの2人には諦めがついている。

「あ、これ？今週試合なんで気合い入れよーと」
「…まぁ良い。それより風邪はもう良いのか？」
「だいたい」
「そうか。よし、じゃあ戻って良いぞ」

春樹は返事をして職員室から出ていく。

阿笠はまだ担任と話しているが、結局何だかんだでサッカーの話に入っている。

まぁ春樹も阿笠もそんなことする人間ではないから教師たちも大目に見てくれたんだろう。

春樹が教室に戻ると、みんながソワソワと何か聞きたそうにウズウズしている。

だが春樹はそんな光景を見て見ぬフリして淡々と授業の支度を始める。

みんながなぜ聞きたいのに近寄ってこないかと言うと、秋人・夏実・麻冬が何もしないからだ。

秋人は寝ているし、夏実は漫画読んでるし麻冬はミサンガを作っている。

春樹が戻ってきたのに3人は春樹に訳を聞こうとしないものだから、他のみんなも実行に移せないのだ。

そんな3人の態度は春樹にとっては好都合。

3人はなぜそんな態度をするのかと言えば、これは推測にすぎないが秋人は阿笠と春樹の間で何かがあることを知っている。

夏実は春樹に深入りしてはいけないと思っている。

麻冬は阿笠に聞けば良いと思っている、からである。

偶然にも3人がそう思っていたから誰も動かないだけだろう。

そうしているうちに1限が始まり、時間は過ぎていき昼休みにまで経過する。

春樹が教室が良いと言ったから、4人は教室で昼食を食べることにした。

適当に窓際の机をくっつけて、お弁当を広げる。

春樹は内心イライラモンモンしていたが、３人が阿笠のことには触れずに楽しい話題を提供してくれるから、なんとか笑って過ごすことができている。

「明後日よね～春樹」

麻冬が卵焼きをはしで取りながら言った。

「ねぇ。勝てるかなぁ」
「じゃなくて、勝つの」
「あは、そうだね」

春樹はそれでも自信がなさげだ。

夏実が、いつもなら余裕って言ってるじゃないと春樹に言うと、秋人が
「あー、だって４日もやってねぇじゃん。春樹」と言った。

秋人にそう言われて夏実は、確かに…と頷いている。

「…この大事なときに風邪とか本当役立たずだよね」

春樹は苦笑した。

春樹のこの気持ちはここにいる3人が誰より分かっている。

今大会は上へはつながらないと分かっていても、ならば優勝はしなければならないというプレッシャーが覆い被さるのだ。

バドミントンで団体戦となればまだ話は別だが、個人戦での春樹の勝利は当たり前。

部員たちみんなそう思っている。

「あたしだって足怪我してるよ」

「夏実」

「そろそろリハビリ始めるの。なら、あたしも役立たずかな」

夏実がそう言うと、春樹はすぐにそんなことないと否定する。

そんな春樹に夏実はニッと笑って言った。

「でしょ？なら春樹もそうなの。アーユーＯＫ？」

夏実の励ましとおちゃらけたセリフに春樹はブッと吹く。

そして今日の中で一番楽しそうに声に出して笑っている。

そんな春樹を見て、良かった良かったと3人もつい笑顔になってしまっている。

「よーし、じゃあ麻冬っ。まずは俺らが先手必勝だね！」
「もっちろん」

4人はさっさと昼食をすませて、音楽室へと向かった。

次の授業は音楽だからだ。

特に教室にいてもすることがないし、暇だからということで。

音楽祭ももう来週に迫っている。

結局阿笠のクラスに勝つにはどうするかを考えないまま時だけが過ぎていく。

音楽室に行くために階段を上がっていくと、何やら楽器の音が聞こえ始める。

いざ音楽室に入ってみると、４人より先に先客がいた。

「あ、６組さん」

ピアノを弾いている人が口を開くと、阿笠はフルートわ演奏しながら４人のほうを見た。

６組というのが、秋人たちのことだと気づくと阿笠は吹くのをやめて、ピアノの子に言った。

「井上さん、戻ろうか」

井上さんと呼ばれるその人は、そうだねと言って椅子から下りる。

それを見た麻冬や秋人が、次どうせ授業だから良いよと言うけれど阿笠はそれを受け流した。

春樹は阿笠を見ないように、わざとらしく視線を変えている。

「良いのに」

「あはは、だってやる気が失せたんだもん」

阿笠は笑いながら残酷な言葉をさらっと言ってのける。

「…同感だね。俺もこのまま聞いてたらせっかくのやる気も失せるとこだったよ」

春樹は腕を組みながら、顔を反らして嫌味っぽく言う。

阿笠がキッと春樹のほうを見ると、春樹も視線を阿笠に向けた。

にらみ合う2人の間に流れる冷たく不穏な空気。

「…へぇ、やる気なんてあったのか」

「…何だって？」

「櫻井は無意味な行動しか取らないかと思ってたよ」

フルートをケースにしまいながら、あざけ笑うように阿笠は言う。

その阿笠の言葉にキレた春樹は殴りかかりたいと内心思っていたけれど、どうにか堪えてワナワナと震えながら、平静を保とうとしながら皮肉いっぱいに言った。

「心配どーも。お節介癖は治らないみたいだね」

その言葉に阿笠もカッとする。

秋人たちも止めるに止められない空気を漂わせる2人に困惑している。

そんな中、今朝春樹と阿笠がケンカしたことを知っている井上さんが危険を察知したのか、阿笠の手を引いて
「じゃあね、みなさん」と言って音楽室から出ていった。

言い足りなかったのか阿笠は軽く抵抗しようとしたが、それでも井上さんは足早に教室へと向かう。

2人が出ていくと音楽室はシーンとする。

春樹は未だに怒りを静められずにいて、すぐに春樹も音楽室から飛び出した。

バーン！とドアを思い切り閉める音が響く。

残された3人はお互いに顔を見合わせた。

「こ…こわ…」
「春樹と阿笠があんなにキレるなんて…」
「まじやばいよな」

一番ケンカしなさそうな2人だからこそ、余計に怖い。

その原因が夏実と秋人に関係していると知ったら、2人はどんな顔をすりだろう。

とりあえず麻冬はピアノの椅子に腰を下ろして、課題曲を演奏し始める。

クラスのみんながガヤガヤと音楽室に集まってきた頃、春樹も便乗して戻ってきた。

next

第６０話【お節介と言われても】

「…ありがと、井上さん」

教室に着いた頃、阿笠が井上さんにそう呟いた。

「ううん。それより阿笠くん珍しいよね」

「…え？」

２人は席に着くことなく、そのまま窓際に行って話を続けている。

井上さん、本名・井上幸子はすいてある髪を可愛らしく三つ編みに揺っていて、ナチュラルだが化粧もしている。

麻冬と同様ピアノを習っていて、井上さんはまだ続けているため去年も今年も音楽祭の伴奏者に選ばれたのだ。

「阿笠くんでも怒ることあるんだなーって」

「そりゃあ」

「特に朝なんて櫻井くんのパンチは止めるわ、蹴ろうとするわですごかったぁ」

井上さんは何てこともないかのようにケラケラ笑っている。

「…秋人には怒られたけど」

阿笠が微笑しながらそう言うと、井上さんは
「男の子なんだから少しくらいやんちゃでも良いじゃーん」と言った。

クラスメートたちはいつもとは違う阿笠にビクついているようだったけど、井上さんは違う。

むしろ優しすぎるより良いと言うのだ。

「でもさっきのは良くなかったかな」

井上さんは三つ編みがほつれていたのに気づき、縛り直しながら言う。

「今朝は言いたいこと…っていうか本音のぶつかり合いだったけど、さっきのはお互い嫌味しか言わなかったね」
「…」
「嫌味を言ったら解決するものでもないでしょ？」

阿笠は井上さんの的確な言葉に何も言い返せない。

阿笠にだってそんなことは十分に分かっている。

阿笠と春樹がケンカをしたって意味がないことも、蔑み合っても何にもならないことも。

それでも阿笠には阿笠の、春樹には春樹の言い分があるからこそ拗れてしまう。

阿笠が自分のようにならないようにって、春樹を助けたい気持ちもよく分かる。

だけど、春樹の気持ちだって分からなくないのだ。

本気で諦めるつもりで夏実を振ったのに、事実を知ったからと言って夏実に告白できるはずもない。

夏実にしても、ならなんで振ったの？と思うだろう。

秋人が夏実のことを好きじゃないと聞いたから、夏実と付き合いたいなんてのは都合良すぎて、そんなことしようとするのは夏実にも自分にも申し訳ないと思っている。

ああ、そうですか

で済まされるような簡単な問題ではない。

「…解決なんて、きっとしない」

阿笠はポツリと呟く。

そして続ける。

「たぶん…本当に俺ただのお節介だ。俺と櫻井は違うんだから、重ねる必要ないのに…」

阿笠は切なそうな顔をしながらそう言った。

井上さんはその阿笠の言葉を聞き逃さずに一句一句しっかりと耳を傾けている。

「…だけど、助けたいって思ったから言ったんでしょう?」

井上さんのその言葉に阿笠は顔を上げた。

「よく分からないけど…それでも阿笠くんは櫻井くんと自分を重ねる必要があるって思ったからしたんでしょう？」

「井…」

「阿笠くんがそう思ったんなら、それを信じるしかないよ」

井上さんの言葉は、阿笠の心にストンと入ってきた。

ケンカなんてほとんどしたことがなく、ましてや相手があの春樹なのだから阿笠は相当後ろめたい気持ちだった。

自分が何もしなければ櫻井があんなに怒ることはなかった、と。

だけどそれでも阿笠は今しなきゃいけないと思ったから…井上さんの言う通り必要だと思ったから腹を割って言ったのだ。

誰にでも言うわけじゃない。

春樹だから、言ったんだ。

「…うん」

阿笠は声にならない声で返事をする。

「うん…そうだよね」

阿笠は開いている窓から外の景色を見た。

下を見れば楽しそうに球技をしている生徒たちがいて

上を見ればひつじ雲が青い空の中に浮かんでいる。

飛行機雲も見え、清々しいほどの良い天気だ。

そんな景色は、阿笠の悩める心をも消し去ってくれるかのよう。

眩しそうに空を見つめる阿笠は、こう言った。

「またケンカになるだろうけど…お互い納得するまで話してみる」

そう言ってから阿笠は井上さんのほうに振り返る。

すると井上さんは、返事をするわけでも頷くわけでもなく、ただた

だ微笑んでいた。

阿笠は一瞬戸惑ったけれど、何の根拠もないけどきっと頑張れると思いながら、今日初めて心から微笑んだ。

その頃４人のクラスは音楽の授業が時期に始まるため徐々に音楽室へと向かっていく。

春樹もクラスメートに紛れて音楽室へ再び行き、そのうち授業が始まる。

麻冬はソプラノのパートリーダーだったがピアノもやることになったため、ピアノの練習やらリーダーの仕事やらで少し大変そうだ。

それでも自分がやると決めたのだからしっかりこなしている。

各パートごとの練習だから、夏実はアルト、そして春樹と秋人は男子パートで練習する。

「……樹。春樹」

「…えっ？」

練習している中、ボーッとしている春樹に秋人が声をかける。

「ちゃんと歌えよ」

「うん…ごめん」

秋人に注意されて歌い出すけれどそれでもまだ元気がなく声も小さい。

秋人はそんな春樹に気づいてか気づかぬのか何も言わなかったけど、誰かが

「春樹調子悪いん？」と春樹に言った。

もちろん春樹はそんなことないと言うけど、様子が普通ではないからその男子生徒が気にかけている。

秋人は春樹が調子悪いわけではないことを知っている。

単純に阿笠との絡みが原因なことが分かっているため、春樹に言った。

「ならちゃんとやれって。他の奴が集中できないから」

決して冷たく言っているわけではなく、ただ純粋に注意しているだけなのだが、春樹には自分を突き放しているように聞こえた。

何も言わず黙って秋人のほうを見ていると、

「何？」と秋人が尋ねてきた。

何でもないと春樹は答えるも、納得いかない秋人は春樹に言った。

「…なんか阿笠とこじれてんのは知ってるけど、そんなんになるならケンカなんかしなきゃ良かったのに。春樹らしくない」

秋人は譜面を見ながら淡々としている。

昼休みの阿笠との嫌味の言い合いでまだイライラしていた春樹は、そんな秋人の些細な言葉ですら憤りを感じる。

「らしくない…？」

歌詞カードを強く握って怒りを静めようとしながらも、春樹は声に出す。

そんな春樹に、え？と秋人は振り向いた。

「最も俺らしいことしたのに…」
「何言って…」
「誰の…っ…」

春樹はなおも抑えようと必死に自分と戦う。

「誰のためにしてると思って……っ……」

クシャッと紙が握り潰される音がした。

春樹はそこまで言って、ようやく抑えられたのかグッと唇を噛み締めている。

そしてしばらくしてフー…と息を漏らした。

「…ごめん、続けよう。ちゃんとやるから」

春樹はグシャグシャになった歌詞カードを広げながら言った。

「…春樹」

心配そうに秋人は春樹に気にかけるが、春樹はそんな秋人の態度を気にも止めない。

グシャグシャで使い物にならなくなった歌詞カードを見て、再びグシャグシャにしてごみ箱に捨てに行く。

春樹を見て呆然としている男子たちに、春樹はごみ箱の位置から戻ってくる際に
「何?」と呼び掛ける。

歌詞カードがない春樹に、誰かが一緒に見るかと聞けば、覚えてるから良いと言う。

春樹が戻ってきたところで再び練習が再開され、春樹は自分で言った通り今度は真面目に歌っている。

秋人だけでなく他の男子たちも時折チラッと春樹のほうを見る。

気づいているだろうのに、春樹は淡々と歌い続けるのだ。

誰も怖くて春樹に何があったのかなんて聞けない雰囲気。

そんな中、男子パートの隣で練習しているのはアルトパート。

「夏実？どうかした？」
「えっ？あ、ううんっ」

夏実は春樹と秋人のやりとりを横目で見ていた。

いつになく不穏な空気を漂わせる春樹を見つめながら。

next

第６１話【夢】

「お疲れー」
「お疲れっすー」

サッカー部の放課後の練習が終わり、１年はコート整備に入り２年はぞろぞろと部室へと戻っていく。

「阿笠」

練習着の裾で汗を拭いている阿笠に秋人が話しかけた。

それに気づいた阿笠は
「んー？」と答える。

「練習してくだろ？ちょい付き合ってよ」
「もちろん」

体育祭を終えて振替休日を過ぎてから、約束通り阿笠と麻冬は一緒に帰っている。

秋人が麻冬を好きだと自覚したことを知ってもなお、阿笠は一歩も譲らずにいる。

譲ってしまったら、一歩どころではなくなるから。

「何やる？」
「守りなんだけどさ、ＤＦが散らばったときの……」

秋人は言いかけながら、じっと阿笠を見た。

言葉を微妙な位置で区切ってそれ以上言わない秋人を不思議に思い、阿笠はどうかしたのかと尋ねた。

秋人は阿笠に声をかけられてハッとする。

「あ…いや」
「なんだよー？気になる」
「や…ただ…阿笠は普通なんだなと思って」

何を？と聞き返すと、秋人は非常に言いづらそうな表情を浮かべる。

「春樹…ずっとあんなんだったから」

秋人にそう言われ、阿笠はすぐにピーンときた。

そして、それには触れたくないと言わんばかりに、足元に転がっているボールを足で蹴り上げて軽くリフティングする。

「悪い。聞きたいってわけじゃないけど、ただ…」

「…ただ…？」

「お前俺に何か春樹に言えって言ったろ。それのことでこじれてんのかなって…」

さすが秋人、鋭い。

まさしくその通りだが、肯定してしまえば全てが秋人にバレてしまう。

だから否定せざるを得ないのだ。

「違うよ。私的なケンカなんだ」

阿笠がそう言うと、秋人は少し安堵した顔をした。

私的なことと知って、それ以上は何も追及せずに

「早く治まると良いな」とだけ言った。

知らないのだから仕方ないことだけど、原因の一部である秋人に他人事のようにそう言われて、阿笠が何とも思わないはずがない。

秋人にバレたって構わないのだけど、秋人が知ったらきっと今度は春樹と秋人でケンカになる。

どっちみち春樹が責められてしまうのだ。

春樹のした行為が正しいとは言えないけど、決して間違ってるとも言えないのだ。

恋愛に対する考え方はみんな違うのだから、春樹がその道を選択したことを誰かがとやかく言う筋合いはない。

2人は練習に取り組み始めた。

大会が近いせいか、今日は麻冬は夜が遅くなると昨日言っていたことを阿笠は練習の終わり間際に思い出す。

それでもまぁ練習は自分のためにするものだから別に良いか、と思

いながら続けた。

強豪と呼ばれても練習を疎かにすればどんどん抜かされる。

そんなことは長年やってきた2人には十分過ぎるほど分かっている。

狙うは全国制覇だけど、最強と呼ばれたＤＦがいない中優勝は確実に厳しい。

阿笠が十分攻められる場合なら秋人は迷わず守備に徹底するのだが、難しいところだ。

外はかなり暗くなり、グランドはライトアップされている。

ほとんどの部活をしていた人たちがいなくなっていく。

秋人と阿笠も自主練を終わりにする。

散らかったボールたちを片付けるため2人で拾い集める。

暗くて足元にあったボールに気づかず走っていた阿笠は、そのボールを思い切り踏みつけてバランスを崩して倒れた。

「いっ…」

倒れる際とっさに受け身を取ろうとした左手を痛めたようで、阿笠は倒れ込んだまま手首を押さえている。

倒れた阿笠が起き上がらないのを見た秋人は、すぐさま阿笠に走って近寄った。

「阿笠！どうした？！」

阿笠は右手を軸にゆっくり立ち上がり、片目を閉じながら少し痛そうな表情をしている。

「どこ怪我した？」

「あー…はは、平気平気。大丈夫」

右手で手を振りながら笑ってそう言う阿笠の体をじっと見て、秋人は阿笠の右肘を軽く掴む。

そして肘を持ち上げた。

「…っ…」

阿笠は声にならない声を出す。

肘を持ち上げられたことで同時に手首も動かされ、痛みが走ったようだ。

「左手首か」

秋人はあっさりと言った。

なぜバレたんだろうと阿笠は思うが、そんな阿笠をよそに秋人は「手当てしなきゃな」と言った。

とりあえず阿笠を先に部室へと行かせ、秋人は急いでボールを片付ける。

阿笠は秋人の行為に甘えて先に部室へ戻り、ベンチに腰を下ろした。

自分の怪我した手を見つめながら、何かを思う。

「……」

シーンと静まりかえる部室。

汗の匂いとスプレーの匂いが入り交じっていて、マネージャーがいないせいか少し汚い部屋。

それでも週に一度は1年が掃除しているのだが。

阿笠はベンチに横になる。

左手をお腹の上に置いて、右手は適当にブラーンとぶら下げる。

練習疲れか少し瞼が重くなっていて、うとうとと今にも寝てしまいそう。

それでも秋人が頑張って片付けてくれてるんだからと、寝ないように目を開けていようとするけどそのうち阿笠は耐えきれなくなって目を閉じた。

夢の中に出てきたのは、何とも摩訶不思議なことに佑亮だった。

真っ暗な闇の中に佑亮がただ1人立っていて、こちらを笑いながら見ている。

『先輩！』

阿笠が佑亮に話しかけても、佑亮は阿笠の存在に気づかない。

そして、おーい麻冬ちゃん！と遠くに向かって手を大きく振りながら叫んでいる。

『え、麻冬？』

阿笠が麻冬のいるほうを振り向くと、確かに麻冬がいる。

麻冬は佑亮の声に気づいて、小走りで向かってくる。

阿笠が話しかけても麻冬は素通りして、佑亮のもとへ行く。

『麻冬ちゃん、秋人連れてきたよ』

『よ、麻冬』

すると突然佑亮の隣に秋人がパッと現れる。

『ありがとう、先輩。じゃあ秋人、行こっか』

え…行くってどこに?と阿笠が問いかけても声は届かない。
秋人の腕をギュッと握る麻冬に、秋人がワザとらしく言う。

『本当に阿笠は良いのか?』
『良いの良いの。だってあたしが好きなのは秋人だもん』

そうして2人は遠くへと歩いて行き、姿は見えなくなった。
追いかけようにも闇の中に消えた2人を探る宛はない。
途方に暮れている阿笠に、佑亮が後ろから話しかける。

『行っちゃったな』

阿笠はグルンと振り返り、佑亮に掴みかかる。

『なんで先輩が秋人と麻冬の仲取り持つんですか?!麻冬は俺の彼女です!!』
『なんでって、だって秋人と麻冬は両思いじゃないか』

その言葉は阿笠に現実を突きつけた。

手の力が抜け、佑亮の服を掴んでいた阿笠の手が離れる。

『くっつけてやんなきゃ可哀想だろ？』
『…俺はどうでも良いって？』
『さぁな。ほら、秋人って近いうちに義弟になるから心配で』

普段なら佑亮はこんなことを言ったりしない。

ただこれは夢の中だ。

『俺だって！俺だって…本気でっ…』
『阿笠』

必死に訴えかけようとする阿笠の言葉を止めて、佑亮は優しく微笑みながら言った。

『それは俺に言うことか？』
『え…』
『頑張れ、阿笠』

麻冬と引き離したり応援したり、矛盾している。

阿笠は佑亮の名前を連呼したが、佑亮の姿がどんどん遠くに見えていき、次第に見えなくなった。

「ん……」

夢を見終えた阿笠が重い瞼を開くと、天井に電気がついていて眩しくてつい目を細める。

「あ、起きた？」

その横で、もう着替え終わって暇だったのか雑誌を読んでいる秋人がいる。

阿笠はゆっくり起き上がり、少しキョロキョロと見回した。

不意にさっき怪我した手を見てみると、手当てされている。

湿布が貼られている上を器用に綺麗に包帯が巻いてある。

「手……あ。秋人？だよね。ありがとう」

「おう。一応病院行っとけよ」

「うん、分かった」

そして、阿笠も制服に着替え始める。

そんな阿笠に秋人が言った。

「そういや今日は麻冬と約束してないんだってな」

「あ、そうそう」

「阿笠寝てるからどうすんのかと思ってメールしたらそう言われた」

特に2人のこの会話に意図や悪意はない。

お互い麻冬のことが好きなのに、一緒に帰れるのは阿笠なのだ。

「起こしてくれたら良かったのに」

阿笠はシュルシュルとネクタイを巻いている。

秋人は雑誌を放り投げて、フワーッとあくびをした。

「あんまり気持ち良さそうに寝てるからさ」

秋人が眠そうに、夢でも見たか？なんて冗談混じりに言う。

阿笠は練習着を袋にしまってカバンに入れ、ロッカーをパタンと閉じる。

「…うん。夢、見てた」

そして2人は一緒に部室を出て行く。

自転車のハンドルを握れないため秋人が家まで阿笠を送って行った。

玄関で阿笠の母親が出迎えて、ついでに秋人は阿笠家で夕飯食べていくことになった。

next

第62話【一番言いたい言葉が言えなくて】

「あっれ、春樹じゃん」
「え。あ…えっ、タケ！」
「おー、めっちゃ久しぶり！」

部活が終わって春樹と夏実は一緒に帰る。

夏実の足がまだ治ってないため春樹と2ケツしているのだが、横断歩道で信号待ちをしているとき偶然中学時代の春樹の友達に出会った。

「本当だよー！タケってばバド辞めちゃうんだもん」
「あはは、やっぱ俺にはスポ根とか合わないしな」
「またまた！上手いくせにっ」

身長が割と高めで、黒い髪がとてもツヤツヤしている。

椎葉タケルは中学時代の部活仲間で、春樹が部長だった時代にタケルは副部長だった。

「あ、夏実。中学のときの部活仲間の椎葉タケル」
「よろしくー」
「よろしく。あたし海野夏実」

夏実とタケルは軽くあいさつを交わす。

すると、タケルは夏実じっと見た。

夏実が不思議そうに

「何？」と聞き返すとタケルはゆっくりと口を開いた。

「…どっかで会ったことない？」

突然の言葉に夏実は人違いだよ、なんて笑って言う。

「その茶髪とか絶対見たことあるしなー」

「中1からこの髪色だよ」

「中1……？……」

タケルは軽くグーにしている右手を口顎につけている。

そして上を向きながら、なおも考えている。

「……中1……」

「タケ、人違いだよ」

春樹はタケルに変なことを言って欲しくないため、わざとそう言う。
けどタケルは聞く耳を持たずに考えている。

そして、横断歩道が青に変わった瞬間にタケルは叫んだ。

「中1！海野さんちの中学でうちが試合やったとき！」

タケルがそう言ったとき、春樹は目を大きく開いてタケルのほうを振り返りバッと見た。

タケルは思い出せたのが嬉しいのかはしゃぎながら言う。

「試合後に先輩に弄られてた春樹を助けたでしょ？」
「タケ！」

春樹は必死に止めさせようとするが、タケルはズルズルと話を引っ張っていく。

「まじカッコ良かったぜー。いつもなら俺らが止めるとこだけど生憎春樹の側にいなかったからな」
「タケ、ちょっと…」
「あたしが？春樹を…？」

「あ、覚えてない？えーっと、確か『いじめられた方は一生癒えない傷を背負ってく』とか『あたしは身長低いしまだ1年だけど堂々とエースって言える』とか？」

春樹はそこまで話してしまったタケルと、これ以上一緒にいたら危ないと思ってさっさと行ってしまおうとするが、夏実がタケルに食いついているためそうもいかない。

「そういえば春樹前にあたしに助けられたって……」

夏実も思い出すかのようにそう言った。

春樹は前を向いてうつむきながら、時が過ぎるのを待っている。

「でしょ？それにしても良かったな、春樹」

タケルは今度は春樹に振った。

春樹は振り向かずにそのままの体勢でいるが、タケルは気にせず話し続ける。

「まさか同じ高校とはな。あれから4年以上経つな」

「…4年以上…？」

夏実が年数に反応する。

「てかもしや2人は付き合ってんの?」

確かに男女が仲良く2ケツしていれば誰だってそう思うだろう。

けど今の2人にその言葉は禁句中の禁句だ。

一瞬だけど、2人の間に流れる不穏な空気。

先に口を割ったのは夏実のほうだった。

「違うよぉ」

「そうなん?もったいないなー、春樹良い奴だよ?」

「知ってる」

「付き合っちゃえば良いのに」

タケルに悪気がないことなど2人にはちゃんと分かっている。

けれど、振られた夏実にも振った春樹にもその言葉ほど痛いものはない。

「あたし振られたの。あは。春樹好きな子いるから」

夏実は微笑した。

春樹は居たたまれない気持ちになって、

「タケル、もう良いじゃん」と切なそうな顔で言う。

「新しく好きな子できたのか…」

「違う」

「違うって…だってお前」

「違うんだって！」

そのとき、信号機の青がチカチカしているのに春樹は気づいた。

じゃあね、タケ。また遊ぼ、とだけ言って春樹は自転車を走らせた。

本当はタケルも横断歩道を渡るつもりだったのだが、赤になってしまい結局渡れずにいる。

しばらく沈黙が続いた中春樹はペダルをこぎ続ける。

久しぶりに旧友に会えた嬉しさと忘れたい話を持ち出されたことへど憤りが入り交じる春樹の心情。

夜道を自転車のライトで照らすけど、自転車のライトじゃ明るさにも限度がある。

「えっ?!わっ…わわ!」

突然猫が現れて春樹は思い切り横へ切った。

バランスが取れなくなり、そのままガッシャーン!と2人は自転車ごと倒れた。

猫は自転車の倒れた音にビックリしたのか足早に消えていき、自転車のタイヤが回るカラカラという音が鳴っている。

「あぃってー……」

春樹がギュッとつぶっていた目を開けると、仰向けに倒れた春樹の上に夏実がいた。

「あてて…ごめん、春樹。動けな……」

「えっ?!大丈夫?!」

夏実は春樹をまたいで両膝を地面につけて両手は春樹の顔の両側で

地面につけている。

ちょうど夏実が春樹を押し倒したような形になっていた。

「と、とりあえず俺抜け…」

「待って、春樹」

春樹が下から抜けようとすると、夏実がそれを止めた。

聞いて、と付け加えて。

「新しくって…何？春樹ずっと片思いしてるんじゃなかったの？」

「…それは…」

「あたしには関係ないかもだけど…聞きたいの」

夏実は今にも泣きそうな顔をしている。

夏実だって生半可な気持ちで春樹に好きだと言ったわけではないのだ。

「…振られちゃっても、あたし春樹のこと好きなの！」

泣きそうなのは夏実だけど、実際泣いたのは

「……んで…」

春樹のほうだ。

「なんで…こんな俺を好きになってくれるの…」

春樹は右腕で目を隠しながら涙を防ごうとする。

「新しく好きな子なんて…できるわけない。きっと一生…」

「春…」

「分からない？タケの話から」

夏実はさっきタケルが言っていた言葉と、中1の頃の記憶と最近の春樹とのこの話系の会話を頭の中で巡らせる。

夏実だってバカではないのだから、分からないはずはない。

4年以上片思いしている

中1のときに2人は出会っていた

夏実を振ったことを知ったタケルがああ言った理由

全ては1つに繋がるのだ。

「…だけど…本当のこと知ったらきっと絶望する」

今この場で、夏実に気持ちを伝えられたらどんなに良いか。

けれど夏実振ってからまだたったの1週間しか経っていないのに、言えるはずがない。

それが明日でも5年先でも同じかもしれないが。

「絶望って…」

春樹はなおも目を腕で隠したままで、目から涙が垂れたのが見えた。

泣きたいわけじゃない。

泣いたってどうにもなるわけではない。

けれど

「夏実がいてくれたから…幸せだったんだ……」

春樹は鼻をすする。

「4年半前から…ずっと夏実だけを思ってた」

「…それって」

「だけど、俺にはもうなんもない……なんもないんだ」

春樹にはそれ以上言うことができなく、ただただ涙を堪えるのに必死だ。

夏実もそれ以上聞くことはせずに、足が痛いだろうのに無理して起き上がる。

自転車を直すことはできないから、倒れた自転車の籠から飛んだ自分のカバンを拾い上げるだけして、足を引きずりながらゆっくりと帰っていく。

それに気づいてるはずだが、春樹は追いかけはしない。

仰向けになったまま片膝を折り曲げて、目から腕を離して真っ暗な空を見上げた。

暗闇に光る星たちが、卑しくも春樹を照らす。

唇をギュッと噛みしめても、涙は溢れるだけ。

「…付き合って…て……なん…言えない…んだよ……っ…」

泣いているせいで上手く言えない言葉が道に響く。

仕方ない、とは言えない。

けれど、どうしようもない。

世の中そんなに上手くいくわけじゃないんだって言い聞かせても、
そんな言葉では納得できるはずもない。

好きなのに

両思いなのに

たった一歩の勇気なのに

それさえも、できなくて…

next

第６３話【懐かしの日々】

「あー……痛いな、もう」

夏実は怪我している足を引きずりながら歩き続けるが、途中で痛くて立ち止まる。

閉まっている店のシャッターに寄りかかって、息をつく。

「…康介呼ぼうかな」

夏実はカバンから携帯を取り出して、電話帳から康介の電話番号を出す。

けれどかけようとしたところで指を止めた。

別にここに途惑っていてもすることはないし、かといって家へ帰る気分でもない。

何にもする気になれない衝動にかられている夏実には、すべてが闇に思える。

いくら夏実が鈍感といえど、さっきの流れからおそらく分かったに違いない。

けれど決定的に分からないのは、なぜそれでもダメなのか…そして、なぜ春樹は泣いているのか。

どんだけ悩んでもこればっかりは理解できない。

両思いなのになぜ付き合うことができないのか。

理由を知らない夏実が納得しるはずがない。

夏実はしばらくの間シャッターに寄りかかりながら、何をするわけでもなくただただ目を閉じて居座った。

その頃春樹はというと、未だ止まらぬ涙を放置して夜空を見上げていた。

すると、プァッパー！と車のクラクションが鳴り車から人が慌てて出てきた。

「おい、どうした?!大丈夫か?!」

春樹は人が走ってきたことに気づいて、すぐさま涙を拭き取り上半身を起こす。

車を運転していたその男性は血相を変えて

「事故か?!」なんて言う。

春樹はとっさに、首に手を回していかにも首を怪我したかのように振る舞った。

「あたた……首打った」

そしてゆっくりと立ち上がり、猫が急に飛び出してきたから避けたら転んだんだと説明する。

すると男性はたいした怪我をしていないことにホッとした表情を見せた。

春樹は、お騒がせしてすみませんと軽く頭を下げ、倒れていた自転車を起こして荷物を拾う。

「ありがとうございました。じゃあ、失礼します」

「ああ。気をつけて」

春樹は自転車にまたがって何事もなかったかのように去っていく。

途中夏実と会うのを避けるために遠回りして帰った。

顔には涙のあとがついていて、鼻水だってまだ止まらない。

思いを背負いながら春樹は帰宅し、あまり喉が通らないが夕飯を食べて部屋へ向かう。

制服を脱いで適当な服を引っ張り出して着、ヘッドフォンを耳につけて音楽を聞こうとするが、春樹はそのヘッドフォンを耳から外し乱暴にベッドに向かって投げた。

特に意味はなく、むしゃくしゃしていただけなのだ。

音楽も耳に入ってこない。

お笑い番組も楽しくない。

宿題もやる気がしない。

漫画も読む気がしない。

全然眠くもないし、風呂に入る気分でもない。

春樹は人形のようにベッドにもたれかかって、ただボーッとしている。

そのうち携帯のバイブがカバンの中で鳴り始めた。

春樹は重い足で携帯を取りに行き開いてみるとただのイタズラメールで、しかも立て続けに2通もきている。

メールを除去し、適当にデータフォルダを開いておもむろにアルバムを見始めた。

くだらない写真もあれば、みんなが笑ってる写真もある。

一番最近での楽しい思い出は、夏休みにみんなでプールに行った写真。

ちょうど昼休み中で、白のビキニを着ている麻冬と黄色のビキニにデニムパンツをはいている夏実と、コーラを飲んでいる秋人と、そして春樹がカメラに向かって思い切り楽しそうに笑っている。

久しぶりに4日の休日が合ったから行ったのだ。

人で混んでいたけど、それすらも忘れるくらいはしゃいでいた。

高1の5月に出会ってからこれまで、楽しい思い出ばかりしかない
4人にとってのここ最近の出来事は本当に辛い。

去れば来て、そしてまた去れば来る。

どこでどう歯車がズレてしまったのか。

それまではお互い恋愛感情を持ちつつもそれなりに良い関係を保ち
続けてきた。

誰かが一歩動けば張りつめた糸がすぐにでもプツッと切れてしまう
ような、そんな脆い関係でもあったと言えるが。

けれど、曖昧な答えしか出せないでいた４人がようやく本当の答えを見つけようとしている。

怒りも悲しみも憤りも、単なる序調にしか過ぎない。

勇気を出して前へ進むための、なくてはならない道。

「…なんで俺夏実のこと好きなんだろうな」

春樹はポソッと呟く。

アルバムを適当に見ながら過去の思い出に浸っている。

思えば、春樹がこうしてここにいられるのは夏実のおかげだった。

あの頃夏実に出会わなければ、もしかしたら春樹はバドミントンを辞めていたかもしれない。

間違った道へ進んでいたかもしれない。

「櫻井…春樹」

春樹はおもむろに自分の名前を言う。

そしてフォルダを閉じて携帯の電話帳から阿笠を探し、電話をかける。

プルルルル……と何回かコールしたのち、阿笠が出た。

『櫻井？』

紛れもない、阿笠の声。

「阿笠…今出れる？」
『今？良いけど、秋人も一緒だよ。あ、でもそろそろ帰るみたい』
「秋人……」

春樹は一瞬どうしようか悩んでいる。

けれど、ゴクッと唾を飲んで迷いを打ち消すかのように一気に言った。

「じゃあ、秋人が帰ったら出てきて欲しいんだ」
『…分かった。どこに行けば良い？』
「郵便局近くのコンビニ」

そうして阿笠は、返事をして電話を切った。

春樹はギュッと拳をつくり、前をキッと見て意気込む。

そして、まるでこれから戦争にでも行くかのようにズンズンと進んで部屋を出て家を出る。

来週には１０月に入るせいか多少風が体に冷える。

春樹は軽く薄い上着を１枚羽織るのを忘れているけど、冷たさすら感じていない。

先にコンビニに着いたのはもちろん春樹だ。

その頃秋人と別れた阿笠もコンビニへと向かっていた。

「んー、はい」

『あ。阿笠？あたしだけど明日の部活何時に終わる？』

歩いている途中阿笠の携帯が鳴り、麻冬から電話がきた。

「明日は17時半か18時かな」

『ほんと！あたしとだいたい一緒くらいだ』

「そうなんだ。あ、そしたら一緒に帰る？」

『うん。でさ、そのとき秋人と一緒にいてくれる？』

電話越しに聞こえる麻冬の声が阿笠には何とも愛しく思える。

昼間学校であんなにケンカして、これからまたケンカになるかもしれない。

だから一層麻冬との会話は阿笠の心を癒すのだ。

「秋人？なんだ、用事？」

『一瞬だけね～。それ終わったら阿笠夕飯奢ってよ』

麻冬はふざけ半分でおねだりするように言った。

「５００円までなら」

『えー！けちー！！』

そんな反応をする麻冬に阿笠はクスッと笑って、

「嘘嘘。じゃあ食べ行こっか」と訂正した。

そのあと軽く会話しているとあっという間に郵便局付近のコンビニに着き、阿笠はキョロキョロと見回してコンビニの中で雑誌を立ち読みしている春樹を発見し、電話を切った。

まさかコンビニの中で大声出すわけにもいかないし、どうせ口論になるならと、阿笠はコンビニ内へは入らない。

すぐに春樹が外にいる阿笠に気づき、雑誌をもとあった場所に戻してコンビニを出た。

ドアが開くウィーンという音に阿笠が気づいて、２人はまた何時間かぶりに顔を合わせた。

「櫻井…」

next

第６４話【運命―春樹―】

春が過ぎ櫻は散って
夏を越え海は静まり
秋が終わると月は落ち
冬が明ければ雪は溶ける

「…阿笠、来てくれてありがとう」
「えっ」

けれど

けれど

雪が溶ければ春になり
櫻が散れば夏になり

海が静まれば秋になり
月が落ちれば冬になる

「俺ね、いろいろ考えたよ」

またケンカになると思っていた阿笠は、穏やかな雰囲気をしている春樹に終始驚いている。

そんな阿笠の態度に気づいた春樹は、左手で目を隠した。

阿笠を見たくないというのではなく、ただ阿笠を見ていたら感情が溢れてしまいそうだったから……

「なんでこの４人で仲良くなったんだろうとか、なんで最近はこんなことばっかり起きるんだろう、とか」

たったの一時の出来事でしかなかった。

ほんの数分たまたま廊下で４人が出会って話をした。

ただそれだけのことだったのに、その数分が人生の大きな分かれ道だった。

そのとき出会わなければ、春樹は夏実のことをとっくに忘れていたかもしれない。

夏実はスターだからと告白された元彼と付き合うことはなかったかもしれない。

秋人が麻冬を好きになることもなかったかもしれないし、麻冬は阿笠だけをずっと思っていたかもしれない。

４人出会わなければ、きっとお互い恋愛なんてしていなかったかもしれない。

「なんで俺は星陵に入って…夏実と再会したんだろうとか」

そう言う春樹の声は徐々にかすれていく。

阿笠は驚いているような素振りはもう見せず、春樹を見入っている。

「どうして中１のとき夏実は俺を助けたんだろうとか…」

「…助け？」
「俺のこと…妬んでる部の先輩から助けてくれたんだ……」
阿笠は春樹の言葉に心の中で納得する。
春樹は構わず続けた。
「…バドすらしなければ俺の人生の中で夏実に会うことはきっとなかったんだ」
春樹は左手を目から外す。
そして斜め下に視線を移して、深く目を閉じる。
「……都合良すぎるって思うかもしれないし、そんなの甘えだって言うかもしれない」
その震える声は阿笠の心にずっしり入り込んでくる。
「だけど」
春樹はズボンの横を手で掴みギュッと握る。

そして、ようやく阿笠の顔を直視した。

「……まだ俺のことを好きって言ってくれた夏実を…それでもまだ俺は好きだって思った」

そして、俺自分で言ったのに全然諦められてないんだとポツリと呟いた。

春樹の頭の中には今朝阿笠と口論したときの映像が流れている。

何度も何度も諦める覚悟はできてると阿笠に言ったのに、いざ現実を目の当たりにしたらそんな意気込みなんて、長年の想いには敵わない。

誰かと付き合っているときでさえ夏実を想っていた。

なのにすぐ側にいて、しかも自分を好きだと言ってくれる夏実を好きじゃなくなれるはずはないんだ。

遠くにいても

側にいても

想いは同じ。

「…ただのバカだ…俺」

春樹はぐっと堪える表情をしながらも、なおも阿笠を見つめて必死に今の気持ちを伝えようとしている。

春樹がこんなに一生懸命なのは、阿笠が一生懸命春樹を助けようという姿勢を見せたからだ。

嘘偽りのない言葉は

しっかりと春樹を励ましていた。

「そうだね、バカだ」

阿笠はズボンのポケットに片手を突っ込みながら、少し真面目な顔をしながら言う。

春樹は阿笠にそう言われ、軽くうつむいた。

「だけど間違いに気づいたじゃん」

けれどその阿笠の言葉に、え…と春樹は顔を上げた。

阿笠はさっきとは打って変わって穏やかな顔をして口元が少し緩いでいる。

「俺3年もかかったんだ。それでも好きって気持ちは変わらないこと…よく分かるから」

「でも……」

「秋人がさ、教えてくれたんだ」

今度は阿笠が軽くうつむいた。

「…相手のことばっか考えてないで自分が幸せになれる方法を探せば良いんだ…って」

「方法…」

「幸せになる権利あるんだ、って」

阿笠にとって今、その言葉ほど重いものはない。

秋人が麻冬を好きだと知った今、秋人が動いたらきっと阿笠は身を

引くだろう。

どうして何度も何度もみんな友達と同じ人を好きになるのだろうか。

悲しいことなのに

辛いだけなのに

切ないだけなのに

「ねぇ櫻井」

阿笠は春樹の目を見る。

春樹は眉間にしわを寄せながらもなお切なさを堪えている。

「櫻井が中1のとき夏実ちゃんに助けられたのも、2人が星陵に入って再会したのも」

「…」

「仲良くなったのも2人が恋をしたのも、…櫻井がそれでも夏実ちゃんを好きなことも、全ては偶然でもなければ必然でもない」

そのときピューッと冷たい風が吹いた。

それでも阿笠は凛とした表情を保ちながら続ける。

「…運命なんだ――――」

春樹は少し寒さに震えながらも、阿笠の言葉を聞き返す。

「うん…めい？」
「そうなる運命だったんだ」

運命なんて言葉で
人生を決められたくないし、そんなものを信じたくもない。

けれど
このときの春樹は

阿笠の言葉を信じた。

根拠もないその言葉を、今この状況で阿笠が言ったから信じたのだ。

「…俺、わがままだよ。あんなことしたのにそれでも夏実の側にい

たいって思ってる」
「うん」
「麻冬を好きだって言った秋人を妬みさえした」
「うん」
「きっと…きっと許されないだろうけど、俺を守ってくれた夏実を守りたいんだ…」

そう言った春樹に、阿笠は最高に優しい笑顔をした。
その顔を見た春樹の中で、いろいろなものが吹き飛ぶ。
ただ暗かっただけの春樹の心の中に光が差した。
春樹は心臓がある位置に拳をあて、その手をギュッと固く握る。
そして弱々しながらも笑顔をしながら阿笠に言った。

「…俺が夏実を振ったことまでが運命だとは思わないけど、きっと今朝阿笠とケンカしたことも…今も絶対無駄なんかじゃないんだね」

そう言った春樹に、阿笠は
「そうだね。遠回りでも通らなきゃならない道だった」と言う。

夏実を振ったことを後悔しないと言ったら明らかに嘘になってしまうけど、それでも阿笠の言葉は春樹を癒した。

以前自分が通った道だからこそ阿笠は自信を持って言える。

誰しもがそうだとは限らないけれど、きっと阿笠と春樹は同じだから…

春樹は胸にあてていた手で今度は自分の頬をポリ…とかきながら照れたように言う。

「…阿笠がいてくれて良かった」

照れのせいか阿笠から視線を反らしつつも、そう言った自分の言葉に反応して、バッと阿笠を見上げた。

「そっか！阿笠に出会ったのも…運命なんだ！」

「あはは、運命。そうだね、分からないけど、でも俺も櫻井に会えて良かった」

「なんか照れるね」

そう言う春樹に同調しながら阿笠はクスクス笑った。

春樹は阿笠の手を取り、両手をギュッと握る。

何？なんて言う阿笠に、春樹は言った。

「ありがとう…なんて言葉じゃ言い足りないけど、でも」

そして、ここ最近あまり見せなかった前のような猫のような愛らしい笑顔をした。

「…ありがとう！」

春樹の笑顔につられて阿笠もニコッと笑う。

ついでに今日学校でいろいろごめん、と言う春樹に阿笠も、俺こそごめんと言った。

たぶん、ごめんなんて言葉いらない。

言わなくてもお互い分かっている。

阿笠と出会わなければ春樹はきっと未練たらしく引きずりながら夏実に彼氏ができるのを待っていただろう。

…いや、きっとそんな未来はこない。

春樹は阿笠に出会う運命だったのだ――――…

その後2人はコンビニに入って適当に軽く食べ物を買い、また外に出て座りながら他愛もない話をした。

next

第６５話【運命―夏実―】

「よーし、でーきた！」

麻冬は部屋の中で楽しそうな声を上げた。

昼間授業中の光景としても述べたが、麻冬は昨日今日とミサンガを作っていた。

それぞれ大会が近いという理由もあるけど、麻冬は願をかけているのだ。

「上出来上出来。春樹は部活始まる時間一緒だからたぶん待ってれば校門で会うし、夏実は夜来るはずだからそのときで良いよね」

外枠と名前がピンクで白地のミサンガが春樹。

外枠と名前が青で水色地のミサンガが夏実。

外枠と名前がオレンジで薄黄地のミサンガが秋人。

外枠と名前が白で紺地のミサンガが麻冬だ。

春らしく櫻を
夏らしく海を
秋らしく月を
冬らしく雪を

名前はローマ字でファーストネームにした。
外枠と内地の色だけを変えるならまだしも、名前まで一緒に作るとなるとかなり難しい。

上手く斜めにいかなかったりズレたりしてしまう。

だが器用な麻冬は1、2回しか失敗せずに作り上げたのだ。

ちなみに阿笠へはミサンガではなく買ってきた白地に紺色のプーマのタオルのはじに、ＤＡＩＧＯ．Ａとまるでお店の人がやるような刺繍を紺色で付けた。

さすが麻冬、プロに頼んだと思われるくらい上手い。

何で紺なのかと言うと、麻冬のミサンガが紺と白だから一応おそろいという意味のようだ。

さっき阿笠に電話をしたあともせっせと作り、ようやく作り終えたらしい。

することがなくなったから、麻冬が暇していると麻冬の携帯のバイブが鳴る。

阿笠が何か言い忘れでもしたのかな、なんて思いながら携帯を開いてみると意外にも夏実からの着信だった。

「夏実？どうしたの？」

麻冬がそう尋ねてから数秒して、夏実は電話越しでようやく口を開く。

『ちょっと声が聞きたくなって』

「え～、なによぉ」

麻冬はケラケラ笑っているから、夏実は軽く微笑した。

あの後夏実はしばらくあそこにいたのち、ゆっくりノロノロと歩き始めた。

それも自分の家へ帰るわけではなく、麻冬の家の方向へと向かっている。

「今何してるの？」

麻冬は携帯片手にさっきまで使っていた刺繍糸やらハサミやらを片付ける。

『んー……』

歯切れの悪い夏実に麻冬は不思議に感じるが、片付けに忙しいせいか特に気にせず夏実が答えるのを待っている。

パタパタと部屋の中を歩き回っていると、夏実はおねだりするように言った。

『…ねー、麻冬んち行っても良い？』
「今から？良いわよ」
『じゃああと5分くらいで行くね』

夏実はそう言って電話を切る。

夏実からの電話が切れたあと麻冬は
「5分？」と呟いた。

普通に考えて夏実の家からじゃ麻冬の家へは5分ではつかない。

夏実の言葉に疑問を感じるも、まぁ良いかと気にしないでいる。

麻冬は部屋から出てリビングにいる母親に声をかけた。

「お母さん、これから夏実来るから何か出してくれる？」
「あらそうなの。分かったわ」

夏実にそう言われた母親はキッチンに向かい無造作にガサガサと何やらあさる。

そんな麻冬に居間にいた父親が声をかける。

「明後日試合だな」
「うん。まぁただの県までしか繋がらない大会だけどね」
「調子はどうだ？」
「見ててよ。トロフィーと賞状持って帰ってくるから」

麻冬は微笑みながら意気揚々にそう言った。

自信満々な麻冬に父親もハハハと笑い、キッチンにいる母親も
「頑張ってね」と言う。

仲が良くて夫婦円満で、麻冬も父親を好いていてとても幸せな一家だ。

麻冬は1人娘のせいかとても愛情を持って可愛がられながら育てられた。

言ってしまえば阿笠の家庭と似ている。

だからお互い惹かれあうものがあるのかもしれない。

「他のみんなも大会なんだろ」
「今週はあたしと春樹ね。夏実や秋人は来週なのよ」
「へぇ」

そして麻冬は母親がいるほうに振り向いて、
「あ、明日夕飯いらない」と言った。

誰かと食べに行くの？と尋ねた母親に麻冬は、阿笠とね、と答えた。

そのとき麻冬が心の中で、
「あ。夏実と明日夜約束してた。どうしよっかな」なんて思っていると、２人の会話を聞いていた父親が
「えっ？！」と声を上げながら勢いよく振り向いた。

母親は麻冬たちがより戻したことを知っていたけど、父親は知らなかったのだ。

「そっか、お父さんには言ってなかったもんね」

麻冬はあっさりと言う。

父親はなおもびっくりしているが、そのうち嬉しそうな表情を見せた。

父親は阿笠のことがお気に入りで、阿笠が休日に来たときなどは２人でチェスをしてたりもしていた。

分け隔てない阿笠の優しさと気配りが好感度を与えるのだ。

「またチェスの相手してもらわないとな～」

楽しそうに言う父親に、麻冬は軽く冗談を言う。

「お父さんじゃ阿笠の相手になんないってぇ」

「ふん。次は絶対勝つぞ」

阿笠家では麻冬はとても好かれていて、雪原家では阿笠はとても気に入られていた。

中学生だったにも関わらず両家で認められていたような2人だから、2人が別れたときは両家とも実に残念がったものだ。

そうこうしているうちにインターフォンが鳴り、夏実が来た。

麻冬が玄関に出て夏実を迎え入れ、夏実は麻冬の両親にあいさつをする。

麻冬が母親から用意されたジュースやお菓子を受け取って2人は麻冬の部屋へと向かう。

麻冬はまだ制服を着ている夏実を見て
「もしかして家に帰ってないの？」と驚きながら尋ねた。
夏実は微笑しながら返事をする。

麻冬の部屋へ来て、麻冬はテーブルにオボンを置いて、2人は適当に座る。

「お腹空いてない？なんか作ってもらおっか」
「んーん、良い」
「そう？」

夏実は邪魔なのか長い髪の毛を手で結う。
部活のとき以外は縛っていないくいつも下ろしている。

「何か…目赤いね？」

麻冬が夏実の顔を凝視しながら言った。
夏実は苦笑しながら、あくびしたからかもなんて言い訳をする。

すると麻冬は立ち上がり、机の引き出しを開けた。

「あのね、夏実に渡すものがあるの」

そう言って麻冬は夏実用に編んだミサンガを出した。

夏実はミサンガを見て元気なかった表情を少し輝かせて、わー！と声を上げた。

「ふふ、夏実は海をイメージしたのよ」

麻冬は夏実にミサンガを手渡した。

そして自分の手につけてるミサンガを夏実に見せながら「あたしのは雪なの」と笑う。

「もしかして春樹とか秋人のも？」

「もちろん」

「見たい見たーい！」

夏実がおねだりするものだから、麻冬は引き出しから2人の分のミサンガも出した。

「おぉー！春樹のは櫻で秋人のは月かっ」

「ピンポーン。気に入ってくれた？」
「めっちゃ！さっそく付けるよ～」

そう言って夏実は左手首にミサンガを付ける。

嬉しそうにはしゃぐ夏実に麻冬は言った。

「これね、願掛けしたの」
「願掛け？」

麻冬は再び腰を下ろす。

そして聞き返してきた夏実に答えた。

「最近なんかみんなしていろいろあったでしょ。だから前みたく平和になりますようにって」

麻冬のその言葉を聞いて夏実は視線を反らした。

軽くうつむきながら、ポツリと呟く。

「…平和……」
「もちろん、たぶんいろいろあることは悪いことじゃないわ」

「平和じゃないのに？」
「うん。だって、きっとなくてはならないものだと思うから」

麻冬の言葉は阿笠を思い出させられる。

もちろん麻冬も夏実も知らないが、コンビニでの阿笠と春樹の会話を見れば一目瞭然だ。

「…全部？全部そうだと思う？」
「うーん…あたしにもよく分からないけど、でも例えば夏実と春樹の間で何があったか知らないけど、それはたぶん2人がこれからを歩むためには避けられないものなのよ」

麻冬は2人のことに関しては全く知らないわけだから、第三者が何を言ってるんだと普通は思うかもしれない。

けれど、夏実はその麻冬の言葉に耳を傾けた。

「運命…ってこと？」

夏実が恐る恐るそう言うと、麻冬はそれだ！と言わんばかりに言った。

「そうね。運命なのよ」

そう言われた夏実は、心なしか少しだけ元気を取り戻した。

自分が振られたのは運命で、春樹があ言ったのも全ては運命。

だけどそれは過去の運命でしかない。

未来は誰にも分からないし、例え決まっているとしても歩まなければならない。

一歩を踏み出す勇気さえ必要と言うのなら、それすら運命だと言うのなら

それを信じるしかない。

「運命…か――――…」

麻冬の言葉は夏実に勇気を与えるきっかけとなった。

next

第６６話【知らされざる過去】

「まぁた来てんすか、先輩」

秋人が阿笠の家から帰ってきたあと、母親に茉李亜の部屋にジュースを運ぶように言われたから茉李亜の部屋へ行く。

コップが２つあるからまさかと思いきや、予想通りに佑亮が遊びに来ていた。

「固いこと言うなってー」

秋人はテーブルの上に持ってきたものを置き、部屋から出ようとする。

が、思い出したように立ち止まり佑亮に話しかけた。

「そうだ、前見たがってたＤＶＤいります？」

「おー、いるいる！」

佑亮は嬉しそうに立ち上がり、秋人のあとを付いていく。

秋人の部屋に行き、秋人がＤＶＤを探している中佑亮は本棚を見な

がら言った。

「そういやお前んちって前アメリカにいたんだって？」

「あ…」

秋人は歯切れの悪い返事をする。

そして、茉李亜に聞いたんすか…とポツリと呟いた。

秋人が帰国子女ということは阿笠はもちろん、他の3人だって知らない。

茉李亜も必要以上には言わないようにしてるし、今や月影家ではトップシークレットだ。

「茉李亜の小学校んときの卒アル見たぜ～」

「そっすか」

「ん？でもお前確か小6くらいんときはもうこっちにいたんだよな？」

なぜトップシークレットなのかといえば、秋人の過去を見れば一目瞭然である。

仲の良い友達にすら話したくない過去がある。

「そうっすね…小6はこっちにいました」
「じゃあ卒アルって日本のか？」
「…ないっすね」

秋人はようやく佑亮の欲しがってるＤＶＤを見つけて手渡した。

「ないって…」

佑亮は秋人の意外な言葉に聞き返したけど、秋人はそれ以上は話そうとしなかった。

そして、これから課題やるからと言って佑亮を部屋から追い出す。

佑亮がいなくなって部屋が静まり返っても、秋人は課題をする素振りなんかは見せずに本棚をじっと見る。

幼稚園の卒アルの隣にあるのは中学の卒アルだ。

小学校のだけない。

思い出したくない過去

辛い日々でしかない

秋人はそんな思いを打ちきるため日本に戻ってきた。

『まさか１０歳の子どもと同じゼミなんてな』

秋人はベッドに仰向けになって寝転んだ。

『あんなに苦労して入った大学なのに１０も年下と同じ学力なんて思い知らされるよ…』

『天才すぎて怖いわ』

『何話したら良いか分からないよ。関わりたくない』

秋人は側にあった雑誌を天井目掛けて思い切り投げた。

バサーッと音を立てて雑誌は天井にぶつかることなく落下して、フ

ローリング上に落ちる。

「……くそっ…」

秋人は腕で目を覆う。

日本に来たのは、誰も自分を知らない土地で普通の男子として生活するため。

まだ小学校に一応通っていた時期にやっていたサッカーだけが、日本で過ごした中学に上がるまでの1年間の唯一の楽しみだった。

茉李亜は中学に転入し中3として学校に通った。

秋人は、小学校へ行くことを拒んだ。

家庭教師をつけたけど、家庭教師側が根を上げた。

すでに大学生並みの知識を持っていた秋人に教えるものなど、なにもない。

だから秋人は学校へも行かず家庭教師も付けずに何もせずに過ごし

ていた。

『秋人、茉李亜の彼氏の佑亮。１つ下なの』
『どーも。佐々佑亮。茉李亜の３つ下ってことは小６？』
『……一応』

そんな中ある日茉李亜が佑亮を家に連れてきた。

空き地でサッカーしに出掛けようとしていた秋人は、初めて佑亮に出会った。

『あ、サッカーやんの？』
『うん』
『俺サッカー部なんだ』

佑亮のその言葉にすら秋人はあまり反応を示さないけど、佑亮は茉李亜にカバンを預けて秋人に言った。

『うし！じゃあ一緒にサッカーやろうぜ！』
『えっ』

そう言って佑亮は秋人の手を引っ張った。

秋人が行こうとしていた空き地へ向かい、佑亮が１ｏｎ１しようと

言った。

ずっと1人でサッカーをしていた秋人もその誘いに応じ、2人はサッカーをし始めた。

秋人のその素質は小学校時代から磨かれていたし、佑亮ももうかなりの実力だった。

あの秋人が、ずっと心を閉ざしていた秋人が心から笑ったのは実に1年半ぶりだった。

『やるなぁ秋人』

何十分かやったあと、休憩をしているときに佑亮が秋人に言った。

『佑亮さんこそ。かなり上手いですね』

『一応選抜に選ばれてっしな』

佑亮はピースしてはにかみながら無邪気に言う。

『そっかー』

『秋人来年からはうちの中学だろ?』

秋人はその問いには無言だった。

中学に入るかなんてずっと迷っていて、むしろ入らない気持ちのほうが大きかったのだ。

家庭教師同様、中学行っても意味がないと思っていたから。

『なんだ、違う中学行くのか？』

『…分かんない…』

『えー迷ってんのか？絶対うちの学校来いって』

佑亮は根気よく秋人を誘う。

そんな秋人が興味を示したのは、こんな佑亮の言葉だ。

『俺お前と一緒にサッカーやりたいんだ』

天才だからと怖がられていて側にいることすら嫌がられた大学時代を過ごした秋人にとって、その言葉は自分を必要としてくれてるかのようで嬉しかったのだ。

『…俺なんか？』

それでも秋人はなかなか素直になれない。
当然と言えば当然だ。

秋人が受けた心の傷は相当に深かった。

小5に上がらずにアメリカのスキップ制度を利用して大学に入り、
このマイペース人間の秋人がたった1年で大学を辞めた。

たった1年と思うかもしれないけれど、その1年は秋人がこれまで
生きてきた10年よりも長く感じるもので

何より辛い毎日だった。

『いやいや、秋人で良いんじゃなくて秋人が良いんだよ』

佑亮は笑って言った。

佑亮と一緒にいる日々のおかげで秋人の心が癒されたのは紛れもな
い事実なのだ。

夏が過ぎ秋になりかけている頃のことだった。

そう、まさしく5年前の現在。

秋が過ぎ冬を越えて春を迎えると、秋人は約束通り佑亮のいる中学へと入った。

秋人がサッカー部に入部希望の紙を出したときは、佑亮は秋人をギュッと抱き締めて喜びの声を上げたほどだった。

すでにキャプテンになっていた佑亮のもとで秋人はサッカー部に入り、すぐにレギュラーになった。

あとはもうみんなが知っての通りの生活を送った。

中学の勉強なんて秋人には全くといって必要ないし、ただ面倒くさいだけのものだけど部活があったから中学生活を続けられたのだ。

そのうち選抜に選ばれ全国にも出たりして、阿笠とも知り合い、ゆくゆくはキャプテンにまで上り詰め

サッカーに生きる喜びを知ったのだ。

スキップして大学に入ってお偉いさんになるより、秋人はサッカーを続けることが自分の幸せなのだと知った。

秋人が誰より何よりサッカーを愛するのはそういう訳だ。

星陵に入ったのは近場だし全国常連だから。

だがその全国常連は佑亮が築いたものだ。

佑亮がいたから星陵に入ったも同然。

しっかり中学も卒業して高校に入学し、今の友達に出会った。

「……卒アルか…」

けれど、小学校を卒業していない秋人には心寂しいものがある。

小学校の同級生たちはスキップすることを決めた秋人のために、集合写真やら個人写真やらを集めて秋人専用の１０歳までの記念アルバムを作った。

丁寧に綺麗に貼られてある写真やみんなからのメッセージ。

みんなと一緒にいることより上へ行くと決めたのに、みんな秋人のためにいろいろしてくれた。

だから秋人は日本に来てもう5年半も経つのに、同級生たちに大学辞めたことも日本に来たことも知らせないまま音信不通になっている。

向こうは秋人の新しい連絡先なんて知らないのだから秋人から連絡しなきゃ連絡は取れない。

「元気かな…みんな」

忘れたい過去の前の

楽しい友人と過ごした日々

引き出しの一番奥に閉まって開かないアルバム

目をつぶることで記憶を忘れようとさえした。

next

第67話【記憶連鎖】

「でね、でね」

あれから引き続き夏実は麻冬の部屋に滞在して2人はお喋りを楽しんでいる。

麻冬のおかげで多少吹っ切れたのか夏実はいつものような元気を取り戻しつつある。

「ほらぁ！」

夏実はカバンの中から楽しげに手紙を2通出す。

「え～、いらないわよぅ」

麻冬は手を振る。

麻冬がいらないと言ったせいか夏実が手紙を開けて中身を読んだ。

まぁいずれも麻冬へのラブレターなのだが。

「あっ、あたしも夏実への手紙預かってた」

「女でしょー？」
「ううん、男よ」

夏実は意外な事実に
「えっ？！」と声を上げた。

麻冬はカバンから預かっていた手紙を出して夏実に渡す。

夏実はペリペリとはがして、内容を読み始める。

「ってこれ群青じゃん！」
「あは。男でしょ？」
「まぁそうだけど～」
「なんだって？」
「うー…」

夏実はブー垂れた顔をしながら、髪の毛を軽く持ち上げて、コレ、とだけ言った。

髪の色を注意する内容だったらしい。

「なんか先生もはや楽しんじゃってるよね」

麻冬は笑いながら言った。

「本当だよ。手紙って何さ」
「あはは、良いじゃん。でもなんで茶色にこだわるの？」

麻冬は特に深くは考えずにあっさりと尋ねた。

夏実は持ち上げている髪をチラッと見て静止する。

そしてじーっと眺めたあと、なおも髪を見ながら口を開いた。

「…茶髪にこだわってるわけじゃないんだけどね」

そして髪をバサッと下ろして、軽く微笑しながら話し始めた。

「中1のときね、入部して即レギュラーになったもんだから一部の先輩から嫌がらせされたの」
「え」
「でもあたしは悪いことしてないけど、言い返せない弱虫な自分が嫌だった」

だから茶髪にして勇気が出るように願をかけたの、と夏実は言った。

これを話したのは春樹と麻冬だけだ。
教師もチームメートたちも知らない茶髪の理由。

「そのあとくらいにね、同じような男の子見かけたんだ」
「へぇ。どんな？」
「その子もあたしと同じ理由で先輩から嫌がらせされてたみたいなの」

なんと意外にも夏実は春樹を助けたことを覚えている。
春樹にあれだけヒントを言われても気づかなかったというのに。

「だからその子いじめてた奴らにガツンと言っちゃった」
「何て何てー？」
「えーっとねぇ…」

夏実は少し上を見上げて、そのときの状況を思い出している。

曖昧な記憶を辿ってそのときの光景を鮮明にしようとしている。

ようやく思い出したのか、夏実は
「あ！」と声を上げた。

「確かね、傷つけたほうはすぐに忘れるだろうけど傷つけられたほうは一生癒えない……傷…を…」

夏実は意気揚々に喋っているその口が徐々に止まる。

――傷つけてるあんたらはこんなことすぐに忘れるんだろうけど、傷つけられた方は一生癒えない傷を背負っていくんだよ！――

――あんたも！黙ってるだけじゃなにも変わらないよ！――

――言いたいことあるなら言いな！あたしだってチビだしまだ1年だけどエースであることに誇り持ってるよ！――

――あ、覚えてない？えーっと、確か――

――いじめられた方は一生癒えない傷を背負っていくとか――

――あたしは身長低いしまだ1年だけど堂々とエースって言えるとか――

「あ……ははっ。あはは！ははっ…」

夏実は記憶を入り交えながら突然笑い出した。

「なっ、なに?!」

びっくりした麻冬が聞き返しても夏実はなおも笑う。

ようやく思い出したようだ。

夏実が覚えていたその男の子と春樹が同一人物であることを。

だって、夏実があの日のことを忘れる訳がない。

茶髪にしてすぐの出来事で、しかも同じような境遇の人だったのだから。

「あーはは…なんだぁ、そっか。…そっかぁ」

夏実は笑い過ぎて少し涙目になっている。

指で涙を拭き取って笑いながら麻冬に言った。

「ごめん、やっぱあたし春樹のこと好きだわ」

どこをどう解釈したらそうなるのかは分からないけど、夏実はきっぱりと言った。

麻冬にしてみても、夏実からはっきりそう言われたのは初めてだ。

「麻冬さっき、全てが運命だって言ったよね」

「う、うん」

「あたしがあのとき春樹助けたのも、高校で再会したのもあたしが春樹を好きなことも、たぶん絶対運命だよ」

夏実の中で何かが吹っ切れたようで、夏実は偽りのない笑顔をして

いる。

「あたし頑張るよ」

麻冬は今ここで、春樹と両思いなんだと教えようとしたけれど言わなかった。

夏実が頑張ると言ったのだから見守ることにしたようだ。

「そっか」

やる気満々の夏実に、麻冬は可愛らしい笑顔をした。

麻冬も夏実も大事なことだけは言わない。

けど、それは誰かに助けを求めるのではなく自分の力で何とかしたいという決意なのだ。

その頃春樹と阿笠は未だに話が盛り上がっている。

買ったものを食べ飲み尽くしたら新しいのを買ってきたりして、懲りずに話し続けている。

「へーっ、阿笠も小学校からサッカーやってたのかぁ」
「一応ね。もちろん櫻井もなんでしょ？」
「そりゃあね。じゃあジュニア時代にも秋人と対戦したこととかあるんだ？」
「や、それがないんだよね」

阿笠は肉まんをモグモグ食べながら不思議そうに言う。

「やっぱ中学の県選抜とかって小学校んとき選抜だった人多いんだけどさ、秋人いなかったんだ」
「え、秋人が？」
「うん。でも絶対中学上がる前からやってたよなぁ、あれは」

話の流れから阿笠は小学校のときも選抜だったということか。

さすがというか何というか。

「そういう話しないんだ？」

春樹が尋ねると阿笠は、うーん…と微妙な受け答えをする。

そしてなおも食べながら言った。

「聞いたことあるけど、上手くはぐらかされたんだよなぁ」
「えぇ？なんでかな」
「な。もしかして転校でもしてきたとかかな」
「あー、あり得る。そういえば秋人の出身小学校知らないや」
「だよね」

知るはずもない。

むしろ知る人なぞ日本では月影家以外いるはずもない。

茉李亜すら転入した際にアメリカ出身であることは決して言わなかった。

聞かれても適当にはぐらかして、アメリカという言葉を言おうとはしない。

だが茉李亜は佑亮に話した。

秋人にとってはショックではあったものの、佑亮ならと納得する反面もある。

なぜなら秋人が立ち直れたのは佑亮のおかげだから。

まぁ佑亮も月影家がアメリカにいたってことくらいしかまだ知らないようだが。

「今度聞こーっと」

春樹がそう言って、秋人の話題はあっさりと終わりを迎える。

今度は違う話題でまた盛り上がり始めた。

コンビニで待ち合わせしてからどれくらい経っただろうか。

いっそどちらかの家にでも行けば良いのに2人は図々しくもまだそこで話そうとする。

特に春樹の場合はずっと寝込んでいたから人とこんなに話すのは久しぶりなのだ。

結局2人は日付が変わってしばらくしてからようやく帰宅した。

next

第68話【ミサンガ】

翌日、午後になりみんな部活をしに学校へと向かう。

麻冬は春樹に会うために校門に自転車を止めて待つ。

麻冬が待ち始めてから数分もしないうちに春樹は耳にイヤホンをつけながらやって来た。

「春樹！」

麻冬が春樹に手を振ると、春樹は麻冬に気づいて麻冬の近くまで自転車で来て止まった。

「おはよー！誰か待ってたの？」

「うん。春樹を」

「えっ、俺？」

意外な返答に春樹は少し驚いているが、麻冬は気にせずカバンから例のミサンガを出した。

「わ、ミサンガだ～」

「これ春樹になの」

「えー本当？！」

麻冬は春樹の名前の部分を見せて言った。
春樹は嬉しそうにそれを受け取り、ありがとうと言う。
麻冬は左手首に付けている自分のミサンガを見せながら言った。
「４人おそろいにしたんだ」
「すご！そっか、じゃあ俺のが櫻で麻冬は雪かぁ」
「うん。昨日夏実にも渡した」
麻冬が夏実の名前を出すと春樹は顔を曇らせた。
「夏実と…会ったの？」
「昨日うちに来たのよ」
「そう……」
なんとなく気まずそうな顔をしている春樹に、麻冬は何を思ったのか笑顔で言った。
「夏実ね、頑張るんだって」

その言葉に春樹は麻冬の顔を見上げる。

「2人に何があったか知らないけどね、夏実吹っ切れたみたいで笑ってそう言ったよ」

「ま…麻冬が夏実に何か言ったの？」

「ううん。何か春樹を思い出して爆笑してた」

「はぁ？」

春樹は麻冬の謎な言葉にまぬけな声を上げる。

けれど夏実が元気だったこと、そして笑っていたことを知って春樹は内心かなり安堵している。

春樹は麻冬にもらったミサンガをじっと見て軽く微笑んだ。

「俺ね、昨日阿笠に会ったんだよ」

ミサンガを左手首に付けながら春樹は言う。

「今日はいろんなことがありすぎちゃった。阿笠とケンカもしたけど、うん…でも良かった」

「良かった？」

「素直になれないだけで阿笠の言ってることが正しいってのは最初から分かってたんだ」

春樹はミサンガを付け終える。

麻冬はミサンガを付けた春樹の手首をチラッと見た。

「そっか……それでも夏実頑張ってくれるのか…」

春樹は麻冬に聞こえないくらい小さな声で呟く。

えっ、何か言った?と麻冬が聞き返すと、春樹は猫のような笑顔でニパッと笑った。

「麻冬、俺きっと今はまだ無理でも俺も頑張ってみるよ」

麻冬は突然の春樹の笑顔に圧倒されて言葉が出ない。

そして春樹は、再来週の日曜は祝会だからねー!と言いながら校内へ入って行った。

麻冬は校内に入ってく春樹を見てプッと吹く。

「やだ、春樹ってば４人優勝する気でいる」

麻冬はクスクス笑いながらも自分も春樹に同意して言った。

「ま、負ける人なんているわけないわよね。確かに」

そして止めてあった自転車を押しながら駐輪場へ向かった。

そのうち部活が始まり、特に明日試合の部活は気合いの入れ方が違う。

たかが秋季大会、されど秋季大会なのだ。

公立にしては運動が盛んなため教師も気合いが入る。

４人が活躍したおかげで運動できる人かそれまで以上に入学するようになった。

今部長として活躍する中、おそらく４月には更に増えるだろう。

３年に上がり彼らが最後の大会を終えたら、翌年は確実に彼らの種目と同じスポーツをしている人が増える。

学校側にしてみてもこの４人の存在は大きいのだ。

特にチームプレーのバレーとサッカーに関しては1人や2人上手くても意味がない。

最も彼らは学校のために優勝を狙ってるわけではないが。

全国へ続く大会は残り2つ。

去年の夏に優勝を成し遂げたサッカー部としてはやはり再び優勝を狙いたいところだし

バレーもいつまでもベスト8に止まるわけにはいかない。

水泳のリレーやらバドミントンのダブルスは分からないが、どちらとも個人ではかなり期待できる。

星陵高校史上初の異種目4冠達成は手の届くところまできているのだ。

だがそんなオリンピックを目指せるような彼らでも、やはり普通の高校生。

普通に学校に通い、時にケンカをしたり笑いあったり、恋愛だってする。

まさにその恋愛でこんなにもこじれようとは誰が想像しただろうか。

大会連盟のお偉いさんも、選抜のみんなも、学校の人たちも彼らにこんな一面があるとは誰が思おうか。

彼らだって知らなかった。

春樹自身にそんなに独占欲があるとは

夏実自身にそんなに諦めない気持ちがあるとは

秋人自身にそんなに悩ませるものがあるとは

麻冬自身にそんなに泣き虫なところがあるとは

思っていなかった。

だけど

怒る春樹が

めげる夏実が

悲しむ秋人が

か弱い麻冬がいることは当たり前で、むしろないことの方があり得ない。

彼らはそのことを理解しつつある。

成長するための、大きな一歩だった。

「麻冬、待った？」
「あ～お疲れ、２人とも」

練習後、約束通り阿笠は麻冬のもとへ秋人も連れていく。
麻冬はさっそく前もってポケットに入れていた秋人へのミサンガを出して、秋人に手渡した。

「ミサンガ？」

麻冬はみんなに見せたときと同様、左手首をチラつかせる。

「おそろいなの。４人で」
「おー、すげぇ。ところで何で俺のは黄系なん……」

秋人はそこまで言って気づいたのか、
「そっか」と自分でつっこみを入れる。

「月か、俺」
「せいかーい！」
「だよな。麻冬の雪だしな。てことは夏実は青で春樹はピンクか」
「うん。みんなも分かってくれたのよ。嬉しいな」

麻冬は編んだかいがあるな、と言いながら喜んでいる。
阿笠は何となく入っていくことのできない４人の空間にためらいがあるのが、軽く視線を反らしている。

それに秋人が気づいた。

秋人は素早く手首にミサンガを付けて、それを麻冬に見せながら軽く笑って言った。

「麻冬ありがとな。明日頑張れよ」
「うん、任せて」
「じゃあな」

そんなあいさつを交わし、秋人は違う方向へと歩いて行く。

秋人なりにさっさといなくなろうと気を使ったのだろう。

秋人が見えなくなるまで阿笠はじっとその方向を見ている。

「阿笠」

そんな阿笠に麻冬は声をかけて、ビニール制のどこかの服のブランドのロゴが入った袋を手渡した。

「え、何？」
「阿笠にもあるの」

阿笠は袋の中を見て、中身を出す。

出てきたプーマのタオルを見て、
「お、タオル！さんきゅー」と笑った。

それを広げて眺めると刺繍してあるのが目に入る。

「あれ…これ麻冬がやった？」
「そうよー。ちょっと難しかった」
「さすが麻冬」

阿笠はタオルをたたんで再び袋の中に入れる。

そしてお礼を言った。

そんな阿笠を麻冬はじっと見つめる。

視線に気づいた阿笠が、何？と尋ねると麻冬は言った。

「気づかない？」

麻冬はホラ、とミサンガを見せる。

阿笠には何のことだかさっぱり分からないでいる。

再びタオルに目をやると、タオルのプーマが紺であることに気づいて、そして麻冬のミサンガと見比べた。

ようやく気づいたのか阿笠はクスクス笑っている。

「そっか、そういうこと」

一応麻冬なりの配慮なのだ。

阿笠も同じミサンガにしようかとも思ったらしいけど、そこはやっぱりできないらしく。

「もー。阿笠ってば気づかないでしまっちゃうんだもん」

麻冬も笑いながら言った。

ごめんごめん、なんて言いながらも笑う阿笠。

漫画なら花の点描がされている場面のようにも思える。

そして阿笠はタオルを袋にしまい、麻冬に問う。

「何食べよっか?」

仲良く肩を並べてあるく2人

その手はしっかりと握られていた。

next

第６９話【Ｈａｎｎａｈ　Ｍｅｉｓｓｎｅｒ】

日曜の夜、春樹をのぞく3人へ春樹からメールが送られた。

麻冬をのぞく3人と阿笠へ麻冬からメールが送られた。

両方とも予選を勝ち抜いたという知らせだった。

誰もが予想通りの結果だと笑う。

バドミントン個人では春樹の他にも数人勝ち上がっているし、もちろんダブルスでも春樹は勝っている。

だがダブルスよりシングルス派の春樹にとっては個人で優勝を狙いたいところだ。

麻冬も背泳ぎ１００Ｍと個人メドレーで勝っている。

リレーは惜しくも敗退。

それでも本人たちにとっては満足のいく試合だったようだ。

翌週が県大会になり、夏実と秋人にとっては県予選となる。

順調に勝ち上がれば４人が優勝するのは目に見えている。

むしろ負けることなんて誰も想像なんかしていない。

なんせ彼らが目指しているのは優勝は優勝でも全国優勝。

県で優勝することなどただの通過点にしか過ぎない。

月曜日、火曜日と過ぎ水曜日は予定通り音楽祭が行われた。

ちなみに音楽祭はやはり４人のクラスと阿笠のクラスが圧倒的な点数を占めていたけど、ピアノとフルートの美しい旋律が上回り阿笠のクラスが優勝した。

サッカー部副部長というレッテルを持つ阿笠の意外な一面を見て、生徒教師ともに感嘆する。

そして木曜日の朝

「おっはー、麻冬！」
「おはよ」
「あ、おはよ。２人とも」

朝、教室に入る前に朝練を終えた夏実と春樹が麻冬と遭遇する。

麻冬もちょうど朝練を終えて教室に来たところだ。

３人で教室に入ると、数分先に来ていた秋人が耳にヘッドフォンをつけながらウトウトしている。

３人はお互い顔を見合わせてニヤッと笑い、静かに秋人に近づいていく。

麻冬が秋人の顔の前で手を振り秋人が起きていないことを確かめ、春樹がそーっとヘッドフォンを耳から外した。

「わっっっ！！！！」
「――――――ぉわっ？！」

そして夏実が耳に向かって思い切り叫んだ。

その声に驚いた秋人が声を上げながらガタガターッと机をひいて起き上がる。

そして3人が目の前で笑っているのを見て、軽くため息をつく。

「なんだよ、起こすなよ」
「まぁそう言うなって」

春樹が笑ってそう言うも、秋人はあくびをして聞いちゃいない。

すると麻冬が思い出したように言った。

「今日から新しいＡＬＴ来るんだって」
「え、まじ？美人美人？」

食いついたのは夏実だ。

文系が得意というだけあって英語も得意だから気になるのか。

「ブロンド美人よ。職員室で見たわ」
「おー！やったね、春樹秋人っ」

春樹は同意するものの、秋人は全く興味がないようだ。

まぁそれもそうだろう。

秋人はブロンド美人を嫌いというよりも、外国人が苦手なのだ。

あんな過去があるのだから。

「ね、そういえば秋人小学校のときもサッカーやってたんでしょ？」
「ん？ああ、まぁ」
「なんで選抜に選ばれてなかったの？」

春樹はこの間の阿笠との会話の内容が気になっているようで、秋人にそう尋ねた。

いきなりの質問に秋人は春樹を凝視した。

そして
「上手くないからだろ」と微笑するが、すぐに春樹は否定した。

しつこく聞いてくる春樹に秋人はついに折れて
「転校してきたんだよ、小6の春に」と答えた。

その言葉を聞いてようやく納得したのか春樹は頷いている。

そして便乗して今度は夏実が秋人に問うた。

「どこから来たの？」

秋人はフイッと視線を少し下にうつして軽くうつむく。

忘れたい過去を今更思い出さなければならない悲しみに暮れているのか。

何も知らずにズカズカと聞いてくる春樹たちに憤りを感じているのか。

とにかく一瞬だけだが切ない表情を見せながら秋人は言った。

「……東から」

東京？東北？と3人が楽しそうに聞いていると、予鈴が鳴った。

残念がりながらも春樹と麻冬は自分の席へ向かい、夏実も席に着いた。

秋人はホッとした顔を見せて、再びヘッドフォンを耳につけて音楽を聞き始めた。

とは言うものの、再びＡＬＴが来たことで内心ドギマギしているのも事実。

高校入学してから初めてＡＬＴの授業を受けたとき、偶然にも秋人が当てられて秋人は返答した。

英語ペラペラな秋人に愛着が沸いたのかそのＡＬＴは秋人といろいろ話をしようとし、秋人も特に意味なく会話をした。

けれど会話をしていくうちに昔の記憶が甦り、その授業は途中退出した。

それ以降ＡＬＴの授業は一度たりとも出ていない。

２年の前期は日系だったから秋人は出たのだが。

今回はブロンド美人というくらいなのだから純粋の外国人なのだから秋人はおそらく授業には出ないだろう。

「Ｈｅｌｌｏ」

時間が過ぎ英語の授業が始まる。

英語の教師とＡＬＴ講師がやってきた。

「あっきー。おい、あっきー」

秋人の前の席の男子が寝ている秋人をつついて起こす。

眠そうに目をこすっている秋人にその男子はコソコソ言った。

「良いのか？ＡＬＴだぞ」
「えっ」

秋人はバッと腕時計を見て、英語の授業が始まっていることを知った。

彼は去年秋人と同じクラスだったから知っているのだ。

秋人は急いで立ち上がり、
「先生、俺保健室行きます」と携帯だけ持った。

「おい、月影？」

不思議そうに教師が呼び止めるも秋人はそそくさと教室を出て行こうとする。

みんなの視線が集まり、当たり前のように講師も秋人のほうを見た。

「――――Ｔｓｕｋｉｋａｇｅ？」

講師は秋人の名前に反応を示し、秋人の顔をじっと見る。

秋人も反射的に彼女を見た。

「……Ａｋｉｔｏ…？」

名前を教えていないはずなのに彼女が秋人の名前を呼んだものだから、秋人は彼女の顔を凝視した。

「……Ｈａｎｎａｈ？」

秋人が彼女の名前を呼ぶと、彼女はやっぱり！と日本語で言った。

「何でここに…」

秋人は立ち止まって彼女を見ながら、軽く震えている。

「それはこっちのセリフだわ」

純粋のアメリカ人のはずの彼女がペラペラと日本語を話している。

クラスメートや教師には何がなんだか分からなくて、ただただ２人

の会話を聞いては両者をチラチラ見ている。

「Ｗｈｙ　ａｒｅ　ｙｏｕ　ａ　ｈｉｇｈ　ｓｃｈｏｏｌ　ｓｔｕｄｅｎｔ？　Ｎｏｔ　Ｔｅａｃｈｅｒ？」

「……Ｂｅｃａｕｓｅ　Ｉ'ｍ　１６.」

たったそれだけの会話なのに、彼女はなるほどね、というような顔つきをしている。

「…まさかまたあなたに会えるなんて思ってもみなかった」

「俺は二度と会いたくなかった」

「あら、心外だわ」

彼女は鼻で笑う。

秋人はキッと睨んで、震える手をギュッと握る。

「心外…だと？」

秋人はツカツカと教壇にいる彼女に近づいていく。

そして目の前に立ち、教壇にいる彼女と同じくらいの視線になる。

「なんで日本にいんだよ！また俺の邪魔すんのか！！」

秋人の罵声でクラス中がシーンとなった。

「誰がなんのために高校生やってると思ってんだよ！」

秋人は抑えきれない感情をかなり表面に出している。

「月影！彼女は教師だぞ。言葉を慎みなさい！」

英語教師がそう言うも秋人は無視している。

優等生のはずの秋人が教師の忠告を無視するとは意外すぎる。

寝ることに関して以外は。

「良いんですよ。彼は私の大学の同級生ですわ」

「…おいっ？！」

「同級生に敬語使われるなんて恐れ多いわ。…たとえ８歳差でもね」

彼女は不適な笑みを浮かべる。

その言葉に教師だけでなくクラス中がガヤガヤと騒ぎ出した。

秋人は知られたくない過去をいとも簡単にバラされて怒りを抑えることがでかずに、彼女の胸ぐらを掴んだ。

女子がキャー！と騒いで、よりいっそうクラスが騒がしくなる。

「秋人！」

席から急いで立ち上がってきた春樹が秋人を止めに入る。

親友の春樹には、これ以上秋人を怒らせると危ないとでも思ったのだろう。

「外行こう！俺とっ」

春樹は強制的に秋人をつれて行こうとする。

秋人はなおも彼女を睨んだままだ。

春樹がガラッとドアを開けて廊下に出ようとすると、彼女が春樹を

止めた。

「紹介がまだだったわ。アメリカの大学卒業後日本に来て英会話の講師をしているＨａｎｎａｈ　Ｍｅｉｓｓｎｅｒです。よろしく」

「……櫻井春樹。あなたとはよろしくしない」

春樹も秋人と同様ハンナを睨み付け、ピシャッと手荒な音をたてながらドアを乱暴に閉めた。

意味深な言葉で惑わされている生徒たちを英語教師がなだめ、数分後ようやく授業が始まった。

偶然にも星陵にやってきたハンナ・マイズナー。

嵐の予感。

next

第７０話【バスケ】

春樹に連れられて秋人は教室を出て、誰１人いないラウンジに向かった。

春樹は自販機でジュースを２つ買い、１つを秋人に差し出す。

秋人はそれを受け取って一気に飲みほした。

「秋人って何でＡＬＴの授業出ないの？外国人が嫌いなの？それともただの偶然？」

春樹は一方的にペラペラと喋り出す。

「…って、去年聞かれたよ。秋人のクラスの人に」

「…」

「だけど今年の前期はちゃんと出てたから偶然なんだって思った。けどさっきの態度見てやっと分かったよ」

春樹はガタッと椅子を引いて座る。

まだ立っている秋人を見上げながら言った。

「意図的なんだってこと」

秋人は罰が悪そうにフイッと顔を反らすけど、そのうち春樹の隣に腰を下ろした。

「まぁ、言いたくないなら良いよ。それよりせっかく暇だし何かしようよ」

春樹はまだ中身の入っている缶を飲みほして、笑って言う。

そして椅子をズラして後ろにある缶のゴミ入れ目掛けてポーンと軽く投げた。

ガコガコガコーッと音を立てて缶は上手く入る。

おーっ、ナイス！なんて春樹ははしゃいでる。

「春樹」

秋人に名を呼ばれ春樹が振り向くと、秋人は軽く頭を下げた。

ギョッとした春樹が
「ちょっ…秋人?!」と声を上げても、秋人は頭を上げない。

「…さっきありがとう」
「さ、さっき?」
「春樹が止めてくんなかったら俺何してたか分からない」

秋人はゆっくり頭を上げた。

そして何か覚悟を決めたような表情をしている。

「…俺、ずっと隠してたことがあるんだ」

けれど、そこまで言っておきながらも秋人は言うか言わまいか迷っている。

そんな秋人を見て春樹は、心の中で穏やかに笑う。

「秋人」

春樹は立ち上がり、秋人の手を引いた。

「体育館でバスケやろっ」
「は…」
「こんなときは運動するに限るよ。さっ、ほら！」

春樹はグイッと手を引き、その衝動で秋人はヨロッと立ち上がる。
そして手を引きながら春樹は小走りして体育館へと向かう。

春樹が走るものだから秋人も走るしかなく、とりあえず春樹についていく。

とてもバスケをする気分ではないし、遊んでる暇もない。

けど秋人は今自分の手を引いているのが春樹だったから文句も言わずにいるのだ。

秋人は春樹に絶対的な信頼を寄せている。

その信頼は、ついさっき更に大きなものになった。

一方的にハンナ・マイズナーに詰め寄った秋人の方を責めるのではなく、ハンナを敵と見なした。

秋人があんなに怒りを露にするのは絶対に何かあると確信しているのだ。

理由もなしに人の胸ぐらを掴むような人間でもない。

だからさっき春樹がハンナに自己紹介をされたとき、「あなたとはよろしくしない」と返答したのだ。

春樹らしかぬ言葉だけど、いくら講師といえど秋人の敵は春樹の敵……そういうことだろうか。

体育の授業が行われていないはずの体育館に、ダンダンとボールをつく音が響いている。

「もらいっ！」
「あっ！」

秋人のボールを春樹が奪い、ゴールにシュートする。

どれくらいの時間やっていたのだろうか。

春樹はズボンを膝までまくり上げ、秋人もワイシャツを脱いでその下に着ているTシャツだけになっている。

「くっそーっ」

秋人は床に座り込み、手でパタパタと顔を扇ぐ。

春樹がボールを持ちながら秋人に近づく。

「へへーん。ど?もっかいやる?」
「あちーからもう良いわ」

秋人はシャツの袖で汗を拭う。

励ます、なんて言葉では意味合いが変だがいつもの秋人になってくれるようにと元気づけたつもりなのだ。

運動しか思いつかなくて、けれど運動が一番のはずだと春樹は思った。

「次昼だ。あー、今日ご飯忘れたんだ」
「まじ?俺も」
「コンビニ行く?それとも久々にパン並ぶ?」

春樹がボールを片しながら秋人に尋ねる。

秋人は少し考えてから、たまには並ぶか、と言う。

だが本来並ぶのは授業後に行くから混んでるのであって、彼らは授業に出ていないのだから多少早めに行けば並ばずに済むのだが。

2人は汗をかいたままじゃ風をひくからと、バド部の部室にあるタオルを使って汗を拭く。

本来他部の部室に入ることは禁止だから秋人も初めて入ったわけなのだ。

秋人は部室の中を見るやいなや、すぐに言った。

「綺麗だなー、部屋」

男子バド部にもサッカー部同様マネージャーはいない。

マネージャーがいればたいていは綺麗なのだが、いないと普通はそんなに綺麗にはならない。

「そう？まぁ週1で掃除はやらせてるけど」

春樹は換気のために窓を開ける。

カラカラという音と同時に心地よい風が入ってきた。

「俺んとこも一応週1なんだけどなぁ」

秋人は室内を見回す。

バド関係のポスターが貼ってあったり本棚には漫画や雑誌が並べられてある。

けれど壁に落書きなどはなくむしろピカピカとまではいかなくてもかなり綺麗のまま。

床にゴミが落ちてるわけでもなければ、用具が散らかってるわけでもない。

「あはは。俺部屋汚いのすっごく嫌いだからさ」

春樹は笑って言った。

確かに春樹の部屋もかなり整頓されている。

春樹は自分のロッカーを開けて汗で濡れたポロシャツの代わりに予備の服を着る。

「おま…ピンクかよ」

春樹が着た服を見て秋人は呆れながら言った。

チェリーピンクの半袖の服でフードがついている。
全面には多少黄色い星が散らばっていて、明らかに男子が着るような服ではない。

「かわいっしょ？これ夏実の」
「あ？」
「前着てたからさ、欲しいって言ったら本当にくれた」

秋人はそういえば着てたかもな、なんて思い出している。
秋人には女から女ものの服をもらってそれを着るなんて到底考えられない。
そもそも秋人には女ものの服なんて入らないだろうけど。

「そんなに気に入ったんだ、それ」

秋人はベンチに腰を下ろして、雑誌をパラパラめくる。
春樹はロッカーにある袋を取り出して、脱いだ服をたたんでその袋に入れながら言った。

「てゆーか、夏実のならなんでも良かったんだ」

意外な返事に秋人はピクッと反応した。

「ねぇ秋人、俺こそ秋人に言わなきゃなんないことあるんだ」

春樹はパタンとロッカーを閉める。

何？なんて言う秋人のほうを振り向いて一瞬だけニコッと笑った。

そして少しだけ真面目な顔をして言う。

「体育祭前日夏実に告られて…振った」

「へぇ……えっ、は？！振っ…？！」

「先週の金曜日も…まだ好きだと言ってくれた夏実を拒絶した」

秋人は突然の言葉に頭が整理しきれていない。

けれど春樹はそれでも話し続けた。

「阿笠とのケンカは…それが原因なんだ」

そして春樹は、少し長くなるけど全部聞いてくれる？と秋人に尋ねた。

秋人は考える時間なんて必要なく、当たり前だろと即答した。

春樹は一呼吸置いて、最近自分にあった事実をすべて話し始めた。

next

第71話【明かされた事実】

「好きになったのは中1の頃だった」

春樹は過去を振り返り、すべてを秋人に話そうと決意した。

「部活の先輩から嫌がらせ受けてる俺を助けてくれて、俺に勇気をくれたんだ」

「中1…？」

「遠征で偶然会ったんだよ。……そのときから夏実は俺の誇りだった」

春樹は続けて、中学のとき付き合った子とダメになった理由、そして去年夏実と再会して好きだと再確認したことを言った。

「秋人も夏実を好きなことは知ってた」

「……お前まさか…」

秋人は言葉を失っている。

春樹は呆然と驚いている春樹を見て、フッ…と軽く笑う。

「そのまさかだよ」

春樹は開けた窓の外を見る。

今日は少し雲が多くてどんよりしている。

夏から秋に変わる準備をしている木々たちを見て、春樹は何かを思う。

「あの日…雨が降った日阿笠と話していたのはそのこと。なんで阿笠が泣いたのかそのときは分からなかったけど、先週秋人から麻冬とのこと聞いてやっと分かった」

秋人は視線を床にずらした。

まさか春樹が自分のために夏実を振っていただなんて思いもしなかったのだろう。

秋人も今ようやく、なんで阿笠があんなに必死に春樹に伝えろと言っていたのか分かったようだ。

「…そのあと秋人から麻冬を好きだって聞いて、正直頭が真っ白になった」

「……ごめん」

「なんで秋人が謝るの」

春樹は苦笑する。

「…阿笠はしきりに俺に言ったよ。諦める必要なんかないんだって」

秋人は罰の悪そうな顔をしているのを春樹に見られないように、うつむいたままおでこに手を当てる。

体育祭でも仲良くしていた2人を見ているのだから、前日にそんなことがあったなんて思いもしないだろう。

「けどさ」

春樹は切なそうに微笑しながらも、気持ちを秋人に伝えようとしている。

そのことは痛いほど秋人に伝わっている。

「一度はちゃんと諦めようって…秋人と幸せになれば良いって思ったんだよ。簡単な決断じゃなかったんだ…」

「…だから体育祭の夜俺にああ言ったんだ」

「うん。でもダメダメだ」

ヘラッと笑う春樹を見て、秋人は何とも言えない憤りを感じている。

自分がもっとはやく麻冬を好きなことに気づいて春樹に伝えていたら、春樹はそんなことをせずにすんだ。

1人で悩んで1人で背負いこんで、1人だけ悪者になって傷つく必要なんてなかった。

秋人はそのことを自身に責める。

「阿笠とケンカしてたのはそんな訳なんだ。阿笠の言ってることが正しいのは分かってる。けど、違うと分かったとたんに夏実に告白するなんて…そんなの都合良すぎて自分が情けなくて……」

静まりかえる体育館の片隅にある部室の中

誰も入り込んでこない空間に2人

事実を話してどうするのか。

事実を知ってどう思うのか。

きっと、いくら仲が良くても隠してることなんていくらでもある。
秋人に言えない過去があるように、春樹だってこのことは言いたくはないはずなんだ。
けどあえて言おうと決めた。

「…金曜日、夏実と一緒に帰った。なりゆきで俺が夏実のこと好きだったことバレたんだ」

その言葉を聞いて秋人は顔を上げて、春樹を見上げた。

「あれ、でもお前…」
「うん、そう。だから拒絶したんだ」
「は…いや、だって…」

秋人は歯切れの悪い言葉を連呼する。
春樹にも秋人が何を言いたいのかは分かっている。

「だってそうでしょ」

春樹は一歩秋人に近づく。

秋人は角度的に更に上を見上げる。

「何回好きだと言われても……夏実が傷つくと分かっていても…」

春樹はそこまで言って言葉に詰まっている。

「…そうだよな。俺だってきっと同じことしてる…」

そんな春樹を助けるかのように秋人が言った。

春樹はまたその切なそうな顔に軽く笑みを浮かべる。

「…でもそれじゃダメなんだ。いつまでも未練たらしく思ってるなら本当のことを打ち明けて振られた方が良い。それを…金曜の夜阿笠に伝えた」

そして春樹は、その夜阿笠が春樹に言ってくれた言葉を思い出す限りすべて繰り返して言った。

その翌日、麻冬が夏実も元気だということを教えてくれたこともあとから付け加えて、暗黙の了解で今週も今日までずっと夏実とは平穏を保ってきた、と話した。

夏実だって傷つかないはずがない。

だけどいろいろなことがあって、夏実自身成長してきたことも事実。

春樹はすべてを秋人に話し終えて緊張が解けたのか、フー…とため息をついている。

そして風で冷えて寒くなったのか、開けた窓を閉める。

部室内に沈黙が流れた。

お互いにその沈黙をあえて破ろうとはせずに、春樹はポケットに手を突っ込みながら部内を見回して物が散らかってないかを確認している。

秋人は秋人でさっきまで読んでた雑誌を本棚に戻して、本棚を眺めている。

春樹はグズゴミを拾い上げゴミ箱に捨てた。

秋人は横目でチラッと春樹を見て、また視線を本棚に戻す。

いきなりいろいろ驚きの事実を知らされて平静を保つのにいっぱいいっぱいのようだ。

しかも、その発端が秋人にも関係しているとなれば気にせずにはいられない。

まさか自分の知らないところでそんなことが起こってるなんて夢にも思わない。

だが無理もない。

どうにかしようにも、秋人ですら自分の本心に気づいてなかったのだから。

最初に気づいたのは、阿笠だった。

「運命……ね」

秋人はボツりと呟く。

何か言った?なんて春樹が聞くと、秋人は振り向いて春樹に言った。

「…麻冬を好きだって思っても仕方ないのに、これも定めだなんて言うのかな」

春樹は
「えっ」と軽く声を上げた。

秋人からそんな言葉が出てくるなんて思ってなかったのだろう。

苦笑してそう言ってきた秋人に、春樹は一呼吸置いて言う。

「定めは…運命とは違う」

その言葉に秋人はクエスチョンマークを浮かべる。

「定めなんてものはこの世には存在しないんだよ。秋人」
「……?…え?」
「人はみんな運命があって、その運命は絶対変えられる」

定めがこの世には存在しない、とは何とも突拍子な言葉だ。

存在しないのなら、その単語そのものが存在しないはずなのに…なんて秋人は思うけど、なんとなく春樹が言っている意味も分かっているようだ。

定めとは、その決められたレールの上を歩くしかなかった…いや、レールを歩く以外の道を選ばなかった人たちが勝手に作った言葉。

「だからさ、例えば今麻冬が阿笠を選んでいても未来はどうなるか分からないってこと」
「俺次第…ね」
「そのとーり」

なぜ最近彼らは運命という言葉をよく口にするのか。

普通の高校生が運命を語るなんて、普通ではあり得ない。

それほど切羽詰まっているということなのか。

運命

その言葉にかかる重み

たった16やそこらしか生きてきていない彼らに何が分かるというのか。

それだけの期間

何を思い
何を感じ
何のために

「お前はさ、どうすんの？」

秋人は春樹に尋ねた。

春樹は一瞬考えるように目を泳がせ、そして言った。

「思うがままにするよ」

笑いながら言う春樹に、まぁ春樹らしい返答といえばそうだよな…なんて秋人は思う。

そろそろ行こう、ということになり2人は部室を出て再び体育館に出る。

体育館をまたいでパンを売る場所までゆっくりと歩いていく。

3年の階の廊下を歩けば3年の教室で授業をしている教師や生徒たちに注目される。

特に春樹はチェリーピンクの服を着ているから。

「春樹制服は着ねぇの？」

なんとなく疑問に思った秋人がそう尋ねると、春樹は不敵な笑みを浮かべながら言った。

「俺が制服着るのは覚悟決めたときだよ」

このとき秋人には春樹の言っている意味が理解できずにそのまま受け流してしまう。

だが、近い未来にその言葉の意味を知ることになるのは秋人にも春樹にもまだ分かっていない。

next

第72話【日常】

「あっ、あっきー！」

春樹と秋人がラウンジで昼ご飯を食べているとクラスの男子たちが秋人のもとへ来た。

「さっきはまじ驚いたぜー」
「なぁ」

秋人は春樹とのやりとりですっかり授業のことなんか忘れていた。

秋人はハンナが自分の過去をバラしてしまったことを思いだし、一気にサーッと顔が青ざめる。

「秋人？」

様子のおかしい秋人を心配するように春樹は声をかける。

が、次に男子たちが言った意外な言葉で秋人は驚く。

「まさかアメリカでのご近所さんだったとは」

「――――はっ？」
「え？だから昔アメリカにいた頃近くに住んでたんだろ？ケンカ別れしたからさっきもあんなに大ゲンカしたって…」

どういう成り行きでそういうことになるのか秋人には理解できずにいたが、ハッとして気づいたように言った。

「ハンナ…がそう言ったのか？」
「そうだけど」

一応ハンナも秋人に悪いと思ったのだろうか、弁解したようだ。
アメリカに住んでいたことは結局バレてしまったけど。

それでも秋人はかなりホッとして顔に血の気が戻ってきている。
冷や汗を手で拭い、
「あれ、違うの？」なんて言う男子たちに言った。

「や、違わない」
「やっぱりー」
「ケンカしたままだったからつい手が出ちまって」

秋人はありもしない嘘を淡々と喋る。

嘘はいけないが、秋人が傷つかずにすむにはそれしかない。

何のために飛び級したのか。

それなのに高校生やってる現在があることが秋人には信じられないのだ。

それを元同期に見られる、この屈辱が。

「仲良くしろよ？これから生徒と教師なんだから」
「俺ＡＬＴ出ないし」
「あぁ、そうだったな」

秋人の言葉にそう答えたのは去年一緒のクラスだった人。

一緒にいた元違うクラスの人は
「何で？」とクエスチョンマークを浮かべる。

けど2人はあえてその質問には答えず、会話を続けている。

その光景を見た春樹は、さっきのラウンジでの秋人との会話を思い出している。

春樹にはなんとなく秋人がなぜ授業に出ないのか分かっているようだ。

前期の授業は日系人だった。

日系なら良くて外国人ではダメだなんて、普通に考えたらおかしい。

秋人のさっきのキレっぷりが
「つい」のわけない。

かなり意図を持っての怒りだ。

ハンナはみんなに適当に嘘を言ったようだが、それこそが嘘だというくらい春樹には普通に分かっている。

話の流れから考えても

秋人の幼少時代を誰も知らないことも

秋人の頭の良さからしても

ハンナの話が本当だとすれば、すべてが繋がる。

「じゃあな～。あっきー、春樹」
「あー」
「うん、また」

男子たちは席が空いているのを見つけて一言言い、そこへ向かって行く。

「焦った？」

春樹は何を考えてか、秋人にそう言った。

秋人は特に不思議にも思わずにパンを食べながら

「おう、まじ焦った」

と言った。

春樹は内心かなり焦っている秋人を見てクスッと笑う。

春樹がそう尋ねている時点で春樹にバレてることを、頭がいっぱいいっぱいの秋人はまだ気づいていない。

それでもすべてがバレているわけではないし、まだ良い。

あのくらいの会話では秋人がなぜ日本に来て大学を辞めたのかまでは分からないはずだ。

秋人が一番恐れているのは、その理由が公になること。

「…ね、秋人」

春樹は紙パックのジュースをストローで吸う。

そして秋人に言った。

「この間の模試さ」

「ん？」

「あ……やっぱ良いや」

何だよ?と聞き返す秋人に、春樹は手を振りながら何でもないと笑う。

気になるけど春樹が良いというものだから秋人は受け流す。

春樹はパンを食べる秋人をじっと見つめた。

この間の模試とは何のことを聞こうとしているのだろうか。

秋人がアメリカにいたことと何か関係があるのか。

だから聞くのを止めたのか。

そこは分からずじまいだが、とりあえずこれ以上秋人を追い詰めないために聞くのを止めたことは確かだ。

食事を終えた2人が教室へ戻ると、男女問わずクラスにいた人が秋人を囲んだ。

アメリカにいたんだね

ハンナ先生と知り合いなんてすごい偶然だね

せっかく再会したんだから仲直りしろよ

アメリカはどうだった？

なんで日本に来たの？

いろいろな質問が殺到するが、秋人はどの質問にも１つも答えずにスタスタ歩く。

その隣を歩く春樹にも誰かが尋ねてくる。

春樹はクルッと振り向いて、

「ちょっとうるさいんじゃない？」と笑って言う。

顔は笑ってるけど内心怒っていると感じとったのか、みんなは一歩引いた。

「あ、席借りてるわよ。秋人」

秋人を見て麻冬が言った。

おー、なんて返事をしながら秋人と春樹は夏実と麻冬が座っている席の前に座る。

「秋人どうりで発音良いわけだぁ」

夏実がおかずを食べながら感心して言う。

「まぁな」
「よく生きてたねぇ」
「何？」
「だってアメリカって物騒じゃない？」

真剣な顔をしてそう言う夏実に秋人はクックと笑う。

「日本は平和だよな」

ハンナのことに触れるのではなく、アメリカのことを言いながら笑いを誘っている夏実。

もちろんそんなことは麻冬にも春樹にも分かっているし、秋人だって十分分かっている。

それでも夏実のそんな優しさを嬉しく思うのだ。

この４人はいつもそう。

嫌がることは決してしなく、気になっても言ってくるのを待っている。

深く浅い仲…とでも言っておこうか。

基本初めは浅入りしかしないけど、そのうちに深入りしていくんだ。

それは喋らせるのではなく、自ら喋り出すのを待っている証拠。

だからこんなにタイプの違う４人が仲良くやっていけるわけだ。

それでも最近はその思いより感情が先に出てしまうことも多いけれど。

「…悪いな、みんな」

一呼吸置いてからポツリと秋人はそう言った。

少しの間沈黙が流れるが、そんな沈黙はすぐにかき消される。

「え、何？謝られるようなことされてないわよ」
「いや待て麻冬。されてるされてる」

麻冬の言葉を否定しながら夏実は言う。

「こないだ化学の先生に授業秋人寝てるの放っといたら怒られた」
「あー俺も！秋人のヘッドフォン取り上げてくれって国先に言われたっ」
「そういえば私も」

夏実に続いて春樹と麻冬もポンポン言い始める。

そういう意味で言ったわけではないだろうに、３人の言葉を聞いて秋人はしばしポカーンとする。

が、そのうちフ…と笑えて穏やかな表情をし始めた。

大人に囲まれて過ごしたあの時期には手に入らなかったもの

高校生になって…高校生をやってようやく手に入れた。

「放っとけ」

秋人は肘を立てて手のひらで顎を押さえる体勢をする。

ぶっきらぼうにそう言う秋人の背中を春樹が
「開き治ったな～っ」とバシッと叩いた。

「おまっ……ちっとは加減しろ！」
「夏実にやられるよりマシでしょ」

春樹がそう言うと、麻冬はクスクス笑いながら
「確かに」と同調する。

夏実はなぜ自分の名前が上がったのか分からずに頭にクエスチョンマークを浮かべている。

まぁおそらくバレーのアタッカーの平手打ちのほうが何倍も痛いという意味なんだろうけど。

「てかそろそろ定期試験だ」
「そうだっけ」
「あーめんどくさいわね。秋人またヤマはってよ」
「1教科につき中華マン1つずつな」

「ケチ！」

そんな会話をしていると笑いが溢れる。

普通の会話でさえ、愛しく思う。

こんな日常が

素敵すぎて。

next

第７３話【見失うもの】

「そういうわけだから頼むな。月影」
「うぃっす」
「今週からだし気合い入れてけよ」
「うぃっす」

昼休み、職員室で秋人が顧問と話をしている。

どうやら部活関係の話のようで、秋人も真面目に聞いている。

話し終えて秋人が職員室の中を歩いていると、誰かが秋人に近づいてきた。

「アキト、あなたサッカー部部長なのね」
「……ハンナ」

図々しくもハンナはよく秋人に話しかける。

秋人はハンナの顔を一瞬だけ見て無視をして職員室を出ようとする。

ハンナはしつこく秋人の後ろを付いて行った。

「何よ、無視しないでよ」
「…」
「昔のが可愛げあったわよ」

その言葉に秋人はピタッと立ち止まる。

疑問に感じたハンナは先回りして秋人の前に立つと、秋人の顔が怒っているのに気づく。

「その可愛かった子どもを追い詰めたのはどこのどいつだよ」

秋人はそれでも怒りを爆発させずに抑えようと冷静に堪えている。

「ハンナ」

そしてハンナの顔を一途な瞳で見据えて言った。

「怖いって言って俺から遠ざかったのはそっちだ。なら二度と話しかけるな」

真剣な秋人にハンナは一歩引くが、年下に命令されたのが嫌なのかむきになって言い返した。

「ふん…何よ、偉そうに」
「何だと」
「違うわね、実際偉かったっけ」

ハンナは髪の毛をいじりながら皮肉たっぷりな言葉を浴びせる。

「だから私と同期だったのよね。たかたが１０歳の子どもが」
「……」
「天才わ良いわよね。何の苦労もしなくて。私があの大学入るのにどれだけ死ぬ気で勉強したか」

ハンナは…大学の同期生はそう言うが、実際問題秋人には何の関係もない言葉だ。

確かに秋人は苦労せずに飛び級して大学に入れた。
確かにその大学に入るために頑張ってた人もいた。
だけどその人がどんな努力をしてようが秋人には無関係だ。

「だから何だよ。俺には関係ない」

無関係なのにどれくらいの人にそう言われたことか。

それも本当にたかたが１０歳の子どもにだ。

傷つくと思わなかったのか。

大人が子どもを追い詰めたところで何になるのか。

「…あなたは何のために大学に入ったのよ」

ハンナは秋人の顔をキッと睨みながら言う。

秋人は即答した。

「さっさと学歴手に入れて社会的地位を上げようとしてた」

ハンナは秋人が即答したことを少し驚いている。

大学時代、秋人はたった1人にも大学に入った理由を教えはしなかった。

周りが敵しかいなかったのだから当然といえば当然かもしれないが。

例え嫌味で聞かれても、秋人はその口を固く閉じていた。

「他に飛び級してまでガキが大学入る理由はないだろ」

秋人は視線を横にずらす。

秋人にとっては正直な言葉だが、ハンナには屈辱そのもの。

これ見よがしにハンナは更に言い返した。

「その天才少年がジャパンで高校生やってるなんて笑えるわね」
「そーだな」
「あなたが手に入れたいものはここにあるのかしら」
「お前に関係ない」

これ以上話しても無駄だと思ったのか、秋人はスタスタと歩き出した。

ハンナは離れていく秋人の背に向かって叫ぶ。

「どうせ1年で辞めちゃうくらいの気持ちだったんでしょ?!…バカにしないで!」

けれど秋人の背中は反応せず、真っ直ぐ歩いて行く。

ハンナはグッと堪えるような顔をして、再び室内に戻る。

秋人も教室へ向かう。

教室の中では、春樹たちが仲良くお喋りをしていて、教室に入ってきた秋人に気づき声をかけた。

「秋人ー、説教終わった？」

秋人は3人に近づきながら言う。

「顧問と部活の話だっつの」

3人がいる席に座り、秋人は疲れたのか軽くため息をついた。

秋人も交えて4人で楽しく会話を続けるが、正直秋人にはそんな楽しい話題も頭に入ってこない。

ハンナがこの学校に昨日からやってきてから、そのことばかり考え

てしまう。

両親にも茉李亜にもハンナのことは話していない。

せっかく日本に来て幸せに暮らしていたのに、辛い過去を思い出さなきゃならないのは秋人だけでなく家族にとっても耐え難い。

忘れかけていた…

いや、忘れようと必死だったのに今鮮明に思い出しつつある。

何のために…

そう、何のために秋人は大学へ入ったのか今さらながら自分を責めた。

あのまま素直に年齢相応に上がっていけば仲良しの幼なじみたちとサッカーやったり休日遊んだりと、普通の日常が送れていた。

おそらく日本へ来ることなんてなく、そのままアメリカで生涯を過ごしただろう。

卒アルがないことを多少切なく思うこともなければ
少しだけ頭脳を偽装する必要もない。

秋人にすれば高校の問題なんて糞のようなもので、試験なんてする必要もない。

けれどそれでも一般を装うため満点取れる問題でも1位はキープできるくらいに少しワザと間違えたりしている。

全国模試は絶対受けない。

名前が出るものだから、秋人は油断できないのだ。

ハンナのように偶然昔の同期や知り合いがそれを見たら秋人が日本で高校生をやっていることがバレてしまう。

昔の知り合いが全くいないこの土地で何も辛いことなく過ごしていきたい秋人の細やかなワガママなのだ。

おそらく、昨日春樹が秋人に模試のことで聞こうとしたのはソレのことだろう。

秋人はこの前の模試を風邪と言って休んだ。

だが実際に秋人が風邪ひいてないことは3人は知ってる。

秋人の風邪は1日ではいつも治らないからだ。

なぜズル休みしたのか、それを聞きたかったに違いない。

でも高2の後期ともなれば大学に向けて模試も増える。

いくら彼らがスポーツ推薦と言えど、普通の公立高なのだ。

しかも彼らは勉強もできるから期待が大きくなる。

特に秋人は星陵の看板なのだから、学校側は秋人に模試を受けてもらって学校の平均点を上げたいと思うはず。

模試を受けるにはお金もかかるわけだし、毎回理由をつけて休んでいくわけにもいかない。

どうするつもりなのか。

1年のときも秋人は模試を受けていなかったのだ。

教師陣も何とかしようとは思わないのか。

どうして誰も気づかずに放っておいたのだろう。

誰かが声をかけて手を差しのべるべきだった。

それでも高校生を演じようとする秋人のために…

「……と？秋人？」

「…えっ？」

「もう、どうしたの？ボーッとしちゃって」

秋人は麻冬の呼び掛けによって現実に引き戻される。

周りをキョロッと見ると、みんな次の授業の支度を始めようとしているところだ。

「じゃ俺ら席戻るねー」

春樹と麻冬も自分の席に戻って行く。

秋人は自分の席に座り直して、なおもボーッとする。

いつになく変な秋人を見て夏実は言った。

「秋人、顧問に何か言われたの？」

まさかハンナと口論したなんて夢にも思わないだろう。

秋人は夏実に

「いや……」と小さな声を漏らす。

秋人は星陵に入ったことさえ後悔し始めてしまっている。

星陵に入らなければハンナに会うことはなかった、と。

ハンナを、過去を思い出して囚われるたびに秋人は大切なことを徐々に見失っていっている。

確かに星陵に入らなければ、いっそ飛び級なんかしていなければ、
そんな悲しい過去は存在しなかったかもしれない。

けれどつまりそれは

春樹や夏実や麻冬と

佑亮や阿笠と

大切な人たちと出会っていないことを指す。

そんな未来があることを知らない過去にいる自分はそんなことはどうでも良いと言うかもしれない。

けれど

結果的に見たら

将来過去を振り返ったら

彼らに出会った過去を思い出しては嬉しく思うことを。

next

第７４話【名もない感情】

照りつける太陽の中、午後の暑い日射しを浴びながらグランドを懸命に走るサッカー部員たち。

明日県予選を迎えるため、いつもより気合いが入る

…はずなのだが

「秋人！何回目のミスだ！」

阿笠の声がグランドに響く。

練習をしている中、どうも秋人は珍しくミスを繰り返している。

「最近たるんでるぞ！」

阿笠が秋人にそう言ったものだからチームメートたちは一斉に２人をチラチラ見る。

阿笠はミスをした秋人に近づきながら、試合は明日なんだぞと声を張って言う。

「……ああ。悪い。…走ってくる」
「スランプってわけじゃないんならちゃんと頭冷やせ」
「…うっす」

そうして秋人はグランドの周りを走り始める。

秋人が走ることなんて今まで1回たりともなく、また阿笠が秋人を怒鳴るのも珍しいからチームメートだけでなく他の部活の人も秋人をチラッと見る。

トラックを走ってる陸上部や、反対側で筋トレをしている野球部。

水泳部からもフェンス越しにグランドの様子は見える。

ちょうど麻冬は泳いでいたから見ることはないけれど。

「誰が練習止めろと言った！」

動きが止まっている部員を見て阿笠が言う。

部員たちは自分も走らされることを恐れ、急いで練習に戻る。

阿笠が言った最近とは、おそらくハンナが来てからだ。

秋人は部活中だけでなく授業中も休み時間もあんな調子。

いくら春樹たちが気を使ってくれても、気になるものは気になるのだ。

気にするなという方が無理である。

結局秋人は昨日の６限にあったＡＬＴの英語の授業もサボった。

ハンナじゃなくてもサボるけど、今回に限ってはハンナだから余計に。

秋人はセンスや才能があるがゆえにたくさんのものを背負い込まなくてはならない。

パーフェクトだと羨む人がいる。

ずるいと蔑む人もいる。

けれど……

「……あ〜〜〜！くそ！」

秋人は走りながらもやり場のない怒りを抑えようとする。

サッカーにまで悪影響及ぼしたくないのに、無意識の中でやっぱり考えてしまっている。

だからいつもは絶対にしないミスばかりして阿笠を怒らせた。

「部長、あれ」

その頃春樹は過呼吸で倒れた部員を外に連れ出して寝かせていた。

その部員とペアを組んでる部員も一緒にいて、彼がグランドの方を指差した。

「え？」

春樹はグランドの方を見るが、特に不思議な様子もなく
「何、どうかした？」と尋ねる。

「よく見てください。ほら、走らされてる人を」

春樹は視線を倒れた部員の方に移して看病しながら言う。

「ああ、サッカー部？いつものことじゃん。無断欠勤無断遅刻…あとはミスでもして秋人を怒らせたんでしょ」

淡々とそう言う春樹に、部員は叫んだ。

「その秋人先輩ですって！」

意外な言葉に春樹はバッと振り向いてグランドをまじまじと見つめた。

サッカーのウェアを着て走っている人を探し、その人の顔を懸命に見ようとする。

そして春樹は呟いた。

「秋人だ…」

いつもは走らせる側にいる秋人が走っているのは、春樹には信じがたい光景である。

「や…あれは罰じゃないよ。だって秋人無断遅刻なんてしてない…。俺と一緒に教室出た」

「部長」

「きっと走りたいから走ってるだけだよ」

春樹は自分にそう言い聞かす。

春樹がこうもうろたえているのには訳がある。

日常生活で何かあって春樹たちはそれを部活中でも態度に表してしまうのに対して

秋人はそれは一切ない。

授業中とかには態度に出してしまうことがあっても、部活中には絶対出さない。

サッカーにだけは
絶対に。

秋人にはサッカーしかなくて……違う、秋人には全てが兼ね揃えてあるけれど生き甲斐はサッカーしかなくて

だから部活中も自分にも部員にも厳しいし、部活後には自主練をしている。

中学入って
佑亮とサッカーをして
阿笠にも出会って

大会で勝つ度に
生き甲斐を感じた。

「ミスなんてするわけない！秋人がボーッとしてて走らされるわけなんてない…！！」
「ぶ…部長？落ち着いて…」

そのくらい、春樹には分かっている。

側で見ていれば、痛いほど分かっているのだ。

アメリカで何があったかを知らなくても、秋人がこうしてサッカーに命賭けてることを知ってるからこそ、叫ばずにはいられない。

「秋人先輩だってミスくらいしますよ。人間なんすから」

我を失っている春樹をなだめるかのように、彼は春樹に言う。

「部長だってたまにはするじゃないですか。天才だって言われる2人でも…」

「違う！天才とかそんなんじゃない！」

すぐ側に病人がいることすら忘れている。

隣で叫ばれるものだから過呼吸は更にひどくなり、春樹はその過呼吸の部員のヒューヒューという音が大きくなるのを聞いてハッと我に返った。

「ご、ごめん！田辺大丈夫？！」

春樹は田辺という部員の背中をさすりながら言う。

「中川、先行って練習に戻れ。あとは俺1人で良い」

「う、うっす」

中川は中に戻る。

春樹は自分のせいで悪化させたことに罪悪感を持ち、懸命に看病し始める。

しばらくして田辺は落ち着きを取り戻し、過呼吸は治まった。

すぐに練習に戻すわけにはいかないため、しばらく涼しい風にあたることにして、2人はその場に居続ける。

「…部長、すんません」

田辺は横になりながら春樹にすまなそうに言う。

「何言ってんのさ。しょーがないって」

春樹は軽く笑いながら言う。

「……月影先輩って、部長にとって何ですか」

「ん？」

「いや……なんか異常なくらい心配するから」

春樹は、聞こえてたんだ…と苦笑する。

「少し」と田辺も答える。

春樹は少し間を開けて、グランドの方をじっと見つめる。

まだ走っている秋人を目で追いかけながら

「何…かぁ」とポツリと呟く。

親友なんて言葉では収まりきれない。

では何と呼ぼうか。

「阿笠にも劣らない気持ち…って言うかねぇ」

何です？それ、と田辺は言い返すけれど春樹は

「俺もよく分かんないや」と言う。

春樹はそれ以上何も言わなかったし、田辺もそれ以上何も聞かなかった。

１０数分してから２人は中へ戻り、部活を始めた。

秋人は結局自主的に３０週走り、その後は練習に加わったもののまた些細なミスを連発し、自ら練習から抜けた。

あまりにも酷い秋人を見かねた阿笠は怒りを通り越して心配し始めるが、秋人はベンチに座ってうつむいたまま何も言わない。

「……悪い、阿笠」
「秋人」

ようやく口を開いたかと思えば、秋人は意外な言葉を口にする。

「明日…お前ゲームキャプテンやってくれ」
「は…あ、秋人は？」
「俺は出ないから……」

秋人は頭にタオルをかぶっているせいで、阿笠に秋人の表情は見えない。

どんな顔をしてどんな気持ちでそう言ってるのか。

「部長はお前だろ。秋人いる限り俺は絶対やらない」

阿笠がそう言うと、秋人は低い声で言った。

「じゃあ…俺明日行かないから」

その言葉はあまりに予想外すぎて阿笠は開いた口が塞がらずにいた。

けどそれでも阿笠は秋人の頼みを聞き入れず、こう言って練習に戻って行った。

「朝迎えに行くから」

阿笠は翌朝、秋人を迎えにやってきた。

秋人は本当に大会に行くつもりはなかったらしく、朝起きてこずに部屋の中から出てこない。

困り果てた親や茉李亜をよそに、阿笠は無理やり部屋をこじあけ秋人を連れて会場まで行く。

秋人の顔からはやる気は失せ、まるで人形のようだった。

それでも阿笠は秋人を試合に出させるが、昨日と同様秋人らしかぬミスを連発して司令塔の役目を果たさず、阿笠はついには秋人をベンチに下げた。

いつもなら余裕で県予選を優勝しているところが、秋人が抜けたせいで優勝には全く手が届かずに終わった。

敗者復活戦で辛くも勝ったため県大会への切符は手に入れたものの秋人のおかげで部員まで困惑している。

顧問の話すら聞く耳をもたない。

危険を感じた阿笠は敗北が決まった直後春樹にすぐさま電話をかける。

だが同じ学校が会場なわけではないため知らせたところでどうにもならない。

電源を切っていたため春樹から電話がきてることを知らない秋人は人通りの少ないベンチに座ってただただ自分を責めていた。

「アキト」

ハンナが来るまでは。

next

第７５話【有名となる定め―何時何処でも―】

「秋人……どうしたんだよ」

春樹はいくらかけても出ない秋人へ文句を言う。

春樹もまだ試合が全部終わってるわけではないから、今すぐ秋人のもとへ駆けつけるなんてことは出来ない。

とりあえず何とか敗者復活戦で勝ったということを阿笠から聞いて、ただただホッとするばかり。

「春樹、そろそろ決勝だぞ」

控え室にいた春樹を部員が呼びに来た。

春樹は携帯をカバンにしまって会場へと向かう。

午前中にはダブルスの試合はもう終わっていて、ダブルスでは３位という結果に終わる。

そして夕方になりシングルスの決勝を迎える。

各学校の生徒たちもみんな春樹に注目をする。

当然といえば当然だ。

県で優勝するような人なのだから拝みたくもなる。

おそらく静岡でバドミントンをやってる人に春樹を知らない人などいない。

「今日こそは負けねぇ。櫻井」

「良い試合しよう」

お互い握手をして、そして試合は始まる。

結果は春樹の勝利だ。

圧勝までとはいかないけど、やはりかなりの点差はある。

勝つのは当たり前だけど、やっぱり勝てれば嬉しいわけで。

みんなが春樹を取り囲んでおめでとうと言う。

その頃秋人はと言うと、突然現れたハンナに驚きつつもやはり黙りこくる。

「見てたわよ、全部」
「…そ。わざわざ来なくて良いのに」

秋人はまだユニフォームを身に付けていて、秋人を偶然見かけた人が「星陵の月影だ」と囁く。

最もユニフォームなんか来ていなくても秋人の顔さえ見れば分かることなのだが。

「ふぅん。有名なのね」

ハンナは周りにチラホラいる人が秋人を見てはそう囁いているのを見て、そう言った。

けれど秋人は何も答えない。

「…他の先生とか生徒からあなたのことといろいろ聞いたわ」

ハンナは秋人の隣に座る。
秋人はそれでも何の反応も示さずにうつむいている。
「1年のときは全国優勝したそうね。有望選手で成績も当然良いわけだからみんな絶賛してるわ」
「…」
「あなた、社会的地位を手に入れるためって言ったわね。大学に入ったのは」
その言葉にようやく秋人は少しだけ顔を上げてハンナの顔を見た。
「それを捨てて今高校生やってて何か良いことあるのかしら」
「は…」
「だから、高校生をやる利益」
「利益なんて…ねぇよ」
秋人は軽く目を閉じる。
「あなたの言う社会的地位なんて、私たちがあなたを少し責めただけで諦めちゃうようなものなんでしょ」
もう秋人には言い返す気力もなく、ため息をついて重い足で立ち上

がる。

「そう思うならそれで良い」

もはや大学を辞めた理由なんて秋人にはどうでも良いのだ。

秋人にとって今のすべては、大学を辞めたことではなく大学に入ったことだ。

「そういう態度が気に食わないのよ、アキト！」

ハンナは立ち去ろうとする秋人に訴えかける。

秋人はスタスタと歩き始め、ハンナから離れようとする。

「日本で見つけたサッカーだってあの程度のものなんでしょ」

その言葉を聞いて秋人はピタッと立ち止まる。

横目でハンナを見ながら秋人は冷たく言い放つ。

「……ハンナ。俺からもう居場所を奪わないでくれ」

「なっ…」

「俺、決してお前たちをバカにしたかったわけじゃない」

ハンナもベンチから立ち上がり、何かを言おうとするが先に秋人が言った。

「自分で幸せになる道作ろうとしただけなんだ」

秋人は切なそうな瞳で一瞬ハンナを見て、再び歩き出す。

ハンナはその場に立ち尽くして心の中で自問自答する。

「な…何よ。私たちが秋人の幸せ奪ったって言うの？」

ハンナたちからしてみれば秋人の存在は屈辱そのものだったのかもしれない。

有名大学に入るために普通の人は死ぬ気で努力する。

その努力がバカにされたように感じるのは当然だ。

けれど悪意のあったわけではない秋人にとって、彼らのストレス解消的な嫌味は悪口程度のレベルではない。

存在が怖いと
話したくないと
天才なんか嫌いだと言われた秋人の気持ちを考えたことがあるだろうか。

「幸せって…大げさすぎよ」

ハンナはそうは言うものの、どこかで罪悪感を感じている。
さっきの秋人の切なそうな顔がハンナにそう感じさせたのだ。

けれど確かにエリート街道を歩もうとした秋人をそのコースから引きずり降ろし、日本で楽しく過ごしている日常に風波を立てた。

ハンナはそう思った。

「…だって…そりゃ追い詰めたのは悪かったけど、…」

ハンナはあの頃の自分と心の中で葛藤している。

黄色い猿のくせにと秋人をバカにしたあの頃のハンナと。

卒業して社会人となっている今でさえこうして秋人を追い詰めている。

何年経ってもちっとも変わっていない。

「あ、月影秋人さん！」

もう制服を着ているどこかの高校のサッカー部の男子たちが秋人を見つけて叫んだ。

秋人はゆっくりと彼らの方を振り向く。

すると1人が秋人のもとに走ってきて握手を求めた。

秋人はそれに応じ、ギュッと手を握る。

「怪我でもしたんすか？今日試合出てなかったみたいすけど」

「いや…調子悪くて」

「そうなんですか！はやく治してくださいっ」

彼はペコッと会釈して部員たちのところへ戻る。

彼は部員らに羨ましいだろ、と笑って言う。

秋人のファンは数知れない。

「なんで俺有名…なんだろ」

秋人は握手したその手を見つけてボソッと呟く。

注目されるのはこりごりだったけど、サッカーをやっていて必然と有名になった。

上を目指せば少しくらい有名になるのは目に見えていたことだけど、秋人はわけが違う。

サッカーがすべての秋人なのに、今はこのサッカーのユニフォームでさえが憎くてたまらない。

秋人はさっさと着替えるために更衣室に走った。

秋人は着替え終わるとすぐに荷物を持って更衣室を出て、そこらへんにいた部員に先に帰ると伝えて帰って行った。

審判をやっていた阿笠たち数人が戻ってきて、阿笠は部員たちや顧問を召集する。

けれど部員の中に秋人がいないことに気づいて言った。

「秋人は？」

みんなが首を振って知らないと言ったから阿笠が探しに行こうとすると、秋人に言伝てを頼まれた部員が慌てて言った。

「副部長っ、部長なら先に帰りました！」
「何だって？」
「帰るとだけ言って…俺言伝て頼まれて」
「…そう」

とりあえずいなくなったわけではないことに阿笠はホッとする。

「なんだ月影は。練習も試合も集中しないし終いにはいなくなるし」

顧問が少し苛立ちながら言う。

この顧問はサッカーのことをあまり知らない人で、今年から赴任してきたばかり。

その前にいた顧問もあまりサッカーに詳しくない人だったから代々部長に任せっきりだった。

「部長辞めた方が良いんじゃないか」

秋人のことを対して何も知らない顧問はそう言う。

顧問の言葉に部員たちはシーンとなる。

慕っている部長がけなされたけど相手が顧問だから何も言えないでいるのだ。

けどそんな中ただ1人顧問の言葉を否定した。

「先生、嘘でもそんなこと言わないでください」

阿笠だった。

「俺は秋人以外に従わないし、俺が秋人を差し置いて部長になることもない」

「あ…阿笠」

「現に俺らは秋人がいなきゃ予選で勝つことすら出来ない。違いますか？」

阿笠の目力に圧倒されて顧問は何も言えなくなる。
阿笠は必要事項などを部員たちに伝え、解散する。

その夜阿笠も春樹も何度も秋人にコールしたが、決して出ることはなかった。

また、春樹にも夏実にも麻冬にも県予選通過したことを知らせるメールを秋人が送ることもなかった。

next

第７６話【登校拒否】

秋人は月曜も火曜も学校には来なかった。

月曜が部活休みの春樹が放課後秋人の家へ行っても、秋人は部屋から出てこなかった。

３人や阿笠がどれほどメールや電話をしても反応を示さない。

火曜日、部活後に打ち合わせして春樹と夏実と麻冬が秋人の家へ行くと、先に阿笠が来ていた。

それでも秋人は出てこない。

阿笠も試合の日のように勝手にドアをこじ開けるわけにもいかず、結局会えずじまいだ。

「今日も…かしら」

水曜日、朝練を終えた３人が教室内で集まる。

麻冬がまだ来ていない秋人の席を見つめて言った。

「春樹、秋人何かあったのかな」

夏実が心配そうに言う。

心当たりがありすぎる春樹は、窓の外をじっと見つめる。

そのうちＨＲが始まり出席を取って担任の話を終えたあと、春樹はカバンを置いて財布と携帯だけズボンのポケットに入れて教室を出た。

教師や夏実や麻冬にもバレないように校舎を出て、走って行く。

１限が始まって担当教師が、欠席になってないのに春樹がいないのを見て

「櫻井はどうした」と言った。

当然誰も知らないわけで、少しザワザワする。

「海野、雪原。聞いてないのか？」

「あ…はい」

「何も」

麻冬と夏実も席越しに顔を見合わせて首を傾げる。

とりあえず夏実が春樹にメールを入れておいた。

春樹は秋人の家へ向かっていた。

自転車を豪快に勢いよく走らせて、立ちこぎしながらペダルをこぎまくる。

秋人の家は両親とも仕事に行っていて、茉李亜も大学に行っている。

昨日両親が春樹たちに何とかしてほしいと願った。

自分たちじゃどうにもしてやれないから、と。

春樹はその言葉を鵜呑みにしたわけではないけど、たぶん他の人より秋人かああなっている原因を分かっているのは自分だと確信している。

だから、今秋人を助けるのは自分しかいないと思っているのだ。

その頃秋人は、今までずっと机の奥に入れていた手作りの卒アルを眺めていた。

それを見ながら、何かを思う。

『あんなに苦労して入った大学なのに１０も年下と同じ学力なんて

思い知らされるよ…』

『天才すぎて怖いわ』

『何話したら良いか分からないよ。関わりたくない』

幼少期の友達と楽しそうに遊んでる自分を見ては、大学での1年間を思い出す。

『生意気なイエローモンキー』

クスクス笑う人もいれば、睨んでくる人もいる。

過酷な日々だった。

エリート街道を歩むことを止めて普通の人間として暮らしていた矢先に再び現れた、同期生。

『Ｗｈｙ　ａｒｅ　ｙｏｕ　ａ　ｈｉｇｈ　ｓｃｈｏｏｌ　ｓｔｕｄｅｎｔ？　Ｎｏｔ　Ｔｅａｃｈｅｒ？』

『…まさかまたあなたに会えるなんて思ってもみなかった』

『俺は二度と会いたくなかった』

『なんで日本にいんだよ！また俺の邪魔すんのか！！』

幸せに暮らせると思った。

誰も自分を知らない土地で暮らして一からやり直せば、忘れられる過去だと思った。

『誰がなんのために高校生やってると思ってんだよ！』

『…あなたは何のために大学に入ったのよ』

『さっさと学歴手に入れて社会的地位を上げようとしてた』

エリート街道を諦めた。

『あなたが手に入れたいものはここにあるのかしら』

出世することを目標にするのを止めた代償として手に入れたもの。

『どうせ1年で辞めちゃうくらいの気持ちだったんでしょ?!』

その代償はあまりに大きなものだったけれど

その代償を補えるくらいのものを日本で見つけた。

『日本で見つけたサッカーだってあの程度のものなんでしょ』

けれどそれすらダメだと言われたらどうしたらいいのか。

例えハンナにもう悪意がないのだとしても、ハンナという存在がいるだけで秋人を苦しませているのだ。

なら、秋人はハンナがこの学校にいる限りずっと過去に怯えて生活しなきゃいけないのか。

終わったことなのに。

『自分で幸せになる道作ろうとしただけなんだ』

秋人は自分で言った言葉を頭の中で繰り返した。

幸せになりたかっただけなのに、そんなものは意図も簡単に壊されていく。

何度も、何度も。

「ジェイ…マリー……」

秋人は幼なじみたちの名前をポツリポツリと言い始めた。

今頃みんなは何してるんだろう、幸せに暮らしてるんだろうか…と。

「…勉強なんか出来なきゃ平和だったのに」

天は二物を与えず、とはよく言うけれどそんなもの秋人には到底当てはまらない。

容姿も才能も有り溢れすぎてしまっている。

秋人は手作りの卒アルの一番最後に載ってるみんなの住所録をじっと見た。

そこに書いてある電話番号に今すぐ電話さえすれば声を聞くことが出来る。

アメリカなんて簡単に会いに行ける。

けれど…

その頃春樹はようやく秋人の家に着き、インターフォンすら鳴らさ

ず玄関に手をかけると、鍵がかかっていないため開いた。

勝手に家に上がり春樹は居間に置いてある秋人の部屋の鍵を取って2階の秋人の部屋に向かう。

2階の部屋は外からも中からも鍵がかけられるのだ。

ノックもせずに春樹は鍵でドアを開け、部屋に入る。

ドアが開く音に気づいた秋人は振り返った。

「……春樹…」

部屋の中にいる寝間着のままなにやら雑誌のようなものを読んでいる秋人を春樹は見つける。

春樹の顔を見てパッと卒アルを隠して、気まずそうに春樹から視線を反らした。

「秋人、学校行こう」

春樹は左手を差し出す。

けれど秋人はその手を掴むことはなく、小声で言った。

「…放っといてくれよ」

秋人はベッドの中にもぐり布団をかぶる。

春樹が秋人の名前を呼んでも秋人は微動だにしない。

ふと春樹はさっき秋人が隠した雑誌を見つけ、それを拾い上げる。

「ＡＬ…アルバム？」

その声を聞いた秋人はバッと起き上がり、春樹からアルバムを奪う。

春樹は

「え？な、何？」とびっくりしている。

秋人はアルバムを見つめて、切なそうに言う。

「…お前どこまで知ってるんだよ」

秋人は前髪をくしゃっと握る。

春樹はその場に腰を下ろして、秋人の質問に答えた。

「何も知らないよ。秋人がアメリカで大学にいたことと、頭良いことバレないために模試を受けてないってこと以外は」

「…やっぱ騙されるわけねぇよな。みんなも分かってて気使ってくれてんだろうな」

「や、大丈夫。たぶん俺ら3人しか知らないから」

春樹のその言葉に秋人は顔を上げた。

「夏実も麻冬も、最初のハンナの言葉を信じたわけじゃない。ただ仲良しのご近所っていう弁解は嘘だと気づいてるだけ」

秋人はそれを聞いて少しだけホッとしている。

結局春樹にバレてることには変わりないのに。

知られて気分の良い話ではないから秋人も極力気を使っていた。

「……言うべきことじゃないと思ってたから」

秋人は春樹から奪い取った卒アルを見つめて言う。

「アメリカにいたことすら家族以外知らない…」

そう言っておきながら秋人は佑亮にも知られていることに気づいたが、そこはあえて言わずに続けた。

「こんなんなら日本になんか来なきゃ良かった…」

next

第77話【話される過去】

「メールの返事は？」
「んーん、ない」

1限を終えた夏実と麻冬は春樹の不在を不審に思いながら話している。

「カバンはあるのに…」

バイブなしのマナーモードにしているからメールに気づくはずもなく、また気づいていてもおそらく無視してる。

授業なんかより秋人が学校へ来ないことのほうがよっぽど心配な春樹は。

嫌がらせも多少受けただろうけど、春樹は恵まれた環境で育ってきた。

小さい頃からバドミントンをやってきてその才能を開花させ、学校でもいつも人気者だ。

それは麻冬や夏実も同じで、偶然自分に見合うスポーツを見つけて必然的に才能を開花させた。

もともとの素質を持ってること自体幸せなのだ。

もし秋人が日本にいたら、どうだっただろう。

その良すぎる頭をどのように使おうとしていたのか。

サッカーの道は選んでいなかったかもしれない。

弁護士でも医者でも政治家でも何でも、日本のトップクラスに立っていただろう。

…いや。

彼ら的に言わせてもらえば、そんな道はなくこうなる運命だった、だ。

秋人がアメリカにいたのも

日本に来たのも

サッカー続けたのも

全てはその単語1つのみ。

「何で?俺は秋人に会えて嬉しいよ」

春樹は秋人の投げやりな言葉に返答した。

「むしろもっと早く出会ってれば良かったとさえ思う」

秋人は春樹の顔をチラッと見て、また視線を変える。

春樹が秋人に
「秋人はそうは思わないの?」と尋ねるけど、秋人は黙ったまま答えない。

沈黙がしばらく流れ、春樹はとにかく秋人の悩みを聞き出すためにあれこれ聞いた。

「俺ね、バドできて嬉しいんだよ。自分の居場所だから」
「…」
「何でバド選んだのかよく分からないけど、あの頃の選択は間違ってなかったって思える」

春樹は立ち上がり、部屋の中を見回した。

阿笠の部屋にもあった中学選抜選手たちの大きなパネル。

メダルに賞状

トロフィー、写真

秋人専用のマイボール

試合のビデオ

サッカーウェア

数えきれないほどの
見きれないほどの

サッカーずくしの部屋。

「日本でサッカーの道、見つけたんじゃないの」

春樹は悲しそうな顔をしながらも精一杯微笑んで言った。

「日本に来なきゃ良かったなんて言うなよ」

秋人はそんな春樹を見て、バッと頭を抱えた。

秋人だってたった5年やそこらでこんなにもサッカーに染まるなんて思っていなかった。

けど春樹の言う通り部屋を見渡せばサッカーものばかり。

秋人だって本当は分かっている。

日本に来なきゃ良かったなんて、思っちゃいない。

けどそう思わなきゃ秋人が秋人でいられなかった。

「春樹…」

春樹は秋人の呼び掛けに反応して、秋人の目の前に立つ。

秋人は頭から手を離して、ちょっとずつ話し始めた。

「…俺、日本でいう小5のとき大学に入った。飛び級で…」

「…うん」

「けど、入った大学は俺にとって地獄だった」

秋人は大学生活で周りやハンナからいろいろ言われたことや、マスコミでも取り上げられたことを話した。

春樹は予想以上の話に驚きを隠そうと必死に平然を装うとするが、秋人はそんな春樹を見て

「…おかしいだろ？」と言う。

「普通じゃないんだよ…俺」

「秋…」

「大学は1年で辞めた。日本に来て茉李亜は学校に編入して、俺はそのとき小6だった」

そして秋人はさっきまで見ていた手作りの卒アルを春樹に手渡した。

春樹は中をペラペラめくっていく。

「…みんなと一緒にいることより自分の将来を選んだ俺なのに、作ってくれたんだ」

春樹だって当然持っている小学校の卒アル。

秋人のはそこまで立派でもないし紙だって固くない。

ワープロ打ちではなく手書きで書かれている。

ただの雑誌なのに

「みんな秋人の幸せ願ってたんだよ…」

秋人にとっては

たった1冊のかけがえのない思い出なのだ。

「…みんなに言えない。応援してくれたのにあっさり辞めちゃって…」

春樹はこのとき本棚に日本の小学校の卒アルがないことにようやく気づいた。

「秋人…もしかして…」

秋人は春樹が本棚を見ながら驚いてることに気づき、重々しく言った。

「行ってないから…。中学だって行くつもりなかった」

「なんで…」
「もう嫌だったんだ。それに日本来てすぐ俺に付いたカテキョは根を上げた。…きっと中学教師だって同じだ」

春樹は手作り卒アルをギュッと握りしめる。

「毎日サッカーしてた。サッカーしかできなかった…」
「でも中学は」
「ちょうど5年前のこの時期佐々先輩と出会った」

春樹は佑亮の名前が出てきて少し反応した。
茉李亜と佑亮が付き合ってることも、秋人が佑亮を兄のように慕ってることも春樹は知ってる。

「先輩は……先輩が俺を必要だと言ってくれた」

春樹は少しだけ涙腺が緩んできている。
秋人の肩が震えていることに気づいているようだ。

「俺の存在を否定された1年を過ごしたあとだったから…嬉しかった」

秋人は鼻をすする。

「死ぬほど…嬉しかったんだ」

春樹からは見えないが、秋人のうつむいてるその顔の瞳には涙がたまっている。

あと少しで溢れんばかりの涙が。

「中学行ってサッカーの道見つけた…」

そして、秋人の目から涙が落ちた。

1粒、そしてまた1粒。

けど春樹に泣いてるのを見られたくないために顔を上げることも寝間着の袖で涙を拭くこともできずにいる。

「サッカーの道見つけてお前らにも会って…俺、ようやく普通の生活送れてたんだ」

春樹の目からもツーッと頬を伝って涙が流れる。

春樹は堪えようとするけどどうにも止まらない涙を手で拭き取ろうとする。

春樹も泣いているのに秋人は気づいたけど、それでもなお顔を上げられずにいる。

「だけどハンナが現れて忘れたかった過去をまた思い出し始めて…
…怖くなった」
「怖く?…また幸せを壊されるかもって?」
「…うん」

秋人はなぜ春樹に話す気になったのだろう。

今まで固く口を閉じて決して誰にも言わなかったのに。

前に秋人がどこから転校してきたかという話になったとき、秋人は東から、と答えた。

あながち嘘ではない。

「秋人は…一度奪われたんだね。幸せへの道」
「……サッカーまで取られたらって思うと全くサッカーに打ち込めなくて、試合も悲惨だった」

続けて秋人は、そういえば電話くれたよな…と付け足した。

「俺からサッカー取ったら何もなくなる…。それを受け止めるのが怖くて、もうサッカーやりたくないんだ…」

春樹はようやく秋人が学校に来ない理由を理解した。

それ以前に、秋人が抱えてるものがあまりにも予想以上のもので春樹は心を打たれた。

たった１０歳やそこらの子どもがそんな辛い思いをして、そして生き甲斐を見つけなきゃ生きていけなかったことは、驚きという言葉を十に通り越している。

秋人１人に背負わせてはいけないと、春樹は直感で思った。

「秋人。もう誰も秋人から幸せ奪わないよ」

春樹はその瞬間、前に体育祭の夜に秋人とした会話を思い出した。

今幸せかと秋人に尋ねて、秋人は肯定した。

秋人が好きな人が手に入らないから幸せじゃないなんて言ってられるレベルではないことを、春樹は今ようやく分かった。

春樹はいろんなことを思い、感じながら秋人に抱きついた。

「春っ…」

春樹はベッドの上で座ってうつむいてる秋人を抱きしめ、そして言った。

「奪わせない！死んでも俺が守ってやる…！！」
「は、春樹…」
「だって秋人…サッカーやりたいだろ？」

秋人は自分のためにこんなにも泣いてくれる人がいることを、すごくありがたく感じた。

秋人の涙は自分を抱きしめている春樹の体に落ちていく。

「秋人が自分で見つけた道だよ…っ……秋人が幸せになるために歩む道なんだっ…！」

春樹は更にギュッと秋人を抱きしめる。

その強さは優しく温かく、秋人が自ら手に入れた友人のぬくもり。

背伸びしなくても、エリートになんかならなくても秋人の居場所はここにあった。

「…でもハンナが…」

「ハンナが何だ。今度はハンナにだって壊せない夢なんだってこと見せてやれよ」

「え…」

「…違うか？秋人っ」

春樹の必死の訴えはしっかりと秋人に届いている。

秋人は震える手で春樹を抱きしめ返した。

「違…わない…」

秋人はこれでもかってほど春樹に力強く抱きついて、溢れる以上の涙を流して泣いた。

初めて人前で泣いた。

春樹は、ようやく自分の本音を言えた秋人を微笑みながら優しく受け止めた。

「堂々と言ってやれ。秋人の信じた道を」

秋人はその声が聞こえてないのか頷きはしなかったけれど、声を出しながら本気で泣いている。

滅多に感情を露にはしないのに、春樹には素直に泣けた。

春樹が言ったように、それは言葉では表せない気持ち。

秋人はしばらくの間ずっと今までたまってきた分の涙を流した。

落ち着きを取り戻したあと、少し気まずそうに顔を隠した秋人を見て春樹は微笑ましく思う。

そして、手作り卒アルを本棚の中に置いた。

それを見た秋人が困惑しながら言う。

「春樹…それは」
「良いじゃん。これは正真正銘秋人が過ごした小学校時代の卒アルだよ」
ニコッと笑う春樹につられて、秋人も少しだけ笑った。
そして春樹はハンガーにかけてある制服を取って秋人に手渡した。
「行こうか。学校」
「……」
それでも秋人はやっぱりためらっている。
意固地とかではなく、ただ単純に気まずいだけなのだろう。
「放課後になったら部活だよ。部活頑張ってもらわないと」
「…え？」
「秋人が優勝決めたら俺、夏実に言う」
真剣な目をしながら口元が緩んでいる春樹を見て、秋人はその春樹の優しさをありがたく受け取った。

「…そっか」
「だよ。覚悟決めさせてよ」

秋人はその言葉を聞いて、ハンナが学校にやってきた日にした春樹との会話を思い出す。

そういう意味だったのか、とようやく秋人は知った。

春樹としては初めはそういう意味で言ったわけではないけれど。

「そうだな。制服…着させてやるよ」

秋人はそう言って制服に着替え始めた。

しっかりとサッカーウェアもカバンの中に入れ、2人は1階へと下りていく。

秋人は顔を洗い、歯を磨いてから2人は秋人の家を出て学校へと向かった。

学校に着いた頃はもう3限が始まっていた。

秋人は泣いた自分がいたことを恥じるのではなく、弱い自分とさよならできたんだと思い、その瞳は遥か遠くを見据えていた。

next

第78話【サッカー部復活】

昼休みに入って麻冬に用事があった阿笠が6組に来た。

秋人がいるのを見て、驚いた顔をしている。

「阿笠…」

「秋っ…」

秋人はやっぱり気まずそうで、なんと言ったら良いのか分からない様子だ。

そんな中春樹が割って入って言った。

「あのさ阿笠、秋人さっき連れてきたばっかだから。本当は学校休むところを無理やり連れてきちゃっただけで」

「無理やり？」

「だから朝練もサボり…ってわけじゃ…」

春樹はサッカー部が規律にうるさいことを知ってる。

月曜日火曜日と朝練、放課後の練習を無断欠席。

そして今日の朝練もとなれば、何周走らされるか分かったもんじゃない。

「良いよ、春樹」

秋人はカバってくれてる春樹に軽く微笑みながら言う。

秋人なりのありがとうの気持ちなのだ。

それが分かった春樹はもう口出しをしない。

秋人は阿笠と向き合って言った。

「なんにせよ無断で休んだことに変わりない。分かってる」

「…1回の欠席につき２０周だぞ」

「ああ」

後ろで麻冬と夏実が

「えー１００周！」と声を上げた。

確かに驚きだろう。

「と、言いたいとこだけど」

阿笠は歯切れよく言う。

「秋人にずっと走られたら練習できないから、土曜日まで放課後練のとき1日25周な」

阿笠だって本当は秋人を走らせたくなんかない。

「…や、1日30周走る」
「え？」
「試合でも俺酷かった」

阿笠は少し上を向きながら
「ああ…」と納得したような表情をしている。

けれどこう言った。

「それは良いよ」
「でもっ」
「俺らの練習不足だから。秋人いなきゃあのレベルってこと実感させてもらったよ」

阿笠は苦笑した。

「はやく戻ってきてくんないと困るんだ。俺部長の役までやりたくないし」

「よく言う。お前だって十分こえーよ」

「あはは」

さっきまで気まずそうだったのに、もういつもの2人に戻っている。

阿笠も元々勝手にサボったりしていた秋人にそこまで怒ってはいなかった。

阿笠は秋人とサッカーをしている年数なら誰にも劣らない。

サッカーに態度を出すには何か相当な訳があることは分かっているのだ。

分かっていても、今は大会の最中でお互い部長副部長という立場ゆえ仕方ない。

「じゃあ」

阿笠が帰ろうとすると、麻冬が呼び止めた。

阿笠が振り返ると麻冬は言う。

「土曜の夜暇？」
「？たぶん」
「じゃあ今度はあたしが阿笠に奢るね」

フフッと笑いながらそう言う麻冬をよそに、阿笠はチラッと春樹や秋人を見る。

春樹もチラリと秋人のほうを見るが、これぱかりはどうしようもない。

秋人も聞いていない素振りを見せている。

「うん、分かった。麻冬今日部活ないんだっけ」
「もー。だから水泳部は木曜安みっ」
「あれ、そうだっけ？」
「いつになったら覚えるのよぉ」

たったそれだけの会話だけど、はたから見たらラブラブそのもの。

最初の頃みたくギクシャクもしてないし、幸せそうな2人。

そのまま2人は廊下に出て、昼休みが終わるまでずっと楽しそうにお喋りをしていた。

「…秋人。秋人も誘えば？」
「良いよ、別に」
「良いの？あれ」

春樹は仲良く話している2人をそっと指差す。

秋人は春樹が指差したほうを振り向いて、麻冬たちをじっと見つめた。

こんなに近くにいるのにまるで遠くの世界にいるようだ。

たとえ春樹が実は秋人と麻冬が両思いだと知っていても、麻冬が阿笠と付き合うと決めた以上口出しはできない。

ただ、麻冬がそう決断したのは自分の恋が脈なしだと思ったからだ。

脈なしではない今、もし事実を知ったらどうするのだろう。

「…今は先にやるべきことがあるから。落ち着いたら頑張る」
「頑張る」
「逃げてばっかはもう嫌なんだ。だから」

大学から逃げ

夏実から逃げ

阿笠から逃げ

そしてサッカーからも逃げた。

まずはサッカーから逃げないことが第一歩。

そしたら第二歩目には麻冬だ。

秋人は無理なことは絶対に言わない。

できるからこそ断言する。

そのせいかどことなく秋人の言葉には説得力がある。

「そっか」

春樹は前向きにいこうとする秋人を嬉しく思い、ニコッと笑う。

何度その笑顔に助けられたことだろう。

何度その笑顔につられたことだろう。

「絶対優勝してやるからな」

そして、秋人はいつからそんなに笑うようになったんだろう。

昔からぶっきらぼうでほとんど無表情だったけど最近はよく怒り、泣き、笑う。

喜怒哀楽が出てきた。

クールなのが性格なんだろうとも考えられるけど、エリート時代背伸びしていたからということも考えられる。

本当はこんな風に喜怒哀楽を持っていたかもしれない。

そう思うと、春樹たちの存在はかなり大きなものとなる。

今日の授業が終わり、掃除もＨＲも終わると秋人はすぐに走って部室へと向かう。

用具の準備をする1年よりも急いで着替え、足早にグランドに行き走り始めた。

通常ならあと20分後くらいに練習が始まるのだが、それまでに終わらせようとしているのだろう。

秋人の足なら20分以内に20周くらいは軽い。

「部長」
「部長だ」

用具を倉庫から出している1年が秋人を見つけた。

「走ってるってことは…」
「ああ。そういうことだろ」

続々と部室にやってくる部員たちが走っている秋人に目をやる。

秋人が練習前に走ってるということは、もう大丈夫なんだろうとみんな理解している。

阿笠も秋人を見て、なんとなく微笑んだ。

そして部室に入る。

「副部長、部長来ましたね」

部室に入ってきた阿笠に一番に声をかけたのは1年生ながら正ＧＫの里田だ。

里田は着替え終わっていてスパイクの紐を結び直している。

「ああ。櫻井が連れてきてくれたって」

「へぇ。さすが親友っすね。でも安心した」

安心？と阿笠が聞き返すと、里田はあっさりと言った。

「だって俺がいくら守ろうとしても副部長が決めようとしても、部長がいなきゃ始まらない」

そう、実際にその通りだ。

結局は秋人に頼るしかなくて。

けれど見方を変えれば、里田がいなければ守備力が格段に下がるし

阿笠がいなければ得点することも難しい。

3人がお互いを絶対になくてはならない存在だとしっかり認識してるからこそ、チーム自体が強くなる。

これで佑亮がいたら最高なんだろうとか考えてしまう。

最強と呼ばれた佑亮

天才と歌われる阿笠

カリスマ性のある秋人

星陵の守護神・里田

4人ではサッカーはできないけど、他のメンバーも大事だけどやっぱり彼らがいなきゃ星陵サッカー部は成り立たない。

「そうだね」

里田は他の1年に連れられてグランドへ急いで向かう。

阿笠や他の2年は時間が来るまでゆっくり支度をする。

阿笠たちが部室を出た頃にはもう秋人は走り終わっていて、部室近くの水道で水を飲んでいた。

阿笠たちに気づいた秋人は彼らに近づき、一緒にグランドへと入る。

準備を終えた1年たちも集まってきて、部員たちが輪を作る。

「…一昨日昨日それと今日の朝練サボって悪かった」

秋人は軽く頭を下げる。

「自分勝手で不甲斐ない部長だけど、今日からまた気持ち入れ替えていくから付いてきて欲しい」

秋人のその言葉に

「おう」と真っ先に返事をしたのは阿笠だった。

阿笠に続いて他の部員たちも元気よく返事をしていく。

すると阿笠は秋人に、どうせ気合い入れるならアレやれば?と催促する。

えー…とためらう秋人なんかを無視するかのように、部員たちは輪を作っている状態から隣同士で肩を組んでいる。

やるしかないと諦めた秋人も、隣にいる阿笠ともう1人の部員の肩に手を回す。

そしてみんな少し前屈みになった。

「いくぞ星陵！」
「おう！！」
「勝つぞ星陵！」
「おう！！」
「星陵サッカー」
「日本一！！」

これはサッカー部がいつも試合前にする掛け声である。

秋人が1人で言う部分と他の部員が全員で言う部員とに分かれている。

「星陵～ファイ！」
「オウ！」
「ファイ！」
「オウ！」
「ファイ」
「オーッ！！！」

これで掛け声は終わりになる。

みんな輪を崩して、ランニングに入る。

ようやく久しぶりに星陵サッカー部に士気が戻った。

next

第79話【気まずい2人】

「あーれ…」

次の日の昼休み、春樹がトイレから帰ってくると秋人と麻冬の姿はなかった。

どこに行ったのかと教室を見回してもいなく、残っていた夏実が春樹に言った。

「秋人は職員室で麻冬は呼び出し」
「呼び出しぃ？麻冬ほんっとモテるねぇ」
「てゆーより阿笠くんと付き合ってるの有名なのによく男子告るよね」

夏実はケラケラ笑う。

「青春だね」

春樹も笑ってそう言い返すけど、どことなく2人の間で微妙な空気が流れる。

夏実の足ももう治り、今は練習に参加もしている。

秋人と同じく今週が県大会。

夏実が加わればおそらく優勝は間違いなしだろう。

「あのさ」

2人して同時に言う。

「あっ…夏実先に良いよ」

「えっ、春樹こそ」

よそよそしくお互い譲り合うものだから、なんとなく2人はお互いの話題を察している。

あまり2人でいるときは恋愛話はしないようにしていたようだ。

気まずいというより、どうしたら良いのか分からないから。

春樹からすればいろいろあったかもしれないけど、夏実にとっては好きなのに振られた。

訳が分からずにいる。

夏実の性格上気になることはしっかりと聞きたいけれど、春樹があんなにしてまで言わないのには訳があると思い、聞けずにいるのだ。

「……」

2人の間に沈黙が流れる。

数十秒ほどしてから沈黙を破ったのは春樹のほうだ。

「俺…さ、なんかいろんなこと考えすぎてたかもしれない」

「え？」

「余分なことばっか考えてるから頭の中ぐちゃぐちゃして…結局そんな俺の性格がみんなを傷つけるんだ」

夏実を筆頭に阿笠や秋人までが、春樹が夏実を振ったがために辛い思いをしていた。

春樹もそれは十分承知していて、だからこそ自分を責めている。

「ストレートに言えたら悩まずに済んだのかな…」

こんな状況下の中ストレートにごめんと言えない春樹なりの、精一杯の謝罪。

それが夏実にどう伝わっているかは分からないが、夏実はそう言う春樹に言った。

「よく分かんないけど…でもあたしは春樹が春樹でいてくれて良かったよ」

例え無意味に振られたとしても

一番辛いとき側にいてくれた。

いつも隣にいてくれた。

いつだって支えてくれた。

その優しさで、笑顔で何度も助けられた。

それだけで十分なのだ。

「そのまんまの春樹でいて欲しいって思うもん」

春樹はそう言ってくれる夏実の顔を直視できずにいる。

夏実とて春樹のせいで泣かせられたりしたのに、春樹を励ますためにそう言ってくれてることが心苦しいようだ。

春樹が隣中だったにも関わらず夏実を探さなかったのは、照れなんかではない。

もし探しあてたとしてもドラマや漫画のように恋が芽生える訳ではないし、きっと春樹のことを夏実は覚えていないと思ったから。

会いに行こうと思えばいつだって行ける距離。

だからこそ会いに行かなかったというのに

「ごめんね、やっと思い出したよ。春樹のこと」

「え…」

「春樹の顔は覚えてなかったけど、春樹を忘れたことは一度もなかった」

出会ってしまった。

あの日、廊下で2人

「…？どういう……」

春樹は夏実の矛盾する言葉を聞き返す。

夏実はクスッと笑った。

「前に言ったよね。強くなるために茶髪にしたって」

夏実は髪の毛を指差しながら言う。

春樹は微かに頷いた。

「でも、あたし以外にも同じような人がいるんだって事実が一番励みになったんだ」

「…」

「たぶん茶髪にしてなかったらあんなこと言えなかった」

春樹と夏実は互いに頭の中で当時の記憶を甦らせている。

何年経っても忘れることのできない、２人の思い出。

「今頃何やってるかな。まだバドやってるかな。勝ってるかな。そろそろ部長になったかな」

夏実は思い出を愛しそうに愛でながら優しく言う。

春樹はそんな夏実に見とれて言葉を失っているようだ。

「中体連どうだったかな。高校はどこにしたのかな。……って、ずっと考えてたよ」

名前も知らないし、あれから会うことはなかった。

それでも夏実は春樹と同じように、会えなくても春樹のことを思いながら生きてきた。

それは恋心ではなかったかもしれない。

ただの懐かしい思い出の一部かもしれない。

けれど、確かに夏実の人生に大きく影響したという事実はある。

「…それが春樹だって分かったのはついこの間だけど」

夏実はベッと舌を出す。

「…そ…か…」

春樹は夏実から顔を反らして、小声で呟く。

春樹にとっては夏実があのことを思い出してくれたということよりも、夏実も春樹を思いながら過ごしてきたという事実が嬉しいのだ。

４年半、一方的な春樹の片思いだと思っていたけれど心の片隅に確かに春樹はいた。

「どっかの私立にでも行ってるかと思ってた」

春樹は照れを隠しながら言う。

「たぶんもう会わないんだろうなって…」

春樹が初めて夏実の姿を見たのは、入学式の日。

春休みのときからもう上級生に混じって練習していた夏実は、当然

式のあとも練習に参加した。

体育館へ行く夏実を、楽しそうに走っていく茶髪の女の子をそのとき見かけた。

すぐさま夏実だと気づいた。

「同じ学校でバレーやってるのを見て、心底嬉しかった」

気づいても名前も知らないし話しかけることもできない。

クラスも違うし何の接点もない。

目で追いかける日々。

「…あたしはバドやってる春樹見ながら、春樹のこと思ってた」

「あは。なんか難しい」

「あの子が春樹だったら良かったのにな、ってずーっと思ってたんだよ」

春樹が誤魔化すように笑うと、夏実もつられて笑う。

そしてまた沈黙。

何か明るい話題があれば良いのだが今の2人にはそんなもの浮かんでこない。

お互いに顔をチラチラ見合うけど、目が合うたびに反らす。

そんなやりとりをしていると、いつもは短く感じる昼休みでさえもが長く感じる。

キャアキャア楽しそうにはしゃいでる女の子たちの声も、芸人のものまねなんてバカなことをしてる男子たちの笑い声も2人には届いてこずに、自分の世界に入っている。

「あ…のさ…」

しばらくしてから、夏実がもじもじと何か言いたそうにした。

何？なんて春樹も聞き返すけど、内心かなりドキドキしている。

それでもまだ言おうかどうしようか戸惑ってる夏実に、春樹は「待って」と止める。

「え？」

何が言いたいのかおそらく察知したのだろう。
春樹は夏実の目を見ながら言う。

「俺、…夏実にいろいろ言わなきゃなんないことある」
「…うん」
「だから…あとちょっとだけ待ってて欲しい。必ず話すから」

本当なら今この雰囲気で言ってしまったほうが何倍も楽だ。
それでも春樹が話したがらないのは、秋人との約束を守るため。

真面目な顔をして言う春樹を信用したのか、夏実は分かったと頷いた。

そのときちょうどクラスの男子が春樹を呼んだため、春樹はその場から立つ。

数秒してから夏実のところにも同じ部活の子が話に来たため、２人はそれ以降昼休みを別々に過ごした。

2人にはちょうど良かったかもしれない。

あのまま気まずい雰囲気のままでいるよりずっと。

それでも、夏実はいつか聞けると分かって少しだけすっきりしていた。

next

第８０話【木村】

昼休み、ご飯を食べ終わって春樹が教室を出ていき、秋人までがいなくなったあと麻冬はサッカー部の１年に呼び出された。

秋人がその場にいたら止めていただろうのに、秋人はちょうどいなかったため麻冬は彼に付いて行く。

とは言っても、２年の階の廊下に出ただけだけど。

「えーと、確かサッカー部の木村くんよね」

今までずっと秋人と一緒に帰っていたせいか、顔くらいは覚えているようだ。

麻冬としては阿笠と付き合ってる以上、サッカー部の人からの告白は気まずいものがある。

ちなみに木村とは前にも言ったかもしれないが、１年でもうレギュラーのＤＦである。

「雪原先輩、何で俺が先輩を呼び出したと思います？」

「はっ？」

普通ならこれは告白なんだろうが、そう聞かれてそう答えられるほど麻冬も図々しくはない。

答えに詰まっている麻冬を見て木村は、バカにしたようにクスッと笑った。

「先輩、副部長と付き合ってますよね」

「…そうだけど」

「俺ずっと不思議だったんですよ。明らかに先輩は部長のことが好きなはずなのにおかしいって」

告白かと思えば、木村の話は予想外にも麻冬の恋の話だった。

しかも秋人のことが好きなのをバレている。

「何言ってんのよ。阿笠が好きだから阿笠と付き合ったのよ」

麻冬も負けじと言い返す。

けれど木村は麻冬の顔をじっと見て眉を吊り上げながら言った。

「それ副部長の前でも言えますか」

その顔と言葉の迫力に麻冬は押し負けている。

この子…知ってる、と心の中で思いながら。

いつもなら適当にはぐらかしている麻冬も、なぜだか木村には嘘つけないと感じている。

木村の真剣さがそう思わせているんだろう。

「…最近、２人が変なんだ。副部長が朝練遅刻したり部長が試合に出れないほど落ち込んでたり」

「…どういう…？」

「２人でコソコソ重い話とかしてることもあるんです。…練習中にも関わらず」

麻冬の疑問を無視するかのように木村はペラペラと勢いよく話す。

麻冬はそのどれも知らない。

「雪原先輩と付き合うちょっと前からですよ。もちろんその後も」

「あ、あたし？」

「何があったか知らないけど、先輩が好きでもない副部長と付き合うから歯車が狂ったんじゃないですか！」

木村はかなり必死に叫んでいる。

麻冬は知らされてない事実を一気に言われて頭が混乱している。

だが、なんとなく同時に木村の気持ちも理解しているようだ。

木村にしてみれば麻冬が誰と付き合うとかは興味なんか全然ない。

ただ練習中にそんな雰囲気や態度を出されたりするのが気に入らないでいるだけ。

「…部長や副部長とサッカーするために俺この学校にしたんです」

木村は麻冬から顔を少し反らして、手を拳にしてギュッと握りしめている。

「ずっと楽しみにしてて…今嬉しいんです。なのに、せっかく一緒にできるのに最近の2人はちっとも練習に身が入ってない」

「ま…待ってよ。阿笠や秋人が不調なのがあたしのせいって言いがかりも良いとこだわ」

麻冬は少し声を張り上げて言った。

「そりゃ付き合う前は2人といろいろあったわ。だからそのときの不調はあたしのせいかもしれない」

麻冬が言い返したくなるのもよく分かる。

麻冬にしてみれば秋人たちのスランプは全部麻冬のせいと言われてるようなもの。

秋人や阿笠が麻冬のことでそんなに悩んでたなんて知らないのだから。

「けどそのあとのことは関係ないわ」

最も試合の日のことは麻冬には全く関係はないのだが。

「むしろ不調のチームメートを支えられないあなたたちのほうがよっぽど問題よ」

「なっ…」

「同じスポーツマンとして言わせてもらうけど、秋人1人くらいカバーできないで球技が勤まるもんですか。優勝できないのはあなたたちの実力不足なのよ」

麻冬に的確なところを付かれて木村はカアッと顔を赤くした。

そんなことは当の本人の木村や阿笠たちが一番よく分かっている。

「……でも雪原先輩が余計なことしなきゃそんなことは起こらなかったんだ」

「そんなのっ…」

「先輩は何も分かってない」

木村は言い返されたのが悔しくてこんなことを言ってるわけではない。

「付き合った後も2人にいろいろあったのは何でだと思うかよく考えてくださいよ」

木村は当然秋人が麻冬を好きなのだと思っている。

自主練しながら麻冬を待ち、一緒に帰るのは秋人が麻冬を好きだから…と。

実際には秋人が自主練するのは偶然で、前は夏実のことが好きだったのだが。

「何でって…」

確かに付き合う前のいざこざならあってもおかしくはない。

2人が両思いだと知ってる木村だからこそ言うのだ。

「部長が何のために悩んだか、先輩が分かってあげなきゃ意味ない。あなたは目先の幸せしか見えていないんだ」

なんでたかだか大した知り合いでもない後輩にこんなことを言われなきゃならないのか。

けど麻冬は木村の言葉に惑わされて考えさせられている。

付き合う前なら秋人とケンカしたし阿笠ともいろいろあった。

けどそれ以降は特に何もなかったはずなのに、もし本当に2人が変だったのだとしたら…と。

秋人は麻冬の判断にたくさん心配してくれた。

春樹にも阿笠と付き合うのはよくないと言われた。

「目先の幸せ…」

麻冬はその言葉を繰り返す。

木村の言葉が麻冬の行動にジャストヒットしているのだ。

叶わない恋から逃げるために自分を愛してくれる昔の恋人と付き合った。

確かに愛されることは幸せかもしれない。

けれど麻冬は、他の男ではなく阿笠を選んだのは、元彼ならまた愛せると思い込んだから。

麻冬には無自覚だとしても、絶対にどこかでそう思っていたはずだ。

昔幸せになれなかったから今度こそはと思っているだけで、そこに愛なんかはない。

春樹もそれが分かってるから麻冬に忠告した。

「まぁ…先輩を責めるのは間違ってるかもしれませんよね」

さっきとはうってかわって木村は少ししおらしくなる。

責められてるにも関わらず、クルクル変わる表情に麻冬はどこか好感を持っている。

「先輩がモテるから」

「え」

「可愛いから仕方ないっすよね。モテんの分かります」

しおらしくなったかと思えば、今度は爽やかに笑う。

本当なんなんだろう、この少年は。

少年と言っても麻冬よりもデカいけれど。

喜怒哀楽が激しくて…そう、まるで春樹のよう。

「な…なに？木村くん」

麻冬はもう訳が分からなくなって頭が混乱している。

責められたり共感されたり褒められたり…

「俺が指図することじゃないけど、先輩がはっきりしないと2人とも前に進めないっすよ」

「2人って…」

「部長と副部長」

またその話に逆戻りした。

麻冬としてははっきりした態度を取っているつもりなのだ。

もう秋人と一緒に帰っていないし、なるだけ阿笠との時間を大事にしている。

キスもすればそれ以上のことだって、普通の恋人と同じようにするのだ。

「木村くん。何か誤解してる」

阿笠と付き合うと決めたとき、麻冬はある決意をした。

誰にも言ってないし、決意したところで叶うものでもない。

それでも麻冬はその決意を頑なに守ろうとしている。

「あたし、誰が何と言おうと阿笠の彼女なの」

そのとき、ピューッと涼やかな風が吹いて麻冬のウェーブを揺らした。

その中に浮かぶ麻冬の真剣な瞳が木村の時を止める。

「阿笠だけを愛するって決めたのよ。もう秋人は見ない」

「そんな…」

「秋人のこと忘れたくて阿笠と付き合ったの。だから当然でしょう？」

そんな決意ごときで忘れられる気持ちでは決してない。

けれど自分にそう言い聞かせなきゃいられないほど、麻冬は阿笠にすがろうとした。

誰よりも愛したいって言う人もいるけど、愛されたいって人もいる。

麻冬は前者から後者に移っただけ。

「だって…それは先輩が知らないから！」

「何を？」

「部長の気持ちを！」

木村の言葉に麻冬は苦笑した。

「夏実でしょ？知ってるわ」

「違う！」

「え？違うって…」

このとき木村はようやくなぜ麻冬と阿笠が付き合うことになったのか理解したようだ。

勘違いしてすれ違って、相思相愛なのにお互いがお互いの気持ちに気づいていない。

こんなに苦しいことってあるんだろうか。

「夏実じゃないの？」

麻冬は怪訝するように木村に尋ねる。

だが木村は、思っていたより複雑なことを知って言うに言えずに、言葉に詰まっている。

木村くん？と麻冬が催促しても木村は言葉を出さない。

そしてそうこうしているうちに、昼休み終了の予鈴か鳴り2人は教室へと戻っていく。

廊下とは言え一応隅のほうで話していたため、おそらく誰にも気づかれなかった。

あんなことを誰かに聞かれたらどんな噂が立つか分かったものじゃない。

麻冬が教室に戻ると当たり前だがもう秋人も戻ってきていた。

麻冬は木村が言った言葉を思い出しながら、秋人をじっと眺めた。

next

第８１話【もう逃げない】

春樹がトイレに行ったあとすぐ秋人は職員室へ向かった。

「失礼しまーす」

秋人が職員室に入るといろんな教師が声をかけてきた。

「おぉ月影。昨日はいつからいたんだ？」

まずは担任だ。

「昼前っす。プチ不登校の俺を春樹が迎えに来たんで」
「そうか。なんだ、風邪か？」
「なんすかね。まぁ…風邪っすかね？」

こんな会話をしていると、顧問が近寄ってきた。

顧問は昨日の部活には来なかったから秋人が昨日学校にいたことは知らない。

「月影ー。お前何してんだ」

「すんません」
「部長なんだからしっかりしろよ。今週は県大会なんだから」
「うっす」
「ったく…。なんでみんなお前が良いのかね」

ため息をつきながらそう言う顧問に秋人は、は?と声を上げる。

顧問は眠そうな顔をしながら淡々と言う。

「月影を部長からおろせって言ったら阿笠がな、お前以外には従わないし自分が月影の上になることもないって言ったんだよ」
「阿笠が?」
「みんなも同意したよ。相当慕われてんだな。月影」

顧問はポンッと肩に手を置いて、今日は部活出ろよと行っていなくなった。

秋人は小さな声で
「昨日も出たっつーの…」と呟く。

再び担任と会話していると、秋人の教科担任たちがゾロゾロとまた話しかけに来る。

まぁ仕方ない。
来週はテストなのだ。

成績トップの秋人に教師たちが期待するのはごくごく当たり前のこと。

もう言うまでもないが秋人にとっては問題を間違えるほうが大変なくらいだ。

本来なら全教科満点は普通に取れるのに、ＩＱが高いことがバレないためにワザと間違えてる始末。

適当に教師たちの言葉を受け流し、担任とも別れてから秋人は足早にハンナのもとへ向かう。

ハンナは授業で使ったらしきプリントを見ている。

「ハンナ」

秋人が話しかけると、ハンナは驚いたように振り向いた。

「あら、アキト」

秋人から話しかけることなんて皆無だから珍しいと思ったんだろう。

ハンナはプリントを机の上に置いて椅子をキィと回す。

「どうしたのよ」

秋人が職員室に来た理由は担任や顧問たちとお喋りするためではない。

ハンナのもとへ行きたかったのみ。

「今週の試合見に来てよ」

「え？」

「県大会。たぶん優勝するから」

ハンナはまさか秋人が自らそんなこと言うなんて思ってなかったようで、唖然としている。

ハンナもハンナでもう秋人には関わらないであげようと思っていたところなのだ。

秋人が日本でしている新たな生活の邪魔はしないでおこうと決めた

らしい。

それでもやっぱりいるだけで秋人には辛い思いをさせる。

秋人自身も、そんな自分に打ち勝つためにあえてハンナにこう言ってるのだ。

「今は日本に来れたことに心底感謝してる」

するとそのとき、他の教師が余分にコーヒー入れたからと秋人に渡してきた。

それ飲んで5限は寝るなよ、なんて笑いながら。

秋人も遠慮せずコーヒーを口にする。

「…ハンナ。エリートになるより大事なもんあったよ」

「…何？」

「俺サッカーに生きる。誰が何と言おうと一生サッカーと共に行こうって決めた」

秋人には確かに過酷な日々だったかもしれない。

けれど今ある日常は、その過酷な日々を過ごしたからこそ得たもの

なのだ。

「それを見てて欲しい」

秋人はズズーッとカップに残っていたコーヒーを飲みほし、ハンナの机の上に置く。

そして、今日の授業は参加するよと付け足した。

珍しくＡＬＴの授業に出るというのだ。

もう欠席しなきゃならない理由もないわけだし、当たり前といえば当たり前だ。

ありのままの、充実した高校生活を送ってることを示すためにはむしろ出たほうが良い。

そう考えたのだろう。

「じゃ」

秋人はそれだけ言って向きを変えて職員室の出入口のほうへと歩いて行く。

結局昼休みが終わるまでまたいろんな教師に捕まってお喋りさせられていたが。

ハンナは秋人の申し出に言い返すことなく、秋人が置いていったカップを見つめながら物思いにふけっていた。

秋人は前へ進もうとしている。

けれどハンナは秋人を嘲笑ったあの頃とちっとも変わっていない。

その事実がハンナの心に突き付けられたのだ。

5年半ぶりに再会した2人

見た目だけ変わって中身はそのままだった。

子供だった秋人が少し成長して背も高くなり、容姿も凛々しくなった。

大学1年だったハンナは社会人になって少し大人っぽくなった。

けど見た目だけが変わったって…

「秋人、なんで授業の支度してんだ？」

昼休みが終わりそのまま秋人は教室へ戻った。

今までならそのまま教室戻らずにどこかへ行くだろうのに、ハンナとの約束守るために教室にちゃんと行ったのだ。

前の席の男子が驚いた顔をしながら秋人にそう言った。

「うん、出るから」

「はっ、出るって授業？」

「おう」

まじかよ?!とその男子は叫んだ。

その声にクラスの人が振り向いたが、すぐにまた顔を戻した。

春樹を覗いて。

春樹は秋人がＡＬＴの授業には出ないことを知ってる。

だから春樹も少し驚いた顔をしながら秋人を見ていた。

春樹の視線に秋人も気づいて、秋人も春樹を見つめた。

秋人は一呼吸置いてから少し離れた席にいる春樹に向かって言った。

「お前が言ったんだろ」

「え?」

「俺、もう逃げねぇよ」

秋人は軽く笑う。

春樹はそれでもまだ信じられないという表情をしているが、秋人が頑張ろうとしているその姿を見て、秋人が本気なんだと知る。

そのうち鐘が鳴りハンナが入ってきた。

ハンナは一番に秋人を探して見つけ、春樹と同じような表情をしてみせた。

秋人はすでに耳にヘッドフォンをつけてウトウトしているが、それでも秋人がこの授業に出るのは…そう、まるで奇跡。

出席を取るためハンナが1人1人名前を呼ぶ。

初めて秋人の名前を呼んで返事が返ってきた。

寝ていようが音楽を聞いていようが、授業に出席していること自体が感動ものである。

授業に出るなんて普通なら当たり前のことなのだが。

そうして授業は進められる。

基本的にＡＬＴの授業に出ない秋人は授業で何をするのか全く分かっちゃいない。

出ても今のようにヘッドフォンをつけて寝ている。

けどそんな秋人にハンナが近寄って話しかけた。

「アキト、ヘッドフォン取りなさい」

「何だよハンナ」

ハンナがヘッドフォンを秋人の耳から外す。

「私の課題やってないのアキトだけよ」

「課題？そりゃそうだろ。俺初めてこれ出たんだから」

一応講師という立場のハンナに敬語すら使わずズケズケと言う。

怖いもの知らずというか、ただのバカというか…

「はい」

ハンナは秋人にプリントを渡す。

内容は将来の夢とその理由を英作文するといったもの。

「やれって？」

「ついでに発表したら？」

秋人はめんどくさそうな顔をしながらも立ち上がって、英作文を作る前にもう英語で言い始めた。

「…Ｉ　ｗａｎｎａ　ｔｏ　ｂｅｃｏｍｅ　ｐｒｏ　ｏｆ　ｓｏｃｃｅｒ．　Ｂｅｃａｕｓｅ…」

秋人はペラペラと英語を話し出す。

もうアメリカに住んでたという事実はバレているから英語が喋れるくらいは全然問題ない。

日本人みたく文法にとらわれない本場の英語に生徒たちには何を言ってるか理解できずにいるが、ハンナと春樹や夏実や麻冬は耳を澄まして聞いている。

秋人の英作文が終わると、ハンナは秋人に
「あなたの覚悟、見せてもらうわ」と英語で言う。

秋人はただ頷くだけして、席に座った。

他の人も何人か当てられた。

みんなしどろもどろの英作文にドギマギしたり笑いを誘ったりしているが、４人だけは肘を机に立てたりしながら真剣な瞳で黒板のほうを見つめる。

秋人の言葉を考えているのだ。

プロサッカー選手になろうと思う。

サッカーは俺に生きる希望を与えてくれた。

サッカーの道教えてくれたのは佐々先輩で、先々代のキャプテンだ。

彼は訳あってもうサッカーはしてないけど、彼が俺にサッカーの楽しさ教えて良かったって思ってもらえるようになりたい。

だからあのまま向こうで過ごさずに日本に来て良かった。

結局ただの結果オーライだけど、それでもここでは向こうでは見つからなかったたくさんの大切なもの見つけれた。

ああ…話ズレたな。

まぁとりあえず

いつかプロになったときハンナ含めた大学の同期生たちに向かって
言ってやるよ。

嫌味でも皮肉でもなく

ただ純粋に

ありがとう、って。

next

第８２話【優勝―和解―】

金曜が終わり土曜を経て、ついに日曜日を迎えた。

今日は秋人と夏実の県大会である。

もう優勝を決めた春樹と麻冬に続いてほしいものだ。

春樹と麻冬は２人の応援に行きたかったが、半日練習があるし来週の中間から定期試験が始まるからその勉強もしなければならない。

２人が勝つことを信じて、春樹たちは自分のことをする。

バレー部は予選を優勝してきたためトーナメントでもかなり有利な位置にいる。

準決勝、決勝くらいにならないと相手との差はかなりある。

一方サッカー部はコンソレーションからの勝ち上がりだから一番不利な位置にいる。

初戦から数ある優勝候補の１つとやらなければならない。

最も一番の優勝候補はこの星陵サッカー部なのだが。

午前を終えた時点で両者とも順調に勝ち上がってきている。

県内では敵なしなのだから当然といえば当然だ。

それでもこれは春の大会での位置づけに関わる大会だからどこの学校も気合いが入っている。

特にサッカー部なんかは他の部よりも期待されている。

佑亮の穴を埋めるために彗星のごとく現れた木村と里田。

2人合わせてもまだ佑亮の実力には及ばないが、それでも並みの実力ではない。

夏に行われた静岡代表チーム対全国選抜チームの試合では静岡代表チームに秋人と阿笠はもちろんのこと、その2人も選ばれた。

ちなみに試合はもちろん静岡代表チームの勝ち。

それもそのはず。

全国選抜の要である秋人や阿笠が静岡に入ってしまっているのだから。

惜しくも木村と里田は選抜には選ばれなかった。

だが今後が期待できる良い選手たちだ。

「月影をマークしろ！！」

相手方のキャプテンの支持で秋人に敵が集まる。

それでもすんなり交わしていく華麗なドリブルを見せる秋人。

キャプテンが足から突っ込んできたかと思えば、秋人はボールを軽く上に蹴ってジャンプしてそれすらも交わす。

「阿笠！」

秋人からのセンタリングで、待ってましたと言わんばかりに阿笠がシュートを決めた。

「ナイッシュ！」
「ナイスパス！」

2人はパンッと互いの手を叩く。

全国選抜で要になる2人のコンビを止められるのは、日本にいるかいないか分からないほど。

サッカー王国静岡にだってまずいないだろう。

「くそっ…誰だよ！月影が試合出てないなんて言ったのは！」

相手のＤＦが悔しそうに言う。

他のＤＦたちも便乗した。

「月影がいたら絶対阿笠なんて止めらんねぇっつの」
「ばか！止めらんねぇじゃなくて止めんだよ！！」
「できるか！天才阿笠だぞ！」

秋人が不調という噂は県内中に広まっていたようだ。

油断したのが運の尽き、圧倒的な点差で星陵が勝った。

その後も勝ち、迎えた決勝も何の苦もなく前半を2‐0という点差で勝っている。

秋人はドリンクを飲み汗を拭きながら観客席を見渡している。

「どうした?」

阿笠が不思議そうに尋ねると、秋人は
「あ、いや…」と曖昧な返事をしながらもなお誰かを探している。
誰かなんて、聞かなくても分かる。

ハンナだ。

「来てねぇのか…?」

結局ハンナを見つけられないまま後半戦が始まるホイッスルが響く。
レギュラー陣は円陣を組んで例の掛け声を出す。

「行くぞ、優勝だ」

阿笠が秋人の背中を叩く。

秋人は自分の両頬をパンッと叩き、

「おう」と返事をしてグランドへ入っていく。

秋人は、ハンナは絶対来てると自分に言い聞かせる。

約束したから。

この前の県予選でなぜ優勝できなかったか。

それは秋人が試合に出なかったからという理由ではない。

秋人がいないという不安に押されてみんなが実力の半分も出せずにいたからだ。

それでも阿笠などは冷静に点を取っていくけど、秋人の代わりに入った選手はプレッシャーの重圧に押し負けて思うようにプレーできていなくＦＷ陣との連携が取れなかった。

ＤＦ陣も頼れる秋人がいないからか弱気になって相手を抑えられなかった。

阿笠がいくら頑張って点を取ろうとしても、それ以上に点を取られたら意味がない。

麻冬の言う通り、負けた原因は秋人を支えきれなかったチームメートたち。

それが痛いほど分かった彼らは、今日は先週とはうってかわってものすごい士気。

そんな彼らを止められるはずもなく、後半も残り１分を残して４－０まで点を重ねた。

その頃ハンナは、約束通りちゃんと会場に来ていた。

観客たちに混じってこっそり秋人を見ている。

４点中２点は阿笠が取り、１点は他のＦＷが取り、そしてもう１点は秋人が取ったものだ。

サッカーのルールなんてほとんど知らないハンナにも、秋人があの

中で目立って上手いことは十分分かる。

日本でサッカーの道見つけたと言った秋人。

それがどれくらいの覚悟のものなのかをハンナはその目で確かめようとしている。

ハンナの脳裏にはまだ幼い可愛らしい１０歳ほどの秋人の記憶しかない。

「あと1分…か」

タイムボードを見ながらハンナは呟いた。

周りに嫌味を言われても悔しそうな顔をして泣くこともなかった秋人。

悔しくないわけない。

悲しくないわけない。

辛くないわけない。

それでも自分の決めたことだからと我慢していた。
周りはそんな態度を生意気だと罵った。

「アキト…」

試合では、秋人と阿笠が同時に走り出す。
マークしようと相手選手が必死に2人を追いかける。
他のＭＦが持っていたボールが阿笠に渡され、阿笠はマークをよけながらドリブルをして秋人にパスをする。
秋人もまたドリブルをしながら走り、阿笠にパスを出す。
2人のパスの出しあいに付いていけず、相手選手はかなり翻弄されている。
ゴール近くにきてボールを持ってる阿笠に他の相手選手もディフェンスについてきた。
交わすに交わせず、阿笠は高くボールを蹴りあげる。

「秋人！」

相手選手2人と秋人が同時にジャンプをした。

が、秋人のほうが数段高く秋人はオーバーヘッドでゴールを決めた。

その数秒後、試合終了のホイッスルが鳴る。

「部長ー！！」
「秋人っ！！」

その瞬間チームメートたちが一斉に秋人のもとへ集まった。

「優勝だーー！！」

阿笠が前方から秋人に飛び乗ってきた。

秋人は笑ってそれを受け止める。

よく野球の投手と捕手が勝ちが決まった瞬間にやる光景だ。

飛び乗るというかしがみつくというか。

「よーし、今日は一杯会だ！」

阿笠は秋人に抱きついたままガッツポーズをしながらそう叫んだ。

「てめっ！最後のセンタリングミスったくせにっ」

「あは、バレた？」

そうは言うものの、とても楽しそうで秋人の顔はキラキラと輝いている。

それは秋人だけではないが、ハンナには秋人の顔しか見えていない。

結果的に秋人は2点決めた。

まぁその事実よりも秋人が生き生きとプレーしていたことにハンナは心打たれている。

そんな笑顔は1年間一緒にいても見ることはなかった。

仏頂面で少年らしい生気すら感じなかった子どもが、こんなに楽しそうに笑っている。

サッカーが秋人に与えたものは計り知れない。

「…ありがとう、か」

ハンナは一昨日秋人が英作文で言った言葉を思い出しながら呟いた。

皮肉でもなく嫌味でもなく、ありがとうと言いたいと言った秋人。

「成長したのね。…イエローボーイ」

ハンナは秋人を愛しそうに見ながら軽く笑う。

そのとき秋人がふと上を見上げて、ハンナと目があった。

秋人は
「あ！」と声を出しているようだがハンナにはその声は届いていない。

2人は数秒見つめあう。

秋人は十分にその覚悟というものをハンナに見せた。

今度はハンナの番だ。

周りがキャアキャアはしゃいでいる中、2人はお互い以外の周りは白黒の世界となっていて音すら聞こえていない。

未だ抱きついてる阿笠すら目に入っていない。

じっと見つめている秋人に、ハンナはゆっくりとお辞儀をした。

「ハンナ…」

秋人は信じられないという顔をするが、顔を上げたハンナが笑顔だったから、秋人の思いが伝わったのだと確信した。

笑顔のハンナに、秋人も精一杯笑い返した。

そうしてハンナは手を振って観客席からいなくなった。

秋人もまたはしゃいでる部員たちにまた混ざり、優勝祝いをする。

もう逃げない。

その言葉を実現させた。

きっともう大丈夫。

next

第８３話【打ち上げ】

「秋人、鳴ってるよ携帯」

試合後、本当に一杯会が行われた。

一杯会と言っても大会のあとジャージを着たまま居酒屋に直行したから酒類はなし。

ジャージの背にＳＥＲＹＯの文字が刻まれているからだ。

「んー。あ、本当だ」

みんな食って飲んで歌って物真似してテンションが上がっている中、やっぱり秋人は依然としていつものテンション。

秋人が携帯を開くと夏実からのメールだった。

「あ。バレー部も優勝って」

秋人がそう言うと、なぜだか部員たちは一層盛り上がる。

雄叫びにビクッとした秋人に部員たちは駆け寄る。

「４人とも優勝じゃないですか！部長」
「さすがっすよね！」

４人とは、秋人含めた仲良し４人組のことか。

秋人と同時に阿笠にも視線が向けられた。

「つか副部長羨ましいっすー」
「本当本当。あんな綺麗でしかも水泳もすごい人が彼女なんて！」

阿笠はそう？と笑って流す。

「阿笠と雪原さんが並ぶとまじ美男美女だよなぁ」

同級生の部員が言う。

それに続いてまたも同級生部員が言った。

「でもまさか阿笠とはな」

その妙な言い回しに阿笠は、何？と聞き返した。

その男子は悪びれた素振りも見せずにケラケラ笑いながら言う。

「やー、付き合うなら普通にあっきーと思うしょ。いつも一緒に帰るし仲良いし」

そう言った瞬間、一気にその場がシーンとなった。

その部員は

「え、何？どうかした？」なんて言ってまるで空気が読めていない。

誰かがその部員に何か耳元で囁くと、彼はヤバいといった顔をしながら口を押さえた。

沈黙が続く空間。

どうやらみんなそのことに関しては突っ込まないようにしているらしい。

はたから見れば阿笠が秋人から麻冬を取ったようなもの。

それでも秋人と阿笠の仲は壊れていないから暗黙の了解で誰も口にしないようにしていた。

鈍いその男子以外の部員は。

「あ…っと……」

阿笠も何て言えば良いのか戸惑っている。

秋人も秋人で、麻冬に片思いしてると思い込んでるのだからその言葉に軽くショックを受けているようだ。

他の同級生部員がその男子に

「バカ！」と小声で言いながら頭を軽く小突く。

ごめん～、とその男子は手を合わせながら小声で言う。

特に木村は一昨日麻冬とその話題をしたせいか、やけに緊張している。

秋人と麻冬が恋仲だと思っていたのは少なくとも木村だけではないようだ。

まぁ2人はもともと仲良しメンバーだし、同じ外部活だから一緒に帰ってるだけだと思ってる人もいるけれど。

そのときちょうどまた秋人の携帯が鳴る。

麻冬からの着信だった。

秋人はこの雰囲気の中どうしようか迷っているが、とりあえず電話に出た。

「おう、何？」

『今夏実と祝賀会どこでやるか話してたんだけど、秋人どこが良い？』

「あ、あー……」

秋人はとりあえず席を離れ、居酒屋の外に出る。

麻冬は電話越しに人の声が聞こえるのに気づき、出かけてるの？と尋ねた。

秋人は素直に

「優勝したからサッカー部で一杯会やってんだ」と答える。

『へぇ、そう。あ、ならあとで阿笠に代わってもらえる？』

「えっ」

『ちょうど良かったわ。阿笠にもかけようとしてたのよー』

麻冬はラッキーと言わんばかりに楽しそうに言う。

阿笠の名前が出て動揺が隠せずにいる秋人は、とりあえず分かったと返事をした。

そして2人は本題に入る。

本当なら今日の夜祝賀会をやるところだけど秋人が一杯会してるためそれはできない。

だから今度の日曜の夜に優勝の祝賀会とテスト明け祝賀会を兼ねてやることになる。

いつも亀八でやるから今回は違うところを予約するという話にまで発展する。

その話題のあと、2人は少し世間話などをして盛り上がる。

20分くらい話したあと、秋人が

「じゃあ阿笠に代わるよ」と言いながら再び居酒屋に入り、部員たちがいる座席のほうまでノコノコ行く。

みんな沈黙が解けて当初よりは盛り上がりに欠けるけど、それでも話に花を咲かせている。

「阿笠」

他の部員と話している阿笠に呼び掛けて振り向くと、秋人は少しだけ気まずそうに言う。

「麻冬。…代われって」

「え…あ、麻冬ね。うん」

阿笠も微妙な面持ちで携帯を受け取り、秋人と同様席を立ってどこかへ行く。

他のみんなは麻冬の名前を聞いて見ぬふりをしている。

それでもまださっきみたく沈黙になるよりはマシだ。

「あっきー、歌うー？」

マイクを持った部員が楽しそうに秋人に振る。

「え～、パス」

「まったまたぁ。これ点数出っからみんなで競争しようぜ」

1人がそう言うと、秋人と阿笠を除いた2年部員全員が賛成と盛り上がる。

逃げるに逃げれなくなり、結局秋人も参加するはめになってしまった。

それでも適当にさっさと歌って終わらそうとした秋人に、誰かが言った。

「ビリは罰ゲームで腹躍りー」

「なら1位は？」

「あ、じゃあ1位は好きな奴から欲しいもん1こもらうってのは？」

「例えば？」

「例えばー、林からゲームソフトとか！」

そう言った瞬間、うおーー！！と2年部員が雄叫びを上げる。

秋人も例外ではなく、まじかよというように少し嬉しそうな顔をしている。

「てなわけであっきー。本気バトルだぜ！」

「ったりめーだ」

どういう順番で歌うか迷ったあと、1年からのリクエスト順ということになった。

秋人はトリにしようということになり、それ以外の部員から歌っていく。

みんな腹躍りなんてしたくないし、しかも誰かに自分のものを取られたくないから必死だ。

大真面目に歌う光景を見てみんな笑いが絶えない。

十八番の歌を熱唱する部員もいれば、アニメ曲をアニメ声で歌う部員もいる。

２年部員は全部で１０人いて、阿笠と秋人を除く８人が歌い終わった時点で今のところの１位は８９点で中野だ。

ちなみにビリは言い出しっぺの村松で６１点。

おそらくビリになることはないだろうけど、優勝しなきゃ意味がないから秋人も選曲には慎重だ。

秋人にマイクが渡り、秋人が歌う番となる。

秋人が立ち上がると部員たちがまばらに拍手をする。

「おーミスチル！」

画面に絵が出て前奏が流れると誰かが楽しそうに言った。

「いーね、あっきー。優勝狙ってんじゃん」
「うるせっ」

秋人はカラオケなんて滅多に行かない。

歌自体は上手いのだが、もともとテンション低い人間だからテンション上げ上げになる場所は好かないらしい。

春樹たちに無理やり誘われて行かされるとき以外はほぼ行かない。

秋人が我すら忘れて熱唱しているのを部員たちが聞き入っている。

サビに入れば誰かが手拍子を始めるし、中間演奏だけのところでは冷やかしもしたりしている。

数分して歌い終わり得点が出るのを待っている。

みんなが画面に注目した。

結果は

「部長すげー！」
「９５ぉ～～？！」

中野を押さえて堂々の１位。
しかも９０点代を出したのは秋人ただ１人だ。

「うっしゃ。俺優勝」

秋人もちょっとだけ笑いながら嬉しそうに言う。
腹躍り決定の村松が秋人に
「で、商品は？」と尋ねる。

そうだなー…なんて悩む秋人にみんなが視線を集めている。
みんな期待と不安に苛まれているのだ。

少ししてから秋人は、あ。と思い出したように言う。

「んじゃあ阿笠の部屋にあった――――……あ？」

秋人は途中で言うのをやめる。

部員たちも阿笠の名前が出てハッとしている。

「あー！阿笠！」
「あいつ歌ってねぇ！」

秋人の優勝かと思えたけど、まだ阿笠が歌っていない。

2年部員全員だから阿笠も含めなきゃ仕方ないのだが、秋人はかなり嫌そうな顔をしている。

なんせ阿笠は歌がプロ級に上手いのだ。

とりあえず阿笠が戻ってくるのを待つことにした。

待ち始めてから数分もしないうちにようやく座席に戻ってきた。

「阿笠、はい」
「？なに、マイク？」

秋人が阿笠にマイクを渡すと、阿笠は不思議そうな顔をする。

部員が
「2年メンツで歌ってんだ。だから阿笠も」と言う。

阿笠が歌上手いこと知ってる2年部員は競争のことは言おうとしない。

秋人が優勝してくれれば秋人は阿笠のものを取るつもりだから自分に被害が及ばないと思っているのだろう。

だが阿笠のことを知らない1年部員が言ってしまった。

「副部長ー、本気で歌うんすよ」
「なんで？」
「賭けしてんすよ。優勝とビリには賞品ありっす」

ふーん、と聞き流しながら阿笠は選曲している。

余計なことを言ってしまった1年に2年部員がものすごい形相で睨んでいる。

訳が分からない彼は頭にクエスチョンマークを浮かべている。

阿笠が入れたのはＥＸＩＬＥの曲だ。

本気で歌えと言われたからちゃんと本気で歌うらしい。

2年部員はもう分かりきっていることだが、阿笠が歌い始めると1年部員たちが感嘆の声を上げる。

当然ながら秋人を上回る歌の上手さだ。

秋人は無理やり誘ってようやく行くタチだが阿笠は普通に誘えば行く派だ。

最も自分からは行こうとはしないけど。

とりあえず2年部員はみんな阿笠が自分から何か物を取らないようにと手を組みながら必死に祈っている。

はたから見れば奇妙だし笑える光景だが、彼らは本気。

歌い終わった阿笠がふと2年部員のそんな姿を見て、何してるの？と聞くと1人が

「1年に聞け、1年にっ」と言う。

不思議に思いながら言われた通り1年に聞いてみると、1年部員たちは楽しそうに説明した。

そのうち結果が出て、画面に点数が表れた。

「お、９８点」

阿笠が嬉しそうに言っているのを無視するかのように１年部員は歓喜の声を上げ、２年部員はがっくりと肩を落として嘆いている。

「誰が何点？」

阿笠がそう尋ねると、中野が答えた。

「村松がビリであっきーが９５点でトップ…だったんだよ」
「えっ、じゃあ」
「阿笠の優勝だ」

中野がそう言うと、優勝者が決まった喜びなのか２年部員までも拍手をした。

まぁ所詮はゲームのわけなのだから。

２年部員が、賞品どうする？とワクワクビクビクしながら聞くと、さっきの秋人同様しばらく考え始めた。

1、2分くらいして阿笠が思いついたように言った。

「あっ、じゃあ秋人の部屋にあったポスター！」
「……あっ?!待て待て待て。お前あれが何か…」
「超レアなんだよねぇ」

阿笠は嬉しそうに言う。

2年部員はみんな自分でなくて良かったとかなりホッとしているが、そんな中秋人はかなり焦っている。

朝早くから並んでようやく手に入れたサッカー選手のレアポスターのようだ。

阿笠もそのことは十分知っている。

「まじかよーー！！」

ゲーム上ルールは絶対だから、秋人はかなりショックを受けてる。

限定ものでそんなに出回っていないし、しかもその日はそのために朝練すらズル休みしたくらいなのだ。

もちろん無断欠席するわけにもいかないから阿笠にだけ本当のこと言って誤魔化してもらったほど。

「お前っ…あれどんだけ苦労したことかっ」

秋人はなんとか食い止めようとするけど、解放された2年部員が秋人に責め寄る。

「だーめだめ。ルールルール」
「運が悪かったってことで諦めろー」

秋人も秋人で
「あっ、お前ら自分じゃなかったからって！」と文句を言うが結局その超レアなポスターとやらを阿笠に上げるはめになった。

仕方ないといえば仕方ないが、少し可哀想だ。

その後20分くらい飲み食いして解散したあと、阿笠が秋人の家に寄ってポスターをもらうことになった。

なにはともわれ、優勝ということでおめでたい限りだ。

next

第８４話【秋人賛賞、春樹珍賞】

翌日の朝、朝練を終えたサッカー部たちが教室へ戻ると生徒たちはサッカーの話でもちきりだ。

秋人が教室に入るなりクラスメートたちが秋人に視線を集めた。

「…ん？何？」

疲れたのかガーガー寝ている春樹と音量ガンガンにしてイヤホンつけて音楽を聞きながら机にうつぶせになっている夏実。

麻冬はまだ来ていない。

クラスメートたちは春樹たちが秋人に詰め寄らないからか秋人に近づくのをためらっている様子だ。

妙に思いながらも秋人は気にせず席に着く。

秋人が来たことに気づいた夏実が耳からイヤホンを外し、秋人にあいさつをした。

「ね、見て」

夏実は春樹のほうを指差した。

秋人がそっちの方向を見ると、寝ている春樹の服がなんと制服であることに気づく。

「制服着てるー。珍しくない？今日なんかあったっけ」

秋人はこの前春樹がした約束を思い出す。

本当に夏実に言うつもりなのだろうか。

「ああ。じゃあ今日楽しみにしといたら」

「ん？」

「明日俺楽しみにしてるわ」

全く意味の分からない秋人の言葉に翻弄される夏実だが、そんな会話をしている2人のもとにクラスメートたちがワラワラと集まってきた。

「何？さっきから」

どうにもソワソワしてるみんなの行動が勘に触るらしく、秋人は眉をピクッと動かす。

すると1人が
「新聞見たぜ」と言った。

「新聞？へぇ」
「あれ、もしや見てない？」
「朝読んでる暇ねぇしな」

新聞がどうした？と隣の夏実も尋ねる。

どうやら夏実も新聞は読んでいないようだ。

それもそのはず。

朝練がある彼らは朝支度に忙しくてそんな暇はない。

それは春樹や麻冬も同じで、おそらく2人も新聞なんか読んでいないだろう。

見てないと言った秋人と夏実に1人が新聞をバッと広げて見せた。

最初は興味なさげだった秋人も、新聞を見た瞬間目を丸くした。

「……うーわ、やられた」

驚いたかと思いきや、ため息をつきながら、またかという顔をしている。

「やーったじゃん！１面トップ！」

夏実は楽しそうにキャハハと笑いながら言う。

スポーツ新聞のトップ面には阿笠が秋人に乗っかって抱きついているときの写真がデカデカと載っている。

星陵全員を載せれば良いものを、２人メインに撮っているところが何とも言えない。

写真の横の見出しには

「抱き合う月影くん阿笠くん。感動Ｖ……ってか」

県内新聞だから特に問題はないのだが、秋人の顔が堂々と出ているのが気になるらしい。

阿笠は抱きついてるから顔は見えないが、見出しに書かれてしまってるから普通にバレバレである。

秋人はようやくクラスメートたちの様子が少しおかしかったことに納得している。

「すげぇな、あっきー」
「優勝おめでと」

クラスメートたちがしきりに秋人にそう言う。

新聞には写真だけでなく試合結果やら県予選のときのことやらも説明書きが載っている。

もちろん夏実たち女子バレー部の優勝も書かれているが、サッカー部のような写真が載っているわけではない。

夏実の顔写真程度が載っているくらいだ。

麻冬のときは集合写真で春樹はスマッシュを打っている写真が載っていたが、どちらも夏実の写真と同じくらいの大きさ。

秋人はもはやレベルが違いすぎる。

隣のクラスでは阿笠もクラスメートから新聞を見せられ、秋人と同じようなリアクションを見せている。

慣れてるとはいえ、何も抱き合ってるところじゃなくても良いのに…と。

他のサッカー部員たちはサッカー部員で、こんなにも大きい写真なのにほとんど秋人と阿笠しか写ってないことに少しがっかりしている。

載っても載らなくても肩を落としてるとは面白い。

「おはよーん。何の騒ぎ？」

秋人の席のところがワイワイにぎわっていると、朝練を終えて教室に入ってきた麻冬が話しかけてきた。

クラスメートたちが麻冬に新聞を見せ、なぜだか彼らのほうが興奮している。

麻冬は写真を見るなり夏実と同様楽しそうに笑う。

「やあだ。秋人やられちゃったわね～」
「本当だよ。ったく」

麻冬は説明書きのほうに目をやり、内容を読んでいる。

県予選ではキャプテン月影くんの不調によりチームメートたちも不安を抱いたのかミスを連発し、優勝には全く手が届かずにいた――――…のくだりを見て、木村との会話を思い出している。

「ねぇ秋人？」
「ん？」
「あ……やっぱり良いや」

秋人は何だよ？と聞くが、麻冬が
「ここじゃあちょっとな…」と回りをチラッと見ながら言う。

それでも気になる秋人は、
「何、気になるじゃん」と催促をする。

けどやはりみんなの前では言いづらいのか、麻冬は手を振りながら微笑して言った。

「また今度にする」

そうして麻冬は自分の席へと戻ろうとする。

だが席に着く前に春樹が制服着てるのに気づいてかなり驚いた顔をしている。

その場から秋人や夏実に向かって話しかけた。

「どうしたのよ？これ」

麻冬は春樹を指差す。

もちろん何も知らない夏実は、さあ？と首を傾げる。

秋人は秋人で何も答えずにじっと春樹を見ている。

Ｙシャツを着て更にはネクタイもつけている。

いつも似合わないと豪語していた春樹が突然入学式ぶりに着ているのだ。

上級生の卒業式でさえブレザーと同じ色のセーターを着てきたというのに。

「てか何で爆睡？」

夏実が言う。

秋人じゃあるまいし、朝っぱらから寝るとは。

不可思議な春樹に一同お手上げである。

そのうち担任が入ってきてＨＲが始まり、まず始めに出席を取るのだが春樹は未だに寝たままだ。

順に呼ばれていく。

「櫻井」

春樹の名前も呼ばれるが、寝ている春樹は返事をしない。

隣の人が春樹をゆすって起こそうとするが、本気で寝入っているようだ。

「なんだ、休みか？」

担任がそう言うと、見かねた秋人が言った。

「春樹寝てまーす」

その言葉に担任は春樹の姿を探す。

春樹を見つけると確かに寝ていて、担任はため息をついてから春樹の席まで行く。

そして担任も春樹をゆすって起こそうとする。

「おい櫻井。起きなさい」

何度そう呼びかけてもビクともしない春樹に呆れ、担任は諦めて名簿にとりあえず出席のマークをつけた。

そのとき、春樹が制服を着ていることに気づいて驚いたように言う。

「なんだ、制服着てるじゃないか。櫻井」

その声にクラス中が春樹に視線を集めた。

まるでパンダでも見るかのように珍しがっている。

「何の心境の変化だ？」

担任はなぜか秋人に返答を求めた。

秋人はクスッと笑って、お望み通り答える。

「今日だけっす」

「今日だけ？」

「起きたら褒めてやってくださいよ。それ着るのかなり勇気いるらしいですから」

秋人は笑ってそう言うが、担任やクラスメートたちには意味が分かっていない。

そもそも制服を着ることに勇気が必要な時点でおかしいだろう。

とりあえず担任はそこには突っ込まずに、そういえば…と話を転換した。

「先生も新聞見たぞ。やったな、１面トップ」

ワハハと教師は笑う。

秋人は呆れたように笑い、
「どうも。それよか出席の続きやってください」と言う。

おお、そうだったな、なんて言いながら担任は教壇に戻り、出席確認の続きを始める。

夏実は耳元でコソッと
「春樹が変な理由知ってんの？」と尋ねた。

秋人は
「いんや」とシラを切っているが、話の流れから普通に知っているはずと夏実も麻冬も思っている。

ＨＲが終わり１限が始まっても春樹は起きず、担当教諭は担当と全く同じ行動を繰り返した。

春樹をゆすっては諦め、制服を着ているのに気づいては秋人に振るのだ。

秋人も同じようなことを言わなきゃならなくて少し苦笑している。

春樹が制服を着るということは、そういうことなのだ。

結局春樹は2限が始まる前に秋人が無理やり起こして、ようやく目覚めた。

next

第85話【複雑な心境】

「あっかさー」

ようやく起きたかと思えば、春樹は阿笠のクラスへと遊びに向かう。

ドアをガラッと開けたものだからみんながその方に振り向き、春樹が制服を着てるのを見てザワッとなる。

まだ前の授業の担当教諭が片付けをしていて、教師すらびっくりしている。

春樹は気にせずズカズカと教室に入っていく。

「さ、櫻井…」

「ん？」

教師に話しかけられて振り向くと、教師は制服を指差しながら言った。

「お前制服…」

「あ、これ？偉いしょ。でも今日だけね」

「はっ？」

「だぁから～」

春樹が続けようとすると、後ろから春樹の名前を呼びながら女子たちが迫ってきた。

「やーん、超可愛い～」
「春樹くんコスプレー？」
「写メ撮らしてっ」

猛烈な女子たちのアタックに春樹も一歩引いてる。

男子たちは春樹に話しかけようにも女子たちに圧倒されて近づけずにいる。

教師も身の危険を感じたのかさっさと教室から出ていくほどだ。

さっきのクラスは起きてすぐ出てきたからそんな反応はなかったし、しかも他の3人を前になかなかそんなことはやりづらい。

春樹は抱えきれないほどのお菓子を渡され、手にいっぱいだ。

「ちょ…阿笠～っ」

春樹は女子の渦から出ようとするがなかなか抜けられない。

阿笠に会いに来ただけだから予想外の出来事に春樹も困惑しているようだ。

「ちょっと通してー」

そんな中女子の集団を割って入ってくる人がいる。

「大丈夫？櫻井」

阿笠だ。

他の男子でさえビビって近づいてこないというのに、阿笠は何てこともないふうに平然と入ってきた。

「阿笠」

春樹は阿笠と対面してかなりホッとしている。

そして阿笠は春樹の手を引き、教室から出ていく。

女子たちが追いかけようとしたが、阿笠がさも迷惑だと言うかのよ

うにピシャッとドアを閉めたものだからシーンとなる。

「阿笠怒らすなよー」

周りで見ていた男子たちが女子にそう文句を言うと、女子たちも負けじと反論する。

「なによ。だってしょうがないじゃない」

男女でいがみ合いをするが、そのうち無意味なことに気づいてもう誰も何も言わなくなった。

廊下に連れ出された春樹は、阿笠にありがとうとお礼を言う。

廊下でもやはり道行く人がみんな春樹を見ている。

阿笠もチラッとそんな周りの光景を目にして、春樹に尋ねた。

「心境の変化?あ、今日だけなんだっけ」

「うん、そう」

「今日なんか良いことでもあるの?」

阿笠は微笑みながら言う。

春樹はコクンと頷く。

「だから阿笠に知らせようと思って」

「え？」

「俺、秋人と約束したんだ。秋人は約束守ってくれた。だから俺も覚悟決めた」

阿笠は、覚悟？と首を少し傾げながら聞き返す。

春樹は自分が着ているYシャツを見下ろして、ネクタイを手で軽く持ち上げた。

そして一呼吸置いて言う。

「夏実に言うよ」

阿笠には一緒なんのことだか理解できなかったが、春樹の言葉とその目付き、そして最近の出来事から夏実に告白するのだと理解した。

阿笠は自分で勧めておきながらあれだが、なんと声をかけたら良い

か分からない様子。

だって、阿笠は全て知っている。

春樹が夏実を振ったこと

夏実が再び告白してきたのにまたも振ったことも。

今更言うのは都合良すぎると思われるかもしれない。

そう考えると、阿笠は素直に応援できずにいる。

「…阿笠」

「良いんだよ。逃げた俺が悪いんだ」

「え…」

「だめで元々。当たって砕けてくる」

春樹は負け惜しみではなく、笑顔で本気で言う。

「いろいろありがと」

春樹はすっと右手を差し出す。

阿笠はその手を見てから春樹の顔を見た。

「阿笠がいなきゃきっと俺弱いままだった。進まなきゃいけないって教えてくれて、嬉しかったんだ」

2人は去年出会った。

仲良くなった。

今年はクラス違うけれど

たくさん話し

笑い

泣き

ケンカもした。

それでもやっぱり支えてくれたのは、君だった。

「…櫻井。俺ももうそろそろ終わりにするかな」
「何を？」
「君ももう知ってるだろ。秋人と麻冬が両思いなことくらい」

阿笠は軽く目を閉じた。

春樹は右手を差し出したまま、そんな阿笠に言う。

「麻冬が秋人を好きだと言ったんならそうすれば良い」
「…え？」
「麻冬は俺に、幸せになるために阿笠を選んだって言ったよ」
「でもそれは…」

それは麻冬が秋人への気持ちが叶うことはないと思っているから、と言おうとしたが春樹はそれを遮った。

「…正直、秋人も阿笠も大事だから2人の応援できない」

春樹は素直な気持ちを述べる。

だがそのあとに付け加えて言った。

「でももし秋人が入ってきても、簡単に麻冬を諦めないで」
「櫻井…」
「それじゃ今の俺と……昔の阿笠と同じ過ちをすることになる」

阿笠の頭の中に中学の頃の記憶が浮かんだ。

麻冬の気持ち考えなしに麻冬を振ったあの頃の自分がいたことに阿笠は気づく。

結局3年も経ってようやく和解できた。

けれど今度もまた和解できるとは限らない。

一生知らないまま終わってしまうかもしれない。

「幸せにできると思ったから麻冬に告ったんでしょ？」

春樹はニッと笑う。

その顔がなんだか阿笠には心強く感じて、阿笠は春樹が差し出している右手をギュッと握った。

「ああ」

そして春樹はもう一度ありがとうと言う。

鐘が鳴るまで少し会話をしてから、2人はそれぞれの教室に戻って行った。

教室に戻った阿笠に数人の男子が駆け寄ってきて興味津々に話しかけてきた。

「阿笠、櫻井何なん?」
「何って?」
「とぼけんなって~。今日何かあんの?」

春樹が制服着てきたことにそこまで興味が持てるとはある意味すごい。

入学式で春樹を見てない人は今日初めて春樹の制服姿を見ることになるのだから仕方ないかもしれないが。

秋人や夏実や麻冬でさえおそらく初めてに違いない。

「ああ……んー、さあ?気が向いたんじゃない?」

阿笠は適当に答えてさっさと席へ着く。

まだ何か聞きたそうだったが教師が教室に入ってきたため仕方なく席へ戻って行く。

阿笠はカバンから教科書やらを出し準備をする。

教師が出席確認をして阿笠の名前を呼び、阿笠が返事をすると定番のように教師は今朝の新聞のことを褒めた。

さんざんクラスメートからも言われ担任や担当教諭からも言われたからいい加減面倒くさくなっている。

「どうも」

適当に愛想笑いしてそう答えると、教師は次の外国遠征はいつだ？と尋ねた。

全国選抜でのことを言っているのだろう。

「あー…っと」

阿笠は少し上を見上げて考えている。

クラスメートのサッカー部に聞こうと振り返るが、選抜には自分っ秋人しか入ってないことにすぐ気づいて視線を元に戻す。

「おいおい、大丈夫かぁ？」
「うーん…秋人に聞いてください」

阿笠は苦笑した。

この担当教諭はサッカーを見るのが好きなようで、よくサッカー部員とサッカーの話をしたりもしている。

その後再び出席確認を取り、授業に入る。

阿笠は新聞に写真が載ったことや遠征のことよりも

さっきの春樹との会話を思い出している。

春樹が決意をした。

阿笠は、春樹が上手くいかないかもしれないと不安でもなく、春樹

が付き合うことになるかもという幸せでもなく

夏実に告白をした春樹を見て秋人も麻冬に告白してしまうかもしれないということに怯えているのだ。

春樹はああ言ったけれど、秋人に…好きな人に告白されて嬉しくない人なんかいない。

阿笠は麻冬が秋人を好きなのを知った上で麻冬に告白した。

奪われないように頑張るとか、そんな単純なものではない事実に気が気ではないようだ。

じきにテストだというのに、阿笠は全く授業を聞いていなかった。

next

第８６話【春樹の夢】

４人は昼休みにラウンジ…は行かずに教室で昼食を食べている。

ラウンジには人が多いからまたじろじろ見られたりあれこれ聞かれたりするから春樹が行きたくないようだ。

春樹もまさかこまで言われるとは思っていなかったみたいで、制服着ていることを今更ながら少し後悔している。

「寝すぎよ、春樹。大丈夫？」

春樹は首を寝違えたようで痛そうに押さえている。

結局一度は起きたものの再び寝て結局午前の授業は全く聞いてなかったのだ。

「んー…。まぁ午後は寝ないよ。たぶん」

「午後さ、５、６限ともテスト前で確か自主勉だろ」

「あれ、そうだっけ？」

「あー、いたたた…」

首を押さえながらご飯を食べている春樹に秋人が言う。

「だからゲーセン行かね？俺良いゲーム見っけたんだよ」

珍しく秋人が自らサボろうとしている。

まぁ自主勉なんて秋人には関係ないし、寝るのにも飽きただけなんだろうけど。

「えっ、まじ？どんなん？」

「なんかバスケのなんだけど…」

秋人がワクワクしながら説明しようとすると、夏実がそれを遮った。

「秋人、そんなんよりヤマはってよ。ヤマ」

「あ、あたしも知りた～い」

夏実の言葉に麻冬も同調したが、秋人は露骨に嫌そうな声を出す。

「ヤマのがどーでも良いって。なぁ、春樹」

春樹に同意を求めると、春樹は最初はちょっとためらいながらも軽く手を上げて
「俺も知りたい…かも」と言った。

春樹は賛成してくれると思っていた秋人は
「え～…」と少しスネている。

人のためにヤマをはっても何の利益もないから秋人が嫌がるのはよく分かる。

だが部活のテスト休みがない3人にとっては秋人が最後の頼みなのだ。

もちろん秋人もテスト休みなぞないが。

「俺がヤマはってお前らは俺に何してくれんの」

秋人は見るからに不機嫌そうだ。

秋人がここまでスネるなんて滅多にない。

春樹の前で泣いたときといい今といい、喜怒哀楽が出てきている。

「まぁまぁ秋人。明日行こうよゲーセン」

春樹は秋人の肩に手を回して秋人をなだめるように言う。

秋人と春樹の部活休みは毎週火曜日だ。

ちなみに夏実が水曜休みで麻冬が木曜休みになっている。

ちなみにテストは水曜と木曜に行われる。

「今度ご飯おごるって～」

「そうそう。なんならバイキングでも行っとく？」

秋人はどうしてもゲーセンに行きたかったらしく、なおもスネているが3人がそういうから渋々了解した。

それにしても春樹もゲーセンは明日にしようなんて、余裕ぶっこきである。

一応明後日からテストだというのに。

まぁ（秋人以外）彼らはスポーツ推薦だから出来なくても文句は言われないが、勉強も出来ないわけではないから自ら情けない点を取るのはプライドが許さないらしく、成績は上位にある。

とりあえず昼休みまで勉強する気はないようで、４人で楽しくお喋りしている。

春樹が最近また誰か女子の相談に乗ってる話をしていると、春樹は「でもそのうち俺の相談になっちゃったんだよね～」としみじみ言う。

ブフーッ！と夏実は口を押さえながら笑う。

「やぁだ、なにそれ」

麻冬も楽しそうに言った。

付け足して、何の相談をしたの？と尋ねると春樹は後頭部に手を当てながら黙る。

「何だよ、言えないのか？やらしいな」

秋人がからかうようにそう言うと春樹は、バッカ！と声を上げた。

「じゃ何？」
「いやさ、なぁんか…みんなに言うのは気まずい……」

そう言われるとますます気になる3人は寄ってたかって春樹に詰めよって吐かせようとする。

春樹は拒み続けるけど、ついに3人に押し負ける。

春樹は軽くうつむきながら、小さな小さな声で呟いた。

「……医者…なろっかなって」

その言葉に3人が声を合わせて
「はっ？」と言った。

「俺スポーツ医学好きなんだ。整形外科でも接骨院でも良いから、スポーツやってる人の怪我治したいなー…って」

春樹がスポーツ医学を好きなことは3人とも知っている。

テーピングの巻き方とかも上手だし、人と触れ合うのが好きな春樹には合っているかもしれない。

「え、おま……本気？」

秋人がそう言うと、春樹は秋人をチラッと見て頷いた。

春樹がただのバドミントン部員だったなら誰も何も言わない。

だけど春樹は星陵バド部の部長でエースで、県の強化選手に選ばれていて、そのうちオリンピック強化選手にさえ選ばれるかもしれない。

そんな人がバドミントンをやる未来を選ばずに医者や柔道整復師になるのはもったいなさすぎる。

「…だよなぁ」

春樹は驚いている3人の態度を見て軽くため息をつきながら言う。

「だから言いたくなかったんだ。…みんなはスポーツで食ってくんだから」

そして春樹は場を和ませようと無理に笑いながら明るくこう言った。

「ほらねっ。聞かなきゃ良かったっしょー？」

アハハなんて笑いながら手を振る春樹に、みんな言葉をなくしている。

みんな当然お互いがスポーツに生きていくと思い込んでいたわけだから、唖然としてしまうのも無理はない。

「で…も、引退してからでも遅くはないでしょ？」

夏実が言った。

春樹は頬をポリ…とかきながら微妙な顔をする。

「うーん……引退してからまた勉強し直すのもなぁ」

「嘘でしょ？だって春樹、よく考えてよ」

「麻冬」

「インハイで結果残せば絶対的な将来が約束されんのよ？バドミントンだけじゃないわ。テレビにだって出たりすればもっとお金も稼げる」

麻冬が言うのも正しい。

今の時代ちょっと人気があればすぐにバラエティやらなんやらからオファーがくる。

特に春樹なんて若い人やおばさん層にかなり人気が出るだろう。

薔薇色の人生が待っている。

「うん。でも麻冬、お金じゃないんだ」
「え…」
「やりたいことをやってこその人生なわけだし」

春樹の真面目なその言葉に麻冬は言い返せない。

次に秋人が言った。

「じゃなんでお前小学校んときから今までずっとバドやってきたんだ？」
「好きだから」
「好きなこととやりたいことって…」
「別なんだよ。秋人」

夏休み開けた直後の進路希望調査、４人の中で唯一卒業後進学と書いた。

それは大学でもバドミントンを続けるためじゃない。

まだはっきりとは決まってなくても確固たる未来を見据えてのことである。

「…でも、まだ全然悩んでる」

春樹はボソッと呟いた。

「バドやってれば欲が出てくるんだ。無理かもしれないけど、世界で戦ってみたいって…」

春樹は小声でそう言ったけれど、みんな聞き逃さなかった。

欲くらい出て当然だ。

そんな夢を見たって良い位置にまで春樹はきている。

いや、夢なんかではない。

このまま行けば現実となる。

それが分かっているから春樹は一層悩んでるのだ。

「春樹、あの…さ」

夏実がたどたどしく話しかける。

春樹はゆっくり夏実のほうを振り返った。

「なんて言ったら良いか分かんないけど…でも正直あたしは、ここにいる４人でオリンピック狙いたいよ」

「夏実…」

「夢じゃないんだよ。誰もが憧れる舞台に立てる実力持ってるんだよ」

夏実に続いて麻冬が言った。

「医者ならお年寄りでもやってけるじゃない。でもオリンピックにいける回数は限られてるのよ」

「…うん…」

そして麻冬に続いて最後には秋人が言った。

「お前が俺にサッカーの道行けって言ったじゃん。それってお前も

バドの道行くからじゃないのかよ」

連呼されるオリンピックという言葉。

それは簡単なものではない。

みんなが羨ましがって、そして結局羨ましいまま行けずにテレビで観戦するしかないもの。

高校生がそんな大層な言葉をいとも簡単に言っているのはあり得ないことだけど、それが彼らだから疑問すら持たない。

みんな信じてる。

何年後かのオリンピックに…もしかしたら次のオリンピックに彼らが出場することを。

「きっと世界には俺らより強い奴がたくさんいる。だから、俺絶対やめないよ。サッカー」

サッカー

バレー

水泳

バドミントン

種目は全く違ってもスポーツを愛する気持ちは同じ。

それを知ってるからこそみんな春樹をとめている。

「…そうだよなぁ。きっと強い奴いっぱいなんだよな」

春樹は微笑しながら言う。

そして左手で拳をつくり、それを見つめている。

「俺ねぇ、もいっこ夢あって」

春樹は3人の顔を見る。

「4人で選手村で遊びたいなー、なんて」

真面目な顔して春樹がそう言うものだから、3人同時に口を押さえて笑いを堪えている。

夏実なんかもう堪えているくせに笑い声が出ている。

「えっ、何?!」

笑っているみんなを見て春樹は挙動不審になる。

「真顔で言うなよっ」

秋人が笑いながら言う。

「ちょっ……もーお腹痛い!」

笑いすぎてお腹を抱えている夏実。

「可愛い夢ね、春樹」

麻冬はニコッと微笑んだ。

そして、3人は言った。

「それ夢じゃなくて現実になるから大丈夫」

その言葉を聞いてなぜか春樹も笑えてきてしまい、

「何その自信～」と言い返す。

けど、そう言っている春樹にすら近い将来の現実であることは分かっている。

「行こうぜ。オリンピック」

秋人が胸の位置で左手でガッツポーズをつくる。

「あたしは東洋の魔女復活させるよ」

夏実はウインクしながらピースをする。

「いつまでもみんなで同じ世界にいたいな。きっと楽しいわよ」

麻冬は右手の親指を立ててグッドのサインをする。

そう、スポーツやってる限り彼らは同じ舞台にいられる。

高校3年間だけなんて寂しいことは言わない。

想像できる。

もっと大人になった彼らが休日に一緒に遊んで飲んで笑っている光景が。

春樹はここまで勧めてくれる3人に顔が上がらないようで、うつむいている。

少し顔を上げれば涙が出てしまいそうだから。

「……うん…」

やりたいことをやっていれば幸せかもしれない。

確かに医者になれば嬉しいかもしれない。

けれど

たとえ君たちのいない未来に幸せがあったとしても…

next

第87話【強さ】

昼休みが終わり5限目が始まると、４人は席を移動して固まり、勉強を始める。

「あーバカ！まじバカ！」

もうヘッドホンすら耳につけずに秋人は歯がゆそうにそう叫んでいる。

「ちょっ、バカとは何よ！」
「教えんのめんどくせーな。麻冬交代」
「やーよ。夏実だけは」
「あっ、麻冬まで！」

どうやら夏実がやっているのは化学のようだ。

化学も公式やらは暗記が得意な夏実は覚えられるようだが、理論やらは全く持って理解していない。

「まぁまぁ夏実。俺が教えてあげるよ」
「わーい！」

春樹がそう言って夏実に化学を教え始める。

春樹が化学得意とは知らないが、まぁ少なくとも夏実よりはマシなんだろう。

麻冬も自分で勉強しているから秋人は教えることもなくなり暇をしている。

音楽でも聞きながら寝てようか、なんて考えているものの、またすぐに起こされるんだろうなと思いやめる。

ふと秋人は、春樹が古典をやっていた形跡を見つけ、それを見始める。

そして出そうなところにチェックを入れ、やってある練習問題の間違っている部分の正しい答えを書いている。

春樹は基本理系だからあまり文系は好きではないようだ。

英語はできるのだが、特に国語系が苦手らしく春樹はテストになると国語系ばっかり勉強している。

他の教科はテストやる前の１０分間の休み時間に教科書をパラパラ見てる程度。

もちろん事前に秋人にヤマはってもらってるから見る範囲は限られるわけだが。

「やっさしー」

秋人を見て麻冬はキシシと笑いながら言う。

「ほっとけ」
「なんだかんだで秋人春樹を愛しちゃってるもんね」
「逆だろ。愛されてんだよ」
「またまたぁ」

麻冬がそう言うのも分かる。

結局秋人はどんなときだって常に春樹の側にいる。

1人が好きな一匹狼のような雰囲気を持っているのに、他の男子にはそこまで深く関わろうとしないのに、だ。

春樹も春樹で人なつっこい性格してるにも関わらず秋人と一緒にいる。

秋人も春樹も違う意味で男子から好かれているのに、2人は互いを

選んだ。

「あーっ、秋人ありがと！」

春樹が秋人が古典を見てくれているのに気づきお礼を言う。

秋人は「いーえー」なんて返事をして、続けて「どう？そのバカ」と尋ねた。

こらー！なんて怒る夏実を差し置いて春樹も、いやー…なかなか教え甲斐があるってもんだよ、と笑っている。

「春樹ひどーい！」

「え～っ。良いじゃん、化学くらいできなくっても」

「だめ！今回は化学でトップ１０狙ってんの」

「え……えーー？！」

「そんな驚くこと？！」

春樹と夏実のテンポの良い会話を見ていて、秋人はブハッと吹いて笑っている。

秋人がそんなに良い顔して笑うなんてあまりないことだから、夏実が「なぁにー？」と不思議そうな顔をしていると、秋人はなおも笑いながら言った。

「いや、楽しくて」

目には少し涙を浮かべて笑っている秋人を見て、夏実は笑い返すけど、春樹はそんな秋人を愛しそうに見ている。

秋人の事情を知っている春樹は、秋人が学校を楽しいと言ってくれることがなにより嬉しいようだ。

そんな秋人と春樹を見比べて麻冬は疑問を抱いている。

ずっと聞くに聞けなかったことを。

楽しそうに3人で喋っているのを見て麻冬は最初ためらったが、どうしても気になっているようでついに秋人に話しかける。

「ね、聞いても良い？」

「ん？」

「…嫌なら答えなくても良いわ。シカトしてね」

麻冬の微妙な言い回しに秋人はクエスチョンマークを浮かべる。

とりあえず秋人が返事をすると、麻冬は言った。

「秋人、あなたアメリカでスキップして大学生してたの？」

その瞬間、化学をやろうとしていた春樹と夏実が手を止め麻冬の顔を見た。

秋人は一瞬驚いた顔をして、少し切なそうに麻冬から顔を反らしている。

「この前英作文発表してたでしょ。そのときハンナに言ってたわよね。大学の同期の人にありがとうって…」

「麻冬!!」

麻冬の言葉を遮るかのように春樹が叫んだ。

春樹の声に驚いたクラスメートたちが一斉に春樹のほうを振り向いたが、夏実が「何でもないからね」と慌ててみんなに言う。

春樹は麻冬をキッと睨みながら言った。

「麻冬、聞いて良いことと悪いことがあるよ」

「は、春樹」

真剣に怒っている春樹に麻冬は少したじろいでいる。

麻冬とてそこまで大変な質問をしたなんて予想しない。

「良いよ、春樹」

秋人が春樹の肩に手を置いて春樹を落ち着かせる。

春樹は「でもっ…」と秋人を心配している様子だ。

「だってお前受け入れてくれたじゃん」

秋人が優しく笑いながらそう言ったものだから、春樹は言葉をなくしている。

「そーかー……英語分かるのかぁ」

秋人は苦笑しながらそう言う。

まさか本場の英語が分かるわけないと思ったんだろう。

だが甘い。

秋人が全国選抜に選ばれ海外の選手と試合をするように、彼らも小さい頃からそれくらいしてるのだ。

例えば夏実はジュニア時代に県選抜として、日本にきていた韓国と試合をしている。

全国選抜に選ばれなくても、運が良ければ市や区の選抜でも外国に行ったり試合したりできるのだ。

自然と英語くらい話せるようになる。

「…うん。麻冬の言うようにスキップして大学入ったんだ。俺」

秋人は全てをさらけ出そうという表情をしている。

夏実が「い、いつ？」と恐る恐る尋ねた。

「小５のとき…だな」

夏実と麻冬は目を見開いて驚いている。

大声は出さないようにと口を手で押さえながら。

「１年間大学生やって…やめて日本に来た。小６の年は学校へは行

かなかった。だから日本の小学校…は卒業してない」

もちろんアメリカでいた学校ではスキップする際に卒業証書は受け取っているが。

3人は前に秋人にどこの小学校なのかと尋ねたときのことを思い出している。

今思えば酷い質問をしたと後悔している。

「じゃあ…初日ハンナが言ってたことって」

「事実だ」

麻冬はなんてことを聞いたんだろうとショックを隠せずにいる。

言わなかったということは話したくないということ。

そう思うと麻冬は自分を責めた。

「なんでやめたか…聞いて良い？」

「ハンナ……大学の同期生からの悪口に耐えられなかった。ただそれだけ」

秋人はあっさりそう言うけれど、そんな簡単な言葉ではすまされないことくらい夏実と麻冬には分かっている。

この秋人が悪口程度の言葉に負けるはずはない、と。

よっぽどのことを言われ続けたのだろうと。

「日本を選んだのは自分たちが日本人だったから。他に何か聞きたいことは？」

淡々と話している秋人を春樹は静かに見守っている。

夏実と麻冬はお互い顔を見合わせて、チラッと春樹を見た。

春樹は2人の視線に気づき、コクンと頷く。

「じゃ…もし何事もなかったらそのまま大学通ってて、今もうすでに働いてるの？」
「ああ」
「サッカーやることはなかったの？」
「ああ。…まぁガキんときやってたけど」
「そしたらあたしらが出会ってこんな風に話したりすることもなかったの？」
「ああ」

自分たちでそう聞いておきながら夏実と麻冬は少し悲しそうな顔をしている。

複雑な気分だろう。

「だけど」

秋人が辛い過去を背負っているのは悲しいが、もしその過去がなかったら4人でいることはない。

そんな2人に向かって秋人は微笑みながら言う。

「そんなことは起こりえないって。俺らが出会ったのは偶然なんかじゃないって教えてもらった」

秋人はチラッと春樹を見る。

春樹は秋人に気づいてニコッと笑う。

「大学やめて日本に来て、脱け殻のような日々を過ごしてた俺の前に佐々先輩が現れて…」

秋人は春樹を通り越して窓の外を見ている。
澄んでいる空に浮かぶ白い雲を見ては、何かを思う。

「サッカーって生き甲斐見つけて、阿笠にも会って、学校にも行けるようになって」

遠く繋がっている空
アメリカまでも。

「学校ちゃんと卒業して、高校入って…それで」

秋人はまた顔を動かして3人を見渡す。

「お前らに会った」

夏実と麻冬は全く知らなかった秋人の過去を聞いて泣きそうになっている。
夏実は涙が出ないよう必死に堪えているし、麻冬は両袖で目頭を押さえている。

秋人は立ち上がり、夏実と麻冬の頭にポンッと手を置いた。

「そんな顔すんなよ。俺今幸せなんだ」

優しいその言葉に、2人はより一層涙腺が緩くなる。

「秋人、どこ行くの？」

「便所」

秋人はそう言って教室を出ていく。

クラスメートたちに気づかれないように夏実と麻冬は頑張って涙を拭き、勉強に取りかかる。

春樹はさっき秋人が眺めていた空をじっと見つめている。

秋人は廊下に出て、トイレを通り越してそのまま誰もいるはずのないラウンジへ向かった。

携帯を開いて、今までずっと押すに押せずにいた電話番号を見つめ

ている。

発信しようと思っては思い留まる。

そんなことの繰り返しをしていたが、ようやく勇気を出せたらしく秋人は発信ボタンを押した。

何回かのコールのあと、ようやく男の子が電話に出た。

『Ｈｅｌｌｏ?』

一瞬秋人は声が出ずにいたが、ゴクッと唾を飲んで恐る恐る喋り出す。

「Ｊｏｈｎ…?　Ｉ'ｍ　Ａｋｉｔｏ……Ａｋｉｔｏ　Ｔｓｕｋｉｋａｇｅ.」

『…Ａｋｉｔｏ?!　Ｏｈ，Ａｋｉｔｏ!!』

それは、大学に入る前の友達。

秋人の大事な友達。

日本に来て5年半

ようやく秋人は過去を凌駕した。

next

第８８話【旧友】

秋人が教室に戻ると、春樹たち３人はせっせと勉強を続けていた。
春樹が秋人が戻ってきたことに気づいて声をかける。

「遅かったじゃーん」
「おう。ちょっとな」

秋人が戻ってきたところで３人は秋人に各教科のヤマをはってもらう。
秋人は教科書をパラパラめくりながら指を差してその箇所を説明していく。

「ここは出ないの？」
「８０％出ないな。そこを出すならこっちを出して応用きかせたほうが一石二鳥だし」
「あ、そっか」

ただ物生選択だけは秋人にもどうしようもない。
秋人は物理選択だから物理のヤマならはれるが生物は分からない。

こういうときは春樹がだいたいのヤマをはって夏実に教えるものだ。

ヤマを教えるだけ教えてみんなが再び勉強に取りかかると、秋人は暇になる。

自習があることを知っていたからあらかじめ漫画をたくさん持ってきていたようで、カバンから漫画を取り出す。

いつものようにヘッドホンを耳につけ秋人は漫画を読み始めた。

そこらへんにある何てことのない普通の漫画。

秋人はそれを読み音楽を聞きながらも、さっきのことを思い出している。

ラウンジで秋人が電話をかけたのはジョン・Mという幼少期の友人。

一緒にサッカーしたり遊んだりしていた仲良しだ。

他にもたくさん仲良い友達はいたものだけど、でもやはりジョンが一番のようだ。

ジョンも、秋人への卒業アルバム制作を発案したりなどしてかなり秋人を慕っていた。

『久しぶりだな、アキト』
「ああ……元気か？」

秋人は久しぶりの幼なじみの声にホッとしている反面ドキドキもしている。

『おう。お前は？』
「元気だよ。…あのさ…」

秋人は何かを言おうとするが、言葉が出てこないようだ。

どうしたんだよ？とジョンが催促するが、なかなか言えない。

そんな秋人を察したのか、ジョンは優しく言う。

『言えよ。全部聞いてやるからさ』

その言葉から秋人はジョンが秋人のことを知っているのだと察知した。

積もり積もった話があるだろうのに、ジョンは秋人のことばかりを思う。

「…大学…1年でやめたんだ。そのあと日本に行って…今高校生やってる」
『そんで?』
「サッカーやってる。プロ…目指してる」

秋人が恐る恐るそう言うと、ジョンは電話越しにクックと笑っている。

『まさかお前が俺と同じ高校生とはねぇ』
「同じ年だろっ」
『あはは、確かに』

幼なじみの懐かしい英語は、秋人に幼少時代の思い出を思い出させる。

『…知ってたよ。アキト』
「え…Ｗｈａｔ?」
『アキトが大学やめたのも日本に行ったのもサッカーやってんのも』

秋人はジョンのその言葉にあまり驚かずにいる。

さっきのジョンの態度から知られていることはもう分かっていたからだろう。

知って驚かれるのは嫌だが、知られているのも嫌だ。

「なんで…」

『俺サッカー好きだもん。よく雑誌見るけど、何回かお前載ってんの見たよ』

「そうか…雑誌か……」

日本だけでなく世界の雑誌にも載っているところがすごい。

まぁ載る機会も少なくはなかったから当然だろう。

『最初は理解できなかった。アメリカにいるはずのお前が日本でサッカーやってるなんて』

「…うん」

『なんでやめたんだ?』

これで何回目だろう。

大学をやめた理由や日本での出来事、サッカーやりはじめた理由を話すのは。

けれどそれでも秋人は事細かにジョンに説明していく。

ジョンは相づちを打ちながら秋人の話に耳を傾けている。

そしてもう1つ、ハンナと再会したことも話した。

ハンナと再会して弱い自分に逃げて、サッカーすら捨てようとしたこと。

そんな自分に手を差し伸べてくれた友人がいたこと。

秋人はどれもこぼさずに全てを洗いざらい言っている。

「…だから、ジェイにも言えずにいたんだ。ジェイたち応援してくれたのに俺逃げたから」

秋人の言うジェイとはジョンのことだ。

ジョンのあだ名で秋人しかそう呼ばない。

小さい頃ジョンという名前が呼べずにジェイ（J）と言ったことから始まった。

『水くせぇんだよ。本当』
「ジェイ」
『どんな道を選ぼうと俺らがお前を嫌うわけないだろ』
「でも俺…」

秋人は何と言ったら良いのか分からずにいる。

幼なじみなのに、大事なのにずっと音信不通にしてしまっていて、久しぶりに電話したかと思えばこんな会話で。

『アキト、幸せになれたんだろ?』

ジョンの後ろからなんだか少し賑やかな声が聞こえる。

さっきまでは静かだったはずなのだが。

『良い人たちに出会ったんだな。恵まれてんだよ、お前』
「…もし俺がそっちでスキップしなきゃずっと一緒だったじゃん」
『言うなよ。どんだけ一緒にいても雑誌で見たようなサッカー楽しそうにやってるお前のキラキラした顔は見たことなかった』

秋人は正論をつかれて言葉に詰まっている。

否定はできないけど、肯定もしたくない。

『会いに行くよ。だからお前も会いに来い』

ジョンの純粋な言葉は秋人の心にかなり響いている。

「話なんか…してくんないと思ってた」

『え？』

「裏切り者って…お前なんか知らないって拒絶されるかと…」

秋人の声は若干震えている。

そう思われるのが、言われるのが怖くてずっと連絡しなかったのだ。

『んなわけないって。会えなくても俺お前大好きだし』

ジョンはそう言って、『なぁ、みんな！』と叫んだ。

「みんな…って…え？」

秋人が不思議に思っているのもつかの間、電話の向こうからたくさんの声が聞こえてきた。

『アキトー?!』
『久しぶり!憶えてる?あたしマリーよ!』
『お前たまにはこっち来いよな!!』

耳では聞き取れないほどの数々の声がキンキンとしている。

実はジョンが秋人と電話している間にメールであの頃の友達を呼んでいたのだ。

みんな秋人の名前を見て一目散に家を飛び出してきた。

『驚いた?』

ジョンが笑いながら言う。

「やっ…待っ……頭が追いつかねぇ」
『あはは、だろうな』

ジョンは笑うだけ笑って少し間を開ける。

そして落ち着いた声で秋人に言った。

『アキト、お前の居場所ちゃんとあるから』
「ジェイ」
『みんな待ってるから。気にせずいつでも帰って来い』

ジョンの、遊びに来い、ではなく帰って来いという言葉が何より秋人には嬉しい。

もう二度と行かないと思っていたアメリカにも、ちゃんと秋人の居場所はある。

その事実だけで十分だった。

「…ジェイ、いつか俺の友達紹介するな」
『Ｆｒｉｅｎｄｓ？』
「ああ。…最後の友達だ」

秋人はその後ジェイだけでなくその場に来てくれた旧友たちと少し話をした。

ジェイからのメールで眠気が覚めてパジャマのまま来たポール。

ジェイと秋人の幼なじみのマリー。

彼女とのデートすっぽかして来てくれたレン。

学校で補講（アメリカは今日日曜日）を受けてたアリッサに部活をしていたティム。

他にも何人もの人が集まってきてくれた。

秋人のたった1本の電話のために。

秋人は最後にジョンに秋人の携帯番号とアドレスを教えた。

ジョンも秋人に自分の番号やらを教え、必ず会おうと約束して電話を切った。

秋人が電話したのはジョンの家電だったのだ。

ジョンはそこにいる人に秋人のアドレスを教え、みんな早々と登録をして秋人にメールを送る。

アメリカという離れた国から何通ものメールが届いた。

世界規模でも、心が繋がっている限り必ず会える。

会いに行けない距離では決してないのだから。

願わくばみんな幸せでありますように。

またみんなと楽しい一時を過ごせますように。

秋人は空を見ながらそう思う。

「秋人ー、ねぇここは？」
「だからー」

強くなった秋人に

訪れよ

幸せな未来。

next

第８９話【現・元親友】

「あーあ、部活かぁ」
「あっれ。珍しいじゃん、秋人が嫌がるなんて」

掃除をしているとき、長帚に軽く寄りかかりながらだれている秋人に春樹が声をかける。

「ん～…だってさぁ、んーー……」

曖昧な言葉を言う秋人。

そのとき、ズボンのポケットに入ってる秋人の携帯のバイブが鳴り出した。

かったるそうに携帯を出して発信者も見ずに秋人は出た。

「うーい」
『Ｈ－ｉ，Ａｋｉｔｏ～』

またもや英語だ。

「誰、ジェイ？」
『おう。さっきちょっと言い忘れたんだけどさ』
「ん」
『今度サッカー選抜でアメリカ来るんだって？』
「…そうだっけ？」

秋人はよく知ってるな、なんてまるで他人事のように言う。

「え、じゃあ寄って良い？」
『ったり前だろ。あとさ、彼連れてきてよ』
「Ｈｅ？」
『Ｄａｉｇｏ．　Ｄａｉｇｏ　Ａｋａｓａ．』
「えっ、阿笠？」

意外なことに阿笠の名前が出てきて秋人は終始驚いている。

なんでもサッカーやってるティムが阿笠のプレーにベタ惚れらしく、会いたいようだ。

「そーか。ティムもサッカーやってんだ」
『そうそう。つっても最近フットサルに転向したけどな』
「へぇ」
『マリーもダイゴのことカッコイイとか言ってんぜ』
「何！マリーもか！」
『わはは。お前昔からマリーには甘々だったからな』

秋人とジョンは昔話に花を咲かせている。
ジョンと秋人とマリーは中でもかなり仲が良かった。
マリーはなんというか女の子らしくて可愛らしくて、秋人にべったりだったせいか秋人もマリーを甘やかしていた。
恋人というよりは親子といったら良いのか…
『んでさー』
楽しそうに2人が会話していると、秋人は春樹の視線に気がついた。
春樹はかなり驚いた顔をしながら会話を聞いている。
「ジョン」
『ん?』
「今ここにいるんだ」
『何、誰?』
「さっき言ったろ。親友」
そう言って秋人は携帯を春樹に差し出す。

「はっ？」

春樹は訳が分からずに携帯を受け取り秋人の顔を見上げた。

「ジョン・ハリスン。アメリカにいたときの幼なじみなんだ」

「え…あれ、でも…」

春樹は秋人が後ろめたさを感じてジョンたちに連絡できずにいたことを知っている。

だからその幼なじみと気楽に会話してる秋人を見て不思議に思うのもおかしくはない。

秋人はそんな春樹に言った。

「出てよ。春樹のこと紹介するって言ったんだ」

そう言われて出ないわけにもいかず、春樹は携帯を耳に当てて言った。

「…ジョン？」

『あ、君がアキトの親友？』

「うん。ハルキ・サクライ」
『Ｏｈ，Ｈａｒｕｋｉ　！！』
ジョンは春樹と話せて嬉しいらしく、テンションが上がっている。
それに対して春樹は状況の展開に着いていけずオドオドとしている。

「秋人～、こっちやった？」
「やべ。あ、春樹、俺向こう行ってくる」
「あ、うん」

秋人がその場からいなくなり、一瞬沈黙が流れたが春樹は思い切ってジョンに聞いてみた。

「…どういうこと？ジョン。君らが話してるなんて」

春樹は慣れたように本場ものの英語を喋る。

『ハルキ英語上手いな。留学でもした？』
「や、遠征とかで行くからさ。外国」
『もしかしてアキトと一緒にサッカーでもやってる？』
「俺はバドミントンだよ」

ジョンは、グレイト！なんて言いながら羨ましがっている。

さすがアキトの友達だ、一流のアスリートなんだね。とジョンは興奮気味に言う。

春樹は照れを隠しながらも謙遜して言った。

「あはは。まだまだ一流には遠いけどね」

軽く笑いを交えながら楽しく会話をしていると、ふと沈黙が流れた。

2人ともシーンとなり、どっちから口を開くか迷っているようだ。

結局春樹の質問は流れたままだから春樹がもう一度聞こうとすると、春樹より先にジョンが言った。

『…さっきアキトが連絡くれたんだ』

「え?」

『話してくれたよ、全部。ハルキ、君はどこまで知ってる?』

「たぶん…全部」

『そっか』

ジョンはさっきの秋人との会話を簡単に説明する。

春樹が秋人の現親友だから腹を割って言ってるんだろう。

元親友からのメッセージ。

じゃなきゃいちいち会話の内容なんて教えるはずもない。

秋人が一番心配してたのはジョンたちに嫌われることだった。

けれど全くそんなことはなく、むしろ好かれてることを知って春樹は軽く安心している。

春樹が秋人をいつでも心配して側にいたいって思っているように、遠く離れた国にいる彼らだって同じなのだ。

その事実が春樹の心をポカポカと温める。

「いつかさ、秋人に会ったとき笑顔で迎えてやってよ」

絆という友情はこんなにも固く結ばれていて

「クールな顔しときながらたぶん内心ドキドキしてるだろうからさ」

春樹がそう言うと、ジョンは言った。

『だな。あいつ顔に出さないからなー』

「ほんとほんと。分かりずらいの何のって」

秋人の性格を知っている2人だからこそ言える言葉。

笑ってはいるものの、どこか温かさを感じる。

『ハルキも遊びに来いよ』

「え、良いの？」

『もちろん。大歓迎さ』

今や携帯1つで外国にいる人とも話せるようになった。

離れているという実感が薄れていくのも認めざるを得ない事実だが、

それは時に勇気や希望を与えるものとなる。

国や文化や外見や言葉が違っても、もとは同じ人間。

『アキトどんなんになってんのかな。楽しみだな』
「身長高くて顔カッコ良くて爽やかヘアのモテモテ人間だよ。やんなるくらい」
『へぇ～！やっぱ雑誌だけじゃ全然分かんねぇな』
「ね」

たぶん、秋人が生きていくのに欠かせない人たちだった。

人間の温かさを教えてくれたジョンとの別れ

そして、大学での辛い経験は春樹に巡り会うための期間なんだとしたら、決して無駄なんかではなかった。

サッカーがあるから中学も何とか行けた。

初めて学校が楽しいと思えたのは高校。

１０歳で大学にスキップし、大学すらスキップして大学院にだって行ける頭脳を持っているから高校の授業なんてくだらないもの。

授業中は寝てるか音楽聞いてるかしてるけど、それでも行こうと思

えたのは春樹がいたから。

これを運命と言わずになんと呼ぼうか。

実は2人、入学式の日にもうすでに出会っていた。

入学式直後、新入生代表であいさつした秋人が教師に褒められていた。

秋人は適当に愛想笑いしながら受け流していたものだ。

――お、櫻井――

その教師がちょうどバド部の顧問だった。

春休みからすでに練習に参加していた春樹を当然知ってるわけで、偶然通りかかった春樹に声をかけたのだ。

――今日も部活あるぞ――

――え、出て良いんですか?新入生が部活できるのってまだ先なんじゃ――

基本新入生が部活に仮入部できるのは４月の中旬あたりで、５月の頭くらいに本入部となる。

そう説明されていた春樹が顧問にそう言うと、顧問は豪快に笑いながら言った。

――何のためのスポ薦だね。もちろん参加だよ――

――分かりました。まぁ俺も道具とか持ってきちゃってんですよね――

――やる気があって良いな、櫻井――

こんな会話をしていた。

秋人は眠そうにその会話を軽く聞いていた。

ちなみに秋人はスポーツ推薦で入ったわけではないが、星陵からスポーツ推薦きていたしただ推薦を受験できなかっただけだから秋人も春休みから練習はしていたのだ。

だからもちろん式の日にも練習はしていたし、それは阿笠も同じ。

春樹だけでなく阿笠の存在もかなり大きい。
むしろサッカーやってる限りでは阿笠のほうが重要。
阿笠と同じサッカー部に入ってよりサッカーが楽しくなったことも事実。
やはり強い人と一緒にやれることは嬉しいものだ。
しかしサッカーを抜いたら何もなくなると秋人は言うけど、そんなことはない。
日常生活で秋人はかけがえのないものをたくさん抱えている。
それに春樹が含まれることは言うまでもない。
式のときに出会っていた。
仲良くなれたのは1ヶ月後のことになるけれど。
「盛り上がってんじゃん」

ジョンと春樹が笑いながら他愛もない話をしていると、秋人がようやく戻ってきた。

「あ、秋人」

春樹は振り向いて秋人に声をかける。

そしてジョンに言った。

「あ、じゃあ秋人に代わるね。またねジョン」

『ああ』

そうして春樹は秋人に携帯を返した。

秋人も多少会話をしてから電話を切る。

じきに掃除の時間も終わるから2人は道具を用具入れにしまいに行く。

「言ってくれれば良かったのに」

「ん？」

「ジョンたちと和解したこと」

「ああ」

秋人はそれもそうだけどさー、と微妙な受け答えをするが春樹には声は届いていない。

秋人の昔を知っているジョンと話せたこと、そしてジョンに春樹の存在が嬉しいと言われて何だか気分が良いようだ。

ジョンも春樹がいれば一安心とでも思っているのだろう。

そう思われてることが嬉しいみたいだ。

「さーて、HRだ」
「かったりぃ」

秋人は知らない

ジョンと春樹だけの

秘密の会話。

next

第９０話【アパシー】

「夏実」

ＨＲが終わり放課後になり、支度を済ませた春樹が夏実の席へ向かう。

「今日一緒に帰ろ？」
「んー？どうしたの、急に。いつも一緒じゃなーい」
「うん、まぁそうなんだけど…今日は絶対に」
「？うん、分かった」

夏実がそう返事すると春樹は心なしか少し安堵した。

春樹がチラッと秋人を見ると、秋人は春樹の顔を見ながら軽く微笑んでいる。

春樹が今日制服で来た意味をようやく果たせる。

春樹は夏実が見てないところで秋人に右腕を曲げてガッツポーズしてみせる。

秋人も頑張れと言わんばかりに同じ行動をした。

夏実の支度が終わると、夏実と春樹は秋人にバイバイと言う。
ちょうどそのとき麻冬もこっちに来て、またもあいさつをして2人は教室を出て行った。

「やっぱ何かあるのね、今日」

麻冬は教室を出て行った2人を目で追いながらそう言う。

「今日は春樹の一世一代の日だからな」
「そんな大変なことなの？夏実に関係してるのね」

麻冬は軽く笑いながら
「てゆーかあの2人両思いなんだからさっさとくっつけば良いのに」
と言った。

秋人はコメントしにくいらしく黙っている。

「あっ……ごめ…」

麻冬はハッとしたように口を押さえた。

麻冬はまだ秋人が夏実を好きだと思っているのだ。

「ごめんって何が？」
「だっ…て」
「俺夏実のこと好きじゃないよ」
「え？嘘…」
「正確には好きではなくなった…だな」
「新しい好きな人ができたってこと？」

麻冬のその言葉に秋人は何も言わずに少し切なそうに麻冬を見つめた。

好きな人はあなたですと、今言えたらどれだけ楽な気持ちになれるだろう。

でも麻冬には阿笠がいるし、何より秋人はいろいろあったことがようやく解決してきたばかりでまだそんな余裕はない。

一言好きだの言葉さえ

届かない。

「…聞いたらまずい？」

「今は言えない」
「今は？」
「時が来たら麻冬に言うよ」

麻冬はふーん、と頷きながら返事をする。

麻冬にしてみればかなり複雑な気持ちだ。

夏実を好きだと思っていたから阿笠に逃げたのに、秋人はもう夏実を好きじゃない。

「帰りさ、いろいろ言いたいことあんだけど良い？」
「言いたいこと？」
「春樹の今日のことで」
「ふーん？うん、じゃあ阿笠に言っといてくれる？」
「えっ、俺から？！」

秋人があからさまに嫌がるような声を出すから麻冬は不思議に思い、まずいの？と聞き返した。

まずいも何もないだろう。

まぁ麻冬は知らないのだから仕方ないかもしれないが。

「いや……ん、分かった」

そして2人も荷物を持って教室を出て行く。

いつものように校舎を出て少ししたところで別れ、秋人は部室に向かい麻冬はプールへと向かう。

グランドではもう1年生が準備をしていて、部室にはほぼ部員が来ている。

「うーす」
「おーす、秋人」
「うぃー」

みんな着替えながら適当にあいさつをする。

ロッカーに荷物を置いて秋人も着替えようとすると、阿笠が入って来た。

「うーす」

阿笠が適当にあいさつをすると、他の部員たちもあいさつを返す。

阿笠が荷物をおろしているのを秋人がじっと見つめていると、阿笠がその視線に気づいた。

「ん？なした？」

優しい顔をしている阿笠を見て少し後ろめたい気分にもなるが、秋人は一気に言う。

「今日麻冬借りて良い？」

「え？」

「話したいこととかあるんだ。ちょっと」

阿笠は、話したいことって？と聞き返したいところだがそこは敢えて深く追求せずに快く承諾した。

そして付け加えて、もしかして告るの？と少し真剣な顔をしながら尋ねる。

「いや、違う」

「ふーん、そっか」

「まぁいつか告るけど」

「そうなんだ。頑張……あっ？え、何？！」

阿笠は流そうとしたが秋人の言葉を頭の中で繰り返して、慌てて聞き返した。

秋人は着替え終わったようでパタンとロッカーをしめ、靴の紐を縛る。

「俺だって良い加減前に進まなきゃなんないんだよ。お前だって宣戦布告したじゃん」
「…本気？」
「ああ」

阿笠は怒るでも怯むでもなく、いつか来る現実がとうとう来たんだな…と覚悟しているような態度をしている。

いくら麻冬が自分を選んでくれても秋人が本気を出したら勝てないと内心思っている。

むしろ2人は両思いなのだから祝福するのが普通なのかもしれない、と。

「だからって手ぇ抜くなよ」
「…抜くかもしれない」

肯定しない阿笠に驚いたのか、秋人は阿笠の顔を見た。

「…俺、訳分かんなくなってきた」

阿笠は昼間春樹に言われてからいろいろと考えいた。

春樹が言ったことは正しいし、阿笠は麻冬を幸せにしたいと思ったから告白した。

けれど、それは幸せにできると思ったのではない。

したいと思ったからだ。

「分かんねぇ…」

阿笠は膝を曲げてズルズルとしゃがみ込む。

そして左手で前髪をかきわけて額を押さえている。

阿笠も辛いんだろう。

部の人たちの中には阿笠が秋人から麻冬を取ったと思っている人も

いる。

何も知らないクラスメートたちや学校の人は、可愛い彼女がいて幸せだね、と言う。

幸せなものか。

阿笠は大事な仲間である秋人が麻冬を好きなことも知っている。

麻冬が秋人を好きなことも知っている。

阿笠がどんなに足掻いたって相思相愛にはなれない。

「あの頃の俺と今じゃ状況が全然違う…」

確かに阿笠の言う通り状況が違う。

あの頃は2人は両思いだったけど、今はそうではない。

だからむしろ身を引くべきなのだと阿笠は感じている。

秋人は阿笠を心配してしゃがんで阿笠の顔を覗き込む。

「頑張れって…みんな……どうすりゃ良いんだよ…」

「阿笠…」

秋人はなぜ阿笠がこんな態度をしているのか分からない。

それもそのはずだ。

麻冬が秋人を好きなことを知っているのは春樹と阿笠しかいない。

「わり……泣きそう」

阿笠は額に当てている左手で今度は目を押さえている。

阿笠は口元は笑っているが、その声は震えている。

「秋人に言うことじゃないよな……でも」

阿笠がいくら大人っぽくて紳士だと言われても、所詮は高校生だ。

昨日みたく優勝すれば秋人に飛び乗ってはしゃぐし、恋にだって悩む普通の高校生。

まだ部室にいる部員たちも何事かと阿笠の心配をしているが、秋人が何でもないと適当に受け流す。

気になるものの秋人にそう言われて部員たちはぞろぞろとグランドに出て行く。

部室がシンと静まり返る。

そして阿笠は静かに言った。

「…みんな秋人と麻冬がくっつくと思ってんだよ」

「何言って…」

「昨日の祝賀会忘れてないだろ」

秋人は阿笠にそう言われて何も言い返せない。

「…はやく告白してくれ」

「え？何て…」

春樹に秋人に負けるなと言われても

麻冬に阿笠と幸せになると言われても

秋人に宣戦布告されても

「はやくくっついてくれ……秋人…」

例え、悲しい結末でも。

next

第９１話【過去の会話】

時は巡る。

例え鮮明に記憶が残っていたとしても。

『阿笠ー』
『あ、麻冬。おはよう』
『昨日選抜だったんでしょ？どうだった？』
『もちろん勝ったよ』

付き合っていた頃のとある日の麻冬と阿笠。

ここで言う選抜は県選抜のことで、昨日はどうやら県別の対抗試合だったようだ。

『さっすがぁ』

麻冬が阿笠の背中をバシバシ叩きながら褒める。

すると阿笠は痛いって～、と笑って答える。

『秋人の回しが上手いんだよなぁ。本当感動するくらい』
『例のＭＦくんね』
『そうそう。天性の才能だなー、あれは』

実は麻冬はもう中学のときから秋人のことを知っていた。

とは言っても阿笠から話を聞いたり写真などで見たりする程度だからもちろん秋人は麻冬のことを知らないわけだが。

サッカーの話になれば必ずと言って良いほど出てくる秋人の名前をすっかり憶えていた。

『でもそれって彼と阿笠の息が合ってるってことよね』
『そう？』
『相性が良いのよ。きっと』

その程度のものだった。

このときの麻冬にとっての秋人は、阿笠の大事なサッカー仲間ってくらいの認識だった。

なぜなら麻冬が好きなのは阿笠だったから。

『でもカッコイイよね、彼』
『ね』
『性格はどんな？』
『そうだなー…あんま表情出さない不器用な奴かも』
『あ、あたし苦手だな』

まさかこのときいずれ秋人を好きになるなんて夢にも思ってなかっただろう。

『へぇ。苦手なんだ？俺は好きだけどなー』
『だって付き合っても放置されそうじゃない？』
『うーん』

表情出さないのは物事にあまり関心がないだけで、興味あるものにはかなり食いつく。

だからサッカーやってるときは別人のよう。

そう言わないのは阿笠がまだ秋人をそこまでよく知らないからなだけだろう。

秋人は一途だ。

『じゃあどんなのが良いの？』

麻冬は入学式で新入生代表のあいさつをしている秋人を見てかなり驚いていた。

中３に上がる頃にはもう阿笠と別れていたから、それ以降当然秋人の話も聞かない。

『あたしはやっぱり優しい人が好きかな』
『優しい人ねぇ』
『阿笠のことよ』

想像できないほどのラブラブぶりだった。

邪魔する人さえいなければ本当に一生ものだったかもしれない程の。

『…どーも』
『あー、照れてるぅ』
『からかうなよーっ』

高校も同じだし似てる夢を持っているのだから、きっと上手くいっ

ていた。

けれど1回だめになったものは、やっぱりだめなんだ。

特に今の2人の場合は愛し合ってるから付き合ってるんじゃない。

阿笠は確かに麻冬を好きかもしれないが、麻冬は阿笠を好きになろうと努力しているだけだ。

麻冬が阿笠を選んだのは阿笠が麻冬を幸せにできると確信したからではない。

昔の儚く散った恋の懐かしさに酔いしれてるだけなのだ。

『阿笠は？』

『えー、俺ぇ？』

『あたしだけに言わせるなんて卑怯でしょ～』

『…言わなくても分かるくせに』

初々しい2人。

幸せな時期はそう長くはなかったけど、それでも一緒にいた日々は幸せそのもの。

一緒にいれる、それだけで幸せだってことを中2ながら理解していた。

『分かんないもん』
『あー、ずりぃ！』
『どっちがよー』

それは2人がとても人気あって、その中でお互いを見つけたから。

そして阿笠のファンの子たちから嫌がらせされてたから、麻冬自身も一緒にいれるのは恵まれてると思っていた。

好きな人と一緒にいるだけで恵まれてるなんて、そんなこと普通の中学生が思うだろうか。

『俺の好きなタイプはー……まぁ好きになった子がタイプだしなぁ』
『つまり？』
『つまり麻冬が好きってこと！』

麻冬がからかうように突っ込むから阿笠は顔を赤くしてそう叫んだ。

それを見て笑う麻冬。

『…言わせたいだけだろ』
『あは、バレた』
『うーわ、もう絶対言わない』

スネた秋人に麻冬は思いついたようにこう言った。

『え～もしあたしが月影秋人に告られても?』
『ちょ…なんで秋人?』
『だって阿笠彼に頭上がんなそうだから』

ケラケラ麻冬は冗談交じりに笑って言うが、阿笠は本気になって言った。

『秋人なんかにやるわけないだろ!』

大声で言う阿笠に麻冬は少しびっくりしたような顔をする。

が、可愛らしく怒っている阿笠が嬉しいのか麻冬は阿笠の左腕を掴んで言った。

『絶対なびかないから大丈夫よっ!』

ニコニコ微笑んでる麻冬を見て阿笠は、してやられたという表情をしながら右手で顔を隠している。

こんな時期が2人にあったなんてにわか信じられない。

素直に自分の気持ちをこんなにも露にしている。

『もー。勘弁してよ』
『ごーめんって』

こんな会話をしていたことを2人はきっと憶えていないだろう。

2人にとってはある日の一会話にしか過ぎない。

秋人になんか譲らないし、秋人になんかなびかないと言った言葉

そんなセリフ、きっと忘れているに違いない。

このときの2人にはまさか麻冬が本当に秋人を好きになり、阿笠は秋人に麻冬を取られそうになろうとは思いもしなかっただろう。

もし阿笠が麻冬を振らなかったら
もし麻冬が星陵に進学しなかったら
秋人と麻冬が出会わなければ2人は恋に落ちるなんてことはなかった。
お互い惹かれ合うことなんてなかった。
「阿笠…どうしたんだよ。意味分かんないぞ」
秋人がそう言っても阿笠は泣くのを堪えるのに必死で返事なんかできない。
「くっつけって…なんで俺?それなら麻冬の好きな奴とだろ」
秋人は麻冬に好きな人がいることは知っている。
ただそれが誰なのかを知らないだけで。
「それが…誰だと思う?」

阿笠は震える声で言う。

秋人が知らないと答えると、阿笠は目を押さえている左手を目から放して秋人の顔を見た。

本当に何も知らない様子の秋人を見て、改めて事の重大さを理解したらしく、阿笠は深く目を閉じる。

そして、こう言った。

「…ついてない」
「え…？」
「あー…本当俺ついてない」

そして阿笠はすくっと立ち上がる。

しゃがんでいる秋人を見下ろしながら阿笠は切なそうに微笑んだ。

「…適わないや」

何が適わないのかと疑問に抱いている秋人を見ながら阿笠は、これ以上悩んでも無駄かもしれないと思っている。

何も知らないのならばきっと秋人は本気で来る。

本気で来たらおそらく意図も簡単に麻冬を取られてしまうんだろう。

阿笠がどんなに必死に抵抗したとしても。

そう思っている。

確かに阿笠は念願だった麻冬とより戻せて嬉しかったかもしれない。

けれどどんな強い人だって彼女に他に好きな人がいると知ってれば挫けるものだ。

例えそれを知っていながら付き合ったとしても。

「…秋人、ごめんね。意味分かんなかったよね」

阿笠は微笑しながら秋人に手を差し伸ばす。

秋人はその手を掴んで一気に立ち上がる。

「いや」
「でも…ずっとモヤモヤしてたんだ。いつか…」
「ん？」

いつか麻冬は自分の前からいなくなってしまうに違いない……と言おうとしたが阿笠はやはり言うのをやめる。

「や、何でもない」

どんなに言葉にしてもらっても不安が消えないというのなら

相手を信用できないというのなら

それは相思相愛なんかではない。

絶対に

「部長、副部長。そろそろ…」

部室のドアが開き部員が秋人と阿笠を呼びに来た。

阿笠は急いで着替え始める。

秋人が返事をするとその部員は足早にグランドに戻って行く。

阿笠が着替え終わるのを待って2人は一緒に部室を出た。

グランドには他のサッカー部員が少し心配そうな顔をしながら2人を待っていた。

next

第９２話【練習風景】

阿笠はグランドのみんながいる場所へ行く前に水道で顔をバシャバシャ洗った。

着ているウェアで顔を拭き、じっと水道を見つめてから両頬を手でパンッと叩く。

「……うしっ」

気合いを入れたのか切り替えるためなのか。

阿笠はみんなのところへ行き、阿笠が加わってようやく練習が始まった。

この間の秋人のように練習中に他のことを考えて部活を疎かにしないためにやったんだろう。

阿笠も秋人と同じくサッカーに命をかける男なのだ。

昨日試合が終わったばかりなので今日の練習は流す程度のもの。

ランニング、アップ……と始まり軽くパス練やドリブルをしたりしていく。

始まってから1時間ほどすぎてレギュラー陣がシュート練をし始める。

ゴールに里田をつけての練習で、他の部員たちも違うゴールで同じ練習をしている。

「あっ！」

ある1人のレギュラー部員が里田に止められて声を上げる。

「あーあ、行ってらぁ」

阿笠は笑いながら彼にそう言う。

彼はやられた、というような顔をしながらグランドを2周ほぼ全力で走る。

彼に続いて何人か同じように走りに行った。

里田に止められたら走るのが決まりのようだ。

走り終わったらまた練習に加わるのだが、ミスをすればまた走らなければならない。

しかもミスをするたび走る周が長くなるのだ。

始めは2周だが次は3周、4周と。

なかなかキーパーに止められることもそうそうなさそうなのだが、そこは星陵一のキーパー。

並外れたものである。

長年の経験の直感と相手のちょっとした動作や心理から読み取れるようだ。

またダイナミックなアクロバットも見ものである。

その練習が20~30分続いた頃、レギュラー陣のほうではまだ残っているのが秋人と阿笠だけになる。

「おいおい……」

秋人も予想外のことにちょっと驚いている。

「みんな手抜きすぎじゃん？いくら流しっつっても」

阿笠と秋人はグランドを走ってる多くの部員たちを見ながら傍観者のごとく言う。

いつもなら2人しか残らないなんてことはない。

が、今日に限ってはみんな走っているし中には走りすぎてバテている人もいる。

阿笠のようなＦＷにはまだ有利な練習だし秋人のようなＭＦにもまだマシだ。

だがＤＦ陣には少し辛いものもある。

「里田、休憩して良いよ」

「うっす」

阿笠が里田にそう声をかけると、里田は走ってドリンクを飲みに行く。

阿笠がそんなことをしてる間、秋人は他の部員たちに向かって叫んでいた。

「おい！少しだらしないぞ！集中してやれ！！」

走っている部員たちは息をゼイゼイと切らしながらも、これでもかってくらい大きな声で返事をした。

グランド中に響く声。

他のグランドでやってる運動部が、大変だな…と気の毒そうに見ている程だ。

流す程度のはずなのに結局かなり力が入っている。

秋人が戻ってくると、阿笠と秋人の目が合った。

「…お前、なんかすごいな」

「んー？」

「切り替え早い。そこんとこ見習わなきゃな」

秋人が関心しながらそう言うと、阿笠はフッと笑う。

「サッカー大好きなんだ」
「ふーん」
「あれ。麻冬より？って聞かないんだ」
「だってそれ前に聞いた気がするからさ」
「あは、そうだっけ」

俺なんて答えたっけなー、なんて阿笠が笑いながら言っていると秋人は冗談交じりに言った。

「サッカー」
「えっ、嘘！」
「うん、嘘」

秋人は足元に転がっているボールを足で拾って軽くリフティングをし始める。

ポーンポーンと、まるで足に吸い付くかのように華麗なリフティングを魅せる。

「選べないけど、サッカーやってない将来はないって言ったな」
「へーぇ。よく憶えてる」

「俺も同じだから」

少し意外な言葉を聞いて阿笠は秋人を見ている。

そして、リフティングやっている秋人に
「パス、パス」とパスを誘う。

秋人はポーンと阿笠に向かって軽く弧を描くように蹴り、それを阿笠が足で受け取る。

2、3回リフティングしてから同じように秋人にパスを返した。

秋人も阿笠と同じ行動を繰り返している。

「大学は？」
「んー…行かないな」
「同じとこでプロになったりして」
「え、ありうる」

他愛もない会話をしていると、ようやく少しずつ部員たちが戻ってきた。

半分集まったところで練習に入ろうとするが、やたらみんな疲れて

いるため仕方なく１０分間休憩に入ることにした。

別にそこまで疲れてなく喉も渇いてない秋人と阿笠は２人でボールを蹴って遊んでいる。

「部長たち…さすが」
「よく疲れないな…」

グランドに座り込んでいる部員たちが２人を見ながらそう言う。

まぁ２人はグランドを走ったわけではないのだからそこまで疲れてなくて当たり前だ。

秋人と阿笠はそのうちゴール１つを使って１ｏｎ１をやり出す始末。

始めは軽く遊び程度にやっていたが次第にむきになって本気で競り合い出した。

阿笠対佑亮ほどではないが、秋人より攻撃が上手い阿笠と阿笠より守備が上手い秋人だから戦いは平行線。

つまり秋人は阿笠の攻撃を止められないし、阿笠も秋人の攻撃を止

められないということでもある。

阿笠は天才と呼ばれる意地を見せ、秋人もカリスマ性のあるプレーをする。

疲れているはずの部員たちもつい2人に見入ってしまうほど。

「もらい！」
「させるか！」

夢中になっている2人に里田がストップウォッチを見ながら「あと1分で終わりっすよー」と元気に言う。

「えっ、もう?!」
「やべっ」

2人は焦りながらみんなのところへ行き、ドリンクを飲む。

タオルで汗を拭きながら、疲れたぁーなんて言っている。

休憩なのに逆に疲れるとは。

「あ、そうだ。部長、土曜の県選抜のことなんすけど」
「ん？」
「あれじゃないっすか。練習って西部だから朝めちゃ早いすよね」
「そうだっけ。なぁ阿笠」
秋人は木村に話しかけられ、阿笠に振る。
阿笠もあんまり憶えていないらしく首を傾げてる。
「金曜から行きます？」
里田も加わる。
県選抜にはこの４人が選ばれているのだ。
「朝早いのもかったりーしなぁ……って」
「「あ」」
秋人と阿笠は声を合わせて言う。
何すか？と言った里田を差し置いて２人は顔を見合わせて
「あー！」と叫んだ。
そう、土曜はサッカー観戦に行く日なのだ。

2人は選抜の練習があることをすっかり忘れていたようだ。

「おい、どうする？」

「でもさぁ、せっかくチケット取れたのに」

2人はヒソヒソと話す。

もうとっくに10分は過ぎてしまっている。

この観戦は前々から2人が楽しみにしていて、苦労してようやく手に入れたもの。

そのチケットを無駄にするのは実に惜しい。

秋人と阿笠は、行くしかないだろと言わんばかりにお互い頷き、アイコンタクトをする。

「ごめん、その日俺法事あるんだ」

「俺山梨にいるばーちゃんの見舞い行かなきゃなんだった。わり、木村と里田2人で行ってくれ」

明らかにその行動から嘘だとバレバレだが、木村と里田は特に深くは突っ込まずにいる。

「自主的にサボりって珍しいっすね」

里田が笑いながら言う。

ギクッとする2人だが、

「こればっかははずせないからさ」と見苦しい言い訳をし続ける。

言い訳してもバレバレだが、2人がサボることがあまりにも珍しいことなのでよっぽどのことがあるんだろうと周りは思っている。

秋人は3年部員に土曜の練習は4人いない旨を伝え、練習メニューも土曜までに紙書いて渡すからと説明をする。

「秋人、そろそろやんなきゃやべーぞ」

「ああ、そだな」

そうしてようやく休憩が終わり部活が再開された。

next

第９３話【中丸】

「ん～っ。…あー！だめだ！」
「わはは、春樹ふっちょーう。試合終わって気ぃ抜けた？」
「そうじゃないけど～」

春樹はスマッシュ練習をしているとき、どうにもコントロールが鈍り狙いどころへ打てないようだ。

春樹のダブルスのペアの中丸が笑いながら春樹に話しかけている。

中丸は副部長で春樹には劣るもののなかなかの実力の持ち主でもある。

この間の大会では春樹と組んだダブルスは3位、シングルスでも3位という結果を持っている。

インターハイに行ける実力はあるが、その中で上位に行くまでの実力ではないくらいだ。

「つーかさ、やっぱ俺らダブルス向いてないのな」
「ん？あはは、何今更」
「この間実感した」

中丸がそう言うのも無理はない。
彼らはどう考えてもシングルスプレーヤーで、ダブルス向きではない。
その証拠に県大会でダブルスで3位以上を取ったことは一度もないのだ。

「だって俺と中丸だもん。ぶっちゃけ賞増やすためにやってるようなもんだよね」
「だよなぁ。ダブルスはおまけって感じだな」
「俺ら中1のときから組んでんのにね」

春樹たち2人だからこそ笑い話にできるものだ。
他の部員が聞いたら怒るだろう。

結局今大会で入賞したのはこの2人だけなのだから。

「でもお前は良いじゃん。俺なんてWもSも3位よ」
「へへーん」
「あーあ、最後くらいはインハイでベスト8入りてぇな」

ところでなぜ2人がこんなにのんきに話なんかをしてるかと言うと、実は他の部員は筋トレをやらされてるからである。

なぜ2人はやってないのかはサッカー部とほぼ同じ。

2人1組で打ち合いをするのだが、10分間ミスらずにやらなければならない。

1回ミスるごとに腕立て・腹筋・スクワット10回ずつで、10分間の打ち合いが終わったあとに全部の筋トレをやるのだ。

極端に言えば10回ミスれば腕立て腹筋スクワットを100回ずつやらなければならない。

春樹と中丸ペアは当たり前ながらミスはなし。

「ところで今日めっちゃ騒がれてたな。春樹」
「ん、ああ、制服ね」
「どうしてまた急に」
「それは明日のお楽しみ」

春樹は笑いながら言った。

中丸は意味が分からないながらも春樹が話す気がないと思ったのかそれ以上は深く追求せず、ふーんと流した。

「あ、そういえば良いこと教えてやるよ」

中丸は耳貸してみ、と楽しげに言う。

春樹は言われた通り中丸に耳を傾けると、中丸はコソッと耳元で囁いた。

「男バスの坂本いるじゃん」
「あー、あのちょい色黒の」
「そう。そいつが夏実ちゃん好きって噂」
「はーーー??!!」

春樹の叫び声に筋トレ中の部員たちが何だ何だと振り向く。

「ばかっ、声でけーよ」

中丸は焦りながら言う。

「ご、ごめん。だって」
「俺の彼女知ってるだろ」

「あ、女バレ副部長の」
「幼なじみらしいんだ」
「坂本と？うーん…」

女子バレー部の副部長はセッターの人だ。

1年のときから2人はコンビを組んできた。

その子が坂本のことをいろいろと中丸言ってくるらしい。

「あれだよな、夏実ちゃん今フリーだし」
「あ…ああ、そっか」

中丸は…というか秋人と阿笠以外夏実が春樹のこと好きなのを知らない。

「元気だし明るいし可愛いし、確かに良い子だよな」

楽しそうにそう言う中丸の側で春樹は確かめるように尋ねた。

「夏実…人気あるの？」
「んぁ？そりゃあな。麻冬ちゃんみたいな女の子らしい子が好きって奴もいるけど、一緒にワイワイ騒げる夏実ちゃんを好きって奴も

普通にいるよ」
「麻冬がモテんのは知ってた…」
「お前案外失礼だな」
「…だって…」

春樹は軽くショックを受けてるようだ。

夏実がモテないと言ってるわけではない。

春樹は2回も夏実を振ってしまってるから、次もし誰かが夏実に告白したら夏実はその誰かに流れてしまうかもしれないと心配しているのだ。

……麻冬のように。

誰だって何回も振られれば逃げてしまいたくなるもの。

無意味に愛するより、誰かに愛して欲しい。

そう思うのはきっとワガママなんかではない。

「春樹はどっち派？」
「何が？」
「夏実ちゃんと麻冬ちゃん」

「夏実」
「わーお、即答。なんでなんで？」

中丸は興味津々に詰め寄ってくる。

春樹は考える暇もなくはっきりズバッと言った。

「夏実が好きだから」

春樹がそう言うと、今度は中丸がさっきの春樹と同じように大声で叫んだ。

「ほらぁ、中丸も声おっきいって」

春樹はケラケラ笑って言うが、中丸は予想外の言葉にかなり驚いている。

まぁ無理もない。

いくら春樹が分かりやすいとは言ってもそれはいつも一緒にいる秋人や麻冬だからバレていただけ。

春樹は落ちているシャトルをラケットで拾い上げて、器用にポンポンと軽く打ち上げている。

「いっ、いつから?!」
「中1」
「あ?だって学校違うだろ」
「まぁまぁ。出逢う運命だったんだよ、俺ら」

春樹の言葉を理解できない中丸は不思議そうな顔をしている。

「つーわけで坂本には負けないから。じゃ打ち合いでもしよ、中丸」
「お、おう」

春樹が反対側のコートに鼻歌を歌いながら移動していく。

中丸は唖然としながら春樹を見つめているが、春樹が早々と打ってきたから中丸は現実に引き戻される。

「ちょっ…わっ…」

中丸はなんとかシャトルを打ち返す。

バシュッと音を立てながら春樹は陽気に言った。

「なっちゃん！これ負けたほう筋トレだかんね！」
「でぇっ？！なっ、何点？！」
「1本勝負だって！」

そう言うと春樹はいきなりスマッシュを打ってくる。

もちろん中丸はそれを返し、ラリーの応酬となる。

星陵バド部ははっきり言って全国レベルなのはこの2人だけである。

中丸が強いのには訳がある。

2人は中学からの仲で、彼らが1年のときに3年が引退したあと偶然ダブルスのペアを組むことになった。

小学校のときからバドをやってる春樹と中学から始めた中丸。

差は歴然だった。

「隙あんぜ！」

中丸はそう言いながら春樹の右手後ろに向かって打つ。

「どこがっ？」

負けず嫌いの春樹はそう言いながら危なくも打ち返す。

「おわっ！」

春樹ももちろんペアなのだから中丸に教えたりもした。

だが基本勝手に打っていたい派の春樹だったため、そこまで中丸に手が回らずにいた。

中丸も中丸で、比べられるのが嫌だと必死に自主練もしたりして上達していったのだ。

その自主練の量は半端なものではなかった。

手に血豆ができてはテーピングをまき、テーピングをまくのすら痛くなるほどラケットを握った。

目に見えて上達していく中丸は、中2に上がる頃には春樹の隣に立てるくらいまでになっていた。

その頑張りは春樹も十分分かっていた。

だからこそ敢えて手を貸さなかったのかもしれない。

隣に立てると言っても全国レベルにまで上がったわけではなく、それでも県大会に出れるくらいだった。

シングルスとして数々の大会に出ていた春樹はシングルスプレーヤーとして知られ渡っていたが、最後の大会である中体連ではダブルスで全国に行った。

もちろん2人ともシングルスででも全国へ行ったが。

「部長、副部長ー。全員筋トレ終わったっす」

部員が2人にそう声をかけると、部長である春樹は指示を出すために「あ、ほんと?」と油断をしてしまった。

中丸はそこをついて思い切りスマッシュを打ってようやくラリーが終わった。

「あーー!!!」

「やりー!」

中丸はガッツポーズをして笑っている。

春樹は、今のはずるい！と反論するが結局そんな抵抗もむなしく春樹は筋トレをすることになった。

１０回ずつだからすぐに終わり、全員揃ったところで次の練習へと移った。

next

第９４話【春樹の本気】

今日は少しバド部の練習が長引いたため、先に終わった夏実は体育館１階のベンチに座りながらバド部の練習を見ていた。

「お疲れ、春樹」

夏実は春樹が部室で着替えているときに自販機でジュースを買って待っていたようだ。

はい、とジュースを手渡す。

「わー、ありがと！」

そんな光景を見ていた中丸は、何か煌めいたのか、手招きして春樹を呼ぶ。

「あ、ごめん夏実。ちょい待ってて」

「うん」

「夏実っ、おまたー」

春樹は中丸のほうへ行き、何？と尋ねた。

中丸は小さな声で言う。

「分かったわ。お前今日夏実ちゃんに告んべ？」

「えっ！」

「だから制服なんだな」

図星を差されて春樹は、バレたかと舌をベッと出しながら言った。

中丸はやっぱり！と笑いながら春樹の肩に手を置く。

「さっきいらんこと言って悪かったな」

「んにゃ、全然」

「まー頑張ってこい！」

「おうっ」

そうして2人はじゃーなと言って別れ、春樹は夏実のもとへ駆ける。

春樹と夏実は体育館を出て駐輪場へと向かって行った。

一方秋人たちも同じように駐輪場へと向かう途中だった。

麻冬を待ちながら自主練をしていた秋人と阿笠のもとに麻冬がやってきて、3人で話しながら歩いている。

いつもそうだ。

前までは麻冬と一緒に帰っていたのは秋人だったから2人だけだったが、麻冬と阿笠が付き合い始めてからは阿笠も時々しかしてなかった自主練を毎日するようになった。

そうして麻冬が来たら3人で駐輪場に向かい秋人が先に1人で帰るか、もしくは秋人だけ残って自主練を続けている。

「んじゃお先ー」

駐輪場につくと、阿笠は早々駐輪場から自転車を出して股がる。

「おう、また明日」
「ばいばい阿笠」

阿笠がいなくなってから2人も自転車を探し、取り出す。

2人して帰る用意ができ自転車を走らそうとしたとき、ちょうど夏

実と春樹がやって来た。

「あーっ、偶然〜」

夏実が2人に手を振ると、2人は夏実と春樹に気づいて走らすのを止める。

「お疲れ。遅かったのね、夏実たち」
「今日は俺んちが長かったんだ」

そんな会話をしていると、夏実がどうせなら久しぶりに4人で帰らない？と言い出した。

麻冬も、良いねー！とその提案に乗っている。

夏実に告白するつもりでいる春樹と、せっかく麻冬と2人で帰れるチャンスの秋人はお互い顔を見合わせて、数秒してから何やらアイコンタクトしたのかほぼ同時に頷いている。

そして春樹が言った。

「ほら夏実、はやく行かないとドラマ始まるよっ」

「えっ、え？ドラマ何かやってたっけ？」

春樹が夏実の手を引いて自転車を探し出す。

秋人も秋人で、麻冬にそろそろ行こうぜと声をかけて自転車をこぎ出す。

「あれっ、一緒に帰らないの？」

春樹も秋人も夏実や麻冬の言葉を丸切り無視している。

秋人が

「じゃーな」と春樹に声をかけると春樹も意気揚々と

「また明日！」と声を上げる。

麻冬は何が何だか分からないようだが、秋人が行ってしまうので付いていく。

夏実は行ってしまう2人を目で追いつつ自分の自転車を探している。

もうちょっと気が利いた言い訳ができないものか。

どうせなら秋人も告白してしまえば良いのに。
そうしたらダブルで両思いになって４人幸せでハッピーエンドになるのに。
……そんな上手く簡単にいくはずもないか。
麻冬がすぐに秋人に乗り替えるなんてことはきっとない。
それでも諦めないで秋人は食いつくだろうか。
それともすぐ諦めて悲しみを癒そうとするのか。
「秋人、どうしたの？もしかして怒ってる？」
「いや」
「春樹も変だったなー」
ゆっくり道を自転車で走りながら2人は会話をしている。
自転車だと２０分強くらいで家に着いてしまうため、秋人はすぐに本題に入る。

「あのさ、春樹のことなんだけど」

秋人は春樹のことを言うか言わまいか迷っていた。

けど学校で麻冬と、秋人が夏実を好きだったという話をしたから覚悟できたのか、言うと決めたようだ。

「夏実さ、2回春樹に告ってんだ」

「……え？」

「体育祭前日と、先々週…だっけ？の金曜日くらいに」

「告…って……ほんとに？」

「ああ」

麻冬はかなり意外な事実を聞かされて驚いている。

そうして頭を整理しながら、なんで2回なの？と尋ねた。

秋人は自分を責めながら、その重々しい口を開く。

「振ったんだ…夏実のこと。それも2回とも」

なんですって？！と叫ぶ麻冬の顔を見ることができずに秋人は夜道の地面を軽く見つめる。

「1回目は…俺が夏実を好きだから春樹が遠慮した」
「そんな…」
「2回目は、もう俺の誤解は解けてたけど……だからOKするのは都合良すぎるって言って振ったんだ」

秋人だって本当はこんなこと話したくないだろう。

けれど明日どうせ知ることになるならと、2人の代わりに言っているのだ。

知らなかったで済まされないように。

「だけど春樹は、それでもやっぱり夏実が好きなんだって。だから今日告るって」
「……だから制服なの」

麻冬の言葉に秋人は頷く。

麻冬は呆れて…というか驚きのあまり言葉もないようだ。

それもそのはず。

自分の知らないところでそんなことが起きていたのだ。

すると麻冬は、思い出したように言った。

「もしかして阿笠知ってる？」
「あ？ああ」
「そっか…だからあのとき……。あ、じゃあ阿笠と春樹のケンカって…」
「そう。そのこと」

なるほどねー…と少し納得している麻冬に、秋人は言った。

「いろいろ黙ってて悪かった」
「んーん。本人たちの問題だもんね」
「……上手く行くかな」
「あら、行くわよ」

麻冬があまりにもきっぱりと断言するものだから、ついに秋人は麻冬のほうを振り向く。

麻冬は風でウェーブの髪を揺らしながら笑っている。

「その日…夏実が2回目に振られた日ね、夏実あたしんち来たの」
「えっ」
「それでも春樹が好きだって笑って言ってたわ」

「笑ってって…」

秋人の言葉を無視するかのように麻冬は、だから大丈夫よと付け足した。

そんなこと保証はできないけど、麻冬がそう言うからなんとなく秋人もそう思い、言った。

「そうだな」

そうして2人は仲良くいろいろな話で盛り上がりながら20分という短い時間を満喫した。

その頃夏実と春樹も、秋人たちに遅れながらも一緒に自転車で帰っている。

まさか春樹に告白されるなんて思っていない夏実は、いつものように楽しげに世間話をする。

「もー、だから春樹にも見せたかったなぁ」
「俺も見たかったな」
「でしょ？」

夏実と春樹たちも自転車でなら20分ちょっとくらいで着いてしま

う距離だ。

けれど春樹はなかなか言い出せないでいる。

かなり緊張しているらしく、夏実との会話も空返事をしているくらいだ。

だけど夏実はそんなことには全く気づかず、いつもの調子でいる。

結局春樹は何も言えないまま夏実との分かれ道にまで来てしまった。

「じゃあまた明日。春樹」

ここで分かれたらなんのために制服を着てきたのか。

なんのために久しぶりに4人で帰れるところをわざと2人きりにしたのか。

「……待って」

行こうとした夏実に、春樹は小声で呼び止める。

夏実はそれを聞き取り自転車にブレーキをかけた。

「ん？」

これから起こることを予期していない夏実は無邪気な顔を春樹に見せる。

春樹はハンドルをギュッと握って唾を飲む。

「坂本…知ってる？」
「男バスの？もちろん」
「…坂本が夏実を好きなんだって聞いた」

いきなりの春樹の話題に夏実は、いきなり何言ってんのーと笑い飛ばしている。

それでも春樹はひるむことなく言い続けた。

「坂本に……坂本だけじゃなく誰かにもし告られたら夏実は付き合う？」

その言葉はあまりにも無神経すぎて、夏実は春樹をキッと睨む。

「春樹…」

それもそのはず。

夏実は2回も春樹に思いを伝えているのだ。

なのにそんなこと尋ねられたらどんなにショックか。

「や、違う」

けれど春樹はすぐさま訂正する。

「そんなんが言いたいんじゃなくて……」

春樹にとっては一世一代の出来事なのだ。

恥ずかしいのか緊張してるのか気まずいのか、春樹は一瞬夏実から視線を反らす。

けれど夏実が真剣な瞳で春樹を見つめるものだから春樹はいたたまれなくなっている。

「夏実が誰かと付き合うなんて考えられなくて」

春樹は自転車から降りて、片手でハンドルを握って自転車が倒れないように支えながら立っている。

「なくて……何？」

反射的に夏実も自転車から降りる。

春樹の言葉に隠された本音を知ろうと必死なのだ。

けれど夏実は春樹が何かを言う前に口を開く。

「…あたし2回も春樹に告白したよ。なのにそれってあんまりじゃない？」

少し泣きそうな顔をしながらそう言う夏実。

春樹は自分が勝手なことを分かっているのか、罰の悪そうな顔をしている。

しばらく沈黙が流れる。

「……春樹の好きな子誰なの？…気をもたせるようなことしないで」

2回目に告白したときの春樹の言葉、夏実は忘れてなんかいない。

明らかに両思いのはずなのに付き合えない意味が分からないのだ。

例え春樹がちゃんと言うと言っても、いつまでこんな気持ちになっていれば良いのかと不安も抱えている。

夏実にとっては友達関係を続けることさえ辛いかもしれない。

何もなかったように振る舞わなきゃいけないから。

「…違う！」

それまで黙っていた春樹がようやく言葉を発した。

「違うって…何が？」

「俺はっ……」

春樹は言葉に詰まる。

そんな春樹に夏実は言った。

「春樹前にあたしが彼氏に振られたとき、側にいてくれるって言った……。…守れない約束はしないでよぉっ」

「違う！」

春樹は震える肩を抑えようとしながら、グッと堪えた顔をしている。

そして手をギュッと拳にして、力を入れる。

「気なんかもたせてない！側にいたいからああ言った！俺はっ……」

春樹は地面とにらめっこ状態をしている。

いろんな思いを背負いながら目をギュッと一瞬瞑り、何か覚悟を決めたのか、夏実の顔を見てバッと身を乗り出す。

「春っ……んっ…！」

春樹は夏実の後頭部を支えてキスをした。

春樹の自転車は春樹が手を離した瞬間にガッシャーンと音を立てて

倒れた。

そのキスは深く力強く

そして愛しく。

「……夏実が好きだ」

春樹は唇を離してギュッと夏実を抱きしめながら耳元でそう囁いた。

next

第９５話【告白―キス】

どれほどの人が恋愛をしているだろう。

片思い
両思い

失恋
遠恋

なぜ人は人を好きになるのだろう。

誰しもが幸せな恋ができるわけではない。

辛くて悔しい思いもする人は必ずいる。

それでも…

「さかもっちゃーん」
「ん？あー、里菜彼」
「あっ、その呼び方やめろよー。」

部活を終えて着替え終わった中丸淳が男バスのいる体育館2階へと向かう。

「つか里菜は？」
「あー、里菜早退。なんか腹痛だって」
「は？！聞いてねーっ」

里菜とは中丸の彼女兼坂本の幼なじみ。

そしてバレー部副部長。

ちなみにバド部は1階、バレー部とバスケ部は2階で部活やっているのだ。

「あ、そうだ。お前夏実ちゃん好きなんだって？」
「は？！」
「あ、里菜から聞いた」

中丸はおちゃめに可愛らしく言った。

まさかバレてると思っていなかった坂本はかなり驚いている。

「告んの？」

そんな坂本を無視するかのように中丸はズカズカと質問をする。

この2人は中丸が麻生里菜と付き合ってから知り合ったものだ。

中丸たちが付き合い始めたのは去年の夏休みのこと。

そこから坂本と中丸が知り合って仲良くなった。

「や、もう告ったし」

「えっ」

中丸は意外な事実にかなり面白い顔をしている。

里菜からそんな話は聞いていなかったのか、まずい…というような顔つきだ。

「里菜にも言ってねぇから知らなくて当然だよ」

中丸の気持ちを察したのか坂本はそう言った。

「…振られたよ」

坂本は苦笑しながら言う。

「…好きな奴いるんだって。振られたけど頑張るって」
「ふ…られた？」
「ああ」
「だ、誰に……」

中丸が恐る恐る尋ねると、坂本は一瞬躊躇する。

中丸も中丸で、この予想外な展開には追いつけずにいる。
たった今、春樹が夏実に告白しに行ったのだから。

「お前んとこの部長だよ」
「…は、春樹――――？」

中丸は夏実が振られた人が春樹だと聞き、頭を押さえる。
矛盾している出来事にパニックに陥っているようだ。
どういうことなのか全くもって分からないでいる。

「あーあ。櫻井じゃあ勝てっこねぇよな」

混乱している中丸をよそに、坂本は少し声を上げて言う。

「…あいつチビのくせにでっけーんだよな。絶対適わねぇや」

「坂本…」

「あーっ、くそ。なんでお前にこんなこと言ってんだろ」

中丸はまだ矛盾している春樹のことが気になっているようだが、それよりも坂本があまりにも明るく振る舞っているものだからそっちのほうが気になるようだ。

坂本は中丸の彼女の幼なじみ…

今じゃそんなレッテルはいらないくらいの仲になった。

友達として失恋した人を励ましたいと思うのは当然だ。

「…まぁまぁ。きっとまた良い恋できるよ」

中丸が坂本の肩に手を起き微笑みながらそう言うと、中丸は照れを隠すかのような表情をしている。

「ふん。よく言うぜ」
「よっしゃ！なんか食いに行こうぜ！おごっちゃる！」
「おっ、まじか！」

坂本と中丸は一瞬に体育館を出る。

中丸はもう酔っ払っているかのように叫んだ。

「よーし、飲むぞー！！」
「ばか！学校でいらんこと言うなっつの！」

坂本はそう言うけれど、内心嬉しかった。

里菜にも言えず

他に知っている人もいない。

だから今こうやって

笑顔でいられる。

例え失恋したとしても。

「嘘…言わないでよ」

夏実は春樹に抱きしめられながら震える体を治めようとする。

「嘘なんかじゃない」

まさか春樹がこんなに大胆な行動に出るとは…

夏実は目の前が真っ白になりながらも必死に事を理解しようとしている。

「…助けてくれたときからずっと好きだった」

「ならなんでっ…」

「ごめん、しか言えない」

春樹は夏実を離す。

夏実は目に涙をためていて、今にもこぼれ落ちそうだ。

「言えないけど…夏実を傷つけたのも本当だけど、でも信じて。誓って二度と傷つけない」

春樹のその言葉に、夏実はついに涙を流した。

「本当に……？」

春樹は人差し指でその涙を拭う。

「本当だよ。俺、夏実が好きなんだ」

春樹はいつものような無邪気で愛らしい笑顔ではなく

穏やかで大人びた表情をしながら微笑んでいる。

「あたしっ……春樹好きで良いの？」

「良いよ」

「一緒にいて良いの…？」
「うん。いて」

今度は夏実は自分の袖で涙を拭っている。

溢れる涙を抑えきれずにいる夏実を見て、春樹は愛しく思う。

そして、夏実は最後の最後に勇気を出して言った。

「あたし…春樹の彼女なの…？」

春樹は涙を拭っている夏実の腕を掴み、頬に流れている涙をペロッと舐める。

「彼女だよ」

舌をベッと出して片目をウインクしながら春樹は笑う。

夏実はそんな春樹に抱きつく。

春樹は急だったからびっくりして一瞬よろめいたけど、しっかりと夏実を受け止めた。

春樹は左手を夏実腰に回し、右手を首の付け根に回しながら優しく抱きしめる。

「ばかっ…ばか！」
「うん。ばかかも」
「もう振られたって離れないんだから！！」
「あは。もう絶対振らないよ」

春樹はいつからこんなに男らしくなったんだろう。

背だってまだ夏実より低いし、童顔だ。

けどその手は力強く
その胸は温かく

全身で夏実を好きだと言っている。

「春樹…あたしのこと好き？」

夏実は春樹の顔を見ながらそう尋ねた。

春樹は口元でニコッと笑いながら、再びキスをした。

今度は甘い甘い

長いキス。

「大好き」

2人、ようやく結ばれた。

両思いだったのに言葉足らずですれ違い

告白したのに振り振られ

幾度となく味わう挫折

でもそれでも諦めなかった2人の愛の勝利。

「……春樹んち行って良い？」

「…輝樹？」

「うん、そう」

春樹は倒した自転車を起こしながら、嫌そうな顔をしつつも良いよと答える。

そういうわけで2人は春樹の家へ向かうことにした。

途中薬局があり、突然夏実が入りたいと言い出した。

何を買うのかと思いきや、染色剤だった。

しかも黒の。

ギョッとした春樹が何でかと夏実に聞くと、夏実は笑いながら言った。

「もう勇気入らないもの。春樹がいてくれるかな」

夏実の笑顔がやけにキラキラ輝いていて、春樹は一瞬ドキッとした。

「そっか」

そうして2人は買い物を終えて薬局を出る。

春樹の家へはすぐに着き、夏実は春樹の親にあいさつをしてから2

人で先に夕飯を食べ終えていた輝樹の部屋へと向かう。

ノックをすると輝樹は、どーぞーと適当な返事をした。

夏実と春樹が部屋に入ると、輝樹はまさか夏実がいるとは思わずに少しびっくりした顔をしている。

「はい、輝樹」

夏実は手を振りながら輝樹に近づく。

ベッドに寝っ転がっていた輝樹は思わず体を起こす。

「な…夏実っ……」

「輝樹と話したいって言ったじゃん。だから来たの」

すると夏実は春樹に、2人で話したいと申し出た。

前に夏実が輝樹に何をされたか知っている春樹はかなりためらっている。

実の弟だけど、心配なものはやはり心配なのだ。

「あのな、兄貴。俺だって…」

輝樹が反論しようとすると、春樹が言った。

「輝樹っ。言っとくけど俺の彼女に手ぇ出したらただじゃおかねぇからな！」

「えっ」

そう言って春樹は部屋から出て行く。

部屋には輝樹と夏実の2人だけになり、シーンと沈黙が流れた。

輝樹は立ち上がって夏実に近づく。

「俺の彼女…」

「さっき春樹に告白されたんだ。付き合うの」

「…ふーん。そ」

輝樹はようやく付き合うんだ、と言わんばかりの顔をしている。

夏実はさっそく本題に入ろうとするが、夏実よりも先に輝樹が口を開いた。

「…何が聞きたいのかだいたい分かってる」
「え？」
「まぁ座れば」

輝樹は座布団を夏実に差し出す。

輝樹も座椅子に寄りかかりながら方膝を立てて、立てているほうの膝を手で組んでいる。

そして、輝樹は夏実が知りたかった真実を話し始めた。

next

第９６話【事の真相】

「あーあ…大丈夫かな」

春樹は自分の部屋でモンモンとひたすら夏実が戻ってくるのを待っている。

春樹も輝樹が同じ過ちをするとは思ってはいない。

けど輝樹が夏実を好きなことを知っているから、万が一のことも考えてしまうようだ。

結局どんなに夏実がやんちゃでも輝樹には敵わない、と。

そんな心配とは裏腹に、輝樹と夏実は真面目に話している。

輝樹が幼少期からの春樹との関係のことを話し始めていた。

『春樹くんは本当いい子ね』

数々のおばさんたちがそう言っていたようだ。

春樹はあんな性格だから人から好かれやすかったし、輝樹は不器用だった。

春樹がバド部を始めてからは一層春樹ばかりに注目が集まっていた。

「……良いよなぁ、兄貴は」

輝樹は注目されたかったわけではないけど、春樹ばかり愛されていたのが子どもだった自分には寂しかったんだ…と言った。

長々と語られる2人の関係を、夏実は一字一句たりとも聞き漏らしはしない。

「でもそれが兄貴だから仕方ないって割り切ってた」

そして輝樹は夏実の顔をチラッと見て、でも…と続ける。

「そこに夏実が現れた…」

輝樹が夏実のことを知ったのはもちろん春樹が高校に上がってから。

春樹が他の3人と仲良くなって家へ連れてきたりしてから、輝樹も夏実を知った。

特に夏実はいつも春樹と一緒に帰ってくるもんだから、輝樹も夏実と話す回数が増えた。

「…あたし？」

輝樹は夏実そのものに惚れたのだ。

茶色いその髪の毛も
元気なところも
喜怒哀楽があるとこも

すべてに惚れた。

「兄貴ばっかいろんなもん手に入れて…ずるい」

輝樹は春樹が夏実を好きなことくらい知っていた。

だから余計に悔しかったのかもしれない。

「兄貴は夏実だってきっと簡単に手に入れる…そう思った」

輝樹は立てている膝を伸ばし、軽くため息をつく。

「だから、夏実が俺のこと好きになれば兄貴にも勝てるって思ったんだ」

「結局春樹に勝ちたかっただけなの？」

「…ばかか、お前」

輝樹は呆れたように夏実を見る。

夏実は未だ意味を理解していないようで、首を傾げる。

「…好きだからだよ」

「え？誰、春樹？」

「お前だよ」

夏実は予想外の告白に

「えっ！」と声を上げる。

そして輝樹は、いくらなんでも好きじゃない奴に対抗心だけであんなことしねぇよ…と小声で呟いた。

夏実はようやく輝樹があんなことした意味を理解したようだ。

「お前だけは取られたくなかったんだよ。……言わせんなよっ」

輝樹は顔を背ける。

悔しいに違いない。

昔からいろんなことに諦めてきたけど、夏実だけは取られたくないと思っていたのに

結局夏実まで取られてしまったのだ。

形はおかしかったけれど、輝樹の夏実への恋だった。

「…そっか」

夏実はフローリングをじっと見つめている。

「……悪かった」

輝樹は夏実のほうを振り向いて、少し頭を下げた。

「ひどいことした…本当に」

輝樹は夏実を傷つけたいわけではなかった。

手に入れたいと思ったばかりに犯してしまったミス。

ミスなんて言葉では片付けられないけれど…

「あっ、頭上げてよ！」

夏実は慌ててそう言う。

輝樹はゆっくりと頭を上げて、夏実を見つめた。

「あの…えっと、あたし…」

「…」

「あたし、春樹の彼女なの」

「……知ってる」

輝樹は切なそうに微笑する。

けれどそんな輝樹に夏実は精一杯微笑みながら言った。

「でもありがとう。あたしも輝樹大好きだから」

夏実なりの優しさだ。

ごめんと言わないことが。

それは輝樹にも十分伝わっているようだ。

「最後にキスしてよ」

「はっ？！」

「良いじゃん。ディープまでしたんだし」

「ばっ…ばか！」

夏実は顔を赤くしながらアタフタとしている。

その光景を見ているとなんだか笑えている輝樹がいる。

輝樹は夏実の手をグイッと引いて、頬にキスをした。

「もらい」

あーーーー!!とキスされた頬を手で押さえている夏実。

だがベッと舌を出してウインクしている輝樹を見て一瞬だけドキッとした。

そう、さっきの春樹とまるで同じ表情をしていたから。

「なんだ、どーした!!」

夏実の叫び声を聞きつけて春樹が走って輝樹の部屋に入ってきた。

バン!と勢いよくドアが開いて輝樹と夏実は驚きながら春樹のほうを見ている。

「あっは、何よぉ。春樹ぃ」
「何かされたんじゃ…」
「別にー?ね、輝樹」

夏実は輝樹に賛成を求めるが、輝樹は

「さぁね」と意味深に言い返す。

すると春樹は夏実が頬を押さえていることに気づいて、
「頬どうかした？」と尋ねると、夏実は顔を赤くした。

「な、なんでも？」

そんな夏実の言葉を無視するかのように輝樹のほうを向くと、輝樹はニコッと笑いながら言った。

「それくらい良いしょ？おにーちゃん」
「てーるーきーっ！」

春樹は眉を吊り上げながら輝樹に近づく。

が、途中でやめてクルッと夏実のほうを振り向いた。

どうしたの、春樹？と不思議そうな顔をする夏実に春樹は口をつける。

輝樹への仕返しかと思い、軽いキスだと思っていた夏実の考えとは裏腹に、春樹は深く深く、そして舌をからませるようにして夏実にキスをする。

「あっ！兄貴！」

途中夏実が苦しそうな声を出したから春樹は口を離し、よたる夏実をよそに輝樹に向かって言った。

「ばーか。ほっぺにチューくらいなんだっつの」

嘲笑いながらそう言う春樹にカチンときたのか、輝樹は眉をひくつかせながら言う。

「はんっ。Dキスなんてとっくに済ませてるし」
「あ？」
「夏実と」
「何ー？！」

そんな会話をしている2人に、夏実はこれ以上いては危険だと感じたのか部屋を出ようとする。

そんな夏実に気づき春樹は声をかける。

「あ、今日泊まってけよ」
「え゛っ」

「輝樹に俺たちの愛見せつけてやろーぜ」

春樹は笑いながら言った。

輝樹はムッとしたのか、兄貴なんてどうせ最後までいけねぇよと言う。

「言ったな！」

もはや兄弟で戯れている域だ。

夏実はあーあ…と肩を落としながらため息をつく。

それから2人は1階に下りて夕飯を食べる。

両親がいる前で2人が付き合い出したことを伝え、そして今日夏実が泊まることも言う。

父親のほうは泊まると言った瞬間にコーヒーをブッとはいたが、母親が良いわよと言ったので一応了解を得た。

しばらく両親と春樹と夏実の４人で話してから2人は春樹の部屋へ

行く。

どうせだからと春樹が夏実の髪の毛を染めてあげることになった。

「大丈夫ー？」
「平気平気。任して」

春樹は説明書を読んで器用にやっていく。

まだらにならないことにだけ注意をしてやり、確かに春樹は上手い。
鏡を見ながら夏実も春樹の器用さに感嘆している。

1時間ほどして仕上げ終わり、カバーを外すと夏実の髪の毛は見事に黒く染まっていた。

「超似合う！」
「本当？久しぶりだがらなんか恥ずかしいな」

照れながら言う夏実に、春樹は楽しげに言う。

「どうせだし俺が髪可愛くしてやるよ」
「えっ、できるの？」
「よく女子に頼まれるしね」

春樹はワックスやらクシやらを取り出して、１０分もしないうちに夏実の髪をアレンジしていく。

夏実もこうやって女の子らしくしてれば十分可愛いのだ。

「すごーい！」
「な」

夏実は手鏡を持ちながら髪型を見て嬉しそうな声を出す。

それから風呂に入ったり他愛もない話をしていると１１時を過ぎ、春樹が押し入れから布団を取り出す。

「夏実ベッド使って」

春樹はさっさと布団を引いて横になる。

おやすみー、と言って寝ようとする春樹に夏実は言った。

「えっ……寝ちゃうの？」
「何、期待した？」
「ひど！そんなんじゃないもんっ」

夏実はプイッと顔を反らす。

そんな夏実が可愛すぎて春樹は笑っている。

「じゃあおいで」

春樹は起き上がって、両手を広げる。

「やだっ」

夏実は拗ねているようだ。

ベッドに上がり、おやすみっ！と言って布団に入る。

「うっそ、寝るの？自分から誘っといて」
「春樹が悪いんだもん」
「あはは、ごめんって」

春樹は立ち上がって夏実が寝ているベッドへ行く。

「……春樹手はやい」
「え、俺４年半くらい待ってたんだけど」
「う…」

夏実は罰が悪そうな顔をして起き上がる。

「…恥ずかしいな」
「何、今更」
「だって春樹…顔近い」

少し顔を赤らめてそう言う夏実が可愛くて春樹はドキッとする。

「だめなの？」

自信満々に言う春樹に、夏実は春樹から視線を外して
「分かってるくせに…」と呟く。

春樹は笑いながら夏実に近づき、キスをする。

そうして結局最後までいってしまった。

なにはともあれ、今日は夏実と春樹が身も心も結ばれた日となった。

next

第97話【更生】

翌日、春樹と夏実はまさに注目の的だった。

「わー！！何その髪型！」
「ちょ！また制服？！」

朝練でも部員からさんざん言われ、学校の生徒たちにもいろいろ言われている。

だが夏実と春樹はそんなみんなの反応には気にせずに、また春樹が夏実の髪の毛をアレンジしている。

どうやら夏実が気に入ったらしい。

「じゃーん。ど？」
「あ、可愛い！巻いてある」

クラスの女子が持っていたアイロンで春樹は夏実の髪を巻いてアレンジをした。

ヘアゴムもシュシュを使ったりして可愛く仕上げている。

「春樹器用～」
「いくらでもやるよ」
「本当？毎日やって」

可愛くおねだりする夏実に、春樹はデレデレになりながら
「しょうがないなぁ」と言う。

誰がどう見てもラブラブの2人にみんな入っていけない。

呆れながら見ている秋人と麻冬が2人に言った。

「で？上手くいったわけか」
「まぁね」
「だからってなんでそれなわけ？」

麻冬は夏実の髪と春樹の制服を指差す。

夏実と春樹は顔を合わせながら笑い合う。

「だって、ねぇ？」
「ねー」

楽しそうな2人に、秋人と麻冬は微笑ましさを通り越して正直うざく感じている。

それでもやっぱり2人が上手くいって嬉しいのか、仕方ないか……と諦めていたりもする。

「夏実髪可愛い！」

夏実のもとにクラスの女子たちがわらわらと集まる。

また、春樹のもとにもお菓子あげると言いながら女子たちが集まる。

女子に好かれる彼ら。

「あ、良いや」

「えー。どうしたの？」

「夏実からももらうし」

春樹は珍しくお菓子を受け取らない。

「なんでぇ？」

「なんで夏実なのぉ？」

女子たちはもちろんブーイングをする。

また夏実は夏実で、あたしも春樹くんにアレンジやってもらいたいなーと言っている子たちにダメ出ししている。

「だーめ。春樹はあたしにしかしないもん」

そして夏実と春樹は顔を合わせて

「ねー」と声をハモらせる。

あまりのイチャつきぶりに誰かがついに尋ねた。

「もしかして……付き合ってるの？」

「えっ、嘘。まさかぁ。夏実と春樹くんよ」

「そうよ。ないない」

何がないのかよく分からないが、女子たちは信じたくないようだ。

まぁ無理もない。

夏実は以前年上と付き合っていたし、春樹は女子から人気がある。

認めたくないのも分からないではない。

「ありえないだって」

笑いながら春樹が言う。

「ひっどいよね～」

夏実もケラケラ笑って答える。

春樹は、じゃあ証拠見せてあげようよと夏実の了解も得ずに軽くキスをした。

その場にいた女子や、それを見ていたクラスメートたちがこれでもかというくらいの大きさで叫び声を上げた。

秋人は頭を驚きのあまりゴンッと机にぶつけてしまい、麻冬は飲んでいたジュースをブハッと吹いた。

「もう、春樹ってば」
「良いじゃん。減らないし」
「あーあ、倒れちゃった」

女子の中にはショックのあまり倒れてしまった子もいる。

そこまで春樹が好きだったのだろうか。

春樹と夏実が付き合ってるというニュースは1限を終えた段階でもう生徒の2／3は知っていた。

有名な2人なのだから仕方ないことだが。

祝福する生徒もいれば、悲しむ生徒もいるし蔑む生徒もいる。

夏実を好きな男子
春樹を好きな女子

まぁ様々だ。

だが教師陣はこぞって喜んだ。

規則破り常習犯の茶髪の夏実と私服の春樹が、夏実は髪を真っ黒にして春樹は制服をきちんときている。

どれだけ注意しても直さなかったから職員室では教師たちがバンザイ三唱しているくらいだ。

もちろん坂本の耳にも入るし阿笠にも知られる。

中丸は朝練のときに言ったから知っているが。

「ったくー。お前今日は寝かせねぇぞ」

「あはははは」

昼食の時間になり、４人はラウンジで食べている。

秋人が春樹にそう言うと、春樹は答えようもなく笑って返した。

今日サッカー部とバド部は部活休みだから昨日ゲーセンに行く約束をしたのだ。

一応明日からテストなのだが…

「うち来る？それとも秋人んち？」

春樹はもぐもぐ食べながら秋人に尋ねる。

秋人はうーん…と悩んでから

「佐々先輩に邪魔されたかねーしなぁ」と言った。

「じゃあうちおいでよ」

「おう、行く行く」

「あ、つかお前勉強は？」

「ああ…まぁ平気しょ。とりあえず今日の5、6限も自主勉だし」

「あ、そっか」

そんな会話をしている春樹たちの向かいの席では夏実と麻冬が会話している。

「思いきったわねぇ」

「そう？変かな？」

どうやら夏実の髪の毛の色について話しているようだ。

秋人も春樹も麻冬も茶髪の夏実しか見たことないから新鮮なんだろう。

「ううん、似合ってるわ」

麻冬はにっこり微笑みながらそう言う。

「でも良かったわね。本当」
「うん。諦めないで良かった」
「あ、聞いたわよ。振られたこととか」
「えっ」
「頑張ったじゃない」

麻冬があまりにも夏実を褒めてくれるものだから、夏実はちょっと照れている。

「ありがと」

春樹と夏実はちゃんと自分で乗り越えてお互いを手に入れた。

じゃあ、麻冬と秋人は？

確かに両思いなのに、伝わらない思い。

伝えたところで叶う思いなのかも分からないが。

「あ、そうだ秋人。このまえ木村くんがさー」
「木村？うちの部員の？」

「うん。なんか…」

麻冬はこの前木村と話したことを言おうとしたが、やっぱり言うのをやめた。

秋人は何だよ?と催促するが、麻冬は受け流す。

木村のああいう言い方ではまるで麻冬と秋人が両思いだと言っているようなものだ。

だから阿笠が秋人から麻冬を奪ったせいで秋人が部活に支障をきたしたりしているのだと。

あながち嘘ではないが、あのとき秋人が調子悪かったのは麻冬のことではなくハンナのことだ。

「あ、阿笠」

もぐもぐとご飯を食べていた秋人が阿笠が歩いているのに気がついた。

阿笠の名前を呼ぶと阿笠は４人に気づく。

「すごいじゃん、その数」

春樹は阿笠が持っているジュースを指差しながら言う。
阿笠は苦笑しながらジャンケンに負けたんだと言った。

「それよりおめでと。すごい噂になってる」
「みたいだね。でもぶっちゃけ阿笠のおかげだよ」
「いやいや、櫻井が決めたんじゃん」
「でも阿笠とケンカしてなきゃたぶん今はないよ」

2人のそんな会話を秋人と麻冬は心の中で頷きながら聞いている。
夏実にはなぜ2回も振ったのかを結局言わないでいる。

「あーあ、お前ばーっか幸せ」

阿笠は笑いながらそう言う。
その言葉の意味を知るものはここにいる男子メンバーのみ。
夏実にも麻冬にも、阿笠の言っている意味を理解できずにいる。
今まさに本当の両思いとして付き合っているのは夏実と春樹だけだ。

そう言いたいのか。

「やれるもんならやってみなよ、阿笠」
「へーんだ」

春樹は秋人のほうを向いて
「秋人もね」と笑って言う。

こんなとこで何を言うかと呆れる秋人も、阿笠に向かって言った。

「だってさ。春樹に言われちゃやるしかねぇな」

阿笠も便乗してププ…と笑いながら
「だね」と言い返す。

そして阿笠はクラスへと戻って行った。

不思議な会話をしていた男子たちに麻冬は
「どういうこと?」と尋ねたけど秋人に上手くかわされている。

さて、すべてを知る男・春樹はどうでるだろうか。

next

第９８話【隠せない思い】

昼ご飯を食べ終えて昼休みが終わるまで仲良くラウンジで喋っていた４人のもとへ、知らない男子が２人やって来た。

どうやら１つ年下で夏実のファンのようだ。

前に上級生にたかられていたところを夏実が助けてから、ずっと夏実ラブらしい。

「なんでっすか？前の先輩のほうが良いですよ」

どうやら夏実が髪の毛を黒くして女の子らしい髪型をしているのが気に入らないようだ。

「なんで？髪染め治しただけじゃん」

夏実は楽しい時間をくだらないことに費やされて内心イライラしている。

他の３人は夏実のその男子たちとのやりとりを黙って見ている。

「バレー部の部長であることも困ってる人助けんのも、なんも変わ

ってないでしょ」
「でもっ！」
「茶色の髪はもういらないんだって！」

それでも平静を保っていた夏実だったが、ついに声を荒げた。

「あたしもう弱くないの。守ってくれる人できたから」
「どういう…」
「茶髪は弱い自分を隠すためにしてただけ。だからいらないの」

夏実はフンッと顔を背けてジュルジュルとジュースをストローで飲む。

それでもまだ男子たちは何か言ってるようだが、夏実は丸きし無視している。

いくら夏実でもここまでしつこくされれば怒るだろう。

すると夏実の代わりに春樹が言った。

「ねぇ、もう良いでしょ」
「さ、櫻井先輩」
「何か文句ある？黒だって十分可愛いでしょ」

顔は笑ってるけど、早くどこかへ行けと言っているようなオーラに彼らは押され負けしている。

と、そこに今度は上級生の女子たちが集まってきた。

「春樹くーん。なんで制服になっちゃったの？」
「前のが可愛いわよ～」

春樹は、次は俺かよ…と一瞬嫌そうな顔をする。

「先輩、俺可愛いとか言われたくないですって」
「えっ」
「一応男ですから」

いつもなら可愛いと言われれば嬉しがってる春樹がこんなことを言うなんて…

秋人でさえ少しびっくりしている。

「付き合うんですって？海野さんと」

1人が夏実のほうをチラッと見ながら言う。

「そうですよ」

そんな会話をしていると次々と生徒たちが群がってくる。

下級生同級生上級生

ただでさえ賑わっているラウンジが一層騒がしくなる。

春樹も夏実も対応しきれなくなって秋人や麻冬に助けを求めるが、2人もお手上げ状態だ。

人から注目されてばっかりの4人だが、さすがに学校の中でまでこんな風にされたくないのである。

まるでイベントをやっているかくらいの騒ぎで教師たちも慌てて駆けつけてくるほどだ。

そこまで広いわけではないラウンジにどこからか湧いてくるように生徒たちが集まるものだから仕方ない。

「……夏実、行こう！」
「えっ、春樹？！」

春樹は夏実の腕を引いて人混みをかき分けながら走っていく。

「秋人ーっ、ごめんな！」

春樹はラウンジの入口付近で、まだ麻冬と座っている秋人にそう叫んだ。

秋人の返事を聞く間もなく春樹と夏実はいなくなる。

廊下も他の場所も学校の生徒がいるところでは2人が休まるはずはない。

だとすれば教室が一番安全。

クラスメートたちは春樹たちが嫌がることなんかしないし、むしろ守ってくれるはずだ。

そう考えた春樹は自分の教室へと夏実を引っ張りながら走って行く。

「…ごめんって……」

秋人は呆れながら春樹たちが出て行ったほうを見ている。

「まぁったく、仕方ないわねー」

麻冬も失笑している。

お目当ての春樹と夏実がいなくなって生徒たちの標的が秋人と麻冬に移ろうとしているが、それが嫌な秋人は春樹と夏実と自分の弁当箱を片手に抱えて、春樹と同じように麻冬の手を引っ張る。

「あっ、秋人？」

麻冬は反射的に立ち上がる。

「俺らも行こうぜ」

春樹は夏実の腕を掴んだが、秋人は麻冬の手を繋いでいる。

秋人はそう言って麻冬の手を引っ張りながらラウンジを出て行く。

みんな４人がいなくなってしまってガッカリしている。
中には追いかける人たちもいるが、大半はブーブー文句をたれている。

「秋人っ、どこ行くの？」
「どこが良い？」
「えぇ～っ」

２人は走りながらそんな会話をしている。
結局行き着いた先は教室ということになる。

ラウンジでの生徒は追い払えたけど、廊下を走っていたものだから噂を聞きつけた他の生徒たちが面白がって追いかけてくる始末だ。

「ちょっ…増えてる！」

麻冬が後ろを見ながら驚いたように叫ぶと、秋人もチラッと後ろを見て
「げっ！」と声を上げる。
先に教室に行った春樹と夏実は走り疲れて教室でへばっている。

もちろん教室には鍵をかけて。

「ぅわっ、おい！鍵！！」

教室のドアを開けようとした秋人は鍵がかかっていることに気づいて、ドアをドンドンと叩く。

秋人と麻冬の姿に気づいたクラスメートがドアをこっそり開け2人を入れてすぐにドアを閉めた。

追いかけてきた生徒たちも鍵がかかってるため教室に入ってこれないでいる。

「つ…かれたぁ…」
「まったくだ……」

秋人と麻冬は尻を床につけて春樹たちと同じようにへたりこんでいる。

秋人はまだ麻冬の手を握ったままだが、麻冬はそれに気づいたても何も言わずにいる。

「あーれれ、浮気ぃ？」

麻冬たちが手を繋いでいることに気づいた夏実がニヤニヤしながらそう言うと、秋人はハッと気づいてすぐに手を離した。

「わっ、わりぃ」

秋人は少し動揺して顔を赤くしている。

「う…ううん」

麻冬も麻冬で顔を赤らめながら返事をしている。

2人はチラッと目を合わせては視線を反らし、そしてまたチラッと顔を見る。

そんなことをやっていれば、周りには丸分かりだ。

お互い好きだということが。

「…」

春樹は腕を組みながらその様子について何か考えている。

まったく分かっていないのは夏実だけだ。

「どしたの？2人して顔赤くして」

「な、なんでも」

「走ったから暑いだけだよ」

2人の適当な返事に夏実は納得したように頷いている。

自分だって同じように走ってきたくせに。

そして秋人は抱えていたお弁当を春樹と夏実に渡す。

2人はお礼を言いながらそれを受け取り、自分の席に置きに行った。

麻冬と秋人も立ち上がってお弁当をカバンにしまいに席へと向かう。

「麻冬、平気？」

途中春樹が麻冬にそう尋ねると、麻冬は平気だよと笑って答える。

春樹はそういう意味で聞いたのではないのに、と心の中で思いつつも余計な波風を立てまいと何も言わなかった。

そのうち昼休み終了の予鈴が鳴り、ガヤガヤしていた廊下も収まっていく。

麻冬はボーッと席に座りながら手を押さえている。

さっき秋人に握られていたほうの手を。

その手を見てさっきのことを思い出しては顔が赤くなる。

一体どうしてしまったというのだろうか。

阿笠と肉体の関係を持ってしまっているというのに（どこまでいってるのかは知らないが）ただ秋人と手を繋いだだけでこの反応とは驚きだ。

「麻冬ー、はやくぅ」

夏実が手を振りながら早く来いと催促している。

我に帰った麻冬は急いで勉強道具を持って夏実たちのもとへ軽く走る。

「ごめ～ん」

４人で机を合わせたとき、麻冬隣が春樹で斜め前が夏実、そして目の前が秋人になった。

秋人はいつものごとくヤマだけはって音楽を聞いたり寝ていたりするのだが、麻冬はチラチラと秋人のほうばかり見て、結局あまり勉強に身が入らなかった。

next

第９９話【涙】

「ね、じゃあ勝ったほうが何かもらえるようにしよ」
「えー、俺絶対勝つよ」
「今回化学以外はあたしもいけるもんね」

勉強しているにも関わらず春樹と夏実のラブラブぶりは止まらない。
まるでそれまで我慢していたものが爆発したようなイチャつきぶりだ。

「あんたらウザいわねー」

呆れながら麻冬がそう言うと2人は笑って、そう？と言い返す。

秋人も関わるまいと耳にヘッドホンをつけて聞こえないようにしている。

「なによぉ、麻冬もどうせ阿笠くんとイチャついてんでしょ？」
「えっ」

麻冬はいきなり阿笠の話題を振られて少し困惑している。

無理もない。

この場で阿笠の話なんかできるはずがない。

春樹は麻冬が秋人を好きなことを知ってるし、好きだった秋人にも聞かれたくない。

阿笠の名前が出た瞬間、知らんぷりするかのごとく春樹はせっせと勉強し始めるし秋人も漫画を読み始める。

「…まぁね」

「ほらぁ。あたし2人がキスしてるとこ見ちゃったし～」

「見てたの？やだぁ」

「帰り道に道路でしてるほうが悪いんだよーだ」

もはや夏実のトークは止まらない。

このような会話をしばらくしていると、ついに見かけた春樹が声をかけた。

「夏実、そろそろ…」

春樹は麻冬を気づかうように困惑しながら言う。

夏実はそんな春樹の様子に気づかずに
「え？」と聞き返した。
聞き返されても言うに言えない春樹は黙り込む。

「良いわよ。春樹」
「麻冬……でも…」

秋人は漫画を読みながらチラリと春樹たちの様子を見ている。
そんな中麻冬は眉を逆八の字にして微笑しながら言った。

「だって付き合ってるんだもの。当然でしょ？」
「そ…れは……」
「ありがとね」

春樹は麻冬がそう言うものだから何も言い返せない。

そういえば秋人も麻冬に他に好きな人がいることを知っている。
もちろんそれが秋人だなんて知るはずはないが。

「何、なんなの？」

夏実は怪訝そうに尋ねる。

いくら夏実が鈍感といえど、そんな会話をされたら何か隠されてることくらい気づく。

夏実にそう聞かれても麻冬は答えられずにいる。

代わりに春樹が慌てて言った。

「麻冬この手の会話苦手なんだよ。ね」
「え…ええ」
「だからちょっと言いづらいってだけ」

春樹のそんな適当な答えに夏実は
「そうなんだぁ」と頷きながら納得している。

内心ホッとしている麻冬。

別に夏実にだけ隠さなくても良いのだが、やっぱり良い話ではないからあまり人に言いたくないのだろう。

春樹が知ったのは阿笠から聞いただけで、麻冬が言ったわけではない。

麻冬にしてみても知られたくないことだ。
本当なら春樹にだって知られたくなかったはず。
こんなにも秋人は麻冬の近くにいるのだから。
「んなことより良いのか？やんなくて」
秋人はヘッドホンを外して3人にそう言う。
現実に引き戻された3人は慌てたように教科書をパラパラめくって
再び勉強をし始めた。
秋人は漫画を机に置いて立ち上がる。
「どこ行くの？」
春樹がそう尋ねると秋人は
「便所」と言って教室を出ていった。
夏実も、何か飲み物を買ってくると言って席を立つ。

春樹と麻冬だけになり、お互い少し気まずそうに目を合わせた。

「…で、どうですか？」

先に話題を持ち出したのは春樹のほうだ。

麻冬はペンを置いて軽くため息をつく。

「あたし、バカかも」

「…」

「いい加減阿笠を好きになってるつもりなのよ。これでも」

すべてを知ってるのが春樹だけだということは、麻冬が相談できるのも春樹だけになる。

春樹も最初は麻冬に阿笠との交際を反対していたが、麻冬の気持ちも汲んで見守ることにしている。

「一緒に帰って遊んで話して…恋人らしいことしてるの」

「どこまで？」

「…どこまでも」

麻冬は苦笑した。

「中2の頃できなかったこと、してるの。念願だったはずなのに…」

麻冬が何を言いたいのか春樹にはだいたい分かっている。

春樹とて見ていればすぐに気づいてしまうことだ。

「……阿笠あたしのこと好きなの。すごく伝わる。だからあたしも嬉しい」

「阿笠は麻冬が望むことなら何だってするよ」

「だから困ってるのよ」

麻冬はウェーブの髪を左手でくしゃっと握る。

そして悔しそうな切なそうな泣きそうな表情をする。

「……幸せになる道見つけたいって言ったね」

春樹がそう言うと、麻冬はそのままの表情を保ちながら春樹の顔を直視する。

「麻冬は愛することより愛されることを望んだ。それがこの結果だよ」
「…どっちの味方なの、春樹は」
「どっちも」

春樹はガタッと音を立てながら椅子を後ろに引く。

そして窓の外に目をやって空を見上げながら淡々と言った。

「俺麻冬に幸せになってほしいんだよ」
「…」
「麻冬が選んだんなら秋人でも阿笠でも。でも麻冬、あの2人の運命は麻冬にかかってること忘れないで」

春樹の重みのある言葉に麻冬は
「え…」と声を漏らす。

春樹はまるで空に話しかけるかのように青空を見ている。

そこに何かいるかのように。

「阿笠はずっと麻冬が好きでようやく幸せ手に入れたんだ」
「…うん。だから……」
「でも秋人にとってもようやく見つけたかけがえのない存在なんだよ」

「……え？」

春樹は疑問そうに聞き返した麻冬のほうをクルッと振り向いて、分からない？と言った。

「分からないんなら…分かってあげて。でも自分で」
「意味がよく分からな……」
「素直になりなよ、麻冬」

春樹はじっと真剣な瞳で麻冬を見つめる。

麻冬は何もかもを春樹に見透かされそうで怖くなったのか、パッと顔を背けた。

「見てりゃ分かるんだよ。どんなに麻冬が秋人を好きかなんて」
「ちょっ…あたしはっ…」
「麻冬は阿笠を好きなんじゃなくて、好きになろうともがいてるだけだ」

春樹にそう言われ、麻冬は言葉をなくす。

けれど春樹は続けてズカズカと言った。

「でも好きって気持ちはなろうと思ってなれるもんじゃない」

春樹は麻冬が何か言うと思ったのか少し間を開ける。
だが麻冬が何も言わずに黙り込んでいるものだから、春樹は深く目を瞑って言う。

「…どんなに過去を思い出しても一緒にいても彼女だって言っても」
「春樹」
「好きだって言ってもキスしてもそれ以上のことをしたって」
「…春樹！やめて！」

麻冬は耳を手で隠しながらそう叫ぶが春樹は続ける。

「どんなことしたって秋人を思う気持ちに勝るわけなんかないんだよ」

春樹は真面目な目付きで強気にそう言う。

麻冬はそんな春樹の言葉を聞きたくないと耳を押さえながら首を振る。

小声くらいはしてるもののの静かな教室の中での麻冬の声はかなり響いた。

クラスメートたちがチラチラと2人を見ているが、春樹たちはそんなことに気づかずにいる。

「分かんないよ…春樹には」

麻冬は震える声で言う。

「あたし強くない……夏実みたく振られても頑張れないし、悲しい恋したくない」

「強くなくたって」

「両思いの春樹にはきっと分かんないよっ……」

麻冬は泣くのを堪えるために手で顔を覆う。

はたから見れば春樹が麻冬を泣かしたかのようだ。

「…なら一生阿笠と付き合ってれば良い」

顔から手を離した麻冬に春樹がそう言い放つと、麻冬は傷ついたような顔をする。

春樹の目は真面目というより冷酷になっている。

「愛されたいんだろ。幸せでいたいんだろ。傷つきたくないんだろ」
「…」
「なら優しい優しい阿笠にずっと守ってもらえば良い」

春樹とて麻冬を責めたいわけではない。

ただ、春樹がいろんな人に助けられて今こうして夏実と付き合っていれるように、麻冬にも本当の幸せを掴んで欲しいのだ。

傷つこうが悲しかろうが、それでもそれを乗り越えて先にあるものを見つけて欲しいと、そう思っているのだ。

「好かれて困るなんて言うなよ。阿笠に失礼だ」

春樹が冷たく言うのには訳がある。
夏実みたく単純ではないから普通に言ってもプライドや意固地が邪魔してしまうのだ。

冷たく突き放して、嫌ってほどどん底に落としてやらなきゃきっと動けない。

そう思っている。

「ひど……ぅっ……」

ついに麻冬は泣き出してしまう。

これにはさすがにクラスメートも見てみぬ振りはできないらしく、心配そうに近寄ろうとしてくる。

だが、彼らが麻冬たちに話しかける前にトイレから帰ってきた秋人がドアを開けた。

「？みんな何してんの」

席を立ってる人や困惑してる人や勉強してない人ばかりで秋人は不思議そうな顔をする。

みんなが見ている方向に視線をやるとそこには春樹たちがいることに気づいて、秋人が席に戻ろうとする。

「あ…？麻冬？どうした？！」

「あ…秋……」

麻冬は涙を拭きながら秋人を見上げた。

next

第１００話【募る怒り】

「春樹…何した？」

秋人は驚いた顔をしながら春樹に尋ねる。

春樹は麻冬に言ったときと同じような冷酷な表情で薄ら笑いを浮かべながら言った。

「本当のこと言っただけ」

その春樹の顔に秋人はゾクッとする。

何となく聞いてはいけないような気がしたのか、秋人は春樹に聞くのはやめて麻冬にハンカチを差し出す。

「とりあえず顔洗ってきたら」

「…ありがとう」

麻冬は秋人からハンカチを受け取り、パタパタと足音を立てて教室を出て行こうとする。

そんな麻冬に春樹は言った。

「ほら。また優しさに惑わされて困惑するんだろ」

麻冬は振り返らずにそのまま教室を出て行った。

クラスがシーンとなる。

クラスメートたちも秋人と同じく春樹の顔を見て関わってはいけないと感じたのかみんな席に戻り、勉強を再開している。

秋人も恐る恐る席に座り、ため息をついている春樹をじっと見つめる。

「……お前な、何があったか知らんけど相手は女だぞ」

「だから？」

「泣かすなよ。ってこと」

「泣かしたかったわけじゃないよ。勝手に泣いちゃったんだ」

春樹のその言葉にカチンときた秋人は言い返す。

「麻冬がちょっとくらいのことで泣くわけないだろ。明らかにお前の言い過ぎ」

「…ふーん。麻冬の肩持つんだ」

「あ？」

春樹は無意味に教科書をパラパラめくっている。

「俺知ってんだよ。全部」

いつから春樹はこんなに男らしい態度をするようになったのだろう。

今だけの偶然か

それとも…

「麻冬が誰を好きで何で阿笠を選んで、そんで今どんな心境にいるのかも」

「お前…」

「だからアドバイスしてたんだ。でも麻冬は自分が弱いって言って逃げてばっかり。だからちょっとムカついた」

秋人はペラペラ喋る春樹に翻弄される。

秋人の言葉を待たずに春樹は続けて言った。

「…麻冬はこの前の俺と一緒だから」

しおれた感じでもなく悲しそうなわけでもなく、春樹は悔しそうな顔をした。

春樹が悔しがることではないのにそんな表情をしているものだから、秋人もなんとなく春樹の気持ちを理解してきた。

前に阿笠と春樹がケンカしたのは素直にならない春樹に阿笠が怒ったからだ。

今回も全く同じ。

逃げてばかりの麻冬に春樹が怒ったというだけ。

「…分かってない。あんときの俺もそうだったけど、結局現実見なきゃ分からないんだ……」

「春樹…」

「誰かが傷つくのは仕方ないけど…でもそれでも少しでも思い出を増やさないうちに決めてもらいたい」

春樹は何やら麻冬の教科書に書いている。

秋人の位置からは何て書いてるのか見えないようだ。

「……助けてやれない自分がこんなにももどかしいなんて」

春樹は自分を嘲笑うかのように笑い、書き終えたのかペンを机に置く。

何かを書いたページを開いたまま下向きにして机上に置いている。

「それは…俺に対しての侮辱？」

秋人が言った。

春樹はカバンに荷物を詰め込みながらあっさりと否定する。

「違うよ。きっと秋人もすぐに分かる。分からないなら行動するのみ」

そして支度を終えた春樹はカバンを肩掛けカバンを背中に背負い、椅子から立ち上がる。

「先ゲーセン行ってる」

「はっ？！ちょっ……まだ5限っ」

「じゃーねーん」

春樹はそう言って教室を出て行った。
取り残させた秋人はやり場のない手をおろし、唖然としている。

一応授業中にも関わらず春樹が帰って行くのを見ていたクラスメートたちも少し驚いている。

「謎だな…あいつ…」

麻冬も夏実もまだ帰ってこないものだから秋人は1人になる。
勉強する必要なんかなく、勉強を教える人もいなく特にすることのない秋人は、とりあえず音楽を聞き始める。

そのうち戻ってくるだろうと思いつつも暇すぎて机に寝そべってダラダラしていると、陽気な日差しのせいで睡魔に襲われ始める。

結局音楽を聞き始めてから2分もしないうちに秋人は爆睡してしまった。

なぜ夏実が戻ってくるのが遅いのかと言えば、ラウンジにジュースを買いに行ったわけだが、ラウンジでちょうど授業をサボってる不良たちに声をかけられていたのだ。

彼らはよく夏実に注意される常習犯でもあり、もはや顔見知りの域に入っている。

「良いじゃん、ちょっとくらい」
「やです」

どうやらこのまま一緒に授業を抜けて遊びに行こうとしつこく迫られているようだ。

夏実はさっさと教室に帰ろうとするがなかなか帰してもらえずにいる。

「もしかしてまた真面目な人からお金取ったの？」

夏実がチラッと横目で見ると、よく分かってるじゃんと彼らは笑う。

夏実はため息をつきながら言った。

「そんな汚いお金で遊びたくない。ほら、出して」

夏実が右手を差し出すと、彼ら不良仲間のリーダー的な人が差し出

してきた夏実の手を掴む。

「ちょっ…」

夏実が振り払おうとするが予想よりも力が強くて振りほどけなかった。

めんどくさいのにからまれたな、と内心思っているが正義感溢れる夏実には見逃せないのだ。

「今日かーわいーじゃん。それ彼氏のためだって？」
「つか彼氏って櫻井らしいじゃん」
「げっ、まじ？！あの櫻井春樹かよ」

それが何なの！と夏実は強気に言い返す。

「櫻井ねぇ」

ニヤニヤしながらそのリーダー的な人が言う。

「あんなチビの何が良いんだか。女子にちやほやされて楽しんでるだけだろ」
「なっ…」

「俺らのが絶対良いって。なんだかんだ仲良しじゃん？」

そうして夏実の手を引っ張って無理やり連れて行こうとする。

いつものように殴ろうにも人数が多いし、しかも授業中だから人気もない。

失敗しても逃げるに逃げれない状態だから夏実にも抵抗することができない。

「もう！冗談はほどほどにしてよ先輩！！」

夏実が嫌そうな声を出すと、彼はピタッと止まる。

「冗談？」

「えっ…」

「お前前男性恐怖症になったの、何でか知ってるぜ」

彼は笑いながら言う。

その言葉を聞いて夏実は一瞬ビクッとした。

まじ？と他の先輩たちは彼に聞いてるから、どうやら知ってるのは

その人だけのようだ。

むしろ本当に知ってるのかも怪しいが。

「同じことしてやろうか」

夏実はそう言われて一気に頭の中にあの日の映像が流れる。

いくら輝樹と分かち合っても、あのことで男性恐怖症になったことは紛れもない事実。

彼は夏実の手を掴んでいるせいで、夏実が微かに震えていることに気づく。

夏実は今にも泣きそうだが、こんな奴らのために泣くもんかと堪えている。

何を考えついたのか、彼は夏実の手をグイッと引いて夏実を抱き寄せる。

「ちょっ…離し……」

恐怖に埋もれている夏実の抵抗力よりも彼の力のほうが圧倒的に強い。

「いやっ……やだぁっ…！」

そうは言うものの、手で顔を覆って震えているだけで何の抵抗もしない夏実を見て彼以外の人たちも
「なるほど」と納得したようだ。

「嫌だってよ。どうする？」

ケラケラ笑いながら誰かが言う。

「やっちゃえば？」
「むしろこいつのこと好きな奴に引き渡すか」
「お。ガッポリ稼げるぜ、それ」

そんな会話をされてても夏実は何もできない。

可哀想に、ようやく恐怖症も治って彼氏もできて嫌なことが忘れられるはずだったのに。

輝樹に悪気がなくても、輝樹と和解しても、たとえあれが初めてじゃないにしても襲われるという感覚は恐ろしいものなのだ。

と、そこに楽しそうに話しているバカどもに誰かが話しかける。

「なら俺に売ってよ」

みんなが振り返ると、そこにいたのは

「げっ、櫻井！」

春樹はボスザルから夏実を引き離し、夏実を自分の後ろに隠す。

夏実は春樹に気づいて

「春樹…」と驚きつつも安堵の声を出した。

「悪趣味っすね。嫌がる女に手ぇ出すのって」

「はん。嫌がろうがなんだろうが海野夏実とやることがステータスだろ」

「くだらね」

「なんだと？」

春樹とその男はまるで火花を散らしてるかのごとくお互い睨み合っている。

だが、春樹のほうが強い。

さっきのことで気分が悪い春樹はもはや不機嫌オーラ全開だ。
かつて見たことないほどの春樹の怒りにみんな一歩後ろに引いている。

その男でさえもたじろぐ。

「さっさと散れよ。今日は見逃してやる」
「なっ…」
「今なら手加減できねぇぞ」

春樹に怯えた他の先輩たちがその男に
「はやく行こうぜ」とせかす。

だがここで引いたら負けになってしまうと彼は粘るが、結局仲間に引っ張られてラウンジからいなくなって行った。

一気にラウンジは静まり返る。

「春樹…あの…」

後ろにいる夏実が何か言おうとするから春樹は振り返る。

そして夏実の話を聞く前に愛想笑いをしながら
「気をつけて教室戻ってね」と言う。

春樹は帰らないの？と焦って尋ねる夏実に春樹は返事だけしてラウンジを出て行く。

春樹がどこに行くのか気になりつつも、またからまれたから困ると思い夏実も軽く駆け足で教室へと戻って行った。

next

第１０１話【消えぬ不安】

春樹が校舎を出てロータリーを歩いているところを体育教師が発見した。

「おい、櫻井？」

「あー先生。やっほ」

麻冬との口論に加えて夏実に手を出してた上級生とのことで更にイライラが募っていた春樹だが、堂々とサボってるところを見つかって怒られないために作り笑いをする。

まぁもともとこの体育教師はそんなに怒る人ではないし、むしろユーモアがある教師なのだが。

今はちょうどグランドで体育をやってるクラスがあるようだ。

「なんだ、サボりか？」

「あはは」

「にしてもお前担任とか学年主任が泣いて喜んでたぞ」

サボっているということはあまりにもあっさり流され、春樹は一瞬ポカンとする。

だがラッキーと思い、教師の話に合わせる。

「ああ、これ？」

春樹は軽くネクタイを持ち上げて笑った。

「それと海野もな。まぁったく、どんな心境の変化だ？」

教師は腕を組みながら興味津々に聞いてくる。

「付き合ってんだ、俺ら」

「えっ」

「だから夏実が茶髪にする理由も俺が私服でいる意味もなくなっちゃったわけ」

春樹は淡々とそう言うが、教師は知らなかったようで口を開けて驚いている。

そんな教師に構わず春樹はペラペラと続けている。

「夏実ってモテるんだね。知らなかったー」
「あ…？ああ、そうだな」
「前よりもっと可愛くなったから俺も大変」

あははなんて春樹は笑って言うけど、教師はいまいち話についていけてない。

結局なぜ付き合い始めたからといって更生したのかは謎のままである。

「まぁ良いや。じゃあ先生体育頑張ってねー」
「お、おお」

春樹は愛想よく手を振りながら帰って行く。

教師はしばらく唖然としながら春樹の姿を見つめていたが、春樹の姿が見えなくなったことで我に返って、急いで授業へ戻って行った。

春樹はついムカムカしてて特に何も考えずに歩いていたため、自転車に乗るのを忘れている。

それに気づいたのは、学校からもう1キロほど歩いたあとだった。

引き戻すのもバカらしいと、春樹はそのままゲームセンターへと向

かう。

その頃教室では秋人はかなりの勢いで爆睡していて、そこへ先に夏実が戻ってきた。

夏実はなぜか麻冬がいないことに不思議に思ったが秋人が寝ているため聞くに聞けない。

仕方なく席に座って勉強をしているが、そんな夏実にクラス中の生徒が注目している。

夏実もチラチラ見られていることに気づき、何?と振り向いて尋ねるが誰も何も言わない。

再び勉強を始めるが、なおも視線を感じるため勉強に打ち込めない夏実が少し声を荒げて言った。

「ちょっと!言いたいことあるなら言ってよ」

夏実が間近で大声出してるにも関わらず秋人は起きない。

クラスメートたちはどうしたら良いのかと困惑するばかり。

夏実は近くにいた女子にもう一度聞いてると、彼女たちは重々しく口を開いた。

「春樹くんが…麻冬ちゃん泣かせてたのよ」
「はっ？」
「内容は聞こえなかったけど……」

予想外のことを言われて夏実は一瞬頭がフリーズする。

夏実の一番新しい春樹の記憶はさっきラウンジで不良たちから助けてくれたことだ。

「……だから不機嫌だったのか」

夏実はボソッと呟く。

「え？」
「ううん、なんでも」

どこからどう見ても不機嫌そうだったのは夏実がからまれていたからではなく、麻冬とケンカしたからなのだと夏実は理解した。

だから授業も抜けて帰ってしまったんだ、と。

だがそれでも帰りの遅い夏実を心配して一応ラウンジによったのは紛れもない春樹の優しさである。

春樹がよらなかったら夏実はどうなっていたことか。

「秋人は知ってるの？」
「あ、えっと…麻冬ちゃんが泣き始めてから来たから」
「ふーん。で麻冬は」
「秋人くんが麻冬ちゃんにハンカチ渡して顔洗うように言ってたような…」

夏実はチラッと秋人のほうを見る。

耳にヘッドホンつけたまま気持ち良さそうに寝ている顔を見て、一呼吸置いてからクラスメートたちに言った。

「…そっか。まぁケンカくらいよくあるし、みんな気にしないでね」

そう言って夏実は席に座り、何事もなかったように勉強をまた始める。

クラスメートたちも最初は戸惑いつつも、確かにそれは麻冬と春樹

の問題だからとみんなも勉強をし始めた。

とはいうものの、夏実だって気にならないわけがない。

麻冬が人前で泣くくらいだから何かあるはずだと夏実は思っている。

でもあまり干渉するのも良くないから、とりあえず麻冬が戻ってきて話そうとしてきたら話を聞こうと決めたようだ。

だが麻冬も戻るに戻りにくくなっている。

やっぱり泣いてしまったことの恥ずかしさもあるし、何より春樹との気まずさだろう。

麻冬は春樹が帰ったことを知らないのだから。

水道で顔を洗って秋人から借りたハンカチで拭くが、涙は再び流れる。

そんな繰り返しで、麻冬はひとまず落ち着こうとゆっくり廊下を歩く。

しばらくボーッと歩いたあと、何を思いついたのか麻冬は少し引き

返して階段を登って行く。

どこに行くのかと思えば、麻冬が行き着いたのは音楽室だ。

音楽室から音や声がもれていないことを確認して、そっと音楽室へと入る。

「誰もいない……」

麻冬は音楽室の中を見回し、ピアノを見つめている。

ピアノに近づき、そっと鍵盤に触れて音を出す。

音楽祭が終わってからずっと弾いていないようで、麻冬は少しだけ懐かしく感じる。

ピアノの椅子に座り、思いついた曲を引き始める。

ピアノを弾いているときは嫌なことが忘れられるようだ。

…忘れてはいけないのだが。

それでも麻冬に選択を迫った春樹も決して間違ってはいない。

けれど麻冬は最初からすべてを知った上で阿笠と付き合うと決めた。

いくら体が心が秋人に反応してしまっても、麻冬が阿笠を選んだのは生半可な気持ちではない。

でも春樹にああ言われて、それでも阿笠が良いのだときっぱり言えなかったのは迷いがあったからだ。

麻冬は何曲かを弾き終えたあと、何の曲があるかとそこら辺にある楽譜をパラパラとめくっている。

クラシックから童謡、宮崎駿シリーズに教科書に載っているもの、または流行りの曲。

どれを弾こうかと迷いながらもとりあえず一番手前にあるものから弾いていくことにしたようだ。

どれくらい弾いただろう。

ピアノを弾いていると時間が経つのが早い。

時計は麻冬から死角の位置にあり携帯も持っていなかったため時間のことなどすっかり忘れていたようだ。

麻冬は気持ちよくＫｉｒｏｒｏの長い間という曲を歌いながら演奏している。

「愛してる。まさかね、こんなこと言えない」

小さな声で歌ってるとはいえ、誰もいない音楽室のせいか麻冬の声は響く。

「笑ってる……ん？笑ってる……」

半分以上歌ったところでどうやら歌詞につかえたようだ。

麻冬はピアノを弾くその手を止める。

と、そのとき麻冬以外の歌声が音楽室に響いた。

「笑ってるあなたのそばでは素直になれるの」

その声がするドアのほうを振り返ると、そこにいたのはポケットに

手を突っ込みながらドアによりかかっている

「えっ！阿笠？！」

麻冬が驚いた顔をしていると、阿笠はクスクス笑う。

「はは。俺１０分以上前からいたんだけど」

「えぇ！」

阿笠はポケットから手を出して麻冬に近づく。

「な、なんで…」

どうやら5限のあとの休み時間に春樹に会いに来たらしい。

だが、春樹はいなく秋人も寝ていて夏実に聞いたところ、麻冬が春樹とケンカして泣いたあとから帰ってこないと言われたようだ。

阿笠が詳しく聞こうとするが当然夏実も知らないわけで。

ずっと戻ってこないというから心配になったようだ。

夏実には女子トイレを探してもらい、阿笠は他のところを探していた。

そしてようやく音楽室で麻冬を見つけた。

「櫻井とケンカだって」

「…あ、聞いたの……」

麻冬は微かにうつむく。

いくら春樹と麻冬でも時にはケンカくらいするだろう。

他愛もないことで口論くらいするだろう。

けれど、もしかしたらもしかして阿笠関係なんじゃないかと、阿笠は心の中で思っている。

そうとは限らないし、そうあってほしくはないけれど思わざるをいられない。

勘違いであれば良いのに、と心臓がドクドクしている。

「…なにか俺に言いたいことは？」

阿笠がそう尋ねると麻冬は阿笠を見上げた。

麻冬はしばらく黙ってただただ阿笠を見つめる。

阿笠も苦しいところだ。

麻冬だけではない。

麻冬が黙り込んでいても、阿笠から口を決して開かない。

なんでも良いから麻冬から話を聞きたいと思っているのだ。

2、3分くらい経ってからようやく麻冬は口を開く。

「…あたしのこと、好きですか……」

麻冬は今にも泣きそうな顔をしながら震える声で阿笠にそう言った。

阿笠は麻冬を元気づけるために精一杯微笑んでみせた。

「好きだよ」

切なそうな顔をする麻冬をギュッと優しく抱きしめる。

麻冬も阿笠の背中に手を回した。

こんなにも温かく

優しく

愛しいのに

麻冬の悲しみは癒されなかった。

next

第１０２話【悲しみの序幕】

「あ…見つかったか」

学校中のありとあらゆるトイレを探していた夏実のもとへ阿笠からのメールが届いた。

麻冬にまだ存在を気づかれていなかったときに送ったものだ。

夏実は麻冬がいたことにとりあえず安堵して、あとは阿笠に任せようと教室へ戻る。

麻冬を見つけた阿笠も、いつものようにあまり楽しそうに演奏していないことにどこか胸に苦しさを感じながら聴いていた。

阿笠が聞いた限りでは長い間を抜かして切ない曲を2曲弾いていた。

音はその人を表すとはよく言うものだ。

気分上げるためにアップテンポな曲を弾けば良いものを、やはりそういう曲になってしまうんだろう。

「櫻井に何か言われたんだね。麻冬」

阿笠はそっと抱きしめながらそう言う。

麻冬は何も答えなかったが、阿笠はそれを肯定と受け取る。

「だいたい何言ったか分かるけど」

阿笠のその言葉に反応した麻冬はバッと勢いよく阿笠から離れて、

「違うの！」と叫んだ。

そうしてまたさっきみたく悲しそうな泣きそうな顔をしている。

おでこに手を当てながら

「違うのよ…」と呟いた。

阿笠は何か言おうとして止める。

音楽室に沈黙が流れる。

それでもお互いに口を開こうとはしない。

2人して床をじっと見つめたまま時は簡単に過ぎてゆく。

結局しばらくしてから口を開いたのは阿笠だった。

「……迷ってるから櫻井に怒られたんだろ」

「え…」

「素直になれよって、そう言われたんだろ」

阿笠の言葉があまりにも正確すぎて麻冬は驚いている。

その通りすぎて、それが阿笠に知られていることが情けなさすぎて麻冬は自分を責める。

「……あたしなんかいなきゃ良かったね」

「麻冬」

麻冬は音楽室を出ようとドアに向かって歩く。

ドアを開けながら麻冬はもう一度言う。

「あたしさえいなきゃ…」

そうして、ドアを開け終えたところでピタッと動作を止めて、声を荒げて叫んだ。

「あたしさえいなきゃ春樹とケンカすることも阿笠苦しめることもなかった！秋人だってっ……」

「違う！！」

けどそんな麻冬の言葉を遮るかのように阿笠も叫ぶ。

「違くないよ……木村くんにも言われた。あたし…最低」

音楽室から出ようとした麻冬の腕を阿笠は掴んだ。

「お前がいてくんなきゃ俺は今ここにはいない！」

阿笠の必死の訴えに麻冬は立ち止まる。

「中学んとき麻冬と会ってなかったら俺今こんな幸せなんかじゃない。星陵にも来てなかった」

「…分かんないよ、そんなの」

「分かるよ。俺麻冬追いかけて星陵入ったんだ」

阿笠がそう言うと、麻冬はゆっくり振り返る。

阿笠は真剣な瞳をしながら麻冬に言い続ける。

「星陵来なきゃサッカーで優勝することも…麻冬と付き合うこともなかったんだ」

「阿笠……」

「少なくとも俺にとっては麻冬はいなきゃダメだったんだ」

阿笠にはきっと分からない。

そんなありきたりな言葉で今麻冬がどれほど救われているか。

人を傷つけ自分を守ることしかできないでいる麻冬にとって、自分の存在を肯定されることはこの上なく嬉しいこと。

「麻冬いなかったら俺の人生成り立ってなかった！」

麻冬はまた泣きそうになるけど、必死に堪える。

「あたし…は……」

麻冬はそう呟いて言葉に詰まっている。

「いなきゃ良かったなんて言うなよ」

「だって……あたし本当嫌な子だもん。阿笠と付き合うって決めたのに……」

麻冬は目にたまる涙を指で拭く。

だが溢れてくる涙は一向に止まる気配を見せない。

「秋人と手繋いだだけで…ドキドキしてる……」

その言葉にズキッと少し心を痛めた阿笠は、麻冬の腕をそっと離す。

麻冬は傷つきながらも切なく微笑む阿笠の顔を見て、余計に泣けてきてしまう。

両手で顔を覆いながらグスグス泣いている。

「ごめ……」

麻冬は必死に謝ろうとするが泣いているせいで上手く言葉にできな

い。

いくら優しい阿笠といっても、彼女からそんなこと言われれば傷つくし辛い。

それでもそんな麻冬を受け入れたのも、阿笠なのだ。

「それでも良いって…言っただろ」

阿笠は小さな声で言う。

「見返りなんか求めない。俺は…俺だけは麻冬がいてくれればそれで良い」

阿笠はポケットからハンカチを取り出して、麻冬の顔を覆っている手をどかす。

そして泣いている麻冬にハンカチを差し出した。

「自分のことをいらないっていうなら、俺のために存在してよ」

「…阿笠……」

麻冬はハンカチを受け取ったものの涙を拭こうとはせず、阿笠の優

しい瞳を見つめる。

「麻冬が笑っててくれるだけで良いんだ」

阿笠は最高級の笑顔をしながらそう言う。

麻冬はようやくハンカチで涙を拭いた。

「そんなの…あたしに都合良すぎる……」

「だから言ったじゃん。俺好きな子には甘やかすんだって」

まるで前に阿笠が麻冬に告白したときの会話のようだ。

あのときも、同じようなやりとりをしていた。

秋人とケンカして泣いていた麻冬を阿笠が癒して、そうして付き合うことになった。

今度は春樹とケンカして泣いている麻冬を癒すのか？

それで、良いのか。

「もっと頼れよ。愚痴でも秋人のことでもなんでも良いよ。全部聞くから」
「優しすぎるって……ばか」

そうは言うものの、麻冬はかなり安堵しているようだ。

愛したいのか愛されたいのか、それは人それぞれ。

ただ麻冬は愛されたいと願っただけ。

阿笠も、ただ愛したいと思った。

両者がそう思っている限り壊れることはないだろう。

ただ、どちらかが…

麻冬が人を愛したいと

阿笠が人に愛されたいと

そう願ってしまったら、きっといとも簡単に崩れてしまうに違いない。

「でも…ありがと。阿笠」

そう言って唇を重ねる2人。

春樹にああ言われても、結局阿笠を選んだ。

弱い自分のためか

守られたいからか

それとも

阿笠を愛してるのか…

それは麻冬にも分からない、悲しい悲しい序幕。

next

第１０３話【愛川烈】

「あ。櫻井帰ったから」
「え？」

その後音楽室で２人は演奏したり歌ったり喋ったりしながら楽しい時を過ごす。

６限の終わり間近、阿笠が思い出したように言った。

「休み時間櫻井に会いに行ったらいなかった」
「そう…なの」
「麻冬とのケンカで気まずくなったのかね」

笑ってそう言う阿笠に、
「もう。笑い事じゃないのに」と麻冬は言った。

そして付け加える。

「そういえば阿笠授業…」
「あ？あー。サボっちゃった」
「あたし探してたのよね。ごめんね」
「良いって。サボれてラッキーだったし」

阿笠はそう言うが、そんなはずはないのである。

「……古典なのに」

麻冬はポツリと呟く。

古典の授業はテスト前の最後の授業でいつもテスト内容を詰め込むのだ。

つまりこれを受けないとテスト範囲の内容はさっぱり分からないのである。

阿笠だって受けなければまずい授業なのだが、古典よりも麻冬を取ったのだ。

「ん？」

優しい顔して笑う阿笠。

麻冬には阿笠のその優しさが痛いほど伝わっている。

それでもサボれてラッキーだと笑う阿笠の、麻冬に心配させないための嘘は麻冬の心に十分に響いている。

「今日さ、一緒に帰ろうか」
「えっ。でも阿笠部活ないのよね？」
「自主練か勉強でもしてる」
「そっか。分かった。じゃあ待っててね」

麻冬は嬉しそうに言う。

6限の授業終了の鐘が鳴ると2人はそれぞれ教室に戻って行った。

阿笠は古典教師に対策プリントもらいし少し駆け足をする。

教師が帰ったらおしまいだからだ。

「せーんせ」
「お、阿笠。お前欠席じゃないのか？」
「具合悪くて寝てました。だからプリントください」

阿笠がそう言うと、教師は素直にすんなりプリントを渡す。

そしてお大事にと言って教室から出て行った。

阿笠は自分の席に戻り、後ろの席の男子に話しかける。

「烈、ノートコピーさして」
「お前サボりだろー」

烈という男子はケラケラ笑いながらノートを渡す。

本名、愛川烈は阿笠の一番の仲良しの男子でもある。

中学からずっと一緒で、彼は美術部に所属している。

「あっは、バレた」

本来愛川烈も運動神経がよく、阿笠は中学時代何度も彼をサッカー部に誘っていた。

なぜなら小学校のときにジュニア選抜に選ばれていたから。

でも昔から画でいくつも賞を取っていたものだから、結局画家への

道を選んだ。

ならなぜ理数クラスにいるのかといえば、阿笠がいるからだ。

理数だと美術の授業はないのだが、まぁ学校で教わる程度のものなどとっくに独学で習得しているからいらないそうだ。

あの４人ほどではないが、阿笠と並ぶくらい学校ではちょっとした有名人。

「ところで烈、今日も部活あんの？」
「知らね。どうだろ？」
「お前なぁ。仮にも部長だろ」
「俺勝手にやらされてるだけだよ～。全部副部長やってくれっし」

こんな人がなぜ部長なのかというと、みんなの推薦だからである。

副部長は女の子でその子が主に仕事をしている。

もともとそういう約束で部長になったのだ。

じゃあなぜそれでもやらせたかったのかと言えば、実力のある烈を押し退けて部長になりたがる人はいないからだ。

烈も烈で、偶然部活ある日に顔を出したときには部員に聞かれればちゃんと教えたりもする。

そんな関係を保っているから成り立っているわけだ。

「ふーん。じゃあサッカーしようよ」
「えー？サッカー？」
「久々に烈とやりたいな」

阿笠にそう言われるものだから烈は仕方なく了解する。

一匹狼みたいなところがあるかと思えば、阿笠大好きなところもあったりで可愛い人である。

愛川烈といえば、髪の毛の天使の輪の部分が赤く見えるような髪色をしている。

光に当たると全体的に赤く見えるのだが、普段は天使の輪だけである。

「ほら、掃除掃除」

まだ教科書やらを机の上に出したままの阿笠に愛川が促す。

「わっ、やべ」

もともとジュニア選抜で顔は知っていたものの、仲良くなったきっかけは中学入学当初の席が前後だったことだ。

愛川、阿笠の順に並ぶわけだから当然といえば当然だ。

阿笠は急いで教科書やらを片付けて掃除の準備に入る。

阿笠と烈の掃除区域は男子トイレだ。

トイレといえばまぁサボれる区域である。

一応2人と他の男子2人ほども男子トイレに向かうが、適当に喋っているか他の区域に遊びに行くかするのがオチである。

阿笠と烈はトイレの前で壁に寄りかかりながら話をしている。

「…んで?」

烈はあくびをしながら言う。

阿笠は、ん？なんてとぼけたように言い返すが、烈はこう言った。

「麻冬となんかあったわけか」
「…いや、てかなんでそんなこと分かんの？」
「画家なめんなよ」
「思いっきし関係ねぇな」

烈はまだ１０月中旬だというのにトレーナーを着ている。

暑くないのかと気になるところだが、本人曰く冷え性だから良いらしい。

髪も染めているし、制服着てないのになぜ怒られないのか。

いや、多少怒られるが烈は普通にシカトしている。

烈がそんな自由でいられるのは、もちろん画のおかげ。

賞を総なめしてるものだから教師陣もそうそう強気でいられないわけだ。

まるで昨日までの春樹や夏実のよう。

「まぁ……結局麻冬は秋人が好きなんだなって」
「そんなん」
「最初から分かってるけどさ。でもそれで櫻井とケンカしたみたいなんだ」

烈は阿笠の相談相手でもある。

最初は麻冬のこともたまにもらしたりするが、たいてい烈のほうから聞いてくる。

阿笠が悩みをためこんでダメにならないうちに。

中学からの友達なのだから、もちろん烈は昔阿笠と麻冬が付き合っていたことを知ってる。

なぜ別れたのかも、なぜ阿笠が星陵選んだのかも、そしてまた付き合うことになったこともすべて。

「あー……つか櫻井って全部知ってんだな」
「そうみたい」

阿笠は苦笑した。

もちろん阿笠も全部知っている。

麻冬が阿笠を選んだ理由、麻冬が秋人を好きなこと、そして秋人も麻冬を好きなこと。

それは烈も知っている。

「ケンカねぇ……この前お前も櫻井とケンカしてたよな」
「ああ、うん。あれは俺から吹っ掛けたんだけどね」
「でもあのおかげで櫻井夏実ちゃんに告るって決めたんだろ？」
「おかげかは分からないけど……でも、そうだね」

このとき阿笠は、烈に教えてないのになんで内容知ってんだろ…と思うが、まぁ喋ってる言葉を聞いていたならそれらから内容くらい理解できるだろう。

…いや、できるはずない。

だってあのときのケンカは春樹と夏実のことだ。

阿笠は自分のことは烈に話しても、春樹と夏実の恋愛のことは話してない。

ケンカしてるところを見たからって烈が分かるわけがないのだ。

「烈……相変わらず烈だけは敵に回したくないな」

阿笠は苦笑しながら言う。

もはや烈は敏感というより情報網である。

どこからそんなことを知ったのか本当不思議だ。

あの時点で春樹が夏実を振った理由を知っていたのは春樹と阿笠だけだというのに。

「似てるな。お前と櫻井」

「え？」

「相手のこと思うばかりにケンカになる、か」

烈はトイレの前にある教室を何気なくボーッと見ている。

トイレがあるのは階の一番端だ。

「麻冬…ねぇ」

烈は意味ありげに呟く。

「なんだよ？」

「いや。だってさ、俺知ってんぜ。お前が月影にはやく告って付き合えって言ったこと」

「なん……」

阿笠は少し目を丸くする。

サッカー部の部室で秋人とたった2人で話した言葉。

「俺さー、お前が麻冬の気持ち知ってながら付き合ってるって知ったとき正直嬉しかったんだよ」

烈はまるで何事もなかったかのように続けている。

「いつも人のことばっかで自分の気持ち後回しにしてたから。阿笠は」

「あ……それは秋人が背中押してくれたから」

「ふーん…じゃあお前はさ」

烈は阿笠のほうを見る。

そして言った。

「また繰り返すわけ？」

「え…」

「忘れたとは言わせない。麻冬のためにお前がしたこと」

「烈」

「せっかく嬉しかったのに、また麻冬のために諦めんの？今度は大学追いかけんの？」

烈の目はなんとも力強い。

阿笠はその目から目を反らすことができずにたじろぐ。

「がっかりだな」

悲痛な烈の言葉

阿笠の胸に突き刺さる。

next

第１０４話【涙の対決】

「ねー！秋人起きなぁい！」

夏実と麻冬が必死に秋人を起こそうとするが秋人は起きない。

他の男子に頼むも起きないため仕方なく、秋人の寝ている机だけ動かさずに掃除することになった。

夏実と麻冬も教室を出る。

「大丈夫？麻冬」
「うん。ごめんね。探してくれてたって」
「良いよ。じゃまた」

２人はそれぞれの掃除区域へと向かって行った。

夏実は隅の階段掃除のため阿笠たちがいるところを通る。

夏実は阿笠と烈に軽く遠目から気づいたが、どうやら込み入った話をしているようなので話しかけずに階段へ向かって行く。

阿笠と烈は夏実が目の前を通っても気づかずにいる。

「れ…烈……」

阿笠は烈からはじめてきつい言葉を言われて驚いている。

烈は横目で阿笠を見ながら黙っているだけ。

基本的に烈は阿笠のことが大好きだからこんなこと言わない。

阿笠も烈のことが好きだし、何よりもともとそんなことを言う性格ではないから2人がケンカなんてしたことはない。

あるとすれば…

そう、中1の入学当初の出会ったばかりのときだけ。

『サッカー部入らないって……何ばかなこと!』
『俺美術やっから』
『でも!部活入んないならっ』

その頃、サッカー部に入らないで美術をやると言った烈に阿笠が食って掛かった。

しかも美術をやるくせに美術部には入らないという。

中学は部活に入らなくても良かったらしい。

『サッカー部入ると忙しくなるだろ。したら貴重な画書く時間減るじゃん』

烈がそう言うのは、部活の練習だけでなくおそらく選抜に選ばれたりしたときの話だ。

もちろん選抜は断ることもできるが、断ることになったときどのみちこうやって阿笠と口論になる。

『だってお前…サッカー好きだろ?!』

烈の実力は確かだ。

ポジションはＧＫで、もし今も続けていれば星陵サッカー部の里田以上のはず。

『好きだよ』

本当に烈がいれば、星陵サッカー部は最強なのに。

『でも、画も好きなんだ』
『だめだ！もったいなさすぎるっ！』
『阿笠』

阿笠に烈の気持ちが分かるはずがない。

小学生のときにはもう選抜に選ばれて海外遠征すら行っていた。

サッカーの道を行くとこの時点で決めていた阿笠には、同じく実力を持ちながらサッカー以外の道を行こうとする烈の気持ちなど、阿笠に理解できるはずもない。

『お前がいるから俺おもいっきし最前線で攻撃できんだ！』
『んなもん…俺だってそうだ』

まだ髪が黒い烈は、溢れる感情を抑えながら震える声で言う。

『お前が点決めてくれるから俺ゴール守れるんだ』
『ならなんでっ……』
『でも俺の夢はサッカーじゃないんだ！』

烈はこぼれる思いを振りきりながら阿笠に叫ぶ。

初めてサッカーを否定された阿笠はとても驚いている。

当然サッカーの道を一緒に歩むのだと思っていたのだ。

『たとえサッカーで飯食えても、画じゃ飯食えなくても俺は画書きたいんだ！』

『烈…』

『…分かってくれ、阿笠。俺だってお前に会ってサッカーもっと楽しくなった。何度もサッカー続けようって思った』

幼い阿笠には、そんなサッカー以外の道など知るよしもない。

だから余計に画を書くと言った烈に怒ったのかもしれない。

『それでも……やっぱ画しかない』

肩を震わせながらそう訴る阿笠の腕を阿笠は引っ張り、どこかへ連れていく。

『ちょっ…阿笠！』

『絶対許さない』

阿笠が連れていったのはグランドだ。

まだサッカー部の練習が始まっていなく、そんなに人がいない。

阿笠は転がってるサッカーボールを足で拾い上げる。

『5本勝負だ。俺が負けたら入部しろよ』
『だから俺はっ』
『いくぞ』

これ以上何を言っても無駄だと思ったのか、烈は学ランを脱いで仕方なくゴールの前に立つ。

しかも手袋なしで、だ。

阿笠は烈が準備できたところでＰＫの位置にボールを置き、勝負を始めた。

仕方なしということで油断していた烈に少しも触れられることなく、阿笠のボールはポスト左上に見事シュートした。

『お前…』

烈は阿笠の球の威力に身震いさえした。

いつも以上に球ははやく重く、回転も増している。

烈はようやく阿笠が本気だと気づいた。

『…おいおい。これじゃ怪我しちまうぜ』

烈は何を思ったのかゴールから遠退き、近くにいたサッカーウェアを着ている人に部室の場所を聞いて部室へと向かって行く。

なにかと思いきや、烈はすぐに部室から出てくる。

手に手袋をつけて。

阿笠の本気を見て、烈も自分の気持ちが生半可ではないからとを見せようとしたのだ。

阿笠の球を素手で取るわけにはいかない。

『よーし、こい！』

烈は手をパンッと叩いて意気込んだ。

阿笠はそうこなくっちゃ、と言わんばかりに思いっきり球を蹴った。

阿笠の癖を知っている烈は阿笠の球の方向を読み、2本目は大ジャンプをして手でカバー。

続く3本目も、左にくると思い左に跳んだが予想外にも真ん中に蹴ってきた阿笠の球を、かろうじて足でセーブする。

跳んで落ちた烈の制服は土でかなり汚れるが、烈は自信ありげに笑う。

『まだまだ負けねぇよ』

『そうこなくっちゃ』

阿笠と烈の不思議なやりとりにサッカー部員たちがワラワラと集まってくる。

そう、まだ入学したばかりで阿笠はサッカー部に入部していなかったのだ。

サッカー部員たちから見れば知らない人が勝手にゴール使って遊んでるのだ。

気になるものだ。

『いくよ、４本目』

阿笠の蹴った球は右上へと向かう。

烈は右下だと思い足を出すが、球は上にきたものだから烈は必死に手を出す。

だが、威力の強い球に跳ね返されボールはゴールに入る。

『よっしゃ！』

阿笠はガッツポーズしながら喜んでいる。

烈も烈で、拳で土を殴って悔しそうな顔をしている。

もはや勝負することになった原因なんて忘れて、純粋に勝負をしている。

阿笠も天才の名にかけて負けるわけにもいかず、うずうずと5本目の球を置く。

だが、このとき阿笠はゴールの前で必死になって構えている烈を見てハッとする。

確かにサッカーをしている烈は楽しそうだし生き生きしてる。

阿笠や周りが認める実力も才能も努力もある。

小さいながらにこんなに才能を持っているのだからきっと将来は約束されたも同然。

そんな美味しい未来が何もせずとも待っているというのに

烈はそれを捨ててまで、画の道に進もうとしている。

『烈……あと1球だね』

阿笠はうつむきながらゆっくりと立ち上がる。

『おう。悪いけど負けないぜ。俺の夢は半端じゃない』

『…何よりも？』
『何よりも！』

はっきりと断言した烈の顔はとても輝いていた。

『でも、俺が勝ったら入部するんだよね』

阿笠は2、3歩下がる。

『だから負けねって』

本当はずっと一緒にこれからもサッカーしていきたい。
中学高校、そしてその先の栄光も共に掴みたい。
けれど阿笠がいくらそう願っても、烈は思っていない。

『お前は俺とサッカーやるんだ！！』

そう言って阿笠は今まで以上に強くボールを蹴る。
スピードを増したそのボールは右へとグンッと曲がる。

烈は必死に食い下がる。

誰もが勝負ありと、そう思った。

『えっ！』

烈の驚きの声とともに、ボールはゴールを数センチ横を外していく。

ゴールの後方にあるグランドとロータリーを仕切る緑のネットにボールは当たり、ギュルギュルと回転したのち落ちる。

烈は着地してボールをまじまじと見つめている。

『…あーあ、外れちった』

阿笠は手をぶらぶらしながら言う。

烈は阿笠のほうを振り向いて、驚いた顔をする。

『おま……わざと…』

阿笠は蹴ったボールを拾いに向かう。

『人聞きの悪い。俺がそんなことするわけないしょ』

阿笠はボールを拾って烈のところへ歩いていく。

烈も立ち上がり、まだ信じられないという顔をしている。

『だって…阿笠が外すわけないじゃん。お前が言い出したんだろ?!最後までやれよ!』

『できないよ!そんなこと!』

烈の叫びに反抗するかのように阿笠も叫ぶ。

『万が一俺が勝ったらお前サッカー部入んだぞ?!』

『えっ…?』

『お前の夢壊せるかよ!』

阿笠はクルッと後ろを振り返る。

ボールを右手で抱え、左手で目を押さえている。

『俺に烈の夢壊す権利ないって最初から分かってた…』
『阿笠……』
『でも、こうでもしなきゃ…お前のこと諦めらんなかったんだ』

阿笠はズッと鼻をすする。

その後ろ姿から烈は阿笠が泣いていることに気づく。

烈にとっても苦しい選択だったのだ。

自分のために泣いてくれる人がいるなんて、思ってもみなかっただろう。

『……ごめん、ごめんな』

烈も泣きそうな顔をしながら阿笠に謝る。

阿笠は謝るなよ、なんて強気に言うけど、それでも烈は阿笠に謝る。

『短い期間だけど阿笠とサッカーできて楽しかった。……ありがとう』

烈は軽くお辞儀する。

後ろを向いてる阿笠にはその姿は見えない。

だが、このときっと2人には通じあったものがあったに違いない。

『俺の分までサッカー頑張ってくれ』

『……おう』

この瞬間から2人は親友とよべる関係になったのだ。

中1の春だった。

next

第１０５話【親友の言葉】

「って言いたいとこだけど」
「え？」
「阿笠だもんなぁ」

烈はアハハと陽気に笑う。

軽蔑されたのかと思っていた阿笠は事に付いていけず、唖然としている。

「阿笠優しいよなぁ、本当」
「れ、烈？」
「なんか中１んときのこと思い出しちゃったよ」

中１？と阿笠が聞き返すと、
「サッカー部入らないっつった俺にケンカ吹っ掛けたじゃん」と烈は言う。

阿笠は記憶を巡らせて当時のことを思い出してみると、カーッと一気に顔が赤くなった。

「それもうなしだろ～」

烈とサッカーできないと知って泣いた幼い自分が恥ずかしいのか、阿笠はかきけす。

「うん、だからさ、あんときみたいにすれば良いんだよ」
「あ？どゆこと？」
「自分の気持ち最優先させてしがみつけってこと」

烈はポケットから飴を取り出して、阿笠にも1つ渡してそれを舐める。

烈が舐めているのは苺ミルクで阿笠がもらったのはグレープ。

「や…でも……」

阿笠はためらっている。

あのとき以外は常に周りのことを第一に考えて行動してしまっている阿笠には、そんなこと簡単に言われてもなかなかできるものではない。

「嬉しかったもん。俺」

烈は甘い飴をモグモグさせながら淡々と言う。

「素直に引き下がれるよりずっと嬉しかった」
「そ…そうだった？」
「おう。確実に」

あっさりと言う烈に阿笠は少しキョトンとする。

選抜で烈と出会って、自分の後ろ任せられる守護神を見つけて
そしてサッカーをやめると言った烈にだめだと叫び
勝負までして
負けて
泣いて

そんな過去を阿笠は大人気なく感じていた。

「…麻冬もさ、誰でも良かったわけじゃないよ」
「え…」
「阿笠だから選んだ。ただそれだけのことだ」

烈は舐めることに飽きたのか、飴をボリッと噛んでいる。

「自信持てよ。少なくとも俺はお前の味方だから」

そう言いながら軽く微笑む烈。

「…俺さ、前に秋人に負けないって言った。でも正直秋人が動いたら身を引かなきゃって思った」

阿笠はもらった飴を左手でギュッと握りしめる。

「でも……自分のためにもがいても良いかな」

本当ならば麻冬のことを思うなら秋人に譲るのがベスト。

両思い同士でいたほうが絶対に幸せに決まってる。

たとえ自分を犠牲にしようとも……

阿笠はそう思っていた。

でも烈に言わせればそれは麻冬の気持ちを優先させてるだけだと。
もっと自分の幸せ考えて良いんだと。

「恋愛なんてそんなもんだよ」

そう言った烈はなんとなく大人びていた。
そして付け加えて、こう言った。

「あんときから俺お前大好きだし」

平然とそう言う烈に阿笠は
「はっ？！」とびっくりしている。

でも烈は照れた様子も見せずに、ニコッと笑う。

「大丈夫だよ。頑張れ」

それは烈からの

親友からの励ましの言葉。

「……はは。敵わないな、烈には」

大丈夫なんて保証はないし、むしろ可能性は低い。

けれど烈が味方でいてくれるなら怖いものなんか何もないと、阿笠は心に思う。

春樹に頑張れと言われるより、秋人に競り合おうと言われるより

何よりも一番

「あ。食い終わっちゃった」

烈は噛んでいた飴を食べてしまい、もう1つポケットから飴を取り出した。

「何個入ってんの？」

阿笠が不思議そうに尋ねると、烈はズボンの両ポケットとトレーナ

ーのポケットから大量の飴を取り出す。
パッと見た限りでは軽く２０個は越えている。

「持ちすぎだろ！」
「頭使うと糖分必要だろ？」
「それにしたって…」

阿笠は烈のありえない行動に唖然としながらも、次の瞬間にはブッと吹き出してお腹を抱えて笑いだした。

突然笑いだした阿笠に驚いた烈は
「なんだよ！」と声を上げる。

「だ…だってお前っ……」

阿笠は喋るのも苦しそうなくらい笑っている。

こんな関係の２人

大事なことはサッカーだけではない。

そんな関係からそのことを阿笠は教えてもらった。

しばらくすると掃除の時間が終わりＨＲが始まる。

それも終わるとみんな部活をしに行ったり帰ったり、遊びに出かけたり又は教室で仲良く喋っていたりする。

阿笠と烈はノートをコピーしに資料室まで向かう。

資料室には生徒用にコピー機が置いてあるのだ。

その帰り道、秋人たちのクラスの前を通りかかったときに偶然視野に秋人の寝ている姿が目に入る。

「あ。秋人寝てる」

「あ、なぁ月影ってめちゃ上手いんだろ」

「なに、一緒にやってみたくなった？」

ニヤッと笑いながら阿笠が烈を見ると、烈は

「面白がってるな、こいつ」なんて思いながらも答える。

「……少し」

秋人がキャプテンなことは星陵生なら誰でも知っているし、全国優勝したことは全国民が知っている。

烈だって例外ではない。

「じゃ誘ってみよっか」

そう言って阿笠は秋人の教室へと入って行く。

なにやら夏実と麻冬が頑張って秋人を起こそうとしているようだ。

だが爆睡している秋人は気持ち良さそうに寝ていて起きる気配を見せない。

阿笠は夏実と麻冬を押し退けて、寝ている秋人の肩をグイッと上げて胸ぐらを掴む。

「ちょっ、阿笠?!」

何をするのかと麻冬は驚いた声を出している。

そして阿笠は胸ぐらを掴んだ状態で前後に思いきり揺らす。

「起ーきーろー！！」

ガクガクと揺れながらもなおも寝ている秋人に、阿笠は何を思ったのか机を足で蹴ってどかせて、椅子に座っている秋人を胸ぐらを掴んだまま立たせる。

そしてまた激しく揺らした。

「……んぁ？」

寝ぼけた声を出しながらようやく秋人が起きたのを確認すると阿笠はすぐに秋人を離す。

「ぅおっ？！いてっ…！」

足に力の入っていなく、しかも立ってるとは夢にも思わなかった秋人はそのまま尻から落ちる。

痛そうにしてる秋人と同じ目線になるために阿笠はしゃがみこんで

ニコッと笑う。

「おはよ。ところで暇？」
「あ？」
「一緒にサッカーやろーよ」

唐突な話の流れについていけない秋人は呆然とする。

阿笠はそんなことおかまいなしに続けた。

「今日久々に烈がサッカーやってくれんだ。俺もう嬉しくって」
「は？あ、ああ」
「ね？行こ行こ」

阿笠が手を差し出して秋人を立たせる。

秋人もそろそろ現実に戻ったところで春樹との約束を思い出した。

「あ、俺春樹とゲーセンだ」
「えー。んなケチくさいこと言うなよ」
「ケチって」

秋人は席を直す。

そしてクラスメートたちももう半分くらいいなくなってるのを見て、
「あれ。授業終わったの？」と言った。

麻冬がそうだと頷くと、秋人は帰る支度を始める。

「明日にしてよ。って明日は部活か」

秋人が阿笠に言う。

「良いじゃん月影、ちょっとだけ」

烈は右手の親指と人差し指を平行にしてそう言う。

「てか愛川サッカーするんだ」
「何言ってんの秋人。秋人の球くらい烈簡単に止めちゃうよ」
「はっ？」

秋人は烈がサッカーをすることは知らない。

２人がサッカーして遊ぶのはだいたい休日の部活がオフな時間帯だ。

もしくは中学のグランドでやったりもする。

もちろん秋人は烈の実力など知るわけもなく。

「ははは。敵わないだろ月影には」

烈は阿笠に笑い返す。

「え～んなことないって。だって攻撃なら俺秋人に負けないもん」
「へぇ？」
「な。興味持ったろ？」
「ちょっとな」

秋人を置いて阿笠と烈は楽しそうに会話を弾ませている。

阿笠が蹴った球を烈が守れるのは五割。

その数字は以前から変わりはない。

なぜなら烈は少年サッカーのコーチをしたり草野球ならぬ草サッカーなどをやっていたりするからだ。

もちろん気が向いたときにだけなのだが。

少年サッカーについては土日のどっちかは出るくらいで、平日は本当に気分次第なのだ。

そんなことが許されるのも、烈はサッカー団からコーチとしてのお金をもらわないからである。

あちら側は渡したがるが、気分屋の烈は
「やりたいときに来てるだけだから」と断っている。

だから小学生でサッカーはやめたけど、それは自分がサッカーへの道を歩むのをやめただけであってサッカー自体をやめたのではない。

だからこうやって今全国トップレベルの阿笠と釣り合えるのだ。

「あ、じゃあ秋人が勝つまでで良いや」

阿笠は秋人に提案する。

「勝つまでって、俺が負けるか？一般人に」
「それはお楽しみ」

結局阿笠たちに促されて秋人は少しだけやることになった。

麻冬と夏実は部活があるからとそれぞれの場所へと向かって行く。

秋人は知らないだろう。

こんな身近で挫折を味わうことになろうとは。

next

第１０６話【烈と秋人】

阿笠と烈と秋人はグランドへ行き、カバンを適当にベンチに置いて隅に片付けてあるゴールを引っ張り出す。

みんなズボンが汚れないようにと膝丈くらいまで間繰り上げている。

「うーし、やっか」

阿笠は楽しそうにボールを出す。

それは嬉しいだろう。

星陵サッカー部部長でカリスマと呼ばれる男と、阿笠が唯一五割の確率でゴールを取られる男との夢の共演だ。

「んじゃ愛川、やろうぜ」

秋人が烈に１ｏｎ１をやろうと言うと、烈は手を振りながら「やだなぁ」と笑う。

「はやく帰りたいんでしょ？ＰＫにしようか」
「え、ＰＫ？」
「１ｏｎ１じゃ絶対月影俺を抜けないから」

悪気なくそう言う烈にカチンときた秋人はムッとしながら言い返す。

「俺そこまで下手じゃねぇぞ」

無理もない。

秋人からすればただの一般人から侮辱されたも当然なのだ。

しかも未来のオリンピック候補の秋人を、だ。

「んじゃ５本で良い？」

阿笠がそう言うと、烈は頷く。

秋人の意思など丸無視で進められている。

結局ＰＫをやることになる。

烈は阿笠から借りた手袋をつけてゴールの前に立つ。
秋人もＰＫの位置にボールを置いて準備をした。

春樹と約束しているとはいえ、すぐに終わってしまったら面白みがないと思った秋人は手加減しようとする。

だが、そんな秋人の心情に勘づいた烈は大きく手を振りながら言った。

「おーい、手加減なしな！」
「えっ」

なんで読まれたんだろうと少し驚いてる秋人に阿笠も言う。

「なめてかかると痛い目見るかもよ」
「お前まで何言って…」

訳のわからない状態でありながらも、とりあえず始めようと秋人は軽く助走して球を蹴る。

軽くとは言っても７０％くらいの強さだ。

が、烈はそれをいとも簡単にセーブする。

「おっ？」

７０くらいとはいえ、その球の威力やスピードは県大会上位レベルのもの。

同じサッカー部でも取れない人も多くいるくらいなのだから、部員ではない人が止められるはずがない。

読みが合ったとしても。

「月影ぇ。お前こんなん４割しか本気出してねぇだろ！」

しかも烈がそんなことを言うものだから尚更驚きだ。

秋人は小さな声で

「ばかいえ……7割だっつの……」と呆然としながら呟く。

そしてチラッと阿笠を見ると、秋人の視線に気づいた阿笠は意味ありげに笑う。

「だから言ったでしょ。烈上手いんだって」
「いや、でも……」
「実力は里田以上だよ」

阿笠からの予想外の言葉に
「はっっ?!」と秋人は烈に聞こえるくらいの声で叫んだ。

「小学生のとき選抜で一緒だったんだ。今は少年サッカーのコーチとかしたりしてる」
「ま…まじかよ」
「ちなみに状況や場面から相手の心情も読むからＰＫにはかなり強いよ」

秋人はただの初心者と思って油断していた自分をバカらしく思う。

バカにするどころか、バカにされるくらいだ。

「ちなみに俺の球取る確率５割だから」
「おっ…まえが５割じゃ俺は７割は取られんぜ」

まだ本気でやりあっていないとはいえ、烈の実力はもう秋人には十分分かっているようだ。

それもそのはず。

あの阿笠がそこまで言うのだから。

「そっか……あいつキーパーなわけか」

秋人はチラリと烈を見ながら呟く。

烈ははやく蹴ろよー！と催促している始末だ。

何かが吹っ切れたのか秋人は置いてあるボールの前で深く目を閉じる。

そして数秒してすぐ目を開き、蹴る体制に入る。

どうやらここからようやく本当の勝負が始まるようだ。

烈も自分の実力を秋人が理解したのだと感じ、その構えには一層集中力が感じられる。

秋人が蹴った球はゴールの左下をめがける。

左にくるとは分かったものの下だと思っていたなかった烈は上をセ

ーブしようとする。

だが下にきたのに気づいて左足をかすかに動かすが間に合わず、秋人の得点となる。

続く3本目も烈は惜しくもゴールを取られるが、4本目はなんなくセーブ。

そしてラスト1球

「うっし。絶対負けね」

のってきた秋人は楽しそうな顔をしている。

いまのところ2―2の引き分けだからラストで勝負が決まるのだ。

「ぜってー取ったる」

烈も、現役高校生サッカー部とサッカーができて嬉しいようだ。

やはり烈にはサッカーが似合っている。

素質も才能も可能性も十分にあるというのに、本当もったいない限りだ。

この前の県大会予選だって、例え秋人がいなくても烈がゴールを守ってれば点を取られることはなかった。

阿笠はちゃんと得点していたのだから。

まぁそんなあり得ないことを考えても仕方ない。

烈はそれでもサッカーを選ばなかった。

そして、ついに秋人が最後の球を蹴る。

右か左か真ん中か

上か下か

烈は何を思ったのか、思いきりジャンプして右足を９０度上げた。

球は、まるで烈の足に吸い付いていくかのような軌道を見せる。

「うっそ……」

秋人がそんな声を漏らした瞬間、烈は見事に秋人の球をセーブしてみせた。

完璧にそこに来ると分かってなきゃできない芸当だ。

片足1本で球を止めるなんて。

「へへ。やっぱ最後くらいは魅せないとな」

烈はウインクしながら陽気に言い、秋人に近づいてくる。

「すげぇな……愛川」

秋人は未だかつてこれほどまでの人を見たことはないと言わんばかりの顔をしている。

もちろん全国には烈より上手い人が片手指折りくらいはいるかもしれない。

それでも烈は現役選手ほど練習をしていない。

もし同じ練習をしたら……

「…愛川！あのさ！」
「あ、烈。セーブしたボールが陸上部のほうに」
秋人が烈に何かを言う前に阿笠が烈にそう言う。
烈は阿笠に指差された方向を振り向き、ボールが転がって行くのを見て
「やべっ」と慌てて拾いに走る。
そんな烈の姿を見つめている秋人に阿笠は話しかける。
「……考えて。できることならもうとっくの昔に烈をサッカー部に入れてる」
阿笠のほうを振り向くと、阿笠は楽しそうな烈を少し遠目で見ている。
「俺だってずっと一緒にサッカーやりたかった。普通にいけばあいつは日本一のキーパーになる」
「だったら…」
「けどさ、烈はサッカーじゃない道をもう４年以上前に選んでんだ」

転がって行ったボールは近くにいた陸上部が拾い上げる。
烈に気づくと、その部員は烈にボールを渡す。
どうやら友達だったようで、なにやら楽しそうに話をしているようだ。
「サッカー以外の道……」
秋人はかつてアメリカにいた頃の自分を思い出している。
社会的地位を手に入れてエリート街道を歩もうとしていた、幼い自分。
秋人にとってはその夢は壊れてしまったけれど、でも代わりにサッカーを見つけた。
秋人は烈を自分と重ねて考えてみた。
サッカーしていた頃の烈はアメリカにいた頃の秋人。
画家を目指してる烈は、今の秋人。

全く同じなのだ。

「……じゃあ仕方ないな」

秋人は未練は残るものの仕方がないとため息をつく。

「えっ」

物わかりの良い秋人に阿笠は少し驚いている。

普通これほどの実力を見せられたら何がなんでも入れたいと思うはずなのに……と。

「気持ち…分かるから」

秋人は烈を見つめる。

秋人にとってサッカーに生きる道が幸せであるように、烈にとってもそうなのだ。

それは経験したことのある人にしか分からない。

贅沢な悩みと思うかもしれない。

才能がありすぎだと思うかもしれない。

けれど

「ふーん?そっか」

「あ。じゃ俺行くわ」

「えーもう?!負けてんじゃん!」

秋人は適当に置いていたカバンを拾い、まくりあげていたズボンを下ろす。

「ばか。日が暮れちまうわ」

そして秋人はタッと烈のところに駆けていく。

烈の肩に手を置き、秋人は言った。

「愛川、またやろうな」
「あれ。終わり？」
「おう」
「次も勝っちゃうよ」

烈はピースしながら言う。

「そうはいくかよ」

ハハッと少し笑って秋人も言い返す。

そうして秋人は駐輪場へと走って行った。

烈も陸上部員と話すのをやめて阿笠のところに戻ってくる。

無邪気な烈を見て阿笠はボソッと呟く。

「本当惜しいよな……」

え？と聞き返した烈に阿笠は
「何でもない」と笑う。

あれから4年半以上経った今も阿笠は心の底で惜しいものだと思っている。

すぐ側にいるのに一緒にできない悔しさ。

でも、サッカーやってる烈だけでなく画家という夢を持って素晴らしい賞を取っている烈も隣で見てきた。

画を書いてる烈がどれだけ楽しそうか、阿笠が一番分かる。

複雑な思いだろう。

「あれ？そういえばなんで秋人が烈の気持ち分かるんだ？」
「え？」
「あ…いやさっきな」

烈はチラッと空を見上げて
「ふーん……」と頷く。

情報網の烈だから、秋人の過去すら知っているのか。
それは烈にしか分からない。

ただ、秋人自身は烈という存在を嬉しく思っている。
自分の選んだ道が間違ってはいないと示してくれたみたいだから。

自転車で春樹がいるゲーセンまで向かう中
秋人は珍しく鼻歌を歌っていた。

next

第１０７話【秋人知る麻冬の思い】

「お待たせ、春樹」

気分上々の秋人はゲーセン内で春樹を見つけて声をかける。

ちょうどユーフォーキャッチャーをやっているところ。

よく見ればもう大量にぬいぐるみやら香水やらアクセやらを取っていて、大きな袋に入っている。

「ご機嫌だね。秋人」

春樹はチラッと秋人を見て、またキャッチャーに集中する。

どうやらこの機械でもぬいぐるみを取れば、ここにあるユーフォーキャッチャーすべて制したことになるようだ。

「おう。あんな、愛川いるじゃん？あいつサッカーめちゃ上手くてさ」

「へぇ？烈が？」

「まじ里田とは比じゃないくらい。なんか楽しくって」

ふーん、と受け流すように春樹は返事をする。

と、そこでぬいぐるみを取り損ねて
「あっ！」と声を上げている。

春樹はもう２００円入れる。

「烈ね、小学校俺と一緒」
「えっ？でも」
「うちの学校からは北と南に分かれて２つの中学に上がるんだ」
「なるほどなぁ」

そうして春樹はもう一度挑戦し始める。

狙いはプーさんのぬいぐるみのようだ。

「だから烈がサッカー選抜にいたとか知ってた」
「まじか！」
「でもあいつ画上手いだろ。だからサッカーやめてさ」

話しながらもゲームに集中し、春樹は今度こそぬいぐるみをゲットする。

春樹は手に入れたぬいぐるみを袋に詰める。

「中学上がった頃阿笠とケンカしたりしたみたい」
「ケンカ？」
「サッカーやらない烈をどうしても許せなかったみたいでね、ＰＫ勝負したんだ」

秋人はそう言われてさっきのことを思い出す。

「その勝負じゃ阿笠と愛川なら五分五分だろ」

阿笠がさっきそう言っていたのを思い出して秋人は春樹にそう言う。

春樹は
「そうなんだけどね」と一呼吸置いてから言った。

「５本勝負だからさ」
「…ってことは阿笠負けたの？」

今烈がサッカーやってないということはそういうことになる、と秋人は思う。

確かにその通りだ。

阿笠は負けた。

ただ……

「ラスト阿笠がわざと外したんだ」
「え」
「俺がもし入れちゃったら烈サッカー部入んなきゃなんないだろ…
…って阿笠言ったらしいよ」

春樹は重たそうに袋を持ち上げる。

そして2人はここだと邪魔になってしまうからと休憩所のようなところへ向かう。

「阿笠から勝負ふっかけたのにか」
「阿笠も意地っ張りだからさ。そうでもしなきゃ烈を諦めらんなかったんだよ」
「なるほどな。阿笠らしい」
「だねぇ」

アハハと笑う春樹を見て、秋人はハッとする。

「そういえばお前もう怒ってねぇの？」

秋人がそういうと春樹は笑うのをやめて、少し罰が悪そうな顔をしながら顔を反らす。

春樹も反省しているようだ。

いくら麻冬に幸せになってほしいと思ったからああ言ったとはいえ、泣かすなんてやりすぎだ。

いつか秋人が告白すればすべてが分かることで、きっと麻冬はそのときにまた泣くんだろう。

その一番の相談相手でなくてはならない自分が先走りしてしまったことに、春樹は大いに悔いている。

「……謝んなきゃ。明日」
「謝るのか」
「やっぱ俺も悪いし」

すると秋人は、少し神妙な面持ちで春樹に尋ねた。

「……麻冬の好きな奴って誰？」

春樹は予想外の質問に少し驚いている。

「え…っと……」

「阿笠も知ってんだろ？なら俺も知りたい」

「や、やー……俺…は……」

「知らないとは言わせねぇぞ」

春樹の口から秋人に言えるはずがない。

なぜならその人こそが秋人なのだから。

秋人は春樹が知ってることを知っているし、春樹はどうにも隠せない。

それでも春樹から言って良い話でもない。

「こ…告れば分かる」

「そりゃそうだろ」

「じゃなくてっ」

春樹は困惑しながらも一途な目で秋人を見つめる。

「…そういう意味じゃなくて。……分かるでしょ？」

その言葉に秋人はピタッと止まる。

秋人は今までの記憶を廻らせている。

夏実のことで麻冬とケンカした日のこと

その次の日、麻冬と阿笠は付き合い出したことを知った。

夏実を好きだと思っていたけど、本当は麻冬が好きなんだと自覚した。

阿笠と一緒に帰っていく麻冬を見て寂しく感じる。

阿笠にはやく告れと言われたこと

春樹の言葉

「…まじ……かよ」

秋人は信じられないという顔をしている。

春樹は頷きも何かを言ったりもせず、気まずそうにただ秋人を見ている。

「なんで……だって…」

ようやく秋人は知った。

麻冬の気持ち。

「あいつ愛されたいから阿笠選んだって……。……あっ……そうか……」

秋人は麻冬が好きな人いるのに阿笠と付き合っていることは知っていた。

直接麻冬から聞かされていたからだ。

幸せになりたいから阿笠を選んだと……直接言われた。

「だって秋人は夏実を好きだったから……」

春樹は小声で言う。

まさかその相手が自分だったなんて秋人は夢にも思っていなかっただろう。

けれどそれならこれまでのこともすべてつじつまが合う。

「きっつ……」

秋人は額に手を当てて辛そうな声を出す。

開かれた真実を目の当たりにして秋人は絶望的になっている。

夏実を好きだと知っていた麻冬がどんな気持ちで自分を見ていて

阿笠はどんな思いで麻冬と付き合って

そして阿笠はどんな思いで自分の麻冬への思いを気づかせてくれたんだろうと、秋人は思う。

それだけでなく、一番記憶に新しいのはあの日だ。

頭を抱えながら麻冬を秋人に譲ると言った、あのときの記憶。

「あいつ……どんな思いで俺に言ったんだろ」

考えてみればあのときの阿笠の言葉から読み取れたはずだ。

麻冬が秋人を好きなことも、阿笠が麻冬を取られると不安になっていたことも。

「麻冬？」

知らなかったとはいえ、麻冬にも阿笠にもひどいことをしていた。

違う、知らなかったんじゃない。

知ろうとしなかった。

それがこの結末だ。

「阿笠……」

春樹は阿笠の名前が出てきてハッとする。

2人とも友達だからどちらも応援できないでいるから後ろめたいのだろう。

「……秋人、あの…」

春樹はもじもじとする。

「俺最悪だ」

「え？」

春樹より先に秋人が言う。

「阿笠……全部知ってんだよな。なのによく俺に笑ってくれた」

「阿笠は…そういう奴だよ」

「優しすぎる……」

2人の脳裏に思い浮かべられる阿笠の笑顔。

常に微笑みかけてくれて、困ったら手を差し伸べてくれる優しい優しい青年。

その笑顔の裏に、幾千の悲しみが隠れていただろう。

春樹とケンカもしたし、秋人の前で泣きそうになったし、真面目な顔もする。

それでもいつもあるのは、笑っていてくれる顔なんだ。

「優しいんだよ、ばか……」

秋人は悔しそうに言った。

側にいたのに、なにも力になってやれない。

それどころか存在自体が阿笠を苦しめてるなんて、想像もしていなかった。

秋人は罪悪感でいっぱいでいる。

「でも…言うでしょ？ちゃんと麻冬に」
「……言わない」
「なんで？」

秋人は前で手を組みギュッと力を入れる。

その手は微かに震えている。

「麻冬は……幸せになりたいから阿笠にしたんだって堂々と俺に言った」
「でもそれは……」
「つまりそういうことだろ…？」

こんなに近くにいるのに

両思いなのに

結ばれない。

それがこんなにも苦しいことだったなんて。

next

第１０８話【焦り】

烈と阿笠は秋人が帰ったあとも楽しくサッカーをしていた。
少し休憩しているとき、阿笠は思い出したように言った。

「な、木村ってどれくらいいんのかな。学校に」
「木村？」
「って分かるわけないよな～」

阿笠は昼間麻冬が木村という名前を出したことを思い出す。

「や、分かるけど」
「分かっちゃうの？！」
「うちの学年なら３人。上は４人で下は１人」
「すっげ……あ、じゃあその中で男は？」
「上から２、２、１」

なぜこんなことまで知っているのか、そこは深く突っ込んではいけない。

観察力が鋭いのか記憶力が優れているのか…

「なんか…関係ありそうなのいる？」

「阿笠に？」

「俺とー……麻冬？」

烈はうーん…と軽く空を見上げて考える。

そしてブツブツ何かを言っている。

3年の2人は部活も何も接点ないしなー…なんて。

「あ」

「おっ、なんだ？」

「1年の木村はサッカー部じゃん」

烈にそう言われ、阿笠は

「あっ」と声を上げる。

目から鱗状態だ。

「木村か……でもあいつがなんで麻冬に…」

「なんか麻冬にしたの？」
「いや、よく分かんないんだけどさ」
「ふーん」

と、そのとき烈はスクッと立ち上がる。

何かした？と阿笠が尋ねると、烈は目をギラギラさせながら嬉しそうに言う。

「ひらめいた！」
「えっ」

すると烈はカバンやらをガサガサ持って忙しそうにしている。

「ちょっ、今日はサッカーだろっ」
「わりっ！また明日！」
「ったくもー」

ひらめいたとは、何やら良い画が書けそうということのようだ。

一緒にいてもこんなことはよくあるらしい。

授業中だってひらめけば構わず板を出して書いている。

そのため烈はいつも一番後ろの席なのだ。

教師ももう諦めてしまっている始末。

「…木村か」

阿笠は自主練しようかとも考えたけど、もしかしてまだ木村が学校にいるかもと思ってボールたちを片付け始める。

ゴールも隅に寄せなきゃならなく、阿笠はそこらへんにいる他部の生徒を捕まえて手伝ってもらう。

1人で自主練するときはゴールのある隅のほうでやったり、またはゴールを使わなかったりしているが今回は１ｏｎ１ということで出した。

片付け終わったところで荷物を持って阿笠は再び校舎へと向かう。

まだ校舎に残っている生徒はかなりいる。

阿笠は木村が何組か分からないため、廊下にいた1年にクラスを聞いて、その教室へと向かってく。

どうやら木村は同じサッカー部の1年とテスト勉強をしているようだ。

阿笠はバレないように静かに教室に入る。

「あれ……ここ過去だっけ」
「違うよ。仮定法の過去は大過去になるからそこはｈａｄ　ｈａｄかな」
「おぉ、なるほど。……え?!」

木村の独り言に阿笠は淡々と答える。

すると木村はバッと振り返って驚いた顔をした。

「副部長!」

一緒に勉強していた他の部員たちも阿笠に気づいてあいさつをする。

「やっほ。勉強?偉いね」
「副部長勉強しないんすか?」
「ん?まぁめんどいしね」
「言ってみたいっすよ。そんな言葉」

すると誰かが阿笠に
「あ、じゃあ教えてくれません?俺らもうちんぷんかんぷんで」と
言った。

阿笠は良いよと答えるものの、加えて木村に言う。

「でもその前に木村。ちょっと良い?」
「俺?」

そう言って阿笠は木村をつれて教室を出る。
木村は何か部活のことだろうと素直に出て行くが、よくよく考えて
それならあの場で言わなかったことを不思議に感じる。

あそこにはサッカー部しかいなかったのだから。

個人的な用事というのなら木村にも心当たりはある。

案の定木村の読みは的中していた。

「あのさ、単刀直入に聞くけど麻冬に何か言った?」

人通りの少ない廊下の隅のほうに来て阿笠は木村に尋ねた。

木村はやっぱり…と心の中で呟く。

木村は何と答えようか一瞬戸惑ったけど、意を決して堂々と言う。

「俺、前々から雪原先輩と部長が両思いだと思ってたっす」

「え…」

「でも実際には副部長が付き合ってるじゃないっすか。まぁ、俺としては恋愛関係はなんでも良いんですけど…」

阿笠は一昨日の試合のあとの打ち上げのときの様子を思い出す。

誰かが麻冬のことに触れて一気に場が盛り下がった。

あのとき秋人と阿笠は、ようやくみんなにそんな風に思われていたのだと知った。

阿笠が横恋慕…みたいな形になったんだと思ってる人もいることに阿笠はどことなく悲しみを覚えた。

「ただ部活に支障は出さないでください」

木村は臆することなくズバズバと阿笠に言う。

「部長も副部長も雪原先輩のせいでたまに練習に身が入らないじゃないっすか」

「……なんだと？」

「雪原先輩がはっきりしないからこんなんになるんでしょ。だから俺言ったんですよ。先輩のせいで2人を傷つけてんだって」

木村はまだ何かを言おうとしたが、その前に阿笠は木村の肩をグイッと掴む。

今この場ではサッカー部副部長という立場ではなく、麻冬の彼氏というような顔つきで怒りに満ち溢れている。

「麻冬のせい……だと？」

普段の優しい顔の阿笠ではなく、部活中の真剣な顔の阿笠でもなく優勝したときの嬉しそうな顔の阿笠でもなく

かつて見たこともないような形相の顔をしている阿笠に木村はビクッとする。

「なんで麻冬にそんなこと言ったんだよ」
「え……」
「なんで言ったんだって聞いてんだよ！」

木村はかなり怒っている阿笠に逆らえないようで、おどおどしながら言う。

「だ…って、雪原先輩がはっきりしないから……」
「麻冬のせいなんかじゃない！文句あんなら俺らに言え！」
「ふ…副部長…」

しまった、やばい、というような顔をしている木村を見て阿笠はハッとする。

そして木村の肩をすぐさま離す。

そしてフーッと深くため息をついて額に右手を当てる。

「……わり。ちょっと気が動転してた」
「や…いっす」
「だけど本当麻冬には何も言わないでくれ」

阿笠はうつむきながら目をつむっている。

「あいつ…秋人が自分を好きだって知らないから」
「ま…まじっすか」
「秋人も麻冬が自分を好きだって知らないんだ」

木村は麻冬との会話を思い出して確認する。

確かに麻冬は秋人が好きなのは夏実だと言っていた。

「秋人が麻冬を好きだって知ったのは付き合い出したあとからだけど……でも、だからって秋人には譲りたくない」

お前にも幸せになる権利あるんだよと、阿笠の背中を押してくれた秋人。

まさか麻冬を好きになってるとは思いもよらなかっただろう。

最初から気づいていれば、阿笠を応援する必要なんかはなかった。

「…卑怯だって分かってるけど……」
「卑怯だとは…思いません」
「え？」

阿笠はようやく顔を上げる。

木村は少し真剣な瞳で阿笠に言った。

「副部長が本気なら仕方ないって思います。誰にも譲れない気持ちってある」

「木村……」

そして木村はペコッと頭を下げる。

「すんません。俺、軽率でした」

麻冬は麻冬なりに複雑な心境を持っていること、そして阿笠も阿笠なりに複雑な心境を持っていると木村は理解した。

もともとサッカーを真面目にやって欲しくて麻冬に文句を言ったクチだけど

「えっ…い、良いよ木村。頭上げて」

慌てて阿笠がそう言うと、木村はゆっくり頭を上げる。

「今度から文句は副部長たちに言いますね」

ニコッと不敵な笑みを浮かべながら言う木村に、阿笠は少したじろぐ。

「う……き、気をつける」

そうしてしばらくの間世間話で盛り上がる。

その後阿笠は帰ろうとするが、木村が
「勉強教えてくれんじゃないっすか？」と言う。

すっかり忘れていた阿笠は思い出したように返事をして、2人は教室へと戻って行った。

頑張って勉強してるサッカー部員たちは分からないところだらけのようで、阿笠が戻ってきたことに半泣きで喜んでいる。

結局阿笠は自分の勉強もすることなくずっと教えるはめになってしまった。

next

第１０９話【突き放し突き放され】

「麻冬は……秋人が夏実を好きだと思ってるから阿笠を選んだんだよ」

麻冬が自分を好きだと知って落ち込んでいる秋人に、春樹は諭すように言う。

「言わなきゃ何も伝わらない。麻冬は…ただ愛されたいだけなんだ」

「愛してくれる奴なら誰でも良いっつーことだろ…」

「分かんないの？秋人」

突き付けられた現実に戸惑いを隠せないのは致し方ないのかもしれない。

ただ一言好きだと…ただ一言伝えていれば、もしかしたら今麻冬の隣にいるのは秋人かもしれない。

なぜ麻冬への気持ちに気づかなかったんだろう

なぜ阿笠を応援したんだろう

なぜ失ってから気づいてしまうんだろう

秋人は後悔でいっぱいだ。

「いっぱい告られてる麻冬が阿笠を選んだのは、阿笠で良かったんじゃない。阿笠が良かったんだ」

春樹の言葉に秋人は不思議そうな顔をする。

「阿笠なら、一度好きになった人ならきっとまた愛せる。そう思ってんだよ」

「だっ…て……」

「秋人を無理やりにでも忘れるために阿笠を好きだと思い込んでんだ」

秋人の脳裏に麻冬の姿が浮かぶ。

阿笠と一緒にいる麻冬

笑っている麻冬

泣いていた麻冬

1つ1つが愛しい。

「……それでもまだ秋人を好きだから、俺怒った」

秋人は今やっとさっきの麻冬と春樹のケンカの意味を理解したようだ。

ようやく線が1本に繋がった。

「俺は麻冬と秋人が両思いなのを知ってる。でも麻冬が阿笠が良いって言うのなら、俺は秋人も阿笠も応援できない」

春樹も本当は親友である秋人にこんなことを言いたくない。

本当なら応援したいし協力したいと思っている。

「もう一度言う。秋人、俺は何もしてやれない。自分の力で這い上がれ」

「春樹…」

「……ごめん。秋人」

春樹は少し頭を下げる。

なにもしてあげられないし、味方をすることもできない。
たった1人の親友を突き放すことしかできない。
それでも、もしくじけたり悩んだりしたらいつでも秋人の支えになるよ
と、そう思っている春樹の心情を秋人は読み取った。
「……今はまだ正直、前へ進むかは分からない」
秋人は小さな声で言う。
春樹は頭を上げて秋人を見た。
「けど、それでも俺お前がいてくれることは忘れない」
秋人は辛そうな顔をしているけど、春樹も秋人の心情を読み取る。
お互い、分からないはずがない。

知り合った歴は短いかもしれない。
秋人は阿笠との歴史のほうが長いし、春樹も中丸との歴史のほうが長い。

けど、それでも時間を感じさせないくらいのものがそこにはある。

いつどこにいても、何をしていても大人になっても

君を思うことだけは変わらない。

今何をしているだろうか

元気だろうか

君は今日も笑っているだろうか

そういう風に、いつも思われている。

僕たちは、そうやって年を重ねていくんだ。

「よっし。じゃあ秋人遊ぼうか！」
「ところでそれは？」
「あ、これ？明日麻冬にあげようと思って」

春樹はぬいぐるみたちが入っている大きな袋を持ち上げてイヒヒと笑う。

仲直りするつもりであげるんだろうけど、麻冬と夏実に…とは言わないのか。

かなり数ある景品を。

「……春樹らしいな」

いつもと変わらない春樹を見て秋人はクスッと笑う。

「そ？」
「よし、遊ぼうぜ！」

秋人はスクッと立ち上がる。

春樹も便乗して立ち上がった。

楽しそうに遊んでいるときの彼らは

スポーツをやって脚光を浴びているときの凛々しいスポーツマンで
はなく

学校で憧れの的になっている有名な人間でもなく

ただ純粋に、一男子として。

無邪気にじゃれあってゲームをして一喜一憂して

そんなごく普通のこと

夢見て憧れて。

勉強を教えるはめになった阿笠は、容赦なくバシバシと言っている。

「だーっ、もう！アホかお前らっ！！」

基本的に星陵高校はそこまで偏差値は高くない。

偏差値５６くらいのごく普通の公立高校。

ただスポーツは全国レベルなところもあるから、割とスポーツ推薦に力を入れてる。

つまり、スポーツ推薦は偏差値関係ないわけだから出来の悪い生徒もいる。

木村なんかは良い例だ。

１年でスポーツ推薦で入ってきたのは里田と木村、あと４人ほどだ。

里田は勉強もそこそこできるが、木村は中の下くらい。

「副部長～。そんなこと言わずにーっ」

今ここにいるサッカー部員たちは、木村を含めて４人。

そのうちサッカー推薦は２人だ。

「特に大竹ひどいな、本当」

「俺ぇ？！」

「わはは、大竹はまじバカっすから」

「や、お前もな」

「がーん」

阿笠が大竹という部員にそう言うと木村が笑う。

笑った木村に阿笠は止めをさしている。

そう、もう１人の推薦はこの大竹である。

すると一般組の２人がケラケラ笑った。

「だってこいつら推薦組っすもん」
「サッカー部1年の推薦組みんなバカばっかっすよ」

そういうと、阿笠は納得するどころかキョトンとする。

「？推薦組だとなんで頭悪いの？」

まぁ阿笠には理解できないだろう。

阿笠の周りの推薦組はだいたい頭が良いのだ。

まずは阿笠自身、烈、そしてあの4人だ。

それだけではないが、メインキャストだとこうなる。

「え？だって推薦は筆記試験ないじゃないっすか」
「ああ、まぁ」
「つまり学力関係なしってことっすよね」
「へーぇ」

阿笠には無縁の話だ。

ちなみに阿笠の代のサッカー推薦入学は6人だ。

星陵なら推薦でなくても上手い奴くらい簡単に集まってくるのだが。

「あれ。でも副部長と部長って頭良いですよね」

木村は思いついたようにそう言う。

「まぁね」

阿笠も謙遜することなくサラッと言ってのける。

「推薦なのに頭良いって最強っすよねぇ」

「え、秋人は……」

「え？」

「あ、や…何でもない」

本当なら阿笠は秋人が推薦ではないことを知っている。

だがそれを言うと大騒ぎになるだろうと思い、秋人は言うのをやめた。

まぁ驚くのも無理はないだろう。

あの秋人に推薦がこないと思っているなら。

実際には推薦はきていた。

秋人がまさか風邪ひいて受験できなかったなんて部員たちが知ったら、秋人が恥ずかしい思いをしてしまう。

秋人が推薦入学だと思っているのは1年だけではなく、同じ学年の部員ですらそう思ってる人はいる。

秋人がみんなに言わない限り、誰もが秋人はサッカー推薦だと思うだろう。

もしくは勉強のほうの特待だと思う人もいるかもしれない。

とにかく秋人が一般受験したなんて誰も考えはしない。

「んー、まぁほら、秋人天才だから」

阿笠は誤魔化そうと必死に笑いながら言う。

秋人は受験勉強しなくてももちろん受かるが、もし本番で失敗してもおそらく秋人は合格だ。

秋人を星陵に入れない理由などない。

去年の初夏、星陵教師陣全員が秋人を入学させて良かったと思っただろう。

「それに秋人はー……」

阿笠がまだ何かを言おうとしたとき、ガラッと教室のドアが開いた。

「あーかさ。迎え来た」

麻冬だ。

阿笠は麻冬に気づいてトコトコ歩いて行く。

「はやいじゃん。まだ6時半なのに」

「なんか明日テストだしもう試合終わったし、早く切り上げるかって顧問が」

「なるほど～」

どうやら麻冬は一度阿笠の教室に行ったらしいがいなく、校内で適当に人に尋ねてここにいると知ったようだ。

阿笠の携帯はサイレントになっていて電話しても阿笠が気づかなかった。

麻冬はそんな会話をしている中、木村がいることに気づく。

少しだけ気まずそうな顔をして、顔を反らす。

木村も木村で顔を合わせないようにしている。

「あ」

そんな2人の様子に阿笠は気づく。

だが、何と言ったら良いか分からないのであえて口出しはしないでいる。

阿笠は荷物を取り、後輩たちに帰ると言った。

後輩たちはお礼を言ったりあいさつをしたりする。

そうして麻冬と阿笠は教室からいなくなった。

一緒に帰る中、阿笠は何度か木村のことを言おうとしたが結局言えなかった。

麻冬は阿笠の家に一緒に勉強をしに行き、そのまま泊まっていった。

next

第１１０話【秋人の推薦事情】

テストも無事終わり、金曜日になるとその日ある教科の分のテストはもうさっそく返ってくる。

いまのところ数学やら物生やらが手に戻ってきているが、さすがは理系みんな良い点数を取っている。

そう、テストは無事終わったのだが新たな問題が１つ。

秋人の麻冬に対する態度がよそよそしいこと。

秋人は知ってしまったかりギクシャクする気持ちも分かるが、麻冬は秋人に知られてることを知らないのだから、当然秋人の態度に不満を持つ。

あたし何かした?と麻冬が尋ねても秋人は否定するし、じゃあなぜ避けるのかと問えば沈黙になる。

秋人もそんな態度は取りたくないのだが、本当のことを知ってかなりショックを受けてしまっているのだ。

それもそのはず。

両思いなのに、麻冬は今阿笠の彼女なのだ。

テスト期間中ずっとよそよそしく、金曜の今日ももう終わろうとしている。

明日は待ちに待ったサッカー観戦だ。

選抜の練習だか試合だかをサボってまで行きたい、阿笠との観戦。

だが今の秋人には正直阿笠と2人はキツいかもしれない。

「ちょっと秋人」

放課後になり支度を終えた麻冬が秋人のところにやってくる。

夏実は立ち上がり、2人にバイバイと言って春樹と一緒に教室を出て行く。

「え…な、何？」

「何じゃないわよ」

麻冬は少し怒っているようだ。

「なんかあるなら言って。なんで避けんのよ」
「そんなんじゃ…」
「じゃあ何？」

秋人は言葉に詰まる。

今ここで、俺とお前両思いなんだよと言えたらどんなに素敵か。

言えるはずがない。

「や…ちょっと阿笠とケンカしたから」
「ケンカ？」
「まぁ他愛もない口論だけど……」

とっさについた嘘。

「なんであたしに関係するの？」

怪訝そうにそう尋ねてきた麻冬に秋人は言った。

「阿笠の彼女だし」

そう言った瞬間秋人はハッとする。

麻冬も少し驚いた顔をして一瞬切なそうな顔をした。

2人、思いは同じなのに。

「そっか、そういうこと」
「でも今日仲直りすっから。悪かったな、麻冬」
「ううん、良いよ。だってあたしら友達だもん」

その言葉にどんな意味が込められているのか。

どんな思いで言い、どんな思いで聞いただろう。

切ない

これ以上の言葉は見つからない。

「じゃああたしらも部活行こっか」
「そうだな」

秋人と麻冬も教室を出て部活へと向かっていく。

2人とも昇降口を出て、もう少し歩いたところで分かれる。
秋人が部室へ向かうと、まだ1年たちが着替えていた。

「こんちはー」
「ちーすっ」

みんな着替えながらもあいさつをしていく。

おう、なんて言いながら秋人もロッカーを開けていろいろと準備し始める。

「ん？誰のだ、これ」

秋人は自分のロッカーのすぐ下にタオルが落ちているのに気づき、拾い上げて部員たちに尋ねる。

「あ、俺っす。ありがとうございます」

「はいよ」

木村だ。

木村は秋人からタオルを受けとるが、秋人の顔を見て一瞬気まずそうな顔をした。

秋人は不思議に思いはしたが特に気にせず流す。

そして秋人も制服を脱いで着替え始めた。

「あ、あの部長…」

木村は着替えている秋人にもじもじと話しかける。

秋人はワイシャツのボタンを取りながら

「んー」と空返事をする。

木村は水木と部活中も微かに秋人を避けていた。

避けていたというか、もちろん必要事項は話したりするし部活中もいろいろプレーのことで言ったりしてる。

だがそれ以外のときは極力目を合わせないようにしていたようだ。

やっぱりいろいろ知ってしまって気まずいのだろう。

「あ…えっと……」

何か言いたそうで、でもなかなか言わない木村を疑問に思う秋人は「何？大事な話？」と尋ねた。

木村はゴクッと唾を飲んで、覚悟を決める。

「あのっ、部長は――――」

「うーっす」

そのとき、部室のドアが開いて阿笠が入ってきた。

「おう、阿笠」

「あ、秋人。やっほ。テストどうよ？」

「ははは。満点」

「は？！全部？！」

「今んとこな」

秋人はサラッと言ってのける。
部室にいた部員たちがガヤガヤと騒ぎ出した。
「お前は？」
「数が９７と９５で物理が９９、英語９７現文９２、古典１００くらいか？」
「お前…ほんっと惜しい奴だよな」
「うるせ！」

阿笠でもこんな点数が取れるのだ。
もちろん阿笠もかなり頭は良いほうなのだが、別に全国レベルというわけでもない。
そんな阿笠が９０点後半ばかり取れるのだから、世界でも指折りの天才児の秋人が満点取れるのは当然である。

「あっ、木村。な、推薦を言い訳にはしないぜぇ」
阿笠はピースしながらすぐ側にいる木村に笑う。
木村は失笑しながら
「参りました」と言った。

そんな会話を見ていた秋人が不思議そうに言う。

「推薦？」

「ほら、木村サッカー推薦で入学したろ。スポーツ推薦組って頭悪いのばっかじゃん」

「あ、そっか。そういや阿笠も推薦だったな」

「そうそう」

「阿笠は頭良いよなぁ」

秋人は部室の中をキョロッと見回す。

それから阿笠に、もしかしてサッカー部って推薦ばっかなの？と尋ねた。

「んー、まぁレギュラーとか準レギュ当たりはな」

「へ～」

秋人は少し物珍しそうに答える。

そんな秋人に同級生の部員たちが笑いながら言った。

「あっきーだって推薦だろ？」

知らない人ばかりなのは仕方ない。

なぜなら同級生たちの中で秋人がサッカー推薦ではないと知っているのは阿笠と同中の部員だけなのだから。

中学選抜でも仲が良かったから、阿笠は秋人が推薦を受けに来てないことに気づいてその日に秋人にメールをした。

そうして秋人は風邪であることを阿笠に伝えたのだ。

別にあえてみんな秋人が一般組だと言う必要もなく、黙っていただけ。

「いや、俺一般受験だから」

秋人がそう言うと、部室中に叫び声が響いた。

秋人は耳を押さえて

「なんだよ！」と言い返す。

「はっ？！だって何っ…」

「お前を推薦しなくて俺らを推薦って意味分かんなくね？！」

2年だけでなく1年も同じように騒ぎ出す。

秋人はしまった、というような顔をする。

それは言いたくないだろう。

風邪ひいて受験しなかったなんて秋人にとってはカッコ悪いことだ。

秋人は阿笠に助けを求めようとするが、阿笠は上を向いて知らんぷりをしている。

同じ中学だった部員たちも、せっせと支度をしているフリをしている。

阿笠は内心、この前のときせっかく木村たちに黙っててやったのにと思っている。

まさか自分で墓穴掘るとは。

「ほらほら、1年ははやく準備準備」

阿笠は急かすように言う。

1年たちは真相を聞きたそうな顔をしているが、阿笠には逆らえないので仕方なくぞろぞろと部室を出て行く。

なおも2年部員たちはしつこく詰め寄ってくる。

「阿笠は知ってんの？」

秋人をカバう姿勢を見せた阿笠に誰かが言う。

「そうだよ、お前なら知ってんだろ」

「えっ、つか秋人と同中なら知ってんじゃね？！」

阿笠の次は秋人と同中部員たちが標的にされる。

だが彼らはそそくさと部室を逃げ出して行く。

阿笠も逃げようかと思ったが、秋人があまりに気の毒だから阿笠はみんなにこう言った。

「じゃあさ、今日の紅白戦で俺と秋人の攻撃止めれたら教えるよ」

「えっ阿笠…」

秋人はいきなり何を言い出すのかと驚いた顔をしている。

「もちろん俺と秋人は同じチームで」

阿笠はニッと笑う。

阿笠と秋人のコンビを止められるはずがない。

2年部員たちは悔しそうな顔をして、諦めたようだ。

そうして彼らも部室を出て行く。

部室には秋人と阿笠だけになり、来てすぐ話し込んでしまった阿笠もようやく着替え始めた。

「はー……まじ助かった」

「でしょ。感謝してよ」

阿笠は爽やかに笑う。

ふと秋人の脳裏には、ゲーセンでの春樹との会話が浮かぶ。

何もかも知っている阿笠がいたことを…

「？どうかした？」

じっと阿笠を見つめていた秋人に、阿笠が尋ねる。

「あっ？や、別に」

「そ？」

どうしてそんなに優しくしてくれるのか

秋人にはそんな思いでいっぱいである。

2人も着替え終わり、ともに部室を出る。

そのとき、ふと秋人は呟く。

「あれ。木村と何の話してたっけ」

結局阿笠が入ってきて話が盛り上がってしまったから木村の話を聞いていなかった。

秋人はどうするか迷うが次の瞬間には、まぁ良いかと1人で解決する。

とりあえず、1年の準備が終わってから部活が始まった。

next

第１１１話【絆】

「阿笠、勝ったら教えてくれんだって？」
「は？」

部活で紅白戦を行う直前、２年部員たちが阿笠に言った。

「秋人のこと」

阿笠は、ああ…とさっきの部室での会話を思い出す。

「え……本気？」
「ったり前だろ」
「そこまでして知るもんじゃないのに…」

そこまで気になるものなのかと阿笠は少し呆れている。

「秋人ぉ、どうする？」
「はー？かったりぃなあ……。くだらんこと言ってないでさっさとチーム決めるぞ」

秋人は面倒くさそうに頭をかきながら言う。

だがみんな反論する。

同中だった部員もはやく始めたいというような顔をしているが、2年部員の迫力には負けている。

あまりのしつこさに秋人がキレそうになったとき、誰かが言った。

「そっち勝ったら何でも奢ってやるから！」

その言葉に秋人と阿笠の動きがピタッと止まる。

そして、何でも？と2人してハモりながら聞き返す。

「おう！」

「それなら良いだろ？！」

秋人と阿笠は顔を見合わせる。

普通に勝てると分かっている勝負なのに、勝てたら何でも奢ってもらえる。

こんな好条件飲むしかないだろうと言わんばかりの顔だ。

「良いぜ」
「じゃあやろうか」

秋人と阿笠は挑戦的に言う。

これにより、紅白戦という名の部長副部長ｖｓ２年部員という異色の試合が始まる。

もちろんＦＷが秋人たちを止めれるはずもないから、相手チームの誰かが止めれたら部員全員に教えるという。

２年部員たちは１年に事情を話す。

すると部員全体がやる気に満ち溢れている。

同じチームの部員たちも極力秋人と阿笠にパスを回すつもりのようだ。

止められるチャンスを増やすために。

味方チームなのに敵とは、なんとも摩訶不思議だ。

これにより紅白戦が始まった。

勝負とはいえれっきとした練習でもあるから、味方チームがミスすれば秋人も阿笠も怒る。

相手チームにはいまのところ星陵一のＤＦ木村がいるし、里田までいる。

最悪の条件だが、秋人たちには全く問題はない。

全国レベル……全国でもトップレベルの２人に県レベルの２人が止められるはずがない。

「阿笠！」

秋人からの絶好のパス。

阿笠は待ってましたと言わんばかりにシュートして、里田に指一本触れさせずに決める。

「ないっしゅ」

「今度は秋人な」

2人はパンッとハイタッチしながら言う。

いくら相手チームが2人に守備を固めてきても止められるはずがない。

華麗なドリブルを魅せる秋人に天才的な攻撃をする阿笠のコンビ。

綺麗に抜かされて、しかもフェイントかけられて2人におちょくられるのがオチである。

それでもみんな秋人の秘密を知りたいがために必死になるが、結局紅白戦で一度足りとも2人を止めることはできなかった。

「じゃあ終わりー」

秋人の声で練習が終わり、みんな疲れた〜などと言いながら一例に並び始める。

秋人から順に阿笠、2年部員、1年部員と。

「気をつけー礼、ありあとーざぁした」

「ありあとーざぁした」

秋人が始めに言い、他の部員たちが揃って言う。

グランドへのお辞儀だ。

掛け声は正式には

「ありがとうございました」なのだが、大きな声で言うと更にリズム的にああなってしまうのだ。

残りは各自ストレッチなどをしたりする。

「あ～くそっ。結局聞けねぇのかよ」

部員たちはドサッと座り込んでストレッチをしながら言う。

「何か奢れよ。あ、じゃあステーキ食いたい」

「お、良いね。ついでにサラダバー付けちゃうか」

「ないす阿笠」

阿笠と秋人は楽しそうに言っている。

何でも奢ると言った以上部員たちは何も言えない。

「いつにする？」

阿笠が秋人に尋ねた。

「んー。明日は阿笠と観せ……選抜練習だし、日曜は春樹たちの飲み会だしなぁ」

「あ、じゃ今日で良いじゃん」

「でもお前麻冬は？」

「連絡入れとくよ」

「おっけ。決まりだな」

というわけで、今日は自主練をせずに夕飯を食べに行くことになる。

部員全員で行っても席取れないだろうから、秋人と阿笠以外に用事のない2年部員で行くことになった。

自転車で20分くらいのところにステーキ屋があるのだが、秋人や阿笠には家と反対方向にある。

だが近場にはそこしかないため、そこに行くことになった。

阿笠は今朝は遅刻しそうだったから車で来たようで、秋人と2ケツ

する。

着替え終わった彼らは店に向かって集団で自転車を走らせる。

「秋……？なんで…」
「や、こっち近道」

途中で秋人はみんなとは違う道へと進み出す。

「そうなんだ。すっごいな秋人。俺道とかダメダメでさ」
「あー確かに阿笠はそうだよな」
「でしょ。1回秋人の脳の中見たいなぁ」

阿笠は非現実的なことだと笑うが、秋人は特に気にすることもなく「見る？」と言う。

「……はっ？」

秋人の意外な返事に阿笠は頭がついていけない。
そんな阿笠に気にせず秋人はずいずいと言った。

「昔研究所でデータ欲しいとかって取られたんだ。だからそこに連絡すりゃ…」
「えっ、え？何、何？」
「うん、だからさ、俺普通じゃないんだって」

意味の分からないことを言い続けるものだから、阿笠は荷台に座りながら足を地面に付けて自転車を止めようとする。

「ぅおっ？！」

急に阿笠が止めようとするもんだから秋人はバランスを崩し、自転車ごと横に転倒する。

阿笠共々秋人は地面に倒れる。

「あぃってー……」

2人の上に自転車が落ちてきたものだから、秋人は痛そうに上半身を起こしながら自転車を向こうへガシャーンと飛ばす。

これは痛いだろう。

右半身を地面にぶつけ、左半身には自転車がぶつかってきたのだ。

阿笠も痛そうに肩を押さえながら上半身を起こす。

「あたた……」
「お前な！危ないだろ！」
「だって秋人が変なこと言うから……」

地面の上であぐらをかきながら打った部位を押さえる2人。

裏道で車が通らないところだから良かったものの、本当無茶をするものだ。

「阿笠には隠し事したくないから言おうと思ってた」
「うん」
「俺がアメリカにいたことは知ってるよな」
「ああ…ハンナ先生と近所だったとかって」

阿笠は思い出したように言う。

学校中の人がそう思っているのだ。

おかげで秋人はみんなに過去をバレずにすんでいるが。

「本当は近所なんかじゃなくて同期だったんだ」

「何の？」
「大学の」

秋人がそう言うと、阿笠はキョトンとする。
そして目を丸くして尋ねた。

「秋人……年齢詐称？」
「あほ。……１０歳んとき飛び級して大学入ったんだよ」
「飛び…ってスキップ？」
「ああ」

阿笠は信じられない事実に言葉を失って唖然としている。
日本ではほとんど導入されてない制度だから驚くのも無理はない。

「……アメリカで地位を獲得するつもりだった。だからさっさと大学出て社会に出たかったんだ」
「……」
「でもやっぱ、そんじょそこらの糞大学じゃなかったから周りは俺を妬んだ」

そうして秋人は大学での生活を赤裸々に告白する。

周りからいろいろ罵られたという事実や、実際に言われた言葉。

気にしないふりしていたことで更に生意気だと言われたこと。

味方なんかいなくて、追い詰められてばかりの息詰まる毎日。

１０歳の子どもらしい生気の消失。

逃げるようにして家族共々日本へやって来たこと。

秋人は何１つ隠すことなく阿笠に言っている。

「小６の期間は学校へ行かなかった。毎日サッカーして遊んで……そんであるとき、佐々先輩に会った」

「佐々…先輩」

「おう。先輩は……こんな俺を必要だと言ってくれた」

秋人にとってこの話をするのは３回目になる。

何度目だって辛いのは同じことだけど、それでも重みが違う。

１回目は春樹に支えられた。

２回目は春樹がいたから夏実と麻冬に言えた。

そしてその後ハンナとの和解に旧友との電話。

すべてが解決したあとになるこの3回目は、心持ちが全然違うのだ。

「だからサッカーの道選んだんだ。逃げ道なんかじゃない。……新しい道だと思った」

秋人は付け足して、ハンナとのいざこざで試合にまで悪影響及ぼしたのだと説明する。

試合だけでなく、登校拒否で来なかった日もだ。

もちろん春樹のおかげで立ち直れたことや、ハンナとのこともちゃんと言っている。

旧友たちとの電話でのやりとりも、おおまかに説明する。

すべて話し終えるのにどれくらいかかったんだろうか。

阿笠は話されたことを理解しようと必死だ。

いきなりこんな事実を話されても信じられないのが普通だが、秋人

の場合なら有り得そうなものだ。

「そーかー……」

阿笠は言葉を漏らす。

「どうりで小学校んとき知り合わなかったわけだ」

「あは、そこ？」

阿笠の意外な驚きのポイントに秋人は少し笑う。

「どうりで頭も良いわけだ」

「んー…」

「つかさ、ずるくね？頭良い上にサッカーもトップレベルって」

阿笠は真剣な顔でそう言う。

「なんだぁ、だからお前満点ばっかなのか！今まで適当に天才とか言ってたけど、本当に天才だったとは」

真剣な顔の次は、楽しそうにケラケラ笑っている。

クルクル変わる表情に秋人はついていけず、こう言った。

「……なんとも思わない…のか？」

「ん？」

「変だとか、いろいろ」

すると、阿笠はニコッと笑う。

「思うわけないじゃん」

今この瞬間は、きっと恋愛のことなど2人には関係ない。

共にサッカーやってる戦友として、絆で結ばれた友達としての関係。

「むしろそうじゃなきゃ秋人日本に来なかっただろ。だからラッキーだよ」

「阿笠…」

「だってほら、今一緒にサッカーできてる」

そして、阿笠はよいしょと言いながら立ち上がる。

阿笠が立ち上がるのを見上げていた秋人に、阿笠は手を差し出す。

「俺たちに言わせれば、そのすべてが運命なんだって」

秋人はその手を掴む。

「運命……」

そして、立ち上がった。

阿笠は倒れている自転車を起こして立たせる。

そして秋人のほうを振り向いて言った。

「話してくれてありがと」

「あ、や……こっちこそ」

「何にせよ、俺は嬉しいよ。秋人が日本にいてくれて」

その笑顔

どうやったらそんな顔になれるんだろう。

ただ言えることは、阿笠が心底優しいということだけだ。

優しいなんて言葉では表せないものがそこにある。

「……ありがとう」

秋人は小さな小さな声で呟いた。

next

第１１２話【松平雪】

部活を終えた麻冬は、携帯に阿笠からのメールが入っているのを見てポツリと呟いた。

「……1人かぁ」

阿笠はサッカー部たちと夕飯を食べに行っているから今日は帰りは麻冬1人だけ。

女子更衣室でみんなが帰っていく中、麻冬は部誌を書いている。

時期的にそろそろ外プールでは寒くなるから、来週からは温水プールへと移行することになる。

公立高校だが、スポーツに力を入れている分そういった設備は万全なのだ。

特に今は麻冬がいるから尚更。

「えーと、今日は……」

部誌を書こうとしているが、なかなかペンが進まない。

なにをそんなにイライラしているのか、麻冬は髪の毛を頭でわしゃわしゃとかきながら「あ～っもう！」と声を上げている。

いや、なにを？

そんなことは分からないはずがない。

自分にイライラしているに決まっているのだから。

麻冬はペンを粗末に置き捨て、椅子にもたれかかる。

そうして、この間の木村との会話を思い出している。

『先輩は何も分かってない』

火曜日に阿笠を迎えに1年の教室へ向かったとき。麻冬と木村はお互い気づいたが気づかないフリをしていた。

『付き合った後も2人にいろいろあったのは何でだと思うかよく考えてくださいよ』

仕方ないことかもしれない。

木村は阿笠からすべての事実を聞いて気まずく思うわけだし、麻冬

も秋人から避けられていたりとモヤモヤしていた。

避けられている間、何度も木村の言葉を思い浮かべては自己嫌悪に陥る。

『部長が何のために悩んだか、先輩が分かってあげなきゃ意味ない。あなたは目先の幸せしか見えていないんだ』

ついさっき秋人に、阿笠とケンカしてたから気まずかっただけなんて言われていたけど、そんなはずはないと麻冬は分かっている。

2人で仲良く自主練しているのを木曜日に見ていたから。

『俺が指図することじゃないけど、先輩がはっきりしないと2人とも前に進めないっすよ』

『2人って…』

『部長と副部長』

それでも秋人がああ言うのだから納得しないわけにはいかなかったのだろう。

あそこで事実を述べてわざわざ秋人と更にギクシャクする必要はない。

……友達なのだから。

『木村くん。何か誤解してる』

そう、事実上秋人と麻冬は仲の良い友達。

阿笠の相棒と、阿笠の彼女という関係でしかない。

『あたし、誰が何と言おうと阿笠の彼女なの』

誰もがそう思っているし、当人たちもそう思っている。

『阿笠だけを愛するって決めたのよ。もう秋人は見ない』

『そんな…』

『秋人のこと忘れたくて阿笠と付き合ったの。だから当然でしょう？』

ため息をついて麻冬は椅子から立ち上がる。

そして、何を思ったのかまた水着に着替え始めた。

さっき使った水着は濡れていて気持ち悪く、予備の水着も今回は置いていなくどうせ誰もいないだろうしと麻冬は白いビキニに着替え

ている。

なぜビキニがあるのかと言うと、部活ない日に友達と遊びで着て泳いでいたからだ。

『だって…それは先輩が知らないから！』

いつもなら1人でもさっさと家に帰っているところだけど、今日の麻冬は様子がおかしい。

『夏実でしょ？』

『違う！』

ふと麻冬は心に思う。

春樹とケンカしているときの雰囲気から、春樹も秋人の好きな人を知っているはず、と。

もしかしたら阿笠でさえも知っているかもしれない。

そう思うと、麻冬は胸騒ぎを起こす。

知らないのは自分だけ。

……いや、知ろうとしていないだけだ。

言葉の本音にしか理解しないふりをしているのだ。

本当なら分からないほうがおかしい。

どう考えても秋人が麻冬を好きなことくらい……

「えっ？」

麻冬が更衣室を出ると、その前で同じ水泳部員の男子が1人まるで麻冬を待っていたかのように立っていた。

その男子は麻冬に気づき、

「おう」と声をかける。

「って何で水着？しかもビキニって」

その男子は恥ずかしそうに顔を反らす。

「ま…松平くん、どうしたの？もしかしてあたしに用事？」
「いや…えーと……」

松平というその男子は男子部員の中でエースをはってる。
麻冬が女子部員の中でエースなのと同じように。

「……ならあたしと泳ぐ？」
「えっ」
「暇でしょ？あたし浮き輪とか持ってるから遊ぼうよ」
「お、おお」

そうして松平は半強制的に水着に着替えることになった。
麻冬は部室に置いてある浮き輪を探し出して、空気入れを見つけようとするがどうやら空気入れはないようだ。

仕方なく麻冬は男子更衣室にある空気入れを借りようと、男子更衣室を適当にノックする。

「えっ、待っ……」

慌ててそう言う松平の声は耳に届いていないらしく、麻冬はガチャ

ッとドアを開けた。
松平はちょうどズボンを脱いでトランク1枚になっているところだ。

「きゃーーー!!!」
「ゆっ…雪原〜!」

麻冬はすぐさま更衣室を出る。

ドア越しに麻冬は赤面しながら、ごめん〜!と言う。

その十数秒後少し照れた顔の松平が更衣室から出てきた。

「何だった?」
「あ、えっと……空気入れ貸して欲しくて」
「空気入れ?あー、こっちにもねぇな」

そう言うと、松平は麻冬から空気の入っていない浮き輪を受け取って口で空気を入れ始めた。

「お〜、すごい」

最初はなかなか膨らまないものだが、10分もしないうちに浮き輪

は空気でパンパンになる。
ピンクの花柄の浮き輪だ。
2人はそれを持ってプールへと入る。
まずは麻冬が浮き輪に座る。
その横で松平が不思議そうに麻冬に尋ねた。
「なんで1人で泳ごうとしてたん？」
「んー、なんでだろ？」
「ははは、なんだそれ」
松平は爽やかに笑う。
松平といえば、身長が１８０ほどあり水泳部なのに色は割りと白め。
爽やかカットの髪型をしていて、実力は本物だ。
麻冬のように全国でも賞を取れるまではいかないが、あと1年しないうちに今までよりももっと努力すれば狙えるくらいのレベルだ。

「え、で松平くんは何で？」
「雪原待ってたんだ」
「うん？」
「……ところでさ、雪原って俺のこと松平くんって呼ぶよな」

松平は突然話題を変える。

不思議に思う麻冬もとりあえず返事をした。

「みんな雪って呼ぶのに」

そう、松平の本名は松平雪という。

麻冬と同じで冬に生まれ、しかも雪が降っていたからそう名付けられたようだ。

「あはは。そういえばそうだよね」
「だろ」
「だってなんかあたしたち名前似てるから」
「雪原と雪？」
「うん、それに松平くんだってあたしのこと麻冬って呼ばないじゃない」

雪原麻冬に松平雪。

そう、運命を感じたのは中学に上がってまもなくのあの日。

それまでツンツンしていた松平がこんな風に爽やか青年になったのは、あの日からだった。

麻冬のたった一言で、松平はそれまでの人生をもったいないと思うくらい、幸せになれた。

「俺、雪って名前好きなんだ」

松平はニコッと笑ってそう言う。

麻冬も松平につられて「あたしもよ」と笑った。

「ところで今日は阿笠と一緒に帰んないって女子が言ってたからさ」
「あ、そうなの」
「うん。だから雪原とちょっと遊ぼうと思って」

すると麻冬は、「どうせならスライダーとかあれば良いのにね」と冗談交じりで言う。

基本的に部活の中では部長副部長という関係柄もあって2人は仲が良い。

部長を決めるときだって、中にはやはり男の松平を部長にと推す人もいた。

だがそんな輩に猛反発したのが、松平自身だったのだ。

実力で選ぶのが部の伝統的な仕来りなのだから、絶対に部長になるのは雪原しかいないと断言したのだ。

実力でなら誰もが麻冬が一番なことは分かっていた。

それでも今まで星陵水泳部に女子部長がいたことはなかったから、松平を部長にと推す人もいたという話だ。

結局松平のその言葉で麻冬は即部長に就任した。

「ところでそろそろ教えてくんない？」

「え？」

「なんで月影じゃなくて阿笠と付き合ってるか」

そう、松平は知っている。

麻冬が秋人を好きなことを。

知っているというより、バレてしまっていたというほうが正しいが。

阿笠と付き合い出したときには松平はかなり驚いた顔をしていたが、麻冬が触れて欲しくないような顔をしていたからずっと黙っていたようだ。

「……あたしね、秋人に叶わない恋してたから愛してもらいたかったの」

「叶わない？」

「…秋人は好きな子いるから」

そう言ってる麻冬はどんな思いをしているだろう。

好きな子？

それが誰かなんて、言われなきゃ分からないというのか。

「…だって、雪原じゃん。月影の好きな奴」

松平はきっぱりとそう言った。

麻冬は、まるで今の言葉を聞いていなかったかのように黙り込む。

松平でさえ秋人の好きな人を知っている。

いや、「でさえ」という表現は間違っているかもしれない。

松平だからこそ知っているのだ。
仲良く一緒に帰る2人をよく見ていたのだから。

「……何を迷うのさ」
「あたしは…阿笠の彼女なの」
「でも両思いなのに」

簡単にそう言う松平に、麻冬はキッと睨む。

「あたしが阿笠を選んだのよ。…なのに阿笠を捨てれるわけないじゃない」

強気な顔つきをしているのに、そう言う声はとても震えている。
そんな麻冬に松平は何も言葉を言ってあげられなく、しばらく沈黙が流れた。
そんな沈黙から逃げるように麻冬は、じゃあそろそろ上がるねとプールから出る。

「松平くんは？」
「あー、俺まだいる」
「そう。あ、あたしも部誌書かなきゃ」

麻冬が思いついたようにそう言うと、松平は「俺が書いとくから更衣室にでも置いといてよ」と言った。

部誌は別に部長か副部長が書けば問題はない。

まぁ基本的に部長だが、部長が休んだときの代理として副部長が書くのだ。

部誌に行き詰っていた麻冬はラッキーと言わんばかりに喜んでいる。

「わーい。ありがとう松平くん」

「ははは。それと、何かあったら俺に言えよ。話くらい聞くから」

「……うん。松平くん本当優しい」

麻冬はニコッと微笑む。

そして付け足して、じゃあ風邪ひかないようにねと言って麻冬は女子更衣室へと向かって行く。

松平はプールの上に浮かんでいるピンクの浮き輪をじっと見つめる。

何を思ったか、いきなり松平はプールへと潜って、いきおいよく飛

び上がる。

プハーッと息を吐いて、松平は真っ暗な夜空を見つめた。

「優しい……か」

点々と光る星たちが、プールの水をキラキラ反射させていた。

next

第１１３話【雪】

松平雪はその昔、雪という名前が大嫌いだった。

たとえ雪が積もってもそのうち溶けてなくなってしまう。

夏に雪と呼ばれるのもおかしくて嫌だとよく言っていたものだ。

それなら櫻や海や月がファーストネームだと嫌だと言っているようなものだが。

けれど、小学生のある日松平は雪原麻冬の存在を知った。

市内大会、県予選、県大会

たいてい女子も男子も同じ競泳場でやる。

その上毎回同じ人が優勝してれば嫌でも名前くらい覚えるものだ。

昔から麻冬は優勝ばかりしていた。

松平はといえば、賞を取れたり取れなかったりというぐあい。

その頃の松平には麻冬という存在は雲の上だった。

だから麻冬に並べるようにと松平はコーチについてひたすら練習の日々を送っていた。

その甲斐あって中学に上がった頃には県では文句なしで優勝できるほどの実力を手に入れていたのだ。

松平の名前がほぼ県内の水泳界に知れ渡った頃のあるときの大会で、松平はようやく麻冬に話しかけた。

『あのさっ』
『ん。あれ、松平くんね』
『知ってるんだ、俺のこと』
『そりゃあ。今大会も3冠達成おめでとう』

ニッコリ笑ってそう言う麻冬に、松平は緊張しながら言う。

当時から顔が可愛かった麻冬に笑顔をされたら緊張くらいするものだが、このとき松平が緊張していたのはそんな理由ではない。

『ありがとう。雪原こそ。ところで……』

はじめて麻冬の存在を知ったときからずっとずっと話しかけたかった。

だが、いざとなると言葉に詰まってしまって言えない。

黙り込む松平に麻冬は疑問を抱くが、麻冬は思いついたように言った。

『松平くん下の名前雪よね』

『え？あ、うん』

『あたしも雪つくからなんか親近感わくなぁ。あたし雪好きなの』

雪という名前がついていることをどう思うかと麻冬に聞こうとしていた松平は、意外にもその話題が出されて少し驚く。

『繊細で、でも芯は強い。積もったときには大喜び』

『……でも、溶けたらただの水になっちゃうじゃん』

『あら、違うわよ』

麻冬は両手を軽やかに広げる。

そして言った。

『溶けたら春になるのよ。そしたら今度は櫻が咲くわ。四季の繰り返しに雪は必要なの』

『春になる……？』

セーラー服を着てまだ少し濡れている髪の毛も、松平には宝石のように輝いて見えた。

この言葉を聞いた瞬間。

『雪が春を運ぶの。だから春にとって雪が必要なように、誰かにとっても松平くんが必要な存在になるようにってきっとご両親が名付けたのよ』

その瞬間から、松平は雪という名前が大好きになった。

嫌いだとばかり思っていた名前を好きと呼べる日が来ようとは思いもしなかっただろう。

まるでそれまでいた日々がなくなってしまうくらい、世界がパアッと開けたような気がしたのだ。

『あ、ところで松平くん何か用事があったんじゃ…』
『ううん、もう良いや』
『え』
『次の大会でまた会おう！じゃな、雪原』

これが2人の出会いだった。

大会で顔を合わせるたび話すようになって、そのうち高校の話題にもなった。

麻冬が星陵にすると言ったから松平も星陵にした。

もちろん麻冬にあとを追いかけてきただなんて思われないように、温水プールがあるからだとか言っていろいろこじつけたりもして。

大会だけじゃなく、毎日でも顔を合わせたいと思ったのだ。

雪という名前を褒めてくれたあの日から。

「……優しくなんかねぇよ」

松平はプールサイドに上がろうと水の中をチャプチャプ歩く。

どうやら飛び込み台へと向かっているようだ。

「好きだって言えない臆病者なだけだ…」

ポツリと呟く声は響くことなく、暗闇に吸収されていく。

はじめて麻冬と話したその瞬間から全身全霊で麻冬に惹かれていた。

好きだと、そばにいたいとどんなに思ってもそれを口に出すことはできずにいた。

『それに松平くんだってあたしのこと麻冬って呼ばないじゃない』

松平はプールサイドに上がり、飛び込み台に上る。

飛び込み台から見る景色は、いつもとは違って見える。

暗いせいか
浮き輪があるからか
水泳帽もゴーグルもつけていないせいなのか。

「…呼ばないんじゃない。呼べないんだ」

松平は飛び込まずにただただ台に立つ尽くす。

そして、誰もいないこのプールに、まるで誰かに訴えるかのように独り言を言い続けている。

「一度でもそう呼んだら、もうライバルではいられなくなると思うから……」

結局松平はプールへと飛び込むことができず、台の上でしばらく立っていたあと更衣室へ戻って行った。

男子更衣室にある机の上に置かれた部誌。

よろしくね！と書かれたメモがそばにある。

松平は部誌をパラパラめくっていく。

日々の練習内容、練習風景、注意点

綺麗な字で書かれている。

記入者　雪原麻冬という欄を見ては切なく思う。

本日のページにはまだほとんど手がつけられておらず、練習内容を書く欄に

「今日の練習」までしか書かれていない。

「阿笠と月影……ね」

松平はとりあえず制服に着替え始める。

濡れている体や頭を適当に拭き、まだ水が乾ききっていないのに制服を身につける。

ロッカーのカバンに入っている筆箱からペンを取り出し、部誌を書

き始めた。

麻冬とは打って変わってスラスラと書いていく。

選ばなければ松平ならいくらでも彼女くらいできただろうのに、中学のときから麻冬麻冬と、麻冬しか見てこなかった。

どんなに見ていても結局いつも恋が叶うことはない。

中学のときに阿笠と付き合い出したことを麻冬本人から聞き、別れたことも本人から聞いた。

高校入って今度は麻冬は月影秋人を好きになる。

麻冬はさっき松平に、叶わない恋をしてるから愛されたかったと言った。

それなら俺が愛してやると、どうして言えなかったのだろう。

どんなに近くにいても、ただのライバルとしか思ってもらえないこの悔しさ

きっと一生
変わらないもの。

「んぁ？」

そのとき、ちょうど松平の携帯が鳴った。

「はーい」
『あっ、松平くん？麻冬だけど』

麻冬からの電話だ。

麻冬のことを考えていたからか、松平は妙に緊張する。

「あ、ああ……どうした？」
『鍵ないよね？』
「鍵？」
『サイドしめる鍵なんだけど……あたし1こ持ってて。今から戻る！』

どうやら麻冬はまだ学校を出て少ししてからの位置にいたようだ。

「あっ、待っ……」
『え？』
「…いや、うん。頼むよ」
『オッケー。じゃあちょっと待っててね』

そう言って麻冬は電話を切る。

本当は合鍵を松平は持っている。

けれど、麻冬に会えると思った松平はとっさに持っていることを隠した。

また会えるからって何かが変わるわけじゃない。

それでも麻冬に会いたいと思う松平を、なぜか愛しく思う。

「…なっさけねー……」

松平は携帯をギュッと握りしめる。

その携帯には、雪の結晶のストラップがついている。

雪が好きだと思ったあの日、即行でこのストラップを買いに行ったのだ。

麻冬の分も買ったけれど、何年経っても渡せないでいる雪の結晶のストラップ――……。

next

第１１４話【とっくみあい】

阿笠と秋人は、例のステーキ屋でたらふく夕飯を食べて家へ帰る途中だ。

阿笠は自転車がないから、もちろん秋人と2ケツをしている。

他愛もない会話を楽しんでいる最中だった。

「明日楽しみだな～」
「駅に１２時だっけ」
「そうそう。チケット忘れちゃダメだぜ」

学校からステーキ屋までは２０分。

つまりステーキ屋から家までは４０分は余裕でかかる。

来た道に殉じて帰っていくと当然学校の前を通るわけだ。

外は真っ暗でこんな時間にはもう部活の生徒も残っていない。

普通なら。

秋人は快適に走らせていた自転車を学校の校門付近でキキッと止めた。

「秋人？」

阿笠が急になんなのかと不思議そうに秋人を見ると、秋人は阿笠の顔を見ながら言った。

「……なんか…変」

何が変なのか阿笠には理解できないが、秋人がどうしてもというから2人は学校の中へ入って行った。

真っ暗なロータリーを自転車で走っている途中、グランドより向こうにあるプールがまだ電気のついたままなことに阿笠が気づく。

秋人にそれを伝えると、2人は顔を見合わせた。

「……麻冬？まだ練習？」

「やー、こんな時間まで？」

そうは言うものの、もし麻冬だったらこんな時間まで1人で練習なんて危ないからと2人はプールまで向かう。

普通にグランドを自転車で走るなんていけないことだが、そんな規則気にせず秋人はスイスイと走る。

グランドを走っている中、それでも一応隅の方を走ろうとしている秋人は自分の自転車以外の通ったあとがグランドについているのを見つける。

その通りに自転車を走らせてみると、やはり行き先はプールだった。

「麻冬のじゃん」

阿笠がプールの階段前入り口のところに麻冬の自転車が置いてあるのに気づいた。

「しっ！」

秋人は手で阿笠の口を塞ぐ。

「あ、あひと？」
「ちょっとこっち」

秋人は阿笠をつれて自転車を引きながら木の後ろに隠れる。
普通に隠れるはずがないが、暗いせいで気づかないものだ。

そのうち楽しそうに会話をしながら誰かがプールサイドの出入口の階段を降りてくる。

「もー、ちゃんと乾かさなきゃ」
「平気だよ」
「ダメよ。ほら、タオル貸して～」

麻冬は松平からタオルを借りて、背伸びをして松平の髪の毛を拭く。
麻冬は拭きやすいように階段に松平を座らせ、ワシャワシャと拭いている。

「来週から温水よね。きっと気持ち良いだろうな」
「な。楽しみ」
「月曜日一番最初に競泳しよっか」
「あはは、まじか。じゃあ自由形１００メートルでどう？」

単に麻冬がお世話焼きなだけなのだが、はたから見ればイチャついてるカップルそのものだ。

「良いね。あたしらの得意なのだし」

麻冬だってそんじょそこらの男子にはこんなことしない。

同じ水泳部員ってだけなら、こんなことしない。

松平だからだ。

麻冬だって松平のことは小学生のときから知っていた。

2人が初めて話したのは中1のときだが、以前から知っていたのだ。

誰かが松平の雪という名前をからかっていて、松平は雪という名前を嫌いだと言っているのを聞いたことがあるようだ。

その頃から松平のことが気になっていたようだ。

「ジュースでも賭ける？」

「やだぁ、あたしと松平くんじゃ松平くんのが速いじゃない」

「じゃあ自己新出したら勝ちってことで」

松平は麻冬に名前を知ってもらうためにかなりの努力をしたのだが、そんなことをしなくても麻冬に十分知られていた。

だがそれを知らないおかげで、松平はまだ麻冬に肩を並べられないにしても、追いかけて良いくらいのレベルにまでなったのだ。

「乗った！」

だいたい拭き終わって少し乾いていたから、松平は「もう大丈夫。ありがとう」と言う。

2人は出入口を出て鍵をしめる。

「あれ、雪原ここまでチャリで来たんだ」
「はやいほうが良いかなって」
「そっか」

案の定麻冬と松平は阿笠と秋人がすぐそこにいることに気づかずに、松平が麻冬の自転車を押して2人で仲良く歩いて行く。

30メートルくらい2人が進んで行ったのを見て、阿笠と秋人は茂

みから出てくる。

2人は暗闇の中に麻冬と松平が消えていくのを見て、呆然と言う。

「なぁ……あいつら付き合ってんのかな」
「や……付き合ってんのはお前だろ」
「だよなぁ」

自転車に乗ってしまうと麻冬たちを追い抜かすことになるから、とりあえず阿笠と秋人は自転車を押して歩く。

「あんな仲良かったっけ」
「さぁ……松平ねぇ。クラス違うしな」
「あんま喋ったことねぇな」

それもそうだ。

彼は文系クラスにいる。

本当なら麻冬と同じ理系にしようとしたが、あいにくそんなに理系が得意ではなかったようだ。

それに風の噂で４人が理系にしたと聞いたらしく、万が一秋人と麻冬と自分が同じクラスになったら嫌だと思ったようだ。

それは嫌だろう。

麻冬のことが好きなのに、秋人を好きな麻冬を見ているのは辛い。

「あーあ、浮気じゃね？」

秋人はからかうように阿笠に言う。

「へーん。なんだ、あんな爽やかノッポ」
「爽やかなのは同類だな」
「うっ」
「水泳部だろ。裸で抱き合ってりゃ簡単にオチるかもな」

その言葉に阿笠は秋人のほうをバッと振り向く。

「あーきーっ！！」
「いでででっ！」

阿笠は秋人の両頬を手でつねっている。

「お前だって好きだろーがっ！！」
「ぎっ、ギブ！ギブー！」
「分かりゃー良い」

そう言って阿笠は秋人から手を離す。

分かりやすい男たちだ。

「ったく」
「あー、でも俺らも夏プール行ったわ」
「……へん。水着くらいなんだっての」
「お」
「裸みたし」

すると今度は、阿笠の頬を秋人がつねり始めた。

「なんだとー？！」

秋人の場合は自転車を押してるから片手でつねるだけだ。

「いひゃいな！」
「てめー、やることやってんじゃねぇよ！」

「らったらあひともやってみえば良いらろっ！」

だったら秋人もやってみれば良いだろ、と言っているようだ。

「付き合ってねぇのにやれるか！」
「なんらよ、弱虫！」
「てめーまだ言うか！」
「負け犬！ざまーみろ！」

2人の口論は一本線を辿るばかりだ。

しばらくしてから言い疲れた2人はハァハァと息を切らし、秋人もようやく阿笠から手を離した。

「……無理やり犯すぞ」

秋人がポツリと呟くと、阿笠は鼻で笑って言った。

「ははは。できるもんならやってみてよ」
「言ったな！」
「言ったよ！」

そうしてまた2人はとっくみ合いになる。
今度は秋人も自転車をそっちのけだ。

殴りあいをしないところがまだ可愛らしいが、夜にグランドでこんなことしてるなんて真に奇妙だ。

制服が乱れて髪の毛振り回して、顔をつねり合ってるなんて学校の生徒が見たらなんと思うだろうか。

「……何してんの」

グランドに響く女の子の声に、阿笠と秋人は振り返る。

「秋人と阿笠……え、何？」
「あっ、やっ……これは秋人が！」
「違うだろ！阿笠がっ」

麻冬が止めに入ったにも関わらず、2人はまたとっくみ合いを続けようとする。

声がするから麻冬と松平は引き返してきたようだ。

「……良いの？」
「まぁケンカじゃないみたいだし…ほっとこうか」
だが止めない２人を見て、麻冬たちはそう言ってこの場を離れていく。
そうとは知らず秋人たちはだんだんエスカレートしていき、制服のまま土のグランドでゴロゴロ転がりながら尚もつねりあっている。
もはや学校にいるのはもう秋人と阿笠だけだ。
麻冬たちがいなくなって１０分くらいしてから、ようやく２人はまたも息を切らして疲れたようにハァハァしている。
部活をやってるわけでもないのに、なぜこんな息を切らすのか。
本当バカとしか言いようがない。
「……あれ、誰もいない」
「…まじだ。つか俺ら何やってんの、これ」
やっと我に返ったようだ。

阿笠と秋人は顔を見合わせた。

「え？俺らアホ？」
「てか麻冬とあいつ２人きり？」

２人はあぐらをかきながら呆然としている。

「結局意味なくね？」

もう何がなんだか分からなくなっている。

グランドであぐらなんかかいてるせいでズボンは土まみれだし、制服もボロボロ。

ネクタイなんてかなり緩んでいるし、髪もボサボサ。

良い男が台無しだ。

「とりあえず…帰る？」

２人はゆっくりと立ち上がり、転がってる自転車を起こして再び２ケツをし始めた。

特にこのことにはもう触れず、また明日のサッカー観戦に話を戻してワイワイ盛り上がっている。

秋人は阿笠を家まで送り、そのあとようやく自分の家へ向かって行った。

next

第１１５話【サッカー観戦】

「おー！すっげぇ！！」

晴天下

待ちに待ったサッカー観戦だ。

清水エスパルスが地元で他県のチームとの試合をしているのだ。

かなり良い席が取れて、おまけに試合は大盛り上がり。

もう１０月中旬を越しているにも関わらず、かなりの熱気で暑い。

「うぉ！上手い！あそこで抜かせるかぁ？！」

興奮するのも無理はない。

高校サッカー界ではもう怖いものなしだが、プロとなれば２人より上手い選手くらいたくさんいる。

全国選抜ですら２人はこんなに興奮したりしない。

「なー阿笠、お前ならあそこの場面どうする？」
「そうだなー。俺ならあそこはフェイクかけて…」

ときには2人は選手たちのプレーを評価したり自分に置き換えて考えてみたりもする。

テレビで見るのよりも生のほうがずっとありがたみもあるし迫力もある。

学校の部活や選抜の練習すらサボって見に来る価値は十分にあるというものだ。

秋人たちは清水エスパルスに強い夢を持っている。

同じ県ってこともあるけど、何より憧れの選手がいるからだ。

秋人の憧れはＭＦの村田選手（仮名）で、阿笠の憧れはＦＷの武井選手（仮名）だ。

両選手とも日本代表に選ばれてるのだ。

だから今回間近で見れるということで喜びも増大なのだ。

試合はエスパルスが３‐１で快勝した。

ファンたちが続々と選手に会いに行こうとしている中、もちろん秋人たちも便乗する。

だが大勢のファンたちの勢いには敵わなく２人は少し離れたところでしか見れないでいる。

そんな中、秋人と阿笠を見た誰かが叫んだ。

「月影秋人と阿笠大悟！」

その瞬間ファンたちだけでなく選手たちまで秋人たちのほうを振り向いた。

やばい！と感じた２人はそそくさと逃げようとするが、なんと選手たちが直々に声をかけてきたのだ。

「月影くん、待って」

「え……む、村田さん！」

秋人に話しかけてきたのは秋人の憧れの村田選手だ。

また同様にして、阿笠の憧れの選手である武井も阿笠に話しかけた。

やはり同じポジションをやっているというだけあって意識も強いのだろう。

「どうだい、調子は」
「はは。まぁそこそこです。来年の夏期待しててください」
「頼もしいね。一度君とは得点率を競ってみたいもんだ」
「そんな。武井さんには負けますって」

秋人と阿笠は憧れの選手と楽しそうに会話を弾ませる。

「謙遜すんなって。星陵の阿笠って言ったら天才ＦＷだって有名じゃないか」
「まだまだですよ、俺なんて」

阿笠のＦＷとしての活躍はプロにも劣らない。

むしろ、プロにさえ魅せられるといったところか。

秋人も秋人で村田と会話を弾ませている。

「そういえば先週の試合見に行ったんだよ、実は」
「えっ、まじっすか」

「ああ、友達と。やっぱ月影くんと阿笠くんのコンビ良いね」
「いやーはは、阿笠が上手いんですよ」
「やだな、謙遜して。攻撃よし守備よし統率力よしカリスマ性ありで惚れ惚れするよ」

秋人はまさかここまで褒めてくれるとは思わず、少し照れているようだ。

すると武井が村田に話しかけ、阿笠も含めて4人で話をするようになる。

他の選手たちも混ざりたそうだが、その場の空気から入ってこれないようだ。

15分くらい盛り上がっただろうか、すると秋人がハッとして言った。

「阿笠……写真とか取られてねぇよな」
「お？どうした、急に」
「ばっか、今日選抜サボって来てんだぜ」
「あ！そっか！」

選抜をこんな私的な用事でサボったりしたら落とされかねない。

たとえ県選抜だろうと、上へ報告が行けば全国選抜にも影響が出てしまう。

落とされないにしても何らかの処分はつきものだ。

秋人と阿笠がキョロキョロしていると、村田が笑った。

「大丈夫、たぶん見られてないよ」

「そ、そうですかね」

「選抜サボってサッカー観戦なんてしょっちゅうやったぜ。なぁ武井」

「まぁな。1回見つかって危なかったけど」

そういえば村田と武井は同期で仲が良い。

ちょうど阿笠と秋人みたいな関係だろうか。

村田は大丈夫と言ったが、もし見つかったらシャレにならないのでこのへんで帰ることにしたようだ。

「じゃあまた来ます」

「頑張ってくださいね」

秋人と阿笠がそう言うと、村田武井そしてその他の選手たちが手を

振る。

「卒業したらうち来いよー」
「清水エスパルスよろしく～」

社交辞令なのか本気なのか分かったもんじゃないが、まぁ半分半分だろう。

秋人と阿笠が即戦力なことは誰もが認めている。

足りないのは世界での経験の場数のみ。

佑亮がサッカーをもうやらないと報道したとき、彼らはどんな反応をしていただろう。

どのチームも喉から手が出るほど佑亮を手に入れたかったのだ。

全国で星陵を優勝に導いたのだから、全国一の部長であり全国一のＤＦでもある。

ユーモアのあるキャラクターからも、人気は爆発的だった。

あれは人気になる素質を持ち合わせている天性の人間だ。

誰もが夢見ただろう。

特に阿笠と佑亮が違うチームに入っていつか対戦することを。

最強対天才の勝負を誰もが楽しみにしていた。

二度と叶うことはない夢だけれども。

もう誰も佑亮の名前を口にすることはない。

忘れたわけではなく、ただ惜しい人を逃したことを思い出さないため。

地元の大学で彼女と楽しい毎日を送る、どこにでもいるごく普通の青年になっていることを想像させないため。

何か理由がなければ思い出してしまうほど、日本中の人が佑亮の存在を大きく思っているのだ。

あれだけ何度もテレビで報道されて、あれほど大きくサッカー引退

の会見がされれば記憶にも残るだろう。

つまり、そんな悲しい記憶を生み出してしまうほど佑亮のプレーは素晴らしかったということだ。

「あーあ、久々だったし握手くらいすれば良かった」

阿笠が頭の後ろで手を組みながら言う。

「どうせ高校卒業すりゃいくらでもできるよ」
「おっと、自信ありあり？」
「そんなんお前もだろ？」
「あははー」

秋人たちは駅へ向かい、自分の街へと帰ってゆく。

ピンだとそこまででもないのだが、秋人と阿笠2人が揃うと余計目立つ。

サッカーファンじゃなくても顔は知られている可能性もあるから、2人で遠出のときは軽く変装するのだ。

阿笠は帽子をかぶり、秋人はダテ眼鏡をつける。

一度阿笠がサングラスつけていたことがあったがすぐにバレてしまった。

サングラスだと違う意味で目立つからあまり意味ないのだ。

「サッカー王国ねぇ…」

秋人は電車内の貼り紙を見てポツリと呟く。

「好きだね、静岡県民。サッカー王国のわりに優勝ってあんまできてないけど」

「歴代で見るとな」

「えー、なになに……ああ、また静岡県選抜対全国選ば……えっ？」

阿笠は貼り紙を読みながら動きが止まる。

秋人も阿笠の言葉を聞いて貼り紙に目をやる。

「え！聞いてねぇしっ」

「だよな。え～11月下旬ってあと1ヶ月……」

何をそんなに困ることがあるのかと言えば、秋人たちがどちらのチームに入るかだ。

２人は県選抜に選ばれてる上に全国選抜にも選ばれてる。

前のときは県選抜チームのほうに出た。

「うわー……またコーチともめるじゃん」

「……なぁ」

全国選抜においても県選抜においても２人は必須。

だったら言い争いになるような試合はしなければ良いのに。

「……今回は俺ら違うチームにしとく？」

秋人が言った。

「そのほうが無難かな」

「そしたら中学の部活以来の対戦だな」

「まぁ楽しみっちゃ楽しみだけど……でもなぁ」

「やっぱり？」

前監督たちがもめていたとき、２人は互いが敵チームになると提案した。

けれど2人のコンビを見たい人は観客だけでなく他の選手や監督も同じだ。

結局静岡出身だからと県選抜選手として出た。

まぁ2人にしてみてもやはり一緒に戦いたいという気持ちは強い。

ただそんな気持ちの片隅には、やはり一生のライバルとして負けたくないという思いもある。

「今度は全国選抜のほうかね、きっと」

「まぁそうだろな」

こんな会話をしていることを後悔するときが来るなんて、きっと今の2人には見当もつかないだろう。

next

第１１６話【祝賀会】

「かんぱーい！」

今は春樹、夏実、秋人、麻冬の４人で祝賀会をしている。

４人の優勝祝いとテストお疲れ会を兼ねているようだ。

いつも行く亀八ではなく、今日来ているところはみんな初めて来るところのようだ。

和風な感じの創りがなんともいえない雰囲気を醸し出していて、そこまで混んでいるわけでもなく従業員の態度も良くて、４人はさっそく気に入っている。

「いやー、まさか本当にみんな優勝しちゃうとは」

春樹はビールをグビッと飲み、プハーッと吐きながら言う。

「よく言う。県でくらい楽勝だろ」

その横で秋人もビールを飲みながら答える。

「あれれー、県予選とちったのはどこの誰ぇ？」
「あっ、夏実！てめっ」
「あはは、冗談よ～」

よく考えると、こうして４人でゆっくり飲むのは久々かもしれない。
いや、まだ高校生なんだから飲んではいけないのだが。

こんなところが誰かにバレたら彼らの選手生命に関わる。

「でもあたし団体競技で優勝できるのってすごいと思うなぁ」

麻冬は唐揚げをもぐもぐ食べながら言う。

「個人なら自分が頑張れば良いだけだもん」

バレーもサッカーも団体競技だ。
またバドミントンのダブルスも言ってしまえば団体。
個人ではないのだから。

そんな中麻冬は水泳をやっているから個人プレーだ。
もちろんリレーとかはあるが、麻冬はリレーはもう諦めている。

「ばっかだな。難しいから楽しいんだよ」

秋人もつまみをつまみながら言う。

「でもまぁ俺らから言わせれば、個人で優勝もすげぇよ。なぁ夏実」
「うん。だってチームプレーなら自分のミスを他の人にカバーしてもらえるし」

麻冬は、へぇ～と頷きながら話を聞いている。

「俺はやっぱシングルス派だけど、でもなっちゃんと組むとやっぱ楽だな」
「ああ、中丸か」
「かれこれ４年はダブルス組んでるわけだし」

こんな風にしてスポーツの話を楽しんだあと、４人は世間話で盛り上がる。

飲み放題だからじゃんじゃん酒やらカクテルやらを注文し、料理も追加していく。

４人で割り勘となると高くついてしまうけど、そんなことは４人にはまったく苦にならない。

他の学生が楽しく遊んでいるとき、４人はいつだって部活やら選抜に打ち込んでいる。

つまりお金をあまり使わないということだ。

使うとしたら新しいウェアやシューズとかだが、まぁそんなものは親に頼めば買ってもらえる。

それにしても、４人は恵まれている。

普通全国常連校に通うとなれば、親元を離れて下宿したり寮に住んだりするものだ。

もちろん星陵にもスポーツのために下宿生活を送ってる人はなんぼでもいる。

４人はたまたま近くに星陵があった、というだけ。

しかも公立高校だから学費も安い。

まさに親孝行って奴だ。

麻冬と春樹は今大会までの成績でオリンピック強化選手に選ばれた。

夏実や秋人は全国選抜に選ばれている。

こんな将来を約束されたような子が自分の子どもだったら、親はどんな気持ちになるだろう。

「そういえば秋人、金曜日何してたの？」

宴会ももう終わりに差し掛かろうとしていたとき、麻冬が思い出したように言った。

麻冬は阿笠からメールで、一緒に帰れなくなった、ごめんとしか言われていなかったようだ。

「ん？ああ、急にサッカー部で肉食いに行くことになって」
「へぇ。え、でもなんで学校にいたの？」

麻冬がそう尋ねると秋人は少し恥ずかしそうに顔を反らす。

「……なんだよ。お前だって松平とイチャついてたくせに」
「えっ」
「髪拭いてやったりして仲良さげだったよなー」
「そっ、そんなこと！」

夏実と春樹はというと、勢いで飲みすぎて酔っ払っている夏実を春樹が相手している。

寝てしまえば良いものの、寝ずにまだ飲もうとしているから春樹もなかなか大変だ。

「そっちだってあたしが松平くんと一緒にいても何も言わなかったじゃないっ」
「言う前に帰っちゃったろ！」
「あたしほっぽって阿笠とケンカしてたくせに！」
「あれは！阿笠がお前の裸見たっつーから！」
「はっ？！はっ、裸？！」
「あっ」

秋人はそう言った瞬間やばいという顔をして、机に伏せる。

「ちょっと！なんて会話してんのよ変態！」

麻冬は顔を赤くして怒っているが、伏せている秋人もかなり顔が赤い。

「やっ、待っ……あー、いや。すまん」

秋人は顔を上げずにそう言う。

麻冬は信じられないという顔をして、グビッと酒を一気飲みする。

「うっ…えっ……」

なにかっ思うと、麻冬は持っていたグラスを思いきりゴトッと置く。

その音にびっくりした秋人は顔を上げる。

麻冬は首を押さえながら気持ち悪そうにしている。

「まっ、麻冬?！どうした！」

「お、お酒……」

秋人は麻冬が飲んだらしきお酒を一口飲む。

「げっ……日本酒。しかも割ってねぇじゃん」

割っていない日本酒をあんなに一気飲みしたら気持ち悪いだろう。

秋人は気持ち悪そうにしている麻冬にトイレに行くように言うが、吐きそうにもないようなので麻冬は首を横に振る。

とりあえず麻冬を横に寝かせて、秋人が着ている上着を麻冬にかける。

「ごめ……秋…」

「良いって。気にすんな」

そうこうしているうちに、どうやらようやく夏実は酔い潰れて寝たようだ。

麻冬に付き添ってて秋人も飲んでる場合じゃなく、春樹も夏実が寝てしまったから秋人と春樹はここでお開きにしようと決めた。

春樹は秋人に自分と夏実の分のお金を秋人に渡す。

そうして、寝ている夏実を春樹はおぶさった。

「ごめん秋人、靴出してくれる？」
「おう」

秋人は靴箱から春樹と夏実の靴を出す。

春樹のを床に置くと、春樹は夏実をおぶったまま適当に靴をはく。

そして春樹の片手に夏実の靴を持たせた。

「タクシー呼ぶだろ。俺拾ってやるよ」
「大丈夫。それより麻冬についててあげて」

春樹は寝ている麻冬をチラッと見ながら言う。

良いのか？なんて聞く秋人をよそに、春樹は笑って言った。

「お互い大変な彼女持っちゃったもんだね」
「……どこまで分かってんだか」

「はは。どこまでも」

そう言って春樹は店から出て行った。

残された秋人は、とりあえず麻冬のところに戻る。

まだ気持ち悪そうではあるが、横になったから少しは楽になっているようだ。

とりあえず水を飲ませてはいる。

秋人は机の上の皿やらグラスやらを重ねて片付ける。

そうしていると、従業員が皿を片付けにやってきた。

「お連れさん平気ですか？」

「ええ、大丈夫。もう少し寝かせたら連れて帰ります」

「ごゆっくり」

片付けを従業員に任せて、秋人は麻冬の隣に座る。

麻冬は右腕で両目を隠すようにしている。

暇になった秋人は春樹から預かったお金を見て計算しているようだ。

「おっ、５００円儲け」

どうやら春樹が余分に払ったようだ。

春樹は酔っ払っている夏実を相手している間にも、秋人と麻冬のやりとりを見ていた。

気づかないはずがない。

２人の会話はどうみても痴話喧嘩そのものだ。

「ごめん…ね」

秋人が財布を覗いていると、麻冬がポツリと呟いた。

「だから気にすんなって言っ…」

「弱くて…ごめんね……」

麻冬のその言葉に秋人は振り向く。

麻冬は腕で目を隠したまま、口を動かす。

「夏実のこと好きって……だからあたし阿笠に逃げて…」
「……分かってる」
「阿笠なら……好きになれるって…秋人忘れられるって……」
「分かってる。分かってるから……もう言うな」

秋人は切なそうにそう言う。

麻冬は黙り込むが、腕と目の隙間から涙が流れているのが秋人にも分かった。

だが気づいたところで何もしてやれない秋人は、あえて気づかないふりをしている。

励ませるわけでもない。

だからといって責められるわけもない。

「俺は……好きだよ。お前が阿笠と付き合ってても」

秋人は苦しい気持ちを抑えながら小声で言う。

麻冬は鼻をすすって、そしてまだ泣いている。

「大好き……出会った頃からずっと……」

2人、ようやく本当に両思いなのだと確信する。

けれど

「なのにあたし……っ……うぅ…っ……」

「……さっさとお前への気持ちに気づけなかった俺への報い…だよ。ごめんな…」

けれど、ようやくお互いの気持ちが通じ合ったのに実らない。

こんな切ないことってあっても良いのだろうか。

秋人のことを考えて夏実から一旦手を引いた春樹と、付き合うことができない秋人。

どっちが不幸かを秤にかけて吊るすわけではないけど、なぜ彼らはこんなにも苦しい恋ばかりしているんだろう。

「ごめ……秋人……ごめん」

そう言ってしばらくしてから麻冬は眠りにつく。

酔っていた勢いであんなことを言ったのか、それともちゃんと正気だったのかは分からないけれど

確かに悲しい気持ちだけがそこに残っていた。

秋人は泣きそうになるのを堪えながら、春樹と同じように麻冬を背負ってタクシーで帰って行った。

もう深夜だが麻冬の両親ともいなく、仕方ないから麻冬のカバンから家の鍵を出して勝手に家へ入る。

そうして麻冬の部屋へ麻冬を連れて行って、麻冬をベッドへ寝かせる。

鍵はポストに入れておく、というメモを残して秋人は足早に雪原家を出て行く。

何分後かに自分の家につき部屋へ戻った秋人は、ベッドの上に寝転んでいる。

そうしてようやく涙が出てきた。

next

第１１７話【朝礼】

翌日、朝練を終えた４人はそれぞれ教室へ向かう。

「あ……」

偶然外で麻冬と秋人は顔を合わせる。

こんなときに限って阿笠も松平もいないのだ。

「…おす」

「お、おはよ」

気まずそうにしているところを見ると、どうやら麻冬は昨日のあのとき意識はちゃんとあったようだ。

出くわしても知らんぷりをしていれば良かったものの、あいさつをしてしまった以上一緒に行かざるを得ない。

２人はぎこちなく歩き始める。

「あ……そうだ。秋人何欲しい？」

「え？」

「今週誕生日じゃない。去年は確かワックスあげたっけ」

麻冬は機転をきかせて話題を振る。

「あー。あれよく分かったじゃん」

「あはは、秋人が髪のしまりが悪いって言うからさ」

「おう、まじドンピシャ」

麻冬のおかげで話に花が咲く。

それでもどこか雰囲気はギクシャクしている。

仕方ないといえば……当然といえばそうかもしれない。

昨日あんなことがあったばかりなのだ。

どうあれ両思いだと分かっているのだ。

「で、今年は？」

「……」

「秋人？遠慮しないで言ってよ」

あどけない表情でそう言う麻冬とは逆に、秋人は黙り込んでいる。
その表情はどこか切なげで儚げで、けれど力強い。

欲しいものなんて、１つしかない。
それしか思いつかないし、それ以外はいらない。
麻冬だって、きっと本当は分かっている。

「……麻冬」
「ん？」

秋人は麻冬の顔をじっと見つめながら言った。

「麻冬が欲しい」

そのとき、ザァッ…と風が吹いて、一瞬時が止まったかのように思われた。

麻冬は少ししてからハッとして、慌てて言う。

「だっ…め……あたしは阿笠と……」
「……それ以外はいらない」
秋人はそう言って校舎へと向かって行く。
「あ、秋……」
麻冬は秋人の名前を呼ぶが、秋人には届かない。
麻冬は先に行く秋人の背中を見つめて、見えなくなってもずっとその方を向いていた。
そのうち他の友達に声をかけられて一緒に校舎に入って行った。
秋人の誕生日は今週の金曜日だ。
そうしてじきに11月に入る。
11月のメインイベントといえば文化祭だ。

クラスでの出し物や部活での出し物など実に様々で、大いに盛り上がる。

去年は春樹のクラスはコスプレ喫茶、夏実はお化け屋敷、秋人は劇、麻冬はバザーだった。

特にコスプレ喫茶では春樹がうさぎの着ぐるみを着ていたものだから大反響。

言わなくても分かるだろうが、秋人はもちろん大道具。

劇自体は美女と野獣で、本来なら秋人が野獣をやるはずが秋人はどうしても嫌だと言ったため裏方になった。

秋人が出ないと知った客からかなりガッカリされたのを覚えている。

文化祭は体育祭と並ぶほどのビッグイベントだから、生徒たちも力が入る。

あの４人も体育祭よりずっと楽しめる。

体育祭は基本スポーツできる人ばかり目立ってしまうが、文化祭はそうはいかない。

ちなみに運動部は大抵屋台を出す。

屋台のほうが大した準備もなく楽なので、部活を引退した3年がやることになっている。

3年生はこの時期受験真っ盛りだからあまり負担にならないようにしているのだ。

話は戻り、今日は1限の前に全校朝礼が行われる。

まぁいわゆる校長の長い話やら生活指導担当の教師の話やらを聞くやつだ。

それから、もうすべての運動部の秋季大会を終えているからその表彰も行われる。

大会の表彰式でもらった賞状やらトロフィーやらをもう一度今度は生徒たちの前で校長から受け取るのだ。

「呼ばれた順に代表者2名前に出てください。女子バレーボール部、

男子サッカー部」

名前を呼ばれて立ったのは、夏実と里菜と秋人と阿笠だ。

４人は前に出て、呼ばれた順に並び壇上に上がる。

そうして賞状とトロフィーを受け取って壇上を降りる。

「続きまして個人の部。男子バドミントン部シングルス櫻井くん中丸くん。ダブルス櫻井くん中丸くん。水泳部雪原さん松平くん」

バド部では結局シングルスもダブルスもあの2人だ。

まぁそれもそのはず。

県1位は春樹、3位が中丸でダブルスも3位が春樹中丸ペアなのだから。

麻冬も松平も自由形１００メートルで優勝。

それから背泳ぎ５０メートルでも麻冬は優勝している。

こう見ると、本当にすごい人の集まりなんだと思わされる。

普段は笑って怒って泣いて遊んでケンカして、そんなどこにでもいる高校生なのにスポーツとなるとガラリと変わる。

その目付きから、態度から姿勢から本気が読み取れられるのだ。

春樹たちも壇上に出て受け取るものを受け取り、戻ってくる。

大抵みんな壇上に上がって表彰されると照れたり緊張したりするもんだが、彼らは違う。

むしろ毎回前に出るなんてめんどくさいとさえ思っているほどだ。

秋人なんて壇上で校長が賞状を読み上げているときでさえ首がコクリコクリと揺れていた。

ここまでくると清々しい。

今日までに大会やコンクールを終えたのはどうやら運動部だけではないようだ。

美術部では烈が最優秀賞を取って表彰されている。

他にも写真部が入賞したりもしたようだ。

「イヒヒ。良いだろ、2こ」

春樹は五十音順で2列に並ぶと秋人の前になる。

櫻井と月影だが、男女が前後で並ぶため真ん中には高橋しかいない。

「ずっけ。俺んちどうあがいても2ことかもらえねぇし」

「だよねぇ～」

「結局春樹と中丸だけか」

「まぁね。まぁ所詮そんなもんさ」

春樹はあははと笑う。

どこかその笑い声が心地よくて、秋人は清々しそうな表情をしている。

と、そのとき春樹はそんな秋人の顔からふと気づく。

「あれ、秋人泣いた？」

「えっ」

「目…ちょっと腫れてる」

秋人はバッと顔を反らした。

昨日家に帰ってから秋人は嫌ってほど泣いた。

だからだろう。

でも他の誰もは何も言ってこないくらいの、ささやかな腫れではある。

「……なんかあった？」

春樹は秋人に尋ねる。

不器用な秋人はそんなことないと、首を振ることも言い訳することもできない。

ただただ罰の悪そうな顔をして床を見つめるばかり。

そんな態度を取られたらすぐに分かってしまう。

「そ…か……」

春樹も床を見つめながら寂しそうに笑う。

「麻冬だね」

そりゃ麻冬しかいないだろう。

だって昨日の夜、秋人と最後まで一緒にいたのは麻冬なのだ。

阿笠とケンカとか寝不足なだけとか、そんな簡単なものじゃない。

「……寂しいね」

春樹の言葉に、秋人は涙腺が緩くなる。

それでもなんとか手を拳にしてギュッと震えながら握りしめることで何とか持ちこたえている。

「でも、頑張ってる秋人は愛しいと思う」

だが、その言葉で秋人は堪えきれなくなる。

左腕で目を押さえて声を押し殺している。

切ない感情が溢れ出て、よりいっそう秋人を苦しめる。

生徒はみんな座っているが、春樹はあぐらをかきながら泣く秋人を立たせる。

「ごめん、賞状阿笠と烈に預けてくれる?」

春樹は隣に座っていた高橋にそう言う。

高橋は驚きながらもとりあえず返事をした。

立っている2人に全校生徒の注目が集まる。

春樹は臆することなく秋人の背中を優しく押しながら列の後ろに連れて行く。

目を隠しているし、とにかく泣き声がもれないように秋人も必死だがらおそらく生徒たちには泣いていることはバレていない。

「櫻井、どうした?」

担任が慌てて春樹に状況を尋ねている。

「秋人具合が悪いみたいなんで外連れてきます」
「保健室じゃなくて良いのか？」
「たぶん外の空気吸ったほうが楽ですから。それでもダメなら保健室行きます」

養護教諭もパタパタと駆けつけてくるが、春樹はノーと答えて秋人を体育館から連れ出す。

春樹はどこに連れて行こうか迷いに迷って、絶対今なら人が来ないバド部の部室に連れてくことにした。

バド部は2階で練習するから2階に部室もある。

朝礼が行われているのは1階で、1階を出て扉の向こうの体育館の玄関付近に2階へ上がる階段がある。

そこを静かに上り、2人はゆっくりと2階へ上がって行く。

部室に着いた頃には秋人もだいぶ泣き止んでいた。

next

第118話【未来を語る声】

朝礼が終わるとみんなガヤガヤと体育館を出て自分の教室へと出て行く。

「ちょっとちょっと麻冬～っ」

「ん？」

夏実は麻冬のところに駆けて行く。

「秋人どうしたのかな」

「……あ、そういえば出て行ったよね」

「珍しいね、秋人がこんな時期に体調崩すなんて」

さっき2人は縦列に沿って後ろに出たから、当然夏実や麻冬の近くを通る。

夏実は心配そうに2人を見ていたけど、麻冬はチラリとだけしただけだった。

それでも秋人を連れてる春樹と目が合った。

一瞬麻冬の時が止まった。

すべてを見透かされてるように思えた。

「体調……崩す？」

「違うかな？単にめまいがしただけかもね」

「……何にめまいがしたんだろうね」

「何って…」

麻冬はボーッとしながらそう呟いている。

分からないはずがない。

「気持ちにめまいが起きたのかな……」

麻冬の意味深な発言に夏実は首をかしげる。

そんな夏実を見て麻冬はニコッと作り笑いをして言った。

「なーんてね。ジュース買ってこっか」

「あ、良いね！」

「…とその前に、職員室行かなきゃ」

職員室というのは、渡された賞状やらトロフィーを顧問に渡しに行くためである。

だからさっき名前を呼ばれた人はみんな職員室へ向かうことになるわけだ。

全校生徒がいっぺんに動くわけだからかなり混み合う。

特に麻冬は人混みが好きではなく、もみくちゃになるのをかなり嫌がる人である。

春樹や秋人がいれば、麻冬が人ごみに溢れないよう横や斜め前に立っていてくれる。

特に秋人は４人の中で一番大きいわけだから、人ごみでは必ず麻冬の側にいた。

麻冬がそうしろって言ったわけではない。

麻冬のことを思って自らそうしてくれていただけ。

「もうちょっと後に出れば良かったね」

夏実が途中でそう言った。

麻冬は夏実に変な心配をかけないように笑うのだ。

「平気平気。良い加減慣れなきゃ」

麻冬には隣に立っている秋人の姿が一瞬見える。

いつもそうやって影ながら守ってくれていたこと、麻冬はちっとも気づいてなかった。

確かに夏実を好きだったかもしれない。

報われない恋だって思うかもしれない。

けど、それでも秋人は麻冬の側にいた。

いつだって側にいて、隣にいてくれた。

秋人が夏実を好きだと思ったのは、夏実のような性格に憧れていたから。

自分が持っていないものを持ってる夏実を羨ましく思って、憧れて、
大事にしたいと思って、それを好きだと勘違いした。

確かに秋人は夏実を人として好きになった。

でも

秋人が1人の女の子として好きになったのは

「麻冬」
「……えっ？」
「えって、職員室こっちだよ」
「あ、ごめんごめん」

2人は職員室へと入って行く。

職員室には先にもう表彰された男子たちが来ていた。

とりあえず麻冬は水泳部の顧問のもとへ行く。

顧問は楽しげに松平と話している。

「おお、雪原」

「賞状持ってきました」

麻冬は顧問に渡すものを渡して、今日の部活の話などをしたりする。

そのうち授業が始まりそうになり、麻冬は夏実のほうをチラリと見る。

夏実はまだ里菜と顧問の3人でお喋りをしている。

「麻冬！」

夏実を見ていた麻冬に、阿笠が少し遠くから手を振っている。

阿笠の横には烈もいる。

烈も一緒になって手を振ったりしている。

「おはよ」

麻冬も手を振り返した。

そうして阿笠と烈は職員室を出て行く。

「松平くん、行こ」
「うん」

麻冬も松平と歩く。

職員室は2階にあり、麻冬たち2年生の教室は3階だ。

職員室をすぐ出て近くにある階段を上る。

他愛もない話をしている2人だが、松平は麻冬の異変にどことなく気づいている。

麻冬が作り笑いするたびに松平は麻冬の顔をじっと見る。

「でね、軽く地理とちっちゃったんだ」
「へぇ」
「理系なのになー」

それでも頑張って笑う麻冬に、松平は別れ際に言った。

「何かあった？」

そう言われた松平は一瞬時を忘れるくらい驚いている。

無理もない。

完璧な作り笑いを見透かされているのだから。

まぁそれくらい春樹や秋人にもすぐにバレてしまうものだろうけど。

「泣きたいときは泣け。作り笑いはきっと自分もそいつも傷つける」

松平はどこまで分かってそう言っているのだろう。

おそらく秋人と昨日あんなことあったことに気づいているわけではないだろうけど。

麻冬は松平にそう言われて軽くうつむいている。

松平は軽く息を落として、麻冬の頭にポンと手を置いて優しい顔で言った。

「それでもダメなときは俺に言って。いくらでも聞く」

そして松平は、それじゃあまた、と言って教室に入っていく。

麻冬は何十秒くらいかはそのままの状態でいたけれど、授業のためにノロノロと教室へと歩いて向かって行く。

このとき春樹と秋人は、バド部の部室にいた。

秋人は泣くわけでもなく何かを話すわけでもなく

春樹も慰めるわけでもなく話を聞くわけでもない。

椅子に座ってうつむいている秋人と、窓の外をボーッと見ている春樹がいる。

沈黙という名の、穏やかな空間が流れている。

もう授業が始まることは2人とも分かっている。

それでも春樹は秋人に戻ろうとは言わないし、秋人も春樹に先に戻って良いよとは言わない。

ゆったりした時間のみが流れている。

２人がここに来てはやくも３０分くらいが経とうとしている頃、春樹は飲み物を買おうと思い振り返る。

すると同時に、うつむいて座っている秋人がポツリと言った。

「前に春樹と夏実のことを聞いたのも……ここだったな」

おそらく秋人は春樹が動いたのを察知して言わなきゃと思ったのではない。

ほぼ同時の動作だった。

「あ……ああ、そうだね。そういえば」

春樹はいきなり秋人がそう言ったことに驚きつつも、しっかり受け答える。

けれどそれっきり秋人はまた黙り込む。

春樹はしばらくその場で秋人を見つめて、その後秋人の正面に立った。

秋人は春樹が目の前に来たのに気づき、見上げた。

「思ったよりも辛い？」

そんな言葉とは裏腹に、春樹の顔はとても優しい。

秋人はまたもやうつむいて、そして言った。

「……けっこうな」

麻冬と阿笠が付き合っていることは紛れもない事実。

阿笠が麻冬を愛してるのも、麻冬が阿笠を好きになろうとしてるのも変えようのない事実なのだ。

はいそうですか、なんて言って簡単に乗り換えられるものではない。

特にあの2人は、いろんな思いを抱えて付き合い出した。

「……でも、弱い自分はもういらないんだ」

秋人は手に力を入れ、やり場のない震えを抑えている。

「…麻冬が大きな存在だってことを気づこうとしなかったのは確かに俺で、あいつは……阿笠はどんなときも麻冬を必要とした」

秋人は震える声を搾り出しながら、それでも一生懸命話してくれている。

本当は弱音なんて吐きたくないだろうに

惨めな自分を知られたくないだろうに

それでも秋人は、誰かに分かってもらいたくて必死に喋っているのだ。

「それは受け止めなきゃいけない事実だと思う」

春樹も、そんな秋人を分かってか分からずか、黙って話に耳を傾けている。

「でもそれだけじゃなくて、過去の俺はそうだったとしても未来の俺はどうかはまだ分からないんだ……」

「……うん」

「……今までたくさん壁乗り越えてきたつもりだった」

秋人は肘を腿に置いて、両手を額にあてる。
前髪がかき上げられる。

「大学もハンナもＪもサッカーも……。なのにこれ以上どう苦しめれば気が済むんだって…思った」

体育館で体育をやるクラスはないようで、静まり返っている。
そんな中部室の中に響く、秋人の未来を語る声。

「…でも、たぶんこの先もきっとそんなものはいくつでも現れる。乗り越えられないものじゃないんだとも…思うんだ」

ついこの前のゲーセンでの秋人は、こんなことは言っていなかった。
むしろ麻冬が自分を好きだと言うのなら諦めると、前へは進まないと…そう言っていた。

けれど、秋人はしっかりと自分の気持ちを麻冬に伝えた。

それは確かに応えてもらうことができなかったけれど

それでも秋人は弱い自分とさよならしたくて、簡単に諦められるものじゃないことを理解して、叶わなくとも願えばきっと明日はあることを信じて

歩もうとしている。

秋人は立ち上がって、泣きそうな、けれど必死に耐えている瞳で春樹を見る。

「諦めが悪いって言ったらそうかもしれない。けど、すぐに諦めて違う道を見つけようとして結果的に良い方向へと進めたとしても…」

春樹とて、決して強い人間なわけではない。

秋人と同じように傷つくし泣くこともあるし、大きな壁にだって直面して挫折をしている。

それでも春樹はその壁を乗り越えたときの意味を知っているから、だからそんな表情で秋人を見守っている。

「そんなの、寂しすぎるんだ……」

秋人がそう訴える瞳には少しだけ涙が溜まっている。

「だから……」

そのとき、春樹は秋人の肩に手を置いた。

そうして優しい顔で微笑んでいる。

「春樹…」

まるで天使のような……いや、子どもを優しく見守る母親のような顔で微笑む春樹に、秋人は余計に泣きそうになる。

「……うん。うん、そうだね」

「春…」

「そうやって1つずつ進んでいけば、きっと見えない明日も来る」

そんなもの、秋人にも春樹にも分からない。

けれど、それを信じて向かわなければ手に入るものも入らない。

「自分を弱いってちゃんと分かってる秋人はきっと強くなる」

春樹はクルッと向きを変えて、なにやらゴソゴソと部室のものをいじっている。

秋人は袖で目を押さえて溜まっている涙を拭いている。

そんな秋人に、春樹はバドミントンのシャトルを軽く当てる。

「つまりね、今を楽しむしかないよ」

歯を出して無邪気に笑いながら春樹は秋人にラケットを渡した。

秋人はそれを受け取る。

「――――だな」

どこからそういうことに繋がるのかは分からないが、秋人は気が晴れたように少しだけ笑っている。

阿笠が困っていたらきっと春樹は同じように阿笠を慰めるんだろうけど、今の秋人にはそんなことはどうでも良かった。

ただ黙って話を聞いてくれて、弱い自分を優しく受け止めてくれた。

それだけで、十分救われた。

「お前バド部なんだから手加減しろや！」

「やーだよっ！」

それは、前へ進むための勇気を出すための糧となる。

next

第１１９話【サボり】

春樹と秋人はバドミントンに熱中したあと、次はバスケをし始めた。

その次にはバレーボールでマンツーマンをしたりハンドボールを使って遊んだりと、体育館にある道具を使って２限が終わるまで遊んでいた。

その頃には汗をいっぱいかいていて、２人はＹシャツの下に着ているＴシャツを脱ぐ。

「あっちー。春樹～タオル」
「ほいよ」

２人は体育館の窓を開けて上半身裸のまましばらくそよ風に当たっている。

誰もいないから良いものの、人に見られれば明らかに不審者だ。

「前もバスケやったなー」
「ん？」
「ほら、過去のことで俺が滅入ってたとき」
「あー、はは。したね」

スポーツマンの性なのか、やはりリフレッシュやストレス解消にはスポーツが一番のようだ。

頭を使って悩んだ分、体を使って気分を晴らすというのはまぁ良い考えである。

「迷惑ばっかかけてんだなー……俺って」

秋人は足を伸ばして座っていた状態から寝転んで、天井を見上げた。

寝転んでいるせいでいつもよりはるか高く感じる天井。

「かけてくれる方が嬉しいけどね」

春樹は方膝を立てて座っている。

目をつむり、そう言っている口元は微かに緩んでいる。

「はっ？」

秋人はふいに春樹に視線をやる。

秋人の視線に気づいた春樹は秋人と目を合わせた。

「ちょっと前までの秋人は喜怒哀楽もそんなになくて、物事にも無関心でどこか自分の殻に籠ってるとこがあった」
「ああ……そうかも」
「でも最近いろんなことがあるおかげで秋人、変わってるんだよ」

もともとのその大人びたどことなくクールな雰囲気は、あの時代に築いたもの。

大学に入ってから葛藤の日々で、子どもらしさを失っていた。

あどけなさが残っていてもまだ良い頃なのに、大人に囲まれた秋人は少しでも大人に近づこうとして無理をした。

その代償だ。

「秋人にとっては良いことなんだ。だからそのためならいくらでも構わないよ」

その言葉を聞いたあと、秋人は上半身を起こす。

そして、少し後ろめたさを感じながら春樹に問うた。

「お前は……人のことばっかだ。そんなんで疲れねぇ？」
「秋人」
「もっと自分を尊重しても良いんじゃないか。…優しいな」

そうして秋人は付け加えた。

「俺は自分のことばっかだから……」

秋人は手を組んで細目で床を適当に見つめている。

秋人の言うように、確かに春樹は人のことばっかりだ。

自分のことは後回しにしてでも人に優しくする。

秋人もその優しさにどれほど助けられただろうか。

「自分のことばっかって、そんなことないじゃん」

「え…」

「だって今俺の心配してくれてる」

人に優しくしたいとか、自分は後回しで良いとか

そういうふうに思って行動しているわけではない。

ただ、そうするのが春樹で、春樹だからこそそうであっているだけ。

「あ。そろそろ3限始まっちゃうね」

春樹は体育館の時計が目に入り、そう言う。

つられて秋人も時計に目をやった。

「そろそろ戻るか？」
「でも途中から入るのもなー」
「じゃ4限からで良いか」

と、そのとき体育館で体育をやろうとしているクラスの生徒たちがワイワイと近づいてきた。

その声と足音に気づいた2人は脱いだ服たちを掴んですぐさまバド部の部室へと駆けた。

すると、どうやら1年生のクラスのようで、しかも女子たちだ。

出て行くに行けず、結局2人は部室に留まっている。

そのうち体育が始まり、女子たちはネットを出してバレーをし始めた。

教師がいなくなればなんとかなるが、体育教師が体育館内にいるものだから動きようもない。

「くっそ……出れねぇし」

2人は部室のドアを少しだけ開けて体育館の中を覗いている。

いくら部室とは言え、声を出せば簡単に響く。

響いたらサボっていることがバレてしまうから、うかうかと声も出せない。

と、そのとき体育教師はなにやら忘れものでもしたらしく体育館から走っていなくなった。

生徒たちは依然とバレーを楽しんでいる。

「秋人、先生いなくなった」

「まじか」

2人は小さな声でコソコソと話している。

教師にさえ見つからなければ、文句を言われることはない。

生徒たちには顔さえバレなければ良いのだから。

秋人はタオルを頭にかけて両横からは顔が見えないようにし、春樹はフード付きの服をYシャツの下に着ていたため、フードをかぶる。

部室は南側にあり、ステージは北にある。

出入口は東にあり、西側は窓になっている。

つまり南側が後ろになるわけだから、壁に沿って出入口にまで行けばなんとかなる。

タオルやらフードで横からは顔は見えない。

2人は教師が来る前にと思い、部室から出る。

出るときも後ろ向きで念入りだ。

そうしてスタスタと何事もないかのように歩いている。

当然女子たちは2人の男子が歩いていることに気づく。

「あれ……秋人先輩と春樹先輩じゃない？」
「うっそ、顔見えないじゃん」

2人はそんな声が聞こえてきたのに気づき、左手で顔を見えないよう壁をつくる。

「それに秋人先輩って具合悪いみたいだしこんなとこにはいないでしょ」
「それもそうか」

そんな女子たちの声がする中、2人はようやく出入口から出て、階段を降りる。

そうして体育を出て校舎と体育館をつなぐ廊下にまで着いたとき、2人はフードを外したりタオルを取ったりした。

体育館から出たものの、2人はどこへ行こうか決めかねてる。

グランドでは体育をしているし、校内では授業。

中庭とかそういうところでも良いけど、またすぐに戻ってくるのも面倒だ。

結局あれこれ悩んだ末、いつものようにラウンジへ行くことになっ

た。

ジュースも飲めるし声を出しても響かないし丁度良い場所なのだ。

人がいない限りは。

「あっ」

春樹はラウンジに入るやいなや声を漏らす。

何？と聞き返した秋人に、春樹は自販機のほうを指差した。

「……あ。阿笠だ」

授業中にも関わらず何やら阿笠はジュースを買ってその場で一気飲みする。

そして飲み終えた缶を片手で握り潰している。

2人は話しかけようとしたが、どうにも阿笠の様子が変なことに気づき、思わず隠れて見ている。

阿笠は遠目で見ても分かるほど震えている。
怒りの震えか悲しみの震えかは分からないけれど。

「あ、阿笠何かおかしい」
「朝練のときは普通だったけどな」

そして阿笠は潰れた缶を一目見て、床に思いきり投げつけた。
ガシャ！カラカラ……という音を立てながら缶は床にぶつかり少し転がる。
阿笠はまるでサッカーボールを操るかのように缶を足で拾い上げ、缶のゴミ箱目掛けてそれを軽く蹴った。
が、しかし缶はゴミ箱の隅にあたり中に入ることなくまたもや床に落ちる。

「入んねーし……」

ボソッと呟いて、阿笠はようやく手で拾う。
そうしてゴミ箱の中に缶を思いきり投げた。

中にはたくさんの缶が入っているため、大きな音が鳴り響いている。

出て行くに行けない春樹と秋人は、とりあえず阿笠に見つからないようにしている。

阿笠はポケットに手を突っ込んで不機嫌そうな顔をしながら、偶然にも秋人たちがいる出入口とは別の出入口から出て行った。

見つからなくてとりあえずホッとした2人だが、阿笠の奇怪な行動に首を傾げている。

なぜ阿笠がこんな態度を取るのか全く考えつかずにいる。

next

第１２０話【理解】

『阿笠』
『はーい』

３限、テストが返ってくる。

文系科目のテストだったんだが頭の良い阿笠は当然点数が高い。

『クラス１は阿笠で９５点だ。すごいな、阿笠』

教師はみんなの前で阿笠を褒める。

みんなすごいだのさすがだの、拍手しながら阿笠を称えている。

あの烈も押さえての１位だ。

だいたい阿笠か烈が１位を取っているのだ。

『本当お前は出来る奴だな。サッカーも勉強も』

教師が満足そうにそう言うと、クラスメートの誰かが言った。

『男の俺から見ても阿笠かっこ良いしな。ジェントルマンだし』

その言葉にクラス中が賛同している。

彼らにとっては本気で阿笠を羨んでいる。

そうさ、どうみたって阿笠は恵まれている。

サッカーの才能も頭脳も、容姿も器用さも音楽の才能があることも。

それでいて性格が良ければ非の打ち所がない。

阿笠は黙ってみんなの話を聞きながら席に着く。

後ろの席の烈は心配そうに阿笠を見ている。

『それに雪原さんが彼女だし。落ち目なしだよなぁ』

だが、誰かがそう言ったとき阿笠は受け取った解答用紙をクシャッと握りしめた。

みんなが阿笠の行動に注目した中、阿笠は震える声で喋り始める。

『……落ち目ないって？ありまくりだよ』

教師までもが解答用紙を配ることを中断している。

『あいつは……97点だ。サッカーだって俺は副。あいつのが背も高い』

阿笠の言っている
「あいつ」というのがみんなにはすぐに分かった。

けれど流水のごとく静かに怒る阿笠に誰も突っ込めずにいる。

突っ込まないのではなく、怒っている阿笠に触れてはいけないと感じているから。

『結局俺はいつも2番目なわけでっ……それに麻冬だって…』
『阿笠！』

阿笠の言葉を遮るかのように烈は阿笠の名前を呼ぶ。

阿笠はゆっくりと後ろの烈のほうに振り向いた。

『だめじゃん、そんなこと言っちゃ』

烈は怒るでもなくバカにするでもなく、ニコリとしながら笑顔を阿笠に向ける。

『いくら今月影とケンカしてるからってさ。ったく、はやいうちに仲直りしとけよ?』

いきなり何を言うのかと阿笠は目を丸くする。

だが烈のフォローのおかげでクラスメートたちは納得したようだ。

びっくりしたーだの、阿笠があんなこと言うわけないよなだの、安堵の声を漏らしている。

もちろん嘘の話なのだから阿笠が驚くのも無理はないが、せっかく烈がカバってくれたんだから有効活用しなければもったいない。

そう頭で分かっていても、阿笠は素直になることができずにいる。

『頭冷やしてきたら?どうせ授業はテストの解説だし』

烈はそう言ったあと、教師に『ねっ』と相槌をする。
教師もとりあえず烈に合わせて頷いて返事をした。

『怒んのはよくないな。気が向いたらサッカー付き合っちゃるから』

そう言って烈は阿笠の背中を押す。
阿笠はガタッと音を立てて席から離れ、去り際に烈の耳元で囁いた。

『……ありがとう。烈』

そして阿笠は授業を抜けてラウンジへと向かったのだ。
そのあとは春樹と秋人が見た通り。

阿笠が怒るのも珍しいけど、それ以上にコントロールを誤ることの方がもっと珍しい。

あんな距離で阿笠が外すわけないのに、缶はゴミ箱に入らなかった。
それほど神経を逆立てているということだ。

阿笠が何をもって秋人にそんなに怒っているのか。

頭では仕方ないことだと分かっているのに。

秋人が海外でも指折りの天才だということ

サッカーをやる上では秋人は統率力がずば抜けていること

そして、麻冬が秋人を好きだということも…

違う、そんなことにイライラしていたのではない。

「あちーっつーの…」

阿笠はスリッパのまま玄関に出る。

照りつける太陽が阿笠を包み、阿笠は眩しそうに見上げた。

「……別にいつも2番手だとか…気にしてないし」

阿笠は足元に落ちていた小石を蹴る。

阿笠はまるで誰かに文句を言うかのように呟く。

ならなぜこんなカリカリしているのかと言うと、阿笠は偶然聞いていたのだ。

今朝の秋人と麻冬の会話を。

遠くで秋人と麻冬が一緒にいるのを見つけ、阿笠は一緒に行こうと駆けた。

声をかけようとしたとき、秋人は麻冬にこう言った。

『麻冬が欲しい』

一瞬聞き間違えたのかとさえ思ってしまう。

耳を疑った。

けれど秋人は困惑する麻冬にとどめを刺すかのように、それ以外はいらないと、そう言った。

秋人は立ちすくむ麻冬を置いてさっさと歩いて行く。

阿笠は麻冬に話しかけようかとも思ったが、麻冬のその姿はとても痛々しく、話しかけると自分が惨めになる気がして阿笠は走って校舎へと入って行ったのだ。

2人のあんな会話を聞いたら嫌でも分かる。

何かあったことを。

それでも聞くに聞けなくて、思い知らされるのが怖くて

何もできなくて

怒りだけが込み上げてきてしまった。

そうして授業中テストを配られたとき、秋人がこのテストで自分より点数が少し高かったことを思い出して

それからみんなが阿笠を褒めちぎるものだから余計に悔しく思えて、八つ当たりをしてしまった。

仕方ないとは言えないけれど、無理もない。

あんな2人を目の当たりにして平常でいられる人のほうがどうかしている。

麻冬に告ったであろう秋人と、揺れている麻冬。

そんな2人を見るているだけで苦しくて辛くて、胸が張り裂けそうになることは当たり前のことだ。

「あーかさーっ！」

ふとどこからか阿笠を呼ぶ声が聞こえてきた。

阿笠がキョロキョロしていると、今度は

「上上！」と叫んでいる。

阿笠はその声の通り上を見上げると、3階の自分の教室から烈が顔を出して手を振っていた。

「烈！」

阿笠は烈の真下に歩いてきて、授業中なのに何してんだよ、と言うと烈は楽しげに笑いながら言った。

「教室ん中歩いてたら偶然阿笠見えてさ」

「んなバカな……」

まず教室の中を歩いている意味が分からないし、教師がいる前でそんなことをしている意味も分からない。

だがその不可思議なところが烈らしくもある。

「受け取れーっ！！」

そして烈は、なにやら物を投げ落としてきた。

かろうじて阿笠がそれをキャッチすると、一口サイズの紙に包まれたチョコだった。

「チョコ……？」

すると、更に続々と投げ落とされてきて阿笠は取るに取りきれずそれらは阿笠に当たったり地面に落ちたりしている。

「わっ…いてっ！」

なにがなんだか分からなくなっているが、ようやく嵐が収まったところで阿笠は地面を見下ろした。

そこにはチョコだけでなく飴やらビスコやらがかなりの数散らばっている。

一瞬呆然とするが、阿笠は勢いよく上を見上げた。

黄色いフードをかぶっている烈が、青空をバックに微笑んでいる。

「甘いもん食えばすっきりするかもよっ」

きっと烈は分かっている。

なぜ自分がこんなにもイライラしていて授業さえ抜けなければいけないのか、何があったのか、きっと分かっている。

それでも烈は胸を貸すわけでもなく泣き言を聞くわけでもないのは、そんなことで苦しみや悲しみが癒えるわけがないと理解しているから。

阿笠はそう思っている。

おそらくその通りだ。

烈の情報網やら何やらからして、事を理解している。

烈が阿笠のことを分かっているように、阿笠も烈をちゃんと分かっているのだ。

阿笠は眩しいながらも烈を見上げている。

ありがとう、なんて言葉では表せない気持ちをどう表現しようか。

それでもありがとうの言葉しか思いつかない。

「烈ー！４限はちゃんと出るからなー！」

そう言って笑顔をした阿笠に、烈は
「待ってる！」と返事をした。

烈は顔を教室に引っ込め、阿笠は散らばったお菓子を拾い集める。

たったこれだけのやりとりだけど、確実に2人の信頼関係は成り立っている。

そう思わせる光景だった。

next

第１２１話【烈がいる理由】

阿笠はお菓子を拾い集めたあと、もうしばらくその場に留まってリフレッシュをした。

そのあと、再びラウンジへと向かった。

当然ラウンジで暇を潰していた秋人と春樹に出くわすわけである。

「あれ、２人とも何してんの？」

怒りマックスの阿笠と鉢合わせずにすんでホッとしていた２人は、阿笠が自ら寄ってきて目を丸くして言葉も失いながら驚いている。

だが２人の思考とは裏腹に

「ああ、サボりだ？」なんて阿笠は穏やかに言うから、春樹はキョトンとしながら秋人にコソッと言った。

「ふ、普通じゃん？」

「だ…だな。どうしたんだ？」

もちろん阿笠はさっきの行動をまさかこの２人に見られてるなんて思っていない。

だから2人のコソコソしたやりとりを不思議に感じている。

「何さ？」
「あ…いや、ところでそれどうした？」

秋人は話題を変えようと阿笠が持っていたお菓子に目をつけた。

両手いっぱいポケットいっぱいにお菓子を抱えていれば誰でも気になる。

「あ、烈にもらったんだ」
「へぇ。あ、俺袋持ってるよ。使う？」
「あっ、まじ？さんきゅ」

阿笠は春樹から袋を受け取って、大量のお菓子をその中へと入れる。

「烈ってお菓子好きだよね」
「へぇ、そうなんだ」

とにかく2人は阿笠が授業をサボっていることに関しては触れないようにしている。

「なんか甘いもん食べなきゃ画書けないってさ」

そんな2人の思いに全く気づかずに阿笠は平然としている。

目の前につい怒りをぶつけたくなった相手、秋人がいるけど阿笠は烈のおかげで平常心を保てている。

「あはは。まぁ烈はねー、特別だし」

「そういや今朝表彰されてたな、愛川」

「烈はあの画じゃ参加賞にも当てはまらないのにって嘆いてたよ」

「わ、天才発言」

烈の話題のおかげでギクシャクした雰囲気を出さずにすみ、ようやく2人も緊張の糸が解けたようだ。

普段おとなしい奴ほどキレると恐いとはよく言う。

まぁ阿笠の場合はおとなしくはないけど、普段が穏やかだからそう思うのだろう。

「やっぱ大学とか推薦なのかなぁ」

春樹がそう言うと、阿笠は手を振って否定した。

「烈フランス行くって」
「フランス?!」
「有名な先生が烈に声かけてくれたんだよ。ってか前々から誘いがあって。その先生のもとで修行すんのさ」
「ほぇ〜……まさかそんなすごい奴だとは」

秋人が関心している隣で、春樹は遮るかのように尋ねた。

「前々って?」
「中3の冬」

阿笠が平然とそう言うと、春樹に加えて秋人までもが
「中3?!」と声を荒げた。

まぁ無理もない。

中3の子どもが世界でも有数の先生のお目にかかるなんて、ありえない話だ。

「高校行かずにそのままフランスへ……って話だったんだけどね」

そのとき阿笠は少しだけ悲しそうに笑う。

春樹はそんな阿笠の表情を見逃さなかった。

「あれ、でも愛川高校生やってんじゃん」

見逃さなかったがいまいちピンときてなかった春樹だったが、秋人のその言葉で謎が解けたようだ。

春樹は人差し指を立てながら陽気に言った。

「分かった、阿笠と一緒にいたかったんだ！」

阿笠と烈が仲良しなことは中学時代から周知の事実だ。

女同士だとよくあることだが、男同士で2人でいつもつるんでいることは珍しい。

もちろん友達も多いし、男女問わず好かれている。

だが2人はいつも一緒。

それは高校でも同じだ。

「当たり」

阿笠は苦笑している。

「正確には半分当たりかな。やっぱ数少ない学生生活一緒に送りたいんだって」

「……あ、そっか。お前は高校卒業したらプロだしな」

「はは。なれるか分かんないけど」

お互いがプロとして羽ばたいてしまえば、そう簡単には会えなくなる。

烈はフランスだし、阿笠も世界中に行くとは言ってもフランスに行けるとは限らない。

学生であるうちは、同じ学校にいさえすれば側にいられる。

きっと大学に行かないであろう2人にとって、高校生活が最後の2人の場となる。

「俺が邪魔してる、って思ってんだろ。お前」

「え」

「愛川のチャンスを自分のせいで逃してるって感じてんだろ」

秋人は阿笠の心を読み取るかのようにズケズケと言う。
さっき悲しそうに笑っていたのは、そういうわけだ。

「……だってそうじゃん。俺がいなきゃ烈はさっさとフランスに行けたんだ」

阿笠は少し悔しそうな顔をしながらそう言う。

分からなくない。
とても複雑だろう。

阿笠とて烈とはいつまでも一緒にいたいし、高校生活を共に送れて良かったと思っている。

それでも……

「でも烈が選んだ道だよ」

今度は春樹が言った。

「烈が阿笠といたくて、日本に残ること決めて星陵に来たんだ」

烈からその話を聞いたのは、高校に上がって少ししてからだった。

烈と一緒に歩いているとき、美術教師が話しかけてきて、こぞって烈の入学を喜んでいた。

フランスへ行かず我が校に入学してくれて嬉しい、と。

烈もいつかはバレるだろうと思ってはいたが、まさかこんなに早く知られるとは思わなかっただろう。

阿笠がそのとき何のことか問いただすと、烈は誘わていたことを話した。

何でだよ！と半分怒りながら阿笠が言うと、烈はやっぱり笑って言ったんだ。

――阿笠と一緒に学生やれるの高校で最後じゃん――

阿笠はそんな理由で行かないなんて……と烈に怒ったけど、反面嬉しかった。

フランスよりも自分を選んでくれたこと。

「あいつあんなにサッカーの才能あんのに画を選んだろ。阿笠に何言われても」

「秋人…」

「愛川って意志固いじゃん。他人のために自分の人生犠牲にしたりなんかしない」

たとえば、烈がサッカーを選ばなかったのは阿笠が音楽を選ばなかったのと同じ。

目指す道が違えば進む道も異なる。

いつかは離れてしまう。

「だから、あいつは阿笠と一緒にいるって自分で決めたんだ。お前に何も言わなかったのは、愛川が高校生やるのに何の迷いもなかった証拠だ」

それでも今一緒にいられる時を楽しむために

隣で笑って
ケンカもして
慰めあって

そうして記憶や思い出を残すために、選んだ道。

「阿笠。愛されてるんだよ。こんなにも」

春樹は微笑みながら言った。

今更こんなことを愚痴愚痴言っても仕方ないことだけど、それでも
烈の夢を邪魔してるって気持ちが大きかった阿笠は十分救われた。

大人になったとき、2人は全く違う環境にいる。

テレビの中でサッカーしている阿笠を見て烈は
絵画展を開いている烈の画を見ている阿笠は

ふと思い出す。

楽しかった学生時代を。

「幸せな奴だな」
「烈みたいな人に好かれるって恵まれてるよ」

このときの春樹と秋人は、阿笠の機嫌を取ろうとしているわけでも同情でも憐れみでもなく
ただ純粋にそう思っている。

阿笠にしてみれば素直に喜べないかもしれない。
それでも、一緒にいてくれていることを誇りに思う。
大事な親友だって、世界中の人に言えるくらい。

「ありがと、2人とも」

阿笠は少し照れながらも笑って言った。

そのとき、授業終了のチャイムが鳴り響いた。

「あっ」

阿笠はすぐさま自販機に向かい、ジュースを2本買う。

なんで2本も買うのか秋人が尋ねたところ、阿笠はこう答えた。

「烈の分。お菓子のお礼！じゃあまたなっ」

それだけ言って阿笠は軽く走ってラウンジから出て行った。

残された春樹と秋人は顔を見合わせて、笑う。

「あはは。なるほど、ジュース買いに来たわけか」

「なんだかんだあいつら相思相愛なんじゃん？」

言葉にしなくてもその糸はきっちり繋がっている。

2人には見えていた。

教室に戻った阿笠が烈とジュースを飲みながら楽しそうにお菓子を

食べている光景が。

next

第１２２話【昼の一時】

「つまりさ、アレだよね」

春樹はポッキーを秋人のほうに向けて上下に軽く振る。

「なんつーの？神様は不公平ってゆーか、むしろ秋人みたいな奴しか運を与えないって？」

そうしてそのポッキーをパクパクと食べ始める。

今は昼休み。

夏実と麻冬は２人でラウンジで食べに行っている。

今日はレディースデーのようで、売りに来るパンの値段が女の場合いつもより安くなるようだ。

レディーではない秋人と春樹はそのまま教室に残る。

まぁレディースデーというのは口実で、秋人も麻冬もお互い一緒にいるのが気まずいのだろう。

「あほか。お前の不注意だっつの」

秋人はポッキーを2本取り出して、1本ずつ食べる。

「だぁってさー！」

2人はさっき昼食を食べ終わったあとに、1~3限分のテストをもらおうと職員室に行った。

秋人が体調悪いことは全教師が知っていたわけだが、春樹まで一緒にずっといなかったとなればサボりもバレバレである。

外の風にあたってたら日差しが心地よくてつい眠ってました、なんて適当な言い訳をしたがそんなに怒られずにはすんだようだ。

所詮今日の授業はテスト返しだし、2人は成績も良い。

が、そんなことは全くもって問題ではない。

春樹がこんなにやさぐれてるのには訳がある。

『ちょっとちょっと先生、嘘でしょこれ』

問題は2限目に返ってくるはずだった化学のようだ。

『俺満点でしょ。採点間違ってますって』

春樹の点数は９６点だ。

もちろん秋人は満点なのだが、春樹は今回化学にかなり力を入れたようで自信があったようなのだ。

『ん、ああ。お前惜しかったな。最後解答順番逆だよ』

『え』

『前から順に述べよ、って問題に書いてあったろ』

『はっ？！』

春樹は勢いよく自分の答えを見て、そして秋人から秋人のテストを奪い取って見比べている。

確かに秋人と春樹のその問題の解答順番は違う。

『えーーっ！まじかよ！』

これはショックだろう。

なまじ満点だとばかり思っていたために反動は強い。

それも問題が解けなかったわけではなく、しっかり読んでいなかったからだとなれば悔しさも増す。

まぁ読まなかったほうが悪いと言えばそうなるけれど。

「あー！むかつく！！」

春樹はポッキーを数本一気にバリバリと噛んでいる。

ちなみに2人は4限はしっかり出た。

麻冬たちが休み時間に保健室に行ってもいなかったと、軽く2人に怒っていた。

朝礼中に抜けて携帯もカバンの中だったから当然電話しても出るわけはなく。

どこにいるのか何をしてるのか、全く見当もつかないと文句を言っていた。

そりゃ心配もするだろう。

3時間分も授業をサボっているとなれば。

「良いじゃん。所詮そんなもんなんだよ、お前」
「なにそれ。自分はお偉いとでも?」
「春樹よりはな」
「ムキーーーッ!!!」

猿みたく怒る春樹に、秋人は声に出して笑っている。

腹が立ってしょうがない春樹だけど、秋人の笑顔を見るとなぜか春樹は嬉しくなる。

滅多に表情を出さなかった秋人が、たくさん笑って、たくさん泣いてたくさん本音を言ってくれることが嬉しくてたまらないのだろう。

やっぱり春樹は人のことばかりだ。

特に秋人のことばかり。

でもそれは、春樹が秋人を本気で好きだと思っている何よりの証拠。

「そういや今日6限ないんだっけ」

すると、秋人は思い出したように言う。

「そうだっけ?あ、違う違う。文化祭でやる項目決めだよ」
「あれ、そうだっけ」
「今年は何やるんだろね」

11月中旬にある文化祭。

一般人も来て良いから、変な取材が来そうで怖いというのはある。
まぁ報道陣もそこまで暇ではないのだから、心配しなくても良いかもしれないが。

去年はすごかった。

4人目当ての一般人が押し寄せてきた。

秋人は全国制覇した上に佑亮が秋人や阿笠の肩を組んであんなこと

言ったから、国民に顔を知られている。

夏実もインハイ出場してテレビに写っていたから、バレーファンにはよく知られている。

個人プレーをする春樹や麻冬は各界でかなりの名が高いため、知名度と人気はかなりある。

それに加えて４人のこの容姿と個性のおかげで更に人気は上がっているのだ。

「つか有志にすりゃ良いのに」
「またまたそんなこと言って。去年も王子様やんなかったくせに」
「誰がやるか！」

前にも述べたように、秋人のクラスは去年劇をやった。

春樹のクラスはコスプレ喫茶だった。

「今年はさ、せっかく４人一緒なんだし４人で何かしたいなー」
「えー……例えば？」
「ん～」

そうはいうものの、案は思いつかないようだ。
まぁ喫茶みたいな食べ物関係が一番楽といったら楽だ。
劇とかになると練習もたくさんしなければならないし、衣装も揃えなきゃいけない。
何もしないという考えは即却下されるので考えないようにする。

「あ、そうだ。今週の木曜日秋人の誕生日会ね」
「あ。あー、そうだな」
「どこでやろっか？まぁ詳しくは夏実麻冬と話しとく」
「おう」

今週は秋人の誕生日。
春樹、夏実についでようやく秋人も17歳になる。

「何が欲しい？」
「車」
「免許持ってないくせにっ」
「はは。なんでも良いよ」

秋人は笑って答えたが、ふと今朝の麻冬との会話を思い出す。

春樹と同じように、麻冬に何が欲しいかと尋ねられたとき秋人は言った。

麻冬が欲しい、と。

今思い返せば何とも恥ずかしいセリフだ。

そう思うと秋人はゆでタコのように一気に顔を真っ赤にした。

「えっ、秋人？！」

秋人の顔を見てギョッとしたように春樹は声を漏らす。

昨日の今日という勢いで秋人はああ言ってしまったんだろう。

けど、確かに勢いでもなんでもあのセリフしか出てこなかった。

やはり両思いと分かっているのに叶わないのは辛い。

「あー…何やってんだ、俺」

気まずくなるのなんて分かってることなのに
阿笠とだって関係壊すかもしれないのに

それでも秋人は麻冬を手に入れたいと思った。

秋人は机にひれ伏す状態になっている。

そんな秋人を覗き込むようにして春樹は言った。

「秋人恋愛初心者だもんね」

声を弾ませながら春樹は楽しそうにしている。

秋人は机上で腕を組んでその上に顔を乗せて、上目で春樹を見た。

「……昨日も言ったけど、お前どこまで分かってんだよ」

顔を赤くしたまま少し不満そうな表情をしている秋人に、春樹はなおも楽しげに言った。

「だから、どこまでも」

「～～～～っ……」

さすがの秋人も春樹には適わない。

「勉強ばっかじゃダメなんでちゅよー。あーちゃん」

春樹は秋人の頭をなでながら言う。

「あーくそっ！！」

秋人は組んでる腕に顔をうつむける。

春樹は満足そうな顔をしながらなでている。

「……そーゆーお前だっていろいろ悩んだくせにっ」

秋人はうつむいたままボソッと言った。

「あはは。だから秋人もたくさん悩むと良いよ」

そう言って秋人の頭をなでる手を止める。

数秒してから秋人が少し恥ずかしそうにゆっくり頭を上げると

そこにはまたあの優しい顔して微笑んでいる春樹がいた。

next

第１２３話【出し物決め】

同じく昼休み、秋人たちがそんな会話している隣の教室で阿笠は先の春樹と同じようにお菓子をパクパク食べながらやさぐれている。

「てゆーかさぁ、なんで俺お前にも負けてんの」

どうやら今のところ返ってきているテストの合計点が阿笠より烈のほうが高いようだ。

いつもだいたい合計点では阿笠のほうが高いのだが、今の時点で２０点も差がある。

「もー！秋人だけじゃなくて烈まで敵かよ！お前らほんっとずりー！！」

「何がさ」

烈は受け流している。

こうなった阿笠は手がつけられないというか面倒というか、とりあえず烈は流すようにしているらしい。

「いくつ才能持って生まれりゃ気ぃすむんだって話！」

「へー」
「流すな！」

烈も長年の付き合いのせいで阿笠の扱いには慣れている。

烈は漫画をパラパラめくり読みながら
「はいはい、何？」と言っている。

「もー良いよ！どうせ凡人の俺にゃ届かねぇしっ」

せっかく烈が尋ねたのに今度はプンプンと怒りながら自分を卑下している。

これもお約束だ。

ここで烈が、お前のどこが凡人なんだよと言ってしまうと話が余計にこじれてしまうことは烈には分かっている。

だが俺も凡人だよ、と言ってもダメなのでここではこう言うしかないのだ。

「ごめんよ。凡人じゃなくて」

基本的に今の阿笠に何を言ってもダメなのでとにかく阿笠の言葉に肯定しとけばなんとかなる。

これが４年半一緒にいて見つけた答えのようだ。

阿笠は阿笠でこのことなんか１時間後にはすっかり忘れている。

だからまぁ何を言っても覚えてないから問題はなく、とりあえず阿笠を正気に戻すしかない。

手っ取り早い方法は阿笠が言いたいこと言ってはやくスッキリすれば良い。

「本当だよ！ったくさー」

「まぁ良いじゃん。それでも毎日楽しいし」

「そうだけど～」

阿笠は飴を口に入れて舐め始める。

そのうち飽きたのかバリバリと噛み始めた。

「まぁ良い。明日でテスト全部返ってくるわけだ」

「んぁ？ああ、そうだな」

烈は教室の前のほうに貼られている時間割をチラッと見て同意する。
すると阿笠はフハハハハと不気味に笑い出した。
そうして烈を指差して自信満々な顔をしながら叫んだ。

「絶対総合点で烈に勝ぁーーつっ!!!」

阿笠は手を腰に当ててまた笑っている。
もう10月後半になるわけで、クラスメートたちも多少慣れてきているようで、見てみぬフリをしている。

多くて2ヶ月に1回くらいはこうなるからだ。
なにもなければ半年に1回くらいなのだが。

「俺に勝ったらお前も凡人じゃねぇってことじゃん」

烈は勢いでそう言ってしまったが、言った瞬間にハッとした。
近くにいたクラスメートたちも心の中で烈に
「バカ!」と叫んでいる。

たまに烈もやってしまうのだ。

そのまま肯定しとけば良いもののつい口が勝手に否定の言葉を言ってしまう。

「だからお前はだなー！」

こうしてまた長い長い阿笠のやさぐれが始まってしまうのだ。

クラスにいるクラスメート全員がはやく昼休みが終わるようにと祈っていることは言うまでもない。

結局阿笠は昼休み終了の鐘が鳴ったあとも教師が教室に入ってくるまで延々と言い続けていた。

そうして5限が終わり6限が始まって、秋人にとってはドキドキの時間になる。

文化祭で何をやるかは最重要なのだ。

サボりたい気持ち１２０％の秋人にとっては特に。

いくつか意見を出してその中から第１～３希望まで決め、クラス委員が委員会議でそれを発表する。

運良く他のクラスと重なっていなければ第１希望が通るというわけだ。

あまりにバカげているものや予算がかかり過ぎるものなどは発表した時点で生徒会から却下されてしまう。

とまぁ、一連の流れはこうなっている。

続々とクラスメートたちから意見が出され黒板に書かれていく。

お約束の劇、喫茶、射撃……

意見を上げるのは自由だから書ききれないくらいたくさん案が上げられている。

「ほら秋人ぉ、起きてないと変なのに決まっちゃうかもよ」

「いーよ、別に」
「女装喫茶とかあるけど」
「えっ！」

秋人は顔を上げてまじまじと黒板を見ている。

喫茶にもいろんな種類が出ていて、女装やらニューハーフやらチャイナやら何やらと恥ずかしいものがたくさん出ている。

「ばっ…かじゃねぇの」
「でもあたしはチャイナ喫茶やりたいな～。チャイナ服着たい」
「まじかよ。まぁ喫茶なら俺はキッチンだな。呼び込みでも良いや」

呼び込みという名のサボりのつもりだろう。

夏実はそう思ったが、それを口にする前に2人の席の周りに座っているクラスメートたちが一斉に言った。

「あっきーはウェイターだから！」
「まぁ呼び込みでも服着てもらうけどね」
「綺麗なお姉さん連れてきてくれー！！」

みんな口々にそう言うものだから、秋人は少しびびって一歩身を引いている。

秋人も何か言っているようだが、周りの声にかき消されてしまっている。

夏実でさえもみんなと同じことを言っている始末だ。

秋人の席周辺が賑やかなためクラス中の注目が集まる。

春樹や麻冬は傍観者のようにクックと笑いながらその光景を見ている。

そのうちようやくクラス委員が注意して、また項目決めが再開された。

嵐が過ぎ去って秋人は目を深くつぶりながらため息をついている。

去年はなんとか大道具で済まされたが、今年はきっと劇にしろ喫茶にしろ表舞台に立たされるんだろうな……なんて思いながら嫌そうな顔をしている。

だいたいクラスにこの４人が揃っていて４人が何もしないなんてあり得ない話なのだ。

客寄せには打ってつけだし、なんせ各部門で優勝したらクラスにパ

ン無料券が配られる。

「春樹何やりたい？」

春樹の前の席の男子が春樹に問いかける。

「そうだなー。俺カフェが良いなー」

「お。どの？」

「和洋折衷の奴。浴衣着たりドレス着たりタキシード着たりしたら絶対楽しい気がする」

「あ、良いなそれ！」

春樹がそう言っていると、その男子だけでなく近くにいた生徒たちも同意している。

そしてその案を誰かが発表すると、クラスメートたちも「良いかも」なんて言って賛成し始めている。

ただ秋人はかなり嫌そうな顔をして春樹を見ている。

春樹は秋人に向かってアッカンベーをしてちゃかした。

「秋人どっちが良い？」

「は?!」
「だからー、浴衣とタキシード」
なにやらもうそれで決定かのような流れになっている。
「どっちも嫌だ」
「春樹ー、あたし浴衣着たいから春樹も浴衣にして!」
秋人の言葉をかき消すように夏実は秋人よりも大きな声で春樹に向かって言った。
春樹はその言葉を聞いて、今度は麻冬に尋ねている。
「あたしはどっちでも良いわよ。夏実が浴衣着るならドレス着る」
「そっか!じゃ決まりだ!」
4人同じ系統を着るという選択肢はないようだ。
まぁ確かに4人が同じものを着てしまったら客寄せとしての効果も薄れてしまう。
だがおそらく彼らはそこまでは考えていない。

「ちょい！決まりって！俺タキシードとか着ねぇし！」

秋人は真っ向から否定するが、秋人の意見などもう耳に傾けられてもいない。

春樹がクラス委員にその旨を伝えると、和洋喫茶を第１希望にすることの多数決を取ることになった。

みんな浴衣着たりドレス着たりすることにノリノリらしく、結局反対者は１人だけだったので和洋喫茶に決定した。

おそらく他のクラスと重なることはないだろうから、第２・３希望は適当に選ぶ。

会議は明日の放課後に行われることになっているから、結果は水曜日に分かる。

意外にもすんなりと項目決めが終わったので６限終了まであと２０分ほど残っている。

残りの時間は自習という題目の自由時間だ。

不服そうな顔をしている秋人のもとに、麻冬をつれて春樹がやって来た。

「秋人ぶっさいく」
「ほっとけ」
「浴衣のが良かった？」
「ばか」

もう秋人も完全に諦めている。

浴衣やドレスやタキシードをどこから調達するかは会議が終わってから細かく決めることになるだろうが、まぁおそらく浴衣は時前だろう。

ドレスは専門店からレンタルするしかない。

かなり高くついてしまうが、そんなものは喫茶のメニューを少し高くして、あとは校長におねだりでもすれば良い。

４人の頼みを断るほど校長もバカではない。

「麻冬きっと白いドレスが似合うよ」
「白かぁ」
「麻冬のイメージだもん」

夏実は楽しそうに言う。

確かに麻冬といえば白いイメージがある。

名前が冬だからだろうか。

「秋人は黒派？」

「まぁ……白は似合わねぇだろうな」

「うはは。確かに」

春樹と秋人もそんな会話をしている。

なんだかんだ言って文化祭は楽しい行事の１つ。

みんなの士気が高まるのも当然のことである。

翌日クラス委員が会議に出席して発表したところ、予想通り他のクラスと重なることはなかった。

なので

和洋喫茶　決定。

next

第１２４話【５組の出し物】

和洋喫茶が決定したことが知らされたのは水曜の朝のＨＲのときである。

秋人ももうここまできたらやるしかないと、開き直っている。

文化祭まであと半月ほどだからみんな準備に取りかかる。

放課後は部活に入ってる人も多いから昼休みを中心に。

まぁ前日くらいになると最後の追い込みで放課後の部活はたいてい不参加になる人も多いものだが。

とりあえずまずはメニューを決めることから始まる。

そのあとセッティングに配役に衣装に予算に……と、やることは膨大だ。

「そうだ。明日ベリーズでやることになった」

「ん？」

「誕生日会」

話し合いをしている中、春樹と秋人は普通に全く関係ない話をして

いる。

「なんでベリーズ？」

ベリーズというのは麻冬の中学のほうにあるファミレスだ。

「誕生日にケーキ食べるとピザとかサービスしてくれるんだってさ」
「へぇ。あそこ何時までやってるっけ？」
「午前2時だったかな」

本当言うとみんな午前2時では物足りないのだが、まぁ木曜日だし次の日も学校や朝練があるからそこは仕方ない。

方面的にもそんなに遠いというわけではなく、しかもサービスがあると言うのなら拒否する理由もないだろう。

「じゃ部活終わったらみんなで集まる感じか？」
「だね。自主練するなんて言わないでよ」
「だってどうせ麻冬終わるまで時間あるだろ」

2人がそんな会話をしていると、ニョッと麻冬が入ってきた。

「木曜日だから部活ないわよ」
「あ、そうか」

というわけで、麻冬は1度家に帰ってベリーズで落ち合うということになった。

その後も相変わらずお喋りを続けている彼らに、ようやくクラス委員も注意をして話し合いに参加させた。

まぁ話し合いと言ってもメニューにしたいものをみんなで上げて、その中のどれを使うかを多数決で決めたりするだけなのだが。

6組は和洋喫茶で決まり、阿笠のいる5組は中華料理店をやることになったようだ。

隣のクラスが全く違うジャンルの飲食店をやるとなると、おそらく客争いが激しくなる。

とりあえず一般人に人気があるのは阿笠で、容姿からすれば烈も負けない。

だがやはり4対2ではかなり不利だろう。

5組も今の昼休みという時間を使って話し合いをしている。
服装はもちろんチャイナ服を着るんだろう。

「てゆーかさ、なんで中華？」
「まぁだ言ってる」

だが阿笠は何やら少し不服そうである。
まぁ中華と言っても中華まんや八宝菜やら回鍋肉やらそこらへんのものが出るくらいのものだけど。

「俺和服着たい。むしろ侍が良い」

中華料理店に決まってからも阿笠はずっとこんな調子だ。
多数決をしたとき反対したのは阿笠含めて数名で、阿笠以外の反対者の意見は面倒くさそう、とか予算オーバーなどというものだった。
面倒くさいというのは置いといて予算はなんとかなるということで中華料理店に決定した次第なのだ。

「もー。しょうがないだろ？決まっちゃったんだから」
「やだやだやだ！」

どうしても和服が着たいというのではなく、ただ単にチャイナ服が嫌なだけらしい。

キッチンなら着なくても良いが、阿笠も秋人たちと同じく宣伝部隊なのだ。

「委員長ー！俺キッチンじゃなきゃ参加しないから！」

阿笠は壇上にいるクラス委員にそう訴えている。

子どもみたいな阿笠の駄々にもうみんな慣れたように笑っている。

「阿笠。良い加減にしなさい」

「やぁだ！」

隣で烈がまるでお母さんのようになだめるのも、もう見慣れた光景でもある。

それでもどうしても嫌がる阿笠に、烈は諦めたのかついにこう言った。

「分かった。チャイナ服着なくても良いしウェイターもやらなくて

良いや」
「まじで?!」

その言葉にクラスメートたち全員が驚いた顔をしている。
いきなり何を言い出すのかと、声にも出ないほどの驚きだ。

「その代わり、お前七変化な」
「えっ?」
「あらゆることして客寄せしろ」

烈が阿笠に突きつけたものは意外なものだった。

ウェイターはなしでただの客寄せだけで良い。
ただしいろんな格好や行動をしろと、そう言っている。

阿笠は目をパチクリしながら
「どういうこと?」と聞き返している。

「とりあえず客さえ入りゃ良いんだ。なんでもしろ」

烈は意味深に笑っている。

「なんでも……」

阿笠は目線を上げて何があるかを思い浮かべている。

クラスメートたちはじっと阿笠を見つめたまま黙っている。

確かに客さえ入ればクラスにとっても問題はない。

今度は目をつぶって腕を組みながら考えること約1分、阿笠はパチッと目を見開いて言った。

「よーし！乗った！！」

「そうこなくっちゃ」

烈はニカッと笑う。

クラスメートたちは半信半疑だけど、結局阿笠は客寄せだけをやることになった。

もちろん客寄せは阿笠だけではないが、まぁほとんどの客は阿笠目当てだろう。

烈もウェイター兼客寄せをやることになる。

本番になればそのうちどうせ阿笠もウェイターを無理やりにでもやらされることになるだろうけど。

そんなことは全く考えもせずにただ服着たくないだけでそこまで喜べるとは可愛いものだ。

「なんか良い案あんの？」

烈と阿笠の近くにいた男子がニョキッと顔を出して尋ねてきた。

阿笠は当たり前だとでも言うようにアハハと笑っている。

「俺の得意分野で勝負すっから大丈夫」

「得意分野？」

「たっのしみー」

なにやら秘策はあるらしく、阿笠のテンションはかなり上がっているようだ。

もともと文化祭自体は好きのようだから客寄せすることには何の損もないらしい。

と、そのときクラス委員が
「6組に負けないくらい客集めるにはどうするかー」と言った。
5組の生徒全員あの4人が客寄せするに決まっていると分かっているのだ。

喫茶部門で優勝するにはどのみち6組は抑えなければいけない。

「えっ。何そんな心配してんの？」

なんとか良い案を出そうとしているクラス委員やクラスメートたちをキョトンとしながら見て、阿笠は平然と言う。

「え？って、だってあの4人がいるんだぜ」

クラス委員は少し驚きながら返答する。
阿笠はそんなことかとケラケラ笑いながら手を振る。

「だぁから任してって。俺と烈で客集められるから」
「ほ、本当にできんのか？」
「できるよー」

どこからそんな自信が来るのか分からないが、阿笠はもう勝つ気でいるようだ。

と、そのとき教室のドアがガラッと開いた。

「あ、やべ。話し合い中？」

秋人だった。

「どうしたの？」

阿笠が席から立ち上がって秋人に尋ねると、

「部活のことだけど後で良いや」と言ってドアを閉めようとする。

阿笠はそんな秋人を慌てて止めた。

「待った！秋人んち和洋喫茶やるんだって？」

「お？おう」

「俺んち中華なんだ」

すると秋人は一歩引きながら、お前チャイナ服着んの？と怪訝そう

に言う。

「ばっ……着るか！」
「え。じゃお前キッチン？」
「いんや」

阿笠の矛盾する言葉に秋人は
「はっ？」と聞き返した。

秋人の言葉なんて耳に聞こえてないかのように無視し、阿笠は秋人に近づいて行く。

そうしてニコッと意味深に笑う。

「残念だけど俺の勝ちかな」
「だから何が…」
「今に見てろ。俺の底力」

そして阿笠は左手を腰にあて、右腕を伸ばして人差し指で秋人を指差しながら訳の分からぬ宣戦布告をする。

「絶対勝つ！例え6組に負けても秋人だけにゃ負けねー！！」

またも暴走している阿笠にクラスメートたちは呆れを通り越して笑っている。

さすがの烈も手に負えないようで、もう見てみぬフリをしている。

そして阿笠はクルッとみんなのほうを振り向いた。

「ちょっとちょっと。なんでやる気ゼロなん」

不満そうにそう言う阿笠にクラスメートたちは困惑している。

秋人も手を額に当てて

「バカだこいつ……」とため息をついている。

秋人も付き合いが長い分阿笠の性格はよく分かっている。

「体育祭だって6組に取られたんだから文化祭くらい勝たなきゃ！」

「音楽祭勝ったぞー」

「だから気合い入れてくぞ！」

途中烈の言葉を阿笠はまたもや無視する。

無視するというよりは届いていないと言ったほうが正しいかもしれ

ないが。

「優勝すっぞー！！」

阿笠が左腕でガッツポーズしながらそう言うと、ところどころで「お、おー！」という声が聞こえてくる。

阿笠の考えていることはよく分からないが、優勝したいという気持ちはクラス一同同じのようだ。

阿笠さえやる気出してくれれば６組と張り合えることくらい、みんな承知している。

「声が小さい！」

みんなも阿笠に賭けているわけで、わざわざ阿笠のやる気を損ねる必要はない。

阿笠が拗ねながらそう言うと、今度はクラスメート全員が先程の阿笠と同じのようにガッツポーズをしながら叫んだ。

「おーーー！！！！」

秋人はその光景を見て自分のクラスと重ねている。

結局阿笠や烈の力で上へのしあがってくる様は、秋人たち４人の力で成り立つ６組と同じだ。

ただ違うのは、阿笠のやる気が大きいということ。

秋人も優勝はしたいものだがやはり張り合いがなきゃつまらない。

阿笠のおかげで６組の士気が高まっているのを見て、なんとなく笑えてしまっている。

ワイワイと楽しそうに喋っている阿笠を後に、秋人は教室に戻って行った。

next

第１２５話【誕生日会】

「コングラッチュレーション秋人～！！」

翌朝の木曜、秋人が朝練のため部室に入るとパンパーン！といくつか音を上げながらクラッカーが鳴り響いた。

そう、今日は秋人の誕生日。

「おー」

秋人は何と言葉を発したら良いのか分からずにいる。

そんな秋人に阿笠が近づいていく。

「はい。おめでと」

「さんきゅ。これ何？」

阿笠は秋人に誕生日のプレゼントを渡す。

秋人の質問に阿笠は、良いから開けてみてよと催促した。

言われるがままに秋人はそれを開いてみた。

何やら髪がくるまっているものでそれがビニール袋に入っているものだ。

だいたい予想はつく。

「あ！これ！」

カレンダーだ。

しかももちろんプロサッカー選手のだ。

「えー嘘！発売12月だろ？！」

「どうやって手に入れたんだよ阿笠？！」

秋人が開いたカレンダーを見て部員たちも驚きの声を上げている。

やはりサッカー少年だけあってみんな興味ありありの様子だ。

秋人の好きな選手や阿笠の憧れてる選手、有名な選手が載っている。

阿笠も秋人もバカみたいに毎年サッカー選手のカレンダーばかり買うのだ。

「それはさー、コネとかいろいろあるじゃん」
「お前そんなすごかったっけ?!」
「いや。ただ、俺阿笠大悟なんですけどって出版社に言ったら特別に売ってくれた」

いや、そんなはずないだろうとその場にいた全員が心の中で突っ込んでいる。

ただ阿笠は本気でそう言っているようだ。

そこにはこんな訳がある。

そのカレンダーの写真を撮ったのは夏だったが、そのとき記者が阿笠の憧れである武井選手と他愛もない話をした。

その中には阿笠の話が出てきて、阿笠にぜひプレゼントしたいと武井選手が言ったらしい。

その話を出版社側が覚えていて、先日阿笠が出版社に電話したときに快く販売してくれたようだ。

もちろん内密だし他の人にバレたらまずいけれど。

阿笠は幸運だった。

おまけに自分の分もついでに買っている。

「あ、他の奴らにはシーな。バレたらやばいから」
「お、おう」

みんな阿笠に突っ込みたいことがたくさんあるようだが、言葉にできずにいる。

それでもやはり嬉しいもので、秋人も素直に喜んでいる。

「ありがとな、阿笠」

カレンダーとは言っても4~5千はする。

バイトもしていない普通の高校生にはなかなかの値段である。

それでも軽くポンと買ってあげれるとはすごい。

そうして2人を含め部室にいる部員たちでワイワイ賑やかに着替えながら各自グランドへと出て行った。

朝練が終わり教室へ行く途中の下駄箱で、廊下で、階段で、そして教室でも彼はいろんな人から祝福される。

男子はもちろん気軽に言ってくるし、女子の中にはプレゼントまで用意している人までいる。

秋人のまったく知らない人からのプレゼントだが、もらえるものはもらっとこうと秋人は躊躇せず受け取っている。

やはり人気者の宿命であろうか、教室に着くまでにもらったプレゼントは片手の指以上である。

「やほー。おめでと秋人」

教室に入ってきた秋人に気づいた春樹が軽く手を振りながら近づいてくる。

「おう」

それから夏実、麻冬も同様にワラワラと寄ってくる。

プレゼントは夜渡すことになっているから、今はおめでとうと言うだけのようだ。

秋人にとってはある意味運命の分かれ道のような日である。

17歳になることなんてはっきり言って何の意味もない。

ただ今日という日は、麻冬からの返事がもらえる日なのだ。

秋人のあの言葉で麻冬がどうでるか……

それによって否かどうかが分かるのだ。

正直秋人は昨日の夜からたいして眠れなかった。

どんな返事がくるのか、拒否されてしまうのかどうなのか、不安と期待でいっぱいなのだ。

秋人の意志ははっきりと伝えた。

大事な相棒である阿笠を差し置いてでも手に入れたいと、そう言った。

あとは麻冬の気持ちだけである。

自分の気持ちを押し殺して阿笠と付き合い続けるか

それとも阿笠を傷つけてでも自分の気持ちを優先させるか。

どちらを選ぶもその身1つまで。

秋人の未来も

阿笠の恋も

すべては麻冬に託されている。

秋人にしてみれば、麻冬は初恋の人である。

だが阿笠にしてみても麻冬は初恋の人である。

初恋は実らないとは言うが、どちらに転がってもその諺は嘘となる。

麻冬がどちらとも付き合わないと言わない限りは。

秋人と麻冬の仲は未だにギクシャクしている。

麻冬も必死に笑おうとするが、その作り笑いが余計に秋人を切なく

させるのだ。

秋人も極力麻冬に近づこうとはせずにいる。

想いは1つなのに、気持ちは伝わっているのにすれ違ってばかりの2人。

ぎこちない態度を取る2人に春樹はもう何も言わなかった。

きっと、言ってどうにかなるものではないことを知っているから。

それに秋人になんか言ってしまえば、どっちの味方もしないという春樹の言葉は嘘になってしまう。

もうここからは当人たちの意志だけの世界だ。

たとえそれが悲しい結末を迎えたとしても、すべてはそうなる運命。

運命すら逆らうというのなら、ぜひ変えて欲しい。

放課後になると、麻冬を除いた3人は部室へと向かう。
部活のない麻冬はそのまま帰宅することになった。

一度家に帰ろうかとしたが、帰らずに家の近場にある花屋へと向かった。

花の匂いが充満していて、少し息苦しい。

麻冬は店内をキョロキョロと探していた。

「何かお探しですか？」

店員が近寄ってきた。

麻冬は、友達にプレゼントしたいんですと店員に告げる。

すると店員は、両手のひらサイズの小鉢の花を勧めてきた。

「プレゼントにはこちらのものが可愛いですよ。ラッピングもいたしますし」
「あ、本当だ。可愛い」

ピンクの花や黄色い花。

パンジーやらなんやら、たくさんの種類がある。

「どれになさいますか？」

どうやら麻冬は秋人に花をプレゼントするようだ。

……秋人の告白を断るということだろうか。

それとも、花と一緒にオーケーするのだろうか。

それは麻冬にしか分からない。

「あの、――――っていう花言葉の花この中にあります？」

数時間後、部活を終えた秋人・春樹・夏実は駐輪場で落ち合い、一緒にベリーズへと向かう。

夏実が麻冬に、今から3人でベリーズに行くとメールを打ったようだ。

そのメールを受け取った麻冬は、その画面をじっと見つめて覚悟を決め、携帯をパチンと閉じた。

そうして先程購入した花を見つめて、１０分くらいしてからその花を持って家を出た。

麻冬のほうがはやく着き、３人を待つ形になる。

時間的にももう客もそんなにいなく、どうせそのうち４人だけになってしまうだろう。

夜中までやるため、まさか制服でなんて来れるはずもなく麻冬は着替えてきている。

秋人たちは制服の上をＴシャツやらパーカーやらにして誤魔化すようだ。

秋人の生年月日を確かめるために身分証明書を見せるが、まぁ生まれた年のところは持つ指で上手く隠したりすれば良いし、もしくは店員も年数までは確認しないだろう。

暇を持て余している麻冬は適当に携帯をいじっている。

待つこと数分、ようやく3人も到着してきた。

「おまたせーっ」

「あ、お疲れ。3人とも」

みんなテーブルについたところで、さっそく注文をし始めた。

予約していた誕生日ケーキと、それにサービスとしてつくスパイシーピザ、チキン。

それからサンドウィッチの盛り合わせにオードブルを頼み、最後にドリンクバイキング。

手始めとしてそれらを注文することになった。

そうしてお待ちかねのプレゼント渡しに移る。
まずは春樹だ。

「はい。開けて開けて」
「さんきゅ」

春樹にせかされて開けてみたところ、中身は手袋だった。

「お、良い色だな」
「でしょ！冬になったら使ってね」
「おう」

綺麗な紺色の毛糸の手袋。
とても温かそうで秋人にもよく似合う。

座っている順番的に次に渡すのは麻冬だ。

麻冬は一瞬うつむいて目を深くつぶり、それから秋人にプレゼントを渡した。

「…麻冬……」

秋人はプレゼントを渡されて、唇を噛み締めている。

麻冬以外はいらないと言ったあの言葉への返事。

みんながいる前だからだとかは考えずに、これが麻冬の結論なのだと秋人は気づいた。

秋人がまどろっこしいことを嫌うことは麻冬もよく知っている。

もし返事がイエスならその場で麻冬が告白するはずだった。

「秋人、開けないの？」

不思議そうに夏実がそう言ってきたから、秋人は慌てて袋から中身を出した。

可愛くラッピングされたオレンジ色の花。

それを見た春樹は目を丸くしながら麻冬に言った。

「麻冬！あれっ――」

だが、春樹の瞳に写ったのは切なそうに微笑む麻冬の顔。

一瞬にして春樹は、春樹がその花から読み取った意味とは逆の意味なのだと気づいた。

意味を知ってしまった春樹は、一歩引いて遠目で花を見る。

「何？この花がどうかした？」

「あ…ううん」

秋人にそう聞かれても、春樹は愛想笑いをしながら首を振るだけ。

疑問に思いつつも、あまりもう突っ込みたくないものだから秋人も流した。

そして逃げるように、夏実からのプレゼントをさも嬉しげに喜んで受け取った。

夏実が渡したものは、限定品のＴシャツだった。

悪夢のようなプレゼント渡しが終わる頃に、運良く注文したものが届き始めた。

本当運が良い。

そのままご飯がこなかったら気まずい空間でいなくてはならなかった。

花の意味を知ってるにしろ知らないにしろ、どっちみち秋人への返事はノー。

もう、それだけで十分だった。

そうして3人は、気まずさを見せないがごとくわざとテンションを上げて、夏実を含め4人で盛大に盛り上がる誕生日会になった。

それぞれに交差する想いを抱えながら。

next

第１２６話【花言葉】

「あ、じゃあ俺麻冬と夏実送ってくから」

閉店時間になって、４人は帰る支度を始めた。

「え……でも」

春樹のその言葉に秋人は戸惑う。

ここからなら麻冬の家は秋人んちからも春樹んちからもあまり変わらない距離にある。

「あ、あたし良いや。康介からメールで今近場にいるから来てくれるって」

「康介夜遊び？」

「かな？珍しいよね」

どういうわけか康介が来てくれることになったから、春樹は麻冬だけを送って行くことになる。

秋人は気まずさを隠せずにいて、それは麻冬も同じだ。

内心2人とも春樹がそう言ってくれて良かったと思っている。

特に秋人は、初めから断るつもりでいた麻冬よりもショックが大きいはずだ。

ほんの数%でも期待していたのなら。

4人がベリーズを出ると、康介が空を見上げながら待っていた。

「あ」

康介は4人に気づくと、タタッと駆けてきた。

夏実ではなく麻冬のもとへ。

「麻冬姉っ」

そういえば前に康介が麻冬にある頼みをしたことを覚えているだろうか。

モテモテの康介だからこその悩みなのだ。

「こないだありがと。おかげで彼女たちもう何も言ってこない」

康介はヒソヒソと麻冬に話す。

「本当？良かった。彼女たちどう？」

「なんか現実逃避してる」

「あはは、そうよね。でも康介に彼女できたって噂広まったりしてない？」

「平気。２人とも悪い夢だって思ってるみたい」

それもまたすごいが、まぁ康介だからなんとなく分かる。

２人は他のみんなに聞こえないくらいの声でコソコソ話して、そのあと康介は夏実と帰って行った。

どうやら康介は歩きだったようで、夏実の自転車に２人乗りして行った。

それから麻冬と春樹も一緒に帰り、２人とは反対方向の道へと秋人も帰って行った。

バラバラになる。

バラバラになって、何を思うだろうか。

空を見上げて何を思うだろうか。

一番星さえ輝いていない真っ暗な空を見て、何を考えるのだろうか。

きっと誰も、誰かが誰かを思って泣いて、そして悲しんでいるなんて思わない。

切なさだけが浮かぶ空間。

「……春樹。ごめんね」
「ん？」
「気づいたんでしょ？あの花」
「……そうだね」

春樹と麻冬は自転車で並列走行している。

こんな真夜中に走る車はほとんどいない。

「秋人に……ってそういう意味かと思ったよ」
「そっか……そういう意味にも取れるね」
「麻冬はそれで良いんだ？」
「たぶん……って言ったら怒る？」
「怒らないよ」

春樹は前を見据えながら口元は少し微笑んでいる。

「麻冬の意志ならなんだって良い」

麻冬はそう言われると罰が悪くなってしまう。

意志というより、それしかできなかったと言ったほうが正しいか。

秋人を好きな気持ちは未だに変わらないし、両思いだと知った今嬉しくもある。

けれど、あんなに堂々と秋人の前で交際宣言をしてしまった手前…
…という気持ちもある。

結局は阿笠を振りきれなかっただけなのだ。

「……阿笠も秋人も…自分も傷つけてこんな結果って、本当最低だと思う」
「なら秋人のほうに行けば最低じゃなかった？」
「……」

痛いところを付かれて麻冬は黙り込む。

確かにどちらに行ったにしても誰かが傷つくことは変わらない。

それならいっそ

「どのみち誰かが傷つくんだったら、自分の気持ち尊重すれば良いんだ」
「そんなこと……」
「だってきっと2人は麻冬に同情されることなんて望んでない」

麻冬は顔がカァッと赤くなる。

春樹はチラッと横目でそんな麻冬を見て、また視線を前へ戻す。

春樹にだって麻冬がなぜ阿笠を選んだかなんて分からない。

けどそれでも、幸せになって欲しいという気持ちは同じ。

結果なんてまだ誰にも分からないし、見たくもない。

ただ、そうして出された結果がたとえ悪いものだったとしても、後悔だけはして欲しくない。

その道を選んだ結果がそんなものだったとしても、またそこからやり直すのだ。

そしてようやく輝かしい未来に踏み込めたとき、あのとき一度間違ったから今の自分があるのだと、そう思って欲しい。

間違いをしろと言っているわけではない。

ただ、間違えてしまってもたとえそれが遠回りだとしても、それは決して無駄なことなんかじゃなかったのだと笑って欲しいだけ。

きっと悲しいことばかりだろう。

それでも１００の悲しみを経て掴んだ１つの喜びは、最大の幸せになる。

そのことをどうか胸に刻んで覚えていて欲しい。

そう願う。

「あ、お帰りぃ。秋人」

秋人が玄関から入ると、ちょうど風呂上がりの茉李亜がいた。

「おう」
「誕生日プレゼントだ！見たい見たーい！」
「わーったって。部屋でな」
「やった！」

どうやらさっきまで佑亮がいたらしい。

泊まってけば良いものの、明日提出の課題があることを思い出して急いで帰ったようだ。

茉李亜も佑亮も順調に恋愛をしている。

2人は秋人の部屋へ行き、茉李亜にせかされて秋人は一度開いたプ

レゼントをもう一度開いた。

茉李亜はまず始めに夏実からのプレゼントを開け、次に春樹のを開けた。

夏実のくれた限定品の服はどうやら知る人の中ではけっこう価値のあるものらしい。

茉李亜もその手の人のようでかなり羨ましがっている。

そして最後に開けたのは麻冬からのプレゼントだ。

茉李亜はその花を見るなりこう言った。

「あれっ、トウワタだ」

茉李亜はじろじろとその花を見ている。

そうして、プレゼントには珍しい花だなぁ……とポツリと呟いている。

そんな茉李亜を見て、秋人はさっきの春樹の態度を思い出す。

この花を見た瞬間驚いた顔をしていた。

秋人は思わず茉李亜に尋ねた。

「ま…茉李亜、この花ってなんか意味とかある？」

「意味？あ、花言葉か」

茉李亜はトウワタをチラッと見て軽く笑いながら言った。

「トウワタはね、『行かせてください』とか『心変わり』って意味があるよ～」

その言葉を聞いた瞬間、一時秋人の時間が止まった。

すべてが繋がった瞬間だった。

麻冬が自分ではなく阿笠を選んだ決定的な証拠だ。

秋人はまだどこかで期待している気持ちがあった。

たとえ麻冬が、秋人がまどろっこしいことは嫌いだと知っていても、どこかでまだ、花をくれたのは手前味噌だと信じていたかった。

プレゼントを用意された時点で可能性はゼロだと分かっていても、それでももしかしたらこの花には特別な意味があるかもと思いたかった。

麻冬のことが

こんなにも、こんなにも

大好きだから。

「秋ちゃん？どうかした？」

黙ってうつむく秋人に茉李亜は不思議そうに尋ねた。

秋人は今にも泣きそうな震える声で茉李亜に言う。

「……1人にしてくれ」

「えっ？」

「悪い。出てって」

いきなりの言葉に茉李亜は冗談だと思い言い返そうとするが、秋人の異変を感じて茉李亜は大人しく秋人の部屋から出て行った。

時は真夜中。

静まり帰る家の中で、茉李亜が自分の部屋のドアを開け閉めする音が鳴る。

秋人は花を見つめたまましばらくボーッとしている。

オレンジ色のトウワタの花が目に写る。

その花には何の罪もないのに、抑えきれない憤りを感じる。

そしてそれと同時に、好きな人と結ばれないという事実を悲しく思う。

両思いなのに

好きあってるのに
すぐ傍にいるのに

「あー……くそ……」

秋人は両手で顔を覆いながら仰向けに寝転んだ。

どれだけ春樹に励まされたって、結果が出てしまえばもうどうすることもできない。

ただただやり場のない悲しみをぶちまけるしか、それしかないのだ。

初めての失恋

秋人にとって、生まれて初めての恋は辛く切ないものになった。

どれくらいの時間が経ったか分からないが、秋人はいつまでもその状態で居続けた。

時折手の間から見える透明の液体が流れてカーペットに落ちては染み込み落ちては染み込んで行った。

next

第１２７話【寂しさの余韻】

「……」

家へ着くなり麻冬はすぐさま部屋へ駆け入り、座椅子に寄りかかりながらボーッとしている。

珍しく音楽もかけずに、テレビを見るわけでも携帯をいじるでもなく、ただただ何かに呆然としている。

もう涙すら出ずに、……違う。

涙を流さないようにしているのだ。

自分で決めたことで秋人を傷つけることになるのに、自分が泣くのは筋違いだと思っている。

「……電話…？」

麻冬はカバンの中で携帯が鳴っているのに気づく。

誰からの発信かも見ずにだるそうに携帯を取って電話に出た。

『あ、俺』

「……阿笠？」

阿笠だ。

もう3時を過ぎているというのに、電話の相手は彼氏。

『もう終わってる？』

「……うん。1時間くらい前に」

『そう。俺さ、どうしても麻冬に聞きたいことが……』

電話を耳に当てながらも麻冬はボーッとしている。

電話越しの阿笠の声が遠くなるように。

まさかのまさかだ。

まさか阿笠から今このタイミングで電話をかけてくるなんて思ってなかっただろう。

だが阿笠は今このタイミングを狙って電話してきたのだ。

『麻冬？』
「あ……ごめん。何？」
『眠い？』
「平気よ。大丈夫」

麻冬はハッとして慌てて返事をしている。

なぜ麻冬が秋人に花を送ったのかと言うと、春樹や茉李亜のように花の知識なんて麻冬も秋人にもないわけだ。

他のプレゼントを無意味にあげるよりも、花に何か意味を込めて送ったほうが良いと思ったようだ。

たとえ秋人が知らないとしても、誰かに聞いてその意味を知るかもしれない。

直接言葉で言えない麻冬の精一杯の断りだった。

――あの、ごめんなさいっていう花言葉の花この中にあります？――

麻冬にそう尋ねられた花屋の店員は花を見回して、うーん……と考

えこんだ。

――どういう意味のごめんなさい？――

――えっと……たとえば告白を断る感じとか――

――あ、なるほど――

季節的なことも関係してあまりそういった意味の花はないらしく店員は少し困惑していた。

麻冬は可愛らしい花を見つめて、ただただ秋人のことばかり考えていた。

薔薇の花束でも贈れたらどんなに素敵だろうか。

なぜこんな哀しい気持ちで哀しい花を贈らねばならないのか。

花に罪はない。

けれど……

――あ、お客様。こちらの花はどうですか？――

――これ？――

――ええ。トウワタといいまして、花言葉は「心変わり」という――

麻冬は心変わりという言葉にピクッとする。

心変わりと言うのか、なんなのか……

悶々としている麻冬に店員は付け加えて言った。

――そうだ。

「行かせてください」って意味もありますね――

麻冬はその言葉を聞いて店員のほうを振り向いた。

そうしてもう一度花をじっと見る。

行かせてください

まさにその通りだ。

ごめんなさい、よりも今の麻冬にピッタリだ。

麻冬は迷うことなくすぐさまその花を購入した。

店員はその花を可愛くラッピングしてくれるけれど、内心どうせ悲しませるなら可愛くなんてしないほうが良い、と思っていた。

それでもそんなこと言えるはずなく、麻冬はプレゼント用に包装された花を持って家に帰って行った。

『何かあった？』

阿笠は元気のない麻冬にそう尋ねる。

「そんなことないわよ。ちょっと騒ぎすぎただけかも」

『なら良いけど』

麻冬は阿笠に心配かけないためにそう言ってみせた。

そんな嘘なんて阿笠には簡単に見破られるに決まっているというのに。

『今外出れる？』

「今？」

『麻冬んちの前にいるんだ』

そう言われ、麻冬はすぐさま勢いよく立ち上がって窓のカーテンを開いた。

麻冬の部屋の真下に携帯を耳に当てながら阿笠が立っていて、目が合った。

阿笠は麻冬の顔を見て少し微笑みながら軽く手を振る。

麻冬は携帯を投げ捨てて階段を駆け降り、阿笠のもとへ走って行く。

バタバタと足音が響いて寝ている両親を起こしてしまいそうな勢いだったが、今の麻冬にはそんなことを気にする余裕はない。

乱暴に玄関を開けて麻冬は外に出た。

「阿笠……っ…」

麻冬は阿笠の姿を見てとても驚いている。

まさか来てくれてるとは思わなかったのだろう。

「は、入って来てくれれば良かったのに」

「んー、でも夜中だし」

阿笠はなぜかまだ制服を着たままで、夜中にYシャツ1枚はさすがにもう冷える。

麻冬ははおっていたカーディガンを阿笠に渡すが、阿笠は大丈夫と言って受け取らない。

「聞きたいこと、やっぱ直接聞きたいから」

どうやら阿笠は今まで烈の家にいたようだ。

烈の家を出て歩きながら麻冬に電話をかけていた。

「あ……聞きたいことって？」
「麻冬さ、秋人に告られたんだろ」
「えっ」

阿笠は単刀直入に言った。

麻冬は阿笠に知られてるとは思っていなかったから、目が飛び出そうなほどびっくりしている。

「なんで知って……」
「月曜の朝秋人と話してんの聞いちゃった」

麻冬は月曜の朝練のあと秋人とした会話を思い出して、思わず口に手を当てている。

「……今夜結論が出るんだろうって思って」

阿笠は辛さを隠すかのように笑ってみせている。

「散ってしまうと分かってもやっぱ麻冬に言いたくて」

阿笠は真っ暗な地面を見つめながらそう言う。

秋人に背中を押されて麻冬と付き合うことになったのに、まさか秋人に麻冬を奪われることになるなんて……と、歯がゆい気持ちでいる。

それでも、簡単には引き下がりたくないから阿笠は振られると思ってもこうして会いに来た。

「俺麻冬が秋人を選んでも絶対追いかける。振り向いてくれなくても、頑張るよ」

そう言って阿笠ははにかんだ。

いつだって相手のことばかり思ってしまう阿笠の、初めての自分優先の意志。

阿笠にとってそれはものすごく勇気のいることで。

この上ない頑張りで。

「……散ってなんかないよ」

麻冬は阿笠の笑顔にいたたまれなくなり、視線を下にずらす。

そして、え?と聞き返した阿笠に向かって言った。

「秋人とは付き合わないよ。断ったの」

「……え?!」

「あたし阿笠の彼女だもん」

阿笠は予期していなかった出来事に驚きを隠せずにいる。

「なんっ……だって…!」

「阿笠あたしを幸せにしてくれるって言った。守るって約束してくれた」

「だけど……」

決して秋人と付き合って欲しかったわけではない。

麻冬が自分を選んでくれて嬉しい気持ちもちゃんとある。

でも１００%絶対に別れることになると思っていたから、その驚きの反動はかなり大きい。

「……あたしに気づいてくれたのは阿笠なの」

そう言って麻冬は阿笠に抱きついた。

阿笠はどうしようか一瞬迷ったけど、もうそれ以上何も聞かなかった。

阿笠は抱きついてきた麻冬を抱きしめる。

「本当……バカだよ。麻冬」

振り向いて欲しいけど、こんなことを望んでいたわけではなかった。

阿笠は、ちゃんと自分を見て好きになって欲しかったのだ。

秋人から逃げる道具ではなく、ただ1人の男として。

「バカでごめん……」

麻冬は阿笠を見上げる。

見つめ合う2人、そのままキスをした。

秋人を傷つけてまで阿笠を選んだのに切ない気持ちでいっぱいの麻冬の想いと

同情なんかで付き合ってほしくない阿笠の想いが重なり合う。

愛情表現のはずのキスなのに、寂しい気持ちばかりが流れていた。

next

第１２８話【親友】

阿笠はキスをしたあと、何も言わずにそのまま自分の家へと帰って行った。

麻冬は阿笠が見えなくなるまで阿笠の背中をじっと見つめていた。

もうこれで2人何も怯えることなく一緒にいられる。

誰からも何も言われずに、好きあっていられる。

なのに、何も語らないその背中は、その背中を見つめる瞳はより一層悲しみを物語っていた。

翌朝、眠れなかったのか秋人はいつもより４０分もはやく学校に来ていた。

阿笠もまたいつもより３０分ほどはやく来た。

先に着替えている秋人がいる部室に阿笠も入り、２人は目を合わせた。

「あっ…きと……」
「あ…阿笠……」

それはびっくりするだろう。

お互いこんなにはやく学校来るとは思っていない。

動揺しながらも阿笠はとりあえず部室に入る。

「なんだよ……眠れなかったのか」

着替え終わった秋人がロッカーの中に荷物を入れながらそう言うと、阿笠は荷物をベンチに置いて言った。

「それは…お互いさまだろ」

阿笠は罰の悪そうな顔をしている。

秋人は阿笠にそう言われ、阿笠の顔を見た。

「知ってんのか……」
「……昨日夜中に麻冬と会ったんだ」

阿笠は決して秋人のほうを見ようとはしない。
見てしまったら堪えきれなくなってしまいそうだから。

あまり寝ていないせいで目が赤い阿笠と、泣いていたせいで目が赤い秋人。

「だったら……喜べよ。素直に喜べよ」
「無理だよ」
「なんでだよ」

2人して震える声で話している。

「喜べるわけないじゃん」

眉間にしわを寄せてグッと堪えている阿笠を、訴えるような瞳で見ている秋人。

「お前がそんなんだったら俺どうすりゃ良いんだよっ……」

秋人は渾身を込めて言う。

「……お前が嫌な奴になってくんなきゃ皮肉も言えねぇよ！」

秋人は手をギュッと握りしめる。

本当は阿笠の胸ぐらを掴んでやりたい気分だけど、一番幸せなはずの阿笠がこんな状態だから秋人はそんなことはできない。

阿笠が幸せいっぱいだって顔をして今日来てくれれば、頬を一発殴ってそれでスッキリしてまた仲良しの2人に戻れるというのに。

秋人と同じように泣きそうな顔をしているものだから……

「皮肉……言ってよ」

「あ…？」

「結局麻冬は情に流されてるだけだよ。俺、十分嫌な奴だよ……」

阿笠は灰色のロッカーを細目で見つめている。

ボソボソと話すその言葉を秋人は聞き漏らさずにいる。

「こんなこと…望んでたんじゃないよ。だって麻冬は秋人を好きなままだ」
「……でもお前を選んだじゃねぇか」
「だから同情だって！」

阿笠は肩に力を込めて思いきり叫ぶ。

それでもなお秋人のほうを振り向こうとはしない。

「もしそうだとしても、結局俺への気持ちよりお前を守りたい気持ちのほうが強いってことだろ」
「守るって約束したのは俺なんだ……」
「同じだろ」
「同じじゃないんだってっ…」

阿笠はドンッ！とロッカーを叩く。

結局悪い風に言ってしまえば阿笠は麻冬に秋人を選んで欲しかったのだ。

そこからまた、一から麻冬にアピールして今度こそ自分自身を好きになってもらった上で付き合いたかった。

所詮人生はシナリオ通りにはいかないものだけど、一番望んでない結果に悔やみ切れない。

「……ごめん。秋人が一番辛いよね」

阿笠はロッカーから手を離して、ようやく秋人のほうを振り向いた。

無理やり笑おうとして不自然な笑顔をしている。

悲しみを堪えているその瞳から今にも溢れんばかりの雫。

「俺……バカだね。秋人に言うことじゃないのに」

「阿笠…」

「ごめん秋人。忘れて。それから……他にもごめん」

そうして阿笠は着替え始めた。

秋人はいたたまれなくなって、先に部室を出る。

倉庫からボールを取って、リフティングを始める。

まだ他に誰もいないグランドでボールを蹴る音が響く。

３０回ほど連続してリフティングしたところで飽きたのか、秋人はボールを止める。

そうして真っ青な空を見上げた。

普通ならば気分がスカッとするほどの晴天なのに、今は全然スカッとしない。

空に浮かぶ羊雲を見ては、ため息を漏らす。

そしてその場に尻をつけて座り込んだ。

片膝は立てて片膝は伸ばす。

それから頭をクシャクシャとかいて、あ〝ーーーっ!!と声を上げる。

「くっそ……バカ阿笠!」

秋人はやり場のない気持ちを空にぶつける。

どうしようもなく、どうにもできない悔しさを抑えきれない。

秋人はそのまま後ろに背中を倒して仰向けになった。

視界にはもう空と雲しか写っていない。

時折見える飛行機雲や鳥。

「なにが秋人が一番辛いよね、だ……」

秋人はポツリと呟く。

さっきの阿笠の顔が頭から離れないようだ。

「お前が一番辛そうだっつの……」

秋人は強い。

確かにいろいろな壁にぶつかってきたけれど、いつだってたとえ自分の心を押し殺してたとしても生きてきた。

佑亮との出会いで人生変わったことも確かだけど、強いというのは言い過ぎかもしれないけど

けれど阿笠ほど弱くはない。

「ったく……泣きたいのは俺のほうだっつーのに」

本当ならこの空にだって埋めきれないくらいたくさん泣きたい。

それでも阿笠が悲しそうだから、秋人は泣くに泣けない。

本当秋人の言う通り阿笠が嫌な奴になってくれれば良いのに。

そうしたら秋人は嫌ってほど愚痴を言えるし八つ当たりだって出来る。

「……同情……ねぇ」

独り言が絶えない。

複雑な思いを抱えながら秋人は空を見ては目を閉じる。

「やっぱ同情かなぁ」

「さぁな……どっちみちあいつは阿笠を選……あっ？」

いきなり秋人の視界に春樹の顔が入ってきた。
秋人は勢いよく上半身を起き上がらせる。

「春樹！おまっ……」
「おは。いやぁ、秋人のことだからきっとはやく学校来ると思って」

春樹は今来たところのようで、まだ制服を着ている。

ポケットに手を突っ込みながら春樹は秋人を見下ろしている。

「……お前は分かってんだもんな」
「ああ、あの花ね」
「やってくれるよな……麻冬も」

秋人はあぐらをかく。

春樹は側に転がっているボールを見つけて、さっきの秋人のようにリフティングをし始めた。

サッカーをやってなくともやはり並の運動神経ではない春樹だからリフティングくらいはお手の物のようだ。

軽々とやってのけている。

「落ち込んでる秋人を励ましに来たんだよー、俺」

春樹はリフティングしながらそう言う。

秋人はそんな春樹に言った。

「落ち込んでんのは阿笠のが重症だぞ。あいつヤバイ」

「へぇ。阿笠がねぇ」

「あいつがあんなんだから俺グレらんねぇっつの…」

そうして秋人は立ち上がって、全身についた砂をはらう。

春樹はリフティングをやめて、秋人の足元にコロコロとボールを転がした。

秋人の足にボールが当たり、秋人はボールに気づく。

「阿笠には烈がいるじゃん」

「え」

「だから秋人には俺がいるんだよ」

春樹はベッと舌を出しながら可愛らしく言う。

秋人は少しうつむいて右手で前髪をくしゃっとする。

「バカ……」

口ではそう言っているけれど、秋人は今にも泣きそうな顔をしている。

春樹はニッコリ笑ってクルッと向きを変えた。

「あ。やーっぱり」

春樹は部室のほうを見ながらそう言った。

烈が部室に近づいて行っている。

烈は春樹の視線に気づき、軽く手を振った。

春樹も手を振り返すと、烈は今度は何やら部室を指差している。

春樹が嬉しそうに大きく頷くと、烈はサッカー部の部室に入って行った。

ほら、やっぱり春樹の言った通り阿笠には烈がいる。

秋人がどれだけ阿笠に何かを言うよりも、春樹が励ますよりも何より親友の烈の言葉が一番の薬となる。

「秋人、遊ぼうよ」

春樹は秋人に近づいて転がっているボールを蹴り上げる。

「はぁ……少しだけだぞ」

親友の存在がこれほどにも大きいことを実感する。

ただ一緒にいるだけで楽しくて、ただ一緒にいることが当たり前になってるこの関係は、とても尊いものだと思う。

友達のために朝早起きしてまでこんなことするかと聞かれると答えられないが、それでも彼らはやっている。

自分の時間なんて惜しくないくらい大切に思っている。

それはこの先どんなものよりかけがえのないものになることを、彼らはまだ知らない。

next

第１２９話【親友２】

阿笠は着替え終わったあとただただ部室の中で椅子に座りながらボーッとしていた。

それこそ烈がすぐ隣にいることに気づかないくらい。

結局５分くらい経ったところで烈は阿笠の目の前でパン！と手を叩いた。

我に返った阿笠はようやく烈の存在に気づく。

「れ…烈？」
「よ。おはよ」
「あれ……なんでここに」

今日なんかもう厚手の柄のついたセーターを着てきている。

しかもウサギの絵の、だ。

前の春樹と同じくらいタチが悪い。

セーターはジャンパー式になっていて前を開けている。

一応下にシャツとネクタイはつけている。

「もうさ、悩んだって仕方ないよ」
「え…」
「だって阿笠は麻冬を切れないだろ」

烈は部室のグランド側の窓を開けた。

そこから秋人と春樹が遊んでいるのが目に入る。

その光景には阿笠も気づいた。

「例えばそれが仮に同情だったとしても、麻冬と付き合うことに変わりはないよ」
「……でも」
「……麻冬は月影と両思いなのを知ってる。それでも麻冬はお前を選んだ」

烈はグランドにいる2人をじっと見つめている。

さっきのことなんてもう忘れたかのように、楽しそうにじゃれあっている2人。

きっと、必要なのはそれでも前を見る向上心。

きっと、大切なのは一歩を踏み出す勇気。

「頑張るって言ったじゃん」

烈は阿笠のほうを振り向く。

阿笠はうつむきながら指をからめている。

「振り向かせるために頑張れるなら、今度は麻冬に同情なんかじゃなく好きだから付き合ってるんだって言わせてみてよ」

烈は少しだけ微笑みながらそう言った。

阿笠は顔を上げて烈のその表情を見上げた。

「弱音ならいくらでも聞くよ。でも泣き言は聞かない」

「烈……」

「たまには自分のワガママぶつけてみろよ」

そして烈は、グーにした左手を胸に当てて付け加えて言う。

「全力でやって生まれた結果は絶対後悔しない」

すると、ようやく阿笠はポツリポツリと話し出した。

「俺さ、辛いはずの秋人に不満言っちゃったんだ……」
「うん」
「秋人は……俺が嫌な奴だったら良かったって言った」
「うん」
「……絶対俺を責めたりしないんだ」

すると烈は、座っている阿笠の前でしゃがみこみ、阿笠の顔を見上げた。

「大丈夫。月影は」
「……？」
「あいつには春樹がいる。だからへコたれたりしない」
「そ…かな」
「部室出たときは元気よく話しかけろ。絶対大丈夫」

そう言う烈に阿笠は首を振る。

「そんな無神経なことできな……」
「あいつはそう望んでんだって」

烈にそう言われて阿笠はハッとする。
さっきの秋人の言葉をもう一度頭の中で繰り返した。
ようやく気づいた。
きっと自分が逆の立場だったらどうしていたかを。

「月影は強いよ」
「……うん」
「まぁ一番強いのは春樹なんだろうけど」

阿笠はしゃがんでいる体勢から立ち上がる。
つられて阿笠はその行動を目で追った。

「強くなれなんて言わないし、思ってない」

そうして、烈は右手を差し出した。

「阿笠の持つ弱さや優しさはとても尊いものだと思うよ」

それはまるで一本の光の道しるべのようだった。

まだ朝早いというのに、阿笠にはキラキラ輝いているように見えた。

阿笠は震えながらもゆっくりと手を掴もうとする。

だが、まだどこかで躊躇している。

「弱さをバネに生きろ。いつだって俺がいる」

烈は手を伸ばそうとしている阿笠の手をギュッと握った。

「良いじゃん。自分の信じる道を行け」

「烈……」

烈はニコッと笑った。

烈の笑顔はまるで天使のように思えた。

「迷惑かけてごめん……」

「バカ。迷惑なもんか」

「だって俺……何度烈に助けられたか分かんない」

歯がゆいに違いない。

悔しいに違いない。

いつも助けられるのは。

「言っただろ。そんな阿笠だから好きなんだって」

それでも烈はいつだって笑っていてくれるから。

どんなことをしても絶対に側にいて味方でいてくれるから。

だから甘えてしまうんだ。

烈の優しさに。

「俺も……好きだしっ……！」

すると阿笠は烈のウサギ柄のセーターで目を押さえた。

「あっ！おまっ……！これオニューだぞ！！」
「うるさーい」

オニューなのは本当だけど、烈はまぁ仕方ないか……と阿笠を見守る。

阿笠はセーターに顔をうずくめながら、そういえば……と思い出す。

平然と烈はこうして来てくれたけど、本当は烈は朝が苦手なのだ。

いつも遅刻スレスレに来るし、はやく来たことなんてほとんどない。

朝ご飯も学校で食べるくらい、時間ギリギリに起きて登校してくるのだ。

そんな烈が、しかも朝練が始まるずっと前に学校へやって来た。

それはとてもすごいことなのだ。

阿笠はセーターから顔を離して烈の顔を見た。

「ん？」

けれど烈は全くそんなこと気にしてないかのように振る舞ってくれている。

昨日の夜中2時過ぎまで付き合わせた上にこうして7時よりもっと前にここに立ってくれている。

烈にとってはあり得ないことなのだ。

「……本当弱いや。俺」

阿笠は烈にも聞こえないくらいの声で呟いた。

弱い自分は嫌い。

阿笠は何度も何度も頭の中でそう繰り返した。

でも、その弱さを受け止めない自分が一番嫌いだと訴える。

それでも、烈はそんな自分を好きだと言ってくれた。

それがどれだけ阿笠を救ったか、きっと烈には分からない。

「あー、そだ。これお前の分もあんだぜ」
「ぅん？」

阿笠は思わずセーターをパッと離した。

烈はカバンの中から何やらゴソゴソと取り出す。

「ほら」

烈が取り出したのは、烈の着ているジャンバーセーターとおそろいの服だ。

烈は赤地に無数の白ウサギがいる柄だが、烈が取り出したのは青地に無数の白犬だ。

「ばっ……かじゃねぇの？！」
「あ？バカ？」
「俺お前じゃないから！」

阿笠は後退りする。

そりゃ確かに驚くだろう。

烈はともかくも、阿笠はこういうのを着るキャラではない。

「えー。可愛いのに」

烈はそのセーターを見ながら頬をプクッと膨らませる。

「今日これ着て」

何を思ったのか烈はそう言って、セーターを阿笠に渡す。

阿笠は一応受けとるがもちろん着るのは拒む。

阿笠がこんなの着ていたら学校中で大騒ぎだ。

生徒や教師はみんな（クラスメートなど一部を除いて）阿笠を紳士なジェントルマンだと思っているのだ。

「着て」

「だ…だって……」

「着・て」

断り続けるも、阿笠は完全に迫力負けしている。

しかも朝こうして来てくれたという恩もある。

結局阿笠は押し負かされて着ることになってしまう。

もちろんこれから朝練だからその後からだが。

そうして烈は、じゃーねと楽しげに言いながら部室を出て行った。

烈が部室を出て行った直後に1年たちがやって来た。

なぜか烈が部室から出てきたことと春樹が秋人と遊んでることに疑問を感じるが、とりあえず早く準備しようとさっさと部室へ入って行く。

部室には烈に渡されたセーターを持ちながらため息をついている阿笠がいる。

はたから見れば謎だらけな光景だが、そこには美しき友情があったことは4人にしか分からない。

next

第１３０話【前へ進むための向上心】

「じゃ、おっさきー」
「やべー！今日当てられる！」

朝練を終えた2年部員たちがぞろぞろと部室を出て行く。

1年生もようやく片付けが終わったようで入れ替わりで部室に入ってきたりした。

春樹や烈のおかげでとりあえず元気を取り戻した2人、特に阿笠はなんとか朝練をこなすことができた。

気まずい雰囲気を出さないためにお互いもう気を使わずに普段通り接することにしているようだ。

「阿笠、俺らも行こうぜ」

支度を終えた秋人が阿笠にそう呼びかけるが、阿笠はその場で凍りついたように固まっている。

不思議に思った秋人が阿笠の肩をグイッと掴むと、阿笠はどんよりした顔をしながら振り向いた。

「ひっ?!なっ、なんだよ?!」
「だって〜〜〜〜……」

阿笠は秋人に烈にもらったセーターを見せた。

「烈がこれ着ろって言うんだぜー」
「ぶっ……なんだこれ、愛川っぽい」

秋人はそのセーターをまじまじと見ながら笑っている。

確かにこれじゃあ気落ちもするわな、と言いながら。

「でもまぁ愛川の愛じゃん?」

笑いながら言うものだから説得力に欠けているが、烈との約束をまさか破るわけにはいかず阿笠はしぶしぶそれを制服の上に羽織る。

まだ暑いよ、こんなん……と阿笠はブツブツ文句を言う。

確かにまだ11月にも入ってないのにセーターは暑いだろう。

烈も寒いならブレザーを着れば良いものを。

「えっ。副部長それどうしたんすか！」

阿笠のセーターを見たまだ着替え途中の1年部員が声を上げた。

他の部員たちもガヤガヤと騒ぎ出す。

秋人はそんな阿笠の隣で笑いを必死に堪えている。

烈が着ていると全く違和感はなく自然なのだが、やはり阿笠が着ると明らかにおかしい。

「あ！愛川先輩と朝すれ違ったときおそろいの着てた！」

「分かった！愛川先輩からのプレゼントっすね！」

阿笠が何も言わずとも1年たちは勝手に自己解決している。

自分のことでワイワイ騒がれていてもたってもいられなくなり、阿笠は秋人の手を引いて部室を飛び出して行った。

部室を飛び出したところで周囲の反応は変わらないというのに。

朝練を終えた他の部の人たちや登校してきた人たちで昇降口や校舎は賑わっている。

そんな中阿笠がこんなものを着て走っているものだから注目の的になることは言うまでもない。

女子たちはキャーキャーはしゃいでいるし、男子たちは気の毒に…と同情している。

誰がどう見てもその服の趣味は烈か春樹である。

阿笠が着ているということは烈の影響であるということくらい、みんなすぐに分かるものだ。

「じゃな！秋人っ」

クラスの前で秋人と分かれ、阿笠は勢いよく教室に入って行った。

一緒になって走らされていた秋人は呆然としている。

そのうちクラスメートが秋人に話しかけてようやく秋人も教室へ入って行った次第だ。

阿笠は教室に入るなり乱れる息を無視してゼーゼー言いながら叫ぶ。

「れーつーーーっ！！！」

自分の席に座って今日の課題をやっていた烈は阿笠に気づいて「よっ」と言う。

阿笠はズカズカと烈に近づいて顔を赤くしながら言った。

「恥ずかしくってまともに歩けないって！これ！」
「嘘ぉ。似合ってるよ」
「どこが！」

烈は耳からイヤホンを外す。

「良いじゃん良いじゃん。おそろだし」

烈は声を弾ませながらそう言うが、阿笠はまったく……とため息をついて席に座る。

クラスメートたちは阿笠の服を見て一瞬びっくりしているが、すぐに烈の仕業だと納得している。

「もー良いや」

走ってきたため暑いのか阿笠は腕捲りをする。

脱げば良いものの脱がないところが素直で可愛いというか。

「あ。俺職員室行かなきゃ」

阿笠はスクッと立ち上がるが、次の瞬間に烈にこう言った。

「烈もだよ」

「え～。なんでさ」

「1人でこんな格好で言ったら何言われるか」

烈は面倒くさそうな顔をするけど、仕方なく立ち上がる。

そうして2人してペアのセーターを着てトコトコと廊下を歩いて行く。

あまりの恥ずかしさに阿笠はセーターについてるフードをかぶるが、あまり意味はない。

顔見せないようにしたって結局は烈と一緒にいるってだけでバレてしまうのだから。

この時期にこんな暑苦しい格好を好むのなんて烈くらいだ。

静岡は１０月になってやっと涼しくなるくらいで、ブレザーやらセーターやらが必要になるのは１１月の中旬くらいからである。

セーターも物によるが、今着ているセーターほど厚いものは本来ならば１２月になってから着るようなもの。

「あー。最悪」

「最高の間違いじゃない」

不満を漏らす阿笠に烈は平然と言い返す。

と、職員室の真ん前まで来たところで烈はトイレに行くと言い出してすぐ側のトイレに入った。

とりあえず先に入ろうと阿笠は職員室のドアを開ける。

フードを深くかぶって顔を見られずに歩こうとするが、教師に話しかけられた。

「おぉ、愛川。この前の試験４位だったな。あと少しで阿笠と並んだのに惜しかったな」

そう、結局試験は阿笠のほうが点数が上だったようだ。

たったの数点差だが。

ところでこの教師は完璧に阿笠を烈だと思っている。

阿笠はどうしようか悩んだが、パサッとフードを取った。

「俺阿笠です」

その教師は目が飛び出るほどの勢いですごい表情をし、周りにいた教師たちも騒ぎ声を立てた。

「阿笠?!なに愛川みたいなことやって……」

「阿笠くんがそんなの着るなんて…!」

「それ愛川のか?!」

ザワザワと職員室内はうるさくなる。

ほら言わんこっちゃない、と阿笠は心の中で呟く。

「と、とりあえず脱ぎなさい。校則違反だ」
「脱ぎたいのはヤマヤマですよ、先生」
「はっ？」
「俺だって恥ずかしい」

矛盾する阿笠の言動に教師たちはクエスチョンマークを浮かべる。

そこへようやくトイレから戻ってきた烈がケラケラ笑いながら言った。

「良いじゃないですか先生。俺とおそろだもん」

いつの間にか壁に寄りかかりながら腕を組む烈。

いつ来たのかと阿笠は少し驚いているが、すかさず教師陣に言った。

「文句は烈に言ってください。彼の命令なんで」
「あ、命令だなんて言うなよぉ」
「じゃ押し付け」
「ひど！」

まぁとりあえず烈が無理やり着せてるということが教師陣にも分か

り、怒るに怒れないでいる。

烈といえばもう教師公認で自由な服装をしている。

フランス蹴ってまで入学したということに負い目を感じる教師たちは何も言えないのだ。

阿笠は今更ながら烈のすごさに関心している。

「阿笠、用事は？」

「あっと、そうだった」

阿笠は慌てて用事のある教師のもとへ行く。

後ろからノコノコと烈もついて行く。

と、そこへまだ何も知らない春樹が職員室に入ってきた。

顧問に用事があるらしく彼のところへ向かうが、やはり派手な服を着てれば目立つ。

「れーつ。おっはよ」

春樹は後ろから烈に話しかけた。

烈も振り向いて

「おう」と返事をする。

そして春樹は烈の前にいるフードをかぶった男に目をつける。

なにやら教師と話しているその男を指差しながら、春樹は烈に恐る恐る尋ねた。

「……あ、阿笠？」

烈は片手で丸を作り、声を出さずに笑っている。

なんで？とコソコソ聞いてきた春樹に烈は耳元で囁いた。

「今朝のお礼」

「今朝……ああ！」

「ぷくく。似合ってんだろ？」

春樹はなるほどと納得しつつも口をあんぐり開けてまだ少し驚いている。

そのうち教師と話し終わった阿笠が後ろを振り向き、春樹と目が合

った。

春樹は何気ない顔で手を振る。

「今朝はうちの秋人がどーも」

阿笠はフードを取って、チラリと烈を見る。

烈はその視線に気づいて、ニッと笑った。

「……櫻井さ、俺の味方も秋人の味方もできないって言ったよね」

「ん？うん、言った」

「じゃあやっぱり櫻井は秋人の味方してよ」

「えっ」

春樹は予想外のことを言われて一瞬戸惑う。

まさか阿笠の口からそんな言葉がでてくるなんて思わなかったのだろう。

だが阿笠の隣で烈は軽く頷きながら微笑んでいる。

「俺には烈がいてくれるように……秋人にも誰か必要だと思う」

「阿笠」
「俺、秋人ほど強くないし全然弱いけど……でも支えてくれる人がいるから頑張れる気がするんだ」

目先のことなんてまったく見えず、明日さえどうなるか分からない。
どんな結末があるかなんて予想できないし、不安でいっぱいだ。

でもそんな阿笠がようやく、立ち上がろうとしている。
今すぐにこの現状を受け止めるとかそんなことではないけど、それでも進まなきゃいけないと理解しただけでも成長している。

「阿笠……」

春樹は、弱々しくも一生懸命気持ちを伝えようとしている阿笠を見て誇らしげに感じる。

すると、今度は烈が言った。

「次は、うちの阿笠がどーもって言わせろよ。春樹」

春樹も烈も大変な親友を持ってしまったものだ。

それでもそんなこと気にせず側にいてくれるから、秋人も阿笠も笑っていられる。

「楽しみにしてる」

そうして春樹は顧問のところへと向かって行った。

烈が教室戻ろうと言っても阿笠はうつむいたまま動かずにいたため、烈は阿笠の顔を覗き込んだ。

恥ずかしさを堪えているような、罰が悪そうな顔をしている。

烈は阿笠のフードを頭にかぶせ、阿笠の手を引っ張る。

「よくできました」

きっと阿笠は強くなる。

烈にはそう思えてならなかった。

next

第１３１話【宣戦布告】

秋人が麻冬に振られた日から1週間以上経ち、もう１１月に入っている。

そろそろ肌寒くなる季節になり、学校では文化祭を控えているし秋人は選抜試合を控えている。

他の３人も練習試合をしたり選抜のほうにも参加したりなど多忙である。

選抜のせいで土日会えないというのは当たり前で、会えても４人揃うことはなかなかない。

平日は普通に会えるけど。

「はぁ?!やだよ!」

昼休み、文化祭の準備をしている秋人のところに文化祭実行委員ライブ担当の人数人がやってきた。

どうやらライブに出て欲しいという頼みらしい。

ライブはいくつかのバンドが順番にやるらしく、毎年なかなかの好評なのだ。

「頼むよ月影ー。人気ある奴が歌えば大盛況間違いなしなんだからさっ」

「春樹とか誘えよ！」

「お前が一番人気なんだって」

秋人は人前で歌ったりなんてあまりしないからこういう類の話はいつも断る。

確かに秋人がライブやると言えばかなりの人数が集まるだろう。

ライブはいつも後夜祭の前にやるから、ライブが盛り上がれば後夜祭も盛り上がる。

後夜祭は文化祭のメインともいえるもので、グランドでのダンスパーティーが行われる。

もちろん後夜祭は学生だけが参加する。

カップルで出たりするのがほとんどだったりするから、後夜祭までにカップルの数は増える。

つまり秋人たちはたくさん告白されるというわけだ。

「だからって！……人気あれば良いのか？」

秋人は反論しようとした矢先、なにやら思いついたように言う。

「あ？ああ、まぁ」

「つまり俺と同じくらいの奴なら良いんだよな」

「いるならな。言っとくけど」

「春樹以外だろ？」

秋人はニヤッと笑う。

この学校に秋人以外に春樹を除いて同レベルの人気を持つ人なんているのか。

そもそもなぜ春樹がダメなのかというと、春樹は彼女持ちだからだ。

ライブに出れば女子が殺到するが、生憎彼女のいる春樹は後夜祭のパートナーに選べない。

つまり彼女のいない人気のある男子……が決定打だ。

「阿笠大悟」

それなのに秋人が口にした男子はあの阿笠だ。

「なっ……阿笠には雪原さんがいるだろ」

「大丈夫」

「話題性にも欠け――――」

すると、秋人は彼の耳元で何かを囁いた。

その男子はゴクッと唾を飲んで、

「正気か……？」と尋ねた。

秋人はそれに対して何も答えず、こう言った。

「話題性が欲しいなら本番まで阿笠出るのは伏せとけ」

「そんなの前代未聞だよ」

「だから今回で未聞じゃなくさせりゃ良いじゃん」

毎年大物ゲストが出る。

去年は佑亮が出たように。

まぁ佑亮にも彼女はいたが彼女は大学生だからダンスパーティーには参加できない。

だから参加できたのだ。

このように毎年学校で一番の人気者が出てるのだから、確かに名前を伏せてれば例年以上に話題性にはなる。

「良いだろ。大橋」

大橋というその男子はライブ担当の責任者らしい。

大橋は少し考え込み、周りにいる他のライブ担当に相談することなく決断を下した。

「……よーし！それでいこう！」

「そうこなくっちゃ」

「でも本番までに頼むぜ。できんのか？」

「さぁ」

さぁって……と呆れる大橋をよそに、秋人は作業を進める。

「できなかったら責任は取ってやんよ」

秋人はそれだけ言い残し、黙々と作業をする。
もう大橋が何を言っても秋人は聞き入れない。
諦めがついた大橋は他のライブ担当に、行くぞと言って教室から出ていく。

「月影。期待してっぞ」

秋人は大橋を見ずにピースをして答える。
それを見た大橋は秋人のもとから去って行った。

結局大橋に何を言ったのかは不明だが、とりあえず阿笠が出ることになったようだ。
もちろん秋人が阿笠にその旨を伝えて説得させることは必要条件だ。

阿笠を説得させられるなんて確実な確信はない秋人だが、とりあえず出るのがどうしても嫌らしく粘るつもりらしい。

確かに阿笠は人気もある。

特にサッカーを見ていた人の中には、秋人より阿笠という人のほうが多いかもしれない。

爽やかで優しくて外見もかなり良い、その上華のエース。

これで人気がなかったらまずおかしい。

阿笠がダメなら烈という手もある。

烈なら彼女もいないし何の問題もない。

秋人は作業しながらそんなことを思っていた。

「秋人、今日暇？」

「んぁ？」

作業している秋人のもとに春樹がやってきた。

春樹は作業のため体操服を着ているが、赤いペンキがついている。

春樹は看板を作っていたようだ。

「衣装届いたみたい。放課後合わせようって」

「あ、そうか。今日火曜か」
「うん。部活ないしょ？」

秋人は頭に巻いていたタオルを取る。

そして、分かったと頷く。

それだけ伝えて春樹はまた作業に戻って行った。

なかなか忙しいようだ。

春樹は和服だが、どうやら春樹が持っている浴衣では色が地味らしくて春樹も借りることになったらしい。

というより、和服を着る人のほとんどが借りる。

色とりどりで行こうということのようだ。

ちなみに春樹はオレンジ色らしい。

麻冬のドレスはやはり白のようで、秋人のタキシードは黒で夏実の浴衣は水色。

本当は春樹はピンクで秋人は黄色という案もあったのだが、さすがにそれではあんまりだということで、それらの色になったらしい。

「そうか、今日部活ねぇや」

秋人はボソッと呟く。

そうして、同じ作業をしている他の人に「ちょっと出る」と言ってその場を離れた。

どうやら5組に向かっているよう。

秋人は勝手に5組に入り、阿笠を探す。

だが阿笠の姿は教室にはなく、5組の生徒に聞いたところちょうど秋人と入れ違いで出て行ったようだ。

秋人は後ろのドアから入り、阿笠は前のドアから出て行ったということか。

秋人は5組を出て廊下をキョロキョロしていると、6組の前で麻冬と話している阿笠を見つけた。

ちょうど良いと思いながら秋人は2人に近づいていく。

「阿笠」

秋人の呼びかけで阿笠が振り向く。

「お、秋人」
「なぁ、文化祭のライブ出ねぇ？」
「は？」
「てゆうか出て。責任者に阿笠出るって言っちゃった」
「はー？！」

阿笠は信じられないという顔をしている。

麻冬はさっき実行委員と話してたのはそのことだったのか、と心の中で納得している。

「ん……え？ちょっと待って。それってあのゲストにでしょ？」

麻冬はハッとしながら秋人に尋ねる。

「そうそう」
「あれって校内に彼女いる人は出れないんじゃ……」

そのことはどうやら生徒ならみんな知っているようだ。

毎年の大物ゲストは一番の楽しみだから当然と言ったら当然か。

麻冬の言葉を聞いて阿笠もそのことを思い出し賛同する。

「そうじゃん。つか秋人が出れば良いのに。校内一の人気者は秋人だろ」

「甘いね、君たち」

「「はっ？」」

秋人は手を振りながら自信ありげに言っている。

キョトンとしている2人に秋人は言った。

「本番まで阿笠がゲストなことは伏せっから」

「？でも本番になりゃバレんじゃん」

「本番までに阿笠がフリーになりゃ良いんだろ？」

秋人がそう言うと、阿笠は秋人の真意に気づいたようだ。

「お前っ……」

麻冬はいまいち分かっていないようだが、すぐにピンときた阿笠は秋人に反論しようとする。

だが秋人の言葉によって遮られた。

「麻冬、俺諦めるなんて一度も言ってねぇから」

「え？」

「本番までに振り向かせりゃ良いわけだろ。阿笠、覚悟しとけ」

秋人は不敵な笑みを浮かべる。

「あと2週間ちょっとで何ができるって言うんだ」

阿笠は右隣にいる麻冬を渡さないとでもいうように、右手を麻冬の前にバッと出す。

「さぁな。俺もたいした自信ねぇし」

「あ？」

「とりあえずそういうわけだから、よろしくな」

秋人は手を振って6組の教室へと入って言った。

「何考えてんだ、あいつ…」

呆れてる阿笠をよそに、麻冬は秋人のほうをじっと見つめている。

阿笠はそのことに気づいたが、何も言えない。

言えるはずがない。

ギュッと手を拳にして握りしめて、悔しさを露にしないようにしている。

「2週間……か」

阿笠は麻冬にも聞こえないくらいの小さな声で呟く。

さっき2週間で何ができるかと阿笠は言ったけど、内心2週間麻冬を奪われずに守れるか不安のようだ。

当たり前だろう。

阿笠を選んだと言っても結局まだ麻冬は秋人を好きなのだ。

すべては麻冬の決断１つのみ。

およそ2週間後、麻冬は誰のものになっているだろう。

ｎｅｘｔ

第１３２話【衣装合わせ】

放課後になり、部活のない６組の生徒は衣装合わせをしている。

秋人が黒のタキシードを試着すると、クラスの女子がキャーキャーと騒ぐ。

かなり似合っていて格好良さが増している。

「うし。じゃああっきーは平気だな。春樹は？」

衣装担当の人がチェックしていく。

もちろん男子には男子の衣装担当が、女子には女子の衣装担当が。

「んー、微妙にでかい」

春樹は和装を着ている。

少しばかり大きいようだが、女子が裾上げしてあげてなんとかサイズを合わせた。

他のクラスメートたちもウェイターやウェイトレスをやる人たちはみんな試着している。

見事に和洋が混ざっていて何とも違和感がある。

夏実と麻冬は部活だから明日の昼休みに試着するようだ。

「これもう脱いで良い？」

タキシードが恥ずかしい秋人はそう言うが、みんなこぞってダメだと言う。

おまけに春樹と2人で宣伝してこいと言われ、看板まで持たされる始末だ。

秋人は渋っているがノリノリの春樹につれられて秋人は仕方なく行くことにした。

放課後だが割とまだ生徒も残っているし、何より体育館やグランドに行けば部活をやってる生徒が大勢いる。

暇な2人はあちこちを回ることにした。

ところどころで鳴るカメラのシャッター音に初めは秋人も嫌がっていたが、そのうち諦めてきている。

どうやら5組も同じところで衣装を頼んだらしく、服が届いている。

ということは当然、5組も宣伝に行くわけだ。

「きゃー！秋人先輩！」
「春樹先輩カッコ可愛い！」

学校にいる女子たちがワイワイ騒ぎ立てる。

秋人はもちろん無視しているが、春樹はちゃっかり喫茶の宣伝をしている。

「さっき烈先輩のチャイナ服姿見ちゃったー！」
「えっ、まじでぇ?！」

宣伝しに回っている2人はあるときそんな言葉を耳にする。

秋人と春樹は顔を見合わせて、
「ってことは……」と声をハモらせている。

そうして突然学校の敷地内の中を走り回り出した。

秋人はタキシードの前のボタンを開け、春樹は裾を少し持ち上げて走っている。

5組といえば6組の和洋喫茶と相反する中華料理店だ。

喫茶部門で人気が二分するのは間違いなし。

周りの反応なぞもうお構い無しに2人は息を切らしながら走っている。

そうしてようやく、ラウンジで休憩している烈と阿笠を発見した。

ドアを勢いよく開けて血相変えている秋人たちに阿笠たちはギョッとする。

「な…何してんの?」

阿笠はジュースを口から離し、２人に話しかけた。

やはり阿笠はチャイナ服は着ていない。

普通に制服を着ている。

「ほ…本当に着ないのか、阿笠」

「ん？ああ、チャイナ服？着ないよー」

「それでまじで勝つつもりなわけ？俺らに」

秋人のその質問に阿笠はひるむことなく、

「うん」とサラッと言ってのける。

春樹も秋人から阿笠はウェイターをやらないと聞いていてそのことは知っている。

だから２人して阿笠を探しに走ったのだ。

もしかしたら着ているのかもしれない、と。

だってただの制服で客がたくさん集まるはずがない。

中華料理店なら中国らしい服装をして宣伝して客を集めるのが通常だろう。

阿笠にはどんな秘策があるのかと2人は疑っているのだ。

「良いなー6組。俺も6組だったら良かった」

そんな2人の心中などまるで知るよしもなく阿笠は羨ましそうに言う。

特に和装をしている春樹をじっと見て不満そうな顔をする。

「……侍やりたい」

なぜそこまで侍が良いのかはよく分からないが、また阿笠のワガママが始まりそうだったから烈は阿笠の機嫌を戻すためにチョコを渡す。

「まぁまぁ。それよりこれやるから」

「お、ビターだ」

阿笠はチョコを受け取り袋から出して食べる。

「ちょっと春樹」

そして烈は春樹を手招く。

何？と言いながら春樹は烈に近づいていき、烈と春樹は秋人たちから少し離れる。

秋人たちは秋人たちで何やら話をしているから烈たちの行動にあまり何も感じていない。

烈はとりあえず2人に聞こえない程度の声で言う。

「聞いた？秋人から」
「何を？」
「阿笠がライブのゲストに出るって話」
「えっ！」

春樹は思わず声を上げるが、すぐに手で口を隠す。

「だ…だってあれって……」
「本当は月影に誘いがあったんだけど、月影は阿笠をゲストにしたんだ」
「でもよく実行委員が許したね」

すると烈は、昼休みのときの阿笠と秋人（麻冬もいたが）との会話を一部始終再現してみせた。

秋人が嫌がることなんてみんな分かってることだけど、驚くのは阿笠を選んだ理由だ。

たいそうな自信だ。

本人はそんな自信はカケラもないらしく、ただこの恋をどうにかして終わらせたかったようなのだ。

それが悪い結果だったとしても、とにかく麻冬を好きでいる以上は前へ進もうとする秋人なりの向上。

「はぁ～。秋人思いきったなぁ」

春樹は横目でチラッと秋人を見てそう言う。

「ところで烈は見てたの？3人の会話を」
「うんにゃ」
「じゃ阿笠に聞いた？」
「まっさかぁ」
「ならなんで……いや、聞いた俺がバカか。本当すごいの

な、烈って」

春樹は軽く首を振って、ため息をする。

相変わらず烈の情報量には驚かされるものだ。

「この間は阿笠が頑張ったろ」

「この間？……あ、職員室で？」

「うん。だから今度は月影が頑張るってんだな」

烈も秋人を見た。

いや、正確には楽しそうにじゃれあっている秋人と阿笠の2人を見ている。

恋愛のことを抜きにしたら2人は本当に最高の相棒だ。

それでも好きになってしまったんだから仕方ない。

それを受け入れてるからこそ笑ってる彼らがいる。

彼らをまるで母のように見守っている春樹と烈をよそに、阿笠と秋人はこんな会話をしている。

「決ーめた！秋人、選抜戦おっか」
「……はぁ？！」
「どっちが良い？全国選抜チームと県選抜チーム」
「ちょちょちょちょっと待てよ。お前何言ってんのか分かってんの？」

いきなりの阿笠の話に秋人は戸惑いを隠せずにいる。

この前は普通に一緒に出るって話をしていたばかりだ。

やはり息が合うのはこいつしかいないと、２人も分かっているから。

「分かってるよ。別々になったらいろいろ言われるだろうし」
「ならなんで……」

きっと記者や実況の人はあることないことを言って世間を騒がすだろう。

中学のときから一度も２人は敵になったことはなかった。

それがどんなことか、２人にも分かっている。

「……戦ってみたくなった」

阿笠はネクタイを緩める。

だがその顔は真剣そのもの。

「お前のアシストがなきゃたぶん俺は実力以上の力を出せない。秋人だって、ＦＷとの連携がやりにくいはず」

「分かってんじゃん」

「俺ら２人だからここまでこれてる」

阿笠は今までの秋人との練習や大会での思い出を頭の中で振り返っている。

時にはぶつかり合ったし、時にはケンカもした。

でも有無を言わせない２人のプレーは実に素晴らしい。

「……阿笠の言いたいことよく分かる」

「秋人」

「俺はさ、たぶん怖いんだ。正直言ってお前を止める自信なくて」

秋人もまた阿笠とのプレーを思い出している。

「俺はお前ほどの攻撃力も佐々先輩ほどの守備力もない。……だから1人になったら俺っている意味ない気がしてた」

正直中学時代の部活では全然物足りなかった秋人は、選抜で阿笠と会えて良かったと思っている。

それは阿笠とて同じだ。

所詮一般の公立中学ではそのレベルも知れてる。

まだ佑亮がいた頃は良かったのに、佑亮は秋人が入部して少ししてから引退。

「俺なんて攻撃できるだけだよ」

「……」

「佐々先輩も言ってしまえば守備できるだけ」

そうして阿笠は苦笑しながら付け加える。

「どっちもできる秋人が羨ましいよ、本当」

阿笠はそう言うが、秋人にしてみればどっちか秀でたものを持ってる阿笠たちのほうが羨ましい限りだ。

ポジションのことだから仕方ないことだけど、それでも2人はそんな思いを押し殺してでも2人の連携を保とうとしている。

「いずれは……戦う運命なのかもな」

秋人は今は冷静を取り戻しているが、さっきまで興奮していて熱いのか上着を脱ぐ。

「それと、もう1個決着つけたいから」

「何？」

「……学生時代に戦うのはきっと今回だけだよ」

阿笠はニンと微笑んだ。

まったくもって秋人の問いを無視しているが、何となく秋人にも理解できた。

「一度だけで良いから対戦したかった。天才とカリスマ、どっちが上かな」

「もちろん俺」

「あ、言ったな」

ハハハと2人は笑っているけど、やはり内心では切ない思いでいっぱいだ。

話を持ちかけた阿笠でさえ悲しく思っている。

それでもやっぱり、相棒として最高のライバルとして戦ってみたいという気持ちは誰よりも2人が分かっている。

麻冬のことなんて二の次……いや、もしくはただの口実。

純粋に試合したかっただけ。

「秋人、俺のワガママ聞いてくれてありがとう」

阿笠は笑って言った。

秋人も阿笠に負けないくらい笑って、阿笠の肩に手をかける。

「今月はきっとテレビ騒がしいぜー」

結末は今月下旬。

next

第１３３話【裏切り】

「おー、コスプレ？良いね」

ラウンジで話し終えたあと、４人は相も変わらずまだ喋りながら一応看板を持って校内やグランドを歩き回っている。

４人がコスプレしているのを見てみんなが声をかける。

「秋人ー、春樹、烈～。ちょお並んで並んで」

ある男子がそう呼びかけてカメラを向けている。

「ちょっ、俺はぁ？！」
「阿笠コスプレしてねーじゃん」
「えーっ！」
「うっそ。阿笠も入って～」

秋人は内心嫌がっているが、他の３人が乗り気なものだから仕方なく参加する。

阿笠は前でヤンキー座りをしながらピースをし、他の３人はその後

ろに立ってピースをしたりしている。

カシャッという音が鳴り、カメラマンの男子は
「じゃ宣伝頑張れよーっ」と言っていなくなって行った。

今のは新聞部の人である。

もしかしたら校内新聞に載るかもとみんなで言い合う。
載ったら宣伝効果も上がって一石二鳥だ。

「いーなー。俺もコスプレしてみたい」

3人が着ているのを見て阿笠は物欲しそうに言う。
もちろん烈の中国服は論外らしいが。

「着たいの？じゃ俺の着ろよ」

ラッキーと言わんばかりに秋人は名乗りでる。
だが阿笠が返事をする前に烈が遮った。

「他のクラスのじゃ意味ないだろ阿笠。着たいならうちの着ろよ」
「やーだー」
「なんでそんな嫌なわけ？」
「俺の趣味じゃない」
「は……そんな理由？」
「うん」

そりゃみんなだって自分の趣味でコスプレしてるわけじゃないだろうよ、と3人は心の中で呟く。

阿笠のように中国服を嫌がる人もいるが強制的に着せられているのだ。

阿笠は自由を認められた唯一の男。

「てっめー……女子の着せるぞコラ！」
「えっ、なんでキレてんの？！」
「ふざけっ！もー良い！ちょっと来い！！」

烈は阿笠の首の後ろのシャツを持って阿笠をグイグイ引っ張っていく。

「れ、烈～～～っ！」

阿笠は何が何だか分からないようだが、烈は阿笠を無視して勝手に連れて行ってる。

秋人と春樹は、まぁそうだよなぁ……と烈に賛成しているようでウンウンと頷いてその光景を見ている。

「ねっ、ねぇ！烈?!ちょっと秋人ぉー！！」

阿笠は手を伸ばして秋人に助けを求める。

だが秋人は手をひらひらと振りながら言う。

「行ってこい。阿笠」

結局助けを求めるも虚しく阿笠は烈に教室まで連れていかれた。

あとはもうどうなるか予想できるだろう。

嵐の元凶もいなくなり、秋人と春樹は引き続き宣伝をし始める。

宣伝と言っても決して2人から声をかけたりするわけではなく、生徒たちから声をかけてくるのだ。

もう2人の場合は、もちろん阿笠と烈も同じだが歩いているだけで

宣伝になる。

これほど楽なものってあるのだろうか。

確かにこれは喫茶部門で優勝できると豪語するだけのことはある。

「あ。麻冬たちんとこ行ってないね」

「そうだな。体育館のが近いし夏実んとこから行こうぜ」

そういうわけで2人は体育館へと向かう。

バレー部は2階だ。

2人は人目も気にせず楽しげに笑いながら勝手に体育館へと入って行く。

2階のドアが開くとバレー部だけでなく他のバスケ部たちも振り向いた。

「はろー。頑張ってる?」

春樹が夏実を見つけて手を振っている。

夏実はタタッと2人のところに駆けつけた。

「えー！2人とも良い！かっこいー！！」

すると他のバレー部員たちも練習を中断してワラワラと集まってきている。

ちょうど監督がいないから良かったものの。

やはり和服もタキシードも女の子は大好きだ。

キャッキャッキャッキャッ言いながら女子たちは喜んでいる。

夏実もその1人だ。

秋人はまさかこんなことになるなんて予想もしていなかったようで、しまった……と頭を押さえている。

すぐにでも逃げたい気分だったが女子がなかなか離してくれないものだから実行できずにいる。

10分くらいしてようやくほとぼりも冷めてきて、秋人は春樹の手を掴んで逃げるようにしてドアから出て行った。

女子たちはまだ騒ぎたかったらしく少し不満そうだが、監督が来たら大変だがらと渋々練習を再開する。

春樹は麻冬のところにも行こうとしたが、またあんな状況になるのを嫌がった秋人はそれを断固拒否した。

結局また校内やグランドの徘徊を続けている。

ちなみに阿笠はと言うと、教室に戻るなり烈の指示で男子たちから無理やりチャイナ服を着せられていた。

逃げて逃げて逃げていた阿笠もそのうち捕まり、強制的に脱がされたのだ。

烈が着ているのは上下の分かれた形のもの。

色は黄色と黄緑系でズボンは白。

阿笠が着せられたのは青や紫系のワンピース形だ。

スリットが入っている、よくあるあの服だ。

もちろん男性用のものだし下に白いズボンもはいている。

これがまた似合っているもので、阿笠はかなり拗ねているがクラスメートたちは大盛り上がり。

「阿笠くん格好良い！」
「いけてんじゃん、阿笠」

みんなそう言ってくれるが阿笠はムスッとしていてなかなか機嫌を直さない。

「拗ねんなって。阿笠」

烈は阿笠の肩に手を置いてそう言うが、阿笠はその手を払いのける。

「……約束違うじゃん」

まぁ阿笠が怒るのも分かる。

チャイナ服着なくて良い代わりに客寄せで何でもするという約束をしたのだ。

その約束があったから阿笠も中華料理店でなんとか合意した。

もともと阿笠がどうしてもウェイターや客寄せをやらなくてはならないという決まりはなく、阿笠にだってキッチンを選ぶ権利はある。

じゃんけんもせず阿笠がキッチンをやらないことに妥協したのも、阿笠なりの配慮なのだ。

自分がいれば客がもっと集まると分かっているから。

「みんなが約束守らないんなら俺だって絶対守らないかんな」

阿笠はキッと烈やクラスメートを睨んで、教室を出て行ってしまった。

誰かが阿笠を呼び止めようとしたが、阿笠はシカトしてドアもピシャン！と勢いよく閉めていった。

クラス中がシンとなる。

「しまったー。やり過ぎた」

烈は首をポキポキ鳴らしながら言う。

みんなの視線が烈に集まる。

「烈ー、どうするよ」

「やべぇよ阿笠。本気だ」

「あいついなきゃ絶対優勝できねぇよ」

特に無理やり着せた男子たちは慌て焦っている。

責任も感じるだろう。

「うーん……」

烈もさすがに困っているらしく、手のうちどころがない。

阿笠の理由も理由だが、クラスメートもクラスメートだ。

一度決まったことをこうも簡単に破られては怒るのも当然。

「ありゃ面倒くせぇぞ……どうすっかな」

クラスメートたちは不安そうな顔をしている。

今となっては優勝できないという気持ちよりも阿笠の意志を無視した行動への罪悪感のほうが強いようだ。

阿笠に無理やり着せた男子だけでなく見ていたクラスメートも、格好良いだのなんだのと言っていたクラスメートたちもだ。

どんよりした空気が5組の中に漂っている。

阿笠は阿笠で、さっさと着替えればいいものの怒りでそれすらも忘れてズカズカと廊下を歩いている。

声をかけてくる生徒を丸きり無視して、かなりの怒りに満ち溢れたオーラを出している。

「くっそ……ざけんなよ」

どこに行くのか何をするのか、本人にも分かっていない。

ただ抑えきれない怒りを必死に堪えているようだ。

と、そのとき阿笠は何を思いついたのかその場に立ち止まる。

そうして近くにあった窓を開けてグランドを覗いた。

そうして何を見つけたのか、阿笠は突然走り出す。

昇降口で靴に履き替え、グランドへと向かって行く。

そこにはちょうどサッカーをしている同級生たちがいた。

もちろん部活ではなくただの遊びでだが。

阿笠がそこに行くとみんな阿笠に気づいて近寄ってくる。

クラスメートたちと同じような反応を見せるも、さっきとはうってかわって今度はニコッと笑っている。

「俺も入れて」

その言葉にみんなが驚く。

借り物の衣装を着たまま言うだから無理はない。

「汚れるぜ？」
「平気平気。さ、やろ」

男子たちは躊躇するが阿笠が良いと言うものだから一緒にサッカーをし始めた。

最初は軽くだったがそのうちみんな遊びに熱中して本気を出し始めている。

そんな中阿笠は無性にスライディングをしたり腹でボールを受けたりしている。

みんな熱中しているものだから阿笠の服が借り物だということに気づかずにいたが、休憩に入ったときに汚れている衣装を見て男子たちはギョッとする。

大丈夫なのかとオロオロしているが、阿笠はケラケラ笑いながら平気だと答えている。

そのうちまたサッカーを始めた。

その頃秋人と春樹はグランドに出て宣伝をし出した。

運動部がたくさんいるから宣伝の効果も抜群である。

そして、先に春樹が阿笠を見つけた。

「ね、ねぇ秋人……あれ」

春樹が驚きながら指差しているほうを振り向くと、秋人も目を丸くした。

青と紫のまだら模様のチャイナ服が茶色く汚れているのだ。

特に白いズボンでボールを受けたり蹴ったりするのが一番多いせいでかなり汚い。

「ちょっ……あれ借りもんだろっ」

秋人はとりあえず阿笠のところに走った。

春樹も秋人のあとを追って行く。

秋人は阿笠の肩を掴んで

「おいっ！」と声をかけた。

振り向いた阿笠は平然としながら、何？と言う。

「それ汚したらまずいだろ！穴でも開けたらどうすんだ！」

「ああ、これ？」

阿笠は自分の服を見下ろす。

「良いの良いの。こんなの」

「こんなのって……」

「烈が……クラスが俺を裏切ったんだ。ならもう俺知らないよ」

阿笠は秋人の手を振り払う。

そうしてサッカーしている男子たちに再び混じった。

もう秋人が何を言っても無駄のようで、秋人の言葉を無視している。

何がなんだかよく分からない秋人は、とりあえず烈に知らせることにした。

next

第１３４話【優しき心】

「ん？んー、ああ、阿笠な」

秋人と春樹が５組に向かうと、烈はもうチャイナ服を脱いで他の作業をしていた。

烈は作業する手を止め、椅子に座る。

「キレてた？」
「や、てか衣装が……」
「衣装？」
「ボロボロだぜ」

はっ？！と声を上げて烈は勢いよく椅子から立ち上がり、窓を開けてグランドをまじまじと見ている。

サッカーを楽しんでる阿笠を見つけて、烈は額に手を当ててため息をつく。

「そうくるかぁ……」

ここからでは衣装がボロボロなのは見えないが、サッカーやってるなら汚れるのか確かだ。

烈は衣装担当のクラスメートに阿笠のことを伝える。

すると教室にいたクラスメートたちのほとんどが窓からグランドを覗いた。

阿笠を見つけるなり烈と同じようにため息をついている。

呆れているため息ではなく、どうしようかと悩んでいるため息だ。

「烈ぅ、どうすっか」
「いやー、俺がなんか言っても火に油注いじゃうしなぁ」
「でもほっとけねぇよ」

クラスメートたちはガヤガヤと騒ぎ出す。

秋人と春樹だけ何も分かっていなく、春樹は
「何なの？」と尋ねた。

烈は頬をポリとかいて、少し重い口で話し出した。

「……阿笠がチャイナ服着ないってのは月影も知ってるよな」

「ああ」
「阿笠あの服着てウェイターやるの嫌がったんだ。だから着なくて良い代わりにどんな手を使っても6組よりも客を集めるって約束したんだけど……」

秋人は、あのときのあの言葉はそういう意味だったのかと納得している。

「ついあいつのワガママに俺怒っちゃってねぇ」
「あ、さっきのか」
「うん。無理やり着させたんだ、チャイナ服」

他のクラスメートたちも作業しながら烈たちの会話を聞いたり、中には作業を止めたりしている人もいる。

阿笠を怒らせたってことはそれほど重大なことで、これほど雰囲気も悪くなるということか。

「したら阿笠キレて教室出てっちゃってさ」

フー…と烈は息を吐く。

あの烈でさえ手がつけられないとは。

「でもそんだけで？阿笠がそんだけでキレるか？」

重々しいオーラを出している5組の生徒に秋人は反論する。

「泣くとかなら分かるけど、あいつがキレるときはサッカー関係とか――」

「阿笠はさ」

だが秋人の言葉を遮るように烈は少し声を上げる。

「……阿笠はさ、嫌がってたんだよ。ウェイターとか」

「う？」

「お前らなら分かるだろ？6組はお前らがいなきゃ優勝できるくらい客集めらんない。5組もそうだから」

秋人と春樹は顔を見合わせた。

秋人もキッチンのほうが良いと言っていたクチだが、それほど嫌がっていたわけでもなかった。

他の3人がやるなら仕方ないかと諦めてる気持ちのほうが大きかったからだ。

「阿笠もそれ分かってるからさ、キッチンやりたいなんて口では言ってたけどじゃんけん参加しなかったんだ」
「じゃんけん？キッチン決めの？」
「うん」

諦めてたのは阿笠も同じ。

阿笠の場合は烈もいるからとかそういう気持ちで諦めてたのではなく、優勝したいというクラスメートの気持ちを汲んで諦めていたのだ。

感謝されこそすれ憎まれるなんてあり得ないこと。

「相当嫌がってたんだよ内心。ウェイターも客寄せも」
「へぇ……」
「それでもクラスのために客寄せならやるってことになったから」

クラス中がシンとなる。

阿笠の話を聞いて顔を曇らせる生徒も多々いる。

みんな分かってるのだ。

秋人と春樹もかける言葉がなく少し戸惑っているようだ。

阿笠の気持ちもなんとなく分からないでもないのだろう。

阿笠をカバうわけではないけどクラスメートをカバうこともできず、だから尚更2人は困惑している。

そこまで嫌がっているとは思わなかったのだろう。

阿笠ならウェイターとか進んでやりたいというキャラだから。

もちろんウェイターが嫌だというよりチャイナ服が嫌なだけなのだが。

「……で、ほっとくの？阿笠」

秋人は一呼吸置いてそう言う。

「良いのか？あいつあの服ズタズタにするつもりだぜ」

そんなことは言われなくても5組一同分かっている。

阿笠なりの復讐だ。

あれほど嫌がっていた服を無理やり着せたみんなへの、約束を破ったみんなへの復讐。

「まさか阿笠の気がすむまでやらせる、なんて言わないよね？」

今度は春樹が言った。

だが烈も含め５組の生徒が何も言わないから肯定してると春樹は受け取る。

「冗談でしょ！気すむわけないじゃん、あのくらいで！」

「もう帰ってこないぜ、あいつ」

「阿笠が必要なら本気で阿笠止めようよっ」

「はやいとこ行動したほうが良いぜ。度を越すと俺でも手出せねぇし」

春樹と秋人は交互に言う。

２人が言っていることは明らかな正論だ。

それでも何をしたら良いのか分からない5組生徒は何もできずにいる。

いつもなら一番に阿笠のことを理解している烈も、悔しそうな顔をしながらグランドでサッカーしている阿笠を見ている。

阿笠の小さなワガママを許せなかった5組生徒たちは後悔でいっぱいのようだ。

誰1人として阿笠を責める人はいない。

阿笠の小さなワガママの大きな自分勝手を責める人はいない。

「……そんなんだから阿笠だってああするしかないんだよ」

秋人はギリッと歯を噛んで少し怒りながら言う。

「お前らが阿笠と言い合いしないから阿笠だって怒りをぶつけらんねんだよ！」

春樹は秋人を見上げた。

春樹の知らない阿笠を知っている秋人だからこそ言える。

「あいつのワガママってどんなもんがあるか知ってるか？」

秋人はみんなにそう問うているにも関わらずみんなの返答を待たずに言い続ける。

「絶対みんなが困ることは言わねんだよ！できる範囲のことしか言わねんだよ！」

「秋人……」

「本音をいつも隠して自分のことなんか後回しにしてんだろ！クラスのことだっていつも考えてくれてんだろ！」

グランドにいる阿笠を見ていた烈も秋人の顔を見る。

何1つ音のない5組に秋人の声だけが響いている。

「今回くらいあいつのワガママ聞いてやれよ！」

秋人は力いっぱいに言う。

「阿笠が優しいからってなんでもしてくれると思うな！知ってんの

か？1年ときも今年も体育祭でも文化祭でも音楽祭でもいつでもあいつはっ……」

「秋人、秋人」

熱くなっている秋人に春樹はタキシードをクイクイと軽く引っ張って止める。

「それぐらいで良いよ」

まだ言い足りないようだが、春樹にそう言われて秋人は渋々静まる。

秋人が怒鳴らなくなってより一層空気は重くなる。

そんな中、春樹は真剣な顔つきで言った。

「阿笠が何も言わないのは自分の力がどのくらいあるのか知ってるからだよ。俺らは嫌なことは嫌だって言って本当にやらないけど、阿笠は結局はやってくれるだろ」

春樹は前髪をかきわけながら、少し視線を下げて低い声で言う。

「傷つけないでよ。阿笠を」

烈は何か言おうとしたが、何も言えずにいる。

春樹はこれ以上言っても5組生徒には何もできないと悟ったのか、5組を出ようと振り返る。

だがそのとき、グランドがザワついてるのにみんな気づいた。

5組の誰かが窓から身を乗り出してグランドの様子を見るなり突然叫んだ。

「阿笠っ！！！」

その声に烈と春樹と秋人は勢いよく振り返って窓に駆けつけた。

さっきまでサッカーをしていたはずの阿笠が何やら倒れている。

一緒に遊んでいた男子が阿笠を取り囲み、グランドで部活をしていた生徒たちもワラワラと集まってきている。

「阿笠っ……」

秋人はグランドへ行こうとすぐに走り出そうとするが、秋人よりも先に烈が飛び出した。

烈のはやさに驚いた秋人は一瞬立ち止まる。

すると他の5組生徒たちも教室から飛び出して行った。

ポカンと口を開けて驚いている秋人に、春樹はクスクス笑いながら言った。

「なんだかんだ言って結局愛されてんだよ。阿笠」

春樹も5組生徒に怒りたい気持ちがあるのはヤマヤマだ。

でも代わりに秋人が怒ってくれたから春樹は冷静でいられた。

秋人は外を見つめている春樹を見て、ようやく肩の荷を下ろす。

「――――だな」

そのうちようやく烈がグランドに現れた。

倒れている阿笠にごめんと謝りながら今にも泣きそうになっている生徒もいる。

烈は群衆をかき分けて入って行った。

「阿笠?!」

阿笠は気を失っているようだ。

烈は阿笠の上半身を抱き抱えて、周りにいた人に状況を尋ねた。

どうやらサッカーをしている最中に野球部が打った球がこっちに飛んできたらしい。

当たりそうになったのは阿笠ではなく他の人だったが、球に気づいた阿笠が彼をカバうようにして飛び出した。

手を出して頭を守ろうとするが、頭は阿笠の右側の頭を多少かすってそのまま後方に飛んで行ったようだ。

その衝撃で阿笠は倒れてその拍子に頭をグランドの地面に打った。

気を失っているのはそのせいのようだ。

球がかすったことはあまり関係していない。

「頭打ったのか……よし」

烈は阿笠をおぶる。

そのとき教師がやってきたが烈は阿笠を教師には渡さない。

「愛川～……」

ボールを打った張本人らしき野球部員や阿笠にカバってもらった生徒が泣きそうな顔で烈の名前を呼ぶ。

「大丈夫だから。阿笠つれてっから」

とりあえず烈はあまり揺らさないように歩き出す。

群衆の中には一緒に走ってきた5組生徒たちもいたが、烈は目もくれずに一目散に保健室へと向かって行く。

阿笠と烈がいなくなってもしばらくはまだグランドはザワついていたが、教師たちが何とか場を収めた。

さっきあんなことがあったというのに烈はまったく気にせず阿笠を運んでいる。

当たり前か。

親友が倒れていたら真っ先に駆けつけるくらい誰でもする。

「ん……」

昇降口で靴を適当に脱ぎ散らかしてスリッパも履かずに校内に入った直後、阿笠がかすかに声を漏らした。

「気づいたか？阿笠」
「あれ……烈？俺……？」
「大丈夫か？頭打ったらしいから保健室行くぞ」

阿笠はボーッとする意識を整えようとするが、まだ多少クラクラしているようだ。

そのうち保健室に付き、養護教諭がいなかったから勝手に阿笠をベッドに寝かせた。

靴を脱がせて、布団をかけてあげている。

「烈……」

阿笠はうつろな目で烈を見ている。

「ごめん……俺、勝手だった」

阿笠のその言葉に烈はさっきの秋人の数々の言葉を思い出させられる。

烈だって阿笠のワガママがいつも小さなもので、絶対人を困らすことは言わないと知っていた。

知っていたけどそれが当たり前になってしまっていた。

「……阿笠が謝ることなんてない」

「……え？」

「月影に怒られたよ。悪かったのはこっちだ。ごめんな」

「秋人……？」

「もう二度とお前の嫌がることはしない。なんでも本音言ってくれ」

烈は切なそうな表情をする。

阿笠には何がどうなっているのか分からなかったけど、言えることは1つだった。

「いつだって本音だよ。だから俺ワガママだもん」

阿笠は軽く笑う。

そうしてまだ頭の調子が良くないらしく、阿笠は眠りに付いた。

烈は阿笠が寝てからもずっと側にいる。

養護教諭が帰ってくると事情を説明して、そのうち連れて帰ると言った。

おそらく脳に異常もなく、今はただ日々のストレスや疲労でぐっすり寝ているだけ。

烈はそう理解したようだ。

５組の生徒たちが阿笠の様子を見に来てはまた作業に戻り、また様子を見に来る。

その繰り返しだ。

１８時を過ぎた頃、保健室にいる他の生徒たちがちょうどゼロになる。

烈はキュッと唇を噛み締めて、阿笠の顔を覗き込む。

「ワガママなもんか……」

静まり返っている保健室の中に烈の震える声が響く。

「ごめんなんて言うなよ……こっちのセリフだ」

決して応答のない阿笠に烈は言い続ける。

「阿笠……本当良い奴」

ベッドのすぐ側で椅子に座っている烈は、ベッドに頭をうずくめる。

悔しさで何も言えなくなったゆえの行動だが、そのうち烈まで寝てしまった。

それから1時間くらいして先に阿笠が目を覚まし、寝ている烈を起こす。

目をこすっていた烈に阿笠はいつもと変わらぬ笑顔を見せた。

烈はいたたまれなくなるが、それでも阿笠は笑ってくれるから烈も少しだけ笑顔になれた。

烈と阿笠が一緒に5組に戻ると、5組生徒はまだ作業を頑張っていた。

2人に気づいたクラスメートたちは歓喜の声を上げながら近寄ってくる。

ごめんと
ありがとうと
無事で良かったと

みんなが阿笠に言う。

そうして阿笠はいつもみたいに笑ってみせたんだ。

next

第135話【大ばか野郎】

「いやー、良かった」
「もう平気なのか？」

教室に戻ってきた阿笠にみんなが取り囲む。

クラスメートたちの顔に安堵が伺えた。

烈も一緒になって安堵しているが、ハッと気づく。

「みんな違うだろ」

烈がそう言うと、今度はみんな烈のほうを振り向く。

「一番言わなきゃいけないこと言わなきゃ」

烈の言葉にみんなもハッとしたようだ。

阿笠が無事だったことに安心してしまったせいで根源を忘れていた。

みんな阿笠のほうを向いて軽く頭を下げる。

「ごめんなさい！」

声はバラバラだったけど、確かにその場にいる5組生徒全員がそう言った。

突然頭を下げられて阿笠は困惑するばかりだ。

阿笠はチラッと烈を見る。

その視線に気づいた烈は阿笠に言った。

「俺らお前に甘え過ぎてた」

「烈」

「さっき阿笠言ったよな。いつも本音言ってるし自分はワガママだって」

烈は阿笠に近づいて行く。

そうして、阿笠の制服を阿笠に渡した。

阿笠はキョトンとしながらそれを受け取る。

「お前の言うワガママなんて全然ワガママじゃないよ。もっと俺ら困らせてよ」
「困らせて…って……え？」
「自分優先して良いんだよ。言ったろ、何したって嫌いになんかならないって」

阿笠は烈から渡された制服をじっと見つめている。
誰がたたんだのかとても綺麗だ。

「キッチンやりたいならキッチンでも良いよ。……いや、文化祭だけじゃない。普段だってもっと自己主張して良いよ」
「……」
「違うか。良いよ、じゃなくて、してください……かな」

すると烈に続いてクラスメートたちが次々に言った。

阿笠なら何とかしてくれるって頼りすぎてた
阿笠にばっかりいつも大役押し付けてた
阿笠がタマに壊れるのも一種のストレス発散なんだよな
いつも私たちのこと考えてくれてたのに、阿笠くんの気持ち考えな

くてごめんね

とにかくみんな口々に言ってくるものだから聞き取れないほどだ。

それでも阿笠は必死になって耳を傾けている。

まさか自分のとった行動でみんながここまでしてくれるなんて思ってなかったのだろう。

嬉しさ反面申し訳ない気持ちもあるようだ。

まだみんなが何か言っている中、烈が阿笠の名を呼ぶ。

すると不思議とクラスメートたちは黙り込んだ。

「阿笠のこと何も分かってなくてごめんな。俺、もっと頑張るから」

烈は目に涙を溜めて、でも笑いながらそう言った。

正直阿笠はサッカーしている間クラスメートたちへの怒りでいっぱいだった。

衣装を汚してクラスメートを困らせて、本番もサボろうとさえ考えていたのだ。

他人のことを優先しまいがちな自分を恨み、悔しさを覚えていた。

もう二度と他人を優先させるものか、助けるものかって思っていた矢先、結局1人の男子をカバって自分が怪我をした。

阿笠は気を失っている中で自分をバカだと責めていた。

有言実行しなきゃ何の意味もないのに、結局また自分を犠牲にしている。

生まれつきの性だからどうしようもないのだと言い聞かせても、自分に腹立っていた。

こんな自分は損な役割でしかないと思っていた。

あんなことを言ったのだからきっと烈もクラスメートも自分に嫌気がさしたに決まっている。

きっともう烈にさえ相手にされないかもしれない。

そう思っていたのに、目が覚めたとき自分をおぶってくれていたのは烈だった。

大丈夫かと優しい言葉をかけて介抱しようとしてくれていた。

嫌われたと思っていたのに、わざわざ教室から走って来て助けてくれた。

阿笠には、それだけで十分だったのだ。

「烈は……誰より俺のこと分かってくれてるよ」

阿笠は制服を握る手に少し力を込める。

その手はかすかに震える。

「困ってるとき、悲しいとき辛いとき……いつだって側にいてくれる」

阿笠の目にも涙が溜まる。

阿笠はたたんである制服に顔をうずくめるようにして覆った。

「ワガママなんか言えない……」

おそらく涙を見せないための行動だが、その肩は震えている。

誰もが阿笠が泣いていることに気づいている。

烈は袖で自分の目を拭き、阿笠の頭を片手で押さえてギュッと抱きしめた。

「言ったって良いんだよ。誰も軽蔑なんかしない……」

その光景に誰もが感激している。

女子の中にはもらい泣きしている子さえいる。

「俺はお前が犯罪者になったって味方できるって約束できる」

阿笠は鼻をすする。

その言葉を言える気持ちは綺麗な心かもしれない。
けど実際にそんな場面になったら約束を破るに違いない。

でも、誰も烈の言葉を嘘だとは思わなかった。

「頼むから、自分を追い詰めないでくれ」

たかが阿笠がキレただけで何でみんなここまで熱くなるのかと思うかもしれない。

ただ、最近よく怒る中でも今回のキレ方は尋常ではなかった。
この前テストを配られたときの数倍のキレ方だった。

そんな阿笠を見るのは烈とて初めてだ。

つまりそこまで怒るのはよっぽどのことだということ。

その原因が自分たちにあるのだから、熱くならずにはいられないだろう。

ここまでの友情物語ってあるだろうか。

「キッチン……」

烈に抱きしめられ制服に顔をうずめながら、阿笠はボソッと呟いた。

その声を聞いた烈は阿笠を離す。

すると阿笠は制服から顔を外して、指で目を軽くこすってから言った。

「……キッチンはやらない。俺、客寄せだから」

みんなその言葉に耳を疑う。

「6組よりも集めるって約束……したし」

烈は阿笠の肩をガッと掴んで少し声を上げて言った。

「俺らの言った意味分かってる?!阿笠の好きな…」
「うん、だから」

だが阿笠は烈の言葉を遮る。

「自分がしたいと思って今客寄せ選んだよ」
「でもっ……」
「みんなは俺が客寄せすることに不満があると思ってるかもしれないけど、俺も優勝したいからそれ選んだんだよ」

阿笠は微笑んでいる。

烈は阿笠の肩からそっと手を離す。

「自分の意思だよ」

それは本心か偽りか。

それには烈にも分からず、阿笠にだけ分かること。

それでも阿笠がそう言うのだから烈もみんなも信じざるを得なかっ

た。

どこまで優しいのだろう。

「……ばっか野郎」

そう言って烈は軽く阿笠の腕をたたく。

けどその表情は確かに笑っていた。

「よく言われます～」

阿笠もまた笑っている。

偽りのものかもしれない。

また己を犠牲にしているかもしれない。

けれど、そこにはただ優しい空間が流れている。

烈たちの話を理解した上での阿笠の選択に、もう誰も何も言わなか

った。

「あ、衣装ボロボロ」

阿笠は思いついたように衣装を見ながら言った。

「派手にやってくれたじゃん。誰か直せる奴ー」

烈がそう言うと、数人の女子が挙手をした。

とりあえず着替えることにして、衣装を女子たちに預ける。

再び制服を着た阿笠は、

「あーやっぱ制服落ち着く」と笑っている。

みんなそろそろ帰る支度をし始めているため作業を中断する。

阿笠もカバンに荷物を詰めている。

「ど？チャイナ服は」

作業を切りの良いところで止めて終わらせてきた烈が、帰る支度をしながら阿笠に尋ねる。

「最悪の着心地だね」
「ははは。そっか」
「でも少しくらいは着ても良いかも」

その言葉に烈は、えっ！と驚いた声を出す。

「あれ俺のでしょ？俺も中華料理店の一員だし」
「阿笠……」
「あ、クラスのためとかじゃないよ。ただ良いかなって思えたから」

阿笠は、自分は全然損な役割なんかじゃないと思った。

たとえ面倒なことばかりだとしても、必ず側には烈がいてくれる。

烈が自分を心配してくれて支えてくれる。

1人じゃない。

1人じゃないから。

「分かった」

そう言ってとびきりの笑顔を見せてくれる烈がいるから。

next

第１３６話【初対面】

「やーべぇ、もうこんな時間か」

５組の隣で６組も文化祭に向けての作業を頑張っている。

といっても、もうほとんどの生徒は帰っている。

残っている数人は運動部に所属している生徒で、部活ある日はできないから部活のない日に遅くまで残っているのだ。

「そろそろ切り上げる？秋人」

「ん～、どうすっかなぁ」

その頃烈と阿笠は帰る準備を終えていた。

５組の生徒たちは阿笠が目覚めるまでみんな待ってくれていたからかなりの人数がいる。

それでもそろそろ帰って行くようだ。

烈たちも同じように帰るのだが、烈が６組に寄りたいって言うものだから阿笠と２人で６組へと向かう。

当然作業をしている秋人や春樹がいるわけで。

「月影」

烈はドアを開けて秋人の名前を呼ぶ。

秋人と春樹はその声のするほうを振り向いた。

「愛川。……と、阿笠！」

すると烈は秋人たちに近づいて行く。

「いろいろありがとう2人とも」

烈は軽く微笑みながらそう言い、それ以上は何も言わなかった。

秋人たちは一瞬時間が止まるが、2人が一緒にいるということは和解したのだと理解した。

すると春樹は荷物を背負って思いついたように言った。

「４人で飯行かない？」
「お、良いな。阿笠と愛川も行くだろ？」
「んー…」

春樹の提案に秋人は乗り気だが、阿笠は曖昧な返事をする。
何だよ、用事？と烈が阿笠に言うと阿笠は笑いながら言う。

「いやー、今日３００円しか持ってないんだよね。烈貸して」
「しょーがねぇなぁ」

というわけで、４人で夕飯を食べに行くことにした。

なかなか珍しい組み合わせだ。
いや、そうでもないか？

秋人と春樹は親友で、秋人と阿笠は相棒、阿笠と春樹は去年同じクラスで、烈と春樹は昔なじみ、烈と阿笠は親友。
烈と秋人があまり接点がないだけだ。

４人は仲良く校舎を出て駐輪場に行く。

烈は今日は歩いてきたらしく、自転車はない。

「だから1限遅刻したのか」

阿笠は納得し、烈を荷台に乗せて走り出す。

秋人と春樹も同様に自転車を走らせた。

まだ運動部は部活をしている。

夕飯を食べに行くと言ってもどこへ行くかは決めておらず、４人はあーだこーだ言いながら自転車をこいでいる。

結局家の方向はほぼ同じだから問題はない。

ファミレス、ラーメン屋、居酒屋……いろいろ提案が出て話がまとまらないようだ。

そうこうしているうちにいくつか店を通り過ぎそうになり、結局ファミレスに行くことになった。

ファミレスはファミレスでも、静岡県にしかない「さわやか」というファミレスでスポーツマンならたいていは知っている店だ。

もちろんスポーツマンじゃなくても知っているだろうけど、特にさわやかのゲンコツハンバーグというのがガン担ぎしてくれるのだ。

例えば芸能人で言えば野久保〇樹も球児時代によく食べていたし、甲子園で優勝した高校も甲子園に行く直前に優勝できますようにと願掛けて食べた。

なにを隠そうあの佑亮がいた時代、星陵サッカー部は全国大会行く前にそれを食べた。

もちろんガン担ぎのため。

まぁ今回４人がさわやかを選んだのはちょうど通りにあるからという理由だが。

「いらっしゃいませー。４名様でしょうか」
「はい」
「ではこちらにどうぞ」

ウェイトレスに席まで案内されてメニューを渡される。

メニューを見て悩んでいると、斜め後ろらへんのテーブルに座っていた男の子たちが何やら立ち上がって近づいてきた。

「春樹じゃん。うーすっ」
「あっ、烈もいる！」

どうやら春樹と烈の知り合いのようで、2人も「おー！」と嬉しそうに話している。

流れ的に2人と小学校が同じで、特に中学は春樹と同じだった人たちのようだ。

烈と春樹は小学校は一緒。

すると、向こう側が阿笠と秋人がいることに素早く気づいて声を上げた。

あまりの叫び声に思わず店にいるほとんどの人が振り返った。

「月影に阿笠だー！うっわ、ラッキー！！」
「まじだ！すげぇ！」
「えー！まさかこんなとこで会えるなんて！」

男子たちはどうやら秋人たちのことを知っているようだ。

どうやら他校のサッカー部のようで、手すら届かない星陵サッカー部にはかなりの憧れを抱いているようだ。

その星陵サッカー部が目の前に、しかもあの月影秋人と阿笠大悟がいるのだ。

興奮するのも無理はない。

さすがに秋人ももう慣れているようで、軽くあいさつをしたりしている。

すると男子の1人が阿笠の手をギュッと握った。

阿笠は一瞬ビクッとするが、驚くより先に相手の猛烈なラブアタックに完全に押し負かされている。

「俺もFWなんすよ！阿笠さんには遠く及ばないっすけど」

「え、同じだ」

「だからすっげぇ憧れてて！もー会えて嬉しいっす！」

同級生なのに思わず敬語になっていることに阿笠もつい笑えてしま

う。

「そっかぁ、そう言ってもらえると嬉しいな」

その男子は照れているよえで顔を赤くする。

憧れの人と話せるってそれほどまでに嬉しいことなのだろうか。

秋人はその光景をなんとなく悔しそうな表情で見ている。

熱狂的なファンがいることが羨ましいわけではなく、いろんなことがあったのに阿笠が屈託のない笑顔をするものだから。

決して阿笠が強いわけではないんだろうけど。

「予選で当たったら戦えるね。楽しみ」

「滅相もないっすよ。うわー、うわぁ。やっべ～」

彼は喜びをどう表現したら良いのか分からないようで、一緒にいた男子たちに嬉しそうな顔を向けている。

友達たちは彼が阿笠の大ファンなことを知っているようで、

「はいはい、良かったな」とはにかんでいる。

そんな彼らを見ると阿笠もつい微笑ましくなる。

もともと秋人が阿笠と仲良くなれたのは、阿笠の真っ直ぐな性格のおかげだ。

初めて中学のとき県選抜で顔を合わせたとき、秋人のプレーはその場にいる全員を唖然とさせた。

やはり選抜に選ばれるのは小学校のときにも選抜に選ばれてた人がほとんどだったから、中学から選抜入りした秋人自体が珍しいものだった。

中学で初めて選抜に選ばれたというのにその場にいる誰より上手いことにみんな驚いていたが、阿笠だけは違った。

『あれー、君誰？』

『……月影秋人』

『へぇ！俺は阿笠大悟。上手いね、君』

初対面の秋人にあの屈託のない笑顔を見せた。

『俺ね、正直ここにいる面子とじゃだめな気すんだ』

『何？レベルが違うってこと？』

『うん。でも君とならいける気がする』

悪びれた素振りも見せずに阿笠はあっさりそう言ってのけた。

確かに秋人がくるまで阿笠は選抜の中でも一番に上手かったし、レベルも正直合っていなかった。

だから秋人を見て直感的に思ったのだろう。

『買いかぶり過ぎじゃね？俺たいしたことねぇよ』

照れ隠しで秋人はついそっぽを向いてしまうが、阿笠は純粋な目で言った。

『んなことないよ！一緒に日本一になろう！』

日本一、そんな言葉秋人には聞いたことがなかった言葉。

アメリカでトップになることしか頭になかったのだから当然と言っては当然なのだが、それでもその言葉に秋人がどれだけ救われたか。

サッカーの道を教えてくれたのは紛れもなく佑亮だ。

だけど、サッカーでトップになれると言ってくれたのは阿笠だった。

日本にいていいんだと、言われたようだった。

『日本……一？』

『うん。あ、世界一のほうが良かった？』

『え……あ、や……』

秋人がこの選抜にきたのはもう佑亮が引退したあとだった。

佑亮がいなくなったあとの秋人のサッカーへの道しるべは、阿笠大悟。

彼自身だった。

『俺ね、大好きなサッカーやれるだけで嬉しいんだ。お前もそうだろ？』

『あ……ああ』

『そのサッカーで一番になれたらきっともっと嬉しい。そう思わねぇ？』

楽しそうにそう言う阿笠の顔が今でも離れられないと、秋人はのちに語っていた。

あのとき秋人に物怖じせずに一番に話しかけてきたのが阿笠だったから、2人はこんなにも信頼し合える相方になれた。

中学から始まって、今の高校時代に至り、それはきっと一生ものとなる。

「秋人？どうかした？」

ボーッとしていた秋人に阿笠は不思議そうに話しかける。

秋人はハッと現実に引き戻されて、慌てて返事をする。

「もー。聞いてなかったろ」

頬を膨らませながらそう言う阿笠に秋人は笑って受け流す。

さすがに過去を思い出してた、なんて言えない。

するとまだあの男子たちがいて、阿笠たちに尋ねた。

「そういえば今度静岡対全国でまた試合しますよね」

「どっちに出るんすか？」

その話は春樹も烈も初耳だったようで、そうなんだと少し驚いている。

秋人と阿笠は少し顔を見合わせた。

まだ監督とも話し合ってないからなんとも言えないはずなのに、秋人ははっきりと言う。

「……俺ら今回別々だから」

まさかこんなところで言うなんて思ってなかった阿笠は、

「ちょっ……秋人！」とかなり動揺している。

一緒に出るのならまだしも2人が別々に出るとなれば周りは黙ってはいない。

そのくらい2人にも分かっているはずだが……

「俺全国選抜として出る。だから阿笠は県選抜に出ろ」

「だっ……お前っ……」

「あ、逆が良い？」

阿笠は口をパクパクさせて呆然としている。

男子たちに加えて春樹と烈も予想外の言葉に驚きを隠せずにワイワイ騒いでいる。

「阿笠、俺もさ、やってみたくなったんだよね」

「へ……」

「やっぱ世界一になるにはお互い戦う必要あるよな」

秋人はさっき阿笠に言われてからいろいろ考えていたようだ。

あのときは阿笠の押しに負けて分かったと言ってしまったけど、よくよく考えて阿笠の言葉は最ものようだ。

2人が全国選抜でもチームを引っ張っていることは自他共に認めている。

つまり、一番の敵はお互いであると。

「世界一って……」

「お前が昔そう言ってくれたじゃん。忘れた?」

「……覚えてたんだ。あんな昔のこと」

「忘れるもんか」

秋人はハハッと笑う。

「俺が全身全霊かけてお前の攻撃とめてやる。だからお前は俺の攻撃とめてみろ」

「言ったな。俺の攻撃とめれたら褒めてやる」

「マークしてやっから」

「ははん。覚悟しとけっ」

阿笠も乗せられて言う。

だが次の瞬間には事の重大さを思い出す。

「だからってここで言うこたねぇだろー！」

「あ、そっか。やべ」

「ったく……勝手に決めて絶対怒られるよ」

「まぁ良いじゃん。怒られるのは一緒だし」

「お前はー……」

阿笠はため息をつく。

確実に近隣のサッカー少年の間ではこのことがバレてしまうだろう。

背びれ尾びれのついた噂が一緒になってみんなに知られることは間違いなしだ。

監督の耳に入る前に電話をしなければ。

とか、そんなことを考えてるのは阿笠だけのようだ。

秋人は今からもう試合するのを楽しみにしている。

そんな秋人を見たら阿笠だって楽しみだと思わないはずがない。

「しょーがないなぁ」

静岡県選抜チーム、キャプテン代理・阿笠大悟

ポジション　ＦＷ

対するは

全国選抜チーム、キャプテン月影秋人

ポジション　ＭＦ

所属、星陵高校サッカー部。

next

第137話【揺れる心】

「はーい。って、麻冬？！」

夜、部活を終えてもう家に着いていた夏実の家に麻冬が訪れた。

学校から直で来たのだろう、制服のまま。

「あは、ごめん。会いたくなっちゃって」

麻冬は苦笑しながら言う。

とりあえず夏実は麻冬を家に入れた。

夏実もだが、まだ麻冬はご飯食べてないはずだから夏実は麻冬に「夕飯食べるでしょ？」と尋ねた。

麻冬は歯切れの悪い返事をする。

何かあったんだと思った夏実は、母親に麻冬の分の夕飯の用意して欲しいこととそれを部屋まで運ぶことを伝える。

母親はすぐに2人分の夕飯を用意してくれた。

おぼんに乗せて夏実はそれを持って自分の部屋まで運ぶ。
麻冬は夏実の親に軽くあいさつをして、夏実のあとを付いて行った。

夏実の部屋へ行って夏実がご飯を食べ始めても、麻冬は手をつけようとしない。

食べないの？と夏実が聞くと、食べるよと愛想笑いするもののなかなか食べないでいる。

なにか重要なことがあったらしく、夏実もどう切り出せば良いのか分からずにいる。

もぐもぐとご飯を食べながら、重い空気をどうにかしようと夏実は試みた。

「麻冬、秋人のこと好きだよね」

夏実がそう言うと、麻冬は顔を勢いよく上げた。

「知らないと思った？分かるよ、見てたら」

前になんらか会話をしていたとき、麻冬の態度を見て夏実は気づいたようだ。

それでも麻冬からなにも言ってこないから夏実も黙っていた。

「……ごめん」

麻冬は正座していた足を少しくずす。

そうして、言った。

「こんな優柔不断なあたしは……嫌われると思った」

「優柔不断？だって阿笠くんを選んでるじゃない」

「……」

「……まさか…」

夏実はハッとする。

どうやら少しだけ何があったのか分かったようだ。

だけど、それを口にすることを躊躇しているようで夏実は黙り込んでしまう。

シンとした空間に流れる気まずい空気。

あんな反応されたら誰でも分かってしまう。

だが、夏実は秋人が麻冬を好きなことを知ってるけど、告白したことは知らない。

だから麻冬が告白されたかどうかは分からないため、夏実は一種の賭けに出た。

「どうして…秋人じゃだめなの？逆に言えばどうして阿笠くんなの？」

そう言われた麻冬はビクッと肩を震わせた。

基本的に夏実も麻冬も自分が困っているからといって人に頼ったりはしない。

泣きそうなくらい悩んでいても、気が滅入るくらい辛くても弱音は吐かない。

それでも、やはりお互いの顔を見たくなるようだ。

春樹に振られたとき夏実は麻冬の家にやってきた。
すべてを話すわけではないけど、それでも麻冬に励まされて元気を取り戻した。
彼女らは、男子たちよりも数倍強い。
どんな逆境でも人を頼ることを知らない。
「……あたしね、初恋は阿笠だったの」
夏実の聞いた質問とはまったく違う答えを言う麻冬。
「あんなに真っ直ぐに思われたの、初めて」
それでも麻冬が頑張って何かを言おうとするものだから夏実はつい耳を傾ける。
麻冬はお茶を一口飲んで、また続ける。
「秋人は……不器用なの。振ったのに、それでも好きでいてくれてる」
「…」

「2人ともあたしにちゃんと気持ちをぶつけてくれた。なのに……」

なのに麻冬は阿笠を選んだ。

阿笠は、春樹は秋人はそれを同情だと言う。

だが、なぜ阿笠を選んだのかは麻冬自身よく分かっていないようだ。

秋人への気持ちがあるのも確かだけど、阿笠への眠っていた恋心が湧き出てきているのも事実なのだ。

「……あたしずるいね」

「え……？」

「いろいろ考えて阿笠を選んだのよ。ちゃんと阿笠のこと好きなつもりなの。だけど、秋人がああ言ってくれて……実際また揺れてる」

麻冬にとっては阿笠という存在は切っても切れない縁だ。

中学のときの彼氏というだけでなく、やはり人生で初めて愛した人だから決して忘れられない。

別れてからも、高校入ってからずっと話さずにいたのは未練がましい女だと思われないため。

秋人を好きになったのだって、阿笠とまったく性格の人を好きになれば良いと思ったから。

ちょうど仲の良い友達ができて、もし秋人を好きになれば、秋人と付き合えれば阿笠を忘れられると思ったから。

「……だめだ。夏実に言うことじゃないや」

「麻冬…」

「ごめんね、変なこと言って。さ、食べよっか」

麻冬は作り笑いしながらご飯にありつける。

夏実は何か言おうとしたけれど麻冬がそうさせない。

何を言われても結局は麻冬が決めなきゃならないと、麻冬は分かっている。

だから夏実の励ましの言葉を聞きたくなかったのだろう。

夏実は仕方なく麻冬の言ったようにご飯を食べるが、しばらくしてから小声で言った。

「何かあったら言って。何もできないかもだけど、悩みくらい聞く

よ」

夏実も春樹と付き合うことになるまでいろいろあった。

切ない思いもしたし、悲しくて泣いた。

それでも諦めない気持ちが春樹を動かした。

春樹も、プライドを捨てて夏実を選んだ。

だからこその愛がそこにある。

「……1人じゃないことは心強いって、麻冬知らないでしょう?」

「夏実」

「泣いたら胸を貸すし、愚痴りたかったら朝まで聞くし」

そうして、夏実は手首についてるミサンガをチラリと見せて笑って言った。

「友達ってそういうもんでしょ?」

夏実があまりにも頼もしいことを言ってくれるものだから、麻冬は

つい笑ってしまう。

「そうね」

今は笑っていても明日はどうなるか分からない。

諦めないと言った秋人にこれからどうするのか検討もつかない。

それでも、結果のない未来はこない。

今こうすることで何がどうなるかなんて分からないけれど、それでも今こうして何かをしなければ全ては始まらない。

物事には終わりがあるように、なんらかの終わりがある。

例えば麻冬たちのトライアングルの恋は、中2のとき阿笠と麻冬が恋した時点で始まりを迎えていた。

もっと言えば出会ったときから始まっていたかもしれない。

そうして幸せが掴めたとき、全員が笑ってられるとは限らない。

それでも少なくとも遠い未来で再び出会ったときに、ああ…あのときは。と笑ってられるようにするために、みんな今この時を頑張るのだ。

見えない未来でも必ず明日は来るのだと、誰かが言った。

来ない明日はないと、誰かが言った。

それは綺麗事かもしれない。

けれど……

「あ、そういえば聞いた？文化祭ねー、日程遅らすって」

「えっ？」

夏実と麻冬がそんな会話をしていた頃、ファミレスでご飯を食べ終わって未だにべちゃくちゃと楽しげに話しているあの４人たちも同じ会話をしていた。

「ぅお、まじか」

まずは烈のもとに誰かからか電話があり、その旨を烈に伝えたようだ。

「ああ、分かった。んじゃな」

電話を切り終わったあと、烈は他の3人にその話をし始めた。

「あのさ、今生徒会から電話きてさ」
「んぁ？」
「文化祭日程伸びた」
「はっ？！」

そもそもなぜ生徒会から電話がくるのか、そこに突っ込みたいところだがあえて誰も突っ込まずにいる。

「最後の週になった。最後の週の金土でやるって」
「なんでぇ？」
「招待試合の都合とかいろいろあって」
「へー」

まさか延期になるとは誰が予想していたか。

まぁ彼らにとっては文化祭がいつになろうがあまり気にはならないことだ。

いや、違う。
気にならないことはない。

「あ。次の日」
「あ。試合だ」

あまりの突然のことで大きなリアクションもできない秋人と阿笠。
次の日試合ということは実際土曜日の夜にはこっちを出なければならない。
ということは、後夜祭になど出てる余裕はない。

まぁもともと秋人にいたっては彼女がいようがいまいが後夜祭には出る気はない。

「え～？ハードスケジュールだな……」
「文化祭のあとそのまま直行するか」
「秋人んちホテル？」
「だと思う」

どうやら直行するのは全国選抜だけのようだ。

場所は静岡西部らしいから、まぁ当然である。

全国選抜のほうは前日からホテルに泊まると予想できる。

「てか絶対前日練習でしょ、そっち」

阿笠はケラケラ笑いながら言った。

「だろうな。まぁなんとかしてみる」

「まぁ秋人がそっちに出るってだけで監督も喜ぶだろうし、たぶん平気だよ」

基本的に今月の土日は選抜での練習が多くなる。

ということは、2人が離ればなれで練習するということだ。

悩みに悩んでる麻冬がいる側で、2人はサッカーできることの嬉しさに浸っている。

伸びた文化祭

それまでの期間

どうなるだろう。

next

第１３８話【麻冬の本音】

朝練が終わり麻冬が玄関付近を歩いていると、誰かが麻冬を呼び止めた。

「麻冬！」

「あ、秋人。おはよう」
「おう。一緒に行こうぜ」

昨日の今日で麻冬は正直顔が合わせずらいようだが、秋人はそんなことまったく気にしていないようだ。

２人で歩いていると、阿笠が秋人の肩を掴む。

「こら。朝っぱらからちょっかいだすな」
「うわ、出た」
「先に部室出てったから何かと思えば。ったく」

阿笠は麻冬の手をグイッと引いて秋人から離れさす。

抜け目ない秋人の行動に阿笠も呆れつつ関心している。

「もう遠慮しねぇし」

秋人はフフンと鼻で笑いながらそう言う。

「公衆の面前だっつの」

「良いんじゃん？俺らもともと友達だから怪しくないし」

「だめ。絶対やんない」

阿笠は麻冬の手をつないだまま歩き始める。

つられて麻冬も歩くが、それを追うように秋人は話しかけながらついていく。

はたから見れば仲が良い3人が一緒に登校してるくらいにしか見えない。

だが秋人と阿笠の間にはバチバチと火の粉が飛んでいる。

どうやら秋人は本気らしい。

「だー、もう！麻冬に話しかけんなっ」

「うるせぇなぁ。嫌ならあっち行けよ」

「お前が行けーっ！」

まぁ当然だろう。

秋人にとっては期限付きの恋なわけなのだから。

そうこうしているうちに3人は教室の前まで行く。

5組の阿笠は仕方なく2人と分かれて教室に入って行った。

秋人と麻冬も一緒に6組に入る。

2人が一緒にいても誰も何も言わないし驚かない。

友達なのだから友達だという風に目もくれない。

違う感情を抱いているのは当人たちばかりだ。

秋人はそれでもまだ麻冬に思いを伝えるだけだが、麻冬にとっては地獄だろう。

あのまま秋人が引き下がってくれたら3人の恋はそこで終わることができた。

麻冬と阿笠が付き合って、秋人はそのうち麻冬を忘れる。

そう望んでいた麻冬にしてみれば、なくそうとした思いを掘り返された気分だ。

だけど、誰も真実を知らない。

みんな麻冬が阿笠と付き合った理由を……いや、むしろ秋人を好きになった本当の理由を誰1人として知らない。

知っているのは麻冬だけ。

春樹だって、阿笠でさえ知らない麻冬の本当の気持ち。

そんなこと言えないだろう。

言ったら事がもっとひどくなるに違いない。

傷つく心が大きくなるだけだ。

それでも言わないわけにはいかない。

秋人も阿笠も、必死になってくれている。

苦笑して見てれば良いだけなんてそんなの、お門違いにもほどがある。

はやくも午前の授業が終わり、昼休みになる。

４人で教室で食べるかと思いきや、いきなり春樹はこう言い出した。

「わりっ。今日は夏実と食うわ」

そう言って春樹は夏実を連れて行ってしまった。

ポカンとしながらも秋人は先に我に返り麻冬に言った。

「じゃあ俺らも食おうぜ」

「う…うん」

２人は廊下側の後ろドアに近い席でお弁当を広げた。

２人でご飯なんて別に珍しいわけではない。

けれど2人は異常なまでに緊張しているのか何も喋らず黙々と食べている。

チラリとお互いを見て目が合うと顔を反らす。

そうして2人して顔を赤くするなんて行動ばかりを繰り返している。

周りも2人の不思議な反応になんだなんだとチラチラ見ている。

麻冬は分かるが、まさかあの秋人までがそんな反応するなんて。

そんな空気に耐えられなくなった秋人は箸を置いて、少し小声で言った。

「……あのさ、自分勝手なのは分かってる。麻冬も迷惑してることは十分承知してる」

「…秋人…」

「何回も振られてんのに未練がましいって分かってる。けど俺は……えっと……」

秋人は言いたいことがまとまらないようで言葉に詰まる。

「あ〝ー……くそっ。だから……」

顔を赤くしながらそれでも麻冬に伝えようと真っ直ぐな瞳で麻冬を見る。

きっと普通の女の子なら秋人にここまでさせたら簡単に惚れてしまうだろう。

麻冬だってちょっと前まではそうだった。

「……秋人、あのね。あたし言わなきゃいけないことがあるの」

そのときちょうど阿笠が廊下を歩いていた。

ドアの近くでご飯を食べてる2人を見かけて話しかけようとするが、次の麻冬の言葉で立ち止まる。

「阿笠はいつも笑ってくれる。あたしのことを真っ直ぐに好きだって言ってくれる」

なにやら重たい話をしているらしく、阿笠は教室に入って行くのをためらう。

そうして少しドアに隠れながら2人の会話に耳を傾けた。

「今も昔も同じなの。……阿笠を忘れるのはすごく大変だった」
「……それが…」
「ううん、違う。忘れられなかったの」

楽しそうにワイワイ盛り上がっている6組の教室の中で、2人の周りだけ空気が完全に違う。

本当ならこんなこと、教室で言うべきではない。

けれどなかなか言い出せない麻冬には、今しかなかった。

「あたしね、秋人のこと知ってたよ。阿笠からいろいろ聞いてた。阿笠と正反対の性格だってことも……」

麻冬は顔をうつむかせる。

「高校入って秋人と友達になったとき、正直ラッキーって思ったよ」
「は……」
「阿笠とまったく違う秋人を、阿笠と友達の秋人を好きになれば…
…阿笠を忘れられるって……思った」

明かされる麻冬の真実。

面と向かって聞いてる秋人もドアを挟んで聞いてる阿笠も、考えていなかった事実に言葉を失っている。

「愛されたくて阿笠を選んだって、あたし言ったね」
「ああ…」
「阿笠に好きって言われたとき心底嬉しかったよ。でも、あたしの好きな人は秋人のはず。そう思ってたけど……」

麻冬は少しずつ声が小さくなっていってる。

かすかに震える声。

「夏実を思っている秋人が手に入らないなら、もう良いと思ったの」
「……」
「みんなあたしの好きな人は秋人だって知ってるから……なかなか阿笠に素直になれなくて。けど、秋人が夏実を好きならちょうど良いと思った」

誰が知っていたか、このことを。

誰が気づいていたか、このことに。

「つじつま合わせの恋はいらなくなったから……」

いや、気づくはずがない。

秋人を見ている麻冬のその目は一途で、その顔は愛しく、全身で秋人を見ていた。

あんな仏頂面の側にいれるだけで嬉しそうにしていた。

明らかに、あれは秋人に恋をしていた。

「あたし、秋人を愛してない……」

麻冬は泣きそうな顔で秋人を見つめた。

顔を少し赤くして、目には涙が溜まっている。

「愛してないよ……ごめん」

これは確かに麻冬の本心かもしれない。

本当にただのつじつま合わせで始まっただけの恋なのかもしれない。

こんな真顔でこんな嘘がつける人間ではない。

けれど……

「……つじつま合わせだろうがなんだって良い。お前が俺を見てたことに変わりはない」

秋人は唇を噛み締めて切なそうに言う。

「別に阿笠を一途に思ったって良い。俺はそういうお前に惚れたんだ」

「……だめだよ。あたしなんか」

「好きなんだよ！」

秋人は声を上げた。

クラス中に響いて、クラスメートたちは静まり返る。

それでも秋人は気にせず続けた。

「阿笠と性格が違うから、阿笠の友達だから選ばれたって言うんなら……俺は阿笠に感謝するよ」

クラスメートたちも阿笠も、秋人の泣きそうで儚げで、かつ強い声に聞き入れる。

「俺は別にすぐに彼女になれなんて言わない。でも、これからも俺を見てて欲しい」
「できないよ……そんなの」
「文化祭までで良い。それまでに振り向かせらんなかったらきっぱり諦める」

秋人は目を反らすことなく、全身で麻冬を好きだと言いながら気持ちをぶつけている。

こんな一途な秋人はきっと春樹だって見たことがないはず。

秋人自身そういうキャラじゃないし、ましてやこんな積極的に恋愛するタイプでもない。

珍しくこんなに頑張っているのは、きっと麻冬を愛している証拠。

「だからそれまでの間だけは俺のことも見て」

辛いはずなのに秋人はニコッと優しい笑顔をした。

何度も振ったのに、ひどいことを言ったのにそれでも好きでいてくれる秋人に麻冬は言葉が見つからない。

今にも目に溜まっている涙が溢れそうだ。

「あたし……」

どうしたら良いのか分からないでいる麻冬に、秋人は頬に軽くキスをした。

見ていたクラスメートたちの中にはブッと飲み物を吹き出したり、ガタガタと椅子から落ちる人もいる。

「あっ、きと……」

麻冬はキスされた頬を手で抑えながらどうにか状況を把握しようとする。

だが混乱しているようで文句の1つも言えないようだ。

「絶対好きにさせる」

優しい顔してそう言い、秋人は食べ終えたお弁当をとじてそのまま置き、教室を出て行った。

教室はザワザワと騒いでいる。

阿笠は秋人が出てくるとき背中を向けてなんとか立ち聞きしていたことをバレずにすんだようだ。

麻冬にもクラスメートたちは詰め寄るが、麻冬は呆然としていて何かを話せる状態ではない。

それでもクラスメートたちは楽しそうに盛り上がっている。

まさかの秋人の公衆の面前での告白。

阿笠はその後も麻冬に近寄るでもなく教室に帰るでもなく、烈が探しに来るまでその場に立ち尽くしていた。

next

第１３９話【独り言】

『秋人ってあんまり笑わないのねぇ』
『ほっとけ』

友達になったばかりの頃、麻冬はいつになく眠そうな秋人にそう言った。

『女の子に話しかけられてもあんま返事しないわよね？』
『そうだな』
『もしかして好きになった人とかいない？』
『いねぇな』

麻冬が阿笠も星陵に入学したことを知ったのは、入学して少ししてから。

秋人と友達になる少し前のときだった。

推薦で合格していた阿笠は仮入部中もしてないうちにサッカー部の練習に混ざっていた。

もちろん一般で入った秋人もそうだったが。

その光景を見たときに阿笠が同じ高校だと知り、なんとも言えない

憤りを感じたようだ。
また同時に、そのときに秋人の存在も知ったようだ。

あの阿笠が嬉しそうに1人の男子を
「秋人」と呼んでいた。

麻冬はすぐにそれがあの月影秋人だと理解した。

『そうなんだ。じゃああいつとは大違い……』
『あいつ？』
『あ、ううん。なんでもない』

あの日、4人が出会った日に麻冬と秋人が鉢合わせたのは確かに偶然だ。

けれど、仲良くなったのは秋人秋人だったから。

知り合っていくうちに秋人の性格を知っていったから。

『どうしてサッカーやってるの？』
『唐突だな。まぁ…そうだな。ボールがすぐ側にあったんだ』
『あっは。なるほど』

そう、確かに最初はつじつま合わせの恋だった。
阿笠を忘れるために好きになっただけだった。

そう、全ては阿笠大悟のため。

春樹も秋人も阿笠も、そんなこと知らない。
高校入って麻冬は秋人を好きになったけど、阿笠に告白されて阿笠と付き合った。

その理由は、秋人への恋心が報われないものだから。

みんなそう思っている。

実際に麻冬もそう言った。

『サッカーの道教えてくれたのは現キャプテンなんだ』
『あ、あの佐々先輩？』
『姉貴の彼氏なんだ』
『へぇ！』

このときは珍しく秋人が自分のことを喋っていた。

滅多に自分のことを言わないから聞いたらいけないものだと思っていた麻冬は、つい耳を立てて聞き入れる。

『でもサッカーを一生やるって決めたのはさ、ある1人の男のおかげ』

『佐々先輩じゃなくて？』

『ああ。最初会ったときピンときた』

もう誰のことかお分かりだろう。

だがこのときの麻冬には全然予想もできなくて、ただ秋人の話を聞くだけだった。

『こいつとならトップ狙えるって、そう思ったね』

当時滅多に笑わなかった秋人がそう言いながら笑っていた。

この瞬間、麻冬は秋人を好きになろうと決めたのだ。

好きになろうと思って人を好きになることなんて普通できないし、

できたとしてもただの錯覚でしかない。

麻冬はそれを理解した上でそれでも好きになりたいと思った。

だけど、秋人への気持ちが偽物だと言えば嘘になる。

別にただのつじつま合わせの恋なのなら、秋人のことを思ってあんなに泣いたりしない。

悲しくなって、悩んだりもして辛い思いなんてする必要なんかない。

振るときにごめんなんて言いながら泣いたりしない。

誕生日にわざわざあの花を買ったりしない。

全部、秋人を思ってしたことだった。

麻冬は騒がしい教室の中ただ1人、ボーッとしている。

秋人はと言えば、人気の少ない廊下まで行っていた。

そうしてそこでしゃがみこんで頭を抱えていた。

「うわーっ……あほか、俺！」

顔を赤くしてさっきのことを思い出しているようだ。

秋人はあんな言葉言うつもりではなかったらしく、ましてやクラスメートの前で言うなんてあり得ないようだ。

人気は少ないが、時折通る生徒たちが秋人を不思議そうな目で見ている。

まぁ確かにあんなに堂々と阿笠から奪う発言したら恥ずかしいだろう。

というか、クラスメートにバレてしまったわけだ。

これはもう後には引けない。

「バカだー……」

だが、秋人は予想外のことを言われて少し傷ついているのも事実。

阿笠を忘れるために自分を好きだと思い込んでいただけ、なんて言われれば傷つくのも当然だろう。

普通に両思いだと思っていたから尚更だ。

これまで阿笠がいなければ上手くいくはずだった恋が、本当は自分がいなければ上手くいくなんて思いもよらないはず。

今更ながらそれまでの阿笠の立場に立ってようやく、片思いの気持ちを理解している。

あれだけ阿笠に簡単に諦めるなと言ってきたのだ。

引くわけにはいかない。

秋人は立ち上がって廊下にある窓から外を眺める。

「つじつま合わせ、ね」

そこから見えるのは中庭で、中庭にはあまり人はいない。

ふとカップルが目に入る。

よくよく見ればそれは春樹と夏実だ。

昼休み始まってすぐ2人していなくなってしまい、どこに行ったかと思えば中庭だ。

仲良くお弁当を一緒に食べていて幸せオーラ満開。

秋人は窓を開けて少し身を乗りだしながら2人を眺めている。

「バカップルだな、本当」

軽く笑いながらそう言う。

夏実が何やら電話が鳴ったようで、立ち上がって春樹から少し離れて携帯で話をし出した。

暇になった春樹は、空を見上げようと上を向く。

その行動をする流れの中で窓から人が自分たちを覗いていることに

気づき、窓に目をやる。

「……秋人？」

秋人のいる廊下は3階で、2人は会話ができる距離ではない。

秋人も春樹が自分に気づいたことに気づき、手を振る。

「うーす。仲良いな」

ゆっくり言ったようだからなんとなく口の動きから春樹は秋人の言葉を受け取り、ピースしながら笑う。

「麻冬は？」
「教室にいる」

声は聞こえないが、確かに2人は口パクで会話している。

「一緒じゃないんだ？」

そう言う春樹を秋人は、少し切なげに見る。

そうして春樹に分からないくらい少し早口でボソボソと喋り出した。

「なぁ春樹。俺間違ってねぇよな？」

春樹は耳に手を当てて、え？と聞き返している。

それでも秋人は同じようにして言い続けた。

「好きなら一直線にいっても良いだろ？俺のこと好きじゃなくても……頑張るくらい許されるよな」

秋人はあえて春樹にバレないように言っている。

クラスメートに聞けばすぐに春樹や夏実にもバレてしまうことなのだが、それでも自分の口からは言わないつもりだ。

「阿笠みたいなのがタイプらしいけど、俺はこのまんまで行くつもり」

まったく聞き取れない春樹は少し困った顔をしながら首を傾げている。

それでも秋人から視線を外さないところはさすがというか、春樹ら

しい。

「阿笠と違う俺だから好きになろうとしたんなら、今度は俺みたいなのを好きになってもらえば良いわけだよな」

さっきまで切なそうな顔をしていた秋人が、今度は少し強気な顔をしている。

勝負に勝つ自信があるから強気なのではなく、春樹を見て頑張る力をもらったのだ。

春樹は何も知らないし何も言っていない。

けれど、春樹がいつでもいるということを確信した秋人にもう怖いものなどない。

「文化祭まであんま時間ないけど、やれるだけやる。諦めたらそこで終わりだよな」

春樹が何か特別な力を持っているのではない。

ただ春樹は秋人が泣きそうなときは慰めてくれ、辛いとき励ましてくれ、くじけそうなとき支えてくれる人だから。

そう考えるのは甘えかもしれないけど、春樹が転んだって良いんだよと笑ってくれるから。

「またお前に助けられるかもしれない。けど俺はもう前の臆病な俺じゃない」

サァッと風が吹いた。

秋人の髪が揺れ、春樹のネクタイが揺れる。

春樹はその一途な眼差しでじっと秋人を見つめている。

「何度振られても追いかける。頑張る姿勢が大事だって言ってたよな、春樹」

やはり未だに春樹は秋人の言葉が届いていないようだが、それでも真剣な瞳をしている。

そうして秋人はペコッと頭を下げてから、また春樹の顔を見て今度は笑いながら言った。

「そう教えてくれてありがとう」

秋人はそれだけ言って窓を閉めて、その場から離れる。

春樹は秋人を呼び止めようとするが、その声は秋人に届かない。

ちょうど電話をし終えた夏実が戻ってきて、秋人の名前を呼ぶ春樹に問いかけた。

「秋人がどうかした？」

春樹はチラッとさっきまで秋人がいた廊下を見上げ、歯切れの悪い曖昧な返事をする。

夏実は不思議に思うものの特に気にしていないようだ。

「……」

そしてまた春樹はチラリと廊下を見上げる。

もう姿のない秋人を探している。

秋人のクルクル変わる表情から何かがあったことは理解できる。

その何かは分からないが。

でも春樹は、最終的には秋人は笑っていたから「まぁ良いか…」と流すことにしたようだ。

このあと2人は教室に戻ってクラスメートから、秋人が麻冬に堂々と告白したことを聞かされる。

春樹はこのことだったのかと勝手に解釈する。

本当の真意を掴めないまま。

ｎｅｘｔ

第１４０話【強さの根源】

「そーんなこと言ったら確かに恥ずかしいよねぇ」
「……」
「てゆーかどうせキスすんなら口にしちゃえば良いのに」
「……」
「そんだけ堂々告白したなら公開プレイもできるしょ」

掃除中、箒を持って壁に寄りかかりながら春樹はヌケヌケと言う。
秋人は照れ隠しのため視線を反らしている。

「すぐに彼女になれなんて言わない。でも俺も見て……だとぅ？」
「……」
「文化祭までのくせによくそんな悠長なこと言ってられんなぁ」
「……」

もうさっきからずいぶんこんな会話にならない会話を続けている。
春樹に言わせると、その現場を見れなかったことが残念なようだ。

「さっき笑ってたのは」
「だーっ、もう！うっせ！！はやくゴミ入れろや！」

春樹の声をかき消すかのように秋人は叫ぶ。
秋人はしゃがみこみながらちりとりを持って春樹がゴミを入れるのをもう数分も待っている。
ゴミを集めてあとはもうちりとりに入れるだけだというのに、春樹はべちゃくちゃとお喋りしていたようだ。
「へいへーい」
春樹は仕方なく箒でゴミをちりとりの中に入れる。
「ったく……見られなくて本当良かったぜ」
「俺は見たかったなぁ」
「ほざけ」
ここまでバレてしまっても、あの春樹にでさえも秋人は本当のことを言わないようだ。
いくらでも言うタイミングもチャンスもあるのに、絶対に言おうとしない。
「阿笠が聞いたら怒るな」

「もうあいつの前で略奪宣言したし平気だろ」

秋人が平然とそう言うと、春樹はちょっと間を開けて言った。

「俺それ知らない」

「あっ」

秋人はしまったと口を抑えるが、もう遅い。

春樹は何のことなのかと質問攻めをしてくる。

秋人はシカトしてちりとりのゴミを捨てに行くが、ちゃっかり春樹も付いてきてしつこく聞いてくる。

押され負けた秋人は、ようやく話し出した。

昨日阿笠に略奪宣言してしまったことを。

だがその根本が文化祭のライブにあることにはまったく触れていない。

どうやら秋人にライブの話がきたというところはハブき、秋人が阿笠を推薦したところから話しているようだ。

だが、その話は実は昨日烈から聞いていて春樹は知ってる。

「なるほどねぇ。やるじゃん、秋人」
「……言葉のアヤだ」
「じゃあ昼間の告白も言葉のアヤ？」
「だー！うっさい！」

麻冬も本当大変だ。

秋人と阿笠、どちらも学校の人気者で有名人。

どちらを取っても損はない。

まぁ損得で選ぶわけではないけど、普通の女子が麻冬の立場になったら泣いて喜ぶものだ。

星陵サッカー部ってだけでもかなりのものなのに、それがあの天才ＦＷ阿笠大悟とカリスマＭＦ月影秋人だ。

おまけに容姿も良くて多彩で、最高級である。

音楽も軽くこなすフェミニスト阿笠と、頭脳明晰なクールボーイ秋人。

どちらが良いかなんて選べないほどだ。

「で、本当は秋人にゲストの誘いきたんだね？」
「えっ」
「実は昨日もう烈から聞いてたんだよね、全部」

春樹は猫のような顔でニヒッと笑う。

秋人はまさか知られていただなんて思わず、かなり驚いているようだ。

「おまっ……」
「でもそっかぁ、これでもう後には引けないわけかぁ」

そんな秋人をよそに春樹は少し楽しげに言う。

からかいたかっただけなのか何のか。

「ま、俺も協力するよ」

春樹がそう言うと、秋人は更に驚いた表情をする。

「え？だって……どっちの味方もしないって」

「阿笠がね、言ったんだ」

春樹は秋人からちりとりを取って、箒とともに掃除用具入れにしまいに行く。

自然と秋人もついて行く。

「自分には烈がいてくれるように、秋人の側にいてやってくれ。ってね」

「……阿笠が？」

「うん。あの阿笠がそう言ったんだ」

「いつ……」

そう尋ねられると春樹は、クルッと振り向いて秋人の顔を見上げながら言った。

「秋人が麻冬に振られた次の日の朝」

「朝？」

「朝練のあとだよ」

まさかの話に秋人は絶句している。

確かあのときの阿笠は、かなりと言って良い程落ち込んでいた。

本当なら秋人が阿笠に愚痴でも言ってやりたいところだったが、かなり負に陥ってたからそれすらもできないほど。

そんな阿笠に、そんなこと言えるはずがないと秋人は思っている。

「びっくり？まぁ……俺もびっくりしたもんなぁ」
「嘘だろ？愛川に言われたんじゃなくて？本当に阿笠？」
「紛れもなく」

春樹は今でもそのときの阿笠の顔を思い出せるらしい。

きっと春樹でさえ衝撃的なことだったのだろう。

あの泣きそうな顔をしながらも弱々しく微笑み、それでも一生懸命前を向こうとする阿笠の顔が、離れないでいる。

「…あいつ……」

秋人はあの日の朝練前の阿笠との会話を思い出している。

秋人から見ても阿笠は弱々しく儚げで、もろかった。

そんな阿笠が自らそんなこと言えるなんて到底思えない。

けれど、秋人はハッと気づいた。

「愛川か……」

あのとき部室で廃人になってた阿笠のもとへ向かう烈の姿を、秋人は見ていなかったわけではない。

きっと烈ならすべてを理解していて落ち込んでる阿笠を助けるだろうと、あのとき秋人は無意識にそう思った。

自分にはこうして春樹が朝から会いに来てくれたように、きっと愛川だって阿笠に会いに来たに違いないんだって、心の隅で思っていた。

頼れないって分かっているはずなのにどうしても秋人の心には春樹が存在する。

「烈は人の気持ちに敏感だよ」

「……」

「違うか。阿笠の気持ちに敏感なのかな」

秋人は、お前だって敏感だよ……と思ったけれどあえて口にしないでいる。

そういえば、昼休みのあの会話を聞いた阿笠は呆然としてあの場から動けずにいた。

そんな阿笠を教室に連れて帰ったのもやはり烈だ。

『阿笠？いくら待ってもこないから探しに来た』

『あ……烈…』

どうやら阿笠は2人分のジュースを買いに行こうとしていたらしい。

なかなか帰ってこないものだから探しに来たようだ。

『なした？』

『や……なんでもない』

『ん？6組盛り上がってんな』

『えっ…』

『え？』

6組が盛り上がってるという言葉に阿笠はビクッと反応した。

烈はそんな阿笠を見逃さない。

けれど阿笠は何を聞いても答えようとしなかった。

まぁ聞かなくとも烈ならすぐに耳に入るだろう。

『大丈夫？』

『う、うん平気。ごめん、ジュースだった』

『一緒に行くべ』

『ありがと』

トレーナーのポケットに手を突っ込みながら歩く烈の横を、阿笠はトボトボと歩く。

烈が横目で見ても分かるくらい阿笠の表情はいつもとは違う。

悲しそうというより、辛そうというより、切なそうというより、泣きそうというより…

複雑そうだ。

「……笠。阿笠」

こちらも今は掃除中、ボーッとしている阿笠に烈は何度も話しかけている。

「阿笠！」
「……えっ？あ、何？」
「何って……」

昼休み以降ずっとこの調子の阿笠を不振に思う烈。
当然烈はもう昼休みの６組での出来事を知っている。
阿笠があの場にいたことから阿笠がその話を聞いていたことも十分予想できる。

ただ、予想できるがなぜ阿笠がこれほどまでに陥っているのかが分からないようだ。
昨日だって目の前で宣戦布告されたのだ、今更秋人が麻冬に告白したところで動じるはずがない。

キスしたといっても所詮は頬にしただけだ。
だとすれば他に何かあったに違いない……

烈はそう睨んでいるけれど、一向にその何かの情報は入ってこないらしい。

まぁ当然だろう。

阿笠が放心する理由となった話は、麻冬と秋人の間でしか話されていなくクラスメートたちは聞いていなかった。

情報なぞ手に入るはずがない。

「……めまいがした？気持ちに？それとも誰かに？」

烈は阿笠の額に手を当てながらそう言う。

阿笠は烈のほうを見て、軽く笑った。

「……してた。でももう大丈夫だよ。ありがとね、烈」

「良いのか？」

「ん？」

「いくらでも協力するぞ、俺なら」

心配そうにそう言う烈を困らせないように阿笠は笑顔を保っている。

「逃げないって言葉、嘘にしたくない。だから少しずつ進むよ」

気づかなかった麻冬の心。

きっぱりと引導されたけどそれでも諦めない男と

事実から目を反らさないで前へ進もうとする男

勝利の女神はどちらに微笑むのだろう。

next

第１４１話【通じない思い】

それから麻冬は、阿笠と秋人に挟まれた日々を続けた。

朝練が終わると抜け駆けしようと秋人も阿笠もすぐに着替えて麻冬を待ち伏せに行き、結局は3人で教室に行く。

ただ昼休みになると秋人は麻冬を連れてどこかに行く。

偶然阿笠に見つかったときは阿笠が阻止するが、大抵は逃げられる。

放課後は部活のあとやはり阿笠も秋人も自主練をして麻冬の帰りを待っている。

そんな日が数日続いた。

「……あの…」

そして今日も1日が終わる。

「てめぇさっさと帰れっ」
「そっちこそ！」
「ふざけ！」
「どっちが！」

阿笠と秋人は怒鳴りながらドリブルをしている。
麻冬がすぐそこで2人を待っているのにも気づかずに。

「2人きりにさせるか！どうせ変なことしか考えてないだろ！」
「お前にだきゃ言われたかねぇ！」
「俺らは付き合ってんだから良いんだよ！ピーしてピーしたって！！」
「俺だってピーしてピーしてやるさ！！」

2人は何を考えているのかいやらしい言葉を連発している。
後になって顔赤くして照れるくせに、その場の勢いとはすごいものだ。

「変態秋人！ムッツリ！」
「だから阿笠には言われたかねぇっつってんだろ！」
「俺はオープンだ！！」

もう2人は完璧開き直っているように見える。
見えるだけだから内心はどうなのかは分からないが、少なくとも麻冬を渡さないという意思だけは持っているようだ。

「……バカ2人!!あたし帰るよっ?!」

ドリブルして取っ組み合いながら競っている2人に、ついに麻冬が大声を上げた。

2人の会話を聞いて顔を真っ赤にしている麻冬に、ようやく2人とも気づいた。

「ま…麻冬!」
「い、いつからそこに?」

2人はボールそっちのけで麻冬に駆け寄る。

麻冬は恥ずかしいのか目をギュッとつぶって頬に手を当てている。

「なんて会話してんの……2人して」

可愛らしい反応をしている麻冬を見て、秋人も阿笠もボッと顔を赤らめた。

「超可愛い」

そう言って秋人はすかさず麻冬をギュッと抱き締めた。

「はいはい、離れて」

だがすぐに阿笠が秋人から麻冬を離し、麻冬の肩を抱く。

「邪魔すんなコラ」
「ははは。どっちが？」

顔に怒りマークをつけて半恐しながら言う秋人に対抗して、阿笠は怒りマークをつけながら笑っている。

「面倒くさい男だな。本当」
「どっちが！って……おいっ！！」

秋人の言葉を聞かずに、阿笠は麻冬とキスをし始めた。

軽くキスするだけかと思いきや、阿笠はいつにもまして激しく舌を入れていく。

「あ…あかっ……んっ……あ…」

苦しそうな声を出す麻冬なぞシカトするように、阿笠は麻冬の腰と頭に手を回してキスをし続ける。

秋人は顔を赤くして言葉にならない声を出しながらその光景を見ている。

その行為は数分に渡って続き、阿笠が満足して唇を離したあとにはもう麻冬は失神していた。

「あっ、やりすぎた」

阿笠は悪びれた素振りも見せずに淡々とそう言う。

阿笠はその態勢のまま麻冬をお姫様抱っこする。

「お前なーっ……」

「ど？秋人。俺らのラブラブっぷり見た？」

阿笠はケラケラ笑いながら秋人にそう言う。

「一方的だろ、今の！」

「えー、嘘ぉ。まぁとりあえず部室行こうよ」
「……」

信じらんねぇ、という顔をしながら秋人は阿笠の顔を見る。

「あっ、麻冬のカバン持って」

阿笠は麻冬のカバンが落ちているのに気づいて阿笠にそう言う。
さすがに秋人もピキッときたようで、阿笠の腿を蹴る。

「いてっ！」
「くそっ。このエセ爽やかめ」

そう言いつつも秋人はカバンを拾って、阿笠と一緒に部室へと向かう。

部室に着くと、とりあえず麻冬をベンチに寝かせて、2人は制服に着替え始めた。

支度が終えたところで、秋人は教室に忘れものをしていたことに気づき、あまり離れたくないが教室に取りに行くことにしたようだ。

「ぜってー先帰んなよ！」
「良いからはやく行ってきたら～」

阿笠はひらひら手を振りながら笑って言う。

秋人は勢いよく部室を飛び出して走って校舎へと向かって行った。

阿笠はとりあえず麻冬が起きるまで雑誌を読みながら待つ。

麻冬が目を覚ましたのは秋人が部室からいなくなって2分くらい立ってからだった。

「あれ……」
「あ、気がついた？」
「あ、阿笠」

麻冬は阿笠の顔を見るなりさっきのことを思い出したのか、ゆでダコのように顔を真っ赤にした。

「じゃあ帰ろっか」

阿笠は雑誌を元あったところに戻して荷物を持つ。

「秋人は？」
「あぁ、なんか急用らしくて帰ったよ」
「急用？……そっか」

麻冬は少しだけホッとしたような表情をしている。
阿笠はそんな麻冬の顔を見逃さず、すかさず麻冬に尋ねた。

「残念？」
「え？そ…そんなこと！」

阿笠はあの日この耳ではっきりと聞いた。
麻冬の気持ちを。

麻冬は阿笠にはそのことを言おうとはしないし阿笠が知っているとも気づいていない。

「あ、あたし今日自転車じゃない」

麻冬は話題を変えようとそう言った。

「まじ？なら乗せるよ」
「ありがと」

2人は部室を出て駐輪場へと向かう。

もうほとんど自転車はなく、数台しかない。

もちろんその中には秋人のもあるわけだが、阿笠は秋人の自転車を見ぬふりして自分の自転車を持ってくる。

そして荷台に麻冬を乗せて2人は学校を出た。

いつも麻冬は荷台に乗るときには横向きに乗っているのだが、今日に限っては前方を向いて座っている。

阿笠は不思議に思いつつも特に気にしていない。

他愛もない会話をしながら軽く1キロほど走ったところで、麻冬は阿笠のお腹に回している手に少し力を加える。

「どうかした？」

阿笠は速度を軽く抑えて横目で後ろの麻冬に尋ねる。

麻冬は沈黙を保つが、しばらくしてからこう言った。

「阿笠は……まだあたしが秋人を好きだと思ってる？」

阿笠はまさかそんなことを聞かれるとは思っていなく、言葉に詰まっている。

たまたま聞いてしまったあの話でさえ、未だに阿笠は信じられずにいるのだ。

信じたくないわけではなく、信じがたいだけ。

だってそうだろう。

麻冬はとっくに自分を忘れていて秋人を好きになって、秋人との叶わない恋から逃れたくなくて自分とまた付き合い出した。

それが阿笠の見てきた事実だったのだ。

突然、秋人を好きになったのは思い込みで本当はずっと自分を好きだったなんて言われても、どう信じられようか。

麻冬を疑うわけではないけど、突拍子なことに戸惑いを隠せないのも事実なのだ。

「……分かんない。正直、麻冬の気持ちの半分は秋人にあると思う」

麻冬は痛いところを付かれて、何も言い返せない。

「でも俺は好きだから」

そんな麻冬に阿笠はきっぱりと言った。

信じがたいし今すぐどうこうできるわけではないけど、自分の気持ちに正直でいることだけは貫き通すようだ。

「……あたしは…、阿笠が大好きなの」

「……」

「お願い。今日……ずっと一緒にいて」

いきなりの麻冬の言葉に、阿笠は思わず自転車を止める。

急にブレーキがかかって麻冬は阿笠の背中に顔をぶつけた。

阿笠は片足を地につけて片手でハンドルを持って自転車を倒さないようにし、上半身を後ろに振り向かせる。

阿笠だって別に麻冬との行為は今回が初めてになるわけではない。親公認の付き合いだから何度もお互いの家に泊まったりもしている。

「今更かもだけど……俺はそんな麻冬を抱きたくない」

阿笠は悲しみを堪えてるような瞳で麻冬の目を見る。

「ごめん。麻冬の好きって言葉信じらんないんだ……」
「……どうして？」
「秋人の目の前で……俺の目を見てそう言える？」
「言えるよ！」

麻冬は阿笠よりも大きな声でそう言う。

こんなにもはっきりと言ってくれてるのに、何をそんなに迷うことがあるのか。

「どうしてそんなに不安なの？確かに秋人から逃げたのも事実だけど……ちゃんと阿笠のこと好きだもん…」

麻冬は目を潤ませながら懸命に気持ちを伝えようとする。

その気持ちが、届いていないわけではない。

「どうしたら信じてもらえるの……？」

麻冬は阿笠に抱きついた。

片半身でバランスを取っていた阿笠は突然のことだったためバランスを崩した。

「やばっ……」

反射的に耐えようとしたがその隙もなく、そのまま横に倒れてしまった。

自転車も倒れてガッシャーン！と音を立てる。

「あたた……ま、麻冬大丈夫か？」

阿笠が片目を開けると、ちょうど阿笠の上に麻冬が倒れてきた態勢になっている。

麻冬は顔を阿笠の上半身にうずくめて起き上がらない。

麻冬が反応しないことに気づいた阿笠は、麻冬の肩を押さえながら上半身をバッと起き上がらせる。

「麻冬?!怪我した?!」

「……よ」

「え?!」

「不安なら……いくらでも好きって言うよっ……」

麻冬はポロポロと目から涙を溢す。

阿笠はそんな麻冬から一瞬たりとも目を反らすことができずにいる。

「ごめん……麻冬。ごめんな」

今度は阿笠が麻冬を抱きしめた。

泣きじゃくる麻冬に、阿笠はごめんとしか言えなかった。

next

第１４２話【未来予想図】

「あっ！あいつら先に帰りやがったな！」

秋人は走って教室から戻ってきたものの、もうそこには阿笠と麻冬の姿は当然ない。

まぁ分かってはいたことだが、麻冬が目覚めないうちに戻れば大丈夫と思ってもいた。

「ちぇー。帰るか」

秋人は向きを変えて駐輪場へと向かう。

珍しく秋人がこんなにも頑張るのは、この間の麻冬の話が原因のようだ。

好きじゃないって言われたからこんなにも積極的になっている。

普通は逆だと思うかもしれないが、秋人はそれまで両思いだと思っていたからどこか優勢な気持ちでいた。

自分が振られても結局はいずれ阿笠とこじれて戻ってくると思っているところも少しはあった。

けれど好きじゃないときっぱり言われて、頑張らなきゃ振り向かせられないと気づいたようだ。

なんとしても振り向かせるには積極的にアピールするしかない、と。

「……春樹んちでも行こっかな」

秋人はポツリと呟く。

春樹に会ったら何かが変わるというわけではないけれど、決して慰めて欲しいわけでもなく

ただ春樹がこんな自分の隣で笑っていてくれる、それだけで秋人は心強い。

結局春樹に支えられてると言っても過言ではないのだけれど、それを承知した上でそれでも側にいようと言っている。

秋人は駐輪場で自転車を見つけるやすぐに自転車に乗って走り出す。

その頃ただ謝るしかできないでいる阿笠に麻冬は、こう言った。

「……今日一緒に阿笠のうち行く」

「麻冬……」

「抱いてなんて言わない……。ただ、あたしがどれくらい阿笠を好きか知って欲しいの」

麻冬は鼻をすすりながら阿笠にそう言う。

阿笠は躊躇するけど麻冬に押し負かされて、結局オーケーしてしまった。

2人は立ち上がって、倒れている自転車を起こして再び自転車に乗る。

そうして阿笠の家へと向かって行った。

秋人が2人が倒れた場所を通ったのは、2人がいなくなってからその数分後だった。

阿笠はそれでもどうしようか悩んだけど、真剣な顔をしてそう言う麻冬を振りきれずに結局2人で阿笠の家に行くことになった。

阿笠は沈黙を破ろうと何か話をしようとするが、喉まで言葉が出てきてるのに声が出せずにいる。

麻冬も麻冬で不安を隠すためにただただ黙り込んでいる。

たったの十数分の自転車での道のりがまるで1時間くらいかのように思われた。

阿笠の家に着くと両親ともいて阿笠の帰りを待っていた。

麻冬がいるのを見て2人が喜んだのは言うまでもない。

すぐさま母親が麻冬の分の夕飯を用意して、４人で食卓に並んで食べ始めた。

「いやー、嬉しいなぁ。また麻冬ちゃんが来てくれて」

ホクホクしながら父親がそう言う側で母親も嬉しそうに言った。

「また一緒にお菓子作ったりしたいわね」

麻冬は阿笠家に大歓迎されているのだ。

阿笠が雪原家に大歓迎されているように。

「ええ、ぜひ。そうだ、今日泊まってっても良いですか？」
「もちろん。大悟の部屋で良いかしら？」
「ふふ」

再びよりを戻してから麻冬は何度か阿笠の家に泊まっている。

最初は客間にという話になったのだがノリの良い母親が阿笠と同じ部屋にしたらと言ったのだ。

それ以来普通に麻冬は阿笠の部屋に泊まっている。

阿笠は、優しい両親に愛され、サッカーの才能に恵まれ、その容姿から人気も集めて何不自由ない暮らしをしてきた。

烈という親友がいて、秋人という戦友がいて麻冬という彼女がいる。

人はそれを羨ましいと言う。

確かにそれは夢みたいな生活かもしれない。

「麻冬、今度サッカーの全国選抜と静岡選抜とで試合するんだ」
「へぇ！阿笠はどっちに出るの？」

まだ阿笠からその話を聞いていなかった両親も少し驚いている。

「静岡に出るよ」

そう言うと両親が、秋人くんも一緒に静岡？と尋ねてきた。
すると阿笠ではなく麻冬が
「当たり前じゃないですか～」と軽く笑いながら言う。

麻冬だって阿笠と秋人が離れることはないと思っているし、2人のコンビを見たい。

麻冬だけでなく阿笠の両親も、夏実も秋人もクラスメートも他の生徒も教師もテレビを見ている人きっとみんなそう思っているに違いない。
彼らのコンビは技術だけでなく人々を惹き付ける何かがある。

「秋人は……敵だよ」

喜んでる3人を前に、阿笠は箸を置いてそう言う。

3人はピタッと動きが止まり、戸惑いの声を上げながら耳を疑っている。

「今週末たぶんそのこと発表するから言っとこうと思って。秋人は全国選抜チームに出る」

前にファミレスで秋人が他校生のいる前でそのことを話したが、そのときは彼らに口止めをした。

噂として漏れるといろいろ困るからだろう。

そして2人で両チームの監督に掛け合ってその話をし、なんとか許可を得たようだ。

両チームとも2人を欲しがっているのは目に見えているし、そんなに難しい話ではなかった。

どちらが良いとか、そんな話は愚の骨頂である。

コンビをつくる秋人がいなければ阿笠はいつも以上の力は出せない

かもしれない。

だがいくら秋人でも阿笠の球は止められない。

逆に阿笠には秋人の攻撃を止めることもできない。

そして、日本のサッカーをやってる学生の中に阿笠を止められる人はいない。

秋人とてそんな簡単に球を奪われたりはしない。

つまりどちらがより多く得点できるか、だ。

秋人は得点を決めつつ、他の敵に点を決めさせない。

阿笠はとにかく点を入れる。

それしかない。

「……戦うのは、中学以来になる」

阿笠は少しはにかんでいる。

「どんどん成長してく秋人を見て俺も成長したつもり。だから戦ってみたいんだ」

よほど嬉しいのだろう。

阿笠が試合できることを喜んでいることはそこにいる3人に十分に伝わっている。

秋人とのコンビを見たいという気持ち以上に、阿笠のささやかな願いが叶うことの嬉しさをかみしめている。

「頑張って。阿笠」

麻冬は笑顔でそう言った。

応援されてることを嬉しく思いながら、阿笠は意地悪なことに笑いながら

「どっちを応援するつもり?」と聞く。

「ず、ずるい阿笠」

「あはは。なんでさ」

「も〜」

どっちなんて答えられるわけがない。

好きとかそういう話以前に、秋人は大事な友達なのだ。

阿笠は麻冬が答えられないのを分かっててあえて聞いている。

「俺今回秋人マークするから」
「秋人を？他のＦＷじゃなくて？」
「うん。一番点取ってくるのたぶん秋人だし」

カチャカチャと音を立てながら箸を操りご飯を食べる。

阿笠の母親と父親も２人でなにやら会話を楽しんでいるようだ。

「絶対勝つよ。そしたら一緒に行って欲しいところがあるんだ」
「うん。どこ？」
「それは――――」

阿笠が言おうとしたとき、母親が阿笠たちの会話を遮った。

醤油を取ってくれという内容だったが、そこからまた再び両親が阿笠たちに話しかけて結局話題が反れる。

そのまま夕飯が終わり、麻冬と母親は片付けをし始めて阿笠と父親は居間のソファに座って適当にテレビを見ながらくつろぎ出している。

母親は麻冬にやらなくて良いと遠慮するが、麻冬はそれでも手伝っている。

まるで本当の家族のような空間に流れる雰囲気がなんとも心地よい。

水道で洗い物をしながら楽しく話している女性陣に、テレビを見ながら団らんをする男性陣。

麻冬が阿笠家に嫁いだら毎日がこんな風になるのだろうと想像すると、なんとも幸せなことだろう。

「あなた、何飲む？」
「阿笠ー。紅茶で良い？」

片付け終えた女性たちがほぼ同時にそれぞれのパートナーに話しかける。

会話していた2人は振り返り、麻冬たちがエプロンで手を拭きながら全く同じことを尋ねてきていることが可笑しくて、つい笑ってい

る。

何を笑っているのか分からない女性たちは首を傾げている。

「ははは。うん、ダージリンでお願い」

阿笠は口を手で軽く押さえながらそう言う。

父親も、微笑しながら
「コーヒーで」と答える。

それを聞いた麻冬たちは再びキッチンに戻り、言われた通りの飲み物を用意する。

阿笠と父親はその光景をじっと見つめて、そしてお互いの顔を見合わせた。

そうしてまたプッと笑う。

「やばいね、父さん」
「本当。毒されてるな」

もし阿笠と麻冬が結婚したらいつでもこんな会話をすることができる。

家に花が咲く。

近い未来の出来事になってくれるだろうか。

麻冬のエプロン姿は、これから先何十年も見られるような気がした。

next

第１４３話【溝】

「そういえば阿笠文化祭のときチャイナ服着ないんだって？」

夕飯を食べ終えてお風呂にももう入った2人は、阿笠の部屋の中でくつろいでいる。

もう12時を回っているが、一向にお喋りをやめない。

「ああ、秋人から聞いた？」
「うん。んー？でも着たんだって？」
「え？」
「いろんな人が阿笠のチャイナ服姿見たって」
「あー…」

阿笠はあの日のことを思い出している。

無理やり着せられて、阿笠は珍しくキレてチャイナ服をボロボロにしてしまった。

今思うとなんて滑稽で子どもじみてるのだろうと、阿笠は思い出し笑いしている。

「なぁに？」
「いや。はは、本番では着ることにしたんだ」
「えっ」

麻冬は秋人の話と矛盾しているから少しだけ驚いている。
それもそのはず、秋人はそのことを知らない。
知っているのはあの場にいた3組の生徒だけ。

「いやー、はは……本当、ばかばっかり」

阿笠はもはや苦笑している。

みんなは阿笠のワガママを可愛いものだと言う。
みんなは、阿笠は本気で困るようなワガママは言わないと言う。

阿笠からすれば大きなワガママなんて言わないことが普通で、誰かが困っていたら助けるのが普通で、頼られたら引き受けることが普通なのだ。
昔からそうだったから阿笠にはそれが当たり前になっていた。

だから、確かにチャイナ服を着ないというのは阿笠のささやかな反抗だったのかもしれない。

それ以前に客寄せやウェイターをやらされることは重々承知していたのだから、それくらいは許されることだとは思うが。

阿笠はキレたことで地位を固めたかったわけではない。

別に心配されたかったわけでも、泣いて欲しかったわけでもない。

ただ、キレて、そして口論してケンカして、そしてまた仲良しに戻るような、普通の男子がするようなケンカが良かったのだ。

阿笠だって普通の男子なのだからキレることくらいあるし、キレたらキレたで放って置いて欲しかっただけ。

阿笠は一目置かれて普通の扱いをされないことを嫌がっている。

普通の扱いをされないことは、確かに仕方ないことかもしれない。

あれだけのものを持っていれば普通でないことは明らかに分かるのだが、それでもやはり本人からすれば嫌なものだろう。

烈のように自由な人間ではないのだから。

「阿笠？」

阿笠は苦笑してるかと思いきや、いきなり黙り込んだ。

そんな阿笠を見て麻冬は不思議そうに話しかける。

阿笠は麻冬の顔をチラッと見て、視線を下にずらす。

「……ごめん、な」

阿笠はポツリと呟いた。

「なにが？」

麻冬は分かっているのか本当に分からないのか、軽やかに言う。

阿笠は何かを言おうとするが、言えずに止まっている。

それでも麻冬は阿笠が何かを喋るのをゆっくり待っている。

阿笠はそんな麻冬の優しさが更に切ないのか、悔しそうな表情を浮かべた。

あの日の秋人と麻冬の会話をどうしても忘れられないのは、なぜだろう。

麻冬は確実に阿笠が好きだと、一緒にいたいと言っている。

なのに不安になることなんか何もない。

それでも不安なのは何か理由があるからだろうか。

阿笠自身なぜ自分がこんなにモヤモヤしているのか分からないでいる。

「……文化祭」

「ん？」

「文化祭麻冬は1日ずっとやってんの？店」

阿笠は顔を上げて話題を変えてきた。

麻冬は内心驚いていたものの、阿笠がそういう気ならそれでも良いと、その話題に入る。

「そうねぇ、お昼時の前後1時間ずつだけ休みかな」
「あ、やっぱ？俺もなんだよね」
「お昼は混むからいなきゃなのよね」

お昼時は有無を言わず混むとはいうものの、どのみち彼らがいれば売り上げは確実だ。

それをわざわざ手放すはずもない。

「一緒に回れるかしら？」
「できるかなぁ。時間合うかな」
「せっかくだし回りたいわよね」

麻冬は惜しみなくそう言ってくれる。

それでも阿笠は、本当は秋人と回りたいんじゃないかって思ってしまうのだ。

偏屈なわけではないが、心の中にある不安が阿笠にそう思わせてしまう。

阿笠はそんな自分が嫌で惨めでたまらないでいる。

きっと、このまま文化祭が来ても麻冬は阿笠のために秋人の告白を断るんだろう。

何度迫られても、阿笠が好きだと言うんだろう。

「麻冬……あのさ、」

阿笠が聞いた話は事実かもしれない。

阿笠を好きだと言う気持ちも本当かもしれない。

けれど

「聞いたんだ、俺。あの日麻冬と秋人が話してんの」
「あの日？」
「昼休み、弁当食べながら2人で喋ってた」

麻冬は軽く上目をしながらいつのことの話なのかを思い浮かべている。

「秋人を好きじゃない、って言ってた」

「……えっ」

「秋人を好きになったのは俺を忘れるためだって……言った」

阿笠は麻冬の目を見ながら何かに耐えている顔をしている。

麻冬はあのときのことを思い出して、びっくりしたように驚いている。

秋人の恥ずかしい告白はクラス中が聞いていたし、もしかしたら廊下にいた人にも聞こえていたかもしれない。

だが麻冬がその話をしたときは決して大声で話してたわけではないから、おそらくクラスの人でさえ誰も聞いていない。

だからまさか阿笠が聞いていたなんて夢にも思わなかったのだろう。

そこらへんの生徒ならまだしも、この阿笠とは。

「……ならなんであたしのこと信用してくれないの？」

麻冬は少し目を細めて秋人にそう言う。

「俺は……」

阿笠は麻冬にそう言われて言葉に詰まる。

そんな阿笠に麻冬はズケズケと言った。

「あたしの秋人に対する気持ち、知ってるんでしょ？あたしが阿笠を好きだって分かってるんでしょ？」

「……」

「黙ってちゃ分かんないよ……阿笠」

麻冬のあの言葉を聞いたから信用できる、なんてことはない。

むしろ聞いてしまったから更に信用できずにいる。

きっとその意味は麻冬には分からない。

いくら言葉にしても、いくらキスをしても、きっと阿笠はもう麻冬の気持ちを見逃すことはできないだろう。

「つじつま合わせだって、本物になるよ」

阿笠は視線を反らして少し声を抑えながら言う。

「……あたしが秋人を好きだって言いたいの？」

「……」

「ちゃんと秋人に好きじゃないって言ったのよ。それ以上の証拠ってある？」

阿笠が言いたいことはそんなことではない。

もう、信用するしないの話ではない。

だがそれを口にしてしまったら、もし麻冬が気づいてしまったら今度こそもう二度と、２人は一緒にいられない。

それを分かっているから、阿笠は何も言えずにいる。

けれど言わないままではモヤモヤ感はずっと取れず、これから先こんな疚しい気持ちで麻冬の側にいなければならない。

どちらを取っても阿笠には苦痛でしかない。

「良いよ。信じてくれなくても良い」

麻冬は阿笠の顔に手を当てる。

阿笠が麻冬の顔を見ると、麻冬は溢れんばかりの愛情を込めた笑顔でこう言った。

「大好きです。だから側にいる。ううん、いてください」

きっと、言わなければ麻冬は惜しみない愛情を阿笠に与えてくれるだろう。

秋人のことを忘れて阿笠と生きる道を選んでくれるだろう。

その優しさで阿笠を守ってくれるだろう。

「…はい…」

阿笠は、切なそうに笑いながら答える。

悩んでも嘆いても、答えは1つしかない。

その答えがどんな道を辿るのかはまだ誰にも分からない。

それすらも運命と呼んでしまうのは何とも侘しい。

だが、ちっぽけな出来事も九死に一生の奇跡も、すべては運命というレールの上にある。

それでも運命に逆らうというのなら、それを何と言おう。

きっと、そんなことは誰にもできない。

それでも良い道を作るために必死にもがくのだ。

阿笠と麻冬はどんな風にもがくというのか。

next

第１４４話【愛】

「ちぇ……今頃よろしくやってんのかね」

秋人は夜道を歩きながらボソッと呟く。

コンビニに向かっている様子で、自転車で行けば良いもののどうやら歩きたい気分のようだ。

麻冬と阿笠は秋人が戻って来る前に帰ってしまったから、秋人は１人で帰るはめになった。

「阿笠がそのまま麻冬帰すわけねぇしなー……」

秋人の思っている通り、２人は一緒にいる。

だが別によろしくやっているわけではない。

「……」

秋人はほんの一瞬だけ辛そうな表情をした。

はたから見れば阿笠と無邪気に戯れている程度にしか見えないかも

しれないが、本人にとっては全くそんなことはない。

秋人が阿笠にからむことで麻冬に困った顔をさせてしまうし、告白すれば悲しませる。

好きじゃないと、そんな言葉を言わせるはめになる。

一番笑っていて欲しい人にそんな顔をさせて平気なはずがない。

本当は悲しくて辛くて悔しいはずなんだ。

それでも心の底から湧き出て来る気持ちには逆らえない。

愛しい

そんな感情ばかりが込み上げてくる。

「いらっしゃいませー」

ようやくコンビニに辿り着いた秋人が店内を歩いていると、意外な人物がいた。

秋人は驚きつつもすぐさま近寄る。

「麻冬」

もう買い物が終わったのか腕にコンビニの袋がかかっていて、本が置いてあるコーナーで雑誌を立ち読みしている。

「あ…秋人！」

麻冬は秋人の声に気づいて振り向いた。

「なんでここに？麻冬んちからじゃ遠いだろ」
「あ…あたし今阿笠の家にいて」
「ああ……どっちにしろ同じじゃね？」
「……あたしの買いたいのここにしかないのよ」

麻冬は気まずそうながらも笑いながらそう言う。

「そうなんだ。阿笠は？」

「今課題やってる」

麻冬は雑誌を閉じて元々あった場所に戻す。

一瞬2人の間に沈黙が流れるが、それをかき消すかのように秋人は話し出す。

「……ちょっとだけ、時間取れる？」

「え？」

「や、阿笠んち送らせてくれるだけでも良い。麻冬と2人になんの……あんまないから」

秋人は照れながらそう言う。

麻冬はあんなに堂々と断ったものの秋人に押され負けて、結局払いのけることができないでいるのだ。

秋人の言う期間を律儀に守ろうとしている。

「じゃあ…送ってください」

麻冬も少し照れを隠しながらそう言った。

秋人は目当てのものをさっさと買い、２人は一緒にコンビニを出た。

学校では春樹も夏実もいて、放課後には阿笠がいる。

だから実際２人きりになることはあまりない。

いや、何度もあったかもしれないが、お互いここまで意識してなかっただろう。

今は２人きりという事実に緊張してばかり。

「寒…」

麻冬は冷たい風に肩を震わせた。

今の麻冬は阿笠に借りた適当な服を着ている。

上はトレーナーだが、そこまで厚い生地ではない。

「ほら」

秋人は着ていた紺のパーカーを脱いで麻冬に羽織らせる。

「良いの？」
「おう。俺寒くないし」

そう言いながらも秋人は軽く鳥肌になる。

麻冬にバレないように必死に隠しているようだが、麻冬には分かっている。

「ありがとう」

秋人のバカみたいにまっすぐな不器用な優しさを、麻冬はきちんと受け止める。

いつだって秋人は麻冬の側にいて、気づかないほどさりげないフォローをしてくれた。

笑わなくても、いつも見守ってくれていた。

愛されてない、なんて

そんなことなかった。

「……お前さ、俺を好きになろうとしたのは阿笠と正反対だったからって言ったよな」
「え…」
「俺がお前好きになった理由、言ってなかった」
秋人は切なげな顔ではなく、愛しそうに麻冬を見る。
「まぁ…理由っていう理由もないんだけどさ」
そんな表情をしている秋人から、麻冬は目が離せない。
いつだったか、誰かが秋人に告白したときに、秋人は断る口実として麻冬にニコリと笑ってみせた。
その笑顔は麻冬と夏実にしかしないからと言って。
あのときのような作り笑いではなく、心から愛を込めて愛しそうに麻冬を見つめているのだ。
「夏実を好きだと思ったのは夏実が俺と違ったからなんだ」
「違った？」

「性格からすべて。だからつい目で追ってた」

長袖の服1枚を着ながら、それでも寒さなんて気にもしていないかのように平然とポケットに手を入れながら歩いている。

その横で麻冬は、秋人から借りた少し大きなパーカーを着ている。

「それが好きってことなんだと思ったんだ。でもさ、夏実に彼氏がいても平気だったのに麻冬に彼氏ができた途端なんだかイライラとかモヤモヤした」

冷たい風が何度か吹いているにも関わらず、秋人は薄着で平然を装う。

きっと阿笠でも同じことをしてくれる。

けれどその優しさが何とも心地よくて、秋人の隣に久々に立ってられる安堵の気持ちが麻冬の心に芽生えている。

「隣にいるのが当たり前すぎて気づかなかった」

立ち止まることなく、ゆっくり歩く2人。

夜中の夜道はもうほとんど人の影すらない。

「麻冬の大人びた口調も笑顔も、泣き虫なとこも全部引っくるめて好きだって思ったんだ」

麻冬は相槌もせずただ黙って秋人の話を聞いている。

秋人も、麻冬からの返事を待たずに話し続ける。

「麻冬がはっきり断ってくれても、俺諦めらんねぇんだ」

秋人は、どれほどまっすぐな言葉を幾度言っただろう。

いつだって上辺なんかではなく本気の本音を話した。

好きだと思ったから、例え阿笠に嫌われようと周りからなんと言われようと麻冬に伝え続けた。

麻冬の負担になろうとも、泣かせると分かっていても秋人は言った。

自分勝手だと思うかもしれないし、そんなの麻冬が可哀想だと思う

かもしれない。

それでも、側にいられるだけで幸せなんだってことを、秋人は伝えたいのだ。

「……このまま時が過ぎて文化祭来たらきっと麻冬は阿笠を選ぶんだろうな」

秋人は少し視線を下に向けながら、微笑する。

「時間が欲しいって言ったのは俺だけど、それでも良いかとも思える」

すると、ようやく麻冬が口を開いた。

「なんで……」

「なんでって、決まってんだろ？」

秋人は麻冬の目を見つめながら笑う。

「好きな奴にはいつだって幸せでいて欲しい」

全身全霊でお前を愛してる、と言っているようだ。

全身で麻冬を好きだと言っている。

麻冬が秋人を払いのけ切れないのは、本当に秋人を振り切れないからだけなのか。

もう二言くらい言えば必ず秋人は麻冬を諦めるだろう。

そんなこと、今の麻冬にも十分分かっている。

それでもその二言が言えないのは、どこかで揺れているからだ。

実際に麻冬本人でさえ気づかないほどの小さな揺れの大きな変化が起きている。

秋人を愛してないなんて、そんなの嘘。

じゃなきゃ今までの麻冬の行動はなんだったのか。

確かに初めは何か理由があったかもしれないけれど、そんな些細な理由さえ忘れてしまうくらいにちゃんと秋人を愛していた。

絶対に、阿笠よりずっとずっと愛していた。

たとえ麻冬自身にそれが嘘だと分かっていなくても、あれは阿笠を守るためについた必死の言葉だ。

そう思うことで阿笠を好きであると思い込んでいただけの、これこそまさに錯覚の恋。

でも、そう錯覚しなきゃ麻冬が麻冬でいられなかった。

どこかで両思いではないかと思ってしまった時点で、そう思わなければ立っていられないほどショックを受けていた。

強くない。

麻冬は決して強くない。

愛されてなきゃいられないような、普通の女の子。

「どうして……？」

麻冬は目に涙を溜める。

あと少しで溢れ出してしまいそうだ。

「え？」

麻冬は言葉に詰まる。

何か言ったら涙がこぼれそうで言うに言えずにいる。

秋人は泣きそうな麻冬を見てオロオロするばかり。

秋人の告白で心がズキズキする麻冬。

悲しいのか嬉しいのか、その涙にはどんな意味が込められているのだろう。

その頃、阿笠は帰りが遅い麻冬を心配してコンビニに向かっている途中だった。

麻冬は携帯を忘れていってしまったが、どこのコンビニに行くかは事前に麻冬から聞いていたから迎えに行けるようだ。

耳にイヤホンをつけながら陽気に歩いている阿笠が角を曲がった直後に目にしたものは、泣いている麻冬を秋人が抱きしめている光景だった。

「あ…きと?」

阿笠は驚きつつも角に隠れて2人の様子を見ている。

ただ泣くだけで何も言わない麻冬と、ただ麻冬を抱きしめているだけの秋人。

信じられない光景に阿笠は、口が塞がらずにいた。

next

第１４５話【別れ】

「麻冬？どうしたんだよ」

秋人は必死に麻冬をなだめようとするも、麻冬は泣き止まない。

すぐに止まるような涙ではなく、ボロボロと溢れ出る涙はもう麻冬の手では抑え切れない。

２人ともタオルなんて持っていないし、麻冬は秋人に借りたパーカーを着ているから袖で拭えない。

そこで秋人は麻冬の手を目から離し、自分の服の袖で涙を拭く。

「わりぃ……泣かせたかったわけじゃないんだ」

秋人はすまなそうに言う。

「……って、何度も泣かせといてそれはねぇよな」

自分の言葉に突っ込みながら秋人は苦笑した。

そんな秋人に、麻冬は必死に訴えかける。

「ちが……っ……」

けれどなかなか上手く言葉に出来ずにいる。

「あたし……」

泣いているせいで上手く喋れないだけなのか、それとも言う言葉が見つからないのか。

どちらにしろ麻冬は秋人が何度聞いても答えない。

ただ泣くばかりだ。

そんな光景を角に隠れながら見ている阿笠は、唖然としている。

それもそのはず。

状況を掴めないのだから。

「どうなってんだ……？」

阿笠はボソッと呟く。

烈がいれば分かるだろうけど、今これだけの場面からは何も推定なぞできない。

麻冬がなぜ泣いているのか

なぜ秋人がいるのか

はたまたなぜ秋人が麻冬を抱きしめているのか。

いや、予想くらいできるしそれがどのくらいの確率の可能性かも阿笠は分かっている。

それでも信じたくなくて分からないふりをしているのだ。

信じたくなくもないだろう。

ついさっき、麻冬に好きだと言われたばかりなのだ。

信じられないと言った阿笠に、麻冬は何度もそう言った。

だから信じられなくとも信じなきゃと思い始めていた矢先なのに…

「……麻冬は俺が初めて心から愛した奴だ」

秋人は抱きしめている手を麻冬から離す。

麻冬は涙を流しながら秋人の顔を見上げた。

「人を愛するってこんなにも嬉しいことだって知らなかった」

友達として好きになった人ならいくらでもいた。

アメリカにいる幼なじみたちも日本で知り合った人たちも。

けれど、その人を思うだけで嬉しくて、喜ぶ顔が見れただけで幸せになるこの感情

それは、麻冬へだけのものだった。

「好きになれて良かった。絶対後悔しない」

「あき……」

「……諦めらんねぇって言ったけど、俺がそうすることでお前が傷つくだけなら俺は身を引くよ」

秋人は切なそうに笑う。

麻冬はそう言われた瞬間、目を見開いてすがるような瞳を見せた。

「文化祭まで待たなくて良い。もう何も俺のこと考えなくて良いんだ」

きっと、秋人は最後の最後まで待ちたかったに違いない。

必死にもがいて、そして麻冬を手に入れたかったに違いないのだ。

けれど、これまで幾度も泣かせて傷つけた。

自分の気持ちを優先させてばかりで麻冬のことを何も考えてなかった。

幸せになって欲しいと願っている人を泣かせるなんてほど愚かなことはない。

「阿笠だけを愛してやってくれ。あいつにはお前が必要だ」

「待っ……」

「さんざん勝手なことして悪かった」

そうして、秋人は本音は泣きたいくせに麻冬のためにとびきりの笑顔を作る。

「幸せになれよ。今までありがとう」

秋人はそれだけ言って、来た道へと戻る。

と、突然立ち止まって振り返らずにこう言った。

「でも俺ら友達だかんな。一生の大事な」

そして今度こそ本当に秋人は去って行った。

残された麻冬はただただ泣くばかり。

麻冬とてなぜこんなにも涙が出るのか分からない。

大事な友達を傷つけてしまったことへの罪悪感か

それとも……

「秋人ぉ～…っ……」

角に隠れている阿笠には、今ここで出ていって麻冬を慰めるなんてことは出来ない。

阿笠に出来ることは、麻冬が泣き止んで阿笠の家へ戻ろうとするまで、その場で麻冬を見守ることだけだった。

麻冬は秋人の行くほうを泣きながら見つめ、何度も秋人の名前を呼ぶ。

大事な友達を傷つけたからとか、もうそんなレベルの話ではない。

秋人が本当の意味で隣からいなくなってしまう
そのことが一番一番、悲しくて。

それから十数分ほどして、ようやく麻冬がなおも泣きながら歩き始めた。

阿笠はそれに気づいて、走って家へと帰って行く。

まさかその場で出くわしたりしたら、もし麻冬に秋人とのやりとりを見ていたことがバレたら

きっと麻冬はもう正気ではいられなくなる。

阿笠はそう思った。

麻冬のこの涙こそが阿笠への最大の裏切りだと言うのに、それでも

麻冬を守ろうと言うのか。

信じられないと、麻冬の気持ちをあれほど否定していたのに、それでも麻冬を守ろうとしているのか。

麻冬は、あんなにもはっきりと阿笠に好きだと言った。

なのに今は秋人がいなくなることを悲しく思い、泣いている。

矛盾だらけの言動に一番驚いているのは麻冬本人だ。

阿笠を愛そうと……いや、愛してると思っている分、余計に歯がゆいのだろう。

阿笠を好きでいれば、阿笠を好きでいた自分は悪くないと思える。

秋人への偽りの恋も許される。

麻冬はどこかでそう思っているに違いない。

自分では気づいてなくとも、そう考えているに違いないのだ。

２０分くらいしてそのうちようやく阿笠の家に辿り着く。

麻冬は玄関を開けようとするが、その場で立ち止まった。

こんな泣きはらした顔をしている上に、秋人のパーカーを着ている。

阿笠にこんな姿を見られたらきっとすぐにバレてしまう、そう考えた麻冬はなかなか家へ入ろうとしない。

走って帰って行った阿笠はとうに家についていて、いつ麻冬が帰って来ても良いようにくつろいでるフリをしている。

だがなかなか帰って来ないからチラチラ時計を見ては、窓の外を眺めている。

そんなことの繰り返しをしていたが、しばらく窓の外を見るのを止めていた。

幸か不幸かその頃麻冬は玄関の前で立ち止まっていた。

阿笠が再び窓の外を見たのは、それから十数分してからだ。

チラリとカーテンの隙間から覗いて見ては、暗闇の中に麻冬がいないか探すのだ。

「……麻冬！」

阿笠はようやく玄関の前で突っ立っている麻冬を見つけた。

急いで部屋から出て階段を駆け降り、玄関を勢いよく開ける。

目をはらした麻冬がうつむいて立っていて、阿笠に気づくとまた泣きそうな顔をする。

「麻冬……」

阿笠はどんな反応をしたら良いか分からずにいるが、あまりにも可

哀想な麻冬をついつい甘やかしてしまうのだ。

傷つけられてるのは自分だというのに。

「遅かったじゃん。平気だった？」

「う…うん」

「冷えただろ。とりあえず先に顔洗おうか」

そう言って阿笠は麻冬を家へと入れる。

麻冬は言われた通り顔を洗いに洗面所へ行く。

適当にタオル使って良いからと言い、阿笠は2階の自分の部屋へと上がって行く。

水でパシャパシャと顔を洗ってふかふかのタオルで顔を拭きながら、麻冬はじっと立ち止まる。

後で聞こうとしているのかそれとも分かっていて触れないようにしているのか、どちらにせよ秋人と何かあったことがバレてることは麻冬も分かっている。

それ以上にさっきあんなに不安そうにしていた阿笠に、きっぱりと好きだと言った手前気まずさが込み上げているようだ。

阿笠とてすべてを分かるはずではないと麻冬は思いながらも、かなりの罪悪感でいっぱいだ。

きっと優しい阿笠だから何も聞かないか、もしくは許してくれるに違いない。

そう思えてしまうからこそ、麻冬は余計に泣けてしまう。

せっかく顔を洗ったというのに、麻冬は再び声を押し殺して泣いた。

next

第１４６話【狂い始める歯車】

翌日の朝練後、阿笠より先に部室を出て秋人はライブ担当責任者の大橋のもとへと向かう。

阿笠はまさか大橋のところへ向かってるとは思わないが、麻冬を待つために早く出たわけではないだろうと思う。

秋人も阿笠が昨日のことを見ていたなんて、きっと思いもしないはず。

大橋は秋人にライブに出ると言われてすぐに、他のライブ担当たちとポスター作りを始めた。

昼休みには学校中にポスターが貼り付けられ、星陵の全生徒と教師に知れ渡った。

その事実はもちろん麻冬や阿笠も知ることになるし、春樹たちにもすぐに知られた。

堂々と麻冬に告白しときながらライブに出るということは、結果麻

冬を諦めたことになる。

春樹は秋人に詰め寄るが、秋人は
「良いんだ」としか言わない。

阿笠はあえて秋人のもとへは行かなかった。

昨日の2人の会話から、こうなることは分かっていた。

驚くことではないけど、でもはやり切ない。

秋人が諦めてくれて嬉しいはずなのに、阿笠も麻冬もモヤモヤした気持ちが消えずにいる。

文化祭まであと少しだというのに、こんな終わり方で良いのだろうか。

阿笠がどれほど麻冬を好きかなんて秋人には痛いほど分かるけど、秋人だって阿笠に負けないくらいの気持ちだ。

それでも麻冬がもう苦しまないようにと自ら身を引いたのは、称えるべきか。

秋人が身を引くことで一番傷つくのは誰なのか。

「なぜ今まで出ることを黙っていたんですか？」
「出るつもりなかったから」
「なぜ出るつもりに？」
「さぁ……心境の変化だな」

秋人は新聞部から嫌ってほど質問を受けている。

それだけでなく放送部にも放送を流されるし、生徒会からもプッシュされる。

ライブは一般客も見に来れるから、それ用の宣伝もされることになる。

去年の佑亮のときも本当すごかったが、今回もすごい。

去年は大物は佑亮くらいしかいなかったが、今年は秋人以外にも候補はいた。

春樹に阿笠に烈だ。

誰が出ても異論はないだろうが、1年生女子の間で行われた事前アンケートでは阿笠と烈が並んでいた。

1年生は彼女持ちが出てはいけないことを知らないのだ。

続いて2人では秋人がトップで、3年では春樹と烈だ。

3年は春樹がだめだと分かっていても、つい投票してしまったのだろう。

トップの数では烈のほうが多いが、合わせると秋人がダントツだ。

烈の破天荒で自由な行動を好む人は多く、なにより目につく容姿もしている。

髪の色もそうだし、愛くるしい笑顔に時折やる気のない表情。

そして服。

「何か一言お願いします！」
「まぁ本番で寝ないようにしとくよ」

秋人は適当な返答をし、やっと終わったと言わんばかりに伸びをする。

そうしてスタスタと歩いてどこかへ行ってしまった。

まだあと1つ授業があるというのに、どこへ行くのか。

まぁ教室ではクラスメートたちがコソコソと話をしているから仕方ないのかもしれない。

彼らは秋人が麻冬に告白したことを知っている。

それなのにライブに出るということは……と。

たかだかライブくらい、と思うかもしれないが、それだけ秋人の人気が計り知れないということだ。

「なんだ、月影はどうした？」

授業が始まり、出席を取っている中秋人がいないことを不思議に思う教師が言った。

「あ、体調悪いって言ってましたよ」

「本当か？櫻井」

「はい」

春樹は秋人がいない理由を知らないが、適当にそう言う。

そうしてまた点呼が続けられた。

これまでどれほど授業をサボってきたことか。

ただ今回ばかりは春樹も何も言えない。

もしかしたら春樹の言うとおり本当に体調が悪いのかもしれない。

でも、違うかもしれない。

そう軽はずみには春樹も秋人に何があったかなんて聞けないし、麻

冬や阿笠になんてもっと聞けないだろう。

そっとしておくしかない。

秋人が春樹を頼って話してくるまでは。

そうして授業が終わり、掃除を終えて長い長いＨＲが終わったあとに秋人はようやく教室へと帰ってきた。

一瞬秋人の登場にクラスメートたちも緊張が高まったけれど、普通通りに接している。

「サボりか！」
「まーな」
「どこ行ってたん？」
「部室で漫画読んでた」

男子たちはごく普通の会話をしようとしている。

誰も気になっていることには触れてこない。

もちろん春樹も。

「秋人」
「おう。春樹」

春樹は荷物を持って秋人の近くに行く。

秋人は荷物を整理しながら春樹の呼びかけに応じた。

「今日そのまま帰るん？」
「あ？……あー、そっか。今日部活ないのか」

秋人は部活があるものだと思い込んでいたらしく、少し気落ちしている。

それならこんなに急いで支度する必要なんかなかったと言わんばかりに支度するのを中断した。

「今日は帰るかな。久しぶりにゆっくりする」

秋人は後ろ側の首に手を当てて微笑しながら言う。

「んじゃ途中まで一緒に行こっか」

春樹がそう言うと、秋人は返事をしてカバンを手に持って春樹と2人で教室を出る。

未だ秋人の話題で持ちきりだが、疲れた秋人はもう耳すら傾けていない。

たかがライブで数曲歌うだけ。

そう思っているのは学校中を見ても秋人だけだ。

「良いのか？」

秋人と春樹が帰って行く様子を教室の窓から眺めて指差しながら、烈は隣にいる阿笠に尋ねる。

「なにがさ」

阿笠は全開にしている窓に、腕を組ませて乗せてその上に顔を置いている姿勢にいる。

窓に寄りかかりながら外を見ている烈は、
「なにがって……」と少し言葉を濁らす。

昨日結局阿笠は決して麻冬に何も聞かなかった。
罰が悪そうな顔をしながらも、麻冬も阿笠に話そうとはしなかったのだ。

結局軽く話してからお互い寝静まる。
正確には寝たふりをお互いにしていただけなのだが。

夜中の2人の会話を聞いていなくとも、秋人の行動から意味は読み取れる。
春樹も夏実も烈も、きっとみんな同じことを思っている。

それでも誰も何も聞こうとはしない。

烈くらいなら、もしかしたら昨日のことを知っているかもしれない。
実際見ていたのは阿笠だけだから、あの光景を目の当たりにしたの

は実質当人たちを含めて3人になるはずだが。

「まぁ、俺はお前が大丈夫なら良いんだけどね」

そう言って烈は阿笠の頭にポンと手を置く。

その手から伝わってくる温かさはまるで烈の優しさを表しているかのようで、阿笠の心を癒してくれる。

どうしたら良いのか分からずにいる阿笠への道しるべのようだった。

阿笠はじわっと涙が出そうになるが、目をつぶってグッと堪える。

十数秒くらいして、涙を抑えきれたのかようやく阿笠は目を開けた。

「バカだね……俺」

阿笠は悔しそうに笑いながら言う。

烈は阿笠の頭から手を離した。

「俺が麻冬を好きならそれで良いって……なのに……」
「……」
「俺を好きだと言った麻冬を……離れてく秋人に泣いた麻冬を……」

言葉に詰まったのか阿笠はその続きを言わない。

代わりにズッと鼻をすする。

詰まったのではなく、言ってしまったら悲しくなるから言えないだけだ。

それを分かっていながら烈は阿笠に何も言わない。

阿笠が言ってくるのを待っているのだ。

「…麻冬を……」

阿笠はもう一度麻冬の名を呼ぶ。

もう姿さえ見えない秋人たちの軌跡を辿りながら、悔しい気持ちを抑えながら

「どう信じたら良いのかもう分かんないんだ……」

空は晴れてる。

雲が泳いでる。

グランドはこんなにも活気づいていて、校舎も賑わっている。

なのになぜこんな風になってしまうのだろう。

阿笠は、それしかもう言わなかった。

next

第１４７話【幸せという名の関係】

秋人が家に着いて中に入ると、ちょうど佑亮が階段を登ろうとしていた。

「おーう、秋人」

「来てたんすか。先輩」
「まぁな。今日部活ない日だっけ？」
「そうっす」

秋人は靴を脱いで佑亮と共に階段を上がる。

「休みの日くらい遊べば良いのによぉ」
「今日はそんな気分じゃないんです」
「へぇ。なんだ、悩みか？」

佑亮は冗談でそう言うが、次の瞬間にはそう言ったことを後悔する。

「まさか」

秋人は苦笑しながらそう答えた。

その表情を見て佑亮はハッとしている。

悩みとは少し違うけど、確かに晴れやかな気分にはなれない何かがある。

そうして秋人は佑亮に別れを告げて自分の部屋に入って行く。

気になりつつも何も聞けない佑亮は、仕方なしに茉李亜の部屋へと戻った。

部屋の中に入るなり秋人はカバンを無造作に投げ捨てて、制服のままベッドの上に寝転ぶ。

それでも寝るわけでもなく音楽を聞くわけでもなく、ただ仰向けになって天井を見つめている。

昨日麻冬とさよならしたばかりのときは、どんなに悲しくとも全く涙は出てこなかった。

今日どれほどクラスメートに哀れまれても、弱音なんて吐かなかった。

阿笠を見て怒るわけでも、春樹を見て泣きつくわけでもない。

ただいつも通りの秋人でいた。

演じていたわけでは決してない。

そうしようとしていたわけでもない。

ただ、あまりにも実感がなさすぎて悲しいという気持ちが沸いてこないだけだ。

泣きたいはずなのに泣けずに、笑うしかない自分がこんなにも惨めだと、秋人は自身を責めている。

「友達……ねぇ」

秋人は目に腕を当てながらそう呟く。

友達とは、なんて残酷な位置づけだろう。

そう名乗れば側にいれるのは確かだけども、好きなのに手に入らない人と一緒にご飯を食べてお喋りして勉強するほど苦痛なことはない。

周りに心配かけまいと笑うしかないことほど切ないことはない。

「は、はは……何が大事な友達だよ……」

秋人は苦笑した。

「自分でそう言いながらこれじゃあ…世話ねぇな」

麻冬に出会えてようやく見つけた新たな感情

優しさ
親しみ
敬い
希望
夢

きっと、それらよりも欲しがっていた。

「麻冬……」

焦げるような衝動にかられながら、ポカンと空いている心の穴に埋まってくれたその感情。

そうか、これが

愛しい

「かっこつけて手放して……きっともう一生手に入んねぇんだろうな」

麻冬のためならきっとなんだってできる。

側にいて欲しいならずっと隣にいるし

楽しませて欲しいなら面白い話をいくらでも聞かせよう。

励まして欲しいなら慰めの言葉をかけるし

悲しいんだったらその気持ちを共有する。

ただ、側にいることが辛いのならもう好きだなんて言わない。

言えない。

それだけのことだった。

麻冬が阿笠を好きだと思い込んでいるだけだろうが何だろうが、麻冬が決めたことなのだから仕方ないと割り切るしかないのだ。

秋人がそれで良いと言うのなら、誰にもその意思を曲げることはできないのだ。

そうして、麻冬を好きじゃなくなると言った日から幾日か経ち、ついに文化祭を迎えた。

文化祭は金曜と土曜に行われるが、金曜は文化部たちによる校内発表だけだ。

吹奏楽によるオーケストラに演劇部による劇、文学部の展覧会や家庭科部の試食に科学部による面白実験。

特別に新体操部のパフォーマンスなど様々だ。

秋人は出席票だけ提出して帰って行き、春樹と夏実・阿笠と麻冬は一緒に見て回っている。

烈は美術部部長として……というより専門家たちからのインタビューや撮影など忙しい様子。

学校中がワイワイ賑わっていてとても楽しそうだ。

明日になれば一般客も来るものだからこの何倍にもなって星陵高校は活気づく。

あれから2週間以上経っている。

ちゃんと秋人は友達として麻冬に接しているし、麻冬も秋人の意思を汲んでそれ相応の態度を取っている。

秋人は友達で彼氏は阿笠、という事実を大切にしている。

阿笠も阿笠で振り向かせようと必死だ。

もう麻冬が心配するようなことは言わずに、いつもの笑顔を見せている。

朝練が終わって時間が合えば秋人と阿笠は一緒に部室を出るし、そこで偶然麻冬に会えば3人で教室へ向かう。

お昼休みは4人で昼食を楽しんでいるし、阿笠は烈と仲良く食べている。

放課後の部活のあともいつも通り秋人と阿笠は自主練をしていて、麻冬が来たら阿笠は麻冬と2人で帰って行く。

そう、ちょっと前とまったく同じ日常を送っている。

なんら変わりのない、いつもの平穏な日々を。

それでも3人でいるときは、どこかお互い遠慮していて相手のテリ

トリーには決して踏み入れずにいる。

楽しそうな空間にいるけれど、一歩踏み入れるとその空間はいとも簡単にバラバラに崩れてしまいそうだ。

溝なんてものではない。

溝が深まるだけならまだマシなほうだ。

必死に築いている偽りの絆が切れてしまったら、きっともう元には戻らない。

自覚してなくとも3人の心がそれを制御している。

その証拠に3人はあのときから泣きも怒りもしていない。

はたから見れば、それは共に幸せだからだと思うかもしれない。

けれどそんなことは決してないのだ。

まるで脆い硝子には触れたくないかのように、３人が３人とも境界線を引いている。

そんなことくらい、春樹にも夏実にも烈にも知られている。

知っているところで、彼らにはどうすることもできない。

心配そうな顔をしている春樹と夏実に、無情の烈。

できることと言えば、あの３人が望むようにいつも通りの日常を送ることだけだ。

例え痛々しく見えても、そうしていなきゃあの３人は身心ともにもたないだろう。

ちょっとでも油断したら簡単に逝ってしまいそうなくらい、寸前の場所にいるのだ。

大袈裟に思うかもしれない、けれど愛想笑いしかしていない3人を見ていれば一目瞭然だ。

おかしいと、悲しいと誰かが思わない限り永遠に続く。

こうなる運命なんだって思い込んで、ずっとこのままになってしまうだろう。

確かに幸せかもしれない。

阿笠という男に愛されて麻冬は、麻冬と付き合えて阿笠は、麻冬の幸せを願う秋人は、確かにこれで幸せかもしれない。

けれど……

「春樹、それ買うの？」
「ん？んー」

春樹は有志で出してるバザーで見つけたリストバンドをじっと見つめている。

「白と黒かぁ。春樹なら白のほうじゃない？」

コンバースのリストバンドで、隅に赤いラインが入っていてなかなか格好可愛い。

春樹は2こを見比べながら、黙り込む。

こんなんで状況が変わるわけではない。
むしろ全く意味のないものかもしれない。

「……黒、だよな」

それでも、何かできなくても支えたいと思うのは、春樹の勝手だ。

春樹はそれを購入した。

その2時間後、そのバザーの前を大群が歩いていた。

「今すぐにでも来て欲しいくらいだよ。愛川くん」
「はは。そう言わないでくださいよ」

烈と記者とカメラマンと、有名な画家たちだ。

今日は特別に学校の許可が下りての取材やらスカウトのようで、もちろんそれは烈も承知している。

「烈くん、そうまでして学生でいたい理由とは？」

パシャパシャとシャッター音が鳴り響く中、女性記者が烈にそう尋ねた。

それは関係者なら誰もが聞きたい真意である。

「そうですね、なぜでしょう」

「そういえばあの天才フォワードの阿笠くんとは中学以来の親友だとか！」

「ええ。まぁプライベートにはあまり触れないで下さ……」

烈は言い終える前に突然立ち止まる。

そうして突然しゃがみこんだ。

「愛川くん？」

お偉いさんたちが不思議そうな顔で見ている中、烈はあるものを見つけてそれを手に取っている。

烈がじっと見つめていると、バザーの店員らしき女生徒がこう言った。

「2時間くらい前にその黒が売れちゃったんですよ〜」
「へぇ、黒か」
「やっぱ黒のが人気ですね」
「……や、これ買う」

烈はそれを店員に差し出す。

記者たちは
「コンバースが好きなんですか？」とか
「黒より白なんですね」とかいろいろ聞いてくるけど、烈は全否定した。

「あいつは黒より白だから」

きっと、何も変わらない。

応援してたって、事実は事実のままだろう。

当人たちがそれで良いと言ってるのだから。

だから

「それで良い」のではなく
「それが良い」と言わせたいと思っているのは

2人の勝手。

優しくてお節介な、烈と春樹の勝手なのだ。

next

第１４８話【七変化】

「ねぇっ、フルートの音が聞こえない？」
「行ってみようよ！」

翌日、ついに一般公開の文化祭が行われた。

昨日のような文化部による公演ではなく、クラスや部活による多くの出し物だ。

喫茶部門以外の部門をやるクラスはすごい勢いで宣伝をし、客を集めようとしている。

なぜ喫茶部門以外かと言えばもうご存知の通り、喫茶部門で２‐５と２‐６を押し退けて優勝するなんて無謀だからである。

それでもとりあえず赤字にはならないようにと頑張ってはいるようだ。

だがやはり、客寄せしなくても集まるのに客寄せをしまくるものだからあり得ないほどの人数が集まるのだ。

「あっ、いた！」

学校中に響くフルートの音に女性たちが集まって行く。
その行き先はもちろん、2年の階である。

「やぁ。走ってきてお腹が空いたならぜひ5組に」

阿笠はフルートを口から放し、営業スマイルをする。
女性たちは阿笠の容姿にやられてそのまま5組へと直行して行くのだ。

フルート少年を演じて女性たちを魅了したあとは、次は男子たちを惹き付ける番だ。

「あ！阿笠大悟！」

今度は阿笠はサッカー部のユニフォームを着てサッカーボールを操っている。

「すげ！本物だ！」
「うおー！サッカーやってるぜー！！」

これには若者の男性だけでなく子どもからお年寄りまで人気がある。
もちろん年頃の女の子たちにもかなりの人気だ。

「よ。俺とサッカーやる？」

阿笠はそう言ってサッカーボールでリフティングをし出した。

「かっけー！」

そうしてドリブルをしながら阿笠は走り出す。
反射的にみんな付いて行くが、当たり前にもその先はやっぱり5組なわけで。

「はーい、何十名様かご到着～っ」

阿笠はクラスメートに惹き付けてきた客を渡して、再びどこかへ行く。

結局盛り上がりすぎて阿笠はクラスを抜けることができず、休憩な

しのようだ。

それでもトイレで着替えるときは、数分ほどゆっくりしてから来るようにしている。

お腹が減れば、中華料理らしく肉まんを食べながら客寄せに出る。

「あ」
「あっ」

阿笠が肉まんを食べながら足でボールを蹴りつつ歩いていると、どこかの高校の制服を着ている学生と鉢合わせた。

どうやら知り合いのようで、阿笠は立ち止まる。

「おひさぁ、田渕&雷門」

阿笠は口をモグモグしながら手をひらひら振る。

「あほ。この前試合したばっかだっての」
「あはは、そっか～」
「ったく、本当サッカーやってるときとは別人だな」

どうやら彼らは県大会で準優勝した高校のようだ。
そのくらいともなればお互い顔見知りにもなる。
彼らも全国選抜に選ばれているが、試合が近いため阿笠は県選抜の練習に出ている。
「それにしてもお前らが別々のチームとはな」
「うーん。あはは」
「でもまぁ、お前と対戦できて嬉しい気持ちもあるかも」
雷門は手をポキポキならしながらそう言う。
そう、彼はキーパーなのだ。
一応第二キーパーなのだが、最近では第一キーパーと見劣りしないくらいにまで伸びてきている。
ちなみに田渕は阿笠と同じフォワード。
。
「またやっつけちゃうよ」

阿笠ははにかみながら言う。

「よく言う。なんなら今やっても良いぜぇ？」
「はっはーん。無理無理、お前じゃ」
「なっ……えっ、誰？！」

雷門の肩に手を置きながら強気にそう言うのは、烈だ。
しかもなぜか星陵高校サッカー部のユニフォームを着ている。

「お前サッカー部か？見ない顔だな」

田渕は腕を組みながら烈の顔をじろじろと見る。

すると烈は笑いながら手を振った。

「俺美術部美術部」
「美術部ぅ～？」
「でも、キーパーやったらたぶん日本一」
「はっ？！」

唖然としている田渕や雷門をよそに、烈は
「ねー」と阿笠に振る。

阿笠もまた、微笑みながら
「ねー」と応える。

まさか烈からこんなこと言うなんて信じられない。

決してサッカーやってたことを隠してるわけではないのだが、別にサッカーで注目されることを望んでないためあえて言わないのだ。

烈が欲しいのは画家としての知名度。

「日本一たぁ言ってくれんじゃん。なんなら勝負するか?」
「んー、だってお前阿笠の球止められんないだろ?」
「お前止めれんのかよ?」
「2本に1本はな」

そんな会話をしていると、田渕たちの向こう側からタキシードを着た、まるでホストのような男子が近づいてきた。

「愛川本当強いから止めとけ。俺も負けた」

髪の毛を整えてピシッと綺麗にタキシードを着ていると本当に格好良い。

田渕たちは振り向き、突然の秋人の登場に少し驚いている。

「月影！」
「ど、どういうことだよ？負けたって」

阿笠は今日秋人に初めて会ったようで、おはよ～と言いながら秋人に近寄る。

秋人は軽くため息をつきながら、阿笠に言った。

「なるほどなぁ。客集まるわけだ」
「ん？」
「お前七変化してるわけか」

そう、阿笠はフルートとサッカー以外にもいろいろやっていたのだ。

まだ一般客があまり着ていない段階では普通に制服を着ながら生徒を集めた。

一般客が入ってくるようになってからは例のチャイナ服を着たし、その後はまた制服に着替えてあの綺麗な歌声で人を集める。

そのあとは烈が白いスーツに帽子を被ってキッド役をやり阿笠がメガネをかけて蝶ネクタイをしてコナン役をやりサッカー対決をしたりした。

キャプテン翼やホイッスルもやったりしたが、やはりコナンが一番人気。

烈はウェイターをしているためそこまで客寄せをしているわけじゃないから、烈がいないときにフルート吹いたりサッカーのユニフォーム着たりしているわけだ。

これだけすれば話題性もあって人が集まるのは当然だろう。

「だって烈がなんでもしろって言うからさぁ」
「はー……こりゃ勝てるわけねぇわな」

秋人はもはや失笑している。

ここまでするなんて誰も考えないだろう。

クラスメートたちもあまりの客でかなり忙しそうだ。

「あとで阿笠ともう1回コナンやるから見てて」

烈も楽しそうに言う。

ちゃっかりしてることに服にスピーカーをつけて名探偵コナンのテーマ曲をかけながらやっているのだ。

しかも所々にコナンの決めゼリフを入れている。

なかなか考えるものだ。

と、他の話に花を咲かせている3人にそっちのけにされている田渕たちが軽く叫ぶ。

「俺らの存在忘れてね?!」

「あ、忘れてた」

「おいっ!」

なんだっけ?と3人が言っていると、雷門が烈の話だと言って話をぶり返す。

そんな話は今3人にとってはかなりどうでも良い。

だがここでほったらかすわけにもいかず、阿笠は流しながら適当に答えた。

「まぁそういうことだよ。ほら、2人ともうちの店来なよ」
「あ、ずりぃ。俺んち店来いよ」

その後も何度か尋ねたが結局流されてしまい、田渕たちはもう諦めている。

そうして再び秋人たちは客寄せをしに行き、田渕たちは校内を回る。

田渕たちは阿笠になんで静岡のほうに出るのかを聞きにわざわざ遠いところ来たようだが、それも意味なかった。

秋人は春樹たちを集めてどうしたら5組より客を集めることができるか作戦を立てているが、そうしている間にも阿笠と烈が更に客を集めるのだ。

何にせよ、とりあえず喫茶部門では異常なまでの盛り上がりを見せていた。

next

第１４９話【キセキ】

１６時を過ぎた頃、ようやく嵐も収まりつつある。

だが文化祭と言えばやはりメインイベントなわけで、彼女のいない烈や秋人は女生徒たちから何度も告白をされる。

半分はファンみたいなものだが。

また他校の人は春樹や阿笠に彼女がいるなんて知らないものだから当然彼らにも声をかけまくっていた。

夏実や麻冬も同様だ。

秋人のセクシーなタキシード姿や春樹のおちゃめな和服、夏実の可愛らしい浴衣に麻冬の可憐なドレスとくれば目も引くだろう。

阿笠や烈にいたってはコスプレばかりだから嫌でも目に入るし、その上あの容姿だ。

今年は断然あの6人が人気を争っている。

「あーっ、麻冬！」

なおも客寄せをしつつ何かご飯を食べている阿笠は偶然麻冬を見つけた。

駆け寄ると麻冬も阿笠に気づいて手を振る。

「宣伝中？またサッカーのユニフォームなのね」
「やっぱこれが人気かなって」
「ふふ、そうね」

今日阿笠と麻冬が2人きりになったのはこれが初めてだ。

廊下で見かけても声をかけるくらいか、もしくは声すらかけれないくらい忙しかった。

白のAラインのドレスと髪についている白いバラの髪飾りがとても似合っていて、いつになく美しい麻冬に阿笠はドキッとする。

「阿笠の歌声や音色聞こえたよ。やっぱり綺麗」
「んなことないって」

「ううん、綺麗よ。羨ましいくらい」

麻冬はこんなこと言っているけど、実際には心臓がドキドキしまくりなのだ。

麻冬は昔、阿笠のサッカーを一生懸命にやる姿に惚れたのだ。

その優しさと時折見せる厳しさに惚れたのだ。

サッカーボールを片手に持っている阿笠を、好きだと思ったのだ。

「一緒に見て回らない？せっかくだし」

「麻冬は良いの？客寄せしなくて」

「他の３人が頑張ってるから平気よ。ね、行こ」

麻冬は阿笠の腕を掴む。

阿笠は一瞬どうしようか迷ったけど、もうこんな時間だし客寄せしなくても良いかと思い快く誘いに応じた。

阿笠とて麻冬と回りたかったのだから嬉しいだろう。

その頃、秋人はライブ担当の人に呼ばれて控え室に向かっていた。

もうじきライブが始まる時間のようで、ライブは計1時間ほどに渡って行われ、ゲストが出るのは最後から2番目とされている。

出番までは時間あるのだが、出演者はみんな控え室に集められるのだ。

秋人はとりあえずタキシードを脱いで制服に着替えるためにトイレへ行く。

久しぶりの制服に軽く安堵を覚え、タキシードを袋に入れて持ったまま控え室へと行く。

その途中、秋人は阿笠と麻冬が歩いているのを見つけた。

「あ。麻ふ――――」

秋人は手を上げて麻冬の名前を呼ぼうとするが、なぜかその動作をピタッと止める。

遠目からでも分かるほどの、楽しそうな2人。

綺麗な麻冬とその側で麻冬を守るナイトに、秋人は入って行くことができない。

いつもその笑顔を見せてくれていたのは自分だった。

きっと何もなければ自分が麻冬とああやって文化祭を回っていた。

心のどこかで、まだ麻冬を思う秋人がそう叫んでいる。

麻冬を諦めた秋人がその思いを制御しようとしても、どうにも止まらない。

麻冬を諦めると言ったところで、まだ麻冬に未練があるのは事実だ。

何も嫌いになったわけではないのだから。

けれど未練があっても決して報われることはないんだと、秋人はたった今実感した。

2人でいるところを見るのは初めてではないし、何度も見ている。

けれど、こんな人混みの中で簡単に麻冬を見つけられるくらい……阿笠が自分だったら良いのにと思うくらい、まだ全然諦めきれていなかった。

「…っ……」

秋人は上に上げたやり場のない手を下ろして、ギュッと握り締める。

そうしてその拳にした手を見つめて憤りを感じている。

きっと、時間が解決してくれると思ったんだろう。

あの2人が一緒にいることが当たり前になれば忘れられると思ったんだろう。

そんなはず、あるわけないのに。

「あっ、月影。阿笠知らん？」

そのとき、後ろから歩いてきた烈が秋人に声をかけた。

秋人は手を下ろして烈の顔を見て平静を装う。

「や、知らねぇ。探してんの？」

「いや、いないなら良いんだけどさ、ただそろそろ休憩させようかと思って」

「ああ、なるほど」

それだけ会話して烈は、じゃあなと言っていなくなる。

秋人が振り向くと、さっきの場所にはもうあの2人はいなかった。

秋人は悔しさと惨めさに嫌気が差すが、とりあえず控え室へとゆっくり向かって行く。

秋人が控え室に着いた頃にはもうライブの3組目まで始まっていた。

「おー！遅かったじゃん」

「わりわり」

秋人の後ろで演奏してくれるメンバーたちが秋人に近寄る。
男性ギターに男性ドラマー、女性ベースに女性キーボード、そして秋人のヴォーカルの計5人だ。

毎年ゲストのバックは有志で出ることになっていて、去年今年と共に希望者はけっこういた。
その中で実力で選ばれたのが彼らなのだ。

「んじゃ打ち合わせ通りでオーケー？」
「ああ。結局あれになったんだよな、歌う順番って」
「そうそう」

話に花を咲かせる秋人とメンバーたち。

秋人が歌うことで盛り上がることが確実なものだから余裕のようだ。

楽しげにお喋りをしているが、秋人はどこか他人行儀。
愛想笑いをしているだけの、本気の笑いではない。

2010

いや、笑えないのだろう。

現実に直面してしまって戸惑っているのだ。

ようやく頭がさよならする意味を理解してしまったのだ。

あのまま幸せそうな2人がこの先もずっと一緒にいて、例えば秋人と阿笠が同じJリーグに入ったりしたらその側にはきっと麻冬がいるんだろうと、側にいても一生見ているだけなのだという

未来予想図が見えた。

それまでに秋人にも他に好きな子ができるかもしれない。

でも、今の秋人にはそんなことはあり得ないと全面拒否することができてしまう。

拒否してしまう限り、麻冬への思いが自分を苦しめることになる。

2011

好きじゃなくなるなんて、そんな方法は存在しないし頭で考えてできるわけではない。

何もしないでいることが一番辛いのだと、秋人は知った。

「わ、うまっ。麻冬、これかなり美味いよ」
「本当？一口ちょうだい」
「はいよ」

阿笠と麻冬は仲良く校内を回っている。

喫茶店に入ったり何か物を買ってみたり相性占いをしたりお化け屋敷に入ったり、とにかくなかなか一緒にいれなかった分たくさんの所を見て歩いている。

「ん～！本当だ！」
「ね。てかうちの高校県立の割りになかなか豪勢だよね」
「うんうん」

そのとき麻冬は、ふと思い出したように言った。

「烈くんが着てたユニフォームって誰の？」
「ああ、秋人のだよ」
「え、秋人の――――」

麻冬は秋人の存在を思い出して一瞬止まる。

だが阿笠はそんな麻冬には気づかずに続けた。

「部室にあるから勝手に持ってけって言ったんだ。秋人は気づいてないみたい」

軽く笑いながら言う阿笠。

麻冬も適当に笑って答えるが、いやに顔が緊張している。

「そういえば明日試合なのよね」
「どうせなら見に来る？なんて、麻冬は練習かぁ」
「んーん。行く」
「あ、そう？……えっ？！」

阿笠が明日は西部でやるんだよと言っても、新幹線で行くと言って聞かない。

練習もあるだろうのに、なぜそんなに急ぐことがあるのかと阿笠は疑問に感じる。

けど麻冬は試合するスタジアムの場所だけ尋ねて、それ以外は何も言わなかった。

阿笠と秋人の対決を直接見たいのだろうか。

それとも他に何か違う理由があるのだろうか。

阿笠が何を聞いても麻冬は答えようとしない。

仕方なく諦めた阿笠は話題を変えて、さっきしてもらった相性占いのことについて話す。

彼らの相性は８９％でなかなか高い数値を出していた。

もちろん所詮生徒による占いだから何とも言えないのだが、麻冬は前にその生徒に秋人との相性をこっそり占ってもらったことがある。

春樹と夏実でさえ９２％だったのに、麻冬と秋人の相性は滅多に出ない１００％だった。

遊びだとは言うけれど、こんな偶然ってあるだろうか。

阿笠との相性を見てもらったあとに麻冬は、前に秋人との相性を見てもらったことに気づいて後悔をした。

せめて阿笠との相性も１００％だったら良かったのに、と麻冬は自分を恨む。

相性占いの話題から少しずつ他の話題に変わりつつあるとき、講堂の前を通りかかった。

そう、この講堂ではあのライブが行われているのだ。

講堂に入らなくてもギターやらの楽器の音がギンギンに鳴り響いている。

「……？人いっぱい」

阿笠は続々と生徒や一般客たちが講堂に入って行くのを見て不思議そうに言う。

特に女子が多い。

「……あっ！秋人か！麻冬、俺らも中入ろう！」

「えっ…ちょっ…待っ……！」

麻冬の嫌がる声も聞かずに阿笠は麻冬の手を引いて講堂に入って行く。

溢れんばかりの観客を前にステージで歌っているのは、本当にあの秋人だ。

『例えばほら、明日を見失いそうに僕らなったとしても』

秋人が歌っているのはＧＲｅｅｅＮのキセキのようだ。

ライトアップされながらマイクを持って歌っている秋人はいつにも増して格好良い。

キャーキャー騒いでいる女子たちの間には危なくて入っていけないため、阿笠と麻冬は後ろのほうで見ている。

「やっぱ上手ー。秋人」

ボールを軽くポンポンとリフティングしながら阿笠はそう言う。

だが、阿笠がボールを蹴っていたために秋人はこんな人混みの中でも2人がいることに気づいてしまった。

一瞬言葉に詰まりそうになったが、秋人はそれでも歌う。

『2人寄り添って歩いて、永久の愛を形にして、いつまでも君の横で笑っていたくて…』

秋人はチラッと麻冬の顔を見て、そしてまた視線を変える。

『ありがとうやAh、愛してるじゃまだ、足りないけどせめて言わせて
「幸せでした」』

と、秋人は歌詞を間違えたようで阿笠は麻冬に笑いながら突っ込む。

けれど麻冬は秋人を一直線に見つめていて、阿笠の声には気づかずにいる。

麻冬?と聞き返しても反応のないため、阿笠は罰が悪そうな顔をして視線を麻冬から外す。

『上手くいかない日だって、2人でいれば晴れだって。喜びや悲しみも全て分けあえる』

麻冬は、人前で歌うことのない秋人を屈託のない瞳でじっと見ている。

秋人はそれを知ってか知らずか、もう麻冬のほうを見ようとはしていない。

『君がいたから今の僕がいる。次は君が幸せになって、好きな奴と。最後の一秒まで』

もはや秋人は歌詞をめちゃくちゃに歌っている。

熱狂している観客たちは秋人の気のきいたアドリブだと思い込んで盛り上がっているが、決してアドリブなんかではない。

「あいつっ……」

阿笠は小言でそう呟いた。

その横で、麻冬は秋人を見つめる真剣なその瞳から涙を流していた。

「ま、麻冬……」

阿笠は麻冬が泣いていることに気づくが、阿笠にはどうすることもできない。

『明日今日より笑顔になれる。君がいるだけでそう思えるから、何十年何百年何千年時を越えても』

秋人の歌を聞いて何かを感じたのは、阿笠と麻冬だけではない。

『君を愛してる』

観客たちに混じって真ん中らへんで聞いていた春樹や夏実も

講堂の出入口のドアに寄りかかりながら聞いていた烈も、みんな同じだ。

愛してる

もう伝えてはならない、最後の告白だった。

next

2020

第１５０話【リストバンド】

阿笠は、まだ秋人の出番は終わっていないにも関わらず麻冬の手を引っ張って講堂を小走りで出て行く。

烈は阿笠たちの姿が見えたところで軽く隠れて、２人が出て行ったあとまた姿を見せた。

「……ふーん」

横目で見ても分かる、麻冬の涙に烈は意味ありげに納得している。

春樹はキョロキョロと講堂内を見回すけど、この人混みの中だしおまけにもう2人が出て行ったあとだから、２人の姿を見つけることはできない。

ため息をつきながら床を見つめ、春樹は心配そうな顔をしている。

烈は、そのまま講堂を出て教室へと戻って行った。

もうどのクラスも終わりを迎えていて片付けをしている。

ライブのあとは後夜祭だから、それまでにはある程度片しておきたいのだろう。

後夜祭……そう、後夜祭といえば文化祭でのメインだ。

男女で踊るのが毎年恒例だからかなり盛り上がる。

ライブのゲストになるということは、その後夜祭のパートナー探しの標的になるということだ。

彼氏のいない、もしくは他校に彼氏がいる女生徒たちがここぞとばかり秋人に詰め寄るのが目に見えている。

ライブが終わったあとどうやって隠れてすり抜けるかが、一番の悩みどころだ。

「お疲れっす！」
「おう！大盛況！」
「月影ナイスだぜ」
「ああ」

出番を終えた秋人とメンバーたちが控え室に戻る。

もう帰っても良いのだが、秋人はその場に留まっている。

メンバーの1人が秋人に、帰らないのか?と尋ねると女子メンバーが笑って言った。

「女の子たちに囲まれたくないのよね」

「う……ま、まぁ」

「そっちの窓から逃げると良いわ。でも後夜祭出ないの?」

秋人は指差された窓をチラッと見て、質問に答える。

「明日試合だからこれから新幹線で東京行くんだ」

「あ……ああ!サッカーな!俺めっちゃ楽しみにしてるんだぜ」

秋人がそう言うと、他の男子たちが身を乗り出してワイワイと騒ぎ立てる。

他のライブを終えたバンドたちは控え室からいなくなっていくが、秋人の仲間たちは大いに盛り上がる。

秋人も嫌なことを忘れたいがごとく、珍しく楽しげに話している。

ようやく最後のバンドが最後の曲に入ろうとしている頃、まだ話に花を咲かせている彼らのいる控え室をノックする音がした。

もし女子だったら嫌だと言わんばかりに秋人は隠れようとするが、意外にもそれは春樹だった。

「は、春樹？」

秋人はタタッと春樹に近づき、どうかした？と尋ねる。

春樹は必死に作り笑顔をしながら、あのリストバンドを差し出した。

「これ、昨日買ったんだ。秋人に」
「俺に？」
「頑張って……って言ったら怒る？」
「？なんで？」

秋人は春樹の心意には全く気づかずに、おかしなことを言う春樹に笑っている。

その笑顔が、更に春樹を心配にさせるとも思わずに。

「……辛いときとか悲しいとき、俺がいるってこと忘れないでね」
「はは、どうしたんだよ？」
「とにかく俺だけはどんなときも絶対側にいるから」

春樹は真顔ではなく、あえて微笑しながら言っている。

こんな状況の秋人に真剣に言って余分なことを考えさせたくないのだろう。

明日は試合なのだ。

それも、日本中が注目する中阿笠との対戦。

「じゃあ俺行くね。明日見に行けないけど頑張れ」
「おう。またな」

秋人が手を振る中、春樹は控え室から出て行く。

秋人は春樹にもらったリストバンドを左手首に付けて、またバンド仲間たちの元に戻る。

窓から出るのは良いものの、教室に荷物があるから一度は教室に行かなくてはならない。

教室に行くとなれば見つかってしまうだろう、なんてそんなことを考えているとまた控え室をノックする音がした。

誰？と聞く暇も与えず、ノックをした人は「俺」と言っている。

俺だけでは分からないのだが、秋人はそれが阿笠の声だと瞬時に判断してドアを開けた。

「よっ。はい、荷物」
「えっ、持ってきてくれたのか？」
「うん。秋人がへたに校内歩くと大騒ぎでしょ？」
「わー、さんきゅ！」

秋人はカバンを阿笠から受け取り、肩にかける。

「お前後夜祭出るんだろ？そういや麻冬は？」

秋人はさっきのこともあって少し控えめに言っている。

阿笠に聞かれていたことは十分承知なのだ。

「ううん、俺もこれから練習行くから後夜祭出ない」
「は?!だって麻冬あれ出んの楽しみにしてっ……」
「やっぱ良いってさ」

阿笠は苦笑している。

まだサッカー部のユニフォームを見に付けている阿笠は、どこか親しみを感じる。

そのユニフォームを着続けていることにたいして意味はないんだろうけど、それでもこう思わせられてしまう。

自分たちには結局サッカーしかないのだと。

「そ、そうか。それなら良いんだけど」

そうして阿笠は、新幹線でこれから行くんだろ?と秋人に尋ねた。

秋人が頷くと、一緒に駅まで行こうと阿笠は言い、2人は控え室の窓から出て共にバスで駅まで向かうことにした。

グランドでは後夜祭の準備がほとんど終わっていて、人がガヤガヤと集まり出している。

黄色い声を上げながら楽しそうにはしゃいでいる生徒たちを横目で見ながら、２人はコソコソと隠れながら通り過ぎて行く。

２人はこれから練習に行くため、ジャージに着替えてある。

阿笠はＳＨＩＺＵＯＫＡと書かれたジャージを羽織り、秋人はＪＡＰＡＮと書かれたジャージを羽織っている。

静岡選抜用と全国選抜用のジャージのようで、当然ながらお互い両方を持っている。

バスはそこまで混んでおらず、割りと静かだ。

そんな中、２人はたいして会話もしない。

一応隣には座っているものの、窓側に座っている阿笠は外を眺めているし、秋人は腕を組みながら軽く寝ている。

２、３０分ほどして駅まで着くと、２人は出発時刻を調べ始める。

阿笠は浜松までの下りで、秋人は東京までの上りだ。

全国選抜は東京で集まって練習してから早朝、浜松へと行くことになっている。

静岡選抜は前日から浜松で練習してそのままそこに泊まる予定のようだ。

先に新幹線が来るのは秋人のようで、その十数分後に浜松への新幹線が来る。

阿笠は見送りとして改札の入り口まで付いていく。

改札に入ってしまう前に秋人は振り返り、阿笠の顔をじっと見つめる。

「なに？」

阿笠はジャージのポケットに手を入れながら、何気なく微笑んでいる。

「明日、負けない」

「え」
「ごめん。俺全然余裕ないんだ。嘘つきって思われても良い」
秋人はいつになく真剣な瞳をしている。
「……俺ね、いろいろ分かってるつもりなんだ。きっと秋人には適わない」
「？何言って……」
「でも俺も負けない。静岡選抜のキャプテンとして、ここに誓う」
阿笠は右手を拳にして、右腕をすっと床と平行に差し出す。
秋人はその拳を一瞬見つめ、右拳を阿笠の拳にゴッと当てた。
「なら全国選抜のキャプテンとして俺も誓う」
2人はニッと笑い合い、そうして秋人は改札を通って行ってしまった。
阿笠は秋人の背中を追うことなくすぐにその場から去る。
椅子に座って新幹線を待っている間、突然阿笠の携帯が鳴った。

誰からの着信かを確認して阿笠は電話に出る。

「烈？どうし……」

『もう出た？！』

「えっ？あ、まだだけど」

『良かった！お前今どこにいる？！』

どこって……とキョロキョロして何か目印を探そうと阿笠が視線を変えると、向こうから電話片手に走って来る烈の姿が見えた。

「れっ……？！」

阿笠はあまりにも驚いてつい立ち上がる。

烈は阿笠に気づいて電話を切り、走るのを止めて歩き始めた。

阿笠が駆け寄ると烈は、膝に手を当てて息を整える。

「あっぶね……はぁ、はぁ」

「な、なんでここに？」

「これ」

烈はポケットからゴソゴソと何かを取り出す。
そしてそれを阿笠に渡した。

「リストバンド？」
「昨日買ったんだ。渡しそびれちゃって」

烈は、額の汗を袖で拭いながら笑う。
バス降り場からかなり急いで走ってきたんだろう、すごい汗をかいている。

「俺に？」
「おう。別に意味はないんだけどさ、なんていうか……」

烈は言葉に詰まっている。

意味がなくはない。
けれど、確信を持った意味でもない。

「少しでも良いほうに進めればと思って」
「烈……」
「俺さ、お前と一緒にいれる期間のうちに絶対お前に幸せ掴んで欲

しいんだ」

高校までという、期間限定の学生生活

「もちろん期間終わっても会いに行くし永遠に友達だけど」

「……うん」

「だからさ、いつだって俺が側にいること忘れんな」

烈は阿笠の肩を軽く殴る。

阿笠は笑って返そうとするが、どうしても溢れる感情を抑えることはできないようだ。

リストバンドを握り締めながら、涙が出るのを堪えている。

「明日頑張れよ」

そんな阿笠に烈は最高級の笑顔を見せた。

阿笠はすかさずリストバンドを左手首にはめて、それを烈に見せる。

「へへっ。似合う?」

「おう、めちゃくちゃ」

そうこうしてじゃれ合っているうちに新幹線があと数分で来そうになる。

烈は改札口まで阿笠を見送って、そうして阿笠は乗車口へと向かって行った。

烈は、阿笠の姿が見えなくなっても改札口でその方向を見続けた。

「負けんな……阿笠」

切なそうに微笑む烈の姿だけが、そこにあった。

next

第１５１話【信じたのは…】

「ええ、今から向かうんで少し練習遅れます。――ええ、ええ。はい、では」

秋人はパタンと携帯を閉じる。

監督に遅刻することを一応連絡入れていたようだ。

最もあらかじめ遅刻することは伝えていたようだが。

「……かったりぃ。練習かぁ……」

秋人は軽く目をつぶって椅子に深く寄りかかる。

まさか秋人から練習が面倒くさいという言葉が出てくるとは。

その場に他の友達がいたら目が飛び出していただろう。

文化祭であれだけ周りを盛り上げて、今から東京に向かってそれから練習とはかなりのハードスケジュールだ。

もちろんそれは阿笠も同じだが、疲労もあるだろう。

疲労だけならまだしも、再び嵐が起きてしまいそうなのだ。

麻冬が、阿笠が聞いていることを承知でキセキを歌った。

もう近寄らないと、もう傷つけないと言ったのにそれでも抑え切ることができなかった。

歌ったことで気分が晴れるわけでも、本当に諦めきれるわけでもない。

自分も麻冬も阿笠も追い詰めることになってしまうことは、重々分かっていた。

それでも、言わずにはいられなかった。

「君がいたから今の僕がいる……ね…」

秋人は自分が歌った歌詞を思い出しながら、そう呟く。

よく咄嗟に歌詞が浮かぶものだと自画自賛しつつ、そんな言葉が出てきたことを切なくも思う。

歌ったことが恥ずかしいという気持ちよりも割りきれない気持ちのほうが大きい秋人は、やるせない気持ちばかりが溢れる。

秋人は麻冬が泣いていたことなんて知らないし、知りたくもないだろう。

むしろもう終わったことにされたいに違いない。

遠くから見てるだけのほうが楽なこともある。

きっぱりと別れられないのは、どこかに期待があるからだ。

それを粉々にしなければいつまでもその期待を抱えながら想っていなくてはならない。

だから公衆の面前でああやって歌った。

「……は……」

秋人は額に手を当てる。

目を薄く開き、少しだけ口元に笑みを浮かべた。

体の中で何かが逆流してくるみたいに、秋人はグッと堪えている。

「なるほどね、これが……」

あの祝賀会の日、家に帰ったあとで秋人は泣いた。

自分が愚かだったことを責める意味での涙だった。

秋人の誕生日会の夜は、トウワタの花言葉に切なく思い、泣いた。

その後はいくら振られようとも、決して泣くことはなかった。

けれど、いつだって泣きたい気持ちはちゃんとあったはずなのだ。

そう、自分ではダメだということを実感しないうちは悲しくて泣くなんてできなかった。

「これが失恋……ってやつか」

今日ようやく知った。

決して2人の間には入って行ってはならない、と。

友達としてならいくらでも一緒にいても良いだろうけど、恋愛感情なんてものを持った秋人に入り込む隙なんてこれっぽっちもないことを。

もう阿笠に譲ると言ってしまった以上、そうしなきゃいけないことを。

期待なんて微塵に消え去り、残ったのは悲しい気持ちとそれでも麻冬を思う気持ちのみ。

秋人は失恋してようやく、本当の意味で涙を流した。

その頃阿笠も新幹線に乗って浜松へと向かっていた。

そこまで人が乗っていなく、新幹線内は割りと静かだ。

耳にイヤホンをつけて音楽を聞きながら、阿笠は外の景色を眺めている。

本当ならもっと遅い時間に浜松に向かう予定だった。

後夜祭に出るつもりだったのだ。

別に阿笠自身はそこまで出たかったわけではないが、麻冬が出たいと言っていたから出ようとしていたらしい。

『あっ…阿笠…！どこまで行くの？！』

さっき講堂から麻冬を連れ去った阿笠は、人気のない使われていない3年の教室まで走った。

いきなりのことで驚いている麻冬は、まだ軽く目が潤っていて顔には涙の線がついていた。

息を整えながら阿笠は麻冬をじっと見つめる。

『……ごめん、俺そろそろ行かないと』
『え……ど、どこに？』
『浜松』

麻冬は阿笠が文化祭終えたその足で浜松へ向かうことは知っていた。

けれどもちろんそれは後夜祭が終わってからだと思っていたから、驚いた顔をしている。

『こ、後夜祭は？』

『出ない』

『なっ、なんで？だって約束して……』

『他の男のことで泣いてる奴と踊りたくないな』

阿笠は真剣な目で麻冬を見ながらそう言う。

麻冬はすぐさま目に手を当てて涙を拭き取った。

あまり泣いてるという自覚がなかったようで、麻冬自身ショックを受けている。

麻冬は罰の悪そうな顔をしながら視線を反らした。

『……ごめんなさい…』

気まずそうに謝っているけど、阿笠は更につけこむ。

『俺はどこまで信じたら良いの？麻冬を』

『……』

阿笠にそう言われると、麻冬はカァッと顔を赤くする。

『逆にさ、麻冬は自分の言ってる言葉を信用してる？』

『それ…は……』

『……俺さ、弱いんだ』

阿笠が突然話題を変えたものだから麻冬は視線を阿笠に戻す。

今度は阿笠が顔を背けて、左手を首の後ろに当てている。

『女みたいに泣くし弱音ばっかだし。麻冬と付き合ってから、……中学んときな。そんときから悲しいこととか辛いことといっぱいあった』

そのあと、もちろん楽しいこともあったけど、と付け足す。

そして続けて言った。

『まぁ……今のが状況は悪いけどさ。それでも麻冬と付き合ってんのは……麻冬が好きだって言ってくれるからじゃない』

『え……』

『信じてたのは……信じようとしてたのは、麻冬じゃないんだ』

阿笠は完璧麻冬に背中を見せている。

男の子の背中なのに、なぜか今は小さく見える。

肩はわずかに震えている。

『烈だった。いつだって烈の言葉だけを信じてた……』

決して言ってはならないことだった。

麻冬を目の前にそんなこと、言ってはいけなかった。

それでも、勝手に口が動いてしまった。

阿笠にはどうにも止めることはできなかったのだ。

『ごめん。……麻冬が側にいるって言うから隣にいるんじゃなくて、烈が頑張れって言うからここまで来れたんだ』

麻冬は予想外の言葉に驚くことも悲しむこともできずにいる。

ただ耳を疑いながら、唖然としているだけだ。

『……俺が麻冬を好きだって言ったこと、信用できる？』

『……できるよ！できる』

『だから俺も……麻冬を信じたい。なのに……』

背中に見える背番号１０を見つめながら麻冬は懸命に訴えようとするけど、阿笠にはあまり届いていないようだ。

阿笠が信じられないというのも分からないでもない。

さよならした秋人に泣いて、キセキを歌った秋人に泣いて……これ以上どう信じたら良いものか。

麻冬はきっと自分がまだ秋人を好きだなんて思っていない。

泣いた理由さえ見当もつかないだろう。

『……こんな俺でも、まだ付き合ってたい？』

言わなきゃバレないし、言わなきゃずっとこのままでいられる。

秋人さえいなければ幸せな2人を演じることができる。

そう思いながら、幾度麻冬に確認しただろう。

『阿笠だから付き合いたいのよ！泣いたことは……謝る。だからっ……』

『……ほら、ね』

阿笠は背を向けたまま顔だけ軽く振り返る。

寂しそうな顔をしながら見つめる瞳には、一体麻冬の何が映っているのか。

『俺……』

俺はこうやってまた麻冬を振りきれないんだ、と阿笠は言おうとするがやっぱり止める。

麻冬の心の底にある思いを教えてあげれば、この辛い恋にも終止符がつく。

それでも言えないのは、やっぱり阿笠が麻冬を愛してるからなのだ。

そうすることでしか愛を確認できないとは、なんて切ないことだろう。

『ありがとう……ごめん、麻冬。愚痴愚痴言って』

『う、ううん』

『ひどいこと言った』

阿笠は床を見つめながら言う。

そんなことない！と大声で言う麻冬をチラリと見て弱々しく微笑んだ。

『俺も頑張るね。ごめん』

そうして、2人はその教室を出ることにした。

阿笠は教室に荷物を取りに行き、麻冬はどこかへと歩いて行ってしまった。

そのあとは先にも述べた通り、阿笠は秋人のいる控え室へと向かったのだ。

阿笠とてそんなこと言いたくなかっただろう。

彼女を信用してないなんて……麻冬と付き合ってられるのは烈のおかげだなんて、口にしたくなかっただろう。

決して腹いせのために言ったのではないことは分かっているけど、どうにもやるせない。

「何十年……何百年何千年時を越えても、君を愛してる……」

阿笠はキセキを口ずさむ。

「は……越えよう、じゃないのかよ…」

切なそうに微笑しながら、阿笠は窓に映る自分の顔を見ている。

「頑張るって何だよ……ばっかみたい……俺」

阿笠は秋人のようには割り切れない。

好きになればなるほど、秋人を思う麻冬を許せなくなる。

秋人を好きなままでも良いと最初に言ったけど、きっとそんなことすら忘れている。

阿笠は、自分が教室で麻冬に言った言葉を思い出しながらリストバンドを見つめた。

next

第１５２話【天才誕生の経緯】

『大ちゃん、ほらっ』
『つかさちゃん上手！』

あれはいつだっただろうか。

いつものように公園でサッカーボールで遊んでいた。

『えへへ。今日はオーバーヘッド教えてあげる！』
『できるかなぁ？』
『大ちゃんならできるよ、運動神経良いもんっ』

つかさちゃんというのは、阿笠の幼なじみの女の子で本名は比護つかさと言った。

黒く長い髪の毛をいつも高い位置で２つで結んでいて、くりくりした目が印象的だ。

父親が小中高とサッカーをやっていたため、小さい頃からつかさはサッカーを父親から教わっていたようだ。

阿笠と知り合ったのは小学１年のとき。

そしてあの日は、阿笠が小2でサッカーの少年団に入ってまもなくした頃だった。

つかさは少年団には入っていなかったけど、実際少年団の6年よりも上手かった。

そもそも阿笠が少年団に入ろうと思ったのは、つかさのおかげだったのだ。

『あっ！』

あのとき、つかさの蹴ったボールが公園を出て道路に出て行った。

つかさは慌ててボールを取りに行き、道路上でボールを拾った。

『良かった～。ドブに落ちなくて』

だがホッとしたのも束の間、楽しげに言うつかさの前に、トラックが走って来た。

『つかさちゃん！危ない！！』

『えっ』

トラックに気づいた阿笠は走り出すが、幼い阿笠はそこまで足も早くなく、トラックは無情にもつかさに直撃した。

『きゃぁぁあぁぁ〜っ！！』

キキーッ！とトラックがブレーキを踏んでも避けきれる距離ではなかった。

鈍く大きな音を立てて、つかさは弾き飛んだ。

『つっ…つかさちゃん！！』

即死ではなかった。

苦しそうにたくさん血を吐きながら、体を痙攣させながらもつかさはまだ意識があった。

トラックの運転手はかなり気が動転していてパニックになっていて、周りにいた主婦が急いで救急車を呼んでいた。

阿笠は、必死になってつかさに叫んだ。

『死んじゃだめだよ！つかさちゃんっ！！』
『だ、大ちゃ……』

ゴフッと血を吐き出し、つかさは辛そうなのに話そうとする。

『ごめ……オー……バーヘッド……教えらんなかっ……』
『良いよ！また今度教えてよ！絶対絶対教えてよ！！』
『大…ちゃん…』

つかさはうっすら涙を浮かべていた。

阿笠はそれでもつかさの手を握って、彼女に生きろと囁く。

『だ…大ちゃ……が、サッカーやってくれ…て……嬉しかった…
…』
『つかさちゃん！』
『これからも続けて……』

つかさは泣きながらも苦しみながらも、最後の力を振り絞って笑顔を見せた。

『サッカーしてる大ちゃん……大好き』
『つかさ！……する！いくらでもサッカーする！！プロにもなってみせる！』
『あは……プロかぁ……』

つかさはカタカタと震える手を一生懸命に上げて、小指を立てようとする。

『や…くそく…ね……』

けれど指切りをする前に、つかさはそれだけ言って息を耐えてしまった。

つかさが懸命に上げようとした手は落ちる。

『つかさちゃんーー！！』

阿笠は勢いよくつかさの手を持って指切りの形をする。

そうしてもう片方の手をギュッと握り締めた。

『どうしてっ……なんでぇ～～～！！！』

たかだか小学2年生の子どもには最大のショックだっただろう。

大事な人が目の前で死んで行く悲しみを堪えきれるはずがないだろう。

阿笠はもう喋ることのないつかさを抱き締めて、大粒の涙を溢した。

止まることのない涙を嫌というほど溢したけれど、そんなことで癒されるものではない。

ようやく救急車が来ても阿笠はつかさを離さなかった。

阿笠は葬式にも通夜にも参加せず、2週間くらいは学校にも行けなかった。

行けるようになったのは、やっぱりつかさのおかげだった。

学校に行けないでいる阿笠のもとに、つかさの両親がやってきてあるものを渡した。

1冊のノートだった。

虚ろな目で阿笠はペラペラめくったが、すぐにギョッとして目を見開いた。

それは、つかさが書いたもので阿笠にサッカーを教える方法がズラズラと絵も付けながら書いてあった。

今見返せば少し下手に見えるが、あのときは最高に綺麗で上手かった。

結局教えることができなかったオーバーヘッドも他の技も、とても分かりやすく書いてあった。

『つかさちゃ……』

あれ以来一言も喋らなかった阿笠が、初めて声を漏らした。

ペラペラとめくっていくと、びっしり書かれていてあと1ページで1冊を終えるくらいだったのだ。

『大悟くん。つかさは大悟くんとサッカーするのをすごく楽しんでいたよ』

『おじさん……』
『少年団は女の子は入れなかったから』
つかさの父親に代わって今度は母親が話し出した。
『大悟くんはどんな技でもすぐ覚えてくれるから教えがいあるって……つかさ嬉しそうに笑ってたのよ』
『……』
『プロになるって昔はよく言ってたわ。……大悟くん、サッカーは辞めたとしてもつかさのことは忘れないでね』
忘れるものか。
忘れられるはずがない。
阿笠はノートをギュッと抱き締めて、ポツリポツリと話し始めた。
『つかさちゃんと……約束したんだ。プロになるって』
『え?』
『サッカー辞めない。サッカー……続ける』
阿笠はつかさの両親の顔を見上げて、軽く微笑んだ。

『つかさちゃんの夢、僕が叶えます』

つかさの両親とてまだ辛いはずなのにこうして阿笠のために足を運んでくれた。

そんなことくらい、幼い阿笠にも分かっていた。

これ以上迷惑かけるわけにはいかないと

けれどそれ以上に、つかさの思いが阿笠に伝わったのだろう。

『学校ちゃんと行って……つかさちゃんがいたときと同じ日常送る』

『だ、大悟』

阿笠の言葉に阿笠の母親が反応した。

どれだけ声をかけても決して耳を傾けなかった息子が今、こうして立ち直ろうとしているのだ。

『おじさんおばさん。ごめんなさい……ありがとう』

阿笠は頭を下げた。

そうして次の日から学校にも行くようになって、サボってた少年団にもちゃんと行くようにした。

つかさのノートをこれでもかというほど熟読して、それを片手に毎日毎日日がくれるまで練習していたものだから阿笠は見違えるように上達していった。

つかさの持っている技は、難易度が高いものも含まれていた。

どれもつかさの父親が教えたもので、ノートの中にはまだつかささえできないものもあった。

一応やり方は書いてあるものの、あまり詳しくはない。

そういうものは阿笠が直接つかさの父親に聞きに行ったりしたものだ。

そうして6年を指し終えて4年の春にはレギュラーを勝ち取り、ゆくゆくは選抜に選ばれて行った。

その後はみんなも知っているようなサッカー人生を歩んで来た。

秋人が佑亮がきっかけでサッカーの道を決めたように、つかさが阿

笠の道しるべとなっていたのだ。

このことは、烈しか知らない。

小5で選抜に選ばれて烈と出会い、烈にこの話をしたのは小6になってからだった。

烈は一度だけそのノートを見せてもらったことがある。

天才フォワード阿笠大悟が誕生したのには、そういった経緯があった。

「ん……あれ、寝てた？」

ゴーッという音をたてながら走る新幹線の中で阿笠は寝ていたようだ。

目をこすって電子掲示板を見る。

「危ね……あと数分じゃん」

阿笠は荷物がちゃんとあることを確認して一息つく。

駅に着いたらそこからまたバスに乗らなければならなく、とても慌ただしい。

阿笠はイヤホンを耳から外してバックにしまい、ポケットに入っている携帯を取り出す。

特に何の着信もないことを確かめてまたポケットにしまった。

「……懐かしい夢だったなぁ、うん」

そして阿笠はふと、ある会話を思い出す。

秋人を置いて先に麻冬と帰って阿笠家で４人で夕飯を食べていたときの、麻冬との会話だ。

試合に勝ったら連れて行きたいところがあると言った。

その場所を教える前に話は中断させられてしまい、その後はすっかりその話題のことは忘れていて触れてなかった。

「勝てても……今の俺らを、麻冬を見せるわけにはいかないよな」

ポツリと呟く。

いったい何を見せようとしているのか。

それは阿笠にしか分からないが、でもきっと阿笠にとってかなり大切なものなのだろう。

「つかさちゃんがいたら……どうなってたんだろ。俺……」

阿笠は窓から見える空を眺めながら言った。

夕方から夜に変わりつつある空に見える、小さな星。

今夜はきっと綺麗な星空が見えるだろう。

next

第１５３話【静岡選抜チーム】

秋人はようやく練習場に着いた。

「月影！」
「おっ、月影来たな！」
「ちーす！」

秋人に気づいた練習しているメンバーたちが口々に秋人にあいさつをしていく。

そうして監督も近づいてきた。

「監督、遅れました」
「おお。早くアップして練習に加われ」
「はい」

監督とそれだけ会話したあと、秋人は更衣室に向かって荷物を下ろした。

もうすでに着替えてはあったし、夜は肌寒いからジャージを着たまま更衣室を出て、とりあえず走り出した。

ただ走っているだけなのに、秋人はその場にいる人を魅了する。

走り方から呼吸の仕方から何から、秋人の仕草1つ1つに惹き付けられる。

つい練習中のメンバーや監督でさえ時を止めてしまう。

これがカリスマと呼ばれる由縁だ。

統率力がずば抜けているだけでなくサッカーが上手いだけでもなく、立っているだけでも従いたくなるようなそんなオーラを持っている。

人生に絶対はないけれど、絶対的な将来が待っていると言っても過言ではない。

辛い過去を乗り越えて身につけた自信なのだろう。

これが月影秋人だ。

決してカリスマではないけれど、絶対にボールを奪われることがないドリブルを見せて得点を決める得点王

その体から引き出される様々な神がかりの技は、到底真似できるものではない。

それはカリスマとは無縁だが、天才と呼ばれるのに相応しい。

そう、阿笠大悟だ。

アンダー１８に選ばれて活躍を見せる彼らは、明日母県静岡で戦う。

スタジアムに人が溢れることは、テレビを前に世間が盛り上がることは当たり前だろう。

夏実は、春樹は、烈は

そして麻冬はそれを見て何を思うのだろう。

「阿笠、もしこの場合にマークされたら……」

休憩中、阿笠の周りに人が集まってそれぞれいろいろなことを質問、または意見してくる。

キャプテンでありエースである阿笠のもとに人が集まることは自然の流れだろう。

秋人がいれば阿笠は秋人にほとんどを押し付けてしまうが。

阿笠はこういうことは苦手なのだ。

教えたり一緒に考えたりするのがあまり好きではないようで、まぁ

だからこそあのような独創的なプレーができるのだろう。

でも今回は秋人がいないために阿笠が秋人の役回りをしなくてはならない。

そう考えると、秋人は唯我独尊ではないようだ。

カリスマ性を魅せているだけでなく、ちゃんと頂点に立つ男なりの心得がある。

どちらかと言えば阿笠のほうが唯我独尊かもしれない。

もちろんサッカーに限っての話なのだが。

「キャプテーン！監督が呼んでます！」

そのとき、メンバーの１人が遠くからそう叫んだ。

阿笠は身を起こして言う。

「はいよー。じゃあ休憩終わりだからさっきの練習もう１回ね」

阿笠の言葉にみんな返事をして小走りでグランドに駆けていく。

ワイワイと練習を始めるメンバーたちを背に阿笠は歩いて監督がいる本部席のほうへと向かって行く。

軽く冷えるためジャージを羽織ろうとするが、阿笠はジャージの背中のＳＨＩＺＵＯＫＡの文字を見て一瞬足を止める。

だがすぐに再び歩き始めてジャージを羽織った。

前回も静岡チームだった。

普通なら県選抜に選ばれていようが全国選抜にも選ばれているなら、当然全国選抜に参加するに決まっている。

練習も全国選抜だし、試合も全国選抜だからもう県選抜にはいない選手として扱われるようなものなのだ。

だが２人は別だ。

全国選抜で要になっているような２人がいない静岡選抜など全くもって大したことがない。

サッカー王国など呼ばれなくなってしまうだろう。

全国選抜ならまだ全国から強い選手を集めているから良いが、県選抜は所詮1つの県から集められた選手だけだ。

やはり程度が知られる。

これでその程度が知られる中で強い選手を全国選抜に持っていかれたら、県選抜のレベルは格段に下がる。

ならばなぜわざわざ県選抜対全国選抜なんていう試合をするのか。

答えは簡単だ。

誰もが静岡はサッカー王国だとつい期待してしまうから。

「監督、お呼びですか？」

「おお、阿笠」

コーヒーを飲みながら練習を見ていた監督は、阿笠に気づいてコーヒーを置いた。

もちろん他のコーチが練習を教えているから何の問題もない。

「どうだ、調子は」
「そうですね。正直分かりません」
「なんでだ?」

阿笠は練習しているメンバーをチラッと見て言う。

「秋人がいないと俺に付いてこれる人がいない。だから暴走しちゃうと思うんです」

中学の部活では結局阿笠のワンマンだった。

当然といえば当然だろう。

たいして強くもない至って普通レベルの部員しかいなかったのだから。

選抜では秋人がいたからワンマンにならずに済んだ。

多彩な技を持つくせに派手なパフォーマンスをするくせに、自分だけ注目されることを人一倍嫌がる。

「月影がいなきゃそんなもんか？お前は」

監督は諭すように言うが、阿笠はあまりにも簡単に認める。

「ええ」

監督は意外な返答に少し驚いているが、阿笠は構わず進めた。決して監督と目を合わせようとはせず、ひたすらメンバーたちを目で追っている。

「でも、いかにワンマンなプレーをしないかを学ぶ良い機会ではあると思うんです」

「お前に付いてこれんメンバーしかいないなら、それは無茶じゃないか？」

監督はさっきの阿笠の言葉に引っかけて、意地悪くそう言う。

するとようやく阿笠は監督の顔を見た。

不思議にも阿笠の表情は和らいでいて、少し笑っていた。

「監督もそう思います？」

すると、阿笠はメンバーたちを指差しながらこう言った。

「彼ら頑張ってるみたい。秋人の穴を埋めようと、俺に付いてこようと」

一緒に練習していたさっきまでは、きっとダメだろうなんて思ったりもしていた。

結局自分しかいないことの孤独さに打ち勝つしかないのだ、と。

けれど見ていて、……見ていなきゃ分からないこともあったようだ。

メンバーたちはいつも以上にあんなに真剣になって練習している。

誰のため？

自分のため

チームに貢献するため
目立つため

どれも違うだろう。

「だったら俺もみんなの期待に答えなきゃ。ね、監督」

阿笠はニコッと笑った。

監督は立ち上がり、阿笠のようにまじまじと練習を眺め始めた。

「本当だな」

別に練習したところで急に上手くなるわけでも、勝てる保証があるわけでもない。

ただ、阿笠を欠いたメンバーたちが今、自分こそが阿笠のように指令を出そうと、余分に走ろうとしている。

そんなんじゃ阿笠に付いてけねぇよ！というような罵声や、楽すんな！阿笠だけに頼らず自分らでやれ！！というような怒声が響いている。

そんな言葉を聞いて何も思わないはずがないだろう。

「阿笠。明日は勝て」

その言葉を聞いて阿笠は監督の顔を見た。

監督は再びコーヒーを飲みながら涼しげな表情をしている。

「はい」

阿笠はニッと笑いながら答えた。

そうして監督とともに本部を出て、メンバーが練習しているところへ向かって歩いて行く。

その背中は、なんとも頼もしく見えた。

next

第１５４話【全国選抜チーム】

「あー疲れた」

練習も終わりクールダウンをした秋人はホテルのロビーで自販機でジュースを買っている。

東京の夜は冷えるが、秋人は冷たい飲み物を飲んで自分を癒している。

と、そこにぞろぞろとメンバーたちが集まってきた。

不思議に思いつつも秋人はさっさと部屋に戻ろうとしたとき、１人が言った。

「秋人、ミーティングしないか？」

「あ？ミーティング？ポジション確認ならさっきしたろ」

「じゃなくて、やっぱり今回はお前は攻撃に集中したほうが良いんじゃないか」

「なに？」

ポジション確認もマークも作戦も、監督に指示された通りに練習した。

それは全て秋人が考えているのと同じだったから秋人は何も言わず

に従った。

キャプテンが従うのだから当然他のメンバーも従うわけなのだが……

「阿笠マークしたって絶対抜けないだろ。なら阿笠より多く点を取ったほうが良い」

「阿笠をノーマークにするってのか？」

「阿笠はマークしようがしまいが変わらない」

秋人にそう言って食って掛かってるのは、明日スタメンで出るフォワードの笠井だ。

阿笠がいない今フォワードの中で一番点を取れるのは彼。

身長や体つきは阿笠よりも大きく、色は軽く小麦色をしていて短すぎない髪の毛は彼を爽やかに見せている。

「秋人は他の人をマークしてせめて阿笠だけに得点させたほうが良いよ」

こう言ったのは、笠井と同じくフォワードの井上。

「月影だって勝ちたいんだろ？」

「勝つには俺らなりの最善のやり方でやったほうが確実だ」
「阿笠は天才なんだ。最強だった佐々さんにだって止められやしない」

秋人は突然佑亮の名前が出されてピクッと顔を動かすが、平然を保っている。

みんな口々にそう言ってきているのを、秋人はジュースを飲みながら黙って聞いている。

全国選抜は前回、静岡選抜に負けた。

そのことがかなりネックになっているようで、今回はどうしても勝ちたいのだろう。

「そもそもなんで今回お前ら別々なんだよ？前回静岡に出たんなら今回は2人でこっちに出るべきだろ」

そう言ってきたのは、阿笠がいない今副キャプテンを務めてる桑原だ。

彼は秋人と同じくミッドフィルダーで、どちらかと言うと攻撃より守備のほうを好む。

まさかみんな2人がお互いに戦いたいから別々にしたなんて夢にも思わないだろう。

例え思っていても口には出せないし、秋人たちも決して言わない。

そんな私的な理由など許されるはずもない。

秋人は正直今回監督の指示が自分の都合に合っていたものだからホッとしていた。

もし違っていたら今の彼らと同じように抗議していただろう。

「……お前らが阿笠阿笠って言ってっからだろ」

「え？」

「いつまでも阿笠にばっか頼ってんな。阿笠がいなきゃ点取れないなんてのは甘えだ」

秋人は飲み干したアルミ缶を力強く握って潰す。

その行動に一同は静まり返った。

「阿笠をマークすんな？バカも休み休み言え。確かに阿笠をカット

できる奴なんていない。だけど阿笠の攻撃を最小限に食い止めることならできる」

秋人の言葉に誰も言い返さない。

正確には、何か言おうとした人もいたが言葉に詰まっているようだ。

「阿笠がもしここにいたらお前らは阿笠にばっか荷を負わせるんだろうな。まぁいつものことだけど」

「つ、月影……」

「阿笠に任せれば良い、阿笠だけは止められない。……そんなもの、お前らの甘えだっつってんだよ」

これはキャプテンとしての説教だろうか。

それとも阿笠と競り合いたいがための言い訳だろうか。

いや、そのどちらでもない。

秋人は阿笠の相棒として、一プレーヤーとしてそう言っている。

「だ、だけど実際に阿笠は天才だからっ……」
「ふざけんな！」

秋人は右手で壁を思いきり叩く。

鈍く大きな音が響き、秋人たち以外のロビーにいるホテルの客たちまで振り向いた。

「俺や阿笠が何の苦労もしてないって言ってんのか？！」

秋人の行為によってロビーは少しざわめき、フロント係がかけ寄ってきた。

秋人以外の誰かがフロント係に謝っているが、秋人は悪びれた素振りも見せない。

それどころか、あまりにも腹立たしいのか潰した缶をごみ入れに向かって思いきり投げつけた。

ガコーン！という大きな音を立ててまた他の客たちやフロント係がこちらを見るが、秋人はお構いなしにそのまま玄関から外に出て行く。

その場は一気にシンとなった。

メンバーの中には、監督の指示に特に反対していなかった人たちもいて彼らが
「ほらみろ。怒らせてどうすんだよ」と言い始めて、反対派の人と口論をし始めた。

そもそも反対しているのはフォワード陣やミッドフィルダー陣ばかりだ。

守備を専門とする人たちはほとんど反対なんかしていない。

それもそうだろう。

阿笠をノーマークなんかにしたら点の取られ放題で、ディフェンダーやキーパーには屈辱的なことだ。

だが反対派のほうが人数も多く副キャプテンの桑原を筆頭にそう言ってきたため、仕方なく今この場にいるようだ。

そうは言うものの、こんなところを一般客に見られてありもしない

噂立てられたらたまったもんではない。

将来のサッカー界を担う彼らにはかなりのダメージだ。

しかも明日には全国民が注目している試合がある。

だからなんとかその場を抑えようとしているメンバーもいるが、口論は次第に激しくなっていくばかりだ。

受付嬢も注意してくるが、それでも収まらない言い合いについにホテルの支配人までやってきてしまう。

だが、支配人が声をかける前にディフェンダーの１人である久野が声を荒げた。

「静かにしろよ！！」

その声にメンバーだけでなく支配人の動きも止まる。

久野は身長１６５と誰よりも小柄で、むしろ普通なら１７０以下の選手なんてメンバーには選ばれない。

だが、彼はその小さな体からは想像のできない超人的な守備力で周りを釘付けにした。

第二の佐々と呼ばれた。

佑亮は自分を抜かせないことは当たり前で、キーパーがゴール前にいないときにゴールを守るのを最も得意としていた。

手は使えない分、それこそかなりジャンプをして足で止めたり時には頭で防ぎにいくこともあり、身を捨てるようなプレーばかりだった。

そのダイナミックな行動も含めて最強と呼ばれていたのだ。

そして久野も、佑亮のようなプレーをする。

小学生の頃はもともとフォワードだったが、中学のとき偶然佑亮を知って憧れて転向したのだ。

佑亮がそこまで有名になる前のことだった。

「……お前らちっとも分かってねぇよ。阿笠の気持ちも秋人の気持

ちも」

阿笠は、久野にとって唯一止められない男。

もちろん他にも止められなかったことくらいはあるが、久野はやられたらやり返すタチだ。

だが阿笠にだけはやり返すことができない。

悔しいだろう。

歯がゆいだろう。

屈辱的だろう。

「そんなんじゃ明日絶対勝てねぇよ。阿笠がどうとかより、自分がやるべきことをやれよ」

久野は男にしては可愛らしく髪の毛もサラサラしている。

色も割りと白めで、みんなから可愛がられるタイプだ。

そんな久野が今、メンバーに説教をしている。

「確かに阿笠は止められない。でも秋人がマークすることで少しでも時間を稼ぐ。それしかないだろ」

「久野……」

「……俺らディフェンダーが阿笠をマークしないって事実にどれほど惨めに思ってるか知ってるか？」

久野は手をギュッと握りしめる。

床を見つめながら言っているのは、悔しそうな顔をみんなに見せないため。

久野の言葉に、ディフェンダーたちやキーパーも罰の悪そうな顔をしている。

秋人にしてみたらただ阿笠と戦いたいだけだろう。

でも久野たちにしてみたら、これ以上の屈辱ってない。

秋人は久野たちの気持ちなんて全く考えていなく、久野たちもまた秋人の心意には気づいていない。

言ってしまえば秋人のただのワガママなのだ。

「それでも勝つためには仕方ないかなって思ってんだ。なのに……っ…」

久野は言葉に詰まる。

場はより一層静まり返っていて、もう他の客はロビーにいなくて支配人もどうしたら良いのかとただ立ち尽くしている。

「俺はっ……」

全国から優れた選手をこんなにも集めているのに、それでもやはり秋人と阿笠は別格。

その事実はここにいるみんなが何よりも知っている。

けれど、別格だから抜かれても良いってわけではない。

格好悪くても必死にしがみついていかなければならない。

そんなことくらい、メンバーたちは分かっているはずなのに。

何も言えなくなった久野はそのまま秋人と同様に玄関から飛び出して行った。

久野の名前を呼ぶメンバーもいたが、とりあえず一旦解散するようにと桑原がその場を収めた。

気まずそうな雰囲気を残したままメンバーたちはぞろぞろと各自の部屋へ戻って行く。

けっこうな人数がその場にいたため、みんながいなくなるには多少時間がかかったが桑原は一番最後まで待ってみんなが帰るのを見届けた。

そして、支配人に頭を下げて騒ぎを立てたことを謝る。

すでに外にいる秋人と

外に飛び出した久野

そしてロビーで立ちずさんでいる桑原

それぞれの気持ちを胸に

一体どうなるのか。

next

第155話【全国選抜チーム2】

『へぇ、あの子上手いじゃないっすか。監督』
『ん？ああ、久野か』
『久野……何っすか？』
『久野遥。月影と同期だよ』

今年の春、秋人がまだ2年になりたての頃、全国選抜の練習に佑亮が足を運んだ。

練習を見ながら真面目にやってる可愛い後輩の秋人や阿笠を見ながら嬉しそうな顔をしつつ、どこか寂しげな表情をしていた。

未練があるわけではなくとも、小さい頃からずっとやっていたものを辞めるのはやはり心淋しいものがある。

『久野遥、ね』

そんなとき、佑亮は偶然にも久野を見つけた。

小柄なのになぜか存在感のあり、身を個にしてやるプレーは何となく自分と重なって見えたのだと、佑亮は後に語ってくれた。

秋人たちのレベルにはまだまだ及ばないけれど、明らかに他の人よりも上なのは一目で分かる。

佑亮はしばらく練習を見学して、差し入れの飲み物を監督に渡してから秋人たちにさえあいさつをしないで帰ってしまった。

また来る、と言い残して。

その日は茉李亜と東京で遊んでいたらしく、本当にちょこっと顔出すつもりだったようだ。

秋人が東京にいることを知ってる茉李亜が、佑亮に顔を出しに行くように言った。

佑亮はそういうものとは一線を引こうとしているところがあったが、茉李亜は責任も感じているのであろう自らデート中にそう言ってくれたのだ。

将来を約束されていた佑亮が自分のためにサッカーやめたなんて、茉李亜だって心苦しいに違いないのだ。

決して佑亮は茉李亜のためだなんて言わないけど、そのくらい口にしなくても分かる。

『え？』

『だからな、佐々佑亮がお前のこと褒めてたよ。まるで俺みたいなプレーをするって嬉しそうに』

監督はその日の練習後に久野にそう言った。

佑亮が来ていたことは差し入れをもらったときに聞いていたことだからあまり驚きはしない。

秋人と阿笠は声くらいかけてくれれば良いのにと、少し拗ねていた。

『佐々……ってあの？』

『ああ』

『佐々さんが俺を……』

久野は嬉しさをどう表現したら良いのか分からないようで、顔を赤らめながら自分の手を見つめた。

佑亮に興奮し佑亮に憧れてポジションまで転向した久野にとっては、何よりの最高の言葉。

佑亮のようになりたいと佑亮のような技を身につけ、誰よりもコートを駆け巡り守るその姿から、疾風神と呼ばれた。

『～～～～～っ……っしゃあーー！！！』

久野は震える手を高く上げてガッツポーズをしながら喜んだ。

そうだ、久野が今こうして疾風神だなんて呼ばれるようになったのは、全ては佑亮のおかげだった。

久野にとって佑亮は一生無二の人物なのだ。

例えサッカーをやっていなくとも。

「……ちきしょ……なにが佐々さんにも止められないだ」

久野は外に飛び出してホテルの近くの道路を歩いている。

真っ暗で街灯がなければ何も見えないが、それでも久野は歩いている。

確かに久野にとって秋人に阿笠をマークさせることは屈辱的なのかもしれない。

だが、それ以上に佑亮を侮辱されたことのほうが許せないのだろう。

じゃなきゃ久野はあんなに声を上げて怒ったりしない。

見た目も中身も可愛く、久野は神奈川の男子校に通っているが学校でもチヤホヤされる。

だが、サッカーとなれば別。

そう、普段は寝てばかりの秋人がサッカーをやるときは真面目なように、普段穏やかな阿笠がサッカーのこととなれば人にも厳しくなるように、久野も男らしい顔をして懸命にボールを追っているのだ。

秋人たちのように強豪校ではないため、朝から晩まで朽ち果てるほど練習してる。

彼は正真正銘努力をしてここまでやってきた。

「久野？」

歩き疲れた久野が歩道の側にある石垣に座りながらボーッとしていると、誰かが久野の名前を呼んだ。

「……秋人」

久野が顔を上げると、そこにいたのは秋人だった。

走って怒りを静めていたんだろう、少し汗をかいている。

「どうした。冷えるぞ」

「……うん」

「元気ねぇな」

秋人は久野の横に腰を下ろして、袖で汗を拭き取る。

久野はいつもと変わらない表情をしている秋人を見て、口を開く。

「怒ってないの？」

「ん？んー」

「みんな分かってないよね……悔しいな」

秋人と久野は割りと仲が良くて、今回は部屋も同室。

高校サッカー界のＦＷといえば阿笠、ＭＦは秋人というように、ＤＦなら久野だろう。

そこまで有名なわけではないが、サッカーやってる人の間では知らない人はあまりいない。

「秋人は秋人や阿笠が特別扱いされるのを嫌がるだろ？でも正直…俺も２人には遠く及ばないって思ってる」

「そもそも俺らポジション違うじゃん。お前ＤＦん中で一番上手いし」

「でも阿笠にだけは勝てないんだ」

と、突然冷たい風が吹いて、久野は身震いをする。

久野はシャツ１枚しか着ていなくて寒そうだ。

秋人は着ていたジャージを脱いで久野に羽織らせた。

「えっ、平気平気！」

「風邪ひくって」

「ご、ごめん」

秋人はウェアだけになってしまったが、それでも久野のシャツ1枚よりはまだマシだろう。

阿笠にならするかもしれないが、秋人は例えチームのメンバーでさえも絶対こんなことしたりしない。

むしろちゃんと厚着してこないから自業自得だと言ってのける奴でもある。

けれど久野は可愛くて小柄だからつい甘やかしてしまうのだろう。

「……たった1人の人に勝てなくて、何してんだろ。俺」

久野はもはや失笑している。

いくら佑亮の真似をしたって、いくら疾風神と呼ばれたって阿笠を抜けないのなら意味がない。

同じ年なのにあそこまで才能があることを見せつけられては悔しさすら通り越す。

「でも、佐々さんでさえ抜けないなんて……あいつらが言うなんて許せない」
「久野」
「みんなが俺らを信用できないのは仕方ないけど、佐々さんの悪口だけは……」

久野は唇を噛み締めて、悔しそうな顔をしている。
秋人に見られないように腕で顔を覆いながらうつむいて。

「信用……？」

秋人はすぐ側にいる久野にさえ聞こえないくらいの、声なき声で呟く。

久野にそんな顔をさせているのは他のメンバーのせいだけではない。
自分の選択のせいだ、と秋人はようやく自分のワガママさに気づいた。

阿笠と戦いたいがためにチームを変えたことがこんなにも誰かを傷つけてるとは思わなかったのだろう。

だが実際に久野は前回の試合で阿笠をマークしたけど、阿笠を止めることはできなかった。

どんなに悔しがってもそれが結果だから、久野は何も言えないのだ。

「……信用してなくない」

「え？」

「ごめん。俺……」

秋人は事実を言おうとしたが、言葉に詰まる。

そんな秋人を見て久野は不思議そうな顔をするが、秋人はそれでも言えないようだ。

言えるわけない。

口がすべっても、言えるわけないだろう。

「……良いよ、秋人。明日頑張ろう」

「久野……でもな、俺が……」

「秋人が何を思ってるか分かんないけど、でも俺も今の実力じゃ適わないって知ってるから頑張るよ」

久野はニコッと笑った。

心から笑ってるわけではなく、悲しそうな秋人に心配かけまいと振る舞っている。

いつもなら久野が笑ったら秋人は髪の毛をくしゃくしゃして可愛がっていて、そんな秋人に久野はプンプン怒る。

けれど今はそんなことはせずに秋人は久野から目を反らしている。

阿笠みたいなことをする久野にいてもたってもいられなくなったのだろう。

「秋人、久野」

そこに、2人の名前を呼ぶ人物が現れた。

「桑原」

副キャプテンの桑原だ。

桑原は少し気まずそうな顔をしているが、2人に近づいて行く。

2人の前に立ったとき、桑原は頬をポリッとかきながら、重々しく口を開く。

「あの、さ……悪かった」
「えっ」
「なんかいろいろ……阿笠とかお前の気持ち考えてなかった」
「や……俺は…」
「阿笠がすごすぎるから恐れてた……だけかも。前回もボロボロだったし」

桑原は素直に自分たちの非を認めている。

久野も、自分の実力の有無を分かっている。

ならば秋人は？

「でもそうだよな。やるだけやるべきだよな」
「そうだよ桑原。俺も頑張って守るから」
「ああ。勝ちたくて焦ってたのかも」

久野は桑原が考え直したことを知って、立ち上がって少し声を張りながらそう言った。

そうして久野は右手を上げて、その右手を桑原がパンッ！と叩いた。

「勝とうぜ」
「おう！」

このいざこざのおかげで2人はやる気を取り戻したようだが、秋人はそんな2人をボーッと傍観している。

久野は秋人に気づいて、秋人の手をグイッと引いて無理やり立たせた。

一瞬よろめいたが、秋人も立ち上がって2人と視線を合わせる。

「ほら、秋人」

桑原はさっきの久野のように手を上げたが、秋人はそれでも戸惑っている。

だが、ここで合わせないと不思議に思われてしまうから、秋人は渋々その手を叩こうとする。

桑原はその瞬間を見逃さず、秋人の手をギュッと握った。

「えっ？」

桑原は秋人のほうを見て、ニコリと笑う。

「お前だけに荷は負わせねぇ。他の奴は任せとけ。阿笠だけを頼む」

そしてその2人の結ばれた手を、更に久野がギュッと握った。

「静岡にゃ負けねぇ！サッカー王国は静岡でもサッカー王者は俺らだって知らしめてやろうぜ！！」

久野は意気揚々に言う。

秋人も静岡の奴なんだけどな、なんて笑いながら桑原が言うと久野は「そうだった！」なんて言いながら慌てている。

そんないつもの光景が、秋人には眩しく感じられた。

このあと3人でホテルに戻ってメンバーに招集をかけ、再びミーティングを行った。

みんな秋人にさっきの態度を謝ったが、秋人は笑って受け流していた。

だって、本当に謝らなければならないのは自分なのだから。

なにはともあれ、明日はついに阿笠との対決となる。

next

第１５６話【夜のプール】

「雪原」

文化祭も後夜祭も無事終わり、片付けもされて今となってはもう面影すらない。

生徒たちもみなそれぞれ遊びに行ったり帰宅したりと、学校から帰って行く。

暗闇の中電灯の付いていないグランドは物静かで、校内は不気味さを漂わせている。

もう生徒もいないし当直の教師くらいしか残っていないはずの学校で、ただ1人麻冬は温水プールにいた。

「まっ……松平くん！」

麻冬は水着に着替えるわけでもなく、プールサイドに座ってただずっと足だけプールにいれて軽く動かしてちゃぷちゃぷと音を立てていた。

そんなバカみたいな行動を、阿笠とわかれて後夜祭を一目見てからずっと続けていた。

「おま……もしかしてずっとここにいた？」
「え、うん」
「あほ！何時間経ってると思ってんだよ！」

松平はすぐさまカバンからタオルを出して、冷たさで赤くなってる麻冬の足をプールから出させてタオルで覆う。
麻冬はいきなりのことに驚きながらも遠慮した。
だが松平は、足が温まるようにとタオルで押し拭いてくれている。

「何してんだよ。雪原らしくない」
「……ごめんね」
「何かあった？」
「あった」
「へぇ、そうなのか……えっ？」

松平は麻冬の意外な返答に驚いて顔を上げた。
麻冬はただ人形のようにポーッとしている。

麻冬は何かあったとしても決して言おうとはしない。

そのことは松平もよく知っている。

だから麻冬があまりにもあっさり肯定するものだから驚いてしまうのも無理はない。

「そっか……じゃあ、話してみ？」

松平は麻冬のすぐ隣に腰を下ろす。

そしてズボンの裾をめくり上げてさっきの麻冬のように足だけプールの中に入れた。

ちゃぷ……という音が静かな空間に響き渡る。

麻冬は松平からもらったタオルを足から外して、それをじっと見つめた。

「何回も……好きだって言われたの」

麻冬は阿笠に対する自分の無神経さを十分に理解している。

そうしてこうやって男の子と2人きりになって夜話すことも裏切りだと分かっている。

でも、秋人の味方である春樹にも相談できず、親友の夏実にも弱音は吐けず、もう頼れる人はいなかった。

別に答えてくれなくても良いからとにかく誰かに胸のうちを言わなくては、精神的にもたないほど麻冬は陥っている。

たまたまいてくれたのは、松平だった。

「それは……誰に？」

「……2人から」

麻冬が阿笠を選ぼうとするたび阿笠は傷つく。

だけど、麻冬は秋人を選ぶことなんてできなかった。

「何度も秋人を振った。あたし阿笠のこと好きだから……」

「……」

「でも阿笠は……あたしのこと信用してなかったよ」

麻冬は揺れる水面をボーッと眺めながら、淡々と言う。

あまりのことに悲しさすら感じず切なさを忘れ、葛藤すらできないようだ。

そう、本当にドール化している。

人々を魅了するその瞳には生気がなく、お嬢様のような雰囲気はない。

ウェーブの髪も心なしか萎れて見えるのはきっと気のせいではない。

「えっ……な……」

「あたしの言葉じゃなくて烈くんの言葉を信じようとしてただけだって」

「あ、阿笠がそう言ったのか？」

松平はそう問いかけるが、麻冬はその質問には答えずに続けた。

「……違う、そんなことは……どうでも良い。あたし……あたしが悪いの」

「……え？」
「あたしが……秋人見て泣いちゃったから」

麻冬は頭の中でさっきのことや今までのことを思い出そうとしているのではなく、勝手にその映像が出てきてしまうようだ。

その浮かんできた映像を見ては自分を責める。

「好きだって言ってくれた秋人に泣いて……本当にさよならした秋人に泣いて、キセキ歌った秋人に泣いた……」
「雪原……」
「こんなんじゃあ信用できなくて当たり前よね……」

本当は阿笠と出るはずだった後夜祭。

みんな楽しそうに好きな人と踊ったりしているのに、あそこに自分がいない惨めさ。

でも、仕方ないでは済まされない。

「……雪原はどうしたいの？」
「え……」
「阿笠といたいの？それとも秋人と付き合いたいの？」

松平は直球に言う。

だが、簡単な質問だけど麻冬には最も難しいことなのだ。

それが分かっているならこんなに苦しんでいない。

阿笠を選んでおきながら秋人を惜しんでるという事実が麻冬を追い詰めている。

だからといってお試しで秋人を選ぶこともできない。

きっと秋人を選んだ時点で阿笠とは全てが終わる。

阿笠を好きだという麻冬の思い込みなんて、とっくに否定されているのだ。

「……分かんないからこんなことになってるのよ」

麻冬はようやく、初めて悔しそうに言った。

眉間にしわを寄せて、大きな瞳をプルプルさせて尚もタオルを見つめている。

「考えたって答えは出ないし……結局2人を傷つけてる」

タオルを握りしめている手に力を込め、やり場のない気持ちをどうにか抑えようとする。

松平はそんな麻冬を見て、すぐさま抱きしめたい衝動に駆られたけど必死で自分を止める。

抱きしめて優しい言葉をかけるなんて簡単だ。

そのまま勢いで好きだとも言えるだろう。

けれどたかたが2人の男子のことでこんなにも滅入っている麻冬にそんなことをしたら、きっと正気ではいられない。

松平はそう思った。

代わりに足を軽くパチャパチャと動かし、理性を保とうとしている。

麻冬を思う年数でいったら松平が一番だろう。
麻冬を愛する深さでいったら阿笠が一番だろう。
だが、麻冬を諦めない気持ちでいったら秋人が一番だろう。
その秋人はもう諦めてしまったから一番ではないけれど。

「……傷つかないことなんてないよ。どのみち誰かが傷つくんだよ」
「でも、あたしが傷つけて良い権利なんか……」
「権利とか関係ない」

その言葉に麻冬は松平のほうを向いた。

松平も麻冬と視線を合わせる。

「雪原のこと好きな奴は他にもいるし、あの2人を好きな奴だって

いる。……雪原が知らないだけで、お前ら3人が幸せだとしても悲しい思いする奴なんざたくさんいるよ」

俺を筆頭に、と松平は心の中で呟く。

麻冬は目を細めて軽くうつむきながら、そうだよね……と小声で言った。

ここで告白まで到達できない松平はまた視線を水面に戻して、ギュッと目を閉じた。

そしてプールの中から足を出して、そのままあぐらをかく。

今までずっと2人の声が響いていたのに、一気にシンとなってしまった。

そんな沈黙を破ったのは麻冬のほうだ。

「結局……どっちも選ばなければ良いの？あたしどうしたら良いの……」

そんなこと松平に分かるはずがない。

けれど自分自身で答えを見つけられない麻冬は、もう誰かに聞くしかないのだろう。

だが、本当に阿笠を選んで秋人を振ったことがいけないことだったのか。

誰かが傷つくのが当たり前なのなら、秋人が振られて傷つくのは仕方なく、阿笠が割りきれなくて傷つくのも仕方ないことで、麻冬が心のどこかで秋人を求めてることも仕方ないのではないだろうか。

例えば3人が幸せな方向に持っていけたとしても、そこに松平の存在はない。

ずっと側にいた松平が傷つくのも仕方ないと言うのか。

何て残酷なのだろう。

「それは雪原が決めて良いんだよ」

「……え…」
「雪原が決めたことなら誰も文句は言わない」

松平はそう言うけれど、麻冬は何度も自分の意思で阿笠を選んでいる。

そのたび3人が揃いも揃って傷いている。

「……自分の心の中にいるのが誰なのか、ちゃんと考えたことあるか?」
「だからあたしは阿笠を……」
「ならなぜ月影に泣く」
「……」

松平の遠回しではない直球な言葉が麻冬に突き刺さる。

麻冬は何も言い返すことができずに黙りこんだ。

「……本当に阿笠が好きか?」
「あたしは……」
「月影が阿笠に劣ってるものって何?逆に言えば阿笠が勝ってるのってどこ?」

松平は隙を与えないほどにズバズバと言う。

だが決して麻冬を追い詰めたいわけではなく、むしろ助けたいがためのことなのだ。

言うならば、松平は麻冬の幸せを願う秋人側の人間。

学校は違くても、大会で顔を合わせるたび話をしてお互い強化選手に選ばれて、高校に入ってからはずっと側にいた。

毎日毎日隣で泳いで、競いあえる良きライバルだった。

それでも、麻冬が松平を男として見ることは一度もなかった。

「雪原はさ、阿笠を守りたい？それとも月影に守って欲しい？」

「え……」

麻冬は松平の言葉に考えさせられる。

そんな麻冬に松平は、頭に手をポンと置いて優しい顔をした。

その顔は、まるで大丈夫だと言っているみたいで麻冬には優しすぎて泣けてしまいそう。

それでも麻冬は泣かずにただただ松平に癒されていた。

next

第157話【試合開始】

「さぁ、いよいよ始まります！プロの目にも止まる高校サッカー界の天才・阿笠大悟とカリスマ・月影秋人の世紀の一戦が始まろうとしています！」

報道陣たちがカメラを持ちながら何十人……何百人と押し寄せている。

今日はついに待ちに待った静岡選抜対全国選抜の試合だ。

両チームとも軽く練習をしながら汗を流している。

やはりその中で響いているのは、あの2人の声である。

同じ高校でゴールデンコンビと言われる主将副主将の2人が、まさかこんな形で戦うことになるとは少し前までは誰も思っていなかっただろう。

スタジアムの観客席は満席で後ろで立っている人もかなりいて、もう入りきれないほどの人がいる。

みんながこの日を待ち望んでいた。

だが一番待っていたのは、やはりあの２人なのだ。

声が枯れそうなほど大きな声を出して走り回り、厳しくメンバーを叱る。

そして時折見せる笑顔。

本日の天候は快晴、気温２０度だがスタジアム内は２５度まで上がっている。

絶好のサッカー日和と言って良いだろう。

やはり彼らは澄んだ青空でサッカーボールを追いかけてる姿がとてもよく似合う。

高い身長にスリムながら程よく筋肉がつき、サッカー小僧とは思えないほどの容姿。

無造作だがナチュラルな黒髪でキリッとした目がその顔つきを際立たせる秋人と、肩にかからないくらいの長さの少し茶色い髪の毛で甘く穏やかなフェイスの阿笠。

神は彼に二物どころか何物も与えている。

だが何物与えられたとしてもそれを生かせるかどうかはその人次第なわけで、彼らが輝いて見えるのは決して神のおかげだけではない。

いくつもの壁を乗り越えてきた勇気が、彼らを一層輝かせているのだ。

「良いか！テレビとか世間とか気にすんな。俺らのサッカーをやるぞ！」

「おう！」

試合直前、全国選抜チームはみんなで肩を組ながら円を作っている。

「決められたら決め返せ！後悔だけはすんな！」

「おう！」

「よし、行くぞ！絶対勝つぞー！！」
「おーっ！！」

秋人の言葉とみんなの返事が代わり番子に響く。

そしてまた、静岡選抜チームのほうも同じように円陣を組んでいる。

「攻撃は最大の防御だ！攻めて攻めて攻めまくれ！」
「おう！」
「絶対ひるむな！静岡の意地見せてやれ！」
「おう！」
「静岡～！ファイッ！！」
「おぉうっ！！」

両チームとも掛け声を出し終えたあと、一斉にフィールドに散らばる。

選手たちがフィールドに立った瞬間、待ってましたと言わんばかりに観客たちは雄叫び出した。

だが選手たちはそんなこと物ともせず、お互いを見つめ合っている。

そしてその中心にいるのは、キャプテンたちである。

ボールは全国選抜チームのほうからで、そして今、ホイッスルが響いた。

一斉に選手たちは走り出し、ボールを追いかけ始める。

「へへん。もらいっ」

まだたったの十数秒もしないうちに阿笠はボールを奪い、ゴールへ向かって走り出す。

だがやはりそこで立ちはだかるのは好敵手、秋人だ。

阿笠をマークしている秋人はまるで風のようにして阿笠の隣に現れ、共に走っている。

「……きたね、秋人」

阿笠は走る足を遅めた。

つられて秋人もスピードを緩める。

「さぁどうする、天才くん」

秋人は挑発的にそう言いながら微笑する。

阿笠もニッと口元で笑みを浮かべ、その瞬間から2人の戦いが始まった。

常にボールは阿笠が持ってはいるものの、2人とも半径1メートル以内から動かない。

秋人は阿笠からボールを奪うことはできないが、阿笠もまた秋人を抜けずにいる。

どんなフェイントをかけてもお互いの癖を知ってる故にバレてしまい、一歩も譲らない。

他の選手たちはつい立ち止まって2人の攻防を息を飲みながら見ている。

「……秋人！今行く！」

桑原が秋人の援護に行こうとしたが、桑原の手を掴んでそれを阻止した男がいる。

「だめだ」
「く、久野。でもっ……」
「だってほら見て」

久野は2人を指差しながら少し笑っている。

「秋人楽しそう」

久野にそう言われた桑原は、再び2人に視線を向ける。

なかなかボールを奪えずにはいるが、いつものように怒っているわけでもなく強ばった表情をしているわけでもなく、あの秋人が生き生きとサッカーをしている。

常に人の上に立つ人間として楽しむ心を抑えていた秋人が、あんなにも楽しそうにしているのはいつぶりだろう。

「……分かっちゃった、俺」
「え？」
「秋人はさ、ただ阿笠とやりたかっただけなんだ」

阿笠も阿笠で、秋人との対戦を待ちにしていたせいか顔が緩んでいる。

あの最強だった佑亮でさえ実は一度阿笠に抜かれている。

阿笠に抜かせないものなどないけれど、秋人は特別なのだろう。

「昨日さ、ミーティングのあと部屋戻ってから秋人俺にこう言った。全ては俺のワガママなんだ……って」

「まじかよ……」

「そのときは意味が分かんなかったけど今分かった」

2人がつい会話をしていたそのとき、観客たちの歓声と選手たちがいきなり走り出したことで2人は我に返る。

どうやら阿笠が秋人を抜いたようだ。

足でスライディングして止めに行った秋人を阿笠は軽々とはね除けて、軽やかにドリブルをして走って行く。

秋人はすぐさま立ち上がって再び阿笠を追いかけた。

「……くる！」

ゴールに向かって走ってくる阿笠を止めるのは、次は久野だ。

「桑原！俺は全力であいつを援護する！！」

そう叫びながら久野は阿笠目掛けて走り出す。

久野は阿笠からボールを奪おうと応戦するが、やはり全国一の彼でも敵わない。

どんなに久野が技をかけようとも阿笠はその上を行く。

「……くっ……！」

秋人にも久野にも止められないことには為す術がない。

そのまま阿笠はゴールまで突っ走り、なんなく得点を決める。

始まってまだ数分しか経っていないのに、もう1点。

その後も秋人は阿笠を止めることができずに2点追加される。

秋人や他の選手たちも頑張って点は決めるものだから点自体は追いかけっこ状態なのだが、もはや阿笠の独壇場である。

阿笠のフィールリフティングは人々を魅了し、選手たちを惑わせる。

阿笠のチームメートでさえ阿笠についていけないでいる。

懸命に全国選抜チームは阿笠を追いかけるが、何人束になっても勝てない。

全国選抜の名が廃るほどに、惨めでバカにされてるかと思うほどに全国選抜チームたちは手も足も出ない。

静岡がサッカー王国だからこんなに強いのではない。

阿笠がいるから強いのだ。

全国から集まった強者たちの中でも一際強いのだから当たり前だと

言えばそうなるが、けれどやるせない。

容赦ない阿笠の攻撃は止まることを知らない。

本来ならば阿笠のチームメートは全国選抜の選手たちなのに、ここまでするとは……観客たちももはや歓声を越えて唖然としている。

結局前半が終了したところで点数は7‐5で静岡選抜チームがリードしている。

サッカーはこんなにポンポン点が入るものではないというのに、前半だけでこれでは試合が終わったあとは何点までいくのだろうか。

スタジアムにいる一般客もテレビを見ている人も、みんな息を飲んで黙りこんでいる。

7点のうち阿笠が決めたのは6点だ。

まるでゲームをしているかのように、阿笠は遊んでいるかのようにさえ見える。

もちろん悪い意味ではなく純粋に楽しんでいるということなのだが、最初の2点くらいは決まったときに阿笠もチームメートも一緒になって喜んでいたが、その後は阿笠はもう特にガッツポーズもせず淡々としている。

メンバーたちが阿笠にハイタッチしに行ったり声をかけに行ったりはするものの、阿笠自身は点を取れることのありがたみを感じずにいる。

「阿笠、楽しい？」
「んぁ？」
「待ちに待った秋人との対戦は」

ドリンクを飲んでいる阿笠に話しかけてきたのはＭＦの宮下だ。

宮下はタオルで汗を拭きながら阿笠の横に座る。

「楽しいね。でも、なんかちょっと違うなぁ」
「違う？」
「んー……秋人はもっとしつこいはずなのにさ」
「そうか？」

阿笠たちがこんな会話をしている頃、秋人と桑原と久野は3人で話している。

正確には一方的に久野が秋人に話しかけていて、それで桑原もたまたま加わった形だが。

「どうするよ秋人」
「ん……」
「阿笠絶好調すぎだな。俺でもお前でも止めらんねぇ」
「確かに……どうするか、やっぱり阿笠はノーマークにした方が良いのかね」

珍しく秋人は弱音を吐く。

そんな秋人に久野は
「秋人っ！！」と怒鳴るが、座り込んでいる秋人は顔を覆いながら生気のない声を出す。

「……桁が違う。俺、よくあいつと肩並べられてるよな。あつかましい……」

前半だけでのあの得点を見れば自信をなくすのも無理はないだろう。

どんなに守備が弱くても阿笠さえいれば勝てる。

ワンマンになるつもりはなくとも結局はワンマンになってしまうんだ。

「秋人、お前がやんなきゃ誰もできない」

桑原は宥めるように秋人に言うが、秋人は黙り込んでいる。

ずっと阿笠の隣で2人して注目されてきたのだ、そんなことくらい秋人だって分かっている。

だがポジションが違うばかりに羨ましくも妬ましくもなるのは仕方がない。

確かに縁の下の力持ちであるＭＦがいてこそのサッカーだけど、やはり目立つのは華のＦＷとなってしまう。

佑亮みたく豪快なプレーをするＤＦではなく、秋人の動きは無駄なく鮮やかな動きをしている。

それだったらどうしても阿笠のほうが目立つ。

阿笠はＦＷなだけでなく目立つ多彩な技を持っているのだから。

「……秋人がやらないんだったら俺がやるよ。良いの？」

久野は落ち着いた声で言う。

秋人は顔を上げずに

「そうしたほうが良いかもしれない……」と呟いた。

久野も桑原も手を打つことができなく、顔を見合わせてため息をつく。

昨日久野がどんな思いで秋人にああ言ったか忘れてしまったのか。

今どんな気持ちでそう言ったか分からないのか。

結局モチベーションが下がったまま後半戦が始まってしまった。

秋人はとりあえず阿笠をマークしているが、どうにも動きに機敏さもやる気も見られない。

久野は秋人の士気を高めるために一応マークに入るが、その行動が逆に秋人により阿笠をマークさせる気を減らす。

しばらくしてから秋人は足を止めてしまい、もう阿笠とボールを取

り合うことをやめてしまった。

「え？」

実況も解説者も観客も記者も敵チームも味方チームも、そして阿笠までもが声を揃えて秋人を見た。

秋人は阿笠から逃げるようにして後ろに下がり、悔しそうに袖で額の汗を拭いたままの姿勢を保っている。

「ちっ……あのバカ！」

久野は急いで阿笠のマークについた。

驚いた阿笠はついドリブルをやめて他の選手にパスをした。

他の選手がゴール目掛けて走り出す中、阿笠は秋人のほうを向いて心配そうな顔を見せた。

そして駆け寄ろうと2、3歩近づいたがやはり足を止めて振り返り、再び攻撃に加わろうと走る。

解説の人も阿笠の行動を説明したりしている。

戦友が心配なんでしょうが今彼は敵ですからね、あれで駆け寄ってたらキャプテンとして……選手として失格ですね、なんてペラペラと喋っている。

観客席には烈と麻冬がだいぶ離れたところに別々で座っていて、午前の練習を終えたばかりの春樹や夏実は家にも帰らず学校で携帯のワンセグでこの試合を見ている。

みんなが画面に乗り出しながらかぶりついている。

「なんでだよ……秋人っ」

阿笠は本気で自分をマークしてこない秋人に対して歯がゆさを覚える。

秋人は阿笠のマークはやめたものの他のプレーはしっかりこなしている。

キャプテンとして指示も出しているし、攻撃もするしカバーもしている。

そんなことをずっと繰り返していて、後半戦の半分は終わろうとしていた。

秋人がいくら阿笠を止められなくても、阿笠がゴールする瞬間を減らすことは可能だ。

久野よりも、やはり秋人のほうがずっと可能だ。

その事実自体が大事だと言うのに、なぜ秋人はそれを忘れてしまったのか。

それでもまだ阿笠は秋人をマークしている。

秋人がボールを持ったまま走り出すと、必然的に阿笠も走り出した。

秋人は確かに阿笠を止められないが、阿笠とて秋人を止めることはできない。

阿笠が滑り込んでボールを奪おうとするが、秋人は難なく避ける。

秋人は再び走るが、今度は他の選手たちが2人がかりでスライディ

ングをしてきた。

もちろんそれもボールともども高くジャンプをして避けるが、その瞬間3人目に秋人をマークしてきた選手がつまずいてバランスを崩し、まだ着地していない秋人に思いきりぶつかった。

足をついていない無防備な体勢の秋人は咄嗟に身を固めて落ちていく。

やばい！と誰もが目を細めたが、次の瞬間には目を疑う。

秋人をマークしようと後ろから追いついてきた阿笠が秋人をカバって下敷きになったのだ。

「あたた……えっ…？」

特に痛みも感じず何やらクッションのような感触を覚えた秋人はキョロキョロと見回す。

すると、自分の真下には阿笠がいた。

「阿笠！？」

「ぐ……っ…」
「阿笠ーーーー！！」

next

第１５８話【ホイッスル】

一瞬フィールドだけでなく観客席や実況まで静まった。

何ということか、阿笠は倒れてくる秋人のためにわざわざ下に飛び込んだのだ。

背中に思いきり秋人が落ちてきて、右肩を強く打ち付けたらしい。

秋人はすぐさま阿笠から降り、阿笠に呼びかけている。

静岡選抜チームの選手たちもみんな阿笠に駆け寄ってきた。

「阿笠！阿笠っ！！」

秋人はこれまでに見たことがないほどの焦った表情で必死に阿笠の名を呼ぶ。

試合は一時中断され、審判たちも寄ってきた。

「大丈夫か、阿笠くん！」

向こうからタンカも運ばれてきたみたいだが、阿笠は声にならない声を出して肩を押さえながら懸命に立ち上がる。

「あかっ…阿笠！俺っ俺っ……」
「は……なんて顔してんだよ秋人」

阿笠は震える手で肩を掴み、脂汗をかきながら息も荒くなっているが、それでも無理やり笑っている。

「阿笠くん、今病院にっ」
「い、良いです。俺、やれます」
「しかし！」
「やれます。やらなきゃ……いけないんだ」

阿笠は元気な証拠を見せるために軽く走る。

「肩を脱臼してるかもしれん！そんな状態でできるわけ……」

阿笠は審判の言葉を無視して秋人に近づいていく。

秋人は今にも泣きそうな顔をしながら、なおも膝をついてしゃがんでいる。

そんな秋人に阿笠は左手を差し出した。

「秋人。続けよう」
「でもお前っ……」
「俺平気だから」
「阿笠……」

秋人に心配させまいと無邪気に笑う阿笠があまりにも優しすぎて、秋人は目に涙を浮かべた。

痛いだろうに、立っているのも辛いだろうのに、こうして秋人に手を差し述べている。

「立って。楽しみにしてたんだよ、この試合。ずっと」
「……ぅ…っ…」
「なんでマークしてくんない？よしてよ、悲壮感ぶるの」

秋人は地面に手をついて頭を下げている。

フィールドには1粒2粒と涙が落ちた。

「お互いを止めれないことくらい分かってたことじゃん。良いじゃん、そのくらい」
「…ぅ…ふっ……」

「それでも良いからやりたいってのは俺だけ？ならワガママでごめん」

秋人は地面から手を離し、ユニフォームで涙を拭いている。

「もし違うリーグに入れば将来戦うこともあるかもしれない。でも俺は今やりたい。そう言っただろ、秋人」

「言っ……た」

「ならやろう。こんくらいどってことないから」

阿笠はチームのみんなに、良いよね？と笑って尋ねた。

みんなが当たり前だろと言っている。

秋人も自分のチームの選手たちを見回した。

誰も何も言わなかったけれど、みんなが頷いている。

久野はピースしているし、桑原は腕を組みながら少し微笑んでいる。

阿笠をマークできないＤＦ陣も、秋人が阿笠をマークすることに反対していたＭＦ陣も、秋人より点数を稼げていないＦＷ陣もみんな秋人を待っている。

悔しいに違いない。
歯がゆいに違いない。
それでも、阿笠と秋人のために何も言わない。
2人の勝手を許してくれている。
「なんで……」
秋人は信じられないというような顔をしながら、訴えかけるように言う。
「だって、楽しそうにサッカーする秋人好きだよ」
「いつも迷惑かけてっし」
「お前が阿笠マークしないで誰がやんだよ」
「そうだぞ月影」
全国選抜チームの選手たちはみんな口々に言った。
あんなに楽しそうにサッカーしている秋人を、こんなにも取り乱した秋人を見るのは全ての人が初めてだろう。

佑亮とサッカーしたときよりも、優勝した瞬間よりも阿笠と競っているこの瞬間が最も楽しそうだった。

それは誰の目にも明らかで、そんな秋人に責める言葉なぞあるだろうか。

最高の好敵手

きっと無二の存在となる。

そうだ、最初にサッカーへの頂を見せてくれたのも

この優しい男だった。

「ほら秋人、時間が押してる。やろうよ」

「阿笠……」

阿笠は更にズイッと左手を前に出した。

秋人が弱々しくその手を握ろうとすると、先に阿笠が秋人の手を取って引っ張り上げて立たせた。

その衝撃で肩に痛みが走ったのだろう、阿笠は一瞬顔をしかめたがまたすぐにいつもの表情に戻す。

「審判、すいません。長引けさせました」
「ほ、本当に大丈夫なのかね」
「ええ。全く」

そうして阿笠がフィールドに散らばろうとしたとき、秋人が阿笠の名前を叫んだ。

何事かと振り返った阿笠に、秋人はこう言った。

「応急処置してこい」
「や……でも」
「そんでもって残りの時間、めいっぱいやろうぜ」

秋人は左手で軽くガッツポーズをする。

阿笠は一瞬悩んだが、納得したようで秋人と同じように左手でガッ

ツポーズをした。

そのとき、お互いの手首についているリストバンドに気づいた。

「あれっ、秋人、それ」
「えっ。お前こそ」
「俺は烈に」
「俺春樹に……って、まじかよ」

すると、なぜだかとても笑えてしまう。

2人は背中を見せて、ほぼ同時に叫んだ。

「行っくぞーーー!!!」

その言葉に敵チーム味方チームの全員が同時に返事をした。

フィールド上に響く声。

見ている人全てが感激をして、中には泣いている人さえいた。

くさい言葉の掛け合いだと言う人もいるかもしれないが、決して偽善なんかではない。

若い彼らには、絶対に必要な言葉だった。

阿笠は秋人に言われた通り一度ベンチに下がってコーチに手当てをしてもらった。

コーチはこんな状態で出るなんてバカだと怒鳴るが、監督は何も言わなかった。

手当てし終えた阿笠にコーチはまだブツブツ文句を言っているが、監督はこう言った。

「行きなさい。後悔しないのなら」

阿笠は手当てのため脱いだユニフォームを再び着て、監督の顔を見ずにフィールドに戻りながら言った。

「いっちょやってきまーす！」

阿笠はさっきまでの蒼白した表情とは全く違う、意気揚々とした普通の少年の顔をしている。

メンバーチェンジで阿笠が入ってきたとき、誰もが待ってましたと言わんばかりに雄叫びを上げた。

残り時間わずか十数分、ただ今の得点は９－９のタイ。

阿笠がいない隙を狙ってここぞとばかりの全国選抜チームの追い上げに静岡選抜チームは少したじろぐが、阿笠が戻ってからはそんな気持ちは消え去る。

もう、託すしかない。

彼らに。

秋人は今度こそ懸命に阿笠を追っている。

阿笠は時折痛そうに顔を歪めるが、天才と呼ばれる意地を見せてい

「これ以上点決められてたまっか！」

る。

「還付泣きまでに叩いてやる！」
「ほざけ！勝つのは俺らだ！」
「静岡だっ！！」

どれくらい2人の攻防が続けられているのか。

必死にボールを守り奪いをしながらも、2人はほんの一瞬だけ至福の顔をする。

中学生で出会い、高校ではチームメートとしてコンビを組み、ここまできた。

お互いがお互いの実力を高めあうことで2人は着実に日々精進していった。

無二のコンビであるが、それは同時に一番のライバルと呼べる。

いつしか戦ってみたいと、そう思うようになる。

そして今、その願いが叶おうとしている。

「……やっと戦えたね、秋人」

阿笠ははにかみながら言う。

秋人も口元を緩ませて嬉しそうな顔をしながら答えた。

「ああ」

麻冬のこととかそんなことはすっかり忘れ、今はただのサッカー少年として思う存分サッカーを楽しんでいる。

サッカーは楽しいばかりではなく、時には嫌になることだってある。

部長や副部長をやっていれば面倒くさいことばかり。

それでも

君は、お前は、いつだって隣にいた。

支え合って時には厳しくあたりながらも、ずっと側にいてくれたね。

戦いたいなんて言ってみたけれど、やはりいつまでもずっとゴールデンコンビでいたい。

君がセンタリングしたボールを俺が決めたい

お前がゴール決めるためのアシストは俺がしたい

絶対なんてことは有り得ないことだけど、この先高校を卒業してもきっと一緒にサッカーをやるだろう。

例えばチームは違うかもしれないし、どちらかが試合には出れないかもしれない。

それでも、このまま共にサッカーをやっている2人の姿が脳裏に浮かぶ。

大人になった2人が日本代表のユニフォームを着てボールを追っている姿が見えるのだ。

……試合を見ていた誰もが、いつまでもこの試合を見ていたいと願った。

だが、ついにホイッスルは鳴り響いた。

「終わっ……た…」

秋人は得点ボードを見上げた。

あのあと阿笠に1点許してしまい、その後は懸命に点を取ろうとしたが惜しくも一歩及ばなかった。

「負け……か」

息を切らしながら秋人は空を見上げている。

サンサンとした太陽が照らしてきてとても暑い。

勝利を喜ぶ静岡選抜チームの選手たちの声が響いた。

秋人がなおも空を見上げていると、誰かが秋人の左手を掴んだ。

阿笠だった。

阿笠は左手で秋人の左腕を掴み、高く掲げた。

その瞬間、パシャパシャとカメラのフラッシュが幾度となく光り、歓声の声がスタジアムに響き渡っている。

以前県で優勝したとき、阿笠は秋人に飛び乗り抱きついた。

だが今はお互い違うチームだし何より阿笠が怪我をしてるから、そ

んなことはしない。

「秋人ーーっ！！」
「阿笠ぁっ！！」

選手みんなが2人の名前を呼びながら駆け寄ってくる。

阿笠は秋人の手を下ろし、チームのみんなと一緒にフィールドから出て行く。

そんな阿笠の背中を、意外にも秋人は晴れ晴れした顔をしながら見ていた。

10-9

全国選抜チーム、あと1点取ることができず

静岡選抜チームの勝利。

next

第１５９話【試合後】

試合後、報道陣が特に2人にインタビュー攻めをした。

毎度のことながら人気者だ。

様々な質問が飛び交う。

「月影くん、途中で泣いていたのは？」
「ああ、あれは阿笠…くんが助けてくれたからですかね」
「では嬉しくて？」
「悔しくて、ですよ」
「と言いますと？」

秋人は向こうでインタビューをされてる阿笠をチラッと横目で見る。

少し照れくさそうにインタビューに答えてる阿笠だが、右上肢は微かに震えている。

試合が終わったのに病院へ行けないとは何たる拷問。

「俺逃げたんですよ。でもあいつはこんな俺のために手を差し伸べてくれた。あんまりにも阿笠が優しいもんで」

「試合中に中断して阿笠くんと喋っていたことについては！」
「あの瞬間だけは自分のことで頭がいっぱいでした。静岡選抜チーム、チームメートならびに応援してくれていたみなさんにもご迷惑をおかけし、反省しています」

優しい問いかけや厳しい質問など、いろいろなことを聞かれて秋人は正直面倒になっている。

ふと明日のスポーツ新聞の見出しには何を書かれるだろうということが頭を過る。

月影くんを庇い阿笠くん怪我
フィールドで泣き伏す月影くん

いろいろなフレーズが浮かんでくるが、どれも書かれても可笑しくはない。

良いことばかりが新聞に載るわけではないことをよく知っている分、ドキドキしてしまうのだろう。

どれも真実なのだから受け止めようという気持ちはあるものの、やはり全国紙に悪口など書いて欲しくはない。

「それって阿笠くんと色違いですよね！」

とある質問の中にこういうものがあった。

ああ……と秋人は自分の左手首を見た。

「そうですね、これ親友にもらったんです」
「阿笠くん？」
「いえ。学校の」
「ああ、例のバドミントンをしている」
「ええ」

阿笠のほうでも同じような質問をされていた。

そしてやっぱり同じような返答をしているのだ。

春樹の名前も烈の名前も出していないけど、春樹はバドミントン界では有名だし烈も取材されたりしているから2人の名前は3人に1人は知っているだろう。

だから、バドミントンの彼とか芸術家の彼なんて言ってしまえば分かるものだ。

しかも阿笠は何を思いついたのか、偶然観客席にいる烈を見つけて手を大きく振りだした。

「烈ーーー!!勝ったぞー!見てたーっ?!」

ばか!と秋人は心の中で叫ぶがもう遅い。

生中継で報道陣がいる中顔の知られてる烈がいるのがバレたら烈にまで被害が及ぶ。

まぁ阿笠の破天荒ぶりはみんなが知っていることだし仕方ないと言えば仕方ないが……

さすがの烈も呆れてため息をついている。

今日の烈は耳に長い飾りのピアスをつけていて（学校ではシンプルなものをつけているが、もちろん違反）シルバーのネックレスをつけていたりと、若干ちゃらい。

おまけにあの赤い髪の毛に青いカラコンとくれば、まぁ目立たないはずもない。

いつもは天使の輪しか赤く見えないが、今は外でしかもかなりの日光が当たっているおかげでけっこうな赤色だ。

阿笠の呼びかけのせいで、烈の半径１０メートルくらいにいる観客たちみんなが烈のほうを振り向いた。

カメラもこちら側を映しているようで隠れようもない。

烈は立ち上がって観客席の一番前へと歩いて行く。

一番前でもフィールドとは高さ４メートルくらいは違う。

「おめでと、阿笠」
「へへっ。やった」

阿笠はピースしながら笑っている。

「よく頑張ったじゃん。痛かっただろうのに」

烈がそう言うと、阿笠は左手を上に上げて言った。

「だってこれが支えてくれてるから」

それは、白地に赤い星のコンバースのリストバンド。

烈が阿笠のために勝ったお守りだった。

「そうだよ、分かってるじゃん。いつだって俺がいるんだよ」

烈も軽く笑った。

2人はお互いの顔を見ながら、どこか安堵している。

阿笠が怪我した瞬間最も驚いたのは秋人かもしれないが、この烈も身を乗り出して阿笠を心配していた。

すぐに駆け寄ってやれないもどかしさに襲われながらも、どうか秋人との試合が続けられますようにと祈った。

「お前ほんっと恥ずかしい奴だな」

呆れた顔をした秋人が阿笠に近寄ってきた。

阿笠は何だよ～、と無邪気に軽く怒るがそれでも態度は変わらない。

「愛川」

そんな阿笠をよそに、秋人は烈に話しかける。

烈はその青い目で秋人を見下ろした。

「阿笠傷つけてごめんな」
「それは怪我のこと？」
「や、身心ともに」

秋人がそう言うと、烈はニンマリ笑った。

まるでお日様みたいな笑顔で、赤い髪の毛がよく映える。

「分かってるなら良いよ。月影もお疲れ」
「さんきゅ」

すると、烈は携帯を秋人目掛けて投げ落とした。

よく見ると着信の画面になっていてどこかに繋がっている。

微かに声がしている。

何？と秋人が烈に尋ねると、

「良いから出てみ」と催促してきた。

言われた通りに秋人が電話に出てみると、向こうから何やら不満そうな声が聞こえた。

『烈ぅーー！ちょっと！用ないなら切るよ？！俺秋人にっ』

「え、春樹？」

『あ？……えっ、秋人？』

どうやら烈が機転をきかせてくれたみたいだ。

阿笠にはこうして今自分がここにいることで思いをぶつけることができるが、秋人の親友はここにはいない。

負けちゃった、と言える相手がいないからそんな秋人のために春樹に電話をかけてくれたようだ。

春樹は電話の相手が秋人だと知ると、試合の話をしてきた。

けれど秋人が阿笠のマークを一度やめてしまったことや泣いていたこと、阿笠が怪我をしたことについては何も触れてこない。

ただ惜しかったね、とかずっとテレビで見てたよ、と優しい言葉をかけてくれる。

秋人はそんな春樹の気遣いに癒されている。

烈だって必要以上に秋人に詰め寄ることなんてしない。

それは彼らが秋人の友達だから、という以前にスポーツマンとして苦しみを分かってしまうから。

こんなときスポーツマンなら、もっと頑張れば良かったのになんて言葉をかける人はいない。

頑張ってる人に、頑張った人にもっと頑張れなんて言う人はいない。

頑張っても頑張ってもどうしようもないことがあることを知っているから。

大切なのは、そのどうしようもないことをいかに努力して補うかだ。

秋人は心地よいテンポで話す春樹に安堵を覚えている。

まるですぐ隣にいるかのようにさえ思わせる。

そのうち静岡選抜チームの招集がかかり阿笠が走って去るが、秋人はなお春樹と話してる。

烈は遠くへ向かう阿笠の後ろ姿を愛しそうに見つめた。

「春樹」

『ん？』

秋人は、いつになく穏やかな口調で語りかける。

自分を癒してくれる春樹にだからこそ、ようやく話そうと思えたのだろう。

「俺ね、だめだった。勝てなかった」

遠くで秋人を呼ぶ声が響いている。

だが、秋人はそれを無視して春樹と話し続けている。

正確には秋人の耳に声が届いていないというのが正しいだろうか。

「試合にもだけど、何より俺自身に」

『そっか』

「あれほど負けないって思ってたのに、悔しい」

初めて秋人は負けて悔しいと誰かに言った。

いつも例え負けたとしても、１人で悔やんでそれをバネに乗り越え

てきた。

つまり、よっぽど堪えたんだろう。

「怖いな。明日の新聞、なんて書かれるんだろ」

泣いたことはちっとも恥ずかしいことなんかではない。

けど、選手としてプレーを怠ったことは許されざる事実であり、ベンチに下がらずフィールド上で泣き伏せたことは迎え入れられることでもない。

「……学校のみんなは何て言うかな。テレビは……ネットでは何て言われて何て叩かれるんだろ」

『そうだね、叩かれるかもしれない。厳しい声があるかもしれない』

「……うん」

春樹は今、元気良く自転車をこいでいる。

学校を出たものの、夏実とは一緒にいない。

そして、春樹が走っているのは家へ帰る道ではない。

『けど、秋人がいっぱい走り回ってたくさん決めて、楽しそうにしていたのをみんな見ていたよ』

一体どこへ向かっているというのだろうか。

坂道に直面して春樹は自転車から降りて自転車を引いている。

『どんなに悪く言われたって、例えプロの評価を下げたって、負けたって良いんだよ』

晴天下、２人は数十キロと離れた場所にいるけれど空は繋がっている。

雲は流れている。

同じ青空がある。

『成長していく証だよ。将来きっと今日のことが役に立つ』

「……かな」

『そうだよ。だって俺たちはこれからだもん』

秋人は空を見上げた。

眩しいほどの太陽と、その回りには綺麗なスカイブルーと羊形のホワイト。

「なんか、早く春樹に会いてぇな」

春樹も空を見上げた。

お互いが空を見上げていることを信じて、お互いが繋がっていることを信じて同じ空を見ている。

同じ県で新幹線で1時間くらいの距離しかないのに、こんなにも遠く感じるのはきっと空が青いせい。

『はやく帰っておいで。待ってるから』

「うん。すぐ行く」

そうしてようやく秋人は携帯を切った。

息をついて携帯を閉じたとき、秋人は隣に桑原がいることに気づいて大袈裟に反応した。

「なっ、なんだよ。いんなら声かけろや」
「ばか！何度も声かけたっつの！ほれ行くぞっ」

桑原はいくら呼んでも秋人が来ようとしないから、わざわざ呼びに来てくれたようだ。

桑原は秋人の腕を引くが、秋人は焦って桑原を引き止める。

秋人は烈に携帯を投げ渡してお礼を言う。

そうして桑原に引っ張られてチームのほうに戻って行った。

烈は、やれやれと頭をかきながらフィールドを見ている。

秋人に返された携帯をズボンのポケットに入れ、観客席をキョロキョロと見回した。

烈が探しているのは、他の誰でもない麻冬だ。

人目を避けるために烈は軽く走って人混みに身を紛らしながら麻冬がどこにいるかを探した。

そのうち麻冬の後ろ姿を見つけるが、麻冬は駆け足で帰って行った。

烈が声をかけようとしたけど、人混みのせいで声をかけることができずにそのうち見失う。

だが麻冬は見ていた。

試合も、烈と秋人と阿笠とも全て。

next

第１６０話【ボール】

「分かっているんだな、月影」
「はい」
「肝に命じておけ。以上」

チームに戻った秋人は監督に叱られた。

勝手なプレーや試合を無視した言動をしたのだから当然だと言わんばかりに秋人はきっちり受け止めた。

監督はみんなの前で秋人を叱り、その後プレーのことやこれからのことについてなどの話をした。

そして監督から解散と言われて解散がいなくなると、秋人はみんなを呼び止めた。

疲れた疲れたと伸びをしている久野や、汗をタオルで拭いている桑原を筆頭にみんな様々なことをしていたが、秋人の声にみんな振り向いた。

秋人は一瞬戸惑いの表情を見せたが、そんな迷いはすぐに打ち消すかのようにバッと頭を下げた。

「悪かった。勝手な行動、本当に申し訳ない。不満も文句も全て聞く」

秋人なりのけじめだ。

反対する選手を押さえてでも阿笠をマークすると豪語したのにこの有り様では秋人も自分を許せないのだろう。

秋人は日本のサッカーをする高校生の頂点にいる。

その重みを感じるときが今であり、ユニフォームについている日本の国旗のマークはそれを物語っている。

「ったく、一時はどうなるかと思ったぜ」

一番に口を開いたのは、やはり久野だった。

久野は可愛い顔に似合わず大きな口を開けて、頭の後ろで手を組みながら言う。

「しっかりしろよな。良い迷惑だぜ」

「ちょっ……く、久野！」

久野の厳しい言葉に周りにいた選手たちは驚く。
それでも久野は口を止めずにズバズバと言った。

「止められないって分かった上での作戦だろうが。阿笠にびびってんじゃねぇよ」
「……わりぃ」
「阿笠が怪我しなきゃお前ずっとあのままだった。そんなんじゃ選手として失格だな」

秋人は頭を上げれずにいる。

久野の言葉は的確すぎて辛いのかもしれない。

「でも、キャプテンはお前しかいないんだよ」

久野は頭の後ろで組むのをやめ、今度は胸の前で腕を組んでいる。

一際小柄で女の子みたいな顔の久野だが、誰よりも負けん気が強い。

思っていることは口に出すタイプの人間で、だからこそ愛嬌がある。

「秋人だからついてくんだ。他の奴じゃだめ」

秋人はその言葉にようやく頭を上げた。

久野はニッと笑いながら秋人に近づいていく。

そして、軽く拳で秋人の胸をポスッと殴った。

「1回や2回失敗したからって気にすんな。誰も秋人を責めちゃいない。なぁ？」

久野の問いかけに、周りにいた選手たちも賛同した。

秋人の醜態は全国選抜の醜態でもあり、世間に何て言われるかなんて分からない。

それでもみんな良いよと言ってくれている。

その優しさが今、どれだけ秋人を救っているかなんてきっとみんなには分からないだろう。

その後しばらくみんなで談話をしながら更衣室で着替えて、各自解散となった。

阿笠と一緒に帰ろうと秋人は静岡選抜チームの更衣室に立ち寄った。

そこには、阿笠を入れてもう数名しか残っておらず、阿笠は携帯をじっと見つめている。

阿笠の携帯には何件ものメールが入っていて、そのほとんどが友達からの試合の感想メールだ。

もちろん秋人のところにも届いていたが、秋人は全く読んでいない。

だがそれは阿笠も同じで、阿笠が読んでいたのは麻冬からのメールだった。

おめでとうという言葉と、先に帰ってますという言葉がかかれている。

可愛らしく絵文字や顔文字が使われているが、阿笠はそんなものに和まれなどしない。

麻冬が見にきてくれていることなど忘れ、阿笠は勝った直後に烈のもとへ駆けた。

烈を見つけたのは偶然だったけれど、阿笠は麻冬を探そうともしなかった。

勝てた喜びを親友に伝えたい気持ちも分かるけど、部活を休んでまで応援に来てくれたのにほっぽってしまったというその事実に阿笠は悔やんでいる。

「阿笠」

秋人は躊躇することなく更衣室に入って阿笠に話しかけた。

阿笠はその声にハッと現実に引き戻される。

「秋人。お疲れ様、もう帰る？」

「ああ。愛川は？」

「あ、烈は浜松での絵画の展覧会に行くって」
「まじか。さすがだな」

どうやら試合を見にきたのもそのついでのようだ。
いつもなら暇でも気が向かなければ応援なんて来ない。

……いや、今回は気が向いたのかもしれない。

阿笠と秋人の一世一代の試合だから見に行かなきゃと思ったかもしれない。

もし試合に負けたとき阿笠を慰められるのは、もし試合に勝てたとき一番褒めてあげられるのは自分しかいないから。

「じゃあ秋人、帰ろ」
「ああ。とりあえず病院寄ってったほうが良いな」
「んー、今日やってないから明日行く」
「そうか、日曜日か。じゃあ朝練来ない？」
「だね」

2人はそんな会話をしながら更衣室を出て行く。

外には2人を出待ちしている一般人やらがゴロゴロしているだろうから、2人はジャージを羽織らずTシャツだけ着て、いつものことながら帽子やメガネで軽く変装する。

そして裏からコソコソと出て行った。

その頃春樹はというと、なぜかスポーツ用品店にいた。

しかも見ているのはバドミントンのコーナーではなくバスケのコーナーだ。

部活用のウェアを見るわけでもシャトルやラケットを眺めるわけでもなく、春樹はバスケのボールを手に取って遊んでいる。

「おにーさん、これって高校男子の？」

春樹は近くにいた店員に話しかけた。

店員は春樹の持っていたボールを受け取り答える。

「そうですね」

「そっか。どーもです」

「3個以上買うと学生割引がききますが、部活でのお買い上げです

か？」
「ううん、秋人と遊ぼうと思って」
春樹は自然にそう言葉にしてしまうが、言ったあとにハッと気づいた。
秋人という名くらい普通にあるだろうし、別にそれが月影秋人だとバレる可能性は低い。
ただついさっきまであんなに白熱した試合を全国テレビに中継していたものだから警戒したのだろう。
「……櫻井春樹、さん？」
「うっ……」
「やっぱり！見ててそうかなって思ってたんですよ。でもバスケのとこにいるし、違うかなーなんて」
店員は目をキラキラ輝かせて熱弁している。
春樹自体はそこまで全国的に有名ではない。
まぁ近隣校やバドミントンをしている人なら普通に知っている、といったぐあいか。

「ラッキー！俺の彼女櫻井さんのファンでっ。良かったらサインくれません？」
「さ、サイン？俺の？」
「はい！あっ、どうしよ。ん～」

店員は回りをキョロキョロと見回している。

そして、隣のテニスのコーナーにあったテニスボールを1こ掴んでそれを春樹に手渡す。

彼女がテニス部だから、と言い加えて。

彼があまりにも嬉しそうに、少し照れたような顔をしてくるものだから春樹はつい顔が緩んだ。

彼女のファンに会えてラッキー、なんて普通は思えないだろう。

むしろ嫉妬したって仕方がないほどだが、これは彼が彼女を心底愛してるんだと思わざるをえない。

そう感じた春樹は快くボールに名前を書いた。

「あ、できたら舞へって書いてほしいっす」
「どういう字？」
「舞台の舞」
「おっけー」

春樹はしっかりと舞ちゃんへと書き、最後にはＦＩＧＨＴ！と綴っていた。

そのボールを店員に手渡すと、店員はものすごく嬉しそうに笑っている。

ボールと一緒に渡された油性ペンも彼に渡すと、彼はエプロンのポケットにボールとペンを入れた。

ボールを入れてるせいでポケットが不自然に膨らんでいるのが笑えてしまう。

「親友なんすよね、２人。羨ましいなぁ」
「はは、そっかな」
「ほら、阿笠くんの親友の……愛川くん？はスタジアムにいたじゃん」
「試合見てたの？」
「休憩中に。まぁ丁度終わったところだったんだけど」

どうやら彼はさっきの阿笠たちのやりとりを見ていたようだ。

というか、あの3人のやりとりがテレビに写っていたのか。

なんて恥ずかしい。

「阿笠には烈が来てくれたけど俺は行けなかったからさ、たぶん秋人すっごい俺に会いたがってるんだ」

春樹は人懐っこい笑顔でそう言うが、その言葉は本音そのもの。

店員がそうなん?と笑いながら言うと、春樹は一瞬だけ真剣な顔を見せながら言った。

「俺が会いたいって思ってるから。たぶんね」

そうして春樹は店員にバイバイと手を振って、バスケのボールを1つ持ってレジへと向かって行った。

あまり騒がれたくないのか、春樹はフードをかぶって会計を済ませたあと外に出る。

見上げた空は、なおもキラキラ輝いていた。

next

第１６１話【恐れずに】

「んー。暇だなぁ」

春樹と秋人の試合を学校で携帯のワンセグで見たあと夏実は家へと帰宅した。

春樹と遊ぼうとしたけど、春樹は用事があると言っていたから仕方なくの直帰。

特に面白い番組もやっていなくて携帯をいじるのにも飽き、だからと言って部屋を掃除する気にもならない。

夏実はベッドに寝そべりながらゴロゴロしていた。

「ひーまー」

何もすることがなく夏実はそう言い続けている。

そこで夏実は部屋を出て同じ階の違う部屋をノックして応答がある前に勝手にドアを開けた。

「こーうすけっ」
「姉さん。だからさ、返事する前に開けるならノックの意味ないって」
「まぁまぁ良いじゃん」

ふと夏実が目をやると、部屋にはもう1人いる。

アイドルのように綺麗な顔をしている康介とは逆に、どっちかといえばカッコいい部類のごく普通の容姿に漆黒の髪をした少年だ。

「あーっ、たっくん！来てたんだ」
「お久しぶりっす。夏実さん」

たっくん、改め江戸川達哉は康介の親友である。

家にも何度か来ているため夏実とは顔馴染みだし、他の春樹たち3人も達哉のことは知っている。

「髪黒くしたんすね。初めて見ました」
「へへ。どう？」
「茶色も良かったけど黒も良いっすね」

達哉は思ったことをストレートに言ってくる。

裏表のない性格がウリで、まぁだから康介の親友なんてやってられるのだろう。

康介のような天然王子様と一緒にいたら疲れるだろうのに。

「あ、あたし邪魔？」
「えっ、俺は全然！なぁ康介」
「ん？まぁ達哉がそう言うなら」

達哉と言えば小学校時代から好きだった彼女に最近振られたばかりだという話だったが……

とりあえず2人の了承を得たところで夏実は座布団に腰を下ろした。

ふとテレビがついていることに気づき、夏実は2人に
「もしかしてサッカー見てた？」と尋ねた。

すると康介は少し気まずそうに逆に夏実に尋ねた。

「秋兄……大丈夫？」

夏実はそう聞かれても何と答えたら良いか迷っている。

春樹と一緒に試合を見ていたとき、春樹は阿笠が怪我したときには驚きもしていたが、秋人が阿笠をマークするのを止めたりフィールドに泣き伏せていたときは真剣な表情をしながら微動だにしていなかった。

なんでマーク止めたんだよとか、さっさと立ち上がれよ、という言葉を国民中が叫んでいても春樹は決して一言も言ったりしなかったのだ。

そんな春樹が隣にいるから夏実も言うに言えなくて、ただ黙って試合を見ていた。

点を決めたら一緒にはしゃいだし、阿笠に抜かれた瞬間はア～……と萎れていたが、あの時だけは。

「……春樹が何も言わないってことは平気なのよね」

「えっ？春兄が何って？」

夏実が呟くと康介が反応した。

だが夏実は、何でもないと言って首を横に振った。

「夏実さんは部活？か。麻冬さんって見に行ったのかな」
「あ、どうなんだろ？麻冬も部活はあったはずだけど」
「麻冬さんってやっぱ秋人さんと付き合ってるの？」

達哉が臆することなくそう言うと、康介は
「そりゃそうでしょ～」と笑いながら達哉の肩に手を置いた。

はたから見ればやはり2人が付き合ってるように見えるのか。

何も知らなければみんなそう思ってるかもしれない。

「麻冬は阿笠くんと付き合ってるよ」

だが夏実が否定すると、ほんの数秒間を開けてから2人は声を揃えて
「え？！」と言った。

夏実は予想通りの反応にも関わらずビクッとした。

阿笠たちが中学時代付き合っていたことを知っているのはそう多くはないし、何より麻冬が秋人と仲良いことを知っている。

「麻冬姉って秋兄が好きなんだと思ってた」

驚きの事実にポケーッとしながら康介は言う。

隣で達哉も勢いよくウンウンと頷いている。

夏実は2人のこの反応になぜかショックを受けていた。

麻冬が阿笠と付き合い始めた頃、何も知らない夏実は麻冬に良かったねと言った。

自分のことのようにとても喜んでいた。

まさか秋人を好きだったなんて夢にも思っていなかったのだろう。

そのとき秋人は、春樹は、そして麻冬はどんな気持ちだったのだろうか。

そう考えると夏実は恥ずかしさとともに憤りさえ感じる。

「やっぱり……そう見える？」

夏実は少しトーンの低い声でそう言う。

「んー、見えるっていうか麻冬さんいつも秋人さんを目で追ってたから」

「そうそう、それ。秋兄だって麻冬姉を見てたじゃんね」

夏実は無邪気に話す彼らの会話に衝撃を受けた。

麻冬の親友としていつも隣にいたのは自分だった。

なのに、みんな気づいているのに親友の自分が麻冬や秋人の気持ちを知らなかった。

近くにいたって何も見えていないし、鈍感だって言葉なんかでは済まされない。

「あたし……最低かも」

夏実は座布団の上で正座している腿の上に置いていた手をギュッと握りしめて拳にする。

ワナワナと震えながら、夏実はうつむいて言う。

「知らなかったじゃ済まされない……」

麻冬が秋人を好きなことを最近知ったけど、それでも麻冬が阿笠を選んでいるならそれで良いと思っていた。

秋人にちゃんと告白された上でそれでも阿笠と付き合いたいのなら、と、夏実は口出しをしてこなかった。

そんなわけないのに。

好きな人と付き合えることの喜びは夏実だって知っている。

例え愛されてなかったとしても先輩と付き合っていたときや春樹と付き合っている今夏実はとても幸せだ。

麻冬の言う、阿笠が好きだなんて言葉は信じられない。

そんなことくらいみんな分かっている。

けれど、言ったところでどうなる？

麻冬の決心を邪魔して怒らせて泣かせて、悩ませて……そしてその先にあるものは？

もしかしたらもう麻冬は恋をすることを拒否するかもしれないし、３人の関係が崩れたらもう麻冬は夏実を友達と思ってくれないかもしれない。

そう思えば思うほど、夏実は言えなかった。

「違う……知らなかったんじゃない。知ってた。知ってたの……」

夏実は目に涙を浮かべる。

夏実がうつむいてることと長い髪のおかげで涙が出ていることは康

介と達哉には知られていない。

けれど震えている体と声で、泣きそうなことには気づいている。

「あたしは……麻冬のしたいようにして欲しい。でも……」

でも、と2回繰り返したあと夏実は言葉に詰まる。

涙がポタッと腿に落ちていくのを2人は見逃さなかった。

それでも夏実は懸命に話そうとしている。

「あた……あたしは……麻冬に一番好きな人と幸せになってもらいたいよ…っ……」

鼻をすすりながら、夏実は手で顔を覆う。

夏実自身こんなに泣けるなんて思っていなかったし、康介たちも突然の夏実の涙に驚きと戸惑いを隠せずにいる。

だが、グスグスと一向に泣き止まない夏実を、親友を思って泣く夏実を康介は立ち膝になってギュッと抱きしめた。

「……こっ……」

夏実は顔から手を離して康介の行動に目を丸くする。

「姉さんが傷つかなくたって良いんだよ」

康介は片手を夏実の背中に置き、もう片手は後頭部やって夏実の頭を自分の胸に押し込める。

その手は春樹より大きく、そして優しく温かい。

「それでもそう思うんなら、怖がらずに麻冬姉に言えば良い」
「康介……でも」
「麻冬姉はそんなことくらいで姉さんを嫌ったりしない」

康介が夏実を抱きしめている傍らで達哉も言った。

「もし嫌われたって、夏実さんが幸せを願って言ったことなんだからきっといつか感謝するよ」

どうしてそう言い切れるのかと夏実は聞こうとしたが、康介と達哉が親友同士なことを思い出して聞くのをやめた。

もしかしたらに2人に似た体験があったかもしれないし、別になかったかもしれない。

けれど本音を言わないで何が親友だよ、と言われているようだった。

「大丈夫。姉さんの気持ちきっと伝わるから」

康介は夏実の頭をポンポンと優しく撫でた。

弟とその友達に慰められているなんて格好良いことではないが、それでも彼らは夏実に勇気をくれた。

結果を恐れずに突き進むことの大切さを教えてくれた。

「……うん」

夏実はしばらくの間康介の胸を借りた。

next

第１６２話【気づく心、隠される思い】

「うーす。月影」
「ちゃーっす」
「秋人よっす」

朝練を終えた秋人に、いつも通りみんなが声をかけていく。

部室を出てすぐの場所、玄関、靴箱、廊下、そして教室。

みんな変わりなく秋人に接している。

接しようとしている。

今朝の新聞には、やはりサッカーの試合が一面トップだった。

スポーツ新聞には試合終了後に阿笠が秋人の左手を掲げた瞬間の写真が載っていた。

だが他の新聞の中にはやはり、秋人を中傷するかのごとくフィールドに泣き伏せている写真が載っているものもあった。

覚悟の上だったとしても、それが全国民に見られるとは屈辱的過ぎて情けない。

いつもは新聞なんか見ずにさっさと朝練へ行く秋人だったが、今日ばかりは新聞を見てから来た。

ニュースでも昨日のことが報道されていて、コメンテーターに悪く言われている場面もある。

昨日帰ったあと家には茉李亜と一緒に佑亮もいたが、佑亮はお疲れ様とニコッと笑っていただけだった。

そして秋人の髪の毛をくしゃくしゃしながら、惜しかったな～あと1点！と言い、それ以上は何も言わなかった。

世間は何て言っているか分からないが、秋人のことを知ってい人は何も言わなかった。

優しさかもしれない。

でも、あえて何も言わないことも酷だ。

いっそのこと責められたほうが楽なことだってある。

慰めの言葉や優しい言葉だけが支えになるわけではない。

「ねぇ秋人、ほらっ」

秋人が教室に行き机にカバンを下ろすと、春樹が近づいてきて何やら紙と封筒を秋人に渡した。

「なんだ。……って、ああ。なるほど」

紙は賞状で、どうやら封筒は図書券が入っている。

「秋人ＭＶＰだったんだよ。表彰できなかったから、式のあと生徒会から渡されたんだ」

春樹は楽しそうに言う。

各部門での優勝クラスと個人ＭＶＰを決めることは毎年恒例のことで、喫茶部門ではやはり阿笠のクラスが優勝した。

喫茶だけで考えたら一番活躍したのは阿笠だろうけど、秋人もそれなりに客を集めた上ライブにゲスト出演してかなりの支持を得たこ

とから選ばれた。

図書券は5千円分と、まぁ嬉しいものだ。

「ラッキー。漫画でも買お」

「うはは。何でも買える券だったら新しいウェアでも買えたのにね」

そんな会話をしているところに夏実もやってきた。

夏実は秋人の隣の席だから躊躇せず席に座る。

「おは～」

秋人と春樹に手を軽く振ると、2人もあいさつをしてきた。

麻冬ももう席にいるけれど、音楽を聞きながらスケジュール帳を見ている。

別にスケジュールを確認したいわけでもないが、特にすることもないようだ。

ならば秋人たちのところに来れば良いものの、やはり気まずいのだろう。

秋人にさよなら宣言されて以来友達として接すれるよう頑張ってきてはいるが、麻冬はようやく知ってしまった。

心の中に秋人がまだ存在していたことを。

一昨日松平とプールで話したあと麻冬は家に帰ってからアルバムを開いて見ていた。

中学のときのアルバムや高校時代のまだ制作中のアルバムを見比べて、何度も何度も思い出し笑いをしては切なく思う。

阿笠との思い出はあまりに少なすぎて、写真にもそんなに残っていない。

けれど高校に入ってすぐ友達になった秋人との写真はかなりの数ある。

もちろん春樹や夏実も一緒に写ってたりはするけど、麻冬の目には秋人しか写っていない。

写真の多さなんて関係ないし、苦しみから言えば阿笠との恋のほうが大きい。

終わったはずの恋がようやく元に戻ったというのに、みんな余所見してばかり。

『……つじつま合わせ？』

麻冬は写真を見つめながらポツリと呟く。

ちょうど見ていたのは、去年の体育祭での麻冬と秋人のツーショットだ。

何かの競技で1位を取ったらしく秋人は1位の旗を持ちながら無愛想な顔をし、その隣で秋人の腕を組みながら笑ってピースしている麻冬がいる。

なんとも可愛らしい写真。

『どこが……？これで……つじつまなの？』

あの頃は腕を組んだって別にそこまで意識したりしていなかった。

秋人が夏実を好きなことを知っていたから。

ずっと、ずっと夏実を好きなままだったら良かったのに。

そうしたら心置きなく阿笠と付き合っていられたのに。

……違う。

そう思った時点で未練がありありなのだ。

諦める必要なんかなかった。

秋人を振る理由なんて何もなかった。

『……どうして？』

麻冬はその写真を抱き抱えながら震えていた。

阿笠を選んだのは、絶対幸せになれると思ったからだ。

昔阿笠といて幸せだったからきっと今も幸せになれると、そう思った。

悲しくも散った初恋を甦らせたところで余計悲しくなるだけなのに。

だってそこにはもう本物の愛などなかった。

秋人を好きになったのは確かにつじつま合わせだったかもしれない。

そうしなきゃ阿笠を忘れられないほど苦しかったのかもしれない。

けれど、夏実を好きな秋人に嫉妬して、自分を好きだと言った秋人を振るのにとても傷ついて、離れていく秋人に言葉をなくして、もう側にいられないと実感したときに泣いた麻冬の行動は、つじつまの偽物の恋なんかではなかった。

つじつまなんてものはきっかけにすぎない。

結局阿笠の存在を一時でも忘れられたくらい、秋人に溺れていた。

全て麻冬が秋人を好きだという揺るぎない事実。

『……ばかだね、あたし』

麻冬からヒラリと写真が落ちる。

麻冬はカーペットに手をつけて、うつむいた。

大きな瞳に溢れんばかりの涙を溜めながら、失笑している。

『愛してないなんて……嘘じゃない。どうして気づかなかったん……気づこうとしなかったんだろう……』

阿笠が自分を信じられないことは当たり前だと麻冬は心底自分を責めた。

どんなに酷いことを言われても仕方ないと、受け入れた。

だがこんな気持ちで阿笠の前にも秋人の前にも行くわけにもいかず、せっかく試合を観に行ったのに2人に会わずに帰って来た。

秋人は麻冬がいたことすら知らないだろう。

彼氏がいる静岡選抜チームと、思い人がいる全国選抜チーム

どちらも応援することができなかった。

秋人をまだ好きだと自覚したところで、麻冬はまた阿笠を選ぶかもしれない。

決して阿笠を嫌いなわけではない。

怪我を顧みず秋人をカバった阿笠を頼もしく思えたし、秋人に手を差し伸べているその姿はとても好きだと思った。

選びようがなく、麻冬は逃げるようにして帰ったのだ。

どうにもできないのなら、そのまま阿笠と付き合っていたほうが楽だろう。

阿笠にありったけの愛情をもらって一緒にいればいつか忘れられるかもしれない。

でも、本当に？

どんなに阿笠を好きだと思っても秋人に会えばまた気持ちが戻る可能性のほうが大きい。

ならば、秋人を追いかけたほうが賢明だ。

けれど秋人はもうただの友達で、阿笠から離れることだってできない。

それって同情？

ふとそんな声が聞こえてきた気がした。

麻冬が阿笠を選んでいるのは阿笠を振れないからだ。

秋人は振れたのになぜ阿笠を振ることができないのか。

阿笠なら何度振ってもきっと追いかけてくれる。

全身全霊で麻冬を愛してくれているだろう。

そう思っても、やっぱり秋人より阿笠を選んだ。

「……冬。麻冬」

麻冬が昨日のことを思い出しながらボーッとしていると、誰かが麻冬に声をかけた。

その声で現実に引き戻された麻冬は顔を上げる。

「夏実」

夏実は麻冬の席の前に立ちながら、ブレザーのポケットに手を突っ込んでいる。

「もー。どうしたの？珍しくボーッとして」
「あ……ううん。なんでもないよ」
「そう？じゃあさ、今日のお昼あたしと一緒に食べよ」
「お昼？２人で？」

麻冬が不思議そうに聞き返すと、夏実は軽く笑いながら

「久しぶりに」と言った。

特に断る理由もないし、昨日の……一昨日の今日で秋人にどんな顔をしたら良いのかも分からなかった麻冬は躊躇することなく承諾した。

春樹と秋人はなおも楽しそうに話をしていたが、すぐに鐘が鳴って夏実は席に戻り春樹も秋人の席から離れて行った。

ふと秋人と一瞬目が合ったけれど、麻冬は無意識に目を反らす。

そんな麻冬に秋人は、苦笑していた。

ｎｅｘｔ

第１６３話【先代キャプテン】

品行方正……とは言い難いが、成績もトップでサッカー部部長も務める秋人は教師にも評判は良い。

だから担任も他の教師も昨日のことは何も言わない。

職員室でコソコソと話しているくせに秋人が行くとコロッと態度を変える。

生徒だってそうだ。

ヒソヒソと話しているくせに秋人がいれば気を使う。

愛想笑いなんか必要ないのに、余計惨めになるだけなのに。

「あ。秋人」

昼休み、秋人がラウンジの自販機に飲み物を買いに行こうとするとその途中で阿笠に出くわした。

阿笠はジュース2本持っているから、おそらくもう1本は烈のだろう。

「うす。肩……どうだった？」
「うん、脱臼まではいかなかったけど、とりあえず当分は軽くしかできないや」

阿笠はペロッと舌を出しながら言った。

「わりぃ……本当」
「えっ。秋人のせいじゃないって！うちのチームメートが秋人に突っ込んだんだから」

手を思いきり振りながら阿笠は否定している。

確かにあれは完全に静岡選抜チームの選手のせいだが、だからと言って阿笠が怪我する必要なんかなかった。

「まぁさ、試合もまだないんだし気にしないで」
「ああ。さんきゅ」
「治療代は田丸に請求しとくから」

阿笠はそう冗談を言って教室へと戻って行く。

秋人も再びラウンジへ向かい、春樹と自分の分のジュースを買いに行った。

ラウンジは昼食を食べている生徒がたくさんいて賑わっている。

まだ秋人を見てコソコソ話をしている人もいるが、秋人は見てみぬふりをしている。

気にしていたらキリがないからだろうけど、気にせずにはいられない。

ショックを受けない人間なんていない。

試合に負けた上に写真まで載せられて、正気でいられるはずもない。

それでも秋人は、少なくとも自分を助けてくれた阿笠やその親友の烈、夏実や春樹がいてくれるから来た。

支えてくれる人がいるということはこんなにも頼もしい。

「おー。誰かと思えば月影じゃん」

秋人が自販機の前で何を飲もうか悩んでいると、誰かが秋人に話しかけてきた。

秋人が振り返ると、いわゆる不良と呼ばれる学生が数人立っていた。

「ああ、高松先輩たち。どーも」

3年生らしく、彼らは髪の毛が金だったりピアスをつけていたりと人相も悪く服装も悪い。

まぁ、烈も髪が赤いしピアスをつけているし、制服もたいして着てこないけれど。

「見たぜぇ、新聞。有名になったもんだな」

「はぁ」

「フィールドに泣き伏す月影くん、ってね。スポーツマンが聞いて呆れるぜ」

3年たちはクックとバカにしたように笑っている。

3年には不良系が1割くらいいるため、秋人や春樹たちはからまれやすい。

相手にしないのが一番だと分かっている秋人は、適当に返事をして自販機でジュースを2本買った。

結局コーラとウーロン茶だ。

だがまぁそんなすました秋人の態度が気に入らないのだろう、更に突っかかってくる。

「おいおい、もっと話そうぜ」
「暇じゃないんで」

秋人はスタスタと歩くが、彼らも便乗している。

「お前さー、なんだかんだ言って阿笠抜かせないのな」
「わはは。それ言っちゃ可哀想だって」
「なんだっけ、カリスマ?所詮カリスマだけじゃ天才にゃ勝てないってわけじゃん?」

高松たちはゲラゲラ笑いながら秋人をバカにしている。

秋人はもはや無視しているが、あまりにしつこく言ってくるものだから立ち止まって彼らを睨み付ける。

高松たちに秋人がからまれているのを周りの生徒たちは息を飲みながら見ていた。

みんな高松たちとはからみたくないと思っているから助けようにも助けられないのだろう。

秋人みたいな有名人相手なら簡単には殴れないが、他の一般人相手なら奴らはいくらでも暴行するだろう。

それを恐れているから何もできないのだ。

「しかも試合まで負けちゃってさ～」

「阿笠がいるからうちのサッカー部強いだけっしょ。にゃはは」

「言えてるー。阿笠いなきゃ糞だよなぁ」

これだけ言われても秋人は何も言い返さない。

そんなことないと反撃すれば良いのに、きっと言えないのだろう。
こいつらが怖いからとかそういうわけではなく、そんなことないと言い切れないのだ。

「あ、そーそー。そんでもって阿笠に怪我させたって？」
「げ、まじ？」
「お前テレビ見てねぇの？こいつカバったせいで肩怪我してんだよ」
「うへー。試合勝つわ月影カバうわでヒーローだな」
「なぁ。まぁ阿笠とかどうでも良いけど。あ、しかもさー文化祭もあいつのクラス優勝したよな」

なんて酷いことを言うのだろう。

春樹がいたらきっとカバってくれただろうけど、あいにくその春樹は今いない。

けれど秋人は春樹がいなくて良かったと思っている。

悪者だって、弱虫だって責めてくれなきゃ秋人は悲観ぶれないからだ。

癒されたところで事実が消えるわけではない。

お前が悪いんだと言ってくれなければ悲しみに朽ち果てられない。

悪者扱いされて被害者ぶることができないのはとても辛い。

そうしてくれるだけでいくらでも楽になれるというのに誰もそうしてくれないから、秋人は苦しまなきゃならない。

だから、今高松たちがこう言ってくれてることに少し安堵しているのも本当なのだ。

「……分かってるよ、そんなこと」

楽しそうに盛り上がっている高松たちに、秋人は少しうつむきながら呟いた。

は？と聞き返してきた彼らに、秋人は続けて言う。

「阿笠がいなきゃ何もできないことくらい分かってる。負けたのも阿笠怪我させたのも結局は俺の実力不足だから」

まさか秋人が肯定するとは思っていなかった3年生たちは少し驚いている。

いつも不自然なくらい堂々としてる秋人がこんな弱気なことを言うなんて全くの予想外だ。

秋人は内部から涙が込み上げてきそうになったが、必死に耐えた。

そしてその一途な目で高松を見据える。

「……でもみんな俺のこと責めてくれないから、正直そう言ってくれて助かる」

「つ…月影」

「ありがとう」

秋人はペコッと頭を下げて、ラウンジから出て行った。

高松たちは呆然としてもう追いかけはしない。

笑うわけでもキレるわけでもなく、初めて見る秋人に驚きを隠せずにいるのだ。

秋人も秋人で、ああやって面と向かって言ってくれる人がいたのにあまり晴れた顔をしていない。

「お、月影」
「部長」
「ははは。部長はお前だろ」

歩いている秋人のもとに星陵サッカー部先代キャプテンが近寄ってきた。

先代はパックのジュースをストローで飲みながら耳にイヤホンをつけて音楽を聞いているようだ。

「観たぜ、昨日の試合」
「あ……なら阿笠褒めてやってください。やっぱ敵いませんでした」

秋人はそう言いながら苦笑している。

「んなことねぇよ。お前だって頑張ってたじゃん」

先代キャプテンのお約束の言葉に秋人は一瞬顔をしかめた。

だが今度は矛盾にも先代は真逆のことを言った。

「とは言ってやんねぇ。抜けないからって阿笠のマークやめたお前は選手として失格だ」

「……はい」

「それでも星陵サッカー部の部長か？だめだと知ったら諦めろなんて教えた覚えはないぞ」

手厳しい先代の言葉に秋人は頭が上がらない。

正論なだけに何も言えないのは当然だろう。

けれどもっと言って欲しいとも思わなかった。

矛盾しているのは、秋人の複雑な気持ちだ。

「……とも言ってやんない」

けど、先代はトーンの低い声でそう言う。

秋人が頭を上げると、先代は真剣な顔つきをしている。

先代が引退するまで部活中にしょっちゅう見ていたサッカーの顔だ。

懐かしい半面、まだまだ自分は未熟だと思わされたようで秋人は萎縮する。

「お前は何て言われたい？どんな言葉なら満足する？」

「え……」

先代の意外な質問に秋人は戸惑っている。

先代は佑亮がいた時代から試合に出ている。

つまり、佑亮・先代・秋人と阿笠が同じフィールドにいた時期があったということだ。

けれど先代はそこまで注目されてこなかった。

最強と言われた佑亮の存在が大きく、自分の代になったらなったで秋人と阿笠の存在のほうが世間的には大きかった。

星陵サッカー部のキャプテンを務めているのにそこまで注目されないことも切ないが、先代はそれでも頑張った。

きっと、誰にも分からないほどの壮絶な壁を乗り越えてきた。

「優しい言葉もらって癒されたいのか、厳しい言葉で悲壮感ぶりたいのか、どっちだ」

「……」

「どっちも欲しいというなら俺がいくらでも言ってやる。でも、そんなことは何の意味もない」

あったのは栄光なんかではなく、苦しみばかりだった。

そんな先代だから言えることなのだろう。

努力していたから先代の真剣な顔をなおも尊敬する秋人がいるのだろう。

華やかでなくとも目立たなくとも、サッカーへの志は断固として曲げなかった男。

「悔しいんならその悔しさをバネに努力しろ。口でいくら嘆いても実にならない。考える前に動け」

先代はそう言って、再びジュースを飲み始めた。

秋人は少し視線を反らしながらしばらく黙っていたあと、小声で問う。

「……何すれば良いんすか。俺……」

先代のポジションは秋人と同じＭＦだった。

攻撃は阿笠に敵わない、守備も佑亮には敵わない。

そんな状況下にいても、決して弱音を吐かなかった。

弱音を吐いたところで天性のアスリートたちに追いつけるわけではないことを知っていたからだ。

「俺が言わなきゃ分からないか？月影」

今度はさっきまでの真剣の顔つきとは反対に、穏やかな表情をして口元は少し緩んでいる。

秋人はその顔を見て、頭を少し下げてうつむく。

「いえ……」

そう答えた秋人の声は微かに震えていた。

秋人は必死に指で涙を拭き取ろうとしているが、感極まっているせいでなかなか止まらない。

「周りの声は気にするな。月影の思うようにやれば、それで良いんだ」

先代は秋人の頭に手をポンと置いた。

先代だけは、佑亮を除いて先代だけは秋人や阿笠にも他の選手同様厳しくしていた。

実力が劣っているとかそんなこと関係なく、いつだって部長として動いてきた。

秋人はそんな先代だから尊敬していたし付いていこうと思っていた。

きっと佑亮よりも秋人にとっては大切な部長。

「はい…っ……」

秋人はYシャツの袖で目を押さえながら、何度も返事をした。

next

第１６４話【守りたいもの】

「あっ、卵焼き！もらいっ」
「も～」

夏実と麻冬は屋上でご飯を食べている。

屋上は立ち入り禁止なのだがまぁ以前に春樹がやった手段を教わっていたのか、同じ行動をしたようだ。

つまり、夏実と麻冬しかいないということだ。

「で、どうしたの？」
「ん？」
「２人になりたいってことは何か話したいことがあったんじゃない？聞くわよ」

麻冬はモグモグとおかずを食べながらそう言う。

何か言うことがあるのはあなたでしょう、と夏実は心の中で思うがそうは言わない。

違う話から責めていくようにしたようだ。

「そういえば昨日部活行かなかったんだって？」
「え？あ、うん」
「もしかしてサッカー観に？」
「えへ。そうなのよ」

ペロッと舌を出しながら可愛い顔をしている。

そんな麻冬はとても愛しいけれど、今の夏実にはそう思う余裕はない。

その顔すら嘘ではないかとさえ思えてしまう。

「あたしもテレビで見たよ。すごかったね」
「ねぇ。1点差よ。ほんと接戦だった」
「惜しかったね」
「うん、惜しかった」

夏実の意味ありげな言葉に麻冬は何の疑問も持たずに同調した。

夏実は一瞬目を細めて、ズバッと麻冬に問いた。

「……応援していたのは秋人なのね？」
「――――えっ」
「阿笠くん応援してたなら、惜しかったなんて答えないよね」

夏実の的確な言葉に、麻冬はカァッと顔を赤くしながら口を手で押さえた。

麻冬の持っていた箸が屋上のコンクリートの上に落ちる。

夏実はお弁当をフキンの上に下ろして、麻冬を一直線に見つめる。

「……秋人の教室での告白はどうなった？確か文化祭までの期限だったよね」
「あ、れは……文化祭の前にもう終わらせたの」
「終わらせた？」
「秋人からもう止めるって言ってきたのよ。……だから、文化祭で秋人がライブするって宣伝もされたでしょ」

そんなことが聞きたかったのではない夏実は更に突っ込んだ。

「なんで？秋人が諦めたのは麻冬が阿笠くんを好きだから？」
「……」
「ねぇ麻冬、本当に阿笠くん好きなの？」

麻冬は口から手を離して、正座している腿の上に手を置く。

そしてうつむいてコンクリートを見つめ、夏実の質問に答えようとしない。

ため息をついて夏実が麻冬の肩に手を置くと、麻冬は一瞬だけビクッとした。

「責めたいんじゃないよ。本当の気持ち知りたいだけ」

言えない。

言えるわけない。

言ったらきっと軽蔑されるに違いない。

だから麻冬は、例え夏実にでも言えないでいる。

麻冬は切なそうな顔を見せないため決して顔を上げない。

そんな麻冬に夏実は優しく言った。

「愛されたいって言ったね。秋人も愛してくれてるでしょう？それとも秋人の愛じゃ足りない？」

「……そんなこと……」

「でしょ？」

夏実は麻冬の肩から手を離す。

すると自然と麻冬の顔も少し上がり夏実を見上げた。

ただ夏実はほんの少し微笑んでいるだけなのに、麻冬にはこれ以上ないくらい眩しく感じられている。

漆黒の髪が太陽に照らされて艶々しい。

その中にある親友の顔がとてもキラキラしていて、今にも気持ちが溢れ出そう。

夏実に抱き着いてしまいたい衝動にかられたけど、麻冬はグッと堪

える。

「良かったら聞かせてよ。麻冬が何を思って何を感じて、どんな気持ちなのか」

麻冬はまたしばらく顔を下げたけれど、お弁当も食べずにただずっと麻冬が話すのを待ってくれている夏実に、ついにポツリポツリと話し始めた。

「……阿笠を忘れられなくて、高校も阿笠一緒だって知って……忘れるために誰か好きにならなきゃって思った」

「……うん」

「阿笠と全く違うタイプの秋人を好きになれば未練もなくなる……って」

秋人にしたときと同じ話を今度は夏実にしている。

けれど決定的に違うことは、今はもうそんな最初のきっかけなんてどうでも良いくらい秋人を愛していたことに気づいたことだ。

阿笠を好きになろうと努力しても本当の気持ちには敵わないと知ったのだ。

人は、好きになろうとしてなるものではない。

確かに秋人を思い込みで好きになったかもしれない、だからこれから先そのまま阿笠を思い続けようとすれば同じように再び阿笠を好きになれるかもしれない。

でも、同じ過ちばかり繰り返して良いはずがない。

「結局……本気で好きになってた。阿笠と付き合えば嘘の恋も終わるって思ったけど……」

「……けど？」

「けど……そんなことはなかったよ」

麻冬は手で顔を覆う。

そのせいで声がこもってきこえるが、麻冬の必死の説明に夏実は耳を傾ける。

「大好き……。何度も振ったけど、何回も阿笠を選んだけど、いっぱい間違ったことしちゃったけど……あ、あたしは……」

途中麻冬は鼻をすする。

泣いているのか、それはよく分からないけど顔を覆っている手が僅かに震えているのは確かだ。

「あたしが愛してるのは……秋人なの」

阿笠を好きになるために秋人を忘れなきゃ

阿笠を好きになるために秋人を振らなきゃ

阿笠を不安にさせないために側にいなきゃ

阿笠を不安にさせないために好きだと言わなきゃ

そう思い込んでいたのは、いったいいつからだろう。

「なきゃ」という概念に囚われていたのは、なぜだろう。

不安がる阿笠を宥めようとしたのは、阿笠を守れるのは自分しかいないと思ったから。

硝子のように脆く繊細な阿笠の心を支えるのは自分でありたいと、そう思ったから。

でも、側にいたい、じゃなくて側にいてあげたいと思っていたことも事実。

「……それでもまだ阿笠くんを選ぶ？」

麻冬は顔から手を離してすぐさま指で涙を拭き取っている。

夏実はポケットに入れていたハンカチを麻冬に渡した。

「……ねぇ、麻冬？阿笠くんの側にいたいのはさ、どうして？」

「あ……阿笠を……」

麻冬は言葉に詰まる。

夏実に借りたハンカチで目頭を押さえて、声を押し殺しながら泣いている。

けれど、麻冬は夏実に伝えようと詰まりながも言った。

「守りたかっ…た……」

愛されたいと、守られたいと望んでいたはずの麻冬が出した結論は、愛して守ってあげてでも阿笠の側にいることだった。

幸せにすると言った阿笠を、逆に幸せにしてあげたいと思っていた。

自分のためならどんなことでもしてしまう阿笠を抱きしめたいと、そう思った。

「阿笠……側にいないとダメなの……。今度こそ……壊れちゃうよ」

「壊れちゃいそうなのは……麻冬じゃないの？」

「え……？」

麻冬はハンカチを少しズラして夏実の顔を見た。

涙のせいでボヤけて見えるけど、確かに真剣な顔をしている。

「阿笠くんには烈くんがいる。阿笠くんは大丈夫だよ」

「なにが……」

「振られてもきっと壊れたりしないで前に進むよ。いつまでも弱いままじゃないよ」

「そんなの分からな……」

「分かるよ」

夏実はスクッと立ち上がり、柵のほうに歩いて行く。

麻冬は夏実を目で追った。

軽く風が吹いて夏実の長い髪が揺れている。

夏実は柵に手をかけて、麻冬のほうを振り向いた。

「麻冬。阿笠くんも秋人も春樹も……あたしも、前進してるんだよ」

太陽が夏実を照らしていて、少し光って見える。

「変わってないのは麻冬だけなの。誰かが傷つくのを恐れて何もできずにいるのは麻冬だけなんだよ」

初めて聞かされる親友からの厳しい言葉。

麻冬は驚きつつも、夏実の言葉に納得している。

人を愛することを知らなかった秋人は、懸命に麻冬を愛した。

夏実を秋人に譲ろうとした春樹は、プライドを捨てて夏実を手に入れた。

好きな人がいると分かっていても夏実は諦めずに春樹を追いかけた。

同じ過ちを犯さないように阿笠は全身全霊をかけて麻冬の側にいると誓った。

ただ好きだと言う気持ちを持つだけでなく、更にその気持ちを活かそうとしてきた。

「……すぐに変わるのは無理だけどさ、でも変わろうとしなきゃ奇跡も起こらないよ」

「…奇跡……」

「あたしは麻冬がそれでも阿笠くんを守りたいって言うんならもう何も言わない」

両手に花だ、と言う人もいるし、さすが麻冬だと羨む人もいる。

けど、夏実は決してそんなことは思っていない。

一見強気な麻冬のその優しい心を知り、泣いてしまうようなか弱い子だと理解し、精一杯人を愛そうとしていることも知っているからだ。

中学時代、お姫様が愛したのは確かに優しい優しいサッカー少年だった。

けれど

「麻冬が守って欲しいと思ってるのは秋人だよね。阿笠くん以上に心の支えになってる」

今は、不器用でも一生懸命愛してくれる秋人という人を好きになったのだ。

太陽に照らされている夏実の眩しさに麻冬は目を反らす。

頑張って前に進んでる人たちはとても美しく、自分がかすんで見えてしまう。

「……あたしのために……秋人は離れたの」

「……」

「あたしが苦しんで……な…泣いてるのを見た秋人は……阿笠と幸せになれって……言ったの」

麻冬は正座している腿に涙をポトリと落とす。

ハンカチで拭きもせず、まるで溢れ出る涙に気づかないかのごとく。

「あたし……もう秋人のとこへは行けない。……行けないよぉっ……」

まさか秋人のほうからそんなことを言ったのだと思っていなかった夏実は目を見開いて、泣き伏す麻冬を見ている。

途中からライブに出ると決めた理由も、ライブでああ歌っていたこともそれならば理由が繋がる。

3人の間にどれほどの悩み、哀しみ、葛藤があったのかなんて誰にも分からない。

けれど、これだけは分かる。

みんな幸せになろうともがいていたということ。

「……本当に？」

阿笠は麻冬を愛しているから手放したくない。

秋人は麻冬を愛しているから離れて行った。

どちらも愛があるために取った行動だけど、そこには愛の違いが確かにある。

「秋人は……それでも麻冬を好きだよ。でもこのまま阿笠くんと付き合ってればもうイザコザはないかもしれない」

「……」

「でも、秋人を思ってまた泣くかもしれないよ」

夏実は麻冬に近寄る。

そしてしゃがみ込んで、泣いている麻冬をギュッと抱きしめた。

「未来は分からないけど……だからこそ今の気持ちを大切にしようよ」

抱きしめているその手は、阿笠のように大きく強くはないけれど、優しさやぬくもりがある。

大丈夫だよと教えてくれる。

穏やかな波のようだ。

そのとき、カッシャーン！と何やら音が響いた。

音の方向に2人が目をやると、ｉＰＯＤが落ちている。

どこから落ちてきたのか、そう思って夏実が上を見上げると屋上から鉄格子を少し昇った上にある壇上（以前秋人とケンカした春樹が寝ていた場所）に烈が寝転んでいた。

烈はやばいという顔をしながらも、とりあえず笑顔を作って手を振った。

「れっ……！」

next

第１６５話【激突】

「あー、落としちまった。平気かな」

烈はヒョイッと飛び降りてｉＰＯＤを拾い上げる。

さっき阿笠がジュース２本持っていたから一緒に教室で食べているはずではなかったのか。

「き……聞いてたの？」

泣き声で麻冬がそう尋ねると、烈は言った。

「もうじき阿笠来るよ。どうする？」

「えっ……」

「麻冬の気持ちくらい月影以外みんな知ってんよ。もちろん阿笠だって」

今日は青いコンタクトはしていないが、その一途で力強い瞳は人を惹き付ける何かがある。

麻冬は気まずいながらも烈から目を反らせない。

「……夏実ちゃんの言うようにいつまでも弱い阿笠じゃない。もう守ってもらわなくてもきっと1人で歩いていける」

烈は何やら音楽をピッピッと選択している。

そして肩にイヤホンの線をかけた。

「何でも1人で背負うのはあいつの悪いくせだけど、背負いながらも前を向き始めたんだ」

「烈くん……」

「言うならば……月影の誕生日の日、月影を選んで欲しかったよ」

麻冬はうつむく。

あの日の深夜阿笠にも同じようなことを言われた。

選ぶべきは阿笠ではなく秋人だったと。

「麻冬に振られて、……でもそっから立ち直るために頑張ろうって意気込んでたんだ。なのにお前は阿笠を選んだ」

「あのときは……」

「……あのときは自覚してなかった？なら、今は自覚してんだろ？」

赤い髪はキラキラ反射していて、夏実の漆黒の髪も艶々しく映える。

髪の毛が綺麗に見えるだけなのに、なぜこんなにもこの2人を遠く感じるのだろう。

その髪の毛と、一途で真剣な眼差しは麻冬を惨めにさせる。

可愛いと言われても高嶺の花と歌われても、彼らの真っ直ぐな瞳ほど美しいものはない。

過去をどうこう言っても仕方ないことなんて烈にも分かっている。

夏実も分かっていながらも黙って聞いている。

けど、麻冬が何か行動するためには必要な言葉だった。

「……あたし……ね、阿笠にだいぶ酷いことした」

麻冬はもう泣かないと決めたのかグッと耐えている。

泣かずに胸のうちを懸命に話そうとしている。

「阿笠……言った。阿笠があたしの隣にいるのは……あたしの言葉を信じたからじゃないって」

麻冬の声はかなり震えているが、夏実と烈は聞き取ろうと耳を傾けた。

時折鼻をすすりながらも、目頭が熱くなっても、麻冬は手に力を込めて涙腺を塞いでいる。

「お前なら大丈夫だ……っていう、烈くんの言葉を信じたんだ……って……言った」

一昨日のライブのあと、阿笠が放った言葉だ。

あのときの阿笠の言葉も表情も頭から焼き付いて離れない。

努力すると阿笠は笑っていたけれど、きっと麻冬が嘘をついている限り不安は隠せない。

いっそのこと嫌いになれたらどんなに幸せか。

「烈くんが頑張れって言うから頑張れたんだって……言ったの」

夏実は口を手で押さえながら傷ついた表情をしている。

そして烈は、情報通の烈でも知らない阿笠の本音に驚きを隠せず唖然としながら目を見開いている。

「……こんな俺でもまだ付き合いたいかって聞かれて……あたしは付き合いたいって……即答したのよ」

「……そこまで言われてんのに?麻冬のこと信用してないって言ってんだぞ?!」

烈は一歩身を乗り出して、そのはずみでトレーナーの前ポケットからチュッパチャップスが2こ落ちた。

お菓子大好きな烈が落ちたお菓子に目もくれずに、叫び続けた。

「そんなん愛情じゃねぇよ!……同情だ!!」

阿笠の幸せを願っていつだって励まし続けてきた烈。

そこまで自分を頼ってくれているのだと嬉しい反面、無理強いさせてるのかもしれないという焦りもある。

麻冬と付き合うことを夢見ていたけれど、ただ付き合えば良いってものではない。

愛がない付き合いなんて、付き合ってるとは言えない。

言えないのに……

「阿笠を……っ……バカにすんな！あいつがどれだけっ……」
「だから！……だから側にいたいのよ！！」
「っ……」
「阿笠の気持ちを無下にできないのよ！秋人を振ってでも一緒にいたいって……そう思ったから言ったの！」

麻冬の言っていることも分からなくはない。

同情とかそんなことではなくて、麻冬の身心で阿笠を守りたいと共に歩みたいと、そう願っているだけだ。

秋人との恋に夢見ていたことだってちゃんとある。

それでも阿笠と付き合っている今、自分が傷ついてもいくら泣いてでも、阿笠を支えたいと思っている。

「……いけないことなの？阿笠を選んだらダメなの？」

確かに秋人を愛していることは認めよう。

離れていったことでそう自覚したことは認めよう。

けれど、認めた上でそれでも阿笠が良いと言うのなら外野がどれだけ言っても意味はない。

「同情なの？あたしが阿笠を守りたいって気持ちは……同情なんかじゃないよ……」

そうして麻冬はまたポロポロと涙を流す。

目が腫れてしまうのではないかというくらい、まるで滝のように鎮まることはない。

「好きだもん……。あたし、優しいとこもいつも笑ってくれるとこも、サッカーやってるとこも全部……全部含めて好きだから」

秋人と阿笠どちらを愛しているかなんて秤にかけるわけにはいかないけれど、どちらが上かなんて関係ない。

愛してる。

愛してる。

秋人を、地球上の誰よりも愛している。

「麻冬……」

夏実は悲しそうに麻冬の名前を呼ぶ。

夏実が思っていたほど簡単なことではなかった。

昨日夏実が泣いた涙など何の意味もなかった。

秋人を好きなんだか阿笠と別れて秋人と付き合えば良いなんて、そんな安易なものではなかった。

ごめん……と心の中で呟きながら、夏実は自分を責める。

「……分かんねぇ……」

烈はギリッと歯軋りをして、悔しそうに言う。

「そうまでして阿笠を選ぶ理由が分からない。……ライブで阿笠の目の前で泣いたのは何なんだ」

「あれ、は……」

「無神経なことしておきながらそれでも側にいたいって？良いか麻冬、阿笠を一番苦しめてるのが何か教えてやる」

烈は少しうつむいて、コンクリートを虚ろに見つめる。

特に意味はないのだが、麻冬の顔を直視できないのだろう。

「お前の優しさだよ。月影を好きなくせに阿笠を見捨てられないお前の優しさとかいう奴に一番悲しんでんだよ」
「れ、烈くん」

夏実が暴走する烈を止めようとしても、烈はおさまらない。

普段の烈は決してこんなことは言わない。

阿笠にだけ優しいとかそういうわけではなく、人の気持ちに敏感な分人が傷つくことは絶対に言わない。

言うとしても遠回しにやんわりとだけ。

「……阿笠は確かに月影のように割り切れない。だからこそこんな茶番はしちゃいけないんだ」

烈は怒っているわけではなく、悲しんでいるというようでもなくただただ悔しそうな表情だけを浮かべている。

中学のときからずっと隣で阿笠を見てきたのだから、きっと誰よりも一番阿笠を分かっている。

サッカーをしている阿笠も、幼少時代に見てきた。

分かっているつもりだった。

一番理解しているつもりだったのに、肝心なことを知らなかったことが悔しい。

「なら……あたしが阿笠を振って秋人と付き合ったとしたら、その先にあるものは何？」

「は？」

「阿笠に追いかけられてまた阿笠と付き合うんだったら……別に今と同じことなんじゃないの？」

麻冬はゆっくりと立ち上がってそう言った。

確かに、またそれで阿笠と付き合うことになるなら状況は変わらない。

むしろその仮定のほうが秋人にも失礼かもしれない。

……でも、失礼じゃないかもしれない。

「……あたしは阿笠の自己満に付き合うべきなの？そこにあたしの意思はないの？」

麻冬はまだ目に涙を浮かべながらも、必死に烈を見つめながらそう言う。

「秋人だって阿笠の自己満の道具なんかじゃない……。分かんない……みんなの言ってること、あたしには理解できない」

切なげな表情をしている麻冬に夏実は何も言えない。

一番好きな人と付き合いたいって思うのは、別に決まりごとではない。

普通かもしれないけど、じゃあその普通って何？

どこからが普通でどこからが普通ではないのか。

そんなの、ただの価値観の違いでしかない。

「ったく、人使い荒いぜ」

ふとそんな声がした。

3人がその声のほうを振り向いた瞬間、屋上のドアが開いた。

入ってきたのは阿笠だった。

next

第166話【ハレルヤ】

晴天下、待ち受けるのは壮大なる修羅場か。

それとも……

「あ……かさっ……聞いてたのか？」

阿笠が来ることは分かっていながらも、突然の阿笠の登場に驚きを隠せない烈。

麻冬や夏実も目を見開いて冷や汗をかいている。

「うん？」

阿笠は平然とそう答えながら烈に近づきジュースを手渡す。

呆然としながら烈はそれを受け取り、聞いてたのに何も言わないのか……？と言った。

だが阿笠は、耳についているイヤホンを外して予想外な言葉を発する。

「ごめん、何か言った？聞こえなかった」

阿笠はボリュームをかなり上げて音楽を聞いていたようで、さっきの返事も特に意味はないようだ。

外されたイヤホンから確かに音が漏れている。

「そ……か。……そっか！うん、なら良いや。阿笠、俺やっぱ教室で食いたいわ」
「えー？！」
「ちょー待ってて」

烈は鉄格子をかけ上がる。

そのとき、ハンカチで涙を拭いている麻冬に気づいて阿笠は駆け寄った。

「どうかした？！」
「……ううん。虫が目に入って痛いだけよ」
「虫？それは痛いね」

大丈夫？と阿笠は麻冬の顔を覗き込む。

純粋で無垢な阿笠に、どこか罪悪感を持つ。

烈は持ってきていた阿笠と自分のお昼ご飯を取って阿笠のところに帰ってきた。

せっかく来たのにと阿笠はプリプリしていたが、別に屋上にこだわりもないから烈に付いていく。

「じゃあねー。麻冬、夏実ちゃん」

阿笠は軽く笑いながら2人に手を振って屋上を出て行った。

屋上はシーンと静まる。

鼻をすする音だけが響き、夏実は空を見上げている。

青々しい空がずっと続く日々の中で、誰が幾度泣いたのだろう。

空はあんなにも清々しいのに、悲しく思う人がいるのはなぜだろう。

「……それでも笑ってくれてるの」

しばらくしてから、麻冬はそう呟いた。

夏実が何か言おうとする前に、麻冬は続けてボソボソと言う。

「阿笠、何度裏切っても笑ってくれるの……。もう裏切りたくない」

「麻冬……」

「ねぇ夏実。阿笠との未来ってあり得ないのかな」

もう泣き止んだのか、どこかすっきりした声。

麻冬の本音と意思表明を聞いて、あんなに麻冬が傷ついてでも好きな人と幸せになるべきだと説得しようとしていた気など失せてしまう。

幸せの押し付けをしても何の意味もないのだと理解したのか、夏実は否定しない。

「……未来は自分で作るものだから、分からないよ」

恋愛にはいろんな形があるのかもしれない。

そう理解しつつも、やはり最後には一番好きな人と幸せになりたいと思うに違いないとどこかで思っている夏実。

分かるはずない。

夏実は不器用だから麻冬のようなことはできない。

先輩と付き合っているときだって一直線だった。

「ただ、麻冬の泣くとこはもう見たくないよ」

夏実は手首につけていたオレンジ色のシュシュで髪の毛をポニーテールに結ぶ。

そうして広げてあるお弁当の前に再び座り込んで、麻冬を手招きした。

「ほら、食べよっ」

笑ってそう言う夏実につられて麻冬もまた座る。

そう、分かるはずない。

でも、分からなくて良い。

誰かのためにとか、そんな愛なんて知らなくて良い。

麻冬が悪いと責めているわけではないが、きっと夏実には麻冬と同じことはできないから。

だからきっと理解しようにもできないし、むしろしないほうが良い。

誰かに分かって欲しいなんて麻冬も思っていない。

それでも良いから側にいてあげたいと想う人がいる、ただそれだけ。

それだけなのだ――……。

「ふてくされるなって。阿笠」

烈は机の上で腕を組んで更にその上に顎を乗せて仏頂面をしている阿笠の頭を撫でる。

「う〜〜〜〜……だぁってさぁ」

阿笠は口を尖らせている。

廊下を歩くたび何かするたびに話しかけられて迷惑をしているようだ。

おめでとうの一言ならまだしも、秋人のこととか怪我のこととかまで言われるらしく怒っている。

秋人をバカにする言葉は許しがたいようだ。

ついさっき屋上から戻って来るときに阿笠はキレたばかり。

違うクラスの同級生たちに声をかけられたところまでは良かったのだが、奴らは秋人のことをケラケラ笑っていた。

『あいつも案外なっさけねぇのなぁ』

『ははは。本当だぜ。試合中にしかも全国放映で泣いちゃうんだし

な』

今にも怒り狂いそうな阿笠を心配そうに烈は隣で見ていた。

早く行こうぜ、と耳打ちした烈の言葉は届いておらず阿笠は眉を吊り上げている。

そんな2人の様子に全く気づかず彼らは話し続ける。

『月影よりお前が部長やったほうが良いんじゃね?』
『言えてるー。結局点取ってんのって阿笠のおかげだしな』
『あれだよ、知ってる?月影って雪原に公衆の面前で告ったんだぜ』
『知ってるー!まじうけるんですけど。雪原には阿笠がいるっつーに』

彼らはお腹を抱えながらヒーヒー笑っている。

何が面白いのかちっとも分からないが、パーフェクトボーイの欠点を見つけられたことが嬉しいのだろう。

だが阿笠にしてみれば全然笑える話ではない。

『……ざけんなよ！！』

阿笠は男子生徒の胸ぐらを掴みにかかろうとしたが、反射的に素早く烈が反応して後ろから脇に腕を入れて押さえた。

『阿笠！気にすんなっ！』

烈は珍しく必死に止めている。

いつもなら放っておいて好きにやらせているものの、今回ばかりは違った。

『秋人はうちの部長だ！秋人をバカにするのは許さねぇ！！』
『阿笠っ！』
『俺が点を取るのはＦＷだからだ！秋人と比べんな！！』

烈の止めも虚しく阿笠はかなりの大声で叫んでいる。

まさか阿笠が怒ると思っていなかった男子たちは唖然としている。

『……麻冬だって！俺と好きな奴かぶって何が悪い！！お前らに笑

う資格あんのか?!』
『な……なんでお前がそんなに怒んだよ?』
『友達だからだよ!!お前ら何も知らないくせに!!言いたい放題言いやがって!俺たちがどんなにっ……ふごっ!』

烈は我を忘れてキレている阿笠の口を手で塞ぐ。

はにふんらよ!!と微妙に言葉が濁った声で阿笠は抵抗する。

『阿笠、大丈夫だから。俺いるから』
『ひゃに言っへ……』

烈は阿笠の口を押さえたまま男子生徒たちをギロリと睨む。

普段愛嬌のある烈の睨む瞳に彼らは一瞬ビクッとする。

『おい、お前ら。調子に乗るなよ。二度と月影のこと言うな。阿笠のこともだ』

龍に包まれているかのように生徒たちは固まる。

阿笠は烈のその言葉を聞いて、もう反抗しようとも反論しようとも

しない。

黙って烈に口を塞がれたまま黙って横目で後ろにいる烈を見ている。

『噂してみろ。学校にいれなくさせてやる』

それだけだったけど、たったその言葉だけだったけれど烈の言葉には迫力があった。

身震いをした彼らは勢いよく頭をブンブンと上下に振る。

『他の奴らにも言っとけ。じゃあな』

烈は阿笠の口からは手を離したものの、首に手を回して引っ張って連れていく。

いたた、と声にならない声で阿笠は言うが、とりあえず烈についていく。

そうしてようやく教室にたどり着き、昼飯を食べ終えて今に至るというわけだ。

素行は悪くないが校則違反ばかりで風紀はもう黙認しているが、絵の才能やその性格から教師受けは良い。

生徒会とも繋がっているし学校のことで烈が知らないことはないくらいの情報通で、まぁつまり裏のボス的存在だ。

表を秋人や春樹や阿笠たちに例えるのなら。

そんな人間を敵に回してプラスになることは何もない。

そう知っている生徒たちは烈にだけは嫌われまいとしている部分もある。

「言わせとけば良いよ。全員に分かれなんて無理だし」

「うーん」

阿笠の頭を撫でているその手は優しく、愛しそうだ。

恋愛感情があるとかそんなわけではないのだが、烈は阿笠をこよなく愛している。

普段穏やかなところもお人好しなところも優しい性格も、やんちゃなところも無理ばかりするところも泣き虫で弱虫なところも全部含めて、阿笠という人間を愛している。

その手は、まるでガラスに触れているかのようだ。

「……烈は良いな」

「ん？」

「いろいろ分かってて……俺はガキみたいで。一緒にいると俺ばっかバカみたいで……」

「だから一緒にいるのは嫌？」

烈が優しくそう尋ねると、阿笠は上半身を勢いよく起こして烈の顔を見上げた。

その反動で阿笠の頭を撫でている烈の手が離れる。

「違うよ！俺っ、そういう意味で言ったんじゃ……」

「うん」

必死に誤解を解こうとする阿笠に、烈は微笑んだ。

「分かってるよ。良いじゃん、バカでもガキでも」
「うー……」
「そんな阿笠だから一緒にいるんだって。それに俺、阿笠が思ってるほどでもないよ」

よく中学の友達は一生だ、とか高校の友達との付き合いは長いとか言うけれど

それならば中学でも高校でも友達だったらその絆はもっと大きなものだということになる。

ましてや小学校のときから出会っていた。

「明日、どっか行こっか」
「どっか？どこでも良い？」
「良いよ。阿笠の好きなとこで」

きっと明日も晴れる。

next

第１６７話【背中】

「あれ、麻冬は？」

昼休み終了ギリギリに戻ってきた夏実に春樹が問いかけた。

麻冬と一緒に屋上へ行ったのに帰ってきたのは夏実だけだ。

「なんか気分悪いって」
「うっそ。大丈夫なの？」
「６限は出るんじゃないかな」

ふーん、と春樹が返事している側で秋人は会話を聞いている。

麻冬に振られサッカーすら負けて、正直秋人はかなり落ち込んでいる。

成績で勝ててたって何も嬉しくはない。

好きな人もサッカーも阿笠に取られることほど雪辱的なことはないだろう。

「……ねぇ秋人？」
「ん」
「俺ねぇ、バスケットボール買ったんだ。今日やろ！」
「今日？だって俺ら部活じゃん」
「部活のあとあと」

窓際で壁に寄りかかっている春樹と秋人を素通りして夏実は麻冬の席に向かい麻冬のお弁当箱を机上に置く。

そして自分の席に戻って次の授業の支度をし始めた。

「疲れてんじゃんよー。明日にしようぜぇ」
「やーだ。今日」

春樹はどうしても今日バスケをしたいらしく、しつこく言っている。

そのうち春樹に押され負けて、ついに秋人はため息をつきながら分かったと承諾した。

それにしても今日じゃなきゃだめな理由でもあるのだろうか。

確かに春樹は昨日買ったボールを今日学校に持ってきて部室のロッカーの中に入れている。

一体そもそもなぜバスケをやるというのか、本当謎である。

それはそうと、麻冬は今まだ屋上にいた。

とりあえず教師にはまだ鍵をすり替えていることはバレていないようで、少し肌寒い風を心地よく浴びている。

一度にたくさん泣いてしまったため目が少し腫れている。

だから教室に戻りたくなかったのだろう。

携帯と夏実に借りたハンカチだけを持ち、コンクリートに尻をつけて足を伸ばして座っている。

青々とした空はとても健やかで、その中を飛んでいる鳥はとても優雅だ。

あんな風に自由に飛べたら良いのに、なんて珍しく思ったりしている。

もし今、自由に飛んで良いのなら麻冬はどこへ行くだろう。

秋人のもとか阿笠のもとか、それとも新たな出会いでも探しに行くのか。

この世の中には数えきれないほどの男がいるというのに、麻冬には彼らしか見えていなくてとても閉鎖的だ。

……いや、恋をすればみんなそうなるものかもしれない。

人を好きになったら付き合わなければいけないなんて法則はないのに、どうしてみんな付き合うのだろう。

そんな固定概念のせいでこんなにも蝕れているのに。

「……アメリカ、ね」

麻冬は届くはずのない空に向かって手を伸ばす。

かつて秋人がいた国、秋人が育った国。

もし何も障害がなかったら秋人は今、世界中をアッと言わせるような実業家になっていたんだろう。

本来ならば中３の年齢でもう社会に出てその名を轟かせていたのだろう。

天才少年とテレビで取り上げられて、麻冬はそれを何てことのない顔をしながら見ていたことだろう。

そう、本来ならば出会うことなんてなかった。

秋人がこうして高校生をやっていることは奇跡なのだから。

その天才児がサッカーやることも、麻冬に惚れたことも、麻冬が惚れたことも全て奇跡だったのだ。

秋人がいなかったらいなかったで、麻冬は他の阿笠以外の人を好きになろうとしただろう。

なぜなら誰でも良かったのだから。

けれど、奇跡が度重なって今がある。

別に奇跡にすがりたいというわけではないけど、奇跡を運命と呼ばずに何と呼べば良いか。

奇跡は奇跡なんかではない。

はじめからそうなると定められた、運命なのだ。

「遠いなぁ……」

あたしに会いに日本に来てくれた、だなんて図々しいことは思わない。

でも、日本に来てあたしを選んでくれた。

好きじゃないと、愛してないと残酷な言葉を吐いても許してくれた。

阿笠と秋人に挟まれて苦しんでる自分を解放してくれた。

幸せになれと言ってくれた。

きっと、あんなに心の優しい人いない。

きっともう現れない。

あたしを包んでくれたその手が遠くに行ってしまっても、呼び止める権利はもうない。

愛する資格がない。

「……間違っててごめんね……秋人…」

麻冬は空を見上げながら涙ぐんでいる。

青空がボヤけて見えるけど、それでもやはり青かった。

麻冬が何を思って何を感じて何に泣いても、空は変わらない。

「やっぱり……阿笠なのかなぁ。それでも阿笠……なの？」

自分の意思で阿笠を選んできた麻冬だったが、ことごとくみんなから反論されて実際揺らいでいる。

それでもきっと、もう秋人のもとへは行けないという気持ちのほうが大きいのだろう。

みんなが言うように、秋人とくっつくのが正解なのかもしれない。

そうすれば阿笠も麻冬もお互いに秋人の存在にビクビクしなくてすむ。

じゃあ、阿笠は？

ああ……、みんなどんな思いでこの空を見上げているのだろう。

「……秋人！これっ」

「あ？……ああ、それか」

放課後になり阿笠が部室へ向かうと、先に秋人が来ていた。

開いた秋人のカバンから何やら無数の紙が飛び出していて、軽く覗いてみたら仰天した。

「誰がこんなことっ……」

阿笠はその紙をグシャッと握りしめる。

それは2チャンネルで叩かれた秋人への残酷な言葉をコピーしたものや、ペンで汚く
「負け犬」と走り書きされたものだった。

酷いことをする。

別に秋人に悪意を持ってやったわけではなく面白半分なのだろうけど、こんなことして傷つかない人間なんていない。

「良いよ。別に」
「秋人！」
「本当のことだから」

秋人は平然とそう言いながら着替えている。

だがその声には嫌味も皮肉も込められていない。

とても清々しく言うんだ。

「……なんで？」

阿笠はグシャグシャに握りしめた紙を開いて、それに書かれている文を見る。

２チャンネラーは的確かつ残酷な言葉を吐き、秋人を庇う発言をした人には容赦なく潰しにかかっている。

阿笠に何１つ勝てない敗者、と書かれた紙を見て阿笠はワナワナと震えながらもう一度秋人に問う。

「なんで……？なんで気にせずにいられる？」

「阿笠」

「俺が秋人と戦いたいなんて言わなきゃ……俺が秋人を庇わなきゃ秋人はこんなこと言われずにすんだんだ」

目頭が熱くなる。

確かに最初にお互い別チームになりたいと言ったのは阿笠のほうだった。

「庇わなきゃ良かった？」

「そんなことはっ……！」

秋人の言葉に阿笠が勢いよく顔を上げると、秋人は予想外にも穏やかに少しだけ笑っている。

「秋人……」

驚いた阿笠は無駄に秋人の名を発する。

着替え終わった秋人はスパイクの紐を縛り直す。

キュッと固く結んで、もう片方も同じようにしている。

唖然としたまま阿笠が秋人を見ているうちに秋人は支度を終えた。

まだ支度をしていない阿笠に、はやく行こうぜと声をかける。

その声で阿笠はハッと我に返った。

「あっ……お、俺……」

阿笠自身何が言いたいのか分からずに言葉に詰まる。

「……言われなきことじゃないんだ」

そんな阿笠に、秋人は言う。

「ここに書いてあるのはたぶん全部本当のことだから。俺はそれを受け入れなきゃなんない」

「で、でも！」

「……それを背負って更なる頂を目指すんだ」

そう言った秋人の瞳はとても真っ直ぐで、真剣なんだと伝わってきた。

その瞳は何を見据えているのか、とても美しい。

「……ありがとな。昼間、怒ってくれて」
「え？」
「お前と友達で良かった」

少しだけ笑いながらそう言って、秋人は部室を出て行った。

取り残された阿笠は、昼休みの出来事を思い出す。

秋人を悪く言った奴らに阿笠がキレたときに言った言葉を思い浮かべてみた。

まさか秋人があれを聞いていたなんて。

「……やっぱライバルだ。うん」

阿笠はポツリと呟いた。

「や……やっぱ目標かも。……一生敵いそうにないや」

完全に麻冬から離れると決めて、けど麻冬を思ってキセキを歌って

いたのに、唯一の繋であるサッカーさえも負けてしまってこんなに嫌がらせされているのに

それでも前を向いて歩くと言うんだね。

弱い自分は捨てて悔しさをバネに進もうとしているんだね。

あの真っ直ぐな瞳は俺ではなく、はるか遠くを見つめているように感じた。

自分を信じて、前へ進んで行くのか。

阿笠にお礼を言って去って行ったその背中はとても頼もしく、そしてユニフォームがすごく似合っていた。

やっぱり君はサッカーをするために生まれてきたんだ。

俺は天才なんて言われてるけど、そんなんじゃない。

ただいろんな技をして相手をおちょくるものだから、そう見えてしまうだけだ。

本当の天才は俺ではなく秋人なのだ。

サッカーの才能の神様に愛された天才は、やはり秋人なのだ――

……。

next

第１６８話【キラキラ１００％】

「ああ……なるほどな。来たかったのってここか」

翌日の放課後、学校が終わってから2人がやってきたのは阿笠の家から徒歩２０分くらいのところにある墓地だ。

「……本当は麻冬と来ようと思ってたんだ」
「つかさちゃんに麻冬を紹介？ならそうすれば良かったのに」
「試合に勝ったらって思ったんだけど、」
「勝ったろ？」

見渡す限りの墓の中を2人は歩きながら話している。

ちらほら綺麗な花が置いてあったりしているが、阿笠は花を持ってきていない。

「負けた、って思ったから」
「なんで？」
「うん。サッカーじゃ勝ったけどね」

阿笠は答えにならない答えを言って、猫みたいに可愛らしく舌をベッと出す。

そのうち阿笠はある墓の前で立ち止まった。

氷野家と書かれた墓石は、手入れがされていてとても綺麗。

だが線香置き場の前には墓場には似合わずリンゴのジュースの缶が置いてある。

阿笠はそれを拾い上げた。

「強くなったね。秋人は」

「んぁ？」

「男の俺から見ても格好良いって思ったんだ。……麻冬が惚れるわけだなぁ」

「阿笠」

いきなり何を言い出すのかと烈は戸惑いの表情を浮かべる。

だが阿笠はそんな烈をよそに、淡々と語っている。

「……守ってもらわなくても立っていたいんだ、俺だって」

少し真剣味のある声。

「麻冬はさ、俺を守りたいから側にいてくれる。幸せにするって約束したのは俺なのに」
「そんなこと……」
「なくはないだろ？」

阿笠はさっき拾ったジュースを阿笠に渡した。

何？なんて聞いてきた烈に、飲もうと言う。

「はっ？！だってこれお供え物っ……」
「良いの。つかさちゃんリンゴジュース大好きなんだ」
「は、は？」
「ちゃんと買ったから平気」
「ああ……だからさっきリンゴジュース買ってたのか」

阿笠は自分の分にともう1つ拾い上げる。

そして缶の蓋を開けてグビッと飲み始めた。

つられて烈もリンゴジュースを飲んだ。

烈は2口くらいしか飲まなかったけど、阿笠は缶を丸ごと一気飲みだ。

飲み終えてプハッと息を漏らし、阿笠は持ってきたリンゴジュースをお供えした。

そうして墓前で手を合わせ、墓石を見つめながら言う。

「……つかさちゃん。約束は必ず守るね。絶対プロになってみせる」

小さい頃、あの瞬間に約束した言葉。

それだけのために血みどろになりながらボールを追いかけてきた。

「全国大会、優勝するから。いつか本当の意味で一番になれたとき、つかさちゃんのおかげだって胸張って言いたい」

「じゃあ、俺も」

すっと烈が阿笠の隣に立って同じように手を合わせて目をつぶる。

阿笠は烈に振り向いたが、烈は気にせず言った。

「つかさちゃんのために阿笠見守り続けるって誓う」

嬉しいやら照れくさいやらで阿笠はニヤけそうになるが、とりあえず堪える。

そんな顔を見られたくなくて、阿笠は視線をまた前に戻す。

「……烈」

阿笠は合わせていた手をおろして、上目で空を見上げた。

烈は阿笠を見て、ん？と聞き返す。

一呼吸置いてから阿笠はこう言った。

「麻冬と別れるよ」

空はどんより曇で、あと数十分したら雨が降りそうだ。

せめて晴れだったら良かったのに、と思うが阿笠は晴れてなくて良

かったと感じている。

これ以上の光はいらないのだと。

あまりに突然の言葉に、烈は返事をするのがワンテンポ遅れた。

「――――――はっ？！」

その声からは驚きを隠せない気持ちが溢れ出ている。

まさかそんなことを言われるなんて思ってなかったのだろう。

いや、誰も阿笠がそんなこと言うなんて予想もしなかった。

「麻冬はもう十分つくしてくれた。……そろそろ本当に幸せになっても良いんだ」

「っ……お前が幸せにすんだろ？！」

「でも麻冬が思ってるのは俺じゃないから」

阿笠は異様に落ち着いている。

いつもなら悲しそうに言うか猫みたく可愛くはぐらかすか、弱音を吐くかなのに

今は凛としていて、空を見つめるその目はとても澄んでいる。

「麻冬がもう俺を守る必要なんかない。ただそれだけ」
「阿笠、お前……」
「……麻冬が俺を蝕んでるんじゃないよ。俺が麻冬を蝕んでたんだ」

阿笠はチラリと烈を見た。

「お前……やっぱ昨日話聞いてて……」
「？いや、聞いてないけど……でも烈はきっとそう思ってただろ？」

阿笠大好きで阿笠を中心に考えている烈はおそらく阿笠が悪いなんて思わない。

思えないのだ。

阿笠はそれを知っている。

阿笠がこんなに苦しんでるのは麻冬がいるからであって、阿笠は何も悪くない……そう思い込んでいるのだ。

本当は阿笠が弱いから2人とも前へ進めないだけ。

「きっと麻冬は俺が何も言わなきゃずっと側にいてくれる。……惜しみない愛情で俺を支えてくれるんだ」

「……」

「だけど、麻冬が俺のために自分を犠牲にする必要なんかない……」

本当なら、過去の恋愛を甦らせるべきではなかった。

でもお互いまだ惹かれあっていたのも事実で、きっとそれはこれからのために必要な遠回りだった。

付き合ったことは決して無駄なんかではない。

切なく終えた初恋をどうにかしたいと、そう思って始まった二度目の恋。

初恋のことすら忘れてしまうくらい夢中だった。

「もう麻冬を追いかけない」

振られても振られても何度でも追いかけようって決めていた。

そうして本当の自分を愛してもらおうって思っていた。

けど、どんだけ愛しても麻冬はきっと秋人を思い続ける。

堂々としていて強気なあの背中を追い続けるのだろう。

「……烈、ごめん。でもありがとう」

烈は目を手で押さえている。

泣いてはいないだろうが、込み上げてくるいろんな思いを必死に堪えているのだろう。

「バカだよ……お前」
「そうかも」
「でも、……間違っちゃいない」

阿笠はまさか烈にそう言われるとは思ってなかったのか、え……と声にならない声を漏らした。

目を押さえてる烈をまじまじと見つめながら、
「本当に？」と聞き返した。

烈は目からそっと手を離して、軽くうつむいてるその顔の口元に笑みを浮かべる。

「……阿笠に無理強いさせてたんだな。俺」
「えっ」
「俺のせいで麻冬から離れらんなかった……？」

確かに口元は笑っているけれど、その表情は今にも泣きそうだ。

赤い髪をくしゃりと握りしめながら、鼻声で喋り続ける。

「余計なこと言わなきゃ阿笠、傷つかなくてすんだんだよな……」

阿笠は最初なんのことを言っているのか分からなかったが、すぐに気づいた。

あの文化祭のとき麻冬に話した会話だ。

もちろん烈はその場にはいなかったけど、情報通の烈に知らないことはないだろうと思ったのだろう。

「違う！そんなつもりで言ったんじゃないっ！」

「でも、」

「烈がいなきゃ頑張れなかったって、そう言ったんだ！」

阿笠は烈の両肩に手を置きながら必死に言う。

「そりゃ最初に背中押してくれたのは秋人だけど……でもっ、秋人がライバルになったときとか励ましてくれたのは烈じゃん！」

大事な親友に勘違いして傷ついてほしくないのだろう、阿笠は懸命だ。

確かに阿笠が傷ついたときいつでも側にいてくれたのは、まぎれもなく烈だった。

泣いてる阿笠に優しく手を差しのべて、言葉を失ってる阿笠を元気付けて、前を見れなくなった阿笠に光を与えたのは、すべて烈だったのだ。

「でも……もっとはやく別れてればこんなに……」
「それは違うよ。烈」

阿笠はそのままギュッと烈を抱きしめた。

はたから見れば男同士で抱きあっていて何とも奇妙だが、阿笠は気にせず烈を包む。

「阿か……」
「こうして傷ついて傷つけて、……後悔せずに別れたいって思えたのは今まで付き合ってきたからなんだ」
「……」
「中途半端に終わらせてたら絶対前へなんて進めなかった。……なくてはいけない日々だったんだよ、きっと」

阿笠の声が烈の心に響く。

まさか阿笠にこうして支えてもらえる日が来ようとは。

「だから、すっごい感謝してんだ。烈には」

阿笠は偽りのない笑顔でそう言ってみせた。

阿笠がこんなにも前向きな発言をして、そうして自分を抱きしめてくれる

それだけで烈は感極まっている。

優しくて弱い阿笠が、ようやく立ち上がろうとしている。

好きな人が幸せになるためにはどうすれば良いかを一人で考えて決断してきた。

今回もまた麻冬のために別れるのだけど、3年前とはまったく違う。

「烈がいてくれて良かった」

墓前で抱き合う2人。

でも絶対に涙は見せない。

その代わりに、どんより曇が広がる空の中に、太陽がチラリと顔を見せた。

next

第169話【届かない想い】

「よーし、じゃあ今日はここまで！」

バレー部の練習が終わり、夏実は空気を入れ替えるために体育館のドアを開けに向かう。

そのときドアの向こう側から聞き慣れた声が聞こえた。

夏実はドアに手をかけながら尋ねる。

「春樹と秋人？」

ドアを開けてみると確かにその2人がいた。

「あっ、お疲れ！」

「うーす」

壁に寄りかかりながらポケットに手を突っ込んでいる秋人と、ナイキのスポーツバッグの上に座っている春樹だ。

今日は火曜日だから2人は部活がない日なのに、こんな時間まで残っているとは。

「どうしたの？珍しいね。今日部活ないでしょ」
「うん。久しぶりに4人で遊びに行こうよ」
「遊び？」
「ボーリングとかカラオケとかさ」

春樹は楽しそうに提案する。

その横で秋人は眠たそうにあくびをしている。

4人で遊びに行くなんて久しぶりで楽しみなはずなのに、正直夏実は戸惑っている。

昨日の昼休み、屋上であんなことがあったばかりだ。

秋人はその場にいなかったけど、きっと麻冬にとっても気まずいに違いない。

困惑している夏実に、春樹は少し強調して言った。

「トモダチじゃん？遊びに行くの普通だよね」
「！」

春樹は表情こそは変えないものの、夏実の気持ちを読んでいることは確かだ。

だがまぁ昨日のことは知らないわけなのだが。

それでもその言葉は考えさせられるものだった。

「……何言ってんの？春樹」

秋人は不思議そうにそう言っている。

今更言わなくても当たり前だろ、というところか。

そう、当たり前なくらいに４人はもともと友達だった。

仲の良い４人組だった。

恋愛が混じってごちゃごちゃしてしまっているけれど、もとはそこから始まっていた。

「……そうだね。うん、行こうか！急いで着替えてきちゃうねっ」

「あいあーい」

夏実はまた体育館の中に戻り部室へと駆けて行った。

ネットを片していた1年たちが2人がドアのところにいるのを気づき、

「櫻井先輩と月影先輩だ～」と小声で嬉しそうに言っている。

やはり2人は人気がある。

ヒソヒソ言っているが、それは秋人に対する悪口などでは決してない。

同じスポーツマンとして言えるはずがないからだ。

昨日よりはだいぶマシにはなってきたが、それでも学校だけでなく道でも指を差され店に行けばコソコソ話をされる。

いつも歓声を上げてくれた人たちでさえそっち側につく人だっている。

仕方のないことかもしれないけど、やはり切ない。

「……春樹」

夏実がいなくなってまた2人きりになる。

すると秋人が軽く目をこすってから春樹に話しかけた。

「ん？」

「昨日さ、部長に会ったんだ」

「部長？……ああ、1つ上のか」

「先輩に言われた。悔しいならそれをバネにして前へ進めって」

秋人を慰めようとしたり蔑もうとしたりする大勢の中でただ1人、先代だけは秋人の欲しい言葉をくれた。

どんなバッシングでも泣かなかった秋人だったが、先代の言葉に泣いた。

「……頑張るよ。俺、強くなるし前を向く」

「秋人」

優しさだけが癒しではない。

時には厳しい言葉を言っても良いのだ。

その中から得るもののほうがはるかに大きいのだから。

「部長～、外に月影先輩たちいますよ」

「え？」
「櫻井先輩と海野先輩も。部長を待ってるみたいです」
練習後、自主練をしていこうと思っていた麻冬に部員の1人がそう言った。
3人が待っていることなんて滅多にないし、しかも今日はサッカー部とバド部は休みだ。
いるはずがない。
そう思いながら麻冬は温水プール場の窓を開けてみた。
「みんな！」
すると本当にあの3人がいるのだから驚きだ。
水着のまま麻冬は窓から身を乗り出す。
温水プールは実質2階建ての高さがあるから麻冬がみんなを見下ろす形になる。

「おーっ。はやく来いよ」
「遊び行こうよ！」
「いっそげー！」

待ちくたびれていた3人も、麻冬の登場にテンションが上がっている。

麻冬は唖然としながら3人を見ている。

そんな麻冬に声をかけたのは夏実だ。

「はやくしないと置いてっちゃうぞー！今日はオールなんだからー！！」

部活のときにはポニーテールにしていた髪の毛は、春樹の暇つぶしにされていたのかサラサラに下ろされていて両耳らへんまで編み込みされている。

あれからも普通に4人は友達として接してきた。

いや、まるではれ物に触れるようにどこか境界線を張っていた。

ぎこちない雰囲気を出さないために必死に作り笑顔をして、何もなかった夏前のような関係は消え去っていた。

お互い好きな人がいても一歩を踏み出さなかったために保たれていた親友という名の形は、何をしても平気だった友情は微塵になった。

男と女なのだから仕方ないことなのだ。

恋愛感情が芽生えたらもう同じようにはできないことくらいみんな知っていた。

それでも仕方ないから、それでも良いからとみんな勇気を出してきた。

「みんな……」

気まずい思いをしてでも伝えたかったのだ。

振り絞った勇気は、泣くために生まれたものではない。

決して関係を壊したかったわけでもない。

「……すぐ行く！待ってて」

麻冬は窓を閉めて駆け足で更衣室へと向かう。

３人は麻冬が降りてくるまでそのまま待つことにした。

麻冬が急いでいると、同じく自主練しようとしていた松平が麻冬に声をかけてきた。

「あれ、雪原帰るん？」
「あっ、うん。なんか遊ぼうって言われて」
「へぇ。海野？」

松平は肩にかけているタオルで軽く顔を拭いている。

さっきまで泳いでいたのだから濡れているのだ。

「あと春樹と秋人もね」

「――――えっ」

松平は麻冬から放たれた言葉に一瞬ビクッとした。

ついこの前、誰もいない夜にここで松平は麻冬を慰めていた。

言うならば、松平がああ言ってくれたから麻冬もようやく本心に気づけたのだ。

守りたい人、と守って欲しかった人。

「……意外？」

麻冬は軽く苦笑しながらそう聞いてきた。

「あ、いや……」

「良いわよ。無理しなくて」

苦笑いしながらも麻冬がそう言うものだから、松平は気まずいながらも言った。

「や……えと、よく行けるなぁ、って」
「あたし？」
「他の３人も。ほら、だってさ、」
「……まぁ、そうよね」

麻冬は瞳を閉じておしとやかに言う。

麻冬自身よく行こうと思えたなと思っている。

けど、もし本当に阿笠だけを見るのならもう逃げるのはやめたい。

友達として付き合っていくなら、しっかり踏ん切りをつけなくちゃいけない。

彼氏は阿笠で秋人は友達

そう思わなくちゃいけない。

「……あたしね、何が正しいかとは分かんないの。でもとりあえず、今のままは良くない」
「雪原」
「だから行くの」

麻冬は軽く笑ってそう言う。

そして、じゃあまた明日と言って更衣室へと向かう。

残された松平はポツンと、麻冬の背中を見ていた。

「……わっかんねぇ」

もうプールには松平しか残っていない。

いつもなら阿笠のいない火曜日は一緒に自主練していたのだが、今夜はただ1人。

「結局……阿笠なのか？」

麻冬に恋い焦がれ、常に近い存在だった。

異性として見てもらうことはできなくとも、それでもせめて支えてあげる人間になりたいとそう決めていた。

でも、泣いてる麻冬を見て、自分だったら絶対に泣かせたりしないのにと思っていたことも事実。

阿笠よりも秋人よりも先に、一番最初に麻冬と出会って麻冬を好きになった。

なのに、告白することもできずにズルズルと仲間という関係だけを保ち続けている。

「なんで俺じゃだめなんだろう……」

だって、言えるわけがなかった。

麻冬が自分を好きではないことくらい知っているのに玉砕なんてしたくはなかった。

してしまったら、今の関係は成り立っていない。

麻冬のタイムが伸びないときスランプのとき、一番分かってあげられるのは同じ水泳選手である自分だけだった。

どうしたら良いかなんてアドバイス、阿笠たちにできるわけがない。

そう、だからせめてライバルでも良いから側にいたい。

確かにそう思っているのに、そう決めてるのに、やっぱり君が他の男と一緒にいるところを見ては、他の男のことで泣いてる君を見ては悲しくなるんだ。

ちくしょ……と軽く切なげに舌打ちしてから松平はプールに飛び込んだ。

松平が誰もいないプールに浮かんで天井を見上げているとき

麻冬たち４人はボーリング場でボーリングを楽しみ

烈の部屋で座って本を読んでいる烈の肩に頭を乗せながら阿笠はスヤスヤと眠っていた。

next

第１７０話【好敵手】

翌朝、珍しくテンションの高い阿笠が部室のドアを元気よく開けた。

「うーっす！」

「おーっす、阿笠」
「今日テンション高いな。何かあった？」

阿笠より先に着てもう着替え始めていた２年部員たちが阿笠に声をかける。

秋人も物珍しげに阿笠を見ている。

そんな秋人に気づきつつも阿笠は普通に話しかけた。

「おはよっ。秋人」
「おう……って、何？」
「ん？」
「やけにご機嫌じゃん」

阿笠はドサッとカバンを下ろし、んー……と歯切れの悪い返事をしながらロッカーを開ける。

昨日烈とあんな会話をしたものだから暗いだろうと思っていたが予想外にもかなり明るい。

別れると決めたことでスッキリしたのか吹っ切れたのか。

それとも弱さを見せないための虚勢か。

「……新たな門出？かな」

阿笠は軽く笑いながら言う。

「門出？」

「うん。前をね、見たいんですよ。俺も」

阿笠はロッカーに置いてあったジャージを取り出す。

怪我のせいであまり動けないため、上下ジャージと適当なTシャツを着て参加しているのだ。

「なんでまた？今のお前で十分なのに」

「ん～」

「特にサッカーやってるお前とか、すっげぇ前向き」

秋人はモゾモゾと着替えながら淡々と言う。

少し驚いた顔を阿笠は一瞬だけしたが、すぐにまた着替えを続けた。

「負けない心とか、諦めない精神とか。あと俺に手ぇ貸してくれたときなんて感動した」

「感動、」

「すっげぇ痛いはずなのに笑ってくれたじゃん。お前」

そうか、お互いがお互いを羨ましく思っているんだ。

確かに日曜日の試合では阿笠のほうが何倍もその前向きさは勝っていただろう。

だけどいくらサッカーだけそうであっても……と阿笠は思う。

逆に秋人はいくら恋愛面であんなに前向きになれてもサッカーがあれではダメだと思っている。

無い物ねだりしてると言ったら言い方が悪いかもしれないが、でもお互いに持っていないからお互いに惹かれ合うのだ。

「強いって、思った」

阿笠は練習着に着替え終わる。

まだ秋人は着替え終わっていなかったが、阿笠にそう言いながら軽く笑っていた。

その顔がなんだがむず痒くて歯がゆくて照れ臭くて切なくて、阿笠は秋人の脛を蹴った。

「っ――――――て、てめっ！」

阿笠は口を尖らせたかと思えば、イーッとしながらこう言って逃げた。

「お前なんか知るかー！」

褒めたつもりなのにいきなりキレるとは何とも意味不明で、秋人はポカンとしている。

「な……んだ、あいつ？」

脛はジンジンして痛むわ阿笠は訳が分からないわで、秋人は怒りを通り越して呆れている。

秋人は意味が分かっていないようだが、回りで2人の光景を見ていた2年部員たち数名がクスクスと笑っている。

それに気づいた秋人が彼らのほうを見ると、1人がこう言った。

「阿笠な、羨ましいんだよ。お前が」
「は？」

そうしてもう1人が続く。

「あれだなー。お互いにないもの持ってるからな、仕方ないんだろうな」
「ああ、それそれ。無い物ねだりっていうか、まぁ惹かれ合うんだろうな」
「憎いって思わないだけ2人とも可愛いよな」

秋人をよそに彼らはクスクス笑いながらそう話している。

まるで子どもの成長を見守っているような感じだ。

当の秋人本人だけが何も分かっていなく、秋人は
「なんなんだよ？」と聞き返す。

今部室には2年しかいなく、1年は支度をしている。

きっと1年なら秋人と同様分からないと言うんだろうけど、彼らは
1年半も2人を見てきている。

阿笠が秋人の背中を追いかけてることくらい
秋人が阿笠のプレーに見惚れてることくらい
1年のときから見ていれば分かることだ。

「目指してるお前にそんなこと言われて複雑なんだよ」

彼らの言葉は実に的確だ。

まさにその通り過ぎて何も弁解することはない。

秋人は意外なことを言われて押し黙る。

そんな秋人を見て、みんな穏やかな表情をしている。

2人がコンビでありながらライバルでもあることは周知の事実だ。

そして、秋人がここの部長であることもまた事実。

「中傷に立ち向かう秋人を尊敬してんだよ、あいつ」

そう言ったのはお調子者でエロバカな村松だ。

「阿笠ならきっと一発でやられてるよ。でもお前はそんな素振りも見せないだろ」

「……そんなことは、」

「あいつな、秋人のそういう強さに憧れてんだ」

普段お調子者なくせに、こういう場面では決してそんな雰囲気を見せない。

高みの見物というわけではないけど、間に入って仲介してくれるような人間なのだ。

みんな村松の言葉にウンウンと頷いている。

「憧れ？……憧れてんのは……俺だ」

秋人は悔しそうにそう言う。

「知ってんよ。だから言ったろ、惹かれ合ってんだって」

練習着に身を包んでいる村松がなんだか少しだけ大人に見えて頼もしく感じた。

彼もまた阿笠と同じＦＷで、県選抜に選ばれている。

２年の中にはもう１人県選抜に選ばれてる人がいて、１年の里田や木村を入れたら６人も選ばれてることになる。

まぁ秋人や阿笠は全国選抜に入っているから実質４人ということになる。

だが、日曜の試合に出たのはあの２人を除いて村松ただ１人だけだった。

「ライバル、ってことなんだろ」

村松は軽く笑いながら言った。

そう言って村松は秋人の肩をポンッと軽く叩いて部室を出て行った。

着替え終わった他の部員たちもゾロゾロと出ていき、秋人も追うようにして部室を後にした。

準備をし終えて2年を待っている1年がいる中、暇を持てあましてる阿笠はリフティングして遊んでいる。

秋人の登場でようやく朝練は開始された。

軽いウォーミングアップくらいは阿笠もするが、激しい運動は肩に響くため出来ない。

だから1年でボールを使って隅のほうでマークを避ける練習をしていたりする。

とりあえず高校サッカー界には阿笠を止められる人はいないのだが、この先はいくらでもいるだろう。

つかさから教わった、もしくはノートに載っていた技をいくつも多様してみたりと、はたから見ると楽しそうだ。

そんな阿笠に秋人は時折部員の指導をするように言う。

そういうことが苦手な阿笠も秋人の言葉には逆らえず、ある程度指導したらまた自分の練習をしたりする。

そうして秋人に怒られて再び指導に入るがまた勝手に自主練を始めたりして、その繰り返しなのだ。

「……ったくあいつは～っ」

秋人は練習しながらもチラチラと阿笠を気にしている。

「うはは。阿笠は可愛いよな、本当」

「可愛い？可愛くないの間違いだろ。俺の言うこと聞きやしねぇ」

ブツくさ言う秋人に中野はケラケラと笑う。

「可愛いじゃん。とりあえず一時言うこと聞いてるしよ」

「子どもかよ」

「子どもだねぇ。だから良いんじゃん」

阿笠じゃなかったらあんな自由は許されないだろう。
というか、他の部員が秋人に逆らえるはずもない。
秋人だって他の部員がこんなことしてたら運動場１０周走らせるくらいじゃ済まない。
「みんなあいつに甘いんだよ」
秋人は吐き捨てるように言う。
そんな秋人の頬をプニッと人差し指で刺しながら、中野はニヒヒと笑っている。
「自由を許してる部長はどこのどいつかな？」
「う……」
頬を突っつかれてる秋人は図星を指されて何も言えない。
そう、結局一番阿笠に甘いのは秋人だということ。

回りにいた部員たちも阿笠に、しょうがないなと笑っているが何だかんだで笑っていられるのは秋人が阿笠に強く言えないからだ。

「～～～～～～っ……阿笠！！」

中野のせいで顔を赤くした秋人が阿笠の名を叫ぶ。

遠くでボールを見事に操りながら、んー？なんて空返事をしている。

「来い！練習付き合え！」
「えーっ、またぁ？」
「またじゃねぇ！」

仁王立ちしてる秋人のもとへ阿笠は面倒くさそうに軽く駆けて行く。

なんだよー、と頬を膨らましながら阿笠はプンプンしている。

「お前はなー。良いか、サッカーってのはチームプレーなんだからもっと……って、おい！」

秋人が説教し始めたのに阿笠はそこらへんにいた部員に何やらプレ

ーを教えている。

秋人が最後まで聞け！と言うと阿笠は眉を八の字にしながら「え～」と言った。

「だって長くなりそうなんだもんー。分かったよ、教えれば良いんでしょ？」

「～～～～っ」

なかなか思い通りにならない阿笠に、秋人はもう半場諦めているようだ。

そんな光景を見ていた村松は腹を抱えてヒーヒー笑っているし、中野たちもブフッ！と吹いている。

漫才のような彼らだけど、実力が本物だからみんな付いていく。

そう、実力がある。

2人はそれぞれ役目が違うしタイプも違うけど、だからこそ一緒にいられる。

お互いがお互いを追いかけてるから成り立つ方程式。

きっとそれだけは一生変わらないのだろう。

好敵手と呼ばれた、その日から。

next

第１７１話【休み時間】

朝練を終えた夏実は大きなあくびをして目をこする。

「ふわあ……ねむ」

「寝不足か？ちゃんと寝ろよ。肌に良くねぇぞ」

「あんたね～！」

そう、昨日結局ボーリングしてカラオケして適当に酒を買って秋人のうちでオールしていたのだ。

だがまぁ秋人は酒すら飲む前にさっさと寝ていた。

他の３人は部屋主である秋人を差し置いてワイワイ賑わっていて、その上秋人の姉茉李亜と泊まりにきていた佑亮も加わり５人でドンチャン騒ぎだ。

うるささに耐えきれず起きたかと思えば、秋人は茉李亜の部屋へ行って寝ていた。

つまり寝不足じゃないのは秋人だけということになる。

「勝ち逃げばっかしてずるい！酔わせて吐かせてやろうと思ってたのにっ」
「あ？勝ち逃げ？」
「こっちは睡眠時間１時間もないのっ」

そうそう、ちなみにボーリングでは１ゲーム目に１８８を出し２ゲーム目に２０８を出した秋人の優勝で、カラオケでは適当な歌で９０点代を２回出して優勝している。

さすがというか何と言うか、やはり実に才能に溢れている。

「てことで授業中当てられたら起こしてね」

夏実は再びあくびをする。

だがそんな夏実に秋人は平然と言った。

「や、俺も寝てるだろうし無理だな」

こいつ……と頬を殴ってやりたいほどだ。

まぁ秋人なら確かに寝てるだろうし無理だろう。

寝てなくても絶対授業に集中なんかしていない。

これで天才児なんだから本当に羨ましい。

「春樹寝不足？クマできてっぞ」
「やー……寝不足より頭痛のがひどい」
「あ？風邪か？」

春樹も春樹で机に伏せてぐったりしている。
昨日泡盛なんて飲んでいたからだろう、二日酔いだ。

そんなんでよく朝練してこれたものだ。

「二日酔い……」
「ぶっ……お前はリーマンか！せめて休日に飲めっ」
「うぅ～」

これでは今日の授業はダメだろう。

だがそんな中麻冬だけは平気な顔してケロッとしている。

いつものように席に座ってファッション雑誌を楽しそうに読んでいる。

周りにいた女子と一緒になって雑誌を見てキャッキャ言っているくらいだ。

「ねぇ麻冬～、夏実とか春樹くん疲れてるね」
「ん？ああ、あたしたちオールで遊んでたのよ」
「えっ、麻冬は平気なの？」
「うん。朝泳いでみたら意外にスッキリしちゃって」

とまぁ、麻冬曰くそうらしい。

まぁお酒飲んで騒いでバカなことをしていたからいろいろ吹っ切れたのだろう。

身体は酒に参っていても精神的に楽になっただけの話。

これから割り切っていこうと思っているのだろうけど、まさか烈と阿笠が昨日あんな会話をしていたなんて露知らず。

また葛藤して悲しんで傷つくことになる。

阿笠だってそれを承知している。

秋人だって、麻冬がもう苦しまないようにと阿笠から奪おうとするのを止めた。

実は麻冬が秋人を好きなことくらい一緒にいれば見えてしまうものだ。

いくら麻冬が口で好きだと言っても偽りにしか聞こえないだろう。

だけど、自分のためではなく今度こそ本当に麻冬のために別れると決めた。

泣いて責められることくらい分かっているのに、それでも麻冬の本音を守ろうとしているのだ。

もう自分のもとへ戻ってこないように、次は本当に好きな人と本当に幸せになれるようにと願っているだけ。

何が正しいかなんて分からないし、もしかしたらそれで不幸せな未

来が待ってるかもしれない。

けれど、今の時点ではそれが最善策だった、ただそれだけ。

好きな人のためにしてあげられることだけを考えた結果。

例え自分が辛くとも、それでも良いと言えるその心は偽善に見えるかもしれない。

偽善だとしても、きっとそれが本当の恋。

もう、逃げない。

「目、冴えてるね」

「冴えてる？覚めてるんじゃなくて？」

授業と授業の合間の休み時間、ペロペロキャンディをなめている烈に阿笠が言った。

「うん。冴えてる」

阿笠は窓の縁に座っている。

誰かが阿笠を押したら一発で落ちてしまうだろうくらいの勢いだ。

「まぁ、今日だしな」

「え？」

昨日つかさのお墓参りをしたあと2人は烈の家に行った。

特に別に何をするでもなく、他愛のない話をしたり雑誌を読んだり寝転んだりと。

学生でいれるうちは、烈が日本にいるうちはできるだけ烈の側にいたいと思っている阿笠。

遊びにも行くけど、こうして気兼ねなく平日に家でまったりなんて到底できないだろう。

いつかは烈も日本に帰ってくるだろうけど。

烈も烈で、フランス行きよりも阿笠を選んだ以上阿笠と一緒にいたい。

こんな困ったちゃんな阿笠を1人にするなんて烈には心配で心配でたまらないけど、最近はそうでもないようだ。

烈が何かを言わなくても1人で立ち上がろうとしている。

それは烈にとってこれ以上ない喜びとなる。

「昨日さ～、秋人に怒られちゃった」
「なんで？」
「部員の指導しないで俺が勝手やってるから」
「ははは。そりゃ怒るだろ」
「あ、やっぱり？」

俺が笑うと、君はいつものように舌をベッと出して可愛らしい顔をするんだ。

「ちゃんと教えてやれよ。せっかくだし」
「え～」
「部員強くしなきゃ全国制覇できないぜ」

烈が冗談混じりに言うと、阿笠はヒラヒラした笑顔を見せた。

「きっと全国のスタジアムに連れてくからね。烈を」

本当は一緒にそのスタジアムでプレーしたかったよ、なんて言いたいところだけどそこはグッと堪えた。

きっと烈だってそう思っているに違いないから。

「スタジアム？全国に行ったくらいじゃつまんないだろ」

「ふふ」

「優勝トロフィーとかメダル、見せてよ」

「うん。頑張る」

へへ、と猫みたいに阿笠は笑っている。

最近は仮面が崩れてきてジェントルマンの姿が見えない。

正確に言えば、喜怒哀楽を自由に出せるようになった。

どこか偽ってばかりだった阿笠が人前でいろんな顔をできるようになったことは、とても嬉しいことだ。

別に偽ろうとしていたわけではないのだが、本音を隠してしまうのも性格なんだろうけど

それでも

「阿笠」

烈は縁に座りながら足をパタパタと上下に左右違うリズムで動かしていてとても危ないことをしている阿笠の名を呼ぶ。

阿笠は、なぁにー？と軽い返事をしながらもまだ足を動かしている。

「言うの？今日」

だが烈がそう言うと、阿笠はピタッと足を止める。

そして、背中を少し後ろに反らして空を見上げている。

「ちょっ……危な！」

阿笠の隣で窓に寄りかかっていた烈が、急いで阿笠の腕を掴んだ。

「今日は晴れかぁ」

そんな烈をよそに、阿笠は淡々と言う。

阿笠が見上げている空は、雲がほとんどない快晴と呼ばれる天候で、飛行機雲が浮かんでいる。

綺麗な青空を眺めながら、阿笠は「良い天気〜」と笑っている。

「あ、阿笠？」

謎な行動をしている阿笠に烈は困惑している。

掴んでいる腕を離して、阿笠の見上げている青空を烈も窓越しに見上げた。

「言うよ」

「え？」

「今日部活が終わったら麻冬に。……きっと星空が綺麗だから」

青空とか星空がどう関係しているのかはよく分からなかったが、烈は阿笠がそう言うと
「そっか」と頷いた。

阿笠にとっては麻冬に告白したあの日よりも一大事。

好きだと言うよりももっともっと勇気がいる。

3年前に別れを告げたときも勇気を出すのに一週間かかったけれど、今回はあのときの勇気と種類が違う。

自分に嘘はもうつかない。

歩みだす土台となる。

きっと、これからを生きていくための糧となる。

「……言い終えたら……」

阿笠は縁から降りる。

烈と視線を合わせて、少し泣きそうな、でもいつになく強い表情をした。

「そしたら、顔見に行っても良いですか」

その言葉は、頑張るよと言っているようだった。

烈の青いコンタクトが阿笠の顔を見つめる。

「待ってる」

すべては今夜、決まる。

next

第172話【ともだち】

案の定、春樹と夏実は午前の授業はずっと寝ていた。

揺すっても起きないバカップルに教師たちは呆れていた。

一緒に遊んでいたはずの麻冬はなおも普通にピンピンしていて、むしろいつもより元気なくらいだ。

いつもならシカトしてるのに数学の授業で挙手して発表したりしていた。

麻冬がそんななのに春樹も夏実も寝ているから、

「こらっ、起きろ！雪原を見習え！」なんて教師が2人に言っていたりする。

秋人も秋人で、あんだけ1人で寝ていたくせに予告通り本当に寝ていた。

『あー……肩こった』

ちょうど麻冬が発表を終えた直後は秋人は寝ていなくて、イヤホンつけて音楽を聞いていたわけだが、そう呟いた秋人は麻冬と目を合

わせてしまった。

『じゃあ、次の問は秋人』

ニッコリ微笑みながら麻冬はそう言う。

状況が把握できない秋人はキョロキョロしていたが、近くの生徒が説明をして泣く泣く秋人は席を立って黒板へ向かう。

『麻冬～、勘弁してよ』

そう言いながらも正解しているところはさすがだ。

教師に、正解だが授業は聞いてくれと頼まれている。

秋人はヘイヘイと空返事をして自分の席へと戻ろうとするが、何を思ったのか教師に尋ねた。

『せんせ、あと2問俺が指名しても良い？』

『お？おお』

『じゃあ櫻井くんと海野さんで』

秋人も麻冬同様ニッコリと微笑んで言った。

まぁ、そうなるよね。

『でもあいつら寝てて起きないぞ。月影』

『わ、やだな先生。俺んときは叩き起こすのに』

そう言って秋人は席へと戻る。

春樹の前の席にいた男子に春樹を起こすように言い、秋人は秋人で夏実を起こし始めた。

『おい、起きろ』

肩を揺すっても起きない夏実に秋人は頬を思いきりつねる。

痛みの声を上げてようやく夏実は起き上がった。

『あっ？え……何？』

挙動不審にキョロリと見回している夏実に、秋人は再びイヤホンを耳につけながら平然と言う。

『何じゃねぇし。当てられてんぞ、お前』
『嘘っ』
『はやくやってこいよ』
『えー！秋人助けてよぉ』
『俺も寝てたから答え知らね』

答えなんて問題を見ればすぐに分かるくせにしらじらない。

夏実は仕方なく黒板のほうへとトボトボ歩いて行く。

春樹のほうも、麻冬が直々に出向いて春樹の頬を2発くらいペチペチと叩いて起こした。

夏実と同じリアクションをとりながらも結局前へと出るはめになる。

席へ戻る麻冬と秋人が偶然目を合わし、お互いクスクスと笑っていた。

自然とそこに今までのような気まずさはない。

理系の春樹はとりあえず普通に解けているが、文系の夏実はなかなか手が進まない。

二日酔いで余分なことはあまり考えられない春樹は夏実の手助けをしてやる余裕などないようだ。

『先生ぇ～。何も今日指さなくてもー』

半泣きで教師にそう訴えた夏実に教師は手を振りながら否定した。

『俺じゃないぞ。お前ら指名したの月影だ』

『『え゛っ』』

教師がバラしたところで2人は一気に秋人を睨み付ける。

秋人は知らんぷりしているようだが、ここでまた1つ教師はネタをバラした。

『ちなみに月影も雪原に当てられたんだけどな』

『あー。先生それ言っちゃいます？』

教師の言葉に麻冬は笑ってそう言っていた。

『麻冬～！頼むよぉ』

春樹が頭を痛そうに抱えながら懇願している。
はたから見て二日酔いなのは確実だが誰も何も言わないところがさすがと言うか。

夏実も夏実で動きが鈍い脳を懸命に働かせようとしている。

『ふふっ。あんまり暇だったもんだから暇つぶしに。ね、秋人』
『おう。君たち授業中はちゃんと起きてなさい』
『やぁだ、秋人が言う？』
『今は起きてたぞ。聞いてなかっただけ』

席が離れてるにも関わらず、２人は楽しそうに会話している。

あれ、こんな光景どこかで見たことがある。

『威張るなっ。歌聞いてたくせにっ』
『櫻井くんさっさと着席したまえよ』
『ぬぁ～～～～！！』

ああ、そうだ。

夏休み前までは当たり前のようにあった光景だ。

普通の友達だったあの頃の日常だ。

授業中なのに他の生徒や教師を無視した行動。

勝手ばかりしていた彼ら。

懐かしい。

たった数ヶ月前のことなのに、こんなにも懐かしい。

４人が同じクラスになってからはこんな会話ばっかりしていたのに、いつから変わってしまったのだろう。

いつからあんなによそよそしくなったのだろう。

お互い顔を合わせないように気まずさをなくすようにとしていたのはなぜだろう。

恋なんてほとんど知らなかった彼ら。
春樹や秋人にいたってはようやく初恋をしたようなものだ。

一緒にいられることの意味、噛み締められた。

「あー。飛行機雲」

あまりに良い天気なもので、４人は中庭で昼食をとっている。
芝生の上に直に座ってお弁当を広げていて、まるでピクニックのようだ。

「良いな、俺もどっか行きたい」
「どっか？」
「グアムとかヨーロッパとかオーストリアとか」
「あはは、欲張り」

楽しくそんな他愛もない会話をしていると、麻冬はハッと思い出す。

そういえば前に試合に勝ったら連れていきたいところがあると阿笠に言われていたことを。

結局何なのかは分からなかったが、とりあえず阿笠は勝った。

「……どこかしら」

麻冬は小声でポツリと呟く。

話に花を咲かせている3人には聞こえなかったようだ。

……今日の夜あたり、そのことについても聞かされるのだろう。

麻冬は一体どんな反応をするだろうか。

「全国制覇した暁にさ、みんなで旅行行こうよ」

春樹が言った。

「もちろんインハイだよね。あたし最後の大会は絶対勝つよ」

「あら、あたしもよ。絶対新記録出して優勝する」

「みんな自信満々だな」

1人だけそう言った秋人に、みんな振り向きながら声を合わせて言った。

「自信ない？」

むしろその自信がどこから出てくるのか不思議だが、彼らが堂々とそう言うと現実になりそうな気がする。

「は。誰に言ってんだよ」

秋人は自信ありげに笑う。

「もう負けない。負けるのは……きっと学生じゃなくなってからだ」

秋人の真剣な眼差しは自身の言葉を確信のあるものにする。

どこにでもある普通の公立高校に集いし才能のある彼ら。

本当に出会ったのは偶然だった。

普通なら特待で入れてくれるような強豪私立へ行くのに、遠いのが嫌だと言って近場の高校を選んだ。

そんな発想をするのが４人もいるだなんて。

「そうだな……星、星が良い」
「星？春樹星好きだっけ」
「違うよ。だって俺たち星陵じゃん」

春樹がそう言うとみんなポカンとする。

だが、次の言葉に納得せざるを得なくみんな笑った。

「俺たちが出会ったのは星陵のおかげだから」

バカにするような嘲笑いでも含み笑いでもなく、その通りだと言わんばかりに微笑んでいる。

そう、星陵高校があったからこそ彼らは今がある。

たまたま近場にある強豪校でしかも学費が私立より安いというだけ、本当にそれだけの理由なのだがそれでも星陵がなければおそらく彼らが出会うことはなかった。

「じゃあ南十字星見に行こうよ」
「南十字星って日本じゃ見れなくない？」
「いや、見れるとこある。遠い島だけど」

せっかくならみんなパスポート持っているんだし海外にでも行けば良いのに、日本内というのが彼らしい。

近場で済ませようとしていると言いたいのでは決してない。

偶然にして必然的に集まった無二の友達がどういうものなのかを示しているように思えるその言葉は、なんとも愛しさを感じる。

「じゃあ行こう！」

優勝したら。

そう続けようとはしなかった。

なぜなら、したらではなくするのだから。

絶対とは言い切れないし、スランプに陥ったり不慮の事故にあってしまうかもしれない。

それでも、４人が出場する限りきっと間違いはない。

優勝トロフィーを持って学校に帰宅して、そうして地元の英雄になるに違いない。

「星陵～！ファイ！」
「「「おーっ！！」」」

ともだち

それは一生のうちでかけがえのない存在となる。

next

第173話【別れ】

「夏実ちゃん」
「えっ。阿笠くん？」

放課後部活を終えた夏実のもとにやってきたのは阿笠だった。
ちょうど夏実が2階から下がって1階の体育館入口の前でベンチに座って春樹を待っているときに阿笠が来た。

「麻冬は？」
「まだ終わってないかな。あのさ、今日……」

今日、夜は暇？と夏実に聞こうとしたけど阿笠は言うのを躊躇う。

「今日？」

不思議そうに夏実が訪ねてきたけど、阿笠は頬をポリ…とかいて、そうして軽く手を振って笑った。

「やっぱ良いや。うん」
「えっ」
「お疲れ。じゃあまた明日」

「う？うん。また明日」

訳も分からずとりあえず夏実はバイバイと手を振る。

阿笠は軽く小走りして行く。

「あれ、阿笠？」

「あ、春樹」

そこに春樹が入口から出てきた。

阿笠の後ろ姿を見て夏実に問いかける。

「阿笠といたの？」

「んー、うん？何かよく分かんなかった」

「ふーん？」

阿笠に対して首を傾げる夏実と夏実に対して首を傾げる春樹。

すべては今宵起こることを2人は……2人を含めてみんな知らない。

部活が終わってすぐに自主練せずに着替えて行った阿笠とは対照的

に、秋人は1人で練習をしている。

その練習にも気合いが入り、白熱している。

練習が終わったというのに汗を流して真剣な表情でボールを蹴りながら走る。

そんな在り来たりな姿さえ、息を飲むほどだ。

他の2年はほとんどいなくなり、片付けをしていた1年たちがそろそろ着替え終わって帰る頃になったとき、そんな秋人の姿を見ている人がいた。

負けた悔しさをバネにしているその姿に、同じスポーツマンとしての眼差しではない視線を送っている。

話しかけようにも話しかけられず、ただ黙って見ているだけ。

何も秋人に用事があるわけではないのに、秋人に目を奪われて本当の用さえ忘れる。

誰だかお分かりだろう。

「え？まじで？」
「はい。ついさっき」

その頃阿笠は温水プールへと足を運んでいた。

帰りかけの水泳部員に麻冬を呼んできて欲しいと頼んだところ、麻冬はもういないと言う。

そもそも今日は水泳部の練習がいつもより短かったようだ。

「分かった。ありがと」

阿笠はサッカー部のほうへと向かい始める。

練習がはやく終わったら終わったでその分自主練してそうなのにもういないとは意外だ。

とりあえず阿笠は走ることなく歩いている。

これから重い雰囲気になろうことは予想できるのに、阿笠は案外落ち着いている。

阿笠には見えているのだろうか。

自分が麻冬を振ることで麻冬に幸せな未来が訪れることを。

今すぐでなくとも、きっといつか秋人の隣で嬉しそうに笑っている麻冬がいることを。

「……真剣……。……あそこにいるのが阿笠だったら良かったのに……」

麻冬は秋人を見つめながらそう呟いた。

あそこにいるのが阿笠だったら気兼ねなく話しかけて、そして一緒に帰れるのに。

なぜか秋人だとダメだ。

一生懸命な彼に近寄る術がなにもない。

トクン、トクンと胸が打つ。

なぜだろう。

どうしてやっかみみたいに彼に恋をしたのだろう。

もっと阿笠と関わりのない人にすれば良かった。

だって彼は阿笠のチームメートで相棒で、かけがえのない人だ。

阿笠と近い存在にいる。

もっと全く知らない人だったらこんなに苦しまずに済んだ。

見せつけるかのように秋人を選んだけど、それこそが間違いだった。

阿笠を忘れる道具として利用したこと自体が間違いだった。

何をどう責めたら良いかも分からず、弁解の言葉すら思いつかない。

そう、彼は代わり。

阿笠の代わり。

自分の恋人は阿笠であって、彼は阿笠への未練をなくすためだけの自己満足に利用していただけ。

勝手に恋しただけ。

「あー。いたいた」

阿笠は校舎側から出てきたところで麻冬の後ろ姿を見つけた。

「麻ふ……」

元気に声をかけようとしたが、彼女の見ている先に秋人がいることに気づいて阿笠は呼ぶのをためらった。

白いカーディガンを着てウェーブの髪を風になびかせている彼女が

見ているのは、やはり彼だった。

阿笠は軽く息を漏らし、後ろから麻冬に近づいた。

「麻冬」

肩に手を置くと麻冬は驚いたように振り返る。

「阿笠」

そうして彼女は嬉しそうに微笑むのだ。

「見て。秋人頑張ってる」
「ね。麻冬はやいね」
「うん。阿笠といろいろ話したかったし」
「……俺もちょうど話したいことがあるんだ」

そうなんだ、と麻冬は軽く言う。

阿笠はこんなところで、と思ったのか麻冬の手を引いて行こうと言った。

当たり前のように麻冬も歩き出す。

美男美女でどこからどう見てもお似合いの2人。

いつも王子が笑っていてくれるからお姫様だって嬉しくなって王子の隣にいたくなる。

ナイトはいらない。

自分を守るナイトなんて必要ないから王子だけいてくれれば良い。

って、

「なんでこんなとこに？」

阿笠が向かったのは駐輪場の裏側のほうにある噴水のあたりだ。

駐輪場の裏なものだから人気はない。

どうせなら一緒に帰るかどこか公園やカフェで話をすれば良いのに。

……まぁ、そんな期待をさせるようなことはできないのだろう。

きっぱり別れてお別れすることが阿笠の精一杯の誠実なのだ。

夜、やはり昼間の予言通り今宵は星が綺麗だ。

点々と散りばめられている星々たちが我も我もと言わんばかりに輝いている。

阿笠が今日言おうと決めた理由は、やはり晴れていたからだ。

中学で初めて2人が付き合い始めた日も、こうして晴れていて夜は星が綺麗だった。

「麻冬、……別れよう」

なかったことにしようなんて言わない。

リセットしたいとも言わない。

ただ、星が綺麗だったあの日に始まったのだから星が綺麗な今宵終わりにしたかった。

ただそれだけ。

「……え？な、何言ってるの？」

「勝手言ってごめん」

「なん……なんで？ライブであたしが泣いたから？！でも阿笠頑張るって言ったじゃない！」

麻冬は信じられないという顔をしながら声を荒げる。

「阿笠あたしのこと好きでしょ？！あたしだって阿笠が好きなんだよ！」

「……違うよ。麻冬が好きなのは俺じゃない」

「っ……」

つい４日前のことだった。

たった４日前に２人は再び始めようとしていた。

けれど、その間にあった出来事があまりに大きすぎてまるで１ヶ月

も前のことのように感じられる。

「それが言いたかったんだ。麻冬はもう俺に囚われることなく幸せになって良いんだ」

「待っ……」

「じゃあね。麻冬」

阿笠は軽くニコッと笑ってその場を去ろうとした。

だが、麻冬は急いでその阿笠の腕を掴んだ。

「待って！幸せって何？！阿笠といるだけで幸せなのよっ」

麻冬はどうしてそこまで阿笠にこだわるのだろう。

好きな人がいるじゃないか。

愛してる人がいるじゃないか。

烈の言う通り、阿笠を蝕っているのは麻冬の優しさかもしれない。

それさえなくなれば阿笠は自由になれるかもしれない。

「……麻冬、今まで守ってくれてありがとう」

だけどそんなことは言わないし阿笠も思ってはいない。

麻冬のせいだなんて決して言わない。

むしろ感謝の言葉しか出てこない。

「俺はもう俺だけの力で生きて行ける。だからもう麻冬を追いかけたりしない」

「阿笠っ……」

「弱い俺を包んでくれる麻冬に甘えてた。俺、麻冬を守るつもりだったのに逆に守られてたんだ」

「そんなことっ、」

別れを言わなければ、きっと麻冬は隣にいてくれる。

このままずっと付き合っていていつか結婚するに違いない。

サッカー選手と水泳選手の両親を持つ子どもが生まれて、きっとそ

の子どもも何らかのスポーツをするのだろう。

笑いが溢れてる、まるで太陽のような幸せな家庭だって築けるだろう。

「……勝ったら連れていきたいところあるって言った約束、守れなくてごめん」

「どこ……どこなの？」

「俺にサッカーを教えてくれた……とうの昔に死んだ幼なじみの墓」

言わなければ、そんな未来が待っていただろう。

それでも言うのは、最後の最後に麻冬に恩返しがしたかったからだ。

いつだって支えてくれた大事な人が本当の好きな人といられるようにすることが、阿笠にできる唯一の恩返しだった。

「俺がいるのは彼女のおかげだから、俺の大切な人を彼女に紹介したかったんだ」

「……」

「ありがとう、麻冬。すごく幸せだった」

突然のことに麻冬は頭が追いつかずにいる。

どうせなら3年前のようにもう好きじゃないんだって言ってくれたほうが諦めがつく。

まだ好きなくせに、こんなにも愛しいくせに……

「構わず秋人のとこ行け。あいつは……今でも麻冬を好きだから」
「やだ！なんで？なんでそんなこと言うの？！」
「麻冬」
「幸せにしてくれるって言ったじゃない！嘘つきっ……！」

麻冬は阿笠の胸をドンドンと叩く。

目に涙を浮かべながら必死に食い下がる。

「あたしが秋人のとこ行って何になるのよぉっ……」

一緒にいたい。

その思いは間違っているのだろうか。

「麻冬」

阿笠は麻冬の手を掴む。

「最後までワガママな俺でごめん。でも麻冬を幸せにできるのは…俺じゃない」

「阿笠っ……」

阿笠は麻冬をギュッと抱きしめた。

何度も何度も抱きしめられたはずなのに、こんなにもザワザワと胸騒ぎがする。

阿笠は麻冬の顎を軽く上げて、そのままキスをした。

短く、そして今までで最も優しいキスだった。

「……最後のキスだよ。麻冬」

阿笠は麻冬を話す。

そして言った。

「ありがとうって言葉しか見当たらない。けど……今度こそ約束する」

「や……」

「いつか俺が大切な人を守れるくらい強くなったら……麻冬に会いに行く」

阿笠は一直線に麻冬を見つめている。

その表情は真剣そのもので、いつになく強さを感じた。

「幸せの証に麻冬に会いに行くよ」

もう十分頼もしくさえ見える。

いつの間にこんなことを言えるくらい強くなれたのだろう。

本当に、1人で歩いていくと言うんだね。

もう麻冬に甘えずに生きていくって……そう言うんだね。

「明日からは友達な。……じゃあ、また」

今度こそ阿笠は行ってしまった。

麻冬はその場に崩れるようにして座り込んだ。

結局麻冬は言いたいこと何1つ言えずに終わってしまった。

明日から……今からもう阿笠の彼女ではない。

別れたくないのに、どうしてだろう。

「麻冬？」

呆然としながら涙を流している麻冬のもとに偶然通りかかったのは

……

next

第１７４話【愛の言葉】

「何してんの？」
「あ……きと」

そこへやってきたのは幸か不幸か秋人だった。

秋人はまだ練習着を着ているがこんなところで何をやっているのか。

「な……どうかしたのか？」

座り込んで泣いている麻冬に秋人は驚きながらも手を差し出す。

けど麻冬はその手を取ることなく、袖で涙を拭いてさっさと立ち上がった。

まさかこのタイミングで秋人と会うなんて。

「だっ、大丈夫……だから。じゃあまた明日ね」

麻冬は逃げるようにしてそそくさと立ち去った。

「……？」

秋人は不自然な麻冬の行動が気になっているようだが、もういなくなってしまって考えても意味がないので止めた。

そして辺りをキョロキョロと見回している。

どうやらボールがこっち方面に転がってしまって探している最中だったらしい。

結局ボールは噴水より向こう側にまで転がっていて、秋人がそれを見つけたのは数分後のことになる。

麻冬も阿笠も今朝自転車で来たというのに2人して自転車の存在を忘れて歩いて帰った。

まぁ歩いて帰れない距離ではなくおよそ1時間前後あれば帰れるくらいだ。

だが、阿笠は良いとして果たして麻冬はしっかり帰れるのだろうか。

それが一番心配だ。

阿笠も麻冬も帰る方向はほとんど一緒だが、確固たる意思を持って歩む阿笠と絶望にうちひしがれてる麻冬とでは歩く足の速さは比べものにはならない。

目から生気を失っている麻冬が歩くこと1時間、まだまだ道のりは遠い中ついに立ち尽くしてしまう。

夜に女の子1人で歩いてるなんて危ないのに今の麻冬にはそんなこと頭に回らない。

頭に浮かぶのは、阿笠からの別れの言葉だけだ。

烈や夏実たちに何と言われようとも、これから一緒に歩んで行こうと思っていた矢先の出来事。

頭を抱えても真実は消えず、耳を塞いでも阿笠の言葉が聞こえてきて目を閉じても阿笠の一途な顔ばかり見えてくる。

いやだ

いやだ……

明日から友達

そんなのはいやだ。

一番でなくても良いから一緒にいたかった。

「……一番でなくても……？」

麻冬はポツリと呟いた。

そのとき、月曜の昼休みに言われた烈の言葉とついさっき阿笠に言われた言葉がふと頭をよぎる。

麻冬の優しさが阿笠を一番苦しめてるのだと

本当に好きな人と幸せになって良いんだと

そう言っていた。

例え阿笠が幸せだったと言ってくれても、苦しめていたのは自分……

阿笠に気持ちを見透かされていたのに、阿笠はあんなにも不安がっていたのに

守りたかったのに

何もしてあげられなかった。

「あたし……最低……」

麻冬はようやく自分のしてきたことの意味を理解した。

阿笠は、自分からようやく旅立とうとしている。

強くなるってそう言っていた彼の瞳には未来があった。

それを止める権利なんて、自分にはない。

「麻冬姉？」

立ち尽くしていた麻冬に誰かが声をかけた。

麻冬を姉なんて呼ぶ人なんてこの世に1人しかいない。

「康介……」

友達の家から帰ってくる途中だった康介は、まだ制服を着ている。

夏実の弟で、麻冬のことを慕ってくれている。

「う……」

夏実とは似ていない彼の顔はとても穏やかで大人っぽくて、安らぎに満ちている。

「康介ぇ～っ……」

麻冬は自転車から降りた康介に抱きついた。

「麻っ……」

康介は一瞬よろめいたけど、きちんと麻冬を支える。

康介の胸を借りてワンワン泣いている麻冬の背中に手を回し、もう片方の手で麻冬の頭をポンポンと叩く。

「なんかあった？……秋兄？それとも阿笠さん？」

「あ……っ…うぅ…」

阿笠の

「あ」、それとも秋人の

「あ」か。

康介には分からなかったが、とにかく何とか麻冬を宥めようと必死だった。

「麻冬姉、俺んち来る？」
「やっ……夏実がいるっ……」

夏実に知られたくない麻冬は涙溢れる目で康介を止める。

夏実に知られたら春樹にも知られてすぐに秋人の耳にも入ってしまう。

そもそも明日になればきっとみんなにバレてしまうのだろうけど。

「……ならどっかでちょっと座ろうか？俺で良かったら話聞くよ」

麻冬はどうしようかと躊躇っているが、誰かに話して解決するものでもないが、それでも誰かに言葉をかけてもらいたかった。

被害者ぶるわけではないけど、それでも頑張ったねって言って笑って欲しかった。

麻冬の行為が許されるものでなくても、そのおかげで得た何かがきっとあると言って欲しかった。

麻冬は涙を振り払うようにして頷いた。

康介は麻冬を離し、２人ですぐそこのファミレスに入った。

まだ客はいるが、そこまで多くもない。

やはり学校からそんな離れてないわけだから学生が多いのだが……

「あ、おい。雪原さんだ」
「本当だ。って、阿笠じゃない男連れてるぜ」

テーブルについた麻冬たちのことを周りにいた学生たちがヒソヒソと話している。

「え～。麻冬先輩が浮気？」
「まさかぁ」
「あれって明徳の制服だよね」
「彼かっこいい～！」

星陵の学生がチラホラいるらしく、麻冬はいたたまれなくなる。

いつもなら全然平気で気にしていないのに、さっきの今だ。

辛いだろう。

麻冬はようやく泣き止んだその瞳からまた涙が出そうな表情をしながら耳を塞いでいる。

そんな麻冬を心配して、康介はあえて大きい声で言った。

「麻冬姉。何にする？」

ヒソヒソ話していた学生たちに聞こえるくらいの明るい声で言ったものだから麻冬は康介を見上げてキョトンとした。

だが、康介の作戦は大成功したようで周りの学生たちは今度はこう言っている。

「なぁんだ、弟かぁ」

麻冬はその声を聞いて周りを見回した。

みんな納得したような顔をしてもうヒソヒソ話をやめ、それぞれの

会話を楽しんでいる。

「あ、ありがとう。康介」
「いーえ。それより夕飯食べてないでしょ？俺奢るし何か食べたら？」
「え、でも……」
「良いから良いから」

麻冬は遠慮するが康介が催促してくるものだから康介に甘えることにした。

2人とも適当に食べるものを注文する。

が、し終えたところで一気にシンとなった。

ここに来たのは康介が麻冬の話を聞くためであるが、2人ともどう切り出そうかと躊躇しているようだ。

いくら康介が誘ってきたとしても、康介から聞けるはずもなく康介は麻冬が話してくるのを黙って待っていた。

だが意外にも麻冬はしばらくしてすぐにポツリと話し始めた。

「……あたしね、秋人を好きなのに何度も阿笠といることを選んだの」
「……うん」
この前夏実が泣いていたことから康介もだいたいは分かるようだ。
「一緒にいたかっただけなの。秋人を切ってでも……」
きっと分からない。
誰にもなぜ麻冬がそうしたいかなんて分からない。
……春樹、春樹だけは分かっているかもしれない。
彼だけは何も言ってこない。
「守りたかった……。折れてしまいそうな阿笠を一緒にいて支えたかった」
「秋兄のことが好きなのに」
「それでもあたしは迷わず阿笠を選んだわ」
今でもその気持ちは変わらない。

阿笠の側にいて、笑ってるときは一緒に笑って泣いてるときは励まして、そうして一緒にこれからを歩んで行きたい。

けど麻冬がいくらそう思っていても、阿笠はもう望んでいない。

麻冬から、まるで親鳥から飛び立とうとしているのだ。

そう、今こそが巣立ちのとき。

「でも結局、あたしが一番阿笠を苦しめてた」

誰かにしがみついてなくちゃいられないような阿笠が、麻冬を追いかけてまで星陵にきた阿笠が、泣き虫だった阿笠がようやく立ち上がろうとしている。

前に進もうとしている。

初めて阿笠が自分の意思で動こうとしている。

「……苦しめてたの」

麻冬はさっきとは一変して泣く気配はない。

けれど切なそうな表情を浮かべながら必死に笑おうとしている。

「本当に？」

康介はずっと黙って聞いていたが、ようやく声を出した。

「阿笠さんは幸せだったって、ありがとうって言ったんでしょ。少なくとも阿笠さんは麻冬姉がいてくれて救われたよ」

康介はさも正しいことを言っているかのように平然と言う。

2人の関係を目の当たりにしたわけでも詳しく知っているわけでもないが、でも分かる。

伝わってくる。

どうやって2人が一緒にいられたかくらい。

「麻冬姉のために阿笠さん身を引いたんだよ。あとは麻冬姉がどうしたいかだ」
「どうしたいかなんて……」
「誰が傷つくとか考えなくて良いんだよ。気持ちに正直になれば良いだけ」

恋なんてしたことのない天然ボーイの康介が珍しく的確なことを言っている。

麻冬がもうこれ以上泣かないようにと必死に言葉を探しているようだが、そんな素振りは一向に見せない。

「一緒にいてあげたいじゃなくて、一緒にいて欲しい人は誰？」

康介は優しい表情で麻冬に尋ねた。

麻冬は言葉に詰まるが、そんなことはとっくに決まっている。

けどそれを口にしてしまったら今までのことが無駄みたいで、麻冬は答えられずにいる。

それはそうだろう。

そうこうしているうちに注文したものが運ばれてきた。

2人はとりあえずそれらを食べる。

しばしの沈黙。

もう少ししてから、麻冬は少しトーンの低い声で言った。

「……救われたって、本当？」

「ん？」

「阿笠があたしに救われたって、」

「ああ、うん。本当だよ。誰も麻冬姉責めたりしない。ありがとうって思ってんだよ」

麻冬は箸を置いて、軽くうつむく。

「頑張ったね。麻冬姉」

康介は少し前に身を乗り出して、うつむいている麻冬の頭を撫でた。

その手がいつになく優しくて、まるで月のように寛大で、すべてを見通しているかのようで

麻冬はまた泣けてしまった。

ありがとう

それは言っても言いきれない、愛の言葉。

next

第175話【来世でまた会いましょう】

夜な夜な阿笠は重くとも前向きな足取りで帰り道を歩いていた。

もうじき自分の家と烈の家への分かれ道に辿り着こうとしていた頃、その足で烈の家に向かおうかどうしようか悩んでいた。

1回帰ってから行くのもおかしな話だし、すぐに烈に会いたかった阿笠はすぐに烈の家に向かうと決めた。

だが、その分かれ道の中点にいたある人物を見つけて平静なんて吹き飛ぶ。

「れ、つ」

こんな時間に何もない道端で立ってる人がいるなんて普通はあり得ない。

だがその人は、塀に寄りかかりながらうとうとと今にも眠りそうだ。

あのオレンジのパーカー付きのトレーナーは烈が昼間着ていたものと同じ。

きっとあれは烈。

阿笠は烈を遠目で見つけるなり、つい立ち止まる。

「うっそ……なんで？」

阿笠は驚きのあまり口をあんぐりと開けている。

普段の烈なら今頃もうご飯食べ終えて部屋の中で絵を書いたりのんびりしていたりする時間帯だ。

コンビニに出かけたりするくらいはあるだろうが、こんなところで眠さに耐えながら立っていることなんてない。

「れ……烈！」

阿笠は少しだけ声を張りながらその名を呼ぶ。

すると眠りかけていた烈が目をパチッと開けて阿笠のほうを振り向いた。

「ああ、阿笠」

烈は笑いかける。

本当に烈だ。

阿笠はなぜだか分からないが何かが込み上げてきて感情が高ぶる。

すぐに側に駆け寄りたくて阿笠は走った。

それこそ１０メートルくらいの距離しかないが。

烈のもとにやってきた阿笠は勢いよく烈に抱きついた。

「わっ、」

烈は一瞬よろめいたが、しっかりと阿笠を支えた。

烈の首に手を回して震える体で抱きついている阿笠をあやすかのように、烈は阿笠の腰に手を回した。

どうだったか、なんて聞かなくても分かる。

「そうかそうか。頑張ったんだな、阿笠」

烈は嬉しそうな口調でそう言ってくれた。

今にも泣いてしまいそうな阿笠は、頭を少し前にかがめて額を烈の肩に当てながら泣くのを堪えている。

身長はそう変わらないから、2人とも同じような背格好をしているのだが、今の阿笠は子犬のように小さく思える。

「ばかっ……烈、ばか」
「おう」
「あほ！ばか！」
「ああ」

阿笠の意味不明な言葉にも烈はしっかり返事する。

「ずるい……っ……烈、」
「まぁな」
「俺だって……っ」
「ああ、そうだな」

阿笠自身何を言っているのか、なぜ言っているのか分からないでいる。

それでも烈はその震える声を支えようとする。

別れ話くらい人間なら誰しもがすることだし、阿笠だけが大変なわけではない。

遠恋とかで阿笠以上に苦労している人たちだっている。

それでも、烈はそんなこと阿笠に言わないし思ってもいない。

順風満帆に何不自由なく過ごしてきたお坊っちゃんが、サッカーの才能や容姿や環境にも多いに恵まれてきた青年が

悩みに悩んだたった1つのもの
それは、恋愛でした。

「泣かないの？阿笠」
「……泣かないっ」
「なんで？」

烈の口調はとても優しい。

阿笠は力強く抱きついたまま、押し切るように言った。

「麻冬のほうが……辛いから」

今までの阿笠だったら絶対にそんな言葉は出てこなかった。

成長した阿笠ならきっとそう言うだろうと予想していた烈は、本当にそう言ってくれたことが嬉しいようで愛しそうな表情をしている。

「そうだな。でも、好きな奴を手放した阿笠のほうが苦しいんじゃ

ないか？」
「……でも、泣き言は言わない」
「そう。じゃあ聞かない」

そう言って烈は、阿笠の背中をポンポンと叩いた。

しばしの間流れる優しい空間、言葉なんかいらない。

烈は星空を見つめて、日本を通り越して世界を見つめた。

あと1年と少ししか側にいてやれない。

フランスに行ったらこうして好きなときに抱きついたりなんてできない。

阿笠の望むことはできるだけ叶えてやりたいし、いれる期間を大事にしたい。

行きたくないっていうのは自分のワガママで、どうせならサッカーの道を選んでれば良かったと思う自分がいるのも最悪だ。

泣く阿笠を差し置いてでも絵を選んだ以上そんなことは思ってはいけないのに。

別にフランスに行かなくたって画家にはなれるけど、阿笠が認めてくれた自分でありたいから少しでも頂きを目指すために行かなくてはならない。

1年なんてすぐ過ぎる。

気づいたときにはきっともう大人になっている。

阿笠がフランスのリーグに入団してくれたら、なんて思うのもワガママなのだろうか。

「阿笠、飯食いに行くか」

烈がそう言うと、阿笠は烈の首に回していた手をゆっくりと下ろす。

つられて烈も阿笠の腰に回していた手をほどいた。

けど恥ずかしいのか、阿笠は顔を上げない。

「奢るぜ」

な、と声をかけながら烈は阿笠の肩に手を置いた。

ようやく阿笠は顔を上げて今宵初めて烈の顔を見た。

この暗い中、烈の赤い髪と青い瞳が輝いているようだ。

「うん」

阿笠はニコッと笑い、返事をした。

とは言いつつも、この近くはあまり飲食店なんてなくおまけに2人は徒歩。

それでも2人は肩を並べて文句1つ言わずに歩き出す。

烈はトレーナーこそ着てはいるもののそれは学校で着ていたもので、ズボンはまだ制服だ。

いくらでも時間はあっただろうのに。

一体いつからあそこに立っていたんだろう。

まぁ部活が終わるおおよその時間くらいは分かるものだが、なんせ阿笠は徒歩で帰ってきてしまったわけだから通常の何倍も帰りが遅いわけで。

「……烈、ありがとね」

闇の中、闇に消えてしまいそうな振り絞った声で阿笠は烈にそう言った。

烈は、んー、なんて言って適当に返事をしているが阿笠は烈の優しさににやけそうになりながらも泣きそうになる。

ジーン、と烈の温かさを感じている。

見に行くとは言ったけど、まさか烈のほうから寄ってきてくれるとは。

「なんか……俺烈依存症だね」

阿笠は泣かないためにヘラッと笑ってそう言う。

「今気づいた？」
「あっ、ひどい」
「良いじゃん。俺も阿笠依存症だし」
「そっか」
「だよ」

親友ってなんだろう。

同性じゃないと親友にはなれないのだろうか。

異性の場合、どちらかに恋愛感情が芽生えてしまえばそれは友情とは呼べなくなる。

「……あーあ。俺、女だったら良かったのに」
「なに、性同一性障害？」

「違う！ただ、女だったらきっと烈好きになってたかなって」

阿笠がそう言うと、烈はブフッと吹き出した。

阿笠の突然のカミングアウトに烈はお腹を抱えながらヒーヒー笑っている。

「そんなに笑う?!」
「だ、だって……！ひゃはははっ」
「う～」
「だ、大丈夫大丈夫。俺も阿笠女だったらきっと彼女にしてっから」

あまりに笑いすぎて烈は涙が出てきたようで、指で涙を拭っている。

烈がここまで笑うなんて珍しい。

「え、まじ?こんなんを?」
「だってほっとけねーじゃん。守ってやらなきゃ、なぁ。大子ちゃん」
「大子……なんかやだ」

そうだろう、きっと彼らが異性だったら付き合っていたに違いないだろう。

烈という彼氏に寄りすがって泣いてる自分をあやしてもらう大子、もとい阿笠が目に浮かぶ。

異性じゃないから好きにはなれなくて、だから親友という立場にいるのだろう。

「じゃあ、もし来世阿笠が女に生まれてきたらもらってやるよ」
「来世も会えるかな」

星は輝く。
彼らを照らす。

「会えるよ。だって現世で会えたんだ」

遠い遠い未来を映し出そうとしていた。

next

第176話【前夜】

「……え?!」

秋人が1人で自主練をしていた頃、珍しく両親揃って星陵高校にやってきた。

ある人物を乗せて。

「悪い話ではないだろう?どうだアキト、私のもとへ来ないか」

ドイツ人のその男性は、秋人にドイツに来ないかとスカウトしているようだ。

突然月影家へやってきてその話をして、両親は慌てて星陵高校へと向かってきたのだと言う。

どうやら彼はドイツのリーグの監督をしていて、今ちょうど日本に来ていたところ日曜の試合を見たらしい。

「なんで……俺なんですか?」

ドイツ語ではなく英語で話をしていたその男性に秋人も英語で返す。

「阿笠じゃなくて、なんで俺なんですか」

両親が後ろで祈るようにして懇願している中、秋人は不安そうにその監督に尋ねた。

知りたいだろう。

どうみてもあの試合で勇敢に戦っていたのは阿笠で、試合に勝ったのも阿笠だ。

「ふむ。確かにあの試合で目立っていたのはダイゴ・アカサだが君には頂きを掴める才能がある」

「……」

「君に日本は狭すぎる。ドイツに来て伸び伸びとサッカーをしないか？」

嘘に決まっている。

誘われるのが阿笠ではなくて自分なんてあり得ない。

秋人はそう思いつつも、胸の高鳴りを抑えることはできないでいる。

「もちろん今はまだ学生だ。だから私の後輩が監督している高校でサッカーをやると良い」

「編入……」

「そうだ。そして卒業したら入団すれば良い」

夢のような話だ。

ドイツでサッカーできて将来も約束されてるなんて、そんな恵まれた環境があるなんてこれ以上ない幸せだ。

サッカーで生きる人間たちにそんな夢のような話を断れるはずもない。

「阿笠も星陵生だって……知ってますよね。俺彼とのコンビじゃなきゃダメなんです」

「……なら、卒業したあとも同じリーグに入れるという確証はあるのかい？」

「それは、……」

秋人は的確なことを言われて押し黙ってしまう。

確かに一生一緒にプレーできるとは限らない。

違うリーグに入ればまた敵になってしまう。

同じ敵なら、ドイツでも日本でも変わらないんじゃないだろうか。

「私は明日の昼ドイツへ帰る。もちろん行くとなれば君も明日出発することになる」

「あ……明日?!」

「それまでに決めておくと良い。アキト、これは自分の可能性を広げるチャンスだ」

そう言うと、監督は向きを変えて秋人の親が呼んでいたタクシーへと向かって行く。

監督の後ろ姿が闇に埋まっていくようで、なんだかとても震えてしまう。

リミットが明日?

編入しろ?

そんなこと突然言われたって困る。

「……待ってください！」

秋人のその声に監督は足を止めて振り返る。

「答えは……決まってます。俺は――――」

キラキラ光る師走の星たち。

彼らは

振られた麻冬を

強くなると決めた阿笠を

そして秋人を

どのように映していて、なぜ照らしているのだろう。

彼らに何の罪もない。

けれど照らされた人間たちは、きっと今宵の星々を忘れはしないだろう。

今日という日を思い出すきっかけとなってしまい、時には嘆き悲しむだろう。

それでも照らし続けると言うのだろうか。

あんなにも遠いのに、身近に感じるのはなぜだろう。

その美しさにいつしか感謝する日は来るのだろうか。

星たちは様々な思いを乗せてキラメくのみ。

「夏実ー」
「ん？」

部活を終えた夏実と春樹は海野家で夕飯を食べ終えてゆっくりしていた。

「なんかさ、今日やたら星が綺麗じゃない？」
「えー、そーお？」

夏実はベッドに寝転んで窓の外の夜空を見ている春樹の隣に座って

同じように星を見上げた。

満点に輝いているけれど、このくらいなら晴れてる日はいくらでも見れる。

けれど、春樹の目にはその星の数の多さと輝き度が異常なほどに見えている。

「あれ、赤く光ってる」

夏実はある星を指差した。

どれ？と聞いてきた春樹に夏実は、あれだよと強調して言う。

「ああ、あれか」

「なんでかな」

「星は寿命が尽きたとき燃えるように生涯で一番の輝きを見せるんだ」

「へぇ。じゃああの星はもうなくっちゃうんだ」

「そうだね。今までで一番綺麗な瞬間なんだよ」

星のトリビアにもだが、物知りな春樹に夏実は感動している。

春樹は意外なくらい物事を知っている。

そういえば花言葉だって知っていた。

これと言って花が好きとかそういうわけではないのによく知っているものだ。

「なんか……やな予感がする」

「やな予感？」

「やな予感ってか……うーん、なんか起こりそう」

春樹は燃えている星を見つめながらそう言う。

「えぇー？月が赤かったら不気味だけどさぁ」

「なんか胸騒ぎがするんだよね」

春樹はブルッと身震いをした。

胸がザワめく意味も分からず、春樹は星を見つめ続けた。

点々と光る星を、今宵はみんなが見上げている星を見て春樹は何を思うのだろう。

春樹のいう予感は、明日すべてが本当になる。

next

第177話【出した答えは…】

「と、いうわけで月影はドイツにサッカー留学することになった」

朝のＨＲ終了後、担任が秋人のドイツ行きを話した。

秋人は朝練にも行かず、学校に例の監督と共にやってきてサッカー留学を話した。

急なことだが、とりあえず手続きは少しずつするという形で校長の許可を何とか得て秋人は学校を去った。

学校側としてはサッカー部の全国優勝を成し遂げて欲しかったという気持ちもあり素直に喜べずにいる。

だが、教え子がサッカーで留学できるなんて星陵高校としても前代未聞のことで大騒ぎだ。

「留学……？！」

「ばかなっ……何も聞いてないよ！俺っ」

「秋人が？！サッカー部は？！」

麻冬、春樹、夏実が続々と叫んでいる。

あまりに突然すぎて信じられない気持ちもよく分かる。

秋人が星陵高校を離れるなんてあり得ないことくらい、3人には分かっている。

なのにどうしていきなり何も言わずに言ってしまったのだろう。

「あのバカっ……」

春樹はすぐに携帯を取り出して秋人の携帯へと繋げる。

「あ！秋人？！」

『おかけになった電話番号はただいま使われていないか、電源が……』

「……くそっ……！」

携帯が繋がらない。

話ができない。

何も聞いてないし、別れの言葉さえ伝えていない。

「春樹っ?!どこ行くの?!」

春樹は乱暴に席から立ち上がって、教室を飛び出そうとした。

麻冬の問いかけにも答えずドアに手をかけようとしたとき、夏実が叫んだ。

「ダメだよ春樹!!」

いつになく大きな声で言った夏実の怒鳴り声に春樹は思わず手を止めた。

振り返らずにドアの前に立っている春樹に、夏実は言う。

「行って何するの?秋人を止めるの?秋人の夢の邪魔をするの?!」

「っ……」

「あたしたちに秋人の夢壊す権利なんてないんだよ。秋人が……自分で決めたんだよ」

夏実は震える声で春樹に訴えかける。

夏実とて春樹の気持ちは分からなくないし、できることなら止めたい。

「何も……言わずに行くなんて変だろ！」

春樹は振り返って夏実をキッと睨みながら言った。

「みんなで全国優勝しようって……星見ようって約束した。……昨日したばっかりだ」

昨日の昼休み、ピクニック気分で外でご飯を食べながら４人は約束をした。

４人でなら、この４人ならきっと果たせる約束だって思った。

優勝して、そしてみんなでプロの世界に入りたかった。

きっとずっと一緒だと、そう思っていた……

「……良いよ、もう！」

春樹は今度こそ教室を飛び出して行ってしまった。

夏実や麻冬の止める声を無視して、走っていなくなる。

教室内はシンとして重い空気が佇んでいる。

もうじき1限が始まるというのに春樹はいなくなり、元気な6組に黄色い声が飛び交わない。

とりあえず担任は他のクラスでの授業の支度をしに職員室へと戻って行く。

しばらくして生徒たちは少しずつザワザワしてきたが、誰も夏実や麻冬に真相を尋ねる人はいなかった。

夏実はいなくなってしまった隣の秋人の席を切なげに見つめながら涙を浮かべている。

麻冬は、手で顔を覆ってうつむいている。

何も言わずにいなくなってしまった、その事実だけが突きつけられた。

「秋人いるー？」

1限が終わるなり阿笠が6組にやってきた。

「あ…阿笠くん」

夏実が阿笠に気づいたため、阿笠はクラスへと入って行き夏実のもとへトコトコ歩いて行く。

夏実の隣が秋人だと知っているため、秋人の席に荷物がないことを

見て疑問に感じたようだ。

「来てないの？」

「あ、阿笠くん……あのね、」

「あいつさー、今朝早々朝練行けないってメールきたんだけどさ、なんでか聞こうとしたけど連絡取れなくなってさぁ」

「あ、秋人は……」

「場合によっちゃ走らせるしかなくなるじゃんなぁ」

なかなか夏実の話を聞こうとせずに阿笠は多少怒りながらもケラケラ笑っている。

2人の近くにいた生徒たちは心配そうな表情を浮かべながら阿笠を見ている。

他のクラスの生徒はどうやらまだ知らないようだ。

なんせ阿笠が知らないのだから。

「あっ……阿笠くん！」

夏実は消えてしまいそうな声で阿笠の名を呼ぶ。

「ん？」

ようやく阿笠は夏実の言葉に耳を傾けようとした。

「秋人は……ドイツに行ったの」

「は、え？」

「サッカー留学したの。突然」

「ドイツ……？……嘘だ！」

「嘘じゃないよ。あたしたちもさっき聞かされて……」

さっきまでのヘラヘラしていた表情とは一変して険しい表情になる。

「嘘だ！」

阿笠は朝の春樹と同じように秋人に電話をかけてみるが、やはり繋がらない。

まだ飛行機には乗ってないはずだから電源を切っているはずもないのだが。

「秋人…っ……」

阿笠は教室の中をキョロキョロと見回す。

どこを見ても秋人はいないが、それでも探す。

「なんでっ……」

誰が聞いても衝撃的だろうが、おそらく一番ショックなのは阿笠ではないだろうか。

星陵高校サッカー部の部長副部長としてこれからが一番大切な時期だと言うのに、肝心の秋人がいないのだ。

「麻冬……！麻冬は？！」

阿笠は麻冬がいないことに気づいて夏実に問いかける。

だが、夏実の答えを聞く前に春樹の存在が気になり再び教室の中を見回す。

どこにもいない春樹を不自然に感じて、

「櫻井は？！」と言った。

「春樹、1限の前に教室から飛び出したっきりなの……。麻冬はさっきいなくなった」

夏実はいたたまれない表情をしながら、悲しそうに言う。

麻冬はただトイレに行っただけかもしれない。

けど、春樹みたくいなくなってしまったのかもしれない。

想い人の秋人がいなくなった悲しみが計り知れない麻冬と、親友がいなくなってしまってやりきれない春樹と同じように夏実だってやり場のない感情をぶつけたいけれど、みんなが壊れてしまったらおしまいだ。

せめて自分だけはしっかり現実を受け止めなきゃ、と夏実は必死に立っているのだ。

本当は、隣の席が空いていることがこんなにも悲しいのに。

「っ……」

そうして阿笠も教室を飛び出して行ってしまった。

取り残された夏実は、込み上げてくる涙が溢れないようにと顔に力を入れて堪えている。

どうすることもできない。

何もできることはない。

けど、秋人がなぜ何も言わずにいなくなったのかを考えようとは思わないのだろうか。

阿笠にすら教えずにドイツへ行った秋人の気持ちを少しくらい考えて欲しい。

秋人を庇うわけではないし、残された人たちだって辛いことくらい分かる。

もともとアメリカのような大国にいたのだから秋人には日本が小さく思えていたのかもしれない。

ドイツに行って伸び伸びしたかったのかもしれない。

――――みんなを置いて？

みんなが何を思い悲しみ嘆いても時間は過ぎていく。

空は繋がっているというけれど、向こうも晴れているんだろうかなんて思いながら春樹は、昨日４人で昼食を食べた中庭の芝生に寝転んでいる。

登りかけている太陽が少し眩しくて、けれど冬に近づく匂いがしてくる。

Ｙシャツの上に着ている白いカーディガンに芝生の草が多々つきながらも、春樹は仰向けになったまま動かない。

飛行機雲を見ては、秋人の軌跡ではないかとさえ感じる。

昨日約束したばかりなのに、遠い日のことのように思える。

秋人くらいの実力ならスカウトされてもおかしくはないだろうけど、それでも歯がゆい。

同じスポーツマンとして先越されたとかそういうことではなく、友達がいなくなる事実にうちひしがれるのだ。

「嘘つき。電話くらい出ろよ」

しゃがれた声で春樹は言う。

「顔くらい見に来いよ。言うことくらいあんだろ」

授業が始まっているのだから中庭には誰もいなく、答えのない問いかけばかりする。

「……何とか言えよ…っ……」

ここまで仲良くなれたのは秋人が初めてだった。

こんなにもタイプが正反対なのによく一緒にいられたものだと感心するくらい。

けど、絶対に隣にいたんだ。

仏頂面の秋人がなんでもこなしていくのを、まるで自分のことのように嬉しく思えた。

……この先一生の友達なんだろうって、思ったんだ。

いつかは離れることくらい分かっている。

けれどこんな形で終わりにはしたくなかった。

永遠の別れではない。

会いに行けば会える。

けれど……

「さぁ。行こうかアキト」

「――――はい」

next

第178話【嘆き、悲しみ、そして別れ】

「あれ、阿笠は？」

予鈴が鳴り授業が始まろうとしているとき、前の席の阿笠がいないことに気づいた烈が近くの生徒に尋ねた。

「戻ってないよな」

「な」

さっきまで寝ていて今起きた烈は、まだ寝ぼけている頭を回転させようとしている。

秋人のクラスへ行ったはずの阿笠は結局戻って来ない。

「え、保健室？……でもないよなぁ」

そうこうしているうちに教師が入ってきて授業は始まってしまった。

点呼のさい、阿笠がいないことを誰もが不思議に思い教師が烈に尋ねるが、何も知らない烈に答えられるはずもない。

行き先も行方も分からず、とりあえず烈は保健室に行ったとだけ言っておいた。

その頃の阿笠というと、タクシーの中にいた。

どこへ向かうかなんて一目瞭然だろう。

財布と携帯はズボンのポケットに入っていたため、６組を飛び出したその足でそのまま空港へと向かっているのだ。

タクシーなんて高いし渋滞に巻き込まれたら終わりだが、いつ来るか分からないバスやら新幹線よりはまだマシかもしれない。

「はやくはやく！」

「任せな！」

運転手をせかしながら、阿笠はまだ行きませんようにと祈っている。

時はすでに１０時を回っている。

秋人の携帯は繋がらないものだから阿笠は来る途中月影家に寄って家の人に秋人がもう行ってしまったのか聞いた。

いたのは茉李亜で、昼頃に行くと躊躇しながら言っていた。

珍しくお礼も言わずに月影家を飛び出してまさに今向かっているというわけだ。

平日の昼間だからほとんど混んでおらず予想外にもはやい。

このまま何事もなく着きますようにと願いながら、阿笠は秋人のもとへと行くのだ。

「ところでなぜご家族に見送りはいらないって言ったんだい？」

「え？ああ、会いたいときには会いに行けば良いと思ったんで」

空港で秋人と監督は椅子に座りながら便を待っている。

とりあえず最小限の荷物だけを詰めてきたが、また送ってもらうことにしたようだ。

「会いに行けば？日本とドイツがどれだけ離れてるか知らないわけ

じゃないだろう？」

監督は意外な秋人の答えに驚いている。

秋人の返事も最もだけど、理屈的には監督の反応のほうが正しい。

「でも、世界って狭いんです。最近そう実感して」
「ほう。ドイツには何回か？」
「一度だけ。遠征で多少は外国を回ってますんで」
「ああ、全国選抜だったね」

秋人は星陵高校の制服を着ている。

どうせ今日は向こうに行ってすぐ学校に行くわけではないのだから私服でも良いものを、どうしても着たかったようだ。

秋人の編入する学校は寮も備わっているため、秋人はそこに入ることになった。

学費から生活費から制服代から何まですべて学校側が出してくれるという、願ったりの好条件である。

そこまでして秋人を迎え入れたいという監督の気持ちがよく伝わっ

てくる。

磨けば光る原石のような存在を見つけられたことが嬉しいのだろう。

「その英語力は遠征で身につけたのかね」
「いえ、俺１０歳くらいまでアメリカに住んでたんで」
「ほう。それはすごい。ドイツ語は話せるのかい？」

今更監督はそんな質問をしてくる。

最初に英語で会話してきたためずっと英語だったのだ。

遠征しただけで話せるようになるならみんな遠征するだろう。

「Ｊａ．」
「本当か！こりゃすごい。ドイツには一度しか来てないんだろう？」
「大学で第二外国語をドイツに――――――――あ、いえ。ドイツ語好きなんで」

秋人はついポロッと自分の過去を言ってしまいそうになるが、なんとか必死に誤魔化す。

不自然には感じた監督だが特に突っ込んできたりはせずに流している。

大学で第二外国語をドイツ語にしていてちょっと興味あったから独学してみた、なんて言えないだろう。

サッカーでドイツに留学するってだけでもニュースなのに、過去までバレたらおしまいだ。

必死に隠してきたこれまでの日々が無駄になる。

「じゃあ何の心配もいらないんだね」

言葉の壁もなく、一度もうドイツに訪れていて、それでいておそらく編入先の高校でもトップレベルの才能。

何も困ることはない。

そう、困ることなんてないんだ。

「ええ。よろしくお願いします」

「そろそろだな。行くか」
「はい」

2人はゲートへと向かう。

ついに日本から飛び立ってしまうのか。

静岡からタクシーできていた阿笠はようやく空港に着いた。

急いで中に入り、まだ便が出ていないことを確認して、キョロキョロと見回した。

多国籍の人間がぞろぞろといる。

こんな中から秋人を探し出すというのか。

と、そのとき今まさにゲートを潜ろうとしていた秋人を見つけた。

「秋人ぉーーーー!!!」

阿笠は周りの目など気にせずになりふり構わず思いきり叫んだ。

同じ制服を着ているのだ、見間違えるはずはない。

ボーッとしていた秋人は全く気づいていなかったが、監督を含めほとんどの人が阿笠のほうを振り向いた。

「あっ……」

監督は思わず声を上げた。

監督のリアクションに気づいた秋人は我に返り、みんなが見ているほうをようやく振り向いた。

その瞬間、秋人は目を丸くする。

「何やってんだよ秋人！そんなん聞いてないぞ！！」

そんな秋人に阿笠は思いきり叫び続ける。

「一緒に優勝しようって言ったのは嘘なのかよ！！」

ザワめく空港。

けど便に乗ろうとしている人たちの列に並んでる秋人たちは立ち止まれるわけがなく、どんどん進んで行く。

秋人は一瞬だけ悔しそうな顔を阿笠に見せたが、すぐに前を向いて歩いている。

少しずつ見えなくなっていく秋人に、それでも阿笠は言う。

「お前がいなくてどうすんだよ!!学生のうちは一緒だって言ったの誰だよ!!」

悔しさ

悲しさ

憎しみ

怒り

切なさ

どれも違う。

「っ……約束果たしもしないでこんなんあんまりじゃないかよぉっ！！」

阿笠は詰まり詰まりも必死に気持ちを伝えようとする。

中学で知り合い、コンビとして活躍し、高校で一緒に全国優勝を成し遂げた。

今度は佑亮がいなくとも優勝してみせると笑っていた2人

誰もが期待していた。

秋人は何も答えず、そのまま姿を消す。

見えなくなっても阿笠は秋人のいた軌跡を見つめて、嘆いている。

「っ……ばか野郎っ……」

阿笠は膝を床につけて、震える手を抑えようとしている。

アナウンスさえ掻き消すような阿笠の声を、誰もが聞いていた。

誰もが何もすることはできなかった。

彼が阿笠だと、相手が秋人だと知る人もいるだろう。

有名人を写真で撮る空気の読めない人間もいる。

しゃがみこんだ阿笠は、行き交う人々にだんだんと埋もれていく。

カツカツと響くヒールの音やキャッキャと楽しそうな声も今の阿笠には届いていない。

悲しみすら通り越して、阿笠の瞳には光はなかった。

相棒がいなくなった、その事実だけが突き付けられて生気を失っている。

「良いのか？アキト」
「……」
秋人はキャリーバックを引いている手に力を込めた。
ギュッと握りしめているからか手汗をかいている。
「アキト？」
監督は秋人の顔を覗き込んだ。
秋人は悔しさを噛み締めながらも前を見据えている。
「……良いんです。これで」
誰からの連絡も取らないと携帯は電源を切り家へ置いてきた。
みんなで撮った写真も持って来なかった。

何もかも捨て、今ここにいる。

ガラス越しに見える大きな飛行機

飛行機くらい何回も乗っているのに、この気持ちは何だろう。

秋人は飛行機を目の前にして瞳を閉じた。

next

第179話【残された者】

「君、大丈夫かい？体調でも悪いのかね」
「……や……」

阿笠が十数分くらいそうしていると、通りかかった中年の男性が声をかけてきた。

そのとき、空港内にアナウンスが流れた。

「お客様のお呼び出しをします。阿笠大悟様、阿笠大悟様。いらっしゃいましたら至急……」

阿笠へのアナウンスだ。

「え……俺……？」

阿笠は自分の名前が呼ばれて少し驚いているようだが、動く力も出てこずにそのままでいる。

「君のことかい？連れて行こうか」
「……」

阿笠は返事をしなかったが、結局その優しい男性が受付まで連れて行ってくれた。

受付まで行くと、どうやら阿笠に電話がきているようだった。

阿笠は男性に軽く会釈だけして、とりあえず受話器を手にする。

が、正常ではない阿笠はその受話器を落としてしまう。

見かねた受付嬢が電話の相手に阿笠が出れる状態ではないことを知らせた。

『は？どういうことです？』

「分かりませんが、体調がお悪いのか平常ではございませんので電話に出れないようです」

『……とにかくそこにいるんですね？』

「はい」

電話主はどうやら烈のようだ。

どこから嗅ぎ付けたのか阿笠が空港に行ったことを知ったらしい。

大方夏実だろう。

『〇〇便はもう出たんですね？』

「はい」

『じゃあ彼に帰ってくるよう言ってください』

「阿笠様、愛川様が帰られるようにとおっしゃっておりますが、」

彼女がそう言っても阿笠は空返事をするだけだ。

このままでは埒があかないため、烈は受付嬢に学校の住所をメモらせた。

そして警備員にタクシー乗り場まで連れて行ってもらうことと運転手にそのメモを渡して欲しいと彼女に伝え、烈は電話を切る。

さすがにここまで迎えに来たのでは帰りが遅くなる。

受付嬢は警備員を呼んで烈の指示通りにして欲しいと頼み、阿笠は警備員に連れて行かれた。

ここまで無気力になってしまうなんて、なぜだろう。

春樹たちだって状況は同じだ。

けれど、阿笠はこうして空港までやってきて姿だって見えたのに、一言も会話をすることができなかった。

悪かった、でも

頑張れよ、でも

なんでも良かった。

何か言ってくれさえしてくれたらそれでも良かった。

なのに、顔を反らされて阿笠の声も虚しく響くだけの空間は、阿笠を壊すのに十分だった。

阿笠が弱いって知ってるくせに最後の最後にこんな仕打ちなんてあんまりだ。

「あれ、お客さん阿笠大悟？」

半地点くらいまで走ったあと運転手が阿笠に尋ねた。

テレビとの印象が違いすぎて気づかなかったようだ。

「うちの息子もサッカーやってましてねぇ、ああ、まだ小学生だけど。阿笠くんの大ファンなんだよ」

運転手は楽しそうに話すが、阿笠はサッカーという言葉に目眩がする。

あからさまに体調の悪そうな阿笠に気づいた運転手は、横になるように言った。

阿笠は言われた通りに横になると、そのまま眠りに着いた。

そのままタクシーは走り続け、ようやく学校までやってきた。

長い距離を走って運転手は肩をコキッと鳴らす。

校門には烈が立っていた。

その前までタクシーは行き、阿笠に着いたよと声をかけようとした運転手に烈は窓を軽くノックした。

運転手は窓を開けて、なんだい？と尋ねた。

「阿笠の友達だけど、悪いけど起こさないでやって」

「でも、」

「俺が払います。いくらすか？」

烈は何万という大金を運転手に払う。

そうして後部座席のドアを開けてもらうと、烈は寝ている阿笠の上半身を起こして手を自分の肩に回し、運転手にも手伝ってもらいながらそのまま頑張っておんぶの体勢となる。

阿笠を背負いながら烈は運転手に言った。

「ありがとうございます。それじゃあ、」

そして烈は学校の敷地内へと入って行った。

タクシーの運転手はよく分からない光景にポカンとしているが、とりあえず金はもらったものだから帰ることにした。

昼休みを終え午後の授業が始まっていて、ちょうど阿笠のクラスは体育をしている。

阿笠のクラスということは、隣のクラスである秋人のクラスも体育をしているわけだ。

女子は体育館で何かをしていて、男子はサッカーをしている。

もちろん烈も２０分くらい前まで体育に参加していたから、上は体操服で下はジャージを履いている。

言い訳を考えるのも面倒だから烈はとにかく他の生徒や教師に見つからないようにこっそりと連れていく。

体育から授業に参加している春樹も2人には気づいていない。

寝ているというよりは半場気を失っていると言ったほうが正しいだろうか。

可哀想に、ようやく麻冬から旅立ってサッカーに生きようとしていたのに。

けれど、秋人がいない以上部長は必然的に阿笠になる。

その阿笠がこんなでは星陵サッカー部はどうなってしまうのだろう。

烈も成長した阿笠にホッとしていた矢先、こんな展開になるとは予想だにしなかった。

「……月影のばか野郎」

烈はポツリと呟いた。

誰も秋人を責める権利なんかない。

秋人はただ純粋に頂点を目指そうとしただけなのだ。

秋人のサッカー留学を喜ぶ人が友達にいないということは、何とも

寂しいことだろう。

素晴らしいことなのに名誉なことなのに、それでも責めるというのか。

烈は阿笠を保健室へと連れていき、養護教諭がいないから勝手に阿笠をベッドにおろした。

掛布団をかけてやり、烈はベッドの側にある椅子に腰をおろす。

そういえば、この前もこんなことがあった。

頭を打った阿笠をこうして起きるのを待っていたっけ。

あのときは珍しく阿笠とケンカ中だった。

「……なぁ、阿笠。お前頑張ったのになぁ」

しゃがれた声で烈は言う。

サッカーだって、麻冬のことだって阿笠は頑張った。

怪我をしてまでカバった秋人が阿笠を見捨てていくなんて……

いや、それを言ったら秋人が悪者になってしまうが、それでもせめて……

第一阿笠は何のために麻冬と別れたのか。

秋人との幸せを願ってのことなのに、どうしていなくなってしまったのか。

これじゃあ麻冬を手放した意味がない。

「なんでいつもいつも上手くいかないんだろうな……」

人生なんてそんなもんだよ、って言う人もいる。

はたから見れば阿笠の人生は恵まれたように思えるだろうし、不幸だなんて言わせないだろう。

けど、そんな阿笠だから、そんな環境や性格や容姿や才能だから悲しい思いをするこっだってある。

人から見たら小さなことが阿笠には大きくて、でもワガママなんて言わずに溜め込んで、いつもそうやって自身を追い詰めてきた。

弱いのに、脆いのに繊細なのに、それでも弱音は吐きたくなくて本音も隠したい。

贅沢な悩みかもしれない。

秋人がいないだけでこれなんてファンはがっかりするかもしれない。

でもそんなことはどうだって良いのだ。

大事なのは、これが阿笠だっていう現実。

「……優勝しなきゃなのにな。あー……本当ばかだよ、月影」

フランスよりも阿笠を選んだ烈にはきっと秋人の気持ちは分からないだろう。

いつか掴める未来ならそれは今でなくて良い、それが烈の考えで秋人とは逆だ。

それはそうと、今阿笠は気を失っている中でいろいろなことを無意識に回想していた。

もちろんそのほとんどが秋人との思い出。

中学選抜で初めて会ったときのこと

中学選抜でのコンビ

中学で敵として闘い

高校で同じ土を踏み

佑亮とともに優勝し

県選抜に選ばれ

全国選抜に選ばれ

遠征して闘って

勝って負けて

そして喜んで悔しがり

麻冬と付き合い

秋人のカミングアウト

秋人の過去

県大会を優勝し

様々なイベントがあり

傷ついて傷つけて

泣いて笑って怒って

そして高校に入って初めて敵として闘い

お互いキャプテンとして最後まで健闘した

それから麻冬との別れ

そして秋人との別れ

頭の中にごちゃごちゃに浮かび上がる様々なシーンが出ては消え出ては消えていく。

数えきれないほどの思い出を背負っている。

出会ってからまだ5年しか経っていないけど、時間を感じさせないほどのものがあった。

喜んであげなきゃ。

秋人が夢に近づけた瞬間なのだから。

今度こそ誰にも邪魔されることなく秋人は夢を掴めるんだ。

なのに俺は、不満を言うだけで快く秋人を見送ってやれなかった。

あと数分前に空港に着いてれば、ゲートをくぐる前の秋人を見つけていればどんなことをしてでも行かせなかった、なんて考えてる自分がいるなんて。

誇りなことなのに。

せめて高校卒業してから行って欲しかったって思うのはワガママだろうか。

ワガママだってなんだって良い。

嫉妬だと思われても良い。

それでも良いからあの手を掴むべきだった。

秋人――――

next

第１８０話【散りばめられてゆく恋心】

「なんだ、愛川はどうした」

体育が終わり生徒たちが整列していると、体育教師が言った。

２クラスもあると誰かが抜けてようが分からないものだが、烈の目立つ身なりに気づかない人はいない。

「あれ、そういえば」
「体育途中からいなかったよな」

クラスメートたちがザワつきだす。

烈は保健室にいるのだからいなくて当然だ。

だが勝手に抜けたから誰もそのことを知らない。

「あ、いた！」

誰かが５０メートルくらい先から歩きながらこっちに向かってくる烈を指差した。

ほとんどの人がそっちのほうを振り向くと烈は視線に気づき、ヘラヘラしながら
「やっほ〜」と手を振る。

それでも走らない烈に教師は何やってるんだと言う。

「腹壊したから便所行ってたんすよー」
「ったくー。せめて一言言ってけって」
「すんませーん」

ようやく烈も列に並び、授業は終わった。

このあともまだ授業があるからみんな急いで更衣室で着替えをすませて教室へと向かう。

それは春樹たちも例外ではなく、更衣室にいるとき春樹が烈に話しかけた。

「阿笠は？体育いなかったみたいだけど」
「んぁ……ああ、誰かさんの親友がいなくなったから倒れちまったよ」
「……え？！」

春樹は着替えていた手を止めて烈を凝視する。

「よくは知らないけど、こいつ空港に行ったんだ。月影に会えたかも分からないけどな」

「な、なんで」

「正常じゃないって空港の人が電話越しに言ってた。……タクシーで連れてきてもらって、ここに着いたときには気を失ってたよ」

烈は淡々と着替えながら春樹に説明していく。

「……秋人が阿笠に何か言ったの？」

「さぁな」

烈はロッカーをパタンと閉じる。

そして、じゃあなと言って更衣室を出ていこうとした。

「阿笠のとこ行くんだろ？！俺も行く！！」

「え、」

「俺も……っ……」

春樹はとても悔しそうな顔をしている。

春樹があのときに行けば確実に間に合っていた。

たとえ夏実たちに引き留められようとも、行けば良かったと春樹は後悔している。

秋人がどんなだったか、どんな顔をして何を言っていたのか、それを確かめたいのだろう。

「……分かった」

春樹の気持ちが分からなくはない烈は、春樹が着替えるのを待つことにした。

目を覚ましていたら良いと思う半面、何て声をかけたら良いか分からない。

秋人の穴を埋めるのはお前しかいない、なんてそんな言葉はかけたくない。

秋人がいなくても大丈夫だよ、とも言いたくない。

秋人がいたという事実を連想させたくないのだ。

なかったことにしたいとは言わないけど、秋人の存在は大きすぎてきっと秋人を少しでも思ってしまったら今度こそダメになってしまいそうだから。

せっかく立ち上がれたのに。

どうして立て続きに起こってしまうのだろう。

「麻冬、大丈夫？」

こちら女子の更衣室では、夏実が心配そうに麻冬に声をかけている。

麻冬とて秋人がいなくなったことによる被害者と言える。

「ん……、平気」

愛想笑いをしながら麻冬はそう答えるが、麻冬は体育中に怪我をし

てしまった。

休憩中得点板の隣にボーッと立っていた麻冬に、ボールを追いかけてきた女子生徒が思いきりぶつかってきた。

何も見ていなかった麻冬は腕を得点板にぶつけて切ってしまったのである。

かなり血が出てきたが、麻冬は大丈夫大丈夫と言ってタオルで傷口を押さえることしかしなかった。

夏実が保健室行こうと言っても、良いとしか言わずに。

あまり動きたくなかったのだろう。

頭が回らないせいで。

「ほら、保健室行くよ」
「えー……」
「良いから」

ほぼ強制的に夏実は麻冬を保健室に連れていく。

だが今行くと彼らと鉢合わせになる。

ベッドの回りにカーテンをしめていれば姿は見えないかもしれないが、声を出してしまえばバレる。

阿笠が今そんな状態なのを見るのは辛いだろう。

「良いわよ夏実、授業行っても」

保健室の前で麻冬は夏実にそう言う。

「本当にちゃんと手当てするんだよ？てかちょっと休んでなって。麻冬……辛そう」

夏実は心配そうに言う。

「大丈夫。してもらうから」

「絶対だよ」

「うん。ほら、行きなって」

麻冬はヒラヒラと手を振りながら、心配そうな表情を絶やさない夏実を見送る。

そうして麻冬は保健室へと入った、が養護教諭はいない。

「……先生いないのかぁ」

麻冬はポツリと呟いて、ソファーに腰をおろした。

誰かが入ってきたことに気づいた烈がカーテンの隙間からその人物を見ると、それが麻冬だと知り春樹に耳元で囁いた。

「やばい、麻冬だ。良いか、声出すなよ」

「？麻冬なら良いじゃん」

「良いから」

春樹は訳が分からなかったが、烈があまりにも慌てていたものだからとりあえず従うことにした。

一向に起きない阿笠をよそに、２人して隙間から麻冬を覗いている。

養護教諭がいないから仕方なく自分で手当てしようとしているが、

なかなか動きを見せない。

とりあえず血は止まっているけれど細菌が入るといけないから綿棒で消毒しようとしているが、いつまで経っても「しようとしている」だけである。

怪我している左腕、そして綿棒を持っている右手、麻冬の肩がにわかに震えている。

烈たちは、麻冬の頬にツーッと流れた涙を見逃さなかった。

麻冬は涙を拭きもせず、力の入らない手から綿棒は落ち、座っている腿にうつぶせになりながら声を押し殺して泣いた。

「ま……ふゆ？」

春樹は麻冬には届かないくらいの小声を出す。

秋人がいなくなってショックなのは、何も阿笠や春樹だけではない。

麻冬だって倒れたいくらいなのに、それでも誰にも気づかれないよ

うにこんなところで泣いているのだ。

阿笠が背中を押してくれたのに、康介が頑張れと言ってくれたのに、その相手がいなくては意味がない。

「秋人ぉ……うぅ……」

鼻声で秋人の名を呼ぶ。

秋人には届かない声。

「なんで……っ……意味ないよ、阿笠……これじゃ意味ないよ……」

突然そこに阿笠の名前が出てきて春樹は不思議に思い烈をチラッと見た。

烈はいたたまれなくなったのか、軽くうつむいている。

「せっかくあたしの幸せ願ってくれたのに……あたし、……どうしたら良いのぉ……」

人気のない保健室、夏実にも言えなくて、でも春樹みたく現実逃避できなくて溜め込んでいた結果がこれだ。

悲しいなんて言葉では済まされない。

ようやく麻冬が秋人に告白できるときがやってきたのに、言う機会がないとは、これも運命なのだろうか。

「秋人～……」

麻冬の言葉から、春樹は何となく予想がついた。

烈に、もしかして……と声をかけると烈は黙って頷いた。

「そんな……」

なんて悲惨な道を辿っているのかと春樹は口を押さえた。

「いつ？いつ……」
「昨日の放課後」
「きっ……」

昨日の今日

昨日の今日でこんな思いをしなければならないのか。

もし阿笠が麻冬を振るのが昨日でなければ、秋人がいなくなると知っていればどうしていただろう。

それでも麻冬を振っていたのだろうか。

「阿笠っ……」

春樹は阿笠のほうを振り向いて胸ぐらを掴んだ。

それでも起きぬ阿笠に、掴む手に力を込める。

「春樹！」

何をするのかと烈も振り向く。

「なんで……なんでっ……」

責めたいのに責めきれない。

春樹は阿笠の上半身にひれ伏して、肩が震えながら込み上げてくる涙を堪えている。

「春樹……」

烈には何も言えなかった。

麻冬の気持ちを考えれば、阿笠のしたことが正しいと言える自信がなかったのだ。

誰もこんな未来を予想してはいなかった。

阿笠も烈も、麻冬と秋人が結ばれるものだと信じていた。

春樹は、秋人が諦めると言った以上麻冬と阿笠の恋に口を出すつもりはなかった。

3人がそう望むならそれで良いと、そう思っていた。

飛び交う気持ちたちは重なることなく、散りばめられていくだけだった。

next

第１８１話【悲しみの理由】

「櫻井と雪原はどうした？」

授業が始まるやいなや、教師は夏実にそう尋ねた。

「麻冬は怪我したんで保健室です。春樹は、……」
「あー春樹体育やったせいで体調悪くしたよ。なぁ」
「おお。午前からずっと調子悪そうだったしな」

夏実が言葉に詰まっていると、他の男子がそう言った。
夏実が彼らのほうをチラッと見ると、舌をベッと出して笑っている。

カバってくれたのだろう。

２人がいないことで何かを言われるのは夏実だから。

「まさか月影追ってるとか言わんだろうなぁ」
「え」
「まぁ月影もあまりに急な話だったけど」

教師は頭をポリポリかきながら言う。

「午前中阿笠もいなかったしなぁ」

「あ……」

夏実はそのことを聞いて、もしかして空港に行ったのかもと思った。

そうしたら秋人に会えたんじゃないのか、なんて期待さえしてしまう。

今すぐ阿笠に会いに行きたい衝動にかられるが、とりあえず放課後にしようと夏実は自身をなだめる。

「でもさぁ、阿笠いなかったよな」

「いなかったな、体育」

ふと近くの男子たちがそんな会話をしてるのが耳に入った。

朝飛び出して、昼過ぎになっても帰ってこないのは少し遅くないだろうか。

もしかして後を追って一緒にドイツに行ったりしてないだろうか。

そうなったら麻冬は……どうなるのだろう。

彼氏も最愛の人もいなくなる悲しみは計り知れない。

麻冬は結局授業がほぼ終わろうとしている頃になって教室に戻ってきた。

「おぉ雪原、大丈夫か？」
「あ、はい」
「櫻井はどうだ？」
「はっ？」
「保健室で寝てたんだろ、櫻井」

教師にそう言われて麻冬は顔を青ざめた。

帰り間際にベッドにカーテンがかかっているのは見たけど、まさかあそこに人がいるなんて思わなかったようだ。

もし聞かれていたら……しかも春樹に。

「静かだったんで……気づかなかったです」

麻冬は重い頭を抱えてよろめきながらも席に着く。

結局あと5分で授業終わりのため麻冬は教科書すら出さずにうつぶせになっている。

どうせなら授業に出なければ良かったものの。

でも、休み時間になったら人が来てしまいそうだったからそうもしてられない。

泣いてるところなんて見られたくないものだ。

連絡が着かない人に思いを伝えるにはどうしたら良いか。

諦める

帰ってくるのを待つ

追いかける

しかないだろう。

けれど諦めきれるほどの半端な気持ちではなく、いつ帰ってくるか分からないまま、ドイツになんてそうそう行けるものでもない。

ドイツには行けても、どこの高校かどこの都市かそれさえも分からないのだから、簡単に見つけれるわけがない。

会いに行きたくても行けない、そういう距離。

ドイツでサッカーしてドイツでプロになれば、日本にいるより上達だってするだろう。

確かにまたとないチャンスで、これを逃す理由などない。

頂点を目指している秋人に訪れた最大の転機なのだ。

それを、たかが友達との約束があるからと言って断れるはずがなかろう。

チャンスが何回もくるとは限らない。

秋人が麻冬から手を引くと言った以上、秋人が麻冬にドイツ行きをどうしても話さなければならない義務はない。

ましてや阿笠の彼女と思われてるんだ、当然だろう。

そう、別に言わなきゃいけない決まりなんてない。

けど、それでも……。

未だ目覚めぬ阿笠を前に男たちはもはや脱落している。

これから部活が始まるというのに、どうしたら良いか。

「とりあえず……春樹は部活行けよ」

「でも阿笠は、」

「サッカー部には言っとくから」

烈はため息をつきながらそう言う。

そうして2人は保健室を出ていった。

春樹とわかれ、サッカー部の部室へ向かおうとしている烈は下駄箱で村松を見つけた。

「むら！」
「あ？おう、烈じゃん」
「あのさ、……阿笠なんだけど……」
「うん？」

烈はなかなか言えない。

突然秋人がいなくなってただでさえサッカー部は混乱しているというのに、阿笠まであんなだなんて言えるわけがない。

それでも言わなきゃいけないけれど、なかなか言葉が出てこない。

村松に催促されてようやく烈は重い口を開いた。

村松といえば秋人阿笠について3番目の存在のような奴だ。

村松に言うのが一番だろう。

だが、村松は烈の口から信じられないことを聞いて目を見開きながら震える声で反論する。

「な……んだよ、それ」

「目覚まさないんだ。あいつ、正気じゃなくて……」

「ふざけんな！」

そう叫んだかと思えば、村松は保健室へと猛ダッシュした。

烈もとりあえず村松のあとを追う。

保健室では、烈たちがいなくなった直後に起きた阿笠が窓の外を眺めていた。

焦点の合わない目で、暗い目で何かを見ているわけでもなくただボーッとしている。

「阿笠ぁ！」

そんなとき勢いよく保健室のドアが開いた。

それでも阿笠は聞こえてないのか身動きしない。

村松がカーテンを開けて顔を出す。

「阿笠、起きたのか……」

烈が少し驚いた顔をしながら呟いた。

「おい阿笠！ふざけんのも大概にしろよ！」

村松の罵声にも阿笠はピクリともせず。

「こっち見ろよ！」

村松が力強く阿笠の肩を掴んでこっちを向かせようとすると、力の入っていない阿笠の体はそのまま向かされたほうへとよろめき、尻

餅を着いた。

転んでも起き上がるわけでもなく、何かを言うわけでもなく、生気のない瞳で床を見つめるだけ。

「あ……阿笠？おいっ、阿笠っ」

村松はしゃがみこんで阿笠の両肩を掴みながらユラユラと揺らす。

「……え？」

ようやく反応したが、阿笠はそれ以上何も言わずにただ村松を見ている。

烈はそんな阿笠を見て思わず口を手で覆う。

涙が込み上げてくるのを必死に堪えているようだ。

「しっかりしてくれよ、阿笠ぁっ……」

村松もやっと阿笠がどれだけ危険な状況なのか分かったようで、阿

笠の肩を掴んだまま顔を下げる。

「お前がいなきゃうちは終わりなんだよ……副部長だろ？部をまとめてくれよ……」

今回のことでショックを受けてる部員も多々いる。

秋人の留学を喜ぶ反面、星陵サッカー部に不安を抱く部員だっている。

村松だって、秋人がいなくなって平気なわけではない。

「なんで？秋人は？」

阿笠は薄ら笑いをしながらそう言う。

「秋人がいるでしょ」

記憶が混乱しているのか、とても冗談を言っているようには見えない。

「阿笠……月影は……、……お前見送ったんだろ？」

烈がそう言うと、阿笠は表情を一変して暗くする。

「あー……秋人……いなくなった」

「あ、阿笠……」

「俺……叫んだ。でも秋人……無視した」

無視はようやく阿笠から手を離し、立ち上がって烈の横に並んだ。

まだ座りこんだままの阿笠は、まるで人形のように足を伸ばして手をだらんとさせている。

どこから見ても正常じゃない阿笠にかける言葉が見つからない。

「約束した……のに、何も言ってくれなかった」

そうして、阿笠の生気のない目から涙がツーッと流れる。

「なんでも良かったんだ……。行ってくるでもごめんでも、頼むでも……」

阿笠は両膝を立て、その上に腕を組んで頭をそこに下げる。

「なんでも良かったんだ……」

村松はグッと眉間にしわを寄せていて、烈はもう顔を反らして手で覆っている。

放課後の保健室という人気のない場所には、阿笠の消えてしまいそうな悲しい声だけが響いていた。

next

第１８２話【中尾の提案】

「村松、阿笠知らん？」

まだ来ていないのが阿笠だけになり中尾が村松に尋ねた。

「ああ……ちょっと阿笠のことで２年に話が……」

「お？」

結局阿笠は部活には来ない。

村松もあんな阿笠を見て部活に来いとは言えず、烈に阿笠を頼んで保健室から出てきたのだ。

「とりあえず１年、先に始めといて！メニューはいつもと一緒で良いから！」

村松が１年にそう言うと、１年たちは元気に返事をしてウォーミングアップを始めた。

村松は隅のほうに２年部員を集め、とにかく阿笠の説明をしようとするが何と言ったら良いか分からずに言葉に詰まる。

「なんだよ？まさか阿笠まで留学するなんて言わないよな」
「いや……」
「じゃあ何？」
「阿笠は、……」

サッカーできる冗談ではありません、なんて言えない。

けどその通りだから言わざるをえないのだ。

きついだろう。

「……今サッカーできない」
「どういうことだよ？」
「正気じゃないんだ。記憶の混乱あるし、精神がいかれてる……」

いかれてる、なんて酷な言葉かもしれないが壊れてるよりもっと上だ。

「は？！」
「意味分かんねぇよ、それ」

2年部員たちは不平を言うが、さっきの保健室での阿笠とのやりとりを話すと、みんな黙り込んでしまう。

それに加えて、阿笠が秋人に空港で無視されたことなどモロモロ話せるだけ話した。

みんな阿笠が精神的に弱いことを知っているし、黄金コンビである2人にそんなことがあったとなれば文句も言えないだろう。

阿笠の心潰すのに十分すぎるほどだと分かっている。

「……でも、阿笠は俺らのエースだ。秋人がいない今あいつがいなきゃ成り立たない」

中尾が言った。

「頼りになんのは阿笠しかいないだろ。……何とかなんねぇのかよ」

ずっとあのままだなんて誰も思ってはいないだろうけど、でもそれがいつまでなのかも分からない。

秋人から連絡があるまで待つなんて言ってたら遅い。

「……頼ってばっかだから悪いんじゃねぇの？」

中尾の言葉に反応して村松は言い返す。

他の部員たちがみんな村松のほうを見た。

「俺らが阿笠に……あの2人に頼ってばっかだから怖いんじゃねぇの」

「な、なんだよそれ」

「秋人がいなきゃ優勝できない、1人じゃ無理。……って、そう思ってんじゃねぇのかって言ってんの」

県レベルの実力で、全国クラスにも筆頭はするがトップクラスではない村松。

ナンバー3の村松が一番あの2人を見ていた。

自分だったらきっと秋人のアシストを最大限に利用するなんて、秋人のスピードについていくなんて不可能。

そう思っているから、阿笠のすごさは見に染みて分かる。

だから不滅のコンビのはずだったのに。

「俺だって……あの2人がいたら守備も攻撃も問題ないって思う」

前に秋人が抜けて望んだ県大会ではボロボロだった。

阿笠がどんなに点を決めても、周りがそれに答えずにバンバン点を取られる。

全国でも優勝候補の彼らがたかだか県予選であんなでは許されない。

阿笠が抜かれることはないにしても、その阿笠にまずボールが回らなければ始まらない。

苦労したろう、阿笠も。

秋人の不在でうろたえている部員たちをまとめるのは。

だが阿笠は、そうだったから今あんな状態になっているのではない。

秋人がいなきゃ無理とか1人では無理とか、そんなことを考えたわけではない。

ただ秋人と一緒に全国の舞台で栄光を掴みたかった、ただそれだけ。

「帰ろうか、阿笠」

「んー……」

あのあと、烈はとりあえず阿笠をなだめて椅子に座らせた。

もう泣いてはいないけど、その顔からはまるで生きる気力がなくなっているように感じられる。

「まだいたい？」

「んー……」

空返事しかしない阿笠に、烈はこう言った。

「……サッカー部に顔出そうか？」

まだ練習が始まってから1時間ほどしか経っていない。

もともと怪我しているからそんなに激しくはできないけど、今からまだ間に合う。

「サッカー……」

阿笠はサッカーという言葉に反応したのか、突然椅子から立ち上がった。

阿笠？と少し不思議そうな顔をしてる烈に、阿笠は言った。

「サッカーやんなきゃ。今から行く」

正気に戻ったのかと喜ぶのも束の間、そういうわけではなかった。

記憶のどこかにいるつかさとの約束が、こんな状態になってもなお阿笠にサッカーをやらせようとしているのだ。

プロになる。

そんなつかさとの約束のために……

「烈も来る？」
「え……？……あ、ああ、行く」

生気のない顔に笑みを浮かべながら阿笠は尋ねた。

今まで部活に来るかなんて聞いたことなかったのだが、そこは本能が察したのだろう。

烈がいなきゃ何かあったときに困ると。

自覚はなくとも無意識に自分が窮地にいることは分かっているようだ。

2人は保健室を出て教室へと戻る。

荷物がまだ教室にあるし、何より烈は体育のときの服装のままだ。

もう誰もいない教室にポツリと置いてある2人分のカバン。

阿笠は保健室で本音を言ったきり、何を聞いてももう何も言わなかった。

喋れないのか喋りたくないのか、どちらにせよ話す気力がないのだろう。

それなのにサッカーをやろうとするなんて危険すぎる。

何とか1人で歩けはしているが、よろよろと危なかしい。

そんなでもとりあえず部室へと向かう。

「あれ……副部長？」

部室に向かって歩いている阿笠に気づいた練習中の1年部員がポツリと呟いた。

すぐ側にいた村松はその言葉に反応してその方向を見る。

「……愛川！」

村松の叫び声に阿笠を除いてほとんどの部員と烈が振り向いた。

村松はタッと阿笠のもとへ駆けていく。

烈は立ち止まるが、そんな烈に気づいてないのか阿笠はそのまま歩いて部室へと入る。

パタン、と閉められた部室を見た2年部員たちが村松と同様烈のもとへと走る。

何がなんだか分からない1年部員たちは練習を中断してポカンとその光景を見ていた。

「なんで……阿笠っ、」
「サッカーやるって」
「で、できんのか？」
「できないと思う」

烈はすっぱり言う。

「じゃあなんで連れてきたんだよ？」
「違うよ、阿笠が俺を連れてきたんだ」
「え？」
「……阿笠にはサッカーをやらなきゃいけない理由がある」

烈は重い口取りで言う。

誰かが聞き返すと、烈は軽くため息をついて言った。

「俺の口からは言えないけど……、だから練習休んでる暇なんかない。って勝手に脳が動いてるんだ」

「そんなバカな……」

「バカだけど事実だ」

烈も止めたい気持ちはやまやまだが、今の阿笠には何を言ってもダメだろう。

「ごめん、俺ついてて良い？どうせ阿笠まだ練習には参加してないんだよな」

「あ、ああ」

とりあえず村松は他の2年部員に練習に戻るよう言う。

彼らは戸惑いを隠せずにいるが、素直に従った。

まだ正常じゃない阿笠を見てない彼らはにわかには信じられないかもしれないが、普段お調子者の村松があんなに重そうな雰囲気で言っていたんだ、信じるほかないだろう。

練習が再び始まり、サッカー部に活気が戻る。

村松はそんなサッカー部を見て、ふぅ……と軽く息を漏らした。

「悪い、むら。無理言って」

烈は村松の背中を見つめながら言った。

村松は、その言葉には反応しなかったがこう言った。

「なぁ……何とかならねぇかな」

「え？」

「阿笠、何とか……なってくんないと困るんだ」

振り向かずに部員たちを見つめる村松の背中を見つめながら烈は黙る。

「……さっきみんなに阿笠に頼りすぎてんだって怒った。でも結局俺だってこうやって頼っちまうんだ」

どこか悔しそうな声に烈は耳を傾けるが、それでも何も言い返さない。

分かってるんだ、阿笠が立ち直らなきゃ、もう阿笠しかいないのだからダメなんだと。

それでも甘やかしてしまう。

「情けないよな……」

村松はポツリとそう言い、そのまま走ってみんなの練習へと加わっていく。

まだ阿笠が部室から出てこないから、烈はベンチに腰を下ろして練習風景を眺めた。

何年か前まではああしてサッカーやってたんだと思うと、懐かしいというより何だか少し侘しくなる。

もしあのままサッカーだけを見ていたら、この星陵高校で秋人と阿笠と自分の3人が活躍してたんだろう、とありもしない想像を膨らめた。

天才フォワードにカリスマミッドフィルダー、そしてヘルフォート

だ。

烈のキーパーはまさに地獄の砦と呼ぶに相応しい。

そんな未来だってあり得たかもしれない。

そうしていれば今の状況ももしかしたらなかったかもしれない。

「烈ー、やろ」

のっそりと阿笠がボールを1つ持ちながら歩いてきた。

烈は返事をして立ち上がり、2人は軽くパスを始める。

最初は軽くだがだんだんスピードを増していき威力も強くなっていく。

阿笠も久しぶりに1人じゃなくて楽しいのか口元に笑みを浮かべている。

サッカー部には入っていなく毎日練習はしていなくともまだサッカーに携わっている烈の動きは美しい。

その容姿からはとてもサッカーをやってるようには思えないから余計に見惚れてしまう。

たかだかパスしているだけなのに、ポーッと2人を眺めている部員さえいる。

豪快な阿笠のプレースタイルとも異なり、教科書のような完璧な秋人のスタイルとも異なり、ただただもうしなやかでかつ繊細で美しいのだ。

ボールのほうから烈に飛び込んでいくみたいに。

本職はキーパーだが、県レベルくらいならフォワードとしてもミッドフィルダーとしてもディフェンダーとしても通用できるだろう。

もし烈にディフェンダーをやらせたら佑亮とどっちが強いだろうか。

並ぶくらいの実力はあるに違いない。

パスをしていた烈と阿笠が今度はドリブルしたりしていると、2人を見ていた中尾が叫んだ。

「愛川！サッカー部入れよ！」

いきなり何を言うのかと、烈はピタッと動きを止めた。

「え？」

next

第１８３話【異国ノ地デ何思フ】

「おい！すげぇ日本人が来たってよ！」
「見に行こうぜ！」

ドイツ――――

秋人は今日は学校へは行かなかったものの、放課後サッカー部に顔を出した。

星陵高校と同じように日本一……いや、ドイツ一になる実力を持っている学校だ。

秋人の噂を聞きつけた学校の生徒たちがワラワラとグランドに集まって来る。

監督とともにみんなが練習しているグランドへ行き練習に混ざった秋人は、その才能を存分に発揮していた。

ボール捌きといいスピードといい正確さといい、何よりカリスマと呼ばれる所以を十分に見せつけていた。

「いやー驚いた。アキト、まさかこんなにすごいとは」

キャプテンの青年が秋人に近寄り、秋人の肩に手を置いた。

「そんなこと、」

「謙遜はいらないぜ。アキト」

「ナギ」

キャプテンがナギと呼ぶその男子は、ブロンドの髪に童顔な顔がなんとも可愛らしい小さな（サッカー選手の中では）青年だ。

秋人は彼を見るなり嬉しそうな顔をしながら、ナギが出してきた左手をいきのいい音を立てながら叩いた。

「ナギ！相変わらず小せぇな」

「久しぶりに会ったダチに言うことか！」

ナギというのは、秋人が前に中学選抜のときにドイツに遠征にきたとき知り合ったドイツ人である。

ナギがいた中学は全国大会常連校だったため、秋人たち選抜はナギの中学と合宿をともにしたのだ。

ナギはフォワードで、神がかりなそのスピードには驚かされたと秋人は笑って言っていた。

毎晩抜け出しては遊びに行っていた。

ナギと秋人と阿笠と、そしてもう1人ナチという男の子も一緒だった。

「ナチは？今日見てないけど」
「ああ、ナチは――――」

ナギが答えようとすると、キャプテンが叫んだ。

「ナチ！おせぇぞ！」

その言葉に秋人は反応し、そちらのほうを振り向いた。

そこにはナギと同じくブロンドの髪をした、秋人と同じくらいの身長の青年がいた。

「あれ、アキト？」

「お前……ナチか？」
「おー！久しぶりじゃん！」

ナチが秋人に駆け寄ろうと軽く走り出したが、秋人にたどり着く前にナギがナチの腹を思いきり殴った。

「いっ……」
「久しぶりじゃん！じゃねぇんだよ！このアホが！」

2人並ぶと背丈は違うものの本当そっくりだ。

2人とも綺麗な青い目をしていて、髪型さえ同じ。

「良いじゃん兄貴、ちゃんと部活には来てんだからー」

そう、2人は双子。

身長さえ同じだったらまったく見分けのつかない一卵性の双子だった。

顔の可愛らしさに加えて少しやんちゃで可愛い性格をしているナギにたいして、弟のナチは学校はサボってもサッカーだけはやりに来

るような人間。

「良かねぇ！お前がこなきゃ何か言われんのは俺だっつの！」
「さーすが双子」
「抜かせ！」

怒っているナギはナチに殴りかかるがナチはそれを止める、その繰り返しだ。

仲良く（？）じゃれあっている姿は昔からちっとも変わっていない。

「や、見違えた。背伸びたんだなナチ」
「だろ？」

中学のときはナチはナギと同じくらいの身長しかなかったようで、まさかこんなに伸びてるとは思っていなかったのだろう。

秋人は感嘆の声を漏らしている。

それにしてもここはナギたちの中学があった場所からはかなり離れている。

５００キロくらいは軽く離れているんじゃないか。

だからまさかこんなところで再会できるなんて夢にも思わなかっただろう。

「ダイゴは？」

ふとナチが秋人に尋ねた。

「いないよ」

「え？お前よく1人で来る気になったじゃん」

あっけらかんとナチは言う。

阿笠と秋人がなくてはならないコンビであることはナチにも十分分かっているらしく、プロんなったらドイツに来いよと言ったナチに阿笠は言った。

秋人と一緒なら行くよ

秋人は呆れた顔でバカと言っていたが、否定はしなかった。

「……日本にいたくなくなったんだ」

「え？」

ナチが聞き返したと同時に、コーチが笛を鳴らして集合をかけた。

秋人も一緒になって集まり、もう一員かのように扱われる。

ナギとナチといえばそのハイスピードを生かして双子ならではの息を合わせながらプレーをする、フェルデン学園（編入先の学校）サッカー部のエースであり、アンダー１８にも選ばれている。

黄金コンビと言われる秋人と阿笠に劣らないくらいのコンビなのだ。

そしてキャプテンのハノイもまたアンダー１８に選ばれているような素晴らしい選手。

そんな３人が秋人を気に入っているのだから、たとえ秋人をよく思ってない人がいても彼らは何も言えないのだ。

秋人を拒否するということは即ち、ハノイたちを敵に回すということだから。

まぁ僻む人はいても蔑む人はいないだろう。

秋人の実力を見れば。

ディフェンダーのハノイ、フォワードの双子がいて優勝候補と呼ばれるのなら、そこにミッドフィルダーの秋人が加わればもう「候補」とは言わせないだろう。

優勝確実という4文字しか浮かんでこない。

ドイツでもこんなに恵まれた環境にいる。

これほど幸せな人間っているのだろうか。

秋人は空を見上げた。

空は繋がっているはずなのに、日本の空とは少し違うように思える。

遠く広く鮮やかな空、少し涙が出てしまったのは太陽を見つめたからだろうか。

『お前よく1人で来る気になったじゃん』

秋人だって、もし他国に所属するなら阿笠とともに行きたいと思っていた。

同じリーグじゃなくとも同じ国ならもしオリンピック選手に選ばれたら一緒にプレーができる。

そう考えていた。

きっと永遠に一緒なんだろうって、俺だって思ってた。

――――　一緒に優勝しようって言ったのは嘘なのかよ！！――――

嘘じゃない。

一緒に優勝して、佐々先輩に見せつけて、それでこれが俺たちの道なんだって堂々と言いたかった。

違う、優勝だけが大事なのではなくて、阿笠とサッカーをやることに意味があるんだ。

たいしてチームプレーなんて気にしていなく、天才的なプレーを豪快に楽しそうに見せる阿笠は自分とは正反対すぎて憧れてたんだ。

カリスマなんて呼ばれてるけど、俺のなんてつまらなすぎて面白みに欠ける。

次は何をしてくれるんだろうって、見てる人をワクワクさせてくれるプレーをする阿笠が大好きだった。

だけど、いろんなことがありすぎた。

麻冬との仲を押したのは確かに俺だけど、結局俺も麻冬を好きだったわけで。

阿笠を裏切るように何度も麻冬に告白しては振られて、麻冬を泣かせて阿笠を傷つけて結局得たものなんかない。

麻冬から離れても、それでも麻冬を忘れられるはずはない。

そしてサッカーでさえ、阿笠に勝てなかった。

五分の試合になるだろうとは思っていたけど、あまりにも惨めすぎて恥ずかしい。

阿笠は、中傷に屈しない俺を強いと言ったけど、そんなんではない。

先代キャプテンが言ってくれたように、悔しさをバネに努力すべきだと思った。

でも、きっと一生阿笠には適わないのだろう。

――あいつな、秋人のそういう強さに憧れてんだよ――

他のものなんていらない。

サッカーだけで良い。

けどそのサッカーですらああだし、何より側にいたら絶対また麻冬に恋をしてしまう。

だから自分がやり直すためには離れるしかなかった。

阿笠といれば間違いなく勝てるだろうし楽しいはずだけど、きっといつまで経っても自分と阿笠を重ねてみては悲しく思うんだ。

阿笠にチームをまとめようっていう気持ちさえあれば、部長だって阿笠がなっていた。

名実ともに星陵サッカー部は阿笠のものだった。

すぐ泣いたり弱音を吐くことだって、それは気持ちを外に出せてる証拠だ。

悲しいときは泣き、楽しいときは笑う。

そんな当たり前の感情が出せる阿笠をどれだけ羨ましく思ったことだろう。

あいつには……何1つ適わないんだって実感した。

勉強ができたところでちっとも嬉しくはない。

欲しいものが手に入らなきゃ意味がない。

俺は

お前の隣に麻冬がいるのを見ていることも

お前の側でサッカーして悔しく思うのも

もう嫌なんだ。

約束、守れなくてごめん。

ごめんな

阿笠――――……。

next

第１８４話【空はつながる、どこまでも】

流れる雲
青い空

君が見上げてる空
俺も見上げた。

「ちょっ……中尾。何言ってんのさ」

練習中突然ある言葉を投げかけてきた中尾に烈は困惑する。

烈のサッカーの実力をみんながみんな知っているわけではないが、２年部員の中には知っている人もいる。

小学校が烈と同じだった中尾だ。

「お前がいれば……秋人がいなくても全国優勝できるかもしれない」
「中尾、俺は……」
「阿笠だって！元に戻るかもしれない！」

烈がボールを止めてしまったせいで中断されたため、阿笠はボールのところにトコトコ歩いて軽く蹴りあげていたとき、ちょうど中尾が阿笠の名前を出したものだから阿笠はポーッと中尾のほうを見た。

「阿笠が……」

阿笠の名前を出されて烈は戸惑う。

確かに中尾が言っている意味もよく分かる。

烈の実力を嫌というほど知っている中尾だから。

中尾はツカツカと烈のもとへ歩いていき、烈の両肩を掴んで必死に説得しようとする。

「阿笠が治るなんて、そんなの分からな――」
「分かんないからやってみてぇんだよ！」

「中尾……」
「阿笠が治るってんならなんだってやるさ！阿笠がいなきゃ困んだよ！」

中尾は烈の両肩に手を置いたまま、顔をうつむかせた。

「優勝とかもどうでも良い……。ただ阿笠とサッカーやりたいだけなんだ」
「……」
「あいつからサッカー取ったら何が残んだよぉっ……」

目に涙を溜めながら中尾はすがる思いをぶつける。

烈は何て声をかけたら良いのか分からずにひたすら困るだけ。

「中尾、その話聞かせろ」

そこへ村松がやってきて、中尾の腕を掴んだ。

中尾は涙目で村松を見上げ、烈から手を離した。

「むら……」

烈は村松の登場に最悪の事態を想定する。

サッカーを選らばなかった烈がこんなところでまた選手として復帰するのか。

それだけは許されないことのように思える。

「……烈は、小学生のときサッカーをやってた」

「中尾……言うな」

「全国選抜にも選ばれてて、誰1人……いや、阿笠以外烈には敵わなかったんだ」

「中尾！」

烈は中尾を止めようとするけど、中尾は村松にも分かってもらおうと話し続ける。

「いいや、烈は阿笠の球だって五分の確率で取れてた！俺から見ても烈は天才そのものだったんだ」

全国選抜には中尾は選ばれていなかったが、その前の県選抜には中尾も含まれていて中尾も当時から阿笠を知っていた。

その並外れた能力をその目で見てきた。

「でもそれは愛川が小学生のときの話だろ？今はもう、」

「変わんねぇよ！こいつはジュニアチームのコーチやったり河川敷でサッカーチームに入ってたりしてんだっ」

なぜそのことを、と烈は言おうとしたがすぐに止めた。

同じ地域に住んでるんだから見られていても不思議ではない。

「こないだだって……秋人の球を5本中3本止めてた！」

その言葉にサッカー部全体がザワめいた。

小学生のときの話は仮に本当だとしても、現役でない人間があの月影秋人を半分以上止めるなんてあり得ない。

あの秋人を、一般人が止めるなんてあり得ない。

秋人が本気ではなかったか手を抜いたか、ただの遊びだったかに過ぎない。

周りでそう言った部員に中尾はキッと睨みながら否定した。

「ざけんな！本気でやって本気で負けたんだよ！お前らの球なんか屁でもねぇんだ！」

「中尾、分かったから。落ち着け、な」

叫んだ中尾をなだめるように村松が言う。

にわかには信じられないが、中尾が言うのだ。

間違いはないだろう。

烈がチラッと阿笠のほうを見ると、いまだに中尾のほうをポーッと見つめている。

ちゃんと話が聞こえているのか、それとも見ているだけか。

「でも、……そうか。愛川キーパーかなんかなのか」

「あ……キーパー」

「なるほど。まぁ確かに親友でしかも実力のあるお前が入ってくれ

たら阿笠もやる気を出すかもしれない」

村松は顎に手を当てながらじっと考え込む。

そんな上手くいくとは限らないし、何よりこの強豪チームにそんな理由で一般人を巻き込むなんて前代未聞だ。

監督はまぁ別に良いとして、他の部員は許さないかもしれない。

「……その実力を見てみたいな、俺」

村松は烈を見ながら言った。

「だから俺はやらないって」

「阿笠のためでもか？」

「う……」

阿笠の名前を出すなんてずるい、阿笠のことで烈が断れるはずがないのだ。

烈が自由気ままな人間だということは星陵の人間なら生徒教師ともに知っていて、また阿笠大好きで甘くて阿笠のためなら何でもする

こともみんな知っている。

見た目は明らかにおかしいが、中身が優しいことくらい誰でも知っている。

「みんな、実力見て決めるなら文句はないだろ？」

村松が振り向いてみんなに問いかけると、みんな「まぁ、それなら……」と言っている。

確かに実力を見ないで決めるなんておかしな話だ。

これで中尾の言葉も証明されるだろう。

けれど良いのか。

烈がやりたくないというのにはちゃんとした理由がある。

今の阿笠を救う以上に大切なことがあるのだ。

「あ、阿笠っ」

中尾に手を引かれてゴールに連れてかれる烈は、振り向いて阿笠のほうを見た。

眉を八の字にして珍しく困っている烈の顔が、阿笠の生気のない瞳に写る。

阿笠は烈が連れていかれるのをただ黙って見ている。

「でも誰がやんの？阿笠は無理だし」
「秋人の球すら止めんだろ？」

他の2年部員たちが言った。

確かに阿笠や秋人が止められるなら、他の部員の球くらい全部止めるだろう。

「俺がやる」

やはり立ちはだかるのは村松だった。

「俺の球全部止めてみせろ。今から5本蹴る」

確かにこの中で阿笠を除いて一番強いのは村松だ。

県代表なのだから。

村松の立候補に、もう逃げ場のない烈は仕方なくグローブをはめている。

部員全員が息を飲みながらその光景を見ていた。

PKでの勝負なら圧倒的に蹴るほうが有利なのだ。

ああ、こんな光景をいつだったか見たことがある。

阿笠はボーッとする頭でそう思った。

そう、あれは中1のことだった。

今でも鮮明に思い出せる。

烈の本気を知って、俺実は最後の球わざと外したんだ。

だって烈にはサッカー以上に大事なものがあるから。

そう、だから応援してた。

今はもう烈がサッカーしてる姿より絵書いてるほうが好きなくらい。

フランスより俺選んでくれたのに、俺お礼すら言ってない。

ああ、いつも迷惑かけてた。

今だってこんなに迷惑かけてる。

やりたくもないことに巻き込まれて困っている。

俺、なんで助けてやらないの？

だって体が動かないんだ。

頭の中もぐちゃぐちゃしているし、力が出てこない。

外してよ烈。

外して良いよ。

なのになんで？

なんでむらの球取っちゃうの？そんなに一生懸命になって。

『俺の夢は半端じゃない。何よりも！』

全部取っちゃったらサッカー部入れられちゃうよ？

やりたくもないのにサッカーやんなきゃなんないんだよ。

烈が俺のためにそんなに頑張ることなんてないよ。

秋人に無視されたくらいでこんなになるバカな俺なんて、もう見捨てて良いよ。

烈が俺のために必死になることなんて何もない。

ないんだよ。

「村松！あと1球！」

あと1球って……烈なら簡単に取っちゃうよ。

ダメだよ。

取っちゃだめだよ。

俺烈の邪魔したくない。

烈の夢の邪魔なんてしたくないんだ。

烈はいつだって俺のためになんでもしてくれた。

俺だって、恩返しをしなきゃいけないんだ。

『俺の分までサッカー頑張れ』

そうだ。

俺、烈の分までサッカーやんなきゃなんないんだ。

烈に全国の会場に連れてくって約束したんだ。

絶対にむらや中尾の思惑に烈を巻き込むもんか！

阿笠はその場から走り出した。

そして、村松がセットしたボールを横から遠くへと蹴り飛ばした。

「なっ……」

蹴ったボールは部室のほうへ飛んでいき、壁に当たってどこかへ行ってしまった。

予想外のことにみんながポカンとしながら阿笠を見た。

「烈をサッカー部になんか入れるもんか！勝手言うな！」

阿笠は怒鳴りながらその声をグランドに響かせる。

そうしてゴール下にいる烈のもとへ行き、土のついた制服（上はトレーナー）をはらう。

「阿笠……お前、」
「ごめん、烈。こんなことに巻き込んで」
烈は青い目を見開かせながら阿笠を見ている。
はらい終えた阿笠が立ち上がると、阿笠は烈を見てニコッと笑った。
「お前……戻って……」
ほのかに涙が込み上げてきて、烈は口を手で押さえた。
さっきまで無表情だった阿笠が笑っていて、生気のなかったその瞳は透き通っている。
無邪気な笑顔を見せる阿笠は、紛れももなくいつもの阿笠だ。
「充電完了。おまたせ」
阿笠はベッと舌を出した。

時間的に言えば阿笠がおかしくなっていたのはたったの半日もないくらいだが、烈からしてみれば1時間が1日のように感じられた。

長いこと阿笠が失われていたかのようにさえ思えた。

「おせぇんだよ。ばかっ」

烈は涙を浮かべながら、軽く笑って阿笠の胸をポスッっ殴る。

「へへ。もう大丈夫。逃げないから」

笑っている。

さっきまで話しかけても何も言わなかった阿笠が、笑っている。

それがこんなにも嬉しいことだったなんて。

「つーわけでぇ、はーい。全員グランド２０周」

阿笠は振り向いて部員たちにそう言う。

ザワつく部員たちに釘を刺すように、阿笠は言った。

「烈に迷惑かけて俺が許すとでも?さっさと行ってこーい」

「そっ、そんな!阿笠のためにっ」

「３０周にされたい?」

ニヤッと笑いながら阿笠が言うと、みんな泣く泣く阿笠に従って走ることになった。

他の部活に混ざりながらグランドを走っているサッカー部員たち。

他部員がジロジロと見ているが、そんなの気にしていたら阿笠に周を増やされる。

そう思いながらみんな一生懸命に走っている。

「くっそー!覚えてろよ阿笠ぁーっ!!」

誰かがそう叫んだ。

それでも阿笠はクスクス笑いながら見ているだけ。

「阿笠、なんで？」
「ん？」
「なんで戻った？」
「あぁ」

阿笠は空をチラリと見上げた。

「烈に迷惑かけたくないし、それに」

今はドイツにいる秋人も空を見上げてる。

離れていても、サッカーだけは繋がっている。

「秋人がいない今俺がやるしかないんだ」

ねぇ

君も空を見上げてるんでしょ？

だから、僕も見上げる。

next

第185話【互いに】

「あ、烈。と……阿笠！」
「ん、あー櫻井」

部活後、先に駐輪場にいた烈と阿笠のもとに春樹がやってきた。

なぜ夏実がいないのかというと、夏実は用事があると言って部活終わって即帰って行ったらしい。

「な、なんで？阿笠？」
「？阿笠だけど」
「じゃなくてっ」
「……えっ」

阿笠は烈の顔を見た。

烈は、アチャーという顔をして失笑しながら目線を反らした。

ああなっていたことはサッカー部員にしかバレていないものだと思っていた阿笠は、顔を一気に赤くした。

「嘘ー！最悪だぁ！！」
「もー。心配した。……で、掘り返すようで悪いんだけどさ……」
「……ああ、秋人？」

阿笠は若干声のトーンを低くして尋ねる。

気まずそうに春樹はコクンと頷いた。

このことはもう烈はだいたい聞いていたが、正常な阿笠からキチンと聞いておきたかったから内心春樹にナイスだと思っている。

「秋人ね、うん。ギリギリ間に合ったんだよ俺」
「えっ、じゃっ、じゃあ」
「でも秋人は何も言わなかったよ」

阿笠は荷物を自分のカゴに入れて、ガチャンと鍵を回す。

ハンドルを片手でギュッと掴み、その手に力を入れている。

「俺が何言っても、こっちを見向きもせずに行っちゃったんだ。……はは、バカだね。俺も」

阿笠は寂しそうに笑う。

春樹と烈はその光景を想像しながら、切なげな表情をしている。

だいたい予想ができる。

どんなシチュエーションかが目に浮かんできて、阿笠がどんな風に嘆き騒いでいたか、どんな風に秋人が阿笠を無視したのか。

「秋人が決心したのをたかが俺が引き止めたって無理なことくらい分かってんのに、」

「そんなこと……」

「なくないよ。実際そうだったんだ。でもね、それでも良かったんだ」

ただ、と阿笠は続ける。

「何か言って欲しかった。ごめんとか、サッカー部頼むとか。……それさえないってことがショックだったんだ」

阿笠はもう失笑すらしていなく、ただ視線を下ろして下を見つめている。

「俺なんてどうでも良いのかなって……いろいろ思っちゃって、」
「……俺も何も言われなかった。電話しても繋がらない。せめて阿笠みたく追いかければ良かったかもしれない」

春樹が言った。

阿笠は春樹の顔を見て、何か言おうとしてやめた。

「でも、思うんだ。秋人そんなに強くない」
「え？」
「好きな人は阿笠のもので、サッカーですら阿笠に負けて、辛くないはずはない」
「……」
「逃げたかったのかもしれない。……どっかに」

春樹は髪をくしゃっと握り、悔しそうに言う。

側にいたのに何もしてやれなかった悔しさばかりが込み上げてくるのだろう。

優しい言葉をかけたくらいでどうにかなる事実ではない。

秋人の心を癒すのは、並大抵のことではない。

「……ごめん。阿笠が悪いって言いたいんじゃないんだ。ただ、そうするしかなかったのかなって……」

一応弁論はするも、春樹は阿笠の顔を伺うかのようにチラッと見た。

阿笠は、とても寂しそうに笑っている。

「……そうだね、俺幸せすぎたね」

烈は阿笠にそんなことないと言ってやりたかったが、春樹が目の前にいる手前そんなこと言えなかった。

春樹の気持ちも考えれば、阿笠ばかりをカバうことはできない。

「……ごめんね櫻井。だとしたら秋人を日本から追い出したのは俺だから、謝っても謝りきれないや」

「そっ……」

「アメリカからも追い出された秋人をまさか自分が日本から追い出すなんて……最悪だ」

阿笠は額に手を当て、涙声で言い放つ。

「アメリカって……阿笠知ってたんだ」

春樹は少し驚きながら呟く。

「でも俺、どうしたら良かったんだろう……」

目に涙が浮かぶ。

もし本当に自分のせいでドイツに行ってしまったのなら、どう償えば良いのだろう。

「さっさと麻冬を切れば良かった？……試合で負ければ良かった？秋人をカバわなきゃ良かった？泣いてる秋人を放っておけば良かった……？」

「阿笠……」

「けど、きっとそんなんあいつ望まなかったよ……」

ズズッと鼻をすする音。

後悔ばかりが浮かぶけれど、実際今でもどうしたら良かったかなんて分からない。

いずれにせよ秋人にだけ幸せな日々を与えるなんて不可能な話だ。

「バカだな秋人……。せっかく麻冬と別れたのに」

どうしてこう上手くいかないのだろう。

本当なら今日にでも秋人は幸せになれたんだ。

サッカーだって俺なんか簡単に越してしまうくせに。

秋人と1対1だったら俺が勝つなんて分かってるじゃないか。

俺はフォワードなんだから。

でもサッカーはチームプレーだから、秋人みたいな奴のほうが大事なのに。

バカだよ秋人。

本当にバカだ……

「……麻冬、どうするの？」

春樹の問いかけに阿笠はフイッと顔を反らす。

そうして意外にもこう言った。

「麻冬がしたいようにすれば良い。俺はもう何もしないから」

「えっ、でも、」

「秋人がいないとか……関係ないしょ？会いたかったら会いに行けば良い」

ドイツだよ？！と春樹はつい突っ込もうとしたが、なぜか言葉が出てこない。

簡単に会いに行ける距離ではないことを阿笠だって分かっているはずだから、軽々しく言ってるのではないと分かるのだろう。

代わりに春樹はこう尋ねた。

「阿笠は……会いに行かないの？」

「……行かない」
「なんで？」

春樹の攻めの質問に、阿笠は春樹のほうに視線を向けて口元を少し緩ませながら、かつ頼もしげにこう言った。

「あいつが帰ってくるまでちゃんとサッカー部守りたいから」

部長という職はやりたがらない阿笠の発言とは思えない。

阿笠は崩れるのを恐れているせいか、背負おうとはしないのだ。

だからいつだって秋人がチームを背負ってきた。

今まで自分にとってのチームでしかなかった阿笠が、秋人がいなくなったことによってチームにとっての自分を考えているのだ。

秋人なき今しなければならないこと、それは部員の思いを背負うこと。

果てしなく重くてとてもプレッシャーかもしれないけど、いつか秋

人が帰ってきたときそれまでと変わりないサッカー部でありたいから。

秋人がスルリと何事もなく入ってこれるような雰囲気を作っておきたいから。

「いつでも秋人が憧れた俺でいれるように、頑張るよ」

いつになく頼もしい阿笠の姿に烈も春樹も見惚れた。

阿笠にここまで言わせて春樹だっていつまでもメソメソしていられない。

春樹は阿笠の腿を軽く足で蹴った。

「なっ……」

「バーカッ。かっこいいんだよ、お前！」

「えっ」

そうして春樹は自分の自転車を引っ張り出して、自転車に乗ってさっそうとこの場から去って行った。

意味も分からず蹴られた阿笠がポカンとしていると、後ろで烈がクックと笑いながら言った。

「頑張るって言ってんだよ。春樹も」

阿笠は振り向いて烈の顔を見ながら軽く叫ぶ。

「今のが?!」

烈も自転車を取り出して鍵を解除する。

そして自転車にまたがった。

阿笠も慌てて自転車にまたがる。

「悔しい気持ちは同じなんだろうなぁ、お前ら」

「ん?」

「阿笠が前を進むなら自分も進まなきゃってことだよ」

「?よく分かんない」

阿笠は軽く首を傾げる。

まだ他人のことまで考えている余裕がない阿笠には、春樹の痛みは分からないようだ。

でも、相棒を失った阿笠と親友を失った春樹

きっと痛みは同じ。

「良いよ、分かんなくて」
「え～？」
「春樹は強いから」

烈は付け加えて、きっと1人で乗りきれる、と軽く小声で言った。

小学生のときから友達だった烈と春樹の間にはどんな関係があったのだろう。

あまりにもお互いを知りすぎているような気がする。

中学が離れても高校でこうして再会して、奇しくもお互いの親友がサッカー部の部長副部長という間柄で。

「ふーん？」

これを運命と言わず何と言おう。

すべてのことには何らかの運命が携わっている。

ならば、秋人がいなくなるのも運命だったのか。

それは誰にも分からない。

next

第１８６話【小林リョーマ】

「アッキトー！」

サッカーの練習後、新しいチームメートたちからいろいろと質問攻めになり疲れた秋人は夕食を食べずに部屋でゆっくりしていた。

明日からの学校の教材を渡されたため、身の回りを整理しようとしていたところにナギが勝手に入ってきた。

「あれ、俺鍵かけてなかったっけ」

「だよ。不用心だな」

勝手に入ってきてよく言うよ、と言いたいところだがナギだからこそ許せてしまう。

風呂上がりらしいナギの髪はまだ濡れていて、首にタオルをかけているもあまり拭いていないようだ。

「まだあんまり荷物ないねー」

「急だったからな」

「まぁさ、とりあえずせっかくだし遊ぼうぜ！」

秋人のベッドにポンッとジャンプして座り、無邪気な笑顔でそう言ってくる。

秋人は整理している手を止め、椅子に腰を下ろした。

「勘弁しろよ。今日来たばっかだぜ？疲れたよ」
「えー！良いじゃん、街とか行こうよ」
「えー」

ため息をつきながら言う秋人に、ナギは足をバタつかせながらダダをこねる。

春樹にどこか似ているせいか、嫌な気分にはならないし懐かしい雰囲気さえ漂わせる。

元気いっぱいのキュートボーイなところは確かにそっくりかもしれない。

と、そこにまた突然ドアがガチャッと開かれた。

「アキー、来たぞ」

ナチだ。

こっちもこっちでノックすらせず勝手に部屋に入ってくる。

「ったく……お前ら双子は相変わらずだな」

もはや笑うしかないだろう。

2人がこんな性格だということは前から知っているが、今でも変わらないというのは笑い以外に何物でもない。

ナチはナギの髪がまだ全然乾いていないのを見て、ナギが首に巻いていたタオルでワシャワシャと拭き始めた。

ナギはまるでいつものことだとでも言うように、片目を瞑って猫みたいな表情をしながら
「ありがとー」と言っている。

ベッドの上で拭くなんて水が飛び散るのに、そこは気にしていないのがさすが双子。

「ちゃんと乾かせよ。風邪ひくぜ」

「だって面倒くさいじゃん」
「あほか」

彼らはとても仲の良い双子で、まぁ確かに夕方のようにナチがサボり魔なせいでナギが怒ったりするのは日常茶飯事なのだが、それでもそのくらい何でも言いたいことが言い合えるような仲というわけだ。

兄のナギは今こそはもうナチより小さいが、人一倍弟思いのお世話好きだ。

ナチはというと、基本物事には無関心なのだが兄にはどうも手をかけてしまうようだ。

「仲良いな」

微笑ましく2人を見ていた秋人が言った。

2人はキョトンとしながら顔を見合わせる。

「アキトとダイゴだって仲良いじゃん」
「え、」
「いつも一緒だったし、俺らより仲良いんじゃね？」

ダイゴ、という言葉がいつになく新鮮に感じる。

普段名字で呼んでるから慣れないだけか、

今日サッカーやってるときに阿笠がいなかったからか、

嘆き叫んだ阿笠を無視してしまったせいか、

なんにせよここには阿笠はいないんだという事実だけしか浮かばない。

確かに春樹といる時間を抜かせば、そのほとんどを阿笠と過ごしているだろう。

朝一緒にサッカーをやり、休み時間もたまに話をしたりして放課後はもちろん言わずとも分かるだろう。

……一緒にいすぎたのかもしれない。

一緒にいるのは当たり前で、隣にいないほうが不自然で、一緒にいすぎたから比べるのが辛かったのかもしれない。

「……。ほらはやく行こうぜ。アキトどこ行きたい？」

黙っている秋人に何かを感じとったのか、ナチは話を切って話題を提供した。

特に何も考えていないナギが元気よく言った。

「とりあえず今日は一杯飲もうよ！歓迎会！」
「あほ。んなもん休日で十分だって」
「えーっ」

なんだかんだで、とりあえず3人は外に出ることにした。

と、その前に多少寮の中を案内してもらうことになった。

部屋は一人部屋と二人部屋があり、まぁ先着順に選べるのだが秋人の場合はちょうど空きがあったため一人部屋だ。

ナチとナギは言わずとも分かるだろうが二人部屋である。

部屋にはシャワーや洗濯機はついているが、寮には立派な大浴場がある。

食堂や娯楽室や売店など様々なものが揃っており、普通の寮とは考えられない。

公立高に通ってる秋人にしてみればこれほど巨大で金持ちな私立高は珍しいだろう。

「ツキカゲアキト！」

3人がワイワイと楽しそうに歩いていると誰かが秋人の名前を叫んだ。

秋人が歩いているのを珍しそうに見ている寮生はたくさんいたが、秋人の名前を読んだ人は初めてである。

サッカー部員たちは今頃練習に疲れてぐーすか寝ているところだからサッカー部員ではないようだが。

「え、うん。月影だけど」

秋人は驚きつつも答える。

叫んだのは片手に雑誌を持って友人と歩いていた寮生の一人の、日系かと思われる黒髪の男子だ。

「うっわ、本物！わー！握手しよー握手！」

すごく嬉しそうにはしゃぎながら黒髪男子は駆け寄ってくる。

いきなりのことに隣にいた友人は驚いている。

黒髪男子は秋人の返事すら待たずに秋人の手を取ってブンブンと激しく振る。

「なんだよリョーマ、知ってんの？アキトのこと」

ナギが不思議そうに尋ねるとリョーマという男子は、あったり前じゃん！と叫んだ。

「去年全国優勝してて今全国選抜のキャプテンでアンダー１８だよ？！」

「へぇ。よく知ってんな」
「もち！カリスマって呼ばれてるんだよなっ」

日本の中にでも秋人を知らない人はいるのに、まさかドイツで秋人を知っている人がいるとは。

リョーマは秋人から手を離し、携帯を取り出してナギに渡して秋人との2ショットを撮ったりした。

秋人もあまりにもリョーマが強引なもので驚きを通り越して唖然としている。

「俺は小林リョーマ。ドイツの日系3世なんだ。日本には行ったことないけど日本語なら話せるぜ」
「まじか。すっげ。え、日本のことは知らないのによく俺のこと知ってたな」
「あれ、覚えてない？中学選抜でドイツ来たろ？」

え？と秋人はナギとナチの顔を見た。

ナギとナチは確かに選抜で知り合ったが、秋人の記憶には2人以外はあまりいない。

「え、でもサッカーやってんの？部活には入ってないよな？」
「ん？うん、まぁ部員ではないな」

秋人とリョーマがそんな会話をしていると、横からナギが口出してきた。

「だから一緒にサッカーやろうって言ってるじゃん。俺リョーマとやりたいよー。なぁナチ」
「おう。リョーマがいりゃ楽勝なのによ」

ナギとナチにここまで言わせる彼はいったいどんな存在なんだろう。

もしあのとき戦っていたのなら、そんなすごい選手なら忘れるはずはない。

でもナギとナチくらいしか秀でてる人はいないように思えた。

今のこの学校でだってやはり目立って素晴らしい選手というのは双子と、あとはハノイくらいなものだ。

国内一とは言え、すべての選手がプロに認められるほどすごいわけではない。

星陵サッカー部だってそのうちの1つだ。

実際秋人と阿笠しかいない。

「えー、俺はもう良いよ」

リョーマは軽く手を振りながら笑って言う。

3人の会話を不思議に感じた秋人はすかさず問う。

「どういうこと?」

秋人の質問に、ちぇーっと口を尖らせていたナギが答える。

「リョーマはさぁ、俺らより上手いよ。まじ」

「は?」

「フォワードなんだけどさ、まぁフォワード以外もできるんだけどさ、とにかくコーチしてんだよ。今」

「??」

ナギの分かるようで分からない説明に秋人はクエスチョンマークを

浮かべている。

「中学から現役をやめてさ、コーチしてんの。だって俺らがここの学校入ったのリョーマのスカウトだし」

「ちょっと待て、だって学生だろ？」

「うん」

「うんって、は？！」

いくらナギが説明しようとしても疑問の符合しかでてこないため、見かねたナチが代わりに説明した。

リョーマはサッカー部コーチの息子で、小学生まではサッカーをしていたがすぐに選手としての道は捨てた。

親であるコーチと同じように人を指導する立場を選んだのだ。

この学校は中等部からあり、中等部に入ったリョーマは親と一緒に高等部サッカー部を指導していた。

まぁ主にリョーマの仕事は部員の相手をすることだ。

エース格となる人は普通チームに1人程度だが、1人だとつまりその人の相手になる人間がいないというわけになる。

だからリョーマがその相手役となるのだ。

平たく言えば練習相手といったところか。

天才という言葉すら通り越して、もう神の域だという。

「今日ちょっと練習試合申し込みついでに遠出してきたんだ。まさかアキトが転入してくるなんてなぁ」

ウキウキさせながらリョーマは言う。

納得できるようなできないような、このリョーマがそんなにすごい人だとは。

秋人は半信半疑だが、信じるほかないだろう。

実際ナギとナチがスカウトされてるのなら。

中学のときのナギたちとの秋人の試合も、リョーマはわざわざ見に行っていたようだ。

そのとき秋人を知りつつ、ナギたちをスカウトしたのだから。

だからまぁ秋人がリョーマを知らないのは当然だろう。

「でもさ、なんでアカサダイゴいないの？」

「え……」

「お前ら2人で1人って感じじゃなかった？」

「あぁ……」

秋人は軽くため息をつく。

どこに行っても誰に会っても、結局阿笠の名前ばかりが出る。

きっと阿笠が秋人の立場だったら同じように秋人はどうしたのかって聞かれるのだろうけど、こう1日に何回も、しかも異国の地で言われれば嫌にもなるだろう。

阿笠から離れるためにドイツに来たのだから。

「リョーマ」

突然ナチがリョーマの名前を呼び、友達が待ってるぞと友人を指差した。

リョーマは、忘れてた！と勢いよく彼のもとへ走って行き、友人は「ったく～」と呆れて笑っている。

嵐のようなリョーマがいなくなって一瞬シンとなるが、何も気づいていないナギは頭の後ろで手を組みながら「はやく行こうぜ～」と言っている。

きっとサッカーをしている限り阿笠の存在は消えない。

いや、決して消したくて逃げてきたわけではない。

負けないくらい心身共に強くなりたいと願ってのことなのだ。

麻冬と阿笠の幸せを完璧に祈れるくらい、サッカーで負けていても折れない心を持てるくらい強くなれたら、もう一度会いに行こうと。

けれど、無理そうだって思っているのも事実。

向日葵のような阿笠を思い出さないことなんてできない。

思い知らされる。

結局阿笠しかいないのか、と。

next

第187話【蛹から蝶へ】

「はい？」

夜な夜なインターフォンが鳴り響く。

「あ、麻冬？俺」
「烈くん？待って、今開ける」

烈は阿笠と別れてすぐ麻冬の家へと向かった。

言葉通りすぐに麻冬はドアを開けてくる。

「珍しいわね。どうしたの？」
「えっと、さ……」

予想外にも麻冬はすっきりした顔で元気がある。

午後保健室で心が折れそうなくらい泣いていたのに、意外だと烈はかなり驚いている。

無理もない。

彼氏と昨日別れた上に最愛の人が海外へ行ってしまった悲しみは計り知れないはずなのに、麻冬はこうして笑っている。

「あ、上がってく？今ちょうどみんないるの」
「みんな？」
「春樹と夏実」

麻冬は平然とそう答えた。

「あー、はは。なるほどね……ははははっ」

すると烈はいきなり笑いだした。

珍しく烈が声を上げて、しかもこんなに笑うものだから麻冬はキョトンとしている。

基本的にマイペースで自由気ままな烈はそこまで感情を露にしたりしないのだ。

自分勝手に動くことはたくさんあるが、こんな風に大声で笑ったり

しない。

だから怒ったりもしない。

「れ、烈くん？」

「そっかそっか、春樹たちが……はは、そっか」

何て言葉をかけたら良いのか分からずに麻冬の家まで来てしまったが、なんにせよ烈は阿笠を励ますつもりだった。

どんな言葉をかけたら元気になるかとか、そんなことを悶々と考えながら途中引き返そうかとも思ったけれど、烈はやって来た。

麻冬のために。

けれどそんな必要はなかったようだ。

麻冬は１人ではない。

春樹や夏実がついている。

用事があると言って足早に帰った夏実はこのためで、あのあと春樹もすぐに向かったというのか。

想定外のことばかりで、烈も言葉がない。

そのうち烈は笑いがおさまったのか、麻冬の顔を直視してようやく話し出した。

「……春樹たちが何を言ったかは知らないけど、１つだけ言いたいことがある」

烈はパーカーのポケットに腕を突っ込みながら、少し真面目な顔をした。

「月影に会いに行くのも阿笠の元に戻るのも、あとは全部麻冬次第だ」

「……」

「あいつらはお前のために何でもしてくれた。あとは……麻冬が動いてやんなきゃ何も始まらない」

麻冬のために秋人は麻冬から離れた。

麻冬のために阿笠は麻冬を振った。

一番愛してる人と結ばれるか側にいたい人と連れ添うか、どっちを選ぶかはもう麻冬次第。

「……同情も何もいらない。お前の好きなほうへ行け」

「……好きなほう、……」

「麻冬が選んだ結果に絶対誰も文句は言わない」

ただ幸せになって欲しい。

秋人も阿笠もただそれだけを祈ってくれた。

中学のときとはもう違う。

何が幸せなのか、どうすれば良いかくらい阿笠だって分かっているのだ。

「……それだけ言いたかったんだ。じゃあまたな」

そう言って烈は道路の隅に止めていた自転車の鍵を解く。

麻冬も急いで道路に出てきて、自転車のサドルにまたがった烈に向

かって言った。

「ありがとうっ、烈くん」

烈は一瞬驚いた顔をしたが次にはニコッと微笑んだ。

そうして烈は自転車に乗って帰って行く。

麻冬はその後ろ姿を見えなくなってもずっと見続けていた。

しばらくしてから麻冬は家の中に再び入り、自分の部屋がある2階へ向かう。

部屋に入ると寝転びながら雑誌を読んでいる夏実と、その隣でうとうとと眠そうな顔をしている春樹がいる。

麻冬が部屋に戻ってきたのに気づいた夏実が声をかけた。

「お帰りー」
「ただいま」
「誰だったの？」

夏実の質問に、麻冬は腰をおろしながら答える。

「烈くん」

「――――――えっ？！」

すると眠たそうにしていた春樹が突然声を上げた。

何事かと夏実は春樹のほうを見上げる。

「えっ、阿笠も一緒？」

「それが烈くんだけなのよ」

「はーーーー？！」

目を見開きながら春樹はこれでもかと言わんばかりに叫ぶ。

麻冬は春樹の叫び声に動揺する様子も見せず、淡々と言った。

「あたしも驚いたわ。まさか烈くんが心配してくれるなんて」

「なんで烈くんだと驚きなの？」

「だっ、あいっあいつはっ！」

夏実の疑問に春樹は答えようとするが、驚きのあまり言葉が出てこないようだ。

春樹が驚くのも無理はない。

小学校が烈と一緒だった春樹は烈の性格を知っている。

見かねた麻冬が、春樹の代わりに話した。

「烈くんが人の心配をするのが驚きなの。基本彼は人に興味ないから」

「え、でも阿笠くんは、」

「阿笠は特別」

そう、烈は人には……というか興味ある物事にしか関心を示さない。

だから烈が心を開くことなんてあまりないし、喜怒哀楽だって楽しか見せない。

そんな烈がなぜ阿笠と仲良くなったのかと言うと、２人の出会いは小学生のときの選抜だった。

上級生を差し置いて2人は試合に出ていたし、ずば抜けて上手かったのもやはり烈と阿笠だけだった。

だが、豪快なプレーをして相手をおちょくるような技ばかりしている阿笠と、完璧を求める隙のないスタイルを好む烈との間では自然と壁があった。

エースとキーパーというだけで役割は正反対なのに、プレースタイルまで正反対なものだから2人ははっきり言ってお互いを良く思っていなかった。

練習中も互いを避け、交流はまったくない。

いがみ合っていた。

そんなある日、練習試合でギリギリ勝ったあとの出来事だった。

『おい、お前のプレーには隙がありすぎる』

まだ髪も黒くカラコンをしていない烈が阿笠に食いついた。

『は？』
『もっと周りを見て動け。無駄なことをするな』
『お前のプレーはつまんなすぎるんだよ』

まだ今より髪が少し短い阿笠も烈に言い返した。

これが初めて2人が交わした会話だった。

『完璧っつーか、見てて面白くない』
『面白さなんていらないだろ。勝つことが大事だ』
『勝つことは当たり前の前提』

何ヶ月も一緒のチームにいてようやく会話をしたと思えばこれだ。

他のチームメートやコーチはハラハラしながら見ている。

天才だかなんだか知らないけどいい気になんなよ、なんて烈が突っかかったり

お前こそいつも澄まして何様のつもりだよ、と阿笠は怒鳴ったりして言い争いはヒートアップしていくばかり。

話は平行線でお互いが譲らないため終わりが来ない。

となると、２人はサッカーでケリをつけようと言い出した。

２人は練習試合が終わったばかりで疲れているにも関わらず、１ｏｎ１をし始めた。

それも今までの練習で見せたことがないくらい必死になっているのだ。

コーチも関心するほどに。

人より体力も技術も数段上の２人は他の選手と同じレベルの練習では余裕とまではいかなくても普通にやりこなせる。

真剣な顔をしてボールを追いかけたのは、おそらくこのときが初めてだった。

だが結果は分かるだろう、得点王と守護神だ。

戦ったところで決着がつくはずがない。

延々と続け、そのうち2人はもう走れないとグランドに大の字になって寝転んだ。

『やるじゃん、阿笠……』

2人の切れた息だけがグランドに響いている。

『……そっちこそ、』

2人は顔を見合わせて、豪快に笑いあった。

ようやく分かったようだ。

どちらのプレーが良いのかではなく、お互いがそのプレーをするから強いのだと。

『やっぱ豪快に動くだけじゃだめなのかー』
『いや、阿笠は予測不可能なプレーをするから点取れんだよ』

相手をおちょくりながらチームメートにさえ分からない動きをする阿笠に追いつける選手はいない。

だから阿笠は得点王。

逆に隙がないスタイルを好むからこそ絶対にゴールさせない、だから烈は守護神なのだ。

スタイルが違ったって、そのスタイルをするからこその得点王と守護神なのだと2人は気づいた。

それからは、烈に守備を任せて阿笠は攻撃に徹底し、阿笠に攻撃を任せて烈は守備に徹底した。

2人が協力しあうようになってからはチームは格段に強くなった。

同時に、2人が親友となった瞬間でもあった。

「……烈くんは阿笠にしか興味ないの。だからまさかあたしのことを考えてくれるなんて思わなかった」

麻冬が烈と話をするのだって、中学時代阿笠と付き合っていたからだ。

阿笠の付属品としてしか見られていないだろうが、それがなければ烈と関わることはなかった。

「あれだね、烈も悪かったって思ってるのかも」

「ん、」

「やっぱどうしても阿笠の肩を持ちがちになるじゃん。屋上でのこととか気にしてるのかも」

そう、つまり阿笠にしか関心がない分阿笠ばかりカバってしまうところがある。

そのせいで麻冬を傷つけたことを後悔しているのだろう。

「……そうね。烈くんあたし次第だって言った」

「え？」

「そうだよね、あたしが進まなきゃ２人とも動けないわよね」

麻冬は軽く窓をチラッと見た。

もう夜のせいで、外は真っ暗だ。

星はあまりなくキラキラ輝いているわけではないが、それでも点々と光る星は力強い。

「あたし頑張る」

もう、何もできなかった頃のお姫様ではない。

あたしも輝きたい。

みんなのように。

next

第１８８話【旅立ち】

秋人がいなくなってからはや数週間が経った。

明日から冬休みを迎える。

「麻冬麻冬、明日一緒に遊びに行かない？」

放課後、荷物をまとめていた麻冬のもとに夏実と春樹がやってきた。

「明日？あは、良いわよ。イヴじゃない。あたしに気使わないで２人で遊んで」
「でも、」
「大丈夫。あたしも明日は用事あるから」
「そ、そっか」

麻冬に断られて２人はしょんぼりするが、当の麻冬は意外と元気だ。

恋人との３大イベントでもあるクリスマスを好きな人と過ごせるって、どんなに幸せなことだろう。

阿笠と別れたことはもう学校中に知れ渡っているため、麻冬はいろ

んな人に声をかけられたり告白されたりしている。
イベントの前になると告白率が高くなるのは必然。

そのすべてを麻冬は断り続けてきた。

今まで阿笠と付き合っていたものだから、みんな阿笠には適わないと一歩引いていたがガードマンを失ったお姫様は大変も大変。

それでも麻冬は言い続けた。

好きな人がいます、と。

「あ、用事って……ああ、そっか」

春樹は思い出したように少し驚きながら納得している。

「いよいよ今日か」
「……あ、そうか。今日だもんね、麻冬」
「うん」

「いよいよ今日か」
「……あ、そうか。今日だもんね、麻冬」
「うん」

そう言う春樹と夏実はどこかしみじみとしている。

オレンジのマフラーを首に巻いている春樹は、首の前側のマフラーを手で握りながら、口まで軽く覆う。

夏実も夏実で、ニット帽を少しだけ深くかぶった。

そんな何気ない仕草が物語る。

「はやいなぁ。3週間は経ってんだよな」

「でも意外とはやく過ぎてくものだよね」

彼の転校により空いてしまった机や椅子は、春樹の手で片付けた。

他のクラスメートがやるよと言ってくれたけど、春樹なりにけじめのつもりだったのだろう。

夏実の隣はガランとなり、秋人より後ろに座っていた生徒たちが1つずつ前へ動く形となり今はただのクラスメートの男子が隣の席だ。

授業中横目で見る隣は、寝るわけでも音楽を聞いているわけでもな

い。

軽くノートを取りながらとりあえず授業を聞いているその様は秋人をまったく思わせない。

ああ、いないんだ、と実感してばかりだ。

向こうでちゃんとやってるかとか

生きてるかとか

勝手にいなくなった裏切りの気持ちもあるけど

それでも、寂しくはあっても心配はしていない。

だってきっと大丈夫だから。

「俺もすぐ行くから」
「でも、春樹部活が……」
「そんなん麻冬だって同じでしょ?良いよ、みんなに頭下げてでも行く」
「そっか、」

3人がそんな会話をしていると、烈と阿笠がちょうど廊下を歩いていて3人を見つけ、声をかけてきた。

「やほー。みんなこんなとこで話してて平気?部活」

あれ以来多少気まずくはなったけど、これからは友達として関係を築こうとしている。

麻冬も阿笠もお互いその気持ちをむねに、ちゃんと笑いあっている。

「あ、そうだ。なんか烈が麻冬があっち行こうとしてるって言うから調べたよ」
「へ?」
「ちょっと待って」

阿笠はポケットから何やらメモを取り出して、それを麻冬に渡す。

キョトンとしながら麻冬はそれを受け取り、隣から夏実と春樹がそれを覗いた。

これから麻冬が何をしようとしてるかも露知らず、阿笠は爽やかに笑いながら言う。

「もー、言ってくれればもっと早くに調べたのに。水くさいな」

「えっ、え……これ、」

「住所。俺ドイツにサッカー友達いるからさ、そいつに聞いてみたら同じ高校だったんだよ。秋人が入ったとこと」

ナチとナギのことを言っているようだ。

そう、麻冬はこれからドイツに旅立とうとしていた。

明日から冬休みということで向こうで秋人を捜すつもりだったらしい。

秋人をスカウトしたのは有名な監督らしいから、そこから探していけば冬休みいっぱいくらいで探せるかもしれないと思ったようだ。

あてのない旅。

知らない土地で人探しなんて、無茶苦茶すぎる。

それでも麻冬は秋人に会いに行きたかった。

本当は学校なんて休んですぐにでも探しに行きたかったけれど、期待されてる運動部の部長として無責任なことはできない。

それでも結局冬休み中を休もうとしていたわけだが。

麻冬は昨日の部活のとき、みんなに頭を下げた。

いきなりのことで驚いている部員たちに、麻冬は頭を下げながら言った。

『冬休み、部活を休みたい。勝手なこと言ってるのも分かる。けど……』

まぁだいたいこのシーズンはオフになるものだが、星陵には室内プールがあるからオフはないのだ。

麻冬のために建てられた、麻冬のためのプール。

『秋人を……探しに行きたいの。家族とも連絡を断ってるし居場所も分からないけど、だから……じゃなくて、ただ会いたいの』

鼻をすすりながらも麻冬は懸命に説明する。

『会って……どうすることもできないし、日本に連れ戻すこともできないけど、会いに行きたい……です』

その声は震えていて、ついにはタイルにポタッと涙が落ちる。

麻冬は腕で目を押さえ、必死に涙を抑えようとしているが止まらない。

『……無責任でごめんなさい。みんなが望むなら、退部になっても良い。今のあたしには水泳より大事なことなの……』

麻冬から、あの４人のうちの１人からそんな言葉が出るとは思わないだろう。

星陵高校運動部部長として名高い彼らが、部長を辞めて部活すら辞

めても構わないと。

正直、そんな綺麗事と思うかもしれない。

絶対あとで後悔するんだろ、と言う人もいるかもしれない。

けれど、それで将来食って行こうとしている彼らがスポーツを辞めるという覚悟はそんなに簡単なものではない。

オリンピック強化選手にも選ばれてる麻冬なのだ。

『いーんじゃないですかー？』

泣いてる麻冬の前に立ち、松平は麻冬の視線に合わせるため少しかがんだ。

『だって、雪原頑張ってたじゃん。月影いなくなって悲しいはずなのに、それでもちゃんと笑って部活も頑張ってたじゃん』

『松平くん……』

『誰が見たってお前が月影好きなことくらい分かんだよ』

松平は軽く麻冬の肩を叩きながら、豪快に笑ってそう言っている。
が、次の瞬間には大声で笑うのをやめ、真剣かつ穏やかな表情をした。

『行ってこい。雪原がいない間は俺が部を守るから』

そんな松平の顔を見た麻冬は更に泣けてしまい、言葉を発するにも声が詰まって出ない。

松平は後ろを振り返り、『なぁ、みんな』と部員たちに投げかける。

すると部員たちもウンウンと頷きながら言った。

『そっすよ！冬休みくらい休んだって罰あたりませんて』
『水泳より男！素敵すぎっす！』
『そうですよ先輩。あたしたち待ってますから！』

賛成してくれる人はたくさんいた。

けれど、それればかりではない。

『部長が月影先輩探しに行って会って、それで何か得るものはあるんですか？』
『ちょっと山名！』
『なんだよ、だっておかしいだろ。なんでみんな賛成？』

確かに彼の言うとおりかもしれない。

そんな勝手な感情で部長が部に来なくなるなんて許されるものではない。

いくら水泳が個人競技だとしても、部の調和を乱すようなことがあってはならない。

『……得るものがないとは言い切れない。あたしは何かを得たくて行くんじゃない』
『じゃあ何のために、』

何のために。

『好きな人に会いたいって気持ちに理由はないわ。……ごめんね、山名くん。ダメな部長で』
『そんっ……っ……』
『じゃあ、あたし行きます。明日からよろしくね、松平くん』

そう言って麻冬は更衣室へと入って言った。

山名は言い返せないことが悔しいのか何なのか、歯がゆそうな表情をしている。

反対をするから山名は悪者っていうわけではない。

その証拠に、山名を責める人は誰もいない。

むしろ山名のように反対するのが普通のスポーツマンだとも言えるかもしれない。

『山名。明日からも頑張ろうな。雪原いなくても』

松平は山名にそう言い、松平も更衣室へと向かった。

麻冬はその言葉通り朝練にも行かず、そして今も放課後になったにも関わらず部活へ行く気配は見せない。

「元気だよ、秋人。向こうでも目立ってるって。ナギが……友達が言うから嘘はないだろうけど、本当にそうか見てきて」

まさか阿笠が秋人の住所を知っていたなんて思わずびっくりしている麻冬たちをよそに、阿笠は明るく言う。

見かねた烈が阿笠に言った。

「阿笠阿笠、みんなついていけてないから。頭」
「う？え、なんで？」
「阿笠が知ってるなんて思わないからだろ」
「あ、そっか」

阿笠は言われて気づいたものの、特に躊躇する様子も見せずにメモをじっと見つめている麻冬に話しかける。

「ごめん、俺こんくらいしか力になれないけど」

阿笠はそう言うけど、こんだけしてくれれば言うことなんて何もない。

むしろまさかわざわざ調べてくれるなんて思わないだろう。

勝手にいなくなった部長の行き先なんて、しかも麻冬が秋人に会いに行くための手助けなんて普通ならしない。

でも、やはり別れたって阿笠は優しいから。

「十分すぎよ……。本当に……ありがとうっ」

麻冬はメモを握りしめながら阿笠に抱きついた。

阿笠は一瞬びっくりしたのか一歩後退したが、阿笠の胸に顔をうずくめてくる麻冬がとても愛しく感じる。

阿笠は麻冬の頭に手を置き、フ……と微笑んだ。

「もうっ……大好きっ！」

「はは、うん」

「あたしを振ったこと後悔させるんだからっ……」

「あれ、浮気発言？」

付き合っていた頃には見られなかった余裕な阿笠。

麻冬の言動に一喜一憂したり左右したりしていたのに、今では麻冬を受け止めるまでになっている。

強くなると言った阿笠の言葉は嘘ではないことが分かる。

もちろん、これが強いというわけではないけど、でも着実に確実に近づいている。

果てしなく、けれど終わりの見えるゴールに。

「行ってらっしゃい。麻冬」

思い出はたくさんある。

道も直線ばかりではない。

けれど、迷いはない。

「……行ってきます。阿笠」

麻冬は阿笠から離れて涙目で阿笠を見上げながら、きちんとあいさつをした。

そんな2人の近くで、烈と春樹はこんなやりとりをしていた。

「春樹。うちの阿笠がどーも」

烈は少しだけ嬉しそうに笑いながら言った。

春樹は一瞬何のことだか分からなかったが、すぐに気づいて答えた。

「――――うん。ようやく聞けたね、その言葉」

春樹もまるで烈のように少しだけ嬉しそうにしている。

あの日、秋人の誕生日の翌日の朝のこと。

職員室でのやりとりを忘れたわけではないだろう。

遅くとも、しっかりと成された約束。

それはこれからを生きていくバネとなる。

雪原麻冬

今宵旅立つ。

愛しき人を求め。

next

第189話【隠してきた本音】

「アキト～」
「ん、おう、ナギ」

クリスマス・イヴ。

フェルデン学園も冬休みを迎えているが、強豪であるサッカー部はそんなもの関係なしと言わんばかりに冬休みも練習三昧である。

各地から人が集められていて、かつ練習もあるためなかなか帰れない寮生のために寮は年中使える。

たださすがにお盆や年末年始は食事は出ないため自炊かコンビニとかで買うしかない。

「お前片っぱしから断ってんだって？」
「何を？」
「デートの誘いとか」

練習を終え、風呂から上がったばかりの秋人は自販機でジュースを買っていた。

そこにちょうどナギがやってきたわけだ。

「あー。まぁな」
「なんで？もったいない」
「どうせみんな興味本意だろ。アジア人が珍しいんだよ」
「分かってないな～」

ナギはケラケラ笑いながら、自販機でジュースを選んでいる。
秋人は買ったばかりの缶を開けてグビッと飲み始めた。

「そんだけ見た目良くてサッカーできりゃモテんだろ。日本でもそうだったろ？」
「うーん……」

モテて、はいたけどほとんどの人が麻冬とできてると思っていたため、そこまで多く告白されたわけではない。

秋人は無頓着だからまさか自分が人気あるとは思っていないのだ。

「そんなことなかった」

ナギやナチなんかはやっぱりモテモテだ。

ただナギには彼女がいるしナチは本気で好きな人はいないから周りを気にしていない。

彼女がいてもおかしくないのに、ナチは告白されたら付き合ってみて結局振るか振られる。

たいして興味がないようだ。

「そんなもんかぁ？あ、そうそう！ダイゴ元気みたいだね。なんか会いたくなっちゃった」

「……え？なんで阿笠が元気って知って……」

「えっ？あっ、」

阿笠から電話を受けたナギは久々に阿笠と話した。

もちろん目的は秋人の居所を探すためだ。

まぁこのフェルデンに秋人が編入したため事は楽に進んだものだが、阿笠はナギにくれぐれも自分が秋人を探していたことを言わないでくれと念を押していた。

阿笠なりの配慮だろう。

「ナギ、ジュースよこせ」

と、いきなり後ろからナチが現れてナギが買ったジュースを横取りした。

「あーっ！全部飲むなよっ」

「へいへい」

何とも良いタイミングで現れてくれた、と思うが、偶然ではない。

2人で話してるのを見て最初は素通りしようとしたナチだが、余計なことを口走ったナギをなんとかするためにこのタイミングでやってきた。

ナギは時折阿笠の話をするときがある。

もちろん阿笠のことを好いているからのことであって悪気はないのだが、そのたびに秋人は心を痛める。

難しい話だ。

ナチはそんな秋人の気持ちに気づいているため、ナギが阿笠の名前を出すたびにフォローしている。

もちろんナチにはなぜ秋人が阿笠を避けてるのかは分からないままだ。

「2人とも良いのか。今日はイヴだろ」

秋人がそう言うと、2人は顔を見合わせた。

「俺遠恋だからさぁ」
「俺は今は彼女いない」
「なるほど、」

つまり3人して暇人というわけだ。

なんとなくイヴに暇人とは少し悲しくもある。

「……なぁ、そろそろ聞かしてくんない？」
「え？」
「なんでドイツに来たんだよ」

ナチはいつになく真顔でそう聞いてきた。

秋人はジュースを飲む手をピタッと止めた。

何も知らないナギは、スカウトされたんだろ?とナチに言い返している。

スカウトされたのは事実だが、純粋にこっちでサッカーをしたくて来たのではない。

「ダイゴと何があったんだよ。……俺は今のお前のプレーは好きじゃない」

自販機の前にはソファーが、とうか談話できるようになっているためソファーやテーブルがあり、ナチはそこに腰を下ろした。

ナギは態度悪くもテーブルに寄りかかりながら座る。

だが、秋人はソファーには座らず2人に背を向けたまま立っている。

「もともと手本みたいな動きはしてたけど、予測不可能なダイゴの

動きを読みながらあり得ないところにセンタリングしたりパスしたりするアキトのプレーがない」

「……そりゃ阿笠がいないんだから仕方ないだろ」

「そう。だからお前はダイゴとコンビなのになんでダイゴは一緒じゃない？」

あのときの、中学のときドイツで阿笠と秋人がナギたちに言った言葉を忘れたわけではない。

秋人だってしっかり覚えている。

というか、覚えていなくたって自分が阿笠と離れる将来なんて考えていなかった。

「……言いたくなきゃ良いけど、もっと楽しそうにサッカーやれよ。俺は勝つことも大事だけどそれ以前にサッカーが楽しくなけりゃやる意味はないと思ってるから」

ああ、阿笠もそんなことを言っていた。

勝負したいと言ったのは秋人自身のはずなのに、その結果がこれではあまりに切なすぎる。

ただならぬ雰囲気を醸し出している2人に入っていけないナギは、とりあえず黙って聞いている。

「お前らにアシストするのだって……楽しいよ」

少し震えた声で秋人は言う。

「……けど……」

けど

その先は言えない。

だって言ったらドイツに来た意味がなくなるから。

こっちに来てから3週間は経ち、慣れない学校生活や部活に勤しんできた。

悲しさなんて忘れるくらい忙しい毎日だった。

でも、クラスの中には当たり前だが春樹も夏実も麻冬もいない。

部活仲間には阿笠がいない。

当たり前のことだけど、それを望んでいたはずなんだけど

「……阿笠に……適わない自分が嫌だった」

どうしてこんなにも胸が苦しいんだろう。

「この前……阿笠と対戦したんだ。全国チーム対県チームとして」

「……」

「天才には及ばないって……実感した。みんな頑張れって、悔しいなら立ち上がれって言うけど……」

立ち上がるつもりだった。

また一緒にサッカーをやって切磋琢磨しようって、思っていたはずなのに。

「……一緒にサッカーやってる限りきっと俺はその追いつけない背中を見続けることになる。分かってるのに並べないことが……悔しいんだ」

努力しろ

もっとやれ

そう言われても、これ以上どうすれば良いのか分からない。

だって頑張ってるんだ。

あくる日もサッカーばっかりやっているのに、このまま平行線のままなのは嫌だ。

「……麻冬だって、あいつのもんだ」

「マフユ？」

「何度も振られたって頑張ってみたんだ。……でも麻冬も手に入らなくて、」

秋人は肩を震わせながら、出そうになる涙を懸命に堪えている。

うつむきながら床と対面し、床は歪んで見える。

「……俺、何なんだろうって……どうして阿笠はあんなに輝いているんだろうって……阿笠を妬んだ」

妬む必要なんかないと、みんなは言うかもしれない。

十分幸せだって、秋人を責めたいかもしれない。

でも秋人は一生懸命積み上げてきたものが崩されて、でも誰にも弱音は吐けないから溜め込んで、ついには抱えきれなくなったのだ。

日本に来て、ようやく見つけたサッカーの道も初恋も儚く散っていった悲しみは計り知れない。

ただ、日本を逃げたのは秋人の弱さであることには変わらない。

「妬む自分は……最悪だ。だから、阿笠と比べずにいるために日本を出た。阿笠に劣らないような人間になりたいって……思った」

秋人はついに堪えきれずに涙を浮かべた。

手で涙を拭く仕草を見たナギがテーブルから下りようとしたのを、ナチがスッと手を出して止める。

ナギは躊躇するも、そのままテーブルの上に座り続けた。

「そう思ってここに来たのに、今のお前はどうだ？」

「……阿笠がいなきゃダメだった……」

更衣室で着替えるとき

準備運動するとき

パスするとき

隣にはいつも阿笠がいた。

練習するとき、俺が部員に怒鳴れば阿笠も怒鳴り、阿笠が喜べば俺も喜んだ。

中学までは選抜以外阿笠といることはなかったのに、今となってはいなきゃいけない存在になっている。

あいつの爽やかな表情も時折見せる太陽のようなやんちゃな笑顔も、真面目な顔も切なげな顔も、とにかくあいつの顔ならなんだって良い。

見たい……

「……ずるいよな、俺。阿笠から離れたくて来たのに阿笠とやりたいとか……バカげてる」

バカって言われても良い。

蔑まれても良い。

それでもやっぱりあいつのないサッカーは嫌だ。

一緒に全国優勝しようって言った約束すら守らずに勝手なことした俺にきっと怒ってる。

せっかく空港まで来てくれたのに俺は無視した。

けど、もしあそこで振り向いてしまったらきっと日本に残りたくなっていた。

「良いじゃん、バカでも」

そこでようやくナギが口を開いた。

「やっぱりアキトはダイゴと一緒にやるべきなんだよ。やりたいんだろ？日本に帰りたいんだろ？」

……ここには、ナギやナチがいる。

ハノイもいて、リョーマだっている。

練習するにはうってつけだし、きっとこのままここにいればもっと上達する。

夢見た頂きを目指せる。

「素直になれって」

そんな最高の環境すら惜しくないくらい、君に会いたいと思った。

敵わなくても良いから、もう一度一緒にサッカーやりたいと思った。

流した涙の分だけ。

next

第１９０話【クリスマス・イヴ】

同じくクリスマス・イヴの日本はドイツより数時間時がはやい。

「はー……寒」

阿笠は手を合わせてハーッと息をはいて手を温めている。

ドイツでは秋人たちが練習を始めてる頃だろうか。

阿笠はマフラーやニット帽で防寒しながら道を歩いている。

本当はロードワークしようとしていたのだが、家から出るとあまりの寒さにロードワークする気も失せ、なんとなく歩いている。

とくに意味なく、ただひたすら歩いていると、無意識のうちに学校についた。

学校に行っても別にやることはないのだが、歩いてもつまらないので阿笠は学校に入り、グランドに出た。

野球部が練習試合をしていて、どこの高校の野球部かは知らないが

俺が試合を見ていると、
「阿笠大悟！本物だ！」と指を差された。

本物も偽物もあるか、と思ったけど阿笠は知らんぷりして学校内をテクテク歩く。

イヴだろうがなんだろうが、全国屈指の強豪が多い我が星陵は部活に勤しむ運動部員が数々いる。

もちろんサッカー部も今日は練習があったが、昼間だったため終わっているのだ。

体育館に顔出したら誰かいるかな、なんて軽い気持ちで体育館へ向かうと1階でバド部がこちらも練習試合中だ。

だが、なにやらザワザワと騒いでいる。

何だろうと阿笠は軽く覗いてみると、どうやら誰かが倒れたようだ。

「わ、悪い春樹……」
「気にしないで。誰かなっちゃんを運んで。それと……ん、と……」

どうやら春樹のダブルスのペアが倒れたようだ。

春樹は代わりのペアを選ぼうとするが、みんな首を横に振る。

それはそうだろう。

春樹と並べる実力を持っている人なんてこの部にはいない。

試合したって自分ばかり狙われてボロ負けするのがオチだと思ってしまうのも無理はない。

「困ったな……。しょうがないか」

春樹は立ち上がって審判に告げに行く。

「すみません。櫻井・中丸ペアは棄け……」
「あっ、部長！見てくださいっ」
「ん？」

すると、部員の1人がドアのほうを指差した。

春樹もその方向に視線を向けると、ニタ～ッと嫌な笑みを浮かべて

くる。

その足でこっちのほうに向かってきて、ドアを思いきり開けて阿笠の手を引いた。

「……はっ？！櫻っ……」

「審ぱーん。選手いました。続けます。５分だけ時間もらえませんか？」

「良いかね？鮎沢・丸井ペア」

「いっすけど」

というわけで、突然阿笠が出るはめになってしまった。

もちろん阿笠だとバレるわけにはいかないから、サンバイザーをつけて軽く顔隠しをしてみるも、あまり意味はない。

だがバド部のユニフォームを借りて来てみれば相手もまさか阿笠だとは思わないだろう。

阿笠は強制的にユニフォームに着替えさせられ、いきなり春樹と打ち合いを始めさせられる。

みんな自分が中丸の代わりなんて無理だからと阿笠を全力で応援し

ていて、春樹は楽しそうに笑いながら打っている。

「ちょっと～。俺より部員のほうが上手いだろ？」
「いやいや、阿笠は十分上手いから平気平気」
「……楽しんでる？」
「あっは、バレた？」

まぁ確かに春樹と中丸以外はたいしたことないし、阿笠は運動神経かなり良いし代用しても問題はないだろう。

何よりどうせなら阿笠とやってみたい気持ちのほうが大きい春樹が、久々にダブルスを楽しもうとしている。

阿笠は呆れてものも言えないようだ。

でもバレても阿笠に責任は問われないわけだし、ちょうど暇人してたわけだし何だか少し楽しそうだし、阿笠は腹をくくる。

「どうなっても知らないからなっ！！」

阿笠は思いきりスマッシュをした。

それも部員たち目掛けて。

「よっし、見てろよ。バド部」

阿笠はニヤッと笑い、そうして試合が始まった。

相手校は県の中でもそこそこのレベルで、まぁいわば春樹や中丸以外の部員と互角。

春樹たちにとってはたいして練習にならないし、だからと言って強豪とばかりやるのも少し難がある。

今回はみんなのレベルに合わせて相手校を選んだようだ。

試合は当然優勢だ。

春樹1人の実力で十分すぎるのだから当たり前だが、阿笠もなかなかやる。

「で？中丸どうしたの」

「あ、なっちゃんはね～今日風邪ぎみだったんだ」

「あー、でダウンしちゃったんだ」

「そそ。もー、昨日夜遅くまで彼女とイチャついてるから悪いんだよ」
「あはは。なるほど、」

あまりに余裕なせいか、2人は会話を楽しんでいる。

もちろんプレーも本気だし手は抜いていないが、あまりに余裕で2人が会話をしてくるため相手も少しうろたえている部分もある。

中丸のペアが阿笠だと、バドの素人だと知らない相手校も可哀想に。

まぁ阿笠を攻めたところでやられるのが目に見えてはいるものだが。

「あれ、上手く打てない」
「あ、じゃあ左足一歩後ろに下げてみなよ」

阿笠の言葉に春樹は反応し、阿笠は言われた通りにしてみる。

「おっ。打てた打てた」
「でしょ?そのショットはフォームが大事でね」

なんと、会話をするどころかアドバイスまでし合っている。

もうここまできたら相手のプライドもズタズタだ。
点数的には圧勝というわけでもないし、いろんな打ち方して遊んでる阿笠のミスがいくつかあったものの普通に勝ってしまった。
しまいには、もう終わり？なんて阿笠は言ってしまう。
プライドがズタズタになるどころか戦意すらなくなり精神的に追い詰められるものだ。
「バド楽し～っ。なんか良いな、もっとやったら上達しそう」
阿笠はキャッキャと楽しみながらコートから出る。
部員たちは阿笠と春樹にタオルとドリンクを渡した。
「お疲れっす。いやー、阿笠先輩さすがですね」
「いやいや、ミスしまくったもんよ」
「でも遊びなしだったら余裕勝ちでしたよ、絶対」
その後も練習試合は進められていき、阿笠は最後まで参加するはめ

になる。

星陵バド部は一応顧問はいるけど名前だけの顧問なので、春樹がコーチを兼ねている。

つまり春樹の依存に誰も歯向かうことはできないわけで、阿笠が参加しようが何しようが顧問も文句は言えない。

なんせ春樹がいるから部員はここまで上達できた。

全国に行けるのは春樹や中丸だけだとしても、普通の公立校の生徒が県で上位近辺にいられるのも春樹のコーチのおかげ。

まぁ、阿笠より数段部員の面倒見が良い。

他の部員たちの試合の最中にも部員への指導は怠らない。

「んー、じゃあとは水だけ持ってきてくれる？」
「はいっ」

風邪で体育館のベンチで横になってる中丸には阿笠がついている。

阿笠は1年にいろいろ指示して看病にあたっていた。

春樹から中丸を頼まれたのだ、断れるはずがない。

自分はついててやれないから、と。

「……悪いな、阿笠」
「良いよ。気にしないで」
「ふは、それ俺の？」
「ははは。ユニフォーム借りちゃった」

オレンジ系の迷彩柄に近いユニフォームを着た阿笠は薄ら笑いをする。

「良いな、阿笠は……。何でもできて」
「え、」
「バドだって春樹の隣に並べるって……すごいよ。やっぱ並大抵の運動神経じゃない」

中丸は腕を目に当てながら、少し苦しそうに咳もしつつそう言った。

風邪で苦しいながらも中丸は春樹たちの試合を見ていた。

ちくしょう、ちくしょうって心の中で思っていた。

「……運動神経が多少良くたって嬉しかないよ」

阿笠は表面上は笑っているけど、とても悲しそうだ。

スポーツができる人は小さい頃から無条件でモテる。

その法則は今でも失われていないけど、それが何だって言うんだろう。

いろいろな人に好かれて告白されて、その先にあるものっていったい何？

チヤホヤなんてされたくないし、キャーキャー騒がれたって嬉しくはない。

「スポーツも勉強も並より下でも良い。……好きな人を幸せにできるなら、別に何もいらないんだ」

本当なら今日この日を麻冬と過ごすはずだった阿笠。

イヴを迎える前に別れてしまったのは、阿笠の一存。

切なげに声を押し殺してそう言った阿笠に、中丸は目から腕を外して阿笠の顔を見た。

自然と中丸の視線に引き寄せられ、阿笠も中丸を見る。

「中丸は彼女と上手くやってるでしょ?そのほうがよっぽど羨ましいよ」

ファンレターだって別に望んでいない。

だって、あなたのファンですなんて言われてもどうしたら良いんだ。

俺は芸能人でもなければ有名になりたいわけでもない。

普通の高校生だから。

「……雪原は幸せだよ」

「は、」

「阿笠が雪原と別れたのは雪原のためだろ。雪原は……阿笠に感謝してる」

もはや3人の恋愛事情なんて星陵生のほとんどが知っている。

背鰭尾びれのついた噂が広まってることも事実だが、阿笠が麻冬のために別れて、その理由がなんなのかくらいは合っている。

「なにも生涯側にいることが相手を幸せにするってことじゃない……。側にいなくたって、遠くから見守ってることだってその人を幸せにしてることになるさ」

もし中学の頃俺が麻冬をあんな形じゃなくて身を固にして守っていたら、違った未来があっただろうか。

別れたりしなければ麻冬は秋人を好きになることなんてなかっただろうか。

そんなことは誰にも分からないけど……でも、なんとなく断言できる。

例えずっと付き合っていたとしても麻冬は秋人と出会った時点で秋人に恋をしただろう。

俺なんてもう目に入らないくらい秋人を好きになっただろう。

真っ直ぐな生き方をするあいつを、きっと……。

「雪原の幸せを願ったお前は立派だと思うよ。俺」

中丸は息を切らしながらも懸命に阿笠に伝えようとする。

本当は中丸のほうが阿笠に弱音を吐くつもりだったのだが、阿笠があまりに寂しそうに笑うものだから。

「幸せになると良いな……雪原」

「……違うよ。幸せになるんだよ、絶対」

そのとき1年がミネラルウォーターを持ってきて阿笠に渡した。

それを受け取った阿笠はペットボトルの蓋をキュッと開け、中丸に差し出す。

「ありがとう……。中丸」

恥ずかしさを必死に隠そうとサンバイザーのツバを下に少し下ろした阿笠の仕草を見た中丸は軽く笑った。

阿笠は中丸に笑われても顔を上げることなく、うつむきながら照れを見せずにいる。

中丸はそんな阿笠から水を受け取った。

「どういたしまして」

きっとこのミネラルウォーターは酸っぱい。

中丸はそう思った。

next

第１９１話【対面】

「あ、あのっ」

２４日もあと３０分。

もう時間がない。

「ん？俺？」

「えと……あたしフェルデン学園探してるんですけど」

慣れないドイツ語を片言のように必死に麻冬は喋る。

「……日本人！」

「えっ、に……日本語？」

けれど麻冬は運が良い。

道端で見つけたのはこれからコンビニに行こうとしていたリョーマだ。

「フェルデン学園なら俺通ってるよ。案内しよっか？」

「ほ、本当？」
「うん。あ、でもコンビニ寄って良い？」

リョーマは目の前にあるコンビニを指差しながら尋ねる。

もちろんです！と麻冬は答え、２人はコンビニへと入る。

小林リョーマ、まさか日本語を話せてしかも秋人をよく知っている人物に出会うなんて、麻冬は幸運だ。

それだけではない。

秋人の居所から何から何まで、いろんな人の力を借りて必要な情報や手段を得た。

今、麻冬には女神がついている。

「フェルデンにこんな時間に何しに？」

コンビニで夜食を買い、フェルデンへ向かいながらリョーマは麻冬にそう質問した。

「会いたい人がいて」
「明日のほうが良いんじゃない？もう寝てるかもよ、」
「今日が良いの。寝てたら……起こしてでも会いたい」

なぜ今日が良いのか、そんなこと言わなくても分かる。

だって今日は麻冬の誕生日だから。

「寮生？だとしたら、んー……一応門限あるんだよな」
「なんとかならないかな？あの、月影秋人……って言うんだけど」
「――――アキト？」

麻冬が秋人の名前を出すとリョーマは目を見開きながら少し驚いている。

リョーマはピタッと足を止め、驚き口調で言った。

「アキトに会いに来たの？」
「う？うん」
「君は……ダイゴを知ってる？」
「ダイゴ？」
「アカサダイゴだよ」

リョーマはフェルデン学園のコーチ。

もう何度も秋人の相手をしている。

それならば、ナギやナチが気づいてリョーマが気づかないはずがない。

「知ってるわ……。秋人の相棒でフォワードで……あたしの元彼よ」

「……元彼？」

「秋人を好きなあたしのために別れてくれた……優しい人」

リョーマはこの前の2人の戦いをビデオで見ている。

阿笠に屈辱的に負けている秋人の姿を見ている。

「……アキトとは両思い？」

まさか、なんて考えたくないし思いたくない。

でも、秋人のあのプレーを見ていれば本気でサッカー留学したかったわけではないことくらいすぐに分かる。

覇気がない。

楽しそうではない。

月影秋人のプレースタイルではない。

「……もう嫌われたかも。あたし、何回も秋人を振ったの」

「なんで、」

「阿笠の側にいなきゃって……バカね、あたし……」

バラバラだった線が1つに繋がってしまった。

ああ、そういうことなのか……とリョーマは確信した。

フェルデンが強いから編入したわけでも、あの監督に憧れたから留学したわけでもない。

アキトの留学目的は、日本から……ダイゴとこの子から離れたかっただけだ。

純粋に秋人のプレーに惚れているリョーマはショックを受けている。
悔しそうに唇を噛みしめながら、麻冬の話を聞き続ける。

「秋人……いろいろ言われてるの。学校で」
「……」
「阿笠に……勝てないから逃げたんじゃないかって、」

確かにそう思われても仕方ないだろう。

そう言う人がたくさんいるわけではないだろうが、口に出さずとも思っている人なら多数いそうなものだ。

秋人が有名なだけに軽口は叩けないが、でも秋人や阿笠や麻冬が三角関係なことも秋人がサッカーで阿笠に負けたこともみんな知っているのだ。

疑わずにはいられない。

「あたし悔しい……。秋人が何したって言うの、」
「……」
「あ……、ご、ごめんね。こんな暗い話しちゃって」

麻冬はハッと現実に引き戻され、少し顔を赤くしながら照れ笑いをした。

リョーマは止めていた足を再び動かし、麻冬もつられて一緒に歩き出す。

束の間沈黙が流れる。

こんな真夜中歩いているのは麻冬たちくらいで、静かな夜道は虫の声すら聞こえない。

先に沈黙を破ったのはリョーマのほうだった。

「……ねぇ、名前は？」

「え？あ、麻冬。雪原麻冬」

「マフユね。俺は小林リョーマ。日系3世なんだ」

「あ、どうりで」

麻冬はクスッと笑う。

初めて見せた笑い顔にリョーマは一瞬ドキッとした。

それを隠すためにリョーマは続けて質問をする。

「アキトに会ってどうするつもり？」

「え、」

「会って、何をするの？」

リョーマの言葉に麻冬は目を細めながら自分の手を見た。

この寒いのに手袋すらつけていない手は微かに震えている。

麻冬自身、何か理由を持って秋人に会いに来たわけではない。

何かを得るために会いに行くんじゃないと水泳部員に言ったものの、

会ったら何かあるかもしれないと期待しているのも事実。

話せるだけで良い。

一目見れるだけで良い。

そんな綺麗事だけではここまではこれない。

「……頑張れって言いたい。阿笠いなくても頑張るって決めた秋人に、」
「逃げたのに？」
「逃げたんじゃないわ！」

麻冬はリョーマの顔を見上げながら叫んだ。

驚いて一歩引いたリョーマは黙りこんで麻冬をじっと見る。

「……秋人と阿笠が離れることはそんな簡単なことじゃないわ。覚悟決めなきゃ離れられないのよ」
「……」
「いろんなことに負けた自分から……立ち直ろうとしてんのよ。阿笠もちゃんとそれ分かってる。秋人は……」

そう続けようとしたとき、ようやくフェルデン学園が見えてきて、麻冬はフェルデン学園の建物を見つけ指差しながら
「もしかしてあれ？！」と尋ねた。

リョーマ自身フェルデンに案内してたことを忘れていて、思い出したように頷いた。

麻冬はリョーマを置いて走り出し、少し遠くに見えているフェルデンめがけた。

「マフユ？！」

リョーマの声も届かないくらいに麻冬は無我夢中で走っている。

入口にある案内板を見て寮の位置を確認し、とにかく急げと言わんばかりに寮を探しながら急ぎ続ける。

知らない土地

慣れない言語

それでも秋人に会いたい一心で麻冬は身をこにしている。

同時刻、ナギとナチの前で秋人は肩を震わせながら事実を話していた。

阿笠のいない現実を受け入れることができずに日本に帰りたいと思ってしまう自分を責めながら、秋人は涙を流している。

3人が話しているロビーは1階の入口付近だ。

受付のおばさんももういないし、寮の玄関は鍵がかかっている。

門限を過ぎたら特別な理由がない限り寮から出てはいけないことになっているが、スポーツでこの学園に来ている寮生が多く夜遅くまで自主練してたり遠征で遅くなることがたくさんあるため、運動部の部長は合鍵を持っている。

つまりハノイは持っているということになる。

リョーマは窓からこっそり出てきたものだからハノイに断りもしていないが。

「……ごめん、ナチ、ナギ。せっかく久しぶりに一緒にサッカーできたのにこんなんで」

いずれ違うチームになる可能性だってある。

いつまでも相棒でいられるわけではないし、黄金コンビと呼ばれるのも高校までになるかもしれない。

だけど、それでも良い。

ていうよりそれならなおさら一緒にいなきゃいけない。

残された期間があとわずかなんだと言うのなら、そのわずかな時間だけでも一緒にグランドを駆け回りたい。

「なんにせよお前がここでやったサッカーだってちゃんと本気なんだろ？」

ナギは机から下りて秋人に近づきながら聞く。

「もちろん……でも、」

「なら良いよ」

秋人の肩にそっと手を置き、ナギは笑う。

「今を大事にしろ。アキト」

「ナギ……」

「やっぱお前はダイゴとプレーするほうがキラキラしてる」

ナギがそう言うと、続けてナチも言った。

「……そうだな。今度はダイゴも連れて来いよ」

「ナチ、」

「今度やるときは敵だな。でも、もう一回あのとき憧れたコンビが見れる」

ナチは懐かしそうに、そして少しだけ嬉しそうに口を緩ませながらそう言う。

2人とも秋人の勝手を許してくれている。

編入手続きだってようやく終えたばかり。

勝手にいなくなった手前星陵サッカー部にだって合わせる顔がない。

でも、誰にどう思われようと冷たい目で見られようと蔑まれようと構わない。

今しかできないことを全力でやりたいから……。

「秋人っ……秋人！」

そのとき、鍵がかけられているガラス張りの玄関を叩く音と秋人の名を呼ぶ声が深夜に響いていた。

next

第１９２話【午前零時】

会いたい。

会いたい。

会えるだけで良い。

もっと望んで良いのなら、抱きしめたい。

「秋人ぉっ……！！」

ドイツの、しかもとある学園の寮のドアを日本の女の子が叩いている。

あり得ない光景。

「んん？アジア人？アキトの名前呼んでる」

ナギが女の子を指差しながらそう言う。

言われて声に気づき、秋人は振り返った。

「――――麻冬！！」

秋人は目を見開きながら驚いている。

そして急いで内側から鍵を外してドアを開けた。

すぐさま麻冬は秋人に抱きついてポロポロと涙を流す。

「もうっ……！ばか！ばか！」

「なっ……んで麻冬がっ」

抱きつかれてもまだ実感の沸かない秋人は混乱している。

いつにも増して珍しく冷や汗をかきながらあたふたしている。

「携帯繋がんないし！おばさんたちとも連絡取ってないし！会いに来るしかないでしょぉっ……」

雫というより雨のような涙をこぼしている。

着替えたばかりの秋人の服に水がこびりつくが、そんなことお構い無しに麻冬はワンワン泣き続けている。

どうやって来たのか

なんで場所が分かったのか

1人で来たのか

なぜ来たのか

秋人は分からないことが、聞きたいことが山ほどあるがそれどころではない。

頭を整理するより先に本当に麻冬なのかを確かめようとした。

「ほ……本物？」

「本物よっ」

「だ……おま……、阿笠は」

「別れたの！」

「……えっ？」

麻冬は抱きついている手に力を込めた。

「秋人がいなくなった前日あたしたち別れてたのよっ……」

「――――え？」

予想外の言葉を聞かされた秋人は、麻冬を抱きしめようと回した手をピタッと止め、おろした。

何を言っているのか、耳は確かなのかと疑うほどに秋人は動揺して顔もひきつっている。

無理もない。

もし秋人が2人が別れていたことを知っていたなら、もしかしたらドイツに来ることはなかった。

いや、断言できる。

サッカーでも恋愛でも勝てないのが嫌だった。

……なら、恋愛は勝っているとしたら？

それならば日本を出る必要なんかはなかったんじゃないか？

「ナチ、あの子が例のマフユかな？」

「ああ、たぶん」

秋人と麻冬の側でナギたちはそんな会話をしている。

邪魔かもしれないと思いつつもその場から動けずにいるのだろう。

「なんで……？だってお前、阿笠と幸せになるって……」

「振られたの」

「……お前が？」

分からないことが、予測できないことばかりで秋人は頭が追いついていかない。

「だ……て、阿笠はお前に惚れてて……」

秋人は震えたような声を出している。

何度も何度も阿笠と競り合って何度も負けた秋人にしてみれば信じがたい事実だ。

「……あたしが秋人を好きだから、振ってくれたの」

そのとき、麻冬を追いかけてきたリョーマが息を切らしながら走って寮に入ってきた。

「マフユは?!っ……ととっ、」

麻冬と秋人がお取り込み中なのを見たリョーマは手で口を押さえながら立ち止まった。

リョーマが麻冬の名前を呼んだことに気づいた秋人は、リョーマのほうをチラリと見て言った。

「な……んでリョーマが麻冬を知って?」

リョーマがドイツ語で叫んだものだから、つい癖で秋人は日本語を話せるリョーマにドイツ語で尋ねた。

つられたリョーマもドイツ語で答える。

「あ……道で会って案内してきたんだ。アキトに会いたいって言うから」
「嘘だろ？なんでこんな真夜中に……危ないだろ、麻冬」
今度は麻冬相手なのにも関わらずドイツ語だ。
麻冬は涙でグシャグシャになった顔で秋人を見上げながら、やっぱりドイツ語で答える。
「今日中に会いたかった……。どうしても」
それまで日本語で話していたがドイツ語での会話になったため、ナチやナギにも話が分かるようになる。
ナギが、イヴだからかな？とナチにコソッと言ったのを聞いた秋人はハッと気づいた。
そして、キョロキョロと見回して時計を見つけ、時間を確認した。
「１０分前……。良かった、」

そうポツリ呟いてから、秋人は力いっぱい麻冬を抱きしめた。

「……好きだよ、麻冬。会いに来てくれてありがとう」

「秋人ぉ……」

「誕生日おめでとう」

そう言って、秋人は初めて麻冬にキスをした。

触れるだけの優しいキスのあとにもう一度、今度は深く長い口づけ。

もう何の涙か分からないくらいに麻冬は泣いている。

分からないことも、矛盾してることもたくさんある。

聞きたいことは山ほどあるし事実なのかも確かめたいところだ。

けれどそんなことすらそっちのけて、誕生日に自分に会いたいからとこうして異国の地にたった1人でやってきてくれた麻冬を、秋人はこの上なく愛しいと思った。

理由なんかいらないし、もうどうでも良いと思った。

ただ抱きしめてキスをして、麻冬をもう離したくないと、ただそう思った。

「あたしのこと……嫌いになってない？」

「ならないよ」

「阿笠を何度も選んだこと、怒ってる……？」

麻冬も聞きたいことはたくさんある。

秋人も言いたいことはたくさんある。

「でも、こうして俺を選んでくれただろ」

けど、言葉にできない。

あなたに会えて本当に良かった。

嬉しくて嬉しくて、言葉にできない。

「ごめん……。勝手にいなくなって、本当に……」
「良いよ……だって秋人、こっちで頑張るんでしょう？」

麻冬のその言葉に、秋人は麻冬の両肩に手を置いて顔をうつむかせた。

「……阿笠を超えたくてここに来たけど、阿笠のいないサッカーなんて意味がなかった……」

麻冬の肩に置いている手に力が入り、軽く麻冬の肩を握っている。

その手が微かに震えていることに気づいた麻冬は、黙って秋人の話を聞く。

「ごめん……。一緒にサッカーやりたい。逃げてばっかで……ごめん」
「……秋人」
「みんな許してくれないかもしれない……。それでも、……俺には阿笠が必要だった」

正直麻冬には複雑かもしれない。

結局秋人も阿笠も麻冬よりお互いのサッカーのことばかりを考えている。

秋人が日本に帰りたい理由だって、阿笠とサッカーしたいからだ。

そこに麻冬の存在はない。

けれど麻冬は、仕方のないことだと笑うんだろう。

例え恋敵だとしても秋人と阿笠が離れられないでいる事実は麻冬もよく知っている。

恋より友情とか、そういう次元の問題ではない。

「日本に帰りたい……。帰って……あいつとサッカーやりたいんだ……」

秋人は弱々しく麻冬から手を離した。

「……サッカーばっかでごめん。こんな俺でも良いのか……？」

離れていくその手を、麻冬はしっかりと掴んだ。

今ここで離してしまったらきっと二度と戻らない。

今、この手を。

「帰ろう、秋人。日本に」

秋人は切なそうな瞳で麻冬の顔を見た。

涙のあとが残っているけどその表情はとても優しく、まるで母親のよう。

麻冬はキュッと両手で秋人の手を握り、言った。

「阿笠が待ってるわ。一緒に帰ろう」

「麻冬……」

「……ばかね。2人が一緒にいなきゃいけないことくらい分かってるわよ……」

麻冬は目に涙を浮かべながら、少し嬉しそうに微笑みながらそう言ってくれた。

その優しさに秋人はいてもたってもいられなくなり、ポトッと床に涙を一粒落とした。

続けてもう一粒、そしてまた一粒落ちていく。

たった3週間。

そう、たった3週間しか離れていないのに秋人はここまで限界がきていた。

好きなサッカーでこんなにも苦しく思うことが秋人を更に追い詰めていた。

「ありが……っ……」

秋人は麻冬に掴まれていないほうの手で目を押さえる。

押さえたところで涙は止まるはずもなく、いっそう流れてくるのだ

が秋人はそれでも一生懸命お礼を言った。

もう、ごめんとは言わなかった。

「……ありがとう麻冬……。こんな俺を愛してくれて……」

たくさんあった。

2人が結ばれていく過程で数えきれないほどのたくさんのことが起こった。

泣いたことも

怒ったことも

傷ついたことも

きっとどれも無駄なことではなかった。

2人が一緒になるためには必要な道のりだった。

「そんな秋人だから愛したのよ……」

最高の言葉を授かった秋人は、言葉が出てこなくてそのままズルズルと膝をついて座り込んだ。

秋人の力の入っていない手を握りながら麻冬もしゃがみ込み、弱々しいながらも懸命な秋人をそっと抱きしめた。

「ありがとう……」

鼻声でそう言う秋人。

過去は戻らないし、同じ時間も二度と訪れない。

奇跡みたいな時間は、欲しいなら掴みに行くしかない。

慣れない土地

慣れない言語

けれど確かに2人は通じあった。

時計はちょうど0時を指していた。

next

第１９３話【月物語る、彼らの行く末】

「はー、なるほど。ダイゴはこのためにアキトの場所聞いてきたのかぁ」

しばらくして秋人と麻冬が落ち着いたところで、男子寮に麻冬がいるのがバレたらまずいためナギとナチの部屋へ行くことになった。

秋人の部屋は１人部屋で広くないしリョーマは麻冬の知らない人と２人部屋ということで、ナギたちの部屋が妥当だ。

「つかお前阿笠から電話きたなら言えよ」
「だって口止めされたもん」
「ったく……」

とりあえずナギもナチもリョーマもだいたいの事情は分かっていたが、一応大まかにこうなった成り行きを秋人が話した。

ナチたちにはさっき話したばかりだし、リョーマも麻冬から少し聞いててなんとなくは分かっていたが。

まぁ麻冬自身秋人から直接聞いたことはなかったので、ちょうど良い機会だ。

「……あ、そっか。どっかで見たことあると思った」

突然ナチが思い出したように言った。

「ダイゴの彼女だ。写真で見たことある」

「あたしを？」

「ダイゴたちがドイツに遠征に来たとき、ダイゴの携帯に写メがあった」

ナチがそう言うと、ナギは手をパンッ！と叩きながら同意した。

「あー！そうじゃん！あんときのっ！！」

中学のときドイツに遠征に来たのは中２の冬だから、確かにあの頃阿笠と麻冬は付き合っていた。

阿笠が麻冬の写メを持っていても何もおかしくはないが、よく覚えているものだ。

秋人がそう尋ねてみると、そのときの阿笠が麻冬の誕生日がイヴだと言っていたから印象に残っていたらしい。

「マフユのフユは冬という意味なんだって言ってた。その写メには雪も写ってた」

ナチのそれらの言葉だけで、どれだけ阿笠が麻冬を思いながらナチたちに写メを見せていたのかがよく分かる。

冬に生まれた麻冬が雪に舞う姿はさぞかし可憐で愛しかったことだろう。

いつだって阿笠は麻冬のことだけを思っていた。

「なるほどね。あいつらしいや」

秋人は軽く笑いながら言った。

とにかく全てを説明し終えたところで、秋人は学校側にあいさつに行こうとする。

が、さすがにこの時間に学園長たちがいるはずもなくナチに止められた。

学園長だけでなく、ハノイを始めとするサッカー部員たちやコーチ、そしてスカウトしてくれた監督にも頭を下げなければならない。

手続きだって簡単なわけではないし、やらなきゃいけないことは山ほどある。

たくさんの人に迷惑をかけることにもなる。

「てゆーか、俺認めてないけど」

ナチに止められて再び腰を下ろした秋人にリョーマはあっさりと言いのけた。

「えっ」

「ナギナチが許しても俺は許せないな」

リョーマはスクッと立ち上がって秋人を見下ろした。

リョーマにそう言われると思ってなかった秋人は驚きながらリョーマを見上げる。

「俺さぁ、コーチなわけ。選手育てんのが役目なわけ」
「り、リョーマ？」
「中途半端な奴だけは許せないんだよな」

するとリョーマは腕を伸ばして秋人の胸ぐらを掴み、グッと力を込めて秋人を立ち上がらせた。

苦しそうに秋人は片目をつぶりまがら喘ぎ声を出す。

「リョーマ？！」
「おい、リョーマ。落ち着けって」

ナギとナチが止めに入ろうとするがリョーマは受け付けない。

秋人の胸ぐらを掴んだままこう言った。

「勝手なことばっかしやがって」
「リョ……」
「この下手くそ！」

秋人から手を離したと思った瞬間、そう罵声を上げながらリョーマは秋人の頬を思いきり殴った。

その反動で秋人は倒れ込み、ベッドにもたれた。

殴られた頬を押さえながら秋人はキッとリョーマを睨む。

リョーマは秋人に近づいていき目線を合わせるためにしゃがみこんだ。

「ダイゴとなら強くなれるんだろ。なら次はダイゴと一緒に来い」

「え……」

「お前の本気とやら、見せてもらおうか」

リョーマはナギたちを指差しながら、自信満々に言う。

「俺の育てるこいつらより強くなるってんなら、試させてもらおうじゃねぇか」

ああ、決してリョーマは意地悪をしたかったわけではない。

あのときの阿笠に似てる。

サッカーやめると言った列を許せなくてＰＫをしたときの阿笠と少

しだけ。

リョーマのほうが全然大人だし最初から許すつもりだったけど、何かをしなきゃ気持ちがおさまらなかったのだろう。

リョーマは右手を差し出した。

秋人はその右手をしっかりと握りしめ、強気に笑う。

「楽しみにしてろよ」

たぶん、リョーマさえ味方になればこっちのものだ。

それほどリョーマの存在や信頼は大きいのだ。

夜も遅くなり、話も終えたとこで明日も朝から練習があるためお開きという形になり、リョーマは部屋へと戻る。

麻冬は一応ホテルに予約しているし、ここは男子寮で見つかったらまずいためホテルに帰ることにした。

ここからそのホテルまでは歩いて３０分前後だとナチは言っていたが、こんな夜中に女の子１人で歩かすわけにも行かず、かと言って秋人はまだこの近辺に詳しくはない。

そういうわけで結局４人でホテルへ向かうことにした。

寮を出るまではとにかく寮生に見つからないようにと気を配りながら急ぐ。

夜の外は、遠くで車が走っている音と虫の声くらいしか聞こえてこない。

真っ暗な中街灯だけが頼りの夜道は何となく不気味だ。

けれどこの４人でいればちっとも怖くはない。

「あー。兄貴置いてくるんだった」

途中ナギは睡魔に襲われて限界に達し、ナチがナギをおぶるはめになる。

文句は言っているが率先してナギを運んでいるところがナチの優しいとこだ。

「良いなぁ、兄弟」
「マフユはいねぇの？」
「うん。あたし1人っ子なのよ」

麻冬は羨ましそうにナチたちを見ている。

仲間うちでも兄弟がいないのは麻冬だけだ。

秋人にも春樹にも夏実にも兄弟はいる。

「……ありがとね、ナチ」

麻冬は冷えきった手に息を吹きかけて温めている。

「何が？」

ナチは分かっているくせにわざと尋ね返す。

こういうところがナチのある意味での優しさなのかもしれない。

「……嬉しかったよ。教えてくれてありがとう」
「さぁな」
「ふふ。不器用なとこ秋人に似てるわね」

麻冬の言葉に秋人は
「俺？」と反応した。

ありがとうとしか言っていないのに通じるとは。
おそらく写真のことだろう。

すべての事情を聞いた上で、阿笠は本当に麻冬を愛してくれていたことを教えてくれた。

よほど嬉しかったのだろう。

麻冬は笑みが止まらない。

「まぁ、俺は兄貴ほどバカじゃないしアキトより世渡りベタでもな

いからな」
「あはは。本当よね」

秋人は2人の会話にクエスチョンマークを浮かべながら黙って聞いている。

自分のことを言っていることは何となく分かるが、いったい何なのかついていけないようだ。

麻冬は寝息を立てながら気持ち良さそうに寝ているナギを見てクスッと笑う。

「俺はダイゴ派なのにな」
「ふふ。やっぱり？阿笠は最高よね。カッコ良いし優しいし」
「サッカーも上手いしな」

と、そこで突然麻冬とナチが阿笠を誉めだしたものだから秋人はムッとしてようやく会話に入ってきた。

「なにそれ。何の話だよ」

阿笠ばかり褒められて少しムカついている秋人を見て、麻冬とナチはケラケラ笑った。

「ダイゴは良い男って話」
「はぁ？」
「なんだよ、ダイゴいなきゃだめだって泣いてたくせに」
「なっ……おまっ……そういうこと言うか！」

秋人はバシッとナチの肩を叩いた。

ナチは特に痛そうな素振りなどは見せずに、こう言った。

「まぁ……あれだな。本当残念」
「え、」
「もう一度本気のお前とやってみたかったな。サッカー」

学校はサボりっぱなしで生活態度も特にやる気を見せないナチが唯一真剣に取り組んでいるもの。

ナギがいるからとかスカウトされたからとかそんな容易い理由ではなく、ただ純粋にサッカーが好きだから。

きっとその思いは国境なんて関係ない。

「……そうだな。俺、最悪だよな。でも今度来るときは絶対本気だから」
「ああ。絶対来いよ」
「でも、チームメートとしてちゃんとやるべきだった」

秋人はナチを直視できずに、空を見上げている。

真夜中の空は真っ暗で、時折星が光ってみせる。

「……俺らは戦う宿命だったってだけさ」
「ナチ」
「この先永遠にな」

そう言ったナチは少しだけ笑っていた。

滅多に笑顔を見せないナチの顔に秋人は一瞬驚いたけど、すぐに返事をした。

「ああ」

ライバルは何も阿笠だけではない。

違う国に行けば、上へ行けばもっともっと増えるだろう。

ならばそのライバルたちを踏み台にしろと、今宵の月が物語っているようだった。

next

第１９４話【黒と白をつなぐもの】

ホテルに着いたあと、ロビーで別れる前に秋人は麻冬にこれからどうするのかを尋ねた。

尋ねられた麻冬は、逆に秋人に聞き返す。

秋人は少し困惑した顔を見せたが、すぐ帰れるか分からないと答えた。

それはそうだろう。

そんな簡単に話がすむかも分からないのだ。

「……明後日には春樹も来るわ。でも、あたしは帰る。だから春樹にも行かないよう言っておくわね」

本当は心配で心配で仕方ないから一緒に帰りたい。

でも世の中そんなに上手くいくはずもない。

「……うん。待ってて」

「ええ。じゃあね。ナチも。ナギによろしくね」

ナチはナギを背負いながら、頷いた。

「またな」

麻冬は2人……3人に見送られながら部屋へと戻って行く。

麻冬は一瞬振り返ろうかと迷ったけど、振り向いてしまったら秋人を信用してないみたいでそう思われたら嫌だったから、麻冬は振り返らなかった。

麻冬がいなくなるのを見届けた秋人とナチはホテルを出て来た道を帰る。

クリスマス・イヴを終えてもうクリスマスだ。

周りの家にはキラキラと装飾がされてありとても綺麗。

できるなら、イヴは恋人と過ごしたいものだ。

一応秋人と麻冬はイヴをともに過ごせたことになるのだろうけど、どうせなら一緒に街を歩いたりと恋人らしいことをしたかったものだ。

それでも思いが通じあっただけマシかもしれない。

いや、マシなんて言葉では収まりきれない。

幸せすぎる。

絶対に手に入らないと思っていた麻冬を、イヴの日に麻冬の誕生日にようやく手に入れることができた。

それ以上望むことなんてない。

「……阿笠？」

『おはよ。どうした？あ、もうそっちもクリスマス？』

「うん。クリスマスになった」

部屋についた麻冬はすぐさま阿笠に電話をかけた。

『会えた？秋人には』
「会えたわよ。……変わってなかった」
『そうか、良かっ……あー！櫻井！』
「……？春樹がいるの？」

今ドイツは真夜中に対して日本は朝だ。

おそらくもう9時くらいにはなっているだろう。

昨日練習試合のあと夏実と春樹が遊びに出かけたため阿笠は普通に帰宅した。

夏実のうちに泊まった春樹は、夏実が部活が午前にあると言ったため一緒に夏実の家を出たのだが、午後から部活の春樹は暇なため阿笠の家へ行っていたのだ。

『遊び来てんだ。えっ？代わりたい？仕方ないな』
『やった！やほーっ、麻冬！そっちはどう？』
「春樹」

酒に酔ってるかくらいハイテンションの春樹が阿笠に代わって電話

に出た。

春樹がごちゃごちゃといろんなことを言ってきて答える合間がないため麻冬は黙って聞いている。

が、聞いていても何を言っているのかよく分からない。

なんでこんなにご機嫌なのか、まぁだいたい見当はつく。

夏実とよろしくやっていたのだろう。

なんやかんやで夏実にはベタ惚れなのだ。

「春樹、ちょっと良い？」

『う？』

春樹が未だ暴走しているところを麻冬が止めた。

麻冬は少し躊躇ったが一気に言い放つ。

「こっち来なくて大丈夫よ」

『えっ？』
「秋人、明日から用事で忙しくてそのあとすぐに旅立つんですって」
『えぇ？！遠征ってこと？！』

あながち嘘ではない。

大ざっぱに言えばそうなるが、なぜ春樹に本当のことを言わないのだろう。

実は、秋人からみんなに言わないでくれと口止めされていたようだ。

やっぱり気まずいってこともあるだろうし、気持ちも分からなくはない。

「いつまで旅立つのか分からないみたいなのよ」
『なんだー……』

声だけでも十分すぎるほど春樹が落胆していることが伝わってくる。

麻冬は本当のことを言ってあげたかったけど秋人の気持ちを汲んでグッと堪えた。

「すぐ会えるわよ」
『ちぇっ……。秋人は元気だった？』
「そうね。元気になったみたいよ」
『なった？』
「ええ」

麻冬のおかしな言い回しに春樹は疑問を持つが、さらっと流されたのであえて突っ込まないようだ。

その後しばらく会話したあと電話を切った。

麻冬はそろそろ眠くなってきたのか化粧も落とさずそのままベッドの上で眠り始めた。

それとは逆に活動時間の日本にいる春樹や阿笠は、２人とも午後から部活のため阿笠の部屋でゆっくりしている。

春樹と阿笠の組み合わせもなかなか面白いものだ。

「もうじき3年だな」
「ねー。早いなぁ」

阿笠は寝転がりながら雑誌を読んでいて、その側で春樹はゴロゴロと転がりながら2人は会話をしている。

「あれ？」

と、そのとき春樹は机の下に落ちているものを見つけ、手を伸ばしてそれを拾った。

「これ……同じだ」
「え、何が？」

春樹が見つけたのは、阿笠が烈からもらったリストバンド。

白地のコンバースは、見覚えがあるどころではない。

「あ、それ秋人と色違いなんだ。櫻井があげたんだって？俺もね、烈にもらったんだ」
「まじで？！」
「うん」

阿笠は雑誌を置いて、春樹からリストバンドを受け取りそれをハメた。

色が白いせいか、一応洗濯はしているものの少し汚れている部分もある。

阿笠は学校にいるときも部活のときもこれをハメて過ごしている。

それは秋人も同様だ。

「すご……。こんな偶然ってあるんだ」

「そんな？」

「だってこれフリマの1点ものだよ？2個しかなかったのに、それを俺と烈が買ったって……すごくない？」

「えっ。すご！」

どこかのクラスがやっていたフリーマーケット。

見つけたのは偶然だった。

けど、もしかしたら導かれたのかもしれない。

黒の秋人と白の阿笠。

黒と白があったという時点でもう運命かのように思える。

「そっかぁ、フリマかぁ。フリマって学園祭のだよね」
「そうそう。秋人が東京行く前に渡したんだ」
「あ、俺も浜松行く直前にもらった」

試合を……これからを頑張るようにと願いながら渡したリストバンド。

烈もまさかそんなことを願っていたのだろうか、そう考える春樹は唖然としている。

同じリストバンドを見つけたこともそうだし、それに込めた願いもそうだ。

何かと烈とはシンクロする。

……いや、そうではない。

シンクロさせられるんだ。

秋人と阿笠を思う2人の気持ちが同じなだけ。

どれだけ春樹は秋人を、烈は阿笠を思っていることか。

あの2人は春樹や烈に何もしてあげられない。

それでも春樹たちは秋人たちを支えたいと思うのは、なんて切なる感情だろう。

「俺ね、……秋人に会えて良かったよ」

「ん？」

「すごく嬉しかったんだ。あんなに上手い奴がいて。それだけじゃなくて、やっぱ一緒にいて楽しいのもあるけど」

春樹はふと部屋の中にあるパネルに目を向けた。

今より幼い秋人と阿笠が写っていて、やんちゃなんだろう阿笠は顔に絆創膏をつけていたりして。

でも目一杯笑っている顔は何ともあどけない。

「烈とはまた別で、なんていうか……まぁ一緒にサッカーやってるから特別に感じるだけかもしんないんだけどさ、」

阿笠はリストバンドを見つめて嬉しそうな表情をしている。

「俺、秋人すごい好き」

お揃いのリストバンドなのが嬉しいのか、何かを懐かしく思っているのか、阿笠が何を思っているかは分からないが、愛しそうにリストバンドを見ている顔が春樹の目に入る。

だが阿笠は続けざまにこう言った。

「まぁ、秋人は俺なんか好きじゃないかもだけど」

へへッ、と阿笠は苦笑した。

「俺と出会わなければきっともっと楽しかったんだろうな。何事もなく、」

「……秋人は阿笠のこと大好きなんだよ」

「え？」

春樹は数々のトロフィーやメダルやパネルが飾られている棚を見つめ、捧げるように言う。

「あのトロフィーもメダルも、秋人と阿笠がいたから取れたんだ」

きっと秋人と阿笠は、２人一緒ではなくてもたくさんの賞を取れただろう。

秋人率いる頭脳派軍団と、阿笠率いるワンマンチーム。

秋人の策で阿笠のワンマンを止められるか、予測不可能な阿笠に秋人が翻弄されるか。

どちらにしてもきっとこの前の試合以上のものを見せてくれたに違いない。

もし、２人がまったく違う場所でサッカーをしていたら、２人が顔を合わせるのは部活での全国大会かもしくは県選抜で戦うか、全国選抜で一緒になるか……のどれかだった。

それはそれで見応えがあって面白かっただろう。

「秋人が阿笠を嫌うことなんてあり得ないし、絶対にない。何があってもね」

けれど、やはりそれでもいつも一緒にいる2人を見ていたい。

頭脳派軍団とワンマンチームなんかに分かれなくても良い。

秋人の頭脳的プレーと阿笠のワンマンプレーが一緒になったチームで良い。

だってきっとそのほうが、2人はキラキラしてるはずだから。

「今回だって、きっと秋人はでかくなって帰ってくるさ」
「……そうかな」
「俺が保証するし」

春樹は笑いながらそう言う。

その言葉自体に保証も確実性も何もないけれど、でもなぜだか信用できる。

「だと……良いな」

阿笠にとっても秋人と過ごした日々はかけがえのないものだから。

next

第１９５話【守りたいもの】

「くぉーらぁー！サボんな！走れ走れ！！」

クリスマスの午後。

街には恋人も溢れているし、聖なる日を楽しんでいることだろう。

だがそんなことは関係なしに、星陵高校運動部は張り切って部活に勤しんでいる。

体育館１階では男子バドミントン部が、２階では女子バレー部が。

そして室内プールでは予定よりかなり早く帰ってきた麻冬を筆頭に水泳部。

もちろん忘れてはいけないのは、グランドで部活をしている男子サッカー部だ。

「副部長～っ、もう勘弁してくださ～い～っ」

「ミスんなきゃ良いだけだろ！さっさとノルマこなせーっ」

恒例のごとくサッカー部は陸上部とかしている。

キーパーに取られたりミスした部員はグランドを走っているのだ。

残っているのは村松と中尾と阿笠だけになっている。

学年関係なしにサッカー部員たちはミスした分だけ走り続けるのだ。

そこでキーパーの里田には休憩を与え、３人は適当に体を動かしている。

「でもさ、良かった」

「んぁ？」

リフティングをしている中尾がおもむろに言う。

「阿笠が真面目に部長業やってくれて」

ストレッチをしていた阿笠は自分のことを言われて中尾のほうを振り向いた。

中尾はまだリフティングを続けながら、続けて言った。

「だってさ、秋人が休んだときでさえ周りをまとめようとは全然しなかったじゃん」
「あー、ははは。確かにそうだよなぁ」

中尾の言葉に村松が笑いながら同調する。

座りながらストレッチしている阿笠にたいし村松は立ちながらストレッチをしている。

「自分本位な大悟くんがまさか部をしきるとは、もう嬉しくて嬉しくてー」

おちゃらけたように村松がそう言ったものだから、阿笠は座ったまま村松の足を自分の足で軽く蹴った。

「ほっとけ！」

いてぇな！なんて反論してきた村松に、阿笠は顔をプイッと背けた。

まぁ、２人がそう言うのもよく分かる。

特に阿笠と同じ中学だった人は知っているだろう。

阿笠は部長だったにも関わらずその業務をこなしてはいなかったのだ。

やることと言えば大会のときに賞状を受け取るために前に出ることや、キャプテンを呼び集められたときに顔を出す程度。

普段の練習なんてたいして何もしてこなかった。

もちろん次に何の練習をやるとかそういうことの指示はしていたが、部員がミスしてもヘマしてもアドバイスなんてまったくしなかった。

だらだら走ってる部員がいても気にしていなかった。

相手に合わせて練習中にプレーしたりなんて絶対にしなかったのだ。

その分他の同級生の部員がやってくれていた。

「いやー、ひどかった。中学んときは阿笠の学校の部員可哀想だっ

た」

キシシと笑いながら村松は阿笠をおちょくるように言う。

阿笠は振り返らずに少し怒った口調で

「なにがっ」と言い返した。

「あー、俺も思った。ありゃ可哀想だわ」

「中尾まで！なんだよっ」

「だって阿笠部員のこと何も考えてねぇんだもん。まず実力だって違うしさー、なのに阿笠は自分の力にみあったプレーするしさぁ」

阿笠は口を尖らせているが、2人と同様中学時代を思い浮かべている。

阿笠にとってはそこまで大きな思い出ではなかったし、チームを顧みていなかったから今更思い出したところで何もない。

「まさにワンマンだったな。よく頑張ってついてってたよ、あそこの部員」

「なぁ。部員には絶対怒らない代わりに褒めもしねぇもん。自分しか興味ないってこと丸分かり」

2人が言うように、阿笠の中学のサッカー部は決して良いものでは

なかった。

あの頃はそれが普通だし、人に教えるなんて面倒くさいしそんなことする意味もないと思っていた。

今になってようやく、阿笠は自分がしてきたことが間違ってたのだと理解できている。

「……俺は自力でここまできたからみんなも自分で何とかすりゃ良いって思ったんだよ」

阿笠は拗ねた口調で言う。

「誰しもがお前みたいに才能があるわけじゃないだろ？」
「だからっ、あんときはみんなやればできるって思ってたんだ」
「だろうな」

村松はクックと笑う。

教えて欲しいと言った人にあからさまに嫌そうな顔をしていた阿笠。

そのときの部員の傷ついた表情を忘れたわけじゃない。

なんでそんな顔されなきゃならないんだと思っていた阿笠にはきっと下手な選手の気持ちは分からないだろう。

「だから……中学んとき選抜で秋人がキャプテンになったとき……驚いた」

阿笠は、ボソボソと続けて言った。

「キャプテンってああじゃなきゃダメなんだって知った。……俺にはできないなって」

ああじゃなきゃダメだと知ったあとでも阿笠は実行することができなかった。

すぐには無理だろう。

そうこうしているうちに、阿笠は阿笠のままでしかいられなくて、高校に入ってからもすることはできなかった。

性格のせいかもしれないし、素質がないのかもしれない。

阿笠は人の上に立つのを嫌がるし、ワンマンなくせして目立つのも好まない。

つかさから、そしてあのノートからサッカーを教えてもらった阿笠は、独学でサッカーを築いてきた阿笠には人にどうやって教えれば良いのか分からないのだ。

「できないなら……できないままのほうが良い。同じ奴はチームに2人もいらない」

「阿笠」

「秋人がいればみんなもきっと満足する……って、ね」

秋人がいればちゃんと部員を怒鳴ったりもする。

なぜかって？

秋人に追いつきたいからだ。

「ばーか。俺は自分勝手なお前好きだぜ」

中尾はリフティングしていたボールを蹴って転がして、阿笠の背中にあてた。

見事あたったことで阿笠はようやく振り返る。

泣いてるのかなと思えば、本当に拗ねているだけのようだ。

「ワンマンだろうが何だろうが、まぁ可哀想な部員がいたかもしんないけど俺は中学んときからお前のプレー好きだった」

「……初めて言われた」

「みんな思ってるよ。口にしないだけで」

あーあ、あんな才能あったら羨ましい。

あんな技どうやって身につけたのかね。

やっぱ天才は違う……じゃなくて、努力してるから天才なんだろうな。

あれだけの自信は相当練習してないとつかないよな。

「俺は同じフォワードとしていつでも憧れてたなぁ」

「だろ？むら」

「ああ」

聞こえてくる声は耳を塞いでいつも蓋をしていた。

始めは、周りの声をうっとうしいくらいにしか思ってなかったけど、秋人と出会ってからは自分のプレーが周りから悪く言われてるんじゃないかと思って聞かないようにしていた。

そのうちだんだん周りの声は本当に聞こえなくなって、よりいっそうワンマンになってしまう。

そんな環境でずっとサッカーをやっていた。

「それは褒めてんの？」

阿笠は躊躇しながら2人にそう尋ねた。

2人は少し声を上げてハモらせながら言った。

「「褒めてんのっ！」」

一般の人から話しかけられることなんて山ほどある。

他校のサッカー部員に握手してくれと言われることくらい何千とある。

同じサッカー部員からもすごいだの何だのとは言われてきた。

けど、それが良い意味だとは思っていなかったから面と向かって褒められるのはほぼ初めてに近い。

阿笠は口を開きながら驚きを隠せずにいる。

「ははっ。なんて面だよ」

村松がお腹を押さえながらケラケラ笑っている。

「いや……だって、」

「お前自信持って良いんだぜ？破天荒なお前だからみんなが惹かれるんじゃん」

「そ、そうなの？」

と、そこへようやく数人走り終えた部員が戻ってきた。

阿笠たちがいるところまで息を切らしながら走ってきて、そのまま尻をついて座り込んだり大の字になって寝転がったりしている。

「お疲れー、疲れた？」

特に悪気のない阿笠が部員たちにそう尋ねる。

すがすがしい顔をしている阿笠とは反対に部員たちは顔を赤くしてゼーゼーと呼吸が乱れている。

「あったり前だ……あ～っ……疲れた」
「まだ元気みたいじゃん」
「え〝っ。んなことない！」「あはは。はいはい」

今までなら、そんなに疲れるんならミスしなきゃ良いのにと思いながら軽く冷めた目で見ていた。

だけどそんな阿笠の隣で秋人は、決して見捨てることなく
「ちゃんとクールダウンしろよ」や
「水飲んどけ」と、言葉自体は優しくはなくても思いやりのある声をかけていた。

秋人は阿笠に自分と同じようにしろとは言わなかった。

なぜなら、阿笠がずっと部員を思いやれなかったことと同じように

秋人はずっと部員を思いやってきたから。

お互いがそうしていることが自然となってしまっていただけ。

「お。そろそろ半分は戻ってきたかな」

面白がりながら村松がグランドを見渡しながら言う。

疲れ果てた部員たちがドタドタと倒れ込む姿はもはやサッカー部の恒例の姿でもある。

やはり強い部活には厳しい練習は必須だ。

絶対的なコーチがいなくても、代々受け継がれてきた練習方法や部長の厳しさで強さを保ってきていた。

「ねぇ。さっきさ、俺がちゃんとやってくれて良かったって言ったよね」

「ん？ああ」

「なんでだと思う？」

阿笠は立ち上がって尻についた土をはらう。

阿笠の質問に村松と中尾は顔を見合わせて首を傾げた。

「引退するまでにその答えが分かると良いな。ねっ」

意味不明な言葉を言われて、ねっ、なんて同意を求められても2人ともウンとは言えないだろう。

どういうことかと2人が尋ねてみても、鼻歌を歌っている阿笠の耳には届いていない。

秋人さえ帰ってくればその答えは聞かずとも分かる。

何のために阿笠がこうして慣れないことを頑張っているのか。

ずっとずっとできなかったことをしていくのは、更なるプレッシャーとなる。

それでもやると決めたからには完璧にこなそう。

引退まで待たずとも答えを分かりたいものだが、そればかりは阿笠

には何ともできない。

慣れないことはまだあまり上手くすることができないけど、不器用なりに必死なのだ。

秋人がいなくなった事実は確かなもので隠しようもない。

けれど、せめて秋人がいなくなっても秋人がいた頃と変わらぬ部を維持していきたい。

ただそれだけ。

そう

君が帰ってくるまでは。

next

第１９６話【世界的規模恋愛】

去年の年越しは春夏秋冬の彼らは一緒に過ごした。

電車で２０分くらいの場所にある神社での年越しは、４人には初めて。

たいていいつも家の近くの神社かもしくは家の中で過ごしていたりしていた。

まだお互いの恋心がすさまじい関係をつくることを知らない彼らは無邪気に楽しそうにお参りをしたものだ。

だが今年は違う。

秋人はドイツにいて、春樹と夏実に遠慮した麻冬は家でヌクヌクとこたつにあたっている。

一応、秋人は日本が年を越す時間に合わせて麻冬に電話をしてきた。

やはり場所によって時差も多少のずれがあり、麻冬にかかってきたときは年を越す３０分前のことだったが。

それでも普段の秋人なら絶対しそうにないのに、電話をしてくれた。

なかなか日本に戻れないから麻冬に気を使ってるのだろう。

「お母さ～ん、ちょっと外出てくる」

麻冬はこたつから出て台所にいる母親に呼びかける。

「ちゃんと温かい格好しなさいねー？あと気をつけてね」

「はぁい」

ファーのついた真っ白なコートを羽織り、フサフサの耳当てもつけて麻冬は外へ出る。

時間的にはもう1時を回っているから、神社から帰ってくる家族づれやカップルが道をしばしば歩いている。

麻冬の携帯は、あけましておめでとうメール略してあけおメールがゾクゾクときてずっとバイブが鳴っているが、あとでまとめて返そ

うと麻冬は携帯を開かない。

家から一番近い神社は歩いて15分たらずで、麻冬はそれを通り越した先にあるコンビニへ向かっている。

もっと近くにあるのだが、麻冬の欲しいプリンが売っているのはそこのコンビニだけ。

自転車で行けばはやいのだがここ2日ばかり部活をしていないからちょうど良い運動だ。

空を見上げるとキラキラ輝いてる星たちが意外と近くに見え、手を伸ばしたら掴めそうな気さえした。

そんな夢みたいなことは置いといて、あと数日もすれば短い冬休みも終わりを迎える。

部活自体は冬休みが終わる前から始まるのだが、新学期になったら何かが変わるだろうか。

彼は帰ってくるだろうか。

『うす。元気か？』
『あ、秋人？嘘……秋人から電話くれるなんて、』
『だって日本はそろそろ年が明けるだろ？』

予想もしていなかった秋人からの電話に麻冬は目を丸くしながら驚いた。

たいしてメールも電話もしない筆無精の彼からのコールはあまりにも嬉しいものだ。

『あと……30分くらいかな。そっちはまだ夕方？』
『ああ。……一緒に年越せなくてごめんな。去年は4人で越せたのに』
『まだ……帰れない？』

イヴに、日本に帰る宣言をしてから1週間。

編入をした手前そう簡単に帰って来れないことは重々承知はしていたし、いつか絶対帰ってくることは分かっているから心配はしていない。

『ああ……毎日のように監督に話してんだけどな』
『そう……』

一緒に新学期を迎えたいと思うのはワガママだろうか。

秋人がいない学校生活に少しずつ慣れてはきていても、寂しい気持ちはなくならない。

携帯を持っていってない秋人に自分から連絡を入れる術もない。

声が聞きたくても聞けない。

姿はもっと見えない。

『でも絶対帰る。帰るから、そしたら今度は……阿笠の横に並んでも悔しくないようにたくさん練習するから、』

『うん』

『だから、……俺を見てて欲しい』

秋人の目には、阿笠と麻冬が仲睦まじい姿ばかり映る。

楽しそうに会話を弾ませながら、一緒に歩いている2人は見るからに幸せそうで。

秋人は口数もそんなに多いわけではないし、阿笠みたくたくさん笑ったりもしないから会話が盛り上がることも少ないかもしれない。

秋人から見た阿笠は、なりたかった人間そのもの。

『阿笠、1人で頑張るって言ったのよ。もうあたしの力はいらないって……』

『え、』

『あたしね、阿笠の側にいなきゃって思ってたの』

何度も何度も振られてもそれでも麻冬を好きな秋人。

何度も何度も振ってもそれでも秋人を好きな麻冬。

悲しいくらいのすれ違いを何度してきたことだろう。

麻冬と阿笠が一緒にいるところを見て秋人は

阿笠と一緒にいながらも秋人を気にする麻冬は

いつもどれほど切ない気持ちでいただろう。

『でも違うよね……。あたしのせいで秋人も阿笠も傷つけた』

『……そんなこと、』

『なくないの。でもね、せめて頑張れって背中を押してくれた阿笠のためにもう気持ちに嘘はつかない』

家族で紅白を見ていた麻冬は、秋人からの電話により自分の部屋へと上がっていた。

ちょうど好きな歌手が歌っていたけど、そんなことをそっちのけての秋人との会話。

静かな部屋の中には麻冬の声だけが響いている。

『秋人が好き。……大好き』

『麻冬、』

『自分勝手でごめんなさい。でも、これからは秋人だけを見てて良いですか？』

ベッドに腰をおろしながら電話をする麻冬。

うってかわって秋人は寮の公衆電話からかけている。

断続的に１０円を入れて麻冬と会話を続ける。

よく麻冬の電話番号を覚えていたものだ。

さすが天才児というか、なんというか。

『……』

『秋人？』

麻冬の言葉に秋人はしばらく答えられなかった。

回答に悩んでいたわけではなく、驚きのあまり言葉を失っていたのだ。

『……あ、いや、わ……わりぃ。ちょっと……びっくりして』

『びっくり？』

『まさか麻冬にそう言ってもらえる日が来るなんて……』

まさか来るとは思わなかった、ってそう思うのは当然のことかもしれない。

両思いだと分かっているのに選んでもらえなかったのだ。

イヴのときは勢いのあまりキスまでしてしまったけど、今更ながら実感する。

嘘じゃないんだと。

『……そうよね。あたしも阿笠に言われなきゃ分からなかったわ』

一番大切なこと、見落としていた。

『けど、嘘じゃない。……嘘じゃないわ。秋人……』

感傷にひたっていたが、公衆電話がお金が足りないと合図をしてきたので秋人は急いでまたお金を足す。

カシャン、と機械に入り合図は消える。

秋人は間を置いてから息を飲み、話し始めた。

『……ナチたちは押してくれてんだけど、反対するチームメートもいるしコーチも……監督も許してくれないんだ』

ナチとナギとリョーマは味方でハノイも理解しつつある。

でも他の部員は、天才のたんなる気まぐれだと怒ったり冷ややかな目で見ているようだ。

コーチ自身は秋人の本気を知らないから何とも言えないようだが、でも秋人が日本に戻ることはワガママだと言う。

監督は話さえ取り持ってくれないらしい。

『勝手に帰ることもできるけど、でも自分勝手な俺のせめてもの償いとして……みんなを説得させたいんだ』

いつまでもナギたちにカバってもらうわけにはいかない。

一応ドイツにいる限りは部活には出て、通常の練習をこなすようにしている。

そして練習前練習後にコーチとかけあい、そのあとには毎日のように監督のもとへ足を運んでいる。

『絶対説得させてみせる。そしたらすぐに日本に帰るから……』
『……』
『そしたら部活のあとまた一緒に帰ろうな』

まるで夢みたいな話。

けれど、少し前までは叶っていた話。

ドイツは遠すぎて、そんな簡単な約束すら疑念を抱く。

それでも絶対に叶わないことではない。

『うん』

普通の高校生の普通の恋愛に憧れた。

でも、それなら普通って何が普通なんだろう。

逆に言えば彼らは何が普通ではないのだろう。

確かに、春樹は誰よりも他人を気づかう優しい人かもしれない。

確かに、夏実は正義感に満ち溢れていて弱者を放ってはおけないかもしれない。

確かに、秋人は天才児だったがために辛い過去があったかもしれない。

確かに、麻冬は人よりも美しい容姿をして高嶺の花な部分があるかもしれない。

けれど、彼らだって普通の高校に通う普通の高校生だ。

確かに運動神経は優れていて全国クラスかもしれない。

それが普通ではないと言う人もいるかもしれない。

でも、運動神経が良い以外には普通に生活して喜怒哀楽だってある

高校生。

ただの高校生なのだ。

ようやくコンビニに着いた麻冬は、とりあえず暇を潰そうとファッション誌を立ち読みし始める。

外とは違いコンビニの中はとても暖かくて頬が赤らめる。

眠さもなく、でも何かしていたい麻冬はこうして立ち読みするしかなかった。

秋人は日本が年を越すまで電話をした。

基本的に電話では必要最低限しか会話しない秋人にとってはかなりの頑張りだったと思う。

練習で疲れているだろうのに秋人は麻冬を気使って、一緒に年を越せなくてもせめて話くらいはしていたいと、秋人なりの不器用だけど優しい気持ちなのだ。

「あれ、麻冬ちゃん」

麻冬が雑誌を淡々と見ていると、店員が話しかけてきた。

「佐々先輩」

next

第１９７話【比護みかさ】

雑誌のコーナーで立ち読みしていると、少年週間雑誌をひそかに読んでいた店員、もとい佑亮が話しかけてきた。

佑亮はここのコンビニでバイトをしていて、いつも深夜ばかり入っているから基本的に誰かと会うことは少ない。

それも週2程度だから余計にだ。

「先輩、茉李亜さんは良いんですか？」

「ああ、それがさぁ」

麻冬が何気なくそう尋ねると、佑亮は泣く泣く事情を話し始めた。

どうやら本当は今日は入っていなかったようだが、入る予定だったアルバイトがインフルエンザにかかったらしく、しかも他のバイトは掴まらなかったらしい。

みんな他県出身だったりして帰省中だったり、高校生には深夜はやらせられない。

残ってるのは佑亮だけで、時期２００円アップを条件に入ることに

なったようだ。

むろん佑亮だって茉李亜と過ごす予定だったのだが。

「わ～。なるほど……」

気の毒すぎて麻冬も良い言葉が見つからないようだ。

「あれ、でも麻冬ちゃんは阿笠といなくて良いの？」

「あ、はい。阿笠は……あっ。あたし先輩に話さなきゃいけないかもしれないことがいっぱいあります」

「う？」

と、そこでレジに客が来たため佑亮はレジへと走る。

こんな夜中でも来る人は来るようだ。

麻冬は雑誌を元あった場所に戻して、レジのほうへとトコトコ歩く。

会計をし終えた佑亮と目が合い、佑亮はレジから出てきて邪魔にならない場所に移動した。

コンビニの中は暖かくてコートはいらないくらいなため、麻冬の頬は赤らめている。

「え、で何だっけ？」

佑亮がそう尋ねてきたところで、麻冬は言い出しにくくも本題に入ることにした。

「あの、あたし――」

佑亮といえば星陵生なら誰もが知る人気者で、人見知りを知らない彼は常に輪の中心。

だがそんな一面とは裏腹にあの星陵サッカー部を優勝に導いたキャプテンでもある。

秋人と阿笠の憧れで、そしていずれは秋人の兄になる。

身近な存在のように思えるのも当然だ。

麻冬は佑亮に何を言おうとしているのだろうか。

なぜ言おうとしているのか。

ただ、佑亮は知っていたから。

麻冬が阿笠に本気ではなかったことを。

その頃、烈は家にこもって絵を書いていた。

なぜこんな時間に、と思う人もいるかもしれないが烈はひらめいたときに書くから時間とかは気にしない。

烈が一度集中し出すと止まらなくなるし、周りの音はまったく聞こえない。

携帯が鳴っても、ましてや誰かが部屋に入ってきたって気づくことはない。

「……あー、休憩しよ」

4時間ぶっ通しで作業していた烈は、さすがに疲れたのか肩をコキッと鳴らしながら筆を置いた。

そして振り返ると、そこにはいつの間にか女の子がベッドに座りながら携帯をいじっていた。

「あぁ、みかさ。来てたのか」

みかさと言うその女の子は、クリッとした目が可愛いくて長い髪の毛を上のほうで団子にして縛っている。

「やほ、烈くん。なんか会いたくなっちゃって」

烈が絵に集中し出したら止まらないのを知っている人間はこうやって勝手に入ってくる。

だから烈は驚かないし、入るほうも烈が終わるまで待っているのだ。

ありきたりの日常で、みかさがこうして遊びに来るのだって少なくはない。

「そうだな。俺も電話しようかと思ってた」

烈は絵を部屋の隅のほうへと片付けて、立て掛けていたテーブルを出す。

そしてクッションやら座布団やらも出してきて、みかさが座れるように繕う。

「明日初詣行かない？」
「わり。明日阿笠と遊ぶんだ」
「もー！また大悟くん？」

みさかは用意された座布団に座って、頬を膨らましながら拗ねている。

「ごめんて。今だけは一緒にいたいんだ」
「今だけって高校卒業まででしょー？それって、みぃとも離れるって分かってるぅ？」

「うっ……」

いれるときくらい、一緒に過ごせる時間くらいは一緒に過ごしていたい。

烈はそう言う。

阿笠だってそう望んでる。

高校卒業までの、あと1年ちょっとしかない限りある時間を互いのために費やしたいと考えている。

「結局烈くんは大悟くんばっかなんだね、」

みかさは少しだけ淋しそうに言った。

烈はそんなみかさにごめんとしか言えない。

みかさとは、みなさんご存知だろうあの比護つかさの妹で、今は私立女子中の3年生。

もちろん阿笠とは顔なじみだが、烈とは特別な関係。

烈のフランス行きを知ったくらいからみかさは烈のことが好きだと自覚していたが、烈の阿笠をあまりにも重んじる意思に遮られて告白はできずじまい。

烈も、他の女の子よりみかさを想う気持ちはあるけれど平行線のままだ。

烈自身近い未来外国に行くと決めてる自分がみかさを蝕むわけにはいかないと思っているところがある。

そんな気持ちを知ってか知らずか、2人の間にそう言った話題は出さないようにみかさも気をつけているようだ。

絶対両思いなのに。

「……まぁ、それが烈くんだから仕方ないのかな」
「みかさ、」
「……みぃね、告白されたんだ。他校の男の子に」

もともとなぜみかさと烈が知り合ったかと言うと、つかさ亡きあと

も比護家と阿笠家には交流があり、必然的に阿笠とみかさは馴染みになる。

仲良かった阿笠とみかさの間に阿笠の親友の烈が加わり、みかさと烈も仲良くなったというわけだ。

サッカーばかりしていたつかさとは逆に、みかさはどちらかと言うと新体操とかをしていそうなタイプ。

つかさの父はみかさにサッカーを教えはしなかった。

つかさのように死んでしまうかもしれないから、というわけではない。

つかさの夢はちゃんと阿笠に託されたからだ。

サッカーのプロになるという、大きな夢を。

「あぁ、お前モテそうだもんな」

みかさの告白に烈はケロッと笑いながら答える。

「何て返事したか気にならないの……？」
「え？」
「みぃがオッケーしたかもしれないって言ってるのっ」

普通に断ったと思っていた烈はキョトンとした顔をする。

知り合ってから、まずなついてきたのはみかさのほうからだった。

勝手に家を出入りできるくらいまで仲良くなれたのは、烈もみかさに好意を持っていたからだ。

阿笠へとは違う気持ち。

自然と、２人が一緒にいることは当たり前だった。

付き合おうなんて言ってないし、言葉の約束はない。

けれどお互いを好いていることなど、言葉にしなくても分かっているつもりだった。

「だって、してないだろ？」

みかさが何を思ってそう言ってきたかも知らずに、烈はあっさりと言う。

「何で……？」
「え？」
「何でそう言えるの？」
「だって、……え？」

今までだってみかさも烈も告白されても断ってきた。

烈は、俺にはもう側にいてくれる子がいるからと言い続けた。

みかさだってそうだった。

「……オッケーしたわけ？」

烈はようやく事の重大さに気づいて、探るようにみかさに尋ねた。

みかさは抱きしめていたクッションを更にギュッと抱きしめ、床を見つめている。

何も答えようとしないみかさを見て烈は肯定だと受け取り、どんな顔をしたら良いかと困惑している。

ヒクヒクと口角を歪ませながら、烈は嫌味にも取れるような言葉をつい言ってしまった。

「何、そういうこと?そりゃおめでとう」

みかさは烈を見上げたが、烈の顔を見る前に烈はみかさに背を向けた。

まさかみかさが誰かと付き合うなんて思っていなかった烈

みかさはずっと隣にいるもんだと思っていた烈

素直に嬉しそうな表情がつくれないでいる。

そんな顔を見られたくなくて烈はみかさから背を向けた。

「……本気?」

みかさは震える声で背中を向けている烈に尋ねる。

「……お前は本気だから付き合うんだろ？」

「そ……」

烈だって、みかさを大切に思っている。

けれどいつも阿笠ばかり優先してしまう自分が、いずれ外国へ行ってしまう自分がみかさを蝕むわけにはいかない。

だから好きだなんて言ったらいけない。

日本に帰ってこれる保証なんてない。

会いに来いとも言えない。

そしたら、もう自分から解放してあげるしかない。

「……わかった」

みかさは泣くのを堪えながら、鼻声でそれだけ言って烈の部屋から出ていった。

next

第１９８話【願えない、叶わぬ幸せ】

「……みかさ？」

この真夜中に、体を動かしたくなる性のスポーツマンである阿笠はジョギングに行こうとしていた。

適当なウェアを着て、首にタオルを巻きながら知り尽くした道を走っていると、みかさが比護家に入って行くのが見えた。

小走りをしながら勢いよく家へ入って行ったみかさはいつもとは違う様子で、気になった阿笠は比護家へ向かう。

一応インターホンは押すものの返事も聞かずに勝手に家へと入る。

烈も阿笠もこうやって比護家に自由に入れるのだ。

居間にいたみかさの両親に軽くあいさつをして、阿笠はみかさの部屋がある2階へ向かう。

みかさの部屋をノックすると、鼻声でみかさが「誰？」と尋ねてきたものだから阿笠は俺と言いながら部屋に入る。

みかさはベッドにうつ伏せに寝ながら泣くのを堪えているようだ。

阿笠が入って来るのを感じたみかさは顔を横に向けた。

「大悟くん……」

阿笠はみかさの勉強机に腰を下ろして、顔だけこっちに向けてるみかさを見下ろす。

みさかの部屋はピンクや白いものが揃っていて実に女の子らしいつくりだ。

今は亡きつかさの部屋は、古いサッカーのポスターが貼ってあったりして、シンプルなものが多いまるで秋人や阿笠の部屋のよう。

もうつかさはいないけど、そのまま残して置こうと当時のままの状態なのだ。

もちろん掃除はするが。

「よーす、みかさ。どうかした?」

「なんで……?」

「だって泣いてるから」

みかさは上半身を起こして、気まずいのかうつむく。

ベッドに座った体勢のみかさは、堪えていた涙をポロポロと溢し始めた。

人前で泣くことなんかほとんどないみかさが泣いてるため、阿笠は一瞬ギョッとした。

「……烈くん、」

今にも消えそうな声でみかさはポツリと呟いた。

「え？」

「烈くん……、には好きな人いるのかなぁ」

「は？って……だって烈はお前と、」

付き合ってるんだろ？とは言いきれずに阿笠は言葉に詰まる。

烈がみかさに告白してないことも、みかさから告白したわけでもないことも阿笠は知っているからだ。

阿笠とみかさは同じ立場にいるから分かるのかもしれない。

むしろ、大切にされてるのは阿笠のほうだ。

学校だって阿笠と同じところを選んだし、暇さえあれば阿笠と一緒にいる。

烈はみかさよりも阿笠といる時間のほうが圧倒的に多い。

「……みかさは烈を好きなんだろ？」

それでもみかさは不満を言ったことはない。

仕方ないことだと笑ってくれている。

とても良い子で優しい子なのだ。

「……大好き」

みかさは手で涙を拭きながらそう答える。

阿笠はベッドに座ってるみかさの隣に座り、みかさの頭にポンと手を置く。

「ごめんな。俺ばっかり烈取っちゃって」

「……」

「日本にいるうちは一緒にいたいって……そんなんみかさだって同じなんだよな、」

阿笠の手は、さっきまで走っていたからか比較的温かい。

そのぬくもりを感じながらみかさは何を思うのか。

「良いよ……。だって大悟くんは烈くんの親友だもん」

そうして結局みかさは許してしまうんだ。

烈がどれだけ阿笠を好きなのかを知ってるみかさには2人を引き裂いて自分だけ一緒にいるなんてことはできない。

こんなみかさだから、あのマイペースな烈を好きでいられるのだろう。

けれどそんな優しい性格だから余計仇になるのだ。

「……良い子だな。みかさは」

阿笠はみかさを愛しそうに見つめながら少しだけ嬉しそうに言う。

みかさは、阿笠の口調が和らいだことに気づいたみかさはようやく阿笠のほうを見た。

阿笠の優しい顔はとても綺麗で、みかさの時が一瞬止まる。

阿笠はごめんと言いつつも結局烈を取るけど、みかさはそうではない。

みかさだって傷つくし阿笠を恨んでしまうこともある。

阿笠はずるい。

けど、そんな顔されたら許さざるを得ないじゃないか。

それがみかさなのだから。

「じゃあ、そんなみかさに良いこと教えてあげよっか」

阿笠はみかさから手を離して笑う。

え？と聞き返したみかさから視線を外し、天井を見上げながらこう言った。

「烈、いろんな人から告白されんだよね。先輩後輩同輩問わずに」

「……？」

「……俺にはもう側にいてくれる子がいるから」

真っ白な天井のはずが、阿笠には烈の笑顔が見えている。

告白されたとき、烈がそう言いながら笑っている顔。

「って、必ず言うんだ」

どんなに綺麗な人でも、どんなに好みな子でも絶対に躊躇ったりせずにそう答える。

誰？と聞かれれば、幼なじみだと答えた。

確かに割りと家は近場ではあるし、小学生のときからの知り合いだからあながち嘘ではない。

2こ下の私立の女子中に通う可愛い女の子、比護みかさだとは決して言えないから。

「それって……」

みかさは少し驚いた顔をしながら消えそうな声を出す。

阿笠はみかさをチラッと横目で見ながら言った。

「誰か分かるでしょ？」

好きだ

好きだ

好きだ、って

なぜ言えないんだろう。

言ってしまえたらこんな風にケンカをすることもなかったんだろうか。

言ってしまえたらもっと大事にしてやれたんだろうか。

言ってしまえたらどんなに楽になれるだろうか。

けれど、遠くに行くと分かっているのに言ってしまうのはあまりに無責任だ。

簡単に会えない。

なかなか電話もできないかもしれない。

それでも良いと言ってくれるかもしれないけど、それは俺が許せないんだ。

離れてれば不安になることもあるだろう。

俺を思って泣いているかもしれない。

けど俺はそんなお前を抱きしめてやれない。

それならいっそのこと、お前の近くにいてくれる奴がお前を守ってやったほうがお前は幸せかもしれない。

……俺は寂しいけど。

でもいつだって望んでいるのは、お前の幸せなんだ。

「あれ、なんだ？佐々先輩と麻冬じゃん」

あれから烈は、頭を冷やそうと外を歩いていた。

音楽をガンガンに聞いているけれど歌はちっとも耳に入ってこなくて、みかさのことばかり考えている。

そんな中、通りかかったコンビニにふと目をやると、ガラス越しに麻冬と佑亮の姿が見えた。

特に話なんてないが、気を紛らすために烈はコンビニへと入ることにした。

自動ドアが開いたが佑亮は振り向きもせずにいらっしゃいませと言う。

烈だと気づかずに麻冬と会話をしているようだ。

「佐――――」

「……から、あたしは秋人と付き合ってるんです」

話しかけようとすると、いきなり麻冬の重大発言を聞いてしまい烈は反射的に隣の棚にサッと隠れた。

フードを深く被り、自分だとバレないように覗き見をすることにしたようだ。

麻冬は佑亮に何があったのかを話している最中。

阿笠や秋人との間にあったことを包み隠さず全て。

何分話してることか、客が来ないことを良いことに。

それよりも麻冬が秋人と付き合ってることは誰も知らない。

阿笠でさえ知らない。

秋人と会ったことは阿笠も春樹たちも知っているが、それ以上のことは何も聞かされていないのだ。

だからもちろん烈が知るはずもない。

「そっか。ようやく秋人と結ばれたんだ」

そう言う佑亮はほのかに嬉しそうな顔をする。

「それにしてもそんなことがあったとはねぇ。麻冬ちゃんも大変だったな」

「いえ。秋人と阿笠のほうが辛かったと思うから、」

「はは」

なぜ麻冬はその事実をみんなに言わないのか。

なぜ佑亮にだけ言うのか。

いろんなことを思ったけど、でも

「……みんなが背中押してくれたんです。好きな人と自分が幸せになっても良いんだ、って」

麻冬がそんなことを言うものだから、烈の思考はピタリと止まる。

「傷ついたその先に何があるかは分からないけど、でも逃げてばかりじゃだめなんだって……烈くんが教えてくれた」

いつだったか。

屋上で麻冬に怒りをぶちまけてしまったのは。

俺はあのとき本気で阿笠が苦しんでいるのは麻冬のせいだと思い込んでいた。

けど、誰のせいとか誰のためとかそんなことではなかった。

ただ一緒にいたい、その気持ちだけ……。

わからなかったんだ。

みかさを俺のものにしたい、なんて言えない俺には。

一緒にいるのが当たり前だったなんて、そんなん告白できずにいるただの臆病なだけだ。

俺のものにしたいとは言わないくせに、きっとみかさは俺の側にいてくれると思っていた俺はずるい。

絶対なんて保証ないのに。

「阿笠も仲良くしてくれるんです。なんか……阿笠がそうしてくれるから救われてる」

「……強くなったもんだな。阿笠も」

「はい」

他の奴と幸せになれば良いと思っていながら俺は、さっきみかさが

告白されてオーケーしたと言ったとき正直裏切り者だと思ってしまった。

全然割り切れてない。

みかさが他の誰かと幸せになるなんて、本当は考えたくもないのに……。

「秋人はいつ帰ってくるか分からないけど、でも絶対帰ってきます。……星陵サッカー部を優勝に導くために」

……麻冬や阿笠の背中押しといて、俺何してんだろう。

自分で言っときながらできてないんじゃ世話ねぇよな。

自分の幸せ考えて良いんだって当たり前のように言ってきたけど、……でも本当に？

俺の幸せはもちろん阿笠と永久に親友でいることと、みかさとずっと一緒にいることだ。

願って良いのか？

俺の幸せ。

……けどもう遅い。

みかさには彼氏ができてしまった。

きっとみかさも気に入っているに違いない。

俺が入っていく隙なんてきっとこれっぽっちもないのだろう。

俺はこれ以上麻冬たちの会話を聞いていられず、そっとコンビニを出た。

next

第１９９話【エントリー決定】

新年を迎えると、例のごとく運動部の部活動が始まる。

特に強豪と言われる部活は新年早々三が日にはもう開始されるのだ。

全国優勝を狙う男子サッカー部、女子バレー部、男子バドミントン部、水泳部は２日から練習をした。

寒い中一日中部活に勤しみ、汗をかいてはまた動く。

なんのために。

そう思ってる文化部や帰宅部もいるだろう。

全国優勝するために、なんて理由では納得できないのかもしれないけど運動部に所属する人間にはそれだけのためにこんなにも必死になるのだ。

息も切らしながら限界を越すまで血みどろになりながら練習した上での結果、ただそれを得るためだけ。

特に2年生は3年の夏までしかやれないから、あと半年強くらいしかやれない。

半年なんて短すぎる。

それでもその短い期間を精一杯やろうとしてるのだ。

少ない冬休みを部活に捧げ終わると、学校が始まる。

あけましておめでとうのあいさつが学校中のあちこちで言われていて、まさに新年だ。

だが結局、秋人は新年の授業開始には間に合わなかった。

冬休み中になんとかできるかもしれないと淡い期待を抱いていた麻冬は少しがっかりしていた。

そして、やっぱり秋人のことは誰にも言わないのだ。

帰ってくることも、付き合ってることも。

秋人は帰ってくると約束してくれたけど、本当に帰ってくるという保証がない。

信じてる、もちろん信じているのだけれど。

でもいつ帰ってくるのかと考えるたびに切なくなるのは自分だけで良いという、麻冬なりの気づかいなのだ。

烈もあの日聞いたことは一切言わないし聞かない。

そして、みかさのこともずっと何もできずにいる。

何も変わらないまま過ぎて行った冬休みは、少しだけ侘しくも思う。

「ミスコン？　あぁ……、良いわよ。今年は」

時は経ち睦月を過ぎて2月に入りかけた頃、麻冬のもとにそんな話題が入ってくる。

「えぇ～？　去年のミス星陵が何言ってんの？」
隣で夏実が驚きながら言う。

毎年バレンタイン近辺でミスコンが行われる。

去年は主催側に促されて参加したところ、見事グランプリを勝ち取った。

「部活に力入れたいし、もう1回なれただけで十分よ」
「もったいなぁい。麻冬なら3冠狙えるのに」

本当は、部活があるとかそんな理由ではない。

星陵のミスコンは男子が女子をエスコートする。

まぁ言わば男子のクオリティの高さもグランプリ取るには必須であるというわけだ。

予選が内密に行われるため、ミスコンは実質決勝という形になり、そこで男子も登場するのだが……

去年は秋人が麻冬をエスコートした。

そもそも麻冬は出るつもりはなかったのだが、クラスで1人は必ずエントリーしなければいけないため、クラスの人たちに半強制的にエントリーさせられたのだ。

エントリーする以上はグランプリ取りたいと思った麻冬は、優勝商品としてもらえる金券1万円を餌に秋人を誘った。

もちろん2人で1万だから折半して5千円になるのだが、ただステージを歩くだけで金がもらえると思った秋人は即引き受けた。

だが今年はその秋人がいない。

むろんエスコートするのは秋人ではなくても良いし、麻冬ならエントリーした時点でエスコートしたいと言ってくる男子がたくさんいるだろう。

それでも今は秋人と付き合ってる以上、誰かにエスコートなんてされたくないのだろう。

「麻冬ちゃんなら絶対グランプリ取れるのに、」
「ごめんね」

クラス委員はしょんぼりしながら言った。

誰をエントリーするか早く決めなければならないクラス委員はなかなか焦っている。

当然麻冬が出るもんだと思っていたから流していたようだ。

「代わりに夏実出るから。ね」
「……あたしぃ?!」
「春樹とのラブラブぶり見せつければ優勝よ。やったぁ」

麻冬は他人事のように笑いながら言う。

だが嫌がる夏実をよそに一緒にいた春樹は目を輝かせながら夏実にこう言った。

「出よ！　夏実!!」
「え?!　何言ってんの春樹!」
「俺欲しいウェアあんだよねぇ〜」

ウキウキしながら春樹は楽しそうに喋る。

そんな恥ずかしいものに出たくはないが、あまりにも春樹が楽しそうに言うものだから夏実は嫌と言えずにいる。

結局そのままクラス委員が夏実に必死にお願いしたために夏実はついに折れ、ミスコンに出ることになってしまった。

麻冬はかなりの美少女だが、夏実も確かに可愛い。

黒髪にして春樹が毎日髪をアレンジするものだから前より見た目が女の子らしくなったのも本当だ。

だがグランプリ取れるかまでは微妙だ。

一応星陵の可愛い女の子たちが集まってくるわけだから、なかなか手強い。

だから夏実もあまり乗り気ではないのだろう。

あんなもの自分が可愛いと言っている女の子たちが来るようなもんだ。

だから夏実はナルシストみたいだと思っているようだ。

「やだな～。麻冬も出ようよぉ」

「嫌よぉ。それにエスコートしてくれる人いないもん」

ツーンとそっぽを向いている麻冬に声をかけてきたのは、なんとも意外な人物だった。

「じゃ、俺がしてやるよ」

ちなみに麻冬たちは今昼休みのためラウンジにいる。

お昼ご飯を食べながらの会話だったようだ。

「え……って、烈くん?!」

「よす。偶然通りかかったら面白そうな話してたから」

烈は手をヒラヒラ振りながら軽くそう言う。

その隣で阿笠は飲んでいたジュースを吹き出していた。

その行為にすら烈は目もくれていない。

「烈くん本気ー？」

夏実はラッキーと言わんばかりに烈に尋ねた。

「本気本気」

まさかの展開に夏実以外みんな驚いている。

まさかあの烈が女の子と歩くなんて、烈を知る者なら驚かないはずがない。

「おまっ……みかさに知られたらどうすんだよ！」

むせながら阿笠は烈に食ってかかる。

烈は阿笠のほうをチラリと見て、また視線を戻す。

そうして阿笠にだけ聞こえるような声で呟いた。

「みかさ彼氏できたから」

阿笠は声にならない声を出してものすごく驚いた顔をした。

それもそうだろう。

あの元旦の日、みかさは阿笠に烈が大好きだと言った。

それから1ヶ月程度しか経っていないのにそんなに早く気持ちが変わるわけない。

「冗談……だろ?」

みかさの存在は、麻冬たちはほとんど知らない。

それもそうだろう。

つかさは阿笠の小学校だったし、みかさは私立中だ。

顔なんて合わせるはずもない。

枯れるような声でそう言った阿笠に、烈は寂しそうに一瞬だけ笑った。

嘘ではないのだと阿笠は確信したが、信じがたい。

「烈くん、どういう風の吹き回し？」
「なんだよ麻冬。俺じゃ不服？」
「まさか。烈くんとならグランプリ狙えるだろうけど、」

烈は基本的にこういう目立つようなものに参加するのはあまり好きではない。

というか、注目を浴びるのが好きではないのだ。

例えば体育祭や球技大会、夏休み絵画コンクールなど学校の行事ともあらばどうしても烈のような人間は目立ってしまう。

マイペースな人間だからのほほんと過ごしたいわけだが、天性の素質たちがそれを邪魔してしまう。

最も烈の場合は髪を染めてる上にカラコンにピアス、上半身私服ときたが。

「ちょっ……烈、待てって」

驚きから目が覚めた阿笠は、烈の肩をグイッと引く。

「だからってそれはないだろ？当て付けのつもりか？」

「……当て付け？」

「そうだろ？　だって、他校だって……みかさだって見に来るかもなんだぞ」

そう、星陵のミスコンは近辺の高校生も見に来るほど。

まぁ他の高校でミスコンはやらないから物珍しいだけなのだろうけど。

でも確かに去年はみかさも見に来ていた。

今年は来ないなんて保証はどこにもない。

「……見てもなんとも思わないんだろ。先に裏切ったのはあっちな

んだ」

烈の冷たい声から放たれる憎しみを含んだ言葉は阿笠をゾッとさせた。

阿笠は烈の肩から手を離し、どうにもならない気持ちを何とか抑えようとしている。

春樹はそんな阿笠を見て不思議に思ったが、何分春樹はみかさを知らないため何も検討はつかない。

烈と麻冬は着々と話を進めていき、結局2人は出ることになった。

正しくは麻冬がエントリーされることになった。

その場にまだいたクラス委員は、夏実に加えて麻冬という豪華な顔ぶれがクラスから出てくれて嬉しいのか、とても喜んでいる。

麻冬は阿笠にだけは頼めないし、阿笠も烈の代わりに出るとも言えない。

もうきっぱりそういうことはしないと決めたから。

でも、阿笠には烈を止めなきゃいけない理由がある。

ミスコンではたいていカップルで登場することが多く、またはミスコンでカップルになる確率も高い。

言わば公認の仲になるというわけだが、まぁ誰もまかさ麻冬と烈がデキてるなんて思いはしないかもしれないが、噂が広まればどうなるか分からない。

みかさとだってケンカになるかもしれない。

例え本当にみかさに彼氏ができたのだとしても、2人が離れるはずがない。

ただ……確かに先に烈を裏切ったのがみかさだから、何とも言えない。

でも烈にはそんなヤケクソのようなことはして欲しくない。

モヤモヤした気持ちばかりが立ち込めるのは、果たして阿笠だけなのだろうか。

next

第２００話【まさかの事実】

「聞いた？！」

「聞いた聞いた！今年もやっぱり出るんだって！」

噂なんてすぐ広まる。

尾びれのついた嘘すら簡単に伝わるようなご時世だ。

「雪原麻冬！」

特に麻冬のような有名な人の噂ならだ。

エスコートする相手はミスコンでお披露目になるから、事実烈が麻冬をエスコートすることなんて一部を除いて誰も知らない。

阿笠とはもう別れているし、肝心の秋人はいない。

なら誰が？って話だ。

ありもしない空想の考えが広まるばかりだ。

当然麻冬にも、相手は誰なのかと尋ねてくる人はたくさんいる。

もちろん教えるはずもないけれど。

「……烈、良いのかよ」

休み時間、烈の机に座りながら阿笠は頬を膨らます。

「何が？」

「俺知らないぞ」

ブー垂れていたかと思えば、珍しく深刻な表情さえ浮かべている。

一方烈のほうは涼しそうな顔をしながらスケッチブックに何かを書いている。

ただのミスコンでこんなに深く考えるのかと思うかもしれないけど、たかがミスコンされどミスコンだ。

要らぬ疑いをわざわざかける必要などないし、ましてや烈はやけくそでこんなことをする人間でもない。

みかさは阿笠の大事なつかさの妹だ。

そして烈は親友。

割り込まないわけにはいかないのだろう。

「別にミスコンくらい良いじゃんよ。友達として出るだけなんだから」

あっけらかんとしている烈に、さすがに怒りを覚えたのか阿笠は強ばった表情を一瞬だけしてみせた。

けどすぐに目をつぶって何とか気持ちを抑えようとする。

いつもいつも阿笠にばかりベタベタだった烈

でも烈だって恋はする。

だがその気持ちさえ烈は信じたくはない。

恋なんて錯覚で、みかさは妹のような存在だと自分に言い聞かせてさえいた。

行かないでと言えないみかさと、行くのを止められない烈。

2人の歯車は一方の方向へと進んでいるはずなのにどうしてすれ違うのだろう。

みかさの好きな人は烈なんだとは決して阿笠には言えない。

言えないけど、だからと言って見過ごせるはずもない。

「……阿笠は俺をバカだって思う？……思うだろ？」

ふと烈は弱音にも取れる発言をボソッと言った。

阿笠は目を見開いて烈のほうを向く。

烈は目線を下げながら微動だにしない。

「……俺さ、こんなんだし周りは羨ましいって言ってくるんだ」
「……うん」
「でも羨ましいもんなんか１つもありゃしない」

サッカーの才能

画家としての才能

人を魅せる容姿

言動

すべてに置いて注目されないことはない、愛川烈という人間。

「……もし画なんか書かなかったら……きっとすべてが上手く行ってた」

阿笠とずっとサッカー続けることも、フランスに行かないこともできた。

けれどやはり欲は出てきてしまうがために、わざわざ阿笠から離れなければならない。

同時に、みかさに好きだとさえ言えない。

日本に、側にいるって保証がない限り恋を実らせることなんてできない。

でも、本当に？

「画なんかなけりゃ……幸せだった」

その言葉は本心か。

そう言う声は涙声ではなく震えてもいなく、けれど投げやりではない。

「画なんかなけりゃ……」

まるでこの世の終わりだというかのように、生気のないような消えてしまいそうな声で烈は呟いている。

今日はいつものようにカラコンは入れていなく、黒渕のオシャレメガネをしている。

赤い髪と黒渕メガネがなんとも合ってはいるが、その主である烈本人がこれでは映えるものも映えない。

しかもなぜか知らないがちゃんと制服すら着ている。

学校指定のシャツとネクタイ、そしてカーディガンを羽織ってその上にブレザーだ。

いつも制服なんて着てこないのに一体どういう風の吹き回しか。

単に気が向いただけか、それとも……

「……画なんか……なければ良かったの？」

今度は阿笠が言った。

とても寂しそうに笑っている阿笠の顔を見て、烈は罰が悪くなった

のか顔を歪ませる。

「……ごめん」

確かに烈に画の才能がなければもっと楽に過ごせた。

中1のとき阿笠とケンカする必要もなかった。

こんなに阿笠にベッタリじゃなくてもっとみかさに構ってやれてたかもしれない。

画の代償はとても大きくて計り知れないけど、でもその代償くらいなんてことないほど画だって大事なはずだった。

「だけど、……好きな女の1人も守れないなら……」

初めて聞く、烈からの好きという言葉。

絶対にその言葉を口には出さなかった。

「俺の夢なんてどうでも良いよ……」

口にしてしまったら抑えきれないのが分かっていた。

好きだとは言わない代わりに、ずっと見守り続けるはずだった。

もし、もしまだみかさがそれでも自分を思って待っていてくれたなら、その暁にようやく好きだと言えるはずだったのだ。

ほとんど可能性はない、きっと実らないものだとばかり思っていた。

夢なんてどうでも良い、確かに今の烈には本心かもしれない。

けれどならばなぜフランスに行くのを決めているのか。

どうでも良いのなら、せめて日本にいるのならいくらでも愛せただろうのに。

画とみかさ、どっちを取るかは難しい。

みかさは手放したくない。
けれど夢も捨てられない。

そんな葛藤を抱えながら過ごしてきた日々

葛藤しながらも夢を目指してきた烈

きっと期待してた。

口ではみかさの幸せを祈るなんて言いながら、きっとそれでもみかさは自分を好きでいてくれると。

「そういえばあの子どうなったー？華女中等部の女の子」

ふとそんな声が阿笠と烈の耳に入ってくる。

思わずその話をしている男子たちのほうを見て会話に聞き耳を立てる。

「あー、振られた」
「はやっ！いついつ？」
「クリスマスあとくらい」

思わず入ってきた情報に耳を疑う。

華女、華岡女学院の中等部にはあのみかさが通っている。

しかも、烈とみかさがあの話をしたのは元旦だ。

阿笠はいつ烈とみかさが別れ話（？）をしたのかまでは知らないから、華女とは偶然だなぁなんて思いながら彼らのほうを見ている。

だが烈は、つじつまが合いすぎるその話にまさかという気持ちで食いついた。

「それっ！誰？！」

席から立ち上がって、振られたらしいその男子の肩を掴みながら勢いよく尋ねた。

男子はあまりにビックリしたようでついポロッと名前をこぼす。

「ひ、比護みかさ。……って言っても分からないか」

一時烈の時間が止まったかのように思われる。

その会話を聞いていた阿笠もみかさの名前が出てきて少しだけ驚いているようだ。

「みかさ……振られた？クリスマスのあとに？」

「そうだけど。なんなんだよ、烈？」

烈はあのときの状況のことを回送している。

元旦に確かにみかさは他校の男子に告白されたと言っていた。

誰だとかは言わなかったけど、烈は当たり前のように振ったんだろ？と尋ねた。

みかさはなんで？と聞き返して……

そして

「……烈？なぁ烈、みかさに彼氏ができたのっていつだよ？」

何を悟ったのか、阿笠は後ろから烈にそう尋ねる。

烈は振り返ることなく、その男子から手も離して軽くうつむいた。

冷や汗が流れてる、といった表現が正しいだろうか。

「が……元旦……」

「どこで？」

「俺んち……」

ようやく阿笠はピンときたようだ。

阿笠は席から降りて、立ち尽くしている烈の腕を引っ張ってこっちに来させる。

グイッと引かれた烈は少しよろめいたが、しっかり自分の足で立っている。

だが阿笠の顔は見ずにやはり下を向いている。

「……彼氏ができたって、みかさがそう言ったのか？」

阿笠が慎重にそう聞くと、烈はどもったような声でうろたえながら答えた。

「……言って……ない」

「おまっ……じゃあただの勘違いか！」

「オーケーしたのかって聞いて……なんも答えなかったから、てっきり……」

まぁ、あの状況では勘違いするのも無理はない。

答えなかったみかさもみかさなのだ。

まるでオーケーしたけど烈にはそうは言えない、なんて雰囲気だった。

違うと言えば良かっただけなのに、なぜ。

本当のことを言っていれば烈とケンカまがいなことをすることもなく、烈が麻冬とミスコンに出ることだってなかった。

今までのように仲良くラブラブでいられたのに。

烈とみかさが気づいてないだけで、言葉にしなかっただけで2人は十分恋人らしかった。

夜中でも会いたいときには会いに行くし、烈が唯一電話をするのもみかさだけ。

烈が帰りに華女に寄ってそのままみかさと遊びに行くことなんて普通にあるし、映画だってプールだって遊園地だって2人だけで行く。

友達以上の付き合いであることくらい分かっているのに。

「どうすんだよ?烈、」

烈は予想していなかった真実に言葉を失っていた。

next

第２０１話【帰国の条件】

「アキト、精が出るな」
「……ハノイ、」

練習終了後に1人で自主練し続けることはや2時間。

練習だけでもかなりハードなのに、さらに2時間もやるなんて無謀だ。

だがこんな無謀なことをアキトはずっと続けてきた。

「まぁ、今週だもんな」

なぜかって？

なぜならば、アキトは監督から命じられたからだ。

今度の大会でＭＶＰになれたら秋人の望む通りにしても良いと。

今度の大会とは、ドイツ中で選ばれた学校による親善試合。

州の中で1校ずつ選ばれる、まぁ言わば全国大会に似たようなものである。

トーナメント方式で、去年から始まったばかりの新しい試合なのだ。

秋人たちの通うこの学校ももちろん選ばれている。

この大会のＭＶＰになるということは、すなわちドイツの高校生の中の頂点に君臨するということになる。

不可能な話だ。

日本では確かに高校サッカー界の頂点にいた。

けれど、ここはドイツだ。

将来のドイツ代表選手が相手となればそう簡単なものではない。

監督もそれを狙っているのだろう。

「だけどあんま無理すんなよ？　大会前に体壊したら意味ないしな」
「ああ」
「ま、付き合うよ」

そう言ってハノイは、そこらへんに転がっているボールを足で拾い上げる。

ディフェンダーのハノイは、佑亮のような豪快なプレーはしなくてまるで空気のようなプレーをする。

狙った相手がどこにいようと、すぐにフッと現れる。

まるでボールのほうからハノイに向かっていくかのように。

美しく、とても繊細。

「……本当悪い。ハノイにもたくさん迷惑かけた」

アキトは目を細目ながら、ハノイから視線をはずす。

来てまだ2ヶ月ちょっと、なのにもう留学を勝手に終えようとしている。

申し訳なく思わないはずがないだろう。

「お前とプレーすんの楽しいよ。だからいなくなるのは本当惜しい」

「……」

「ただ、俺にはナギやナチたちみたいな仲間がいるようにアキトにもいるんだろ？　大切な仲間が」

優しい。

ハノイも

ナギもナチもチームメートたちも

そしてリョーマも。

勝手にこっちにやって来てその実力とカリスマ性でチームに大きな影響を与え、なのに結果として掻き乱してしまった。

普通なら怒っているはずなのに、もう誰も何も言わなかった。

「……ナギやナチたちはさ、そのダイゴって奴のこと知ってんだろ？」

「え？　あ、ああ」

するとハノイは、茶色い髪を風に揺らしながら真っ暗な空を見上げた。

点々と光る星は、まるでハノイの使い物のようだ。

ハノイはアンダー１８のキャプテンであり、だがその容姿はとても繊細だ。

襟足につくかつかないかほどのサラサラの茶色い髪と、優しそうに微笑むその顔がそう思わせるのだろうか。

他人には優しくて自分には厳しい男。

その繊細な容姿が、あの繊細なプレーを引き出しているに違いない。

「良いな。俺も戦ってみたい。ダイゴと一緒なら、アキトもっと強いんだろう？」

「わかんない……」

「はは。謙遜すんなって、」

優しいという言葉よりは、美しいといったところか。

春樹の頼もしい優しさでも阿笠の大人な優しさでもない。

儚げな優しさ。

「約束しろよ。今度……そうだな、高校卒業するまでにアキトのチーム連れてきてよ」

プロというのは、一流というのは荒波の世界。

そんな中で彼のような人間がやっていけるだろうか。

答えは、イエスだ。

ナギやナチが挫折を味わう中できっとハノイだけは一本道を進む。

秋人でさえこの前挫折を味わったというのに。

けれどそう思わせられてしまうのだ。

「良いのか？　……ハノイ」

「俺ね、約束は破ったことないんだ。だから言っとく。今度の大会はうちが優勝する」

自信ありげに言っているわけではないのに、ハノイが言うと説得力がある。

「そんでもって、攻守ともに活躍したアキトがＭＶＰさ」

なんというか、本当にそうなる気がしてならないのだ。

佑亮も勘は外したことがないが、それと同等。

似たところがある２人。

絶対的な存在感。

「……だから、そしたら安心して日本に帰ると良い」

ハノイだって最初から許せていたわけではない。

ナチたちのようにダイゴとの連携プレーを見たことがあるわけではないから、信じられないのも無理はない。

留学してきて、即効レギュラーとして迎えて、何度か練習試合をしていく中で秋人はとっくにかけがえのないメンバーになっていたのだから。

自分で留学に来ておいて日本に帰りたいだなんてワガママ、通用するほうがおかしい。

「……帰ってもっと上手くなったら、絶対またここに来る。約束する」

「楽しみだな」

「ありがとう、……ハノイ」

それでも、こうして秋人のためにしてくれる。

あのリョーマでさえ、秋人と一緒にやれて喜んでたリョーマでさえ今は秋人の味方だ。

そもそもこの交渉にありつけたのはリョーマのおかげだった。

コーチを半ば説得させた上、聞く耳持たずの監督にも秋人と話す機会を作らせた。

リョーマの権力があってこその今なのだ。

結局秋人1人の力ではどうすることもできなくて、でもそれでも良い。

立ち上がる勇気さえなかった秋人が立ち上がってフェルデンの仲間に真っ向から挑んだ。

みんなはそれを支えてくれた。

秋人は、ただ愛されているだけなのだ。

仲間という絆に。

その頃日本では明け方を迎えていて、朝練のある運動部員たちが学校に急いで集まってきている。

冬の朝はなんとも厳しく、手袋やマフラー、時には帽子を被っての登校だ。

ファーつきの茶系コートを着た春樹にダッフルコートを着た夏実、そしてトレンチコートに身を包んでいる麻冬。

みんなそれぞれ別々に自転車で登校してきたが、久しぶりにほぼ同時刻に校門に着いた。

おはよう、と誰からともなく言おうとすると3人の間を1台の自転車が通り過ぎた。

やべー！と叫んでいるその人物はかなり一生懸命自転車をこいでいて、すぐに姿は見えなくなる。

「……阿笠？　よね」

「阿笠……だったなぁ」
「阿笠くん、だね」

3人は呆然としながら口々にそう言う。

ブレザーの上にサッカー部用ジャージを着てマフラーを巻いていた阿笠だ。

こんな風景、前にもあった。

確かあれは夏実と春樹が一緒に登校してるときだった。

サッカー部は他の部より始まるのがはやい上規律に厳しい。

しかも今は阿笠が部長代理だから阿笠が遅刻なんかしたら面目が丸潰れだ。

まぁ、選抜チームでも秋人が抜けたために主将代理をしてるから大変と言ったら大変なのだが。

そうだ、今や阿笠は秋人の分まで背負いながらサッカーをしているのだ。

秋人の居場所を奪うわけでもなく、あくまで代理として動いている。
部長にも主将にもならないのは秋人が帰ってきたときのためにその場所を取っておくため。

「セーフ！」

勢いよく阿笠が部室のドアを開けると、部員たちのほとんどが着替え終わっていた。

「ばーか。あと3分でグランド来なきゃ遅刻だぜ」
「わーってるよ！」

村松に茶化されながら阿笠はものすごいはやさで制服を脱いでいく。

ロッカーに雑に制服を投げ入れたかと思えば、もうすでに下に練習着を着ていた。

スパイクを履いてロッカーを乱暴に閉め、阿笠は部室を飛び出す。

なんとか滑り込みセーフのようだ。

「いえーっ。お疲れ阿笠ぁ」
「どうよどうよ？」

みんなが阿笠を取り囲みながらそう言ってくる。

何の話かと思いきや、実は土日と国際試合だったのだ。

しかも相手はあの韓国で、全国選抜チームとして阿笠は韓国に行ってきた。

「かーいしょー！（快勝）」

嬉しそうな笑顔をしながらブイサインをして阿笠は叫んだ。

その瞬間ワァッ！とサッカー部員たちが盛り上がる。

韓国といえば、今はそこまでではないがやはり戦後からずっと日本の長年のライバルだ。

その韓国戦ともなれば自然とつい力も入る。

だが日本は3-0で韓国を下してきた。

阿笠が帰ってきたのは今から5時間ほど前のことだから、遅刻寸前なのも仕方はないだろう。

「すっげぇ！　さすが！」
「秋人いねぇのになっ」

もう部活が始まっている時間だというのに部員一同盛り上がっている。

まさかその秋人が今週の大会のために血みどろになりながら練習してるとは露知らず。

「あはは、実はねぇ」

すると阿笠は後頭部に手を当てて笑いながら話し出した。

next

第２０２話【秋人の姿―フィールド】

韓国との親善試合、まぁ何度かやっていることなのだが秋人がいなくて試合するのは阿笠には初めてだった。

それでも秋人の穴を埋めようと阿笠は頑張っていた。

まぁつまりあのときの全国選抜のメンバーで戦うということになるわけだが。

韓国チームも秋人と阿笠の実力は認めているが、それは阿笠たち日本チームが向こうに着いて韓国チームにあいさつをしたときのこと。

監督同士があいさつを交わしてる側で、阿笠も主将代理として韓国チームのキャプテンと握手をしようとしていた。

ちなみにお互い韓国語や日本語は話せないため英語での会話となる。

『日本チーム主将代理、阿笠大悟です。今回も互いのチームの士気を高めるため頑張りましょう』

『韓国チーム主将、キム・ヘギです。長旅ご苦労様です。お互い全

力を尽くしましょう』

あちらの主将は当たり前だがしっかりとあいさつを交わした。

だが後ろで見ていた韓国チームのあるメンバーがこう言い出した。

『おいアカサ。ツキカゲはどうしたんだよー』

なんとも悪意に満ちた笑いをしながら言ってきたが、阿笠は聞こえないふりをする。

だがその人に便乗して何人かの韓国チームが嘲笑うかのごとく阿笠を茶化す。

『主将代理？　よく言うぜ。ツキカゲ今ドイツだろ』
『ひゃははっ。噂にゃ聞いてたけどまさか海外に逃げたとはなぁ』
『ツキカゲいなきゃ名実共にお前の天下だな！　内心喜んでんだろ』

聞こえないふりして平静を装おっていた阿笠だがさすがにこう言われてまで黙ってられるわけがない。

『んだと？！　この野っ……むぐっ、』

阿笠は言い返そうとしたが、日本チームが阿笠の口を押さえて必死に黙らせた。

『はにふんだよっ?!』

『ばか！　ここでキレたって仕方ないだろ！』

『れもっ……』

『お前が秋人のこと悪く言われてムカつくのは分かる！　でもケンカして秋人が喜ぶとでも思ってんのか?!』

数人のチームメートが阿笠を捕まえながらそう言う。

そこまで言われてようやく阿笠は納得したようだ。

だが分かってはいてもやはり許せずにはいられない。

そんな阿笠をよそに韓国チームのキャプテンが阿笠に突っかかったメンバーに対して怒鳴りちらしていた。

関係ないことを口にするな、何様のつもりだ、と。

キャプテンにそう言われて彼らはグッと縮こまる。

『うちのメンバーがすまない。ちゃんと言ってきかせる』

キムは申し訳なさそうに阿笠のほうを振り向いてそう言う。

みんながみんな秋人を悪く言うわけではない。

だがそんなことは阿笠には関係なくて。

『いや。秋人はちゃんといるってことを見せるよ』

『え？』

『よろしくお願いします』

阿笠は真剣な顔をしたかと思えば、ペコッと頭を下げる。

そうしてそれぞれのチームがウォーミングアップを開始した。

いつになく阿笠がやる気に満ちているのが分かる。

全国大会でもそこまで必死になったことがない阿笠が、珍しく本気だ。

監督は阿笠が何かしでかすのではないかと心配し、みんなが練習している間阿笠といろいろと話をした。

汗を拭き、メンバーが練習しているところを見ながら阿笠は言った。

『俺、秋人を悪く言われんのが一番嫌いなんです』

『阿笠、でもな、月影は』

『秋人はいつだって側にいる。だから監督、秋人がいないなんて言わせません』

どういう意味でそう言っているのかよく分からないが、阿笠があまりにも真面目にそう言うものだから監督でさえ息を飲む。

『……俺は俺の力だけでここまでこれたんじゃないんです。秋人と一緒だからこれた』

確かに秋人はいない。

いないから阿笠が代理としてキャプテンを努めてる。

だけど、秋人のプレーがないわけではない。

唯我独尊だった阿笠のプレーを支えてくれたのは、いつだって秋人

だった。

秋人がいてくれたから阿笠は自由にできた。

ならば、秋人の穴はどう埋めようか。

秋人はどんな風にどんな気持ちでプレーをしていた？

そんなの簡単だ。

すべては阿笠のために。

ついに始まった試合、みんな一斉にボールに食いつく。

ミッドフィルダーの桑原が持っていた球を阿笠が受け取る。

いつもならそこで阿笠は予測できないような爆走をして相手をおちょくるのだが、今はなぜかただ走っているだけ。

相手もチームメートも不思議に感じているが、当然相手チームにマークされる。

だがそれを阿笠はヒョイヒョイとボールを軽やかに操りながら避けている。

時にチームメートにボールをパスしてまた受け取る。

読める行動なのにどうしてかボールが奪えない。

その走りはとても綺麗でなぜだが魅せられる。

相手までも一瞬足を止めてしまうようなドリブル。

『阿笠……じゃない』

誰だかが言った。

『……月影！！』

その瞬間、更に味方にパスをして再び受け取った阿笠は、今度は勢いよく走り出した。

味方さえお構いなしに走っているその姿は、いつもの阿笠そのもの。

果敢に向かってきた敵にはお馴染みかのごとく天才的な技を見せつけておちょくる。

遊んでるようにしか思えないが技の高度さを見ればそうも言ってられない。

阿笠を抜くことなぞできない、なぜならばその動きを読める人間がいないから。

さっきまで秋人を思わせるプレーをしたかと思えばいきなり阿笠らしいプレーとなり、味方さえ翻弄される。

すぐ側に、阿笠の隣に秋人が走っているようだ。

行くぞ、と頼もしく言う秋人にうなずく阿笠。

見慣れた光景がすぐそこにあった。

ようやく、阿笠の言っていた意味が分かった。

フィールドには秋人がいる。

『行くぞ！　……秋人！』

半回転した阿笠が回転をかけながらボールを蹴りゴールへと入れる。

結果として阿笠がハットトリックして韓国に勝った。

秋人は、以前阿笠には敵わないのだと嘆いた。

だけど、秋人が阿笠の攻撃を止めれないように阿笠だって秋人の攻撃を止めることはできない。

ならば何が違うのかと言えば、１人で戦っているときいかに相手を思うかである。

阿笠にとってはもうずっとずっと秋人は欠くことのできない存在だった。

秋人も阿笠をゴールデンペアだとは思ってはいたものの、どれほど大切かまでは分かっていなかった。

それだけの違いだ。

だからあの阿笠との対決のときには気持ちで負けたし、いざドイツに行ってみても阿笠がいないことで滅入っている。

離れるまで阿笠の大切さが理解しきれていなかった秋人の大きなミスなのだ。

フィールド上で、阿笠は常に1人なんかではない。

形はなくともすぐ側を秋人の姿が走ってくれている。

だから阿笠は頑張ってこれたのだ。

秋人も、離れることで阿笠の大切さが分かったのなら、そこには存在しなくともちゃんと阿笠がいるってことを分かればドイツでもやって行けただろうのに。

離れていても気持ちは繋がってるって、言葉で言うのはあまりにも簡単すぎる。

本当はもう自分のことなんていらないんじゃないかとか、忘れてるんじゃないかって思うと怖い。

気持ちは形には見えないから、何が真実かなんて分からない。

それでも、信じているんだ。

君が、お前が俺のことを待ってくれてると。

「まぁねー、やっぱ俺だけじゃ無理って話かな」

阿笠は笑ってそう言う。

部員たちは阿笠の話に真剣に耳を傾けて、時には感嘆の声を漏らしたりもしていた。

「違うよ。秋人がいなくても阿笠の力だけで十分勝てたさ」

中尾は言う。

「ただお前には秋人がいなきゃダメって、そんだけのこと」

バカにするでもなく蔑んでるわけでもなく、懐かしそうに軽く微笑んでいる中尾に、阿笠はつい魅入る。

他の部員も、中尾に賛同するように頷いている。

「阿笠だけじゃない。秋人だってそうなはずなんだ」

何も言わずにいなくなった部長を責める部員なんて阿笠を除いて1人もいなかった。

阿笠だって責めたくて責めたのではない。

ただ、夢見てた。

秋人と組んだ自分がゴールデンペアとして星陵サッカー部を全国優勝に導くことを。

佑亮がいないこの部で、2人が引っ張っていったという証拠を。

プロになるとかそれ以前に、ただ1人の高校生サッカー選手として、サッカー部なら誰もが憧れるその頂きを掴みたかっただけだった。

秋人と一緒に。

「お前が秋人の場所をなくさないように頑張ってること、みんな知ってんだよ」

今度は村松が言う。

「いつでも帰ってこれるように秋人の居場所守ってるお前だからこそ俺ら付いてってんだぜ」

練習で疲れた部員に声をかけたり

ミスした人にはアドバイスをしたり

怒るべきところはちゃんと叱ったり

ナイスプレーをした部員にはきちんと褒めたり

日頃の雑用から何まで、秋人がしていたことをそっくり同じように行っていた。

秋人の代わりになろうとしているのではない。

そこに秋人がちゃんといたという事実を忘れないようにするためでもない。

きっと帰ってくる秋人がするであろう行動を続けておかなければ、

部員たちや秋人が戸惑うからだ。

慣れないことをしていて正直イライラすることもあるし嫌になることもある。

でもそんな阿笠に部員が何も言わないのは、阿笠の気持ちを知っていたから。

秋人がいない寂しさに埋もれることなく前を向いている阿笠を、サッカーでは自分のことしか考えられなかったのにようやく周りを見れるようになった阿笠を、愛しいと思ったから。

それでも秋人を追いかけずにサッカー部を守ろうとする阿笠を、すごいと思ったから。

「ありがとう、なんて言葉は聞かないぜ」

そう言って村松は阿笠の背中を叩き、ランニングに入る。

「さー！　走るぞみんな！」

続いて中尾が同じように阿笠の背中を叩きながらそう言う。

みんな軽くうつむいている阿笠を残し、ランニングを始めた。

いつになく大声の掛け声がグランドに響く。

叩かれた背中は軽くジンジンと痛んでいる。

朝日が阿笠を照らしている。

そうして、阿笠の頬に一粒の涙が落ちた。

next

第２０３話【譲り合いの恋心】

街は女の子たちで賑わい、店はバレンタイン一色に彩られる。

もうじき女の子のメインイベントであるバレンタインが来るせいか、いつになく女の子たちの可愛さに磨きがかかる。

彼氏がいる子も片思いの子も、寂しい１人ものの男子をよそにキャーキャーと楽しそうに会話を弾ませる。

「みかさー、今日放課後服でも買いに行かない？」

授業が終わり帰る支度をしていたみかさに、２人の女友達が声をかける。

「うん、行く行く」

珍しく髪をおろして緩めのウェーブをつくっているみかさは、いつもと雰囲気が違う。

華女といえば他校からも人気があるし可愛い子も多いと評判で、その制服を着て歩けば声をかけられることも多々ある。

みかさだって可愛い顔をしているのだからもちろんその対象になる。

3人で仲良く話に花を咲かせながら歩いていると、校門が一際賑わっているのに気づいた。

不思議に思ったみかさがヒョコッと覗いてみると、そこにいたのは意外な人物だった。

「だっ……大悟くん?!」

みかさが驚きながら阿笠の名を呼ぶと、阿笠はみかさに気づいて手を振った。

「来ちゃった。みかさ」

笑いながら阿笠はそう言っているけれど、阿笠といえばその容姿と星陵サッカー部のエースというレッテルを持ち合わせている人気者なわけで、女の子たちにだって騒がれるような奴だ。

星陵はもうそこまでではないかもしれないが、他校の女の子なんてめったに阿笠に会えるわけではないので嬉しい限り。

華女の女の子たちも例外ではないわけで、親しそうに阿笠がみかさに話しかけるものだからみんなの視線がみかさに釘付けになる。

みかさはつい一歩引いてしまうが、即座にみんなの標的となる。

「みかさ?!　どういう関係なの?!」
「なんで阿笠くんと知り合い?!」
「どういうこと?!」

友達や知らない生徒にまでそう詰め寄られる始末だが、阿笠は自分が人気があるせいでみかさが詰め寄られてるとは鈍感にも気付かず、ケロッとこう言った。

「え?　だって俺とみかさ幼馴染みだもん」

その瞬間、その場にいた女生徒たちが一斉に叫び声を上げ、阿笠はビックリしながら耳を押さえている。

みかさは失笑しながら、あーあ……と頬に手を当てている。

みかさが烈や阿笠と一緒に歩いているという話はチラホラ噂程度には出ていたが、所詮噂は噂止まりだった。

だが阿笠のほうからこう言ってしまったとなれば言い訳もできないだろう。

「えっ、何？　幼馴染みってだけでそんな驚く？」

阿笠はキョトンとしながらそう言う。

みかさに幼馴染みがいても別に普通だが、その相手が阿笠ともなれば話は違う。

驚愕の事実にみんなが阿笠とみかさに詰めよってくるものだから、これはまずいとさすがに感じた阿笠がみかさの手を掴んで走ってその場から去った。

逃げる2人の後ろでまだギャーギャーとわめいている。

みかさはあの華女の制服を着ていて、でも隣にはあの阿笠大悟がいるから男たちはみんな声をかけたくともかけられない。

まぁ女の子たちも華女が隣にいるから声なんてかけられずにいるが。

いつもサッカーばっかりだった阿笠がみかさとこうして夜以外に一緒に外を歩くことなんてめったにない。

ある程度走ったところで阿笠は走るのを止め、つられてみかさも止まった。

普段運動してないみかさは息を切らしたようで膝に手をつきながら呼吸を整えている。

「ごめん、いきなり走って。平気？」
「う、うん。大丈夫」

みかさがようやく息を整えられたところで、2人は一緒に歩き出した。

阿笠の顔なんてバレバレで、まぁ芸能人でもないから顔を隠す必要もないがチラチラみんなに見られてヒソヒソ言われることに気分が良いはずもない。

「せめて着替えてくりゃ良かったかね」
「ふふ。どっちにしても同じよぉ。それよりどうしたの？」

阿笠は、ちょっとねと言いながら受け流す。

そして近場のカフェにみかさを誘って2人はお茶をすることにした。

夕方だからか学校帰りの学生も多々いるし、暇な主婦もいる。

秋人なら躊躇しそうなこのシチュエーションでも阿笠はお構いなしだ。

阿笠がアイスティを頼むそばでみかさはチョコレートパフェを頼む。

しばらく2人は楽しそうに会話をしている。

時折光るフラッシュに阿笠がチラッと見たりするが、そのまま会話は続けられる。

サッカーのこと、つかさのこと、学校のこと、面白い話など話題は尽きない。

ただ烈の話題だけは出てこない。

みかさからは何も言わないし、阿笠も分かっているからその名前は出さずにいた。

だがカフェに来てから1時間半は経った頃、ようやく阿笠から話を持ち出す。

「は～。すごい長居しちゃってるね」

笑いながらそう言ったみかさに、阿笠はティーカップを置いて言う。

「……みかさ。みかさに言わなきゃいけないことがあるんだ」

「ん？」

「……ミス星陵……コンテストに麻冬が出る」

阿笠がそう言うと、みかさはキョトンとしながら「え？　うん」と当然かのように答える。

まぁ麻冬が出なくて誰が出るって話かもしれないが、知らないわけではないだろう。

秋人が日本にいないことくらい。

ニュースでも海外留学が報道されたし、何よりみかさは阿笠の幼馴染みでそのくらい阿笠から聞いている。

「……烈だよ。相手」

「――――え？」

「麻冬をエスコートするの、烈なんだ」

阿笠は気まずそうに言う。

みかさはまさかの阿笠の話に言葉を失っている。

あれ以来2人は一度も会っていなく、見かけても知らないフリをしていた。

彼氏がいると思っていても諦めきれずに顔を背けることしかできない烈にみかさは

本当のことが言い出せなくて悲しんでるみかさに烈は

お互いどう思っているのだろう。

「れ……つくん？　麻冬さんの相手……？」
「烈が自分から麻冬を誘ったんだ。……秋人がいないから参加を諦めようとした麻冬を、」
烈はみかさに彼氏がいないと知っても、何も動こうとはしない。
そればかりかコンテストにエスコートとして出ることさえやめない。
2人のことには絶対に口を出さないようにしていた阿笠が、ここにきて初めて割って入ってきた。
もちろん今日だってみかさに会いに来たことを烈は知らない。
入ってはいけないと分かっていても、やはり何も言えずにはいられなかった。
すれ違う2人を見るのだけは嫌だった。

「烈、勘違いしてた。みかさに彼氏がいるって。でもそれも今は勘違いだって分かってる。……なのに、」

一度すれ違った恋をした阿笠には、そんな体験をした阿笠にはそれがどんなに辛いものかがよく分かる。

和解するのに何年もかかり、けれど相手にはすでに自分以上に愛してる人がいた。

後悔してないと言ったら嘘になる。

けれどあのとき、相手を守るために阿笠にできたことはあれしかなかった。

例え嫌われてでも守りたかったもの、譲れなかったものがそこにある。

「……勘違いさせたのは、みぃだよ」

「え」

「離れてく烈くんを……ずっと好きでいられるかなんて分かんない」

みかさは少しうつむきながらポツリと言う。

「烈くんだってそうでしょう？　だから……何も言わないんでしょ？」

海外に行く烈。

世界規模で活躍することが必須な烈。

一緒にいられるとは限らないし、どんどん遠い存在になっていく。

だからみかさも烈も、好きだと思うことは相手を蝕むことになると思っている。

仕方ないのかもしれない。

そんなことないと言ったら嘘になるのだから。

「心置きなく烈くんは行ってくれれば良い。きっとみぃは重荷になる……」

「みかさ……」

「勘違いって分かっても何も言ってこないのは……みぃがいなければ自由に羽ばたけるから……なんだよ。大悟くん」

顔を上げたみかさの瞳はなんとも切なそうに笑う。

お互い気持ちを知ってるのにそれでも進もうとせず逆に退いてしまっていても、阿笠にはもう何も言えなかった。

みかさは大事な人の妹

烈は大事な親友

そんな2人にはちゃんと幸せになって欲しかったけど、そんな簡単なことではないと阿笠が痛感した瞬間だった。

next

第２０４話【夢見た世界は夢物語】

「あれ……」

阿笠とみかさがカフェで話をしているとき、ちょうど烈がその店の前を通りかかった。

つい足を止めて2人の様子を眺めている。

烈の話題をこれ以上続けるのはまずいと察した阿笠は違う明るい話題を振り、ちょうど2人が楽しそうに笑っているところだった。

「用事ってみかさだったのか、」

部活がない阿笠が珍しくまっしぐらに帰っていくものだから何かと思えばこれだ。

嬉しそうに笑っているみかさと、何やらジェスチャーをしながら話している阿笠の姿を見て烈はなぜか裏切られたような気分になる。

もともとはみかさは阿笠の幼なじみで、だから烈はみかさと知り合えたわけだ。

けれどいつの間にかみかさとの間には恋が芽生え、阿笠より親密になっていた。

ここんとこすれ違っていて顔すら合わせていなかったものだから余計に感じるのだろう。

名も知れぬ歯がゆい感情。

「……なんだよ。……ちきしょー」

今では自分の前で笑ってくれないみかさと、みかさに会いに行くならそう言えば良い阿笠に疎外感を抱く。

仲間外れにされてるような、そんな複雑な気持ち。

だけど、今この場で2人の前に現れることはできない。

偶然ー、なんて言って話しかけにはいけない。

本当は、阿笠がいるあそこの位置には自分がいるはずなのに。

烈は悔しそうに唇を噛みしめ、再び足を進めた。

本当は、フランスに行くのをやめようと思っていたこともある。

阿笠から離れてみかさから離れて、そこまでしてやりたいことってなんだろう、と。

高校生やるって決めたときに将来フランスに行くこともやめていたら、みかさとの高校生らしい恋愛も叶っただろう。

だけど、阿笠もみかさも決して烈がフランスに行くことを止めようとしないから。

だから……

「コーチ！　愛川コーチ！！」

烈は、そのまま帰るのかと思いきや烈がコーチをしているサッカークラブに顔を出した。

元気な小学生たちがワラワラと烈に集まってくる。

「よす。ちゃんとやってたか？」

ここ2週間ばかり顔を出していなかったから久々だ。

小学生とは言え、5・6年にもなれば上手い奴は上手い。

昔の烈のように。

この中にも見事全国選抜に選ばれている子はいて、小学生時代の烈と阿笠の伝説は語り継がれている。

なんせ監督はあのときのままなものだから。

最初仲が悪かったことやケンカしたこと、そして絆が深まったことなど毎年毎年監督が選手に話しているものだから、今やサッカーをしていない烈も一部では有名なのだ。

「俺正キーパーに選ばれたんです！！」

嬉しそうにそう言った少年は、身長が１７０はあるがたいの良い小学生。

「おっ。やったなぁ、章！」

烈は章という少年の髪をくしゃくしゃと撫でる。

伝説のキーパーと称された烈のもとでキーパーとして育てられ、烈と同じく全国選抜の正キーパーに選ばれたことは彼にとって誇りだろう。

烈がコーチとして指導してくれたその日からずっと烈の背中を追い続けたのだから。

「コーチの伝説には手が届かないだろうけど……でも頑張ります！」

「はは、伝説なんて」

「いや！　阿笠さんとの伝説は一生語り継がれますよ」

章に続いてみんなが賛同する。

もはやサッカーをやっている人しか烈の存在は知らない。

今その烈の元相方は月影秋人と伝説を極めようとしている。

だから、烈との伝説なんて裏話でしかない。

最高に陽があたっている阿笠を正直羨ましく思う。

今まだ衰えないこの技術が、烈を苦しめる。

サッカーやりたくないなんて誰が言った？

阿笠となら永遠にやっていきたい。

今阿笠と月影に加えて烈が入れば、同世代の中で伝説になることは間違いないのだ。

だけど、そこに踏み入れることは許されない。

中1のときに誓った。

「愛川コーチが今でも阿笠さんの親友って、なんか素敵ですよね」
「前の全国対静岡の中継で最後コーチがスタンドから2人に何か言ったじゃないですか。あのとき感動したなぁ」

そんな3ヶ月近く前の話、よく覚えてるなと烈は苦笑する。

テレビ局もテレビ局だ。

烈が阿笠の親友だと知ってああやって烈をピックアップして映していたんだ。

ある意味嫌がらせだ。

あれで烈の過去をみんなに知られた暁には、きっと烈は傷から解放されなくなる。

画家になりたかった。

だから画家になろうと決めたけれど、今でもこうしてコーチやったりしてるのはサッカーを切れない証拠だ。

あれだけの実力があって簡単にサッカー捨てられるはずがない。

烈と佑亮は違う。

烈には、佑亮のように恋人のために何もかもを捨てることなんてできない。

「お、いたいた」

そのとき、みかさと分かれた阿笠は暇つぶしにと烈に会いに来ていた。

阿笠もごく稀にこのサッカークラブに訪れることがある。

もちろん阿笠が部活休みで、しかも偶然烈がコーチしに行く日に限る。

グランドで小学生に囲まれている烈を見つけて、阿笠は後ろからトコトコと近寄る。

「……なんで……俺はサッカーを選べないんだろう」

ワイワイと楽しげに盛り上がる小学生たちに、烈は押し殺すような声で言う。

烈の意外な言葉に小学生たちはキョトンとして、一気に静まり返った。

近寄っている阿笠もその異変に気づき不思議に感じている。

「サッカー選んでりゃ何も悩むことなかったのに……」
「あ、愛川コーチ？」
「……みかさだって……絶対幸せにしてやれた……」

烈は立ちながらうつむいていて、その目には涙を溜めている。

青い目に溜まる滴がよりいっそう青さを増させている。

「阿笠とも……ずっと一緒にいられたはずだった……」

サッカーの道を選んでいたら幸せな将来が待っていることは約束されたも同然だった。

星陵で秋人にも出会い3人で全国優勝を成し遂げ、ゆくゆくはプロとなり。

いつかはみかさを妻に迎えて幸せな家庭を築くはずだった。

どこでどう間違ってしまったのか、そんな夢は夢物語となっているけれど。

「全てを失ってまで得るもんなんて……ないはずなのに……っ……」

烈はポトッと涙をグランドの土に落とす。

静かに頬を蔦りながら落ちる涙はとても綺麗だ。

小学生たちは突然の烈の泣きに戸惑いを隠せずオロオロするばかり。

彼らにとって烈は憧れのサッカーの選手であり、自由気ままで時に厳しく時に優しいマイペースな人間。

泣くなんて考えられないような人だった。

だけど阿笠は違う。

これだけ一緒にいれば烈が何を思い何を感じるのかくらい分かっている。

烈の泣き言を後ろで聞いていた阿笠は、込み上げる震えを抑えるかのごとくギュッと手を握りしめる。

そうして、キッと睨むような眼差しをしながら叫んだ。

「勝手なことばっか言ってんじゃねぇよ!!」

グランドに響くその罵声に、烈だけでなく小学生たちも振り返る。

まさか阿笠がいるなんて思わなかった彼らは驚きの声を上げる。

烈の瞳からキラリと涙が光って落ちた。

next

第２０５話【指南】

蒼い空、白い雲

なんて表現は古臭いだろうか。

それでも思い出さずにはいられない。

あの日、まだ入部していないサッカー部のゴールを勝手に借りて一生を決めるＰＫ戦をしたことを。

阿笠が烈を抜ける確率も、烈が阿笠を止められる確率も五分五分の勝負で、最後に勝ったのは烈だった。

「お前がサッカー切り捨てて無くすもんて何だよ?!　選手としての名声?!　安定した未来?!」

「阿か……なん……」

「それとも俺か?!　俺やみかさだってのか!!」

阿笠はズカズカと前に進み、烈の襟元をグイッと掴む。

２０センチやそこらの間近な距離で阿笠は遠慮なく言い続けた。

「……今のお前には例えサッカー選んでたってみかさを幸せになんかできねぇよ！！」
「……っ」
「みかさも俺も！　画を選ぶようなお前だから好きなんだって……なんで分かんねんだよっ……！」

阿笠に圧倒されている烈は黙り込んでいる。

いつも側にいなきゃフラフラとどこかへ行ってしまいそうな彼が、烈が見ていなきゃ弱ったときに立ち直れない彼が、今まさに烈と向かい合っている。

助けられてばかりで、支えてもらわなきゃ立てなかった阿笠が今度は烈を助けなきゃと必死になっている。

「もしっ……もしサッカー捨てることで失うもんがあったとしても！　それでもやりたいから選んだんだろ?!」
「そ……」
「ざけんなよ！　中1んときそう言ったのお前だろ！！」

雛鳥が親離れするような嬉しさがある反面、悔しさが込み上げてくる。

烈はこんな人間だから人に指図されたり怒鳴られたりすることがな

い。

だが今、目の前で親友が自分に向かって正論を言っている。

烈はグッと唇を噛みしめたまま何も言わない。

「俺だって……！　できることならお前と一生一緒にサッカーやりてぇんだよっ……」

流れる涙を拭うことさえできない烈の目の前で、今度は阿笠が目に涙を溜める。

みかさとの会話や烈の最近の言動で、どうにもならないことを知っていてもどうにかしてやりたい阿笠の思いやりを

どうか烈に届いて欲しい。

仕方ない、なんて言葉では終わらせない。

「……好きだって！　それだけ言えばみかさも付いてきてくれるだ

ろ?!　俺だって離れてもずっと友達だぞっ……!!」

ずっと覚悟してた。

烈のいない中学選抜、高校選抜、高校の部活……

まさに正反対のプレーをする烈の姿はグランドにはない。

寂しくないわけがない。

秋人がいたところでその寂しさが埋まるわけでもない。

秋人と烈は別物。

きっとこんな思いを背負いながらこれからも進んで行く。

それでも、烈が選んだことなら仕方ないと思って烈のいないサッカ

ーを頑張ってた。

なのに

「離れたら不幸せだとかそんなの！　誰が決めたんだよ！！」

阿笠のその言葉に烈はハッとする。

離れてしまうからとみかさと距離を置く烈。

そんな烈にみかさは何も言わないけど、決して距離を置かれたいわけではない。

何が幸せだとか何が不幸せだとか、そんなことといつの間に決めつけていたのだろう。

「だって……だって！　離れたくないんだよっ……本当は！！」

烈はようやく口を開いた。

乾くことのない涙が流れ出て、それでもそれを拭わずに烈は言う。

「だけど！　阿笠があの日どんな気持ちでゴールを外したのかを考えれば！！　離れたくないなんてのはただの甘えでしかないって……！！」

「烈……」

「分かってんだよ……、俺だって」

こんな陽気の日には、思い出さずにはいられない。

あの日、まだ入部していないサッカー部のゴールを勝手に借りて一生を決めるＰＫ戦をしたことを。

阿笠が烈を抜ける確率も、烈が阿笠を止められる確率も五分五分の勝負で、最後に勝ったのは烈だった。

なぜかって？

阿笠がわざとゴールを外したからだ。

ゴールを外すなんてミス、あの阿笠がするはずないのに阿笠はあの一番大事な局面でとんでもないミスを犯した。

わざと外すわけないだろ、なんて阿笠は言うけれど、わざとでなければ外すわけがないことを烈は理解していた。

「それでも俺の夢を応援してくれたお前の気持ちを無碍にはできないっ……」

認めてくれた。

サッカー以外の道に行くことを、あの日阿笠は泣きながらも許してくれた。

その気持ちを裏切ることは阿笠を裏切ることになる。

「だから……行けよ」

「えっ……」

「フランス行って有名になって帰って来いよ……。お前の夢だろ？お前の夢は俺の夢だよ……」

そのときようやく、阿笠の瞳に溜まっていた涙がこぼれた。

阿笠は烈から手を離し、涙を流しながらも笑っている。

なんて綺麗な涙だろう、思わず魅とれるほどに。

烈は乱れた襟元を直さずに、阿笠を見つめている。

「離れたって変わらないよ。……永遠に親友だよ」

阿笠とて本当は行ってほしくはないし、側にいたい。

けれどあの日誓った。

全力で烈の夢を応援すると。

「烈……、欲しいものは欲しいって言って良いんだよ」

「え……」

「烈が俺にそう言ってくれたんじゃん。……言葉にしなきゃ伝わらないことだってあるんだよ」

阿笠は指で涙を拭う。

そしてコートのポケットに入っていたハンカチを出して、烈の涙を拭いてやる。

「……もう二度と聞かないよ」

阿笠はじっと烈を見る。

烈は目を反らすことなく阿笠の瞳を受け止める。

冷たい風が吹き続けるのも無視して、回りに小学生がいることも忘れて2人は見つめあう。

たいして変わらない身長、たいして変わらない体格。

けれどいつになく阿笠が大きく思える。

「……やりたいのはサッカー？　なりたいのは、プロサッカー選手？」

真面目な顔をしている阿笠に怯むことなく、烈も久々に見せる真剣な顔をしている。

「……画家になりたい。画を……描きたい」

「……離れたら……終わり？」

そう尋ねる阿笠は切なげな目をした。

もしここで肯定されれば、今まで一緒にいた時間さえも否定されることになる。

楽しかったこと

笑いあったこと

ケンカしたこと

泣きついたこと

そのどれもが2人にとっての大切な記憶。

烈はいろんな思いを振り払って、阿笠に思い切り抱きついた。

「離れても……会いに行くからっ……」

まるで男女のラブシーンのような光景。

けれど、誰もおかしいとは思わなかった。

阿笠の首に手を回してブワッと溢れ出ては止まらない涙を流す烈を、阿笠はギュッと抱きしめる。

麻冬のように柔らかい体をしているわけではないが、全身で愛しいと思える。

離れたくないと泣いてくれる親友がいる、ただそれだけで十分だった。

「俺も行く。……必ず行くよ」

どこへでも。

どんなときでも。

君のためなら。

そのまましばらく余韻に浸っていた2人だったが、ようやく来た全く状況を理解してないサッカークラブの監督が声をかけてくる。

「……何をやってるのかね？」

その声に子どもたちが、監督！と声を上げる。

まさかの監督の登場に阿笠と烈は同時に勢いよく離れる。

「かっ、か、監督！　お久しぶりっす！！」

裏返りそうな声で烈は慌てて答えた。

監督は不思議そうな顔をしているが、阿笠がいることに気づいて阿笠に話しかける。

「おぉ、阿笠くん。良かったら一緒にやっていくかい？」

「えっ」

「あっ、良いじゃん。やってけよ、阿笠」

話題を変えようと烈は必死になっていて、阿笠も恥ずかしさを紛らわすために即答する。

そうして練習は再開され、2週間ぶりに愛川コーチも復帰して今回はかの有名な阿笠大悟も加わり、とても賑やかになる。

烈はもともとトレーナーを着ていたが、阿笠は制服のため偶然持っていたサッカーの練習着のウェアを着る。

もちろん上だけだが。

あとは2人して制服のズボンを多少まくりあげて、制服が汚れるのを最小限に抑えた。

「いっくぞ！　章！！」

高校サッカー界トップの天才フォワードが、小学生の全国選抜正キーパーに向かってボールを放つ。

綺麗な軌跡を残しながらグインとキレよく曲がるシュートを、章は手が掠れることもなくゴールを許してしまう。

まぁ、当然の話だ。

それでも珍しく阿笠が指導をしていたり、烈も指示を出していたりして活気に溢れている。

とても楽しそうな顔をしているものだから、永遠にこの時が続けば良いのにとさえ思ってしまう。

永遠に続くことはないけれど、でも今この瞬間を大切にしたいと思った。

next

第２０６話【プロポーズ】

久々に阿笠とのサッカーを楽しみ、烈はそのあと阿笠の家で一緒に夕飯を食べた。

快く迎えてくれる阿笠家の人は阿笠と同様本当に優しくて穏やかで落ち着いた空間。

夕飯のあとは2人で阿笠の部屋で適当にゲームをしたり雑誌を読んだりとくつろいでいて、時刻はとっくに0時を迎えていた。

このまま泊まって行けばという阿笠の好意を烈は断り、帰る支度を始める。

いつもなら当然のように泊まっていくのに今回は違うようで阿笠は不思議に感じている。

だが、帰り際の烈の言葉を聞いて納得したようだ。

「……俺も逃げないで頑張ってみる」
「えっ、て……もしかして」
「じゃあまた明日な」

阿笠の言葉を遮るかのごとく烈は手を振って去って行く。

聞かなくても分かる。

これからみかさのところに向かうのだ。

あの晦日の夜からずっとみかさを避け続けていた烈が、ようやく動き出そうとしている。

本当は仲直りする瞬間を阿笠も見ていたかったが、そこはグッとこらえて明日詳細を聞こうと決めたようだ。

そうして、朝練に備えて阿笠は再び自分の部屋に戻って就寝した。

烈はみかさの家に向かってはいるものの、こんな真夜中にピンポンは押せないからどうしようか迷っていた。

とりあえずみかさに連絡しようと携帯を取り出して着信履歴からみかさの番号を出そうとするが、1ヶ月半近く電話をしていなかったため履歴には残っていなかった。

その事実が2人の間に確かに距離があったことを示すものとなる。

烈は携帯をギュッと握りしめて、電話をかけるのを止めた。

そしてみかさの家に着くと、烈はインターホンを押さずに玄関を勝手に開ける。

父親が起きていたから烈は軽くあいさつをした。

こんな非常識なことでも烈や阿笠くらいの付き合いになると許されるのだ。

父親は烈に碁の相手を頼むが、烈はやんわりと断ってみかさの部屋へと向かう。

みかさの部屋をノックする前に、烈は2、3度深呼吸をする。

なんて言おうか、なんの話をすれば良いか。

こんなに顔を合わせなかったことはないからやけに緊張する。

２つも年下の女の子だけど、烈にとってはただ１人の女性。

いろいろ聞きたいことは山ほどあるけど、言いたいことは１つだけ。

烈は唾を飲み込み、覚悟を決めてドアをノックする。

「はぁい？」

久しぶりに聞くみかさの声。

「……俺」

烈はそれだけ言い、みかさからの返事を待たずに部屋へと入った。

受験勉強をしていたみかさは驚きながら振り返る。

まさかの登場に声も出ないで口をあんぐり開けている。

「な……んで……」

烈はどんな表情をしたらいいのか困惑するが、とりあえずベッドに腰を下ろした。

勉強机で勉強していたみかさは椅子から立ち上がり、とりあえず座布団に座る。

必然と烈を見上げる形になり、みかさは烈をじっと見つめている。

烈はなかなか言いたいことが言葉にならなくて頭の中で試行錯誤しているが、そんなことしていてもラチがあかないため、ぐちゃぐちゃになってでも良いからと話す決意をする。

烈から何か言ってくるのを待っているみかさに、烈は言う。

「……彼氏いないって、」

「え……あ、……」

「なんでちゃんと断ったって言わなかった？」

あの日、いつものようにみかさがしっかり断ったことを言っていればこんなすれ違いは起きなかった。

「……あー……違う」

烈は髪をくしゃっと握る。

「彼氏がいるとかそんなことは……もうどうでも良い」

素直に好きだと言えない烈の精一杯。

今更言えない。

だけど、阿笠の言うように言葉にしなきゃ分からないこともあるだろう。

言葉に詰まっている烈に、みかさは言った。

「……みぃ、絶対追いかける。フランス留学するから」

今みかさは中3なわけだから受験だ。

けれどエスカレーターでそのまま高等部に上がるらしい。

烈と一緒にいたいなら星陵に来れば良いのに、みかさはそうしないし烈もそう言わない。

なぜ？

そう、そのまま高等部に上がれば国際科というものがあり留学制度も整っている。

みかさは国際科に入ってフランスへ留学すると決めているようなのだ。

あと1年でも同じ高校にすれば良いのに、なんだかんだでみかさは烈の邪魔にはなりたくない。

「フランス……って遠いんだぞ？」

烈は予想外のみかさの言葉に驚きを隠せない。

まかさみかさがそんなことを言ってくれるなんて夢にも思っていな

かったのだ。

「分かってるもん」
「簡単に親にも友達にも会えないんだぞ」
「それでも良いもん！」

みかさはクッションをギュッと抱きしめながら、烈に必死に訴えかける。

みかさの想いは決して軽くはないし、それは烈も重々承知している。

けれどみかさをここから引き離すのはまだどこか躊躇するものがあるようだ。

自分のために、たかだか自分のためだけに留学なんて烈自身許せないのかもしれない。

側にいて欲しい、けれどみかさの大事な人たちから引き離したくはない。

そんな思いばかり募らせていた。

けれどクッションを抱きしめるその手はとても力強く、かつ震えている。

みかさも怖くないはずはないし大変ではないはずもない。

それでも自分と一緒にいようとしてくれている。

「……いつもお前にばっか辛い思いさせてんなぁ、俺」

烈はみかさの側に行き肩に手を回した。

顔があまりに近くてみかさは振り向けずにいる。

「そんなこと……ないよ」

お互いの心臓の鼓動が聞こえてしまいそうな距離。

触れるか触れないかの絶対領域。

もしかしたら、みかさは確かめたかっただけなのかもしれない。

他の男となんて付き合うなと言って欲しかっただけかもしれない。

烈もそれは心のどこかで分かっていたが、口に出してしまえるはずがなかった。

みかさを解放したい。

そんな気持ちばかりが芽生えてきて、自分の気持ちなんて押し殺してばかり。

けれど、みかさは追いかけると言ってくれた。

阿笠とばっかりベタベタして阿笠を優先させてしまうような自分を、それでも良いと言ってくれた。

……離れたら終わり？

夕方の阿笠の言葉が頭の中で木霊する。

違う、終わりなんかではない。

離れてたって会いに行くし、絶対なんて保証もいらない。

ただ、永遠の約束を誓いたいだけなんだ。

「……俺が一人前になってお前も大学卒業したら、さ」

烈が肩に回していた手を離すと、みかさは烈のほうに視線をやって自然と2人は見つめ合う。

いつになく真剣な眼差しをしている烈に、みかさはドキッとしながら顔を少し赤くする。

静かな空間に流れるのは烈の声だけだ。

「絶対日本に帰ってくるから、そしたら……結婚しよう」

好きという言葉もなくて

付き合ってくださいも通り越して

今

永遠の愛を。

「は……はいっ……」

2人はどちらからともなくキスを交わした。

これだけ近くにいるのに、キスしたのすら初めてで。

それはたどたどしい口づけで

世界一素敵な口づけで。

「……ありがとう」

お互い唇を離したあと、烈はポツリと呟いた。

両思いに対してのありがとうなのか、追いかけてきてくれることへのありがとうなのか、何に対してのありがとうなのかは分からないが、みかさは聞き返さなかった。

ただ一言

「幸せにしてください」

涙を瞳いっぱいに溜めて微笑みながらそう言った。

出会ってからもう幾年経ち、2人が恋をしてからどれほど過ぎただろう。

側にいても伝えることが許されず、ただ一緒にいることしかできなかった。

それだけでも幸せだけど、隣で笑ってるだけで幸せだけど

今はもっと幸せだから。

貴方にいつか伝えたい。

愛してくれて、ありがとう。

next

第２０７話【ミスコン１】

「さぁ！　始まりました！　ミス星陵コンテスト本選！！」

１４日の土曜、学校は休みだというのにほぼ全校生徒に加えて近隣の学生たちまで集まっている。

授業の代わりに行われるのはミスコン。

例年通りの賑わいを見せており、予選を勝ち抜いていきた星陵の美少女たちがステージに肩を並べる。

全部で１２人いて、なんと夏実まで残っている。

当然麻冬もいるわけで、ミスコン本選は２次まで行われる。

１次で勝ち上がった６人が２次に進める。

１次の内容は、まぁ簡単だ。

何かアピールすれば良いだけ。

歌を歌うでもマジックを披露するでもなんでもアリで、とにかく美少女たるものに相応しいとみんなに認められれば問題はないわけだ。

それなのに、エントリーナンバー8の夏実様はダボダボのB系ファッションをしてヒップホップを踊っている。

かなりノリノリの曲にグルングルン回るダンスで観客たちも大いに盛り上がるが、普通にこれでは2次への進出は不可能。

人前で可愛らしいことなど恥ずかしい夏実は、せめて最後までは残りたくないと思ってこれにしたようだ。

商品を狙っていた春樹はため息をついている。

「良いぞー！　海野！！」
「夏実先輩かっこいいー！」

回りからそんな声が飛んできて夏実は更にフィートアップする。

そして、最後にはバッファローという斜めに回転するかなり高度な技を見せて終えた。

キャーキャーとかなり盛り上がっていて、しかもなんとテレビ局まで来ているのだ。

どこから聞きつけたのか夏実と麻冬がミスコンに出ると知った報道陣たちが駆けつけてきたようだ。

まぁ1、2社程度しか来ていないが。

ユース代表のエースとして活躍して全日本候補にも上がっている夏実と、オリンピック強化選手に選ばれてる麻冬が出るのだから話題性はある。

おまけに夏実の相手は春樹だと知られているのだから余計に。

そして次はエントリーナンバー9の大本命、麻冬。

麻冬は去年はバレエを踊った。

昔体をしなやかにするために多少たしなんでいたことがあったから、まぁ本当に軽く弄る程度だがトゥシューズを履いて少しだけ踊っていた。

そして今年は、やはりこれしかないと言わんばかりのもの。

ステージに電子ピアノが運ばれてくる。

ステージ中央に置かれた電子ピアノとセットの椅子に腰を下ろした麻冬は、小型マイクを使って観客たちに問いかける。

「何が聞きたいですか？」

麻冬の問いに観客たちは遠慮することなく、名曲クラシックやアニソンやＪ‐ＰＯＰの曲の名前を挙げていく。

あまりにもみんながリクエストしてくるものだから全てを覚えきれはしないが、麻冬は時間が許す限り演奏し、時には弾き語りもした。

それはそれは綺麗な旋律で。

それはそれは美しい歌声で。

水泳をしている姿も、その容姿も何もかもが見る人を魅了させるのだからすごい。

美しさで麻冬に勝てる人なんてこの星陵にはまずいない。

そうしてようやく12人全員終えたところで、観客の投票により次に進める6人が決まる。

6人に選ばれた助生徒は男性1人とランウェイを歩く。

その華やかさ美しさ、そして迫力から名誉あるグランプリが決まるのだ。

男性陣の評価もされるから男性にもなかなかのプレッシャーでもあり、だいたいステージに上がって緊張してぎこちなくなるパターンが多い。

最も去年優勝した麻冬をエスコートした秋人は素晴らしい存在感を見せつけたけども。

「麻冬さん完璧2次進出だね」

「……わりぃな、みかさ」

観客に混じってみさかと烈はそんな会話をしている。

烈が言い出した手前、ミスコンを辞退することはできなくて結局烈はそのまま麻冬をエスコートすることになった。

今更出ないと言っても麻冬に申し訳ないし、何より麻冬は烈が言わなきゃ出るつもりすらなかったのだ。

「ん、良いよ。やるからにはグランプリ狙ってね」

そんな烈にみかさはニコッと笑う。

烈はみかさに微笑み返し、とりあえず結果を待つ。

だがすでに烈はスーツを着ている。

グレーのスーツに紺のネクタイをつけ、ピアスは外している。

エスコートする際にはこうしてピシッとした格好をしなければならず、女性側も軽くドレスか何か身につけるのだ。

烈がスーツを着ていることでただならぬ噂が持ち上がっていることも事実。

誰のエスコートをするのか、まさか雪原麻冬の相手ではないだろうかと。

もちろん知っているのは仲間うちだけで、誰かが漏らしたりするはずもない。

結果は、麻冬を含めた6人でやはり夏実は落選。

そして、エントリーナンバー順に行うと麻冬は最後から2番目となる。

エスコート役の男性陣はステージ裏へと集まる。

当然烈もそこへ行くことになるが、そこでは意外な組み合わせが登場していた。

裏にいたのは、村松と中尾、そして阿笠だ。

「……はっ？　サッカー部多くね？」

その光景を見るなり烈は目を丸くしている。

村松は1年の彼女のエスコートをし、中尾は3年の彼女のエスコートをするようだ。

そして阿笠は、クラスを代表してでる女子のエスコートを勤めることになった。

もちろん最初から阿笠だったわけてはなく、ついさっきエスコートするはずだった人が風邪でダウンしてしまい、急遽阿笠が出ることになった。

阿笠は嫌がるが、容姿がよくステージ映えし、更にその男子のスーツのサイズが合うのが阿笠か烈しかいなかったから仕方なく阿笠になった。

そのことは烈も知らなかったようで、まかさ阿笠がいるとは思わず驚いている。

「あ〜っ……しかもネクタイピンクだよ?!　やだよ烈〜」

悲しそうな子犬みたいな表情をしている阿笠に、烈は頭を撫でてやる。

「まぁまぁ。ピンクも似合ってるよ。いつも通りにしてれば平気平気」

「ほんと～？」

阿笠はネクタイをヒラヒラと振りながら口を尖らせている。

順番はクラス順のため村松・阿笠・烈・中尾となる。

司会者がどんどん司会を進めて行き、2次も始まろうとしている。

落選した夏実は観客に混じって春樹と一緒に応援。

控え室では2次に進める人たちがドレスアップし終えてステージ裏に向かってきている。

メイクの力もあるだろうがやはり最後まで残るだけあってみんな美しい。

続々と美女が集まってくるが、なぜか烈の相手の麻冬だけは来ない。

「あ？　雪原さんいないじゃん。……っと。ああ、雪原さんの相手って烈か」
「ああ……なんで来ないんだろ」

ステージ裏で村松と烈がそんな会話をしているとは露知らず、麻冬は未だに控え室にいた。

携帯をじっと見つめながら動かない。

もう準備は済ませていてステージ裏にさっさと行かなくてはならないのに、電話をかけるでもメールを打つでもなくただただ画面を見ている。

今日という日の日付を見ながら、かかってくるはずのない電話を待っているのだ。

帰ると約束してから2ヶ月弱、バレンタインデーの今日さえも会えない。

いつ帰ってくるのか、もう帰って来ないのか。

今何してるのか、忘れてないだろうか。

いろんな思いを募らせながら画面を見ては、ため息をつく。

ここ最近はずっと連絡も取っていない。

秋人の事情を知らないのだから仕方ないのだが、少しばかり可哀想だ。

「麻冬。いる？」

そのとき、控え室をノックする音とともに麻冬を呼ぶ烈の声がした。

「あ……烈くん？　ごめ……」

麻冬は携帯を置いて、急いでドアを開ける。

待っても現れない麻冬を迎えに来た烈に、麻冬はとりあえず謝罪してステージ裏に向かう。

「……付き合ってんだって？　月影と」

「えっ……」
「わりぃ。前に佐々先輩との会話聞いたんだ。元旦のとき」
誰にも話さなかったことを烈はようやく口にする。
まさか聞かれていたなんて思わなかった麻冬は驚きもあるが、星陵生徒が何も知らないということは烈が誰にも喋っていないという何よりの証拠。
安堵の気持ちが上回る。
「うん。……阿笠にも？」
「言ってない。月影は……帰ってくんのか？」
「分からない……」
そっか、とだけ答えて烈はそれ以上何も言わなかった。
next

第２０８話【ミスコン2】（前書き）

※ボーイズラブではありません（笑）

さて、そろそろ最終話までのカウントダウンです。
かなりの長編になってしまってますが最後まで読んで頂けたら恐縮です。

第２０８話【ミスコン２】

「まにっ……間に合わねぇ！」

その頃１人の少年が学校の入口前でタクシーから降りて急いで走っている。

さて、ミスコンが行われているのは第２グランドで入口からは一番遠い場所にある。

これでもかってほどの賑わいも入口付近には声すら届かないほどの距離。

「いよいよミス星陵コンテスト本選２次が始まります！　今年も優勝は女王雪原か？！　さぁ、まずはエントリーナンバー２……」

ついに２次が始まった。

一番手は村松とその彼女で、可愛らしさを強調して淡いピンクの膝上ドレスで髪を巻いている。

ふわふわした感じが印象の可愛らしい女の子だ。

2次は、持ち時間は5分程度でランウェイを一通り歩いて戻ってくる。

恥ずかしがった仕草はマイナスだし、やり過ぎも悪い印象しか残らない。

どれだけ存在感をアピールできるか、どれだけ観客を魅了できるかがキーである。

順番的には村松が一番でその後に2人続いていき、そして阿笠、烈と麻冬、そして中尾となる。

麻冬はやはり白いドレスで、膝丈でふわっとしている。

その上に白いレースのカーディガンを羽織り、銀色に光るミュールを履いて頭には黒いバレッタをつけている。

普段よりも気合いの入った化粧は、更に麻冬を美しく仕上げている。

2冠達成だと誰もが確信するくらいの美しさ。

高嶺の花そのものだ。

その隣で麻冬と親しげに喋っている烈も、麻冬と並んでも見劣りしないほどのかっこよさ。

それはそうだ。

秋人に阿笠、そして烈といえば誰もが認める美男子。

春樹はかっこいいよりは可愛い系統だが、他の3人は優劣がないほどの美形でもある。

「そうなんだ。みかさちゃんと付き合うのね」
「おう。あの阿笠にああまで言われちゃなー。なんて、」
「ふふ」

烈は麻冬にみかさの話をしたようだ。

もちろん麻冬はみかさのことを知っていて、阿笠と幼なじみで烈と仲が良かったことも承知している。

ただ、麻冬はつかさのことは知らないし阿笠も烈もみかさも麻冬につかさのことは言わない。

「阿笠優先にしちゃってばっかで悪いよな」
「あら、良いんじゃない？」
「え？」
「だって分かるもの。みかさちゃんの気持ち」

麻冬と烈が話してるのをよそに、阿笠は眠いのか目をこすっていてペアの女子に何か言われている。

あながち阿笠くんは緊張しないの？とでも言われているに違いない。

まぁ、村松中尾阿笠といったサッカー部連中は試合馴れというか人前に出ることに慣れているし、烈だって緊張するようなタマではない。

「分かる？　って、え？」
「だって、仕方ないんだもん」

麻冬は遠くを見つめながら凛としている。

「あたしのこと好きって言ってくれても、いつも側にいるのはあたしじゃなくて阿笠なの」

麻冬は、誰を思い描いているのだろう。

確かに麻冬とみかさは似たような立場にいる。

麻冬は阿笠の相棒の彼女。

みかさは阿笠の親友の彼女。

阿笠の相棒も親友も、自分の彼女より阿笠を優先する。

そんなところがソックリだということだ。

「阿笠はずるい」

「麻冬、」

「阿笠は……ずるい」

いろんな人に愛されて、阿笠がいる場所は陽だまりの中で、数えきれないほどの才能を持っていて、そして誰も憎めないような愛嬌がある。

サッカーをやってなくてもきっと阿笠はみんなから好かれるだろうし、阿笠のことを嫌いなんていう人のほうが珍しい。

そんな人間いるのかと思うが、実際にいるのだから疑う余地もない。

秋人との会話には、必ず阿笠の名前が出てきた。

いつも眠そうで物事に無関心だけど、阿笠の話をするときだけは楽しそうだった。

ああ、本当に阿笠のこと好きなんだなって思えた。

だから、あなたの隣に阿笠がいない未来なんてないんだろうとさえ思える。

親友とはまた違う存在の、かけがえのない好敵手。

こんな逸材がこんな狭い地域で出会うなんてなかなかないことで、
それこそ運命のイタズラではないかとさえ感じる。

けれど、試合に勝ったときやコンビプレーが炸裂したときの2人を
見ていればそんなことはどうでも良い。

信じざるをえないのだ。

認めざるをえないのだ。

彼らの強い絆を。

「あ、阿笠くん。出番」

ようやく阿笠たちの順番が回ってきたようだ。

基本的に男女はステージ裏の左右から分かれて登場し、ステージ中央で並んでそこからランウェイを歩く。

阿笠のクラスの女子はステージの左側に向かい、阿笠は右側にトロトロと歩く。

「阿笠。回りの声は気にすんなよ」

烈は後ろからささやかに阿笠を応援する。

テレビ局まできている以上阿笠が出たらかなり盛り上がってしまう。

それもあるから阿笠は嫌がるのだが、出ることになった以上は仕方ない。

「うんっ」

そうして司会のアナウンスと共に、2人はステージへと登っていく。

阿笠の登場に女子たちが盛大に黄色い声を上げる。

制服とは違った凛々しさ、サッカーのユニフォームとは違ったかっこよさに女の子たちはご満悦のようだ。

ステージ中央で並ぶために2人は互いに中央へと足を進める。

テレビ局が来ているのをチラッと横目で見ながら嫌だなぁなんて思ってる阿笠の目に、信じられないものが写った。

観客たちの遠方から全力で走ってくる青年。

阿笠は思わず足を止め、その方向をじっと見つめた。

信じられないし目を疑いたくもなるが、目の前にいるのだから信じざるをえない。

「秋人!!」

阿笠が驚きながらそう叫ぶと、観客や報道陣、司会者ならびにステージ裏から決勝進出者たちが一斉にその方向を振り向いた。

茶色い制服に金色のネクタイをつけ、つい道を開けてくれた観客たちの間を割って秋人が走っている。

ランウェイの先端まできた秋人はようやく足を止め、息を整えようとしている。

「阿笠……っはぁ……た……ただいま」

「なん……」

阿笠は目を丸くしている。

そんな阿笠に秋人は少し笑いながら言った。

「帰ってきちゃった。やっぱお前とサッカーしたくて」

その言葉に、阿笠はブワッと涙を目に溜める。

いろんな感情や記憶が飛び交うが、そんなものを遮るほどに嬉しさが打ち勝つ。

そうしてエスコートする女子の存在も忘れ、阿笠はランウェイを走りそのままステージ下にいる秋人に飛びついた。

秋人は阿笠が飛びついてくることを予想してたのか両腕を広げて阿笠をきっちり受け止めた。

阿笠は秋人の首に手を回し、顔を秋人の肩に埋める。

一瞬何が起きたのかみんな分からず、一時騒然とするが2人はそんなことお構い無しだ。

「悪い、阿笠……。お前から逃げた」
「知ってるよっ……」
「でもやっぱお前とじゃなきゃ全然楽しくないんだ」
「あ……たり前だろ！」

泣きを含んだ阿笠の震える声。

いや、震えているのは声だけではない。

全身が震えていて、阿笠はもう離すまいとギュッと秋人に抱きついている。

相棒のいない2ヶ月間を必死に耐えた阿笠。

「……許してくれるか？　こんな俺を」

秋人は阿笠を抱きしめることなく、手はブラリと下げたまま。

震える阿笠を、突き放してしまった阿笠をこの手で抱きしめて良いのか戸惑っている。

まさかの秋人の登場に烈や麻冬まで顔を出しているが、秋人は彼女の麻冬ですら視界に入っちゃいない。

空港からタクシーに乗ってここに直行したのは、阿笠がグランドで部活をしていると思ったからだ。

ミスコンをしているとは思っていなかったが、運動部が1つも活動してないことと今日が14日であることからミスコンだと気づき、ここに向かった。

阿笠がちょうどステージ上にいるとは計算外だったが。

「許さない……一生っ……」

「……阿か……」

「だけど！　言ったろ?!　一緒にやりたいのは俺も同じなんだって……！」

君といた時間
君といた日々

大切なんだと教えてくれたのは、君のいない毎日だった。

「俺のアシストしてくれんのも俺の動き読めんのも秋人だけなんだって……！」
「……ああ」
「約束も忘れたのかよっ……」

阿笠は鼻をすすりながら、ボロボロと涙を流している。

秋人の肩に顔を埋めているからその表情は見れないが、秋人には分かる。

サッカーは強いが、精神は弱くてすぐに崩れてしまうし繊細で儚げで泣き虫なことも十分知っている。

知った上であの日空港で阿笠を突き放した。

その罪の重さを重々理解し、秋人はきっちり自分を責めた。

罪滅ぼしをするならば、できることはただ1つ。

「忘れるもんか。……阿笠、一緒に全国制覇しよう」

佑亮と一緒に成し遂げた偉業を今度は佑亮なしで2人の実力でチームを導こう。

いつしか交わした約束。

このとき、ようやく秋人は阿笠の頭に手を回した。

軽くポンポンと叩いて、少しだけギュッと力を込める。

「……もうどこにも行かない。ずっと側にいる」

まるで恋人に送るような、いや秋人なら恋人にも送らないような愛の言葉。

永遠に一緒だと、そう誓っているように思える。

「絶対だよ……っ」

阿笠の表情は見えないけど、許してくれたことは分かったので秋人はホッとする。

嬉しそうに阿笠を抱きしめて、２人の空間はとても穏やかなものになる。

が、周りの雰囲気はちっとも穏やかではない。

ドイツにいるはずの秋人が今ここにいて、ミスコンなのに相手をそっちのけて阿笠は秋人のもとに走り、男が２人で抱き合っていて、しかもテレビ局が来ているのだ。

それはもう信じられないほどの大騒ぎ。

ここまできたら禁断の愛と言われても仕方ないほどで、落ち着きを取り戻した秋人と阿笠もこの状況に困惑し、抱き合ったまま動けずにいる。

阿笠はまだ顔が見えないから良いが、秋人は顔を隠してないからみんなの注視を集めてばかりで口がひきつっている。

どうしよう？と阿笠が小声で呟くが、こんな状態ではどうにもできまい。

「あ」

雄叫びに近い黄色い声を上げる女子たち、感動するもさすがに引いている男子たち、近寄ろうにも近寄れない記者たち。

彼らの声を無視し、秋人はステージ上にいる（決勝進出者全員がステージ上に出てきた）烈を見つけた。

そして、何を思ったのか突然烈の名を呼ぶ。

今度は烈に視線が集まり、烈は一瞬後退りした。

「……悪かった！　だけど、俺もう逃げない！　だから……」

だから、とそこまで言っておきながら秋人は言葉に詰まる。

だが烈には秋人の言いたいことは十分伝わっているようだ。

こんなテレビ局やみんながいる前で阿笠と抱き合ってる秋人と話すなんて気がひけるが、秋人があまりに真剣な顔をしているものだから烈も逃げずに答えた。

「……お前に裏切られた阿笠、どんなだったか知ってる？」

「……」

「口きけなくなって動けなくなって、それでもお前がいた部を守ろうと立ち直ったんだぞ」

腕を組みながら烈はキッと睨むようにして秋人を見る。

秋人はひるむことなく、烈の言葉を受け止めている。

「阿笠を泣かす奴は許さない。それが例え月影だろうと」

だけど、こうしてみんなの前で烈に謝ることが阿笠への精一杯の償いなのだ。

阿笠を裏切ってドイツに行った自分を戒めるにはこれしかない。

「もう絶対……阿笠を泣かさないし裏切らない！　愛川、俺は阿笠ともう一度サッカーがしたいんだ！」

烈には叶うことのない夢。

ならば誰かに叶えてもらうしかないだろう。

誰に？

「二度目はないからな」

月影秋人に。

阿笠も烈の許しにようやく顔を上げ、烈を見上げた。

「れっ……」

烈はさっきまでの少し怒ったような表情とはうってかわって、ニコリと笑っている。

秋人と阿笠は互いに手を離し、烈を見つめた。

「阿笠をよろしく。秋人」

そうして初めて烈は秋人の名前を呼んだ。

「おう。――――烈」

2人の間に確かな友情が結ばれた瞬間だった。

阿笠は烈と秋人を交互に見て、どんなリアクションをすれば良いのか少し戸惑っていたが2人が笑っているので阿笠もつられて笑った。

烈と秋人には似ているところがあって、だからこそ余計に分かち合えない部分もある。

サッカーを捨てて画家になることを志す烈と、社会的地位を捨ててサッカーの頂きを目指す秋人では。

けれど、繋がっているものもある。

サッカーを愛する気持ちと、阿笠が大切であること。

きっと2人は無二の存在となる。

「……ほら。やっぱり秋人もあたしより阿笠なのよ」

他の決勝進出者と一緒にステージ上に立っている麻冬がポツリと呟いた。

烈の隣にいるのに、秋人は烈が目に入っていても麻冬まで見えていない。

日本に帰ってくる理由も、そもそも阿笠とまたサッカーがしたいからだ。

阿笠しか目に入らなくて、阿笠のことばかり考えている。

普通ならここで阿笠たちのペアを見送って、麻冬が出てきたところで烈から麻冬を奪って華麗に登場を決めるのが王道だろう。

まさか2―5代表の女子から阿笠を奪うだなんて誰も思わない。

男が男を奪略して何が面白いのかと思うが、これが月影秋人と阿笠大悟だとしたら面白さを越えて感動ものである。

秋人の実力は国民が皆知っていることで、阿笠とのコンビのすごさも知り渡っている。

更に、お互いがなくてはならない存在であることはサッカー部や彼らに親い者を筆頭に星陵生なら知っている。

突然いなくなった相方が帰ってきたのだから泣かずにはいられない阿笠の感情も分かるし、彼らがサッカー第一なことも承知している。

故に彼らの言動は理解を超えるものではない。

「まぁ……仕方ないわよね」

麻冬は諦めたようにため息混じりに笑う。

なにはともあれ、秋人無事生還。

お帰りとでも言っておこう。

next

第209話【ミスコン3】

「えー、……」

さて、今なぜ阿笠と秋人がステージに立っているのだろう。

話は戻り、本日のバレンタインデーに星陵高校はミスコンを開いておりました。

その途中でまさかの秋人乱入であたりは一時騒然、ミスコンは止まってしまっていて、結果感動ともいえる再会を済ませた2人はみんなに詫びを入れているのであります。

「ほら秋人っ、なんとか言えよ」
「んなこと言われても、」

阿笠は肘で秋人をつつくが、秋人もなかなか言葉が出てこないようだ。

「お前のせいだろ？　秋人がこなきゃミスコンなんてとっくに終わってたのに」
「おまっ、そういうこと言うか？」
「事実だろ？」

「あっ、待て待て！　マイク入ってる！」
「はぁ？！」

コソコソと話していたつもりのようだが、２人の会話は筒抜けだ。

観客の中からドッと笑いが溢れ、２人は赤面する。

「あーもう！　とりあえずすんませんでした！　ってことで再開しよ！　俺らの出番からっ」

謝罪の態度とはとても思えないが、この場からどうにか逃げたい阿笠はそう切り出す。

残りのメンバーは、阿笠を抜かすと烈＆麻冬、中尾＆３年女子だけだ。

本当はこのあとに自分の出番だなんて恥ずかしすぎるが、事を終えないことにはどうしようもない。

せっかく裏には綺麗に着飾った女子たちがいるのにこれ以上ストップするのはまずい。

阿笠は秋人の手を引いて、いそいそと裏へ戻ろうとするが、意外な人物がちょうど裏から出てきた。

というか、意外な人物たちがゾロゾロと出てきて、その先頭にいたのが麻冬だった。

「えっ、麻っ……」
「良いわよ、ミスコンはもう」
「はっ？」

麻冬は阿笠の後ろにいる秋人をじっと見つめた。

秋人は麻冬の視線に気づき、今更ながら今この場で阿笠を選んだことに罪悪感を持った。

サーッと血が引くとともに、ようやく会えたことに嬉しさを感じてドキドキもしている。

「あ、麻冬……。俺、」
「……お帰り。秋人」

軽く微笑みながらそう言う麻冬が、秋人の帰還にそれほど驚いていないことを不思議に感じながら阿笠は秋人と麻冬を交互に見ている。

麻冬の言葉に、秋人はただ「ああ」と言って相づちをするだけで、激しく再会を喜んだりしていない。

はたから見れば不思議かもしれないが、秋人が帰ると約束したことを信じた麻冬には不思議ではないのだ。

秋人も秋人で、今までにない死ぬような努力をして、例の約束を果たした。

ドイツ中に秋人の名を残し、その栄冠を掴み、チームメートに胴上げされて秋人のドイツ留学は終わりを迎えた。

秋人を日本に帰らせないための無理難題を突きつけたはずだが秋人はそれをやり遂げ、監督も認めざるをえなかった。

ハノイの言葉は実現し、ナギは泣きじゃくりながら喜び、ナチも珍しく笑っていた。

秋人がＭＶＰに選ばれた瞬間、誰よりも喜んでくれたのが彼らだった。

恵まれすぎた環境に秋人は感極まって泣いてしまいそうだったが、グッと堪えてみんなにありったけのお礼の言葉を述べた。

もちろん自分をスカウトしてくれた監督にも、言いきれないほどのお礼を申し上げ、頭を下げた。

ドイツ留学は決して無駄ではなかったと、秋人は笑った。

ＭＶＰを授与し、その後手続きを済ませて秋人は金曜日学校が終わり、最後の練習をし終えて、みんなに見送られながら日本に飛び立った。

だから制服を着たままの直行となり、飛行機に乗り空港からタクシーに乗り換えてすぐさま星陵にやってきて、今に至るというわけだ。

「お前……誰と出るつもりだったわけ？」
「烈くんよ」
「れっ……」
「まぁ、もう辞退するけど」

麻冬は烈のほうを向き、ねぇ、と問いかける。

烈は面白そうに口を手で押さえて笑いながら頷いた。

「辞退って、」

「あたしたち、叶わないって思ったの。ね、安藤さん、南先輩」

今度は、残りのミスコン出場者の女子に相づちをしている。

安藤と南と名乗るその女子たちも、楽しそうに頷いた。

何がなんだか分からない秋人と阿笠は首を傾げている。

要は残り3組はボイコットするというわけだ。

「え、良いの？　てか叶わないって誰に？」

阿笠が少し焦りながらそう言うと、麻冬を筆頭に烈、安藤、南、中尾が一斉に阿笠を指差してきた。

すでに順番を終えていた決勝進出者たちも、麻冬たちの言動に納得するかのように首を上下に振っている。

その行動に圧倒されながらも、阿笠はキョロキョロと周りを見回して、自分以外ではないことを確認してから「俺?!」と叫んだ。

「いやぁ、秋人に抱きついた瞬間の阿笠。まさしく女の中の女だったなぁ」
「れっ、烈!」
「阿笠を受け止めた秋人もさすが紳士って感じでぇ」
「中尾?!」

すでに順を終えていた村松は、キシシとお腹を抱えながら泣き笑いをしている。

もちろん烈や中尾たちも、笑いを堪えるのに必死だ。

もともと麻冬も参加するつもりはなかったし、安藤も南もクラスで必ず1人は代表として出場しなければならないという規則のせいでみんなに推されての出場だった。

立候補はあまりいないもので、そもそも雪原麻冬が出場すると決め

た時点でみんな諦めていたのだ。

だから今更誰がグランプリになるかなど、残りの3組の女子には関係ない。

というわけで、都合良く阿笠と秋人が中断させてくれたしこれはチャンスとばかりにこのままミスコンを終わらせようとしている。

そうなれば最終審査を受けた前の3組の誰かが優勝ということになるはずなのだが、みんな何を考えているのか。

「ちょっ、みなさん出場は辞退ですかっ？」

慌てて司会者が麻冬たちにそう尋ねると、残り3組の出場者たちは惜しむことなく一斉に返事をした。

ちなみに当然ながら阿笠たちはマイクの目の前で会話をしていたため、麻冬たちとの話も全て観客たちに筒抜けだ。

グランプリは決勝進出者以外の観客の投票によって決まるから、いくら辞退したとはいえ麻冬たちには投票権はない。

昔から伝統のある、しかも巷では有名な星陵ミスコンがこんな形で幕を閉じるとは予想外で、観客の中にはブーイングする者もいる。

笑いこけている人もいるし、唖然としている人もいるが、そんな観客にはお構い無しと言わんばかりにミスコンの最終審査は終えた。

なんとなく話が掴めた秋人は苦笑しているし、いまいち納得のいかない阿笠は最後の最後まで文句を言う。

が、こんな大波乱は前代未聞なわけで、とにかくなんとかしようと司会者が打ち切ったのだ。

観客たちには白い紙が渡され、そこにグランプリだと思う人のエントリーナンバーを書いて箱に入れてもらう。

星陵生以外にも観客はいるため、かなりの大人数となるから、主催している生徒会はもちろん、各委員会の委員長なども手伝っての大作業だ。

集計している間は、有志による芸が披露される。

去年は軽く劇をしたりしていたし、一発芸や物真似をしたりする年もある。

今年はライブということになっているが、こんなゴタゴタした雰囲気を持ち直せるか分からないと嘆く有志の人たちが秘かに生徒会に訴えて、実は裏で揉めている。

なかなか始まらないライブに、観客たちは更に不満を持ち始めているようだ。

結果発表が終わるまではステージ裏にいなくてはならない決勝進出者たちも、どうしたものかと心配している。

むろん秋人は決勝進出者ではないため、観客の中にいる夏実と春樹のもとへ行き今は共にいる。

「なんだ、今年は何もやんねぇの？」

プログラムを知らない秋人は不思議そうに言う。

「いんや。今年はライブやるはず……じゃなくて！　秋人に聞きたいことたくさんあ――」

「いた！　秋人！」

春樹が秋人にそう言いかけたとき、阿笠が現れた。

急いで走ってきたらしく阿笠は息が切れていて、秋人の肩を掴んで振り向かせる。

「おう、阿笠」

「ちょっ、来て！　大変なんだ！　ライブやるはずの奴らが怖じ気づいて！！」

「はぁ？」

「俺らのせいだから！　とりあえずやるぞ！」

俺らのせいだから、という言葉でなんとなく理解した秋人はそれ以上問うことなく、素直に阿笠についていくことにした。

春樹が心配して声をかけてくれたとき、同じくステージ裏からかけつけてきた烈が来た。

半泣きのライブメンバーを見て慌てて焦って突然走り出した阿笠とは異なり、烈はいつもの如く冷静だ。

ジャケットの前ボタンを外し、ネクタイを軽く緩めている烈は春樹と夏実に言う。

「2人踊ってくれる？　俺、ドラムやるから。麻冬がキーボードやるし、秋人、お前ギター弾けんだろ？」

テキパキとそう言う烈に阿笠は圧倒されている。

つまり、やるはずのライブを彼らでやってのけるようだ。

楽器はあとはステージに運ぶだけでもともと用意されているし、足りないのは人材のみ。

阿笠と秋人のせいでなくすわけにはいかないと、烈も必死だし春樹にも夏実にもその気持ちは伝わっている。

「お、俺は？」

「歌え！」

「えっ」
「こん中で一番歌上手いのお前だろ！」

そんな会話をしているとき、次々と楽器が運ばれる。

どうやら麻冬が指示しているようで、何人かでの作業は2分とかからない。

「行くぞ！」

誰の声かは分からないが、とにかく5人は走り出す。

人を掻き分けて、急いでステージに上り、すでに準備万端の麻冬を見習ってそれぞれの位置につく。

何の曲をやるのかさえ話し合っていないし、そもそも一度も合わせたことがないのにいきなりできるものか。

けれど、そんな考えはちっともないようで、阿笠はＭＣで繋げた。

「えー、初めての俺ら共同作業なんでぜひ聴いてください。曲は…

…ファンキーモンキーベイビーズの告白です」

確かに、即興でやるならばこのメンバーが適切かもしれない。

夏実はさっきヒップホップをやって分かるようにダンスは得意だし、春樹も小柄ながらアクロバットだ。

麻冬はピアノを弾けるし、たしなむ程度なら秋人もギターを弾ける。

烈がドラムをできるのは意外だが、阿笠のボーカルも含めて適材適所だろう。

キャー！という歓声とともに、前奏から入り中止されるかと思われたライブがついに始まった。

曲は勝手に阿笠が選んだものだし、ダンスだって春樹の動きを夏実が上手く真似たものだ。

楽譜がないこの場で、うろ覚えの知識と感覚で弾いている麻冬と秋人と烈。

それをカバーしているのが、やはり阿笠の歌である。

ところどころ少なからずミスをする後ろのメンバーを支えるように、阿笠は透き通る歌声で聴いている人を魅力する。

未完成なライブだけど、まず彼らがやっているというだけで大反響だ。

「大好きだ、大好きなんだ。それ以上の言葉をもっと上手に届けたいけど、どうしようもなく溢れ出す思いを伝えると、やっぱ大好きしかでてこない」

おそらくこの曲を選んだのは、阿笠なりの思いやり。

どんな言葉よりも大好きしかでてこないという、烈や秋人への気持ち。

言いたいことは山ほどある、でも一番伝えたいことは、それしかない。

春樹や夏実、そして麻冬が秋人に対する気持ちでもある。

それらを全部汲み取ってその曲にしたのだ。

もちろん1曲だけではなく、このあとも3曲か4曲くらいはやるだろうが、告白を一番に持ってきた意味はそれしかない。

文句を言いたい。

泣き言も言いたい。

不満は募るばかり。

だけど、全て愛情があるからなのだと。

大好きなんだと。

そう言いたかった。

即興なりに何とかライブは成功をおさめ、アンケート集計もギリギリで間に合ったようだ。

アンコールがやまない中、少し汗をかきながら彼らは互いに顔を見合わせて、幾度ともなくハイタッチをし合う。

やりきった感がある彼らは、久々に笑顔を見せた。

そうして、辞退をした麻冬や阿笠、烈も含めて彼らはステージから下りる。

楽器が片付けられたあと、決勝進出者の中で審査を受けた3組のみがステージに上り、結果発表を待つ形になる。

ステージの一番前で見守る彼らの前で、ついに司会者がアンケート集計の結果を読み上げた。

「お待たせしました。アンケート集計による結果を発表いたします！」

next

第２１０話【ミスコン４】

これに選ばれた女子は、１年間ミス星陵として掲示板にポスターを貼られる。

今は当然去年の麻冬のグランプリを取ったときの写真がポスターとして貼られているわけで、だが２連覇確実と言われていた麻冬は今年は棄権している。

星陵生、教師、他校の高校生中学生大学生、そして社会人まで多様な観客全員分の投票結果により決定される。

ちなみに棄権した決勝進出者やライブに参加した観客には投票権は得られない。

つまりあの６人は誰も投票に参加できなかったわけだ。

「第２３回ミス星陵コンテストのグランプリは……」

誰もが息を飲む。

その瞬間だけはガヤガヤしていた観客たちも静まり返る。

「エントリーナンバー……0番、阿笠大悟さんです！」

発表された瞬間、静かだった中庭にワァッと活気が戻る。

どこからともなく鳴り響く口笛や黄色い声、称賛の声。

「はあぁぁぁぁ～？！」

そんな中約1名だけが怒りを交えた雄叫びを上げている。

周りの歓声、中には黒い声も多少あるが、そんなものを吹き消すとばかりに阿笠の叫び声が響き渡る。

「ふっ……くくく」

予想通りだと麻冬や烈たちはほくそ笑んでいて、春樹たちはキャッキャッと楽しげ。

そして秋人は口に手を当てながら阿笠の隣で大笑いするのを堪えていた。

「ちょっ……！　俺エントリーしてねぇし！　0番てそもそもおかしいだろ?!　はっ、てかそれ依然に女じゃねぇし!!」

ステージの真ん前で阿笠はギャンギャンと吠える。

阿笠の言葉は正論そのものだが、もはやそんなことは問題ではないようだ。

みんな阿笠を無視してチャキチャキと進行していく。

「はい。では、見事グランプリに輝いた阿笠くんとそのエスコート月影くんは前に出てきてください」

本来ならばステージにいるメンバーの中から選ばれるのに、ステージ上にいる人たちはクスクス笑いながらステージを下りていく。

阿笠は絶対嫌だとその場を動こうとはせず、秋人が手を引っ張っても微動だにしない。

烈が何を言っても無駄で、秋人は苦笑しながら最後の策に出る。

阿笠の背中に手を回し、少しかかんで阿笠の両膝を下から抱えるようにして持ち上げた。

分かりやすく言えば、お姫様抱っこをしている。

「ばっ……秋人?!」

足をジタバタさせて抵抗する阿笠を無視し、秋人はステージを上っていく。

ステージで下ろしてもまたすぐ逃げるだろうと思った秋人は、阿笠を下ろさずにそのまま受賞することにした。

ステージ中央に立ち、グランプリに与えられるティアラが渡され、司会者は阿笠の頭に乗せようとするが、さすがにそれは可哀想かもと、「阿笠、一応受け取ってやって」と耳元で囁く。

阿笠は秋人を上目で見上げながら少し泣きそうな顔をしているが、秋人が頷くと、しぶしぶ阿笠はティアラを受け取り手で持つ。

続いて賞品も授与され、秋人は阿笠を抱っこしたまま司会者に一礼して、次に観客のほうを向いて一礼した。

歓声とともに拍手が巻き起こり、盛大に賑やかになる。

司会者のミスコン終了の言葉を聞いたのち秋人はステージを下りていく。

そのまま新聞部や報道陣や一般生徒たちに囲まれてしまう。

報道陣がいたことを知らなかった秋人は、さすがにまずいと感じたのか阿笠をその場に下ろし、阿笠の手を引いて一目散に走った。

「あっ！　月影くん？！」

呼び止める多勢の声を無視して、訳が分からず引っ張られる阿笠の驚きの声も無視してとにかく走った。

もちろん、向かう場所などは１つしかない。

サッカー部の部室だ。

全力で走り、勢いよく部室に入って行き部室のドアをしめると、秋人は疲れたのかズルリとしゃがみこむ。

「あ～……疲れた」
「あ、秋人？」
「俺で悪かったな。エスコート」
「はっ？」

阿笠は意味が分からないようで、しゃがみこんでいる秋人の側に寄り同じようにしゃがむ。

「どうせなら烈のが良かっただろ」
「えっ、別に。てか俺ミスじゃないからね！」
「ははは、そうだな」

ドイツから帰ってきてすぐミスコンを中断させて阿笠と再会し、しかも見事景品をもらってしまった。

何がなんだかもう分からないくらいにハチャメチャすぎて、秋人はもう失笑するしかない。

そんな秋人に、阿笠はクエスチョンマークを浮かべたまま首を傾げている。

ドイツから帰ってきたってだけでも騒ぎになるだろうに、あんなことまでしたら明後日から学校では大騒ぎだ。

テレビまで来てたから、お茶の間にまで晒し者にされる。

せっかく全国制覇も夢じゃないのに、サッカー部捨てるなんてひでぇキャプテンだな、とか

相棒の阿笠置いて最低、とか

黙って行くなんて春樹たちにも可哀想だ、とか

いろんなこと思われてるだろうと考えていたけど、阿笠に何て言葉をかけたら良いか悩んでいたけど、阿笠を一目見たらそんな思いは吹き飛んだ。

会いたかった

会いたかったって、それだけなんだ。

「秋人……？」

阿笠はクスクス笑っている秋人の肩を軽く揺らす。

秋人は、悪い悪いなんて言いながらもまだ笑っている。

月曜からの学校のことよりも、やっと阿笠に会えたことの嬉しさのほうが上のようだ。

「わり……。やっと一緒にサッカーできんのかと思うと嬉しくて、」

中学のときからの相棒

同部の副部長

憧れるほどの素質

決して適わない攻撃

隣にいるのが当然で、けれど一緒にサッカーやることが億劫になって逃げた。

でも、阿笠のいないグランドは淋しすぎて、あの天真爛漫な笑顔はどこにもなくて

いもしないドイツの地で阿笠を探してた。

「えっ……阿笠？」

だから、君が側にいることが嬉しくて幸せで。

「あ、ごめ……。本物なんだって思ったら……」

阿笠は無意識に一粒涙を流した。

すぐに気づいてその涙を拭くが、どうやら止まらないようで焦っている。

会いたかったのは、秋人だけではない。

阿笠も一緒なのだ。

いつ帰ってくるか分からない秋人を、部を支えながら懇親的に待ち続けていた。

「良かっ……また一緒にサッカーできる……。俺捨てられたか……思っ……」

阿笠は手で膝を抱えて顔をうずくめながら泣いている。

よく笑いよく泣く、表情がクルクル変わる人間ではあるが、今この瞬間だけはその涙は秋人のものだ。

秋人のために泣いている。

ふと秋人は、机の上の置いてある部日誌が目について、立ち上がってそれを手に取った。

秋人が用事あるときにこれを書くのは阿笠の役目であるが、阿笠は面倒くさがって決して書こうとはしなかった。

だから時折部日誌が書かれていないこともあったが、秋人は毎日毎日びっしり細かく書かれている部日誌を見て目を丸くした。

絶対書いてないと思っていたのに、部員のことや練習法に対する改善策、その他もろもろについてかなり詳しく、隙間なく書いてある。

その内容を読むだけで、秋人がいない間阿笠がどれほど頑張ってくれていたかは一目瞭然。

あれほど嫌がった部員指導、チームワークを省みないプレー、副部長でさえ嫌がり、ただ好きなようにボールと戯れていた男が、いつ戻って来るか分からない自分のために戻ってくると信じて待っていてくれたことが身にしみて実感する。

「俺の代わりに……頑張ってくれてたんだな」

秋人は部日誌をギュッと握りしめながら、そう呟いた。

見なくても目に浮かんでくる。

何を書こうかとここで頭を捻りながら一生懸命考えている姿や、部員にアドバイスをしたり時には叱ったり褒めたり、そうして夜1人で自主練している阿笠が想像できてしまう。

秋人には分かる。

阿笠がそうすることがどんなに大変で負担で、でも自分のためにしてくれてたのだと。

「……捨てるわけないだろ？」

秋人は再び阿笠に寄り添う。

頭をふさぎこんでいる阿笠の髪を優しく撫で、しかしその手は微かに震えている。

「俺こそ愛想つかされたかと思……っ……」

秋人は唇を噛みしめ、込み上げる涙を堪えようとする。

「んなわけないじゃん……。秋人以外俺のフォローしてくれる奴なんかいないだろ……」

阿笠はボソボソと言う。

今確実に互いの顔を見てしまったらきっと涙が止まらない。

空を見上げては、きっと2人は同じことを思っていた。

連絡の取れない君は、今元気にしているだろうか。

笑っているだろうか。

グランドを駆け回っているのだろうか。

自分が側にいないほうがやりやすいのかもしれない。

自分がいないほうが良いというのなら、会えなくても応援していよう。

どうか君が成就することを。

けれど願わくば

もう一度君とサッカーをしたい。

「……阿笠。サッカーしよう」
「え……？」
「日本に帰ったら一番に阿笠とボール蹴るって決めてたんだ」
「……おう！」

アメリカもドイツも捨てて、小さな島国に戻ってきた。

大きなチャンスさえ簡単に捨ててしまえるほど、したかったことがあったんだ。

君と一緒にグランドを走る、そんな日々を。

next

第２１０話【ミスコン４】（後書き）

いやー、「春夏秋冬」がテーマなのに阿笠がメインになってますね（＾＾；）

阿笠いてこその「春夏秋冬」だということでお許しくださいまし。

さて、いよいよクライマックスを迎えます。

最終話【終わりなき幸せ】

「秋人！　やっと見つけた！」
「やっぱここかぁ～！」

秋人と阿笠は、今久しぶりに１ｏｎ１をしている。

ゴールは１つだけを用いて攻防戦を繰り返す。

サッカー部員を筆頭に人の群れがグランドに集まってくるが、白熱している２人はちっとも気づかないで続けている。

いつの間にかロッカーに置いていた予備のウェアに着替え（秋人は阿笠に借りた）、幾日かぶりに同じグランドを駆け回っている。

まるで試合のときのような真剣な表情を浮かべる秋人、そして試合のときでさえヘラヘラしている阿笠まで真面目な表情で汗をかきながら走っている。

阿笠が真剣にサッカーをやっているのはこれで二度目。

この前の韓国での試合と、そして今この瞬間。

大好きなサッカーでさえ本気になることはなかったのに、少しだけ成長したようにも思える。

相棒であり、唯一無二のライバルである2人。

「そうだ。まだ夏実たちに言ってなかった」

一緒に駆けつけてきた麻冬は、夏実と春樹に向かってそう切り出した。

「あたし秋人と付き合ってるの」

「……へ？！」
「な、なんて？！」

いきなりの麻冬の発言に2人は目を見開いている。

突然すぎて盛大に驚けずにいて、アワアワと表情を回転させている。

「クリスマス会いに行ったとき。……ごめんね、何も言わなくて」
「じゃ、じゃあ秋人が帰ってくるって知ってたの？」

春樹が遠慮がちにそう尋ねると、麻冬は苦笑する。

「帰るって言ってたけど、いつになるかはお互い分からなくて、それ以来連絡も取ってなかった」
「……」
「ぬか喜びさせちゃ悪いからみんなには黙ってた。……いつ帰るか分からない人をまだかまだかって待つほど……辛いことはないから」

明日こそ明日こそ、そんな風にして毎日待つことはとても大変だ。

いっそ帰ってくると分からないでいるほうがよっぽど気が楽で良い。

苦笑するしかない麻冬に、夏実は被っていたキャップ帽をスポッと被せた。

白いドレスには不釣り合いな帽子だけど、夏実の愛情がたくさん詰まっている。

襟先をグッと下に向け、夏実は麻冬の顔を隠す。

「……1人で背負い込むなって言わなかったっけ？」

「夏実、」

「麻冬1人が辛い思いする必要なんかないのに。……でも、ありがとね」

夏実は少し切なげな表情を浮かべながらそう言う。

麻冬には夏実の表情は見えないけど、でも分かる。

「……阿笠には？」

少ししてから夏実が帽子から手を離した。

キャップ帽を被ったままうつむいている麻冬に春樹が尋ねた。

春樹の問いに、麻冬は軽く首を横に振る。

阿笠と別れた日、麻冬と阿笠はある約束をした。

幸せになれたら、今度こそ本当に幸せになれて阿笠が強くなれたら、向こうから会いに来てくれると。

だから、阿笠が来てくれる日まで麻冬は自ら阿笠には何も言わない。

秋人と付き合ってることも言わないし、阿笠の恋愛事情も聞かない。

阿笠とのたった1つの約束だから。

「……約束したの。だから阿笠に大事な人ができたそのときに、阿

笠のほうから紹介してもらうそのときまでは」

明日にでもバレるだろう。

学校中の噂になるだろう。

それでも、麻冬の口からは絶対に言わない。

それが2人が交わした、最初で最後の誓い。

「そっか。良かったね、麻冬」

春樹は意外にも少し陽気に声を張りながらそう言った。

麻冬がそっと春樹を見上げると、春樹は晴れ晴れしたように笑っている。

今の流れでなぜ笑うのか分からない夏実は、眉をひそめながら春樹と麻冬を交互に見た。

どういうことか尋ねたそうにしている麻冬に、春樹は続けてこう言った。

「これからは本当に好きな人を愛していける」

それはまるで、今までは好きではない人を愛してきたように聞こえる。

いや、実際にそうだ。

阿笠との過去の思い出を綺麗にするために元サヤに戻り、秋人を好きだと言いながらも阿笠から離れようとしなかった。

だがそうキッパリと言われてしまうと、何も言えない。

すごく悪いことをしてきたように思えるし、自分は最低の人間だって思い知らされる。

「嘘偽りのない恋をしていけるんだね」

みんなの反対を押し切っての阿笠との恋は決して楽なものではなかった。

阿笠も麻冬自身も。

だから春樹の言葉は、そんな辛い恋をしてきた麻冬へのお疲れさまという励ましのエール。

「……あたし……」

「夢見てた。秋人が麻冬を好きだと知ったときから、2人が付き合うことを」

春樹は自分を救ってくれた夏実に恋をした。

夏実は、自分を支えてくれた春樹を好きになった。

秋人は自分と違う性格をしている夏実に惹かれた。

麻冬は阿笠を忘れるために秋人を好きになろうとした。

秋人が夏実を好きだと思った麻冬は、今度は秋人を忘れるために阿笠と付き合った。

春樹と秋人は恋敵になり、春樹は告白してきた夏実を振った。

秋人の本当の好きな人が麻冬だと知ったあとも、春樹は再び夏実を振る。

秋人は麻冬が自分を好きだと気づいても何もできない。

そして、勇気を出して春樹は夏実に告白した。

秋人は幾度麻冬に告白しても、そのたび振られ続けた。

だが麻冬は阿笠に別れを告げられ、秋人に会いに行き2人はようやく結ばれた。

「4人がこうなれたら良いなって思ったんだ」

激動の年だった。

時間で言えば半年かそこらだけど、毎日が慌ただしく変化していった。

「……そうだね。本当、いろんなことあったね」

春樹に賛同するように夏実も言った。

「悲しい思いいっぱいしたけど、その分これからはいっぱい楽しいことあるよね」

高校生の恋愛も楽じゃないんです。

いつだったか誰かがそう言っていた。

高校生だからこそ辛いものもある。

「まぁ……俺らこれから忙しいんだけどね」

春樹は冗談混じりに、頬を指で軽く掻きながら言う。

お忘れかもしれないが、彼らは超一流のアスリート。

オリンピック強化選手に選ばれている春樹や麻冬、ユース代表で全日本代表候補の夏実。

アンダー18に選ばれている秋人と阿笠。

恋愛だけを語ると普通の高校生と変わらないけど、スポーツだけはトップレベル。

部活以外にもそれぞれ合宿や練習があり本当は休んでいる暇さえないほど。

なぜなら、次の夏にはオリンピックが待っているのだから。

恐らく春樹と麻冬は選手に選ばれ若きホープとして期待されるだろう。

恐らく秋人や阿笠や夏実は、数少ない選手入りを果たしベンチに座ることができ時折活躍を見せるだろう。

そんな未来予想図が見えるのだ。

「あはは、本当だよ。来月からやばい忙しい」
「あら、そっちも？」
「高3はきっと俺らスポーツに終わるんだな～」

遠くの私立に行くのが嫌で近場の星陵を選んだ彼ら。

偶然という名の形で出会い、そして恋に落ちた。

奇跡としか言い様がない。

違う、奇跡なんて言葉では終わらせない。

彼らは出会う運命だった。

「オリンピック。出れるかな」

夏実が自信なさげにそう言うと、春樹と麻冬が同時に答えた。

「当たり前だよ」

あまりにも自信過剰のような気もするが、そんな自信が生まれるくらい彼らは努力している。

オリンピックに出ることは、小さい頃からの夢だった。

途中バドミントン以外の道も考えていた春樹も、オリンピックだけは例外だ。

スポーツをやってる人ならば誰もが憧れ夢を見、その頂きを目指すもの。

「そっか……そうだよね！」

夏実が元気にそう言ったとき、３人のもとにボールが飛んできた。

それをキャッチした春樹は、飛んできた方向に振り向く。

あからさまに狙ったであろう秋人と阿笠が、こっちを見ながら笑っているのだ。

何だろうと思いながら見ていると、ヒラヒラ手を振っている阿笠の横で秋人が叫んだ。

「一緒にやろうぜ！」

他の生徒を寄せ付けない雰囲気を醸し出していた彼らは、なぜだが春樹たちを誘う。

春樹たちは一般生徒たちを押し退けて、秋人たちのもとに近づいていく。

もちろんサッカーを一緒にするためではない。

麻冬はドレスを、春樹はスーツを着ているのだからそんな格好でできるはずもない。

「何2人で楽しんでんのさ」
「だから誘ったろ?」
「こんな格好でやれと?」

笑いを込めながら春樹と秋人は笑い合う。

ああ、2人がこんな風にして笑うのはいつぶりだろう。

何を思い何を感じながら、今笑顔でいるのだろう。

「烈はぁ?」

そんな2人の間に割って入るように阿笠は、キョロキョロとあたりを見回している。

「ここ」

その声は、みんなの頭上から聞こえてきた。

どこだと上を見上げたとき、烈は木の上からザッと飛び降りてきた。

上手く着地し、何でもないかのように名に食わぬ顔をしながら近づいてきた。

「上かよ！」

こうして、何ヶ月ぶりかに6人が同時に対面した。

ちっとも変わらない互いに、なぜだか笑いが出てくる。

何年も離れていたわけではないから当たり前なのだが、何かしら悲しいことが起こっていた彼らが全員同時に笑うのは、半年以上ぶりだろう。

一時は恋敵だったり、一時は恋人だったりし合っていた彼らもようやく自分の居場所を見つけられた。

長いようで短い期間。

振り返れば、いつも彼らは一緒にいた。

「せっかくだし今日は6人で飲……遊ぼうぜ！」

辛いこと、楽しいこと、哀しいこと、嬉しいこと、いろんなことが数えきれないほどあった。

それでも今、胸張って幸せだと言えるのは彼らが頑張ってきた紛れもない証拠。

傷つけられ傷つけ、追い詰め追われ、嘆き、幾度となく涙を流した。

けれど、どれも遠回りではなかった。

すべては、これからを歩んでいくための土台、これからを生きていくための支えだった。

小さい頃からスポーツばっかりだった彼らが、学校生活を通して恋愛や友情を知り、成長していくことができた。

それはどんなものよりも輝かしい宝物。

「おう！！！」

青春真っ盛りの彼らの、大事な大事な高校生活。

まだ終わらない、彼らの学園物語。

合言葉は

Ｇｏ　ｆｏｒ　ｉｔ　！！

f
i
n

最終話【終わりなき幸せ】（後書き）

ついに最終話にまで辿りつくことができました！
ここまでご愛読頂いた読者様、本当にありがとうございます（＾＾）

長かったようなあっという間のような…
近いうち続編を描くつもりなので、ぜひまたお会いしましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0372f/

春の櫻に夏の海、秋の月そして冬の雪。

2010年10月9日20時33分発行